

一橋大学審査学位論文

博士論文

**日本型排外主義**

**—在特会・外国人参政権・東アジア地政学—**

樋口直人

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

2015年4月

**Japan's Ultraright:  
Zaitkukai, Foreigner's Suffrage and East Asian Geopolitics**

HIGUCHI, Naoto

Doctoral Dissertation  
Graduate School of Social Sciences  
Hitotsubashi University

April 2015

## 目次

プロローグ	1
序章 日本型排外主義をめぐる問い	6
1 排外主義運動の勃興	
2 誰が排外主義運動に馳せ参じるのか	
3 なぜ排外主義運動に馳せ参じるのか	
4 在日コリアンと「在日特権」をめぐる問い	
5 「通常の病理」から「病理的な通常」へ——事態の解明に向けて	
第一章 誰がなぜ極右を支持するのか	22
——支持者像と支持の論理	
1 西欧における極右研究の蓄積	
2 なぜ極右は発生するのか——先行研究の整理	
3 誰がなぜ極右を支持するのか——経験的研究による検証	
4 極右政党研究の「ノーマル化」とその先へ	
第二章 不満・不安で排外主義運動を説明できるのか	36
1 社会運動研究における不満・不安の位置づけ	
2 大衆社会論と排外主義運動	
3 競合論と排外主義運動	
4 代替的な説明図式	
5 排外主義運動のリアルな把握に向けて	
第三章 活動家の政治的社会化とイデオロギー形成	52
1 活動家の多様性とマイクロ動員過程	
2 イデオロギーと政治的社会化——緩やかな説明変数と被説明変数	
3 政治的社会化の過程	
4 排外主義を受容する土壌	
第四章 排外主義運動への誘引	70
——なぜ「在日特権」フレームに共鳴するのか	
1 構築される不満——問題の所在	
2 運動と個人のフレーム調整	
3 活動家の語りにみるフレーム調整過程	
4 「在日特権」フレームの共鳴板	
5 排外主義運動との運命の出会い	

第五章 インターネットと資源動員	81
—なぜ在特会は動員に成功したのか	
1 インターネットと排外主義運動	
2 インターネットと動員構造の変容	
3 排外主義運動へのマイクロ動員過程	
4 資源動員をめぐる後発効果	
第六章 排外主義と政治	97
—右派論壇の変容と排外主義運動との連続性をめぐって	
1 ミクロ動員から政治的機会構造へ	
2 言説の機会構造——分析視点	
3 言説の機会構造と排外主義運動の関連	
4 ネットカルチャーと排外主義運動	
5 右派論壇の鬼子としての排外主義運動	
第七章 国を滅ぼす参政権？	114
—外国人参政権問題の安全保障化	
1 外国人参政権問題をめぐる日本の特殊性——問題の所在	
2 デニズンの権利と安全保障化をめぐる日本の特質	
3 外国人参政権問題の日本的展開	
4 外国人参政権をめぐる脱安全保障化	
第八章 東アジア地政学と日本型排外主義	129
—なぜ在日コリアンが標的となるのか	
1 東アジア地政学と在日コリアン——問題の所在	
2 分析枠組み——民族化国家としての戦後日本	
3 2者関係によって何が進むのか——在日コリアンの変遷と地方市民権	
4 本質主義と外国人排斥の正当化	
終章 日本型排外主義とは何か——欧州との比較で考える	145
1 日欧比較から日本型排外主義を論じる	
2 領域ごとにみる排外主義の特質	
3 まとめ	
エピローグ	152
補論 日本政治のなかの極右	157
補遺 調査とデータについて	165
あとがきと謝辞、そして若干の後日談	171
文献一覧	175
資料 排外主義運動の活動家に対する聞き取り記録	224

## プロローグ

激しい感情はしばしば他者を巻き込み、激情の渦を作り出す。だが、その渦中であって事象の本質を見極めようとするのは容易なことではない。にもかかわらず、いやそうだからこそ新たな発見のための努力を怠り、紋切り型の言葉に頼る解釈が、2000年代以降のナショナリズムや排外主義に関する言説で目立つように思える。1990年代以降の日本は、高度経済成長期の安定的な社会構造を喪失し、グローバル化と経済の長期低落に伴う社会の流動化が「不安」を生み出している。その不安が最悪の形で露出したのが、弱者を攻撃する排外主義である。寄る辺なき不安を抱えた若者たちは、それを他者に対する憎悪へと変換させ、外国人排斥を訴えて街を練り歩くようになるのだ、と。

だが、こうした議論は自らの定立に必要な多くの条件を無検証で採用しており、学術的な批判に堪えうるものではない。一見すると、不満・不安に焦点化した説明は常識に沿ったものともなもののように映る。実際に排外主義運動に参加している人たちは、何らかの不満を抱えていなければその場にはいないわけだから、それを中心的な要因とみてもおかしくはない<sup>1</sup>。しかし、本当にそうした説明でよいのか。

本論文の目的は、参照されざる数多の先行研究——社会運動論、極右研究、移民研究、国際関係論——に依拠しつつ、排外主義運動を分析することにある。その上で、在日特権を許さない市民の会（以下、在特会）をはじめとする排外主義運動の活動家に対する聞き取りデータにより、「日本型排外主義」と筆者が呼ぶものの相貌を浮かび上がらせていく。

在特会は2007年に設立され、2015年3月時点で会員数15000人を超えており、排外主義運動のなかで最大かつもっとも知名度の高い団体である<sup>2</sup>。「普通の若者」を街頭に動員し、在日コリアンをはじめとするエスニック・マイノリティに対してヘイトスピーチを浴びせかける光景は、日本社会が初めて目にするものであった。それゆえ、在特会を追ったルポルタージュが注目を集め（安田、2012a）、ヘイトスピーチ規制が国会や新聞各紙の社説でも取り上げられている（有田、2013）。

\* \* \*

筆者自身は、石原慎太郎を日本版極右とみなし、その支持基盤を分析したことから、排外主義に関連する研究を手がけてきた（樋口・松谷、2013；松谷ほか、2006）。だが、本論文で分析する排外主義運動の研究は、在特会に体现される直接行動を目の当たりにして始めたわけではない。系譜的には、10年以上前から断続的に続けてきた外国人参政権研究の延長に位置づけられる。外国人参政権は、民主党への政権交代後に反対運動が盛り上がったイシューであるが、他の国ではありえない形で問題化が進んでいった。第7章でみるように、こうした特殊性に着目することで日本型排外主義を理解できる。

2000年代後半に「外国人参政権の危険性」が唱えられ、外国人参政権が実現した暁には

---

<sup>1</sup> 実際、初期の頃の排外主義運動を直接目にして書かれた論考は、不安によって安易に説明する危険性を自覚する部分があっても、それ以外の要因を見出しかねているようにみえる（黒い彗星 Che★Gewald、2010；村上、2009、2010；『創』編集部、2010）。

<sup>2</sup> ただし、メール登録すれば会員としてカウントされ、会費の支払いや個人情報の開示といった義務はない。そのため、会員というよりは登録者が15000人超といったほうが正確な表現となる。

日本が外国勢力に乗っ取られるという説が、多くの人の心を捉えていった。それは巷間いわれるネット右翼の「不安」を掻き立てただけでなく、それまで日本政治を見事に統治してきた政党をして現地視察させるほどの信憑性を帯びていたようである（自由民主党政務調査会与那国町調査団、2010）。その不安にどの程度の根拠があるかは実証的に示すまでもなく、通常理解力をもってシミュレーションすれば、以下のような電話相談に逢着するものと思われる。

Q（国境の島に調査団を派遣した某政党の皆さん）：外国人参政権が実現したら、100万近い票が突如として現れ、日本の政治に影響力を行使するようになります。不安で不安ではないので、与那国島に調査団を派遣してしまいました。

A（樋口）：皆さんの憂国の情、深くお察しします。私もなぜ皆さんが不安で仕方ないのか知りたくて、お電話お待ちしていたところです。

Q：某国人とか某国人がキャスティングボートを握ることにより、内政干渉を招く恐れがあります。米軍基地に出て行ってほしい某国が、基地の町に某国人永住者を大量に送り込んでキャスティングボートを握り、基地反対派の市長を当選させたらどうするんですか。

A：万年与党だった選挙のプロ集団とは思えないご意見ですね。米軍基地移転で揺れる名護市に、某国人が応援する市長候補が出たとしましょう。このとき、皆さんのような憂国の士が、その候補が「某国政府の手先」であることを暴露しさえすれば、選挙は「日本人」と「某国人」の対立になり、有権者は皆さんが期待する良識を発揮してくれるでしょう。したがって、某国の思惑は完全に裏目に出て、皆さんは勞せずして選挙を制することができるのです。でも、外交下手とけなされる我が国ならともかく、皆さんが恐れる某国ってそんなに稚拙な戦術しかとれないんですか？

Q：私たちは実際に見てきたんです。国境にある与那国島では、百数十票で町議会議員が当選しています。某国人が与那国島に集団移住すれば、議会を乗っ取ることなど簡単じゃないですか。

A：百数十の票で当選できるのは、人口減に悩む過疎地帯だからです。永住資格を持つくらいの生活基盤を確立した人たちが、わざわざ過疎地帯に集団で引越する？ ふーむ、某国人永住者は過疎の町でも生計を立てていける特技を持っているのでしょうか。高齢者福祉の専門家たちが移住するとか……。えっ、某国政府が年間300万円出して某国人永住者の生活を裏で支える？ でも、150人が引越したとして年間4億5000万円かかります。それでようやく、4年に1回の選挙でたった1人の議員を当選させられるわけです。18億円で町議会議員1人ですか。公共事業に湯水のように金を使ってきた我が国政府ならともかく、某国政府はもっと有効なお金の使い道を考えるのでは。普通に考えれば、某国人が移住した結果として起こるのは、内政干渉ではなく過疎化の緩和です。

Q：でもでも、政治家というのはあらゆるリスクを考えて対策を講じるべきだと思います。

A：御説ごもっとも。が、それならば外国人参政権よりも宇宙人の襲来に対する備えを議論されたほうが、現実的な可能性が高いと思われます。これまでの話を伺っていると、皆さんのすばらしい想像力は、政治家にしておくには実に惜しい。政治よりは空想作家への適性を示しているように思えます。今からでも遅くはありません、お国のためにもノーベル賞を狙

って集団転職されることをお勧めします<sup>3</sup>。

社会に不安の種は常に何時でも転がっており、不安と排外主義を結びつけたくなる誘惑にかられるのは、理解できないことではない。だが、かの大政党の幹部たちは、やはり野党暮らしに耐えかねて不安にかられ、このような妄想に取り込まれてしまったのだろうか<sup>4</sup>。これが妄想ではなく政治過程の一コマになってしまったことを示すために、もう 1 つだけ例を挙げておこう。以下の引用は、小泉チルドレンとして名を馳せた政治家が、国会でした質問の一部である。

竹島問題につきまして、韓国では、不法占拠の状態の正当化ということで独島キャンペーンというのをやっているんですね。我が国は事あるごとに国益を挙げて国として抗議しておりますが、キム・テヒさんという女優がおられまして、独島愛キャンペーンのキャンペーン女優です。たくさんいい女優さんが韓国にはいらっしゃいますが、このキャンペーンをやっているのは一人だけですが、その方が日本の代表的な民放のドラマの主演として今出ておられます<sup>5</sup>。

限りある質問時間をこうした言明に費やすのは、野党暮らしで発言材料に窮した結果と同情を禁じえないが、この政治家もまた不安にかられて排外主義に呑み込まれていったのだろうか。すなわち、東大→大蔵省キャリア→衆議院議員と順調に出世してきたのが、総選挙で苦杯を舐めて将来に不安を抱き、韓国きっての美人女優とされる存在に嫉妬心を抱いて上記の発言に至ったのか。——不安による説明は、わかりやすい常識にかなっているが、社会科学的には多くの留保をつけねばならない。こうした要因を挙げることで決まりきった物語に落とし込み、逆説的だがそれで安心しようとするメンタリティすら感じる。あえて極端な例を持ち出したのは、不安による説明では無理が生じることを示し、再考を促す目的による。

\* \* \*

では、不安以外の何に着目すればよいのか。本論文では、問題をより大きな文脈に位置づけるため、前述の日本型排外主義という概念を用いたい。ここでいう排外主義とは、「国家は国民だけのものであり、外国に出自を持つ（とされる）集団は国民国家の脅威であるとするイデオロギー」を指す<sup>6</sup>。だが、現実には外国に出自を持つ集団すべてが脅威とみなされ

---

<sup>3</sup> 樋口（2011b）より引用。

<sup>4</sup> 「不安」に比べて文章化された言説のなかで述べられることは少ないが、「差別」も排外主義運動の台頭を説明されるために使われる（可能性のある）言葉である。筆者は、不安や差別が日本型排外主義の台頭と無関係だと主張するつもりはないが、それで説明できるとも考えない。たとえば、外国人参政権賛成派だった前原誠司は、「かなり慎重になってきましたね」とこの数年で態度を転換させた（『G2』9号、2012年）。「ある国が大量に自国民を帰化させて、非常に人口の少ないところで多数を占めて議員をつくるという意図を持った場合どうするのか」と彼は述べる。これは、前原が錯乱したとか急に差別主義者になった結果とはみなしがたく、それ以外の要因に目を向けるべきだろう。

<sup>5</sup> 参議院総務委員会、2011年11月17日における片山さつき議員の質問。この質問内容の真偽と問題の経緯については以下を参照（岡本、2013；安田、2012e）。

<sup>6</sup> 定義に際しては、以下の文献を参考にしている（Mudde 2007: 19）。

るわけではなく、国によっても時代によっても変化する。日本の場合、排外主義の標的となるのは在日コリアンおよび在日中国人であり、たとえば近年の欧州の文脈では標的になりにくい集団である。逆に、近年の欧州でムスリムが排斥の標的とされる一方で、日本の排外主義運動は在日ムスリムのことを認知すらしていないだろう<sup>7</sup>。

こうした相違は、人口の多寡や集団の社会経済的地位では説明できず、それ以外の分析枠組みが必要となる。その際、排外的な論理のうちもっとも非合理的な部分に着目することで、排外主義の背景にある要素を析出するという方針をとりたい。ミナレット<sup>8</sup>禁止という無意味な議題が国民投票で採択されるスイス、ごく少数のムスリム女性のブルカ<sup>9</sup>を針小棒大に取り上げるフランスの例などは、西欧型排外主義の特質を示す (Kallis 2013)。翻って日本型排外主義で顕著なのは、上述したような外国人参政権や東アジア諸国関連の 이슈 に対する非合理的な反応にある。

こうした反応は、すべて「東アジアの地政学的構造」を背景としており、それを日本型排外主義の特質と本論文ではみなす<sup>10</sup>。19世紀末以降の東アジアは、「帝国」と「植民地」の双方を域内に抱え、その末期に生じた第二次世界大戦の戦後補償も含めて植民地主義の清算が問題化され続けている。さらに、1990年代以降も冷戦構造が残存し、なおかつ世界の一大経済拠点として「帝国」と「植民地」が対等な経済的プレイヤーとなった。しかも、東アジアはEUやASEANのような域内組織を作れない外交困難を抱える点で、他地域にはない特質を持つ。こうした複雑な関係を歪んだ形で反映するのが、「特亜」<sup>11</sup>「嫌韓」といった近隣諸国に対するラベリングである。それが「在日特権廃絶」という主張につながる点で、日本型排外主義はすぐれて政治的な性格を持つ。

こうした主張を具体的に展開するに際して、本論文の前半では運動参加の側面に注目して分析をくわえていく。運動参加に関しては、「不満」と「資源」という変数をめぐって理論的対立が存在し、そのうち「資源」に着目した説明により筆者の主張の1つを検証できるからである。資源とは、社会運動研究をかじった者であれば誰もが知るようなありふれた概念であり、1970年代以降資源動員論として1つのパラダイムを形成してきた。今になってあえて資源という概念を持ち出すのは、排外主義運動に関わる従来の言説が資源という要素を無視してきたがゆえに、議論に無理が生じたという認識にもとづく。

それに比べると、「東アジア地政学」は稚拙な概念でしかないが、運動参加をめぐる語りから日本型排外主義が東アジア地政学と不可分の関係にあることを浮かび上がらせたい<sup>12</sup>。

---

<sup>7</sup> もちろん、9・11以降の警察が滞日ムスリムを常時監視してきたことを軽視してよいといっているのではない。その実態は、2010年に生じた公安ファイルのインターネット流出事件で明らかになっている。詳細については以下を参照 (青木・梓澤・河崎、2011)。

<sup>8</sup> モスクの尖塔のこと。

<sup>9</sup> 顔を含め全身を覆う布。

<sup>10</sup> この問題を考えるに際して、小熊 (1998: 661-7) の提起した「有色の帝国」概念や、姜尚中 (1996) による日本のオリエンタリズムの議論は、彫琢すれば使える部分が多いだろう。

<sup>11</sup> ネット右翼が用いる用語で「特定アジア」の略。「反日的」な姿勢をとるアジアの特定の国という意味で、具体的には中国、韓国、北朝鮮を指す。

<sup>12</sup> 地政学という概念は、そもそも主に軍事との関連で用いられてきたものであり、既存の勢力分布を所与とする傾向が強い。だが、ここでは社会的に構築された意味づけの記号・体系として地政学を捉える (Tuathail 1996: 52)。そうでなければ第8章の2者関係/3者関係モデル自体が成立しない。

議論のための枠組みや方法論は今後の課題だが、日本型排外主義が「外国人問題」の産物ではなく、東アジア地政学の鬼子であることは、データにより検証できると考える。



## 序章 日本型排外主義をめぐる問い

### 1 排外主義運動の勃興

#### (1) 右翼から排外主義へ

日本に右翼はあっても極右はない——正確にいうと排外主義を前面に掲げた社会運動は存在しないというのが定説であった。確かに排外主義は、既成右翼の中核的な部分ではない。既成右翼に関する代表的な研究は、天皇制に象徴される権威主義的な伝統主義と反共主義を、戦後日本の右翼イデオロギーとしている（堀、1993）<sup>1</sup>。右翼は排外的か否かと聞かれれば、きわめて排外的というのが正解だろうが、既成右翼にとって在日外国人は重要な問題となつてこなかった<sup>2</sup>。

もちろん、日本がこれまで排外的でなかったというのではない。日本政府は戦後ずっと排外的な政策をとっており、国際条約のような外圧がなければそれを改めることもなかった（田中宏、1995）<sup>3</sup>。1980年代以降は、北朝鮮との関係を理由として朝鮮総連やその関係団体を標的とした「制裁」が加えられており、民主党政権で問題となった朝鮮高校の無償化排除はその1つにすぎない。その意味で、「在特会の主張と行動も、実は『新しい』ものというより、その多くはこれまで日本政府やマスメディアが語ってきたことの焼き直しにすぎない」（鄭栄桓、2013b：9）ことは確認しておくべきである<sup>4</sup>。

だが、外国人排斥を主たる目的とした継続的な組織化は、現今の排外主義運動が日本で初めてのものといえるのではないか<sup>5</sup>。確かに、右翼による朝鮮総連攻撃、右翼学生による朝

<sup>1</sup> 既成右翼の特徴として、①天皇および国家に対する絶対的忠誠、②共産主義、社会主義またはこれに同調する勢力への反対、警戒、③理論よりも行動の重視、④民族的伝統、文化の護持と外来思想、文化への警戒、⑤義務、秩序、権威の重視、⑥民族的使命感、⑦命令系統における権威主義、⑧家族主義の全体主義、⑨保守的傾向、⑩家父長的人間関係、⑪インテリ層に対する警戒、⑫1人1党的傾向、⑬少数精鋭主義（社会問題研究会、1976：49）が挙げられる。このうち④は排外主義といってよいだろうが、既成右翼の公分母となってきたのは①と②であった。

<sup>2</sup> これは右翼思想が排外主義を内包していないということではなく、歴史的な経路依存性や国際的な政治環境により排外主義が焦点化しなかったただだと筆者は考えている。安田（2012a）は、特に新右翼による在特会批判をことさらに取り上げるが、これは「正しい右翼」と「排外主義」を切り離して後者だけを非難する帰結をもたらす。そもそも右翼は排外主義と親和的であり、在特会は逸脱的なスタイルだけ取り上げられ批判されているというのが筆者の見解である。その意味で、右翼による排外主義運動批判（e.g. 藤生、2011；鈴木邦男、2013；鈴木・能川、2010）は再帰性を欠いた自己欺瞞でしかないし、右翼に発言を求める側のセンスも疑わざるをえない。

<sup>3</sup> 外国人参政権が今なお問題であり続けるのも、在日コリアンの政治的権利も政治統合も考えない稚拙で排外的な政策がとられてきたことの帰結である（この点については第7章参照）。

<sup>4</sup> 歴史的な概観としては、外村（2014）を参照。在特会が取り上げる「生活保護問題」も、1950年代前半には在日コリアンの受給比率が高いとバッシングが行われ、「適正化」という名目で打ち切りがなされた（樋口雄一、2002：183-6）。外国人参政権も、戦後直後には有権者だった在日コリアンの政治的影響力を恐れて、日本政府が一方的に選挙権を剥奪した経緯がある（水野、1996、1997）。再入国許可も同様に、外交関係上の理由によって制度の運用がなされてきた（鄭栄桓、2012）。これらはあたかも法的問題であるかのごとく扱われるが、実際には政治的理由で権利が制限され、それを正当化するために法律が用いられると考えた方が正しい。

<sup>5</sup> 関東大震災における朝鮮人虐殺は、（この時点で日本にいた朝鮮人は日本国籍を持っていたため）異民族排斥の集合的暴力であるが、継続的な組織化とはいえない。この虐殺には国家による統制のあり方も深く関係しているとはいえない（姜徳相、2003）、一時的で組織立った動きではない

鮮学校生徒に対する暴力はあった（小沢、1974；在日朝鮮人の人権を守る会、1977；在日韓国青年同盟中央本部、1970）<sup>6</sup>。そして現在の排外主義に近い性格を持つものとして、1980～90年代に問題化したチマ・チョゴリ制服の切り裂き事件（韓、2006；金榮、2008）もあるが、組織立ったものとはいえない。それに対して、2000年代後半になってから生まれたのは、在日外国人を明示的な標的とする排外主義運動であった。この運動は、担い手も運動のスタイルも従来のものとは大きく異なる。「少数精鋭」の既成右翼が市民社会の縁辺で蠢くものに対し、在特会はほとんどが職を持った「普通の」メンバーからなる。また、その主張は「在日特権」に体现される排外主義を前面に打ち出しており、これも既成右翼とは異なる。

## （2）排外主義運動の3つの源流、そしてその背景をめぐる問い

日本の排外主義運動には、既成右翼の一部、歴史修正主義的な右派市民運動、ネット右翼<sup>7</sup>という3つの源流がある。第1に、1990年代前半には新右翼の一部が「国家社会主義者同盟」なる団体を設立し、上野公園のイラン人排斥運動をしていた<sup>8</sup>。これが2004年にはNPO法人外国人犯罪追放運動という団体を設立し、排外主義運動の一翼を担うこととなる<sup>9</sup>。また、チベット関連など反中国運動に関わっていた者も、主権回復を目指す会として排外主義を掲げるようになった<sup>10</sup>。これらの「右翼崩れ」は人数的には少ないものの、街頭演説など運動に必要なノウハウを提供した点で重要である。

第2に、人的なつながりはないものの係争課題の継承性が強いものとして、1990年代に発生した新しい歴史教科書をめぐる運動が存在する<sup>11</sup>。日本の排外主義は西欧的な「外国人・移民排斥」というよりも歴史修正主義の一変種としての性格が強い（第6章参照）。1990年代に発生した歴史修正主義運動自体は、修正主義的な教科書採択の不振や新しい歴史教科書をつくる会の内紛などにより衰退した。だが、つくる会の修正主義は排外主義に転換されて排外主義運動が継承したと筆者は考えている。

---

ところに特徴がある。現在の排外主義運動は——その基盤は不安定とはいえ——より継続的で組織的な動きであり、群集や暴動をめぐる古典的な研究とは異なる分析枠組みが必要である。

<sup>6</sup> これと比較の上で興味深い報告として、Björge and Witte (1993) を参照。

<sup>7</sup> 市民運動という、従来は左派のものとしてきた。市民という概念の理解によって市民運動という用語の適用対象は異なるが、既成政治勢力からの相対的独立は、市民運動の重要な構成要素である。その意味で、右派の社会運動を筆者は市民運動の1つと考えており、本稿では右派市民運動と一括して表現し、排外主義運動をその一部とみなしておく。2000年代前半に盛り上がったジェンダーバッシング運動も、右派市民運動の一種といえるだろう（山口・斉藤・荻上、2012）。ジェンダーバッシング自体については、以下を参照（浅井ほか、2006；江原、2007；木村、2005；日本女性学会ジェンダー研究会、2006；双風舎編集部、2006）。1990年代以降の状況に鑑みれば、右派市民運動の系譜を明らかにする作業が今後必要になるだろう。

<sup>8</sup> この団体自体は、建設業者の同業者団体を基盤としており、右翼団体を名乗ってはいたものの談合など利害調整を目的としていた。当時の幹部が上野公園に集まるイラン人を目にしたため、団体の一部メンバーがイラン人に嫌がらせをしたのが発端となる。詳しくは、樋口（2013b）を参照。

<sup>9</sup> 詳しくは樋口（2013a）を参照。この間の経緯を伝えるものとして、瀬戸（2000）がある。

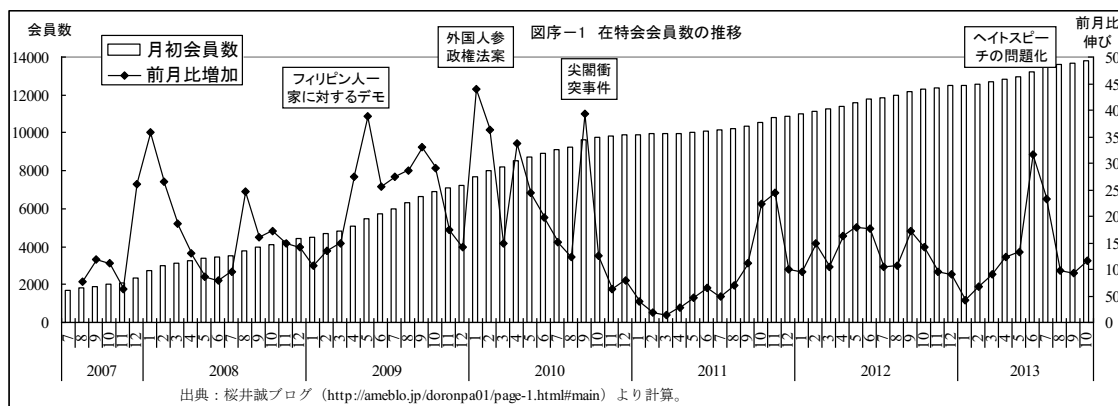
<sup>10</sup> 詳しくは、樋口（2012s、2012x）を参照。

<sup>11</sup> 新しい歴史教科書をつくる会については、具（2010）、村井（1997a、1997b）、小熊・上野（2003）を参照。これは草の根的な広がりを一定程度持ったといえるが、神道や青年会議所のような既成右派勢力の大々的な支援を受けている点で排外主義運動とは異なる（俵、2001）。

第3に、排外主義運動でもっとも規模が大きい在特会の新しさは、組織されざるネット右翼を組織化した点にある<sup>12</sup>。インターネットで右派的なコンテンツを閲覧したり、右派的な書き込みをする者をネット右翼と呼ぶが、在特会は会員や活動家のほぼ全員をインターネットにより勧誘してきた。第5章でみるように、インターネットでの「動員の技術」(Oliver and Marwell 1992)——特に動画での発信能力は左派市民運動を凌駕しており、左派が後追いつく状況がある。

つまり、現在の排外主義運動は「右翼崩れ」からノウハウを、歴史修正主義から係争課題を、インターネットからネット右翼という動員ポテンシャル(運動の支持層)を得てきた。在特会の前会長たる桜井誠<sup>13</sup>が1970年代生まれであるように、運動経験のない若年層が主体となっているものの、排外主義運動は既存の基盤を利用してきた。それに加えて、インターネット利用という新たな動員手法を開発することで、急速に成長したともいえる<sup>14</sup>。

在特会が結成されたのは2007年1月だが、在特会に対する注目の度合いは短期間で大きく変動してきた。それを示すのが図序-1であり、これは在特会の会員数の推移を計数したものである。知名度を上げるきっかけとなったのは、2009年春に在留特別許可を申請した蕨市のフィリピン人一家に対する嫌がらせデモだった。この頃から会員数も急増し、在特会が排外主義運動の代表的な組織として認知されていく。在特会の行動方針は、思い付きをそのまま実行という無計画性を1つの特徴とするが、会員獲得の方法には意識的だった<sup>15</sup>。それが会員拡大を目論んだ過激化路線へと結びつくが、これは在特会の悪名を轟かせたものの、蕨市での嫌がらせデモ以降は効果がなかったと思われる。



すなわち、京都朝鮮学校、徳島県教組、ロート製薬への嫌がらせで逮捕者が出て、会員

<sup>12</sup> 残念ながら、ネット右翼の実態については明らかでない部分が多い。さしあたり別冊宝島編集部(2008)、古谷(2013)、藤田(2011)、近藤・谷崎(2007)、菅原(2009)、辻(2008、2009、2011)を参照。韓国のネット右翼については、金玄郁(2013)がある。

<sup>13</sup> 桜井は、2014年11月に会長を退くことを宣言し、12月には筆頭副会長だった八木康洋が会長になっている。桜井は在特会を退会したことになっているが、インターネット放送などには引き続き出演しており、関係を保ち続けている。この背景に対する見方の1つとして、安田(2015)を参照。

<sup>14</sup> だが経験不足ゆえに、2010年に徳島県教職員組合事務所への押し入りや京都第一朝鮮初級学校への嫌がらせで逮捕者が出るといった問題や、内紛に際して脆さを露呈してきた。これらの行動の法的な問題については、江頭(2012)、山田(2012)を参照。

<sup>15</sup> たとえば、在特会副会長である八木(2011)は、この点に関して言及している。

数の増大にはつながらなかった<sup>16</sup>。ヘイトスピーチが政治の場で取り上げられ、反レイシズムの対抗運動が活発化した 2013 年 6 月にも会員数は一時的に急増した<sup>17</sup>。だが、その後すぐに伸びは低下しており、逮捕のような社会統制や反レイシズムの対抗運動は運動の停滞をもたらす可能性が高い<sup>18</sup>。ヘイトスピーチが法的に規制されれば、運動の勢いがさらに削がれるという予測も可能だろう<sup>19</sup>。

だが、そもそも在特会はなぜ急激に勢力を拡大しえたのか。換言すれば、捉えどころのないネットユーザーに働きかけ、「在日特権」なる虚構を信じさせるという「離れ業」がなぜ可能になるのか。排外主義運動の動員をめぐる「わからなさ」は、当事者のみならず観察者・分析者にとっても同様であり、それだけに憶測や予断にもとづく解釈が跡を絶たない。プロローグでは「不安」に対する説明に疑問を呈したが、日本の排外主義運動をめぐるのは、それ以外にも多くの解明されざる論点が存在する。運動をめぐる基本的な問い——誰が／なぜ／いつ／何を／いかにして、動員／支持／敵視するのか——は、ほとんどが明らかにされていない。現象を理解するには、紋切り型の解釈で思考停止するのではなく、適切な問いを提示してそれに答える必要がある。以下で行うのは、本論文を通じて展開する論点を整理しつつ、各論で解明すべき問いを提示し、全体の骨格を提示する作業である。

---

<sup>16</sup> これらの事件を起こしたのはチーム関西だが、一般人は在特会と区別できないだろう。京都朝鮮学校襲撃事件の経緯については河村（2011）、橘（2011）を、朝鮮学校側からみたルポとして中村（2013a、2013b、2013c）、佐藤（2013）、歴史的な背景や経緯については板垣（2013）、在特会側の解釈については八木（2012）を参照。チーム関西は、これ以外にも奈良水平社博物館差別街宣事件（守安、2012）やロート製薬強要事件（岡本、2013；安田、2012e）などを起こしており、刑事・民事事件とのかかわりが突出している。

<sup>17</sup> 筆者自身は、反差別法制の一環としてヘイトスピーチの法的規制を早急に進めるべきと考える（樋口、2013）。西欧の経験のみを限り、こうした法的規制は反レイシズム運動にとって、数少ない武器となるからである（cf. 森、2010）。運動側からの問題提起が政治的アジェンダに上がることは滅多にないため（原田ほか、2012a；大曲ほか、2012）、この機会を最大限生かすべきだろう。だが、ヘイトスピーチが問題化した 2013 年 3 月以降、メディアの報道がヘイトスピーチに限定される傾向がある。ヘイトスピーチはあくまで排外主義をめぐる問題の一部でしかなく、議論を矮小化しないよう注意が必要だろう。日本における法制化を意識した近年の議論として、以下を参照（有田、2013；関東弁護士会連合会、2012；金尚均、2012、2014；前田、2010、2011、2012、2013；師岡、2012、2013a、2013b）。

<sup>18</sup> 反レイシズムの対抗運動については、中心メンバーである noiehoie（2013）と野間（2013a、2013b）、山口（2013）の他、田崎（2010）を参照。ネット右翼を自称する者による揶揄的なレポートもある（森、2013a、2013b）。反レイシズムの対抗動員は、排外主義運動や極右政党に対する支持を抑制する効果を持つ（Lloyd 1998；Willems 1995）。日本でも対抗運動による抑制効果はあると考えられるが、日本は極右の活動家に対して相対的に「寛大」であるように思われる。たとえばオランダでは、極右組織のメンバーであることで、政治的社会的に相当の不利益を覚悟せねばならない現実がある（Klandermans 2013；Linden and Klandermans 2006a、2006b）。ドイツでは、スキンヘッドに対する社会的なスティグマが強いことから、一度なってしまうと戻りにくい側面もあるという（Backes and Mudde 2000）。

<sup>19</sup> ただし、これは運動の少数過激化をもたらす要因でもあるため（della Porta 1995；della Porta and Reiter 1998）、より深刻なヘイトクライムが発生する可能性もないとはいえない。日本の排外主義運動と社会統制の関係については稿を改めて論じるが、治安当局も排外主義運動には注目しており、以下のようなまとめがなされている（公安調査庁 2011、2012、2013；駆井 2008；森内 2012；右翼問題研究会 2011；山戸 2012；善福 2010）。

## 2 誰が排外主義運動に馳せ参じるのか

### (1) 寄る辺なき底辺の反乱?——『ネットと愛国』の前提を俎上に乗せる

ネット右翼が話題となる時、決まってある種のステレオタイプがついてまわる。すなわち、社会の縁辺で満たされない生活を送り、疎外感や不遇感に満たされた者がいる。ほとんどが男性である彼らは、蓄積される一方の鬱憤を晴らす場をインターネットに見出し、韓国、中国、「在日」といった「敵」のバッシングにいそしむ<sup>20</sup>。常時パソコンにかじりついて待機しているとしか思えないくらい、どのニュースが出てもし早く反応、どんな話題でも「中国、韓国、在日」に結びつけて貶すコメントを書き込む異様な熱意。——Yahoo!のニュース速報をみていると、暇を持て余して非生産的な活動にしか情熱を注げない、そんなネット右翼像を首肯したくもなる。

日本で排外主義的な言説がインターネットを覆うに至った 2000 年代は、日本の経済的なプレゼンスが低下し、非正規雇用の増加や格差・貧困が問題化された時期でもある<sup>21</sup>。社会的排除を蒙る者が程度としても人数としても増加し、それに対する認知が高まるなかで、排除された者がはげ口を求めるといふ説は実感に沿っている。それだけに、排外主義運動の発生と拡大を不満・不安と階層で説明しようという思考が強固に根を張ってきた。だが、第 1 章でみるように外国における極右政党の支持基盤は、不満・不安と階層で説明できるほど単純ではない。正確にいうと、そうした単純な支持者像は経験的研究の蓄積により、大幅な修正を余儀なくされてきた。

では、日本についてはどうなのか。排外主義運動に関して取材を重ね、決定版ともいうべき『ネットと愛国』を著した安田浩一の議論を素材として、先行する説の妥当性を検討することとする<sup>22</sup>。安田の著作は、裏づけのない思い付きを並べた類書とは異なり、決してお手軽でいい加減に作られた本ではない。排外主義運動という同じ対象に関して調査した経験から判断すれば、安田の取材活動はかなり行き届いており、著作に登場しない者も含めて手厚く取材がなされている。『ネットと愛国』が、ジャーナリズム大賞と講談社ノンフィクション賞を受賞したのも、発掘的ジャーナリズムと手厚い取材の両方が評価されたゆえのことだろう。ただし、そうした取材を経て得られたリアリティゆえに、安田の常識的で素朴な

<sup>20</sup> こうした像に対しては当事者の反発が強い。たとえば、当事者の 1 人である古谷 (2012, 2013) は社会調査として成立する水準ではないが、実証的に反論しようとしている。

<sup>21</sup> 第 1 章で言及するように、欧州で排外主義運動と同時期に現われた左派からの動きとされるのは、緑の党に体现される左派自由主義の運動であり、担い手は新中間層である。しかし、日本では以下の見聞記に典型的なように、右も左も不安定労働者が担い手とされており、研究上の文脈を完全に無視している。「在特会が結成された 2007 年 1 月は、この日の有志たち (反在特会運動の有志) とも縁があるプレカリアート (不安定労働者) 運動の発生と同時期である。両者はいわば、二一世紀の社会状況という共通の地盤から生まれた、しかし性格が異なる『新しい社会運動』なのだ」(小熊英二「在特会のデモを見に行く」『GQ』2013 年 3 月 26 日)。この文章では、プレカリアート運動と在特会の発生時期を同じとする (前者はイラク反戦がきっかけで数年早い) といった基本的な事実誤認がなされており、なおかつ両者の社会的背景として (暗黙のうちに) 剥奪経験を安易に想定する点で問題が多い。

<sup>22</sup> 安田の議論については以下を参照 (木村・園・安田 2013; 西村・安田 2013; 津田・安田・鈴木 2013; 津田・香山・安田ほか 2013; 安田 2010, 2011a, 2011b, 2011c, 2012a, 2012b, 2012c, 2012d, 2012e, 2013a, 2013b, 2013c, 2013d, 2013e; 安田・岩田温・古谷・森 2013; 安田・山本・中川 2013)。

思い込みにもとづく解釈が、読者には信憑性を持って受け止められてしまう<sup>23</sup>。それゆえ、安田の議論をやや抽象的な水準で検討し、その問題点を指摘しつつ本論文の問いを提示していきたい<sup>24</sup>。

まず、「誰が排外主義運動の担い手となるのか」という問いに関して、彼は「僕が会った在特会員のほとんどが非正規の労働者で、経済生活の不安定な人が多い」（安田、2012c: 87）という<sup>25</sup>。単に経済状況が良くないだけでなく、精神的にも追い詰められた人が多く、それを以下のように「しんどそうな人々」と表現する。

誤解を恐れずに言えば、今の世の中ではけっして珍しくない「しんどそうな人々」ばかりだった。…抱えきれないほどの不安と不満と憤りをどのようにコントロールすればよいのか、彼ら自身も苦しんでいるように見えた。（安田、2012d: 7）

排外主義運動、特に在特会のデモや街宣への参加者を観察すると、一般的な社会生活に困難を来していると思われる者は一定割合存在する。また、コミュニケーションが苦手そうな者も確かに一定程度いるだろう。だがそれを認めたとしても、「しんどそうな人々」ばかりで運動が組織されているとみるのは無理がある。社会運動研究者としていうならば、運動の組織化や対外的な行動の遂行は、それほど容易なことではない。本当に「しんどそうな人々」ばかりで組織できているのならば、在特会は社会の縁辺にある者の社会的訓練に成功した——目的や行動は最悪だが——優秀な機関という評価が成り立ってしまう。

実際には、排外主義運動は一定の多様性がある担い手からなっており、「しんどそうな人々」ばかりに注目すると多くのことを見落としてしまうのではないか。そもそも、在特会は個人の寄付によって事務所や活動費を賄ってきたが、「しんどそうな人々」が在特会に共感して組織を維持できるだけの寄付をするとは考えにくい。これも担い手の多様性を示す

---

<sup>23</sup> 『ネットと愛国』の紹介・書評やそれにふれたエッセイは数多く、本論文執筆時点において、『朝日新聞』『毎日新聞』『産経新聞』『日刊ゲンダイ』のほか、『週刊朝日』『サンデー毎日』『週刊現代』『週刊文春』『週刊ポスト』『AERA』『SPA!』『新潮45』『Voice』『第三文明』『インパクション』『M ネット』『移民政策研究』でも紹介されている。だが、少数の例外を除いて「しんどそうな人々」が担っているという安田の議論を鵜呑みにする者が多い。安田の議論を批判的に検証することで、思い込みにもとづく素朴実感論から脱却する必要があるだろう。

<sup>24</sup> 念のためお断りしておくが、筆者自身は安田と分析上の見解を異にする部分が多いが、彼に対して否定的な感情を持っているわけではまったくない。調査の過程で意見交換もしたし、いろいろ教えてくれた安田には感謝もしている。唯一違和感を禁じえないのは、前在特会会長・桜井誠の本名の公表過程にある。かねてからウィキペディアなどでは、桜井誠は「木村誠」「高田誠」名も用いていたと書かれていた。それに対して安田（2010）は、彼のことをTとイニシャルで表記したため、「高田誠」が本名だとネット上で言われるようになった。安田はその後、「ネット上では明らかになっていることから、本稿では本名の『高田誠』をそのまま記した」（安田、2011a: 271）という。しかし実質的に本名を特定したのは安田であり、にもかかわらず「ネット上では明らかになっている」というのは原因と結果を意図的に混同させているといわれてもしかたない。ネットに責任転嫁する仕方ではなく、必要性を述べた上で最初から本名を公表すべきだっただろう。

<sup>25</sup> 一方で彼は、一貫性がないだけなのか自説を修正したのかはわからないが、「参加者は、必ずしも『貧しく仕事がない若者』ばかりではない。サラリーマンや主婦、公務員など多様だ」（『毎日新聞』2013年6月18日）とも述べている。

傍証である。それゆえ、「しんどそうな人々」が担い手になるという安田のテーゼそれ自体を、きちんと検証せねばなるまい。だが、安田が何名に対して取材し、そのうち何名が経済的な下層あるいは精神的困難を抱えていると認定したのかは公表されていない。そのため、彼の著作や新聞記事に登場する具体的な人物を検討することで、安田説の妥当性を検証してみよう<sup>26</sup>。

No	活字に登場した呼称	年齢	地域	学歴	職業	出典
1	八木康洋	38	関東	院卒	研究所勤務	2012a: 54
2	米田隆司	49	関東	大卒	出版社勤務	2012a: 40
3	OL	29	九州	大卒	OL	2012a: 60
4	藤田正論	30代後半	北海道	大卒	デザイン会社経営	2012a: 77-8
5	菊地内記	27	東北	大卒	銀行員	2012a: 84-91
6	金友隆幸	25	東京	大卒	右翼団体	2012a: 154
7	増木重夫	58	関西	大卒	学習塾経営	2012a: 339-40
8	中村友幸	57	関西	大卒	サラリーマン	2012a: 226-7
9	沓沢亮次	44	東北	大卒	獣医師	2012b: 293-4
10	西村修平	62	東京	大学中退	建設会社員	2012a: 145-8
11	黒田大輔	34	関東	大学中退	行政書士	2012a: 178-9
12	森脇武一郎	28	中国	大学通信課程	塾講師	2013a:10-19
13	自動車整備士	39	九州	専門学校卒	自動車整備士	2012a: 69
14	宮井将	32	関西	専門学校卒	配送センターアルバイト	2012a: 314-8
15	松本修一	35	関西	専門学校中退	自動車洗浄業	2012a: 332-5 朝日新聞2010.12.30
16	桜井誠	39	関東	高卒	非常勤公務員	2012a: 16-30
17	川東大了	40	関西	高卒	電気工事業	2012a: 118-27
18	荒巻靖彦	47	関西	高卒	バー経営	2012a: 118-42
19	有門大輔	36	東京	高卒	右翼団体	2012a: 163-4
20	よーめん	40代半ば	関東	高卒	健康食品販売業	2012a: 173
21	行本慎一郎	27	東京	高卒		2012a: 178-81
22	西村斉	42	関西	高卒または中退	不動産管理	2012a: 118-31
23	岡本祐樹	21	関西	高卒または中退	鮮魚店員	2012a: 118-41
24	星エリアス	24	関西	高卒または中退	植木職人	2012a: 118-38
25	中谷良子	35	関西	高校中退	ネイリスト	2012a: 118-42
26	中谷辰一郎	42	関西	中卒または高校中退	建設	2012a: 118-34
27	若い男	14	東北	中学生	学生	2012a: 82-3
28	先崎玲	54	九州		美容院経営	2012a: 58-9
29	男性	32	九州		農業	2012a: 67
30	高橋阿矢花	28	北海道		OL	2012a: 73
31	徳部崑久夫	41	東北		ダンプ運転手	2012a: 85
32	OL	30代	東北		OL	2012a: 85-6
33	元支部長	30代	西日本		自営業者	2012a: 264
34	元支部長	40代	西日本		会社員	2012a: 280-1
35	元会員	30代	関西		会社員	2012a: 337-8
36	パート女性	32	沖縄		パート	2012b: 291
37	年配の参加者	50代	沖縄		自営業者	2012b: 291-2
38	青年	25	東京		転職繰り返し	2013a: 31-4
39	一二三	31	中部	院卒	情報処理会社員	朝日新聞2010.3.17
40	中島康治	34	四国	大卒	自営業者	朝日新聞2013.8.22

<sup>26</sup> 安田が著作では触れていないが取材した者の一部を筆者も知っているが、そうした者についても「しんどそうな人々」ばかりとはいえなかった。また、「しんどそうな人々」であっても、それぞれが抱えた困難ゆえに排外主義運動に関わるとは思えないケースも多い。

表序-1 『ネットと愛国』やメディアに登場した排外主義運動の参加者(続き)

No	活字に登場した呼称	年齢	地域	学歴	職業	出典
41	山本優美子	40代	東京	大卒	自営業者	北原・朴 (2014) 佐波 (2013)
42	サヤカ	30代		大卒	OL	北原・朴 (2014)
43	岡山ひびき	28		大卒		佐波 (2013)
44	津原加奈	30	東京	大卒	会社員	佐波 (2013)
45	大学生	20	中国	大学在学中	学生	毎日新聞2013.6.13
46	中野区的女子大生	19	関東	大学在学中	学生	朝日新聞2010.3.15
47	佐波優子	35	東京	短大卒	キャスター	北原・朴 (2014)
48	中曾千鶴子	50代	兵庫	短大卒		北原・朴 (2014)
49	Saya		神奈川	短大卒	シンガーソングライター	佐波 (2013)
50	若者	20代	埼玉	専門学校卒	派遣労働者	東海林 (2013)
51	青年	23	東京	高卒	アルバイト	朝日新聞2014.5.1
52	にゃんにゃん	25	東京	高卒		佐波 (2013)
53	神鷲皇国会の少年	18	関西	高校中退	仕事長続きせず	産経新聞2013.5.13
54	駒井真由美	41	関西	中卒	生活保護	毎日新聞2015.1.5
55	横浜市青葉区の男性管理職	49	関東		外食チェーン管理職	朝日新聞2010.3.15
56	前橋市の行政書士	54	関東		行政書士	朝日新聞2010.3.15
57	国立大の男性職員	45			大学職員	朝日新聞2010.3.17
58	無職男性	25	関西		無職	朝日新聞2010.5.3
59	大阪市の自営業の男性	34	関西		自営業者	読売新聞2010.9.6
60	会社員男性	40代	関東		会社員	西日本新聞2013.4.7
61	生主	39	関東		メーカー勤務	朝日新聞2013.4.28
62	会社員男性	20代	関東		会社員	朝日新聞2013.5.3
63	ビジネスマン	25	関東		ホワイトカラー	Japan Times 2013.5.23
64	男性	26	関西		運送会社員	毎日新聞2013.6.14
65	事務員女性	26	関西		事務員	毎日新聞2013.6.25
66	会社員男性	27	関西		会社員	毎日新聞2013.6.25
67	男性会社員	28	関東		会社員	共同通信2013.7.3
68	男性会社員	33	関西		会社員	読売新聞2013.7.3
69	男子学生	20代	東京		学生	読売新聞2013.7.3
70	幸希	41	中部		看護師	中日新聞2013.7.16
71	20代女性	20代	関西		事務職	朝日新聞2013.11.22
72	会社員女性	32	関西		会社員	朝日新聞2013.11.22
73	男性	55	東京		派遣社員	毎日新聞2014.1.5
74	伊藤広美	54	三重		職業不詳	朝日新聞2014.10.24
75	山本雅人	50	京都		運送業	朝日新聞2014.10.25
76	天羽絢子	35			モデル	佐波 (2013)
77	あにい	22				佐波 (2013)
78	鈴木千春		東京		会社員	佐波 (2013)

注：出版年だけの表記は安田の著作を示す。属性については、他の情報源から得られたものも補ってある。安田の著作については2012年時点、他のメディアは掲載時点での年齢を示す。

彼の一連の著作に登場する人物のうち、属性に関してある程度の情報があるのが38名あり、並べると表序-1のようになる。そのうち23名について、筆者は安田の著作に書かれたこと以外の情報も調査を通じて持っており、総合的に勘案して「しんどそうな人々」と認定してよさそうなのは、以下の7名となる。宮井将、松本修一、岡本祐樹、星エリアス、中谷良子（以上関西）、森脇武一郎（広島）、青年（東京）<sup>27</sup>。このうちの多くは、逮捕者が続出したチーム関西というグループの関係者であり、「ヤンキー文化」を色濃く反映している点で排外主義運動の中でも特異な存在である<sup>28</sup>。それを除けば、明示的に「しんどそうな人々」

<sup>27</sup> ここでいう「しんどそうな人々」とは、経済的困難と精神的な不安のいずれかまたは双方を抱えているとみなしうる場合を指すものと考えられる。中谷辰一郎は高校中退で鳶職についており、社会経済的には下層に属するだろうが、結婚して子どももおり「しんどそうな人々」の範疇には入らないと判断した。筆者独自の情報では、森脇武一郎は専門職についているが、職場が不安定で政治的立場も二転していることから含めた。「青年」も、発達障害であることが活動への参加に結びついたと考えており、現在は東京での生活を断念して郷里に戻っていることから含めている。

<sup>28</sup> ある関係者によれば、ラウンジ経営者がリーダー格となってから、「ヤンキー系」が多く集まってそれ以外の者が去るようになり、組織文化が変化していったという。安田は、「京都・徳島



といえそうな者の比率が高いとはいえ、「ほとんどが非正規の労働者」という安田の言明と一致していない。表序-1 の下段には、メディアの記事に登場する者も掲載したが、柏崎（2011）がいうように中産階級が多いとみなしうる。このことも、「しんどそうな人々」だけに焦点を当てるのが一面的であることを示すだろう。

## （２）「非モテ系」の反乱？

前項でみたように、排外主義運動の担い手の社会経済的な状況には多様性があり、「しんどそうな人々」からなるという性格規定はできないと考える（第２章参照）。だが、社会経済的な特質との関連で確実にいえるようなことが１つあり、それは排外主義運動の担い手には独身層が多いことだった。これについて、「非モテ層」が「リア充」でないことのルサンチマンを解消するべく、排外主義運動に加わって周囲の承認を得て満足する、というストーリーを描くことはたやすい<sup>29</sup>。実際、安田（2012a : 42）は在特会の広報局長について、「独身。恋人もいないらしい」と思わせぶりに描写する。あるいは、よりストレートに以下のよう語る。

在特会のメンバーには、結婚して自分の家族をもつて人間は多くはいませんし、幹部連中のほとんども独身。家族もなく、地域からも孤立しているから、いきなり国家にアイデンティファイをせざるをえない。（安田、2012c : 90）

これは、独身者に対する偏見を多分に含んでいると筆者には思えるが、それをおくとしても論理の飛躍が数多く存在する。まず、家族がおらず地域との接点がないことと、「国家にアイデンティファイ」することは論理的に別の事柄であり、両者をいきなり結びつけるのは乱暴である。そもそも、独身者が地域との接点を持ちにくいのは今に始まったことではない。安田の前提が正しければ、独身者は連綿と「いきなり国家にアイデンティファイ」してきたことになる。この議論を一般命題として展開するならば、未婚化・晩婚化が進む社会的趨勢は、「国家にアイデンティファイ」する者の増加を帰結せねばならない。これを敷衍すれば、近年の「右傾化」の原因として独身者の増加がある、今後もこの傾向は続くという珍説に逢着する。自らの観察対象——在特会——について語る分には、それなりの信憑性を持って聞こえる事柄でも、その一般的な適用可能性を吟味した時点で根拠のなさを露呈してしまう。

これに対して、地域組織や労働組合の組織率が下がるなど個人化が進み、独身者の社会関係が希薄化している、という反論はありえるだろう<sup>30</sup>。だが、これは都市化が社会関係に及ぼす影響について言われたのと同様に、社会関係が「解体」したという見方もあれば「変容」したという見方もある。経験的研究では、失われる社会関係がある一方で、環境の変化に即

---

両事件で逮捕されたメンバーらの経歴を見ても、それ（在特会メンバーの多くが『エリート』とは無縁の存在であること）は明らかだ」（安田、2011b : 35）という。だが、チーム関西の性格を考えれば、そこから全体を類推するのは誤りであると考えたほうがよいだろう。

<sup>29</sup> もっとも、こうした見方は安田に限ったことではなく、たとえば以下を参照。「大衆運動が誕生するときには、ほとんどいつも適齢期を過ぎた未婚婦人や、中年の婦人が、運動に参加するのだけれども、その理由は倦怠である」（Hoffer 1951=2003: 60）。

<sup>30</sup> この点に関しては、欧州を中心に一定の先行研究がある。詳しくは第１章を参照されたい。

して新たに社会関係を構築するという見方のほうが支持されてきた (Fischer 1982, 1984; Wellman 1979)。インターネットについても、自室に閉じこもる孤立した個人を帰結するというよりは、社会関係の組み替えをもたらすとみたほうが妥当である (Fischer 1995; Rainie and Wellman 2012; Wellman and Gulia 1999)。こうした知見をきちんとした根拠により否定できたとしても、さらに「解体」がナショナリズムに結びつくメカニズムを明らかにして初めて、安田の説は検証に堪えるものとなる。

では、どのように理解すればよいか。社会科学的に異なる解釈を示せば、排外主義運動に独身者が多いことは次のように説明できるだろう。まず、独身である分だけ時間的資源を豊富に持つ。これは活動のための時間だけでなく、排外主義への接点であるインターネット使用時間にもつながる。さらに、家族がいることで思考の過激化にブレーキがかかる、あるいは運動参加という直接行動の抑制要因となる。つまり、家族がいる方がネットで怪しげな情報を拾う確率が低下し、それに興味を持って「何を馬鹿なことを言っているの」と他者評価にさらされる。そして運動に加わろうとしても時間がない、あるいは「そんな馬鹿なことやめなさい」といわれて断念する可能性も高い (cf. Klandermans and Oegema 1987; McAdam 1986; McAdam and Paulsen 1993; Oegema and Klandermans 1994; Wiltfang and McAdam 1991)。

つまり、「既婚のAさん」と「単身世帯のBさん」が、家族構成以外は——「国家にアイデンティファイ」する程度も含めて——同じ条件にあったとしよう。Bさんは仕事から帰宅して3時間パソコンの前に向かってネットサーフィンするのに対して、Aさんは15分間必要な用事を済ますだけだった。これだけでも、AさんとBさんでは排外主義的な情報に接する確率が大きく異なる。また、Aさんが排外主義運動の動画にのめり込んで家族に熱く語ったとしても、一笑に付されてバランス感覚を取り戻すかもしれない。さらに、Aさんは休日には家族と一緒に過ごさねばならないから、街宣に行くこともできない。Aさんが運動に参加するには、Bさんと比べて多くの「障害」を乗り越えねばならない。

これは、個人が運動参加に至る過程を分析するミクロ動員論といわれる領域では、きわめて標準的な発想である<sup>31</sup>。前出の広報局長は、「もしも結婚なんてしていたら、こんな運動できないでしょうね」(安田、2012a : 42、傍点引用者)と述べている。つまり、「独身だからできる」という解釈も可能だが、独身＝孤立という見方だけに依拠して、安田は読者をミスリードしているのではないか。

### 3 なぜ排外主義運動に馳せ参じるのか

#### (1) 「承認欲求」「鬱憤晴らし」は運動参加の説明要因なのか

「孤独や不安定を抱えた者がイージーなナショナリズムに絡め取られていく」(安田、2011b : 47) という不満・不安を運動の発生要因とする見方は、かつての社会運動研究では支配的だった (Buechler 2004)。そうした議論の学説史的な位置づけと評価は第2章で行うとして、ここでは「承認欲求」「鬱憤晴らし」という安田の議論を象徴するキーワードを検討したい。安田は活動家を描く際、「日常生活のなかで感じる不安や不満」(2012a : 314)と「仲間を見つけることができた」(2012a : 87) という対比を基本的な解釈のコードとしている。両者をつなぐのが承認欲求と鬱憤晴らしという言葉であり、不満・不安を持つ者の承認

<sup>31</sup> この点については、さしあたり樋口 (1999) で検討しておいた。

欲求が在特会で仲間を会えることで満たされ、街頭で叫べば鬱憤晴らしになる。だから活動にのめりこむのだ、という通奏低音で全体が描かれる。

こうした議論の理論的な問題点はおくとしても、「承認欲求」「鬱憤晴らし」を運動参加の原因としてよいのか、検討の必要がある。社会運動への関与に際しては、(初期の)参加局面と(その後の)継続局面があり、両者を規定する要因が同じとは限らない(McAdam 1986)。安田は元会員のエピソードから、彼にとって街宣が承認される場であり鬱憤晴らしになったから、「在特会にハマった」であろうと示唆している。

街宣しているときに突然、妨害者が現われたことがあるんです。思わず僕は「叩き出せっ！」と叫んでしまったのですが、そのとき、周囲の仲間がみんな僕に同調してくれた。自分が大声で指示を出したときの快感と、仲間が守ってくれているんだという安心感。僕が一時期とはいえ在特会にハマったのは、この感覚なんですよ。(安田、2012a : 322-3)

これは活動の継続局面(なぜ続けたか)の説明になったとしても、参加局面(なぜ加わったか)の説明にはなっていない。彼は、「地域のなかで見向きもされてないタイプだからこそ、在特会に集まってくるんです」(安田、2012a : 337)と、承認の欠乏が運動参加の要因だと述べる。しかし彼は、街宣に加われば承認欲求が満たされ鬱憤晴らしになると考えたから参加し、期待通り承認されたからハマったのだろうか。そうではなく、「承認」が参加の結果として得られたことは、彼の説明を読めばわかる。「承認」や「鬱憤晴らし」は——仮にそれが在特会会員の心情を言い当てていたとしても——運動参加の原因ではなく結果と考えた方が理にかなっている。安田の著作には、こうした原因と結果の混同が多く、読者をミスリードする結果をもたらしている。

一般に、いったん参加した運動を継続するよりも、最初に運動に加わる際のハードルの方がはるかに高い<sup>32</sup>。したがって、参加後の「承認」よりも参加に至る経路や動機の解明の方が理論的には重要なのだが、この点に関する安田の記述はきわめて手薄である。「日常生活のなかで感じる不安や不満が、行き場所を探してたどりついた地平が、たまたま愛国という名の戦場であっただけ」(安田、2012a : 313、傍点引用者)というが、これは説明の放棄としかいいようがない。本当に「たまたま」在特会に関わったのであれば、在特会の盛衰は「日常生活のなかで感じる不安や不満」の総量の関数にすぎないことになる。これが運動参加の説明になっていないことは、第2章以降で詳述していく。

## (2) イデオロギー的に無色の存在？

「なぜ参加するのか」を解明するうえで、運動参加者の政治的イデオロギーは重要な要素である。だが、排外主義運動の説明に際しては、活動家のイデオロギー的背景よりも茫漠とした不満・不安ばかりに焦点が当てられてきた。これは新聞報道の基本的な論調でもあるが、

---

<sup>32</sup> オルソン (Olson 1965) のいうフリーライダー問題の観点からすれば、最初に運動に参加するのがもっとも障壁の高い行為となる。それよりは、障壁を越えて一度参加した者が運動を継続する方が容易なのは、常識的に理解できるだろう。

安田も同様にイデオロギーによる説明に以下のように懐疑的である<sup>33</sup>。

右翼や保守、あるいは民族派やナショナリズムという文脈で語っていいものか躊躇しているのが現状です。つまり政治的な文脈で在特会を語ることにどれだけの意味があるのだろうかという疑問があるわけです。(木村・園・安田、2013: 12)

それと親和的な言説として、既成右翼による在特会批判がある。それによると、在特会がやっていることは単なる弱いものいじめである、在特会には思想がなく右翼とは呼びえない。だが、欧州の研究をみれば明らかなように、極右といってもバリエーションはかなり存在し (Mudde 2000)<sup>34</sup>、共通項はナショナリズムと排外主義くらいしかない (Mudde 2007)。「反日勢力」や「在日」への敵意をむき出しにする排外主義運動は、他の国との比較でいえば紛れもなく極右の範疇に入る<sup>35</sup>。思想がないというよりは、「これまでとは異なる『新しい』保守像をつくりあげようとしている」(木下、2010: 17)と考えたほうが妥当である。既成右翼が奉じる天皇制を中心とする復古主義は、新規の運動参加者にとっては「古くさすぎて興味を持ってない」だけのことだろう<sup>36</sup>。

では、イデオロギー的側面を軽視することで何が失われるのか。安田の著作を具体的に検討していこう。ルポルタージュでは、外見に関する描写は読者が情景を想像するのを助ける小道具となる。そして、『ネットと愛国』の登場人物のほとんどを実際に知っている者としていうならば、安田はおおむね的確に——取材に協力的な人を良く描きすぎているくらいはあるが——外見的特徴を描述している。だが研究者としてみると、それに目を奪われて安田は重要なことを聞き漏らしている、あるいは書き損じているとしか思えない箇所がいくつもある。たとえば以下の記述をみてみよう。

私の目を引いたのは、紅一点の街宣参加者である。赤白ボーダーのTシャツにジーンズというラフな格好で来ていた 29 歳の OL だ。肩甲骨のあたりまで伸びた長い髪が風に揺れる様は、

<sup>33</sup> しかしその一方で、「左翼やリベラルな層であれば、仮に社会的に恵まれていなくても、たとえば貧困運動などの回路があります。でも貧困の保守層には、そういう回路が何もない。在特会という存在は、彼らにとって自我を保つための絶好の突っかい棒なんです」(安田、2012c)ともいう。つまり定見がないわけで、それでいて読者をミスリードするような発言をするのは問題があるだろう。

<sup>34</sup> Mudde (2000: 170) は各国の極右政党について、①ナショナリズム、②排外主義、③国家主義(法と秩序、軍国主義)、④福祉ショーヴィニズム、⑤伝統的倫理、⑥修正主義がどの程度あてはまるかを検討している。これをみる限り、極右といっても相当の多様性があることが理解できる。

<sup>35</sup> 外国人参政権に対する反対のように、既成右翼も排外主義運動も一致する部分もある(「元氣になった日本の保守 永住外国人地方参政権問題」『AERA』2009年11月30日号)。むしろ一致する部分の方が多いはずだが、それは捨象されて相違だけが取り上げられる。既成右翼と排外主義運動の相違は、筆者からすれば運動のイデオロギーではなくスタイルによるところのほうが大きい。

<sup>36</sup> これ自体は、新しい歴史教科書をつくる会でもみられた現象であり、近年の右派市民運動では珍しいことでもない(小熊・上野、2003)。ただし、天皇制がまったく意味を失ったわけでもなく、それが新たな形でナショナリズムと結びつく可能性もある。これについては荻部(2006)を参照。

どことなく野暮ったい男性参加者との差異を際立たせている。くりくりとした二重の目には幼さが残り、「少女」と表現してもおかしくない顔立ちだ。(安田、2012a : 60)

この「29歳のOL」は在特会の「カルデロン一家追放デモ」の動画をみて運動に馳せ参じたという。だが、筆者自身が彼女に聞き取りした際に特筆すべきものと感じたのは、「少女」的な外見ではなく、彼女が学生時代から『正論』を読んでいたことであった(樋口、2012m)。安田は、彼女が着ていたボーダーのシャツについて言及こそすれ、彼女が学生のころから右派論壇誌を愛読していたことにはふれない(恐らく聞いていないのだろう)。安田が活動家のイデオロギー的背景をまったく聞かなかったわけではないし、触れている箇所もある。たとえば、在特会副会長として北海道地区をまとめてきた藤田正論は、以下のようにきわめて特異な家庭環境で育ってきたと紹介されている。

藤田はネットが普及していなかった時代に、「誰とも怒りを共有できない寂しさ」を感じていたという。もともと保守的な家庭で育った。とくに父親からは「日本人としての自覚」を厳しく諭された。テレビに天皇の姿が映ると、すぐさま正座するような父親だった。教育勅語を叩き込まれ、高校生の頃にはそらで言えるようになっていた。(安田、2012a : 77-8)

ただし、こうしたイデオロギー的背景は安田の著作では不当に軽く扱われており、藤田もむしろ参加者が抱える「寂しさ」を示す例として取り上げられている<sup>37</sup>。排外主義運動が政治運動である以上、活動家のイデオロギー的背景は、「なぜ排外主義運動に参加するのか」を解明する上で不可欠な要素だろう。この点については第2章と第3章で詳述するが、安田はなぜか「右翼や保守」という見方を拒み、そうであるがゆえに不満・不安で無理に説明しようとすることになる。時間をかけて多くの取材を積み重ねたのに、「しんどそうな人」の「寂しさ」という単一の物語でまとめたがゆえに、ありえたであろう豊富な発見を逃してしまった。

#### 4 在日コリアンと「在日特権」をめぐる問い

日常生活での不満・不安を運動発生の説明要因にすると、もう1つ理解しがたい論点が生じる。すなわち、なぜ今になって在日コリアンの排斥が叫ばれるのか<sup>38</sup>。排外主義は世界的に広くみられる現象であり、北米や西欧のような大規模な移民受入国では研究蓄積も相当な量にのぼる。そうした先行研究は第1章で整理するが、そこで得られた知見をもってしても、日本でみられる特徴の1つ——長い居住の歴史を持つ在日コリアンが排斥の対象になる理由を十分説明できない(第2章参照)<sup>39</sup>。既成右翼に関する英語の研究は、将来的には

<sup>37</sup> 藤田に関する記述を素直に読めば、彼が生活上の茫漠とした不満・不安により参加したわけではないことはすぐにわかる。イデオロギー的に合致したから運動に加わったはずなのだが、安田の著作ではその部分は考慮の外におかれる。

<sup>38</sup> 排外主義運動のなかには、排害社のように中国人排斥を中心とする団体もあるが、標的となるのは圧倒的に在日コリアンである。排害社は2012年6月に解散、詳しくは樋口(2012e)、金友(2011a、2011b)、安田(2012a)を参照。

<sup>39</sup> 強いていえば、反ユダヤ主義と類似した性格がまったくないとはいえないが、反ユダヤ主義のアナロジーで在日コリアンの排斥を捉えるのは難しい。

外国人労働者の増加が排外主義的な右翼を生み出す可能性があるとしており (Szymkowiak and Steinhoff 1995)、これが一般的な見方だろう。この点については第 8 章で詳述するが、排外主義運動の標的になったのはニューカマー外国人ではなく、他の国ならば標的になる可能性がきわめて低い在日コリアンであった。

在特会の目的は、旧植民地出身者で第二次大戦の敗戦以前から日本に住んでいた者及びその子孫に適用される「出入国管理特例法 (入管特例法)」の廃止とされている。入管特例法が適用されるのはほとんどが在日コリアンであり、それ以外にもいくつか存在する「在日特権」が日本社会の脅威になっているからだという。具体的には、特別永住資格、朝鮮学校補助金交付、生活保護優遇、通名制度という「在日特権」が列挙されている<sup>40</sup>。だが、これらを「特権」などとするのは無知を証明するようなものであり、差別の所産とみなされてきた通名制度ですら「特権」などとされている。「特権」という捉え方の愚かさは論じる余地もなく、検証する価値もない<sup>41</sup>。また、特別永住資格こそ 1991 年に法制化された点で比較的新しいが、それ以外はかなり以前から社会的慣行となってきた。

それにもかかわらず、今になってなぜ多くの者が「特権」なるものを信じるに至ったのか。これに対しては、すでに否定した「生きづらい社会」仮説以外に、大きく 2 つの回答がありえるだろう。第 1 は受容する個人レベルの議論で、ネット右翼になるような者はメディア・リテラシーが低いから、根拠のない情報を鵜呑みにする。あるいは、不満・不安を持て余すがゆえにデマを真に受けてしまう。第 2 は社会全体に関わる議論で、排外主義運動に限らず日本全体が在日コリアンを排除してきたのだから、「特権」は例外というより表現が極端なだけに過ぎないというものだ。あるいは、非正規雇用の増加など社会的排除の深刻化が、弱者による弱者いじめを生み出している。しかし、こうした単純かつ乱暴すぎる議論は、かえって事象の解明を妨げるのではないか。筆者も、個人と社会という 2 つの水準で説明するものの、発見的な知見を導くため以下の方針で分析を進めていく。

第 1 に個人レベルについては、「在日特権」なるフレーム (解釈図式——第 4 章参照) を活動家たちが受容する過程とその基盤を可能な限り詳細に分析する。ここでいう過程とは、幼少からの政治的関心やイデオロギーの形成を含む長期的なものであり、排外主義のイデオロギー的な基盤が検討対象となる。排外主義運動の活動家は、「在日特権」に関して現実的な判断力が著しく欠如していることは間違いない。しかし、それを漠然とした不満・不安と結びつけるのではなく、個々の活動家に生じた認知的過程こそ明らかにする必要がある。そのため、「在日特権」との邂逅に先立って、どのような受容の素地があったのかをまず考察したい (第 3 章)。そのうえで、活動家たちのイデオロギーと「在日特権」フレームが共鳴し、それを受容する過程を分析する (第 4 章)。さらに、活動家が「在日特権」と出会う過程ではインターネットが決定的な役割を果たしており、第 5 章ではインターネットを通じた勧誘のメカニズムを明らかにしたい。

---

<sup>40</sup> 在特会ホームページ上の配布用ビラから抜粋

([http://www.zaitokukai.info/uploads/images/bira/z\\_bira\\_a01.jpg](http://www.zaitokukai.info/uploads/images/bira/z_bira_a01.jpg))

<sup>41</sup> 「在日特権」も部分的に含めた「嫌韓」言説の真偽については、野間 (2013)、太田ほか (2006)、田中・板垣 (2007)、安田 (2012a) を参照。『FLASH』2013 年 10 月 15 日号では、Q&A 方式でわかりやすく解説されている。ところが、『SAPIO』2015 年 2 月号の特集「『在日特権』あるのかないのか徹底的に調べてみた」では、八木秀次を登場させるなど論調が変化している。

第2に、社会レベルでは「在日特権」なるフレームが生み出される背景を分析する。「在日特権」自体は、もっぱら排外主義運動が使用してきたものだが、それは何も真空状態から生まれたわけではない。「在日特権」という言葉が生まれる背後にはある種の政治状況が存在しており、「在日特権」なる枝葉よりもむしろ、その根幹となるより包括的なイデオロギーをみる必要がある。さもなくば、社会の側の要因を明らかにすることなど望むべくもない。

そのため、まずは既成保守勢力と排外主義運動の関係を明らかにする必要がある(第6章)。ここでいう関係とは、人的なつながりという意味ではなく言説上の関連を指す。本章の冒頭で、排外主義運動の主張は既成政治勢力のものを焼き直したに過ぎないと指摘した。それに加えて排外主義運動の言説は、冷戦終了後、特に2000年代に生じた右派論壇の変化を如実に反映している。冷戦時の保守にとっての仮想敵国は、疑いもなくソ連でありそれに連なる共産圏であった。他方で1990年代後半から敵手として結晶化してきたのは、「反日」勢力としての東アジア近隣諸国であり、2000年代になってその傾向に拍車がかかる。その意味で、保守勢力のありようと関連づけないと理解できないことを明らかにする。

次に外国人参政権の事例に即して、「外国人問題」と「東アジア地政学」がどのように関連するのかを議論する(第7章)。外国人参政権をめぐる「国際常識」の議論は、定住する移民の政治統合が健全な民主主義にとって必要という問題意識にもとづいていた。しかるに日本の外国人参政権問題とは、とりも直さず日韓間における——もっと早期に解決すべきだった——植民地清算の一環であった。それに加えて、プロローグでみた安全保障とリンクさせる妄想と相俟って、外国人住民の政治統合の問題であるはずの外国人参政権が、東アジア地政学をめぐる問題になっていく。

ここに至って、ようやく在日コリアンが排斥の標的となる要因を解明できる(第8章)。在日コリアンは、「定住外国人」としてさまざまな権利を獲得してきたが、一方で「過去の国民＝旧植民地出身者」(樋口、2001)としても処遇されてきた。「過去の国民」に対する配慮は、一方で政策を推進する要因ともなってきたが、第6章でみた保守にとっての仮想敵の変化が影を落とすようになった。すなわち、植民地清算が未だにできておらず、現職の首相が歴史修正主義に肩入れする日本において、旧植民地出身者は近隣諸国との対立に巻き込まれる。外国人参政権と同様に、排外主義運動が在日コリアンに対してみているのは、その生身の姿ではなく「本国」の幻影であり、それが憎悪の正体となる。

## 5 「通常の病理」から「病理的な通常」へ——事態の解明に向けて

本章では、「排外主義運動について素朴実感的な理解で思考停止する」「問題の構図を矮小化する」ことを批判し、各論に先立って必要な問いを提示してきた。排外主義運動を——正確には在特会を——特殊な人の特殊な行動として他から隔離してしまうと、本来関連させるべきものとのリンクを見失わせてしまう<sup>42</sup>。それは第1に、「しんどそうな」という社会心理的要因によって運動参加を説明することで、経済的停滞・社会解体が排外主義運動を生み出したという誤った診断を帰結する。第2に、排外主義運動の政治的性格を捨象してしま

<sup>42</sup> 安田(2012a)は、「子どもじみた」在特会と対比的に主権回復の会の西村修平を大人として描くが、振舞いが子どもか大人かといった点にこだわるのは的外れである。両者とも、まったくの虚構をもとに排外主義運動を展開し、直接行動している共通点の方が重要で、そこに分析のメスを入れるべきだろう。

うと、既成右翼や保守勢力と排外主義運動との接点を見出せなくなる。それは、「病理的な人の病理的な行動」として問題を矮小化してしまうだろうし、現実にも合致していない<sup>43</sup>。

これはひとり安田だけの問題ではなく、新聞や一般雑誌でも類似した議論が繰り返されており、第2章でみるように研究者も同じ轍を踏んでいる。排外主義運動は、日本で近年発生し他にない特徴を多く持つだけに、予断を排した慎重な分析が必要なのではないか。そのために最低限必要なのは、①憶測でものをいうのではなくきちんとした実証研究を行うこと、②ありうる理論枠組みを広く検討すること、③外国の類似した事例との比較により特徴を浮き彫りにすること、④日本の歴史的経緯を踏まえて特質を明らかにすることが挙げられる。残念ながら筆者がみる限り、どれ1つとしてなされないままに、排外主義をめぐる議論が積み重ねられてきた。

こうした目的に即した分析をするため、本論文では次の2つの前提をとる。まず、排外主義運動はこれまで「通常の病理」(normal pathology)として扱われてきたが、そうではなく「病理的な通常」(pathological normalcy)として扱う(Mudde 2010, 2013)。従来の極右・排外主義は、通常の民主主義の外部にある「異常」として扱われてきた。グローバル化、リスク社会、ポストフォーディズム、脱産業社会といった社会変動に伴う危機の表れとして、つまりアブノーマルなものとみなされてきたのである。だが、こうした見方に対する経験的根拠が疑問にさらされ、病理的な現象だが通常の民主主義の一部とみなす研究が出てきており、本論文もこれにならう。そのため、「在日特権」なるデマによって排外主義運動が組織されることも、単なる非合理的な病理としてではなく、可能な限り合理的な説明を試みる<sup>44</sup>。

そうした前提にたって分析するべく、本論文では論理実証主義に加えて構成主義的な議論も取り入れる。「在日特権」を指弾する人々の行動をみるに際して、単にそれが存在しないと指摘するだけでは、ありもしないことを信じる愚かな人たちという結論にしかならない。活動家たちが「在日特権」をリアルなものとして受容する過程こそが重要で、構成主義の立場からアプローチする必要があるからである。本論文の課題は、今の日本で生じている排外主義運動という現象を多角的に解明することにある。それゆえ筆者にとって方法論は、「目標に向けた適切な手段の選択」(Beck 2000: 211)の問題であり、場面ごとの課題に即してプラグマティックに採用したい。

---

<sup>43</sup> ステレオタイプ的な見方の流通は日本だけに限ったことではなく、欧米の極右活動家の調査を行った研究者も、「普通の人」が担い手であることを強調している (Blee 1996, 2002; Goodwin 2008b; Klandermans and Mayer 2006b: 269)。

<sup>44</sup> 類似した現象に対して合理性を認める立場からアプローチした研究も増加している (Breton et al. 2002; Wintrobe 2006)。ナチスの台頭を大衆社会論的な非合理性によるものではなく、その経済政策に対する合理的な期待によるものだったと実証したブルステインの研究は特に参考になる (Brustein 1996)。



# 第一章 誰がなぜ極右を支持するのか ——支持者像と支持の論理——

## 1 西欧における極右研究の蓄積<sup>1</sup>

日本の排外主義運動を考えるに際して、まず参考にすべきは外国の極右政党や排外主義運動の例だろう。そのうち本章では極右政党に対する支持について、次章では排外主義運動の担い手について、諸外国の研究成果を概観する。そもそも誰がなぜ、排外主義勢力を支持するのか。これが本章の問いであるが、それに対して正面から答える先行研究は少ない。日本での実証研究が端緒についたばかりなのは当然として、分厚い研究蓄積がある西欧を中心とした外国の状況に関しても、日本語では不十分な紹介しか存在しない<sup>2</sup>。外国の極右に関する日本語の研究は、特定の政党の帰趨を追ったものがほとんどで、極右に対する支持そのものが中心的な課題となってきたわけではないからである<sup>3</sup>。

そこで本章では、極右政党の支持に対する量的調査の知見を検討し、上記の問いに答えていく。「誰がなぜ」という点に関しては、「若年男性、高等教育を受けていない、民間部門のブルーカラー職で働く、都市居住」(Immerfall 1998: 250)という支持者像が固着して理解されている。こうした、「弱者が不満ゆえに」というステレオタイプが日本では繰り返されるが、現実はそのほど単純ではない。極右政党の台頭は数多くの研究を生み出し、分析手法も当初はクロス集計レベルだったのが、さまざまな多変量解析が用いられるようになった。分析単位も、1つの国の1回の世論調査から、複数の国のデータを時系列的に用いた大規模なものへと拡大してきた。その結果、固定的なイメージにとどまらない極右支持の基盤と論理が明らかされてきたのである。以下は、こうした文献のレビューを通して日本の排外主義運動研究に必要な論点を整理する試みである<sup>4</sup>。

## 2 なぜ極右は発生するのか——先行研究の整理

極右政党という用語は、西欧ではメディアでも学界でも頻繁に使われるが、自ら「極右」を標榜する政党があるわけではない。こうした極右政党には一定のバリエーションがあり、時期によって政策や支持基盤も変化する (Ignazi 2003)。だが、おおむね共通する要素を抽出することは可能であり、そうした政党に対する支持について検討する。また、極右政党の

<sup>1</sup> 本章は、樋口 (2013k) を加筆修正したものである。

<sup>2</sup> 日本の排外主義運動をみるうえでも、西欧を中心とした極右に関する研究は有益であり、一通り読んだ上で議論すべきだろう。全体の概観としては、やや古いが山口・高橋 (1998) と拓殖大学海外事情研究所 (2002)、五島 (2005)、古賀 (2008、2009)、ペリノー (2005)、近年の状況に関しては高橋・石田 (2013)、福祉政治との関連を論じた宮本 (2013) がある。

<sup>3</sup> もちろん、特定の国の状況に関する論考も、日本の状況を相対化する上で有益だろう。日本語で書かれたものとして、フランスについては畑山 (1997、2007)、松浦 (2005)、土倉 (2007)、ドイツについては比嘉 (2007)、星野 (1998)、岩間 (1999)、井関 (2003)、高橋 (1997)、坪郷 (1993)、イギリスについては力石 (2009)、ベルギーについては津田 (2004)、上西 (2002)、オーストリアについては東原 (2005a、2005b、2006a、2006b、2006c、2006d、2007)、梶原 (2009)、木戸 (2007)、古賀 (2005)、デンマークについては吉武 (2005)、ノルウェーについては岩崎 (2008) がある。

<sup>4</sup> この領域の議論をレビューした論文のうち、以下を部分的に参考にした (Ignazi 2002, 2003; Rydgren 2007; Eatwell 2003; Schain et al. 2002; 高橋 1993)。

勢力も国や時期によって大きく異なるが、これらは選挙制度や政党間関係、政策距離といった有権者以外の要因に左右されるため、本章では扱わない<sup>5</sup>。また、既成政党の右傾化といった日本で関心を持たれやすい現象の解明も、本章の直接の課題から外れる。さらに極右の台頭に関しては、説明要因がしばしば需要（有権者）と供給（政治構造や政党組織）に分類されるが、本節では需要の面——「誰がなぜ」支持するのかという点に限定する。そうした限定のもとで、4つの関連する理論——「近代化の敗者」論、競合論、抗議政党論、合理的選択論——の説明力を検討していきたい<sup>6</sup>。

### （1）「近代化の敗者」論

もっとも通俗的な理解に近く、初期の極右研究で主流だったものとして、「近代化の敗者」論がある。これは、社会変動の結果として発生する新たな弱者の不満が、極右の成長をもたらしたという説である。すなわち、1980年代以降に西欧各国で極右政党が台頭したのは偶然ではない。これは戦後の社会経済システムの危機の反映であり、特に非熟練ないし半熟練労働者の価値が下がって「近代化の敗者」となった。経済成長期以降の経済変動——移住労働者の増加、新興国からの輸出攻勢、福祉国家の縮小——により、生活水準が低下ないし停滞した層が増加する（Kriesi 1999: 401-3）。それに対応できない政府に対する信頼が失われ、その怒りを組織したのが極右とみなされる。つまり、社会構造の変動が生み出した不確実性が心理的緊張をもたらし、それを解消するべく極右に投票するのである（Betz and Immerfall 1998: 7-8）。

では、心理的緊張を生み出す不確実性とは何か。これは単なる経済状況の関数ではなく、社会解体と相対的剥奪という2つの要素を組み合わせたものとして理解できる（Rydgren 2007: 248）。この2つが極右支持をもたらした要因は、階級論的にいえば以下になるだろう（Kriesi 1999）。1970年代以降、社会の断片化と個人化が進展し、伝統的な社会的紐帯、サブカルチャー、ミリューが崩壊した。安定したアイデンティティは、ジェンダー、エスニシティ、性的志向、ライフスタイルなど、文脈により移ろうものへと変化する。さらにリスクの個人化の負担ものしかかる（Betz 1994: 29-33）。その結果生まれるのは、近代化に適応できた勝者とできなかった敗者の対立である<sup>7</sup>。敗者は変動に対応するだけの資源を持たないし、グローバル化や複雑化する社会に立ち向かう自信もない。それゆえ敗者は、不安に苛まれ将来を悲観するようになる（Mileti and Plomb 2007: 27）。それに対して極右は単純でわかりやすい解決策を提示し、変動のもたらす負の影響がもっとも深刻な集団から支持

<sup>5</sup> さらに、本章では1980年代以降の主に西欧の研究に限定して検討するが、その先駆となったのは、アメリカにおけるファシズムやマッカーシズムの研究である（Husbands 2002）。

<sup>6</sup> ただし、需要側の分析のみでは極右の帰趨を説明できないことは、西欧の研究で繰り返し指摘されるようになった（Mudde 2010: 1168）。実際、「供給」側の変数の方が極右政党に対する支持の度合いをはるかによく説明できる（Van der Berg and Fennema 2007: 482）。供給側変数の説明力を検討したカーターによれば、政党のイデオロギー、組織・リーダーシップ、政党間競合が極右政党の得票に大きく影響しているという（Carter 2005）。

<sup>7</sup> クリーシは、極右と同時に（左派の）新しい社会運動も、専門職とテクノクラートという新中間層内部での対立により生まれるとしているが、ここではふれない。社会変動が緑の党と極右政党という2つの異なる政党を生み出すという議論は他にもあるが（e.g. Ignazi 1992; Kitschelt 1995; Taggart 1996）、2000年代に入ると両者を関連付ける見方は少なくなる。

を調達する (Betz 1994: 176)。

低学歴で非熟練労働につく敗者は、戦後経済成長期の果実を享受したグループだが、低学歴ゆえに教育を通じてリベラルな意識を持つこともなく、権威主義的な態度を保持し続ける (Kriesi 1999)。そうした者は、かつては社会民主主義政党に統合されており、経済的には社会民主主義的だが社会的には保守的という 2 つの側面のうち後者が極右と接点を持つ。そうした者は、かつては階級により社会に統合されていた代わりに、極右の掲げるナショナリズムを受け入れる<sup>8</sup>。極右支持に関して、「近代化の敗者」という社会的基盤を前提とする議論は、「利益政治」と「アイデンティティ・ポリティクス」という 2 つの分析視角へと分岐する<sup>9</sup>。「近代化の敗者」仮説は、このうちアイデンティティ・ポリティクスとして極右支持をみており、政治経済的な利害関係よりも「不安」「欲求不満」といった心理学的な変数を用いて説明される。

では、不安を動員して支持に結びつける勢力が、なぜ他ならぬ極右になるのか。「移民問題」は、1980 年代以前の極右にとって主要なテーマではなかった。だが、その後の極右はナショナリスト的なレトリックを駆使し、普通の人の欲求不満、不安、幻滅を解消するような情緒的アピールに成功する (Ebata 1997)。そうした極右の陰謀論を受け入れてしまうのは、それが感情の抑圧やストレスに対峙し、自尊心を保ち自らの失敗を正当化するという防衛機制によるという説明もある (Ebata 1997: 23-4)。これはスケープゴート論の一種であり、経済的政治的に抑圧された者はより弱い者を標的とすることで、自らの地位を上げようとする。特に外国人を標的とすれば、国民としての自尊心から個人としても自尊心を得ることができるという。

## (2) 競合論

1990 年以降の極右政党にとって、「移民問題」は最重要な争点であり続けてきた。それに着目したのが競合論であり、「近代化の敗者」論のような広範な構造変動ではなく、移民という要素に特化した説明図式を提示する (Rydgren 2007: 250)<sup>10</sup>。エスニック競合論は、希少資源の獲得をめぐる集団間の経済的・政治的・文化的競合が、エスニックな紛争の背景にあると考える。このうち特に重視されるのが労働市場であり、職をめぐるエスニック集団間の競合が相互の敵意を作り出し、集合行為を生み出すという想定にもとづき、エスニックな分業のあり方を問題にする。集団ごとに安定的なニッチの住み分けができていれば競合は発生しないが、新規集団の流入や特定集団の職業移動によりニッチが重なると競合が発生する (Olzak and Nagel 1986; Olzak 1992)。

西欧の極右研究では、「競合」そのものの程度や実態については扱わず、移民や難民・庇護申請者が増加することをもって競合の発生とみなす。そこで発生する競合とは、労働市場はもちろん住宅、福祉給付、結婚まで含むとされるため (Rydgren 2007: 250)、流入そのもの

<sup>8</sup> 操作的にみれば、宗教、労組に属していない、世代間の社会移動により安定した生活世界にいない者は極右支持の比率が高い (Lubbers, Scheepers and Billet 2000: 368-9)。

<sup>9</sup> 利益政治はさらに、福祉国家支持だが移民を排斥すべきという福祉ショーヴィニズムとエスニック競合論に分けられるが、後者については後述する。

<sup>10</sup> これは、エスニック競合論と呼ばれる一連の研究を基礎にしているが、もともとの競合理論を単純化して用いている (Balazs et al. 2007)。

が競合を生むという前提をとれるともいえる。その結果、競合論からは以下のような予測がなされることとなる。第1に、移民や難民・庇護申請者の人口が多い地域、あるいは急増する地域において、極右は支持を多く得る。第2に、競合が発生しやすい地域、すなわち失業率が高い地域において、極右は多くの支持を得る。第3に、特定の地域で誰もが競合に反応して極右を支持するわけではなく、移民と競合しやすい層が基盤になりやすい (Lubbers, Gijsberts and Scheepers 2002: 352)。なかでもブルーカラーと失業者が極右政党の支持者になるが、競合論によれば支持する理由は大きく2つあり、第1は物的な脅威である (Mughan and Paxton 2006)<sup>11</sup>。これは労働市場だけでなく、退職者も社会保障をめぐる競合にさらされる。第2に、ブルーカラーや学歴の低い者は権威主義的態度を保持しており、移民の流入により文化的脅威が発生し、自らの文化が危機にさらされると感じるとされる。

### (3) 抗議政党論

「近代化の敗者」論も競合論も、一定の属性的基盤を想定してきたが、そうではない議論もあり、抗議政党論と次項で検討する合理的選択論が該当する。政治状況に対して幻滅した者が、極右を既成政党とは異なる存在とみなすから極右は支持されるという議論は、これまで繰り返されてきた。それゆえ極右支持票を抗議票とアプリアリにみなしがちだが、これでは「抗議政党に入れるから抗議票」というトートロジーにしかならない (Van der Brug, Fennema and Tillie 2000: 82)。抗議票という概念が何を意味するのか、十分な検討がなされないまま使われてきたきらいがある (Van der Brug and Fennema 2003: 56-7)。概念の明確化のために、「政策にもとづくものではなく、主としてエリートに恐怖感を与えるために投じられた票」 (Van der Brug and Fennema 2003: 57-8) を抗議票としてまず定義しておこう。こうした定義は、以下のような2つの前提にもとづく。

第1は、政治的有効性感覚が低く政府に対する信頼も持たない、政治不信を抱く者の増加である。そうした者は既成政党支持以外の選択肢を求めており、エリート批判のためにエリートが嫌う極右政党に票を投じる (Van der Brug, Fennema and Tillie 2005: 541)。政治不信の表現には棄権や白票という手段もあるはずだが、そうではなく批判勢力とみなしうる政党への投票へと向けられる<sup>12</sup>。ただし、極右に投票する者の政治不信の度合いが強いことと、それが抗議票であることはイコールではない。極右政党は、西欧の政治システムにおける危険な存在として、他のすべての政党から排除されている。それゆえ極右が議席を獲得しても、少数の例外を除いて政権与党になることはない。つまり、極右支持者は支持政党が万年野党だから政治不信に陥るのであり、政治不信は極右支持の原因ではなく結果である。その意味で、政治不信が強いから抗議票と解釈するのは無理がある。

それゆえ第2に、抗議票としての極右支持はイデオロギーの一致によるのではなく、批判勢力としての性格が評価されるという条件が必要になる。政治不信が強くても、極右のイデオロギーに共鳴して投票するのならば、それは通常の投票行動であり抗議票と呼ぶのは適切ではない。既成政党以外の政党に投票することが主たる投票目的となって初めて、極右へ

<sup>11</sup> 経済的競合については、Olzak (1992) が、文化的競合については Lipset (1959) が代表的な文献とされる。

<sup>12</sup> この点については以下を参照 (Van der Brug and Fennema 2003: 56)。

の投票を抗議票とみなしうる。じじつ極右は、政党システムの部外者として自らを演出するがゆえに、政治手法としてポピュリズムを採用することが多い (Mudde 2007: 111-2)。あるいは、リーダーシップを強調して他の政党と差異化をはかろうとする<sup>13</sup>。このような、既成政党とは異なる政治手法をとるがゆえに、抗議票を多く集めるのは他ならぬ極右政党であるとみなされる。

この説を敷衍すれば、極右は他の政党から排除されるから支持されるのであって、政権入りなどにより既成政党化すると、支持を失うことになる。その意味で、既成政党に対する幻滅という見方は、極右政党が一時的に台頭する局面ならば説明力を持つ可能性がある (Rydgren 2007: 251)。しかし、現実の極右政党は離合集散を繰り返しつつも西欧の政治に安定した根を張っており (Rydgren 2007: 251; Eatwell 2003: 52)、抗議政党論の有効性は極右がおかれた政治的文脈によって変化するともいえる。

#### (4) 合理的選択論

これまでみてきた議論に比べると、合理的選択論を明示的に採用する文献は、少数の論者によるものしかない (Van der Brug, Fennema and Tillie 2000; Van der Brug and Fennema 2003; Van der Brug, Fennema and Tillie 2005)。合理的選択論の立場をとると、有権者が極右に対して投票するのは、政府から利益を得られるものと期待しているからとなる (Spanje and Van der Brug 2009: 356)。多くの研究者は、極右に対する投票をこのようにみなしたくない。それゆえ、合理的選択論は極右研究において不人気であるが (Van der Brug 2003: 93)、理論的なバリエーションをみるうえでは多くの示唆を与えてくれる。それは第1に、「近代化の敗者」論で想定される有権者は感情的で非合理的なのに対して、合理的選択論は対極にある有権者像を提示するからである。このように極右への投票を非合理的—合理的という軸で捉えると、競合論と抗議政党論は両者の中間に位置づけられる。競合論が想定する脅威への対応としての極右支持は、非合理的な反応とも捉えられるし、状況に対する合理的な対応ともみなしうる。抗議票の理解も、抗議の意思表示に最適な政党を合理的に選択した結果とも、非合理的な感情的反応とも捉えられる。

第2に、「近代化の敗者」論は特定の属性と投票行動の結びつきを前提とするが、合理的選択論は属性ではなくイデオロギーや政策、争点に対する選好で投票行動を説明する。この対立する見方は、投票行動全体の変化を反映している。欧州の8ヶ国を対象にした分析では、1960年代には投票行動の2割以上が属性によって説明可能だった (Franklin et al. 2009: 386)。説明力はそれ以降低下し続けており、属性により説明できるのは後述するように1割未満となった。そこで説明力の低下を補ったのが政策投票の分析であり、有権者は属性に忠実に投票する状態から、自らの政策的選好にしたがって政党を選ぶようになったとされる。極右への投票には一定の属性的基盤があるといわれるが、政策投票の議論が果たして当てはまるのか。合理的選択論の導入は、極右に対する投票行動の分析の幅を広げ、問いを豊富化する。

合理的選択論の前提によれば、有権者は合理的で極右についても他の政党と同様の基準

---

<sup>13</sup> もっとも、極右の支持は特定の社会的ミリューに集まるわけではないため、リーダーシップによって異なるミリューを統合する必要があるという見方もある (Immerfall 1998: 258)。

で判断して投票する。これは、政党間関係の水準では極右が政治的悪として扱われるのに対して、有権者は極右についてだけ（怒りや抗議の表現など）特殊な理由で投票するわけではない、という認識にもとづく（Van der Brug, Fennema and Tillie 2000: 78）。つまり、有権者は自分のイデオロギーが極右的だと思うから、あるいは極右の政策を評価するから極右に投票する。そこで前提とするのは、極右政党による供給とそれに見合った需要で応える有権者という、選挙市場の通常のあり方なのである。

### 3 誰がなぜ極右を支持するのか——経験的研究による検証

#### (1) 属性との関係

##### ジェンダー

極右政党は、ごく少数の例外を除いて女性より男性により強く支持されてきたことが知られている（de Bruijn and Veenbrink 2012; Fontana, Sidler and Hardmeier 2006; Rippl and Seipel 1999; Mudde 2007: 111-2）。極右に投票する男女比はおおむね 2 対 1 であり、こうした差は 1990 年代までは次のように説明されてきた。まず、極右に限らず女性は政治的に極端な立場を嫌い、中道に集中する傾向がある。極右は家父長的な価値を奉じており、女性とは相容れないという議論もある。しかし、女性のほうが極右的なイデオロギーを持たないから極右を支持しない、というだけではジェンダーによる差を説明できない（Mudde 2007: 113）<sup>14</sup>。女性は政治的関心が低いから新党を支持しないという議論もあるが、緑の党は女性の支持率が高い傾向があるため、この議論にも経験的根拠はない（Betz 1994: 143）。意識よりも先に、ジェンダーによって異なる社会経済的条件を考慮する必要がある。

その際に原因としてよく挙げられるのは、労働とジェンダーの関係である。極右支持者の多くは労働人口であるが、女性の就労比率は男性より低い（Betz 1994: 144-5）。そして極右支持の基盤となる製造業のブルーカラー比率も、男性のほうが高い。女性は、サービス業と公的部門での就労比率が高いため、極右支持にならないことが考えられる。また、一般に無宗教の者の方が極右支持の比率は高いから（Lubbers, Gijsberts and Scheepers 2002）女性のほうが宗教に関わる比率が高いことも、極右を支持しない一因となる（Betz 1994: 145）。宗教心が強い者の方が政治的態度は保守的だが、教会の意向に沿ってキリスト教政党に投票するからである（Billiet 1995; Lubbers and Scheepers 2000: 81）。さらに、女性のほうが寿命が長いいため高齢者が多く、既成政党に投票し続けるという説明もなされる（Gidengil et al. 2005）。

だが、こうした要因を統制しても、極右支持にはジェンダー間の相違があることが、多変量解析の結果から示されている（Givens 2004: 49-50; Arzheimer and Carter 2006: 428）。同じ職業につく男女を比較した時でも、女性のほうが男性より極右を支持しない。そもそも、女性の場合には職業による相違が男性ほど大きくない（Coffé 2012）。そのため、属性そのものよ

---

<sup>14</sup> 以下、他の属性要因も含めた国ごとの支持者像の概要を示したものを挙げておく。イギリスについては、Husbands (1983: 101-2)、Goodwin et al. (2010: 196-8)。ドイツについては Kolinsky (1992: 82)、坪郷 (1993)。オーストリアについては Riedlsperger (1998: 34)。ベルギー（フランデル地方）については、Billiet and de Witte (1995: 185)。デンマークとノルウェーについては、Andersen (1992)、Bjørklund and Andersen (2002: 118-120)。カナダについては、Nevitt et al. (1998: 188)。イタリアについては、Betz (2002)。フランスについては Veugelers and Chiarini (2002)。スウェーデンについては Rydgren (2006)。

りも政治意識の違いでジェンダー間の差異を説明する試みが、先行研究ではなされている。すなわち、女性のほうが文化的な争点に関して保守的でないことは、極右支持を抑制する効果を持つ (Gidengil et al. 2006: 1145-6)。だが、こうした意識変数を組み入れても男女間の差は残るため、ジェンダーによる差を完全には説明できないことになる (Givens 2004) <sup>15</sup>。

## 年齢

若年層のほうが極右に投票する傾向が強いことは、ほとんどすべての研究で言及されてきた<sup>16</sup>。これを「近代化の敗者」論で説明するものがあるが (Betz 1990)、若者の方が不安・不満が強いという根拠はなく、加齢やコーホート効果で説明可能な部分が多い。加齢効果についてみると、極右に限らず緑の党など新興政党の支持者になるのは若者である。若年層は、親世代ほどには既成政党とのつながりが少ないため、新党に対する抵抗もなく、その1つたる極右にとりこまれやすい (Betz 1994: 147-8; Givens 2005: 60)。高齢の者は、極右政党の主張に近い意識を持ったとしても、既成政党に投票してきたので極右には投票しない (Billiet and de Witte 1995: 193)。だが、世代間の差はジェンダーほどには明確ではなく、極右支持者は比較的多くの世代に広がっている (Givens 2005: 60)。

これは、長期的にみればコーホート効果を考慮に入れる必要性を示す<sup>17</sup>。すなわち、若年だから極右政党を支持するというよりも、若いころに極右を支持した世代が、その後も極右を支持し続ける可能性である。現に、イギリス国民党の支持者の中核は25歳未満の若年層にはなく、それより年齢層が高い (Cutts, Ford and Goodwin 2011: 427; Goodwin et al. 2010: 199)。これは、移民問題が政治的対立を伴った時期に育った層が国民党を支持し、多文化主義を内面化する若年層は支持しないことによるという (Ford and Goodwin 2010: 8)。だが、欧州全体で極右政党は1990年代以降に勢力を拡大させ、支持も安定するようになった。将来的には、当時の若者が極右支持のまま中高年になり、若年層の支持と合わせてさらに勢力を伸ばすという予測もできるだろう。

## 学歴・職業

学歴と職業は、双方とも社会経済的地位と密接に関わるため、まとめて論じることとする。職業との関連をみると、かつてファシズムの支持基盤とされたのは中小自営業者だが (Fromm 1941=1951: 202-3)、現代の極右政党は労働者政党としての性格を持つ (Arzheimer 2012)。すなわち、極右政党の支持基盤の中核として製造業ブルーカラーが、それ以外に自

---

<sup>15</sup> こうした差は、脱産業社会において女性の方が男性より全般的に左派的な態度を示すという、社会変動の影響による可能性がある。この点については、極右に直接関連するわけではないが以下を参照 (Inglehart and Norris 2003)。

<sup>16</sup> ただし、25歳未満の若年層の支持が特に強い政党と、後述のように20代後半から40代の支持が中心となる政党という相違はある。後者はイギリス国民党やカナダ改革党が該当する (Goodwin et al. 2010: 197; Nevitt et al. 1998: 188-9)。

<sup>17</sup> もう1つの時代効果についてみれば、1970年代以降は政党支持の脱編成＝無党派の増加が不可逆的に進んでいる (Dalton and Wattenberg 2000; Knutsen 2006)。これは、既成政党が有権者を統合する力を弱めていることでもあり、極右を含む新たな政治勢力が台頭する機会を開いているといえるだろう。

営業、失業者、退職者が挙げられる<sup>18</sup>。極右政党は右派権威主義を掲げる点で共通するものの、その支持基盤は資本主義支持（自助努力、経済的自由）の農民・自営層と福祉ショーヴィニズム（福祉削減への反対と福祉からの外国人の排除）の労働者層の連合からなる（Ivarsflaten 2005; Kitschelt 1995）。両者に共通するのは「法と秩序」の重視のような権威主義だが、政策の中心をどこにおくかにより支持基盤も変化していく。1980年代以前から存在する極右政党の多くは経済的自由主義を掲げていたが、80年代以降には反移民を掲げて支持基盤の「プロレタリア化」が進み、現在に至っている（Betz 1994: 161）。

学歴との関連では、一般に低学歴の方が極右を支持するという結果が出されている（Lubbers, Gijsberts and Scheepers 2002: 364; Lubbers and Scheepers 2000）。これは低学歴の者のほうが権威主義的だからであり、争点が権威主義に関わるほど学歴の効果が強まる（Ivarsflaten and Stubager 2012）。つまり、権威主義的な者が問題視する移民問題が争点化するほど、極右は低学歴の者からの支持を伸ばすことになる。

一方で学歴は、政治参加に要するコストという点でも影響があり、一概に「学歴が低いほど極右に投票する」とはいえない。それを示すのが、学歴が中程度の者が極右をもっとも支持するという大規模調査の結果である（Rydgren 2008: 755; Bornschier and Kriesi 2012; Lubbers, Scheepers and Billet 2000; Arzheimer and Carter 2006）。これは分析方法、端的には低学歴の者に多い棄権を分析に含めるか否かで結果が異なる。学歴が低く経済的に不安定な状況におかれた者は、イデオロギー的には中道右派や極右に近いものの、政治的関心が低いため投票所に足を向けない（Bornschier and Kriesi 2012）。そのため、もっとも学歴が低い者は「投票先」でいうならば極右が多くなるが、それ以上に棄権が突出して多い。投票自体はコストをかける積極的な意思表示である。低学歴層が「苦しいから極右を支持する」というのは誤りで、「政治に関心を持つ余裕がない」とみたほうがよい。

#### 属性による説明力——「近代化の敗者」論と競合論の検証

4つの理論のうち、属性と極右支持との関連を想定していたのは、「近代化の敗者」論と競合論であった。特定の属性的利害を極右政党が取り込む場合が競合論と関わり、下層の欲求不満の解消という非合理的な支持が「近代化の敗者」論で説明される。「近代化の敗者」論は、社会変動の敗者＝下層が極右を支持すると想定しており、属性と極右支持に関するこれまでの記述をみると、冒頭で述べた極右支持層がそのまま当てはまるように見える<sup>19</sup>。だが、「近代化の敗者」論が支持されたといえるほど学歴や職業の説明力は高くない<sup>20</sup>。

すなわち、本章で引用した実証研究のすべてをみても、属性によって説明できるのは極右に対する投票行動の3～9%程度だった<sup>21</sup>。これは、大きな差がある性別も含めた結果であり、

<sup>18</sup> 製造業ブルーカラーの支持の強固さについては以下を参照（Oesch 2012）。自営業者については以下がある（McGann and Kitschelt 2005; Norris 2005）。失業者については以下を（Lubbers and Scheepers 2001: 439; Lubbers and Scheepers 2002; Rink, Phalet and Swyngedouw 2009）、退職者については以下を参照（McGann and Kitschelt 2005）。

<sup>19</sup> 本項では属性要素別にみえてきたが、多くの世論調査を合併したデータでも有意な関係があり（Arzheimer 2009）、頑健な結果といえるだろう。

<sup>20</sup> これに対して、旧来の階級分類が適切ではない、あるいは階級によって極右支持の論理が違ふことも考慮すべきという見解もある（Lubbers and Güveli 2007）。

<sup>21</sup> イギリス国民党支持者を「怒れる白人男性」と特定の属性で表象した研究でさえ、属性や居



職業や学歴、年齢の説明力はさらに低くなる。また、極右政党への支持と階級との結びつきは、むしろ他の政党より低い（階級で説明できる部分が少ない）という大規模調査の結果もある（Van der Brug and Fennema 2003: 64）。

つまり、「近代化の敗者」「競合にさらされる者」が極右政党を台頭させているという見方は、部分的に妥当だったとしても現実の一部を誇張する結果をもたらす<sup>22</sup>。極右支持者を「近代化の敗者」「競合にさらされる階層」とみなしてしまうと、選挙によっては極右が2割以上の票を得る2000年代以降の状況を説明できない。むしろ、極右政党は「敗者」にとどまらず広く支持を調達するところに強みがあり、党勢拡大の潜在力もそこに存在する（Flecker, Hentges and Balazs 2007）。実際には、極右にもっともよく投票するのは、属性にかかわらず反移民感情や政治的不満を持った有権者なのである（Kessler and Freeman 2005）。その意味で「近代化の敗者」論や競合論は、支持される部分があったとしても極右への投票の周辺的な要素しか説明できない。

さらに、「近代化の敗者」論のもう1つの前提である心理的緊張も、極右支持の説明要因にはなりえない。一方で、極右に投票する者は宗教や労組とのつながりが希薄であり、都市で社会的に孤立した者が多いという調査結果が多く存在する（Eatwell 2003: 53）。だが、孤立した者は心理的緊張に耐えかねて国家への帰属を求めるから、極右に投票するわけではない（Lubbers and Scheepers 2000: 81-2）。むしろ、既成組織に入らないがゆえに伝統的な規範に従う意識がなく、それが極右に対する抵抗をなくしている側面があるという。教会や労組の指示に従うのではなく、自らの選好に近い政党を選ぶのならば、これをアノミーというのは妥当ではない<sup>23</sup>。さらに、近年の大規模データの分析結果では、社会的に孤立した者が極右に投票するという見方も否定されている（Zhirkov 2014; Rydgren 2009）。その意味で、社会的孤立テーゼ自体も見直す必要があるかもしれない。

## （2）競合論の検証

競合論を属性以外の要因で実証した試みをみると、調査によって結果はまちまちであるため、説が全体として支持されたとはいえない（Bowyer 2008; Rydgren 2007: 250）。たとえば、欧州6ヶ国（オーストリア、ベルギー、デンマーク、フランス、オランダ、ノルウェー）を分析した論文ではデンマークとオランダでのみ、競合仮説が支持されていた（Rydgren 2008: 757）。これは、競合論に関連する要素のうちどれを用いるかによって、支持される度合いが異なることによる。そうした要素のうち、移民人口比率は極右支持と安定的に関わりがあり、移民人口比率が高い地域に住む者は、極右を支持しやすい（Lubbers, Scheepers and Billet 2000: 376; Lubbers, Gijsberts and Scheepers 2002: 364; Rink, Phalet and Swyngedouw 2009; Norris 2005: 182）<sup>24</sup>。7ヶ国（オーストリア、デンマーク、ベルギーのフランデル、フラン

---

住地を投入した際の擬似決定係数は0.065にすぎなかった（Ford and Goodwin 2010: 14）。

<sup>22</sup> ほとんどの論者は、何らかの構造変動と極右の台頭に関連があること自体は否定しない（Catellani and Milesi 2007; Mileti and Plomb 2007: 33）。だが、それを剥奪と安易に結び付けることが批判の対象となる。

<sup>23</sup> 近年の参加型民主主義論がいうような、組織の拘束なくして自己の判断で投票する有権者像——これは緑の党の支持者像と重なる——に近いともいえる（Dalton 2004; Dalton and Wattenberg 2000）。

<sup>24</sup> ただし、ノリスは同じ著書のなかで、国ごとの移民人口比率と極右の得票率には有意な関係

ス、オランダ、ノルウェー、スイス)の比較研究をみると、経済的不満、政治的不満、移民の制限のうち、移民の制限だけがすべての極右政党の支持につながっていた (Ivarsflaten 2008)。フランデル地方の研究では、移民政策を投票基準にした者は全体では4%だったが、極右に投票した者では33%にのぼっていた (Swyngedouw 1998: 226)。

ところが、競合論の核であるはずの経済的競合は、予想通りの結果にならない。ブルーカラーや経済的に不安定な者がイギリス国民党に投票する第1の理由は、移民に対する敵意だったという結果は、競合論の予測通りである (Cutts, Ford and Goodwin 2011: 433)。しかし、他地域の結果をみる限り、経済的競合→移民に対する敵意→極右支持という直線的な因果関係を想定するのは難しい<sup>25</sup>。前出のフランデル地方では、失業率と極右支持には関係がなかった (Lubbers, Scheepers and Billet 2000)。他の地域の調査結果をみると、単に失業率が高い地域の有権者はむしろ極右を支持しない (Knigge 1998; Lubbers and Scheepers 2000: 77; Kessler and Freeman 2005: 280; Lubbers, Gijsberts and Scheepers 2002: 364)。別の5ヶ国 (オーストリア、ベルギー、フランス、ノルウェー、スイス)の分析でも、文化的競合はすべての国で極右支持と関連があったが、経済的競合のうち仕事についてはオーストリアだけ、福祉についてはスイスとノルウェーだけが関連していた (Oesch 2008)。豪州の調査でも、文化的競合は極右への投票に関連するが、経済的競合は直接の効果を持たないという結果が出ている (Mughan and Paxton 2006: 354)。

こうした結果から一方で浮かぶのは、きわめて実利的な判断をする極右支持者像である。まず、失業増→資源の争奪戦の激化→移民の敵視→極右支持となるわけではない。失業率が高い地域では、極右ではなく経済政策で期待できる政党への投票に向かう。そうした有権者のプラグマティズムは、本章で引用した文献でもっとも大規模なデータを分析したアルツハイマーの論文でも看取できる (Arzheimer 2009: 273)。彼によると、移民、失業、福祉給付という3つの要素が単独で極右への投票を促進するわけではない。移民比率と失業率が共に高く福祉給付が少ない、あるいは移民比率が低くて福祉給付が多い場合、つまり競合する要素が重なり利益が侵害されると思った場合に限って極右に投票する。

それに対して、前出の豪州の事例が示すように、文化的競合が極右への投票に結びつく傾向は経済的競合よりも明確に存在するようと思われる。極右にとって、自営業層とブルーカラーという経済的利害が一致しない支持基盤をまとめるのは、移民のような社会文化的な領域に関わる問題であった (Ivarsflaten 2008)。また、文化的脅威は移民一般というよりも、欧州ではイスラムに対する敵意と関わっている。フランデル地方では、イスラム圏出身の移民比率と極右の支持には明確な関連があったが、それ以外の移民については有意な関係がなかった (Coffé, Heyndels and Vermeir 2007: 150)。さらにイギリスでも、ムスリムが多い地区に住む者は極右政党に投票する比率が高い (Ford and Goodwin 2010: 19; Goodwin 2008a)

<sup>26</sup>。

---

がないとしている。これは *ecological fallacy* として片付けられているが、今後きちんとした説明がなされるべきだろう。

<sup>25</sup> ただし、仕事をめぐる競合と極右投票の関わりは否定するが、住宅をめぐる競合が極右支持に結びつくという議論もある (Bowyer, 2008)。経済的競合を広くみると異なる結果が出る可能性については、留保が必要だろう。

<sup>26</sup> マクロデータの集計結果ではあるが、イギリスではとりわけパキスタンとバングラデシュ系

### (3) 抗議政党論の検証

マイヤーとペリノーによるフランス大統領選の報告は、抗議票を集めた典型例と解釈しうる。大統領選で予想外の票を集めたルペンに投票した者のうち、彼に大統領になってもらいたいと思っていたのは28%にすぎなかった。国民戦線の移民政策に賛同する者でも、4割以上は（国民戦線の言うような）解決方法はないと考えている。すなわち、極右に投票したのはルペンが大統領になって政策が実現されることを期待したからではない。移民や非行、政治エリートや政党といったすべてのものに対する抗議なのである、と（Mayer and Perrineau 1992: 133-4）<sup>27</sup>。

だが、こうした見方の妥当性については多くの疑問が付されてきた。前節でみたように、政治的信頼が低い者の票を抗議票とみなすことはできないため、抗議政党論の検証には2段階の手続きが必要になる。①先行研究で抗議票とされるものが、どのような投票行動を指すのかを確認する。②前節で定義した抗議票に合致するものについてのみ、投票行動をどの程度説明するのかを検討する。

①についていえば、政治不信を強く持つ者ほど極右に投票するという調査結果は、数多く存在する（Lubbers, Gijsberts and Scheepers 2002: 365）。ただし前述のように、これだけでは政治不信が極右支持の原因なのか結果なのかを明らかにするのは難しい。また、政治不信を持つ極右支持者は反移民意識も強い（Keesler and Freeman 2005: 273）、極右への投票を白票と同様の抗議票とみなすのは無理がある。すなわち、「移民問題」を解消してくれない政治に不信感を持つがゆえに、解決してくれそうな極右に投票する。あるいは、極右に投票しても自分の望む政策がとられないから、政治不信に陥ると解釈できる。投票する者は、極右イデオロギーを支持する要素を持っており、イデオロギー的に距離があるのに投票するという見方は該当しない（Lubbers and Scheepers 2000: 82）。

実際、極右が政権入りするか政府が極右に配慮した政策をとる国では、極右支持者の政治的不満の度合いは低い（Norris 2005: 163-4）。極右が政権から一貫して排除されている国において、極右支持者の政治的不満は高くなる。その意味で、極右支持者の不満は政治に対するやり場のない怒りではなく、自らの意向が政府に省みられないことによるものである。これは非合理的な不満というよりは、目的合理的な不満というべきだろう。不満があるから極右を支持するのではなく、極右を支持してもそれが実りをもたらさない、不満は原因ではなく結果という解釈が可能だろう。

②については、7つの反移民政党のうち抗議票を集めたのはオランダの中央党だけという結果が出ている（Van der Brug et al. 2000: 91-3）。すなわち、中央党に投じた者の3分の1は極左を自認しており、極左の抗議票を極右が集めたことになる。アルツハイマーの分析でも、極右政党は政治不信一般に対して広く受け皿を提供するのではなく、社会的イデオロギー的に決まった層からだけ支持されるという（Arzheimer 2009: 267）。他の分析をみても、抗議票を集めるから極右は台頭するのだといえるほどには、その説明力は強くない（De Weerd

---

移民の多い少数の自治体において、極右政党への支持が高くなっている（Bowyer 2008: 618）。

<sup>27</sup> フランス国民戦線に投票する者の政治的不満の度合いは高いが、もっとも高いのは極右に投票する者ではなく棄権する者であることも付言せねばならない（Lubbers and Scheepers 2002: 139）。

et al. 2007: 74) <sup>28</sup>。

それとも関連して、一部の極右政党はカリスマ的なリーダーシップゆえに抗議票を集める、という見方にも疑問が付されている (Van der Brug and Mughan 2007)。オランダの極右政党の分析では、3人の極右政党のリーダーが投票行動に影響を及ぼしたか否かを検討し、結果的に党首効果はみられなかった。3人のうちピム・フォルタインは選挙直前に暗殺され、党自体は第二党になる劇的な勝利を取めたが、その時ですらフォルタイン効果はなかった。投票を伸ばしたのは、フォルタインが当時の争点をめぐる議論をリードしたからであり、政策によって票を得ていたのである。

#### (4) 合理的選択論の検証

合理的選択論の検証に際しては、極右支持者が他の有権者と同様の (合理的な) 判断基準で投票行動を決めているかが問われる。まず、極右政党に対する選好は他の政党に対するものと異なっているのか。すなわち、不安や政治不信をぶつける特殊な政党とみなされているのか。8つの政治体の63の政党 (うち10が極右政党) に対する調査結果では、極右とそれ以外の政党との間に有意な差はなかった (Van der Brug and Fennema 2003: 64)。極右政党は通常の政党とは異なる特殊なものとされがちだが、有権者は他の政党と変わらないものとみなしていることになる。不安・不満を解消する対象ではなく、抗議票の受け皿となるような存在でもない。

他の政党と唯一違ったのは、移民問題を重視する度合いであり、それゆえ極右政党より反移民政党という言葉の方が正確という議論もある (Fennema 1997; Van der Brug and Fennema 2003: 69)。反移民の政策ゆえに極右政党が支持を得ていることは、前出のピム・フォルタイン党が躍進した選挙の分析でも検証されている。ピム・フォルタイン党に対する投票を被説明変数としたときの擬似決定係数 (Cox and Snell) は、属性のみ (0.07)、属性+政治不信 (0.13)、属性+政治不信+政策選好 (0.33) と上がっていった (Van der Brug 2003: 96)。この結果は、ピム・フォルタイン党が一定の抗議票を集めた可能性を示唆するが、それ以上にその移民政策が支持された結果と解釈できる。

だが、政策選好と投票行動は性格に近い変数同士であり、両者の関連が強いのは当然のことともいえる。つまり「反移民の有権者が反移民政党に投票する」という合理的選択論に付き物のトートロジー的性格を払拭できない。それは、「反移民でない者でも反移民政党に投票する」(抗議票) ことの否定にはなっても、「なぜ極右を支持するのか」という問いに対する根本的な答えにはなっていないのである。これに答えるには、反移民感情そのものの形成やバリエーションと極右支持に関する研究をつなげる必要があるだろう。

#### 4 極右政党研究の「ノーマル化」とその先へ

経験的研究の結果をみると、本章で検討した4つの仮説を完全に棄却したものはほとんどない (Goodwin 2011)。その意味で、どれも現実の一側面を反映しているといえるが、ど

---

<sup>28</sup> ただし、投票が義務制となっているベルギーでは、抗議政党論を支持する結果が出ている。スウィングトリーによる出口調査の分析では、抗議票を有意に多く集めたのは極右政党だけだった (Swyngedouw 2001: 234)。棄権という選択肢がない代わりに、極右が選ばれたことになる。

の仮説がどれだけの説明力を持つかが問題となる。そもそも、政治的亀裂の弱体化によって属性の説明力は落ちている。そうした趨勢のもとで、極右政党と緑の党はそれぞれ下層と上層の支持が比較的多いという点で、新たな政治的亀裂の反映という見方もある（Knutsen 2006）。だが、「近代化の敗者」が支持するがゆえに極右政党が台頭した、というほど属性の説明力は強くない。そもそも極右政党と属性の関連は、他の政党と大きく変わるものではない。極右政党が支持を伸ばしたのは、「近代化の敗者」という特定の支持基盤にアピールしたからではなく、属性を越えて広がる反移民感情を票に変換したからである（Eatwell and Goodwin 2010; Merkl 2004）。その意味で、極右政党は既存政党よりも「政策」で勝負する「近代的」な政党であるという皮肉な見方も成り立つ（Van der Brug and Fennema 2003: 66）。

競合論についても、少なくとも経済的競合の側面に関しては合理的な判断の上で極右を支持している状況が浮かび上がった。移民流入と経済的競合を同一視するのではなく、自らの状況と利害を考慮したうえで移民排斥を訴える政党を選ぶのである。その中で非合理的な側面が垣間見えるのは、ムスリム移民に対する敵意が示すような文化的競合がもたらす極右支持であった。

こうした例外を除けば、レビューからみえてくるのは極右政党を特殊なものとしてではなく、他の政党と同様に扱う方向へと変化した研究潮流である。序章で述べた「病理的な正常」として極右政党が定着したといってもよい（Mudde 2010, 2013）。抗議政党論も、個別事例の説明としては信憑性があるようにみえても、大規模データで分析すると他の政党との差がなくなる。合理的選択論についても同様の結果が出る。これは分析手法上の問題というよりも、メディアや政治家や研究者が思うほどには極右政党は特殊なものともみられていなかったことによるだろう。

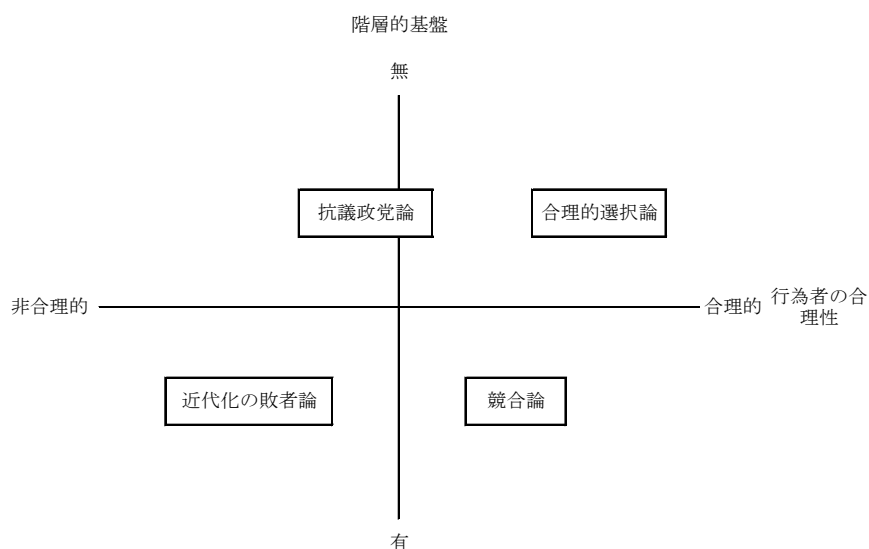


図1-1 4つの理論の位置づけ

西欧の研究は、極右政党とその支持者をアブノーマルな存在とみなすことから始まっており、それを体現するのが「近代化の敗者」論である。しかし、合理的選択論の登場が示すように、極右政党も支持者を病理学的には分析できないという見方が強まってきた。つま

り、図 1-1 のうち左下が支配的だった状況から、経験的研究の蓄積により右上に向かう方向でパラダイムがシフトしつつある。本論文の問題意識に立ち戻れば、極右の支持者や担い手を特殊な存在とみない「ノーマル化」は、日本の分析に対しても示唆するところが大きい。石原慎太郎の支持基盤に関する研究では、有権者のイデオロギーを石原が体現する「ノーマルな支持」が確認されている（松谷ほか、2006）。橋下徹についても、「政治不信を抱く下層民」という支持者像とはむしろ逆の現実が明らかにされている（松谷、2011、2012；坂本、2012）。こうした実証研究をみる限り、日本の極右支持は西欧のそれと類似しており、極右と剥奪をアプリオリに結びつけることはできない。

ただし、このような極右研究のノーマル化がもたらす陥穽については、「病理的な通常」（Mudde 2010, 2013）との関連で最後に指摘しておく必要があるだろう。極右の支持者にとって移民問題は重要な関心事であり、それを合理的に考慮したうえで投票先を選択する（Van der Brug and Fennema 2003: 69）、その意味で「通常の」投票行動とみなしうる。だが、こうした見方は「病理」に関わる問い——なぜ移民が問題化されたのか、その根底にはいかなるものが存在するのか——をないがしろにしてしまう。こうしたことを問わなければ、「有権者は排斥的な移民政策を望んでおり、それを反映させるべき」という現状に居直る結論に至るしかない。その意味で、文化的競合の研究を掘り下げて、今ならイスラム嫌悪の背後にあるものを明らかにする作業が、「ノーマル化」の先にあるものとして求められる。これも日本の文脈に即していえば、日本の極右・排外主義が東アジアの近隣諸国に対して抱く敵意の根底にあるものを明らかにすることが必要となり、これについては第 8 章で詳述したい。

## 第二章 不満・不安で排外主義運動を説明できるのか

### 1 社会運動研究における不満・不安の位置づけ

不満がなければ社会運動に参加などしない。だから、運動参加者に話を聞けば何かしらの不満を口にするに決まっている。そこから「運動参加者にはしかじかの不満がある」、さらには「不満が運動の原因である」というのは簡単だ。その延長として、「不満」の背景に多くの人が抱く「不安」を読み取ることも容易である。いかなる社会にも構造的な問題は存在しており、それにより不安を感じる人はいる。非正規雇用の増加、日本の没落、コミュニティの解体・・・その不安が人々を攻撃的な行動に駆り立て運動に向かわせるのだ、と。

しかし、序章でも述べたように不安が運動の背景にあるという素朴実感論には、多くの欠陥がある。ここで「不安」とは、運動の係争課題に直接結びつかない心理的緊張と定義しておく。「不満」とは、運動の係争課題に直接関わる心理的緊張を指す。本論文の文脈でいえば、「日々の生きづらさ」は不安であり、「在日コリアンに対する敵意」は不満となる。不安は一般的な精神衛生上の問題と運動参加を結びつけるのに対して、不満は具体的な問題と運動参加の連関をみる。

社会運動研究の立場からすれば、不満は運動に不可欠な要素ではあるが、それは数ある要素の1つにすぎない (Jenkins 1985; McCarthy and Zald 1987: 18; Oberschall 1993: 19)。不満が自然に運動を生み出すという議論は、社会運動には組織化が必要で、そのためにはリーダーがいなければならずお金も集めねばならないという側面を無視している。運動を発生させるような不満・不安は、いつでもどこでも存在しているが、それが運動を生み出すのならば社会にはもっと運動が蔓延していることになる<sup>1</sup>。現実にはそうではなく、不満・不安では運動の発生を説明できない (McCarthy and Zald 1987: 18)。不満→運動の間には多くの過程が存在しており、実は不満と運動の結びつきは一般に思われているほど強くない。不安に至っては、さらに漠然とした不安が具体的な不満へと変化する過程を経なければならないため、具体的な運動との距離はさらに遠くなる。

にもかかわらず、排外主義運動と不安を結びつけ、したり顔で若者の生きづらさを語る者は跡を絶たない<sup>2</sup>。本章では、こうした見方の問題点を明らかにするため、社会運動研究の学説史に即して、不満・不安と排外主義運動との関連を検討する。古典的な学説では、不満・不安が社会運動の発生原因とされてきたが、1970年代以降そうした説は徹底的に批判され、社会運動研究自体が大きな変容を遂げてきた。不満・不安による説明に対して、そうした学説史的な検討を行いどこに問題があるのかを明らかにする必要がある。そこで本章の第2節、第3節では、前章でみた「近代化の敗者」論と競合論に対応させる形で、不満・不安と排外主義運動の台頭の関係を検討する。

経験的にみれば、社会全体として不安が高まる時期は存在するだろうが、そうした時期に

<sup>1</sup> これに関して、スリーマイル原発事故のような「急に持ち上がった不満」は、社会運動の直接的な発生原因になるという議論もある (Walsh 1981)。だが、「在日特権」がこれに該当しないのはいうまでもないし、福島第一原発事故を受けた社会運動の動員力が高まるのは、発生後1年以上してからであった (平林、2013)。

<sup>2</sup> これは日本に限ったことではなく、世界各国で同様のステレオタイプが蔓延しており、経験的な反証もなされている (Atkinson 1993; Mudde 2014)。

社会運動が多発するわけではない。ストライキに関する経験的研究は、それが景気後退によって頻発するという見方を退け、労働組合という組織的基盤の整備が重要であると指摘している (Shorter and Tilly 1974; Snyder and Tilly 1972)。また、不安を強く感じる人が社会運動に参加するという見方は、経験的にみて誤りである (Opp 1988)。不満にしても、客観的な状況と不満の間に明確な関係があるわけではなく、状況悪化→不満の亢進→社会運動という単純な因果関係は成り立たない。不満それ自体は所与のものではなく、運動が「発見」した問題をアピールし、個々人の中で不満が「構築」されるという主観的な過程が必要になる (Buechler 2004; Klandermans 1992; Klandermans, Roefs and Olivier 2001; Klandermans, van der Toorn and van Stekelenburg 2008)。

では、排外主義運動の発生には何が必要なのか。社会運動は何もないところから自然発生的に生まれるわけではなく、一定の基盤の上に成り立つものである。そうした基盤としてのイデオロギーとサブカルチャーの役割について先行研究をもとに検討し、第3章以降の議論につなげることが、本章の目的となる。

## 2 大衆社会論と排外主義運動

社会運動をめぐる古典的な学説は、運動参加を非合理的で病的な行動と捉えていた (Gusfield 1994)。そうした理論の代表的なものが大衆社会論であり、個々人の抱える「不安」によって運動の発生を説明している<sup>3</sup>。このような、非合理的な心理状況によって社会運動の発生を説明する議論は、19世紀の群集論 (Le Bon 1895; Tarde 1901) から集合行動論 (Smelser 1963; Turner and Killian 1972) に至るまで、社会学のなかで支配的な地位を占めていた<sup>4</sup>。

その中で大衆社会論の独自性は、まずナチズムの解明が切実な課題となっていた時代状況から生まれた点にある<sup>5</sup>。なぜナチスという全体主義が支持されたのか。その際、「大衆社会では不安が発生する」「その不安を解消するはけ口が社会運動である」という図式がとられる点では、他の古典的な学説と変わらない。だが、これは単なる心理還元主義ではなく、大衆社会という特定の社会構造が生み出す不安との関連で全体主義が説明される。その不安の解明が大衆社会論の主たる課題であり、以下のような論理構成がとられる (Arendt 1951; Kornhauser 1959; Selznick 1970)。

全体主義は、運動参加者のイデオロギーが両極にふれることではなく、むしろイデオロギーが崩壊することによって台頭する。アレントによれば、「全体主義の運動は国家崇拜どころか普通の公民的な心情すらが崩れ去ってからでなければ成立しない」 (Arendt 1951 = 1972a : 86)。ここでいう公民的心情とは、市民的公共性の担い手になるような強い意味ではなく、ブルジョア的個人主義をも含む。個人主義は政治的無関心の原因だが、全体主義への障害ともなるからである (Arendt 1951 = 1974 : 15)。したがって、個人主義すらが崩壊し抵

<sup>3</sup> 大衆社会論の紹介としては、佐藤 (1985) を参照。

<sup>4</sup> ただし、スメルサーの集合行動論は社会運動の展開に関して、後の資源動員論や政治的機会構造論、フレーム分析の原型となるような議論もしていた。不満の発生と社会運動の關係に特化した中範囲理論としては、Davies (1962, 1969)、Gurr (2011) がある。日本語での紹介としては、松本 (1985) を参照。

<sup>5</sup> それに加えて、スターリニズムやマッカーシズムが大衆社会論の想定する分析対象だった。



抗がなくなったところに、全体主義は浸透していく。

ではなぜ公民的心情は崩壊するのか。そこで原子化という用語が用いられるが、これは都市への人口流入や急激な産業化といった社会変動により中間集団が弱体化し、代替となる集団・規範もない状況が念頭におかれている (Kornhauser 1959=1961: 110, 172-3) <sup>6</sup>。そもそも大衆とは、社会構造のなかで自らが占めるべき位置を失い、社会のなかにながら社会の一員ではない、疎外された者を指す。大衆は既存の価値を維持する責任を負わないから移ろいやすく、安定した所属もない。疎外された結果として大衆は不安にかられ、地位や役割を取り戻し、社会と関係しているという感覚を持つとする。だがこれは強迫観念にかられてのことであり、それゆえ全体主義が体現するような代替的コミュニティへと統合されてしまう (Selznick 1970: 263-4)。

大衆社会論の図式は一見すると信憑性があるようにみえるが、後述する資源動員論によって経験的な根拠のなさが批判にされてきた (Costain 1992; Jenkins 1985; McAdam 1982)。だが、実証的な社会運動論で斥けられてからも、社会評論のレベルでは大衆社会論の亡霊が繰り返し登場している<sup>7</sup>。排外主義を含む右派市民運動についても「現代日本版大衆社会論」が提示されており、ここでは『癒しのナショナリズム』(小熊・上野、2003)と『不安型ナショナリズムの時代』(高原、2006)を取り上げて検討したい<sup>8</sup>。彼らは、1990年代以降の日本の特徴を「流動化」という用語で表現し、それが不安を作り出すという。すなわち、「流動化現象が、保守系運動という場で現れたのが『(新しい歴史教科書を) つくる会』である」(小熊・上野、2003: 4、カッコ内は引用者)<sup>9</sup>。『社会流動化』は、今や避けられないグロ

<sup>6</sup> この点に関して、スターリニズムに対するアレントの以下の見方は——経験的な当否は別として——大衆社会論として一貫している。「ヒトラーが崩壊しアトム化しつつある社会の中にまず 1 つの運動を起こすことによって全体的支配を準備したように、スターリンはまずそのような崩壊しアトム化した大衆をつくり出すことによって全体主義的な独裁を準備した。スターリンがそのためにとった方法は、インターナショナリズムの名において新しい少数民族を、階級なき社会の名においてソ連の新しい諸階級を絶滅したことだった」(Arendt 1951=1974: 28)。

<sup>7</sup> この 1 つの要因として、大衆社会論が社会運動を望ましくない病理的な現象と捉え、敵視してきたことが挙げられる (Bevington and Dixon 2005: 201)。右派市民運動に対する批判が、社会運動に対する大衆社会論の否定的な評価と一致したわけであるが、それでは問題の正確な把握と的確な対応を困難にするだろう。そもそも、「大衆」による「自由からの逃走」として排外主義運動を捉えるのは、経験的な妥当性を欠いている。さらにこうした議論をとると、大衆社会論が持つエリート主義を無意識に採用することになり、背後にある分析対象(筆者の立場からすると保守政治)を見逃して大衆批判を帰結してしまう。排外主義運動を大衆的病理としてのみ矮小化することを超えて、それを眼前させる構造を明らかにすることが必要である。

<sup>8</sup> この手のお手軽なナショナリズム論の一括した紹介としては、Honda (2007) を参照。

<sup>9</sup> 小熊の素朴な剥奪論的視点は、排外主義運動に対しても適用されている。彼によると、「在特会が結成された 2007 年 1 月は、この日の有志たちとも縁があるプレカリアート(不安定労働者)運動の発生と同時期である」(小熊英二「『在特会』のデモを見に行く」『GQ』2013.3.26、<http://gqjapan.jp/2013/03/26/thethoughtsonpolitics201305/>)。これに対して、筆者らの調査結果を受けても、以下のように無理に不満で説明しようとする。「特別に何らかの社会層に偏っているというわけではない。しかし、自分たちは意思決定から疎外されている、『特権』を持つ層から疎外されている、という感覚は強烈に持っている」(小熊・菅原・韓、2013: 43)。2000年代に東京・大阪・名古屋などで台頭したポピュリスト首長への支持者の傾向は、60代以上や管理職層、および低所得層に支持が多い。…所得の高低や年代よりも、現代社会において何らかの不安定感や疎外感を抱く度合いの方が、こうした右派ポピュリズムへの親和性につながっているのかも

一バルな潮流であることが明らか」であり、「堅固な組織によりかかる形での将来の予測可能性や、生活の安定性から、人々が放り出される」（高原、2006：38-9）<sup>10</sup>。

その結果、人々は不安を抱えるようになり、そのはけ口として右派市民運動が発生する。すなわち、「1人ひとり『普通の市民』である彼らが、自分の不安を持ち寄って集まることで、排除の暴力を内包した右派集団が形成される」（小熊・上野、2003：220）。しかもそれは、政治的イデオロギーとは関係ない現象として理解されねばならない。「趣味化したナショナリズムの帯びる情念とは、国威の問題でも歴史の問題でもなく、むしろ国内における社会流動化と高度消費社会化の進行に伴う、先行き不透明感である」（高原 2006: 140-1）。したがって、『嫌韓・嫌中感情』とか『右翼的な心情』とか自体を取り上げることに、あまり意味があるとは思えない」（高原、2006：96-7）<sup>11</sup>。

小熊や高原が大衆社会論的な社会運動論を参照したか否かは明らかでないが、彼らの議論はそれに酷似している。だが、そこでのキー概念たる「流動化」が何を指すのか明確でない。流動化→不安→運動参加に至る因果を特定しなければ、社会科学的な議論には堪えられないため、彼らの議論を敷衍して検証する必要がある。その際、彼らの議論に関連するのは、グローバル化、長期不況による経済的不安定、非正規雇用の増加という労働市場の流動化に伴う不安とみてよいだろう。この議論に従うと、「流動化により不安を抱きやすい者」が茫漠とした不安を抱き、それが排外主義運動の担い手になると解釈しうる。

では、不安を抱くのは誰だといえるのか、あるいは誰でないといえるのか。第1に、「不安」そのものを測定して比較するようなデータがないため、不安を持ちやすい社会層との関連で排外主義運動の担い手を考える必要がある。これを社会的に翻訳すれば、将来の見通しを持ちにくい低学歴層、あるいは不安定雇用層が不安を抱きやすいといえるだろう<sup>12</sup>。こうした問いに答えるうえで筆者が直接使えるのは、筆者自身が行った排外主義運動の関係者34名に対して行った調査データである。対象者の全員が運動に継続的に参加し、ほとんどが運動を組織する側にある（在特会25名中役職についていない者は4名）という点で、活動家層の特徴を示すものといえる（補遺参照）。

この領域に関して、他の実証的な調査はほとんど存在しない。筆者の調査対象者を表2-1に掲げたが、34名のうち高校卒7、専門学校3、大学24名であり（中退、在学を含む）、

---

しれない（小熊、2014: 558、下線引用者）。

<sup>10</sup> ここで高原は流動性が意味するところを明確に定義していないが、彼の他の著作を読む限り雇用を中心とする産業社会の構造変化を指していると思われる（高原、2008、2010）。つまり、彼のナショナリズム論はある種の経済還元主義とってよい。

<sup>11</sup> 高原は、日本との比較対象として韓国・中国に着目し、三国で同時に若年層のナショナリズムが高揚していることから議論している。このように、東アジアの現実から出発していること自体には敬意を表したいが、彼のいう「東アジア地政学」は1970年代以降しか視野に入れない薄っぺらなものでしかない（高原、2011）。そもそも、彼が指摘する「流動化」は東アジアのみに生じているのではなく、欧米の現実に対する適用可能性を考慮すべきだが、そうした観点は欠如している。

<sup>12</sup> これは以下のように安田の見解とも一致している。「雇用の流動化が進み、企業は正社員の割合を大幅に減らしていく。…そこから格差と分断が生まれる。何の『所属』も持たない者が増えていく。そういった状況に自覚的であろうが無自覚であろうが、『所属』を持たぬ者たちは、アイデンティティを求めて立ち上がる。そしてその一部が拠り所とするのが『日本人』であるという、揺るぎのない『所属』だった」（安田、2012a：353）。

全体として学歴は決して低くない<sup>13</sup>。職業をみても、大学在学中 2、ホワイトカラー22、ブルーカラー6、自営 4 名であった（退職者は定年前の職）。非正規雇用も 2 名いたのみである。インタビューに答えてもよいという姿勢を示すのは、高学歴のホワイトカラーが多いという傾向があったとしても、高校卒で非正規雇用という在特会前会長の桜井誠が全体を代表しているとは言い難い。

先行研究をみると、小熊は上野の参与観察にもとづいて、新しい歴史教科書をつくる会を「明らかに都市中産層の運動」（小熊・上野、2003：190）という<sup>14</sup>。辻大介（2008：10）のインターネット調査によれば、ネット右翼的な傾向を持つ者は高卒以下の比率が高かったが、大卒以上の比率は変わらなかった。調査対象者であるインターネットのヘビーユーザーの学歴は全体に高かったため、彼の調査ではネット右翼も社会一般より相対的に高学歴に入る<sup>15</sup>。

表2-1 排外主義運動の活動家の背景

学歴	職業	雇用形態
高卒以下	7 ホワイトカラー	22 正規 30
専門学校中退・卒	3 自営	4 非正規 2
大学在学・中退・卒	24 ブルーカラー	6 学生 2
	学生	2
計	34	34 34

筆者の対象者は 34 名、辻の調査もネット右翼的な者は 31 名しかいないため、これをもって排外主義運動の担い手が中間層中心であるとは結論づけられない。それでも、序章での検討とあわせて考えれば、階層の低い者が主たる担い手となった運動とはいえ、不遇状況を運動参加者の共通項とみるのは間違いだろう<sup>16</sup>。また、活動家の中に不遇な者がいないとはいわないが、不遇ゆえの不安が不満を蓄積させ、運動参加に至ったとまでいえるのだろうか。この点について安田（2012a：354）は、保守運動の台頭を『先進国・日本』の経済的没落と歩調を合わせていた」とした後に、以下のように述べている。

<sup>13</sup> 専門学校と大学について中退が 1 人ずついたが、中退後にも専門性を生かした職についているため、卒業に準じるものとして扱っている。

<sup>14</sup> 新しい歴史教科書をつくる会の階層的な性格については、村井（1997a、1997b）でも垣間みることができる。

<sup>15</sup> 大学教員で関連する講義を担当していれば、ネット右翼的な認識を持つ学生に遭遇することは日常茶飯事となっており、それがトラブルになることもある（e.g. 金友子、2015）。これも、低学歴の非正規雇用と排外主義を結び付ける危険性を示す傍証となる。

<sup>16</sup> 属性については、序章でふれた未婚の者が多いこと、男性が多いこと、平均年齢が低いこと、大都市居住者が多いことは確実にいえるだろう（在特会のホームページでは、男女別と都道府県別の会員数が出されており、首都圏・関西圏では人口比以上に会員数が多い）。だが、それ以外の社会経済的地位について明確な傾向があるとはいえないと筆者は考えている。男性優位は、極右政党の支持者だけでなく極右運動の研究で共通しており、女性は配偶者や恋人に誘われて従属的に参加することが多い（Blee and Linden 2012）。

社会への憤りを抱えた者。不平等に怒る者。劣等感に苦しむ者。仲間を欲している者。逃げ場所を求める者。帰る場所が見つからない者——。そうした人々を、在特会は誘蛾灯のように引き寄せる。(安田、2012a : 355)

だが、経済的没落と活動家の動機がどこまで関係しているのか、個々人のエピソードをみると安田の議論は説得力を欠いている。まず、「社会への憤り」や「不平等に怒る」のは、ほとんどの社会運動でみられることであり、在特会について特段言及すべきことでもないだろう。次に、「ほとんどが非正規の労働者」(安田、2012c : 87) が本当だったとしても、その社会経済的地位ゆえに「劣等感」を抱いているのか疑わしい箇所が多い。安田の著作に登場する人物のうち、「植木職人」だったダルビッシュにとっての問題は学歴や職業ではなく、イラン人の母を持つことであった。「仲間を欲して」に至っては、目標を共有する者と行動を共にすれば充実感を得られるのは当然で、ほとんどの社会運動に共通することである。安田が言及する副会長の藤田正論の「寂しさ」は、イデオロギーを他者と共有できないことに起因するのであり、仲間ほしさが先にありきではない。「鮮魚店員」の慶次郎も、チーム関西のリーダーの「格好良さ」に魅かれたのであり、それと彼の職業に結びつきがあるとみるのは無理がある。

社会病理の背景に個人の病理=疎外を読み込むのは、論としてはわかりやすいが、個別事例を詳細にみると説得力がなくなってしまう。前段で挙げた3人だけみても、「不安」として共有する要素が果たして存在するのか疑わしい。これは安田のみならず大衆社会論全般に通じる弱点であり、大衆社会論が想定する疎外状況が何を指すのか、明確にされることはほとんどない (Goodwin, Jasper and Polleta 2000: 67)。

### 3 競合論と排外主義運動

在日コリアンが排外主義運動の標的になる理由を、前章でみた競合論の観点からどこまで説明できるのか。反移民感情の背景にはさまざまな要素があるが、ここでは直接的な「不満」を競合論に即して検討していく<sup>17</sup>。移民は、受け入れ社会のマジョリティと文化的、経済的、政治的に競合して脅威になるという認識が、ここでいう「不満」の発生源となる。日常生活で外国人の存在を認知→それが自らの脅威になると認識→不満→運動参加という経路を、競合論は想定する<sup>18</sup>。もっとも、「競合」があるから不満が生まれるというのはナイーブな議論で、不満の理由として「競合」が後から構築される側面をまず考える必要がある。すなわち、西欧ではムスリム移民に問題があるから敵視されるのではなく、敵視されるからさまざまな問題の原因とされる (Sunier and Ginkel 2006)、そうした観点の必要性である。だが、本章ではひとまず実態的なものとして素朴に「競合」を設定し、在日コリアンに即して

<sup>17</sup> こうした観点から極右運動を分析したものとして以下がある (Adler 1996; Van Dyke and Soule 2002)。だが、これらは活動家個人に関するデータを用いていないため、ecological fallacyの可能性を排除できない。全体として、ミクロデータを用いた研究とマクロデータを用いた研究の知見には齟齬があり、前者のほうが手続的にみて信頼がおけるだろう。

<sup>18</sup> 「現実の」競合と「認知された」競合は、常に一定のずれを含んでおり、後者の方が重要という指摘もある (e.g. Semyonov, Rajjman and Yom-Tov 2002)。

適用の素地を考えてみることにしよう<sup>19</sup>。

まず文化的競合とは、異文化を持った移民集団が文化を保持し続けることが、受け入れ社会の文化にとって脅威になるとみなされる事態を指す。この点について誤解を恐れずいうならば、在日コリアンは国際的な移民研究の基準に照らせば、きわめて同化が進んだ集団だとみなしうる<sup>20</sup>。かつてゴードンは、個人の行動に関わる文化的同化と社会集団レベルでの構造的同化に分けて、移民集団の変容を分析しようとした（Gordon 1964）。それに即してみれば、言語や日常習慣といった文化的同化の面はいうに及ばず、現在は在日コリアンの多くが日本国籍者と結婚する点で構造的同化も高度に進んでいる<sup>21</sup>。また、外国籍の在日コリアンたる特別永住者の数自体が、毎年約1万人ずつ減少している<sup>22</sup>。その意味で、在日コリアンとの「文化的競合」は——それが仮にかつてあったとしても——年々弱まりつつある。現在の在日コリアンは、かつてガンスが象徴的エスニシティと呼んだ状況に近く（Gans 1979, 1994）、排斥する根拠を見出すのは、どうこじつけたとしても難しい<sup>23</sup>。

経済的競合についていえば、在特会は、「生活保護優遇」を「在日特権」の1つとして挙げている。表2-2が示すように、在日コリアン及び他の外国人が生活保護を受ける比率は高いと思われる<sup>24</sup>。しかし、外国人に対して生活保護を権利として認めない行政が在日コリアンを「優遇」などというのは、まったく事実に反する<sup>25</sup>。そもそも、在日コリアンの生活保

---

<sup>19</sup> 在日コリアンほどではないが排斥対象となる在日中国人については、競合論的な説明自体がそもそもナンセンスである。2007年以降、在日中国人登録者数は韓国・朝鮮籍を抜いて1位の座にある。にもかかわらず、可視的なチャイナタウンといえるのは老華僑が横浜、神戸、長崎に築いた中華街くらいで、全体として可視性が低い。また、留学生の多い在日中国人の学歴は全体として在日コリアンより高い（大曲ほか、2011）。専門職としての社会進出が成功を収めている状況は、たとえば段（2003）の示す在日中国人による著作の受賞歴でも伺える。

<sup>20</sup> 在日コリアンの若年層のエスニシティについては、福岡・金（1997）が分析的に明らかにしている。

<sup>21</sup> 在日コリアンの結婚については、橋本（2010）を参照。法務省官僚だった坂中英徳は、（国籍集団としての）在日コリアンは通婚により急速に減少すると述べた（坂中、1999）。これは、血統主義的な国籍法を維持していても通婚によって同化が可能であるという見通しによる。坂中はナショナリストだが、こうしたリアルな同化主義の立場からすれば、在日コリアンを危険視するのはナンセンスということになるのだろう。

<sup>22</sup> この理由は大きく2つある。第1は日本国籍取得者の増加で、1990年代以降は平均して年1万人弱が取得している。第2に日本人と結婚が増加し、生まれた子どものほとんどが日本国籍となるため、韓国・朝鮮籍での出生数が激減したことによる。

<sup>23</sup> 強いていうならば、朝鮮語を教授言語とする朝鮮学校は文化的同化の拒否とみえなくもないが、朝鮮学校が排斥対象となる理由はまったく別のところにある。朝鮮学校の文化については、宋（2012）を参照。

<sup>24</sup> 日本全体の被保護率は計算されるが、外国人については人数ではなく世帯数しか公表されないため、表2-2では独自に計算して実態に近い値を出した。まず、分母としては生活保護準用の対象となる特別永住者、永住者、永住者の配偶者、日本人の配偶者等、定住者の数を在留外国人統計で計算した。実際に保護される人の数については、世帯数と世帯人員を掛け合わせて求めた。この場合、世帯主が外国籍でそれ以外の世帯員が日本国籍である者まで世帯主の国籍の人数とすることになる。逆に、世帯主が日本国籍で世帯員が外国籍の場合は人数に入らない。そうした問題はあがあるが、おおむね実態を反映する数値と考えられるため公開した。

<sup>25</sup> 生活保護は生存権を根拠としており、生存権の保障は居住国ではなく国籍国であるという論拠によって、外国人は日本で生活保護を受給する権利がないとされる。現在適用されているのは、行政裁量による準用という扱いがなされることによっている（高藤、1991）。

護受給比率が高いのはなぜか。第1に、難民条約批准後の法的整備まで国民年金に加入できず、加入時の経過措置もなかったため、公的年金から排除された高齢の受給者が多い<sup>26</sup>。第2は人口学的な問題である。日本国籍取得や日本人との結婚により、生活保護を受給しない就労人口や若年層が韓国・朝鮮籍として計算されなくなったため、「国籍」で区切った見かけ上の受給比率が増加した。第3に、在日コリアンの失業率は日本人より高いと思われるなど、貧困が不可視な形で存在してきた現実も示す<sup>27</sup>。

表2-2 外国人の生活保護をめぐる実態(2011年)

	日本全体		韓国・朝鮮		中国		フィリピン		ベトナム		ブラジル	
	世帯数	%	世帯数	%	世帯数	%	世帯数	%	世帯数	%	世帯数	%
推定被保護率(%)	1.6		8.0		3.0		7.2		9.2		1.7	
理由別世帯数												
高齢者	639,760	43.5	14,940	51.9	543	12.2	20	0.4	72	11.1	124	8.1
母子	106,060	7.2	1,876	6.5	819	18.4	3,606	73.6	209	32.1	397	25.9
障害	158,490	10.8	2,883	10.0	372	8.4	62	1.3	43	6.6	83	5.4
傷病	296,310	20.1	5,321	18.5	1,434	32.3	323	6.6	98	15.1	262	17.1
その他	271,610	18.4	3,776	13.1	1,275	28.7	891	18.2	229	35.2	666	43.5
総数	1,472,230	100.0	28,796	100.0	4,443	100.0	4,902	100.0	651	100.0	1,532	100.0

資料：日本国籍については、厚生労働省大臣官房統計情報部「社会福祉行政業務報告」。外国籍については『在留外国人統計』2012年版と平成23年度被保護者全国一斉調査基礎調査から作成。

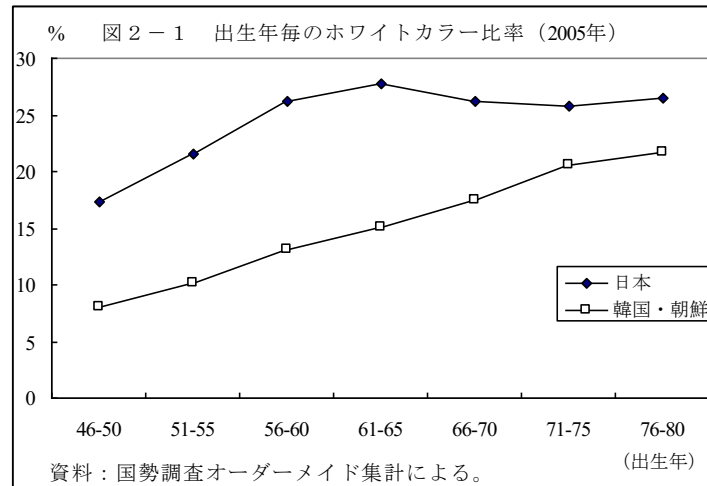
ただし、こうした貧困は高齢世代における就職差別や社会保障からの排除がもたらす「過去の負の遺産」としての性格が強く、若年層は上昇移動を遂げている。それを表すのが図2-1であり、これは韓国・朝鮮籍と日本国籍の間にあるホワイトカラー就業比率の年齢別格差を示す<sup>28</sup>。大企業で就職差別があったことや、公務員への門戸がほぼ閉ざされていたこともあり、在日コリアンにとってホワイトカラーにつくのは容易ではなかった。しかし、図中で最大10ポイント以上あった格差が若年層になると緩和し、1970年代生まれでは5ポイントまで縮小している<sup>29</sup>。つまり、生活保護についても過去の排除的な政策や貧困が原因のほとんどを占め、問題は解消に向かいつつある。したがって、福祉ショーヴィニズムが今になって噴出するのは、実証的なデータからすれば奇異に映る。

<sup>26</sup> それを補っているのが、一部の自治体が設けている福祉給付金であり、これは経過措置をとらなかった政策的不備の補償としての性格が強い。

<sup>27</sup> 生活保護については、移住連貧困プロジェクトでの共同作業に負っている。外国人の貧困一般については、移住連貧困プロジェクト(2011)を参照。

<sup>28</sup> これは国勢調査のオーダーメイド集計により得られたデータであり、稲葉奈々子、大曲由起子、鍛冶致、高谷幸の各氏との共同研究による。詳しくは、樋口(2015d)、稲葉ほか(2014)、鍛冶ほか(2013、2015)、大曲ほか(2011a、2011b、2011c)、高谷・大曲・樋口・鍛冶(2013a、2013b、2013c)、高谷・大曲・樋口・鍛冶・稲葉(2013a、2013b、2013c、2014a、2014b、2014c、2014d、2015a、2015b、2015c)を参照。

<sup>29</sup> ホワイトカラーが多い若年層ニューカマーが、世代的な差をもたらしている可能性を完全には否定できない。が、金・稲月(2000)でもこうした傾向は明確であり、格差が縮小しているとみて差し支えないだろう。



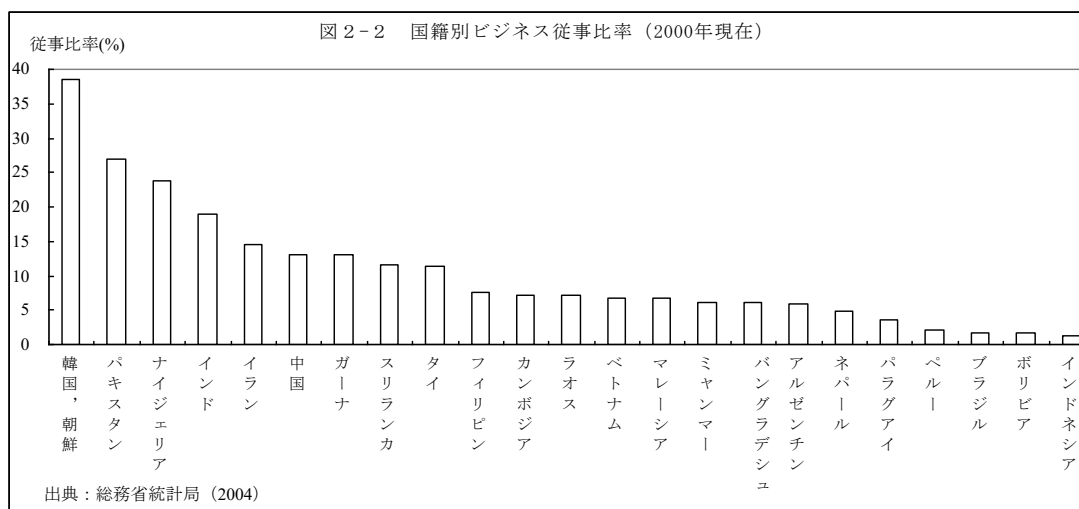
次に、労働市場における競合と敵意の関係を説明した分割労働市場論によれば、労働市場はエスニック集団ごとに分割されている。分割された労働市場で、特定の職に特定の集団がつく状況が、集団間での競合と敵意を生み出す (Bonacich 1972)<sup>30</sup>。ただし、集団ごとに労働市場が分割されている状態が安定的に続けば、それ自体が紛争をもたらすわけではない。特定の移民集団の流入が続くといった現状の変更を伴う動きが、他の集団に「競合」とみなされて敵意につながるのである<sup>31</sup>。

在日コリアンについてみれば、労働市場における特徴は明確である。図 2-2 が示すように、すべての国籍集団のなかで自営業従事比率がもっとも高い<sup>32</sup>。これは、就職差別により自前で事業を興すしかなかった歴史的経緯の所産だが、自営業部門に進出できたため階層的な上昇を達成したともみなしうる (樋口、2012z)。それゆえ、欧州の極右についていわれるような、ブルーカラー層同士の職の競合が在日コリアンに対する敵意を生み出すという見方は当たらない。

<sup>30</sup> 日本でも、労働市場の分断が反移民感情を生み出しているという分析結果が出されている (永吉、2012)。

<sup>31</sup> この点については、エスニック競合論と文化的分業論の間での論争があるのだが、本論文の趣旨とは外れるのでこれ以上ふれない。両者については、Olzak (1992) と Hechter (1999) を参照。

<sup>32</sup> 在日コリアンの経済状況については、韓 (2010)、朴 (2005) を参照。



では、自営業層に対する敵意を説明する中間マイノリティ論の適用可能性はどうか。中間マイノリティとは、社会の支配的な集団と劣位にある集団の中間に位置する媒介者であり、多くは自営業者として劣位にある集団を顧客とする (Bonacich 1973; Bonacich and Modello 1980)。在日コリアンは自営業者が多い点で中間マイノリティとしての性質を持つが、劣位にある集団を顧客とするわけではない。中間マイノリティが敵意を持たれるのは、劣位にある集団が中間マイノリティに見下され搾取されるとみなすからである。その意味で、ニューカマーを顧客とするわけではない在日コリアンに当てはめるのは無理がある。日本人の不安定就労層が在日コリアンを上位主体とみなす、という見方もありえなくはない<sup>33</sup>。だが、これは現実に裏切られており、在日コリアンのビジネスを敵視する動きはパチンコくらいなものだろう。ただし、これとても経済ではなく政治的な理由による排斥であるため<sup>34</sup>、労働市場で在日コリアンへの敵意は説明できない。

最後に「政治的競合」という点ではどうか。戦後直後から 1950 年代にかけては、冷戦や南北分断という政治状況に規定される形で、在日コリアンによる左翼運動や民族運動が盛んに展開されていた (朴、1989; Sugimoto 1981)。南北分断が固定化してからは、民団、総連という二大組織が本国と連携するようになったが、70 年代以降は日本での居住を前提とした権利要求運動が噴出する<sup>35</sup>。民族団体とは独立した市民運動も、この頃から目立つようになっており、日立就職差別裁判、指紋押捺拒否、地方参政権獲得といった主要な運動は、市民運動が先鞭をつけてきた。そうした多様な運動が存在するという意味で、政治的な動きがほとんどなかった老華僑とは異なり、在日コリアンは政治的に活発な集団だったといっ

<sup>33</sup> これは安田の見方とも重なるが、現実の説明としては成立していない。

<sup>34</sup> パチンコに対する敵意は、古くは土井たか子・元社会党委員長の「パチンコ疑惑」バッシングにみられるような、北朝鮮との関連づけによる。

<sup>35</sup> 前述の自治体による在日コリアン高齢者への福祉給付金などは、ローカルな権利要求運動の成果である。

<sup>36</sup> 在日コリアンの社会運動については、本文でふれたもののほか以下を参照 (金敬黙、2011; 朴、1999; 田中、2005)。



だが、民族団体の勢力は年を追って弱体化している。韓国・朝鮮籍の特別永住者数が年々減少しているだけでなく、民族団体離れにも歯止めがかからない。地方参政権運動が、80年代の指紋押捺拒否運動のような広がりを持ち得ない背景の1つとして、民団の組織力の低下があるだろう<sup>37</sup>。指紋押捺拒否は、民族団体によって主導された運動とはいえないが、後になって民団が関わったことで万単位の拒否者を生み出すこととなった。地方参政権が、もっぱら司法・立法の議論とされてきたのに対して、指紋押捺は市民社会の水準で運動が発生し、支援者も多く馳せ参じることとなった。外国人参政権についても、社会運動として広範な動員が行われたら実現可能性にも影響したと思われる。その意味で、政治的競合が仮にあったとしても、90年代以降その度合いは低下している<sup>38</sup>。外国人参政権は国民主権に関わるので重要度が違うという反論はあるかもしれないが、第7章で示すように他の国では政治問題になることなく成立している現実がある。問題は、「生活保護」「参政権」といったイシューの性質ではなく、それに過剰反応する側の認知形成である。

#### 4 代替的な説明図式

##### (1) 「外国人問題」を事後的に構築する保守運動

「客観的」な指標からすれば、競合論で説明できる要素が乏しく、それとて年を追ってなくなりつつあるなかで、排外主義運動は台頭してきた。活動家が外国人と接点を持った度合を示した表2-3をみても、競合論で説明できないことがわかる。活動家のうち、外国人との直接的な接触によりネガティブな意識を抱いたのは、34名中3名だった。接点はあったが排外主義とは関係ないというのが12名、接点がなかったのが19名と多数派であった。活動家が外国人と接した経験は、排外主義運動へと結びつくことはほとんどなく、意識したことすらないという者が多かった。以下は在特会幹部の語りだが、大学を卒業して仕事で在日コリアンと関わるまで、その存在すらほとんど認知していなかった。

表2-3 外国人との接点とその影響

外国人との接点	接触の影響	接点の持ち方
あり 15	ネガティブ	3 集落に在日コリアンがいた 地域に外国人労働者が増加 アルバイト先に中国人がいた
	影響なし	12
なし 19		
合計 34		

初めて朝鮮人として認識したのが、22、3（歳）くらい。（それ）まで、朝鮮人がそんなに日本

<sup>37</sup> 一連の経緯については以下を参照（韓さんの指紋押捺拒否を支える会、1990；〔ひとさし指の自由〕編集委員会、1984；神奈川新聞社会部、1985；民族差別と闘う関東交流集会実行委員会、1985；申・熊野、2007；吉留、1985）。著編者名をみても、これが社会運動として広く展開されたことがうかがわれる。

<sup>38</sup> そもそも、外国人参政権が政治的競合の文脈で語られること自体、西欧的な文脈ではナンセンスなものでしかない。1990年代以降の西欧の研究では、政治参加を通じた統合が課題となっており、その意味で活発な政治参加を実現する方法が問われているからである。

にいるっていうのを知らなかったんですよ。興味もなかったし、韓国なんていう国が。多分日本のほとんどの人が「10年前に韓国に興味ありましたか」って聞かれたら、今ブームになったから知ってるよという人ばかりだと思うんですよ。（I氏、在特会、30代男性）

2006年当時、韓国ってイメージするものって何？と聞かれたときに、「韓国ねえ、首都がソウル、野球がそこそこ強い、いわゆるお隣の国、あと何？」本当このレベルでしたから。（S氏、在特会、30代男性）

排外主義運動に結びつくきっかけをみても、「外国人問題」を挙げたのは6名でしかない。ただしこのうち3名は、90年代あるいはそれ以前から右翼活動に関わっており、そこから排外主義へと転じている。残りの2人は序章でふれたフィリピン人一家の在留特別許可の報道がきっかけであり、在日コリアンが直接のきっかけとなったのは1名しかいない。こうした外国人との接触や認知は、理論的には接触仮説と競合仮説の問題とされてきた（Allport 1954; Olzak 1992）。接触仮説では、外国人が増加しても対面的な関係を築けば排外性が抑制される考えるため、本論文に登場する活動家は接点がないことが排外主義に結びつくという見方になろう<sup>39</sup>。競合仮説は、外国人の増加を認知することが排外主義に結びつくことみなす。だが表2-4が示すのは、外国人の存在自体が意味あるものとして認知されていない、接触も競合も意識外にある事態である。

表2-4 排外主義運動につながるきっかけとなった出来事

区分	具体的なきっかけ	人数	
「外国人問題」	外国人労働者	2	6
	フィリピン人一家の在留特別許可	2	
	外国人参政権	1	
	在日コリアンの集住地区問題	1	
韓国	スポーツ（ワールドカップ、オリンピック）	2	2
北朝鮮	拉致問題	4	4
中国	尖閣問題	1	5
	中国の反日デモ	1	
	天安門事件	1	
	北京オリンピック聖火リレー	2	
歴史	歴史修正主義	8	8
その他	人権擁護法	1	9
	創価学会批判	2	
	戸塚ヨットスクールへの共鳴	1	
	民主党政権の誕生	2	
	右翼へのあこがれ	2	
	民族派つながりで参加	1	
合計		34	34

では、活動家に共通する要素とは何なのか。表2-4が示すように、韓国、北朝鮮、中国に

<sup>39</sup> この2つの仮説を用いた研究には相当の蓄積がある。極右運動関連では、イギリス国民党で流出した党员名簿を用いた研究があり、それによると南アジア系の人口が多くても、住み分けてなく混住している地区では党员が少ない（Biggs and Knauss 2012）。

関わるのが 11 名、近隣諸国と密接に関わる歴史修正主義も含めれば、東アジアにかかわることを挙げた者は 19 名に達する。それ以外の 9 名は、創価学会批判をたまたま動画で目にした 2 名以外、右翼的ないし保守的な関心にもとづくきっかけを挙げている。ここからわかるのは、「外国人問題」以外のことが導入口となって排外主義運動と接点を持ち、事後的に「在日特権」が発見され「不満」が構築される認知動員のあり方である。したがって、「在日特権」などという虚構が受容され、活動家を動かす過程こそが解明されねばならない（第 3、4 章参照）。

さらにいえば、導入口となることの多くは保守的な政治志向と親和的である。活動家の投票行動をまとめた表 2-5 から、この点について考察していこう。表 2-5 をみると、熱心に政治に関わってきたわけではないものの、基本的に選挙に行くのは当たり前としてきた者が多い。また、排外主義運動との関わりを持つ以前から自民党に投票してきた者が多数を占める。そのほとんどは、自民党を積極的に支持して投票しているわけではないが、社会党など当時の野党に対して否定的な感情を持っていることが多かった。民主党の 2 名のうち 1 名は労働組合で活動していた関係で（民社の 1 名も同様）、もう 1 名は反戦志向ゆえに支持していた（社会・共産の 1 名も同様）。白票の 1 名は、政治不信の意思表示として 20 年近く白票を投げ続けている。

表2-5 活動家の投票行動

投票行動		
選挙	投票先	
行く	29 自民	23
たまに行く	1 民主	2
棄権	2 社会・共産	1
未成年	2 民社か自民	1
	決まっていない	2
	白票	1
	34	30

注：未成年とは、聞き取り時に19歳ないし20歳になったばかりで投票経験がない場合を指す。この2名も、投票が可能になった際には右派政党に投票することになる。また、投票先は活動に携わる以前について聞いたもので、聞き取り時点では「たちあがれ日本」「維新政党・新風」が多くなる。

こうした結果は、大衆社会論的説明に対して改めて疑問を付すものとなる。茫漠とした不安が排外主義運動の根底にあるのなら、別に保守支持層に活動家が集中する根拠はないからである。その意味で、在特会は「あなたの隣人」という安田の見立てには問題が多い。確かに排外主義運動の活動家には仕事を持つ「普通の人」が多いが、イデオロギー的には「無色」ではなく保守である。「無色」といえたのは、選挙に行ったことがないという 2 名だけであった。民主・社民・共産に投票していた 4 名は、ある時点でイデオロギー的な転換を遂げている。政治的社会化の過程については次章で詳述するが、この 6 名は具体的な出来事を契機として転換を遂げていた。それに比べると、保守系だった者は大きな転換なくして排外主義運動に関わる場合が多い。

つまり、活動家に共通する背景としてみるべきは、社会階層よりもむしろ政治的イデオロギーであることを、本章の考察は示唆している。欧米での極右運動に関するレビューでも、「欲求不満を抱え、下方へと転落し、社会の縁辺にある」者が担い手になるという見方が誤

りであると結論づけている (Blee and Creasap 2010: 271)。極右団体に関する経験的研究は 1990 年代から盛んになっており、これらは極右運動を社会病理の範疇で捉える大衆社会論の誤りを実証的に明らかにしてきた (Goodwin 2008b: 33)。

むしろ、保守的なイデオロギー的を持つ者が、排外主義に引き寄せられる過程を解明する方が、排外主義運動に関して明らかにできることは多い。「排除された者の鬱憤晴らし」ではなく「保守運動」という当事者の言明をひとまず「真に受ける」こと、そのうえで「保守運動」が最悪の形をとって現われる要因を明らかにすることが求められる。イデオロギーを捨象すると、既成保守イデオロギーの変容と排外主義運動の関わりという重要な論点も見逃してしまうことになる (第 6 章参照)。

## (2) 資源動員の基盤——インターネットと運動文化

社会運動論の立場からすると、大衆社会論的な説明はもう 1 つ大きなことを見落としていた。それは、孤立しているかにみえる個々人の水面下でのつながりである (Goodwin, Jasper and Polletta 2000: 67)。大衆社会論が「原子化された民衆は容易に動員されるのである」(Kornhauser 1959=1961: 34、傍点原文) とみるのに対し、資源動員論はまったく逆の理解を提示する。すなわち、原子化された者を動員するのはコストがかかりすぎるため、社会運動組織と参加者との紐帯が必要とみなす (Oberschall 1993: 24)<sup>40</sup>。「人々が動員し集合行為を行う公式非公式の集合的手段」(McAdam, McCarthy and Zald 1996: 3) たる動員構造が運動に先立って存在しなければ、多くの人を集めることは難しい。排外主義運動についても動員構造は関係しており、動員構造をハードな面 (資源流通のインフラ) とソフトな面 (運動文化の基盤) に分けたとき、以下のような特徴を持つ。

ハード面については、インターネットを使った資源流通に対する依存度の高さが特徴となる。欧米の極右運動もインターネットを積極的に活用する一方で (第 5 章参照)、学校などを通じた対面的な勧誘も行っている (Blee 1996; Braunthal 2009, 2010)<sup>41</sup>。それに対して、日本の排外主義運動——特に在特会——はインターネットへの依存度が極端に高い。紙媒体での情報流通を当初から放棄しており、その意味でインターネットという情報流通手段を用いた特徴が顕著に表れている。インターネットでの情報拡散は不特定の受け手を対象としており、受け手に共通するのはネットユーザーだというくらいしかない。

それに加えてソフト面での特徴でもあるが、単にインターネットを用いるだけでなく、動画を用いた情報拡散を盛んに行っていることも挙げられる。実際、インターネットの普及、動画配信の増加と排外主義運動のあゆみは軌を一にしてきた。活動内容を紙媒体で伝えてもタイムラグが発生するし、臨場感も損なわれ、なおかつ記録のための労力や印刷・郵送費

---

<sup>40</sup> 資源動員論の日本語による紹介としては、長谷川 (1985)、塩原 (1989) を参照。もう 1 つ理論的に重要なのは、群集論、大衆社会論、集合行動論といった古典的理論は社会運動を非合理的なものとしてみているが、資源動員論は合理性を前提とした点である。これは、社会運動を「鬱憤晴らし」とみなすのか「目的達成のための集合行為」とみなすのか、という大きな相違を生み出す。

<sup>41</sup> 第 5 章でみるように、インターネットにおける極右の活動やレトリックに関する研究には一定の蓄積がある。しかし、これらはインターネット上にある情報の分析に留まっており、思想や主張、組織間関係は明らかにされるが、実際の動員に対する効果に関する研究は管見の限りなかった。

も必要になる。動画配信には撮影者が必要になるが、個人で購入可能な程度の費用で機器購入・配信が可能であり、事後的な労力もかからない。資料の中に埋もれていく紙媒体と異なり、アップロードされた過去の動画も検索でヒットするし、偶然視聴される機会も多い。その一方で、動画配信に適した街宣やデモといった行為レパトリーが多くなり、活動がインターネットに拘束される側面もある（第5章参照）。

動員構造のソフト面をみると、欧米の極右運動はいくつかの明確な文化的基盤を持つ。第1は、過去のファシズムの継承という性格である。これは、かつてファシズムや軍国主義に関わった親族の崇拜（Dechezelles 2013）、ハーケンクロイツのようなシンボルの使用などが挙げられる。日本の排外主義運動では、部分的に過去の栄光として身近な人の戦争体験が語られることはあるが、それより明確なのは旭日旗や日の丸の使用だろう。ただ、これはあくまで運動で用いられるアイコンの1つに過ぎず、運動の基礎となる文化とまではいえない。

第2は、特定のサブカルチャーと極右運動との結びつきである。西欧のフーリガンやスキンヘッド、米国のプロテスタント右派は、極右運動の組織的基盤の一部をなしてきた（Fowler et al. 2010; Kaplan and Bjørge 1998）。サッカーはしばしばナショナリズムやレイシズムの発露の場となっており、フーリガンやスキンヘッドのグループは排外主義運動の一定割合を占めている（Borusiak 2009; Jaschke 2013: 25; Kersten 2004: 178-9; Willems 1995: 168-71）。米国では、極右運動（この場合は白人至上主義運動）の代表格ともいえるクー・クラックス・クランが、キリスト教を基盤として儀式にもキリスト教的様式を大幅に取り入れてきた（Green and Rich 1998; McVeigh 2009）。現代でも、プロミス・キーパーズなど宗教色の強い極右運動は多い。こうした文化的基盤は、その「格好良さ」に対する純粋なあこがれを生み出し、それによる勧誘を可能にする（Miller-Idriss 2009: 119-120）<sup>42</sup>。それと密接に関わるものとして男性性の強調、他者の攻撃や暴力と男らしさを結び付ける文化もある（Kimmel 2007; Kimmel and Ferber 2000）。

日本の状況をみると、可視的なサブカルチャーとして一般に思い浮かぶのは、序章でふれた右翼学生による朝鮮学校生への暴力くらいではないか。排外主義運動に直接関係するのは、徳島県教組襲撃や京都朝鮮学校への嫌がらせ、ロート製薬での強要といった刑事事件を起こしたチーム関西が持つ「ヤンキー文化」がある。これについては安田（2012a）が報告しており、「頼れる兄貴分」へのあこがれが運動への誘因の1つになっているという。だが、これは関西にのみみられる現象であり、フーリガン、スキンヘッド、宗教右派に類するサブカルチャー集団が存在するとまではいえない。その機能的等価物として考えられるのは、2ちゃんねるに代表されるインターネット上のサブカルチャーだろう。そもそも、「在日特権」という言葉自体がインターネットで生まれたものである。可視的な集団が存在しない分だけ、ネットカルチャーの刻印を受けた排外主義運動になっている可能性がある。

## 5 排外主義運動のリアルな把握にむけて

大衆社会論的説明の欠点の1つは、極右勢力の中の多様性を見逃してしまうことにある（Kersten 2004: 182）。大衆社会は、ある時代のある社会に住むすべての人に関わることであ

---

<sup>42</sup> たとえばドイツの高校では、こうした文化に魅かれて極右に関心を持つ生徒がいることに苦慮しているという（Miller-Idriss 2009）。

り、そこで発生する問題とは誰もが無関係ではいられない。その結果、活動家はすべからくマクロな社会変動の犠牲者となってしまい、ステレオタイプのな像しか描きにくくなる。だが、排外主義運動の活動家は決して均質な集団ではない。社会全体に大きな力が加わったとしても、すべての人がその影響を同じように感じることはありえない(McAdam 1988b: 35)。安田(2012a)の著作に登場する人物も、それなりの多様性が垣間みえる描写がなされている。それを「しんどそうな人々」と総括してしまうのは、同じ対象にアプローチする者として実に惜しいと言わざるを得ない。

大衆社会論的説明のもう 1 つの欠点は、経験的な根拠が示されないことにある(Mudde 2010)。これは日本に限らず欧米の先行研究も同様であり、実証研究で大衆社会論に沿った結果が出たものは、筆者が目を通した限りではなかった。では、何によって説明すればよいのか。こうした問いに答える準備作業として、本章では以下のことを確認してきた。まず、学歴・階層の低さを日本の排外主義運動の共通項としてみることはできない。さらに在日コリアンだけでなく、外国人一般とも接点がなかった活動家が半数以上を占める。その意味で、直接的な経験における共通性もない。それに代わる共通項となるのは、政治的には保守ということである。これは極右運動の活動家だから当然のことではあるが、排外主義運動に関するこれまでの言説では不思議なくらいふれられなかった。

次に、「在日特権」が虚構に過ぎないことは序章で述べたが、それ以外の客観的な「競合」によっても排外主義運動の発生を説明できない。「競合」の発生条件は、近年になってさらになくなりつつあるため、それ以外の要因で排外主義運動を説明する必要がある。そこでまず指摘したのは、政治的な保守主義が運動の根底にあることで、それが運動の提示する「在日特権」の共鳴板になったと考えられる。

それゆえ、第 3 章では活動家たちがどのような政治的イデオロギーを身につけてきたのか、ライフヒストリーに関する語りを用いてみていきたい。しかし、保守的なイデオロギーを持つからといって、即座に「在日特権」を受容するわけではない。排外主義運動の提示する「在日特権」フレームが、なぜ説得力があるものと捉えられたのか、第 4 章で詳述する。それに加えて、「保守的な者」と「在日特権」なるものの遭遇を演出する仕掛け——インターネットによる資源動員についても、第 5 章で分析したい。こうした手順を踏むことにより、「疎外された者の不満・不安の爆発」という単純な議論では理解できない、排外主義運動のさまざまな側面を明らかにできるだろう。

### 第三章 活動家の政治的社会化とイデオロギー形成

#### 1 活動家の多様性とマイクロ動員過程

社会運動研究でマイクロ動員論と呼ばれる領域は、個人が運動参加に至るメカニズムの解明を目的としている。だが、現実には動員に至る以前にイデオロギーの形成過程が存在しており、これは政治的社会化（政治意識の形成過程）という概念で捉えられてきた<sup>1</sup>。本章では、単に運動参加の経緯だけでなく、「保守運動」に参加するイデオロギーの形成過程も視野に収めるため、活動家のライフヒストリーを分析する<sup>2</sup>。ライフヒストリーについては補遺で詳述するが、これは特に過激な運動に参加する動機の解明に適した方法であり、社会化が政治行動に与える影響の解明にも用いられてきた（della Porta 1992）。

活動家のライフヒストリーに関する分析は、ケニストン（Keniston 1968）の『ヤング・ラディカルズ』を嚆矢とする。ケニストンが学生運動を対象としたように、ラディカル＝左派だったわけだが、1990年代に入ると極右活動家に関するライフヒストリー分析が増加した（Blee 1996, 2002; Fangen 1999; Klandermans and Mayer 2006a; Linden and Klandermans 2007）。こうした研究の背後には、活動家は無からいきなり生まれるのではなく、それまで生きてきた過程、運動に出会う経緯、運動に共感する過程が重要という認識がある。かつてオルソン（Olson 1965）は、運動参加は運動にただ乗りする誘惑を乗り越えて初めて成立すると述べ、ただ乗りしない要因の解明に一書を費やした。理論的前提は異なるものの、運動参加を自動的なものと捉えるのではなく、多くの過程を経なければならないとする点で、ライフヒストリー研究の認識と共通している。

個人の運動参加はそんなに簡単には起こらない——その過程を示したのが図3-1であり、本章から第5章までの内容と相互の関連を表している。実際に排外主義運動との接点が生じるのは第4章以降であり、本章ではまだ排外主義運動は登場しない。政治的社会化の過程において、イデオロギー一般と外国人に対する態度がどのように形成されたのか、何が影響を及ぼしているのかをみていく。これが運動の出会った際の反応を規定することになるからである。また、政治的社会化を未青年期に限定する研究も多いものの（岡村、1971）、本章では「排外主義運動と接点を持つ以前」を分析対象とする。後にみるように、大人になってからも大きな事件やふとしたきっかけにより、それまでのイデオロギーが大きく変わる事例があることによる。

---

<sup>1</sup> 政治的社会化に関する研究は1950～60年代に盛んになされたが、その後は下火になっている（Flanagan and Sherrod 1998）。その意味で、本章では「古い」概念を持ち込んだことになるが、本論文のみならず2000年代の若者の社会運動を対象とする分析にも有益だと考える。90年代の長期不況下で生まれたロス・ジェネレーションが、社会運動の担い手になるという議論に対して、それが具体的に社会運動に結びつくメカニズムを検証する試みはない。キーワードを無批判に用いるのではなく、政治的社会化のコーホート効果を検証したうえで、ロス・ジェネレーション概念の有用性を評価するのが研究者の本来の仕事だろう。

<sup>2</sup> 本文中の登場人物にあてられた記号（在特会にはアルファベット、それ以外にはギリシャ文字）は、聞き取り記録のまとめと対応している。文中では年代と性別しか示していないが、より詳しい情報は樋口（2012a-x, 2013a-j）で提示している。

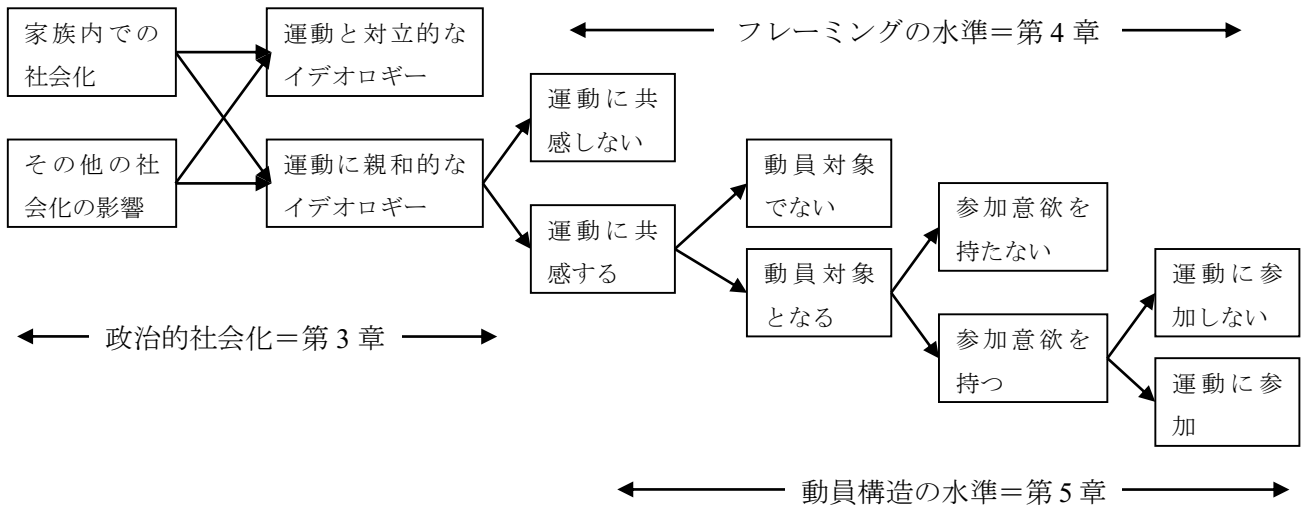


図3-1 運動参加への段階

出典：Klandermans (1997: 23)と McAdam (1986: 69)を合併して作成

## 2 イデオロギーと政治的社会化——緩やかな説明変数と被説明変数

前章では、排外主義運動の活動家たちは政治的に保守的な者が多いと述べた。もっとも、保守といっても実際にはかなりの幅があるし、そうしたイデオロギーが形成される経緯も人によって異なる。そこで本章では、ライフヒストリーの多様性を損ねない形で活動家のイデオロギー形成過程を分析したい。ここでいうイデオロギーとは、政治的立場において革新—保守—右翼に至るスペクトラム上の位置、および排外志向の強さを指す。ここでいう保守とは、戦後日本の政治的対立軸となってきた外交・防衛を中心とする立場の相違である（大嶽、1996）。ただし、排外主義運動の分析に際しては、右端が主流派保守で終わるのは不十分であり、より強硬な立場を指す右翼という類型も設けた。さらに、政治的無関心層も少数ながら存在したので、スペクトラムの外側に位置づけることとした。それと排外志向が明示的であったか否かで組み合わせた類型が表3-1であり、それぞれに該当する人数も示してある。

表3-1 排外主義運動に関わる以前のイデオロギー

		政治的立場			
		無関心	革新→保守/右翼	保守	右翼
排外志向	明示的	0名	0名	排外主義者 接合=3名	0名
	非明示的	ノンポリ 覚醒=3名	転向者 翻身=3名	草の根保守 拡張=18名	右翼 増幅=7名

注：類型の名称に関しては以下を参照した（Berger and Luckmann 1966; Blee 1996; Snow et al. 1986）。

まず、現在の排外主義運動のイデオロギー——右翼で明示的な排外志向——を、運動との



接触以前から持っていた者は1人もいなかった。ただし、在特会以外の活動家の多くは、排外主義運動に関わる以前から右翼的なイデオロギーを持っており、右翼に該当する者は34名中7名にのぼる。以前から「外国人問題」に関心があったわけではないが、右翼イデオロギーを「増幅」させる形で排外主義者になったことになる。もっとも多いのは、保守的だが排外志向を明示的に持っていたわけではない草の根保守で、18名と過半数に達していた。彼ら彼女らは、自らの保守志向を「拡張」させる形で右翼排外主義者になったわけである。さらに保守に属する者のなかには、明示的な排外主義者が3名いた。彼らは、その排外志向を運動と「接合」させることで活動家になる。だが、明示的な排外志向を持つのはこの3名のみであり、単に保守的・右翼的だった者が大多数というのが実像だろう。それ以外では、革新から保守ないし右翼に宗旨替えした転向者が3名で、「翻身」過程を本章でみることとなる。無関心だったノンポリの3名は、排外主義運動とイデオロギー的な親和性もなかったし、関心もなかったのが、インターネットを介して排外主義者へと「覚醒」した。

本章の分析では過程に重点が置かれるため、明確な説明変数と被説明変数を設定するわけではない。が、表3-1で示したイデオロギーを緩やかな被説明変数として設定し、緩やかな説明変数を設けて何がイデオロギー形成に影響を及ぼしたのかを明らかにする。そこで用いられる政治的社会化という概念は、政治意識は社会に存在するイデオロギーを内面化することで形成されるという前提をとる。内面化を媒介するものはさまざまであるが、ここでは「政治的事件」と「集団」に着目し、緩やかな説明変数とする。政治的事件とは、個人のイデオロギー形成に大きな影響を及ぼす出来事であり、排外主義運動でいえば拉致問題がその典型となるだろう<sup>3</sup>。集団としては、直井(1972a, 1972b)が家族、学校、職場の影響を挙げており、それぞれについて関連する場合に言及していくこととする。

### 3 政治的社会化の過程

本節では、覚醒、翻身、接合、拡張、増幅という5つの類型ごとに、いかにしてそこに至ったのかをみていく。その際、政治的事件と集団の影響については適宜小見出しをつけていくが、先行研究の知見とやや異なっていたのは家族の影響だった。これまで、両親との関係は活動家の政治的社会化にとって決定的に重要とされてきた(Demerath III, Marwell and Aiken 1971; Keniston 1968; McAdam 1988b)。これは、西欧における極右活動家の研究でも指摘されており、活動家のなかには極右的な両親のもとで育った者が多いという(Klandermans and Mayer 2006a)<sup>4</sup>。

排外主義運動の活動家にも家族の影響について言及する者はいたが、それは先行研究が示唆するより少数であり、しかも両親よりは祖父母に言及する頻度の方が高かった。両親から保守的・排外的な態度を引き継ぐ例は少ない。リベラルな両親に反発するようなエディプス的反抗(Keniston 1971=1977: 304)は、1名について認められる程度であり、要するに政治的社会化において家族が意味ある他者たりえていない。聞き取り中に水を向けても、「(親の影響は)まったくないですね、うちは。(政治の話は)親とはできないですね」(P氏、在

<sup>3</sup> 世代やコーホートという観点からみると、特定の政治的事件を経験した年齢が重要になるが(Braungart and Braungart 1986)、意味があるといえるほどのデータは得られなかった。

<sup>4</sup> 両親の影響は権威主義一般についても該当する(Adorno et al. 1950=1980: 3章)。

特会、20代女性)といった答えしか返ってこないのがほとんどだった。では、活動家たちはどのようにして政治的社会化の過程を歩んだのか、具体的にみていくことにしよう。

### (1) 覚醒——ノンポリから活動家へ

覚醒とは、「政治」「外国人」の双方に対して関心がなかったノンポリが、何らかのきっかけで「目覚めた」場合を指す。前章でふれたように、もともと保守的な立場だった者が多いため、これに該当するのは3名しかいない。そのうちの1人たるKは、コンピューター専門学校を中退したが、現在はシステムエンジニアとして働くかたわら、在特会の幹部として重要な役割を担っている。彼は、下記のように在特会と接点を持つまで選挙にまったく行っていなかった。

ノンポリとか言われる感じですかね。まったく関心がなかったの。まったく(左右)どちらでもなかったですね。(選挙には)全然行ってないんです。…本当にまったく興味がなかったんですよ。選挙そのものにも興味を持たなくて、選挙自体がそんなに重要とかまったく考えてなかったんです、当時は。(政治の話をするこも)まったくなかったですね。自分の知り合いとか友達も政治の話をする人は、まずいなかったんで。(K氏、在特会、40代男性)

彼は、「地元に住んでれば韓国人というか朝鮮人の評判の悪さは子どもの頃から聞かされているんで、その話だけは昔から聞いてますね」とも述べているが、在日コリアンに対する偏見が「覚醒」の原因になったわけではない<sup>5</sup>。ただし、排外主義運動を受容するような素地がなかったわけではなく、「歴史問題」については弱いながらも反発を覚えていた。以下のように、「アジアに対して」「従軍慰安婦」という文化的トラウマ (Alexander et al. 2004) を否認しており、これが在特会との接点を生み出している。

昔からアジアに対して日本はひどいことをしたって聞いてますし、社会人になってから従軍慰安婦問題も聞いてますけど、その時も「そんなのいちいち問題にすべきじゃないよ」というくらいで。当時は外国人問題にもまったく興味がなかったですね。(K氏、在特会、40代男性)

実際、Kが在特会に行き着く手前の行為——インターネットでの関連事項の検索を始めるきっかけは、

上海の大規模なデモですね<sup>6</sup>。あのデモで昔から日本は中国や朝鮮に対してひどいことをしてきたんで、嫌われているって話ずっと聞いてたんですよ。当時の僕としては、当時戦争時代だったんでそんなの別に当たり前のことじゃないか、その程度しか考えてなかったんですよ。でも、あれだけの大規模なデモが始まったんで、当時の日本はどれだけひどいことをしたんだろ

<sup>5</sup> ただし彼の場合、「より身近な問題として、やはり在日韓国人・朝鮮人という問題が大きいと思うんです。…直接的な被害は、在日の韓国人・朝鮮人、または中国人がいますので」とも述べており、青少年期の偏見が「身近な問題」への関心に結びついているという解釈も可能だろう。

<sup>6</sup> 2005年4月に中国の主要都市で発生した反日デモを指している。これについては、さしあたり溝口(2005)、坂元(2005)を参照。

うと思って、調べ始めたんですよ。ところがほとんどそういう事実はなかったというのがわかって、今に行き着いた、たどりついたんですね。(K氏、在特会、40代男性)

Kの当初の認識は、「ひどいこと」を「戦争時代」の産物だから「当たり前」とは思うものの、賛美するわけではなかったから歴史修正主義とまではいえない。それが、「調べ始めた」ら「そういう事実はなかった」として、インターネットの情報から歴史修正主義者になっている。「覚醒」した今となっては、棄権していたことを「後悔している」と述べ、基本的には自民党に投票するようになったという。Kの実家は、「かなり前には」一般紙を購読していたが、父親が読むスポーツ新聞だけになり、父の死後は新聞をとらなくなった。そうした文化的環境で育っていることが、「ノンポリ」だった背景の1つといえるだろう。

もう1人のGも「高卒で普通の大学とか行ってないんで」と自己定義し、政治に対しても無関心だった。ただし、Kと同様に「20代後半からいろいろ引っかかる、…たとえば伊藤博文を暗殺した人とか。…ネットで調べると『あれ、何か韓国人っぽいやつが暗殺したぞ』とあったんで」と、歴史問題には散発的に関心を寄せていた。その意味で、ノンポリだった活動家であっても排外主義運動との接点がないわけではない。KとGが歴史問題を通じてそうだったように、排外主義へと至る細い糸はつかんでいたのである。

## (2) 翻身——転向者の改宗経験

もともと革新を自認していた者が転向するとき、その変化の度合いはノンポリをはるかにしのぐものとなる。これはバーガー＝Luckmannのいう「翻身」に近いだろう。翻身により、「以前の経歴は、典型的には、新しい正当化装置のなかで戦略的地位を占める否定的範疇のもとに包摂されることによって、全面的に抹消される」(Berger and Luckmann 1966=1977: 269)。転向者もノンポリ同様に少数で3名にとどまるが、過去の自分からの180度の転回を伴うことが語りにも現われる。Aは全体のなかでも原理主義的といってよい強硬派だが、30代までは左派政党に投票していた。

恥ずかしながらね、あの当時ね、当時は社会党とかに入れてたんですね。今から思うとね、本当にタイムマシンに乗ってその自分を殴りたいですね。ほんつとに。共産党にも入れていたことがありますからね。東京都、石原知事ですけど、石原知事に投票したのは2期目からですね。1期目は違う人に入れましたからね。拉致問題の後ですね、自民党に投票するようになったのは、それまではダメでしたね。リベラルはいいことだと思って左系の議員とかに入れてましたね。(A氏、在特会、40代男性)

リベラルはいいことと思っていたAは、なぜ「自分を殴りたい」と言うまでの翻身を遂げるのか。「決定的だったのは…拉致が発覚したあの年ですね。あの年に自分のなかではっきりとあの舵が違う方向にガチャッとされたのを感じましたね」。拉致問題をきっかけとする者は4名おり、排外主義者を増やす社会的な要因だったことは間違いない。だが、Aのような極端な変化を遂げるには事件当時のインパクトだけでは不十分で、翻身＝社会化をやり直すための環境が必要になる。翻身の典型は改宗であり、宗教共同体は「新しい現実に必要な不可欠な妥当性構造を提供する」(Berger and Luckmann 1966=1977: 266)がゆえに、改宗

者としての自己を確立できる。同様に翻身を経験したC（在特会、30代男性）は、「γさんとほとんど一緒に参加して…『お前気持悪いな』って言われるくらい」ベテラン活動家のγに同一化し、自己を形成した。

Aにはそうした「意味ある他者」がいたわけではない。だが、拉致問題に関する報道の洪水とその後の変化は、「以前の自分がいた日本社会」から自らを隔離する効果をもたらしたのではないか。拉致被害者を抱えるのは韓国・中国も同様だが、北朝鮮に対する関心の焦点は核問題にあった。それに対して、小泉訪朝以降の日本の拉致問題に対する執着ぶりは際立っている（白井、2013）<sup>7</sup>。バーガー＝luckマンは、長期的な変化をもたらす制度の典型を宗教とする一方で、短期的に激しい変化をもたらす制度として病院と軍隊を挙げた（Berger and Luckmann 1966=1977:274）。これらはゴフマンのいう全制的施設（Goffman 1961）の典型であり、そうした環境でなければ翻身は生じにくいということでもある。つまりAの翻身を支えていたのは、病院や軍隊のような全制的施設と化していたともいえる、小泉訪朝後の日本であったといえるだろう。

さらに、翻身は過去のものの方の全面的な否定を伴うだけに、Aは北朝鮮だけでなく、「戦勝国」との関係の見直し——「戦後レジーム」の全面的な否定にまで至っている。

今までヨイショしてきた北朝鮮とか、中共とか、ああいう国がいかにとんでもない国か、北朝鮮を1つのモデルとしてみて社会主義国家とはどういうものか、ということですね。要するに日本は戦勝国に囲まれていて、事実上やりたい放題されている状態なんですけど、まあ戦勝国側の理屈がいかにてたらめか——でたらめといたらあれですけど——事実との乖離がすごいということですね。そういう感じで自分のなかでガチャっと、本当にこう音が聞こえたわけではないんですけどね、確かにバーッと切られる感じはありましたね。（A氏、在特会、40代男性）

Aとは異なり家族の影響が色濃く表れているのは、数少ない女性たるXだった。彼女は、下記のように父親が地方公務員で自治労の組合員という家庭で育ち、20代の前半には親の意向を受けて社会党に投票していた。20代後半には、勤務先の同盟系労組の専従となり、男女共同参画を推進する活動に従事していた。この時は、組合の支持する候補を選挙で応援していたという。

親がね——うちは市役所なんですけど——公務員だったんで。「自民党はお金持ちのための政党だから、そうじゃないところに入れなさい」。「ああそうなんだ、ふーん」という感じです。そうなのかと。自民党は金持ちのためにしか仕事をしない人だった、と私は思っていた。知らないから、勉強してないから。親が自治労ですからね、自治労が応援しているところに（選挙では）入れます。（X氏、在特会、40代女性）

同盟系の労働組合なので、政治的に左派とはいえない。だが、Xが専従の時にストライキ

---

<sup>7</sup> その評価は別として、小泉訪朝が大きな変化をもたらしたことは、右派の中西（2007）と左派の和田（2004）の共通認識となっている。

を打つなど、「左翼的な匂い」を彼女自身は感じていた。それゆえ、「自分の中で日本が好きだということをかっちり持ってましたけど、外には口にできない」ストレスがたまる状況が続いていたが、この時点ではそれほど強いものはなかった。そうした彼女の違和感を明示化するきっかけを提供したのは、「自分を変えたい」と入った自己啓発の団体だった。そこで彼女は「正しく導いてもらった」と感じ、「しっくり来るという感覚」を得ることができたという。ここでいう「しっくり来るという感覚」は、それまで抑圧していた「日本の文化と日本語がすごく大好き」という感情を肯定したことによる。

しかしそれは、彼女にとって家族や職場という自分が属してきた世界とは相容れないものだった。そうした職場で、単に与えられた仕事をこなすだけならば、それほど問題は生じなかっただろう。以下のようにXは、組合専従として他の組合員に男女差別の撤廃を訴える側であり、宗旨替えした後では仕事が意に沿わないものとなった。

男女共同参画云々とかが、あたしに合わないということですね。説明ができないんですよ、組合員に。ああじゃこうじゃと言って。もっともらしいことがいえなくて。自分が大事なことじゃなくて、それを人に説明するほどの説得力がなくなってきたんですよ。それで辛くなってしまって。(X氏、在特会、40代女性)

その結果、彼女は組合の専従だけでなく企業自体もやめてしまい、今までとは違った環境に身を置くべく遠方の地に引っ越しまでしている。これは「翻身」の一種であるが、「社会的なことに意識持たなきゃいけないという気持ち」自体は持続している。変化したのは、「ベクトルがあっちに向いたのかこっちに向いたのか、ということだと思ってもらえばいいです」。これは、労組専従というこれまでの職業生活のあり方の否定であるとともに、両親からの自立をも意味する。組合をやめたのとは異なり、両親との関係が断絶したわけではない、在特会での活動についても話すような関係を維持している。

母、父にとっては過激な行動だっという風に見える、理解をされているみたいです。父は口聞かないです。話しません。母には女子同士でお互いこうあるじゃないですか、ああいう感覚で日々のドラマの話だったりとか、やりとりの中でちょこちょこしゃべって。父とは改まってしまって。(X氏、在特会、40代女性)

父親の価値観とは逆方向に翻身したとはいえ、それが衝突の原因になったりするわけではない。それまでそうだったように、Xにとって父親は敬して遠ざける存在であり、イデオロギーにおける父親の影響を脱しても、相互にふれられないような関係にある。こうした父娘関係は日本では珍しくないだろうが、これは前述したエディプスの反抗の一種だろう。それが彼女の振幅を大きくし、過激なものに対する抵抗感を弱めたと考えられる。

### (3) 接合——排外主義者の生育環境

排外主義運動の活動家のほとんどは、当初から明示的な排外主義者だったわけではない。前掲表3-1が示すように、運動に加わる以前から「外国人に対するネガティブな関心」を持っていたのは3名しかいなかった。そのうちの1名たるHは、親が神職である保守的な

家で育ち、家庭内で以下のような排外的意識を植え付けられている。

外国人問題に関心はあったんです。実を言うと僕、〇〇という地区で朝鮮人部落というのがあるんですね。そういうところがあって、親から朝鮮人とは付き合うな、あいつらと関わると危ないぞという教育があるんですよ、僕らの世代って。だから朝鮮人は敵だっていう、極論でいうとそういう教えがあって。(H氏、在特会、30代男性)

Hは有名国立大学に入学するが、そこで学長が在日コリアンを擁護する発言をするので、「抵抗運動みたいな」ものとして在日コリアンを攻撃するようなサークルに入っていたという。その後も同様のサークル活動を続けており、排外主義運動への加入はその延長にあった。Hは2013年になって在特会をやめているが、宗旨替えしたわけではなくより効果的な運動をするべく他の団体に移ったという。Hにとって必要なのは、翻身でみられるような新たな現実の受容ではなく、自らの排外志向とうまく接合するような組織であった。Hは学生時代から数えて4つの団体を渡り歩いてきたが、これも自分に合った組織を求めてさまようがゆえのことである<sup>8</sup>。

ただし、こうした形で在日コリアンに対する差別意識を語り、それを実践してきたのはHだけだった。他の2人は、ニューカマーの増加に伴い地域や職場で外国人と接点を持つようになり、それが排外主義に結びついている。ηは、関西の工場地帯に住んでいたため在日コリアンと身近に接していたが、彼が排外感情を抱いたのはニューカマー外国人に対してだった。

ちょうどバブルの頃に——私は中学生くらいなんですけど——近所の工場でイラン人を雇ったとか、中国人を雇ったとかそういう話がありまして。…非常に外国人は扱いにくい、なかなか一筋縄ではいかない。…社長のいうことは聞くけど他の幹部は無視して、他の社員とトラブルを起こすような、そういう事例が——大人同士の会話であったんですけど。私も子供心でそういうのは話を聞いていまして、これはなかなか一筋縄ではいかないんだなと。…このまま国際化国際化といっただんどんどん無制限に増えてくると、これはちょっと大変なことになるんじゃないかな、というところから僕は関心を持ったわけですね。(η氏、在特会以外、30代男性)

これは移民の流入が排外主義を高めるという競合論の想定する状況だが、ηは周りの大人たちに影響を受けたわけではない。以下のように、学校や地域の大人たちは「むしろ外国人を差別しちゃいけない」という風潮だった。さらに、当時はインターネットもなかったとわざわざ言及している。この当時のηのような志向の持ち主は、認識を共有できる生身の他者に会うこともできず、ネットで情報収集や「同志」を見出すこともできず、1人で忸怩たる思いを抱えるしかなかった。これは親の教育という背景があったHと大きく違う点であ

---

<sup>8</sup> こうした活動家のことを、克蘭ダーマンズらは「放浪者」と呼んでいるが(Linden and Klandermans 2007)、本論文の調査対象者の中では2名しかいなかった。これは排外主義運動の歴史の浅さにもよるだろう。

る。

当時は（排斥的な考えを持つ人は）まったくいなくて、むしろ外国人を差別しちゃいけないとかいうような風潮で。工場なんかでは逆に不法滞在者でも使っているくらいで、外国人を排斥しようとか、トラブルがあってもどうにかしようとか、そういう懸念がまったくないものだから、これはなかなか大変だなと。学校の教師も教えてくれない、地域の大人も教えてくれない、当時はまだインターネットもないと。（η氏、在特会以外、30代男性）

ηが他の者と違ったのは、中学時代の思いが一過性のもので終わるのではなく、高校を卒業して社会人になってからも持続していたことである。彼は、社会人になってから接合＝排外主義運動に加わる機会を得て活動家としての人生を歩むことになるが、その経緯については第5章で詳述する。ηは、「自民だとか当時の野党に対してもそんなあれ（思い）はなかった」が、「国を守る人に対するあこがれ」があった。それゆえ、「自衛隊の何かあるとか、自衛隊の車両が走っているとか、そういうものに対しては関心」をひかれていたという。これは保守支持のイデオロギーとなって持続し、それが彼の排外主義の種火を切らさなかった原因だと考えられる。

#### （4）拡張——草の根保守の多様なパターン

草の根保守に属する者は18名と過半数に達しており、もっとも典型的なパターンとなる。彼ら彼女らは、明示的に排外感情を抱いていたわけではなく、外国人との接点もない者が多い。保守的といっても極端なものではないから、排外主義運動に共鳴するには「保守」の部分を中心に拡張する必要がある。では、草の根保守はいかにして政治的社会化を経験し、それが排外主義運動と潜在的にどのような接点を持ったのか、検討していこう。

#### 都市と農村の草の根保守

まずは草の根保守のプロトタイプを2名——農村と都市のそれを——紹介したい。経理畑で働くサラリーマンたるBは、「元々はまったく新聞も読まなければ何も読まない、世の中のことにそもそも趣味的なこと以外に関心がない」という。大学に入ったのも取り柄がないから何となくという選択によっており、将来の希望もなかったので就職もなかなか決まらなかった。しかし、政治に対する関心はないといいつつも、以下のように典型的な草の根保守的投票行動を続けてきた。

選挙だけは絶対行ってましたね。やらなきゃいけないものだと思ってはいたんです。選挙権の行使というものは。…（投票先は）昔から自民党だったんですね。政党としては、そうですね。あの、実家のほうが農村部で場所的に保守的な層が厚いところで、というのを子どもの時からずっとそういうのを聞いていて、何となくそこで。自民党が保守政党とかうんぬんって、そういう発想自体がまずなかったです。（B氏、在特会、30代男性）

これだけなら、Bが排外主義者になる素地を見つけるのは難しい。その手がかりになるのは、幼少時からの経験に根ざした愛国心であり、飼育していた肉牛が食肉になること、それ

を自分も食べて生きていることを、「必然」という言葉で表している。

母方の実家が稲作農家で、肉牛を二頭飼っていて…肉牛ですから、2年たったらいなくなるわけですよ。…で、それを食っちゃったって気づいたのは小6の時。…なんで、今の僕って必然なんです。…そもそもこの国に生まれたのも、父ちゃん母ちゃんから生まれたのも、全部必然で偶然はないと思うんですよ。そう考えた時に、そもそもこの国を好きか嫌いかっていうのがたまにあるじゃないですか。あなたは日本が好きですかって、そもそもそういった問いがナンセンスだから。好きであれ嫌いであれこの国で生まれ育った以上、愛すしかないと思うんです。(B氏、在特会、30代男性)

かわいがっていた牛を食べるという矛盾に自分は立脚している、それを必然として受容することでBは自らが生きる根拠を見出している。それと同様に、日本で生まれ育ったことを必然とすることで、「愛すしかない」と結果的には素朴な現状肯定に行き着いている。それが「日本が嫌いだ嫌いだって壊している人間が嫌い」として拡張され、排外主義に結びつく<sup>9</sup>。

他方で、大都市郊外だが保守が強い地域で生まれ育ったEは、政治には関心がないが現行システムは支持するという、生活保守主義にもとづく典型的な自民支持層だった。彼女が選挙権を持ったのは中曽根内閣の時だったが、タカ派としての中曽根には関心がなくても、「適当に何かやってくれる」であろう55年体制下の自民党に投票している。

(政治に対する関心は)全然なかったです。昔は自民党政権でしたから、別に一般人は興味持たなくても上の人が適当に何かやってくれるだろうと。(選挙には)国民の義務ですから行ってました。全部行ってました。(投票先は)自民党でした。みんなが宮沢(喜一)はダメダメとっているけど、私からみるとまあまあよくやっているのかなと。まあ100点ではないけども。(E氏、在特会、40代女性)

とはいえ、彼女は55年体制が崩壊した際には新生・新進党と思われる政党に投票しており、堅い自民支持層だったわけではない。その後の政治の展開次第では、より浮動的な無党派となっていた可能性もある。また、Eはチーム関西のような乱暴な行動を嫌うなど、過激なものに対する抵抗感がある。にもかかわらず排外主義運動に関わるのは、やはり生活保守主義ゆえのことであった。

この国を元の90年代の日本に戻したいということじゃないかなと思います。80年代か90年代の。昔の自民党が政権を治めていた時代、何も考えないで普通に生活できる時代に戻すことかな。やっぱり女性っていうのは、今の生活を守りたいというのがあるんです。(E氏、在特会、40代女性)

---

<sup>9</sup> 日本で生まれ育ったという「必然」は、在日コリアンの大多数についても同様なのだが、活動家たちがそうしたことに思い至ることはない。この点については、第8章で詳述する。



1980年代に生じた保守回帰の背景として生活保守主義が指摘されてきたが、Eは80～90年代の「何も考えないで普通に生活できる時代」にノスタルジアを感じていた<sup>10</sup>。こうした都市部の草の根保守が排外主義に引き寄せられる素地はあり、この場合は「日本の没落に対するそこはかたない不安」が背景にあるとみてもよいだろう。だが、彼女のような生活保守主義にもとづく不安が背景にあるタイプは少数で、しかも排外主義運動のなかでは——あくまで相対的にだが——穏健派で常識的な部類に入る。

## 家族の影響

前述のように、家族の影響について言及する者は少数で、草の根保守ではさらに比率が低くなる。例外的なのはVであり、筆者が聞き取りした活動家のなかでも実直そうな雰囲気強く伝わるタイプだった。彼の実直さの少なくとも一部は、比較的好くみられる（極端ではない）保守的な大家族で育ち、以下にみるような保守的な祖父の影響を受けてきたことによるだろう。

僕らが小さい頃は、祭日には日の丸をじいちゃんが掲げたりとか。でも、中学になる頃にはもう掲げてなかったけど、幼稚園とか小学校低学年の時には家で日の丸掲げたりとかいうくらいきちっとして。で、政治に興味を持つというか、社会人としての最低（のこを）知らないかんとということで、ニュースは見なさい、毎日、新聞読みなさいとか。わからんところは聞いたらちゃんと教えてくれるし。…基本は自民ですね。うちのじいちゃん自体が自民党が好きだったんで、昔の話からいうと「自民党に入れとけば」というような考え方ですよ。安定政権を望むというか。（V氏、在特会、40代男性）

Vの祖父は、単に日の丸を掲げるという保守的な姿勢だけでなく、新聞を読むという社会性もしつけている。投票先も祖父の影響を受けて自民党であり、安定政権を望むという「システム・サポート」（田中愛治 1995, 1996）にもとづく草の根保守であった。それが排外主義と接点を持つ要素の1つが、戦前の状況に対する親族の話により培われた、歴史修正主義的な見方である<sup>11</sup>。

前の（戦争）体験の話とかいう部分で、（戦後教育に）疑問は昔から持ってたのはあるんです。じいちゃんとかから聞いた話とかと大分違うなど。で、うちの母も自分のじいちゃんは植民地——朝鮮半島に農園とか1つ持ってたんで、向こうに行っていたという話を母に聞きながら、なんか聞いているような話と大分違うなどというイメージはありました。そんなひどいことなんかしてないのに、という感じのイメージもありましたし。違うなっているのが——向こうの国に対してのイメージが。（V氏、在特会、40代男性）

<sup>10</sup> ここで彼女がいう90年代とは、政治的には55年体制が崩壊する以前の、生活実感としては長期不況に入る以前の日本を指していると思われる。

<sup>11</sup> 身近な親族の話を準拠点として、過去のファシズムや戦争責任を否定するのは、特に珍しいことではない（Dechezelles 2013）。

Vに特徴的なもう1つの要素として、幼少期の自衛隊体験を挙げることができるだろう。自衛隊に対するポジティブな見方は、軍事・国際情勢への関心を醸成した。青年期に入ると『SAPIO』を購読、落合信彦の書籍まで購入し、それが朝鮮総連への態度にまでつながっている。

家の近くに航空自衛隊の基地があるので、飛行機が好きだったので。小さい頃から航空祭って行って中に入れてもらって、戦闘機が飛んでというのを見てたので。…前から結構『SAPIO』とか読んでたんで。拉致の問題とかもかなり前から落合信彦とかあの人たちが書いてたので、横田めぐみさんの話とかは拉致が発覚する前から知ってたんで。…朝鮮人のそういう組織や団体とか（朝鮮総連のこと）があって、とかいうのもその時の本にも書いてあったし。拉致が発覚した後も朝鮮総連が残ってるというのも——漠然とそれは疑問に思ってたんですよ。何でなくなるんだらうな、とか。（V氏、在特会、40代男性）

自衛隊との接点がある者は日本社会では少数派だろうが、これはVが住む地域の特性によるものである。しかもVの家族は、地域にあって子どもが喜ぶものとして自衛隊祭りにも通っていた。歴史修正主義も親族からの影響であり、インターネットを介して受容したわけではない。つまり、彼が排外主義を受容する素地になったのは、親族や地域を媒介とした第一次的な社会化の過程であり、社会集団から遊離したネット右翼というイメージとは対極にある。こうしたタイプは、排外主義運動の活動家のなかで必ずしも多くはない。しかし、地方の保守的な環境のなかで「まっとう」に育ち、その実直さから「疑問」を持って運動に馳せ参じる者がいるから、在特会は過疎地域を含めて多くの都道府県に支部を設けられたとはいえるだろう<sup>12</sup>。

### 歴史修正主義

歴史修正主義者になる回路の1つは、前段でみたような家族（特に祖父母）の影響であった。それに加えて、学校教育への違和感が語られる比率の高さも特徴的で、これは大人が「自虐史観」として敵視するのは異なる水準にある、子どもとしての反発であった。これは家族の影響によるのでもなく、自分なりに歴史の本などを読んで知識にもとづく反駁である。インターネットが普及してからは、「総合学習とかあって、パソコン活用したりとか」（U氏、在特会、20代男性）する過程で歴史修正主義のホームページに行き当たるケースも多いと思われる。Lの場合、戦史に対する関心を子どもの頃から持っており、関連する書籍で読んだ内容と学校教育との齟齬から不信感を持っていた。もっともそれは、Lのように「日本がアメリカ相手に侵略」など教育内容の誤った理解にもとづくことが珍しくないのだが。

自虐史観に対して僕自身、懐疑的な考え方を持っていました。例えば、歴史教育で日本は侵略したと。その辺（の時代）は僕もずっと好きだったんで、「そんなわけないだろ」ってわかっ

<sup>12</sup> こうした軍事施設に対する嫌悪感が強い沖縄では、在特会の支部ができないばかりか、在特会の会員比率が著しく低い。仮に社会経済的な要因だけで排外主義運動への参加が決まるのであれば、若年層失業率がとりわけ高い沖縄で会員数が多くなるはずである。その意味で、政治文化的な要因を議論に入れる必要性を沖縄の事例は示唆している。

ていたんですよ。僕自身、ちょっと興味があったので、戦争の本とかあったんですよ。純粋に日本がアメリカ相手に侵略なんか企てるはずがないと。…戦争ということに関して若干専門的な勉強したということで、中学生高校生が学校で教わるような薄っぺらい、あんなのは出鱈目というのは思っていましたね。(L氏、在特会、40代男性)

女性幹部の1人だったPも、幼少の頃から過去の戦争に関わる報道や学校教育に疑問を抱いていた。Pは学校での成績も芳しくない部類に入っていたが、歴史には強い関心を持ち、教科書の細部の記述に至るまで覚えていた。

幼稚園ぐらいから結構興味があったんですよ、戦争問題とか。8月になると、戦争特集とかテレビでやりますよね。あれみて、何でこんなに日本が悪い悪いといわれたいけないのかという疑問があったので、誰に教えられたわけではないですけど、やっぱり右に寄っていきますよね。大きくなると、学校で教えられたこと以外に自分でも調べたりとかして、「ああ、事実と違うわ」って。(P氏、在特会、20代女性)

Pによれば、「どうにもね、日本は悪かったんだよっていう教育ばかりを受けると、逆にちょっと反発したくもなるんですよ」。そこでシンボルとされるのは、「慰安婦」問題であった。「慰安婦」問題への関心が排外主義に至る源流だとする活動家は、Pの他にも複数いた。これは、歴史修正主義全体にとっての主要な攻撃目標となっており、それをなぞったにすぎない部分もある。ただしそれだけでなく、政治過程において韓国政府と韓国人と在日コリアンが重なる場所に「慰安婦」問題があることが<sup>13</sup>、「慰安婦」への関心→排外主義という回路を形成している。

私らも学校で、日本軍は朝鮮人の女の人を無理やり慰安婦にして、むちゃくちゃにしたという教育をずっと受けてきたんで、実際これは本当かな？という単純な疑問から興味湧いてきていたんですよ。で、今でも慰安婦の問題、左側の人らは補償しろとぎゃーぎゃー言ってますんで、事実と異なるのであれば、こっちも声出して反論しなきゃと思いますし。(P氏、在特会、20代女性)

Pは高校卒業後も歴史関係の書籍を読み続け、それが選挙への積極的参加と「とりあえず自民党」という保守支持に結びついている。彼女の場合、未成年の頃は単に歴史への関心にとどまっていたのが、成人してからは「国の将来」を考えて投票するといった具合に、年齢相応の発達を遂げてきた。それからミクシィの保守系コミュニティに加入し、さらに在特会の幹部として街頭に立つようになるが、これはそれまでの政治的社会化の自然な帰結ともいえる。

二十歳から選挙権もらいますよね。そこからやっぱり、自然と(政治に)眼を向けるようにな

---

<sup>13</sup> 「慰安婦」問題に対する在日コリアン女性の活動については、さしあたり金富子(2011)を参照。

りますね。それ以前は、パッパラパーですよ。全然、ほとんど興味がないんです。新聞なんかも三面記事くらいしか読まないし、テレビ欄とか、そうなんです。でも選挙権、二十歳超えたらもらえるというんで、私も自分の1票は国の将来に関わってくるよと思うと、責任感じますんで。…投票先は、とりあえずまあ自民党ですね。(P氏、在特会、20代女性)

Pはホステスとして働いていたが、これまでの記述をみる限り、彼女の職業階層の状況と在特会への参加を結びつけるのは難しい。ミクシィのようなインターネット上のコミュニティが、彼女の政治への関心やイデオロギーを醸成する役割を果たしていたわけで、動員構造に目を向けるべきだろう。

### 重大事件

元々保守的だったのが、特定の「事件」を契機として排外的な関心も持つようになったのも、典型的なパターンの1つといえる。「事件」とは、ネット右翼しか関心を持たないようなマイナーなものから、尖閣諸島での漁船衝突のようなトップニュースまで多岐に亘る。また、『マンガ嫌韓流』の第1巻の冒頭が2002年のサッカーワールドカップから始まっているように<sup>14</sup>、スポーツが排外主義の導入口になることは——第2章でふれたフーリガンからもわかるように——珍しくない。ワールドカップに加えてWBC（ワールドベースボールクラシック）でも同様の経験をしたのが、在特会最古参の幹部の1人だったSの事例である。Sは幼少の頃から野球チームに入っており、ロンドンに短期留学した妹に触発され、野球の本場たる米国にあこがれて隣国のカナダにワーキングホリデービザで滞在していた<sup>15</sup>。

WBCの時に二次リーグで韓国とやって、日本が負けて、その時に韓国の選手団がマウンドに旗刺したって事件覚えてないですか。そういった事件があったんですね。先ほど申し上げた通り、グランドっていうのは野球をやる人間にとってはこれ以上神聖なところに、ましてや野球のマウンドっていうのはその中でもさらに上位、それこそ何ていうんだろうな、感覚的にはそれこそキリストだとかマリアだとかに近いくらい神聖なものなんです。マウンドっていうのは。それに対して旗を刺すとは何事だっていう怒りがこみあげてきて。そこからですね、本格的に（嫌韓に）なったのは。(S氏、在特会、30代男性)

だが、当然のこととはいえマスメディアを騒がすような大きな事件を挙げる者のほうが多い。Jは、外国語学部で学んで外国人と接する機会も多く、「私は決して——断っておきますが、決して排外主義ではないです」と聞き取りの最初の方に述べている。そうした彼が排外主義運動に関わるようになる根は、まず政治的な保守主義にある。以下でみるように、投票行動としては消極的自民党支持になるが、2011年時点でも「反共」という言葉を用いている。

<sup>14</sup> この点については、ファン（2003）、黒田（2003）を参照。

<sup>15</sup> 米国とはワーキングホリデーの協定を結んでいないため、観戦できる距離にあるカナダでのワーキングホリデーを選択したという。彼はそのために元の仕事をやめ、長時間労働すれば短期で稼げるタクシー運転手になって貯金して渡加している。

(投票先は) 自民党でしょうか、やっぱり。…民主党もですね、一見旧自民党の人が多いけど、旧社会党の間も多いじゃないですか。…やっぱ反共ってのがあるんですよ。共産党、共産主義が嫌いとか、社会主義が嫌いとか、やっぱりあるんで。どうしても社会党とか共産党に入れるのは抵抗があるんで。…消極的な理由でやっぱりどうしても自民を選んでしまうという感じでしょうかね。(J氏、在特会、40代男性)

Jは天安門事件で中国が嫌いになり、「毒入りギョウザとか、北京オリンピックの時の長野の暴動事件」で信用できないという感情が強まったと述べる。そして2010年9月に尖閣沖で生じた中国漁船と巡視船との衝突が、決定的な事件となった。ただし、そこでは日本政府の対応を問題視しており、それから彼は弱腰に映るマスメディアに対する不信感を強め、インターネットに頼るようになっていった。

(活動につながった) 決定的な出来事は尖閣ですよ。中国がああいうことをする国だというのはわかっていたけど、中国の行為よりも日本の政府の対応の方に怒ってたんですよ。(J氏、在特会、40代男性)

こうしてみると、Jの事例はネット右翼になっていく典型例のようにみえるが、その素地はもっと以前からあった。Jは、「ソ連も嫌い」というように社会主義国に対する嫌悪感を抱き続けてきた。そうした古典的ともいえる反共意識が先にあり、その上に中国で起こる数々の「事件」があって嫌悪感が固定化していったとみたほうがよい。

#### (5) 増幅——右翼としての自己形成

ここで右翼と呼ぶ7名は、排外主義運動に関わる以前から自民党より「右」の立場にいた。そうした者の多くは、思春期から右翼的な方向へと自己形成を遂げてきた。未成年のうちから右翼的な思想にふれるには、「意味ある他者」からの導きが必要であり、それゆえ家族や学校といった政治的社会化を媒介する組織が一定の役割を果たしている。Dの場合、封建的な父親のもとで育ち、以下のように現代日本では稀ともいえる家庭教育を受けている。その結果、「陛下がこういうんだったら、それに従うのが当たり前だ」という意識を身につけたという。

とにかく小学校の時から、教育勅語とか暗記させられたんで。中1のときは、大東亜戦争終結の御詔勅も暗記させられたんで、今でも普通にいえますね。…「五内為ニ裂ク」——先帝陛下がおっしゃっている。要するに、内臓が張り裂けそうに辛いついていうようなことをいっていると、しゃべっているうちに段々泣きそうになってくるんですね。(D氏、在特会、30代男性)

Yは、前述のVと同様に祖父母のもとで育っており、それは歴史修正主義ではなく伝統的な保守主義を身につける素地となったという。右翼に分類された者の特徴は、「反日教育」に対する敵意といった反作用的なものではなく、天皇やそれに関わる右翼思想へのあこがれを持つことにある。

天皇陛下のお写真があって陛下に挨拶くらいしてけ、というじいちゃん、自然とこう…。学校でも教えられないじゃないですか。だから多分わかんなかった。天皇陛下の御存在自体考えたことなかったのに——じいちゃんに高校時代お世話になってから、天皇陛下というのは尊敬しなければいけないものなんだ、と毎日刷り込まれていったっていうのが土壌になっていると思いますね。(γ氏、在特会以外、40代男性)

大学に入学したγは、「朝まで生テレビ」に出演していた右翼活動家の野村秋介を知った。友人を介して彼の著作に接して感銘を受け野村事務所に連絡したところ、維新政党・新風を紹介され活動家生活に入ることとなる。それから組織としての体をなしていない新風を離れ、自前の活動を続けるうちに在特会と出会い、排外主義運動にも関わるようになっていく。

政治にはすごい関心があって、テレビを通じて「朝まで生テレビ」ってのが爆発ヒットしていました。あの時に野村秋介先生というのを知って、ああなんか右翼ってなんかわけわかんなかったのに、ちゃんと国のこととか国民のこととかを真剣に考えて、しかも行動する人が今の時代にもいるんだっていうのがわかって。…友達の間で政治の話をよくするように段々やってきて、それで多分右翼的な話をしてたんでしょ、きっと。恐らくね。で、友達が古本屋から「お前の好きそうな本を持ってきてやったぞ」ってくれたんです。それが野村先生の本で、そこからですね、一気にヒートアップしていったんです。(γ氏、在特会以外、40代男性)

20代のδの場合、朝日新聞を購読するような家だったため、親からは自由にしてよいといわれた代わりに、政治的・社会的という面で影響を受けたわけでもない。その代わりに、学校の教員を介して修正主義へと接している。

僕の担任の先生がいて、副担任の人がいるんですけど——担任の先生はもうバリバリの左翼の先生だったんですけど——ある日どうしてか風邪をこじらせて寝込んでしまって、学校に来ない日があったんですね。その時に副担任の若い女性の先生だったんですけど、その先生が放課後のホームルームで「担任のあの先生はいつもああいう風に言っていますけども、皆さん方は日本人であります。日本人としての誇りを持って、日本人としての誇り、日本人とは何なのか、そういうことを勉強するためにも、皆さんに読みやすいように小林よしのりさんの書いた『戦争論』というものがあります」そういう話をされたんですね。(δ氏、在特会以外、20代)

総合学習を通じて修正主義的な情報に接した者は2名いたが、δ以外に教員からの影響について言及する者はいなかった。また、上記の記述からわかるように、副担任の教員から直接的に政治的な影響を受けたわけではなく、情報の所在を示唆されたにすぎない。しかし、排外主義運動に参加する者のブログなどをみると、学校の教員や塾講師から影響を受けた若年層は決して少なくない。村井(1997a, 1997b)では、修正主義史観に共鳴する教員の状況が紹介されているが、そうした教員が修正主義——ひいては排外主義を受容する若年層を生み出しているとはいえる。

『戦争論』で探したら『ゴーマニズム宣言』が出てきて。…そうしたら欄外のところ（に）小さく文字で書いてあるじゃないですか、「謙虚かましてよかですか」って。あのところに「わしは右翼は嫌いじゃけど、右翼の赤尾敏や野村秋介がいていることもわかる」って書いてたんですよ。…それで図書館に引き返して、『日本人物人名事典』というこんな分厚い本があるんですよ。そのこんな分厚い本の中から、あ行から赤尾敏を探して、の行から野村秋介を探して、その名前をみて生涯の生き様をみて、「ああ、すごい生き方をしているな」。(δ氏、在特会以外、20代)

δの場合、好奇心が旺盛だったこともあり、くだんの教員の話から小林よしのりの漫画を読むようになった。そこから野村秋介の名前を知り、著作を読みふけるようになって国士舘大学に進学する。こうして右翼になった者の場合、「国を愛する」「国を守る」といった要素を増幅させれば、排外主義との距離は一気に縮小する。その意味で、排外主義者と並んでもっとも排外主義運動に抵抗なく参加できる層だといえるだろう。

#### 4 排外主義を受容する土壌

これまでの議論を経て確認しておかねばならないのは、活動家内部でも温度差があり、それは活動参加以前においてより大きいということである。欧州で極右運動に関わる少年たちは、ほとんどがそれ以前に逸脱的なサブカルチャーに関わっていたが (Fangen 1999: 370)、日本の場合にはそうではなかった。それが活動参加以前の多様性の 1 つの要因と考えられよう。加えて、政治的社会化の過程で排外主義を受容する素地が形成されているか否かは、活動家によってかなり異なる。当初から排外志向を明示的に持っていた者は 3 名にすぎず、しかも 2 名は「在日」ではなくニューカマーに対する排外意識だった。

ほとんどの者は、「外国人問題」ではなくそれ以外の回路から排外主義へと近づいていった。その有力な要素として、まずは歴史修正主義が挙げられる。歴史修正主義自体は 1950 年代から唱えられており、決して新しいものではない (グラック、2007)。また、特に第 2 次世界大戦をめぐる教科書の記述に嫌悪感を持つ者は、常に一定程度存在しただろう。しかし、修正主義的な情報が手軽に入手できる形で流通し始めたのは、90 年代になってからである。こうした「供給」側の変化により、歴史に対する違和感が個人のなかで言語化されない状態だったのが、与えられた言葉を操る修正主義者が生まれたと考えられる。現に、排外主義以前に修正主義を内面化していた者は、90 年代以降に自己形成期を送った世代であり、修正主義的な情報の助けにより政治的社会化を果している。あるいは、修正主義的な情報に接してから政治的社会化をやり直している (転向者 3 名のうち 2 名は、修正主義的なラジオ番組と『戦争論』を助けとして宗旨替えした)。

次に、政治的社会化の過程で周囲の他者から影響を受けたと自覚している者の比率は低く、受けたとしても両親ではなく祖父母であることが多い。これは、排外主義運動が保守主義に起因するというよりは、歴史修正主義の一変種であることに起因しているだろう。戦争に関する実体験にもとづいた修正主義は、年齢的にみて両親でなく祖父母から受け継がれるからである。ただし、西欧の極右研究では背景要因として極右的なミリューで育った者が多いことが挙げられているが (Klandermans and Mayer 2006a)、日本では全体としてそうであるとは言いがたい。もっとも、前掲表 3-1 で右翼に分類される者の場合、周囲 (家族や学校)

の影響を受けていることが多かった。これは、右翼的思考が大人になってから形成されるわけではないこと、子ども時代には「意味ある他者」の導きが必要であることを意味している。

こうした「意味ある他者」を挙げられないような形で政治的社会化を経験した者の場合、その機能的等価物となるのが何らかの「事件」であった。聞き取りで言及されたものを列挙すると、「拉致問題」「ワールドカップ」「WBC」「尖閣問題」「中国の反日デモ」をきっかけに、排外主義への傾斜が進んでいく。これは、ノンポリ、転向者、草の根保守のすべてについて生じており、活動家へと至る有力な回路となっている。しかもほぼ全員が、マスメディアを通じて初期の情報を知り、それからインターネットによりマスメディアに載らない情報を得るといった段階を経ていた。彼ら彼女らは、単にマスメディアをみて憤るだけならば活動家になることはなかったと思われる。

最後に、特に在特会の基盤は草の根保守にあるが、同じ類型のなかでもっとも多様性が大きかったのはここであった。これは単に人数の違いによるのではなく、前節の冒頭で紹介したように「農村の保守」と「都市の保守」の双方を抱えることによるだろう。また、ノンポリの一部と草の根保守の一部には、政治的社会化の過程で排外主義運動につながる要素を見出すのが難しい者がいた。つまり、運動と接点を持つ以前には相当の温度差があるのだが、これは排外主義運動に参加する段階でかなりの程度解消されている。では、それはいかにして解消されるのか、第4章では運動による働きかけの受容という観点から、第5章では排外主義に接する情報インフラという観点からアプローチしていきたい。



## 第四章 排外主義運動への誘引

### ——なぜ「在日特権」フレームに共鳴するのか——

#### 1 構築される不満——問題の所在

前章でみたのは、排外主義運動とイデオロギー的に親和性がないわけではないが、「外国人問題」に関心があるわけでもない潜在的活動家の状況だった。そうした保守的な市民は、いかにして排外主義運動へと誘引されるのか。本章で扱うのは、活動家たちが排外主義運動と出会い参加するまでに生じる認知過程であり、彼ら彼女らが何を思っていたのかを語りからあとづけていく。その際、社会運動研究におけるフレームという概念は、運動が個人に働きかけて個人が説得される過程を分析するべく提起されており、以下ではこれを用いて分析する<sup>1</sup>。フレームは記述的な概念であるという批判を提唱者ですら受け入れているが（Benford 1997）、本章の目的からすれば問題にはならない。次節以降で行いたいのは、「排外主義への誘引」すなわち潜在的な支持層が運動のフレームに共鳴する過程を記述し、その要因を解明することにあるからである<sup>2</sup>。

まず、議論の前提を確認しておこう。社会運動研究において資源動員論が登場した 1970 年代以降、不満・不安と運動参加の関係に疑問が付されてきた。不満は運動参加の必要条件ではあるが、動員構造や政治的機会といった他の要素と比較して 2 次的な重要性しか持たないというのが、その趣旨となる。これに対して、1980 年代になってから不満と運動参加の関係を取り上げる研究が、再び現れるようになる。そのうちもっともよく使われるのが、スノーらが定式化したフレームやフレーミング過程といった概念であり（Benford 1993a, 1993b; Gamson, Fireman and Rytina 1982; Snow et al. 1986; Snow and Benford 1988, 1992）、他にも類似した議論が数多く登場した（Gamson 1992; Klandermans 1992）<sup>3</sup>。本章の目的は、潜在的な支持層の認知過程を分析することにあるから、他の概念ではなくフレームを用いる。

こうした議論は、不満の構築を中心的な分析対象とする点で、古典的な社会運動論と相通するものがあるが、両者には 3 つの大きな相違がある。第 1 に、古典的な社会運動論は不満・不安を所与のものとして扱い、強い不満が自動的に社会運動を生み出すかのように議論していた（Snow et al. 1986: 465）。これに対して、新たな理論は不満が解釈によって作られるものとみなし（Codena-Roa 2002: 202）、特定の現実を不正義と解釈する過程に着目する。関連する例を挙げれば、在日コリアンに対する憎悪の言葉を発するデモという「客観的」な現実自体が、カウンター行動の動機となる不満を高めるわけではない。排外主義運動の言葉を「ヘイトスピーチ」と解釈して問題視し、社会的な不正義として積極的に取り上げる者がいて初めて、それを問題だとする社会運動が現れる<sup>4</sup>。逆にいえば、第 2 章でみたように「在

<sup>1</sup> フレーム分析の包括的な紹介としては、以下を参照（Benford and Snow 2000; Noakes and Johnston 2005）。極右運動に適用したのものとして、McVeigh, Myers and Sikkink（2004）がある。フレーム分析の特徴はその用途の広さであり、ある時代の社会運動全体が用いる「マスターフレーム」から、個々の社会運動組織によるフレームの構築、組織間／対抗運動とのフレーム競合など膨大な研究蓄積がある。本稿では、「個人の運動参加」をめぐるフレーム調整過程に限定して用いるが、これに関する経験的研究は意外なほど少なく、ほとんどが組織レベルの分析を行っている。本稿が直接参考にした個人レベルの経験的研究としては以下がある（Benford 1993a, 1993b; Johnston 1991, 1995）。

<sup>2</sup> ここでいう「在日特権」フレームとは、上記の 4 点以外にも在日コリアンが日本にとっての脅威であるという認知枠組みを指す。

<sup>3</sup> 一連の議論について詳しくは、本郷（2007）、川北（2004）を参照。

<sup>4</sup> 排外主義運動への対抗運動は、2009 年から行われていたが、それが広がって社会的な影響力を持ったとは言いがたい。それが劇的に変化したのは、2013 年 2 月からヘイトスピーチへの対抗を掲げた運動が新たに現れてからになる。それ以降、日本で初めてヘイトスピーチが現実的な課

日特権」に客観的な根拠がなくても、それが不正義だと叫ぶ運動が現れて納得する者が出れば動員が可能になる。社会運動は、こうした問題の「診断」と解決に向けた「予言」、そのために必要な行動への「動機付け」を行う中心的な主体と位置づけられる (Snow and Benford 1988)。

第2に、古典的な社会運動論とは異なり、孤立した個人が不満を募らせるとは考えない。資源動員論と同様に、潜在的な支持層は運動と何らかの形でつながっており、コミュニケーションの過程を経ることが前提となる。だが、資源動員論が既存の紐帯と運動参加の関係を機械的に考えていたのとは異なり、参加に至る過程の多様性を重視する (Snow et al. 1986: 467)。こうした視角は、排外主義運動が外からみると均質な集団として映るのに対して、実際はかなり多様であるという知見からしても重要だろう (Blee 2002: 4)。

第3に、古典的な社会運動論が非合理的な感情の爆発として運動参加を捉えていたのに対して、近年の議論は運動参加を非合理的で否定的な要素の現れとはみなさない。社会運動における感情の役割を強調する近年の議論も、感情をネガティブなものとしてではなく、むしろポジティブな人間性の発露と捉えている (Goodwin 2001; Goodwin, Jasper and Polletta 2001; Jasper 1997)。筆者は排外主義運動そのものは完全に否定するが、それに参加する者の動機がネガティブなものに凝り固まっているとはいえないと考える。序章において、排外主義運動は孤立した個人の非合理的な反応という見方を否定したのは、以上の3つの点で前提を見直した方が正確な分析ができると判断したからである。

## 2 運動と個人のフレーム調整

フレームとは、ゴフマンの用語で「解釈図式」を、フレーム調整とは、「個人と社会運動組織の解釈志向をつなげること」 (Snow et al. 1986: 464) を指す。運動は、イデオロギーをフレーム調整のための文化的資源として捉え (Snow and Benford 2000: 58)、既存のイデオロギーからフレームを作り出す。その上で、潜在的な支持層のイデオロギーと運動のフレーム間での調整がうまくできた場合、潜在的な支持層のイデオロギーはフレームと共鳴し、運動に参加しようという誘因が発生する。排外主義運動の場合、もっとも人口に膾炙した代表的なフレームは「在日特権」とみて間違いないだろう。組織名はしばしば運動のフレームを体現しており、序章でふれた「主権回復」「外国人犯罪追放」「排害」もその範疇に入る。このうち「外国人犯罪」は、90年代後半には問題化が進んで全国紙にも取り上げられるようになったが (第8章参照)、組織自体はごく小規模に留まっている。それとは対照的に「在日特権」という言葉は、新聞やテレビはおろか、右派論壇ですら認知されておらず、インターネット掲示板で生まれマンガで使われたに過ぎない (第6章参照)。にもかかわらず、多くの者が在特会に誘引されていった過程でいかなるフレーム調整が行われたのか。

スノーらは、フレーム調整の様式としてフレーム架橋 (bridging)、増幅 (amplification)、拡張 (extension)、転換 (transformation) の4類型を挙げている。が、これは論理的な根拠を持つ区分ではなく、経験的一般化の域を出ない。特に、フレーム増幅とフレーム拡張の区別は曖昧で彫琢の余地があるため、その後の研究の展開を踏まえて敷衍する形で類型を再構築しておこう。その際に注意すべきは、フレームは既存のイデオロギーに根ざしているが、イデオロギーにより決定されるわけでもイデオロギーと同型のものでもないということである (Snow and Benford 2000: 58)。この領域の研究に影響を与えたスウィドラー (Swidler 1986) の議論を借りるならば、運動はイデオロギーを道具一式 (tool kit) として用いてフレームを形成する。同様にフレーム調整の対象となる潜在的な支持者の側も、自らのイデオロギーをもとにフレームに共鳴する。

---

題となり、各新聞社の社説に取り上げられて立法上の課題にもなった。その意味で、反レイシズムの対抗運動は近年稀にみる成功例であり、今後のレイシズムへの対抗という意味でも運動論的な分析が必要だろう。

本章では運動のフレームと潜在的支持者のイデオロギーの関係を分析するが、両者の一致度に応じてフレーム調整には一定のバリエーションが生じる。前章でみた潜在的支持者のイデオロギーを参照しつつ、イデオロギーとフレームの関係から類型を構築していく。これを行ったのが図4-1であり、まず潜在的支持者のイデオロギーと運動のフレームの親和性によって分岐が生じる。親和性が高い方が「在日特権」フレームに共鳴しやすいと考えられるが、両者の接点は顕在的な場合と潜在的な場合がある。運動との接触以前から、「在日特権」と結びつくようなイデオロギー的関心があったものを、ここでは「顕在」としておく。この場合、潜在的支持層はスノーらのいうフレーム架橋により「在日特権」フレームに共鳴する。フレーム架橋とは、「特定の争点や問題に関してイデオロギー的に親和的だが構造的に結びついていなかった」(Snow et al. 1986: 467) 対象者とフレームの接続であり、両者は出会う機会さえあれば容易に結びつき運動参加を促す。

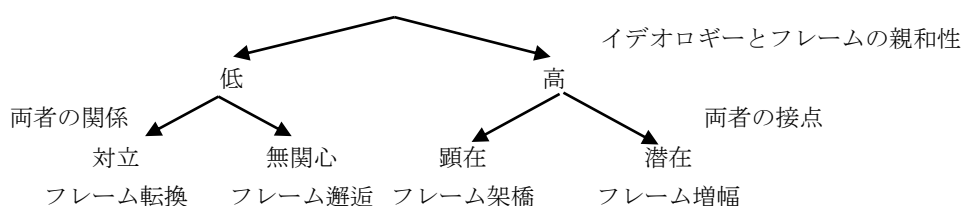


図4-1 イデオロギーとフレーム調整過程の関係

だが、潜在的支持層が「在日特権」フレームと親和的なイデオロギーを持っていたとしても、そのことに強い関心を持っているとは限らない。両者の接点が潜在的である場合には、運動のフレームに接しても見過ごされてしまいがちになる。その場合には、「特定の争点、問題、一連の出来事に関わる解釈フレームの明確化・活性化」(Snow et al. 1986: 489) たるフレーム増幅が必要となる。

次に、「在日特権」フレームとの親和性が低いイデオロギーを持つ者を勧誘対象とする場合が考えられる。両者が対立的な関係にあるときには、「古い理解や価値を変える、そしてまたは新しい理解や価値を生み出す」(Benford and Snow 2000: 625) フレーム転換が必要になる。現実には大きな転換は稀にしか起こらないだろうが、極端な主張を掲げる運動については「過去の自分と訣別」したような転換が生じることも考えられる。

最後に、これまでの類型は運動の掲げるフレームに関して——共鳴にせよ拒否にせよ——明確なイデオロギーを潜在的支持層が持っていることを前提としてきた。しかし、すべての者が明確なイデオロギーを持っているわけではなく、前章でみたノンポリのような立場もありえる。その場合、潜在的支持者は何らかのきっかけにより運動の掲げるフレームに関心を持つようになり、フレームに共鳴するようになると考えられる。こうした過程をフレーム邂逅 (frame encounter) と呼んでおくと、フレーム転換ほどの変容は伴わないものの、ノンポリが活動家になるといった変化は生じる。また、フレーム邂逅はいわば偶発的に発生するため、フレームの到達範囲 (outreach) によって大きく規定されることとなるだろう。

### 3 活動家の語りにみるフレーム調整過程

前章で述べたように、活動家の多くは元々保守的な政治的立場をとっている。その意味で、「在日特権」フレームと親和的なイデオロギーと持っていた者の比率は高いが、そうでない者も一定数存在する。また、イデオロギー的に親和的だったとしてもフレームとの出会い方や共鳴の仕方には一定の差異がある。それぞれに該当する事例を分析することで、フレームに共鳴するメカニズムを明らかにしてみたい。

### (1) フレーム架橋

活動家たちの多くは、在特会と接点を持つまで「在日特権」という言葉自体を知らなかった。だが、それ以前から排外主義的なイデオロギーを持っていた者も存在し、そうした者は積極的に排外主義的な言説を探求中で「在日特権」に行き当たっている。フレーム架橋に該当する者は、最初から排外主義運動を組織する側だった4名を除く30名中14名と一番多かった。この類型の特徴は、自らの考えを体現する存在としての排外主義運動に行き当たって参加したことにある。潜在的参加者のイデオロギーと運動のフレームは一致しており、両者が接点を持ちさえすれば参加に結びつく。その典型が前章でみたエンジニアのHであり、彼は家庭の中で在日コリアンに対するネガティブな見方を植えつけられ、学生時代に歴史修正主義のサークルで活動していた。社会人になって引っ越してから、以下のように活動を継続している。

みんなでディベートサークルを作ったんですよ。仲間内で。そのときインターネットもないので、本当に小さい掲示板でやって。地元掲示板ってあるじゃないですか。その頃にちょうど従軍慰安婦問題が勃発しまして、そこで社会運動で従軍慰安婦はいたんだと訴えてきた人と対峙してディベート合戦していたと。在日というよりも、初っ端は従軍慰安婦の問題。(H氏、在特会、30代男性)

このグループが、「男女関係でもめたりとか、いろいろな問題があって空中分解しちゃった」ため、他に類似した団体はないか探していたという。そうした時に、「カルデロン問題」に関心を持ってインターネットで検索するうちに、在特会に行き着いている。

(在特会を) 認知するのがカルデロン問題で動画をアップしてたのがあって、そこからですかね。在日特権を振りかざす連中というのは、いろいろなことをこれまでやってきたというのがあって、何でこれが続いてきたんだろうと思うと、誰も「やめろ」って大きな声でいわなかったから続いてこなかったんじゃないかなという考え方なんですよ、僕は。そいつらに面と向かって「やめろ」という人が——在特会がいたんですね。これは素晴らしいじゃないかということで、そこから在特会に入ったんですよ。(H氏、在特会、30代男性)

Hの場合、自らの「考え方」を実践するものとして「在特会がいたんですね」という。彼にとって在特会は、自らのイデオロギーを具現化する存在であり、それゆえ「在日特権」フレームにも即座に共鳴したのである。序章で『正論』を読んでいた女性として言及したMも、同じ事件をきっかけに在特会の活動を目にすることとなる。彼女はもともと保守的なイデオロギーを持っていたが、在日コリアンに対するネガティブな感情を以前から持っていたわけではなかった。社会人になってからも、歴史修正主義や排外主義と接点があったわけではない。そんなMは、「カルデロン問題」の報道に接して違和感を抱いていた。

歴史の問題とかには興味持って問題も感じてたんですけど、でも在日問題ってあまり知らなかったんですよ。在特会に入るきっかけになったのが、フィリピン人のカルデロン一家、やっぱり「これはもうマスコミおかしいぞ」って思ってた。(一家のことはテレビで) やってました。「何かかわいそう」って。「何かかわいそうだ、てめえ(と思った)」。テレビの報道はおかしいなと思ってたんで——その動画見つける前ですけど。周りの人間に聞いたんですよ、どう思いますかって。やっぱり薄々おかしいって思っている人、結構いるんですよ。で、自分が心が狭い人間じゃなかったんだって。(M氏、在特会、30代女性)

Mの場合も、自らのイデオロギーと在特会のフレームは一致していたが、Hのように積極的に検索して情報を集めるまではしていない。両者を架橋したのは、偶然見かけたインター

ネットの動画であった。

たまたま Youtube でですね、桜井会長が入国管理局前で（「カルデロン問題」について）街宣したんですよ。それをたまたま見かけて、「やっぱりそういう風に思っている人っているんだな」って。…あの圧倒的な街宣を見てですね、すごいと思って。（M氏、在特会、30代女性）

きっかけは「カルデロン問題」だったが、Mは次のように述べる。「韓国人・朝鮮人が嫌いですが…嘘つき（だから）。とにかく謝罪しろ、賠償しろ、ですよ」。つまり彼女は、歴史修正主義の立場から「在日特権」フレームに共鳴した。歴史修正主義のイデオロギーにもとづき、「在日特権」フレームに共鳴する者の特徴は、「韓国人・朝鮮人」が誰を指すのかが明確でないことである。「謝罪、賠償」が大きな問題になってきたのは韓国との間であり、北朝鮮とも「在日特権」とも関係ない。しかし、Mにとって韓国、北朝鮮、在日コリアン、つまるところ「朝鮮民族」は等しく敵手であり、それにより歴史修正主義は「在日特権」フレームとスムーズにつながるようになる（第8章参照）。

HとMは、自ら検索して在特会を探したか否かという点では異なる。だが、両者とも「カルデロン問題」に対して排外的な関心を持ち、それに合致した団体をみつけたことで参加意欲を促される。これらの事例では、運動参加に必要なのはイデオロギーとフレームの間を調整し共鳴に至る認知的な変化ではない。ブリー（Blee 2002: 27）は、人種主義団体のメンバーの多くは団体に加入した結果として熱烈なレイシストになるという。だが、フレーム架橋に該当する者の場合、運動との接触以前から排外主義者なのであり、運動参加の結果としてそうなるわけではない。その意味で、自らのイデオロギーを体現する運動＝在特会の存在を知ることが重要なのであり、両者をつなげたインターネットこそが運動参加を促した最大の要因となる。

## （2）フレーム増幅

フレーム増幅により排外主義運動のフレームに共鳴する者は、人数としては30名中13名が該当し、フレーム架橋とほぼ二分している。保守的なイデオロギーを持っているが、「在日」あるいは「外国人問題」に対して特に関心を持っていたわけではない、というのがフレーム増幅を経た者の公約数となる。多くは偶然のきっかけにより在特会の動画などに接するようになり、そこから「在日特権」という「問題」を見出していく。これは日本の排外主義運動に限ったことではなく、たとえばクー・クラックス・クランの女性活動家のほとんども、最初に組織と接触するのは何気ないきっかけを通じてであった（Blee 2003）。

その中の1人であるOは、学生時代にマルクス主義にもふれたものの、「左の考えもわかるけど、何かしっくりこないんで」と保守を自認してきた。彼は「外国人問題」に関心を持っているわけではなかったが、偶然 Youtube に上がっていた在特会の動画をみて、「在日特権」を公然と非難することに驚いている。

Youtube とかみてて、ちょっと「何だろう、これは、何をいってるんだろう」。こんな運動してるグループがあるんだな。…僕らの世代というのは、朝鮮人というだけでボコボコにされるぞ、だからちょっと抑えないといけないような時代だったんで。タブーだったんですよ。それが堂々と「朝鮮人出て行け」といっていると。「何だよ、この運動体」はと試してみようになったのがきっかけですね。堂々と発言して、抗議して——「朝鮮人」っていいいいんだ。それはそうだ、フランス人をフランス人といっているのに、朝鮮人を朝鮮人といっているいいことはない。（O氏、在特会、50代男性）

O自身は、在日コリアンに対してネガティブな意識をずっと持っていたが、タブーという言葉を用いることが示すように、それを焦点化して考えることはなかった。ところが、動画

上で叫ばれる排斥の言葉が、「在日特権」というフレームを明確化したことで、彼はタブー破りの快感を感じる。それからOは、インターネットで検索を繰り返すようになり、以下のような「事実」を知ることとなっていく。

調べていったらいろいろ・・・日本人にない特権があるわけですね。これはおかしいや。名前もいっぱい使えるし。口座でもいくらでもいけるし。免許証も通名でいけるし、通名で名前を何個でも持てるし、税金もまともに払ってない。生活保護はものすごい。人口比にして日本の5倍6倍ね、もっとひどい数だから。4人に1人が生活保護ですからね。生活保護にたかって。で、そんなことがいっぱい出てくるんですよ、次々と。(O氏、在特会、50代男性)

「在日特権」フレームが自らのイデオロギーの一部を増幅したのは、「いわゆる自虐史観に対して僕自身、懐疑的な考え方を持っていました」というLについても同様である。

何かのはずみに Youtube の動画サイトで、桜井会長の動画をたまたまみてしまいまして、面白い人がいると。朝鮮人が地方参政権よこせてデモを何千人か(で)やっている中で、会長が30人くらいで抗議する動画でしたね。そこで桜井会長が、「ゴミはゴミ箱に、朝鮮人は朝鮮半島に」と叫んでましたね。なかなか・・・公衆の面前で面白いこという人だなと思って。(L氏、在特会、40代男性)

Lは、「小淵恵三が総理だった時に、北朝鮮に米を支援するといった」ことに憤慨してブログを開設し、「何か事件とかニュースがあったら、僕が愛国的な考え方から『これはこうだ』とか感じる」ことを綴っていた。だが、特定の活動に参加することはないし「在日特権」に関わる意識もなかった。それが在特会の動画に接することで、「愛国」意識を向ける具体的な対象を見出していく。Lは、もともとマイノリティ一般に対する差別意識を持っており、その意味で「在日特権」に対する抵抗感もなかったことも関係しているだろう<sup>5</sup>。

Dは、韓国・朝鮮が「全然嫌いでもなければ好きでもない、興味もないんですよ」という。これはDが「尊皇主義」を自認することによっており、歴史小説を読むことで自らの保守的な指向を満足させるに止めていたのが、極右のホームページに影響されるようになる。

尊皇主義、多分そっちに私は近いんじゃないかと思うんです。今改めて思えば。要するに(天皇)陛下がこう言うんだったら、それに従うのが当たり前だ、という感じなんです。・・・チャンネル桜さんの前身で、そういうネットの媒体を通して保守的なものをずっとやっているサイトがあったんですよ。それがすごく影響大きかったですね。(D氏、在特会、30代男性)

Dは、在特会と接点を持つ以前に人権擁護法反対のビラを街頭で配布しているが、これはあくまで個人的な行動で持続的なものでもなかった。ただし、チャンネル桜に体现されるような極右のサイトは閲覧し続けている。その意味で、イデオロギー的に排外主義運動と距離があるわけではないが、彼が執着したのは「保守」であり、「外国人問題」には関心がなかった。それが、「在日特権」に焦点化したフレームに遭遇し、「めっちゃポイント絞っている」というフレームの明確さに惹かれる。

在特会に一番最初に入るきっかけは、名前が良かった。「在日特権を許さない」——めっちゃポイント絞っているじゃないですか。「在日特権」、何だそれ?というのがあったんですけど、ちょうど私が会に入るきっかけになったのが、三重で詐欺がですねえ、公務員による詐欺が発

<sup>5</sup> 調査倫理の関係で具体的なことは書けないが、彼はさまざまなマイノリティを見下すような意識を持ち実践してきた。

覚したんです。住民税が半額、50 年間に渡って恒久的に半額にしてたっていうあのニュースが出て、「ああやっぱり在日特権はあるんだ」。(D氏、在特会、30代男性)

Dは、「在日特権」の「裏づけ」となるニュースに接して、活動の場を見出していく。チャンネル桜を通じて在特会のことは知っていたが、「ああ本当に(「在日特権」は)あるんだ、やっぱりこれダメじゃない」と実感して初めて加入に至っている。つまりフレームの「経験的信憑性 (empirical credibility)」(Snow and Benford 1988: 209)<sup>6</sup>が、Dをして「在日特権」を信じさせることになるわけである。Dはそれ以外の極右組織も知っていたが、「右翼系の団体ばかりで市民団体、保守系市民団体という感じではなかったですね」と加入していない。他の団体は「いかつい人たちが何かこう命をかけてます、みたいなものばかりだったんで」というDにとって、「市民の会」を冠した在特会は入りやすかった。つまり「在日特権」だけでなく「市民の会」という名称も、参入障壁を下げる副次的なフレームとして機能していたと考えられる。

最後に、「在日特権」フレームは既存の右翼組織から生まれたわけではなく、右翼の一部もそれに共鳴する側にあったことを確認しておきたい。以下でみるηは、在特会より10年以上先んじて外国人労働者排斥運動に関わっており、排外主義運動の活動家としてはフレーム架橋に該当する。彼にとって排外主義運動と接する最初のきっかけは、テレビ番組で運動が取り上げられたことだった。

仕事の関係で夜の勤務で、休憩室——夜の休憩の時間帯ですね——でテレビをみておったんですけど。その頃、TBSのスペースJというニュース番組がありまして、そこで国家社会主義者同盟というのが——日本にもこういう人種差別、民族差別をするような極右団体があるということで取り上げて。…まったく外国人問題に対して懸念を表明する大人がいない、怒りを主張するような人たちも存在しないという中で、日本にもこういう考えを持った人たちがいたんだと。そういう躍動感がありまして。(η氏、在特会以外、30代男性)

ηは中学生の頃に近隣で移住労働者が増加した経験から、外国人排斥に関心を持つようになった。社会人になってからも関心は薄れず、活動の場を探して地元の右翼団体を訪ね歩いたが、「開店休業状態というか、そういう団体も多くて。あるいは活動らしきことはしていても、外国人問題には触れていない」。そうした最中でテレビを通して国家社会主義者同盟に出会い、「自分もこういうところに参加しなければ」と仕事を辞めて民族派の流れを汲むこの団体に属する活動家になった。この段階でηが経験したのはフレーム架橋に他ならないが、この当時は「在日問題」を意識することもなく、以下のように後になって「在日特権」フレームに共鳴している。

(「在日特権」に対して関心を持ったのは) ブログを書き始めてですから、2007年あたりからですね。コメント欄で「在日、在日」とひたすら書いてくる人がいるんですね。最初、「この人たちはなんでこんなに在日なのか」と思っている間に、自分のほうが「在日、在日」となっている。不法滞在問題を言うのもいいんですけど、その背後に在日のこういう問題があって、こういうことだからこういう風に主張したほうがいいんじゃないの、とか。そういった突っ込みがきて、むしろ発信している私よりもコメントしている側のほうが意識が高い、見識が高い、知識がある。逆に自分が教えられるような立場になるんですね。ああそうなのか、と。(η氏、在特会以外、30代男性)

ηのイデオロギーと「在日特権」フレームは対立するものではなかったが、上記の語りか

<sup>6</sup> フレーム調整過程と世界の出来事の適合性を指す。

示すように彼が「在日」を意識することはなかった。ηのブログの読者から、「在日特権」の重要性を主張するコメントが寄せられることで、「外国人排斥」のフレームを「在日特権」まで増幅した。これは彼に限ったことではなく、右翼経験がある排外主義活動家は「在日特権」に関しては、フレームに共鳴する側にまわっている<sup>7</sup>。

### (3) フレーム邂逅

社会的にみると、「在日特権」はもちろん「在日外国人」に関わる事柄が、広く注目を集めてきたわけではない。それゆえ多くの者は、「在日特権」フレームを提示されても怪しい情報として相手にしないか、「わからない」で済ませるか、無関心を決め込むと思われる。だが、排外主義運動の活動家の中には、無関心の状態から一転して「在日特権」フレームに共鳴し、実際に参加した者がいる。これがフレーム邂逅に当たるが、該当するのは30名中3名であった。そのうちの1人であるIは、外国人人口比率が低い地域に住んでいたこともあり、在日外国人に対する認知がそもそもなかった。そんなIが「在日特権」フレームと出会うきっかけになったのは、インターネットにアップロードされた動画を偶然視聴したことであった。

日本語動画でみたら1位になっている動画があって、そこに「創価学会をつぶす存在」みたいなタイトルがあったんで、「何だこれ？」と思って。「あんなところにけんか売ったら殺されるだろう」と思って。・・・（関心を持ったのは）演説聴いて興味を持ったからですよ。拉致も自分には関係ないと思ってましたからね、ずっと。大多数の人と同じですよ。（I氏、在特会、30代男性）

Iが遭遇したのは「創価学会批判」の動画だった。創価学会批判自体は、一時期の排外主義運動のテーマとなっており、その街頭演説をたまたま視聴したことになる。この時にIが「在日特権」に関する動画に行き当たったとしても、それをみようとするしなかっただろう。だが、Iにとっては子ども時代に親族から信仰を強制された経験から、創価学会は否定的な感情を持つ対象だった。

親戚のおじさんの嫁がまたガチガチの学会員で、天井まであるようなでっかい仏壇があるような家だったんですけど、そこのおばちゃんの所に遊びに行くと、「夏休み東映まんがまつり」に連れて行ってくれるんですよね。それで、「東映まんがまつり」を見る前に、大勢の体育館みたいな広い部屋で、大勢の背広の大人たちがうちと違うお経を唱えているやつを、一緒に知らないお経を唱えさせられる。その苦痛の行事を我慢すれば、『プロゴルファー猿対メカゴルファー』が見れるわけですね。（I氏、在特会、30代男性）

排外主義運動は、外国人参政権に前向きな公明党や創価学会を敵視しており、創価学会批判を繰り返してきた。Iはたまたまその一部を動画で視聴し、「そんなすごいことをいってもいいんだ」と引き込まれていった。そこから「月に1回2回くらい休みの日に半日動画をみて」さまざまな情報に接するようになり、フレームに共鳴するようになっていく。

Gは、埼玉県在住で「カルデロン問題」の地元だったこともあり、在特会との接触以前から認知していた。在特会の動画との遭遇は偶然によるものだったが、自分が知っている事柄が取り上げられ、マスメディアとは対極の主張をしていることで「問題提起された」という。

（きっかけは）うちの（桜井誠）会長の動画をみて、ちょうどカルデロン問題で何か街宣をし

<sup>7</sup> これは、「在日特権」というフレーム自体が右翼運動や右派論壇ではなく、インターネット上で生まれたことに起因するが、これについては第6章で詳述する。



ている時に「こんなことしてる人いるんだ」ってんで注目を持った。(動画を見つけた経緯はニコニコ(動画)で何か再生回数が多いなというのでみて、ですね。今までニュースで(カルデロンという)名前くらい聞いて、そういう問題が発生しているというのがあるって、会長がいう考え方があるんだっていうのがあるって。面白いというよりも強烈なインパクトがあったんで。自分の中で問題提起された感じになって。グーグルで検索して、在日と永住権とかそういうなんか検索して、こういうことがあるんだって。(G氏、在特会、30代男性)

2人に共通するのは、動画に接した時のインパクトの大きさである。無関心から出発している以上、「在日特権」フレームとの邂逅は意識的に探求した結果ではなく、偶然の産物だった。ただし、邂逅したとしても動画に興味を惹かれない限り、排外主義の動画との邂逅はネットサーフィンの断片にしかならない。スノーらは、フレームの共鳴度を規定する要因として「中心性」(Snow and Benford 1988: 198)を挙げており、自分にとって重要なことかどうかの影響を及ぼすという。IとGの場合、「創価学会」「地元の問題」というリアルな経験との接点があったことが、動画に関心を持った背景にある。その意味で、フレームが掲げる事柄に関心を持つかどうか、リアルな経験との整合性に影響されているといえるだろう。

#### 4 「在日特権」フレームの共鳴板

これまでの議論を踏まえて、「在日特権」フレームに共鳴があった要因について答えておこう<sup>8</sup>。結果的には、フレーム転換によって排外主義運動に関わった者はおらず、フレーム邂逅に該当するものも3名に過ぎなかった。それ以外は、自ら積極的に排外主義運動との接点を求めた者と、偶発的に排外主義運動と遭遇するがイデオロギー的には抵抗なく受け入れた者で二分される。その意味で、前章でみた政治的社会化の過程で「在日特権」フレームに共鳴するイデオロギーはできていたともいえる。別言すれば、左派政党支持からの翻身は、排外主義運動との接触以前に起こっていたのであり、イデオロギー的にはすでに変化してから運動と接点を持ったのである。

米国の人種主義活動家を調査したブリーによれば、人種主義者になったイデオロギー的变化については、活動家たちは具体的かつ重要なこととして語る傾向がある。しかし、実際に団体に勧誘され活動に加わったことは、抽象的かつ瑣末なこととしてしか語らない(Blee 1996: 692)。これは日本の排外主義運動について、半分は当てはまり半分は当てはまらない。一方で、活動家たちは運動に加わる以前から、それに共鳴するイデオロギーを持つようになっていた。その意味で、運動参加によって自らが大きく変わったという意識を持つ者は、ほとんどいなかった。

他方で、そうしたイデオロギー的な素地が、フレームに対する共鳴に直接つながったわけではない。無媒介で「在日特権」フレームに即座に共鳴するのは、在特会に関わる以前から在日コリアンに対する嫌悪感を持っている者——フレーム架橋の一部——に限定されていた。それ以外の者については、「在日特権」の発見は新たな出来事であり、イデオロギーとフレームを媒介する要素が必要だった。

第1の要素として挙げられるのは、個人的に関心がある事柄について生じた「事件」により生じた、「経験的信憑性」をめぐる競合である。これは、「カルデロン問題」に関するメディアの報道に違和感を持ち、在特会の動画に接して共感したといった場合が該当する。これ以外にも、2002年のサッカーワールドカップで韓国チームに反感を持った以下のような事例もある。

<sup>8</sup> ここで「暫定的」というのは、日本の排外主義運動に関して個人レベルの分析を行ったのは本論文が初めてであり、照合すべき研究蓄積がないからである。調査の蓄積により、本論文の回答がどの程度妥当性を持つのかも検証されていくと考える。

審判買収しているんじゃないかねえかと。大体わかるんですよ。韓国のラフプレイっていうのは、もう非常に眼に余るものがある。他の国ってんじゃないですよ、ラフプレイしているんですから、普通に。「今のファウルだろう」というのをとってくれないとか。(F氏、在特会、30代男性)

これらは、マスメディアとインターネット上の排外主義の間にフレーム矛盾(Nepstad 1997)——特定の紛争に対する両方の解釈の矛盾——が顕著に生じた例といえる。潜在的な支持層はマスメディアのフレームに共鳴しない分だけ、インターネット上の排外主義フレームに共鳴しやすい。インターネット上の排外主義フレームのほうが、自らにとって「経験的信憑性」があるとみなされ「本当に起こっていること」をネット上で見出そうとする。これは、ネット上の真実を知らせれば現実が変わるという有効性感覚をも生み出し、実際の運動参加を促進するだろう(Nepstad 1997: 482-3)。「在日特権」フレームが経験的根拠を持たない以上、潜在的な支持層が自らの経験に即してフレームをふるいにかけてしまえば、それが「経験的信憑性」をもって共鳴することはない。だが、「在日特権」フレームと接点のある上記のような「事件」をきっかけとして、潜在的な支持層の中に「経験的信憑性」が生まれることがある。この場合、フレームが虚構としてふるい落とされることもなくなり、架橋されるだけで「在日特権」フレームに共鳴するようになる。

第2に、「在日特権」に関してそうした「経験的信憑性」が生まれる事例は、現実には少数であった。より多くの者に影響を及ぼしていたのは、「自虐」「反日」という右派社会運動全体を束ねるマスターフレーム(Snow and Benford 1992)の存在であった<sup>9</sup>。「在日特権」を公言する政治家を探すのは難しいが、歴史修正主義や近隣諸国に対する敵意をつまびらかにする政治家は跡を絶たない。「在日特権」フレームは、そうした「自虐」「反日」の下位フレームの1つと考えられる。すなわち、「在日特権」という「経験的信憑性」の低いフレームは、「自虐」「反日」という近隣諸国・在日コリアン・日本の左派という敵手を一体のものとして扱うフレームによって補強される(第8章参照)。前章でみたように、歴史修正主義や近隣諸国に対する敵意は、半数以上の活動家がイデオロギーを形成するに際して重要な影響を及ぼしていた。彼ら彼女らは、まず「自虐」「反日」フレームに共鳴した上で、それと密接に関わるとされる「在日特権」フレームにも共鳴する。こうして「在日特権」という虚構は、歴史修正主義の持つ物語の包括性に寄生する形で受け入れられていく。「外国人問題」でなく「在日特権」が構築されるのは、後者がいかに現実的な根拠がなかろうが、歴史修正主義の共鳴力を借りて潜在的な支持層をひきつけられるというメリットによる。

第3は、運動の掲げる問題が潜在的な支持層の関心をどの程度ひくかという「中心性」(Snow and Benford 1988)の問題である。フレーム邂逅を経験した者は、排外主義運動の動画を偶然視聴することになったが、以前から関心のある出来事をセンセーショナルに扱ったものだったため、強い関心を持つようになった。「尖閣諸島での漁船衝突」といった事件により、在特会の会員数が急増するのも同じことである。

## 5 排外主義運動との運命の出会い

以上からみえてくるのは、運動との邂逅以前から排外主義活動家への道を進み、運動との出会いは運命的でもあるが簡単に共鳴できるものでもあった一群の人々である。憎悪をあらからさまにぶつける街宣やデモをみても、軽蔑や嫌悪の念を覚えない時点で、動画の視聴者は潜在的な支持層へと変換される。前章と本章の分析では、潜在的な支持層になる最大の原因は、イデオロギー的に近いからということが出来る。「外国人問題」に関心がないことよりも、

<sup>9</sup> これについては第6章で詳述するが、上丸(2011)によれば、1996年頃から『諸君!』『正論』誌上で「反日」という言葉が増えていった。これは「中国、韓国などに対して言うときと、日本人に向けて言うときと、両方の使い方」があるという(上丸、2011: 390)。

イデオロギー的な距離の方が重要ということになる。だが、それだけで潜在的な支持層が活動家になるほどマイクロ動員は単純ではなく、参加へのステップを踏み出させるための仕掛けが必要になる。

まず、イデオロギーとフレームの関係は2段階で考えねばならない。本論文に登場する者は、政治的社会的過程で排外主義運動と親和的なイデオロギーを形成し、潜在的な支持層となっていく。その上で、排外主義運動のフレームと接点を持って共鳴し、参加への動機を持つようになる。その際、フレーム架橋のようにイデオロギーとフレームの間に懸隔がない場合には、共鳴も容易なものとなるだろう。そうでない場合、自らの虚構性を補強する3つの材料——経験的信憑性、マスターフレームへの寄生、中心性——の支えの上で「在日特権」フレームに対する共鳴が発生する。このように2つの段階を経て活動家になる以上、「在日特権」フレームだけをみたのでは排外主義運動への誘引を分析することはできない。前章と本章でみたような、排外主義へと至るさまざまな経緯の解析がなければ、排外主義運動への参加は根拠のないものに踊らされる合理性を欠いた行動としか捉えられなくなる。

最後に付言しなければならないのは、こうした認知上の変化が生じる舞台装置となっているのは、何度も言及したようにインターネットを介したコミュニケーションだった。それゆえ、インターネットが固有に果たした役割を分析しなければ、マイクロ動員過程の全体像を示すことはできない。マイクロ動員過程の分析の最後に当たる次章では、舞台装置としてのインターネットが排外主義運動において果たす役割を明らかにしていく。

## 第五章 インターネットと資源動員 ——なぜ在特会は動員に成功したのか——

### 1 インターネットと排外主義運動

これまで垣間みてきたように、活動家たちの政治的社会化とフレーミング過程では、インターネットがきわめて重要な役割を果たしていた。だがインターネットは、イデオロギーや行為を媒介する手段に過ぎない。にもかかわらず、本章でインターネットの役割について論じる理由を、議論に先立って述べておこう。

第1に、インターネットが引き起こす社会変動は——新たな支配や監視の側面が常に留保されつつも——市民ないし社会運動の側に多くの可能性を開くものとみなされてきた (e.g. Castells 2001)。この場合の市民や社会運動とは、基本的に「左」の側に位置するとされており、反グローバル運動がその典型となる (Bennett 2005; della Porta et al. 2006)。しかし、インターネットの利用目的が限定されていない以上、それは「右」の社会運動にも福音をもたらすものとなる<sup>1</sup>。実際、極右運動でインターネットが重要な役割を果たすことについては、欧米の先行研究で指摘されてきた。たとえば米国には、ストームフロントというレイシズム・白人至上主義に特化したポータルサイトがあり、あらゆる年齢や性別に合わせた掲示板が揃っている (Bowman-Grieve 2009; Caren, Jowers and Gaby 2012; Weatherby and Scoggins 2005)。こうしたホームページは、関連する主張を書き連ねるばかりでなく、「白人限定」のデート相手募集、教育や健康、趣味に至るまで網羅している (Back 2002; Bowman-Grieve 2009)。レイシストがナルシスト的に自らの写真を掲載するなど、他者攻撃だけでなく耽美的な要素を含むホームページも多い。

欧米の極右運動におけるこうした要素は、以前から機関誌などでみることができた。インターネットの普及により活動はより可視的になり、リンクをみれば相互の関係も把握しやすくなった。これは研究者側に大きな変化をもたらしており、インターネットと極右運動に関する研究は急速に増加している (Adams and Roscigno 2005; Back 2002; Burris, Smith and Strahm 2000; Caiani and Parenti 2009, 2013; Caiani, della Porta and Wagemann 2012; Daniels 2009; James 2001; Ray and Marsh 2001; Reid and Chen 2007; Tateo 2005; Waeber and Rodeheaver 2003, 2004)。日本でも、インターネットの普及と排外主義運動の台頭には密接な関係があるため、その影響を論じておく必要がある。

第2に、コミュニケーションのコストを低減するというインターネットの特性は、資源を多く持つ者より持たざる者に対して大きな影響を及ぼす<sup>2</sup>。全国組織を持つ政党と形成途上にある社会運動組織を比較してみれば、どちらにとってインターネットの効用がより大きいかは容易に推測できる (van de Donk et al. 2004: 5)。すでに基盤がある組織にとっては、インターネットによって「促進される (enhanced)」ことは多いだろうが、インターネットに

<sup>1</sup> 日本で生じている状況については以下を参照 (Gottlieb and McLelland 2001)。全体としてきわめて記述的な内容だが、新しい歴史教科書をつくる会に関する章もある。

<sup>2</sup> 情報技術の変化が社会運動にもたらす影響に関する研究潮流には、コミュニケーションのコスト低下に着目し、資源動員論の前提を問い直すものが一方にある。つまり、フリーライダー問題と組織による動員モデルの是非が問われることになる (Bimber, Flanagan and Stohl 2005)。本章も、基本的にはこうした研究を下敷きにしていく。

よって初めて「可能になる (enabled)」ことはそれほどないだろう<sup>3</sup>。それに対して、ゼロに近い基盤から始めた日本の排外主義運動は、インターネットによって初めて実現したといっても過言ではない。

では、インターネットが何を可能にしたのか。排外主義運動に関してみれば、何の組織的基盤もないところで多くの人を動員したことが特徴であり、インターネットとの関連でまず解明されるべきこととなる。だが、前段で挙げた欧米の先行研究からは、この点に関して何の知見も得られない。こうした研究はウェブや掲示板の内容分析か、リンクを利用したネットワーク分析が圧倒的に多く、インターネットで得られる情報だけを用いている<sup>4</sup>。その結果、個々の極右活動家がインターネットによって受けた影響は、世界的にも未解明のままである。

第3章でみたように、インターネットがない時代には家族のような人間関係を通じて極右運動に参加する者が多かった。近年の数少ない調査によれば、イギリス国民党の活動家になる者は、同党のホームページをみて加わる人が多い。その意味で、ホームページは活動家の勧誘過程で中心的な役割を担っているという (Goodwin 2011: 134-5)。日本でも、特定地域を基盤とするような極右運動は、今でも既存の組織的基盤や人間関係に依存していると思われる。鈴木彩加 (2013) による愛媛の右派市民運動の調査では、ほとんどの対象者が既成の保守系組織に加入していたし、山口・斉藤・荻上 (2012) も同様の状況を報告している。

ところが、排外主義運動のなかでも在特会の場合には、それ以前の組織加入経験がまったくない者が圧倒的多数だった。そうした基盤がない状態で組織機能を代替したのはインターネットであり、それなくして排外主義運動が台頭する事態は起きなかったと思われる。その意味で、インターネットと排外主義運動の関係は分析上避けて通れない課題となる。本章で行うのは、先行研究でなされてこなかった個々の活動家の水準の分析であり、排外主義者になる過程でインターネットという技術的な基盤が果たした役割の解明である。これは、第3章と第4章で行った認知面での変化を、技術的なインフラという観点から捉え直す試みとなる。

## 2 インターネットと動員構造の変容

### (1) ミクロ動員の文脈と運動参加

第2章で述べたように、孤立した個人や社会的に剥奪された個人は、不満を持ったとしても運動に参加しにくい (McCarthy and Zald 1987: 18, 28, 58)。それに対して、既存の組織や人的つながりを持つ人の方が、運動による勧誘の対象になりやすく、参加する傾向がある。このような、「集合的判断の過程と萌芽的な組織形態が相俟って、集合行為のための動員を生み出す小集団状況」(McAdam 1988a: 134-5) のもとで、ミクロ動員は進行する<sup>5</sup>。だが、こう

<sup>3</sup> 後述するように、この区別は以下にもとづいている (Earl et al. 2010; Earl and Kimport 2011)。

<sup>4</sup> 例外として、極右のチャットルームで 38 名のユーザーに対して調査を実施したものがある (Glaser, Dixit and Green 2002)。筆者自身も、排外主義的なホームページやブログのユーザーに対して、メールで質問票に回答するよう依頼したことがある。だが、メールアドレスが明示されていないものが多く、メールを送った場合でも回答が得られたことはなかった。

<sup>5</sup> ミクロ動員について、本章ではかなり簡略化して説明している。詳しくは樋口 (1999) を参照。

した小集団を介して排外主義運動に参加したのは、在特会以外では9名中6名だったが、在特会では25名中3名に留まっていた。

これまで、小集団が重要だとされてきた理由はいくつかある。第1に、そうした集団を通して情報が流通することで、コミュニケーションにかかるコストが低減する。一例を挙げよう。第3章でみたγは、右翼活動家の野村秋介にあこがれて、90年代から右翼活動をしてきた。排外主義運動にも関わるようになったのは、洞爺湖サミット開催決定がきっかけであり、当初は反中国の立場から単身で街頭演説をしていた。彼は動きの鈍い右翼団体に愛想を尽かしてやめていたため、新たにインターネットを基盤とした運動が始まると聞いて加わることにしたという。

洞爺湖サミットが決まってから街頭に立ってたんですね。…サミットをやるなっていうんじゃないで、どうせやるなら胡錦濤も呼べと。チベット問題、一体どうなってるんだってことを追及せよとね。…その時にね、フリーチベット運動が起こってきて、それ（を）インターネットで2ちゃんねるかなんかで募集始めていて、地元でもやるっていう、チベットやるみたいな情報が入って。それを機会にして地元でそういうデモとか、保守みたいなものが表に出るきっかけになるかもしれないな、とって自分からフリーチベットのほうに行っただです。（γ氏、在特会以外、40代男性）

γは既成右翼から抜け出て排外主義運動に加わるが、これまでの付き合いから新たな運動の情報を知って馳せ参じている。そこで在特会の桜井誠と知り合い、活動を手伝うようになった。「外国人問題」に対して関心を持ったのも、「在特会と出会ってから」だという。γは、既成右翼のネットワークから排外主義運動の情報を得て、勧誘されることとなった<sup>6</sup>。その後は、経験豊富な活動家として両者の橋渡し役となり、自宅でバーベキューを主催するなどして若い活動家の世話役となっている。

第2に、小集団での付き合いは運動参加に必要な社会的誘因（参加すると人間関係上プラスになるという誘因）を生み出す。第3章で労組専従から翻身した例として紹介したXは、気功集団での活動を通じて台湾関係のボランティアに関わるようになった<sup>7</sup>。その団体に誘われて、北京オリンピックの聖火リレーをみに行き、「本当に日本のはずなんですけど、空気が違うんですよ」と驚いて排外主義に関わるようになった。

活動始めた一番最初は、まずいなあと思い始めたのがフリーチベット。長野の（北京）オリンピックの時の聖火リレーでどなたか中国に対して反対をするとか、チベットの虐殺とか弾圧をやめろとかいうことから始まっているので。（その時）あたしは、ボランティアですかね。気功をやってたんで、それと一緒にボランティアをやっているような団体でしたので。…それがあって、じゃあ行ってみようというところから入って。（X氏、在特会、40代女性）

<sup>6</sup> 在特会は既成右翼の反感を買っているとされるが（安田、2012a）、地方によっては活動家層が薄いこともあり、既成右翼との共同行動も多い。

<sup>7</sup> ここでいう台湾関係とは、反中国の含意を持つ活動である。

Xの場合、自らが属する団体が行くのだから、と長野に足を向けている。小集団は、内部の人間関係を誘因として運動参加を促す基盤であり、運動の組織者からすれば、参加者をまとめて連れてくる組織はありがたい存在でもある (cf. Oberschall 1972)。ただし、小集団が運動参加を促進するのは、集団が運動に好意的 (少なくとも中立的) な場合であり、周囲が反対の時には活動の阻害要因となる。Nは、調査対象者の中で唯一交際相手から勧誘されて参加しているが、当初は彼女のことを心配して活動に反対だった。

(交際相手は) 昔から会社の (同僚で) …仲良しになった時にはこういう活動しているとは知らなかったです。(最初は彼女が) 街宣をしているところに出掛けてって、(車を) まわさせられた感じですね。…最初は反対意見だったんですよ。いろいろなリスクを考えたとき、女の子の身でそういう活動に参加して、いろいろなリスクがある。リスクを背負うだけの活動なのか、と疑問を持つわけですね。…徐々に徐々に (関わるようになり)、自分でも興味を持たれたからですね。こういう人たちがいるんだなって。(N氏、在特会、30代男性)

このように「意味ある他者」が活動に反対の場合、運動参加を断念ないし再考することが多いと思われる (Klandermans and Oegema 1987; McAdam 1988b; Snow, Zurcher and Eklund-Olson 1980)。特に排外主義運動の場合、「周囲の理解」を得られることの方が少ないから、社会的誘因は働きにくい。Nの場合、当初は反対だったのが彼女に引き入れられる形になったのは、1つには彼女が主導権を握る関係だったことによる。さらに、彼が反対していたのは活動に伴うリスクを懸念したことによっており、排外主義自体を嫌ったからではない<sup>8</sup>。だが、こうしたケースは稀な部類に入るだろう。実際、活動家の1人であるBは、「付き合い合っていた彼女と結局ダメになっちゃったんです。そういったことする人はダメ」と関係を解消され、活動にのめりこんでいった。Bの場合、身近な他者は活動へのブレーキにならなかったことになる。

γのように、既成右翼のネットワークから排外主義運動に入る場合には、小集団は運動参加の促進要因となる。在特会以外の活動家の多くは、こうした関係から排外主義運動に関わるようになった。だが、社会にある集団のほとんどは排外主義運動にネガティブであり、集団帰属はかえって参加の障壁となるだろう。その意味で、社会運動にとって既存の集団やネットワークが重要であるという知見は、在特会については過去のものとなっている。他の排外主義運動に比べて在特会が急速に拡大したのも、インターネットに依存する度合いが高いがゆえのことだと思われる。在特会の活動家に単身者が多いのも、単身者には家族の反対という抑制効果が働かないという背景があるだろう。インターネットをみて、自分の意思だけで運動に馳せ参じる「身軽な」個人が、勧誘の最大のターゲットとなる<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 彼は女性が活動することで危害を加えられるリスクについて述べているが、より一般的には社会統制によるリスクのほうが大きな意味を持つ。特に在特会関連で有罪判決が相次ぐなか、このリスクは運動参加を抑制する効果を持つと思われる。この点に関する理論的経験的研究としては、以下を参照 (McAdam 1986; Opp and Roehl 1990; Opp, Voss and Gern 1995; Wiltfang and McAdam 1991)。

<sup>9</sup> これは、極端な主張を掲げる集団一般に該当する法則でもあり、インターネットの普及は過激な集団への動員を促進する可能性がある。また、インターネット上の「祭り」がそうであるように、一過性の動員は可能にしたとしても、安定的な動員は難しいという見方も成り立つ。

## (2) インターネットとマイクロ動員過程の変化

前項の議論からもう 1 つ示唆されるのは、小集団という旧来のマイクロ動員の基盤に代わって、インターネットが新たなマイクロ動員の基盤となることである。インターネットは、既存組織を介さず運動への勧誘を大々的に進める点で、動員という概念自体を大きく変える可能性がある<sup>10</sup>。すなわち、社会運動論ではなじみ深い「集合行為 (collective action) の論理」から、デジタルメディアで組織する「連結行為 (connective action) の論理」(Bennett and Segerberg 2012: 752) への移行が、排外主義運動では支配的になっている。集合行為の論理では、合理的な個人は他者の貢献にただ乗りするようになる (Olson 1965)。大集団の中になると、「自分が何かしなくても誰かがするだろう」とただ乗りする誘因が発生するため、それを防ぐものとしての小集団が必要になるとされる (Oberschall 1972; McAdam and Fernandez 1990)。連結行為の論理では、デジタルメディアで動員コストが下がるのだから、ただ乗り防止のための小集団は必ずしも必要にはならない。たとえば、以下で A が経験する見知らぬもの同士の集まりのように。

(活動) 現場にいたのが初対面の方 3 人で、折角だからちょっとお昼でも食べに行きましょうかといったら、警官がぱっと来て要するに職質されたんですよ。そのときに「あなたたちはいつから一緒に活動しているんですか」といわれたんで、「15 分前です」・・・「掲示板で呼びかけやって集まったんで、私が呼びかけたんでもない、彼が呼びかけたのでもない、他の人が呼びかけた、呼びかけたのは別にいてここに集まったのがこの 3 人であって、だから今日初めて顔合わせたので、どこに住んでいるのか名前とかまったく知りません。だからいつから一緒に活動しているかといわれたら、15 分前からとしかいいようがないんです」。(A 氏、在特会、40 代男性)

こうした動員構造は、活字媒体や対人ネットワークへの依存度が高い左派市民運動とは大きく異なる<sup>11</sup>。在特会は、紙媒体のニューズレターを発行したことはなく、なおかつウェブ動画を勧誘の最重要なメディアとしてきた。排外主義運動は、ネットでの活動から生まれた経緯を持つだけに、もっぱらインターネットを介して動員してきた。後発の運動として動員構造が貧弱という劣位性ゆえに、インターネットに依存するしかなかったともいえる。では、インターネットの使用により何が変わるのか。これまでの研究では、①動員コストの低減 (Caiani and Parenti 2013: 154; Earl and Kimport 2011; Van Laer 2010; Salter 2003)、②トランスナショナルな広がり (Bennett 2005; della Porta et al. 2006)、③情報伝達の同時性と双方向性 (Eltantawy and Wiest 2011)、④オンラインの抗議形態の誕生 (Garrett 2006; Van Laer and

<sup>10</sup> すでに述べたグローバルな運動の展開のほか、オンラインだけの運動 (電子運動) もインターネット固有のものといえる (Earl and Kimport 2011: 5-8)。これはネット右翼の研究に際して有益な観点であるが、本論文ではオフラインでの動員に関連する限りで扱う。

<sup>11</sup> もっとも、3・11 後の脱原発運動ではインターネットが新たな動員構造となっており、左派市民運動でも技術革新が生じる可能性はある。この点に関する経験的研究としては、日本については平林 (2013) を、比較対象として G20 反対運動に関する以下を参照 (Stalker and Wood 2013)。



Van Aelst 2010)、⑤情報の独自性 (Carty and Onyett 2006) などが挙げられてきた<sup>12</sup>。このうち排外主義運動と密接に関わるのは、動員コストの低減と情報の独自性であり、この2つの要素からインターネットと排外主義運動の関係を論じていく。

その際、インターネットにより促進された要素(従来の延長の部分)と、インターネットによって独自に実現された要素を分ける必要がある(Earl and Kimport 2011)。印刷物がメールマガジンになると、刊行の費用は大幅に低減されるし、送付先の増加が負担にならない。だが、これは紙媒体でしていたことが電子媒体に置き換わっただけのことで、新たな要素とはいえない。それに対して、情報管制下にあるエジプトでSNSを多用し、弾圧をくぐり抜けて広範な動員を可能にした例などは、インターネットがなければ実現は難しかったと考えられる(Eltantawy and Wiest 2011)。

表5-1 運動への接触・フレーミングにおけるインターネットの役割

		フレーミング過程	
		インターネットが促進	インターネットで実現
動員過程	インターネットで実現	(3)偶発的閲覧 9名	(4)リンクを通じたフレーミング 2名
	インターネットが促進	(1)自発的検索 10名	(2)ネット経由の「問題」発見 4名

注：Earl and Kimport 2011; Van Laer and Van Aelst 2010 をヒントに作成。表中に示した以外に、ネット普及以前から活動している者が7名、人に誘われた者が2名いる。

以上を整理したのが表5-1であり、動員コスト=マイクロ動員過程、情報の独自性=フレーミング過程と読み替え、インターネットで促進/実現された要素を分類した。まず動員コストの低減は、情報発信の限界費用が下がることで勧誘対象の範囲を広げる効果を持つ(Earl and Kimport 2011: 104)。だが、インターネットで情報が拡散したとしても閲覧するのは元々活動家だった者が多いから、それによって勧誘は促進されても新たに実現するというほどではないという見方もある(Carty and Onyett 2006)。次に情報の独自性は、インターネットでなければ見過ごしていた「問題」を発見し、参加意欲を引き出すという点でフレーミング過程を変える可能性がある。これまでみてきたように、活動家の多くはインターネット上の情報に接することで排外主義運動に取り込まれていった。その意味で、インターネットで実現したフレーミング過程も考慮する必要があるだろう。

もっとも、インターネットで促進/実現という区分は、二元論的なものではなく程度を表

<sup>12</sup> 長期的には、再帰的近代化(グローバル化、個人化)による社会運動の変容というテーマの1つとして、インターネットの影響を考える必要があるだろう。その意味で、ティリーによる近代化・国民国家の形成と社会運動という問題設定は、現代の社会変動との関連で受け継がれる必要がある(樋口・稲葉、2004)。インターネットによる資源動員の特性に関しては、理論的経験的な妥当性が問われている段階にある。オランダの女性運動に関する研究では、情報提供、勧誘、意見募集、他組織とのネットワークングについてはインターネット独自の効果があったという(Edwards 2004: 192)。

ず性格が強い。その意味で、個人の分類も便宜的なものとならざるをえないが、インターネットを介して排外主義運動に参加した 25 名は、表 5-1 のように分けられる。次節では、「自発的検索」「ネット経由の『問題』発見」「偶発的閲覧」「リンクを通じたフレーミング」という類型ごとにインターネットがどのような役割を果たしているのか、詳しくみていくこととする。

### 3 排外主義運動へのマイクロ動員過程

#### (1) 自発的検索——動員・フレーミング過程ともインターネットが促進

運動との接触、運動のフレームに共鳴する過程の双方において、インターネットは重要な役割を果たしているが、それなくして実現不可能というわけではない。これが第 1 の類型の特徴であり、自ら検索して排外主義運動に行き当たった者は 10 名と一番多かった。これは現在なら当たり前で容易に思いつく行動だが、インターネットの普及以前は排外主義運動を探すことも容易ではなかった。1990 年代に活動家となった有門大輔は、テレビ番組で極右団体を知った。これは、彼の排外指向と一致するものであったが、団体を探し当てるのに一苦労している。

番組を観た数日後には会社を退職し、ほとんど身一つの状態東京へ向かうのである。国家社会主義者同盟の所在地も電話番号も知らなかった彼は、繁華街を歩き回り、同盟のビラがどこかに貼られていないか、ひたすら探し続けた。「何時間も歩き回って、ようやく新宿駅西口近くの電柱で、同盟の宣伝ビラを発見したんです。飛ぶようにして事務所へ足を運び、そのままいついてしまいました」。(安田、2012a : 164)

公的な組織ならば、インターネットの普及以前から所在は明らかになっていただろうが、排外主義運動に行き当たるのは容易ではない。多くの者は有門のような熱意を持たないだろうから、検索で簡単に情報をみつけられるようになったことで、運動参加が促進されたといえるだろう。第 3 章で登場した P は、この類型に属しており、ミクシィに加入した 1 年後にはミクシィ内の保守系コミュニティに入るようになった。そこでの呼びかけに応じて、外国人参政権反対のビラ配りに参加した。これは 1 回限りの行動だったため、自らネット検索して活動の場を探している。

外国人の特権に反対する団体があるんじゃないかと思ってネット検索したら、正しくそれを団体名にしているような、この団体（在特会）が一番最初にヒットしたので、もうこれは入ろうと思って。だから私、動画なんてみてないし、今でも動画なんて見ないですよ。…すぐに入って——簡単に入れますからね。そうしたら、いついつデモやりますっていう情報がメールで来るようになるので、それで参加しましたね。(P 氏、在特会、20 代女性)

P は、インターネットを使う前から歴史修正主義に関心があった。排外主義はその延長であり、在特会との出会いも運命的なものではない。在特会のような組織を探してネット検索した結果、ヒットしたので入会しただけのことである。実際に街宣に参加した時にも戸惑いはなく、むしろ以下のように「画期的」という言葉を 3 回も繰り返すほどの興奮を味わって

いた。

(参加してみて) 画期的でしたね。画期的だなと思いました。今まで朝鮮総連に向かってやいやいって行くような一般人、いなかったです。それをもう、「出て行け」だのねえ…真っ向勝負挑んでるとというのが画期的だなと。(P氏、在特会、20代女性)

第3章で翻身を経験した熱心な活動家であるCは、配達の仕事をしていたのでラジオを聞くことが多かった。彼にとっての端緒は、「にぎやかし」としてかけていたコミュニティFMで、歴史関係の番組を定期的に聴くようになったことにある。

(番組を) ずっと聴いてたら、日本、いわゆるあちら側がいう太平洋戦争に対しての見方がちょっと自分とは違って、これは何なんだろうな、ということですと調べて…。(その番組は) 保守系の立場です、どちらかという。…ああそうなのか、こういう見方もあるのか。左の人たちがいっている…そういう考え方からちょっとずれてみたら、また違った真実の歴史っていうのが見えてきた。…祖母にもいろいろな話を聞いたんですよ。出征の時の話とか、アメリカから空襲受けた話だとか。…祖父が軍隊に行って(いた時の) 写真もみせてくれたんですよ。馬に、白馬に乗って日本刀をこう差して、凛々しいんですよ。(C氏、在特会、30代男性)

Cは、当時使い始めたインターネットで歴史修正主義の情報を集めるようになる。ブルーカラーだった彼は、自宅にパソコンがないため休日になるとインターネットカフェに通っていた。

インターネットでいろいろ検索してみたら、テレビでやっていることと実際に起きたことが違うんだな、というのがわかった。…家にパソコンがなかったの、ネットカフェ行ってみたんですよ。ネットカフェに何時間もいて、動画みてて。(C氏、在特会、30代男性)

それまで「1人でみてて。キーボードカチャカチャやっけて」という単独行動だったCは、2009年に転機を経験する。「いつまでもネットでカチャカチャやっけてるような状態じゃねえんだって」と、数年間ネット右翼にとどまっていた自己を変えようとしたのである。

8月15日に何かやっけていないかなと思って検索かけていったのです。そうしたら(右翼活動家のブログが) ヒットしたんですよ。「じゃあみに行きたいな」ってみに行っけて、そこで出会ったんですよ。それが最初ですね。リアルで会ったのは。(C氏、在特会、30代男性)

彼の場合、敗戦の日に参加できる行事を探していたため、検索でみつけたのは地元の右翼活動家のブログだった。その告知をみて護国神社での行事に参加し、それから右翼活動家にぴったりくっついて活動するようになった。在特会のことを知ったのも、この右翼活動家が在特会にも関わっていたことによる。そもそもCが歴史修正主義と接したのは、FMラジオという旧来型のメディアであり、在特会にも人づてで入会している。本を読む習慣がないC

は、インターネットで歴史修正主義のページを熱心にたぐっていた。ネットには、「東条総理大臣がいていた開戦の詔勅」など彼の翻身を支える「現実」があったが、インターネット独自の情報とまではいえない。ただ、活字文化に親しみがないCにとっては大きな意味を持ったと思われる。運動参加に際しても、インターネットは便利に検索できる告知板という程度のものでしかなかった。つまり、この類型に属する者にとってのインターネットは、情報入手の機会費用を低減する以上の機能を持たなかったといえる。

## (2) ネット経由の「問題」発見——ネットで実現したフレーミング過程

運動との接触はインターネットにより促進され、フレーム共鳴はインターネットで初めて実現したのがこの類型で、該当者は4名だった。この場合、自ら検索するなかで運動につながる情報を得ているが、それを閲覧するうちに当初の関心から離れて排外主義に傾くようになる。たとえば、2002年のサッカーワールドカップでは、「韓国のラフプレイ」がネット上で喧伝されていた。それは「嫌韓」の理由になったとしても、「在日特権」を信じることには結びつかない。しかしインターネットは、こうした関係ない事柄をリンク機能により結びつけていく。学生時代にラグビーをしていたFは、サッカーにも関心を持って「今のファウルだろうというのをとってくれない」と、韓国戦をみて思ったという。

(きっかけとなったのは) ワールドカップに対する韓国の報道です。やっぱ一番なんか象徴的だったのが、最初日本で単独開催だったんですね。韓国で一緒になろうって話になって、準備できているのかなと思ったら、全然その準備もできてなくて。…共催だっていうことだから、互いに応援し合っているのかということとんでもない。…やっぱりサッカーというのは結構大きかったんですよ。影響というか、今回こういう運動やるという意味で。(F氏、在特会、30代男性)

Fは在日外国人に対する関心が「まったくなかった」し、「在日特権」についても「全然気づかなかったですね」という。それが、「おかしい」と調べるうちに、サッカーは脇に追いやられ、「マスコミってやっぱり本当のこと報道してくれねえ」という不信感と「韓国に対する批判の目」が残った。検索を重ねていくうちに、当初は関心がなかったはずの「在日特権」を糾弾するようになる。「気がついてみたらこれだけやられているんだ」と彼はいうが、それは何の関係もないことがネットサーフィンしながらリンクを通じて結びつけられた結果である。

インターネットで調べて、情報が入ってきたっていう、たまたまそういうところみたっていう、こちらから積極的に調べたっていうのがあって。それでおかしいということがずっとわかって、納得するような答えが出てきて、それでああ在日特権なんだ、というところにいきました。(F氏、在特会、30代男性)

20代前半と若いUは、「総合学習とかあって、パソコン活用したりとか」と小学生の頃から、自宅にパソコンをおいて調べ物に使っていた。「歴史に興味があって、特に近代史、近現代史、その辺がすごい好きで」という知的好奇心は、読書やテレビ番組の視聴にも向かつ

ていた。ここまではインターネット以前からあるエピソードといえるが、以下にみるように彼はインターネットで「自分にじっくりする」一連の情報を発見し、それに共鳴していく。

一番やっぱ大きかったのは、ネットですかね。…そういうのがある程度家庭に普及した時期じゃないですか。そういうので政治関係の情報を載るようになって。左右両方の人が発信していたわけですよ。その時たまたま、自分にじっくりするものがそこにあったということで。それは興味を引きつけたというか、そういう感じですね。特に一番手っ取り早いといったら、韓国の併合問題。その後の問題というか、その辺の関係がちょっと気になったこと、それがきっかけだったと思いますけどね。(U氏、在特会、20代男性)

サンステイーンは、インターネットにおいて個人化されたニュースの閲覧が、集団分極化を促進する要素になるという(Sunstein 2001)。特定の立場のホームページには、それと同じ立場のリンク以外は掲載されにくい。したがって、特定の立場に関心を持ってホームページをみた者は、反対派の主張をみる機会もなく特定の立場で凝り固まっていく。これは排外主義運動でも生じている事態だが、以下でみるようにインターネットにはもう1つの特性がある。

(在特会に行き当たった経緯は)あまり覚えてないですね。結局ネットサーフィンしていたら、気づいたら全然違うところ行ってますでしょう。本当にあんな感じで、友達からサイト教えてもらって、それから検索の検索の検索のという感じで、多分行き着いたんじゃないんですか。たまたまそいつネットが好きで、いろいろみていて、それでたまたまみつけてきたんですよ。…それでたまたま本当に——たまたまですね。だからそういう意味ではある程度ネットの社会にそういうのがある程度、よく出てたというか、そんな感じですね。(U氏、在特会、20代男性)

「検索の検索の検索」により「気づいたら全然違うところ行って」いたというのは、ネットユーザーの多くが経験するところだろう。最初は友人に教えてもらったホームページだったが、それが何だったのかも覚えていない。そこでみたことを調べるべく検索をかけ、さらに別のページに行き着き、そこからさらに検索をかけるうちに在特会にたどり着いた。Uは、「韓国併合」に対する関心から始まり、ネットを介して「日本と韓国との関係、日本と中国との関係という社会問題にシフト」し、それから「外国人問題」に至っている。関連性があるとされるホームページへのリンクを繰り返すうちに、当初みていたのとはかけ離れた内容に行き当たるようになる。これはサンステイーンがいうのとは異なり、意図せざる結果として排外主義に取り込まれるような集団分極化のあり方を示唆している。

### (3) 偶発的閲覧——ネットサーフィンがもたらす排外主義との邂逅

自ら検索するわけではなく、インターネットで偶発的に排外主義的なコンテンツを閲覧し、共鳴するのがこの類型で、該当者は9名だった。第3章で農村の保守としたBは、パチンコ店を営む企業で経理事務をしており、在日コリアンとの接点は多かったが排外主義に結びつくような認識は「まずなかった」という。それを変えたのは、「9月の雨が降ってい

る日」に「李登輝さんと誰かが話している」ネットラジオの番組を聴いたことだった。

基本的に戦後教育を受けて生きてきたなかで、台湾の人たちが——リアルプレイヤーかなんかで聴いたと思うんですけど——ネットで話してたんですね。昔の日本っていうのはこういったもんで、こういった歴史があって、それに対して今の日本人は昔のことを悪くいうばかりで、という話があったんですね。(B氏、在特会、30代男性)

Bは、社会的なことに関心もなく、インターネットで社会や政治に関するページをみるわけでもなかった。「何でそれを見たのか、何でそれを聞いたのか」B自身も覚えていなかったが、この番組の内容は「妙に覚えている」という。「日本人からいわれたのではなく、外国人からいわれたっていうのが大きかった」というのが彼の自己認識で、歴史修正主義関連の情報を集めるようになる。

政治関係のサイトなんてアクセスなんてしないですから……。ただ何となくそういったのを拾っちゃったんでしょうね。拾って聞いてみたら、何か急に心震えるものがあった。そこから勉強をちょっとずつして。ネットからとって本を——図書館行ったりとかですね。以前住んでいるところが非常に図書館から近くて。車で10分くらいのところだったので、ちょっと行って。ネットで調べてそれを検索かけて、あったらそれを読んで。(B氏、在特会、30代男性)

その過程で、在特会の前身ともいえる桜井誠のホームページに行き当たり、彼のラジオ番組を聴くようになった。単にオンライン上で聴くにとどまらず、ポータブルプレイヤーにダウンロードするような熱心なリスナーだった。そこで在特会設立の告知にも接して、すぐに入会を決めている<sup>13</sup>。

今の会長の桜井が昔ネットラジオ「不思議の国の韓国」ってやっていて。それをネットダウンロードして通勤とか出張とか外回りするときに、そういうの聞きながら動いたりしてたんですけど。……そのネットラジオって結構前からやってたんで。……その当時は在特会じゃなかったんですよ。そういったことを会談形式で30分とか長ければ1時間の番組をずっと流して、それを聞いているリスナーだったんですね。そのまま在特会立ち上がった、じゃあ入ろうかっつ。(B氏、在特会、30代男性)

Bと同様に、何が閲覧のきっかけか覚えている者はほとんどいないが、そこでみた内容については詳しく記憶していることが多かった。当人にとってのインパクトの大きさととも

---

<sup>13</sup> Bは、「ネット主体で入れる場所が在特会しかなかった。選択肢はそもそもなかった、あの当時。という感じですね。何で入ったかって聞かれたら、そこですね」と述べる。これはフィッシャーのいう同類結合 (homophily) の論理である (Fischer 1975)。冒頭で述べたように市民運動は左派のものだったが、現在は右派市民運動の1つとして排外主義運動は選択されていく。こうした潜在的な支持層は、2000年代後半に限らず常に一定程度存在したと考えられるが、それを組織化する動員構造が存在しなかった。既成右翼や日本会議のような極右団体は、そうした層を組織化してこなかったと言い換えてもよい。

に、閲覧が偶発的だったことを物語っている。こうした偶然が起こる背景には、インターネット上で流通する排外主義的な情報の「物量」があるだろう。Eは、大学を卒業しても希望の仕事につけず、非正規雇用で働いていた。「ただ生活費のために働く、嫌なことをやるっていうか、そういうのが得意じゃなかった」ため、株取引で生計を立てようと試みて、インターネットとの接点ができる。

ADSL という技術が 2000 年くらいにできて、僕も 2002 年の 9 月 12 日に契約して、そこから常時接続のネット環境ができた。これがライフスタイルを大きく変えちゃった。…要は無制限ですから、ずっと家にいて 1 日中用事がなければ朝から晩まで——仕事がない日ってことですね——ずっとにらめっこしてるんです。(E 氏、在特会以外、40 代男性)

常時接続するようになってから、暇つぶしにネットサーフィンをする者は飛躍的に増大したと思われる。E もその例に漏れないが、きっかけはネットサーフィンではなかった。個人で株取引をしていた際に、株関連のサイトにも「嫌韓」情報が入り込んでいることから関心を持つようになっていく。関係ないサイトに排外主義的な書き込みをする者は、嫌韓厨<sup>14</sup>と揶揄的に命名されているが、その活動にも一定の効果があるということになる。

ネットで株だけ(みていたの)じゃないんですよ。合間や暇つぶしにネットサーフィンするんです。2ちゃんねるとか Yahoo! 掲示板とか。その当時は日韓ワールドカップがありましたよね。それで、韓国人のマナーとかいろいろ問題があって、嫌韓コピペっていうんですかね、韓国を誹謗するようなアスキーアートとか、僕のみていた嫌韓というんですかね、韓国を誹謗するというか、ああいうのがいっぱい貼られて。僕がみていた関係ない経済とか市況の板とか、そういうところまで貼られるようになるわけです。韓国人を誹謗中傷するような…。ですからいやでもそういうのに向き合うようになったというか。(E 氏、在特会以外、40 代男性)

彼が嫌韓的な情報に接したのは偶然だったが、元々歴史に関心があったこともあり、自ら歴史関連の掲示板をみるようになっていく。そこで歴史修正主義的な立場から書き込みをして、ネット右翼として頭角を現していく。

ネット掲示板の歴史議論をはたから眺めているわけですよ。おかしいものがあれば、あるいはネット右翼と左と在日朝鮮人とで歴史——植民地時代のいろいろなことについて議論を戦わせていたわけで、興味があるものについては個別に横槍を。(E 氏、在特会以外、40 代男性)

E が明示的に排外主義を唱えるようになるのは、以下にみる 2005 年 7 月の教科書採択だった。歴史修正主義の教科書採択を阻止する運動は、ほとんどが既成革新政党の関係団体だったが、民団も採択反対の立場から活動していた。それを「在日コリアンと左翼が結託して日本を悪くしている」と捉え、ネット上だけでなく団体に所属して活動する必要を感じたと

---

<sup>14</sup> 嫌韓的な情報を、場をわきまえずに書き込む子どもっぽい行動をする者という意味。「厨」というのは、中学生を示す「中坊」を「厨房」と誤変換させたネットスラングから来ている。

いう。

「つくる会」の教科書、自治体が採択するという。それに抗議する人が人間の鎖で、それが一時期ネット上ですごかったんですよ。…これですね、韓国に対する排外主義を形成するきっかけが。何で韓国民団が日本の歴史教科書にいちいち文句言ってくるんだ、非常に不愉快に思ったんです。(E氏、在特会以外、40代男性)

Eは、これをきっかけとして靖国神社の崇敬奉賛会、主権回復を目指す会、排害社と所属を変えて活動するようになる。だが、歴史修正主義の教科書採択が最大の盛り上がりを見せたのは、2005年ではなく2001年である。その時にEが関心を持たなかったのは、まだ歴史修正主義の掲示板を閲覧していなかったからではない。彼は、新聞を読まないしテレビもみない。したがって、インターネットの常時接続によって初めて、リアルタイムのニュースに接するようになった。その意味で、インターネットがなければEは排外主義に誘引されるどころか、社会の動きに関心を持つことすらなかっただろう。だが、これは新聞やテレビの代替的機能を果たしているに過ぎず、インターネット独自の機能とは言い難い。

#### (4) リンクを通じたフレーミング——ネットで実現した動員・フレーミング過程

インターネットで偶発的に排外主義とは直接関係ないコンテンツを閲覧し、そこからのリンクを通じて排外主義に共鳴するようになるのがこの類型で、該当者は2名だった。インターネットの特性の1つは、前章でふれたIの経験が物語るように、閲覧回数に比例して人目に触れる度合いが高くなることである。

休みの日に…日本語動画で見たら1位になっている動画があって、そこに「創価学会をつぶす存在」みたいなタイトルがあったんで、「何だこれ?」と思って。「あんなところにけんか売ったら殺されるだろう」と思って。…それがきっかけです。(I氏、在特会、30代男性)

この動画は、「瀬戸弘幸さんの参院選の立候補されたときの街頭演説」であり、リンクには主権回復を目指す会や在特会の動画もあった。きっかけは創価学会を中傷する動画だったが、リンクにあった排外主義の方に関心を持つようになり、「雑誌の人が喜ぶ表現をすると、洗脳された」という。それから「月に1回2回くらい休みの日に半日動画を見て」、数年後には仕事が休みの日にデモがあったので参加している。インターネットで問題になるのは、前項でみたような単なる「嫌韓」情報の物量ではない。閲覧・再生回数が多いこと自体が関心と呼び、さらに人目に触れて関心を高めるというサイクルの形成が、排外主義運動に接して支持する者を増やしていくこととなる。これは沈黙の螺旋理論に類似しているが、反排外主義の観点から動画を閲覧したとしても生じる点で異なる。閲覧するという行為自体が情報拡散効果を持ち、排外主義運動を間接的に広げる役割を果たす。

最後に、Qも創価学会を中傷する動画をきっかけに「在日特権」に行き着いている。システムエンジニアである彼は、コンピューターにはなじみがあってネットサーフィンもしばしばしていた。その時に偶然、極右活動家の瀬戸弘幸の動画を視聴する。



きっかけとなるのは、ある方が動画で配信してたんです。…何をきっかけにあの動画を見たかという、たまたまとしか、偶然みかけたとしかいえないです。インターネットサーフィンで、ぼちぼちただみていただけです。…何かのリンクで飛んでいったんですね。…その動画というのが瀬戸弘幸さんという方だったんです。…その時は創価学会に対する批判をいってたんですね。この人いつ殺されるんだろうと、ちよくちよく、その頃から瀬戸さんのホームページを——いつ止まるんだろうというのもあって。興味を持って読み始めた、面白いことしてるなというのが最初に（持った）意見ですね。（Q氏、在特会、30代男性）

それから彼のホームページを閲覧するようになり、その関連で「外国人問題」に関心を持ってインターネットで調べるようになった。彼が初発の関心を持ったのは、瀬戸が創価学会を誹謗する動画、ある種のタブーと思っていたことを口にすると同時に興味をひかれたという。彼の場合、創価学会とも何の関係もないサイト→リンクにあった創価学会中傷の動画→演説者のホームページ→「外国人問題」の発見という経路をたどっている。

その後すぐに政治の話、外国人、朝鮮人の話もされて。そこから調べて、気になって調べたというのがあるんですけどね。裏付けるものもいろいろ出てくるわけですね、いろいろ調べて。そういう悪いことあったんだというのが。（Q氏、在特会、30代男性）

「ずんずん調べていく」とQが表現するように、検索をかけるうちに「外国人問題」の裏付けとなる（と彼に思える）「証拠」が芋づる式に出てくることになる。インターネットにおいて、①歴史修正主義、②近隣諸国の中傷、③排外主義のコンテンツは渾然一体となっている。ネットサーフィンでリンクをクリックし続けるうちに、当初閲覧していたのとはまったく関係ないサイトに行き着くのと同様に、当初の関心とは異なる「在日特権」が目飛び込んでくる。いわば、ヴァーチャル空間を飛んでいた蝶が、排外主義者の張ったクモの巣に引っかかるようなものであり、インターネットならではの現象といえるだろう。

#### 4 資源動員をめぐる後発効果

排外主義運動の指導者の1人である瀬戸弘幸は、「インターネットの普及によって、愛国心は急速な高まりを見せ」（瀬戸、2007：346）、「既成のマスメディアとネットメディアにおいては、完全に乖離」（瀬戸、2007：4）しているという。これは現実の一端を言い当てており、（質の低さはおくとして）インターネットで流通する情報量や動画を中心としたアクセスのしやすさで右派は左派を圧倒している。これは、インターネット掲示板を運動の起源の1つとし、それ以外の基盤を持たなかった新興の運動ならではの後発効果といえる。では、インターネットはマイクロ動員過程の何を変えるのか、最後にまとめておくこととしよう。

第1に、社会的埋め込み（Granovetter 1985）と弱い紐帯の強さ（Granovetter 1973）のどちらが動員に効果的かという問題を、インターネットによる動員は示唆している。資源動員論は、情報伝達のコストに関してはインターネットによる動員の特性を予測していた。だが、フリーライダー問題の解決という点では運動の基盤となる小集団が重要という以上の解を出していない。つまり、社会関係に埋め込まれた個人が、その関係ゆえに運動に参加するようになるという見方をしていた。先行研究をみると、運動の基盤となる小集団への加入（社

会的埋め込み)が、インターネットを介した動員でも意味を持つという結果が出ている (Van Laer 2010)。

しかし、日本の排外主義運動に関していえば、動員に効果的だったのは小集団を介さないインターネット経由の勧誘であった。日本には、排外主義運動の基盤となるようなサブカルチャー集団 (フーリガンやスキンヘッド) が、実質的に存在しない。こうした集団は、勧誘を効果的に進める小集団となるばかりでなく、排外主義運動への抵抗感をなくす文化的基盤ともなる。そうした基盤がない場合、集団への帰属は基本的に運動参加の抑制要因となるだろう。それに対して、排外主義が一定の位置づけを得ているネット文化への帰属は、運動への抵抗をなくす要因となる。確かに、ネット文化への帰属は弱い紐帯しか生み出しにくい (Van Laer and Van Aelst 2010: 18)。しかし、弱い紐帯の強さは数多くの多様な人へと広がる点にあり、それがヴァーチャルな基盤の特徴となる。その意味でも、狭く深い「リアルな基盤」と薄く広い「ヴァーチャルな基盤」には乖離があり、排外主義運動は後者に特化した新たな運動といえるだろう。

第2に、インターネットがマイクロ動員に及ぼす影響といっても、その度合いには一定の幅がある。前掲表5-1のうち、34名中25名はインターネットを介して動員されていた。そのうち、単に検索機能が便利に使えるという程度のもので10人と最多であった。偶発的に排外主義のコンテンツを閲覧した者は9名おり、その意味でインターネットが新規の勧誘を実現する側面はあるだろう (cf. Carty and Onyett 2006)。だが、インターネットを介したフレーミングは、6名についてしか生じていない。つまり、インターネットは新たな情報を得る場としては機能しているが、新たな認識を得る場としての機能は見劣りする。インターネットは、政治的な立場を変えるほどの影響力を持つわけではなく、既存の立場を拡張する媒介になると考えた方がよい<sup>15</sup>。第3章でみたように、以前から政治的に保守的な者が活動家になっているのは、そうしたインターネットの特性によるところもあるだろう。

第3に、ヴァーチャルな基盤に依存した動員は、その匿名性ゆえに選択的誘因 (物質的誘因や社会的誘因) に依存できない。「在日特権」の廃絶という組織目標を達成したところで、活動家たちが利益を得られるわけでもない。その意味で排外主義運動の活動家は、純粹にモラル・プロテスト (道徳的抗議) として運動に馳せ参じたことになる (Jasper 1997)<sup>16</sup>。大義への共鳴が動機になるわけだが、こうした動機は普通に考えても理解しがたい。それゆえ、不遇に対する鬱憤晴らしのような代替的な動機を想定したくなるのだろうが、本論文ではそうした説明の否定の上に出発している。では、どのように考えればいいのか。単なる差別扇動に過ぎないものを、モラル・プロテストの大義にみせる文脈にこそ目を向ける必要がある。そこで次章以降では、排外主義的な言説の背景にあるものを明らかにするべく、政治と

<sup>15</sup> これは、メディアは身体の拡張であるというマクルーハンの議論を想起させる。最初に排外主義運動と接点を持ったのが動画だった者は、25名中7名と筆者の予想より少なかった。ただし、これは動画の効果が限定的であることを意味するわけではなく、文字情報で排外主義運動に接した者も、以下のように動画をみて参加動機を持つことがかなりあると思われる。「やっぱ動画の威力はすごいですよね。ああ、こういう風な感じで街宣するのか、すごいという形ですね。それをみて、自分も何かできることがあればという形で始めたのが、参加するきっかけですね」(W氏、在特会、40代男性)。近年では、左派の市民運動も動画をアップロードすることが増えており、そうした影響については別途考察が必要になるだろう。

<sup>16</sup> モラル・プロテストについて詳しくは、成 (2001) を参照。

の関わりの分析を進めていく。

## 第六章 排外主義運動と政治

### ——右派論壇の変容と排外主義運動との連続性をめぐって——

#### 1 ミクロ動員から政治的機会構造へ

前章までは、聞き取りデータにもとづき個々の活動家が運動にはせ参じる過程を分析してきた。だが、それに加えて排外主義運動が生じる構造的背景に踏み込まなければ、問題の全体像を描くことはできない。排外主義運動は、法律や国家予算の執行と密接に関わる政治的な主張を掲げて運動を組織してきた。それを政治やイデオロギーと結びつけて議論することは意味がないとされてきたが、果たして政治との関わりをないがしろにできるのだろうか。序章と第2章では、経済不況や社会解体といった要因による説明に疑問を呈した。それを受けて、本章以降では政治との関連で排外主義運動の発生と展開を分析する。

第1章でみたように、西欧を中心とする極右政党の研究は、実証研究の積み重ねにより理論の経験的妥当性を検証してきた。その結果、初期にいわれていた大衆社会論的な説明に疑問が付され、極右の支持者像や支持の論理が大きく修正されてきたのである。日本でも、経験的研究の積み重ねにより妥当な理論を見出していく必要があると考えるが、研究は正に端緒についた段階にある。

だが、そうした蓄積がない段階であっても、入手しうるデータを最大限活用して一定の見通しを示すことはできる、とクープマンズはいう（Koopmans 1996）。彼は、西欧8ヶ国における極右暴力の分析で厳密に比較可能とはいえないデータを用いる際、吟味の上で明確な傾向や相違があるのなら意味あるものと解釈できるとした<sup>1</sup>。そこで彼は、極右の暴力を発生させる要因は「不満か機会か」と問いを立て、いくつかのデータを組み合わせて検証し、機会の方が説明力があるとする。日本では、入手しうるデータが西欧よりはるかに限られているため、否応なくクープマンズのような方法をとらざるをえない。こうした前提のもとで行うのは、「個人」ではなく「組織」と「右派論壇」に関するデータにもとづき、排外主義運動と政治との関連を問う試みである。

社会運動と政治の関係は、後述する政治的機会構造という概念で分析されてきた。これは、政治的な機会が開いた時に運動が発生することを明らかにした点で、運動のタイミングを説明するのに適している。2000年代後半になって排外主義運動が発生したのはなぜかという問いに対して、第2章では経済的要因や移民との競合では説明できないことを示した。そして前章では、インターネットや動画共有サービスの普及が強く関係しているとも論じた。インターネットの役割を重視する点では、若者の右傾化に関する社会学者の評論と変わらないが、これらはサブカルチャーの自律性を過度に想定しているように見える（北田、2005；中西、2006；大澤、2011；鈴木、2005）。サブカルチャーのみに目を向けるのではなく、まずは政治的な文脈との関連を検討することが「右傾化」という現象の解明には

---

<sup>1</sup> 彼がこのような言明したのは、欧州でデータを入手するのが不可能だったからではない。クープマンズは、クリーシのもとで1975～90年の西欧4ヶ国における新しい社会運動のイベント分析（補遺参照）を実施し（Kriesi et al. 1995）、そこから極右研究に転じた。その際、新しい社会運動と同様に極右運動についても政治的機会構造が影響を及ぼしていると考え、「不満か機会か」という問題意識を示したのが、冒頭で引用した論文となる。その後、彼は極右についてもイベント分析により暴力の規定要因を分析していくが、報道件数が少ない日本の排外主義運動については別の方法論が必要だろう。

必要だろう。そこで本章では、インターネットに加えて特定の政治的条件が排外主義運動を促進したことを示したい。より端的にいうと、排外主義運動の出現は既存保守勢力の変容に影響されているという仮説を以下では検証していく。

## 2 言説の機会構造——分析視点

### (1) 政治的機会構造と排外主義運動

政治と社会運動の関係については、政治的機会ないし政治的機会構造と呼ばれる概念のもとで膨大な研究が蓄積されてきた (Jenkins and Klandermans 1995; Koopmans 1995; Kriesi et al. 1995; McAdam 1982; Tarrow 1989, 1998; Tilly 1978)。政治的機会構造という用語は、社会運動が特定の政治環境下で形成され、その制約を受けることに着目して広く用いられるようになった<sup>2</sup>。たとえばロシアの極右運動は、政府の反グルジア政策によって勢いづき、新たなメンバーの勧誘や主張の宣伝を行っている (Varga 2008: 572)。極右運動にとっては、政治が格好の機会を提供してくれたわけである。タローによれば、こうした政治的機会には、アクセスの増大、政治的編成の変動、エリートの分裂、影響力のある同盟者という 4 つの次元がある (Tarrow 1998=2006: 139-45)。

では、こうした制度的でハードな政治に着目することで、日本の排外主義運動と政治の関係を明らかにできるだろうか。アクセスの増大という点でいえば、反差別法制で処罰される可能性がある国々と比較して、日本の排外主義運動には活動の制約が少ない。逆にいえば、反差別法制が整備されてアクセスが閉鎖されれば、排外主義運動は特定の集団を標的としにくくなる。だが、そうした国際比較の側面を除けば、アクセスの増大は意味ある要素にはなっていない。少なくとも、2000年代に入って排外主義運動が台頭したことの説明にはならないだろう。

他の3つの要素——政治的編成の変動、エリートの分裂、影響力のある同盟者は、政治が不安定で運動が入り込む隙があること、運動に好意的な政治エリートが重要であることに関わる。これらについても、日本維新の会が台頭する以前は検討する余地もなく、排外主義運動とは関係が薄いと思われる<sup>3</sup>。小泉政権以降の自民政権は、首相交代が相次ぐなど不安定な状態にあった。たちあがれ日本のような極右政党も発足しており、政治的な再編成とエリートの分裂が生じたといえる。しかし、こうした政治の不安定性は右派市民運動にとっての機会にはならなかった。

むしろ、有力な同盟者の存在の方が、右派市民運動の台頭に影響を及ぼしていたと思われる。具体的にいえば、2002年に小泉首相(当時)が北朝鮮を訪問して以降に拉致問題が優先的な政治課題になったことは、「北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協

---

<sup>2</sup> 政治的機会については必ずしも一致した定義が存在していないものの (McAdam 1996)、ここでは以下のように定義しておく。「運動の成否に関する人々の期待に影響を及ぼすことにより、集合行為への誘因を与えるような、政治環境の一貫した (必ずしも公式、恒常的なものではないが) さまざまな次元のこと」(Gamson and Meyer 1996)。政治的機会構造論について詳しくは、樋口・中澤・水澤 (1999)、成・角 (1998) を参照。

<sup>3</sup> 無党派層の多い都市部で排外主義運動がさらに勢力を拡大させ、無視できない票田となれば、保守層の一部が同盟者となる可能性はある。その意味でいえば、民主党政権下で日本政治が不安定な時に排外主義運動がもっと大規模になっていれば、日本維新の会や自民党の一部が連携する可能性すらあっただろう。

議会（救う会）」にとって大きな機会となった。政治家がこぞって拉致問題に関わるようになり、影響力のある同盟者を得ることができたからである。が、排外主義運動の場合には制度政治と距離がありすぎたため、こうした政治の変化に影響を受けているとはいえない<sup>4</sup>。

デラポルタとルフトは、運動にとっての同盟システムとして立場の近い政党を挙げ、政党のイデオロギー的位置が運動に影響を及ぼすと考えた（della Porta and Rucht 1995）。強いというならば、2012年12月の総選挙で躍進した日本維新の会は、排外主義運動の同盟者となりうる極右政党とみなしてもよいだろう<sup>5</sup>。日本維新の会には在特会で活動する地方議員もいた。同会から衆議院議員に返り咲いた西村眞悟の政治塾に通う在特会幹部もおり、その台頭が排外主義運動に影響を及ぼす可能性もあった。とはいえ、日本維新の会といえども国政政党であり、逮捕者が相次ぐ現在の排外主義運動との連携は立場を危うくする。その意味で、制度的でハードな政治的機会構造は排外主義運動にとって閉鎖的であり続けたと考えた方がよい<sup>6</sup>。

## （2）言説の機会構造論

だが、政治的機会とは政治制度や政治的行為者との関係につきるものではなく、文化的でソフトな側面に着目する議論がある（Gamson and Meyer 1996）。これは政治体による相違、政治体内部での運動間の相違、時代ごとの相違を説明する点では、制度的な政治的機会構造概念と大きく変わるものではない。すなわち、特定の政治体が固有に持つ政治文化、特定の時代の政治的風潮、政権の正統性といったことが運動にとっての機会となる。運動がいかなる政治的言説を用いるかは文化的な政治的機会によって異なり、政治的機会に相応した言説を用いなければ運動は支持を得にくい（Diani 1996）。また、新しい運動にとっての政治的機会が流動的で制度化の途上にある場合、政治文化的な風潮の変化が及ぼす影響は大きくなる（Brand 1990: 27）。その意味で、排外主義運動の発生と2000年代の政治文化には一定の関係があるのではないかと想定することもできるだろう。

こうした考え方を洗練させたのが「言説の機会構造」（discursive opportunity structure）という概念で、これはフレーミングと政治的機会構造の統合を企図している（Koopmans and Muis 2009: 648; Koopmans and Statham 1999: 228）<sup>7</sup>。言説の機会構造とは、「制度的に固定し

<sup>4</sup> 在特会と政治家の関係については、安田（2015）を参照。

<sup>5</sup> 日本では、極右政党というと海外のものだという意識が強いからか、日本の政治に対して極右という言葉を使わない。だが、英紙『ガーディアン』は2012年12月の総選挙結果について、日本維新の会を指して「極右新党が第三勢力となった」と見出しをつけている（*The Guardian*, 2012.12.16）。この記事が象徴的に示すように、日本維新の会は国際比較でいえば極右政党みなしたほうがよい（この点については補章を参照）。

<sup>6</sup> この点に関連して木村（2013）は、政治エリートとのつながりが極右運動に及ぼす影響について、興味深い指摘をしている。既成保守勢力と密接な関わりを持つ「日本を守る国民会議」が、80年代に修正主義的な教科書である『新編日本史』の編纂をリードした際には、比較的容易に政府の統制が可能だった。木村は明示的に述べていないが、90年代の新しい歴史教科書をつくる会は従来の極右団体とは成り立ちが異なるがゆえに、運動が政府に統制されにくかったという。排外主義運動はさらに既成保守勢力と距離があるため、政治エリートによって統制されにくいものと考えられる。

<sup>7</sup> 政治的機会構造とフレーミングの関連は、1990年代から議論されてきた（Diani 1996; Snow

た思考様式であり、それにより特定のまとまった考えが政治的に相対的に受容される傾向が生まれる」(Ferre 2003: 209)。これは、ある政治体のある時点においてどういった大義名分が目立つか、現実の構築が信憑性を持つか、要求が正統性を持つかを規定する(Koopmans and Statham 1999: 228)。そうした条件に合わせて運動を構築することで、支持が得られやすくなると同時に、言説の機会構造に反する運動は支持を得にくいという点では制約となる<sup>8</sup>。

制度的な機会構造と同様、言説の機会構造も変化しにくい安定的な要素から、流動的な要素(時代ごとに注目を浴びる言説)まで一様ではない。安定的な要素についてみると、たとえば米国では個人主義(プライバシー権)の文脈で、ドイツでは家族保護の文脈で中絶問題が語られる傾向がある。裁判の判決も異なる原理にもとづいてなされるため、中絶擁護運動もそれに合わせて異なる論理を用いるようになるという(Ferre 2003)。オランダの極右は、異なる宗教が共存してきた「寛容の文化」という国是を利用して、女性や同性愛者に寛容でないムスリムはオランダの寛容の文化を脅かすと訴える(ラバーズ、2010)。日本ならば、ヘイトスピーチ規制をめぐる反対論の強さが示すように、米国流の自由主義の影響下にあるため、排外主義運動は「表現の自由」を利用する傾向が強い<sup>9</sup>。同じ極右運動でも、政治文化が違えば異なる論理を用いるようになる、それが国ごとの運動の相違を生み出すわけである。

流動的な側面をみると、90年代のドイツにおける庇護権の見直しと極右の暴力には密接な関係があった(Koopmans and Olzak 2004)。この問題は、1年半にわたって政治やメディアの最優先事項となっており、その論争に乗じて極右の暴力は増加した。暴力は批判されるものの、ドイツにとって難民や庇護申請者が耐えがたい重荷になっているという見方自体は、社会的な支持を得ていた。極右の暴力は、統一後に落ち込んだ社会経済的状况に対する不満ではなく、ドイツにおける言説の機会構造が反移民になったことで発生したのである<sup>10</sup>。

筆者の関心は、言説の機会構造が排外主義運動に及ぼす影響にある(cf. McAdam 1994)。安定的な言説の機会構造としては、日本に根強くある「アジア諸国に対する蔑視」が排外主義運動の生起を促したという見方が可能だろう。実際、政治家も関連する妄言を以前から繰り返しており、言説の機会構造にも影響している(高崎、2002; 若宮、2006)。「嫌韓」

---

and Benford 1992; Zdravomyslova 1996)。筆者が言説の機会構造という概念を用いるのは、両者の統合を明示的に指向していることによる。

<sup>8</sup> こうした相違が極右政党の帰趨に及ぼした影響を分析した興味深い研究として、Art (2006)がある。本章では、機会が動員に及ぼす影響に限定して分析するが、それが目標達成にインパクトをもたらす可能性もある(McCammon et al. 2007: 731)。朝鮮学校を高校無償化から排除する理由として、世論への配慮が挙げられており、今後は運動がそうした「世論」の一部として考慮され政策に影響する側面の分析も必要になるだろう。

<sup>9</sup> これに関して、京都朝鮮学校に対する嫌がらせをめぐる朝鮮学校側が民事裁判に訴えた第一審の判決が、2013年10月7日に京都地方裁判所で出された(もっとも詳しい判決要旨は『毎日新聞』2013年10月8日朝刊に掲載されている)。判決は、人種差別撤廃条約にもとづいて被告(在特会)の行為の違法性を認めたもので、これにより特定の施設を標的としたヘイトスピーチは難しくなると思われる。

<sup>10</sup> クープマンズは、オランダのピム・フォルタインに関する研究でも同様に、社会経済的条件よりも言説の機会構造が極右の台頭をもたらしたとしている(Koopmans and Muis 2009)。

といった言葉を用いるかどうかは別として、日本的なオリエンタリズムは社会的にも政治的にも深く根を張っている。

だが、こうした日本社会の変わらぬ通弊を原因とみなしても、本論文の課題に答えることはできない。これは、オリエンタリズムやレイシズムが西欧の極右台頭の背景にあるというのと同じレベルの議論で、それ自体は正しいが現象の説明にはならない。アジア諸国に対する蔑視が常に存在するのならば、2000年代になって排外主義運動が台頭した理由の説明にならないからである。それに対して、前章でみたインターネットの普及が「アジア諸国に対する蔑視」にもとづく動員を可能にした、という見方も成り立つ。言説の機会構造は変化していないが、動員構造が変化したことで運動が発生したという説明である。

社会科学的には、こうした説明に先だって言説の機会構造が変化していないか否か、仮に変化したとしたらそれが排外主義運動に影響を及ぼしたか否かをみるべきだろう。その意味で、言説の機会構造のうち流動的な部分——本章の課題に即していえば、2000年代における言説の機会構造の特徴——に着目する必要がある。そこであらかじめ筆者の見通しを述べておくと、政治との関係によって日本の右派市民運動は表 6-1 のように分岐したと考えられる。これは、2つの機会構造を組み合わせ、それぞれの開放－閉鎖が運動の性格に及ぼす影響を示したものである。

その中で言説的に受け入れられ、制度政治にも足がかりを持つのが新しい歴史教科書をつくる会や救う会になる。歴史教科書運動自体は、内紛など組織運営のまずさにより停滞が続いている。だが、自民党右派を中心とする「日本の前途と歴史教育を考える議員の会」など有力な同盟者を抱え、教科書採択時の支援や国会での質問など多くの便宜を供与されてきた。救う会にしても、「北朝鮮拉致疑惑日本人救済議員連盟」と連携を保ちつつ活動するなど、制度政治と強い結びつきを持ってきた。その意味で両者とも制度化が進んだ運動とみなしうる。

表 6-1 2000年代の政治的機会構造と日本の右派市民運動

		制度的な政治的機会構造	
		開放的	閉鎖的
言説の 機会構造	開放的	<b>制度化</b> 新しい歴史教科書をつくる会 救う会	<b>ラディカル化</b> 排外主義運動
	閉鎖的	<b>ポピュリズム</b>	<b>マージナル化</b> 既成右翼

注：Giugni et al. 2005: 149 の表を修正して筆者作成

それに対して、同じ右派市民運動でも排外主義運動にとっての制度的な政治的機会構造は閉鎖的なままだったが、言説の機会構造は2000年代に入って開放的になった。つまり、排外主義的な言説が受容される一方で、制度政治に足がかりを持たないがゆえに、街頭で訴えるような活動に偏るラディカル化が進む。言説が容認されることで運動に共感を持つ層は一定程度存在するから、動員自体は継続的に可能になる。その一方で、主張を政治的



に反映させる回路を持たない以上、動員を直接行動に振り向けるしかないからである<sup>11</sup>。逆に、ソ連という「反共」「北方領土」をめぐる敵手がなくなってから、既存右翼にとっての言説の機会構造は閉鎖的になり、マージナル化＝衰退が進んだ。

### (3) 言説の機会構造におけるヒエラルキー

言説の機会構造という考え方は、社会運動の文化は支配的な文化の一部を借用したものであり、その意味で構造的な制約を受けているという前提にもとづく (cf. Steinberg 1999)。排外主義運動の言説も——それがいかに無知と偏見と悪意に満ちていたとしても——多くは右派エリートの言説から流用したものとする。右派エリートと排外主義運動の言説が直接つながっているというわけではないが、右派エリートの言説を流用することで、排外主義運動の言説は共鳴度を高めることができる。序章でもふれたように、排外主義運動の言説は日本政府やメディアが語ってきたことと親和性があり (鄭栄桓、2013 : 9)、本章ではそうした見方がどこまで正しいのかを検証する。

ただし、排外主義運動はネット右翼を起源の1つとしており、インターネットやマンガのようなサブカルチャーの言説も流用していると考えた方がよい。サブカルチャーでの言説は、支配的な言説の流用で作られる部分もあるが、それとは一定程度独立した性格も持つ。こうした関係を表したのが図 6-1 であり、マスメディアー右派論壇ーマンガ・ムックー排外的サイトー排外主義運動というヒエラルキー的構造になっている。ここでいうヒエラルキーとは、上段にある行為者が下段の言説を流用する関係にあることを意味している。この構造のもとでは、下段にあるマスメディアから段を上がるにつれて言説の正統性は低くなり、内容も限定的で過激になっていく。基本的には上段に位置する行為者が下段にある言説を流用する関係にあるが、単なる流用ではなく独自に加工する過程も含む点で、相対的に独立した性格も持つ。この二面性に即して、次のような仮説を立てて検証していきたい。

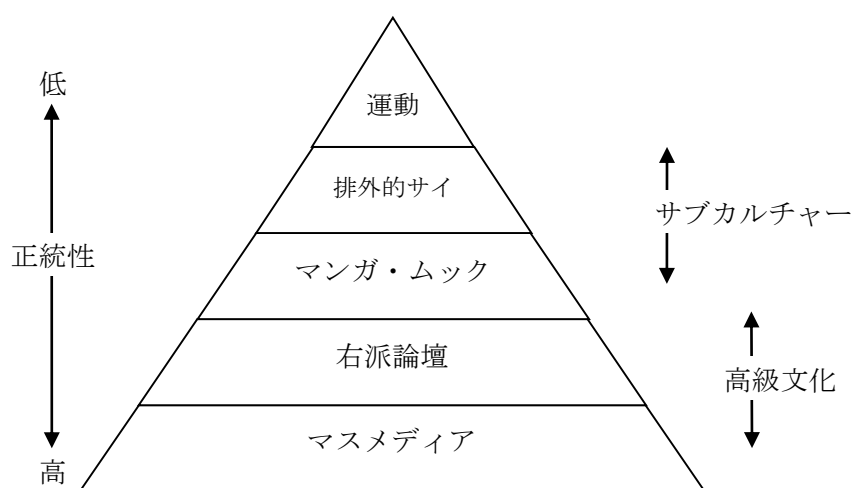


図 6-1 言説の機会構造のなかの排外主義運動  
出典：古屋 (2012) をもとに筆者作成。

<sup>11</sup> この点は、政治的機会構造の開放性と行為レパトリーの関係として議論されてきた。詳しくは以下を参照 (Kriesi et al. 1995; Koopmans 1995; Tarrow 1989; Traugott 1995)。

第1に、右派論壇は2000年代になって変化しており、それが排外主義運動にとっての言説の機会構造を開く結果となった。排外主義運動の言説は右派論壇の影響を受けており、そこからの流用という性格が強い。すなわち、排外主義運動の言説が新たに発生したのは右派論壇全体の言説の変化を受けたものと考えられ、運動の発生と右派論壇の変化には密接な関連がある。

第2に、排外主義運動の言説は、右派論壇の言説の単なる流用に留まるものではない。スタインバーグは支配的な文化と運動の言説の関係を強調したが(Steinberg 1999)、排外主義運動は独自のサブカルチャーから生まれたものでもある。つまり、マンガ・ムックと排外的ウェブサイトというサブカルチャー領域の言説は、右派論壇の影響を受けつつも、そこで独自に形成された要素もある。排外主義運動は、右派論壇とは別にサブカルチャーからも言説を借用していると考えられる。

クープマンズらは、言説の機会構造を新聞記事データでみているが、日本で「移民問題」は彼が研究した西欧ほど大きな問題とはなっていない。そのため、新聞よりは方向性が明確な右派論壇誌で言説の機会構造をみることにし、『正論』と『諸君!』(『諸君!』廃刊のため2009~12年は『WILL』で代用)の見出しでデータベースを作成した(補遺参照)。排外主義運動の行為については、在特会関連のイベントのトピックについて、同様にデータベースを作成した。これらをもとに、右派論壇が2000年代に変化したといえるのか、そして排外主義運動の行為にいかなる影響を及ぼしているのか、次節以降でみていきたい。

### 3 言説の機会構造と排外主義運動の関連

#### (1) 2つの変化の波と東アジアへの関心

まず、右派論壇の関心の変化を2つの図表からあとづけてみよう。図6-2は、記事のなかで米国、ソ連・ロシア、中国、韓国、北朝鮮が登場した頻度の推移を示す。これをみると、1990年代と2000年代に大きく2つの変化が生じている。80年代を通じて、仮想敵国だったソ連の比率は高い水準で推移していた。80年代後半には、経済摩擦により米国も潜在的な敵と表象されることが増えている<sup>12</sup>。その一方で、東アジア諸国の比率は微々たるものにすぎなかった。それが変化したのは90年代に入ってからであり、ソ連は解体に至るまでは関心を持たれていたものの、それから比率は激減して元に戻ることはなかった<sup>13</sup>。前述のように、これは既成右翼にとっての言説の機会構造を著しく狭めることとなり、それが衰退の一因であると考えられる。90年代には全体に関心が内向きになっていき、2000年には5カ国合わせて10%まで落ち込んだ。米国の保守論壇を象徴する『リーダーズ・ダイジェスト』も、90年代には内向き指向が強まっており、日本に限られたことではなく冷戦終焉の帰結といえる(Sharp 2000)<sup>14</sup>。

<sup>12</sup> この時期に『NO!と言え日本』が書かれたのは、日本のナショナリズムが直接米国に向けられた短い機会を捉えてのことだったといえる。90年代以降の日本のナショナリズムは、「おそらく日清戦争以来初めて主要な競争相手や脅威をアジア諸国に求めた」(木村、2007:217)。

<sup>13</sup> その点、米国はいったん落ち込むものの、安定して一定の存在感を示し続けている。その意味で、米国は日本にとっての「第三者の審級」(大澤、2008)というのとは間違いではない。

<sup>14</sup> ただし、米国では内向きになった結果として、フェミニズムや国内マイノリティバッシングに向かったのに対して(Sharp 2000)、日本ではそうではなかった。ジェンダーに関する記事は

ただし、90年代後半には2000年代に本格化する変化の兆しがみえており、図6-3はその方向性を示している。中曽根内閣で防衛費が増大し、ソ連に対する関心も強く、日米防衛協力のあり方が議論された80年代半ばまでは、軍事・防衛関連の記事が1割を超えることもあった。それから軍事・防衛が右派論壇の中心的な関心をしめることはなくなり、それに代わって歴史関連の記事の比率が97年に初めて10%を超えた<sup>15</sup>。この1つの背景として、『正論』の版元である産経新聞社が、97年に系列出版社の出した新しい歴史教科書に肩入れしていたことがある。2割を超えてピークとなった2005年には、中国での反日デモ、小泉首相の靖国神社参拝、教科書採択が重なっている。

だが、歴史に関する記事の増加は個別事情や一過性の事件によるものではなく、97年から民主党政権という新たな敵手が現れる2009年まで、常に10%を超えていた<sup>16</sup>。図6-3のうち折れ線グラフをみると、南京大虐殺に対する修正主義的な記事が増加した80年代後半から、歴史問題と外国の関連が強くなっている。それ以前は、好事家的な昭和史関連の記事が多く<sup>17</sup>、それに対外関連の歴史記事が加わっていく。次のピークは「慰安婦」問題の勃発を受けたものだが、この時点では歴史問題を取り上げる比率自体が低かった。歴史問題の重要性が高まり、なおかつ外国と関連づける比率が安定して高くなるのは、やはり90年代後半からであり、この構図は現在に至るまで変化していない。

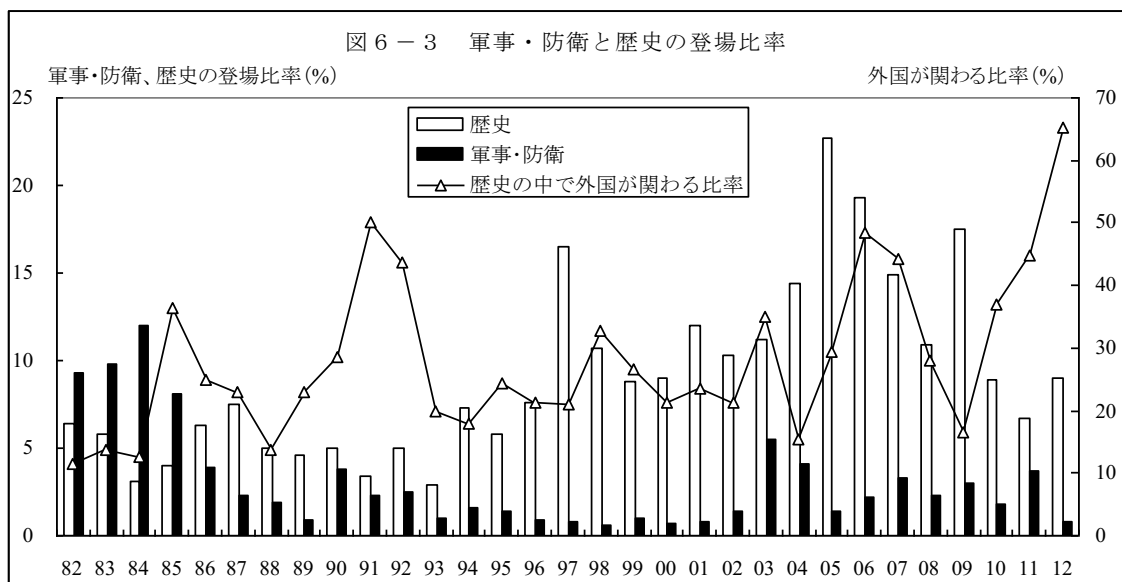
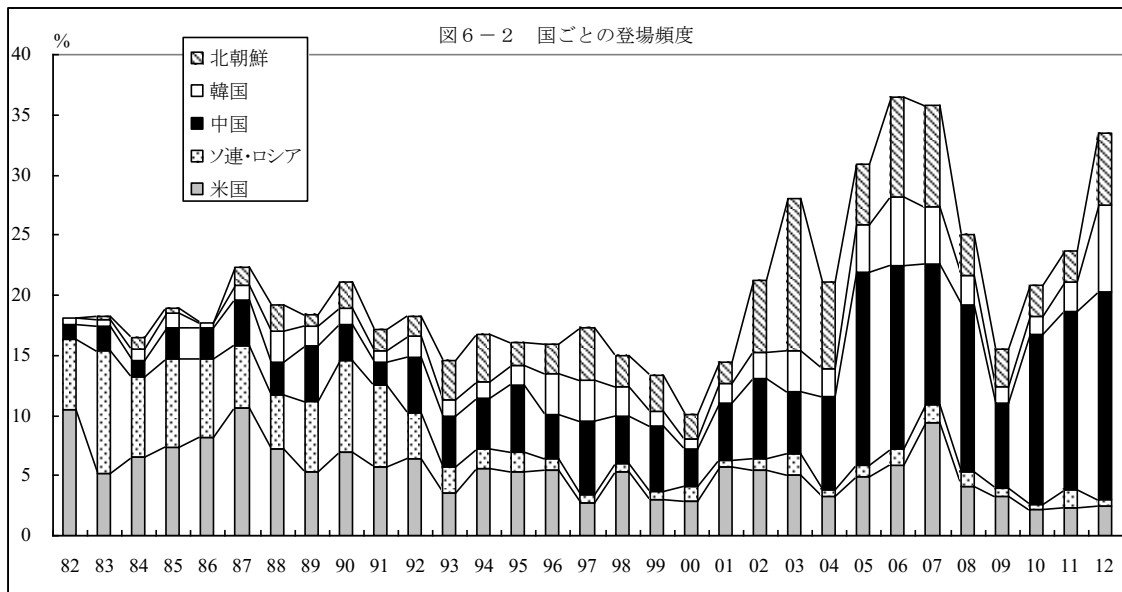
---

もともと多くないが、2002年に初めて2%に達し、ピークの2005年には2.5%であった。この頃には近隣諸国バッシングの記事が増えているから、外国に目を向けなくなった結果としてジェンダーバッシングが行われたとは言いがたい。日本の場合、フェミニズムや国内マイノリティに代わって紙面を埋めたのは、図6-3にある歴史問題だった。こうした結果が生まれた背景については、別途考察する必要がある。

<sup>15</sup> 新しい歴史教科書をつくる会が台頭した背景として、グローバル化に伴う不安が指摘されてきたが（小熊・上野、2003）、歴史をめぐる言説の機会構造が開いたことと関連づけるべきだろう。

<sup>16</sup> この時期に歴史問題が政治化したこと、それがナショナリズムと密接に関連していたことは、日本だけでなく多くの国で生じた現象だった（グラック、2007；黒沢・ニッシュ、2011）。

<sup>17</sup> たとえば保阪正康を主要な書き手とする現代史ものに対する関心は、吉野耕作（1997）が文化ナショナリズムと呼んだものになるだろう。問題は、そうした基層とはやや異なる歴史修正主義が積み重なり、あまつさえ右派の主流の歴史記述になっていった点であり、これについては吉野の枠組みでは答えられない。



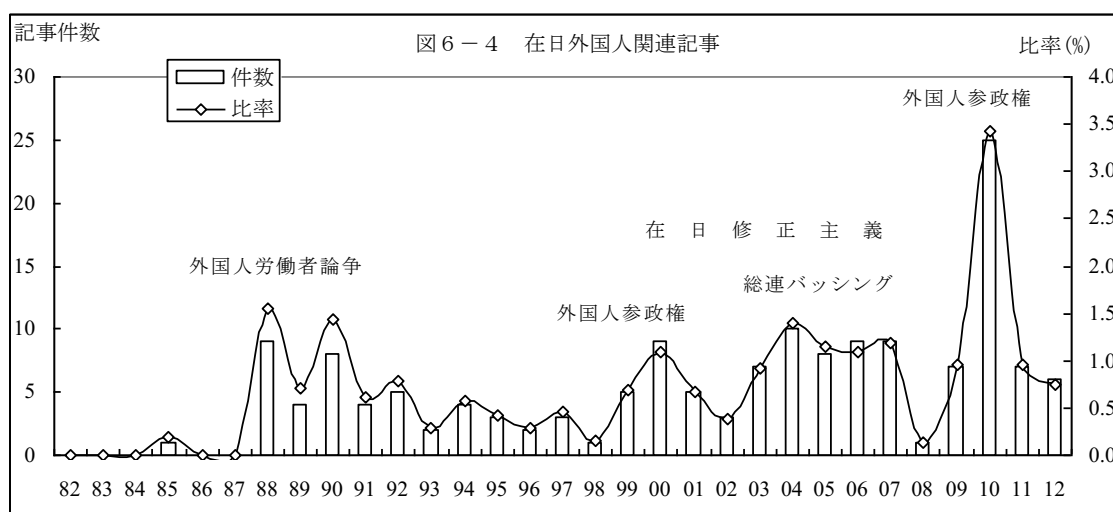
再び図6-2に戻ると、米国で同時多発テロがあった2001年から外国関連の記事が増え始め、2002年には小泉訪朝を受けてさらに増加した。これも一過性のものではなく、2009年に民主党バッシングが主役の座を奪った以外は、常に2割以上に達していた。なかでも東アジア関連記事は、80年代前半には5%に満たなかったのが、今世紀に入ってから約2割にまで増加したのである<sup>18</sup>。さらに、2003年の北朝鮮を別にすれば圧倒的に関心を集めているのは中国であり、2002年以降は米国を常に上回り場合によっては数倍にも達している。

## (2) 言説の機会構造の変化と排外主義運動

<sup>18</sup> 北朝鮮とは国交がないこともあって、歴史問題の文脈では語られない。拉致問題と核問題が主なトピックとなっており、東アジアの二国間関係の複雑さがここにも現れている。

前節で示した第 1 の仮説に沿う形で、90 年代後半から歴史問題が増加し始めており、2000 年代には東アジア諸国が最大の敵手とみなされるようになった。こうした右派論壇の変化によって直接的な恩恵を受けたのは、制度化が進んだ救う会や新しい歴史教科書をつくる会になる。排外主義運動は、前節でみたように制度政治との接点を持てなかったものの、「歴史」「東アジア」をめぐって変化した言説の機会構造と結びついていた。第 2 章でみたように、34 名の活動家が排外主義運動につながるきっかけとして挙げる出来事は、近隣諸国関連が 11 名、歴史問題が 8 名と合計で 6 割弱に達している。右派論壇の東アジア・歴史へのシフトを直接反映する結果であり、これが排外主義への入り口になっていることを示す。

それに対して、「外国人問題」が 6 名と 2 割に満たなかったのは、図 6-4 の結果と符合する。この図は、右派論壇誌における在日外国人関連の記事を計数しており、外国人労働者論争など社会的関心を一定程度反映することが、図中のキャプションから示唆される。だが、その比率は最大の 2010 年でも 3・5% にすぎない。在日外国人に対する右派論壇の関心は、全体としてかなり低いものとみてよいだろう<sup>19</sup>。換言すれば、変化した右派論壇が関心を持つのは近隣諸国と歴史に対してであり、言説の機会構造が開かれるのはこの領域においてであった。その意味で、排外主義運動の活動家の多くが近隣諸国と歴史に対する関心から出発し、「外国人問題」が導入口とならなかったのは、右派論壇の傾向を反映するからだといえる。



### (3) 右派論壇に回収されない排外主義運動

だが、排外主義運動が「在日特権」の糾弾を掲げている以上、運動の言説は右派論壇の変化で説明できない要素を不可避免的に持つ。排外主義運動は、右派論壇の言説をどの程度まで忠実に流用し、どこから分岐するのか。図 6-5 は、在特会が結成された 2007 以降に右派論壇が各トピックを取り上げた比率を示す。ここから、当該期間における右派論壇の特

<sup>19</sup> これは安倍晋三の認識についてもいえることで、彼は著書の中で外国人について 2 度ポジティブに言及するのみである (安倍、2006)。その点でいえば、外国人を敵視する石原のほうが排外主義との親和性が高く、支持基盤にも反映されている (樋口・松谷、2013)。

徴を以下のようにまとめることができる。

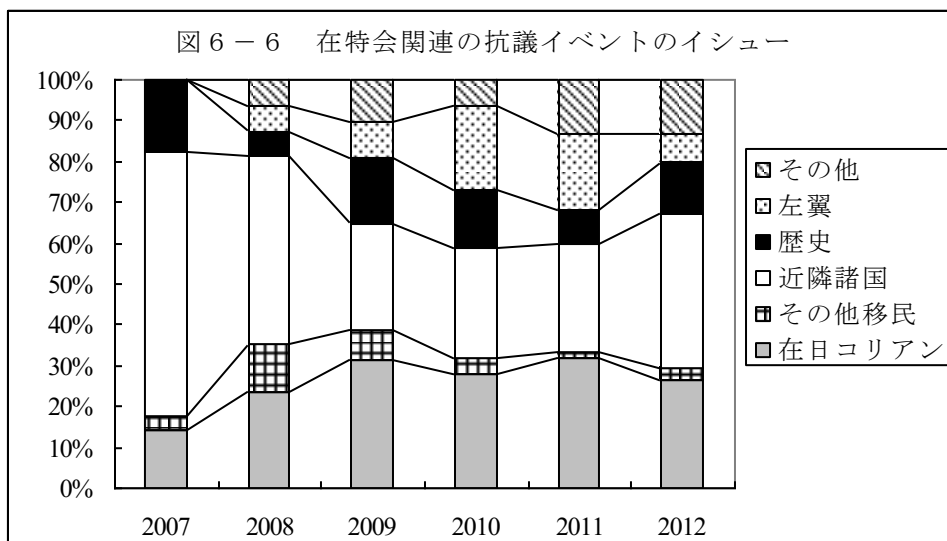
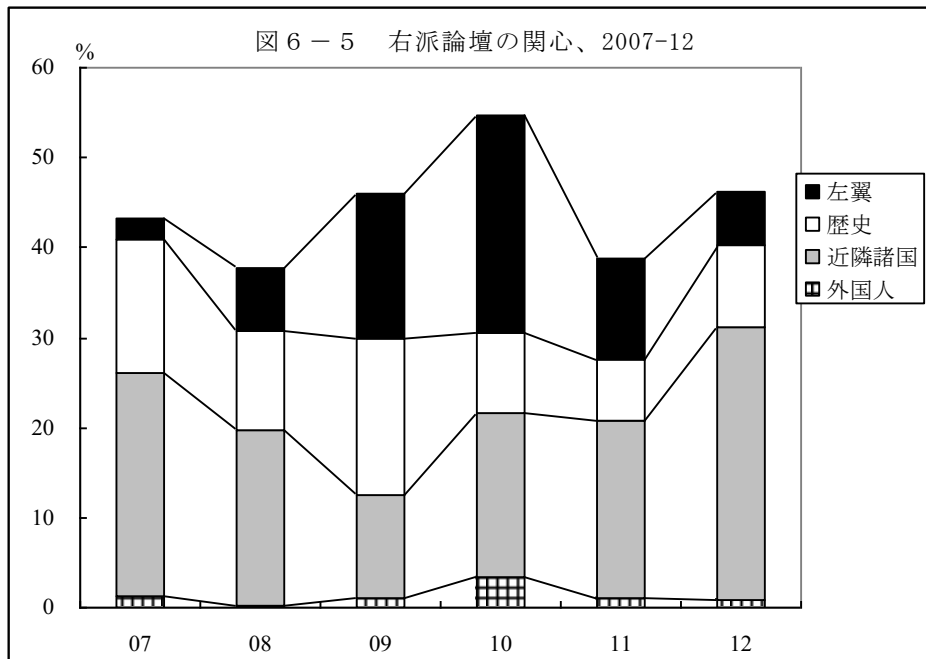
- ① 2007年には25%あった近隣諸国の比率が、2009年には12%まで低下、2012年に31%まで急増。これは、「田母神問題」（後述）での擁護記事と民主党批判が多くなったため、矛先が国内に向けたことによる。2009年には近隣諸国との関係で大きな事件が発生しなかったことも作用しているだろう。2012年に増加したのは、尖閣諸島の国有化による問題の再燃と北朝鮮の金正日総書記の死去の影響である。
- ② 2008年に11%だった歴史の比率が、2009年には18%まで増加。これは自衛隊幹部である田母神俊雄の論文が問題になった時に、擁護する記事が多く出たことによる。翌年には9%まで再び下がり、それから10%に達することはなかった。
- ③ 右派論壇からみた左翼（主に民主党）関連記事の比率は、2007年には2%に過ぎなかったのに対して2009年には16%、2010年には24%まで増加。それから再び低下し、2012年には6%に。

これらは、年単位での言説の機会構造の変化を表すものである。図 6-6 は、在特会が関係する抗議イベントにおける各トピックの比率を示しており（補遺参照）、図 6-5 と比較することで特徴を確認できる<sup>20</sup>。一見してわかるのは、直接的な外国人排斥のイベントは最大となる 2009 年でも 4 割に達しておらず、それ以外のイベントの方が多いことである。これは両義的な意味を持っており、一方では近隣諸国や歴史問題、「左翼」攻撃といったイベントから、右派論壇との類似性を看取できる<sup>21</sup>。では、右派論壇にみられる年毎の変動は、排外主義運動の行動に影響を及ぼしているのだろうか。図 6-5 について指摘した①～③の特徴が、図 6-6 についてもどこまで該当するかを確認しよう。

---

<sup>20</sup> 右派論壇誌の場合、政治的でないエッセイや回顧録など無関係の記事も含むため、関連記事の登場頻度を加算した数値を掲載している。在特会の抗議イベントは、基本的にすべてが関連するため、全体の中での比率を示した。

<sup>21</sup> 標的にはローカルな性格もあり、北海道では在特会の関係団体がアイヌを標的としたイベントを開催することもあるという（岡和田・ウィンチェスター、2015）。



- ① 近隣諸国を標的にする比率は、2007年には64%、2008年には46%だったのに対して、2009年には26%と急激に低下、2012年になって38%まで増加した。量的には右派論壇の推移と似通っており、2009年までは質的にも類似した傾向がみられる。だが、2012年の増加は中国よりも韓国を標的としたものであり、韓国に対する執着がより強い点で右派論壇とは異なる。
- ② 歴史についても、量的な面だけみれば前年の6%から2009年には16%まで増加しており、右派論壇と一致している。だが、この時期に歴史関連のイベントが増加したのは、「慰安婦」関連の企画や民団の歴史展示会の妨害といったローカルなイベントへの嫌がらせによるものだった。田母神擁護のイベントは1件のみであり、歴史関連の帰趨は言説の機会構造に影響されたものとはいえない。むしろ、排外主義運動が拡大するなかで、歴史関連の催しの妨害という定番の標的を見出したことの結果であり、組織

レベルの変化を表すものである。

- ③ 「左翼」に対する攻撃は、2009年は前年の7%から9%に増えた程度であり、右派論壇の動きとは異なる。だが、2010年には反民主党政権のイベントが増加し、比率としても20%に達している。2011年には反・反原発のイベントが加わって比率は高いまま推移しているが、2012年には7%まで低下した。反・反原発以外は、おおむね右派論壇の傾向と一致している。

こうしてみると、全体として量的な推移はかなり類似しているが、歴史関連のように中身までみるとみかけ上の一致といえる部分もある。とはいえ、近隣諸国や「左翼」に対する攻撃は、かなりの程度まで言説の機会構造に忠実に反応した結果とみることができる。在特会が「在日特権」以外のイベントを多く実行するのは、「在日特権」だけでは勢力拡大に結びつかないことにもよるだろう。排外主義運動が「外国人排斥」以外のイベントを多く実施するのは、「近隣諸国」「歴史」「反左翼」について言説の機会構造が開かれており、それを利用した結果とみなしうる。その意味で、排外主義運動を目的が明確でない非合理的な鬱憤晴らしとみるよりは、言説の機会構造に反応する機会主義的な行為者とみる方が現実に合っている。

しかし他方で、言説の機会構造との関連では解けない部分が残されている。それは、近隣諸国のなかで韓国に執着する度合の強さであり、「外国人排斥」を掲げることの正統性の問題である。再び図6-2に戻って考えよう。右派論壇で2000年代に圧倒的な存在感を示すのは中国で、拉致問題との関連で北朝鮮が敵役とされる年もあった。韓国の登場頻度は中国の3分の1、北朝鮮の3分の2でしかない。ところが、在特会にとっての主たる敵は韓国であり、2013年5月に在特会がウェブ上で行った投票結果では、5272名のうち78%（4123人）が韓国を「一番嫌いな国」としていた<sup>22</sup>。中国は12%（652人）、北朝鮮は4%（246人）だから、この「嫌韓」ぶりは突出している。右派論壇の言説の機会構造を用いるならば、嫌中にもとづく活動の方が発生しやすいはずだが、現実には嫌韓の運動が台頭している。

この点についてヒントになるのは、国ごとの歴史問題の比重の相違である。中国とは南京大虐殺や教科書問題など、80年代以降は常に歴史問題を抱えてきた。韓国の場合、民主化して元「慰安婦」が名乗り出た90年代以降、「慰安婦」に代表される歴史問題が集中的に現れる。中国との間では戦後補償問題が今のところ新たに噴出しているわけではないが、韓国との間で「慰安婦」問題は最大の外交的懸案の1つであり続けている。また、中国については政治経済軍事が広く取り上げられるのに対して、90年代以降の韓国は歴史に偏って取り上げられる傾向が強く、91～05年における歴史問題の比率は中国を10ポイント弱上回っている（図6-7参照）<sup>23</sup>。右派論壇にとっての中国は、軍事も含めて全面対決する最大の敵であるのに対して、韓国は主に歴史認識をめぐる敵となることを示す。右派論壇と排外主義運動の接点はここにあり、歴史修正主義が韓国に特化したのが排外主義運動の起

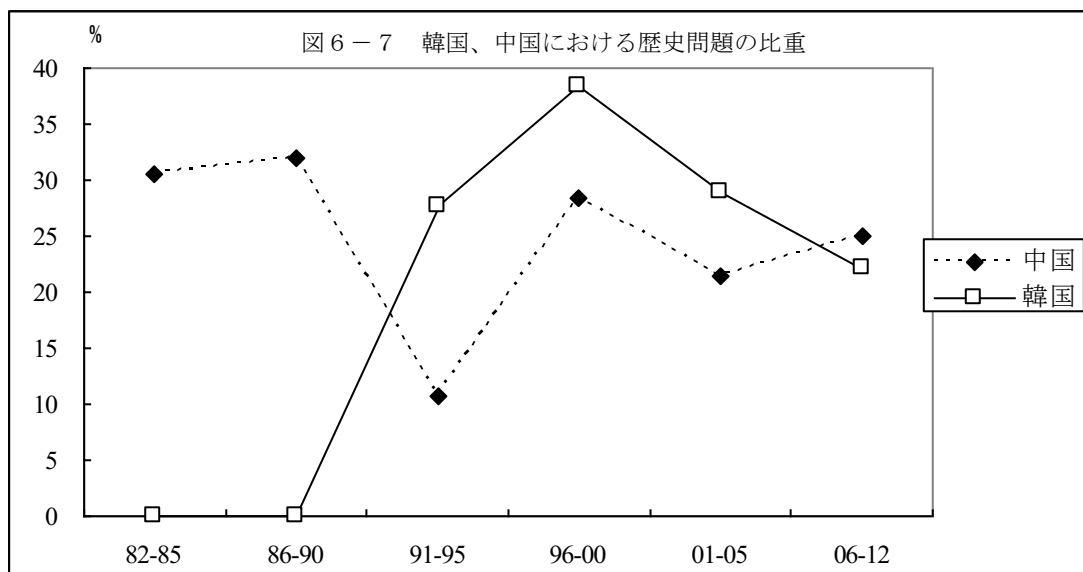
<sup>22</sup> 投票結果は以下で示されている

([http://www.zaitokukai.info/modules/xoopspoll/pollresults.php?poll\\_id=78](http://www.zaitokukai.info/modules/xoopspoll/pollresults.php?poll_id=78)、2013年6月6日閲覧)。

<sup>23</sup> 2006～12年に歴史の比率が下がっているのは、韓国に関して領土問題の比率が上がったことによる。



源となるのではないか。



だが、「在日特権」と右派論壇の関連は説明できないままであり、図 6-6 で大きな部分を占め続ける在日外国人関連の比率は、図 6-5 と大きく異なる。2010 年に外国人参政権反対の動きが生じたことくらいしか、右派論壇と排外主義運動との一致点がない。つまり、排外主義運動だから当然のこととはいえ、外国人排斥に対する執着は突出しており、この部分だけは右派論壇の変容という観点では答えられない。では、この部分は既成右翼やジャーナリズムがいう「鬱憤晴らし」「弱いものいじめ」という、非合理的なものとするのが正しいのか。整合的な説明のためには、これまでみてこなかったサブカルチャーの領域に目を向ける必要がある。

#### 4 ネットカルチャーと排外主義運動

個々の社会運動にとっては、自らが直接コントロールできない構造的な要素であるという意味で、インターネット上の論調もある種の言説の機会構造だといえる。第 2 節では、サブカルチャーも右派論壇という言説の機会構造の影響を受けるとした。だが同時に、サブカルチャーには一定の自律性があることも留保した。前章でみたように、排外主義運動はインターネットでの勧誘に対する依存度が極度に高いがゆえに、インターネットという言説の機会構造に左右されやすい。ここで問題になるのは、右派論壇を起源としないインターネット独自の言説の機会構造（自律性）の有無であり、その存在を示せば外国人排斥の説明に近づける。

インターネットと右派論壇の違いは、「嫌韓」と「在日特権」という言葉をとれば容易に理解できる。右派論壇のデータでは、「嫌韓」という言葉は 96 年と 05 年の 2 回だけ使われており、「在日特権」は一度も登場していない。これらは右派論壇誌の語彙には存在しないもので、インターネット上で作られ流通したものである<sup>24</sup>。しかも、「在日特権」は右派論

<sup>24</sup> その点で「反日」とは対照的ともいえる。「反日」なる言葉は、90 年代後半から右派論壇でよく使われるようになり（上丸、2011）、排外主義運動も好んで用いている。

壇誌ですら認知されていないにもかかわらず、排外主義運動では最重要な言説となった<sup>25</sup>。こうした言説を広めたのが『マンガ嫌韓流』（山野、2005、2006 a、2007、2009）であり、第2巻には「在日特権」を銘打った章が含まれている<sup>26</sup>。だが、4巻合計で100万部近く売れた『マンガ嫌韓流』と作者の山野車輪を、基本的に右派論壇は黙殺した（大月、2005）。知名度に格段の差があるとはいえ、『ゴーマニズム宣言』と作者の小林よしのりが重用されたのとは、ある意味対照的ともいえる。「在日特権」なる言説は、新聞はもちろん右派論壇誌も含めて流通することはなく、インターネットとマンガ・ムック限定で広まった<sup>27</sup>。

『マンガ嫌韓流』の作者である山野車輪は、近隣諸国関連のスレッドができる前から2ちゃんねるを閲覧していた。「調査はほとんどが活字の本」（山野、2006 b : 9）と述べているが、アイデアやトピックは2ちゃんねる掲示板などインターネットから得ていたと考えられる。彼は2002年末に漫画を書き上げており、当時は引き受けてくれる出版社がなかったのでインターネットで公開したという。それから少し遅れて2003年9月には、在特会前会長の桜井誠も自分のサイトを開設している<sup>28</sup>。この時期には、掲示板などで読み捨てられていた嫌韓的な言説が、個人サイト上で体系化していったと考えられるだろう。実際、桜井のサイトは「投稿してきた掲示文をまとめて」作ったものだと述べている（桜井、2006 : 236）。

こうした体系化が進む以前、正確には2001～02年に嫌韓的な言説がネット上で流通した背景として、インターネット上で韓国の情報が得られやすくなったことがある。この時期には韓国主要紙の日本語版サイトが整備され、ポータルサイトで日韓自動翻訳サービスが始まっていた（木村、2007 : 216）。桜井（2006 : 236）も、「初めて韓国人たちと議論するようになったきっかけは、中央日報の翻訳掲示板」と述べている。

この時期におけるネット上の情報拡散の過程と特徴については、村上（2007）による「韓国のつしま」という歌に関する分析が興味深い。この歌は、2001年10月から日本のインターネット上で知られるようになり、2002年8月に翻訳記事が拡散し、2004年11月には「対馬乗っ取り計画」という脅威論となった。そもそもこれは、対馬は韓国領だと言ったものではなく、独島（竹島）が韓国領だと主張する趣旨の歌であった。それが日本のインターネットでは、文脈が完全に無視されて情報拡散したため、「韓国が対馬を狙っている」という脅威論にまで転じている。「在日特権」も同様の曲解が積み重なって生まれたものと考えられる。

『マンガ嫌韓流』は、こうしたインターネット上の言説を流用して活字となった。これは予想外の売れ行きを示すものの、サブカルチャー内部の言説に留まっていた。その意味

<sup>25</sup> インターネットにおける嫌韓的な書き込みの広がりについては、さしあたり金明秀（2011）の体験談を参照。韓流と反韓流の関係については、黄（2011）を参照。

<sup>26</sup> 『マンガ嫌韓流』については、福本（2008）、韓英均（2010）、原尻（2006）、板垣（2007）、松本（2012）を参照。

<sup>27</sup> 『マンガ嫌韓流』は当初ムックとして発売されており、その関連本もすべてムックとして出ている（別冊宝島編集部編、2005、2006 a、2006 b）。

<sup>28</sup> 在特会広報局に対して、桜井に対する聞き取りを再三依頼したものの、結局応諾されなかった。単に主張を聞くのであれば受諾された可能性はあっただろうが、ライフストーリーを語るという趣旨の調査には答えたくなかったのだと思われる。そのため、桜井に関しては間接的な情報にもとづく以上のことは書けなかった。

で、在特会を典型とする排外主義運動は、サブカル限定排外主義としての側面も持つ<sup>29</sup>これは、インターネット空間における言説の広がりには限界があることを示す。それでも、ムックとして流通した時には100万部近くを売り上げたのは、サブカルチャーに相対的自律性があることの証左でもあろう。

「嫌韓」「在日特権」のもう1つの特徴は、それがネット上の言説にとどまらず、現実世界に持続的な影響を及ぼしてきた点である。ネット上の言説が現実世界に現れた例として挙げられるのは、「吉野家祭り」「24時間テレビマラソン監視」（伊藤、2011）や「田代祭り」「湘南ゴミ拾いOFF」（前田、2004）のような一過性のいたずらであった。こうした出来事について前田（2004）は、現実／物語という2分法のもとで、前者と後者の間での急激な移行と循環があるという。だが、「在日特権」という「物語」が生み出したのは、排外主義運動という安定した「現実」である。

ここで再び、前章でみた活動家たちの経験を想起していただきたい。彼ら彼女らは、インターネット上のリンクをたどるうちに、当初の関心とは異なる「在日特権」に行き着いていた。ネット上では「歴史」と「在日特権」にはほとんど懸隔がない。その意味で、本来は物語でしかない「在日特権」の信憑性は、それと近接する近隣諸国への敵意と歴史修正主義の受容によって担保されている。その結果「在日特権」は、物語（ネタ）としてではなく実在する現実として受容され、現実世界での運動を生み出すに至った。比喩的にいえば、「在日特権」という城の本丸は、東アジアと歴史に関わる修正主義的言説を受容した段階で、外堀が埋められたようなものだった。両者の違いは本質的なものというよりは、前者はサブカルチャーでしか流通しておらず、サブカルチャーを通して初めて受容されるという程度のものでしかなかったのである。

## 5 右派論壇の鬼子としての排外主義運動

イタリアの極左テロリズムを、左翼が期せずして生んだ「鬼子」だとする議論に対して、デラポルタとタローは抗議サイクルの論理的な帰結であると反論した（della Porta and Tarrow 1986）。2000年代に変化した言説の機会構造は、インターネットを経由することで「在日特権」という鬼子を生み出した。日本の排外主義運動は、右派論壇の変容が生んだ「鬼子」ではあるが、それはインターネットを介して変形したがゆえに、鬼子扱いされているだけのことである。これは外部からみると不快で不可解なものであるが、ネットサーフィンする者にとっては容易に受容できる程度の距離しかなかった。

つまり、排外主義に至るほとんどの要素は、右派論壇の言説の機会構造が開かれた時に用意されており、そこに技術的条件の変化という媒介が加わったに過ぎない。その両方の条件が揃ったのが2000年代後半なのであり、排外主義運動の発生はこの2つの要素によって説明可能である。また、排外主義運動の抗議イベントをみる限り、言説の機会構造に対してかなりの程度忠実に反応しており、政治との関わりを否定するのは難しい。その意味で、排外主義運動が「保守」を自認するのは誤りとはいえず、排外主義運動の奇矯さは「保守」の変容との関連で分析する必要がある。

また、本章では右派論壇→（インターネット）→排外主義運動という影響関係を想定し

---

<sup>29</sup> これが歴史修正主義運動との違いで、「(つくる会と比べて) いっそう、マスメディアも公教育もスキップするような形で動いて」（板垣、2007：34）きたのが特徴といえる。

てきた。だが、こうした一方通行により言説が「劣化」という因果関係に留まらない現象も生じている。前述の「対馬が危ない」という議論は、インターネットを起点とするデマであったが、それが右派論壇誌でも取り上げられるに至った。対岸の釜山から観光客が訪問することも、韓国による対馬乗っ取りの一環と曲解される（山本、2010）。外国人参政権によって外国人がキャスティングボートを握り、離島が乗っ取られるという議論も、元々はインターネット上のデマであった。

プロローグでみたように、こうしたデマは国会での質問という形で保守政治に逆流している。タイムスパンを伸ばしてみれば、排外主義運動から右派論壇に言説が流れ込む状況が生じているのである。なぜそのようなデマが受け入れられるのか。次章では、外国人参政権を例にとって背景的な要因を明らかにしていきたい。

## 第七章 国を減ぼす参政権？ ——外国人参政権問題の安全保障化——

### 1 外国人参政権問題をめぐる日本の特殊性——問題の所在

外国人参政権——学術的には明快で論議を呼び起こすような用語ではない。だが、政治的にはそうではなく、ある民主党国会議員に聞き取りした際、誤解を招くから「外国人参政権」と呼ばないでほしいと言われた<sup>1</sup>。別の民主党幹部にインタビューした時にも、筆者が「外国人参政権」といったら「地方参政権の問題ね」と即座に言い直された<sup>2</sup>。単に「参政権」というと国政選挙権を含むものと理解され、反対論が増えるからだという。地方参政権と呼んだところで事態が変わるわけではないが、外国人参政権がセンシティブなイシューであることを物語る。

「外国人参政権に反対する会」という団体まで存在するくらい、外国人参政権は排外主義運動にとって重要なイシューである。前章で、排外主義運動は言説の機会構造の変化に乗じた活動であると論じたが、外国人高齢者に対する福祉給付金のように運動以外問題視しないものは多い。だが、外国人参政権に関しては言説としても実際の運動としても、既成保守と排外主義運動の類似性が際立っている。保守から極右まで、怪しげな論拠にもとづき反対一色で盛り上がるのが、外国人参政権をめぐる現況となる。

しかし、これは日本に特異な現象であることを、議論に先立って確認しておく必要がある。他の国でも、外国人参政権に対する政治的な反対がないわけではない。フランスでは、ミッテラン政権の社会党が外国人参政権付与を公約に掲げたものの、保守政党や共産党の反対により実現しなかった (Moulier-Boutang 1985; Rath 1990)。ベルギーでは、1970年代から外国人参政権が政治的課題となりながら、反対に阻まれて2004年ようやく法制化が実現した (Earnest 2008: 113; Jacobs 1999; Jacobs and Swyngedouw 2002)<sup>3</sup>。しかし、これらの例も含めて外国人参政権が日本ほど政治的に注目される国はなかった。多くの国では、法律論をクリアしたうえで<sup>4</sup>時の与党が参政権を付与する方針を打ち出せば、法制化への抵抗は大きくなかったのである (Hammer 1990)<sup>5</sup>。その意味で、違憲判断もないのに政治的な反対だけで実現が阻まれている日本の特殊性は際立っている<sup>6</sup>。

欧州で外国人参政権が政治問題化しなかった背景には、外国人自身が参政権を求めたわ

<sup>1</sup> 2013年2月21日、外国人参政権賛成派の国会議員に対する聞き取りによる。

<sup>2</sup> 2013年4月22日、党役員や閣僚を歴任した議員に対する聞き取りによる。

<sup>3</sup> ベルギーで反対論が強かったのは、フランドルとワロニーの言語戦争という背景がある。参政権付与によって選挙が不利になると考えたフランドルの反対により、法制化に30年以上かかった (Earnest 2008: 120-3)。その意味で、これはベルギーの多極共存型民主主義という政治体制に由来しており、日本での反対論とは異なる文脈に根ざしている。

<sup>4</sup> ドイツでは、外国人参政権が違憲と判断されたため立法化されなかった (Rubio-Martin 2000)。その代わりに、国籍法に出生地主義を導入することで第二世代の政治参加を可能にしている。

<sup>5</sup> そうであるがゆえに、外国人参政権に関する政治学的な研究は少ない。管見では本文で引用したもののほか、米国の状況 (Hayduk 2006) や韓国の状況 (木村、2011) が紹介される程度である。

<sup>6</sup> 日本での外国人参政権をめぐる議論は、基本的に参政権の是非をめぐる主張に回収されてしまい、議論が加熱する背景を分析する視点はない。英語でも日本の外国人参政権にふれた文献はいくつもあるが、そうした問題意識はみられなかった (Chapman 2008; Kalicki 2008)。

けではなく、統合政策の一環としてエリート主導で進められたことがある（Hammar 1990; Jacobs 1998）。つまり、強い要求も強い反対もなく粛々と推進されるわけであり、在日コリアンの要望という推進要因がある日本は、むしろ実現しやすい環境にあるともいえる<sup>7</sup>。しかし、日本の反対派は年を追うごとに加熱し、言論の内容も極端なものへと変化していった。本章と次章の課題は、こうした特殊性に着眼することで、日本型排外主義とはいかなるものかを明らかにすることにある。その際、本章ではキャンベル（Campbell 1998）の方法にならって論を進めていく。すなわち、外国人参政権問題の原因や起源を探究する代わりに、日本的な問題化の仕方がいかにして特定の帰結をもたらすかを描述する。そのために、本章ではデニズンの権利と安全保障化という2つの概念を用いて経過を分析したい。

## 2 デニズンの権利と安全保障化をめぐる日本の特質

### （1）参政権論の日本の特質

#### 西欧におけるデニズンの権利

外国人参政権は、国籍と市民権を切り離して考える新しい市民権の一部と位置づけられてきた<sup>8</sup>。このうち、ブルーベイカーとハンマーの議論は頻繁に参照され、外国人の政治的権利をめぐる議論の基礎となっている（Brubaker 1989; Hammar 1990）。その背景には、西欧で定住する外国人の増加という現実があり、居住期間や生活実態に応じた権利が付与されるべきという前提がある。こうした外国人の市民権論のうち代表的なものの論理を、議論に先立って検討しておこう。

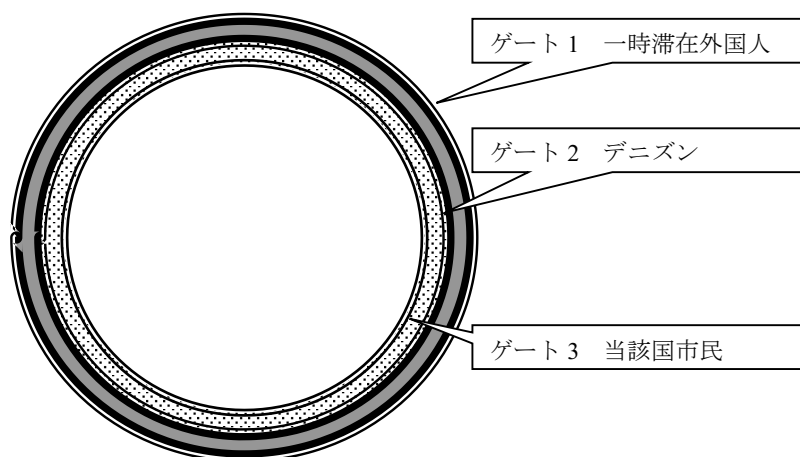


図7-1 ハンマーの3つのゲート論

出典：Hammar (1990: 17)

外国人と国民（citizen）の二分法に加えて、デニズン（denizen）という用語を移民研究に

<sup>7</sup> ただし、外国人参政権を求める運動は広がりや欠いている。在日コリアンに対する世論調査では、参政権を求める声が8割程度存在してきたが（金原ほか、1986；川崎市外国籍市民意識実態調査研究委員会、1993）、それが生身の声を持った大衆運動にはなっていない。

<sup>8</sup> 日本における紹介としては、伊藤（1991）、梶田（1996）を参照。

持ち込んだハンマーは、デニズンの権利 (denizenship) について以下のように述べている。まずデニズンとは、15～20 年以上の居住歴があり、親や子どもが当該国民であるなど家族的絆は強固で、科学者や芸術家、スポーツマンなど名誉ある地位を占めており、居住国の国籍を持たないが居住の地位を確立している (Hammar 1990: 13)。デニズンは、ハンマーのいう図 7-1 の 3 つのゲート (入国管理と在留資格によるカテゴリー分けの基準) のうち、ゲート 1 を通過した一時滞在外国人と、居住国の国籍を持つ市民の間に位置づけられる。

それまで例外的存在だったデニズンが増加したのは、西欧での移民の居住長期化と、そうした移民の帰化率の低さの結果である (Hammar 1990: 19)。ハンマーが強調するのは、そうしたデニズンの増加は民主主義に参加できない (参政権のない) 住民を生み出すことであり、これは帰化を拡大させるだけでは解決できない (Hammar 1990: 24-5) <sup>9</sup>。国籍法が出生地主義をとる国の場合、第二世代が外国人になることはないから、参政権は必要ないという考え方もある。だが、第二世代だけでなくデニズンの数も増えている以上、国籍取得も参政権付与も促進した方が、政治統合に資するものとみなされる<sup>10</sup>。政治的エリートにしてみれば、外国人を宙づり状態のままにしておくよりは、政治的に取り込んでしまった方が望ましい。その方が社会的安定につながると考えるからである<sup>11</sup>。それゆえ参政権を付与するだけでなく、実際に権利を行使して政治統合されているか否かが、近年の課題となっている (Bird, Saalfeld and Wüst 2011; Hochschild and Mollenkopf 2009; Morales and Giugni 2011; Mushaben 2008) <sup>12</sup>。

### 日本における外国人参政権の促進要因

デニズンの権利論は、日本の外国人参政権論にも輸入され有力な論拠とされてきた。実際、スウェーデンをはじめとする欧州諸国で外国人参政権が導入されなければ、日本で具体的な動きが生じることはなかっただろう。反対論者は、こうした動きは一部の国でしか生じておらず、世界的な広がりがあるわけではないと強調する。しかし、デニズンの権利論で問題になっているのは移民の政治統合であり、参政権に加えて国籍法によっても影響されることを理解する必要がある。国籍法が生地主義をとっていれば、在日コリアン二世が参政権を

<sup>9</sup> 上記のハンマーの議論を、権利の性質との関わりで整理し直したのが、レイトン＝ヘンリーの議論である (Layton-Henry 1990)。彼は、外国人が最後に獲得する市民権は政治的権利であることを強調する。国民主権のもとでは、その分だけ政治的権利のハードルは高いわけだが、それでも外国人の政治参加が具体的な政策課題となってきた。これは民主主義論の成熟を示すものでもあり、そうした観点から整理する試みが今でもなされている (Pedroza forthcoming)。

<sup>10</sup> 重国籍も、アイデンティティへの配慮と政治統合の促進を両立するという観点から提案されている (Jones-Correa 1998; Sejersen 2008)。

<sup>11</sup> デニズンの権利論には、それほど露骨ではないにせよ「危険な存在」としての外国人を政治統合するという側面がある。筆者はそれに賛同するものではないが、そうした発想すら持たず在日コリアンを政治的に排除し続けてきた日本よりは現実感覚があると考えられる。

<sup>12</sup> こうした関心にもとづき、移民・外国人の政治参加 (投票行動) に関する実証研究が、本文中で引用した以外にも蓄積されてきた (Berg and Bjørklund 2011; Berger, Galonska and Koopmans 2004; Fennema and Tillie 1999; Jacobs, Phalet and Swyngedouw 2004; Maxwell 2010; Quintelier 2009; Teney et al. 2010; Tillie 2004; Togeby 1999, 2004; Tung 1985; van Loden, Phalet and Hagendoorn 2007)。ここで得られた知見には若干のバリエーションがあるものの、おおむね一致している。すなわち、移民の投票率は高くなく、特に外国籍の場合には低い。組織に参加する者の方が投票率が高い。投票先としては労働者のそれに類似しており、中道左派政党を好む傾向が強い。

持たないことはありえないのだが、反対論はそうした文脈すら考慮しない点で学術的な議論たり得ていない。問題は、在日コリアンが民主主義的意思決定に参加できない状況が何世代にもわたって放置されてきたことにあり、これが日本の特殊性となる。

しかし、日本における外国人参政権をめぐる政治は、デニズンの権利論では説明できない部分が多い。デニズンの権利論は、第二次大戦後に欧州に渡った移民の政治統合を目的とするが、日本の外国人参政権をめぐる政治にはそうした意識が希薄である。デニズンの権利にもとづく参政権付与論としては、1994年に「さきがけしまね」が発表した外国人参政権法案があり<sup>13</sup>、こうした発想自体は後の民主党にも引き継がれている。すなわち、移民が長期間にわたり政治的権利を行使できない問題は、理念としては提示される。しかし、こうしたデニズンの権利論は政治過程に影響を及ぼす要因とはならなかった。

現実の政治過程を動かすのは、旧植民地出身者が戦後になって参政権を剥奪されたことであった。そもそも、外国人参政権の要求主体は在日韓国人であり、日本人の推進派も基本的には在日コリアンを権利の享受主体と考えてきた。政治過程のなかで朝鮮籍の排除が既定路線となったが、それは後述する安全保障化によるものであり、「特別永住者は別」という考えは今でも根強い。その背景には、戦前の朝鮮半島出身者は日本国内で国政選挙権・被選挙権を持っており、それが剥奪されたという議論がある<sup>14</sup>。したがって、日本で生まれながら選挙権を行使できない人が存在する現状、すなわち民主主義から排除される人がいる事態が問題視されるのではない。日本の特徴は、複数の市民権論が交錯するなかで、「過去の国民」(樋口、2001a)の失われた権利回復という植民地清算の論理が政治を動かすことにある<sup>15</sup>。

---

<sup>13</sup> この経緯については、さきがけしまね代表だった錦織淳・元衆議院議員へのインタビュー記事を参照(「法改正原案をだした『さきがけしまね』代表錦織淳氏に聞く」『季刊 Sai』14号、1994年)。

<sup>14</sup> 実際、スペインと旧植民地、イギリスとアイルランドや英連邦諸国のように、旧植民地出身者に対しては参政権が付与されることが多い。1949年にアイルランドが英連邦から離脱した時も、参政権が剥奪されることはなかった(Rath 1990: 139)。イギリスの場合、アイルランド人や英連邦諸国民は厳密に外国人とみなされていないことが参政権の法的な根拠となるが、アイルランドとの「密接な関係」に対する配慮がある(力久、2006)。

<sup>15</sup> こうした議論は、ハンマーのいう「帰化モデル」と「参政権モデル」に即していえば、前者に依拠した修正主義を誘発する。外国人参政権は、国籍とアイデンティティ、国民と民族にねじれを生むため反対という議論である(瀧川、2002; 鄭 2010a, 2010b, 2010c)。これは、一見すると筋が通っているようにみえるが、以下の2点で適切な解決策とはいえない。第1に、「ねじれ」自体が植民地清算の産物であるという前提を軽視するがゆえに、この論は現実的に破綻している。旧植民地出身者に対する日本政府の処遇の結果として、特別永住者は存在している。こうした「ねじれ」を生み出した経路依存性を考慮しない限り、現実には即した議論にならない。第2に、「参政権モデル」が登場したのは「帰化モデル」が機能しない現実の反映であることを蔑ろにしている。帰化で「ねじれ」を簡単に解消できるのであれば、「参政権モデル」は必要ないはずである。こうした議論は、帰化せず政治的権利を行使しないまま一生を終える人がいる現状を、是認し正当化するだけに終わるだろう。これは、「参政権が欲しければ帰化すればよい」という反対派の論理と附合しているが、一方的に帰化を迫るのはバランスを欠いている。「ねじれ」の解消という点で論理的一貫性を持たせるならば、植民地清算と国籍法の生地主義導入という提言とセットでなければならない。



## (2) 移民と安全保障化をめぐる日本の特質

### 移民問題の安全保障化

「移民と安全保障」という言葉は、「法と秩序」「平和と安定」のように、親和的な組み合わせとして相伴うことが多かった (Waters 2010: 217)。移民は安全保障上の脅威とみなされがちであるという意味だが、冷戦後には両者が露骨に結びつけられる事態が増加している<sup>16</sup>。冷戦時代には、安全保障は戦争やその原因となる国家外部の脅威をめぐる問題であったし、国家は敵性国家から国民を保護する存在であった (Ibrahim 2005: 168)。それがポスト冷戦時代になると、安全保障研究は大幅に変化した (Krause and Williams 1997)。東西対立という構図がなくなってからは、何をもって安全保障というか合意がとれないこと自体が、安全保障研究の大きなテーマとなったのである (Terriff et al. 1999:1)。

その結果、一方では安全保障概念自体を再考する動きが起きている。本章と特に関連するのは、批判的安全保障研究といわれるアプローチであり、安全保障という概念が素朴で未発達であるという認識にもとづく (Buzan 1991: 3-12)。このアプローチでは、安全保障は「危険<sup>17</sup> (insecurity) を作り出す実践」(Huysmans 2011: 2) と捉えられる<sup>18</sup>。伝統的な安全保障研究では、危険は国力や軍事バランス、敵対の程度で決まる客観的なものと考えられていた。しかし批判的安全保障研究は、危険を客観的に決まる与件などではなく、何かを危険だと名指す発話行為により人為的に作り出されるものとみなす<sup>19</sup>。

実際、根拠が薄弱だとしても何かを危険と名指してそれを排除するのは、外交政策では珍しいことではない (Campbell 1992; Hansen 2006)。イラク戦争時の米国は、結局は存在しなかったイラクの大量破壊兵器が危険だとして、開戦に踏み切った。大量破壊兵器の有無ではなく、米国がイラクを危険と名指すか否かで安全保障上の行動が決定される。本章でも、これにならって危険を所与のものとして扱わない立場をとり、安全保障化 (securitization) という概念を分析に用いる。安全保障化とは、政治化の極端な形態であり、生存に対する脅威として問題が提示され、非常手段が必要であり、通常の政治的手続きの範囲外での行動を正当化することを意味する (Buzan, Wæver and de Wilde 1998: 23-4)。安全保障化という概念により、外国人参政権に即して「安全保障問題がいかに関与、発生、発展、消滅するか」(Balzacq 2010: 56) を検討するのが、本章の課題となる<sup>20</sup>。

他方で生じているのは、食糧安全保障、人間の安全保障、環境安全保障、経済的安全保障といった、安全保障概念の大幅な拡張である。軍事的な脅威は依然として存在するが、冷戦後の世界で重要なのは安全保障に対する新たな脅威であり、それは国家ではなく社会あるいは社会の一部の水準で生み出される (Wæver et al. 1993: 2; McSweeney 1996: 85)。そのう

<sup>16</sup> 日本語での数少ない紹介として清水 (2013) があるが、訳語がおかしなところが散見される。

<sup>17</sup> Insecurity の訳語として、不安、不安全といったものを目にするが、Security との対比で使われるニュアンスをうまく汲み取った定訳を見つけられなかった。

<sup>18</sup> 批判的安全保障研究には、言語論を援用した哲学的な性格の強いコペンハーゲン学派と、それを社会学的に発展させたパリ学派がある (Balzacq 2010, 2011)。本論文では、実証研究に親和性のあるパリ学派の議論を主に用いるが、コペンハーゲン学派の著作も引用している。

<sup>19</sup> 発話行為を重視する立場は、発話をするエリートを中心にしていると批判されるが、極右運動も発話主体として想定されるので、必ずしもエリート限定ではない (Wæver 1995)。

<sup>20</sup> 別の表現を用いると、「脅威がいかにして定義され構築されるか」(Krause 1998: 306) をみることになる。

ちの1つが移民であり、移民問題の安全保障化が議論されるようになった (Bigo 2001, 2005; Ceyhan and Tsoukala, 2002; Huysman 1995, 2006; Quassoli 2001, 2004; Robinson 1998; Tsoukala 2005; Waters 2010) <sup>21</sup>。移民問題の安全保障化は、冷戦の終焉による東欧から西欧への、グローバル化に伴う南から北への流入圧力の高まり (という言説) により進展し、9・11 で加速した。

移民問題の安全保障化で標的となるのは個々の移民であり、外国よりむしろ国内で危険を生み出すものとみなされる (Terriff et al. 1999: 160) <sup>22</sup>。移民・難民は、主権国家を超えたトランスナショナルな性格を持つため、主権国家同士のような統制が利きにくく、安全保障上の脅威とみなされる。また、テロリスト、スパイ、内通者 (fifth columns) とみなされるがゆえに、非常事態に備えて軍事的対応も考慮される (Hettne and Abiri 1998: 190)。その結果生じるのは、移民が流入する国境管理の厳格化と居住する移民を安全保障の適用対象とする傾向である<sup>23</sup>。

前者で安全保障化が進むのは国境地帯であり、一方で地域統合を進めながら、他方で「西洋を囲む壁」 (Andreas and Snyder 2000) を高めるような動きが代表的なものとされる。具体的には、米墨国境地区に物理的な壁を構築したり (Andreas 2000; Andreas and Biersteker 2003)、EUの境界管理を強化すること (Lavenex and Uçaper 2002; Léonard 2010; McMurray 2001) を指す。しかし、こうした安全保障化は危険に対処している姿勢を示す象徴的な政策という性格が強く、現に米国における国境管理の厳格化は実効性を伴わなかった (Andreas 2000)。一連の管理強化は、非正規移民の滞在長期化や越境に伴う死者の増加といった意図せざる結果も生み出している (Massey, Durand and Malone 2002)。

後者で安全保障化が進むのは、フランス都市暴動が端的に示すような移民の集住地区である<sup>24</sup>。集住地区では、移民はもっぱら犯罪やテロとの関連で名指され、通常を超えた措置をとることが正当化されるようになる。フランス都市暴動後のフランスでは、国籍剥奪という極論まで飛び出した。ここで問題となるのは、集住地区で実際に犯罪が脅威となっているか否かではない。移民の犯罪を脅威とみなして安全保障化を進め、人種・エスニシティを基準とした非常手段をとることの方が問題であり、批判的な分析を要する対象となる。

## 日本における移民の安全保障化

日本では、1990年代になって移民問題の安全保障化が生じている。もっとも、それ以前

---

<sup>21</sup> 今日の国民国家は、国家間のルールを共有しない主体と対峙しなければならず、国家による暴力装置の独占に挑戦するテロリストも、そのなかには含まれる (Beck 2005)。テロリストには、政治の延長としての戦争という論理は働かない。「不法移民」も、国民国家にとって対話不能で制御不能な形でなされている。移民は、敵性国民であることよりもむしろ、そのトランスナショナルな性質ゆえに、国民国家と対立する安全保障上の脅威とみなされる。

<sup>22</sup> イスラモフォビア (イスラム嫌悪) は、安全保障化が進む典型的かつ最悪の例となったが、別の機会にまとめて論じることとしたい。

<sup>23</sup> 移民と安全保障については、不十分ではあるが昔農 (2014) が取り上げている。

<sup>24</sup> 移民と犯罪に関する研究には一定の蓄積があるが、集団の社会経済的特徴と犯罪発生率の関連を問う実証主義的なものが中心だった (Martinez Jr. and Valenzuela Jr. 2006; Peterson, Krivo and Hagan 2006; Tonry 1997; Waters 1999)。ここで得られる知見自体は有用だし、実証的な根拠のない安全保障化を批判する根拠となるが、こうした知見自体が安全保障化の材料にされることに注意する必要がある。

から在日コリアンは、朝鮮総連を筆頭に公安警察の監視対象であり続けたが、刑事警察（犯罪）で大きな問題とはされてこなかった。在日コリアンの犯罪は、絶対的な発生率も低いと思われるし、厳しい就職差別という社会経済的状況を勘案すれば驚くほど少ない。「在日韓国・朝鮮人と呼ばれる人たちの犯罪が少ないことに言及せずして、日本における犯罪の少なさの原因は語れない」（河合、2004：12）という評価が成り立つゆえんである<sup>25</sup>。その後も、プロローグでふれたように在日ムスリムは公安警察の監視下にあったが、日本における移民問題の安全保障化は主に刑事警察の管轄下で生じてきた<sup>26</sup>。

この時期に安全保障化されたのは、在日コリアンではなくニューカマー外国人（警察用語では来日外国人）の犯罪であった（外国人差別ウォッチ・ネットワーク、2004、2008）<sup>27</sup>。1980年代末の日本では、「外国人労働者」の受け入れをめぐる一大論争が展開されており、外国人は「労働者」とみなされていた。それが90年代後半になると、「外国人犯罪」がフレームアップされ、「犯罪者」として捉えられるようになる（高谷、2007）<sup>28</sup>。実際、「外国人の脅威」として犯罪を挙げる比率は日本で際だって高く（Simon and Sikich 2007）、外国人犯罪の安全保障化は「成功」を収めたといえる<sup>29</sup>。

他方で、欧米で移民の若者のドロップアウトや非行が問題化されてきたのに対して、日本で定住移民の犯罪は安全保障化どころか大きな社会問題にもなっていない。これは、犯罪と結びつけられるのが「不法滞在」であることによるだろうが、あくまで現時点では生じていないという留保をつけるべきだろう。ニューカマー若年層の進学率は全体として低く、貧困層となる可能性が高い。将来的には、「日本文化への不適応を起こした来日外国人少年たちによる逸脱行動、犯罪や非行」（鮎川、2001：175）が安全保障化されないとも限らない。さ

---

<sup>25</sup> もっとも、戦後から高度成長期までは在日コリアンの犯罪がフレームアップされていた（高橋 1969）。「闇市」や暴力団との関連などは、今でも排外主義運動の活動家が口にする事柄であり、安全保障化の底流は消えていない。

<sup>26</sup> 日本でも、9・11以降移民問題の安全保障化は生じている（Furuya 2003）。だが、9・11以後移民の意味が変化した（Bigo 2005: 66-7）とまではいえないだろう。

<sup>27</sup> そこで忘れてはならないのは、2000年に石原慎太郎・東京都知事（当時）が自衛隊に対して述べた、「石原発言」として知られる以下の訓示である。

不法入国した多くの三国人、外国人が非常に凶悪な犯罪を繰り返している。…そういう時に皆さん（自衛隊）に出動願って…治安の維持も1つ皆さんの大きな目的として遂行していただきたい。（『毎日新聞』2000年4月11日付掲載）

ここで石原は、「不法滞在者」について言及しつつも在日コリアンに関する記憶を召喚している（古屋 2005）。在日コリアンの歴史は、排外主義者にとって使い勝手の良い修正主義のプールと化してしまっている。本章の文脈で重要なのは、「例外状態」において自衛隊を出動させるという発想であり、「不法」「凶悪」という表象が安全保障化を正当化するところに注目すべきだろう。

<sup>28</sup> 社会科学的にみれば、外国人犯罪を問題視する根拠は乏しい。外国人犯罪をことさらに取り上げる論者は、性別や社会経済的地位の影響すら考慮しないような、社会科学たりえていない水準で議論している（e.g. 前田 2003）。

<sup>29</sup> 日常生活や大衆文化で犯罪やテロが安全保障化される状況を分析するべく、エスノグラフィや流行歌・タブロイド紙の分析といった試みがなされている（Debrix 2008; Pain and Smith 2008）。日本の週刊誌やマンガでも、「外国人犯罪」や東アジア諸国を安全保障化するような表象が溢れており、排外主義の分析素材として活用されてもよいだろう。

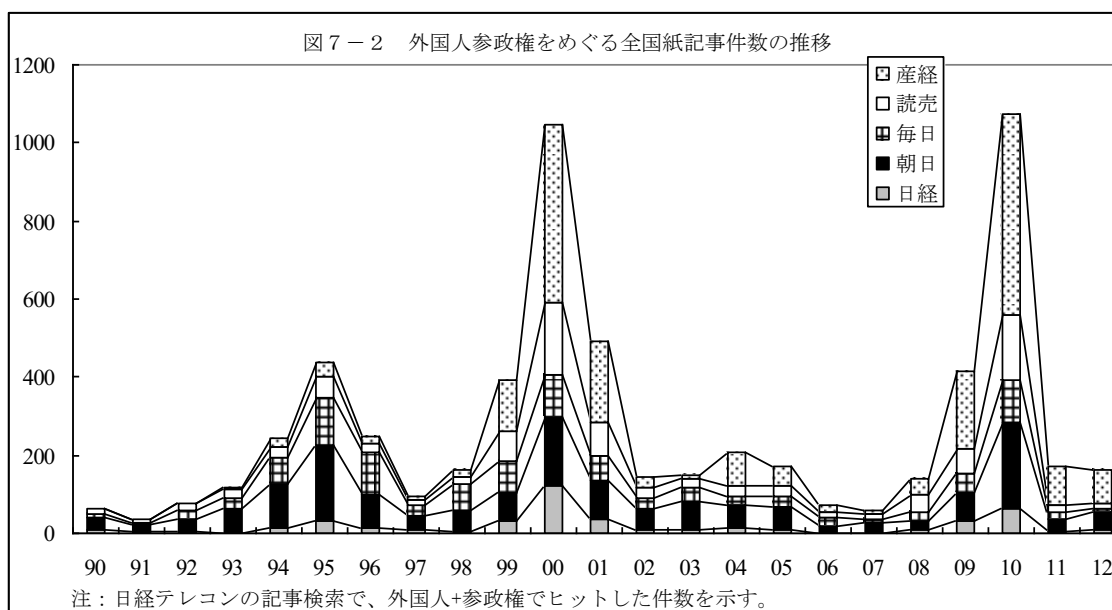
らに、欧米で生じたような国境地帯の安全保障化は、日本では生じていなかった。入国管理に携わる人員は増加したが、これは出入国者数や在留外国人数が増えた結果であり、安全保障化によるものとはいえない。「不法入国」「密航」といった言葉はある程度は使われているといえるが、それが安全保障の言葉で語られることはなかった。

では、「移民問題をめぐる国境地帯の安全保障化」という問題設定は、日本では意味がないのだろうか。ニューカマー外国人の（非正規の）流入により、国境地帯の安全保障化が生じたわけではない。だが、外国人参政権は2つの意味で安全保障化を進めることとなった。すなわち、それまで標的でなかった「在日コリアン」と「国境地帯」を組み合わせる形で、新たに安全保障化が進んでいく。そこでは根拠のない風説が提示されるが、それが受け入れられるところに安全保障化の日本的特質をみることができるだろう。

### 3 外国人参政権問題の日本的展開

#### (1) 外国人参政権問題の端緒——1995年の最高裁判決まで

外国人参政権は、なぜ日本でだけセンシティブな 이슈になるのか、日本における「外国人参政権問題」のあゆみを振り返りつつ答えていこう<sup>30</sup>。図7-2が示すように、外国人参政権が注目を浴びる時期は1995、2000、2010年と3つある<sup>31</sup>。1995年のピークは、外国人参政権を求める裁判闘争の最高裁判決が出たことによる。訴訟自体はすべて斥けられたが、最高裁判決は永住者等に「選挙権を付与する措置を講ずることは、憲法上禁止されているものではないと解するのが相当である」とした。



参政権要求自体が始まったのは、最初のピークから20年さかのぼる1975年、北九州市の韓国人牧師が市長や県知事に公開質問状を出したこととされる。これは個人的な行動だ

<sup>30</sup> 本節の記述は、部分的に原田ほか（2012b）、樋口（2011a）と重なる。経過のまとめではなく論点のまとめとしては、樋口（2001）と佐藤令（2008）を参照。

<sup>31</sup> 参政権でなく「選挙権」に関しては、それ以前から投書や民団支部の要望を取り上げた記事がいくつかある。

ったが、参政権自体の必要性はその後しばらくしてから民団と日韓議員連盟の懇談会でも議題となった（在日本大韓民国居留民団中央本部、1982）。ただし、外国人参政権を具体的に求める組織的な動きは、1980年代後半になって初めて生じている。在日コリアンの市民運動を主導していた民族差別と闘う連絡協議会（民闘連）は、85年に外国人参政権を具体的な課題として取り上げた（民族差別と闘う連絡協議会、1985）。86年になると、民団も公式に選挙権獲得運動推進を決議した。こうした動きが生じたのは、在日韓国人三世の法的地位問題の検討が始まったのが85年であり、それから指紋押捺も含めて懸案が議題に上りやすい状況になったからである。民闘連が「特別永住者は、地方自治体の参政権を有する」（民族差別と闘う連絡協議会、1989：106）という案を示すように、この時点での参政権は在日コリアンの問題と考えられていた。

参政権問題に限らず、在日韓国人の処遇に対して日韓関係が及ぼす影響は大きかった（姜・金、1989；金敬得、1995；李・木宮・浅野、2011）。民団は、韓国政府に要望を伝えることで日韓外交の議題に載せ、韓国経由で日本政府を動かしてきた。その意味で、民団単独では考慮してもらえないことでも、韓国政府の要望に反映させ日本政府に伝えるというブーメラン効果（Keck and Sikkink 1998）により一定の成果を得てきたのである。外国人参政権もその1つであり、法的地位協議に関わる韓国政府の9項目の要望に含まれていた。韓国からの要望は、日韓議員連盟での議題、日韓首脳会談での交渉課題になることで、国会や外務省に直接つながる回路を形成する。日本政府は、外国人参政権については拒否したものの、1991年に両政府が交わした覚書には「地方自治体選挙権については、大韓民国政府より要望が表明された」<sup>32</sup>という一文が付された。

こうした交渉過程の一部は新聞でも報じられているが、当時メディアの焦点となっていたのは在留資格のあり方や指紋押捺の廃止であった。外国人参政権という問題の所在を知らしめたのは、外交とは関係ない裁判闘争であり、しかも先鞭をつけたのは在日コリアンならぬイギリス国籍の大府民だった。彼は参議院選挙で投票できなかったことを不服として、1989年11月に国家賠償を請求する訴訟を起こしている。これを契機として、在日コリアンによる4件の裁判闘争が1990年から2000年まで続いた<sup>33</sup>。その最大の成果が、1995年2月の最高裁判決ということになる。

この最高裁判決を受けて、国会議員のなかでも立法化が現実的な課題として考えられるようになった<sup>34</sup>。これを機に、研究者の間でも外国人参政権は違憲ではないとする説が主流になっていく（廣田、2000；長尾、2000）。この時期の特徴は、読売新聞の社説（1995年3月2日）ですら「定住外国人にも地方選挙への参加の道を開く、画期的な判断」とするようになり、反対論が弱いことにある。産経新聞も、社論としては外国人参政権に反対であるものの、読者投稿や一般報道では賛成の意見もかなり掲載していた。前掲図7-2で確認すると、こ

<sup>32</sup> 日韓法的地位協定に基づく協議の結果に関する覚書、1991年1月10日。

<sup>33</sup> こうした裁判については、徐龍達（1992、1995）で当事者の寄稿を含めて詳しく紹介されている。

<sup>34</sup> 外国人参政権法案にもっとも熱心に取り組んだ議員の1人である公明党の冬柴鐵三・元幹事長も、この判決がなければ立法化を考えることはなかったという（インタビュー、2010年10月22日）。

の年の読売・産経の記事が全体に占める比率は、第2、第3のピークと比べて著しく低い<sup>35</sup>。強く反対しないが関心も低いわけであり、最高裁判決の時点で右派は外国人参政権を脅威とはみなしていなかったことになる<sup>36</sup>。

## (2) 第1の安全保障化——1990年代末から2000年まで

2000年のピークは、自民・自由・公明三党連立政権協議の際に、公明党の意向で外国人参政権の法制化が合意事項として盛り込まれたことに端を発している<sup>37</sup>。憲法解釈に一応の決着がついて以降、問題は司法から立法へと移り<sup>38</sup>、1998年には民主・平和改革（現公明）両党の共同法案、共産党の法案が提出されている。これは、戦後最良といわれた日韓関係と金大中大統領（当時）の働きかけによって作られた面も大きい（Chung 2010=2012: 158）。民団によると、特に金大中が外国人参政権問題に熱心に取り組んでいたとはいえないが、同年11月に来日した際の手脳会談と国会演説で、予想外に時間を割いて参政権に言及した<sup>39</sup>。この来日に合わせて、民主党・平和改革が参政権法案を提出しており、99年の訪韓時に小淵恵三首相（当時）は前向きに検討することを約束している。

2000年がピークになったのは、連立合意を盾に自民党が採決を迫られ、実現可能性の点で注目が集まったからである。このとき自民党は、「他の視点を全て捨象し、憲法との関わりから」論じ、外国人参政権は違憲の可能性が高いとする選挙制度調査会の見解を出した<sup>40</sup>。自民党内の反対の声も高まり、実質的に採決は困難になった。新聞紙上では反対派と歩調を合わせるように、読売・産経が朝日・毎日以上の熱心さで、参政権反対の立場から報道を行うようになった。だが、この時には院外でそれほど目立った議論もなく、推進派の言論は1990年代に出揃ったところで止まっており、反対派の意見も右派論壇が多少取り上げた程度である（中川 1996；櫻井、2000；高市・百地、2000；田久保、2001；八木、1999）。

とはいえ、外国人参政権反対派が可視的な勢力として現れた点で、この時は90年代半ばの状況とは異なっていた。98年の法案提出を受け、99年5月に「日本を守る国会議員の奮

<sup>35</sup> もっとも、これにはデータベースに収録される記事の計数方法の変化が一定程度作用している。産経は、1999年から大阪と東京で別個に記事を記載するようになっていたため、両本社の記事に出る大きな記事の場合には倍の件数が集計されるようになった。こうした変化を考慮する必要はあるが、それでも2000年以降の増加傾向は明確に現われている。

<sup>36</sup> 日本最大の極右団体たる日本会議も、この時点では問題が生じているという認識がなかった。推進派がこれほど力を持つようになるとも、予測していなかったという（日本会議に対する聞き取り、2011年2月19日）。この時期に出された外国人参政権関連の書籍は、要求主体たる在日コリアンの手になるものが中心であり、トーンも賛成一色に近い（『ほるもん文化』編集委員会、1992；金、1994；近藤、1996a、1996b；李英和、1993；丹羽、1995；徐龍達、1992、1995；定住外国人の地方参政権をめざす市民の会、1998）。

<sup>37</sup> この時、自民党は難色を示していたが、公明党に自由党が同調して合意に達している。この年には、自由党の連立離脱を受けて公明・保守両党による再度の法案提出、民主党による法案提出が重なった。この時点での反対論とそれへの反論については、近藤（2000）を参照。

<sup>38</sup> 最高裁判決以降、外国人参政権について憲法上の疑義があるとする議論は、法律論としてよりも政治的な言説として理解すべきという意味である。

<sup>39</sup> インタビュー、2002年7月19日。

<sup>40</sup> 自由民主党（選挙制度調査会）「外国人地方参政権問題に対する見解案（素案）」2000年5月。「（外国人の地方参政権問題）の議論をさらに深化させる必要があるとすれば、この問題は専ら憲法の視点から論ずるべき」という立場から検討している。

起を求める国民の集い」が開催され、国会議員では西村眞悟や米田建三が出席している<sup>41</sup>。この時点では保守傍流で極右と呼んでよい議員の参加にとどまっていたわけで、反対派の危機感は相対的に薄かったといえるだろう。それを受けて、連立与党だった公明・自由両党が2000年1月に参政権法案を提出し、自民党内部での意見調整が始まってから状況は一変する。このときは、自民・自由・公明の連立時の合意事項として、外国人参政権の成立が盛り込まれていた。自民党は難色を示していたが、公明党に自由党が同調して合意に達した。しかし、連立合意後に自民党内部で「外国人参政権の慎重な取り扱いを要求する国会議員の会」が結成され、反対派の裾野が大きく広がった。

これは議員有志の会であったが、実質的に反対派の拠点となったのは日本会議である。日本会議は、元号法制化を主な目的として設立された「日本を守る国民会議」と宗教右派の「日本を守る会」が1997年に合併して設立された。幅広く右派を束ねたのが日本を守る国民会議だったとすれば、神社本庁など宗教右派を入れたことで日本会議は伝統主義的な性格を強めることになる。そうした日本会議が当初の反対勢力を担ったことは、保守主義（伝統主義）にもとづく反対論が優勢だったことを意味する。現に、日本会議国会議員懇談会総会が採択した「外国人地方参政権付与法案についての決議」（2000年10月13日）で展開されるのは、以下のような論理であった<sup>42</sup>。

- ・外国人地方参政権付与法案は、憲法違反です。
- ・国籍取得条件の緩和に先ず取り組むべきです。
- ・各党の内部に反対意見がある以上、拙速に審議入りすべきではありません。
- ・朝鮮半島出身者の意思統一を待つべきです<sup>43</sup>。

これらは、いってみれば単なる守旧主義にもとづく反対論であり、これだけみれば外国人参政権問題の安全保障化が生じたとはいえない。だが、実際にはこの時点で安全保障化が始まっており、それを進めたのは反対派ではなく推進派の側だった。2000年に公明・自由が提出した法案は、98年の民主・平和改革案をもとにしているが、朝鮮籍を排除する点で民主・平和改革案とは大きな相違がある。これは、小沢一郎・自由党党首（当時）が朝鮮籍を含めると法案が通過しないと難色を示したことによる<sup>44</sup>。

小沢自身は、反対派の抵抗を和らげるため朝鮮籍の排除を求めたのだろうが、法の下に平等に著しく抵触する案とならざるをえなかった。特別永住・永住という在留資格を要件としながら、そのうち朝鮮籍だけ排除するという条項を加えたからである。提案者の冬柴自身、「特定の国の名前を指すことは控えておまして、外国人登録原票の国籍欄に国名が記載

<sup>41</sup> 『日本の息吹』140号、1999年7月、17頁。

<sup>42</sup> 「外国人参政権に異議あり——広がる反対、慎重論～日本会議国会議員懇談会総会での提言より」『日本の息吹』156号、2000年11月

<sup>43</sup> 拉致問題以降、朝鮮総連は対外的な発信が実質的に不可能になったため今でこそ表に出ないが、総連自体は本国の指示を受けて外国人参政権に反対だった。こうした在日コリアン内部での意見の分裂を憂慮する声は、在日コリアン知識人の間にも存在した（姜尚中、1994）。それを逆手にとった議論というわけである。

<sup>44</sup> 冬柴氏に対する聞き取り、2010年10月22日。この件に関して小沢氏側に確認をとったわけではないが、自由党との共同提案になって朝鮮籍の排除が入ったため、事実関係に間違いはないだろう。

された者に限るという形で仕分けをした」と苦しい表現をせざるをえなかった<sup>45</sup>。排除に至った直接の要因として、98年の北朝鮮によるミサイル打ち上げがあり、安全保障を理由として法を歪める措置がとられたことになる。

これに対して市民団体からは批判があったものの、マスメディアは実質的に沈黙した。この時点で参政権賛成を表明していた朝日・毎日の社説は、「国籍欄に『朝鮮』と記載されている永住外国人は対象外になっている」<sup>46</sup>「『朝鮮』籍の人は事実上、対象から除かれる」<sup>47</sup>と紹介しただけだった。それがどういう意味を持つのか、どう評価すべきなのかまったく論評がない。朝鮮総連は外国人参政権法案自体に反対を表明したため、参政権から排除されても抗議することはなかった<sup>48</sup>。賛成の立場にあるメディアも、総連の姿勢に乗じて朝鮮籍の排除を事実上容認し、実質的に「国防」の名の下で外国人の権利を制限することの是非を不問にしたことになる。反対派に配慮するため、永住者を除外して特別永住者だけに付与することに対しては、戦後補償的な性格が強まるとして朝日・毎日は反対している。しかし、それと同程度に重要なはずの朝鮮籍の排除は、議論されることもなく受容されていく。

この時点では、朝鮮籍コリアンが参政権を「悪用」する具体例が、情報として流布したわけではない。しかしこれは、外国人参政権問題の安全保障化を進めた端緒であり、朝鮮学校を無償化から排除する先例ともなった。それならば、外国人参政権をデニズンの権利としてではなく「過去の国民」の権利回復という趣旨にして、特別永住者に限定した方が論理的整合性はあった。デニズンの権利は、参政権の付与対象を広げる過程で論じ直すことができる。しかし、安全保障化の論理を容認してしまうと、恣意的に誰かを安全保障上の脅威とみなし、「非常手段」を行使することに歯止めがかからなくなってしまふ。

### (3) 全面的な安全保障化——民主党政権下での外国人参政権問題

2009年9月の政権交代後、鳩山由紀夫首相（当時）と小沢一郎民主党幹事長（当時）が外国人参政権法案の成立に意欲を示したことで、参政権問題をめぐる第3のピークが訪れた。反対派はマニフェストに記載していないため参政権推進は公約違反とするが、政策INDEXには以下のような記述があり、唐突に参政権法案を持ち出したわけではない。「民主党は結党時の『基本政策』に『定住外国人の地方参政権などを早期に実現する』と掲げており、この方針は今後とも引き続き維持していきます」<sup>49</sup>。

この時期、参政権関連のデモンストレーションとしてなされたのは、小沢をトップとする国会議員団の訪韓・訪中であり、アジア外交の一環として位置づけられた性格が強い。右派にとって外国人参政権は、夫婦別姓や人権擁護法と並ぶ「3悪法」とされるに至ったが、後2者は国内問題に留まった。それに対して外国人参政権は、「嫌韓」「嫌中」の文脈でも論じられるようになり、人権問題よりは近隣諸国に対する敵意を反映するものとなっていった。自民党は「外国人参政権付与法案 断固、反対します！」というビラまで作り、民主党政権の材料に用いている。言論面でも反対派の力の入れ方は際立っており、推進派はむしろ守勢

<sup>45</sup> 冬柴議員の答弁、衆議院議事録、2000年5月23日。

<sup>46</sup> 『毎日新聞』2000年1月24日付社説。

<sup>47</sup> 『朝日新聞』2000年2月12日付社説。

<sup>48</sup> 反対の理由については、柳（1996）を参照。

<sup>49</sup> 『民主党政権提言集 INDEX 2009』。



に立たされていた<sup>50</sup>。

さらに、2000年代に生じたのは中国の台頭であり、将来的には米国をも凌駕する大国になるという趨勢を背景に中国脅威論が増幅した。これは単に体制の違いに起因するものではなく、友好的とはいえない（と認識される）大きな隣国と長期衰退過程にある日本を比較したときの恐怖感もあるだろう。だが、在日中国人は、外国人参政権要求の主体とはいえ、ニューカマーの一部組織が賛意を示す程度の関わりしかなかった。そのため、中国脅威論と参政権問題が直結して論じられることは少なかった。ところが、鳩山内閣が打ち出した東アジア共同体構想と外国人参政権は以下のように結び付けられるようになり、中国脅威論にもとづく外国人参政権反対論が語られるようになる<sup>51</sup>。

東アジア共同体に参加するということは、中国の支配下に入るということを意味します。…外国人の選挙権法案は日米安保条約の解消、そして東アジア共同体への第一歩になります。（長尾、2010：62）

民主党は、外国人参政権と対中関係が結びつくとは考えていなかった。これまでの経緯からすれば当然のことで、長尾の議論は荒唐無稽というほかないが、東アジアという単位で参政権反対が語られる点は注目に値する。この議論を「補強」するかのように、2010年9月には尖閣諸島沖での中国漁船衝突事故が起きており、国境地帯の安全保障化が急速に進んだ。「国境防衛」と外国人参政権は無関係な事柄だが、「外国人の選挙権の問題は、いまや、外国人の権利問題から日本の安全保障問題に重点を移しつつある」（長尾 2011: 180）と結びつけられる。東アジアで何らかの係争課題が生じるたびに、外国人参政権問題の安全保障化を進める「論拠」が積み増されていく。日本会議による外国人参政権反対の論拠も、前項でみた2000年の議員総会決議に比べて、2010年のピラは以下のように対外関係をふんだんに盛り込むようになった<sup>52</sup>。

- ・外国人参政権付与は憲法違反の疑いがあります。
- ・教育への内政干渉が強まる恐れがあります。
- ・領土問題解決に大きな障害となります。
- ・地方参政権付与は世界の潮流などではありません。
- ・日本の政治に対する影響力が狙い。

<sup>50</sup> この時期に反対の論陣が集中的に張られている（別冊宝島、2010；早瀬、2009 a、2009 b、2010、2011；井上、2010；岩田、2009；三品、2010；百地、2010；長尾、2010；西村、2010；西尾、2010；桜井、2010；高市、2010；鄭、2010 a～d；山野、2010）。推進派による言論は後手に回っており、存在感でも圧倒されている（保坂、2011；古関、2010；丹羽、2011；朴、2011；徐龍達 2010；徐元喆 2010, 2011a, 2011b；田中、2010；ツルネン、2011）。

<sup>51</sup> こうした議論は挙げればきりが無いが、たとえば以下を参照。「在日外国人地方参政権が在日中国人に付与された場合、大量の在日中国人が住民票を与那国島に移し、親中派（反自衛隊）の町長が誕生する可能性すらある」（濱口、2010：61）。「中国の戦略から見れば…中国人永住者が地方選挙に関与し、合法的に日米離間、自衛隊配備を阻止する投票が可能となることは、まことに願ってもない提案である」（平松、2010：47）。

<sup>52</sup> 直接用いたのは日本会議のピラであるが

（<http://www.nipponkaigi.org/opinion/archives/961#more-961>）、反対論でほぼ共通のフォーマットとして利用されている。

- ・ 中国政府は中国人永住者を政治利用する！
- ・ 危ぶまれる国境周辺の離島。
- ・ このままでは間接侵略を許してしまう。

問題は、荒唐無稽な議論はかえって国益を損ねるというリアリスト的諫言すらなく、安全保障化に歯止めがかからないことにある<sup>53</sup>。日本最大の発行部数を誇る新聞の社説も、堂々と自民党作成の近未来 SF のシナリオを再演するに至っている。

国会でも自民党の小池百合子・元防衛相が、台湾有事における離島防衛の観点から、陸上自衛隊招致に熱心な与那国島（沖縄県）を例にとり、永住中国人による「集団移住」の可能性に言及した。与那国島は、直近の町議選の当選ラインが 139 票だ。特定の政治勢力が町議会を通じて陸自配備への反対運動を盛り上げようと、永住中国人を大量に集団移住させれば、反対派の町議を簡単に当選させることができる。（『読売新聞』2010 年 2 月 1 日社説）

ここに至って外国人参政権をめぐる政治は、外国人の権利をめぐる国内問題を完全に離れ、日本と他の東アジア諸国とをめぐる安全保障の従属変数になった<sup>54</sup>。その結果、日本のデニズンたる外国人は日本に居住するマイノリティとしてはみなされず、東アジア地政学における各国の代理人にさせられる。反対派が外国人参政権にみるのは、日本国内のマイノリティとしての外国人ではなく、その背後にある周辺諸国の幻影であった。それにより犠牲となるのは、外国人参政権という問題提起をしてなお 20 年以上、選挙から排除され続けてきた人たちなのである<sup>55</sup>。

#### 4 外国人参政権をめぐる脱安全保障化

「過去の国民」の権利だろうがデニズンの権利だろうが、外国人参政権は国民／外国人という二分法におさまらない現実に即した制度として広がってきた。日本に長く住む人なら参政権があってもいいのでは、というのが世論の多数意見でもあり（松谷ほか、2005；樋口・丸山、2006）、本来はそうした発想を出発点とすべきだろう。安全保障化は、そうした現実に目をふさいで単純な二分法を強引に再導入するもので、社会から二分法的思考を乗り越える力を奪ってしまう（Waters 2010: 219）。ネット右翼が「お花畑」<sup>56</sup>という表現で二分法に対する懐疑を揶揄するのに呼応して、右派政治家は現実というものは二分法的にできているのだと唱和する。安全保障という伝家の宝刀を抜くことで、常識的な判断による社会的支

<sup>53</sup> 自民党代議士である高市早苗（2010；高市・百地、2010）の外国人参政権反対論は、2000 年と 2010 年で見事なまでに上記の変化を体現している。

<sup>54</sup> 2000 年の外国人参政権法案に対して、自民党から出された代替案は簡易帰化の促進であった。これ自体は、参政権法案が塩漬けにされるとともに立ち消えになっており、単に参政権を阻止するための方便すぎない。しかし、安全保障化が進んだ状況では日本国籍取得自体が危険視される可能性が高く、そうした方便すら用いられることはないだろう。

<sup>55</sup> 外国人参政権が論じられるとき、世界的にみたときの論点はこうした人たちの権利論になる（既出の政治学的な研究に加えて、政治理論からのアプローチとして Benhabib 2004; Munro 2008; Song 2009; Soysal 1994 を参照）。

<sup>56</sup> 頭の中できれいな花畑が広がる世界を想像するような、現実離れしたおめでたい人という意味。

持は封殺されてしまう。

安全保障化という概念は、そうした二分法的な思考の方が現実から乖離しており、問題の解決ではなく新たな問題の種でしかないことを暴露する。行動科学的にいうならば、外国人参政権の法制化により外国人有権者が「特殊な」行動をとることで、安全保障上の脅威が発生することはありえない。安全保障上の脅威を理由にした参政権反対論は、誤った前提とシミュレーションにより、かえって事態を悪化させるような解を導くことになる。欧米で安全保障化の標的となったのは、国境を越えて流入する非正規移民であり、それゆえ国境地帯がクローズアップされるようになった。これ自体は、前述のように実効性がなく無駄な費用をかけて犠牲者を出す結果にしかならなかった。

「安全保障と移民」という観点からみた時の日本の特徴は、すでに生活基盤を確立した永住外国人が国境地帯に移動するという安全保障化がなされたことにある。つまり、国外にある「近隣諸国」と国内にいる「外国人」を強引に近づけて接点を持たせるのが国境という地理空間のメタファーであり、この点に日本型排外主義の特徴がある。しかし、安全保障化が発話行為によってなされる以上、生存に対する危険という思考以外の判断基準を持ち込む脱安全保障化も論理的には不可能ではない (Huysmans 2006; Wæver 1995)。次章では、こうした排外主義を生み出す歴史構造的な要因を分析するとともに、脱安全保障化を進める思考のあり方を考えてみたい。

## 第八章 東アジア地政学と日本型排外主義 ——なぜ在日コリアンが標的となるのか——

### 1 東アジア地政学と在日コリアン——問題の所在

前章でみたのは、「過去の国民」ないし「住民」の権利としての外国人参政権が、安全保障化という発話行為を経て領土問題と結合する過程であった。しかし、国境と領土問題が常に「外国人問題」の安全保障化を引き起こすわけではない。「国境に集団移住する外国人」というたちの悪いおとぎ話が、ある種の人々に信憑性を持って受け止められるのはなぜか。これは、「在日特権」というデマが受容されるのと同型の問題であり、解明に際してはプロローグでふれた東アジア地政学に立ち戻って考える必要がある<sup>1</sup>。

ただし、東アジア地政学といっても地域全体を扱うわけではなく、筆者の能力と分析対象の関係上、在日コリアンに直接関わる要素に限定する。関連する研究ではそのうち近隣諸国との関係の変化をもたらすもの、および日本の国内要因として以下が挙げられている（Söderberg 2011b: 156-7）。近隣諸国との関係＝1965年の日韓基本条約、冷戦とその終焉、金日成の死去、韓国の経済発展、日朝間の拉致問題と核問題、北東アジアでの力関係の変化と中国の台頭。日本の国内要因＝55年体制下での平和的な環境、情報フローの増加、国連人権規約の批准、女性差別撤廃条約の批准、指紋押捺廃止と特別永住資格の導入。こうした個々の要素は、排外主義運動——ひいては日本型排外主義——とどのように関係しているのか。本章の課題は、韓国と北朝鮮との関係から在日コリアンに対する日本政府の政策を整理し、それがいかなる帰結を生み出すのかを解明することにある。

### 2 分析枠組み——民族化国家としての戦後日本

#### (1) ブルーベイカーの3者関係モデル

ブルーベイカーの東欧ナショナリズム研究は、在日コリアンがおかれた状況を考える際に有益な手がかりを提供してくれる（Brubaker 1996, 1998, 2011）。旧ソ連を含む東欧諸国には、潜在的に国民国家を構成しうる民族が複数存在しており、冷戦終焉に伴う国家の再構築が錯綜した状況を生み出した。すなわち、かつての多民族社会主義国家の継承国は、冷戦後に国民国家として自己を再定義していく。国家が分裂したソ連やユーゴスラビアはわかりやすい例だが、それ以外にもポーランドにおけるベラルーシ系住民の処遇など新たな問題が各地で噴出した。ブルーベイカーは、こうした国家再編成の過程で生じた民族問題を、「民族化国家」「民族の祖国」に「ナショナル・マイノリティ」を加えた3者関係の産物とみなす（図 8-1 参照）<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 本来は、サイド（Said 1993）のいう対位法的読解を日本型排外主義の分析に適用することが必要だと考えるが、現在の筆者の能力では不可能なため、今後の課題としておく。

<sup>2</sup> 民族化国家の原語は *nationalizing state*、民族の祖国は *national homeland* である。ここでいうネーションは、シビックなものではなくエスニックなものを想定しているため、「国民」と訳してしまうと不正確になる。「国家を構成しうる民族」という意味になるだろうが、冗長なので民族と訳してある。

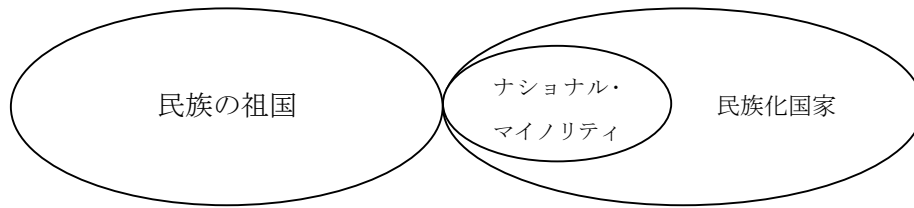


図 8 - 1 民族問題の三者関係モデル  
注：Brubaker（1996）をもとに筆者作成

「民族化国家」は、多様なエスニシティを含むが国民国家とみなされており、エリートたちは国家の基軸となる特定の民族（nation）の言語、文化、人口、経済を優遇する（Brubaker 1996: 57）。たとえば、チェコスロバキアという社会主義国家は、冷戦終焉後にチェコとスロバキアという二大民族の独立国家へと分裂した。ブルーベイカーの用語でいえば、「民族的に同質的な国民国家」（Brubaker 1998）が東欧でいくつも誕生したうちの1つとなる。これは単一民族国家などではなく、スロバキアは隣接するハンガリー系の住民を抱える多民族国家だが、スロバキア系を中心とする国家を作ろうとするわけである。

「民族の祖国」とは、ある国家が他の国に住む同胞に対して同じ民族に属していると規定し、その状況を見守り利益を守らねばならないとする場合を指す（Brubaker 1996: 58）。前段の例でいえば、ハンガリーによるスロバキア支配という歴史的経緯により、両者の関係は良好とはいえなかった。ところが、1995年に歴史的和解の証として友好条約を締結したことで、スロバキアのハンガリー系住民には言語・文化的権利が認められた（Vasilevich 2013）。「祖国」としてのハンガリーが、スロバキアのハンガリー系住民の権利に大きな影響を及ぼしたことになる<sup>3</sup>。

最後に「ナショナル・マイノリティ」とは、以下のような政治的立場をとる集団を指す。①人数的・政治的に支配的な民族とは異なる民族に属すると主張、②異なる民族性を持つことを国家が認めるよう要請、③民族的異質性にもとづく集合的な文化的・政治的権利を要求（Brubaker 1996: 60）。3者関係モデルで優れているのは、ナショナル・マイノリティと民族化国家の関係を一国内で完結するものとしてではなく、国家間関係に影響されることを明示的に打ち出した点にある。ナショナル・マイノリティの運命は、「民族化国家」と「民族の祖国」の対立するナショナリズムの狭間で翻弄される（Brubaker 1996: 5）。

3者関係モデルは、東欧のみならずマレーシアやイスラエルといった国でも適用されており、ブルーベイカーも東南アジアの華僑の分析に有益だと述べている（Brubaker 1996: 6）<sup>4</sup>。だが冷戦後の東欧のように、東西ブロックの崩壊や国家の分裂によりメンバーシップの根

<sup>3</sup> もっとも、これにはEU加盟によるマイノリティの権利保護という背景があったため、外交的な配慮だけで処遇が決められたわけではない。

<sup>4</sup> 彼の議論は東欧研究者を中心に影響力を持ち、このモデルの適用可能性を検討した書籍でマレーシアやイスラエルの分析がなされている（Iglesias, Stojanović and Weinblum 2013）。ブルーベイカーに依拠しているわけではないが、同様の構想で東南アジアの華僑を分析した優れた研究として、田中（2002）がある。

本的な再定義がなされる事例において、このモデルは有効性を発揮する。冷戦後の東欧では、単に国家の分裂が生じただけでなく、「民族の再分離」と呼ぶべき人口移動も生じた（Brubaker 1998）。ドイツへのアウスジードラーの「帰還」、ロシア・ハンガリー系住民のロシアやハンガリーへの移動は、東欧諸国が「民族的に同質的な国民国家」を目指す動きと符合していた。

これには労働力移動としての側面もあるが、移動の主たるプッシュ要因は民族紛争で、プル要因は民族的類似性だった（Brubaker 1998: 1047）。社会主義体制のもとで後景に退いていた民族という要素がメンバーシップの基準となり、国家はその中核となる民族に帰属するものとされるようになる。中核となる民族は脆弱な状況下であり、立場を強くするための措置が必要とされるという（Brubaker 2011: 1786）。移動を促進したのは、こうした民族的同質化の論理であり、移動せずに残ったナショナル・マイノリティには追放ないし同質化の圧力が強くかかる。それに民族の祖国が関与するという3者関係により、問題はさらに錯綜していく。

## （2）3者関係モデルでみた在日コリアン

### SCAPと日本政府による对在日コリアン政策

では、日本、韓国と北朝鮮、在日コリアンという3者関係により、第二次大戦後の状況をどのように分析できるのか。まず、冷戦後の東欧と第二次大戦後の東アジアには、いくつか大きな相違がある<sup>5</sup>。冷戦体制下の朝鮮半島は、韓国と北朝鮮という2つの継承国に分断された（台湾と中国も同様）。日本は北朝鮮を国家として承認していないため、朝鮮籍の在日コリアンは不利益を被ることになった。この分断は在日コリアン社会にも持ち込まれており、主要な民族団体は南北のラインに沿って組織され、統一的な団体は存在しない（原尻、1998: 131）。民族化国家としての日本は、結果的にこうした反目を利用して分割統治し、在日コリアンの力を削いできた<sup>6</sup>。

また、冷戦後の東欧がEUの影響を受けた以上に、日本帝国の解体に伴い生まれた民族問題は米国の政策に強く規定されてきた<sup>7</sup>。まず、ダワーが日本の戦後システムをスキップ・ニューズと呼ぶように（Dower 1999=2004: 下387）、入管体制の制度設計も「民主化」と「反共」というSCAP（連合軍最高司令官）の意向が反映されている（モリス＝スズキ、2005）。サンフランシスコ講和条約以降、在日コリアンの処遇に大きな影響を及ぼした日韓

<sup>5</sup> 植民地清算の一環として在日コリアンの処遇が規定されてきたことも、東欧とは異なる点であるが、ソ連の中核だったロシアと周辺国の関係に類似した要素がないわけではない。

<sup>6</sup> この点については、徐京植（1997）を参照。一方で民族学校が民団系であれば、外交関係を考慮して弾圧を控えた可能性が高いが、総連系だから「非常手段」が正当化され抗議の声も無視される。他方で外国人参政権に関しては、急に総連の意見を尊重しだして反対材料にするといった具合に、南北の分断が都合よく利用されてきた。

<sup>7</sup> もっとも、米国が冷戦構造のもとで早期に講和条約を結び、日本を対アジア封じ込め戦略の拠点にしたことは、近隣諸国のナショナリズムと相容れないものだった（李鍾元、1996）。戦争責任を曖昧にしたままで日本を国際舞台に復帰させた米国の方針が、戦争責任をめぐる多くの問題を棚上げする結果をもたらしてきた（領土問題についてもある程度該当しており、これについては豊下、2012を参照）。こうした過去の清算が、東アジア地政学において冷戦の継続と並ぶ困難な要因を作り出している。

関係も、共通の同盟国たる米国の対アジア戦略によって変化してきた (Cha 1999)。これは、排外主義運動にも影響を及ぼしているが、ここではこれ以上ふれない<sup>8</sup>。

東欧と共通するのは、民族の混合／再分離という状況が、日本帝国の膨張と破綻に伴い生まれた点にある。すなわち、実質的な支配下にあった旧満洲も含めた日本帝国の領域内では、日本からの出移民と植民地からの入移民が交錯し、民族の混合 (ethnic mixing) が進んでいた。それに合わせて、異なる民族を取り込んで支配するための混合民族論が打ち出され、それゆえ同化も可能とされた (小熊、1995)。日韓併合後に朝鮮半島から日本に渡ったコリアンは、法的には日本人として扱われ、(男性だけだが) 国政を含め参政権を持っていた。敗戦により日本帝国が解体される過程で朝鮮半島は解放され、日本人の日本への引き揚げとコリアンの朝鮮半島への帰還が進んだ (蘭、2011 ; 若槻、1991)。これは敗戦と解放に伴う民族の再分離 (ethnic unmixing) であったが (Brubaker 1998)、問題は自主的な帰還にとどまらず日本政府が「再分離」を政治的に望み、かつ政策的に進めたことにある (外村、2013)。

この背景には、在日コリアンを危険視する政治的な判断があり、①帰国の奨励、②日本居住者の権利制限、③民族性の消去と引き替えの帰化による権利付与という方針を生み出した。前掲図 8-1 に即していえば、「ナショナル・マイノリティ」を可能な限り「民族の祖国」へと帰還させ、残った者を冷遇することで、「民族化国家」の建設を進めたことになる。戦後直後には、帰国の奨励は GHQ と日本政府で共通する方針であり、「日本へ向かう輸送船には日本人引揚者を、朝鮮、台湾向け輸送船には朝鮮人、台湾人を乗せて運行」した (大沼、1993 : 36)。それに加えて、1945 年 12 月には旧植民地出身者の選挙権を「停止」する形で参政権を剥奪した<sup>9</sup>。在日朝鮮人の影響力を恐れるがゆえの政治的判断だったことが、後に明らかにされている (水野、1996、1997)。これは、女性参政権の付与と同時期に生じたことであり、「民族化」が日本人女性への権利付与と在日コリアンの権利剥奪を生み出した (金富子、2011 : 59)。戦争末期には韓国と台湾での参政権も検討していたのが、急転直下「民族的に同質的な国民国家」へと舵を切ったわけである。

占領期は 1952 年に確立する出入国管理体制が策定された時期でもあり、さまざまな構想が交錯していた<sup>10</sup>。それを要約すると、日本政府は SCAP の黙認のもとで民族的に同質的な国民国家建設を指向し、そのために在日コリアンの帰還と権利剥奪を進めたとなる<sup>11</sup>。すなわち、ある時期からの日本政府は在日コリアンの国籍選択権も考えなくなったし (大沼、1980a : 254-5)、出入国管理令を在日コリアンに適用して強制退去を容易にしようとすら試

<sup>8</sup> スデルベルクは、日本、韓国、米国に加えて中国の影響も考慮した枠組みを提示しており (Söderberg 2011a: 11)、これ自体は日本型排外主義を分析する際の基礎となるだろう。だが、このモデルの全面展開は筆者の手に余るため、基本的にブルーベイカーのいう 3 者関係に限定して議論する。

<sup>9</sup> これが「過去の国民」として外国人参政権を求める根拠であり、在日コリアンによる参政権裁判でもっとも強調される論点となっている。

<sup>10</sup> この時期における SCAP と日本政府の動向については、金太基 (1997) と大沼 (1993) に依拠している。

<sup>11</sup> 旧植民地出身者の処遇について SCAP の介入の度合いが低かったのは、政策的な優先順位が低いゆえのことだといわれる (金太基、1997 ; Morris-Suzuki 2010)。日本政府はそれを利用して、都合よく「外国人待遇」と「日本人待遇」を使い分けて旧植民地出身者が不利になるようにしていた。

みた。それまで曖昧な地位におかれていた旧植民地出身者は、1952年のサンフランシスコ講和条約発効により正式に日本国籍を喪失したとされた（文、2007）<sup>12</sup>。

これ以降、ナショナル・マイノリティたる在日コリアンは、出入国管理法と外国人登録法により管理されるようになる。この出入国管理法は、米国移民帰化局のアドバイスのもとでSCAPと日本政府が整備したものであった（金太基、1997:702; Morris-Suzuki 2010: Ch.4）。つまりこの時点までは、「民主化」に多少配慮しつつ「反共」を掲げれば、「再分離」政策についても米国の承認を得ることはできた。その結果、「民族的に同質的な国民国家」を指向する日本政府と後ろ盾のない在日コリアンという不均衡な2者関係により、对在日コリアン政策の骨格が決められたのである。

### 1952年入管体制から特別永住へ

講和条約以降の変化は、日韓国交正常化をめぐる日韓会談で在日韓国人の処遇が話し合われるようになり<sup>13</sup>、3者関係が政策を規定するようになったことである。この時点でも日本政府の基本方針は再分離にあり、日韓会談での日本側の当初案は永住資格も新規申請による、生活保護の受給者は退去強制が必要というものだった（崔、2011）。実際、日本政府は在日コリアンの存在を負担とみなし、北朝鮮への帰還事業を実質的に支援している（Morris-Suzuki 2007, 2010）。だが、朴正熙政権になってから民団は韓国政府の統制下に入って支援を受けるようになり（廬、2011）、日韓会談を通じて再分離に対抗する回路が作られた。交渉の結果、1965年には協定永住という在留資格が設けられ、韓国籍コリアンの地位は相対的に安定化したのである。もっとも、協定永住といっても退去強制については韓国側が譲歩する結果となり（小林、2011）、日本政府は依然として「再分離」の可能性を担保していた。また、在留資格こそ整備されたものの、社会保障に体现される社会的権利の多くからは排除されたままであった。

他方で朝鮮籍の者は、法律第126号という暫定的な措置での在留に留まり、協定永住の韓国籍との間で法的地位の分断が生じた<sup>14</sup>。それだけでなく、1966年から朝鮮学校の認可外しを狙いとする外国人学校法案が、69年から政治活動の規制を含んだ出入国管理法案が繰り返し提出されている（田中、1990:27-8; 尹、1992:212）。民族化国家（日本）とナショナル・マイノリティ（朝鮮籍コリアン）に加えて、民族の祖国（北朝鮮）が「敵性国家」という3者関係になると、「再分離」を貫徹させようとする動きすら生じるわけである<sup>15</sup>。

<sup>12</sup> 「ことになった」というのは、国籍喪失自体が無効であるという主張があることによる（鄭暎恵、2003:第5章）。

<sup>13</sup> そこでの論点や日韓当初案の相違については、崔（2011）を参照。

<sup>14</sup> その子や孫は出入国管理令上の在留資格（4-1-16-2 該当者、4-1-16-3 該当者）が適用されており、3年ごとの更新が必要という不安定な状況にあった。この点については、河（1976）、金敬得（1995）、大沼（1993）、坂中（1999）を参照。

<sup>15</sup> 抑圧や就職差別にもかかわらず、在日コリアンは経済的に一定の地位を占め、自治体に働きかける強力な社会運動も展開できた。これは、エスニック・ビジネスという下部構造があったことが大きいと思われる。民族金融機関以外からは融資を受けにくいといった制約があったものの、日本では外国人のビジネスに関する法的な規制はあまりなかった。韓国における華僑は、経済活動が厳しく規制された結果、台湾に移住する者も多かったという（王、2008）。つまり、ナショナル・マイノリティに対する統制は全面的なものとは限らず、エストニアやラトビアではロシア系住民の経済活動を規制しなかった。これをコメルシオは部分的な統制と呼び、ナシヨナ



かかる状況に部分的な変化を促したのは、国連人権規約と難民条約の批准という 3 者関係を越える要因であった。国際法という第 4 項が影響を及ぼすわけであり、東欧における EU と類似の機能を果たしたことになる (Smith 2002)。これにより出入国管理及び難民認定法として法改正がなされ、協定永住以外の在日コリアンの多くが特例永住という形で安定した在留資格になった (大沼、1993 : 267-9)。それに加えて、国民年金、児童手当、公営・公団住宅入居といった社会保障制度が適用されるようになった (高藤 1991)。とはいえ、1950 年から準用されてきた生活保護の国籍条項は撤廃されていないし、居住実態から考えると上記の適用も遅きに失している。条約批准に伴う国内法の整備という形でしか対応できないところに、民族化国家たる日本の性格が表れている。

最後に生じた変化は、日韓基本条約から 25 年後に見直すとされていた三世の法的地位に関する協議によるものだった。この時には、民団の意向を受けて韓国政府が 9 項目の要望を出し、日本政府と協議して「日韓法的地位協定に基づく協議の結果に関する覚書」を発表した。その意味で、北朝鮮と朝鮮籍コリアンを排除した 3 者関係により、法的地位が変更されたことになる。しかし、1991 年に施行された出入国管理特例法では、韓国籍と朝鮮籍が初めて特別永住者という在留資格で統一された。これは、入管の立場からは「特別待遇」「外国人の法的地位として世界に例のない優遇されたもの」「これ以上のものはない安定した地位」(坂中、1999 : 88) と自画自賛されている。

### 3 者関係への固執が生み出す制度的病理

では、特別永住資格を設けた入管特例法をもって、3 者関係から 2 者関係に政策が変化したといえるのか。すなわち、今なお「民族の祖国」(韓国・北朝鮮)との関係により、ナショナル・マイノリティの処遇が決められるのか。それとも、「民族化国家」として外国人を周辺化する路線を転換し、ナショナル・マイノリティの実態に即して権利を承認するようになったといえるのか。

これは、法的地位だけみても評価できない問題だが、まずは「特別待遇」という法的地位についてみていこう。特別永住と協定永住の違いは、前者では実質的に強制退去を行わないこと<sup>16</sup>、子孫に至るまで永住を保障したこと、朝鮮籍も含めたことにある。朝鮮籍も一括して特別永住資格で統一したのは、ナショナル・マイノリティとしての経緯と生活実態を考慮したからだろう。その意味で、「外国人の法的地位」については——日韓関係が基礎にあるとはいえ——2 者関係への転換があったと評価できる。だが、特別永住という旧植民地出身者を一括する在留資格は、二世どころか三世の法的地位に関する協議を待たねばならなかった。現在の特別永住に類似した処遇は、日韓基本条約の交渉段階で韓国から要請されており (金太基、1991 a、1991 b)、本来ならばその時点で法的地位を確定すべきであった。そ

---

ル・マイノリティが経済的ニッチを築くことで問題の深刻化を防いだとしている (Commercio 2008)。在日コリアンに関しても、政治と経済の関連を軸にした歴史的な分析により、新たな事実を発見できると思われる。

<sup>16</sup> もちろん、日本政府が強制退去の条項を担保している以上、その可能性はゼロではない。特に朝鮮籍の在日コリアンにとっては、そうした可能性を懸念せざるをえないような現状もある。ただし、実際に強制退去するのは政治的なリスクが高すぎるため、日本政府が悪意に満ちていたとしてもそこまでの蛮行に及ぶとは考えにくい。

れから 25 年後にようやく実現したわけで、これも遅すぎる対応といってよいだろう。

また、韓国からの要望には外国人参政権も含まれるが、日本側は検討課題にすることを拒み、覚書の末尾に「大韓民国政府より要望が表明された」という文言が加わるに留まった。それを政策課題の土壌に乗せたのは前章でみた法廷闘争であり、日本側のイニシアチブによるものではなかった。さらに、法的地位は 25 年後に一応の解決をみたが、現状では提起から 25 年を経ても外国人参政権が法制化される見込みはない。また、前章でみたように 2000 年以降は朝鮮籍を排除する法案が出されている。外国人参政権は、日本－韓国－韓国籍在日コリアン（その裏返しとしての朝鮮籍の排除）という冷戦型の 3 者関係でしか考慮されず、それでも法制化に至らない。

参政権が実現不可能ならば、国籍法に生地主義の要素を導入する、旧植民地出身者の国籍選択権を回復する、重国籍により対応するといった解決策もあった。これらは、外国ですでにとられている政策であり、法的地位や参政権以外の方法で在日コリアンの政治的権利を考慮したものである<sup>17</sup>。だが、実際には国籍による問題解決の方向性もとられなかった。2000 年には、公明・自由が提出した外国人参政権法案を受けて、連立与党内で「国籍等に関するプロジェクトチーム」が設立されたことがある。しかし、これは国籍取得という解決策を本気で考えたものではなく、参政権法案を牽制するための政治的策動でしかなかった<sup>18</sup>。その結果、今でも行政裁量による帰化申請が国籍取得の唯一の方法であり、国籍取得の権利すら運動として展開されねばならない現実がある（在日コリアンの日本国籍取得権確立協議会編、2006）<sup>19</sup>。

こうした経緯をまとめたのが表 8-1 で、これに即して在日コリアンの処遇を規定する要因とその変化をおさらいしていこう。3 者関係を規定するのは、まずもって日本帝国の国民だったという過去であり、植民地清算の論理が強く働くところが他の外国人との最大の相違となる。また、朝鮮半島が南北に分断され冷戦の最前線となったこと、東西冷戦の終焉後も朝鮮半島には大きな変化がないことが、3 者関係に大きな影を落としてきた。それに加えて、在日コリアンが日本で生活基盤を築き、幾世代もの居住歴があるという現実を、日本の政府当局も無視できなくなっている。こうした 2 者関係と 3 者関係が、時期ごとに政策とその内容を規定してきた。

1952 年の入管法・外登法制定時には、植民地清算も日本に居住する現実も考慮されなかった。北朝鮮への帰還事業を好機と捉えたことからわかるように、ナショナル・マイノリティを帰国させ「再分離」するのが望ましいというのが、当時の日本政府の姿勢といえる。日韓基本条約の時には、強制退去の条件について韓国に譲歩しなかったものの、協定永住という形でナショナル・マイノリティとしての地位を認めないわけではなかった。ただし、それは法的地位に限られたことであり、日常生活に関係が深い社会的権利からは排除したままだった。その意味で、2 者関係にもとづきデニズンとして在日韓国人を処遇するような観点

<sup>17</sup> この点については、30 年以上前に詳細な研究がなされている（大沼、1979a～c、1980a～c）。

<sup>18</sup> このプロジェクトチームは「特別永住者等の国籍取得の特例に関する法律案」をまとめたが、参政権法案が店晒しになると「使命」を終え、一度も国会に提出されていない。

<sup>19</sup> この書籍には、在日コリアンに対する修正主義者が複数登場しており、「帰化しないことの不利益」を挙げて恫喝するような章すらある（坂中、2006）。権利としての日本国籍を謳った書籍が、かえって国籍取得問題の難しさを示すものとなっている。

は、基本的に欠落していたといつてよい。さらに、朝鮮籍の法的地位に変化がなかったことは、2者関係が考慮されなかつただけでなく、可能であれば「再分離＝帰還促進」したいという方針が維持されていることを示す。

表8-1 在日コリアンの処遇をめぐる時期区分

		1952	1965	1982	1991	1991 以降
時期区分の根拠		入管法・外登法の制定	日韓基本条約	難民条約批准	日韓法的地位協定	
3者関係	冷戦		朝鮮籍の法的地位を放置			参政権法案から朝鮮籍を排除、朝鮮学校弾圧
	植民地清算	国籍選択権を否認、永住資格なし	協定永住		特別永住	参政権法案の提出
	国際規範			社会保障の適用		
2者関係	居住性			朝鮮籍に特例永住	韓国・朝鮮籍共に特別永住	参政権法案の提出

それがある程度変化したのが、1991年に施行された入管特例法であった。朝鮮籍も含めた特別永住という在留資格は、冷戦の論理にとらわれず植民地清算を進めたものと評価できる<sup>20</sup>。しかし、日韓基本条約によっても在日韓国人が社会的権利から排除されたのと同様に、入管特例法の制定後も在日コリアンが政治的権利から排除される状況は変化しなかつた。外国人参政権は、1945年12月に「停止」された権利の回復という植民地清算の論理を起源とし、それに「永住」という居住性をもとにした根拠が加わっている。この3者関係と2者関係のハイブリッドは、オールドカマーとニューカマーという人口移動の波にも相応し、戦後積み残した課題を解決する意味で合理性があった<sup>21</sup>。しかし、立法過程のなかで冷戦の論理により朝鮮籍が排除され、さらに日韓外交の材料になることで2者関係も後景に退いた<sup>22</sup>。

<sup>20</sup> これは冷戦終焉だけでなく、日本帝国の元首だった昭和天皇の死去とも前後していた。その意味で、この時期は『『偏見のカタログ』から合成された朝鮮観をはじめとするアジア認識と歴史観の清算』（姜尚中、1989：28）には絶好のタイミングだった。この時期の対応が中途半端だったツケが、現在の外交の行き詰まりや排外主義運動という形で現れている。

<sup>21</sup> 懸案の解消という発想がないのは、単に日本が民族化国家だからではなく、問題を統括する部局がないことにもよるだろう。政治的な意思があれば、審議会を設けるなどして包括的な指針を策定するといった対応も可能だろうが、それが無い以上は官庁セクショナリズムが政策の断片化を進めるだけになる。

<sup>22</sup> 民主党政権において、鳩山内閣での2010年通常国会が外国人参政権法案提出の最大の好機だった。それを逃してから外国人参政権は店晒しにされていたが、野田政権では民主党議員の一部から韓国籍特別永住者に限定した法案提出の動きがあった。反対がもっとも少ない案にしたことになるが、日本の外国人参政権は日韓関係の従属変数でしかなかったことを露呈したともい

結局のところ、在日コリアンの管理統制のために作られた入管法制も、血統主義的な国籍法も、冷戦初期に作られた骨格は根本的には変化していない (Morris-Suzuki 2010: 245)<sup>23</sup>。なぜこうした事態が生じるのか。在日コリアンの地位に関して日本政府は、自ら取り組むべき課題と考えてこなかったからといわざるを得ない。韓国との関係で法的地位を安定化させ、そのついでに朝鮮籍についても改善する。韓国との関係で外国人参政権を検討する一方で、北朝鮮との関係により朝鮮籍を排除する。国連人権規約と難民条約を批准して初めて、社会的権利を付与するに至る。北朝鮮との関係で、総連系の組織を弾圧する。

これらはすべて対外関係に規定されており、日本政府が住民たる在日コリアンに直接向き合うという2者関係にもとづくものではない。実際、在日コリアンに関して政府が主体的に審議会を設け、政策を評価したり方針を決めたりすることは、これまで一度もなかった<sup>24</sup>。在日外国人の処遇改善を目的とした初の審議会たる「多文化共生の推進に関する研究会」は、実質的にニューカマーのみを対象とし、在日コリアンは蚊帳の外におかれていた<sup>25</sup>。この背景には、在日コリアンに関しては歴史や政治と向き合うことが不可避であり、それに伴う不確定要素を政府が嫌ったという側面もあるだろう。しかしそれ以上に、3者関係により処遇を決定するという歴史的な経路の形成が、2者関係にもとづく取り組みの阻害要因となっている<sup>26</sup>。

3者関係には敏感だが2者関係は考慮しない傾向は、たとえば国民年金加入時に経過措置をとらないがゆえに生まれた無年金外国人問題の放置にも現れている。形式的に内外人平等となれば対外上の問題は発生しないから、加入期間不足で年金から排除された外国人がいても、経過措置をとることもない。国籍についても、実務レベルでは帰化要件が緩和されたものの、申請帰化という骨格を維持し続ける。それでも、特別永住者の数は1991年をピークとして毎年約1万人ずつ減少している。日本人との結婚や帰化により、外国籍の在日コリアンというナショナル・マイノリティは遠からず「消滅」する、それを静かに待てば良い。国籍選択権や生地主義など導入せずとも、今の帰化制度のままで何も手を下さずとも時間が解決してくれる。——日本政府がそこまで明示的に考えているかは定かでないが、2者関係に向き合うことなく人口学的な同化という結末を期待した政策という評価は可能である

---

える。

<sup>23</sup> 国籍法で最大の変化は、1985年に父系制から父母両系制になったことだろう (経緯について詳しくは柏崎、2002を参照)。近年の変化としては、非嫡出児の事後的な認知が認められたことも挙げられる (丹野、2013)。これにより、父親が外国人の子も日本国籍になり、特別永住者の減少をもたらす大きな原因となったが、血統主義であることには変わらない。

<sup>24</sup> そうした状況で、政策の明示的な転換など起こるはずもない。同和やアイヌの問題では、立法や政府指針の策定という手続きを踏んだことに鑑みれば、在日コリアンに対する政府の姿勢は変化していないと評価されても仕方ないだろう。

<sup>25</sup> 『多文化共生の推進に関する研究会報告書——地域における多文化共生の推進に向けて』2006年3月、総務省。多文化共生という政策理念は、総連系組織に対する弾圧に無関心を決め込むことが示すように、歴史や政治を避けることで成立している (藤岡、2007)。ニューカマー外国人の分析も、歴史や政治との連続線上でなされなければ見失うものは多いだろう (これは筆者の自己批判でもある) (Buckley 2000: 324)。

<sup>26</sup> これはファヴェル (Favell 1998) が「制度的病理」と呼んだ経路依存性の問題である。ファヴェル自身はイギリスとフランスの制度的病理の分析を行ったが、戦後の在日コリアンに対する政策についても同様の分析が可能だろう。

### 3 2者関係によって何が進むのか——在日コリアンの変遷と地方市民権

#### (1) 在日コリアンの変遷

前節でみてきたのは、在日コリアンに対する日本政府の政策であり、それが3者関係に規定されてきた現実であった。だが、政策の歴史はこれに尽きるものではなく、住民としての在日コリアンに相對してきたもう1つの歴史が存在する。その背景には、在日コリアンが世代や時代の変化に応じて変容する過程がある<sup>28</sup>。在日コリアンの戦後史は、南北分断と植民地清算という2つの要素に大きく規定されてきた。民団と総連という南北を代表する組織に在日社会は分断され、在日コリアンの法的地位も1991年になるまで確定しなかったからである。それまでは奇妙なことに、二世、三世になるほど法的地位が不安定になり、日本生まれ日本育ちの者が3年ごとに在留期間を更新せねばならなかった<sup>29</sup>。

これは植民地清算の遅れが生み出した法的地位と社会学的現実との乖離であり、在日コリアンの社会学的現実は大きな変容を遂げていった<sup>30</sup>。ここでいう社会学的現実とは、まずもって日本生まれ世代の増加であり、世代間と世代内という2つの分岐が生じている。一世の場合、自らが「在外公民」であるという意識が強く、現実に可能か否かは別として帰国指向が一定程度共有されていた。それが二世以下になると、「祖国」とのつながりが自明のものではなくなるという意味で、第一世代とは異なる意識を持たざるを得ない(e.g. Ryang 1997, 2000)<sup>31</sup>。自明でない分岐だけ世代内の分岐が進むともいえる。それを示すのが、帰国でもなく帰化による同化でもない、第3の道としての「在日朝鮮人」「定住外国人」という自己規定になる(Chapman 2008; Hester 2008)。ただし、「第3の道」は単一のものではなく、複数の要素の組み合わせによりさらに分岐していく<sup>32</sup>。

図8-2は、そうした分岐を前提に、三世以降のアイデンティティを分析した代表的な研究(福岡、1993; 福岡・辻山、1991)で用いられる類型である。そこでは、「朝鮮人の被抑圧の歴史への重視度」と「日本社会における自己の生育地への愛着度」の組み合わせにより、分岐が描述される。そこから「祖国志向」「共生志向」「個人志向」「帰化志向」「同胞志向」という類型が抽出されるが、その後の研究は「祖国」という要素の扱いにより大きく2つのアプローチを生み出した。

<sup>27</sup> この点については、大沼(1980c: 476)も参照。

<sup>28</sup> こうした変化について、特に言説面に着目して包括的に整理した試みとして、韓国生まれで幼少期を日本で過ごし、米国で教育を受けたジョン・リーの著作を挙げておく(Lie 2008)。

<sup>29</sup> これについては、すでに注14で述べてある。難民条約の批准まで、こうした法的地位のまま放置したところに、2者関係の軽視が端的に表れている(大沼、1979a: 280)。

<sup>30</sup> この点に関する解説としては、朴(1999)を参照。

<sup>31</sup> リャンは、もっとも明示的に世代を説明要因とした論者であり、二世と三世の相違についても指摘しているが(Ryang 1997)、ここでは一世と二世以下という区分に止める。

<sup>32</sup> その後の分岐はかなり細かなもので、たとえば「在日」「在日朝鮮人」「在日韓国・朝鮮人」「在日コリアン」といった呼称の複雑さにも現れている(宮内 2005)。ただし、第3の道という言葉を用いるかどうかは別として、そこに至るまでの現状認識も、それがあべき方向であるという認識も今はほぼ共有されている。1980年代に生じた若かりし頃の姜尚中らの論争も、第3の道を確保するに際して「民族の祖国」という要素の意味をめぐって行われている(磯貝、1986; 姜尚中 1985a, 1985b; 梁 1985, 1986)。

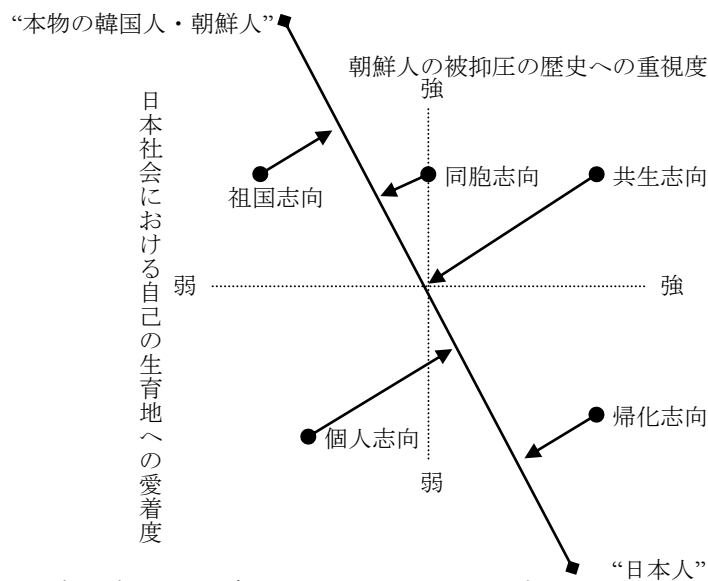


図 8-2 福岡安則による在日コリアンの同化-異化志向の類型

出典：福岡（1993）の 103、89 頁の図

一方の潮流は、福岡の類型のうち祖国指向を事実上修正するものとなる。すなわち、若い世代にとって「民族の祖国」はある種の準拠点にはなるものの、帰還する場所ではない。かといって日本に埋没することもできない。こうした状態を「ディアスポラのナショナリズム」「祖国のないディアスポラ」「トランスナショナルなディアスポラ」といった言葉で表す方向である（Lie 2008; Oh 2012; Ryang and Lie 2009）。これはアイデンティティの危機とも捉えられるが、形而上での望ましいあり方とみなすこともできるだろう。「周辺人」であるがゆえに、在日コリアンは民族化国家も民族の祖国も相対化する位置に立てる、3者関係の脱構築とでもいうべき方向性である（姜尚中 1985b: 180）。

もう一方は、「祖国」という要素を分析に取り込まない、すなわち在日コリアンは日本のエスニック集団の 1 つであるという社会学的現実を前提にする研究である（橋本、2010；谷、2002）<sup>33</sup>。これらは互いに矛盾するわけではなく、両者を踏まえて在日コリアンにとって望ましい方向性を模索する時、準拠点は国家ではなく地域という単位に収斂していく。ディアスポラであっても特定の地域に居住しなければならないし、国家に回収されない地域への愛着も成立する。つまり、「外国籍国民」という言葉は語義矛盾だが、「外国籍市民・県民」という言葉は成立するし、1990年代になって公的にも使われるようになった<sup>34</sup>。帰化が実質的に同化を帰結する現状に鑑みれば、日本という民族化国家への全面的な帰属は民族性の消去にしかならない。しかし、居住したこともない民族の祖国に全面的に帰属するのは、形而下の現実と乖離している。それゆえ国家ではなく、「住民として『地域』に抵抗しつつ参加し、参加しつつ抵抗する」（姜、1992：46）ことが、ジレンマを回避した帰属のあ

<sup>33</sup> ここで「事実上」というのは、戦前の植民地支配や戦後の朝鮮半島分断の影響を指摘しつつも、実際の分析には組み込まないことを指している。

<sup>34</sup> 法的な帰属と日常生活の乖離を踏まえて地域社会レベルで参画するための権利として、都市的市民権といった概念も提示されている（Beaugard and Bounds 2000）。

り方となるだろう<sup>35</sup>。

## (2) 2者関係の根拠としての地域

### 2者関係と自治体の外国人政策

地域への帰属がもたらすのは、2者関係にもとづいた外国人政策である。これまで外国人政策に関しては、政府の無策と自治体の先進性が常に指摘されてきた（江橋、1993；駒井・渡戸、1997；宮島、2000；宮島・梶田、1996；渡戸、1995）。これはニューカマー外国人に対する政策に限定されるものではなく、朝鮮学校の弾圧に熱心な政府をよそに、自治体は各種学校として認可してきた歴史がある。指紋押捺拒否運動に際しても、法務省が取り締まりに躍起になる一方で、首長の判断で告発しないことを決めた自治体は多かった。さらに、前節でみた日本政府とは異なり、在日コリアンに関する審議会の設置や実態調査なども、1980年代から複数の自治体でなされている。

では、なぜ自治体の方が政府より「先進的」な政策を打ち出してきたのか。研究が多い割には問われてこなかった論点だが、移民研究一般の知見をもとにすると次の3点を指摘できる（Ireland 1994; Pak 2000a, 2000b）。①移民は特定地域に集中するため集住地域では重要な課題となり、政策に結びつきやすい。②指紋押捺拒否の不告発を打ち出したのが革新自治体であることが示すように、移民の権利擁護は左派のテーマであり、左派が強い都市部で進む傾向がある。③「内なる国際化」（初瀬、1988）という言葉が示すように、自治体の外国人政策は国際化政策の一環として——ポジティブで未来志向のものとして展開されてきた。

これらはいずれも現実の一端を言い当てているだろうが、本章の議論を踏まえていえば原因はもっと単純である。自治体と外国人住民という2者関係で相対した時、日本政府のように3者関係に逃避することは難しい。その結果、一定の政策が施行され新たな方針が策定されるのは、行政として通常の反応と評価できる<sup>36</sup>。政府の対応の方が異常であり、3者関係だけに目を向けて2者関係をないがしろにしたがゆえに、無策を貫いてこられたと考えられる。

こうした違いは、どのような政策的差異を生み出すのか。前節で、難民条約批准まで外国人は社会保障から排除されていたと述べたが、これは正確ではない。自治体によっては、公営住宅入居などに関して国に先んじて内外人平等を達成していた。国が無策を決め込んだ無年金の問題にしても、自治体によっては福祉給付金という形で実質的な経過措置をとっている。公務就任も、国が「当然の法理」を盾に門戸を閉ざすなかで、1970年代には大阪や兵庫の自治体で国籍条項が撤廃されてきた（仲原、1993：63-4）。これらは、在日コリアンの諸団体による要望を受けた結果であり（徐龍達、1987）、住民と自治体という2者関係ならば国籍条項の不当性が認識されやすいということでもある。

<sup>35</sup> 在日コリアンという規定と地域という準拠点には、経験的にも概念的にも親和性があるといえるのではないかと。日本に韓国・朝鮮籍として居住する時、帰属と同化のジレンマを回避しつつ準拠できる点として地域がある。この点については、ウェンダーによる在日文学研究を参照されたい（Wender 2005）。

<sup>36</sup> 筆者自身は自治体の外国人政策を調査したこともあり、自治体による温度差がかなりあること、「自然に」政策措置がとられるわけではないことは理解している（樋口 2000a, 2000b, 2001b, 2005）。ここで述べているのは、中央政府の頑なな姿勢との比較が目的であることをお断りしておく。

## 2 者関係にもとづく外国人参政権

前章で論じたように、外国人参政権をめぐる政治過程が3者関係を軸に進んだことが、問題の安全保障化の背景にあった。だが、外国人参政権の基礎にデニズンの権利論があることが示すように、本来は「デニズンと国民国家」という2者関係で考慮すべきものである。その意味で、2者関係をもとにした自治体の外国人政策は、脱安全保障化の道筋を考える糸口となる。外国人参政権にしても、韓国政府を経由する以外に地方議会に対する直接の働きかけが、運動の主要な回路となっていた（樋口、2011a）。これはかなりの成功を収め、半数以上の地方議会が外国人参政権を求める決議や意見書を採択している<sup>37</sup>。

国政でも、2者関係にもとづく参政権論が展開されないわけではなかった。2008年には、民主党の小沢一郎代表（当時）の依頼で岡田克也元代表が会長となり、「永住外国人法的地位向上推進議員連盟」が設立された<sup>38</sup>。この議連自体は、小沢と李明博大統領（当時）との会談を受けたものだが、岡田はそれと関係なくデニズンの権利論に依拠した結論を出した。議連が発表した「永住外国人への地方選挙権付与に関する提言」では、以下のような現状認識が披露されている<sup>39</sup>。

「特別永住者は、戦後60年にわたって政治的参画の道が閉ざされたまま、高齢化が進んでいる」。

「先進国（OECD加盟30カ国）の中で、血統主義を採用し、重国籍を認めず、かつ外国人参政権を付与していない国…が日本だけであることは、留意すべき」。

原理原則論者たる岡田らしい結論といえる。しかし、外国人参政権の法制化が現実味を帯びるようになってからは、2者関係ではなく3者関係が外国人参政権を動かす要因となっていた。鳩山由紀夫首相（当時）は、2009年の就任後に外国人参政権の法制化に対する意欲を何度も口にしていたが、その政治的な背景について以下のように述べている。

東アジア共同体のなかで、中国は一国としてきわめて大きいですから、それだけにですね、日本と韓国がいかに協力をしていくかということが非常に重要で…韓国との間の理解を高めていくためにも、地方参政権の話というのは（重要）。まあ韓国は日本に対してだけではなく、永住外国人に対する参政権を認めてくれていますから、そういう、その意味においても、歴史的にですね、帰りたくても帰れなかったと。で、日本でがんばることで決意を固めた人たちに対して、地方参政権を付与することは、私は自然の流れだと思っていますから。歴史の繙いてみれば、東アジアという大きな流れの中で日韓関係が絆——もちろん強くなけれ

<sup>37</sup> 外国人参政権ドットコムによる（<http://www.gaikokujinsanseiken.com>）。2010年には、外国人参政権反対の決議をするキャンペーンを日本会議が進めたが、実際に反対決議を採択した地方議会は1割に満たなかった。

<sup>38</sup> 議連事務局に対する聞き取り、2011年11月2日。

<sup>39</sup> 韓国に要求されたから検討するのではなく、政治参加から排除した状態を放置するのは社会設計上おかし、多様な価値観を認めるべきと結論づけたという（議連事務局に対する聞き取り、2011年11月2日）。だが、朝鮮籍の排除は民主党案でも受け継がれており、政治的なコスト論をクリアできないでいる。



ばならない絆なので。その中で、彼らが一番希望しているものでありますだけにですね、かなえてやるべきではないかと<sup>40</sup>。

念のため述べておくが、鳩山自身は「行政や政治は、そこに住むあらゆる人々によって運営されてしかるべきである」<sup>41</sup>という理念にもとづく推進派である。しかし、実際に政治的コストをかけて実現をはかろうとする時には、3者関係——韓国に対する配慮——が推進のバネとなってしまう。しかし2者関係の問題として構築されれば、参政権を行使するべく国境地帯に集結する得体の知れぬ某国人、などという安全保障化が成功することはあり得ない<sup>42</sup>。

では、脱安全保障化を進める手がかりはどこにあるのか。在日コリアンの日常視点を重視する『ほるもん文化』という雑誌の参政権特集のタイトルは、「在日朝鮮人が選挙に行く日」だった（『ほるもん文化』編集委員会、1992）。この時期には、参政権を求める在日党が結成され、選挙に立候補するパフォーマンスを演じていた（李英和、1993）。あるいは、在日コリアンの歌手が参院選で立候補を受理されなかったため、座り込みで抗議したこともある（『朝日新聞』1995年7月7日）。参政権は抽象的な権利にとどまるものではなく、日本で生きる個々の在日コリアンが行使するものであることを、これらの例は示す。指紋押捺と同様に、生身の人間の尊厳の問題として参政権が理解されれば、安全保障化という事態が生じることもなかったのではないか。そのためには3者関係の改善だけでなく、2者関係の問題として在日コリアンに関わる事柄を捉え直すことが必要になるだろう。

#### 4 本質主義と外国人排斥の正当化

最後に、3者関係にもとづく理解が生み出す最悪の帰結として、排外主義運動が「在日特権」を糾弾するメカニズムを検討する。欧州の極右は、確かに移民排斥を最大の争点としているが、標的となるのは移民だけではない。国内の左翼、既成政党や特定の国といった定番となる敵手が存在する。日本の排外主義運動についても同様で、第6章でみた標的を整理したのが表8-2となる。しかし、これまで述べてきたように、2者関係をもとに在日コリアン（ナショナル・マイノリティ）の危険性を訴えても、あまりに信憑性がなく運動の勢力拡大はおぼつかなかっただろう。そうではなく、それゆえに「民族の祖国」に対する敵意が醸成され、それがナショナル・マイノリティの排斥へと転化していったのである。その意味で、表8-2を単なる類型論にとどめるのではなく、民族の祖国とナショナル・マイノリティを関連づける論理が問われねばならない。

---

<sup>40</sup> 2011年11月21日、鳩山氏に対する聞き取り。

<sup>41</sup> ホームページ「わがリベラル友愛革命」から引用（[http://www.hatoyama.gr.jp/speech/ot02\\_2.html](http://www.hatoyama.gr.jp/speech/ot02_2.html)）。

<sup>42</sup> あの『諸君！』でさえ、大阪・鶴橋での取材で参政権をめぐる状況をルポした時には、生身の在日コリアンにとっての参政権の意味をリアルに紹介している（李隆、1995）。公正を期すためにいっておくと、かつての『諸君！』は一種の諧謔精神を持っており、『正論』とは比較にならないくらい良質な論考も多かった。

表 8-2 排外主義運動の標的

		国家	
		内部	外部
民族	内部	「反日」左翼 民主党、反原発運動	
	外部	ナショナル・マイノリティ 在日コリアン	民族の祖国 韓国、中国、北朝鮮

注：Mudde (2007) をもとに筆者作成

ただし、近隣諸国への敵意を介さない二者関係にもとづく排斥の論理が、排外主義運動の中にならぬわけではない。幹部の1人であるKは、中国の反日デモをきっかけにインターネットで情報収集するようになった。出発点は近隣諸国との関係だが、現在も活動を続ける動機は以下のように変化している。

実態をいろいろ知ってしまった。一番僕が腹が立っているのは、年金の問題と生活保護の問題があります。日本人に対してはまったく出さなくせに、外国人には生活保護が結構簡単に出てしまっている問題ですね。年金もそうですね、日本人は25年間掛金払わないと出ないのに、外国人、極めつけは朝鮮人に対しては掛金1円も払っていないのにかわいそうだからといって、年金の代わりに月額いくら払っているとか。(K氏、在特会、40代男性)

これは、「在日特権」というフレームを鵜呑みにした排外主義であり、こうした「身近な」問題だから関心を持つという者は数名だが存在した。Kのような層は、「在日特権」に何の根拠もないと納得すれば、排外主義運動から去る可能性がある。しかし、日本の排外主義運動は単なる外国人排斥とは異なり、歴史問題や近隣諸国との関係が根底にある。以下でみるAのような者は「在日特権」がデマだと理解したとしても、態度を改めることはないだろう。

(「在日特権」にこだわるのは) 戦後問題は在日問題に集約されるからですね。朝日新聞の西本記者が見事な推察をしてくれたんですけどね、集会に集まった人の顔ぶれをみると、戦後問題に対して異議を唱えている人が多いんですが、テーマはここに集まった目的は「在日特権」の問題であると。つまり「在日特権」の問題は戦後問題の象徴的な側面があるからです、と引いてくれたんですね。・・・GHQが在日という楔を日本に打ち込んで、去っていったということですね。・・・結局は在日という存在を残しておけば日本の足を引っ張ってくれるという目論見があったのかどうかは知りませんが、事実そうなんです。(A氏、在特会、40代男性)

Aの見方では、日本は「戦勝国に囲まれていて、事実上やりたい放題」されており、その「負の遺産」が在日コリアンであるという。この場合、戦後体制の否定が在日コリアンに対する敵意の根にあるため、在日コリアンがいかなる性質を持つと関係ない。在日コリアンが標的にされるのは、他の政府や異なる体制に属しているとされるからであり、集団としての性質によるのではないからである (Bigo 2005: 69)。もっとも、Aほど明確に「戦後問題」

と「在日問題」を結びつけ、揺るぎなき信念を披露する者は他にいなかった。AやK以外の者は、なぜ在日外国人の排斥という「解」に行き着いたのかと問われると、虚を突かれたような反応を示すことが多かった。中学高校をインターナショナルスクールで学んだUは、学校での経験から「自分は日本人だな」と文化伝統に関心を持ったという。では、それがなぜ排外主義運動に結びつくのか。筆者の問いに対して、彼は以下のように反応している。

日本の文化伝統があって、それを守りたいという気持ちがあって。ああそうか、・・・（「外国人問題」とどう連関するか）・・・そうですね。やっぱりその、質問されて、何だろうなって自分で初めて思ったんですけど、何なのかな。（U氏、在特会、20代男性）

Uは、「日本を守る」一環として排外主義運動に参加していることになるが、なぜ外国人排斥が日本を守ることになるのか考えたこともなかった。近隣諸国は、歴史問題を通じて日本の文化伝統に異を唱えているようにみえる。排外主義運動は、それに対する反撃として位置づけられるが、それと在日外国人を攻撃することがどう関わるのか、彼は曖昧な論理すら持っていなかった。Uほど極端でないにしても、Kのように「年金の問題と生活保護の問題」といった2者関係にもとづく動機を明確に語る者はほとんどいない。多くの者は、3者関係のうち「民族の祖国」と「ナショナル・マイノリティ」を渾然一体のものとして捉え、前者への敵意を後者への攻撃に転化していた。だが、その論拠は当人の中でも曖昧模糊としており、本質主義的な民族観によって両者を辛うじて結びつけていた。つまり、近隣諸国と在日近隣諸国民（在日コリアンや在日中国人）は同じ民族で差異はない、というFのような理解である。

同じ民族ですから。私もね、民族性とか何だかってははっきりとはわかりませんよ。だけどね、結局そんなに簡単に人の生活とか人の文化、習慣って変えられるものじゃないでしょ。そこを考えてみたら、在日もそんなに——朝鮮人という点で変わらねえだろうと思いますけど。（F氏、在特会、30代男性）

『マンガ嫌韓流』が本質主義的な民族理解にもとづいていることは、すでに指摘されてきた（板垣、2007）。だが、排外主義運動の本質主義は民族一般に該当するわけではなく、「反日」という論点にだけ適用される。つまり「反日民族」だから、韓国も北朝鮮も在日コリアンも日本を標的にするという因果関係で把握される。植民地清算がきちんとなされていないから、歴史をめぐる韓国からの抗議、および外国人参政権運動が生まれるという因果関係にはたどりつかない。植民地清算という「民族化国家」のあり方に関わる原因を、「反日」という本質主義に置き換えれば、他者の責任にできる。「反日」を民族の変わらぬ本質とみることによって、民族の祖国とナショナル・マイノリティが同一視されてしまう。それにより、論拠が曖昧なまま在日コリアンの排斥を正当化する根拠が生み出されるのである。

## 終章 日本型排外主義とは何か ——欧州との比較で考える——

### 1 日欧比較から日本型排外主義を論じる

これまでの議論を踏まえて、本論文の題名である「日本型排外主義」について論じることとしたい。本論文は、日本にも欧州のようなナショナリズムと排外主義を前面に掲げる、極右と呼ぶべき勢力が出現したことを、議論の前提としている。旧来型の右翼とは区別される新しい性格を持つとされる点でも、日本と欧州で現出した事象は共通している<sup>1</sup>。そうであるがゆえに、西欧における初期の極右研究でみられたのと同じ説明要因——社会変動に伴う社会解体と不安・不満の増大——が日本でも使われたのだといえる。

しかし、そうした排外主義があらわれる仕方は欧州と同じではない。筆者自身は、社会変動と日本型排外主義が無関係だとまで主張するつもりはない。しかし、それは日本の排外主義の出現を説明するうえで、周辺的な位置づけしか与えられないと考える。では、その特徴をどのように要約することができるのか。以下では、主に参照してきた西欧との理念的な比較により、日本型排外主義の特質をまとめていく。

### 2 領域ごとにみる排外主義の特質

#### (1) 標的

表8-2で示したように、日本の排外主義にとっての「敵」は単一ではない。筆者もインタビュー対象者から、あなたのような輩が「真の敵であり支那朝鮮は二の次である」ことに気付いた点で有益だったというメールをもらったこともある<sup>2</sup>。とはいえ、日本の排外主義が圧倒的に主たる標的としているのが、中国、韓国、北朝鮮および在日コリアンであることは間違いない。序章でもふれたように、在特会が勢力を伸ばすきっかけの1つとなったのは、非正規滞在のフィリピン人一家に対する嫌がらせデモだった。だが、第6章でみたように「移民一般」に対する排外主義勢力の関心が高いとはいえない。これは、日本で移民受入れが政治的なイシューになっていないこともあるが、仮に政治的な争点になったとしても近隣諸国が過度に取り上げられることになるだろう<sup>3</sup>。

つまり日本の排外主義は、図補-1の三重の同心円のうち真ん中の層である東アジア地域を、主たる標的としている。これまで何度も述べてきたように、在日外国人は「内なる近隣諸国」とみなされることにより、排斥の対象となっていく。それに対して、同心円の外側にある東アジア地域外のことがらに対しては、基本的に関心が薄い。これは排外主義運動だけでなく、冷戦後の右派論壇の特質であることは第6章で論じたとおりである。在日外国人のなかでも、ニューカマーで国籍別人口の3、4位を占めるフィリピン人やブラジル人が、組織だった排外

<sup>1</sup> ただし、1990年代のイタリアで連立右派政権の一角を占めたイタリア社会運動という極右政党はファシストの流れをそのまま引き継いでおり、例外がないわけではない（Berenzin 2009）。

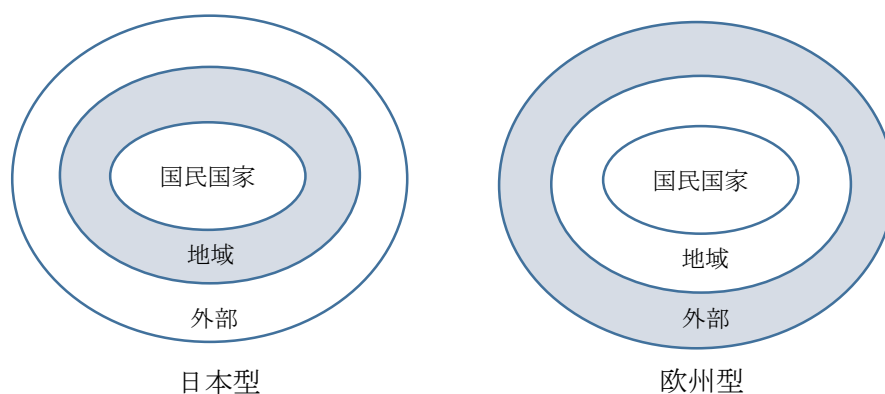
<sup>2</sup> 2011年4月29日の個人的なやりとり。

<sup>3</sup> たとえば、右派の移民受入れ論者である坂中英徳（2015）は、在日外国人人口の約六割を占める中国や韓国からの移民を制限するような「移民国家」論を展開している。移民研究の立場からすれば、これが非現実的な空想であることは論を俟たない。この点については、樋口（2015a）で詳しく論じた。

主義の標的となることはほとんどない<sup>4</sup>。

それに対して、欧州で排斥感情が向けられるのは圧倒的に域外出身の移民である (Semynov et al. 2006)。もちろん、フランスの国民戦線は近年に至るまで反ユダヤ主義に固執していたし (Betz 2013)、東欧出身のロマに対する排斥の動きも根強いものがある (Mudde 2007)。また、反EUは極右にとって有力な旗印ともなっており、それが票の獲得にも結び付いている (Gómez-Reino and Llamazares 2013; Jamin 2013; McDonald 2006; Williams 2013)。欧州に対する懐疑的な態度には、道具的なもの (統合による利得の有無) と政治的なもの (国民主権の侵害) があり (Lubbers and Scheepers 2005)、極右もこうした論理を利用してきた。

だが、これは「怠惰で腐敗した」EUの官僚といった具合に、EUという政治体を批判するものであっても、欧州そのものや近隣諸国を憎悪しているわけではない。むしろ極右には汎欧州主義の理想があり (Bar-on 2008)、「欧州人」としての極右は欧州をアイデンティティのよりどころもしている (Mammone, Godin and Jenkins 2013)。これは、後述する文化的レイシズムの根拠にもなっており、欧州という地域自体を極右の敵手とはみなしえない<sup>5</sup>。図終-1に示したように、欧州の外部とされる存在——端的には移民、とりわけムスリム移民——が主たる敵手となる。



図終-1 排斥の標的の相違

## (2) 経済

移民は経済的な競合相手となるとみなされるがゆえに、排斥の対象となるというのが競合論の基本的な問題設定だった。これは移民人口の比率や流入人口数を指標として測定されることが多いが、在日コリアンはこうした指標からすると排斥の標的にはなりにくい。韓国・朝鮮籍人口は2006年まで最大の国籍集団だったが、韓国・朝鮮籍の特別永住者数は1991

<sup>4</sup> これは、フィリピン人やブラジル人をはじめとする外国人が、差別や排除を蒙っていないという意味ではない。むしろ、日常的な差別や排除を強く受けているのは、こうした人たちである可能性が高いが、日本の排外主義の主たる標的とはなっていないという意味である。

<sup>5</sup> これは日本の右翼思想が強調してきたアジア主義との比較でも興味深い。右翼のアジア主義はアジア蔑視を深く内包しているが、今世紀に入ってから近隣諸国に対する憎悪とは質的に大きく異なる。両者の関係については今後の研究課題としたいが、アジア蔑視を暗黙の前提とするアジア主義は、歴史認識をめぐる異議申し立ての噴出により破綻したというのが筆者の仮説である。

年をピークとして減少し続けている。数世代にわたって居住しているため、流入が競合を高めるともみなしえない。人口学的には、いかなる観点からも競合が生じている集団とはみなしえない。少なくとも、職をめぐる競合を掲げて在日コリアンを排斥するような言説は、ないといってよいだろう。福祉ショーヴィニズムについては、第2章で述べたような生活保護をめぐる排斥の言説はある。だが、これは社会保障制度からの排除がもたらす過渡的な問題であり、人数自体も少ないことから競合が問題を生み出すと考えるのは誤りだろう。

競合論を適用するならば、むしろニューカマーに対して、とりわけ在日南米人や在日ベトナム人の排斥が予想されることとなる<sup>6</sup>。これまでなされた意識調査の結果をみると、外国人人口の増加率が高かった地域やブルーカラー層において、外国人の増加に対する反対意見が多い(濱田、2011; 永吉、2012)<sup>7</sup>。その意味で、経済的競合はニューカマーの増加と排外意識に関して、一定の説明力を持つ可能性がある。だが、現実の排斥行動はニューカマーと関係なく生じていることから、経済的競合で日本の排外主義を説明するのは無理がある。

それに対して、欧米において排外主義と経済的競合の関係を挙げる研究は多かった(Kitschelt 1995)。これは、第1章でもみたように、有権者の極右支持をみる上では必ずしも一環した説明力を持つわけでもない(Schneider 2008)。しかし、現実政治においては欧州諸国の極右政党が、移民は仕事を奪うから排斥されるべきというレトリックを多用してきた経緯もある。日本よりは、経済的競合が排斥に際して使われるところはあるだろう。

### (3) 文化

第2章で述べたように、在日コリアンは文化的にみて高度に同化が進んだ集団といえるだろう。日本人と結婚する比率もきわめて高く、経済面においてよりも同化の程度は高いとみなしうる。日常生活における摩擦が「文化の違い」などとして語られるのは、在日コリアンではなく在日ブラジル人など南米系移民であることが圧倒的に多い(cf 梶田・丹野・樋口、2005)。つまり、文化的脅威を持ち出す客観的根拠は欠如しているし、在日コリアンの文化的な相違をもって排斥が行われるわけではない。文化的脅威を理由とするならば、標的は在日コリアンではなくニューカマーになるはずである。

それに対して、欧州の研究では文化的な競合(移民の文化に対する脅威認知)は、排外意識に対して安定的な説明力を持つ(第1章でふれた研究以外に、Schneider 2008も参照)。政治の水準でも、特に「西欧的価値と相いれないイスラーム」という文化的レイシズムの言説が広く使われている(Akkerman 2005; Hagelund 2003; Halikiopoulou et al. 2013; Pauwels 2014; Rostbøll 2010; Skenderovic 2007)。この場合も、第1項で述べたのと同様に「欧州の外部」にあるとされるムスリム系の住民が標的とされており、文化的同化の程度が高い欧州系の移民は憎悪の対象とならない。

### (4) 法と秩序

第7章で述べたように、特に犯罪との関連で論じられる移民排斥の感情は、日本では他の

<sup>6</sup> ただし、在日ブラジル人に対するヘイトクライムの例として、エルクラノ事件が挙げられる(西野、1999)。その意味で、在日南米人に対する排斥がないといっているわけではなく(次の注も参照)、ニューカマーを標的とした組織的な排斥運動が存在しないことをここでは述べている。

<sup>7</sup> ただし、関連が強いとはいえず、排外意識の社会的基盤が明確に存在するとはいえない。

国より強い傾向がある。その意味で、「法と秩序」を大義名分とする排外主義が、日本では発生しやすいともいえるだろう。だが、そこで「犯罪を犯す外国人」として想定されているのは、在日コリアンではない。警察のいう「来日外国人」とはニューカマーを指しているし、週刊誌や漫画で取り上げられる「外国人犯罪」もニューカマーのそれに限られている。第7章で述べたように、在日コリアンと犯罪を結び付けて論じるような社会的風潮はないといっていよう。東アジアとの関連で唯一あるとすると、「中国人マフィア」が取り上げられる比率の高さだが、それが排外主義運動の標的となっているわけでもない。ここでも、図終-1にある同心円の外部にある存在としての外国人が標的となるはずの状況があるが、実際には在日コリアンに敵意が向けられている<sup>8</sup>。

一方、欧州で「法と秩序」という観点から標的になるのは、圧倒的にEU域外の移民である（第7章参照）。まず、「ヨーロッパ要塞」に域外から流入する移民に対する規制の厳格化がある。加えて、移民と犯罪が問題化される時に標的となるのは、オランダならアンティル諸島系、フランスならマグレブ系の移民といった具合に、EU域外にルーツを持つ移民となる。主にルーマニア出身のロマも標的となるが、これもまたロマが「非欧州人」とみなされるがゆえのことと考えたほうがよい。

#### （5）国内政治

第2章では、在日コリアンは政治的に活発なマイノリティだったが、その活動は衰退傾向にあるとした。それでも、政治的な活動がほとんど存在しないニューカマーと比べれば、政治面で相対的に目立つ集団とはいえる。しかし、日本の外国人人口比率は2%未満であり、政治的に脅威となるという見方自体の根拠を疑った方がよいだろう。その意味で、第8章でふれた二者関係（日本国家-在日コリアン）という枠組みでは、政治的脅威を論じること自体に無理がある。

にもかかわらず、外国人参政権をめぐる議論では外国人がキャスティングボートを握り、政治的な影響力を行使するとまことしやかにささやかれてきた。外国人人口の低さ＝政治的影響力のなさを糊塗して脅威を喧伝するために、人口過疎の国境地帯での選挙が事例として持ち出される。しかも、外国人参政権を求めてきたのは民団であるが、反対派が持ち出す与那国町や名護市の選挙に介入するとされるのは、在日中国人であった。つまり、実際には発生しようがない脅威を喧伝するために、数字上の操作や無理な前提を導入してきたのが、日本的な外国人参政権反対論である。

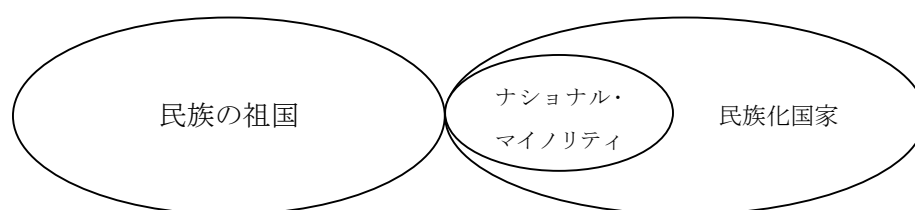
一方、欧州での外国人・移民は政治的な脅威とはみなされていない。イスラームは文化的脅威とはされるものの、政治的にはむしろ活発な参加が統合をうながすものとみなされる（第7章参照）。外国人・移民をめぐる政治的な課題は、むしろ投票率の上昇など実質的な参加を通して市民的な政治文化を共有することにある。一見、外国人の政治参加という同じ問題を抱えているようにみえても、日本と欧州では問題の構築のされ方がまったく異なる。

---

<sup>8</sup> 繰り返しになるが、非正規滞在のフィリピン人一家に対する嫌がらせ行動は、在特会の会員数を伸ばした大きな要因であった。その意味で、「東アジアの外部」からの移民も標的となっていないわけではないが、（そうした移民が標的とならない）その後の展開をみる限りでは例外とみなした方がよいだろう。

## (6) 国際政治

第8章で縷々述べたように、日本の排外主義は対外関係を増幅装置として発生している。外国人参政権の例を挙げれば、かなりの永住者を擁する在日フィリピン人や在日ブラジル人は、議論の埒外におかれてきた。これは、在日コリアンや在日中国人より人数が少ないからではなく、フィリピンやブラジルとの二国間関係に大きな問題がないことの反映にすぎない。つまり、在日フィリピン人や在日ブラジル人は、図終-2でいう「民族の祖国」の意を受けた行為者ではない一方で、在日コリアンや中国人は民族の祖国の代弁者とみなされる。前項で述べたように、在日コリアンは相対的に活発な政治的行為者といえるが、「祖国の代弁者」とされるのはそうした在日コリアン自身の性質によるのではない。「民族の祖国」との関係で生まれる困難が、日本をして民族化国家としての性格を強め、ナショナル・マイノリティの排斥を正当化するのである。



図終-2 民族問題の三者関係モデル

注：図8-1の再掲。

欧州においても、対外関係が背景にある排外主義は存在する。前述のイスラモフォビアは、単に文化的脅威として喧伝されるだけでなく、外国で生じた戦争やテロと結び付けて増幅されてきた。実際、9.11同時多発テロの直後にはムスリム移民に対する感情温度だけ下がったという報告もある (Coenders et al. 2008)。極右政党は、イスラームに対する本質主義的なラベリングにもとづき、欧州とムスリムは共存できないとしてきた。その意味では、「民族の祖国」と「ナショナル・マイノリティ」を同一視する日本の排外主義と共通する部分を持つ。ただし、イスラモフォビアを図終-2で説明することはできない。イスラモフォビアには、民族の祖国という政治体との関係悪化という背景がなく、国家間の関係が憎悪を増幅するような回路を持たないからである。

## (7) 歴史修正主義

第4章と第8章で述べたように、日本の排外主義は——強く言明するならば——歴史修正主義の一変種としての性格を持つ。在日コリアンに対する憎悪は、単なるレイシズムや日本型オリエンタリズムでは説明できない。それはたとえば在日フィリピン人に対して向けられる感情とは異なっており、前者にあつて後者にない最大の要因は植民地主義の歴史である。在日コリアンは、ニューカマー韓国人とは異なり、存在自体が歴史的経緯によって規定される。一般永住とは異なる特別永住資格が設けられるのも、第8章でみたような「過去の国民」に対する処遇が必要なことによつていた。

これまでの項でみてきたもののうち、在日コリアン自身の特質からは排外主義が発生しにくいことを論じてきたが、歴史的経緯だけは例外と考えたほうがよい。すなわち、植民地



主義の歴史と在日コリアンの存在が不可分である以上、植民地主義の歴史の否定は在日コリアンに対するまなざしの変化をもたらさないはずがない。在日コリアンが標的にされるようになった最大の要因は、歴史修正主義の台頭が在日外国人のうちもっぱら在日コリアンを標的とする帰結をもたらすからだと考えられる。

それに対して欧州で歴史修正主義といえ、通常はホロコースト否定論を指す(e.g. Mudde 2007)。イギリスやフランスのような植民地大国の場合、植民地主義の歴史と移民には密接な関係があり、移民の権利運動で歴史的経緯が強調される場合もある(稲葉、2011)。しかし、植民地主義に対する歴史修正主義が排外主義に結びつくわけではない。その意味で、現在の欧州における排外主義は歴史修正主義を背景にしているとはいえないだろう。

### 3 まとめ

本章の冒頭で述べたように、欧州と日本の排外主義には共通する点もある。前節でも、政治的競合という観点から排外主義を説明できない点で、欧州と日本で違いはなかった。しかし、前節での検討を経てみると、次の3つの点で日欧にはかなりの相違があるとみたほうがよいだろう。

第1に、排斥の主たる標的となるのは、日本では東アジア域内にルーツを持つ移民であった。それに対して欧州の場合、EU域外にルーツを持つ移民がもっぱら排斥対象となる。漢字文化圏ということからも、実際の社会経済的地位からも、言語や婚姻のような同化を示す指標からしても、在日東アジア系移民は統合に成功した集団と国際的には評価されよう。これは、欧州におけるEU域内出身の移民と「客観的」には類似した状況にあるが、にもかかわらず排斥対象となっている。それに対して欧州では、統合の度合いが相対的に低いとされる集団が、敵意を向けられ排外主義の標的となってきた。この相違を、換言すれば欧州と比べた日本の特性を説明する必要があり、それが第2、第3の点につながっていく。

第2に、排外主義を誘発する要素は共通しているようにみえるものの、そうした要素から予想されるのとは異なる対象が標的になっている。日本では、経済的競合、文化的競合、法と秩序のいずれからも排斥の標的として理論的に予測されるのは、在日コリアンではなくニューカマーだった。そうした理論的予測を裏切る形で、在日コリアンが排外主義の標的となっていることは、経済、文化、法と秩序が説明変数になりえないことを示す。欧州の場合、上記3つの要素のいずれもがEU域外の移民の排斥を理論的に予測し、実際の結果もその通りになっている。

第3に、国際政治と歴史修正主義に目を転じると、第2点では説明できなかった日本の排外主義を明確に位置づけることができる。欧州でも、国際政治と歴史修正主義は排外主義と関連しているが、主たる説明要因とはいえない。それに対して、東アジアの近隣諸国との関係は、日本の排外主義を激化させる直接的な要因となってきた。多くの移民にとっての「民族の祖国」たる中国、韓国、北朝鮮と日本の間には、困難な外交課題が未解決のまま残っている。これが、社会経済的にみて劣位な状況にある在日フィリピン人や在日ブラジル人ではなく、在日コリアンや在日中国人が標的となる大きな背景となる。さらに、歴史修正主義は在日コリアンに対する排斥を説明する固有の要因であり、それなくして「なぜ在日コリアンが標的となるのか」という本論文を貫く問いに答えることはできない。

プロローグでふれたように、日本型排外主義とは近隣諸国との関係により規定される外

国人排斥の動きを指し、植民地清算と冷戦に立脚するものである。直接の標的になるのは在日外国人だが、排斥感情の根底にあるのは外国人に対するネガティブなステレオタイプよりもむしろ、近隣諸国との歴史的関係となる。その意味で、外国人の増加や職をめぐる競合といった外国で排外主義を生み出す要因は、日本型排外主義の説明に際してさしたる重要性を持たない。

もちろん、西欧にも歴史修正主義にもとづくユダヤ人排斥は存在するし、日本にも2者関係にもとづくレイシズムは存在する。ここでいう日本型排外主義とは、日本に特徴的な要素の理念型である。これを概念化することで、排外主義を単なる不況や不安に還元するような見方から距離をとることができると思う。また、排外主義への対策のあり方という実践的課題に対しても、こうした理念型があればより適切な処方箋を提示することもできるだろう。

## エピローグ

プロローグでふれた日本西端の与那国島は、2008年から自衛隊基地の建設問題で揺れ続けてきた。敗戦直後には、台湾との「密貿易」で賑わい人口2万人を超えたこの島も、今では1600人強が残るのみの「絶海の孤島」となっている<sup>1</sup>。観光客もまばらで島民が静かに暮らす、そんなこの地であって、にわかにある「神話」と「現実」が生み出されるようになった。外国人参政権と自衛隊配備——本論文を締めくくるにあたって、これらの神話と現実から排外主義を再考してみたい<sup>2</sup>。

鳩山政権下で参政権法案提出が現実味を帯びた2010年3月、与那国町議会は外国人参政権反対決議を採択した。この決議は、その後の外国人参政権反対キャンペーンを象徴する事例として扱われようになる。プロローグでみたように、参政権が実現したら外国人が大量に移住してキャスティングボードを握り、国境の島を乗っ取ってしまうからだという。与那国の産業は、公共事業を除けば牧畜と漁業、観光ぐらいで、週2便の貨客船に物資を頼っているため物価も高い。生計を立てるのはかなり大変なところで、人口は縮小する一方だ。中国がその気になれば、この小さな島を乗っ取るのは簡単だ、というわけである。

こうした参政権反対論は、草の根排外主義の1つといえるだろうが、単なる草の根の問題として済ませることはできない。「乗っ取られる与那国」という妄想は、島内で醸成され肥大したわけではなく、外部から吹き込まれたものだからだ。日本最大の極右団体たる日本会議は、2010年に外国人参政権反対キャンペーンを展開し、地方議員に対して参政権反対決議をするよう依頼していった。与那国の自民党町議もそれに従っただけのことだが<sup>3</sup>、ひとたび決議されると「国境地帯が危機感を持っている」証左として利用されていく（三荻、2012）。「国境」を「国防」と結びつける中央の思惑により、住民の権利たる外国人参政権が「侵略の道具」へと読み替えられる。

\* \* \*

「外国人の侵略」に対する備えとして外国人参政権反対が唱えられる一方、与那国島で現実に進んでいるのは、「外国の侵略」への対応であった。2011～15年度の中期防衛力整備計画には、「南西地域の島嶼部に、陸上自衛隊の沿岸監視部隊を新編し配置」<sup>4</sup>とあり、2014年に陸上自衛隊を与那国に配備するべく、建設計画が進んでいる。軍事的には、現在焦点になっている「尖閣防衛」と関係ない地上部隊を、与那国に配備する必要性は乏しい（佐道、2012、2014）<sup>5</sup>。しかし、「防衛が十分でない」国境は、政策や実践によって絶えず作られる（Haddad 2007: 134）。陸上自衛隊の組織防衛に際して、「中国の脅威」は使い勝手の良い資源なのである。

<sup>1</sup> 与那国での密貿易については、石原（1982, 2000）を参照。また、現町長の外間守吉（2012）は与那国町政の最大の課題を人口増だとしており、人口対策の一環として自衛隊を誘致するという。

<sup>2</sup> 以下のモチーフは、樋口（2013m）ですでに展開しており、内容上も重なりがある。

<sup>3</sup> 2010年3月23日に与那国町議会在採択した「永住外国人に対する地方参政権付与に反対する意見書」は、日本会議の雛型をそのまま用いている。

<sup>4</sup> 「中期防衛力整備計画（平成23年度～平成27年度）」2010年12月17日、安全保障会議決定、閣議決定。

<sup>5</sup> 南沙諸島も含めた島嶼をめぐる領土問題については、以下を参照（Emmers 2010）。

この自衛隊計画自体は、外部から強引に持ち込まれたというよりは、島内の防衛協会が誘致したという性格を持つ。与那国島からは、124キロ東方にある石垣島より111キロ西方にある台湾の方が近い。戦前は台湾に出稼ぎに行くなど台湾経済圏にあり、戦後も貿易や人的交流の経験があるため、地域活性化策として台湾との交流特区を構想していた。それが中央政府に却下されたため、次なる地域活性化の方策として自衛隊誘致が浮上したという<sup>6</sup>。この計画は島民の反対運動を引き起こし、2度の町長選で対抗候補の擁立（結果は運動側の敗北）、町議選を経て野党がいなかった議会で6人中2人が野党になった。議会で多数をとれなかったため、反対派は住民投票条例の直接請求までしたが、与党議員の反対により否決された<sup>7</sup>。

2013年8月に誘致派の町長が再選したことから、このままいけば基地の建設が進み、近いうちに100人規模の自衛官が与那国の住民となる。つまり、人口1600人の島に100人の新たな有権者が与那国の町政に参画することになる。——これは妄想の中で移住する外国人の話ではない。自衛官という、高度に同質的で町政にうとい有権者のことである。ここで個々の自衛官の政治的志向を問うているのではない。だが、その人の政治的な立場がいかなるものであれ、たまたま与那国に赴任した自衛官にとって、島の政治は勝手に分からないものでしかないだろう。そうした有権者は、通常は地方選挙を棄権する可能性が高いが、与那国の場合にはそうはならない。自衛隊を応援する団体たるこの地の防衛協会の副会長は、自衛隊誘致話を持ち込んだ町会議員だからである。防衛協会は、町政に不案内な自衛官を正しく投票に導き、堅い組織票を生み出すこととなるだろう。

自衛隊は、独自に持ち込んだ糧食を消費するから島内での買い物は期待できないし、補助金をもたらすわけでもないから、経済効果については疑問が付されている。だが、町長選の投票総数の1割弱に相当する組織票の政治的効果は絶大であり、町政は遠からず「防衛（協会）の論理」を忠実に反映するようになる<sup>8</sup>。それが近隣諸国を刺激して緊張状態に陥れば、さらに自衛隊が規模拡大するという循環が生み出される。中国の脅威→自衛隊配備→外交摩擦→さらなる防衛力強化→国防に従属する島という循環の誕生である。与那国は、台湾への入口→絶海の孤島→国防の最前線へと変貌していく。

歴史を繙くと、与那国が防衛の論理に翻弄されたのは、これが初めてではない。戦後与那国の経済的基盤となった台湾との密貿易は、中国の国共内戦と朝鮮戦争により「強制終了」の憂き目に遭った。米軍は、与那国から薬莖や真鍮が中国に流出するのを問題視し、密貿易を徹底的に取り締まったからである（屋嘉比、2005：51-2）。台湾と切り離された与那国は、それから衰退の一途を辿ることとなる。これが与那国にとっての「一度目の悲劇」だとするならば、「二度目の茶番」として自衛隊配備が進んでいく。この茶番劇は教科書問題まで飛び火し、与那国町を含む八重山地区では、「領土問題」や「自衛隊」の記述が手厚いとされ

---

<sup>6</sup> 「自衛隊は超優良企業」（だから誘致するのだ）という言葉も、島内では堂々と語られている。それゆえ、自衛隊が現実的に離島防衛に役立つか否かは、保守系の誘致派にとって重要性を持たない。

<sup>7</sup> 住民投票条例を請求する過程でも、外国人住民の投票権が問題となった。平穏な生活を維持するために住民としての意思表示をしたい外国人は、某国の代弁者という嫌疑を一方的にかけられる。その結果、住民投票が実現しようがしまいが、彼ら彼女らの意思は封殺されてしまうものとされてしまう。

<sup>8</sup> 自衛隊基地反対派が一番懸念しているのは、これにより島内の保革バランスが崩れ、保守の永続支配になることだった（2013年3月13日の聞き取りによる）。

る育鵬社の公民教科書が採択された<sup>9</sup>。これら一連のことが示すのは、「離島が外国に乗っ取られる」という掛け声のもとで、「離島が国防に乗っ取られる」という、たちの悪いブラックジョークのような事態の現前である<sup>10</sup>。

その後、2014年9月7日に与那国島で町議会議員選挙があり、与野党が4対2から3対3へと拮抗するようになった。双方が議長職を押し付けあった結果、くじ引きで与党（保守）側が議長となり、議決に際して野党が3対2で多数派を握ることとなった。これにより、野党側は住民投票条例を可決し、紆余曲折の末、2015年2月22日に住民投票が実行された。その結果、島内の予想に反して自衛隊誘致賛成派が多数を占め、自衛隊基地建設は揺らがぬものとなった。

\* \* \*

本論文で得られた教訓は、ローカルな意思に加えてナショナル・マイノリティの観点から安全保障化に抗わねばならない、ということになる。外国人排斥を正当化する究極の論理は安全保障であり、「敵性国民」の処遇をめぐる歴史的に多くの悲劇が引き起こされてきた。そうした観点からすれば、与那国町議会の外国人参政権反対決議は、妄想を具現化した出来の悪い SF として一笑に付せば済むような瑣末な例外ではない。「脅威」に乗じる安全保障の論理をひとたび受け入れてしまうと、「国境」はあらゆる場所へと広がって社会全体を統制する原理となっていく。そして北朝鮮との緊張関係が焦点化したとき、朝鮮籍の人たちに対する抑圧を当然のごとく受け入れてしまう「実績」を、日本社会はすでに作ってしまった。

それに対して、「国防」によらず「脅威」を軽減する方法——脱安全保障化の方途を考えることが、与那国でみたような悪循環を止めるに際して不可欠となる。そう考えたとき、「脅威」を生み出す——近隣諸国すべてを敵にする——要因としての歴史問題に立ち戻る必要が生じる。日本は、冷戦構造のもとで米国の傘下に入ることにより、戦争責任や植民地清算を曖昧なまま処理することが許容されてきた。だが、冷戦後もその延長で対応しようとした日本のやり方は、東アジアの経済発展や世界的な「文化的トラウマ」の政治化 (Alexander et al. 2004) により通用しなくなっている。にもかかわらず、対外的に謝罪した直後に国内向けの妄言が飛び出る「国辱もの」の学習能力の欠如が、近隣諸国との関係をこじらせ、その延長に日本型排外主義がある。

\* \* \*

日本型排外主義の起源は、冷戦体制下で日本が過去の清算をうやむやにするという「恩恵」

---

<sup>9</sup> 自衛隊は、2003年に時点で「S（尖閣）諸島周辺海域」で漁船が領海侵犯し、「巡視船へ体当たり」といった事態を想定した演習を実施している（前田、2007：136）。これが2010年の漁船衝突事故を経て政治にも影響を及ぼすようになり、八重山の新興保守勢力も「国境地区における中国の脅威」を活用するようになった（仲新城、2013；中山、2013）。

<sup>10</sup> 新崎（2012）は、生活圏という言葉により柔構造としての国境のあり方を自覚的に取り戻すべき、という趣旨の提言をしている。そうした観点からの人類学や民俗学的な研究も、今後重要な意味を持つようになるだろう。これに関わるのが「境界研究」と呼ばれる領域であり、そうした観点からの研究でナショナリズムを相対化することは、危機回避のためにも必要だろう（Diener and Hagen 2010; Donnan and Wilson 1999; Rajaram and Grundy-Warr 2007; Wilson and Donnan 1998）。ジャーナリズムからの応答としては、松田（2013）、沖縄タイムス「尖閣」取材班（2014）を参照。

を被ったことにある<sup>11</sup>。1945年8月15日は、日本では終戦記念日とされているが、中国では国共内戦が続いていたし、朝鮮半島はその何年も後に本格的な戦争状態に突入したのである（駒込、1996）。その結果として中国と朝鮮半島は分断されたが、実はそうした状況こそが、日本の植民地支配や戦争責任の所在を曖昧にするのに役立った。米国も日本の責任を追及するよりは兵站地の確保を優先させ、責任を曖昧にしたままで近隣諸国と関係を構築することを黙認した。韓国との国交正常化に際しては、開発の原資を必要とする相手の足下をみるような処理がなされた。つまり、賠償という性格を否定しつつ資金を出して植民地清算を解決済にするような、論理的に矛盾する解決方法がとられた。在日コリアンに対しても、同様の措置がとられてきたことはすでに述べたとおりである。

他方で、植民地清算の先延ばしと主体的な対応の放棄以外の経路も、細い糸のようなものではあるが開かれてきた。それが2者関係にもとづく地域レベルでの経験であり、地域はある種のアジールとなってきた面がある。しかし、ここ数年の間に朝鮮学校に対する補助金の廃止が、2者関係の積み上げを反故にする形でなされてきた。自治体の政策にも3者関係が入り込み、アジールが破壊されていく現実がそこにはある。それに対して、過去20年の「共生」の実績はあまりにもろく、それが3者関係に対する阿諛追従でしかないことを露呈してしまった。共生とはいったい何だったのか、批判的な評価にもとづく2者関係の再構築が必要である。

ただし、地域レベルでの取り組みは、あくまでサイドストーリーにすぎない。やはり歴史的に経路づけられた3者関係の再構築がなければ、日本型排外主義は繰り返し噴出することになる。その意味で東西冷戦の終焉は、これまでの歴史的経路を変更して和解に至る好機だったし、現状を考えればその「利得」は大きかった。実際、ドイツは東西統一に際して東方領土の放棄を公式に謳うことで、ポーランドとの関係を再構築したのである（Sakaki 2013; 佐藤成基、2008）。日本でも、細川政権や村山政権でそうした試みはなされてきたが、経路を変えるには至らず中途半端に終わってしまった<sup>12</sup>。在日コリアンに関していうならば、特別永住資格を設ける際に参政権や国籍選択も含む抜本的な措置がなされるべきだった。この時点で近隣諸国との関係を再構築できていれば、韓国・北朝鮮と在日コリアンを同一視する排外主義が信憑性を持つことはなく、運動が急速に拡大することもなかっただろう。

筆者が「不遇原因説」「不安原因説」を執拗に批判してきたのは、それが3者関係の隘路に陥る日本の姿をぼやかしてしまい、本来みるべき構造を捉え損なうからである。また、「連綿と続くアジア蔑視の表れ」という把握も、戦後東アジアの地政学という個別歴史的な要因を見逃してしまう。排外主義運動は、単なるレイシズムとしての在日コリアン排斥ではない。「主流の歴史にたいして不協和音を奏するような物語」（グラック、2007: 310）を体現する存在たる在日コリアンを、汚辱の歴史と共に抹殺したいという欲望が根底にある。今世紀に入ってから保守政治の変容は、確かに排外主義運動の台頭に影響を及ぼしている。だがそれに至る経路は、はるか以前から築かれており、本章ではそれを戦後の对在日コリアン政策に即して検討してきた。

<sup>11</sup> これと歴史問題の関係については、玄（2008）を参照。

<sup>12</sup> 2000年代には、歴史修正主義と防衛力強化の双方を指向する勢力が主流となり（Samuels 2007）、それが現在の緊張状態を生み出している（権、2005）。それに対して防衛力整備を謳うのは、長期的にみれば現実主義の非現実性を実証する結果にしかならないだろう。

70年近くかけてできた経路を変えるのは容易なことではないが、その経路を明らかにすること、その上で変更の可能性を模索することが切実に求められている。現在の政治環境に鑑みれば、経路を明らかにしたところで変更に至るような動きが出るとは考えにくい。それでも、日本型排外主義の噴出は、それに対抗する動きを市民社会と政治で呼び起こすようになった。それを体現するのがヘイトスピーチであり、この言葉は2013年の流行語大賞トップテンに入るほどの注目を集めた。筆者自身は、当事者による対抗手段が必要という観点から、ヘイトスピーチ規制には基本的に賛成である（樋口、2013f）。だが、こうした手段で日本型排外主義自体を抑制することはできない<sup>13</sup>。ヘイトスピーチへの対抗にとどまらず、それを許容する言説の機会構造の問題に、ひいては戦後日本が積み残してきた近隣諸国との間の課題に取り組むことが、今まさに求められている。本論文で提示したのは、その一部のデザインでしかないが、ぼやけた像の輪郭を描きもつれた糸をほぐす試みの一助になることを切に願う<sup>14</sup>。

---

<sup>13</sup> この点については、板垣（2015）も参照。

<sup>14</sup> その最大の背景的要因たる歴史修正主義については、関連する論考の数は多いものの事態の解明に向けた分析的な研究はほとんどない。直近で出されたものとして木村（2014）があるが、筆者からすると期待外れの内容だった。

## 補論 日本政治のなかの極右<sup>1</sup>

- ・生活保護制度を日本人に限定し、困窮した外国人には別の制度を設ける。
- ・国政も地方も参政権は国民固有の権利であることを明記（外国人参政権には反対）、移民の国籍取得要件等の厳格化、特別永住制度の見直し。
- ・東京オリンピックに備えて、入国管理と治安警備を強化。
- ・国境地域や基地周辺など、安全保障上重要な土地の取引と使用を規制。

これは、世間を騒がす特会のホームページからの抜粋だろうか。そうではない。日本維新の会から袂を分かち、2014年12月の解散時点で国会議員26名（衆院19、参院7）を擁した次世代の党が発表した政策集の一部である<sup>2</sup>。ここまで露骨に外国人排斥を公約に盛り込んだ政党は、日本ではかつてないもので、いかなる定義をもってしても極右と呼ぶしかないように思われる。

### 1 日本に極右政党は存在しない？

だが、次世代の党に関して「保守色が強い」といった表現は使われても、極右と名指したマスコミはなかった。一方、海外からみれば日本にも欧州と対置される極右政党があると、当たり前のように認知されている。たとえば英紙ガーディアンは、2012年総選挙での日本維新の会（現・維新の党）の躍進に関して、「極右新党が第三勢力となった」と見出しをつけた（*The Guardian*, December 16, 2012）。それよりはるか以前から、石原慎太郎・元東京都知事を極右と呼ぶ海外メディアは多かった。2014年2月の東京都知事選で60万票を得た田母神俊雄候補は、さらに純化した極右だったといえる。掲げる政策や政治手法の類似性から考えれば、海外メディアが欧州を基準に日本の政治家や政党に対して極右という言葉を用いるのは、ごく自然なことと思われる。

にもかかわらず日本のメディアは、極右とは欧州に存在するもので、あたかも日本とは関係ない現象であるかのように取り扱おうとしてきた節がある。実際、極右という言葉はどう使われてきたのか、表補-1では過去3年間の三大紙（朝毎読）記事のうち、極右という言葉を用いて関連する内容にふれたものを計数した。これをみると、外国に関する記事が圧倒的に多い一方で、日本についても極右という言葉は一定程度使われてきたことがわかる。しかし、日本についてこの言葉を用いるのは、以下の2つの場合に限られる。第1は、中国や韓国の政府やメディアが安倍政権などを批判する際に用いるもので、自民党政権復帰が濃厚になった2012年に多用された。これは相手国政府の言葉として紹介されるにとどまっておろ、メディアが自らの言葉として用いたわけではない。第2は、2014年に安倍政権の閣僚がネオナチグループと写真撮影した事件を受けた記事が該当する。これは、閣僚ではなくネオナチを極右と名指ししたのであり、政党や政治家に対して極右という言葉を用いたわけではない。

<sup>1</sup> 本章は、樋口（2015b）に一定の加筆を施したものである。

<sup>2</sup> 「次世代が希望を持てる日本を（政策集）」次世代の党、2014年11月。



表補-1 新聞の極右関連記事

	日本	外国
2012	24	210
2013	14	100
2014	39	155

注：日経テレコンを用いて、朝日、毎日、読売各紙の見出し・本文検索で「極右」にヒットした記事のうち、極右に関連する記事を計数した。

極右と呼ぶべき存在があるにもかかわらず、その言葉を避けてきたことで、日本の政治をみる切り口の一つが失われてきた<sup>3</sup>。一方で、在特会のような排外主義運動が台頭し、それが歴史修正主義、「慰安婦」、領土問題などを軸とする政治と呼応する状況が現実のものとなっている。こうした事態を極右という観点から整理し、対策のあり方を考えることが本章の目的となる。

## 2 極右とは何か

フランスの国民戦線、オランダの自由党、ギリシャの黄金の夜明け——極右と呼ばれる政党は多いが、具体的にそれが何を指しているのか論じられることはあまりない。現実の極右政党は多様だし、同じ政党でも主張は頻繁に変わるから、何が極右かはおおむね一致しても何をもって極右というかは、論者によって見解が異なる。ムデは、極右のさまざまな定義を整理して、①ナショナリズム、②排外主義、③国家主義（法と秩序、軍国主義）、④福祉ショーヴィニズム、⑤伝統的倫理、⑥修正主義といった要素に分けた（Mudde 2000）。このうちすべての極右政党に該当するのは①②だけであり、ここから「主流派保守よりナショナリズムと排外主義について極端な主張をする政党」と極右を定義できる。

こうした定義に該当する極右が欧州で台頭したのは1980年代以降のことで、それまで「移民」「外国人」が標的とされてきたわけではない。ファシズムの流れを汲む勢力に加えて、王党派やキリスト教原理主義などがかつての極右だったが、限られた勢力しか持たなかった。外国人排斥を前面に掲げ、ポピュリスティックな政治手法を使う勢力が台頭することで、極右という名称が頻繁に用いられるようになったのである。

日本にも、青嵐会など自民党を中心に極端な右派勢力が存在してきた。青嵐会が親台湾派（というよりは反共）として日中国交正常化に反対したことも、現在の中国・韓国・北朝鮮に対する強硬派と相通ずるものがある。だが、かつての右派勢力はナショナリズムを強調する一方で、排外主義（外国人排斥）を掲げてきたわけではない。ナショナリズムに加えて排外主義を表に出すようになったのは、石原慎太郎・元東京都知事の一連の発言が端緒となる

<sup>3</sup> こうした筆者の主張を最初に取り上げてくれたものとして、「台頭する日本版極右」『東京新聞』2014年2月27日付がある。その後、北海道新聞（樋口 2014c）、「ヘイトスピーチの源流を探る」『東京新聞』2014年4月22日付、朝日新聞（樋口 2014f）などが続いており、日本政治への極右概念の導入を本論文の Spin-off たる課題としたい。

だろう。「三国人」「民族的 DNA」など、欧州ならヘイトスピーチとして処罰される発言を繰り返す石原は、右翼というより欧州と直接比較しうる極右と呼ぶべき最初の政治家である。橋下徹・大阪市長は、イデオロギー的には排外主義より新自由主義が強いものの、特別永住資格の見直しを口にするなどしており（『朝日新聞』2014年10月22日付）、場合によっては極右とみなしたほうがよい。

極右の定義が難しい背景の一つは、保守や社民、緑とは異なり、自ら極右と名乗る政党がないことによる。逆にいえば、極右という言葉はスティグマを伴い自ら使用したがるにいかかわらず、政治家やメディアはごく普通に用いてきた。それには2つの理由があり、第一は「保守」とは明らかに異なるから違った言葉が必要というものである。もう1つは、極右のイデオロギーや政治手法は民主主義の敵であり、そうした政治勢力を容認しないという意味で用いられる。日本政治に極右という言葉を導入するに際しても、この2つの点に注意する必要がある。

### 3 極右が台頭・定着する条件

冒頭でふれた次世代の党は、2014年12月の総選挙で解散前の衆院19議席から2議席への惨敗を喫した。この結果は、極右を忌避した有権者の良識のあらわれであり、日本に極右政党は根付かないとみてよいのか。そうではないだろう。石原は都知事時代の極右的言動にもかかわらず、選挙で負けなした<sup>4</sup>。田母神はより純化した極右だったにもかかわらず、都知事選で61万票（得票率12.5%）を獲得し予想外の支持を集めた。

こうした振幅をどう解釈すればよいのか。一般に極右政党の組織的基盤は弱体で、選挙で安定した支持を集めるところはむしろ例外に属する。2002年のオランダ総選挙で第二党となるが、それから急速に衰退し2008年に解党したピム・フォルタイン党のような「一発屋政党（flash party）」は珍しくない。浮動票に頼る傾向が強いわけだが、極右政党が支持を得る条件はいくつかある（Mudde 2007）。そうした要素がすべてそろえば、欧州なら3割程度の票を得る可能性すらある。次世代の党、日本維新の会、石原を例として、日本に即して考えてみよう。

第1に、既成政党に対する不信感の高まりや党の分裂などによる不安定性の高まりが挙げられる。既成政党が有権者と強く結びついていれば、新たな政党が分け入る余地は少ない。政党再編成や政治不信により政党と有権者の結びつきが弱まり、行き場を失った票が生じた時が極右政党（に限らず新党全般）にとってのチャンスである。そこでうまく有権者にアピールできれば、極右が思わぬ躍進を遂げることになる。

2012年総選挙で維新の党が第三党になったのは、民主党政権を選択したもののその後の混乱により行き場を失った票を吸収できたからだろう。維新の党が掲げたのは、新自由主義とナショナリズムだったが、排外主義的な争点が浮上していれば極右的な政策を掲げて議席を伸ばした可能性もある。それに対して、次世代の党が臨んだ昨年の総選挙は、自民党の支持率も高い上に、安倍政権のさらに右に入り込む隙間がほとんどないがゆえに、2012年

---

<sup>4</sup> しかも、石原に対する支持はナショナリズムと強い関係がある（松谷ほか 2006）。また、安倍晋三に対する支持と比べて排外主義の説明力も高い（樋口・松谷 2013）。石原のイデオロギーが支持されているわけであり、極右が支持を伸ばすポテンシャルがかなりあることを示す。

と比べて有利な条件ではなかった。

第2は、極右が得意とする争点が浮上する事態である。常識的な見方とは逆に、不況の時には極右の得票は伸びにくい。現実的な経済政策が求められる際には、極右が選択肢とならないからである。それに対して、移民や犯罪といった問題が争点となったとき、極右の非現実的な主張が斬新に映ることがあるだろう。さらに、その争点を他の政党が避けた時には、争点に対する関心を極右政党が独占することになる。前出のピム・フォルタイン党は、選挙直前に党首の暗殺という事件があったが、オランダで浮上した移民政策の議論を同党がリードしていたことが躍進の背景にあった（第6章参照）。

日本の場合、「移民問題」が選挙戦の争点になったようなことはないが、近隣諸国との関係をめぐるナショナリズムが浮上する可能性はあった。近年ならば、2010年の尖閣諸島沖での漁船衝突事故や、石原が打ち出した東京都による尖閣諸島購入計画といったことがあれば、対外政策を選挙戦での争点となしうる。そうしたタイミングで選挙が行われ、極右が勇ましい政策を掲げれば、一定の支持を得た可能性はあっただろう。逆に、次世代の党は目立った争点のない今年の総選挙で船出し、前面に打ち出した排外主義的な政策も関心を持たれなかったがゆえに、泡沫政党の1つとして埋没したことになる。つまり争点設定という意味で悪条件の選挙だったうえに、争点化しようとした政策もニーズを取り込んでいない内部の戦略ミスが惨敗の一因だといってよい。

第3に、カリスマ的なリーダーがいる時に、極右政党は大きく躍進する（反面、安定した支持を維持するには組織力が重要になる）。フランス国民戦線のルペン、オーストリア自由党のハイダー、オランダ自由党のウィルダースなど、極端な主張を巧みに訴える才能がある党首の重みは他の党にまして大きい。これは、極右がポピュリズム的な政治手法に頼ることと表裏一体の関係にある。

次世代の党が惨敗したのは、平沼赳夫党首のカリスマ性のなさにもよるところも大きいだろう。最高顧問だった石原も、2014年総選挙には半分引退したような状況で臨んでおり、またかつてのような人気もない。しかし、石原人気が高かった2000年代前半に、あるいは橋下がメディアの関心を独占していた頃に極右新党が結成されていたらどうなったか。日本維新の会が2012年の総選挙で第三党に躍り出たことは、橋下のカリスマなくして考えられない。

これらの要素は、それぞれ独立してばらばらに存在するのではない。カリスマ性のある党首は政党政治の空白期に注目され、時代の関心を巧みに表現するという意味で連動している。その意味で、すべての条件がそろわない限り簡単に極右の台頭という事態は生じにくく、確率的に必ずしも高いとはいえない。しかし、これまでの検討を踏まえれば、日本でも極右政党が幅広く支持を得る事態は十分に起こりうると考えた方がよいだろう。

さらに、極右の台頭ではなく政治勢力としての定着をみるに際しては、短期的な選挙結果だけでなく10年単位での政党支持層の変遷も考える必要がある。今年の都知事選では、田母神に対して若年層の支持が厚かったことが、出口調査から明らかにされている<sup>5</sup>。これを

<sup>5</sup> 出口調査結果も含めた解説としては、「田母神氏 60 万票の意味——『ネット保守』支持 都知事選」『朝日新聞』2014年2月11日付、「続報真相 田母神氏 61 万得票の意味」『毎日新聞』2014年3月7日。後者には筆者のコメントも掲載されており、その際に出口調査結果を見る機会を得たが、20代男性の投票先トップは田母神だった。

もって、非正規雇用のような「若者の生きづらさ」と極右支持を結び付ける議論がなされるが、それよりも投票行動の教科書的な説明を持ち出した方が事態を正確に理解できる。(心理的なものも含めて) 既成政党との結びつきが強い若年層にとって、目新しい主張を掲げる候補に対する抵抗感は年長世代より弱い。さらに、近隣諸国との摩擦ばかりが報じられるなかで政治的関心を育む世代にとって、田母神は自分の聞きたいことについて頼もしい主張をする存在にもみえるだろう。その意味で若年層が田母神に投票するのは、いわば当然の結果とすらいえるのではないか。

田母神の例が示すように、極右政党は若年層に支持されることが多いとされるが、それは新しい政党として新しい争点を掲げることと大きく関係している。問題は、極右の主張を新鮮なものと受け取った世代が、極右を正統な政治勢力としてみなすように政治的社会化されることであり、そうなる特定の世代が極右を既定の投票先とし続けて、議会の中に極右政党が定着することにつながる。

#### 4 市民社会と政治を往還する排外主義

極右政党が定着した際に生じる最大の問題の1つは、極右の主張が政治から社会に流布し正統性を持つことにある。主張を広めるのはメディアだけでなく、政治に呼応した極右運動でもあり、90年代以降の日本では可視的な動きとなった歴史修正主義と排外主義が該当する。表補-2では、政治と市民社会における極右勢力を整理しており、両者の組織的な結びつきには濃淡があるが、掲げる主張は相互に影響し合っている。

表補-2 日本の極右政党と極右運動

イデオロギー		政党	社会運動組織		サブカルチャー的基盤
ナショナリズム	外国人排斥	(自民党) 次世代の党 日本維新の会	日本会議	在特会	インターネット
	対外強硬派			救う会	一部財界(青年会議所など)
	歴史修正主義			新しい歴史教科書をつくる会 英霊にこたえる会	宗教(神社本庁、生長の家、統一教会、キリストの幕屋、新生仏教教団等)
	伝統主義			街宣右翼	

出典：Minkenberg [2002: 247]を参考にして作成。

注：自民党をカッコに入れたのは、必ずしも極右政党とはいえないという留保の意味である。

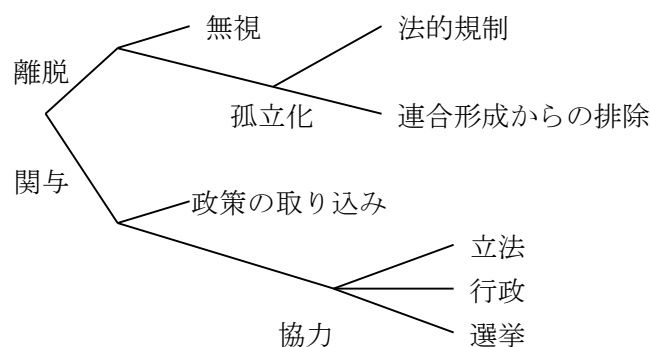
どのように関連しているのか、在特会を例として説明しよう。この団体は、「在日特権」として特別永住制度、通名使用、生活保護優遇、朝鮮学校への補助金を挙げている。これらの特権などというのは、何の根拠もないデマであり(野間、2013)、既成政治勢力が主張していたものから借りてきた主張でもない(第6章参照)。しかし、在特会に連なる排外主義運動は歴史修正主義の影響を強く受けており、それに肩入れする政治家や右派論壇の主張が出発点となっていた。歴史修正主義は、「反日」勢力への憎悪を通じて容易に近隣諸国を標的とするナショナリズムへと転じる。そうしたナショナリズムの薫陶を受けた者たちが、

インターネット上の掲示板などでやりとりするうちに、日本在住の近隣諸国民、なかでも在日コリアンを敵視するようになっていく。その意味で日本の排外主義は、歴史修正主義が政治から市民社会へと浸透した際の、一種のデフォルメとして生まれたことになる。

排外主義運動は、その後ヘイトスピーチとして問題化され、社会悪であるという認知は広がったとあってよい。だが、冒頭で掲げたように次世代の党は、在特会の主張する「在日特権」なるデマのうち2つも政策に取り入れた。橋下も大阪市長として在特会会長と2014年10月に面談し、相互に罵倒して終わった翌日に特別永住資格の見直しを口にしている（『朝日新聞』2014年10月21、22日付）。これまで、いかに右派の政治家といえども特別永住を攻撃することはなかった。それをこと挙げする者が出るようになったのは、在特会の影響としかいいようがない。これにより、政治から流れ出た歴史修正主義が排外主義運動へとデフォルメされ、それが政治へと逆流する回路が完成したことになる<sup>6</sup>。

## 5 西欧的な極右包囲網

ではどうすればよいか。西欧諸国における極右への対応は国によってかなり異なり、図補-1のように類型化されてきた<sup>7</sup>。イタリアやオーストリアでは図の下側にあたる「協力」が盛んで、極右政党が右派連立政権を早くから担っている。極右を政権に取り込んで穏健化させた方が害が少ないという論者もいるが、現実には極右政党の政権入りは移民政策に影響を及ぼしてきた。その意味で、図補-1の上側にあたる孤立化を基本的な対応とした方が、極右の影響を最小限にとどめることができるのではないか。そうした現実的な判断に加えて、極右を民主政治のなかで意味ある存在として認めたくないという意識が相まって、ベルギーやドイツの既成政党は防疫線と呼ばれる協定を結んできた。



図補-1 村八分政党への対応をめぐる選択肢  
出典：Downs (2001: 26).

防疫線とは、極右政党との協力を一切拒み、有権者に対して極右に投票しても無駄と認識

<sup>6</sup> ヘイトスピーチが問題化して以降、右派論壇は「ヘイトスピーチは許されない」「在特会（行動する保守）も論外」とし、在特会の切り捨てをはかっている。一方で、実質的にはその主張を取り入れており（古谷、2015；岩田、2015；小浜、2015；八木、2015）、これも排外主義の往還の一形態とあってよいだろう。

<sup>7</sup> 類型としては、これ以外にも Pelinka (2013)、Widfeldt (2004) が参考になる。

させるような方策を指す。この言葉自体は、正常な政治と極右の間に線引きをして後者の浸透を防ぐという趣旨で用いられる。防疫線を引いた結果、何が起ころのか。まず、排除された極右政党が過激化するわけではなく、政権入りした極右政党が穏健化するともいえない。したがって、イデオロギーに対しては目立った影響がないことになる。一方で、防疫線を引くと極右が直接政策に関わることはできなくなり、既成政党が極右の政策を取り込むような間接効果しか表れず、極右の政策は実現されにくくなる<sup>8</sup>。さらに得票をみると、防疫線が引かれて長期にわたる国（フランス、ベルギー）では、むしろ高い傾向があった。防疫線を生き延びた極右政党は、移民・犯罪といった争点で認知されるようになり、万年野党でも一定の支持基盤を維持できる。

つまり、極右政党が形成された初期のうちに防疫線を引くことで、その後の伸長を防ぎやすくなるし、排除的な政策も実現されにくくなる。しかし、いったん勢力を確立してしまうと防疫線で支持拡大を食い止めることはできないし、極右票の奪回を意識して極右の政策を取り込むような動きも生じてしまう。このように、早めの対策が効果的であるという知見は、日本でも極右という言葉を定着させるべきという筆者の主張の根拠でもある。

## 6 日本での極右包囲網

だが、防疫線が引かれてきたのは欧州でもイギリス、ベルギー、ドイツなど一部の国にとどまる。西欧では、すでに10回以上にわたって極右が政権入りしており、それゆえ政権への取り込みによる穏健化という対極右戦略が語られることになる。日本の場合、極右という言葉が定着したとしても、防疫線が引かれるような事態は生じにくい。むしろ、オーストリアやイタリアのように保守政党は極右政党を容認することになるだろう。そうした条件のもとで、日本で取りえる極右対策のあり方を最後に考えてみよう。

まず、ヘイトスピーチという言葉が2013年の流行語大賞トップテンに入り、絶対的な悪であると認知されたのと同様に、絶対悪としての極右という認識を広める必要がある。もっとも、左派リベラルは極右という言葉を使うことに抵抗はないだろうが、そうした勢力だけが用いるのでは効果が限られてしまう。左派が石原をあれだけ批判しながらも、選挙で石原に太刀打ちできなかったことを想起すればよい。保守層も含めて政治社会に広く極右という言葉が浸透し、極右の支持や極右との協力を——多少なりとも——ためらうような状況が必要となる。これまでみてきたように、欧州と比肩しうるような極右が存在する以上、メディアは及び腰にならず極右という言葉をも日本に適用することが、正確な報道にもつながるだろう。

ただし、日本は伝統的に保守勢力が強く、極右に対しても許容的といってよい。そうした社会で、民主政治の敵や多様性の否定といった規範的な議論を用いるだけでは、極右という言葉の現実的な効果に疑問符がつく。保守層の一定割合から支持が得られるような方策を考える必要があるだろう。

そこで参考になるのが、民主党の野田政権による尖閣諸島国有化をめぐる経緯である。この一件は、極右が政策に悪影響を及ぼした典型例であり、2012年に尖閣諸島の買い上げを最

---

<sup>8</sup> 間接効果といっても、極右政党が既成政党を排除的にする影響があることに変わりはなく（Rydgren 2003）、存在自体が有害だといえるだろう。

初に主張したのは、当時都知事だった石原だった。実際に、東京都として購入すべく多額の寄付金を集めもした。その石原を抑えるために国有化したわけだが、野田政権は実質的に極右の政策を取り込んだことになる。その結果、日中関係は極度に悪化した。極右の政策は、「国益」を訴える歯切れの良さが支持を集める一方で、バランス感覚の欠如ゆえに、かえって国益を損なうことが多い。

日中国交正常化の際に尖閣問題の棚上げを決め、村山談話を継承すると繰り返したのは自民党政権だった。領土問題や歴史認識の問題に対しては、保守といえども事態の複雑さを踏まえた譲歩や妥協を含む政治技術が求められることを示す。しかし、極右の乱暴な対応はそれまで積み上げてきたものをぶち壊してしまう。その意味で、「国益」を重視する現実主義的な保守にとっても、極右の台頭は容認できないはずである。事態を単純化して敵意を煽る極右的な政治手法は、問題解決ではなく新たな問題の原因にしかならない。極右がまだ定着しておらず、近隣諸国との関係が懸念される今だからこそ、極右的なものに対する歯止めをかける必要があるのではないだろうか。

この点に関して、直近の『世界』で高橋哲哉は安倍政権を極右とした<sup>9</sup>。過去の政権との比較でいえば、この認識に間違いはないだろう。過去の政権との比較でいえば、この認識に間違いはないだろう。だが、民主政治に対する敵という規範的な観点からみると、極右という言葉の乱発は効果を減じることになりかねない。つまり、安倍といえども政権を担う以上は現実的な判断が求められる。その意味で保守には妥協の余地があるわけだが、極右と名指してしまうと開き直って歯止めがかからなくなる恐れがある。むしろ、安倍政権を現実主義に引き戻すような方策が必要で、その方が相対的に危険ではないともいえる。つまり、「国益」のために安倍に極右と手を切らせた保守が、極右と対峙するような状況をつくる必要がある。

民主党政権の失敗により残されたのは、左派リベラルだけでは多数派をとりえないどころか、保守と極右が多数を占め続けるなかでの長きにわたる退却戦である。悲観的な見方だが、そうした認識をもとに保守層との連携をはからない限り、ひたすら後退するしかない戦いが続くことになるだろう。そうしたなかで、極右勢力が現実に出場し、保守層の一部も眉をひそめるような政治手法と政策を打ち出しているのは、確かに極右化する政治的危機の表れと考えられる。しかしそれは、保守と極右を明確に分けて、保守に「極右への橋」を渡らせないようにする好機といっていえなくもない。西欧のものと同じにはならないとしても、日本的な防疫線のあり方を考えることはできる。その1つとして、「国益」に敏感な現実主義保守と連携する可能性を示した。線引きのあり方は 이슈によって異なるだろうが、政治にとってきわめて有害な極右という要素を取り除く技術を磨いていく必要があるだろう。

---

<sup>9</sup> 「極右化する政治」『世界』864号、2015年1月。安倍政権と排外主義については、木宮（2014）を参照。

## 補遺：調査とデータについて

本論文で用いるデータの多くは、調査により収集したものである。本文中で逐一提示する煩雑さを避けるため、各章で用いたデータ収集の方法や時期に関して、一括して掲示する。極右、排外主義、保守運動に関する評論は数多いが、実証的な研究は非常に少ない<sup>1</sup>。これは日本に限ったことではない。欧米では、極右政党に関する研究が膨大に蓄積され、命題の検証や相互批判の積み重ね、扱うデータの質の拡充により、得られた知見は2000年代に飛躍的に増加した。だが、極右団体の個々の活動家に対する調査は、極端とってよいほど少ない（Blee 2007; Goodwin 2008b）<sup>2</sup>。この背景として、極右の活動家は研究者やジャーナリストを毛嫌いすることが挙げられている（Andersson 2013; Blee 2007）。そのため、過激な政治的暴力に関しては知見が蓄積されにくい（della Porta 2008）。筆者自身も先行研究の欠乏に苦労したため、後続の研究を期待しつつ情報を可能な限り公開する方針をとった。今後は、「頑張り日本！全国行動委員会」のような相対的にオープンと思われる団体の調査も、研究者やジャーナリストに進めていただくことを期待したい。以下では、本論文で用いたデータについて概説する。

### 1 活動家に対する聞き取りデータ

本論文で用いるのは、排外主義運動の活動家34名に対して筆者が行った聞き取りの記録である。前述のように極右活動家に対する調査は少ないし、調査ができたとしても正確な情報を得るのは極端に難しい（Blee 1996: 687）。質問紙調査を行ったとしても、正直に答えない可能性が高い。構造化面接を行っても、単に自分の信念を繰り返し話されるだけに終わってしまう。そうした状況に鑑みて、筆者は活動家のライフヒストリーの聞き取りによりデータを収集した。ライフヒストリーを聞くことにより、上記の方法論的問題の多くを解決することができる。信念や組織に対する関わりではなく対象者自身のライフヒストリーから始めることにより、組織の方針を自らのものとして語らなくなるからである（Blee and Taylor 2002）<sup>3</sup>。

もちろん、これらが事後的な語りの産物である以上、政治的社会化やフレーム調整の過程を完全に再構成できるわけではない。それでも、ライフヒストリーの解析はフレーム分析では広く用いられている（Johnston 1995）。本人の経験と意識を時系列において聞くことにより、語りの矛盾が聞き取り過程でみえやすく、質問を重ねれば事後的な語りの構築なのか否かを判断しやすい。単に動機について直接尋ねるだけでなく、意味論的な文脈を細かくみることもできるため、運動参加に関するデータを集めるにも適している（Blee and Taylor 2002）。また、聞き取りのデータを公開して検証・反論可能にしてあるため、この語りをを用いて活動

<sup>1</sup> 例外的なものとして、村井（1997 a, 1997 b）、小熊・上野（2003）、鈴木彩加（2013）、山口・斉藤・荻上（2011）があるが、大まかな概況を把握するにも数があまりに不足している。

<sup>2</sup> 実際に個々の活動家にアプローチした実証研究は、管見では以下ぐらいしかなかった。西欧の比較研究（Klandermans and Mayer 2006c）、北欧（Bjørge 1998）、米国（Blazak 2001; Blee 1996, 2002; Ezekiel 2002）、イギリス（Art 2011; Goodwin 2010, 2011）、ドイツ（Virchow 2007）、フランス（Berezin 2007）、オランダ（Linden and Klandermans 2007）、スウェーデン（Kimmel 2007）、ノルウェー（Fangen 1998, 1999）、インド（Schgal 2007）。

<sup>3</sup> 方法論的な論点については、Schiebel（2000）を参照。



家が運動に参加するまでの過程を分析する<sup>4</sup>。

ライフヒストリーという方法をとったもう 1 つの理由は、参与観察のような方法をとりにくかったことによる。在特会に対しては、フォーマルに依頼することが調査の条件となっていたが、副会長レベルでは理解がある場合もあり、参与観察も不可能ではなかった。また、主権回復を目指す会のように調査にオープンな団体もあり、参加しながら聞き取りを進めることも可能だった。そうしなかったのは、調査といえども排外主義運動に参加したくなかったからである<sup>5</sup>。

関連する先行研究では、極右活動家たちが「普通の人」であることが強調されている (Blee 1996, 2002; Ezekiel 2002; Goodwin 2008b; Jansson 2010; Klandermans and Mayer 2006b: 269)。日本の活動家も同様であることは、これまでの調査経験からも予測できた。が、感情的に許容できない活動をする人たちとの「ラポール形成」を考えたくないの、調査自体も 1 年近く先延ばしにしていた (樋口、2013I)。調査に際しては、自分の政治的立場を明らかにした上で (明示的には外国人参政権賛成派と述べておいた)、運動参加に至るライフヒストリーを聞きたいと依頼した。インターネットで検索すればわかることだが、筆者が立場を明示したことから、「敵」のインタビューに答えるのを忌避した者もいただろう<sup>6</sup>。逆に、「敵」とじっくり話せる機会として好奇心を持つ者もあり、インタビューが終わってから議論したことも何度かあった。

対象者のうち 25 名は在特会を主な活動の場としており (していた者も含む)、残りの 9 名はそれ以外の団体を主な活動の場としている<sup>7</sup>。調査に際しては、排外主義運動団体に書状か電子メールで調査趣意書を送り、インタビューを依頼した。住所が明示されていないところも少なくなく、電子メールを送っても返信がないところの方が多かった。このうち在特会に対しては、2010 年末から広報局を通じて依頼することとされており、聞き取りに際しては「取材協力費」を支払うことが受諾条件となっている。調査倫理上、広報局を通じない形での聞き取りは不可能であり、調査をするには在特会の条件に従うしかなかった。在特会が広報局を通さなければ取材できないとしたのは、もともとは安田が在特会に対する取材過程で起こしたトラブルが原因で生じている<sup>8</sup>。

筆者自身が請求されたのは、1 人 2 時間を目安として 1 万円というものだが、在特会事務局の判断で一定の減額がなされる。そうした条件のもとで、2011 年 2 月から 2012 年 10 月まで聞き取りを実施し、録音した上で筆者がトランスクリプトを作成した<sup>9</sup>。属性は以下の

---

<sup>4</sup> 半構造化面接を用いる研究者は、読み手が解釈の是非を判断できるように、聞き取り記録を詳細に開示すべきとされている (Blee and Taylor 2002)。ただし、本人が特定される可能性がある部分は、特定されてもよいという承諾が得られた場合以外は公開していない。

<sup>5</sup> 「不快な」運動の調査に伴う方法論的問題については、以下が興味深い議論をしている (Blee 2003; Esseveld and Eyerman 1992)。

<sup>6</sup> これは、外国人参政権の研究で反対派の議員に調査依頼した際にも経験した。

<sup>7</sup> 1 人を除いた全員分の聞き取り記録を公開しており (樋口 2012a-x, 2013a-j)、すべてインターネット上で検索をかければダウンロード可能にしてある。

<sup>8</sup> 具体的には、安田が在特会会長である桜井誠の弟宅を取材したことが、桜井の態度を硬化させた原因となっている。

<sup>9</sup> 聞き取り記録は意味が通じるように適宜順序を並べ替え、言葉を補ったものを公開している。ただし、調査対象者の出身地を秘匿する必要がある場合、方言は標準語に直してある。

通り。性別＝女性 4 名、男性 30 名。年齢＝20 代 4 名、30 代 13 名、40 代 11 名、50 代 4 名、60 代 2 名。

無作為抽出が不可能な以上、どのようなサンプリング・バイアスがあるかを簡単に述べておく。在特会は、活動費が逼迫する中で取材協力費を請求するようになっており、可能な限り多くのメンバーを紹介する必要があった。それゆえ、対外的イメージを良くするようなメンバーを「選抜」したわけではなく、活動の中で聞き取りに応じてよいという者を募った結果が対象者となっている。その結果、支部運営以上の役職についている者が 21 名、それ以外が 4 名だった。在特会以外を主な活動の場とする者のほとんどは、それ以前から右翼運動の経験を持っており、排外主義運動には近年になって参入している。役職につかない在特会の 4 名も含め、いずれも自らが属する団体に積極的に参加する「活動家層」という特徴を持つと考えてよい。インフォーマルな会話で何度か出たところでは、見知らぬ大学教員とフォーマルなインタビューを行うと聞くと、多くの者は緊張して忌避するという<sup>10</sup>。そのため、調査対象者はコミュニケーションに前向きな傾向がある、また頼まれると断れないタイプだと考えられる。1 対 1 でなく複数名でインタビューに臨むことも多かったが、これも筆者を警戒したところがあるだろう。

対象者の特徴を理解するうえで比較対象となるのは、在特会に対する安田浩一のルポである。序章で述べたように、安田は学歴が低い非正規雇用の者が在特会には多いと述べたが、後に階層的には多様性があるとしている。当初の相違は、1 つには筆者との取材対象の相違によると思われる。安田は在特会の協力をほとんど得られなかったこともあり、「一般会員」にデモで声を掛けたり家までついて行って話を聞いたりしたという<sup>11</sup>。また、『ネットと愛国』が刊行されてからは、トークイベントなどに来た者とも接触している。このように「末端会員」が多い安田の取材と、活動家層を対象とする筆者の調査の違いは階層にも反映されているだろう。

安田と筆者の調査対象者とのもう 1 つの相違は、排外主義につらなるきっかけの部分にあった。「取材した半分以上の人が『日韓W杯をきっかけに韓国が嫌いになった』と答えた」（木村・清・安田、2013：43）と安田はいう。筆者の場合にはW杯がきっかけになった者は 1 名で、歴史修正主義や近隣諸国との対立を起点とする者が多かった（3 章参照）。ただ、安田がいうW杯がきっかけだったというのは、「末端会員」の動機付けの説明としては信憑性にやや欠ける部分があるように思われる。W杯は 2002 年とかなり前の出来事で、「韓国チームのラフプレイ」が社会的に大きな問題になったわけでもない。にもかかわらず、「末端会員」が韓国チームの試合をみて鋭敏に「不正」を見抜いて反感を持ち、その感情を 10 年近く持続させられるのだろうか。何らかのきっかけでインターネット上の情報に接し、事後的に「W杯問題」が構築されたと考えた方が妥当だろう。属性以外の相違は、こうした調査に

---

<sup>10</sup> 在特会に関しては、ほとんどのメンバーが偽名で活動しているため、特にそうした傾向が強い。聞き取りの信頼性を確保するために実施したライフヒストリー調査が、サンプリング・バイアスを生み出すわけである。どの調査方法もバイアスを避けることはできないので、複数の調査対象や調査方法をとった実証研究が出揃わないと、排外主義運動の概要を正確に把握するのは難しいだろう。

<sup>11</sup> 安田氏との直接のやりとりによる。こうした相違は、ジャーナリストが知る権利を掲げて取材するのと、研究者が調査倫理にもとづいて調査することに根ざしている。

おける解釈の方法にも起因すると思われる。

## 2 外国人参政権に関する聞き取り調査

2010年5月から2013年4月の間に、外国人参政権の法制化について19名に対して21件の聞き取りを行った。鳩山由紀夫・元首相と冬柴鐵三・元衆議院議員（故人）以外は、匿名という条件で調査に応じていただいております、内訳は以下の通り。国会議員（民主=9、公明=2、自民=1、社民=1、たちあがれ日本=1）、国会議員秘書（民主=1）、各種団体=6名。

## 3 沖縄・八重山地区調査

松谷満氏との共同調査による。2012年11月と2013年3月、2014年2月、2015年2～3月に、石垣市、与那国町、竹富町における教科書採択と自衛隊基地建設に関して、28件の聞き取り調査を実施した。首長=3、国会議員=1、市町議会議員=8、市町職員=3、関係団体=14名。

## 4 右派論壇誌データ

これは既成保守の言説をみるためのデータであり、右派論壇の関心や敵手の推移を明らかにすることを目的としている<sup>12</sup>。データ作成に際しては、『文藝春秋』『中央公論』といったメジャーな保守論壇誌ではなく、『諸君！』『正論』を対象とした。「極右」研究に際しては、主流派保守より「右」にある言説を扱う必要があると考えたことによる。ただし、『諸君！』は2009年に廃刊しているため、2009年1月からは『WiLL』で代用した。倉（2006、2008、2009）は『SAPIO』の記事分析を行っているが、創刊が新しいことと個別記事の枚数が少ないことから本論文では採用しなかった<sup>13</sup>。他には『Voice』も候補となるが、代表的な右派論壇誌とされる『諸君！』『正論』をみれば動向は把握できると判断した。『WiLL』を用いたのは、編集長が元文藝春秋社員だったこともあり、『諸君！』に紙面が類似しているからである。

82～12年の記事を取り上げるのは、日外アソシエーツの記事データベースで正論を掲載し始めるのが82年という事情と、80年代と90年代末の変化をみるためである<sup>14</sup>。右派論壇に関しては、その傾向が年代ごとに変化していることがすでに指摘されている。吉見（2003：267）は、1980年代になって『諸君！』が「露骨な攻撃性を示す」方向へと転換し、90年代にはそれが量的に拡大したという。上丸も、ソ連脅威論などを挙げて吉見と同じ変化を指摘しつつ、90年代後半以降の「反日」という言葉の頻出など文体が「著しく劣化してきた」（2011：398）と述べる。

データ作成に要する時間的労力的な制約を考慮し、記事の中身に目を通してデータを作

<sup>12</sup> 方法論的に直接関わる先行研究として上丸（2011）が、目的や媒体が重なるものとして加藤（2012）と鈴木（2011）がある。

<sup>13</sup> 聞き取りにおいて、情報源として『諸君！』『正論』『SAPIO』を挙げる者が、それぞれちょうど1名ずついた。

<sup>14</sup> 『正論』についてはデータの未整備が目立っており、国立情報学研究所の雑誌記事データベースでは1996年からしかカバーされていない。そのため松谷満氏に日外アソシエーツのデータを提供していただいた。

ることは断念した（ただし、1990年代以降の関連記事は網羅的にコピーして目を通し、必要に応じて本文中で引用している）。その代わりに、1982～2012年までの見出しを一覧表にし、「年月」「雑誌名」「扱う地域」「イシュー」「著者が政治家（現・元職国会議員）か否か」「反日という言葉の有無」を入力した。見出しだけで判断できない場合には、すべて不明とコーディングした。また、見出しで複数の国家やイシューが言及されている場合には、すべて該当するものとして複数回答扱いにした。3誌について取り上げるトピックや国家には有意な差があるが、これは雑誌の性格というよりも、年毎のイシューの相違を反映したものである。たとえば『WiLL』では右派論壇からみた「左翼」を取り上げる比率が高いが、これは2009～12年が民主党政権だったことによる。逆に『諸君！』でソ連・ロシアの比率が高いのは、冷戦時代をカバーしているからである。

また、基本的には絶対数よりも比率だけを用いて記述している。記事件数自体は年々増加する傾向にあり、これは教育水準が高まるにつれて関心の幅が広がるため、社会に流布する議題の数は全体として増加するからだろう（McCombs and Zhu 1995）。しかし、ある時点で社会に流通する議題を扱う容量は無限ではなく、イシュー間で競合する関係にある（Hilgartner and Bosk 1988）。つまり、右派論壇の関心が全体として増加するというよりは、ある時点での関心の総量を一定とみなした上で、そこに占める割合をみたほうが現実合致しているだろう。

## 5 在特会等による抗議イベントデータ

1970年代以降の社会運動研究では、運動による抗議イベントを計数するイベント分析が用いられるようになった<sup>15</sup>。イベント分析とは、一貫した基準で新聞や公文書などを用いて抗議イベントのデータを集め、コーディングしてデータベースを整備し、それにより社会運動を量的に分析する手法を指す。抗議イベントとは、社会運動が目標達成のために行った集まりを指し、抗議イベントの数・種類・規模は、社会運動の動態を表す指標として用いられる。この方法自体は、1960年代に集会的暴力の国際比較や人種暴動の原因を分析するために用いられるようになった（Olzak 1992: 49）。その後、社会運動の国際比較やマクロ分析の隆盛とともにイベント分析を用いた研究は増大し、87～93年にアメリカの主要な社会学雑誌に掲載された社会運動関連の論文でもっともよく使われた方法論に躍り出ている（Crist and McCarthy 1996: 95-6）。2000年代以降には使用頻度が低くなったものの、方法論的にも確立しており（Rucht and Ohlemacher 1992; Rucht, Koopmans and Neidhardt 1998）、排外主義運動の特徴の把握には有益だと考えてイベント分析のためのデータベースを作成した<sup>16</sup>。

イベント分析のデータソースとしては新聞がもっともよく使われるが、排外主義運動が新聞に登場することはほとんどない<sup>17</sup>。ストライキや過激な運動については、網羅性の高さを考慮して警察などの公文書が使われることもあるが、これも排外主義運動について有益

<sup>15</sup> イベント分析を用いた研究の詳細については、山本・西城戸（2004）を参照。

<sup>16</sup> 筆者がかつてイベント分析を用いて住民運動の研究を行った時も、いくつかの2次データをもとに計数した（中澤ほか、1998）。全国紙では住民運動に関する網羅性が低いという判断によっており、新聞は包括性が高い代わりに個別の運動の動態の把握には不向きだともいえる。

<sup>17</sup> 欧州では極右運動に関する記事が頻繁に出るため、新聞を用いたイベント分析も実際に行われている（Caiani and Parenti 2013; Caiani, della Porta and Wagemann 2012; Koopmans and Olzak 2004）。

なデータソースとはならない。結果的に運動側の情報を用いる以外に方法はなく、データの一貫性と網羅性を考慮した結果、在特会前会長の桜井誠のブログをもとにすることとした<sup>18</sup>。桜井のブログは、在特会の結成当初からのイベントが網羅されているし、関連するイベントの案内がリンク付きで掲載されているため、コーディングに必要な情報も集められる。こうして収集した、2007～12年に行われた抗議イベントは1006件である。それぞれについて、「年月」「発生場所」「イシュー」「標的（抗議が直接向けられる対象）」「行為形態」をコーディングして入力した。

---

<sup>18</sup> 桜井のブログは以下（<http://ameblo.jp/doronpa01/page-1.html#main>）。

## あとがきと謝辞、そして若干の後日談

恥ずかしい話だが、筆者は本論文につながる研究に着手するまで、東アジアについて「たしなみ」以上の関心を持って本を読むことはなかった。元々の専門は南米からのデカセギの研究であり、在日コリアンの経験とは「切れている」と浅薄にも思っていたからである。それが単に研究上必要であるというだけでなく、実存上も切実な問題として東アジアを意識するようになったのは、オランダで在外研究をしていた 2009 年だった。この当時、石原慎太郎東京都知事（当時）を日本版極右とみなして支持基盤を解明するべく、移民に関する計量研究が盛んなユトレヒト大学に客員研究員として 1 年滞在していた。

ユトレヒトでの受け入れ教員だったマルセル・ラバーズ氏（現ナイメーヘン大学）は、オランダの極右である自由党の党首ウィルダースと石原の比較をしようと提案してくれた。パソコンを並べて互いのデータを動かし、結果を付き合わせてみる。「石原支持にはナショナリズムが随分と関係しているんだね」と指摘された瞬間、中国から日本に至る見慣れた東アジアの地図がなぜか鮮明に浮かんできた。それこそ、『失われた時を求めて』の紅茶とマドレーヌのシーンのように。

石原支持の説明に際してもっとも重要な要素はナショナリズムである、これは当たり前のもと思っていたが、西欧の研究者がみるとそうではなかった。極右の支持に一番関係するのは反移民感情であり、ナショナリズムが突出した分析結果が珍しく映ったわけだが、その一言で自分がなすべきことをようやく理解できた。極右はどこでも同じ、とばかりに西欧の結果を機械的に当てはめようとしてきたが、東アジアに深く埋め込まれた日本という前提なしには分析できないのだ、と。以前から関わっていた移住労働者と連帯する全国ネットワークには、オランダ滞在時にレイシズム特集を組みませんかとお誘いをいただいていた。その導入で欧州と引き比べた日本の課題を書いたのが（樋口、2010）、本論文の基本的なモチーフとなっている。

日本に戻ってから調査する過程では、良くも悪くもいろいろと思うことはあった。これについては、補遺である程度説明したし、すでに他所で書いたことがあるので繰り返さない（樋口、2013）。調査自体は筆者が単独で進めたが、研究は基本的に共同作業の一部としてなされたものであり、直接には以下のプロジェクトの成果である。

- ・ 科学研究費補助金「政権交代と社会運動——民主党政権は社会運動にどのような影響を及ぼすのか」（2010～13 年度、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満各氏との共同研究）。本論文の中核となる排外主義運動の調査は、このプロジェクトの一部としてなされている。民主党政権により排外主義運動が活性化したのは間違いないが、プロジェクトの構想時には右派の社会運動の調査をするとは思ってもよらなかった。そこで得られたデータを日本政治の変化と関連づけて分析する視点は、この研究会でなければ得られなかっただろう。申琪榮氏には、韓国からみた東アジアの国際関係についても手ほどきしてもらった。調査と執筆に際しても、飲みながらの議論でも、皆から物心両面で多くのサポートをいただいた 4 年間だった。
- ・ 科学研究費補助金「東アジア地政学と社会紛争——日本版トランスナショナルな社会運動研究に向けて」（2012～13 年度、申琪榮、成元哲、土野瑞穂、松谷満各氏との共同研

究)。沖縄調査はこのプロジェクトの一部としてなされた。理論構築を主な目的とする研究であるため、沖縄調査の知見を理論化する過程で行き当たった安全保障化の議論が、第7章以降で生かされている。

- ・科学研究費補助金「ポスト共生の移民研究に向けたアクション・リサーチ」(2009～11年度、稲葉奈々子、高谷幸、挽地康彦、古屋哲各氏との共同研究)。国民国家と移民について相互に考えたことを持ち寄り、理論的な突破口はどこにあるんだろうね、と悩み続けたプロジェクトだった。研究とは前提を問い直す作業である、という当たり前のことを何度も教えられた研究会であり、特に第8章の議論に反映されている。
- ・科学研究費補助金「在日外国人の社会経済的地位をめぐる動態分析」(2012～14年度、稲葉奈々子、大曲由起子、鍛冶致、高谷幸各氏との共同研究)。第2章で用いた国勢調査のデータは、この共同研究により得られたものである。
- ・野村財団研究助成「日本の外国人問題と政治——外国人参政権はなぜ日本でだけ政治問題化するのか」(筆者単独調査)。外国人参政権に関わる調査は、この助成によりなされている。

プロジェクトの過程で論文のモチーフを検討していただいたが、日本での先行研究が乏しい中で執筆を進めたため、さらに次のようにピアレビューをお願いした。まず、筆者も世話人を務める社会運動論研究会で2度報告し、運動論という観点から議論していただいた。社会理論・動態研究所の青木秀男氏には、第3章までできたところで研究会を開催していただいた。高谷幸、古屋哲、道場親信、安田浩一の各氏には草稿段階でコメントをいただいた。特に安田氏には失礼な批判を随所でしているにもかかわらず、ご多忙なところ無理を承知で事実関係などの確認をお願いした。

博士論文の審査に際しては、町村敬志氏には研究科長として多忙ななか主査をお願いした。町村氏には、学部4年の時からゼミでお世話になって以来、鼻つまみ者の筆者を暖かく寛大に見守っていただいたが、その学恩に応えるような論文を提出できているか、忌憚ないご意見をお伺いしたいと思っていた。国立大学改革が押し寄せる最中に、快くお引き受けいただいたことに深く感謝したい。さらに、審査委員の伊藤るり、田中拓道の両氏には資料が多く文字数だけは大部の論文を読んでいただき、字句の間違いに至るまで指摘していただいた。終章を付して理論的な総括と類型論的な考察が必要という指摘は、博士論文審査ならではのもので有益だった。テーマの大きさに比べると、ほんのさわり程度の内容しか書けていないだが、終章の執筆に時間がかかってしまい、間が空いてしまったことをお詫びしたい。

最後に、本論文は『日本型排外主義——在特会・外国人参政権・東アジア地政学』(名古屋大学出版会、2014年2月)に加筆修正と文献補充を行い、巻末資料として活動家に対する聞き取り記録をつけたものである。刊行後1年を経過した段階で、若干の後日談を加えることで結びとしておこう。筆者が極右研究に着手したのは石原が都知事だった2004年であり、書籍を刊行するまで10年かかったことになる。文献を収集して知見を蓄積する時間は十分あったことになるが、この間に排外主義運動が台頭し、当初の世論調査分析から運動研究へと対象は変化していった。調査に着手した頃ですら予想しなかったことだが、出版したのはヘイトスピーチが問題化する最中であった。

その結果、刊行した書籍は学術書というよりは時事的な情報源として注目されることとなり、予想外に広範囲のメディアで取り上げていただいた（『読売新聞』『朝日新聞』『共同通信』『赤旗』『公明新聞』『図書新聞』『朝鮮新報』『民団新聞』『大原社会問題研究所雑誌』『ソシオロジ』『週刊読書人』『都市問題』『出版ニュース』『未来』『いける本いけない本』『名古屋シネマテーク通信』『みすず』『CREA』『週刊現代』『アジア太平洋研究センター年報』『社会臨床雑誌』『社会と調査』）<sup>1</sup>。テーマに対する社会的関心の高さを示すものであり、書籍の脱稿後にも関連する文献が陸続と刊行されている（明戸、2013；有田・北原・山下、2014；ブライシュ、2011=14；ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会、2014；石橋、2013；神原、2014；韓国民団中央本部、2014；金尚均、2014；北原・朴、2014；小林、2013；高、2014；上瀧、2014；前田、2013；森、2014；師岡、2014；村田、2015；中村、2014；野間、2013；のりこえねっと、2014；佐藤、2013；佐波、2013；桜井、2014；李信恵、2015a, 2015b；李・安田、2014；山本、2015）<sup>2</sup>。

筆者も、一般向きの解説も含めて書く場を与えられており、それ自体は排外主義の抑制を問題関心とする者としてはありがたいことであった<sup>3</sup>。ただ、排外主義の抑制をテーマとしたとき、問いの方向は大きく2つに大別される。第1は、排外主義をめぐる Why に当たる問いを取り上げたもので（樋口、2014b, 2014h, 2015c; Higuchi 2014）、本論文もこの一部に属する。なぜ排外主義が噴出するのか——この問いを規定する因果関係を明確にすることは、排外主義の抑制を考えるにあたって基礎的なことと考える。

それに加えて、排外主義をめぐる How に対する回答を、Why をめぐる研究を踏まえて提示する必要がある。すなわち、いかにして排外主義を抑制するか、処方箋ないし実践に結び付くような研究が次に求められることとなろう。書籍では Why について自分なりの回答を提示したため、刊行後には How に重点を移して執筆するようになった（樋口、2014c, 2014d, 2014e, 2014f, 2014g, 2015a, 2015b, 2015e）<sup>4</sup>。

実際、欧州ではこうした関心にもとづく研究が——Why ほどではないにしても——一定程度蓄積されている。極右が政策に及ぼす影響（Akkerman and Rooduijn forthcoming; Carvalho 2014; Heinisch 2003; Minkenberg 2001, 2002, 2009, 2013; Perlmutter 2002; Schain 2002, 2006; Stiflung 2007; Zaslobe 2004）、既成政党の対応と極右の成否（Bale 2003; Bale et al. 2010; Donselaar 2003; Downs 2001, 2002; Eatwell 2010; Kestel and Godmer 2004; Meguid 2005）、対抗運動の影響（Michael 2003; Stiflung 2007; Willems 1995）に関する研究は、対策に応用しうる知見を導出してきた。これまで「密教」として扱われてきた排外主義が

---

<sup>1</sup> 他に書評予定として、筆者が把握する限りで『社会学評論』『フォーラム現代社会学』『移民政策研究』 *Social Science Japan Journal* がある。経済系の媒体でまったく取り上げられなかったが、『公明新聞』や『赤旗』で書評していただいただけでなく、記事の執筆まで誘われたのは、筆者にとって意外だった。

<sup>2</sup> このうち村田（2015）、桜井（2014）、佐波（2014）、山本（2015）は排外主義運動の活動家であり、そうした者が発表媒体を確保するようになったのは憂慮すべき傾向だろう。

<sup>3</sup> 筆者自身は、排外主義を社会的事実として捉え、それ自体は社会の一部として組み込まれている「ノーマルな現象」というデュルケム的な見方をとる。その意味で排外主義の根絶は不可能だが、対策により抑制は可能であるという観点から研究をするしかないと考えている。

<sup>4</sup> その際の1つの処方箋が、補論にあるような極右概念の日本への導入になるが、これについては新書の執筆などを通じて筆者自身が効果を試す予定である。



「顕教」となり（木下、2010）、排外主義の抑制を真剣に考えざるを得ない状況が現前している。研究者としては、Whyをめぐる思考にはなじみがあっても、Howに関しては常識的で陳腐ともいえるようなことしかいえないところにもどかしさを感じている。そうした現状を超えていかにして有益な知見を導き出せるのか、Whyに端を発した研究の今後の課題として模索していきたい。

## 文献一覧

- 安倍晋三, 2006, 『美しい国へ』 文藝春秋社.
- Adams, Josh and Vincent J. Roscigno, 2005, “White Supremacists, Oppositional Culture and the World Wide Web,” *Social Forces*, 84(2): 759-778.
- Adler, Marina A., 1996, “Xenophobia and Ethnoviolence in Contemporary Germany,” *Critical Sociology*, 22(1): 29-51.
- Adorno, Theodor et al., 1950, *Authoritarian Personality*, Harper & Broパーソナリティthers. (= 1980, 田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳『権威主義的』青木書店.)
- 明戸隆浩, 2013, 「欧米のヘイトスピーチから日本の進む先を考える」『Journalism』282号.
- Akkerman, Tjitske, 2005, “Anti-immigration Parties and the Defence of Liberal Values: The Exceptional Cases of the List Pim Fortuyn,” *Journal of Political Ideologies*, 10(3): 337-354.
- and Matthijs Rooduijn, forthcoming, “Pariahs of Partners? Inclusion and Exclusion of Radical Right Parties and the Effects on Their Policy Positions,” *Political Studies*.
- Alexander, Jeffrey C. et al., 2004, *Cultural Trauma and Collective Identity*, Berkeley: University of California Press.
- Allport, Gordon W., 1958, *The Nature of Prejudice*, Doubleday. (= 1962, 原谷達夫・野村昭訳『偏見の心理』培風館.)
- Andersen, Jørgen Goul, 1992, “Denmark: the Progress Party–Populist Neo-Liberalism and Welfare State Chauvinism,” Paul Hainsworth ed., *The Extreme Right in Europe and the USA*, London: Pinter.
- Andersson, Christoph, 2013, “Dealing with the Extreme Right,” Ruth Wodak, Majid KhosraviNik and Brigitte Mral eds., *Right-wing Populism in Europe: Politics and Discourse*, London: Bloomsbury.
- Andreas, Peter, 2000, *Border Games: Policing the U.S.-Mexico Divide*, Ithaca: Cornell University Press.
- and Timothy Snyder, 2000, *The Wall around the West: State Borders and Immigration Controls in North America and Europe*, Lanham: Rowman & Littlefield.
- and Thomas J. Biersteker eds., 2003, *The Rebordering of North America: Integration and Exclusion in a New Security Context*, New York: Routledge.
- 青木理・梓澤和幸・河崎健一郎編, 2011, 『国家と情報——警視庁公安部「イスラム捜査」流出資料を読む』現代書館.
- 蘭信三編, 2011, 『帝国崩壊とひとの再移動——引揚げ、送還、そして残留』勉誠出版.
- 新崎盛暉, 2012, 「沖縄は、東アジアにおける平和の『触媒』となりうるか」『現代思想』40巻17号.
- Arendt, Hannah, 1951, *The Origins of Totalitarianism*, Harcourt, Brace & World. (= 1972a, 大久保和郎訳『全体主義の起原 1——反ユダヤ主義』、1972b, 大島通義・大島かおり訳『全体主義の起原 2——帝国主義』、1974, 大久保和郎・大島かおり訳『全体主義の起原 3——全体主義』みすず書房.)
- 有田芳生, 2013, 『ヘイトスピーチとたたかう！——日本版排外主義批判』岩波書店.

- ・北原みのり・山下英愛, 2014, 「私たちの社会は何を『憎悪』しているのか——『差別の扇動』と闘う覚悟と希望」『世界』862号.
- Art, David, 2006, *The Politics of the Nazi Past in Germany and Austria*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2011, *Inside the Radical Right: The Development of Anti-Immigrant Parties in Western Europe*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Arzheimer, Kai, 2009, “Contextual Factors and the Extreme Right Vote in Western Europe, 1980-2002,” *American Journal of Political Science*, 53(2): 259-275.
- , 2012, “Working-Class Parties 2.0? Competition between Centre-Left and Extreme Right Parties,” Jens Rydgren ed., *Class Politics and the Radical Right*, London: Routledge.
- and Elizabeth Carter, 2006, “Political Opportunity Structures and Right-Wing Extremist Party Success,” *European Journal of Political Research*, 45: 419-43.
- 浅井春夫ほか, 2006, 『ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る——バッシングを超える知の経験』明石書店.
- Atkinson, Graeme, 1993, “Germany: Nationalism, Nazism and Violence,” Tore Björger and Rob Witte eds., *Racist Violence in Europe*, New York: St. Martin’s Press.
- 鮎川潤, 2001, 『少年犯罪——ほんとうに多発化・凶悪化しているのか』平凡社.
- Back, Les, 2002, “Aryans Reading Adorno: Cyber-Culture and Twenty-First-Century Racism,” *Ethnic and Racial Studies*, 25(4): 628-651.
- Backes, Uwe and Cas Mudde, 2000, “Germany: Extremism without Successful Parties,” *Parliamentary Affairs*, 53: 457-468.
- Balazs, Gabrielle, Jean-Pierre Faguer and Pierre Rimbert, 2007, “Widespread Competition and Political Conversions,” Jörg Flecker ed., *Changing Working Life and the Appeal of the Extreme Right*, Aldershot: Ashgate.
- Bale, Tim, 2003, “Cinderella and Her Ugly Sisters: The Mainstream and Extreme Right in Europe’s Bipolarising Party Systems,” *West European Politics*, 26(3): 67-90.
- et al., 2010, “If You Can’t Beat Them, Join Them? Explaining Social Democratic Responses to the Challenge from the Populist Radical Right in Western Europe,” *Political Studies*, 38: 410-426.
- Balzacq, Thierry, 2010, “Constructivism and Securitization Studies,” Myriam Dunn Cavelty and Victor Mauer eds., *The Routledge Handbook of Security Studies*, London: Routledge.
- , 2011, “A Theory of Securitization: Origins, Core Assumptions, and Variants,” Thierry Balzacq ed., *Securitization Theory: How Security Problems Emerge and Dissolve*, London: Routledge.
- Bar-On, Tamir, 2008, “Fascism to Nouvelle Droite: The Dream of Pan-European Empire,” *Journal of Contemporary European Studies*, 16(3): 327-345.
- Beauregard, Robert A. and Anna Bounds, 2000, “Urban Citizenship,” Engin F. Isin ed., *Democracy, Citizenship and the Global City*, London: Routledge.
- Beck, Ulrich, 2000, “Risk Society Revisited: Theory, Politics and Research Programmes,” Barbara Adam, Ulrich Beck and Joost Van Loon eds., *The Risk Society and Beyond: Critical Issues for*

- Social Theory*, London: Sage.
- , 2005, *Power in the Global Age: A New Global Political Economy*, Cambridge: Polity Press.
- Benford, Robert. D., 1993a, “Frame Disputes within the Nuclear Disarmament Movement,” *Social Forces*, 71: 677-701.
- , 1993b, “‘You Could Be the Hundredth Monkey’: Collective Action Frames and Vocabularies of Motive within the Nuclear Disarmament Movement,” *Sociological Quarterly*, 34(2): 195-216.
- , 1997, “An Insider’s Critique of the Social Movement Framing Perspective,” *Sociological Inquiry*, 67(4): 409-430.
- and David A. Snow, 2000, “Framing Processes and Social Movements: An Overview and Assessment,” *Annual Review of Sociology*, 26: 611-39.
- Benhabib, Seyla, 2004, *The Rights of Others: Aliens, Residents, and Citizens*, Cambridge University Press. (=2006, 向山恭一訳『他者の権利——外国人・居留民・市民』法政大学出版社.)
- Bennett, W. Lance, 2005, “Social Movements beyond Borders: Understanding Two Eras of Transnational Activism,” Donatella della Porta and Sidney Tarrow eds., *Transnational Protest & Global Activism*, Lanham: Rowman & Littlefield.
- and Alexandra Segerberg, 2012, “The Logic of Connective Action: Digital Media and the Personalization of Contentious Politics,” *Information, Communication & Society*, 15(5): 739-768.
- Berezin, Mabel, 2007, “Revisiting the French National Front: The Ontology of a Political Mood,” *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 129-146.
- , 2009, *Illiberal Politics in Neoliberal Times: Culture, Security and Populism in the New Europe*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Berg, Johannes and Tor Bjørklund, 2011, “The Revival of Group Voting: Explaining the Voting Preferences of Immigrants in Norway,” *Political Studies*, 59: 308-327.
- Berger, Maria, Christian Galonska and Ruud Koopmans, 2004, “Political Integration by a Detour? Ethnic Communities and Social Capital of Migrants in Berlin,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 30: 491-507.
- Berger, Peter and Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Doubleday. (=1977, 山口節郎訳『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法』新曜社.)
- 別冊宝島編集部編, 2005, 『マンガ嫌韓流の真実! 〈韓国／半島タブー〉超入門』宝島社.
- , 2006a, 『嫌韓流の真実! ザ・在日特権』宝島社.
- , 2006b, 『嫌韓流の真実! 場外乱闘編』宝島社.
- , 2008, 『ネット右翼ってどんなやつ?』宝島社.
- , 2010, 『“外国人参政権”で日本がなくなる日』宝島社.
- Betz, Hans-Georg, 1990, “Politics of Resentment: Right-Wing Radicalism in West Germany,” *Comparative Politics*, 23: 45-60.
- , 1994, *Radical Right-Wing Populism in Western Europe*, New York: St. Martin’s Press.
- , 2002, “The Divergent Paths of the FPÖ and the Lega Nord,” Martin Schain, Aristide

- Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in Western Europe*, London: Palgrave.
- , 2013, “Mosques, Minarets, Burqas and Other Essential Threats: The Populist Right’s Campaign against Islam in Western Europe,” Ruth Wodak, Majid Khosravi-Nik and Brigitte Mral eds., *Right-wing Populism in Europe: Politics and Discourse*, London: Bloomsbury.
- and Stefan Immerfall, 1998, “Introduction,” Hans-Georg Betz and Stefan Immerfall eds., *The New Politics of the Right: Neo-Populist Parties and Movements in Established Democracies*, New York: St. Martin’s Press.
- Bevington, Douglas and Chris Dixon, 2005, “Movement-Relevant Theory: Rethinking Social Movement Scholarship and Activism,” *Social Movement Studies*, 4(3): 185-208.
- Biggs, Michael and Steven Knauss, 2012, “Explaining Membership of the British National Party: A Multilevel Analysis of Contact and Threat,” *European Sociological Review*, 28(5): 633-646.
- Bigo, Didier, 2001, “Migration and Security,” Christian Joppke and Virginia Guiraudon eds., *Controlling a New Migration World*, London: Routledge.
- , 2005, “From Foreigners to ‘Abnormal Aliens’: How the Faces of the Enemy Have Changed Following September the 11<sup>th</sup>,” Elspeth Guild and Joanne van Selm eds., *International Migration and Security: Opportunities and Challenges*, London: Routledge.
- Billiet, Jaak B., 1995, “Church Involvement, Ethnocentrism, and Voting for a Radical Right-Wing Party: Diverging Behavioral Outcomes of Equal Attitudinal Dispositions,” *Sociology of Religion*, 56: 303-326.
- and Hans de Witte, 1995, “Attitudinal Dispositions to Vote for a ‘New’ Extreme Right-Wing Party: The Case of ‘Vlaams Blok’,” *European Journal of Political Research*, 27: 181-202.
- Bimber, Bruce, Andrew J. Flanagan and Cynthia Stohl, 2005, “Reconceptualizing Collective Action in the Contemporary Media Environment,” *Communication Theory*, 54: 365-388.
- Bird, Karen, Thomas Saalfeld and Andreas M. Wüst eds., 2011, *The Political Representation of Immigrants and Minorities: Voters, Parties and Parliaments in Liberal Democracies*, London: Routledge.
- Björge, Tore and Rob Witte eds., 1993, *Racist Violence in Europe*, New York: St. Martin’s Press.
- Björge, Tore, 1998, “Entry, Bridge-Burning and Exit Options: What Happens to Young People Who Join Racist Groups—and Want to Leave?” Jeffrey Kaplan and Tore Björge eds., *Nation and Race: The Developing Euro-American Racist Subculture*, Boston: Northeastern University Press.
- Bjørklund, Tor and Jørgen Goul Andersen, 2002, “Anti-Immigration Parties in Denmark and Norway: The Progress Parties and the Danish People’s Party,” Martin Schain, Aristide Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in Western Europe*, London: Palgrave.
- Blazak, Randy, 2001, “White Boys to Terrorist Men: Target Recruitment of Nazi Skinheads,” *American Behavioral Scientist*, 44: 982-1000.
- Blee, Kathleen M., 1996, “Becoming a Racist: Woman in Contemporary Ku Klux Klan and Neo-Nazi Groups,” *Gender and Society*, 10(6): 680-702.
- , 2002, *Inside Organized Racism: Women in the Hate Movement*, Berkeley: University of

- California Press.
- , 2003, “Studying the Enemy,” Barry Glassner and Rosanna Hertz eds., *Our Studies, Ourselves: Sociologists’ Lives and Work*, New York: Oxford University Press.
- , 2007, “Ethnographies of the Far Right,” *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 119-128.
- and Verta Taylor, 2002, “Semi-Structured Interviewing in Social Movement Research,” Bert Klandermans and Suzanne Staggenborg eds., *Methods of Social Movement Research*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- and Kimberley A. Creasap, 2010, “Conservative and Radical-Right Movements,” *Annual Review of Sociology*, 36: 269-286.
- and Annette Linden, 2012, “Women in Extreme Right Parties and Movements: A Comparison of the Netherlands and the United States,” Kathleen M. Blee and Sandra McGee Deutsch eds., *Women of the Right: Comparisons and Interplay across Borders*, University Park: Pennsylvania State University Press.
- Bleich, Erik, 2011, *The Freedom to Be Racist? How the United States and Europe Struggle to Preserve Freedom and Combat Racism*, Oxford University Press. (=2014, 明戸隆浩ほか訳 『ヘイトスピーチ——表現の自由はどこまで認められるか』明石書店.)
- Bonacich, Edna, 1972, “A Theory of Ethnic Antagonism: Split Labor Market,” *American Sociological Review*, 37: 547-59.
- , 1973, “A Theory of Middleman Minorities,” *American Sociological Review*, 38: 583-594.
- and John Modell, 1980, *Economic Basis of Ethnic Solidarity: Small Business in the Japanese American Community*, Berkeley: University of California Press.
- Bornschieer, Simon and Hanspeter Kriesi, 2012, “The Populist Right, the Working Class, and the Changing Face of Class Politics,” Jens Rydgren ed., *Class Politics and the Radical Right*, London: Routledge.
- Borusiak, Liubov, 2009, “Soccer as a Catalyst of Patriotism,” *Sociological Research*, 48(4): 57-81.
- Bowman-Grieve, Lorraine, 2009, “Exploring “Stormfront”: A Virtual Community of the Radical Right,” *Studies in Conflict & Terrorism*, 32: 989-1007.
- Bowyer, Benjamin, 2008, “Local Context and Extreme Right Support in England: The British National Party in the 2002 and 2003 Local Elections,” *Electoral Studies*, 27: 611-620.
- Brand, Karl-Werner, 1990, “Cyclical Aspects of New Social Movements: Waves of Cultural Criticism and Mobilization Cycles of New Middle-Class Radicalism,” Russel Dalton and Manfred Kuechler eds., *Challenging the Political Order: New Social and Political Movements in Western Democracies*, London: Polity Press.
- Braungart, Richard G. and Margaret M. Braungart, 1986, “Life-Course and Generational Politics,” *Annual Review of Sociology*, 12: 205-231.
- Braunthal, Gerard, 2009, *Right-Wing Extremism in Contemporary Germany*, London: Palgrave Macmillan.
- , 2010, “Right-Extremism in Germany: Recruitment of New Members,” *German Politics and Society*, 28(4): 41-68.

- Breton, Albert, Gianluigi Galeotti, Pierre Salmon and Ronald Wintrobe eds., 2002, *Political Extremism and Rationality*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Brubaker, Rogers, 1996, *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*, New York: Cambridge University Press.
- , 1998, "Migrations of Ethnic Unmixing in the 'New Europe'," *International Migration Review*, 32: 1047-1065.
- , 2011, "Nationalizing States Revisited: Projects and Processes of Nationalization in Post-Soviet States," *Ethnic and Racial Studies*, 34(11): 1785-1814.
- ed., 1989, *Immigration and the Politics of Citizenship in Europe and North America*, Lanham: University Press of America.
- Brustein, William, 1996, *The Logic of Evil: The Social Origins of the Nazi Party, 1925-1933*, New Haven: Yale University Press.
- Buckley, Sandra, 2000, "Japan and East Asia," Henry Schwarz and Sangeeta Ray eds., *A Companion to Postcolonial Studies*, Oxford: Blackwell.
- Buechler, Steven M., 2004, "The Strange Career of Strain and Breakdown Theories," David A. Snow, Sarah A. Soule and Hanspeter Kriesi eds., *The Blackwell Companion to Social Movements*, Oxford: Blackwell.
- Burris, Val, Emery Smith and Ann Strahm, 2000, "White Supremacist Network on the Internet," *Sociological Focus*, 33(2): 215-234.
- Buzan, Barry, 1991, *People, States, and Fear: An Agenda for International Security Studies in the Post-Cold War Era*, second ed., Boulder: Lynne Rienner.
- , Ole Wæver and Jaap de Wilde, 1998, *Security: A New Framework for Analysis*, Boulder: Lynne Rienner.
- Caiani, Manuela and Linda Parenti, 2009, "The Dark Side of the Web: Italian Right-Wing Extremist Groups and the Internet," *South European Society and Politics*, 14(3): 273-294.
- , 2013, *European and American Extreme Right Groups and the Internet*, Aldershot: Ashgate.
- Caiani, Manuela, Donatella della Porta and Claudius Wagemann, 2012, *Mobilizing on the Extreme Right: Germany, Italy, and the United States*, Oxford: Oxford University Press.
- Campbell, David, 1992, *Writing Security: United States Foreign Policy and the Politics of Identity*, revised edition, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- , 1998, *National Deconstruction: Violence, Identity, and Justice in Bosnia*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Caren, Neal, Kay Jowers and Sarah Gaby, 2012, "A Social Movement Online Community: Stormfront and the White Nationalist Movement," *Research in Social Movements, Conflicts and Change*, 33: 163-193.
- Carter, Elisabeth L., 2005, *The Extreme Right in Western Europe: Success of Failure?* Manchester: Manchester University Press.
- Carty, Victoria and Jake Onyett, 2006, "Protest, Cyberactivism and New Social Movements: The Reemergence of the Peace Movement Post 9/11," *Social Movement Studies*, 5(3): 229-249.

- Carvalho, João, 2014, *Impact of Extreme Right Parties on Immigration Policy: Comparing Britain, France and Italy*, London: Routledge.
- Castells, Manuel, 2001, *The Internet Galaxy: Reflections on the Internet, Business, and Society*, Oxford University Press. (=2009, 矢澤修次郎・小山花子訳『インターネットの銀河系——インターネット時代のビジネスと社会』東信堂.)
- Catellani, Patrizia and Patrizia Milesi, 2007, “The Psychological Routes to Right-Wing Extremism: How Italian Workers Cope with Change,” Jörg Flecker ed., *Changing Working Life and the Appeal of the Extreme Right*, Aldershot: Ashgate.
- Ceyhan, Ayse and Anastassia Tsoukala, 2002, “The Securitization of Migration in Western Societies: Ambivalent Discourses and Policies,” *Alternatives: Global, Local, Political*, 25(1): 21-39.
- Cha, Victor D., 1999, *Alignment Despite Antagonism: The United States-Korea-Japan Security Triangle*, Stanford University Press. (=2003, 船橋洋一監訳『米日韓 反目を超えた連携』有斐閣.)
- Chapman, David, 2008, *Zainichi Korean Identity and Ethnicity*, London: Routledge.
- 崔永鎬, 2011, 「終戦直後の在日朝鮮人・韓国人社会における『本国』指向性と第一次日韓会談」李鍾元・木宮正史・浅野豊美編『歴史としての日韓国交正常化Ⅱ 脱植民地化編』法政大学出版局.
- 鄭暎恵, 2003, 『民が代斉唱——アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店.
- 鄭榮桓, 2012, 「入管法改定と再入国許可制度の再編——『みなし再入国許可』制度と在日朝鮮人」『法律時報』84巻12号.
- , 2013a, 『朝鮮独立への隘路——在日朝鮮人の解放5年史』法政大学出版局.
- , 2013b, 「『制裁』の政治と在日朝鮮人の権利」『Migrants Network』156号.
- Chung, Erin Aeran, 2010, *Immigration and Citizenship in Japan*, Cambridge University Press. (=2012, 阿部温子訳『在日外国人と市民権——移民編入の政治学』明石書店.)
- Codena-Roa, Jorge, 2002, “Strategic Framing, Emotions, and Superbarrio: Mexico City’s Masked Crusader,” *Mobilization*, 7(2): 201-216.
- Coenders, Marcel et al., 2008, “More than Two Decades of Changing Ethnic Attitudes in the Netherlands,” *Journal of Social Issues*, 64(2): 269-285.
- Coffé, Hilde, 2012, “Gender, Class, and Radical Right Voting,” Jens Rydgren ed., *Class Politics and the Radical Right*, London: Routledge.
- , Bruno Heyndels and Jan Vermeir, 2007, “Fertile Grounds for Extreme Right-Wing Parties: Explaining the Vlaams Blok’s Electoral Success,” *Electoral Studies*, 26: 142-155.
- Commercio, Michele E., 2008, “Systems of Partial Control: Ethnic Dynamics in Post-Soviet Estonia and Latvia,” *Comparative International Development*, 43: 81-100.
- Costain, Ann, 1992, *Inviting Women’s Rebellion: A Political Process Interpretation of the Women’s Movement*, Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Crist, John T. and John D. McCarthy, 1996, ““If I Had a Hammer”: The Changing Methodological Repertoire of Collective Behavior and Social Movement Research,” *Mobilization*, 1(1): 87-102.
- Cutts, David, Robert Ford and Matthew J. Goodwin, 2011, “Anti-Immigrant, Politically Disaffected or Still Racist after All? Examining the Attitudinal Drivers of Extreme Right Support in Britain



- in the 2009 European Elections,” *European Journal of Political Research*, 50: 418-440.
- Dalton, Russel J., 2004, *Democratic Challenges, Democratic Choices: The Erosion of Political Support in Advanced Industrial Democracies*, Oxford: Oxford University Press.
- and Martin P. Wattenberg eds., 2000, *Parties without Partisans: Political Change in Advanced Industrial Democracies*, Oxford: Oxford University Press.
- Daniels, Jessie, 2009, *Cyber Racism: White Supremacy Online and the New Attack on Civil Rights*, Lanham: Rowman & Littlefield.
- Davis, James C., 1962, “Toward a Theory of Revolution,” *American Sociological Review*, 27(1): 5-19.
- , 1969, “The J-Curve of Rising and Declining Satisfaction as a Cause of Some Great Revolutions and a Contained Rebellion,” Hugh Davis Graham and Ted Robert Gurr eds., *Violence in America: Historical and Comparative Perspectives*, Vol.II, Washington, DC: U.S. Government Printing Office.
- Debrix, François, 2008, *Tabloid Terror: War, Culture, and Geopolitics*, London: Routledge.
- de Bruijn, Simon and Mark Veenbrink, 2012, “The Gender Gap in Radical Right Voting: Explaining Differences in the Netherlands,” *Social Cosmos*, 10(1): 215-231.
- Dechezelles, Stéphanie, 2013, “Neo-Fascists and Padans: The Cultural and Sociological Basis of Youth Involvement in Italian Extreme-Right Organizations,” Andrea Mammone, Emmanuel Godin and Brian Jenkins eds., *Varieties of Right-Wing Extremism in Europe*, London: Routledge.
- della Porta, Donatella, 1992, “Life Histories in the Analysis of Social Movement Activists,” Mario Diani and Ron Eyerman eds., *Studying Collective Action*, London: Sage.
- , 1995, *Social Movements, Political Violence, and the State: A Comparative Analysis of Italy and Germany*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2008, “Research on Social Movements and Political Violence,” *Qualitative Sociology*, 31: 221-230.
- and Sidney Tarrow, 1986, “Unwanted Children: Political Violence and Cycles of Protest in Italy, 1966-1973,” *European Journal of Political Research*, 14: 607-632.
- and Dieter Rucht, 1995, “Left-Libertarian Movements in Context: A Comparison of Italy and West Germany, 1965-1990,” J. Craig Jenkins and Bert Klandermans eds., *The Politics of Social Protest: Comparative Perspectives on States and Social Movements*, London: UCL Press.
- and Herbert Reiter eds., 1998, *Policing Protest: The Control of Mass Demonstrations in Western Democracies*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- , Massimiliano Andretta, Lorenzo Mosca and Herbert Reiter, 2006, *Globalization from Below: Transnational Activists and Protest Networks*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Demerath III, N. J., Gerald Marwell and Michael T. Aiken, 1971, *Dynamics of Idealism*, San Francisco: Jossey-Bass.
- De Weerd, Yves, Patrizia Catellani, Hans De Witte and Patrizia Milesi, 2007, “Perceived Socio-Economic Change and Right-wing Extremism: Results of the SIREN-Survey among European Workers,” Jörg Flecker ed., *Changing Working Life and the Appeal of the Extreme Right*,

- Aldershot: Ashgate.
- De Weerd, Yves and Hans De Witte, 2007, "Public Safety—Private Right: The Public-Private Divide and Receptiveness of Employees to Right-Wing Extremism in Flanders (Belgium)," Jörg Flecker ed., *Changing Working Life and the Appeal of the Extreme Right*, Aldershot: Ashgate.
- Diani, Mario, 1996, "Linking Mobilization Frames and Political Opportunities: Insights from Regional Populism in Italy," *American Sociological Review*, 61: 1053-69.
- Diener, Alexander C. and Joshua Hagen, 2010, *Borderlines and Borderlands: Political Oddities at the Edge of the Nation-State*, Lanham: Rowman & Littlefield.
- Donselaar, Jaap van, 2003, "Patterns of Response to the Extreme Right in Western Europe." Peter H. Merkl and Leonard Weinberg eds., *Right-wing Extremism in the Twenty-first Century*, London: Frank Cass.
- Donnan, Hastings and Thomas M. Wilson eds., 1999, *Borders: Frontiers of Identity, Nation and State*, Oxford: Berg.
- Dower, John W., 1999, *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*, W.W. Norton. (2004, 三浦陽一・高杉忠明・田代泰子訳『〔増補版〕敗北を抱きしめて』上下巻、岩波書店.)
- Downs, William M., 2001, "Pariahs in Their Midst: Belgian and Norwegian Parties React to Extremist Threats," *West European Politics*, 24(3): 23-42.
- , 2002, "How Effective is the Cordon Sanitaire? Lessons from Efforts to Contain the Far Right in Belgium, France, Denmark, and Norway," *Journal für Konflikt- und Gewaltforschung*, 4(1): 32-51.
- 段躍中, 2003, 『現代中国人の日本留学』明石書店.
- Earl, Jennifer et al., 2010, "Changing the World One Webpage at a Time: Conceptualizing and Explaining Internet Activism," *Mobilization*, 15(4): 425-446.
- Earl, Jennifer and Katrina Kimport, 2011, *Digitally Enabled Social Change: Activism in the Internet Age*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Earnest, David C., 2008, *Old Nations, New Voters: Nationalism, Transnationalism, and Democracy in the Era of Global Migration*, Albany: State University of New York Press.
- Eatwell, Roger, 2003, "Ten Theories of the Extreme Right," Peter H. Merkl and L. Weinberg eds., *Right-Wing Extremism in the Twenty-First Century*, London: Frank Cass.
- , "Responses to the Extreme Right in Britain." Roger Eatwell and Matthew J. Goodwin eds., *The New Extremism in 21st Century Britain*, London: Routledge.
- and Matthew J. Goodwin eds., 2010, *The New Extremism in 21st Century Britain*, London: Routledge.
- 江橋崇編, 1993, 『外国人は住民です』学陽書房.
- Ebata, Michi, 1997, "Right-Wing Extremism: In Search of a Definition," Aurel Braun and Stephen Scheinberg eds., *The Extreme Right: Freedom and Security at Risk*, Boulder: Westview Press.
- Edward, Arthur, 2004, "The Dutch Women's Movement Online: Internet and the Organizational Infrastructure of a Social Movement," Wim van de Donk, Brian D. Loader, Paul G. Nixon and Dieter Rucht eds., *Cyberprotest: New Media, Citizens and Social Movements*, London: Routledge.

- 江頭節子, 2012, 『在特会』メンバー等による朝鮮学校の授業妨害訴訟『国際人権』23号.
- 江原由美子, 2007, 「ジェンダー・フリー・バッシングとその影響」『年報社会学論集』20号.
- Eltantawy, Nahed and Julie B. Wiest, 2011, "Social Media in the Egyptian Revolution: Reconsidering Resource Mobilization Theory," *International Journal of Communication*, 5: 1207-1224.
- Emmers, Ralf, 2010, *Geopolitics and Maritime Territorial Disputes in East Asia*, London: Routledge.
- Esseveld, Johanna and Ron Eyerman, 1992, "Which Side Are You on? Reflections on Methodological Issues in the Study of 'Distasteful' Social Movements," Mario Diani and Ron Eyerman eds., *Studying Collective Action*, London: Sage.
- Ezekiel, Raphael S., 2002, "An Ethnographer Looks at Neo-Nazi and Klan Groups: The Racist Mind Revisited," *American Behavioral Scientist*, 46: 51-71.
- Fangen, Katline, 1998, "Living out Our Ethnic Instincts: Ideological Beliefs among Right-wing Activists in Norway" Jeffrey Kaplan and Tore Bjørgo eds., *Nation and Race: The Developing Euro-American Racist Subculture*, Boston: Northeastern University Press.
- , 1999, "On the Margins of Life: Life Stories of Radical Nationalists," *Acta Sociologica*, 42: 357-373.
- Favell, Adrian, 1998, *Philosophies of Integration: Immigration and the Idea of Citizenship in France and Britain*, London: Macmillan.
- Fennema, Meindert, 1997, "Some Conceptual Issues and Problems in the Comparison of Anti-Immigrant Parties in Western Europe," *Party Politics*, 3(4): 473-492.
- and Jan Tillie, 1999, "Political Participation and Political Trust in Amsterdam," *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 25: 703-26.
- Ferre, Myra Marx, 2003, "Resonance and Radicalism: Feminist Framing in the Abortion Debates of the United States and Germany," *American Journal of Sociology*, 109: 304-344.
- Fischer, Claude S., 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology*, 95: 1319-1341.
- , 1982, *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, Berkeley: University of California Press.
- , 1984, *The Urban Experience*, second ed., San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.
- , 1995, "The Subcultural Theory of Urbanism: A Twentieth-Year Assessment," *American Journal of Sociology*, 101: 543-577.
- Flanagan, Constance A. and Lonnie R. Sherrod, 1998, "Youth Political Development: An Introduction," *Journal of Social Issues*, 54(3): 447-456.
- Flecker, Jörg, Gudrun Hentges and Gabrielle Balazs, 2007, "Potentials of Political Subjectivity and the Various Approaches to the Extreme Right: Findings of the Qualitative Research," Jörg Flecker ed., *Changing Working Life and the Appeal of the Extreme Right*, Aldershot: Ashgate.
- Fontana, Marie-Christine, Andreas Sidler and Sibylle Hardmeier, 2006, "The 'New Right' Vote: An Analysis of the Gender Gap in the Vote Choice for the SVP," *Swiss Political Science Review*, 12(4): 243-271.
- Ford, Robert and Matthew J. Goodwin, 2010, "Angry White Men: Individual and Contextual Predictors of Support for the British National Party," *Political Studies*, 58: 1-25.

- Fowler, Robert Booth et al., 2010, *Religion and Politics in America: Faith, Culture and Strategic Choices*, fourth edition, Boulder: Westview Press.
- Franklin, Mark et al. 2009, *Electoral Change: Responses to Evolving Social and Attitudinal Structures in Western Countries*, Colchester: ECPR Press.
- Fromm, Erich, 1941, *Escape from Freedom*, Reinhardt and Winston. (= 1951, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社.)
- 藤村修, 2011, 「『大きな物語の終焉』——『大義』はどこへゆく?」『デルクイ』1号.
- 藤生明, 2011, 「リアル右翼『愛国の作法』」『AERA』2011年1月24日号.
- 藤岡美恵子, 2007, 「植民地主義の克服と『多文化共生』論」中野憲志編『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の<平和>を紡ぐ』新評論.
- 藤田智博, 2011, 「インターネットと排外性の関連における文化差——日本・アメリカ比較調査の分析から」『年報人間科学』32号.
- 福本拓, 2008, 「《マンガ嫌韓流》におけるマンガ表現の技法とその限界——作品の『読み』の側面に着目して」『世界人権問題研究センター研究紀要』13号.
- 福岡安則, 1993, 『在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ』中央公論社.
- ・辻山ゆき子, 1991, 『同化と異化のはざままで——在日若者世代のアイデンティティ葛藤』新幹社.
- ・金明秀, 1997, 『在日韓国人青年の生活と意識』東京大学出版会.
- 古屋哲, 2005, 「見られる者と見る者——監視社会と外国人」小倉利丸編『グローバル化と監視警察国家への抵抗——戦時電子政府の検証と批判』樹花舎.
- , 2012, 「日本におけるヘイトスピーチ・大阪集会コメントメモ」.
- Furuya, Satoru, 2003, “Migrants, National Security and September 11: The Case of Japan,” *Race & Class*, 44(4): 52-62.
- 古谷ツネヒラ, 2012, 『フジテレビデモに行ってみた!』青林堂.
- , 2013, 『ネット右翼の逆襲——「嫌韓」思想と新保守論』総和社.
- 古谷経衡, 2015, 「『ネトウヨ』と『行動する保守』」『WILL』121号.
- Gamson, William A., 1992, “The Social Psychology of Collective Action,” Aldon D. Morris and Carol M. Mueller eds., *Frontiers in Social Movement Theory*, New Haven: Yale University Press.
- , Bruce Fireman, Steven Rytina, 1982, *Encounters with Unjust Authority*, Homewood: The Dorsey Press.
- and David S. Meyer, 1996, “Framing Political Opportunity,” Doug McAdam, John D. McCarthy and Mayer N. Zald eds., *Comparative Perspective on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framing*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Gans, Herbert, 1979, “Symbolic Ethnicity: The Future of Ethnic Groups and Cultures in America,” *Ethnic and Racial Studies*, 2(1): 1-20.
- , 1994, “Symbolic Ethnicity and Symbolic Religiosity: Towards a Comparison of Ethnic and Religious Acculturation,” *Ethnic and Racial Studies*, 17(4): 577-592.
- 外国人差別ウォッチ・ネットワーク編, 2004, 『外国人包囲網——「治安悪化」のスケープゴート』現代人文社.

- 編, 2008, 『外国人包囲網 PART2——強化される管理システム』現代人文社.
- Garrett, Kelly, 2006, “Protest in an Informational Society: A Review of Literature on Social Movements and New ICTs,” *Information, Communication and Society*, 9(2): 202-224.
- Gidengil, Elizabeth et al., 2005, “Explaining the Gender Gap in Support for the Radical Right: The Case of Canada,” *Comparative Political Studies*, 38(10): 1171-1195.
- Giugni, Marco, Ruud Koopmans, Florence Passey and Paul Statham, 2005, “Institutional and Discursive Opportunities for Extreme-Right Mobilization in Five Countries,” *Mobilization*, 10(1): 145-162.
- Givens, Terrie E., 2004, “The Radical Right Gender Gap,” *Comparative Political Studies*, 37(1): 30-54.
- , 2005, *Voting Radical Right in Western Europe*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Glaser, Jack, Jay Dixit and Donald P. Green, 2002, “Studying Hate Crimes with the Internet: What Makes Racist Advocate Racial Violence?” *Journal of Social Issues*, 58(1): 177-193.
- グラック、キャロル, 2007, 梅崎透訳『歴史で考える』岩波書店.
- Goffman, Erving, 1961, *Asylum: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Anchor. (=1984, 石黒毅訳『アサイラム——施設被収容者の日常世界』誠信書房.)
- Gómez-Reino, Margarita and Iván Llamazares, 2013, “The Populist Radical Right and European Integration: A Comparative Analysis of Party–Voter Links,” *West European Politics*, 36(4): 789-816.
- Goodwin, Jeff, James M. Jasper and Francesca Polletta, 2000, “The Return of the Repressed: The Fall and Rise of Emotions in Social Movement Theory,” *Mobilization*, 5(1): 65-83.
- , 2001, “Introduction: Why Emotions Matter,” Jeff Goodwin, James M. Jasper and Francesca Polletta eds., *Passionate Politics: Emotions and Social Movements*, Chicago: University of Chicago Press.
- Goodwin, Matthew J., 2008a, “Backlash in the 'Hood: Determinants of Support for the British National Party (BNP) at the Local Level,” *Journal of Contemporary European Studies*, 16(3): 347-361.
- , 2008b, “Research, Revisionists and the Radical Right,” *Politics*, 28(1): 33-40.
- , 2010, “Activism in Contemporary Extreme Right Parties: The Case of the British National Party (BNP),” *Journal of Elections, Public Opinion and Parties*, 20(1): 31-54.
- , 2011, *New British Fascism: Rise of the British National Party*, London: Routledge.
- et al., 2010, “Who Votes Extreme Right in Twenty-First-Century Britain? The Social Bases of Support for the National Front and British National Party,” Roger Eatwell and Matthew J. Goodwin eds., *The New Extremism in 21st Century Britain*, London: Routledge.
- Gordon, Milton M., 1964, *Assimilation in American Life*, Oxford University Press. (=2000, 倉田和四生ほか訳『アメリカンライフにおける同化理論の諸相』晃洋書房.)
- 五島昭, 2005, 「欧州極右政党の進出とその背景」『NUCB journal of economics and information science』49 卷 2 号.
- Gottlieb, Nanette and Mark McLelland eds., 2001, *Japanese Cybercultures*, London: Routledge.

- Granovetter, Mark, 1973, "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, 78: 1360-80.
- , 1985, "Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness," *American Journal of Sociology*, 91: 481-510.
- Green, Donald P. and Andrew Rich, 1998, "White Supremacist Activity and Crossburnings in North Carolina," *Journal of Quantitative Criminology*, 14(3): 263-282.
- Gurr, Ted Robert, 2011, *Why Men Rebel*, Fortieth Anniversary Edition, Boulder: Paradigm.
- Gusfield, Joseph R., 1994, "The Reflexivity of Social Movements: Collective Behavior and Mass Society Theory Revisited," Enrique Laraña, Hank Johnston and Joseph R. Gusfield eds., *New Social Movements: From Ideology to Identity*, Philadelphia: Temple University Press.
- 河昌玉, 1976, 「在日朝鮮人の人権問題」上田誠吉・藤島宇内編『朝鮮の統一と人権』合同出版.
- Haddad, Emma, 2007, "Danger Happens at the Border," Prem Kumar Rajaram and Carl Grundy-Warr eds., *Borderscapes: Hidden Geographies and Politics at Territory's Edge*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Hagelund, Anniken, 2003, "A Matter of Decency? The Progress Party in Norwegian Immigration Politics," *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 29(1): 47-65.
- Halikiopoulou, Daphne, Steven Mock and Sofia Vasilopoulou, 2013, "The Civic Zeitgeist: Nationalism and Liberal Values in the European Radical Right," *Nations and Nationalism*, 19(1): 107-127.
- 濱田国祐, 2011, 「移民——外国人増加に誰がメリットを感じ、誰がデメリットを感じるのか？」田辺俊介編『外国人へのまなざしと政治意識——社会調査で読み解く日本のナショナリズム』勁草書房.
- 濱口和久, 2010, 「鳩山政権と領土問題の危機」『祖国と青年』377号.
- Hammar, Tomas, 1990, *Democracy and the Nation State*, Aldershot: Avebury.
- 韓さんの指紋押捺拒否を支える会, 1990, 『指紋押捺拒否者が裁いたニッポン』社会評論社.
- 韓載香, 2010, 『「在日企業」の産業経済史』名古屋大学出版会.
- 韓東賢, 2006, 『チマ・チョゴリ制服の民族誌——その誕生と朝鮮学校の女性たち』双風舎.
- 韓英均, 2010, 「反韓と反日——嫌韓流からみえてくるもの」『社会学論集』16号.
- Hansen, Lene, 2006, *Security as Practice: Discourse Analysis and the Bosnian War*, London: Routledge.
- 原田峻・高木竜輔・松谷満・申琪榮・樋口直人・稲葉奈々子・成元哲, 2012a, 「政権交代と社会運動——問題関心の表明と論点整理の試み」『中京大学現代社会学部紀要』5巻2号.
- 原田峻・高木竜輔・松谷満・申琪榮・樋口直人・稲葉奈々子・成元哲, 2012b, 「政権交代と社会運動をめぐるイシュー・アテンション——民主党政権前後を事例として」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』13号.
- 原尻英樹, 1998, 『「在日」としてのコリアン』講談社.
- , 2006, 『嫌韓流』にみる日本定住コリアンのイメージ——朝鮮蔑視観と自己中心性の病』『アジア遊学』92号.
- 長谷川公一, 1985, 「社会運動の政治社会学——資源動員論の意義と課題」『思想』737号

- 嘴本郁, 2011, 「外国人の生活保護をめぐる大分地裁判決と厚労省通知について」『Migrant's ネット』136号.
- 橋本みゆき, 2010, 『在日韓国・朝鮮人の親密圏——配偶者選択のストーリーから読む<民族>の現在』社会評論社.
- 畑山敏夫, 1997, 『フランス極右の新展開』国際書院.
- , 2007, 『現代フランスの新しい右翼——ルペンに見果てぬ夢』法律文化社.
- 初瀬龍平編, 1988, 『内なる国際化 改訂増補版』三嶺書房.
- 早瀬善彦, 2009a, 「在日大韓国民団と外国人参政権付与政策」『濤標』6巻3号.
- , 2009b, 「諸外国における外国人参政権導入の経緯とその実態」『濤標』6巻4号.
- , 2010, 「日本における外国人参政権問題——導入論出現の背景と現状」『濤標』7巻1号.
- , 2011, 「在日外国人の地位と参政権問題——国籍・法制度の視点から」『濤標』8巻1号.
- Hayduk, Ron, 2006, *Democracy for All: Restoring Immigrant Voting Rights in the United States*, New York: Routledge.
- Hechter, Michael, 1999, *Internal Colonialism: The Celtic Fringe in British National Development*, Second edition, New Brunswick: Transaction.
- Heinisch, Reinhard, 2003, “Success in Opposition—Failure in Government: Explaining the Performance of Right-wing Populist Parties in Public Office,” *West European Politics*, 26(3): 91-130.
- ヘイトスピーチと排外主義に加担しない出版関係者の会編, 2014, 『NO ヘイト! ——出版の製造者責任を考える』ころから.
- Hester, Jeffrey, 2008, “Datsu Zainichi-ron: An Emerging Discourse on Belonging among Ethnic Koreans in Japan,” Nelson H. H. Graburn, John Ertl and Kenji Tierney eds., *Multiculturalism in the New Japan: Crossing the Boundaries within*, New York: Berghahn Books.
- Hettne, Björn and Elisabeth Abiri, 1998, “The Securitization of Cross-Border Migration: Sweden in the Era of Globalization,” Nana Poku and David T. Graham eds., *Redefining Security: Population Movements and National Security*, New York: Praeger.
- 比嘉康光, 2007, 「東ドイツにおける極右問題をめぐる若干の考察」『武蔵大学人文学会雑誌』38巻4号.
- 東原正明, 2005a, 「極右政党としてのオーストリア自由党——ハイダー指導下の台頭期を中心に(1)」『北海学園大学法学研究』41巻2号.
- , 2005b, 「極右政党としてのオーストリア自由党——ハイダー指導下の台頭期を中心に(2)」『北海学園大学法学研究』41巻3号.
- , 2006a, 「極右政党としてのオーストリア自由党——ハイダー指導下の台頭期を中心に(3)」『北海学園大学法学研究』42巻1号.
- , 2006b, 「極右政党としてのオーストリア自由党——ハイダー指導下の台頭期を中心に(4)」『北海学園大学法学研究』42巻2号.
- , 2006c, 「極右政党としてのオーストリア自由党——ハイダー指導下の台頭期を中心に(5)」『北海学園大学法学研究』42巻3号.

- , 2006d, 「極右政党としてのオーストリア自由党——ハイダー指導下の台頭期を中心に(6)」『北海学園大学法学研究』42 巻 4 号.
- , 2007, 「極右政党としてのオーストリア自由党——ハイダー指導下の台頭期を中心に(7)」『北海学園大学法学研究』43 巻 1 号.
- 樋口直人, 1999, 「社会運動のミクロ分析」『ソシオロジ』135 号.
- , 2000a, 「対抗と協力——市政決定メカニズムのなかで」宮島喬編『外国人市民と政治参加』有信堂.
- , 2000b, 「自治体の国際化政策と諮問機関」宮島喬編『外国籍住民と社会的・文化的受け入れ施策』科学研究費報告書.
- , 2001a, 「外国人参政権論の日本的構図——市民権論からのアプローチ」NIRA シティズンシップ研究会編『多文化社会の選択——「シティズンシップ」の視点から』日本経済評論社.
- , 2001b, 「外国人の行政参加システム——外国人諮問機関の検討を通じて」『都市問題』92 巻 4 号.
- , 2005, 「共生から統合へ」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会.
- , 2010, 「人種主義と排外主義を欧州と日本から考える」『Migrant's ネット』127 号.
- , 2011a, 「東アジア地政学と外国人参政権——日本版デニズンシップをめぐるアポリア」『社会志林』57 巻 4 号.
- , 2011b, 「外国人参政権をめぐる虚構と現実」『世界思想』38 号.
- , 2012a, 「在特会の論理 (1) ——拉致問題で『舵が切り換った』A 氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』25 号.
- , 2012b, 「在特会の論理 (2) ——『心震える歴史』を経験した B 氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』25 号.
- , 2012c, 「在特会の論理 (3) ——『鬱憤ばらしじゃ続かない』C 氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』25 号.
- , 2012d, 「在特会の論理 (4) ——教育勅語を暗記している D 氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』25 号.
- , 2012e, 「在特会の論理 (5) ——『普通に生活できる時代』を取りもどしたい E 氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』25 号.
- , 2012f, 「在特会の論理 (6) ——ワールドカップがきっかけとなった F 氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』25 号.
- , 2012g, 「在特会の論理 (7) ——『自分のなかで問題提起された』G 氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』25 号.
- , 2012h, 「在特会の論理 (8) ——『嫌韓流』を地で行く H 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』1 号.
- , 2012i, 「在特会の論理 (9) ——『創価学会をつぶす』動画に引き込まれた I 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』1 号.
- , 2012j, 「在特会の論理(10) ——愛国心と排外主義の間・J 氏の場合」『大阪経済



- 法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号.
- , 2012k, 「在特会の論理(11)——ノンポリ転じて活動家になった K 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012l, 「在特会の論理(12)——在特会が多くの人に勇気を与えたという L 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012m, 「在特会の論理(13)——大学時代から『正論』を読んでいた M 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012n, 「在特会の論理(14)——交際相手に勧誘された N 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012o, 「在特会の論理(15)——『元々右だった』O 氏の場合」『徳島大学社会科学科学研究』26号.
- , 2012p, 「在特会の論理(16)——歴史問題が気にかかっていた P 氏の場合」『徳島大学社会科学科学研究』26号.
- , 2012q, 「在特会の論理(17)——1人で街宣していた動画に引き込まれた Q 氏の場合」『徳島大学社会科学科学研究』26号.
- , 2012r, 「在特会の論理(18)——職場にあった産経新聞を気に入った R 氏の場合」『徳島大学社会科学科学研究』26号.
- , 2012s, 「『行動する保守』の論理(1)——中国が重要という  $\alpha$  氏の場合」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012t, 「『行動する保守』の論理(2)——外国人参政権に反対する  $\beta$  氏の場合」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012u, 「『行動する保守』の論理(3)——在特会から学んだ  $\gamma$  氏の場合」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012v, 「『行動する保守』の論理(4)——『さらなる右』としての排外主義を実践する  $\delta$  氏の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』45号.
- , 2012w, 「『行動する保守』の論理(5)——トンデモ本から歴史問題をめぐる嫌悪感へ  $\epsilon$  氏の場合」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012x, 「『行動する保守』の論理(6)——中国が重要だという  $\alpha$  氏・再」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012y, 「排外主義運動のマイクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号.
- , 2012z, 「日本のエスニック・ビジネスをめぐる見取り図」樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社.
- , 2013a, 「『行動する保守』の論理(7)——右翼に弟子入りした  $\eta$  氏の場合」『アジア太平洋研究センター年報』9号.
- , 2013b, 「『行動する保守』の論理(8)——『ネット右翼のカリスマ』Z 氏の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』46号.
- , 2013c, 「在特会の論理(19)——カナダで変わった S 氏の場合」『徳島大学社会科学科学研究』27号.
- , 2013d, 「在特会の論理(20)——戸塚ヨットスクールに共鳴した T 氏の場合」『徳

- 島大学社会科学研究所』27号.
- , 2013e, 「在特会の論理(21)——インターナショナルスクールで学んだ U 氏の場合」『徳島大学社会科学研究所』27号.
- , 2013f, 「在特会の論理(22)——『日の丸をじいちゃんが掲げた』V 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』3号.
- , 2013g, 「在特会の論理(23)——インターネットで世界が変わった W 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』3号.
- , 2013h, 「在特会の論理(24)——労組専従から右旋回した X 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』3号.
- , 2013i, 「在特会の論理(25)——勉強サークルとしての在特会に参加した Y 氏の場合」『徳島大学地域科学研究』3号.
- , 2013j, 「『行動する保守』の論理(9)——国家革新の一部として排外主義運動に参加する  $\theta$  氏の場合」『徳島大学地域科学研究』3号.
- , 2013k, 「極右政党の社会的基盤——支持者像と支持の論理をめぐる先行研究の検討」『アジア太平洋レビュー』10号.
- , 2013l, 「排外主義運動の核心をつかむ——在特会調査からみえてきたもの」『Journalism』282号.
- , 2013m, 「与那国島が乗っ取られる!?——国境の島からみえる排外主義」『Migrant Network』156号.
- , 2014a, 『日本型排外主義——在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会.
- , 2014b, 「日本型排外主義の背景——なぜ今になってヘイトスピーチが跋扈するのか」『日本の科学者』49巻12号.
- , 2014c, 「日本政治のなかの極右」『北海道新聞』2014年4月4日付.
- , 2014d, 「排外主義——問われる政治の姿勢」『ウォロ』495号.
- , 2014e, 「ヘイトスピーチと排外主義——根本的な対策のために」『聖教新聞』2014年8月7日付.
- , 2014f, 「極右を保守から切り離せ」『朝日新聞』2014年10月2日付.
- , 2014g, 「政治に逆流する排外主義——橋下市長—桜井在特会会長の会談から見えたもの」『The Page』2014.11.7 (<http://thepage.jp/detail/20141107-00000006-wordleaf>).
- , 2014h, 「日本型排外主義と在日韓国・朝鮮人」『RAIK 通信』145号.
- , 2015a, 「日本の移民政策と反知性主義——市民権の廃墟からの出発にむけて」『現代思想』43巻2号.
- , 2015b, 「日本政治のなかの極右」『世界』866号.
- , 2015c, 「ソーシャル・キャピタルと社会運動」坪郷實編『ソーシャル・キャピタル』ミネルヴァ書房.
- , 2015d, 「在日コリアンの社会経済的状況の動態——職業の変遷を中心に」『青鶴』6号.
- , 2015e, 「排外主義勢力といかに対峙すべきか——極右への対応をめぐるレビュー」『コリアン・スタディーズ』3号.

- , 2015f, 「書評に込めて」『ソシオロジ』182号.
- ・中澤秀雄・水澤弘光, 1999, 「住民運動と組織戦略——政治的機会構造と誘因構造に注目して」『社会学評論』49巻4号.
- ・稲葉奈々子, 2004, 「グローバル化と社会運動」曾良中清司ほか編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂.
- ・丸山真央, 2006, 「外国人参政権と世論」田中宏・金敬得編『日・韓「共生社会」の展望——韓国で実現した外国人地方参政権』新幹社.
- ・松谷満, 2013, 「右翼から極右へ?——日本版極右としての石原慎太郎の支持基盤をめぐって」『理論と動態』5号.
- Higuchi, Naoto, 2014, “Japan’s Far Right in East Asian Geopolitics: The Anatomy of New Xenophobic Movements,” 『徳島大学社会科学研究』28号.
- 樋口雄一, 2002, 『日本の朝鮮・韓国人』同成社.
- Hilgartner, Stephen and Charles L. Bosk, 1988, “The Rise and Fall of Social Problems: A Public Arenas Model,” *American Journal of Sociology*, 94: 53-78.
- 平林祐子, 2013, 「何が『デモのある社会』をつくるのか——ポスト 3.11 のアクティビズムとメディア」田中重好・船橋晴俊・正村俊之編『東日本大震災と社会学——大災害を生み出した社会』ミネルヴァ書房.
- 平松茂雄, 2010, 「国を危うくする『外国人地方参政権』」『治安フォーラム』16巻4号.
- 廣田全男, 2000, 「外国人市政参加の法的検討」宮島喬編『外国人市民と政治参加』有信堂.
- 〔ひとさし指の自由〕編集委員会編, 1984, 『ひとさし指の自由——外国人登録法・指紋押捺拒否を闘う』社会評論社.
- Hochschild, Jennifer L. and John H. Mollenkopf eds., 2009, *Bringing Outsiders in: Transatlantic Perspectives on Immigrant Political Incorporation*, Ithaca: Cornell University Press.
- Hoffer, Eric, 1951, *The True Believer: Thoughts on the Nature of Mass Movements*, Harper & Brothers. (=2003, 高根正昭訳『大衆運動』紀伊國屋書店.)
- 外間守吉, 2012, 「与那国町の将来展望——人口増加という課題」『別冊 環』19号.
- Honda, Yuki, 2007, “Focusing in on Contemporary Japan’s ‘Youth’ Nationalism,” *Social Science Japan Journal*, 10(2): 281-286.
- 本郷正武, 2007, 『HIV/AIDS をめぐる集合行為の社会学』ミネルヴァ書房.
- 堀幸雄, 1993, 『増補 戦後の右翼勢力』勁草書房.
- 『ほるもん文化』編集委員会編, 1992, 『在日朝鮮人が選挙に行く日』新幹社.
- 保坂展人, 2011, 「政治的に『いない』存在をなくすために」『部落解放』644号.
- 星野智, 1998, 「ドイツにおける極右主義の台頭とその背景」『法学新報』104巻8-9号.
- Husbands, Christopher T., 1981, “Contemporary Radical Right-Wing Extremism in Western European Democracies: A Review Article,” *European Journal of Political Research*, 9: 75-99.
- , 1983, *Racial Exclusionism and the City: The Urban Support of the National Front*, London: George Allen & Unwin.
- , 2002, “How to Tame the Dragon, or What Goes Around Comes Around: A Critical Review of Some Major Contemporary Attempts to Account for Extreme-Right Racist Politics in Western Europe,” Martin Schain, Aristide Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over*

- Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in Western Europe*, London: Palgrave.
- Huysmans, Jef, 1995, "Migrants as a Security Problem: Dangers of 'Securitizing' Societal Issues," Robert Miles and Dietrich Thränhardt eds., *Migration and European Integration: The Dynamics of Inclusion and Exclusion*, London: Pinter.
- , 2006, *The Politics of Insecurity: Fear, Migration and Asylum in the EU*, London: Routledge.
- , 2011, "What's in an Act? On Security Speech Acts and Little Security Nothings," *Security Dialogue*, 42(4-5): 371-383.
- ファン・ソンビン, 2003, 「W杯と日本の自画像、そして韓国という他者」『マス・コミュニケーション研究』62号.
- 黄盛彬, 2011, 「韓流と反韓流の交差——日本人のアイデンティティと韓国認識」『日本學』33号.
- 玄武岩, 2008, 「グローバル化する人権——『反日』の日韓同時代史」岩崎稔ほか編『戦後日本スタディーズ③——「80・90」年代』紀伊国屋書店.
- Ibrahim, Maggie, 2005, "The Securitization of Migration: A Racial Discourse," *International Migration*, 43(5): 163-187.
- Iglesias, Julien Danero, Nenad Stojanović and Sharon Weinblum eds., 2013, *New Nation-States and National Minorities*, Colchester: ECPR Press.
- Ignazi, Piero, 1992, "The Silent Counter-Revolution: Hypotheses on the Emergence of Extreme Right Parties in Europe," *European Journal of Political Research*, 22: 3-34.
- , 2002, "The Extreme Right: Defining the Object and Assessing the Causes," Martin Schain, Aristide Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in Western Europe*, London: Palgrave.
- , 2003, *Extreme Right Parties in Western Europe*, Oxford: Oxford University Press.
- 移住連貧困プロジェクト編, 2011, 『日本で暮らす移住者の貧困』現代人文社.
- Immerfall, Stefan, 1998, "The Neo-Populist Agenda," Hans-Georg Betz and Stefan Immerfall eds., *The New Politics of the Right: Neo-Populist Parties and Movements in Established Democracies*, New York: St. Martin's Press.
- 稲葉奈々子, 2011, 「<サンパピエ>の運動と反植民地主義言説——作動しなかったポストコロニアリズム」竹沢尚一郎編『移民のヨーロッパ—国際比較の視点から』明石書店.
- ・大曲由起子・高谷幸・樋口直人・鍛冶致, 2014, 「1985年国勢調査にみる在日外国人の仕事」『茨城大学人文コミュニケーション学科論集』17号.
- Inglehart, Ronald and Pippa Norris, 2003, *Rising Tide: Gender Equality and Cultural Change around the World*, New York: Cambridge University Press.
- 井上薫, 2010, 『ここがおかしい、外国人参政権』文藝春秋社.
- Ireland, Patrick, 1994, *The Policy Challenge of Ethnic Diversity: Immigrant Politics in France and Switzerland*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 石橋英昭, 2013, 「『臭いもの』を忌避している間に社会の公正さは損なわれていった」『Journalism』282号.

- 石原昌家, 1982, 『大密貿易の時代——占領初期沖縄の民衆生活』晚餐社.  
 ———, 2000, 『空白の沖縄社会史——戦果と密貿易の時代』晚餐社.
- 磯貝治良, 1986, 『在日』の思想・生き方を読む『季刊三千里』46号.
- 板垣竜太, 2007, 『マンガ嫌韓流』と人種主義—国民主義の構造『前夜』11号.  
 ———, 2013, 「朝鮮学校への嫌がらせ裁判に対する意見書」『評論・社会科学』105号.  
 ———, 2015, 「言葉を暴力をめぐる断想——『ヘイト・スピーチ』を考える」『インパクト』197号.
- 伊藤昌亮, 2011, 『フラッシュモブズ——儀礼と運動の交わる場所』NTT出版.
- 伊藤るり, 1991, 「＜新しい市民権＞と市民社会の変容——移民の政治参加とフランス国民国家」宮島喬・梶田孝道編『統合と分化のなかのヨーロッパ』有信堂.
- Ivarsflaten, Elisabeth, 2005, “The Vulnerable Populist Right Parties: No Economic Realignment Fuelling Their Electoral Success,” *European Journal of Political Research*, 44: 465–492.  
 ———, 2008, “What Unites Right-Wing Populists in Western Europe? Re-Examining Grievance Mobilization Models in Seven Successful Cases,” *Comparative Political Studies*, 41(1): 3–23.  
 ——— and Rune Stubager, 2012, “Voting for the Populist Radical Right in Western Europe: The Role of Education,” Jens Rydgren ed., *Class Politics and the Radical Right*, London: Routledge.
- 岩間陽子, 1999, 「最近のドイツにおける極右主義問題」『海外事情』47巻12号.
- 岩崎昌子, 2008, 「ノルウェーの移民をめぐる『平等』論争——新右翼政党が問いかけた『社会的連帯』」『北ヨーロッパ研究』5巻.
- 岩田温, 2009, 「国民国家の形成——外国人参政権問題研究序説」『濤標』6巻4号.  
 ———, 2015, 「在特会と大江健三郎——ヘイトスピーチを保守は認めない」『正論』517号.
- 井沢泰樹, 2014, 「ヘイトスピーチと若者の意識——大都市圏の大学生の調査から」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』16号.
- 井関正久, 2003, 「極右問題をめぐる社会学的論考——統一ドイツを事例に」『ヨーロッパ研究』2号.
- Jacobs, Dirk, 1998, “Discourses, Politics and Policy: The Dutch Parliamentary Debate about Voting Rights for Foreign Residents,” *International Migration Review*, 32: 350–373.  
 ———, 1999, “The Debate over Enfranchisement of Foreign Residents in Belgium,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 25(4): 649–663.  
 ——— and Marc Swyngedouw, 2002, “The Extreme Right and Enfranchisement of Immigrants: Main Issues in the Public ‘Debate’ on Integration in Belgium,” *International Migration and Integration*, 3(3–4): 329–344.  
 ———, Karen Phalet and Marc Swyngedouw, 2004, “Associational Membership and Political Involvement among Ethnic Minority Groups in Brussels,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 30: 543–59.
- James, Nigel, 2001, “Militias, the Patriot Movement and the Internet: The Ideology of Conspiracism,” Jane Parish and Martin Parker eds., *The Age of Anxiety: Conspiracy Theories and the Human Science*, Oxford: Wiley-Blackwell.
- Jamin, Jérôme, 2013, “Two Different Realities: Notes on Populism and the Extreme Right,” Andrea

- Mammone, Emmanuel Godin and Brian Jenkins eds., *Varieties of Right-wing Extremism in Europe*, London: Routledge.
- Jansson, David, 2010, "The Head vs. the Gut: Emotions, Positionality, and the Challenge of Fieldwork with a Southern Nationalist Movement," *Geoforum*, 41: 19-22.
- Jaschke, Hans-Gerd, 2013, "Right-wing Extremism and Populism in Contemporary Germany and Western Europe," Sabie von Mering and Timothy Wyman McCarthy eds., *Right-wing Radicalism Today: Perspectives from Europe and the US*, London: Routledge.
- Jasper, James M., 1997, *The Art of Moral Protest: Culture, Biography, and Creativity in Social Movements*, Chicago: University of Chicago Press.
- Jenkins, J. Craig, 1985, *The Politics of Insurgency: Farm Workers Movement in the Sixties*, New York: Columbia University Press.
- and Bert Klandermans eds., 1995, *The Politics of Social Protest: Comparative Perspectives on States and Social Movements*, London: UCL Press.
- 自由民主党政務調査会と那国町調査団, 2010, 「外国人地方参政権問題〔資料集〕」『政策特報』1355号.
- Johnston, Hank, 1991, *Tales of Nationalism: Catalonia, 1939-1979*, New Brunswick: Rutgers University Press.
- , 1995, "A Methodology for Frame Analysis: From Discourse to Cognitive Schemata," Hank Johnston and Bert Klandermans eds., *Social Movement and Culture*, London: UCL Press.
- 上丸洋一, 2011, 『「諸君!」「正論」の研究——保守言論はどう変容してきたか』岩波書店.
- Jones-Correa, M., 1998, *Between Two Nations: The Political Predicament of Latinos in New York City*, Ithaca: Cornell University Press.
- 鍛冶致・高谷幸・大曲由起子・樋口直人, 2013, 「1995年と2000年の国勢調査に見る外国人の教育——外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『大阪成蹊大学マネジメント学部紀要』10号.
- 鍛冶致・高谷幸・大曲由起子・樋口直人・稲葉奈々子, 2015, 「1980年と1985年の国勢調査にみる外国人の教育——外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『大阪成蹊大学マネジメント学部紀要』12号.
- 梶田孝道, 1996, 『国際社会学のパースペクティブ』東京大学出版会.
- 梶原克彦, 2009, 「オーストリアにおけるポピュリズム現象と民主主義——戦後政治システムの変容」島田幸典・木村幹編『ポピュリズム・民主主義・政治指導——制度的変動期の比較政治学』ミネルヴァ書房.
- Kalicki, Konrad, 2008, "Voting Rights of the 'Marginal': The Contested Logic of Political Membership in Japan," *Ethnopolitics*, 7: 265-286.
- Kallis, Aristotle, 2013, "Breaking Taboos and 'Mainstreaming the Extreme': The Debates on Restricting Islamic Symbols in Contemporary Europe," Ruth Wodak, Majid KhosraviNik and Brigitte Mral eds., *Right-wing Populism in Europe: Politics and Discourse*, London: Bloomsbury.
- 神奈川新聞社会部, 1985, 『日本の中の外国人——「人さし指の自由」を求めて』神奈川新

- 聞社.
- 神原元, 2014, 『ヘイト・スピーチに抗する人びと』新日本出版社.
- 金友隆幸, 2011a, 『支那人の日本侵略』日新報道.
- , 2011b, 「『美德』を捨てても支那人と対峙せよ!」『国体文化』1048号.
- 姜徳相, 2003, 『〔新版〕関東大震災・虐殺の記憶』青丘文化社.
- 姜在彦・金東勲, 1989, 『在日韓国・朝鮮人——歴史と展望』労働経済社.
- 姜尚中, 1985a, 「『在日』の現在と未来の間」『季刊三千里』42号.
- , 1985b, 「方法としての『在日』」『季刊三千里』44号.
- , 1989, 「昭和の終焉と現代日本の『心象地理=歴史』——教科書の中の朝鮮を中心として」『思想』786号.
- , 1992, 「『在日』の新たな機軸を求めて——抵抗と参加のはざままで」『青丘』13号.
- , 1994, 「転形期の『在日』と参政権」『青丘』20号.
- , 1996, 『オリエンタリズムの彼方へ——近代文化批判』岩波書店.
- 韓国民団中央本部編, 2014, 『ヘイト・スピーチを許してはいけない』新幹社.
- 川崎市外国籍市民意識実態調査研究委員会, 1993, 『川崎市外国籍市民意識実態調査報告書』.
- 関東弁護士会連合会編, 2012, 『外国人の人権』明石書店.
- Kaplan, Jeffrey and Tore Bjørgo eds., 1998, *Nation and Race: The Developing Euro-American Racist Subculture*, Boston: Northeastern University Press.
- 苅部直, 2006, 「浮遊する歴史——1990年代の天皇論」『社会科学研究』58巻1号.
- 駆井翼, 2008, 「右翼運動に影響を与える諸事情」『治安フォーラム』14巻7号.
- Karvonen, Lauri, 2004, “The New Extreme Right-Wingers in Western Europe: Attitudes, World Views and Social Characteristics,” Peter Merkl and Leonard Weingberg eds., *The Revival of Right-Wing Extremism in the Nineties*, London: Frank Cass.
- 柏崎千佳子, 2002, 「国籍のあり方——文化的多様性の承認に向けて」近藤敦編『外国人の法的地位と人権擁護』明石書店.
- 柏崎正憲, 2011, 「現代日本における排外ナショナリズムと植民地主義の否認——批判のために」岩崎稔・陳光興・吉見俊哉編『カルチュラル・スタディーズで読み解くアジア』せりか書房.
- 片岡大右, 2013, 「フランスと日本の右傾化とレイシズム——アイデンティティ派と在特会」『人間と教育』79号.
- 加藤晴乃, 2012, 「保守運動観点からのジェンダーバッシング言説——フレーム分析を使用して」『格差センシティブな人間発達科学の創成公募研究成果論文集』20号.
- 河合幹雄, 2004, 『安全神話崩壊のパラドックス——治安の法社会学』岩波書店.
- 川北稔, 2004, 「社会運動と集合的アイデンティティ——動員過程におけるアイデンティティの諸相」曾良中清司ほか編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂.
- 河村洋二, 2011, 「徳島県教組襲撃事件とネット右翼『在特会』」『科学的社会主義』161号.
- Keck, Margalet E. and Kathryn Sikkink, 1998, *Activists beyond Borders: Advocacy Networks in International Politics*, Ithaca: Cornell University Press.

- Keniston, Kenneth, 1968, *Young Radicals: Notes on Committed Youth*, Harcourt, Brace & World.  
 (=1973, 庄司興吉・庄司洋子訳『ヤング・ラディカルズ』みすず書房.)
- , 1971, *Youth and Dissent: The Rise of a New Opposition*, Harcourt Brace Jovanovich. (= 1977, 高田昭彦他訳『青年の異議申し立て』東京創元社.)
- Kersten, Joachim, 2004, “The Right-Wing Network and the Role of Extremist Youth Groupings in Unified Germany,” Angelica Fenner and Eric D. Weitz eds., *Fascism and Neofascism: Critical Writings on the Radical Right in Europe*, London: Palgrave Macmillan.
- Kessler, Alan E. and Gary P. Freeman, 2005, “Support for Extreme Right-Wing Parties in Western Europe: Individual Attributes, Political Attitudes, and National Context,” *Comparative European Politics*, 3: 261-88.
- Kestel, Laurent and Laurent Godmer, 2004, “Institutional Inclusion and Exclusion of Extreme Right Parties.” Roger Eatwell and Cas Mudde eds., *Western Democracies and the New Extreme Right Challenge*, London: Routledge.
- 木戸衛一, 2007, 「ドイツ極右の着実な伸張」『阪大法学』56巻5号.
- 金東勲, 1994, 『外国人住民の参政権』明石書店.
- 金玄郁, 2013, 「イルベ——韓国のネット右翼の行方」『インパクション』191号.
- 金敬得, 1995, 『在日コリアンのアイデンティティと法的地位』明石書店.
- 金敬黙, 2011, 「日本のなかの『在日』と社会運動——市民運動と国際連帯による再検討」李鍾元・木宮正史・浅野豊美編『歴史としての日韓国交正常化Ⅰ 東アジア冷戦編』法政大学出版社.
- 金明秀, 2011, 「インターネット利用史にみられる2つの《グレシャムの法則》——ハン・ワールドの体験を中心として」『日本學』33号.
- ・稲月正, 2000, 「在日韓国人の社会移動」高坂健次編『階層社会から新しい市民社会へ』東京大学出版会.
- 金富子, 2011, 『継続する植民地主義とジェンダー——「国民」概念・女性の身体・記憶と責任』世織書房.
- 金尚均, 2012, 「ヘイトクライムと人権——いまそこにある民族差別」石崎学・遠藤比呂通編『沈黙する人権』法律文化社.
- 編, 2014, 『ヘイト・スピーチの法的研究』法律文化社.
- 金太基, 1991a, 「在日韓国人三世の法的地位と『1965年韓日協定』(1)」『一橋論叢』105巻1号.
- , 1991b, 「在日韓国人三世の法的地位と『1965年韓日協定』(2)」『一橋論叢』106巻1号.
- , 1997, 『戦後日本政治と在日朝鮮人問題——SCAPの対在日朝鮮人政策 1945-1952年』勁草書房.
- 金友子, 2014, 「ヘイトスピーチの『被害者』になること」『インパクション』197号.
- 金栄, 2008, 「在日朝鮮人弾圧から見る日本の植民地主義と軍事化」金富子・中野敏男編『歴史と責任——「慰安婦」問題と1990年代』青弓社.
- 木宮正史, 2014, 「安倍政権下の日韓(朝)関係と在日コリアン問題」『日本學』38号.
- Kimmel, Michael, 2007, “Racism as Adolescent Male Rite of Passage: Ex-Nazis in Scandinavia,”



- Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 202-218.
- and Abby L. Ferber, 2000, “‘White Men Are This Nation’: Right-wing Militias and the Restoration of Rural American Masculinity,” *Rural Sociology*, 65(4): 582-604.
- 木村幹, 2007, 「ブームは何を残したか——ナショナリズムの中の韓流」石田佐恵子・木村幹・山中千恵編『ポスト韓流のメディア社会学』ミネルヴァ書房.
- , 2011, 「外国人参政権を推進する『ナショナル・ポピュリズム』——蘆武鉉政権下の韓国の事例から」河原祐馬・島田幸典・玉田芳史編『移民と政治——ナショナル・ポピュリズムの国際比較』昭和堂.
- , 2013, 「日韓歴史問題にどう向き合うか(31)——変化する日本社会」『究』31号.
- , 2014, 『日韓歴史認識問題とは何か——歴史教科書・「慰安婦」・ポピュリズム』ミネルヴァ書房.
- 木村元彦・清義明・安田浩一, 2013, 「サッカーと愛国の奇妙な関係」『週刊朝日』118巻45号.
- 木村元彦・園子温・安田浩一, 2013, 『ナショナリズムの誘惑』ころから.
- 木村涼子編, 2005, 『ジェンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』現代書館.
- 木下ちがや, 2010, 「日本の排外主義運動のゆくえ」『Migrant’s ネット』127号.
- 金原左門ほか, 1986, 『日本のなかの韓国・朝鮮人、中国人』明石書店.
- 北田暁大, 2005, 『「嗤う」日本のナショナリズム』日本放送出版協会.
- 北原みのり・朴順梨, 2014, 『奥様は愛国』河出書房新社.
- Kitschelt, Herbert, 1995, *The Radical Right in Western Europe: A Comparative Analysis*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Klandermans, Bert, 1992, “Social Construction of Protest and the Multiorganizational Field,” Aldon D. Morris and Carol M. Muller eds., *Frontiers in Social Movement Theory*, New Haven: Yale University Press.
- , 1997, *Social Psychology of Collective Action*, Oxford: Blackwell.
- , 2013, “Extreme Right Activists: Recruitment and Experience,” Sabie von Mering and Timothy Wyman McCarthy eds., *Right-wing Radicalism Today: Perspectives from Europe and the US*, London: Routledge.
- and Dirk Oegema, 1987, “Potentials, Networks, Motivations and Barriers: Steps towards Participation in Social Movements,” *American Sociological Review*, 52(4): 519-531.
- , Marlene Roefs and Johan Olivier, 2001, “Grievance Formation in a Country in Transition: South Africa, 1994-1998,” *Social Psychology Quarterly*, 64(1): 41-54.
- and Nonna Mayer, 2006a, “Right-Wing Extremism as a Social Movement,” Bert Klandermans and Nonna Mayer eds., *Extreme Right Activists in Europe: Through the Magnifying Glass*, London: Routledge.
- and Nonna Mayer, 2006b, “Through the Magnifying Glass: the World of Extreme Right,” Bert Klandermans and Nonna Mayer eds., *Extreme Right Activists in Europe: Through the Magnifying Glass*, London: Routledge.
- and Nonna Mayer eds., 2006c, *Extreme Right Activists in Europe: Through the*

- Magnifying Glass*, London: Routledge.
- , Jozanneke van der Toorn and Jacquelin van Stekelenburg, 2008, “Embeddedness and Identity: How Immigrants Turn Grievances into Action,” *American Sociological Review*, 73: 992-1012.
- Knigge, Pia, 1998, “The Ecological Correlates of Right-Wing Extremism in Western Europe,” *European Journal of Political Research*, 34: 249-279.
- Knutsen, Oddbjørn, 2006, *Class Voting in Western Europe: A Comparative Longitudinal Study*, Lanham: Lexington Books.
- 公安調査庁, 2011, 『内外情勢の回顧と展望』公安調査庁.
- , 2012, 『内外情勢の回顧と展望』公安調査庁.
- , 2013, 『内外情勢の回顧と展望』公安調査庁.
- 小林真生編, 2013, 『レイシズムと外国人嫌悪』明石書店.
- 小林玲子, 2011, 「日韓会談と『在日』の法的地位問題——退去強制を中心に」李鍾元・木宮正史・浅野豊美編『歴史としての日韓国交正常化 II 脱植民地化編』法政大学出版社.
- 古賀光生, 2005, 「現代ヨーロッパにおける、いわゆる『極右』政党の台頭の分析——オーストリア自由党の事例を中心として」『本郷法政紀要』14号.
- , 2008, 「『カリスマ』の誕生——現代西欧の極右政党における指導者権力の拡大過程」日本比較政治学会編『リーダーシップの比較政治学』早稲田大学出版会.
- , 2009, 「脱クライエンテリズム期における選挙市場の比較分析——西欧極右政党の動員戦略を通じて」『年報政治学 政治における暴力』木鐸社.
- 高賛侑, 2014, 「在日韓国・朝鮮人から見る排外主義と共生の展望」『日本の科学者』49巻12号.
- 小浜逸郎, 2015, 『右翼』『排外主義』レッテル貼りに狂奔する左翼運動』『正論』517号.
- Kolinsky, Eva, 1992, “A Future for Right Extremism in Germany?” Paul Hainsworth ed., *The Extreme Right in Europe and the USA*, London: Pinter.
- 駒込武, 1996, 『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店.
- 駒井洋・渡戸一郎編, 1997, 『自治体の外国人政策』明石書店.
- 近藤敦, 1996a, 『「外国人」の参政権』明石書店.
- , 1996b, 『外国人参政権と国籍』明石書店.
- , 2000, 「永住外国人の地方参政権をめぐる最近の論点」『法学セミナー』552号.
- 近藤瑠漫・谷崎晃編, 2007, 『ネット右翼とサブカル民主主義——マイデモクラシー症候群』三一書房.
- Koopmans, Ruud, 1995, *Democracy from Below: New Social Movements and the Political System in West Germany*, Boulder: Westview Press.
- , 1996, “Explaining the Rise of Racist and Extreme Right Violence in Western Europe: Grievances or Opportunities,” *European Journal of Political Research*, 30: 185-216.
- and Paul Statham, 1999, “Ethnic and Civic Competitions of Nationhood and the Differentiated Success of the Extreme Right in Germany and Italy,” Marco Giugni, Doug McAdam and Charles Tilly eds., *How Social Movements Matter*, Minneapolis: University of

- Minnesota Press.
- and Susan Olzak, 2004, “Discursive Opportunities and the Evolution of Right-wing Violence in Germany,” *American Journal of Sociology*, 119(1): 198-230.
- , Paul Statham, Marco Giugni and Florence Passy, 2005, *Contested Citizenship: Immigration and Cultural Diversity in Europe*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- and Jasper Muis, 2009, “The Rise of Right-Wing Populist Pim Fortuyn in the Netherlands: A Discursive Opportunity Approach,” *European Journal of Political Research*, 48: 642-664.
- Kornhauser, William, 1959, *The Politics of Mass Society*, Free Press. (=1961, 辻村明訳『大衆社会の政治』東京創元社.)
- 古関彰一, 2010, 「帝国臣民から外国人へ——与えられ、奪われてきた朝鮮人・台湾人の参政権」『世界』809号.
- 上瀧浩子, 2014, 「朝鮮学校に対する襲撃事件と控訴審判決について」『日本の科学者』49巻12号.
- 高藤昭, 1991, 「外国人労働者と我が国の社会保障法制」社会保障研究所編『外国人労働者と社会保障』東京大学出版会.
- Krause, Keith, 1998, “Critical Theories and Security Studies: The Research Programme of ‘Critical Security Studies,’” *Cooperation and Conflict*, 33(3): 298-333.
- and Michael C. Williams eds., 1997, *Critical Security Studies: Concepts and Cases*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Kriesi, Hanspeter, 1999, “Movements of the Left, Movements of the Right: Putting the Mobilization of Two New Types of Social Movements into Political Context,” Herbert Kitschelt et al. eds., *Continuity and Change in Contemporary Capitalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- et al., 1995, *New Social Movements in Western Europe: A Comparative Analysis*, London: UCL Press.
- 具裕珍, 2009, 「『新しい歴史教科書をつくる会』の Exit, Voice, Loyalty——東アジア国際関係への含意を中心に」『相関社会科学』19号.
- 倉真一, 2006, 「保守系オピニオン誌における外国人言説(1)——1990年代までの雑誌『SAPIO』を中心に」『宮崎公立大学人文学部紀要』14巻1号.
- , 2008, 「保守系オピニオン誌における外国人言説(2)——1990年代後半における雑誌『SAPIO』を中心に」『宮崎公立大学人文学部紀要』15巻1号.
- , 2009, 「保守系オピニオン誌における外国人言説(3)——2000年代における雑誌『SAPIO』を中心に」『宮崎公立大学人文学部紀要』16巻1号.
- 黒田勇, 2003, 「日韓ワールドカップとメディア」『スポーツ社会学研究』11号.
- 黒い彗星 Che★Gewald, 2010, 「浮遊するシニシズム——インターネットにおける排外主義とカウンターの可能性」『インパクション』174号.
- 黒沢文貴・イアン・ニッシュ編, 2011, 『歴史と和解』東京大学出版会.
- 楠本孝, 2011, 「在特会事件判決の意義と限界」『法と民主主義』464号.
- 権赫泰, 2005, 「日韓関係と『連帯』の問題」『現代思想』33巻6号.
- Lavenex, Sandra and Emek M. Uçaper, 2002, *Migration and the Externalities of European*

- Integration*, Lanham: Lexington Books.
- Layton-Henry, Zig, 1990, "The Challenge of Political Rights," Zig Layton-Henry ed., *The Political Rights of Migrant Workers in Western Europe*, London: Sage.
- Le Bon, Gustave, 1895, *Psychologie des Foules*, Alcan. (=1993, 櫻井成夫訳『群集心理』講談社.)
- 李鍾元, 1996, 『東アジア冷戦と韓米日関係』東京大学出版会.
- ・木宮正史・浅野豊美編, 2011, 『歴史としての日韓国交正常化 II 脱植民地化編』法政大学出版局.
- 李英和, 1993, 『在日韓国・朝鮮人と参政権』明石書店.
- Léonard, Sarah, 2010, "EU Border Security and Migration into the European Union: FRONTEX and Securitisation through Practices," *European Security*, 19:231-254.
- Lie, John, 2008, *Zainichi (Koreans in Japan): Diasporic Nationalism and Postcolonial Identity*, Berkeley: University of California Press.
- Linden, Annette and Bert Klandermans, 2006a, "The Netherlands: Stigmatized Outsiders," Bert Klandermans and Nonna Mayer eds., *Extreme Right Activists in Europe: Through the Magnifying Glass*, London: Routledge.
- , 2006b, "Stigmatization and Repression of Extreme-Right Activism in the Netherlands," *Mobilization*, 11(2): 213-228.
- , 2007, "Revolutionaries, Wanderers, Converts, and Compliant: Life Histories of Extreme Right Activists," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 184-200.
- Lipset, Seymour Martin, 1959, *Political Man: The Social Bases of Politics*, Doublday. (=1963, 内山秀夫訳『政治のなかの人間——ポリティカル・マン』東京創元新社.)
- Lloyd, Cathie, 1998, "Antiracist Mobilization in France and Britain in the 1970s and 1980s," Danièle Joly ed., *Scapegoats and Social Actors: The Exclusion and Integration of Minorities in Western and Eastern Europe*, Basingstoke: Macmillan.
- ラバーズ、マルセル, 2010, 「同化主義へと突き進むオランダ——極右政党の躍進の背後にあるもの」『Migrant's ネット』127号.
- Lubbers, Marcel, Merove Gijsberts and Peer Scheepers, 2002, "Extreme Right-Wing Voting in Western Europe," *European Journal of Political Research*, 41: 345-378.
- Lubbers, Marcel and Ayse Güveli, 2007, "Voting LFP: Stratification and the Varying Importance of Attitudes," *Journal of Elections, Public Opinion & Parties*, 17(1): 21-47.
- Lubbers, Marcel and Peer Scheepers, 2000, "Individual and Contextual Characteristics of the German Extreme Right-Wing Vote in the 1990s: A Test of Complementary Theories," *European Journal of Political Research*, 38: 63-94.
- Lubbers, Marcel and Peer Scheepers, 2001, "Explaining the Trends in Extreme Right-Wing Voting: Germany 1989-1998," *European Sociological Review*, 17: 431-449.
- Lubbers, Marcel and Peer Scheepers, 2002, "French Front National Voting: A Micro and Macro Perspective," *Ethnic and Racial Studies*, 25(1): 120-149.
- Lubbers, Marcel and Peer Scheepers, 2005, "Political versus Instrumental Euro-scepticism: Mapping Scepticism in European Countries and Regions," *European Union Politics*, 6(2): 223-242.

- Lubbers, Marcel, Peer Scheepers and Jaak Billet, 2000, "Multilevel Modeling of Vlaams Blok Voting: Individual and Contextual Characteristics of the Vlaams Blok Vote," *Acta Politica*, 35(4): 363-398.
- 町村敬志, 1999, 「グローバル化と都市——なぜイラン人はたまり場を作ったのか」奥田道大編『講座社会学 都市』東京大学出版会.
- 前田朗, 2010, 『ヘイト・クライム——憎悪犯罪が日本を滅ぼす』三一書房労働組合.
- , 2011, 「ヘイト・クライム法研究の現在——人種差別撤廃委員会第77会期情報の紹介」村井敏邦先生古稀祝賀論集『人権の刑事法学』日本評論社.
- , 2012, 「ヘイト・クライム法研究の射程——人種差別撤廃委員会第79会期情報の紹介」『龍谷大学矯正・保護総合センター研究年報』2号.
- 編, 2013, 『なぜ、いまヘイトスピーチなのか——差別、暴力、脅迫、迫害』三一書房.
- 前田雅英, 2003, 『日本の治安は再生できるか』筑摩書房.
- 前田至剛, 2004, 「現実から物語へ／物語から現実へ」阿部潔・難波功士編『メディア文化を読み解く技法——カルチュラル・スタディーズ・ジャパン』世界思想社.
- 前田哲男, 2007, 『自衛隊——変容のゆくえ』岩波書店.
- Mammone, Andrea, Emmanuel Godin and Brian Jenkins, 2013, "Introduction," Andrea Mammone, Emmanuel Godin and Brian Jenkins eds., *Varieties of Right-wing Extremism in Europe*, London: Routledge.
- Martinez Jr., Ramiro and Abel Valenzuela Jr. eds., 2006, *Immigration and Crime: Race, Ethnicity and Violence*, New York: New York University Press.
- Massey, Douglas S., Jorge Durand and Nolan J. Malone, 2002, *Beyond Smoke and Mirrors: Mexican Immigration in an Era of Economic Integration*, New York: Russell Sage Foundation.
- 松田良孝, 2013, 『与那国台湾往来記——「国境」に暮らす人々』南山舎.
- 松本邦彦, 2012, 「多文化共生論と歴史認識——『嫌韓流』の挑戦を考察する」『北東アジア地域研究』18号.
- 松本康, 1985, 「相対的剥奪と社会運動——相対的剥奪論の再生は可能か」『思想』737号.
- 松谷満, 2011, 「ポピュリズムの台頭とその源泉」『世界』815号.
- , 2012, 「誰が橋下を支持しているのか」『世界』832号.
- ・高木竜輔・丸山真央・村瀬博志・樋口直人, 2005, 「『受け入れ』と『統合』をめぐる社会意識——何が外国人問題への態度を規定するのか」『アジア太平洋レビュー』2号.
- ・高木竜輔・丸山真央・樋口直人, 2006, 「日本版極右はいかにして受容されるのか——石原慎太郎・東京都知事の支持基盤をめぐって」『アジア太平洋レビュー』3号.
- 松浦雄介, 2005, 「フランスにおける国民戦線の台頭と社会システムの変容」『熊本大学文学部論叢』85号.
- Maxwell, Rahsaan, 2010 "Political Participation in France among Non-European-Origin Migrants: Segregation or Integration?" *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 36: 425-443.
- Mayer, Nonna and Pascal Perrineau, 1992, "Why Do They Vote for Le Pen?" *European Journal of Political Research*, 22: 123-141.

- McAdam, Doug, 1982, *Political Process and the Development of Black Insurgency, 1930-1970*, Chicago: University of Chicago Press.
- , 1986, "Recruitment to High-Risk Activism: The Case of Freedom Summer," *American Journal of Sociology*, 92(1): 64-90.
- , 1988a, "Micromobilization Contexts and Recruitment to Activism," *International Social Movement Research*, 1: 125-154.
- , 1988b, *Freedom Summer*; New York: Oxford University Press.
- , 1994, "Culture and Social Movements," Enrique Laraña, Hank Johnston and Joseph R. Gusfield eds., *New Social Movements: From Ideology to Identity*, Philadelphia: Temple University Press.
- , 1996, "Conceptual Origins, Problems, Future Directions," Doug McAdam, John D. McCarthy and Mayer N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge: Cambridge University Press.
- and Roberto M. Fernandez, 1990, "Microstructural Bases of Recruitment to Social Movements," *Research in Social Movements, Conflict and Change*, 12: 1-33.
- and Ronnelle Paulsen, 1993, "Specifying the Relationship between Social Ties and Activism," *American Journal of Sociology*, 99(3): 640-667.
- , John D. McCarthy and Mayer N. Zald, 1996, "Introduction: Opportunities, Mobilizing Structures, and Framing Processes," Doug McAdam, John D. McCarthy and Mayer N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge: Cambridge University Press.
- McCammon, Holly J., Courtney Sanders Muse, Harmony D. Newman and Teresa M. Terrell, 2007, "Movement Framing and Discursive Opportunity Structures: The Political Success of the U.S. Women's Jury Movements," *American Sociological Review*, 72: 725-749.
- McCarthy, John D. and Mayer N. Zald, 1987, *Social Movements in an Organizational Society*, Piscataway: Transaction.
- McCombs, Maxwell and Jian-Hua Zhu, 1995, "Capacity, Diversity, and Volatility of the Public Agenda: Trends from 1954 to 1994," *Public Opinion Quarterly*, 59: 495-525.
- McDonald, Maryon, 2006, "New Nationalisms in the EU: Occupying the Available Space," Andre Gingrich and Marcus Banks eds., *Neo-Nationalism in Europe and Beyond: Perspectives from Social Anthropology*, New York: Berghahn Books.
- McGann, Anthony J. and Herbert Kitschelt, 2005, "The Radical Right in the Alps: Evolution of Support for the Swiss SVP and Austrian FPÖ," *Party Politics*, 11(2): 147-171.
- McMurray, David A., 2001, *In & out of Morocco: Smuggling and Migration in a Frontier Boomtown*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- McSweeney, Bill, 1996, "Identity and Security: Buzan and the Copenhagen School," *Review of International Studies*, 22(1): 81-93.
- McVeigh, Rory, 2009, *The Rise of the Ku Klux Klan: Right-Wing Movements and National Politics*, Minneapolis: University of Minnesota Press.

- , Daniel J. Myers, and David Sikkink, 2004, “Corn, Klansmen, and Coolidge: Structure and Framing in Social Movements,” *Social Forces*, 83: 653-90.
- Meguid, Bonnie, 2005, “Competition between Unequals: The Role of Mainstream Party Strategy in Niche Party Success,” *American Political Science Review*, 99(3): 347-358.
- Merkel, Peter, 2004, “Why Are They So Strong Now? Comparative Reflections on the Revival of the Radical Right in Europe,” Peter Merkel and Leonard Weingberg eds., *The Revival of Right-Wing Extremism in the Nineties*, London: Frank Cass.
- Michael, George, 2003, *Confronting Right-Wing Extremism and Terrorism in the USA*, London: Routledge.
- Mileti, Francesca Pogliana and Fabrice Plomb, 2007, “Addressing the Link between Socio-Economic Change and Right-Wing Populism and Extremism: A Critical Review of the Literature,” Jörg Flecker ed., *Changing Working Life and the Appeal of the Extreme Right*, Aldershot: Ashgate.
- Miller-Idriss, Cynthia, 2009, *Blood and Culture: Youth, Right-Wing Extremism, and National Belonging in Contemporary Germany*, Durham: Duke University Press.
- Minkenberg, Michael, 2001, “The Radical Right in Public Office: Agenda-Setting and Policy Effects,” *West European Politics*, 24(4): 1-21.
- , 2002, “The New Radical Right in the Political Process: Interaction Effects in France and Germany.” Martin Schain, Aristide Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in Western Europe*, New York: Palgrave Macmillan.
- , 2009, “Anti-Immigrant Politics in Europe: The Radical Right, Xenophobic Tendencies, and Their Political Environment,” Jennifer L. Hochschild and John H. Mollenkopf eds., *Bringing Outsiders in: Transatlantic Perspectives on Immigrant Political Incorporation*, Ithaca: Cornell University Press.
- , 2013, “From Pariah to Policy-maker? The Radical Right in Europe, West and East: Between Margin and Mainstream,” *Journal of Contemporary European Studies*, 21(1): 5-24.
- 民族差別と闘う関東交流集会実行委員会編, 1985, 『指紋押捺拒否者への「脅迫状」を読む』明石書店。
- 民族差別と闘う連絡協議会, 1985, 『第11回民闘連全国交流集会資料集』。
- 編, 1989, 『在日韓国・朝鮮人の補償・人権法』新幹社。
- 三荻祥, 2012, 『脅かされる国境の島・与那国——尖閣だけが危機ではない!』明成社。
- 三品純, 2010, 「外国人参政権に潜む日本支配のシナリオ——政治に影響力を持つ在日韓国人と左翼の不気味な動き」『正論』455号。
- 宮島喬編, 2000, 『外国人市民と政治参加』有信堂。
- ・梶田孝道編, 1996, 『外国人労働者から市民へ』有斐閣。
- 宮本太郎, 2013, 『社会的包摂の政治学——自立と承認をめぐる政治対抗』ミネルヴァ書房。
- 宮内洋, 2005, 『体験と経験のフィールドワーク』北大路書房。
- 溝口雄三, 2005, 「反日デモ——どういう歴史の目で見るか」『現代思想』33巻6号。
- 水野直樹, 1996, 「在日朝鮮人台湾人参政権『停止』条項の成立——在日朝鮮人参政権問題の歴史的検討(1)」『世界人権問題研究センター研究紀要』1号。

- , 1997, 「在日朝鮮人台湾人参政権『停止』条項の成立——在日朝鮮人参政権問題の歴史的検討(2)」『世界人権問題研究センター研究紀要』2号.
- 百地章, 2010, 『改訂版 外国人の参政権問題 Q&A——地方選挙権付与も憲法違反』明成社.
- Morales, Laura and Marco Giugni eds., 2011, *Social Capital, Political Participation and Migration in Europe: Making Multicultural Democracy Work?* London: Palgrave Macmillan.
- 森千香子, 2010, 「反レイシズムはレイシズムを乗り越えられるのか? ——フランス反レイシズムの現在と課題」『Migrant's ネット』127号.
- , 2014, 「反ヘイトスピーチ法はレイシズムを抑えられるのか? ——フランスのイスラムフォビアの事例から」『日本の科学者』49巻12号.
- 森鷹久, 2013a, 「不毛な争い 在特会 vs しばき隊」『WiLL』103号.
- , 2013b, 「新大久保『反韓デモ』レポート」『ジャパニズム』12号.
- 森内航平, 2012, 「右翼運動の展望」『治安フォーラム』18巻4号.
- 守安敏司, 2012, 「差別街宣は許さない! ——水平社博物館が『在特会』幹部を提訴」『部落解放』661号.
- 師岡康子, 2012, 「人種・民族差別禁止法の意義——日本における制定に向けて」『法学セミナー』57巻3号.
- , 2013a, 「国際人権基準からみたヘイト・スピーチ規制問題」『世界』848号.
- , 2013b, 『ヘイト・スピーチとは何か』岩波書店.
- , 2014, 「包括的人種差別禁止法制定に向けて——国連人種差別撤廃委員会勧告の意義」『世界』862号.
- モーリス=スズキ、テッサ, 2005, 辛島理人訳「占領軍への有害な行動——敗戦後日本における移民管理と在日朝鮮人」岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編『継続する植民地主義——ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社.
- Morris-Suzuki, Tessa, 2007, *Exodus to North Korea: Shadows from Japan's Cold War*, Rowman & Littlefield. (=2007, 田代泰子訳『北朝鮮へのエクソダス——「帰国事業」の影をたどる』朝日新聞社.)
- , 2010, *Borderline Japan: Foreigners and Frontier Controls in the Postwar Era*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Moulier-Boutang, Yann, 1985, "Resistance to the Political Representation of Alien Populations: The European Paradox," *International Migration Review*, 19: 485-492.
- Mudde, Cas, 2000, *The Ideology of the Extreme Right*, Manchester: Manchester University Press.
- , 2007, *Populist Radical Right Parties in Europe*, Cambridge: Cambridge University Press.
- , 2010, "The Populist Radical Right: A Pathological Normalcy," *West European Politics*, 33(6): 1167-1186.
- , 2013, "Three Decades of Populist Radical Right Parties in Western Europe: So what?" *European Journal of Political Research*, 52: 1-19.
- ed., 2014, *Youth and the Extreme Right*, New York: IDEBATE Press.
- Mughan, Anthony and Pamela Paxton, 2006, "Anti-Immigrant Sentiment, Policy Preferences and Populist Party Voting in Australia," *British Journal of Political Science*, 36: 341-358.
- 文京洙, 2007, 『在日朝鮮人問題の起源』クレイン.



- Munro, Daniel, 2008, "Integration Through Participation: Non-Citizen Resident Voting Rights in an Era of Globalization," *Journal of International Migration and Integration*, 9: 63-80.
- 村井淳志, 1997a, 『歴史認識と授業改革』教育史料出版会.
- , 1997b, 「自由主義史観研究会の教師たち——現場教師への聞き取り調査から」『世界』633号.
- 村上力, 2009, 「『行動する保守』とは何か——街頭で活発化している『嫌韓』的市民運動の実態」『インパクション』171号.
- , 2010, 「日本ナショナリズムの現在——現在進行形の植民地主義」『インパクション』174号.
- 村上和弘, 2007, 「インターネットの中のツシマ——ある『嫌韓』現象をめぐって」石田佐恵子・木村幹・山中千恵編『ポスト韓流のメディア社会学』ミネルヴァ書房.
- 村田春樹, 2015, 『日本乗っ取りはまず地方から！——恐るべき自治基本条例』青林堂.
- Mushaben, Joyce Marie, 2008, *The Changing Face of Citizenship: Integration and Mobilization among Ethnic Minorities in Germany*, New York: Berghahn Books.
- 長尾一紘, 2000, 『外国人の参政権』世界思想社.
- , 2010, 「外国人参政権は『明らかに違憲』」『正論』458号.
- , 2011, 『日本国憲法 全訂第4版』世界思想社.
- 永吉希久子, 2012, 「日本人の排外意識に対する分断労働市場の影響」『社会学評論』63巻1号.
- 中川八洋, 1996, 「『国籍条項』撤廃という『反日』運動——”非国民”たちの公務員権・参政権は『無血侵略』」『正論』292号.
- 仲原良二, 1993, 『在日韓国・朝鮮人の就職差別と国籍条項』明石書店.
- 中村一成, 2013a, 「ヘイトクライムに抗して——ルポ・京都朝鮮第一初級学校襲撃事件」『世界』845号.
- , 2013b, 「ヘイトクライムに抗して (2)」『世界』846号.
- , 2013c, 「ヘイトクライムに抗して (3)」『世界』847号.
- , 2014, 『ルポ京都朝鮮学校襲撃事件——〈ヘイトクライム〉に抗して』岩波書店.
- 中西新太郎, 2006, 「ポップカルチャーと政治 開花する『Jナショナリズム』——『嫌韓流』をテキストに」『世界』749号.
- 中西輝政, 2007, 「『9・17の誓い』と日本の覚醒」『諸君!』39巻10号.
- 仲新城誠, 2013, 『国境の島の「反日」教科書キャンペーン——沖縄と八重山の無法イデオロギー』産経新聞出版.
- 中山義隆, 2013, 『中国が耳をふさぐ尖閣諸島の不都合な真実——石垣市長が語る日本外交の在るべき姿』ワニブックス.
- 中澤秀雄・成元哲・樋口直人・角一典・水澤弘光, 1998, 「環境運動における抗議サイクル形成の論理——構造的ストレインと政治的機会構造の比較分析 (1968-82)」『環境社会学研究』4号.
- 直井道子, 1972a, 「政治的社会化過程における集団の役割」『社会学評論』22巻3号.
- , 1972b, 「政治的社会化過程における集団の役割(2)」『社会学評論』23巻1号.
- Nepstad, Sharon Erickson, 1997, "The Process of Cognitive Liberation: Cultural Synapses, Links,

- and Frame Contradictions in the U.S.-Central America Peace Movement,” *Sociological Inquiry*, 67(4): 470-487.
- Nevitt, Neil et al., 1998, “The Populist Right in Canada: The Rise of the Reform Party of Canada,” Hans-Georg Betz and Stefan Immerfall eds., *The New Politics of the Right: Neo-Populist Parties and Movements in Established Democracies*, New York: St. Martin’s Press.
- 日本女性学会ジェンダー研究会編, 2006, 『男女共同参画／ジェンダーフリー・バッシング——バックラッシュへの徹底反論』 明石書店.
- 西村幸祐編, 2010, 『撃論ムック 外国人参政権の真実』 オークラ出版.
- ・安田浩一, 2013, 「『ネトウヨ亡国論』に異議あり！」『WiLL』 98 号.
- 西野瑠美子, 1999, 『エルクラノはなぜ殺されたのか』 明石書店.
- 西尾幹二, 2010, 「外国人参政権——オランダ、ドイツの惨状」『WiLL』 64 号.
- 丹羽雅雄, 1995, 「在日韓国・朝鮮人の地方参政権」『青丘』 22 号.
- , 2011, 「特別永住者には、国政選挙権も保障すべき」『部落解放』 644 号.
- Noakes, John A. and Hank Johnston, 2005, “Frames of Protest: A Road Map to a Perspective,” Hank Johnston and John A. Noakes eds., *Frames of Protest: Social Movements and the Framing Perspective*, Lanham: Rowman & Littlefield.
- Noiehoie, 2013, 『保守の本分』 扶桑社.
- 野間易通, 2013, 「社会の変革を妨げるものは何か？——反レイシズム運動の“出る杭を打つ”もの」磯部涼編『踊ってはいけない国で、踊り続けるために——風営法問題と社会の変え方』 河出書房新社.
- , 2013, 『「在日特権」の虚構——ネット空間が生み出したヘイト・スピーチ』 河出書房新社.
- のりこえねっと編, 2014, 『ヘイトスピーチってなに？ レイシズムってどんなこと？』 七つ森書館.
- Norris, Pippa, 2005, *Radical Right: Voters and Parties in the Electoral Market*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Oberschall, Anthony, 1972, *Social Conflict and Social Movements*, New Jersey: Prentice Hall.
- , 1993, *Social Movements: Ideologies, Interests, and Identities*, New Brunswick: Transaction.
- Oegema, Dirk and Bert Klandermans, 1994, “Why Social Movement Sympathizers Don't Participate: Erosion and Nonconversion of Support,” *American Sociological Review*, 59(5): 703-22.
- Oesch, Daniel, 2008, “Explaining Workers' Support for Right-Wing Populist Parties in Western Europe: Evidence from Austria, Belgium, France, Norway, and Switzerland,” *International Political Science Review*, 29: 349-373.
- , 2012, “The Class Basis of the Cleavage between the New Left and the Radical Right: An Analysis for Austria, Denmark, Norway and Switzerland,” Jens Rydgren ed., *Class Politics and the Radical Right*, London: Routledge.
- 小熊英二, 1995, 『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』 新曜社.
- , 1998, 『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』 新曜社.

- , 2014, 「国際環境とナショナリズム——『フォーマット化』と疑似冷戦体制」小  
熊英二編『平成史【増補新版】』河出書房新社.
- ・上野陽子, 2003, 『<癒し>のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』慶  
應義塾大学出版会.
- ・菅原琢・韓東賢, 2013, 「変化の手前にある現在——2013年の時代経験」『現代  
思想』41巻17号.
- Oh, Ingyu, 2012, “From Nationalistic Diaspora to Transnational Diaspora: The Evolution of Identity  
Crisis among the Korean-Japanese,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 38(4): 651-669.
- 岡和田晃・マーク・ウィンチェスター編, 2015, 『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新  
社.
- 岡本雅享, 2013, 「金泰希バッシングとロート製薬攻撃——コリアノフォビアに基づく排韓  
運動」外国人権法連絡会編『外国人・民族的マイノリティ人権白書 2013』外国人  
人権法連絡会.
- 岡村忠夫, 1971, 「現代日本における政治的社会化——政治意識の培養と政治家像」『年報  
政治学 現代日本における政治態度の形成と構造』岩波書店.
- 沖縄タイムス「尖閣」取材班編, 2014, 『波よ鎮まれ——尖閣への視座』旬報社.
- 奥貫妃文, 2011, 「労働法および社会保障法からみる移住者の貧困」移住連貧困プロジェ  
クト編『日本で暮らす移住者の貧困』現代人文社.
- Oliver, Pamela E. and Gerald Marwell, 1992, “Mobilizing Technologies for Collective Action,”  
Aldon D. Morris and Carol M. Mueller eds., *Frontiers in Social Movement Theory*, New Haven:  
Yale University Press.
- Olson, Mancur, 1965, *The Logic of Collective Action*, Harvard University Press. (=1996, 依田博・  
森脇俊雄訳『集合行為論』ミネルヴァ書房.)
- Olzak, Suzan, 1992, *The Dynamics of Ethnic Competition and Conflict*, Stanford: Stanford  
University Press.
- and Joane Nagel eds., 1986, *Competitive Ethnic Relations*, Orland: Academic Press.
- 大曲由起子・高谷幸・鍛冶致・稲葉奈々子・樋口直人, 2011a, 「在日外国人の仕事——2000  
年国勢調査データの分析から」『茨城大学地域総合研究所年報』44号.
- , 2011b, 「家族・ジェンダーからみる在日外国人——国勢調査データの分析から」  
『茨城大学地域総合研究所年報』44号.
- , 2011c, 「在学率と通学率から見る在日外国人青少年の教育——2000年国勢調査  
データの分析から」『アジア太平洋研究センター年報』7号.
- 大曲由起子・高谷幸・樋口直人・鍛冶致・稲葉奈々子, 2012, 「『移住者と貧困』をめぐる  
アドボカシー——移住連貧困プロジェクトの取り組みから」『多言語・多文化——実践  
と研究』4号.
- 大沼保昭, 1979a, 「在日朝鮮人の法的地位に関する一考察(1)」『法学協会雑誌』96巻3号.  
———, 1979b, 「在日朝鮮人の法的地位に関する一考察(2)」『法学協会雑誌』96巻5号.  
———, 1979c, 「在日朝鮮人の法的地位に関する一考察(3)」『法学協会雑誌』96巻8号.  
———, 1980a, 「在日朝鮮人の法的地位に関する一考察(4)」『法学協会雑誌』97巻2号.

- , 1980b, 「在日朝鮮人の法的地位に関する一考察(5)」『法学協会雑誌』97 卷 3 号.
- , 1980c, 「在日朝鮮人の法的地位に関する一考察(6)」『法学協会雑誌』97 卷 4 号.
- , 1993, 『新版 単一民族社会の神話を超えて』東信堂.
- Opp, Karl-Dieter, 1988, “Grievances and Participation in Social Movements,” *American Sociological Review*, 53: 853-864.
- and Wolfgang Roehl, 1990, “Repression, Micromobilization, and Political Protest,” *Social Forces*, 69(2): 521-547.
- , Peter Voss and Christiane Gern, 1995, *Origins of a Spontaneous Revolution: East Germany, 1989*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- 大澤真幸, 2008, 『不可能性の時代』岩波書店.
- , 2011, 『近代日本のナショナリズム』講談社.
- 大田修ほか, 2006, 『「マンガ嫌韓流」のここがデタラメ』コモンズ.
- 大嶽秀夫, 1996, 『戦後日本のイデオロギー対立』三一書房.
- 大月隆寛, 2005, 『嫌韓流』は『ゴー宣』よりスゴイんです』『諸君!』37 卷 10 号.
- 小沢有作, 1974, 「民族差別の教育を告発するもの——朝鮮高校生暴行事件における政治と教育」佐藤勝巳編『在日朝鮮人の諸問題』同成社.
- Pain, Rachel and Susan J. Smith eds., 2008, *Fear: Critical Geopolitics and Everyday Life*, Aldershot: Ashgate.
- Pak, Katheryne Tagmayer, 2000a, “Living in Harmony: Prospects for Cooperative Local Responses to Foreign Migrants,” S. A. Smith ed., *Local Voices, National Issues: The Impact of Local Initiative in Japanese Policy-Making*, Ann Arbor: Center for Japanese Studies, the University of Michigan.
- , 2000b, “Foreigners Are Local Citizens too: Local Governments Respond to International Migration in Japan,” M. Douglass and G. S. Roberts eds., *Japan and Global Migration: Foreign Workers and the Advent of a Multicultural Society*, London: Routledge.
- 朴一, 1999, 『<在日>という生き方——差異と平等のジレンマ』講談社.
- , 2005, 「在日コリアンの経済事情」藤原書店編集部編『歴史のなかの「在日」』藤原書店.
- , 2011, 『「内への開国」を期待する』『部落解放』644 号.
- 朴慶植, 1989, 『解放後 在日朝鮮人運動史』三一書房.
- Pauwels, Teun, 2014, *Populism in Western Europe: Comparing Belgium, Germany and the Netherlands*, London: Routledge.
- Pedroza, Luicy, forthcoming, “The Democratic Potential of Enfranchising Resident Migrants,” *International Migration* (doi: 10.1111/imig.12162).
- Pelinka, Anton, 2013, “Right-wing Populism: Concept and Typology,” Ruth Wodak, Majid KhosraviNik and Brigitte Mral eds., *Right-wing Populism in Europe: Politics and Discourse*, London: Bloomsbury.
- Perlmutter, Ted, 2002, “The Politics of Restriction: The Effect of Xenophobic Parties on Italian Immigration Policy and German Asylum Policy,” Martin Schain, Aristide Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in*

- Western Europe*, New York: Palgrave Macmillan.
- ペリノー、パスカル, 2005, 「ヨーロッパにおける極右とポピュリズム」『ノモス』17号.
- Peterson, Ruth, Lauren J. Krivo and John Hagan eds., 2006, *The Many Colors of Crime: Inequalities of Race, Ethnicity, and Crime in America*, New York: New York University Press.
- Quassoli, Fabio, 2001, “Migrant as Criminal: The Judicial Treatment of Migrant Criminality,” Christian Joppke and Virginia Guiraudon eds., *Controlling a New Migration World*, London: Routledge.
- , 2004, “Making the Neighbourhood Safer: Social Alarm, Police Practices and Immigrant Exclusion in Italy,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 30(6): 1163-81.
- Quintelier, Ellen, 2009, “The Political Participation of Immigrant Youth in Belgium,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 35: 919-937.
- Rajaram, Prem Kumar and Carl Grundy-Warr eds., 2007, *Borderscapes: Hidden Geographies and Politics at Territory’s Edge*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Rainie, Lee and Barry Wellman, 2012, *Networked: The New Social Operating System*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Rath, Jan, 1990, “Voting Rights,” Zig Layton-Henry ed., *The Political Rights of Migrant Workers in Western Europe*, London: Sage.
- Ray, Beverley and George Marsh E., 2001, “Recruitment by Extremist Groups on the Internet,” *First Monday*, 6(2): 1-26.
- Reid, Edna and Hsinchen Chen, 2007, “Internet-Savvy U.S. and Middle Eastern Extremist Groups,” *Mobilization*, 12(2): 177-192.
- Riedlsperger, Max, 1998, “The Freedom Party of Austria: From Protest to Radical Right Populism,” Hans-Georg Betz and Stefan Immerfall eds., *The New Politics of the Right: Neo-Populist Parties and Movements in Established Democracies*, New York: St. Martin’s Press.
- 力久昌幸, 2006, 「帝国の変容と『外国人』参政権——イギリスにおける市民権変遷と参政権の関連に注目して」河原祐馬・植村和秀編『外国人参政権問題の国際比較』昭和堂.
- , 2009, 「ヨーロッパにおける極右政党——イギリス国民党の台頭と現代化プロジェクトに対する一考察」『同志社大学ワールド・ワイド・ビジネス・レビュー』10巻.
- Rink, Nathalie, Karen Phalet and Marc Swyngedouw, 2009, “The Effect of Immigrant Population Size, Unemployment and Individual Characteristics on Voting for Vlaams Blok in Flanders 1991-1999,” *European Sociological Review*, 25(4): 411-424.
- Rippl, Susanne and Christian Seipel, 1999, “Gender Differences in Right Wing Extremism: Intergroup Validity of a Second-Order Construct,” *Social Psychology Quarterly*, 62(4): 381-393.
- 廬琦雲, 2011, 「在日民団の本国指向路線と日韓交渉」李鍾元・木宮正史・浅野豊美編『歴史としての日韓国交正常化 II 脱植民地化編』法政大学出版社.
- Robinson, Vaughan, 1998, “Security, Migration, and Refugees,” Nana Poku and David T. Graham eds., *Redefining Security: Population Movements and National Security*, Westport: Praeger.
- Rostbøll, Christian F., 2010, “The Use and Abuse of ‘Universal Values’ in the Danish Cartoon Controversy,” *European Political Science Review*, 2(3): 401-422.

- Rubio-Marín, R., 2000, *Immigration as a Democratic Challenge: Citizenship and Inclusion in Germany and the United States*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Rucht, Dieter and Thomas Ohlemacher, 1992, "Protest Event Data: Collection, Uses and Perspectives," Mario Diani and Ron Eyerman eds., *Studying Collective Action*, London: Sage.
- Rucht, Dieter, Ruud Koopmans and Friedlich Neidhardt eds., 1998, *Acts of Dissent: New Developments in the Study of Protest*, Berlin: Sigma.
- Ryang, Sonia, 1997, *North Koreans in Japan: Language, Ideology, and Identity*, Boulder: Westview Press.
- , 2000, "The North Korean Homeland of Koreans in Japan," Sonia Ryang ed., *Koreans in Japan: Critical Voices from the Margin*, New York: Routledge.
- and John Lie, 2009, *Diaspora without Homeland: Being Koreans in Japan*, Berkeley: University of California Press.
- Rydgren, Jens, 2003, "Meso-Level Reasons for Racism and Xenophobia: Some Converging and Diverging Effects of Radical Right Populism in France and Sweden," *European Journal of Social Theory*, 6(1): 45-68.
- , 2006, *From Tax Populism to Ethnic Nationalism: Radical Right-wing Populism in Sweden*, New York: Berghahn Books.
- , 2007, "The Sociology of the Radical Right," *Annual Review of Sociology*, 33: 241-62.
- , 2008, "Immigration Sceptics, Xenophobes or Racists? Radical Right-wing Voting in Six West European Countries," *European Journal of Political Research*, 47: 737-765.
- , 2009, "Social Isolation? Social Capital and Radical Right-wing Voting in Western Europe," *Journal of Civil Society*, 5(2): 129-150.
- 柳光守, 1996, 「同化につながる参政権に反対する」『同胞들의人権と生活』3号.
- 佐道明広, 2012, 「南西諸島における自衛隊配備問題」『別冊 環』19号.
- , 2014, 『沖縄現代政治史——「自立」をめぐる攻防』吉田書店.
- Said, Edward W., 1993, *Culture and Imperialism*, Vintage. (=1998, 大橋洋一訳『文化と帝国主義 1』、2001, 大橋洋一訳『文化と帝国主義 2』みすず書房.)
- Sakaki, Alessandra, 2013, *Japan and Germany as Regional Actors*, London: Routledge.
- 坂本治也, 2012, 「大阪ダブル選挙の分析——有権者の選択と大阪維新の会支持基盤の解明」『関西大学法学論集』62巻3号.
- 坂元ひろ子, 2005, 「中国の『反日』とどう向き合うか——アジアの練習のために」『現代思想』33巻6号.
- 坂中英徳, 1999, 『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』日本加除出版.
- , 2006, 「在日は『朝鮮系日本国民』への道を」在日コリアンの日本国籍取得権確立協議会編『在日コリアンに権利としての日本国籍を』明石書店.
- , 2015, 「移民国家で世界の頂点をめざす」『WILL』121号.
- 桜井誠, 2006, 『嫌韓流実践ハンドブック——反日妄言撃退マニュアル』晋遊舎.
- , 2010, 『日本侵蝕——日本人の「敵」が企む亡国のシナリオ』晋遊舎.
- , 2013, 『在特会とは「在日特権を許さない市民の会」の略称です!』青林堂.
- , 2014, 『大嫌韓時代』青林堂.

- 櫻井よしこ, 2000, 「野中さん、国を売る気ですか！」『諸君!』32 卷 11 号.
- Salter, Lee, 2003, “Democracy, New Social Movements, and the Internet: A Habermasian Analysis,” Martha McCaughey and Michael D. Ayers eds., *Cyberactivism: Online Activism in Theory and Practice*, London: Routledge.
- Samuels, Richard J., 2007, *Securing Japan: Tokyo’s Grand Strategy and the Future of East Asia*, Ithaca: Cornell University Press.
- 佐波優子, 2013, 『女子と愛国』祥伝社.
- 佐藤令, 2008, 「外国人参政権をめぐる論点」『人口減少社会の外国人問題』国立国会図書館調査資料.
- 佐藤大介, 2013, 「ヘイトスピーチの街で」『G2』14 号.
- 佐藤圭, 2013, 「差別の実態を浮かび上がらせ差別を乗り越えていく」『Journalism』282 号.
- 佐藤健二, 1985, 「社会運動研究における『大衆運動』モデル再検討の射程」『思想』737 号.
- 佐藤成基, 2008, 『ナショナル・アイデンティティと領土——戦後ドイツの東方国境をめぐる論争』新曜社.
- Schain, Martin A., 2002, “The Impact of the French National Front on the French Political System,” Martin Schain, Aristide Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in Western Europe*, New York: Palgrave Macmillan.
- , 2006, “The Extreme-right and Immigration Policy-Making: Measuring Direct and Indirect Effects,” *West European Politics*, 29(2): 270-289.
- , Aristide Zolberg and Patrick Hossay, 2002, “The Development of Radical Right Parties in Western Europe,” Martin Schain, Aristide Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in Western Europe*, London: Palgrave.
- Schgal, Meera, 2007, “Manufacturing a Feminized Siege Mentality: Hindu Nationalist Paramilitary Camps for Women in India,” *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 165-183.
- Schiebel, Martina, 2000, “Extreme Right Attitudes in the Biographies of West German Youth,” Prue Chamberlayne, Joanna Bornat and Tom Wengraf eds., *The Turn to Biographical Methods in Social Science: Comparative issues and Examples*, London: Routledge.
- Schneider, Silke L., 2008, “Anti-Immigrant Attitudes in Europe: Outgroup Size and Perceived Ethnic Threat,” *European Sociological Review*, 24(1): 53-67.
- Sejersen, Tanja Brøndsted, 2008, “‘I Vow to Thee My Countries’: The Expansion of Dual Citizenship in the 21st Century,” *International Migration Review*, 42(3): 523-549.
- 昔農英明, 2014, 『「移民国家ドイツ」の難民庇護政策』慶應義塾大学出版会.
- Selznick, Philip, 1970, “Institutional Vulnerability in Mass Society,” Joseph R. Gusfield ed., *Protest, Reform, and Revolt: A Reader in Social Movements*, New York: John Wiley and Sons.
- Semyonov, Moshe, Rebeca Raijman, Anat Yom-Tov, 2002, “Labor Market Competition, Perceived Threat, and Endorsement of Economic Discrimination against Foreign Workers in Israel,” *Social Problems*, 49(3): 416-431.
- Semyonov, Moshe, Rebeca Raijman and Anastasia Gorodzeisky, 2006, “The Rise of Anti-foreigner

- Sentiment in European Societies, 1988-2000,” *American Sociological Review*, 71: 426-449.
- 瀬戸弘幸, 2000, 『外国人犯罪』 セントラル出版.
- , 2007, 『ネットが変える日本の政治』 岩崎企画.
- 社会問題研究会編, 1976, 『右翼・民族派事典』 国書刊行会.
- Sharp, Joanne P., 2000, *Condensing the Cold War: Reader's Digest and American Identity*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- 清水謙, 2013, 「スウェーデンにおける『移民の安全保障化』——非伝統的安全保障における脅威認識形成」『国際政治』 172 号.
- 申英子・熊野勝之, 2007, 『闇から光へ——同化政策と闘った指紋押捺拒否裁判』 社会評論社.
- 塩原勉編, 1989, 『資源動員と組織戦略』 新曜社.
- 白井聡, 2013, 『永続敗戦論——戦後日本の核心』 大田出版.
- 東海林智, 2013, 『15 歳からの労働組合入門』 毎日新聞社.
- Shorter, Edward and Charles Tilly, 1974, *Strikes in France 1830-1968*, New York: Cambridge University Press.
- Simon, Rita J. and Keri W. Sikich, 2007, “Public Attitudes toward Immigrants and Immigration Policies across Seven Nations,” *International Migration Review*, 41(4): 956-962.
- Skenderovic, Damir, 2007, “Immigration and the Radical Right in Switzerland: Ideology, Discourse and Opportunities,” *Patterns of Prejudice*, 41(2): 155-176.
- Smelser, Neil J., 1963, *Theory of Collective Behavior*, MacMillan. (= 1973, 会田彰・木原孝訳 『集合行動の理論』 誠信書房.)
- Smith, David J., 2002, “Framing the National Question in Central and Eastern Europe: A Quadratic Nexus?” *Global Review of Ethnopolitics*, 2(1): 3-16.
- Snow, David, 2000, “Clarifying the Relationship between Framing and Ideology,” *Mobilization*, 5(1): 55-60.
- , Louis A. Zurcher, Jr., Sheldon Ekland-Olson, 1980, “Social Networks and Social Movements: A Microstructural Approach to Differential Recruitment,” *American Sociological Review*, 45: 787-801.
- et al., 1986, “Frame Alignment Processes, Micromobilization and Movement Participation,” *American Sociological Review*, 51:464-481.
- and Robert D. Benford, 1988, “Ideology, Frame Resonance, and Participant Mobilization,” *International Social Movement Research*, 1: 197-217.
- , 1992, “Master Frames and Cycles of Protest,” Aldon D. Morris and Carol M. Muller eds., *Frontiers in Social Movement Theory*, New Haven: Yale University Press.
- Snyder, David and Charles Tilly, 1972, “Hardship and Collective Violence in France, 1830 to 1960,” *American Sociological Review*, 37: 520-532.
- 徐京植, 1997, 『分断を生きる——「在日」を超えて』 影書房.
- 徐龍達, 1987, 「在日韓国・朝鮮人の人権擁護運動」徐龍達編『韓国・朝鮮人の現状と将来——「人権先進国・日本」への提言』 社会評論社.
- , 2010, 「アジア市民社会への道」『世界』 803 号.



- 編, 1992, 『定住外国人の地方参政権』 日本評論社.
- 編, 1995, 『共生社会への地方参政権』 日本評論社.
- 徐元喆, 2010, 「住民としての権利保障をめざす外国人の地方参政権」『都市問題』 101 巻 4 号.
- , 2011a 「原点に立ち返り、地域からの運動を——永住外国人の地方参政権を求める」『部落解放』 644 号.
- , 2011b, 「永住外国人の地方参政権を考える」『平和運動』 483 号.
- Söderberg, Marie, 2011a, “Introduction: Japan-South Korea Relations at a Crossroads,” Marie Söderberg ed., *Changing Power Relations in Northeast Asia: Implications for Relations between Japan and South Korea*, London: Routledge.
- , 2011b, “The Struggle for a Decent Life in Japan: the Korean Minority Adapting to Changing Legal and Political Conditions,” Marie Söderberg ed., *Changing Power Relations in Northeast Asia: Implications for Relations between Japan and South Korea*, London: Routledge.
- 双風舎編集部編, 2006, 『バックラッシュ！——なぜジェンダーフリーは叩かれたのか？』 双風舎.
- 総務省統計局, 2004, 『平成 12 年国勢調査報告第 8 巻 外国人に関する特別集計結果』.
- 宋基燦, 2012, 『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』 岩波書店.
- Song, Sarah, 2009, “Democracy and Noncitizen Voting Rights,” *Citizenship Studies*, 13(6): 607-620.
- Soysal, Yasemin N., 1994, *Limits of Citizenship: Migrants and Postnational Membership in Europe*, Chicago: University of Chicago Press.
- Spanje, Joost Van and Wouter Van der Brug, 2009, “Being Intolerant of the Intolerant: The Exclusion of Western European Anti-Immigration Parties and Its Consequences for Party Choice,” *Acta Politica*, 44: 353-384.
- Stalker, Glenn J. and Lesley J. Wood, 2013, “Reaching Beyond the Net: Political Circuits and Participation in Toronto's G20 Protests,” *Social Movement Studies*, 12(2): 178-198.
- Steinberg, Marc W., 1999, “The Talk and Back Talk of Collective Action: A Dialogic Analysis of Repertoires of Discourse among Nineteenth-Century English Cotton Spinners,” *American Journal of Sociology*, 105: 736-780.
- Stiftung, Bertelsmann ed., 2007, *Strategies for Combating Right-wing Extremism in Europe*, Gütersloh: Verlag Bertelsmann Stiftung.
- 菅原琢, 2009, 『世論の曲解——なぜ自民党は大敗したのか』 光文社.
- Sugimoto, Yoshio, 1981, *Popular Disturbance in Postwar Japan*, Hong Kong: Asian Research Service.
- 成元哲, 2001, 「モラル・プロテストとしての環境運動——ダイオキシン問題に係わるある農家の自己アイデンティティ」長谷川公一編『環境運動と環境政策のダイナミズム』有斐閣.
- ・角一典, 1998, 「政治的機会構造論の理論射程——運動をめぐる政治環境はどこまで操作化できるのか」『ソシオロギス』 22 号.
- Sunier, Thijl and Rob van Ginkel, 2006, “‘At Your Service!’ Reflections on the Rise of Neo-

- Nationalism in the Netherlands,” Andre Gingrich and Marcus Banks eds., *Neo-Nationalism in Europe and Beyond: Perspectives from Social Anthropology*, New York: Berghahn Books.
- Sunstein, Cass R., 2001, *Republic.com*, Princeton University Press. (=2003, 石川幸憲訳『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社.)
- 鈴木彩加, 2011, 「主婦たちのジェンダー・フリー・バックラッシュ——保守系雑誌記事の分析から」『ソシオロジ』171号.
- , 2013, 「草の根保守の男女共同参画反対運動——愛媛県におけるジェンダー・フリーをめぐる攻防」『年報人間科学』34号.
- 鈴木謙介, 2005, 「若者は『右傾化』しているか——左派の歪んだ写し姿」『世界』741号.
- 鈴木邦男, 2013, 「許せない民族差別と排外主義——朝鮮人・韓国人を排斥する偏狭なナショナリズムと対峙」『月刊 Times』37 卷 6 号.
- ・能川元一, 2010, 「いま排外主義の病理を撃つ——『在特会』よ、君らは卑怯者だ!」『週刊金曜日』823号.
- Swidler, Ann, 1986, “Culture in Action: Symbols and Strategies,” *American Sociological Review*, 51(2): 273-286.
- Swyngedouw, Marc, 1998, “The Extreme Right in Belgium: Of a Non-Existent Front National and an Omnipresent Vlaams Blok,” Hans-Georg Betz and Stefan Immerfall eds., *The New Politics of the Right: Neo-Populist Parties and Movements in Established Democracies*, New York: St. Martin’s Press.
- , 2001, “The Subjective Cognitive and Affective Map of Extreme Right Voters: Using Open-Ended Questions in Exit Polls,” *Electoral Studies*, 20: 217-241.
- Szymkowiak, Kenneth and Patricia G. Steinhoff, 1995, “Wrapping Up in Something Long: Intimidation and Violence by Right-Wing Groups in Postwar Japan,” Tore Bjørgo ed., *Terror from the Extreme Right*, London: Frank Cass.
- 橘尚彦, 2011, 「『在特会』による京都朝鮮学校襲撃事件の背景と民族差別・排外主義を許さない闘い」『月刊社会民主』674号.
- Taggart, Paul, 1996, *The New Populism and the New Politics: New Protest Parties in Sweden in a Comparative Perspective*, Basingstoke: Macmillan.
- 高原基彰, 2006, 『不安型ナショナリズムの時代』洋泉社.
- , 2008, 「日本的脱工業化と若年労働力の流動化——『官僚制』と『個人化』の同時進行という視点から」『社会学評論』56号3号.
- , 2010, 『現代日本の転機』日本放送出版協会.
- , 2011, 「『若者の右傾化』の背景と新しいナショナリズム論——戦後日本の左右対立と東アジア地政学の同時変容という視点から」小谷敏他編『若者の現在』日本図書センター.
- 高橋秀寿, 1993, 「今日におけるドイツ極右現象の歴史的位相」『思想』833号.
- , 1997, 『再帰化する近代——ドイツ現代史試論』国際書院.
- 高橋正巳, 1969, 「敗戦後の日本における朝鮮人の犯罪」岩井弘融ほか編『日本の犯罪学 1 原因 I』東京大学出版会.
- 高橋進・石田徹編, 2013, 『ポピュリズム時代のデモクラシー——ヨーロッパからの考察』

- 法律文化社.
- 高市早苗, 2010, 「外国人参政権付与は亡国への道」『正論』457号.
- ・百地章, 2000, 「立法府が犯す憲法違反の愚」『諸君!』32巻11号.
- 高崎宗司, 2002, 『「妄言」の原形——日本人の朝鮮観』木犀社.
- 高谷幸, 2007, 『外国人』に対する職務質問と治安政策」外国人入権法連絡会編『外国人・民族的マイノリティと人権白書』明石書店.
- ・大曲由起子・樋口直人・鍛冶致, 2013a, 「2005年国勢調査にみる在日外国人の仕事」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』35号.
- , 2013b, 「在日外国人女性の結婚・仕事・住居——2005年国勢調査データ分析」『文化共生学』12号.
- , 2013c, 「2005年国勢調査に見る外国人の教育——外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』35号.
- 高谷幸・大曲由起子・樋口直人・鍛冶致・稲葉奈々子, 2013a, 「1995年国勢調査にみる在日外国人の仕事」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』36号.
- , 2013b, 「1995年国勢調査にみる在日外国人女性の結婚と仕事・住居」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』36号.
- , 2013c, 「1990年国勢調査にみる外国人の教育——外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』36号.
- , 2014a, 「1990年国勢調査にみる在日外国人の仕事」『文化共生学研究』13号.
- , 2014b, 「1990年国勢調査にみる在日外国人女性の結婚と仕事・住居」『文化共生学研究』13号.
- , 2014c, 「1980年国勢調査にみる在日外国人の仕事」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37号.
- , 2014d, 「家族・ジェンダーからみる在日外国人——1980、85年国勢調査分析」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』37号.
- , 2015a, 「2010年国勢調査にみる在日外国人の仕事」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』38号.
- , 2015b, 「2010年国勢調査にみる外国人の教育——外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』38号.
- , 2015c, 「2010年国勢調査にみる在日外国人女性の結婚と仕事・住居」『文化共生学研究』15号.
- 瀧川裕英, 2002, 「国民と民族の切断——外国人の参政権問題を巡って」『大阪市立大学法學雑誌』49巻1号.
- 田久保忠衛編, 2001, 『「国家」を見失った日本人——外国人参政権問題の本質』小学館.
- 拓殖大学海外事情研究所, 2002, 『海外事情』50巻10号.
- 田中愛治, 1995, 『「55年体制」崩壊とシステムサポートの継続』『レヴアイアサン』17号.
- , 1996, 「国民意識における『55年体制』の変容と崩壊——政党編成崩壊とシステム・サポートの継続と変化」『年報政治学 55年体制の崩壊』岩波書店.
- 田中宏, 1990, 『虚妄の国際国家・日本——アジアの視点から』風媒社.

- , 1995, 『新版 在日外国人——法の壁、心の溝』岩波書店.
- , 2005, 「『在日』の権利闘争の50年」藤原書店編集部編『歴史のなかの「在日」』藤原書店.
- , 2010, 「疎外の社会か、共生の社会か」『世界』803号.
- ・板垣竜太編, 2007, 『日韓新たな始まりのための20章』岩波書店.
- 田中恭子, 2002, 『国家と移民——東南アジア華人世界の変容』名古屋大学出版会.
- 谷富夫編, 2002, 『民族関係における結合と分離——社会的メカニズムを解明する』ミネルヴァ書房.
- 丹野清人, 2013, 『国籍の境界を考える——日本人、日系人、在日外国人を隔てる法と社会の壁』吉田書店.
- Tarde, Gabriel, 1901, *L'Opinion et la Foule*, Alcan. (=1964, 稲葉三千男訳『世論と群集』未来社.)
- Tarrow, Sidney, 1989, *Democracy and Disorder: Protest and Politics in Italy, 1965-1975*, Oxford: Clarendon Press.
- , 1998, *Power in Movement: Social Movements and Contentious Politics*, Second ed., Cambridge University Press. (=2006, 大畑裕嗣監訳『社会運動の力——集合行為の比較社会学』彩流社.)
- Tateo, Luca, 2005, “The Italian Extreme Right On-line Network: An Exploratory Study Using an Integrated Social Network Analysis and Content Analysis Approach,” *Journal of Computer-Mediated Communication*, 10(2): article 10.
- 俵義文, 2001, 「『つくる会』運動とは何だったか」『世界』696号.
- 田崎拓真, 2010, 「『外国人追放』を絶叫して襲撃をくりかえす排外主義＝在特会を打ち砕こう——在特会との1年間の攻防をふり返って」『展望』7号.
- 鄭大均, 2010a, 「なぜ左派は外国人参政権を要求するのか——『加害者国家・日本』の生き証人として利用される在日コリアン」『祖国と青年』376号.
- , 2010b, 「民団の参政権運動は在日のためにならない」『正論』456号.
- , 2010c, 「外国人参政権に反対のこれだけの理由」『中央公論』125巻1号.
- , 2010d, 「韓国民団に問われていること」『中央公論』125巻4号.
- 定住外国人の地方参政権をめざす市民の会編, 1998, 『定住外国人の地方参政権』かもがわ出版.
- Teney, Celine et al., 2010, “Ethnic Voting in Brussels: Voting Patterns among Ethnic Minorities in Brussels (Belgium) during the 2006 Local Elections,” *Acta Politica*, 45: 273-297.
- Terriff, Terry et al., 1999, *Security Studies Today*, London: Routledge.
- Tillie, Jan, 2004, “Social Capital of Organisations and Their Members: Explaining the Political Integration of Immigrants in Amsterdam,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 30(3): 529-542.
- Tilly, Charles, 1978, *From Mobilization to Revolution*, Reading: Addison-Wesley. (=1984, 堀江湛監訳『政治変動論』芦書房.)
- Togeby, Lise, 1999, “Migrants at the Polls: An Analysis of Immigrant and Refugee Participation in Dutch Local Elections,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 25: 665-84.

- , 2004, “It Depends... How Organisational Participation Affects Political Participation and Social Trust Among Second-Generation Immigrants in Denmark,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 30(3): 509-528.
- 東京大学医学部保健社会学科研究室, 1992, 『上野の町とイラン人——摩擦と共生』.
- 外村大, 2013, 「戦後日本の保守政治勢力と在日朝鮮人——単一民族社会志向の定着まで」『日本學』36号.
- , 2014, 「日本人は『在日朝鮮人問題』をどう考えてきたか——現代日本における排外主義の歴史的前提」『日本學』38号.
- Tonry, Michael ed., 1997, *Ethnicity, Crime, and Immigration: Comparative and Cross-National Perspective*, Chicago: University of Chicago Press.
- 豊下楯彦, 2012, 『「尖閣問題」とは何か』岩波書店.
- Traugott, Mark ed., 1995, *Repertoires and Cycles of Collective Action*, Durham: Duke University Press.
- 坪郷實, 1993, 「戦後ドイツの極右主義と共和党」『思想』833号.
- 土倉莞爾, 2007, 「現代フランスの極右とポピュリズム」『関西大学法学論集』56巻5-6号.
- 津田大介・安田浩一・鈴木邦男, 2013, 「安倍政権のネット戦略とネット右翼の実態」『創』43巻7号.
- 津田大介・香山リカ・安田浩一ほか, 2013, 『安倍政権のネット戦略』創出版.
- 津田由美子, 2004, 「フレームスブロックとベルギー政党政治」『姫路法学』39-40号.
- 辻大介, 2008, 「インターネットにおける「右傾化」現象に関する実証研究 調査結果概要報告書」日本証券奨学財団研究調査助成金報告書.
- , 2009, 「調査データにみるネット右翼の実態」『Journalism』226号.
- , 2011, 「『ネット右翼』的なるものの虚実——調査データからの実証的検討」小谷敏他編『若者の現在』日本図書センター.
- 『創』編集部, 2010, 「右派陣営の新潮流『在特会』拡大の背景」『創』40巻10号.
- Tsoukala, Anastassia, 2005, “Looking at Migrants as Enemies,” Didier Bigo and Elspeth Guild eds., *Controlling Frontiers: Free Movement into and within Europe*, Aldershot: Ashgate.
- ツルネン・マルティ, 2011, 「帰化を条件にせず、地方参政権を付与すべき」『部落解放』644号.
- Tuathail, Gearóid Ó., 1996, *Critical Geopolitics*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Tung, Ko-Chi R., 1985, “Voting Rights for Alien Residents: Who Wants It?” *International Migration Review*, 19: 451-467.
- Turner, Ralph H. and Lewis M. Killian, 1972, *Collective Behavior*, Second ed., Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 上西秀明, 2002, 「ベルギーにおける三空間並存時代のアイデンティティと極右問題」『国際関係論集』2号.
- 右翼問題研究会, 2011, 「平成22年の右翼運動を振り返って」『治安フォーラム』17巻2号.
- van de Donk, Wim, Brian D. Loader, Paul G. Nixon and Dieter Rucht, 2004, “Introduction: Social Movements and ICTs,” Wim van de Donk, Brian D. Loader, Paul G. Nixon and Dieter Rucht

- eds., *Cyberprotest: New Media, Citizens and Social Movements*, London: Routledge.
- Van der Brug, Wouter, 2003, "How the LPF Fuelled Discontent: Empirical Test of Explanations of LPF Support," *Acta Politica*, 38: 89-106.
- and Meindert Fennema, 2003, "Protest or Mainstream? How the European Anti-Immigrant Parties Developed into Two Separate Groups by 1999," *European Journal of Political Research*, 42: 55–76.
- and Meindert Fennema, 2007, "What Causes People to Vote for a Radical Right Party? A Review of Recent Works," *International Journal of Public Opinion Research*, 19: 474-487.
- , Meindert Fennema and Jan Tillie, 2000, "Anti-Immigrant Parties in Europe: Ideological or Protest Vote?" *European Journal of Political Research*, 37: 77–102.
- , Meindert Fennema and Jan Tillie, 2005, "Why Some Anti-Immigrant Parties Fail and Others Succeed: A Two-Step Model of Aggregate Electoral Support," *Comparative Political Studies*, 38: 537-73.
- and Anthony Mughan, 2007, "Charisma, Leader Effects and Support for Right-Wing Populist Parties," *Party Politics*, 13(1): 29-51.
- Van Dyke, Nella and Sarah H. Soule, 2002, "Structural Social Change and the Mobilizing Effect of Threat: Explaining Levels of Patriot and Militia Organizing in the United States," *Social Problems*, 49(4): 497-520.
- Van Laer, Jeroen, 2010, "Activists Online and Offline: The Internet as an Information Channel for Protest Demonstrations," *Mobilization*, 15(3): 347-66.
- and Peter Van Aelst, 2010, "Internet and Social Movement Action Repertoires: Opportunities and Limitations," *Information, Communication & Society*, 13(8): 1146-71.
- van Londen, Marieke, Karen Phalet and Louk Hagendoorn, 2007, "Civic Engagement and Voter Participation among Turkish and Moroccan Minorities in Rotterdam," *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 33: 1201-26.
- Van Spanje, Joost and Wouter Van der Brug, 2007, "The Party as Pariah: The Exclusion of Anti-Immigration Parties and Its Effect on Their Ideological Positions," *West European Politics*, 30(5): 1022-1040.
- , 2009, "Being Intolerant of the Intolerant: The Exclusion of Western European Anti-immigration Parties and Its Consequences for Party Choice," *Acta Politica*, 44(4): 353-384.
- Varga, Mihai, 2008, "How Political Opportunities Strengthen the Far Right: Understanding the Rise in Far-Right Militancy in Russia," *Europe-Asia Studies*, 60(4): 561-79.
- Vasilevich, Hanna, 2013, "Majority as Minority: A Comparative Case of Autochthonous Slavs in Lithuania and Hungarians in Slovakia after the Second World War," Julien Danero Iglesias, Nenad Stojanović and Sharon Weinblum eds., *New Nation-States and National Minorities*, Colchester: ECPR Press.
- Veugelers, John W. P. and Roberto Chiarini, 2002, "The Far Right in France and Italy: Nativist Politics and Anti-Fascism," Martin Schain, Aristide Zolberg and Patrick Hossay eds., *Shadows over Europe: The Development and Impact of the Extreme Right in Western Europe*, London: Palgrave.

- Virchow, Fabian, 2007, "Performance, Emotion, and Ideology: On the Creation of 'Collectives of Emotion' and Worldview in the Contemporary German Far Right," *Journal of Contemporary Ethnography*, 36(2): 147-64.
- Vuori, Juha, 2011, "Religion Bites: Falungong, Securitization/desecuritization in the People's Republic of China," Thierry Balzacq ed., *Securitization Theory: How Security Problems Emerge and Dissolve*, London: Routledge.
- 和田春樹, 2004, 「『拉致された』国論を脱して——日朝国交正常化と東北アジアの平和」『世界』722号.
- Wæver, Ole, 1995, "Securitization and Desecuritization," Ronnie D. Lipschutz ed., *On Security*, New York: Columbia University Press.
- et al., 1993, *Identity, Migration and the New Security Agenda in Europe*, London: Pinter.
- 若宮啓文, 2006, 『和解とナショナリズム——新版・戦後保守のアジア観』朝日新聞社.
- 若槻泰雄, 1991, 『戦後引揚げの記録』時事通信社.
- Walsh, Edward, 1983, "Resource Mobilization and Citizen Protest in Communities around Three Mile Island," *Social Problems*, 29(1): 1-21.
- 王恩美, 2008, 『東アジア現代史のなかの韓国華僑——冷戦体制と「祖国」意識』三元社.
- 渡戸一郎編, 1995, 『自治体政策の展開とNGO』明石書店.
- Waters, Tony, 1999, *Crime & Immigrant Youth*, Thousand Oaks: Sage.
- Waters, William, 2010, "Migration and Security," J. Peter Burgess ed., *The Routledge Handbook of New Security Studies*, London: Routledge.
- Weatherby, Georgie Ann and Brian Scoggins, 2005, "A Content Analysis of Persuasion Techniques Used on White Supremacist Websites," *Journal of Hate Studies*, 4: 9-31.
- Weeber, Stan and Daniel G. Rodeheaver, 2003, "Militias at the Millennium: A Test of Smelser's Theory of Collective Behavior," *Sociological Quarterly*, 44(2): 181-204.
- , 2004, *Militias in the New Millennium: A Test of Smelser's Theory of Collective Behavior*, Dallas: University Press of America.
- Weerdt, Yves De et al., 2007, "Perceived Socio-Economic Change and Right-Wing Extremism: Results of the SIREN-Survey among European Workers," Jörg Flecker ed., *Changing Working Life and the Appeal of the Extreme Right*, Aldershot: Ashgate.
- Wellman, Barry, 1979, "The Community Question," *American Journal of Sociology*, 99: 1201-1231.
- and Milena Gulia, 1999, "Net-Surfers Don't Ride Alone: Virtual Communities as Communities," Barry Wellman ed., *Networks in the Global Village*, Boulder: Westview Press.
- Wender, Melissa L., 2005, *Lamentation as History: Narratives by Koreans in Japan, 1965-2000*, Stanford: Stanford University Press.
- Widfeldt, Anders, 2004, "The Diversified Approach: Swedish Responses to the Extreme Right," Roger Eatwell and Cas Mudde eds., *Western Democracies and the New Extreme Right Challenge*, London: Routledge.
- Willems, Helmut, 1995, "Development, Patterns and Causes of Violence against Foreigners in Germany: Social and Biographical Characteristics of Perpetrators and the Process of Escalation," Tore Bjørgo ed., *Terror from the Extreme Right*, London: Frank Cass.

- Williams, Bénédicte, 2013, “Right-wing Extremism and the Integration of the European Union: Electoral Strategy Trumps Political Ideology,” Andrea Mammone, Emmanuel Godin and Brian Jenkins eds., *Varieties of Right-wing Extremism in Europe*, London: Routledge.
- Wilson, Thomas M. and Hastings Donnan eds, 1998, *Border Identities: Nation and State at International Frontiers*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wiltfang, Gregory L. and Doug McAdam, 1991, “The Costs and Risks of Social Activism: A Study of Sanctuary Movement Activism,” *Social Forces*, 69(4): 987-1010.
- Wintrobe, Ronald, 2006, *Rational Extremism: The Political Economy of Radicalism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 八木秀次, 1999, 「外国人参政権という人気取り政治の軽率」『正論』328号。  
 ———, 2015, 「韓国・中国批判ができなくなる日」『正論』517号。
- 八木康洋, 2011, 「支那と菅政権へ向けられた怒りの声を国民運動に」『伝統と革新』3号。  
 ———, 2012, 「朝鮮学校による京都市勧進橋児童公園不法占拠事件と有志による抗議活動」『国体文化』1060号。
- 屋嘉比収, 2005, 「顕現する『国境』——沖縄与那国島の密貿易終息の背景」岩崎稔・大川正彦・中野敏男・李孝徳編『継続する植民地主義——ジェンダー／民族／人種／階級』青弓社。
- 山田健太, 2012, 「『在特会』メンバー等による朝鮮学校の授業妨害訴訟・コメント」『国際人権』23号。
- 山口智美, 2013, 「フェミニズムの視点からみた行動保守運動と『慰安婦』問題」『Journalism』282号。  
 ———・斎藤正美・荻上チキ, 2012, 『社会運動の戸惑い——フェミニズムの「失われた時代」と草の根保守運動』勁草書房。
- Yamaguchi, Tomomi, 2013, “Xenophobia in Action: Ultrationalism, Hate Speech and the Internet in Japan,” *Radical History Review*, 117: 98-118.
- 山口定・高橋進編, 1998, 『ヨーロッパ新右翼』朝日新聞社。
- 山口祐二郎, 2013, 『奴らを通すな!』ころから。
- 山本英弘・西城戸誠, 2004, 「イベント分析の展開——政治的機会構造論との関連を中心に」曾良中清司ほか編『社会運動という公共空間——理論と方法のフロンティア』成文堂。
- 山本皓一, 2010, 『国境の島が危ない!』飛鳥新社。
- 山本優美子, 2015, 『女性が守る日本の誇り——「慰安婦問題」の真実を訴えるなでしこ活動録』青林堂。
- 山野車輪, 2005, 『マンガ嫌韓流』晋遊舎。  
 ———, 2006a, 『マンガ嫌韓流2』晋遊舎。  
 ———, 2006b, 「山野車輪ロングインタビュー」『マンガ嫌韓流公式ガイドブック』晋遊舎。  
 ———, 2007, 『マンガ嫌韓流3』晋遊舎。  
 ———, 2009, 『マンガ嫌韓流4』晋遊舎。  
 ———, 2010, 『外国人参政権は、要らない』晋遊舎。  
 ———・安田浩一, 2014, 「嫌韓とヘイトスピーチ」『G2』15号。



- 山戸ときお, 2012, 「平成 23 年の右翼運動を振り返って」『治安フォーラム』18 巻 2 号.
- 梁泰昊, 1985, 「事実としての『在日』——姜尚中氏への疑問」『季刊三千里』43 号.
- , 1986, 「共存・共生・共感」『季刊三千里』45 号.
- 安田浩一, 2010, 「在特会の正体」『G2』6 号.
- , 2011a, 「ネット右翼にたいする宣戦布告」『G2』7 号.
- , 2011b, 「ヘイトスピーチの現場から」『現代排外主義と差別表現規制——人種差別禁止法とヘイトクライム法の検討』第二東京弁護士会人権擁護委員会.
- , 2011c, 「排外主義に走る若者たち」外国人入国法連絡会編『外国人・民族的マイノリティ人権白書 2011』外国人入国法連絡会.
- , 2012a, 『ネットと愛国——在特会の「闇」を追いかけて』講談社.
- , 2012b, 「ネチズム（ネット・ファシズム）は拡散する」『G2』10 号.
- , 2012c, 「在特会は、『いまの日本の気分』をわかりやすく表したもののなんです」『Voice』419 号.
- , 2012d, 「沸騰するナショナリズム」『出版ニュース』2288 号.
- , 2012e, 「『在特会』ロート製菓強要逮捕事件の背後事情」『創』466 号.
- , 2013a, 「ネット右翼のリアル」安田浩一・山本一郎・中川淳一郎『ネット右翼の矛盾——憂国が招く「亡国」』宝島社.
- , 2013b, 「『朝鮮人を殺せ!』新大久保"ヘイトスピーチ団体"って何者?」『週刊文春』4 月 18 日号.
- , 2013c, 「日本を覆う排外主義の『気分』」『Migrants Network』156 号.
- , 2013d, 「遂に逮捕者も出た嫌韓デモをめぐる一触即発」『創』477 号.
- , 2013e, 「なぜ、在特会の『闇』を追いかけたのか」『K-magazine』29 号.
- , 2013f, 「ヘイトスピーチの『在特会』を解剖する」『メディア展望』624 号.
- , 2015, 「在特会の深い闇——桜井誠『会長引退』と永田町人脈の真相」『月刊宝島』43 巻 1 号.
- ・山本一郎・中川淳一郎, 2013, 『ネット右翼の矛盾——憂国が招く「亡国」』宝島社.
- ・岩田温・古谷経衡・森鷹久, 2013, 『ヘイトスピーチとネット右翼——先鋭化する在特会』オークラ出版.
- 李隆, 1995, 「在日参政権と『二つの日本』」『諸君!』27 巻 9 号.
- 李信恵, 2015a, 『#鶴橋安寧——アンチ・ヘイト・クロニクル』影書房.
- , 2015b, 「反ヘイトスピーチ裁判の原告として」『社会運動』416 号.
- ・安田浩一, 2014, 「人間と社会を傷つけるヘイトスピーチ」『世界』862 号.
- 善福浩朗, 2010, 「平成 21 年の右翼運動を振り返って」『治安フォーラム』16 巻 2 号.
- 吉見俊哉, 2003, 『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会.
- 吉武信彦, 2005, 「デンマークにおける新しい右翼——デンマーク国民党を事例として」『地域政策研究』8 巻 2 号.
- 吉留路樹, 1985, 『人権か指紋か——外国人登録制度の狙いとホンネを衝く』市民出版社.

- 尹健次, 1992, 『「在日」を生きるとは』岩波書店.
- 在日朝鮮人の人権を守る会, 1977, 『在日朝鮮人の基本的人権』二月社.
- 在日韓国青年同盟中央本部編, 1970, 『在日韓国人の歴史と現実』洋々社.
- 在日コリアンの日本国籍取得権確立協議会編, 2006, 『在日コリアンに権利としての日本国籍を』明石書店.
- 在日本大韓民国居留民団中央本部, 1982, 『差別白書第6集 整地作業を確実に』.
- Zaslobe, Andrej, 2004, “Closing the Door? The Ideology and Impact of Radical Right Populism on Immigration Policy in Austria and Italy,” *Journal of Political Ideologies*, 9(1): 99-118.
- Zdravomyslova, Elena, 1996, “Opportunities and Framing in the Transition to Democracy: The Case of Russia,” Doug McAdam, John D. McCarthy and Mayer N. Zald eds., *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Zhirkov, Kirill, 2014, “Nativist But Not Alienated: A Comparative perspective on the Radical Right Vote in Western Europe,” *Party Politics*, 20(2): 286-296.

## 巻末資料：活動家に対する聞き取り記録

以下では、表の順に聞き取り記録を掲載していく。この内容はすでに公開済みであり（樋口 2012a-x, 2013a-j）、そのうち前置きに当たる部分を除き、個々人の記録をそのまま再録したものである。

表 聞き取り対象者の属性

	年代	性別	職業	学歴
A	40	男	ホワイト	大卒
B	30	男	ホワイト	大卒
C	30	男	ブルー	高卒
D	30	男	ホワイト	大卒
E	40	女	ブルー	高卒
F	30	男	ホワイト	大卒
G	30	男	ブルー	高卒
H	30	男	ホワイト	大卒
I	30	男	ホワイト	大卒
J	40	男	ホワイト	大卒
K	30	男	ホワイト	専門卒
L	40	男	自営	高卒
M	30	女	ホワイト	大卒
N	30	男	ホワイト	大卒
O	50	男	ホワイト	大卒
P	20	女	ブルー	高卒
Q	30	男	ホワイト	大卒
R	40	男	ホワイト	大卒
S	30	男	ホワイト	大卒
T	50	男	自営	大卒
U	20	男	学生	大学在学
V	40	男	ホワイト	専門卒
W	40	男	自営	大卒
X	40	女	ホワイト	大卒
Y	40	男	ホワイト	専門
$\alpha$	60	男	ホワイト	大学中退
$\beta$	60	男	ホワイト	大卒
$\gamma$	40	男	ホワイト	大卒
$\delta$	20	男	ホワイト	大卒
E	40	男	ブルー	大卒
$\eta$	30	男	ブルー	高卒
$\theta$	50	男	ホワイト	高卒
$\pi$	50	男	自営	大卒

## 1 拉致問題で「舵が切りかわった」A氏の場合

### (1) 「外国人」「政治」について

#### 《外国人との関わり》

生まれたときから周りは在日もいっぱいいましたし、部落民もいっぱいいましたし、そういう環境のなかで育ちましたね。そういう意味では違和感は全然ないですね。彼らが何か問題起こしても、それも全然違和感ないですね。同じ人間ですからね。当然犯罪もやるだろうし、みっともないこともやるだろうと。間違っても韓流にはまっている人みたいに韓国人はすばらしいとかね、そういう目線はまず持たないですね。ただ普通の同じ人間として、文化の違いも人間としてみる、それだけです。

#### 《政治への関心》

ありましたが、正直に言いますと、私本当に日教組のおかげで素晴らしい反戦思想を持つ少年でしたので、軍隊は良くないとか、その割には特攻隊にあこがれたりしてちょっとアンバランスがあったんですけど。

もともと歴史好きだったんで、戦争良くないと思いつつながら戦前の大日本帝国の版図みたら、おお広いとうっとりしたりですね。それはすばらしいですよ、北緯 50 度から赤道まで日本なんですからね。それ見て子どもの少年期とか青年期の人間は興奮しないわけがない。もしこの状態のまんまだったら、グアムとかサイパンとかパラオもパスポートなしに行けるの、とそんなことをついつい思ってしまったんですね。あとは満州とかもですね、範疇で日本の支配が及んだところとかで色がついているわけですね、それもそうですね。いやー、満州とか旅行できたら楽しいだろうなってね。反戦というか戦争良くないと思う傍ら、そんなことしょっちゅう思っていたんですね。

(でも) 基本的には戦後教育の申し子みたいなものでしたね。それは社会人になっても基本構図は変わらず、十数年前までですね。ですから、その辺で自分のなかで、いわゆるパラダイムシフトがですね、大きな変換があったときに——誰かが言ってくれたんですけど——それまで左に思い切り洗脳されてたから、その分ね、思い切り右旋回したんだろうといわれましたけど、その通りだと思いますね。

#### 《投票行動》

(選挙には) 行かれてましたよ。恥ずかしながらね、あの当時ね、当時は社会党とかに入れてたんですね。今から思うとね、本当にタイムマシンに乗ってその自分を殴りたいですね。ほんつとに。

共産党にも入れていたことがありますからね。東京都、石原知事ですけど、石原知事に投票したのは 2 期目からですね。1 期目は違う人に入れましたからね。

拉致問題の後ですね、自民党に投票するようになったのは、それまではダメでしたね。リベラルはいいことだと思って左系の議員とかに入れてましたね。考えたら本当に恥ずかしい。ただ 1 つだけ救いがあるのは入れた人全部落ちたんですよ。それはよかった。通ってたら私、今本当に頭丸めてたかもしれないですね。

## (2) 活動につらなる態度変容

### 《拉致問題》

決定的だったのは8年、もう9年前ですね、拉致が発覚したあの年ですね。あの年に自分のなかではっきりとあの舵が違う方向にガチャッときられたのを感じましたね。今までヨイショしてきた北朝鮮とか、中共とか、ああいう国がいかにとんでもない国か、北朝鮮を1つのモデルとしてみて社会主義国家とはどういうものか、ということですね。で、その社会主義国家につながっていく周辺の国々ですね。

要するに日本は戦勝国に囲まれていて、事実上やりたい放題されている状態なんですけど、まあ戦勝国側の理屈がいかにてたらめか、でたらめといたらあれですけど、事実との乖離がすごいということですね。

それは日朝問題だけではなく、日露問題でもそうです。当然ながら日中問題ですね、同じ構造がみえると。ひいていうと日米関係がそれがある。同盟国だから、日本に安保で軍隊駐屯させるからといって、全幅の信頼をおいていいかといったらそうではないと。確かにパートナーとしての可能性はあるけれども、やはりなんといいですかね、独立国として言うべきところはあるんじゃないか。まあ、それがあればなおのことですね、日米同盟というものもしっかりと継続できると思うし。まあちょっとその辺話がそれましたけどね、そういう感じで自分のなかでガチャッと、本当にこう音が聞こえたわけではないんですけどね、確かにバーッと切られる感じはありましたね。

北朝鮮というのはひどい国だというのは前々からわかっていたのであって、日本で朝鮮半島の歴史の深いところで自分が気がついてなかった部分というのを知ったというんですか。

(そうした変化が生じたのは)私の中(で)の話です。ただ話を聞くと、私以外にもあの9.17が大きなターニングポイントになった人が結構いますね。それはそうですよね。それだけ海外でもドバドバ報道されたことです。しかもそれまで、拉致はでっち上げだっていう風なことが言われてたし、報道も少なかったですから。だから日本の国内でもちょっと左の人が多いところでそんなことを言おうものなら、お前は何かにだまされるぞ、とかボコボコにされるとかね。

### 《拉致から在日へ》

在日と北朝鮮はイコールの部分はかなりあるわけですね。総連というのは南側の人間もいっぱい入っているわけでございまして、民団ともけんかしたり続けてますけど、基本的には同じ穴のムジナと言う感じですね。北朝鮮の問題、北朝鮮が主張していること、その辺を突き詰めていくと結局は朝鮮半島と日本が関わってきた歴史が出てくるわけでありまして。その中の負の遺産として現在日本が抱えているのが在日朝鮮人という問題だと思っただけですね。だから、朝鮮総連系の在日韓国朝鮮人っていうのは、やはりすべて北朝鮮の中央政府の意向で動いているわけで、その傀儡として在日を監視しているのが朝鮮総連なんですよね。

だから北朝鮮が崩壊すれば、在日社会には大混乱が起きるわけですね。恐らく暴露合戦なんかも始まるし、壮大な内ゲバが始まって、それこそ殺し合いレベルに発展するのかなり起こってくる。民団だって無傷ではおられなくて、これまで日本に対してあそこ

うだいて来たことがひっくり返されるようなことがあって、民団の中でも大混乱。だからすべての根源が北朝鮮にあるけれども、末端というのは日本における在日を含む朝鮮系社会そのものになるということですね。

実際に北朝鮮の拉致問題について調べていくと、2 言目には日本人も昔、そんな数じゃおさまらないくらいの朝鮮人を連行したと後になって話になるわけですよ。それに対しては韓国も同調しているわけなんですけど、調べてみたら何のことはない、渡航制限しなければならぬほど朝鮮人がいっぱい日本に押し寄せてくるということがあるわけですよ。

その時にうちの爺さんの話として親から聞いてきたのは、当時うちの祖父さんが運送会社やって、今と同じですよ、道路の現場とかいくと数は減りましたがね、南アジア系とか中東系の出稼ぎの外国人いますよね。当時朝鮮人は日本人だったので、全く同じではないのでそれでも各地にそういう土方とか運送屋とかの現場に来る朝鮮人って必ず働いていた。日雇いだったんですよ。うちの運送屋も例外ではなくて、下っ端の人夫というのはみんな朝鮮人だったらしいんですよ。

その朝鮮人に教えてもらったニンニクの醤油漬けというのは我が家の家伝料理になっているんですよ。あれは風邪の時にガリっとかじると効くんですよ。ただ本当にニンニクを醤油につけておくだけなんですけれど、醤油になじんできたあたりに食べると風邪引かないんですよ。まあそういう感じでね、朝鮮人がわーっと来たりとかしてましたんですよ、その辺を調べていくと強制連行・従軍慰安婦にとどまらないとんでもない話が自分の眼に入ってくるんですよ。そうすると在日社会そのもの、要するに韓国、北朝鮮、朝鮮総連、民団、在日韓国朝鮮人と分けるよりは1つの塊として捉えたほうがわかりやすい。実際につながってますからね。8年前の9月以降は、そういう方向で確立しましたね。

#### 《反北朝鮮が嫌韓に至るまで》

朝鮮半島のことを調べたら、韓国の言ってることも、韓国のやってきたことも、とんでもないことだってことがすぐにわかりました。たとえば竹島——拉致を問題にしてるけど——韓国だって竹島の周辺でいったい何人の日本人漁師を拉致して韓国に連れて行って……。うち何人かね、拉致されるときに殺されたりとか、現地で死亡したりしているわけですよ。だから、そういう韓国の言ってることやってることも、まあ本当タイムラグで、(ひどいものと)思うようになりました。

反北朝鮮というよりは反朝鮮半島的な空気っていうのが、あのタイミングで思い切り醸成されたからですかね。私の中でもそうですし、同じような思いをした人間がかなりいると思います。多分その流れを決定付けたのが、その3年後に山野車輪さんが出した『嫌韓流』ですね。あれでもう、南北朝鮮もろともとんでもない。それくらいの頃ですかね、もうちょっと前からありましたけど、そのくらいの頃から左翼系の市民団体が露骨に韓国を擁護するような発言とか行動が目立ってきたのも、多分その頃だったんじゃないかと思えますかね。

#### 《「在日」の焦点化》

(在日にこだわるのは)戦後問題は在日問題に集約されるからですね。朝日新聞の西本

記者が見事な推察をしてくれたんですけどね、集会に集まった人の顔ぶれをみると、戦後問題に対して異議を唱えている人が多いんですが、テーマはここに集まった目的は在日特権の問題であると。つまり在日特権の問題は戦後問題の象徴的な側面があるからです、と引いてくれたんですね。

やっぱり今言われている基地の問題にしたって何にしたってすべて在日問題につながるわけですね。逆に言うと GHQ が在日という楔を日本に打ち込んで、去っていったということですね。要するに再び日本が強い国にならないためには何か楔が必要であると。その楔に選ばれたのが在日であって、いう感じですね。結局は在日という存在を残しておけば日本の足を引っ張ってくれるという目論見があったのかどうかは知りませんが、事実そうなってますんで。

とにかく入管特例法を廃止して——在日問題をこのままでは、在日 100 世、200 世まで登場して、永遠に未来永劫に日本にたかり続けるような存在を認めてしまうことになる。それには絶対に特別永住権、いわゆる入管特例法による特別永住者を 1 日も早くなくして他の外国人のように一般永住者として扱う、そうすることによる効果は計り知れないと。逆に言うと、今それをやらないと今でさえほとんど鉄壁の状態になっているのに、これを放置しておくともう日本は 2 度とこの問題に着手できなくなる。だから今やらなきゃいけない、遅すぎたけど今やらなきゃいけないとそういう考えです。

（「在日特権」は）社会の中での共通認識として共有されてなかったということですね。メディアの環境も違いますし、今だったらこんなのがありますって一言いえば一瞬にして全国に広めることができますけどね。伝達手段が個人ではできなかった時代には、それは難しいですし、入管特例法の問題にしたって 10 年前にやろうとしたらそんなに賛同者が集まらなかったと思うんですよ。そこから説いていかなきゃいけないわけです。このタイミングで出たのはやむなしという感じですね。

私自身は在日韓国朝鮮人が一般永住者になって、法律を犯さずにちゃんと税金も納めて過ごしていく分には、別に「いたけりゃいれば」という、その代わりに「余計なことを言ったら帰って下さい」という立場ですね。ただ、犯罪とかやった人については厳しく強制送還を含めた措置をするべきであると。在留資格というのは一代限りで、2 代目からは永住資格ほしかったらそれなりの努力をしてとってください、とれなかったら帰ってくださいというのは変わらないですね。今の在日の状況をみたら、特永<sup>5</sup>が廃止されたところで普通に暮している人はまず叩き出されることはないですよ。叩き出されていることが見えている連中がどういう連中かを考えると、在特会の主張につながっていると思いますね。

### （3）政治的社会化の過程

#### 《歴史修正主義との邂逅》

（拉致問題以前には）見ましたけど、残ってなかったですね。自分が関心もって見ないと記憶には残らないですから。だから、『ゴー宣』なんかもそれこそあれですね、90 年代に書かれたものを 2000 年代に入ってから読んで感じですね。ただありがたいのはね、『ゴー宣』とか今図書館にありますんでね、読みたいときにいつでも読めますんでね、そ

---

<sup>5</sup> 特別永住資格の略。

ういう素晴らしいところはありますね。ただ、それだけでは『ゴーマニズム』に悪いので、最近の天皇とかのはちゃんと買わせていただきましたよ。

在特会以前から（活動を）やってますね。それがあればこそ在特会に入ったというのがありますね。拉致問題以前からぼつぼつとあったんですけど、本格的には拉致問題以降ですね。9.17以降に私はむさぼるようにその辺を調べて、本を買い集めて、まあ勉強したといたらあれですけど、見ましたね。

なんていってもネットでいろいろと昔の写真とか、報道記事とか見るようになって、韓国——当事の大韓帝国の李完用首相の言動とかですね、政治思想とか見る機会がありまして、すごい人だなと思ったんですね。自分の国、要するに自分の国民を守るために、民族というのをを守るために国を捨てた。国に決別した、あの決断は本当すごいと思いますね。で、日本もそれに対して礼を尽くして朝鮮半島を近代化させ、王族については華族扱いで、日本の皇族に準ずる地位で遇したんですね。で、一進会ははじめとする朝鮮半島の改革派の人びとに対しては、それなりの要職を与え、かといって報復的に王朝派の併合反対派の人間を弾圧したわけでもなく、等しく朝鮮半島の民生向上に努めたんです。本当にそういったこともネットで初めて知ったんですね。それまでそういうこと言われてて、どういうんだろうなどは思っていましたけど、基本的にはもう全然気がついてなかったですね。

#### 《人権擁護法との出会い》

かれこれ6年前ですね。ちょうどあの、6年前の今頃ですね。古賀誠、当時の自民党元幹事長が部落解放同盟のバックアップで人権擁護法案を国会に強硬提出しており、党議拘束をかけて強行採決しようとしたのが頓挫したのですよね、あの時に。その人権擁護法をキーワードに自分なりにいろいろ調べましたらですね。これはとんでもない法案だった。

もともとあれなんですね。そういったことが結構好きだったんで、その前に舞台を、小劇団で舞台をやっていたりとか。そういうエンタメ系のことが好きだったんで。

丁度ですね、タイミング良くというというか、私は、友人と自主制作映画を趣味でやっております、それがどういうストーリーかという、元在日韓国人の政治家がさまざまな妨害にあいながらも、自分の初心を貫いて、そして朝鮮総連——映画の中では朝鮮連盟——その朝鮮連盟と戦っていくというお話だったので。その時に冒頭です、ね、「朝鮮連盟は参政権を求めろ」とかですね、「差別と闘え」とかっていう張り紙を出して、その議員がびりびりに破いて足で蹴飛ばすというシーンを入れたんですよ。

最初（作っていたの）は、ファンタジーというか荒唐無稽な作品ばかりです。どたばた系ですね。そういうのはあれでしたけれど、いつの間にやら社会派みたいなと言われてますけど、あくまでフィクションでありファンタジーですから。あくまで北朝鮮やら朝鮮総連やら在日やらをテーマで扱ってるだけで、それを啓蒙するためのものじゃないですね。

どこの団体ともしがらみなく。朝鮮ヤクザのどうしようもないチラシとかですね、そういう映画を作ってます。その中ではヤクザが刑事に酔っ払って絡まれてですね、お前が売っているのは北朝（鮮）のものだろ、とかそういうせりふをバンバン入れて、それが一部でマニャックに受けたんで、調子に乗ったりしていたんですね。ただ、それが今日につながることは、その時点ではまったく思わなかったですね。

（それを受けて人権擁護法について）もしこんな法律ができてしまったら、逮捕とかそう



いうのはないって調べてましたんですが、それよりも怖いのはやっぱり自分達が作品を発表できなくなる。不用意にそういうことを発表すると、どんな嫌がらせがですね——法律的な根拠があるわけですから、人権委員会が認めたら差別で賠償金払いなさいといわれるわけですからね。そういう一個人をも追い込めるような法律ができちゃうと、これはまずいと思って人権擁護法案の反対運動からスタートしまして。で、当時はまあ今みたいに Youtube もありませんし、SNS だってミクシィが始まったばかりでそんなにまだ普及してなかったですね。だから、2ちゃんねるのスレッドを使ったりとか、まとめサイトでブログを作ったりとか、そんな感じで、限られた手段の中で必死にやっております。

#### 《従軍慰安婦について》

残念ながら恥ずかしながら、従軍慰安婦のときはあまり関心持ってなかったですね。だから、もしこれが事実であるならばそれはいけないな、というぐらいの認識でしたよね。国家間の中で解決した問題を今出すのはどうなのかな、というぐらいの認識でしたね。だから、逆に言うと私はそれなりに顕著にかんじるようになったのは、そういう状態だったからその当時はあまりそこに関心がいかなかったからかもしれませんね。今世紀に入ってから、それまで左翼系の団体は韓国ってアメリカの傀儡政権という見方があったんですけど、今完全に韓国って（味方だと）やっていますよね。その辺の流れはあの辺で加速したんじゃないかとも思います。

#### （４）在特会以前の活動

##### 《人権擁護法反対のための活動》

ネットでは、まあねえ、いろいろと調べて自分の考えみたいなものは形作られていったと思うんですけど、いわゆる市民活動とかそういうものっていうのは、本当に無縁でしたね。だから、人権擁護法が本当きっかけですね。

6年前のちょうど今頃ですね。例の人権擁護法案の提出等があり、それでネットで知り合った人から「実はこんな集会があるんですよ」って反対集会のことを教えてもらってそこに行って、そこでいろんな人と会って、それでいろいろな人がいるんだと知って、その後ネットでもビラ配りやってるのを見つけて。

（ネットへの書き込みは）しました。それもネットで2ちゃんねるでもそうですし、Yahoo!掲示板とかああいうところなんかで、自分の意見書いたり、知った情報を載せたりとかしてましたね。リアルな活動としてはビラ配りに参加したのが最初ですね。

（人権擁護法案についてもネット上で教えてもらったのか）そうです。最初はぼんやりとあまり下品なことを書いたら怒られるよという程度の認識だったのですが、調べれば調べるほど。その法律ができてすぐどうこうなるんじゃないんですね。どういいますかね、コモドオオトカゲの唾液のように後でじわじわ効いてくる。最初はとりあえずこんなところでよ、とだんだん条件厳しくしていった最後はがんじがらめにしてしまう、そういう感じじゃないですかね。

（参加してみて）いろいろな人がいていろいろな関連する団体があるって知って、さらに調べたら人権擁護法案に関しても街頭でのビラ配りやっていると聞いたんで、そこに連絡して参加するように。（行動することについて）まったく抵抗はないです。もうすんな

りと。

人権擁護法案のグループの時は、いつの間にか真ん中に近い立場になって、その中でビラ配りプラス街宣もやろうって話になって、街宣みたいな方に入っていったりしましたけど。あの時ね、選挙男っていたんですよ。平成17年の選挙の時ですね。立候補した〇〇さんという人。あの時ちょうど電車男がドラマでブームになったんで、それになぞらえて選挙男ってできたんです。議員候補はどこで街宣やってもいいということだったんで、ちょうどその選挙を利用するわけではないんですけど、街頭で堂々と人権擁護法案について反対意見を述べよう、というそういう試みだったんですよ。

もちろんメディアはそこは一切報道せずに、彼が言っていたもう一つの主張ですよ、このネットの時代に選挙期間中のブログ更新とかできないのはおかしい。また、政治家に対して電子ツールを使って意見を述べたり意見を聞く仕組みをもっと法律的な裏づけをとらなきゃいけないということですね、街頭で言った。そこばかり報道されてましたけど、主題は人権擁護法案だったですね。

本当に反対する有志が集まって、形としてはグループでやっているように見えますけど、全体としては取りまとめている組織ではなかったですね。ちょうどその年の衆議院選挙のときに、皆で小泉直突とかって名前勝手につけて、それで小泉首相が来るところに応援演説に皆で押しかけてやったんですよ。その時に××かどっかでやるよというので行ったら、初めての方が何人かいらして、現場にいたのが初対面の方3人で折角だからちょっとお昼でも食べに行きましょうかといったら、警官がばつときて要するに職質されたんですよ。そのときに「あなたたちはいつから一緒に活動しているんですか」と言われたんで、「15分前です」。警官が一瞬「なめんな」みたいな顔になったんですけど、事情を説明して「掲示板で呼びかけやって集まったんで、私が呼びかけたんでもない、彼が呼びかけたのでもない、他の人が呼びかけた、呼びかけたのは別にいてここに集まったのがこの3人であって、だから今日初めて顔合わせたので、どこに住んでいるのか名前とか全く知りません。だからいつから一緒に活動しているかといわれたら、15分前からとしか言いようがないんですよ。個人としてはもっと前から活動しているかもしれませんが、3人でやったのは今日の15分前です」。まあ、何とか納得してましたけどね。

## (5) 在特会での活動

### 《邂逅》

5年前ですね、在特会の前身となる東アジア問題研究会の集会に出まして、その後、発足集会のときに声がかかりまして、それから今日に至る、そんな感じです。

まさに在日特権を許さない会を設立しますと、その時の集会ですね。発足集会の時には人数を限定していたんで、事前に集会参加を申し込んだ人以外は入れなかったんですね。合言葉じゃないですけど、名前といつ申し込んだかを確認したりして、結構厳重にやりましたよね。それで翌年(2007年)の1月からスタート。だから発足集会の後、名簿とか全部破棄しているんですよ、それで改めて申し込みを募った。だから申し込むのが若干遅れたんで、会員番号は68番なんですよ。本当だったら20番以内に入りたんですけど。それでも68番って相当前のほうですけどね。今は一万なんぼいっていると思いますが、番号は抜けていった人も入れてますから、今新規登録する人は一万台超えてますね。

### 《共鳴を得られた背景》

情報的なインフラができてたということです。5年前ですと従軍慰安婦とか強制連行を信じてる人は、一般レベルでもかなり低くなってきてますし、少なくとも政治とかに関心を持っている人に限ってみれば、まずほとんどの人が信用していない。一般の何も知らないノンポリ層だといわれたら、「あ、そうなのか」というくらい思うけど、そんなに詳しくは知らない。左側の「(従軍慰安婦が)あった」という人はわかっててうそを言っているか、本当におめでたい人かどっちかですね。そういう状況であったから、あれだけ人もわーっと来たんじゃないんですかね。いきなり500人くらい。それから亀足でしか増えませんでしたけど、それでも500人集まったわけです。

### 《「行動する団体」への転換》

その年(2008年)くらいからその(直接行動の)回数が、まず福祉給付金の問題がありましたんで、△△で街宣やったりとかデモやったりとかやりまして。

ちょうどその年に長野のあれ<sup>6</sup>があって、それに在特会の会員も多数参加して、長野の時期も会員数増えたんですよね。あの時に、抗議活動をやった団体のひとつとして認識されたんですよね。それでチベットの問題に関心を持った人が、在日特権の問題に関心があるのと限りなくかぶっているんですよね。ですから長野の事件も1つの会員数を増やすきっかけになったと思いますね。実際に長野の動画にうちの会員いっぱい映っているんですよ。当時の事務局長なんかも、長野で日の丸もって機動隊ともみ合いになっているところが動画で堂々とでかでかと配信されてました。

(街頭行動への転換について)どこで線を引くかは難しいのですが、やっぱり(2009年の)カルデロン問題じゃないんですかね。あれがやっぱり、大きく行動する団体として確立したとこだと思いますね。もちろんその前にも国籍法の問題とか、前年の暮れに国会前で抗議活動をやったりしましたし、日比谷の野音で集会やったりしましたし、そういうのはありましたけど、まだ語る段階、議論する段階というのは、主張段階というのはあったと思います。行動そのものが100%目的であり手段となったのは、カルデロン問題からですね。それまでもそういうのは確かにありましたけど、完全に活動団体、実際の行動する団体としての脱皮をしたのは恐らくカルデロン問題の時だと思いますね。特にカルデロンのり子の地元の蕨でデモ行進をやったとき、あそこでがらっと変わったと思いますね。

それまで、何回メディアにこういうことやりますから取材してくださいと言っても、誰も来なかった。左翼団体も我々があれだけでかでかと告知しているのに、妨害はおろか脅迫メール本来なかったんですよ。ところがカルデロン問題のときにはどこで誰が拾ったのか知らないけど、「とんでもない団体が蕨に押しかけます」みたいなやつがネットで流れまして、実際に行ってみたら本当に蕨の駅前で彼らが集まって横断幕とかで構えてたんですね。実際にデモの開始前に横断幕焼くっていう妨害もありましたし、デモ隊に粘着して反対側の歩道で道行く人に「差別団体です」とか言って。そういうのをやっている人があったりとか。もっと後ろのほうになると、スケボーで殴りかかったりとか、埼玉

---

<sup>6</sup> 北京五輪に際して長野で行った聖火リレー。

県警の警備のずさんさもあったんですけど、本当にあのときは一体ここは日本かというくらい妨害を受けまして、デモも確か30分くらいで終わるはずのコースだったんですが、1時間くらいかかったんですね。というのは、妨害あるたびにデモがストップして…。

#### 《直接行動に対する抵抗感》

みんなその辺は抵抗があったみたいですね。ただ、カルデロンの頃にはみんな慣れていたんですね。最初に人権擁護法案があって、前々回の参議院選挙のときに自民党前に抗議活動にいったんですけど、その時に私は帽子かぶってサングラスかけていたんですね。それが無駄な努力なことがわかって、まあいいやという感じで。

### (6) 活動の効用、活動を通じた変化

#### 《良かったこと》

自分ひとりではできないことを、団体に入ることによってみなでやる、というのが一番大きいですね。たとえば今日のデモなんかでも、自分ひとりではできないですからね。実際に・・・でプラカードもって拡声器持って歩いていたら、たちどころに警官に押さえられますから、ちゃんと組織としてデモを申請して、集会場所を決めてやっているからこそできるわけであって。それと自分達に共感して新たに参加する人が日々絶えないことですね。これは大きな部分ですね。

保守系という大枠でいうと人口はかなり増えたんですね。そういうところは嬉しいですよ。自分に直接何かの利得がなくても、全体として何か動きができれば、それほど嬉しいことはないですよ。また、自分の名前を検索すると、一個一個見るのが面倒なくらい件数が出てきますけどね。そういいながら毎日自分の名前を入れてにやにやしているんですけど。自分に共鳴して参加した人がいて、その人に共鳴して参加した人がいる、というこの玉突き状態は本当に嬉しいですね。

#### 《活動を支えるエネルギー源》

なんといっても会長が最後まで弱音を吐くことなく前に進んでいる姿ですね。トップの威力ってすごいと思いますね。それが今、各支部の支部長とか本部の中心メンバーとか、そういう人たちに対象が広がってきて、みんなが桜井化して行って、私もそうだと思うんですけど。もちろん、皆一般の社会人なのでやれる範囲は限られているんですけど、そのなかで活動しているというのはありますね。そこは本当にみんながみんなを支えている状態になってきてますね。

その根底には、冒頭申し上げましたとにかくこのままでは日本という国が、自分達の共同体がなくなってしまう、抛りどころがなくなってしまう、それを何とかして阻止しないといけない。だから抗議するのも周知するのも、実際の活動、集会をやって議論するのも、すべてそこに帰結すると思いますね。参加者の面々もさまざまです。私のように靖国神社に毎月参拝する人もいれば、神社の作法とか知らない若い子もいるんですよ。でも、基本的には日本という国が好きで、自分達が生まれ育った日本という国、日本という共同

---

<sup>7</sup> 録音記録で理解不能だった部分だが、場所の名前を指していると思われる。

体を守りたい、守って子孫に伝えたい、その思いです。だから、外国人参政権の問題もそこに帰結しているんですよ。

安政条約とはニュアンスが違いますけれども、安政条約で日本がとにかく困ったことは、治外法権を認めたこと、治外法権によっていわゆる租界が、ああいう町が形成されて、そこへ日本の公権力が何も手を出せなかったこと、それと関税自主権の問題ですよ。だからその治外法権撤廃させるために、明治政府は戦争を経たりとか外国と同盟結んだりとか、それこそ本当に国の浮沈をかけた努力をしてようやくそれを撤廃したわけですよ。そして21世紀になってなぜこれを自分たちの方から放棄して外国人に門戸を開いてしまうのかというところだと思うんですよ。

治外法権とはニュアンスが違いますけど、基本的には外国人に権利を与えると、当然、外国人を特別扱いしろということにお墨付きを与えることになって、まあ実際ね、チャイナタウンとか一部日本人が怖くて入れないエリアなんかもありますので、そういうのが全国的に形成されてそこには公権力が及ばない。外国人に票が与えられるとそこは組織票となってその利益代表者が地方の政界に入ってくると。これどう考えてもおかしいというか、危険ですよ。で、日本を守りたいという気持ちは外国人参政権に反対する気持ちとイコールになると思いますね。

#### 《活動により得られたもの》

自分としてこういう情報を世の中に広く知らしめることが——もちろん、まだまだ不十分だと思いますけど——ある程度のアナウンス効果を成し遂げたことは嬉しいですね。

在特会と直接関係ないようなんですけど……少しぐらい高くても日本の国内産のものを食べよう。残念ながら、私はわかめ大好きなんですけど、国内でわかめの名産地というと小沢ちゃんの岩手か、仙谷ちゃんの徳島なんですよ。まあでも徳島岩手の漁業関係者の方に罪はありませんので、もしかしたら仙谷さん、特に岩手の場合はね、小沢さんの票をまとめているかもしれませんが、岩手のわかめもおいしいと食べているんですよ。

地産地消ということに……。やっぱり気がついたらこの活動やって今があると思いますけど、ニンニクとかでも安ければいいというものではなく、シナニンニクをいただいていたんですが、最近はずっと。少しずついいものを買えばいい。外食に比べれば全然安いですからね。後でついてきた結果ですけど、そこらへんはあれだったかなーと思いますね。ただ、着るものに関しては輸入品に国産製品は思い切り負けてますからね。メイドインベトナムとかメイドインタイランドを選びます。

#### 《在特会以外の人との付き合い》

まったく別ものですよ。もちろん身の回りの人間にも啓蒙活動を、ちょっとトーンを抑えてやっていますけど。それでも、露骨に在特会の活動を私生活にリンクはちょっと厳しいものがありますので、それは適宜相手の反応を見ながら話す範囲をやっていますけど。日常生活の中でもいけないことはいけないとは言って、一昨年の民主党に政権交代しなければ日本はよくなるらないということを、うるさいほど言ってくれた方をいじる毎日を楽しんでいますね。「あなた、民主党に入れろっていったけど、入れたらどうなったの」って。「何で

すかね、民主党に入れろ入れろといったのは」そんな感じですかね。

#### 《靖国神社への参拝》

（参拝するようになったのは）ちょうど8年前くらいからですね。拉致問題から1年ほどおいて、ちょっとあるうさんくさい神職に出会ったんですけど、その人がやっていることは滅茶苦茶だったんですけど、言っていることはすごく説得力があつて。靖国神社というのは祀られている神様が私たちとほぼ同じ時代——100年くらいの時代のタイムラグというのは、長い歴史でみればどうってことない時間で、あそこに祀られている神様は、自分達にもっとも近い人たちで、その感謝の気持なんか一番喜んで受け取ってくれる神様だって言っていたので、そうすると自分の願い事も聞いてくれる確率が高いのではないか。

と、いい加減なことを言ったんですけど。でもそれがなんか私に響いて、そこで自分の祖父の代くらいの人があそこに祀られているわけで、自分の身内なんかでも出征して皆さん無事帰ってきてきましたが、帰って来れなかった人もいる。そういう人たちが祀られているところになぜ今まで行かなかったんだろう、という気持ちになる。それですぐに行っただけですね。それから毎月行ってます。ちょっとこのところ1、2ヶ月あれなことがありますけど、何かの締めの際には必ず行きますね。

#### （7）外国人参政権について

当然ながら、外国人参政権の反対はそのちょっと前からありましたね。やっぱり政治はその国の国民のものだという、ましてや日本というのは帰化というシステムがあつて、本人が望めば国籍も取得できる。それでなぜ外国人に参政権を、というのは舵きり<sup>8</sup>が変わる前からありましたね。舵きりのあとはなぜとかそんなレベルを超えまして、参政権を要求する奴らってのは、もし法律がなければバットで殴り殺してやるとかね、それくらいまで過激に思うようになりましたね。

もっと若い頃なら、当時はメディアに出ている人間も簡単にだまされてしまって、税金を納めているのだから参政権がないとかかわいそうだなというのは若い頃にはありましたが、それはもう10年以上前に飛びまして。参政権イコール国籍だろうといのは十数年前から思ってたので。で、9.11自体は自分の考えにお墨付き与えた感じですね。

どの民族にも自決する権利があると思うんですよね。第一次世界大戦の時にアメリカのウィルソン大統領が提唱した民族自決ですよね。その観点からしても、日本の政治っていうのは日本国民が決めるべき問題であつて、外国人がそこに関与する余地はないという風に考えています。

で、いろいろ問題はありますが、それはその人をその国で出生させた親の問題であり、またその国の中でどういう仕組みを持って自分が政治に参加できるのか、というのを探っていけば選択肢はあるわけですよね。その国が一切の外国人の帰化を認めていないというのであれば、それはしょうがないですね。その国に生まれたことによって生じた不利益ですから。その不利益がいやであればその国を退去するしかないと思います。もしその国で

---

<sup>8</sup> 前出の拉致問題のこと。

国籍をとれば政治に参加させるシステムがあれば、そのシステムを利用するかしないかはその人の自由であると。で、もしシステムを利用しない場合はそれによって得られる利益も放棄したのと同じであって、これが多分世界的なスタンダードな考えじゃないかと思えますね。

実際外国人参政権を認めてる国ってごく一部の国に限られる話ですし、その限られた国でもかなり厳しい条件付けしてますよね。韓国なんか参政権をもらおうと思ったら大変ですよ。永住者でしかも税金なんぼか納めていて…<sup>9</sup>でもね、結婚した場合には永住権を与えるのはごく普通であって、日本の場合はもう無条件ですからね。特別永住資格があれば。その特別永住資格が代々相続できるわけですから。永住資格がある程度の条件があったらまた話変わってくるんですけど、無条件ですからね。事実上在日に生まれれば無条件に選挙権がもらえるという制度ですよ。そういう風に捉えてますんで、そこはちょっと他の外国人との公平さでも問題であるし、永住者というだけで外国籍の人間に政治に参加させるっていうのもこれも大きな問題であると思えますね。

やはり結婚したりとか何らかの形で永住者っていう、永住者へのハードルは日本より高いっていう感じですけどね。…<sup>10</sup>それは親子代々受け継げるものなんですか？ただ対象となる数が全然違いますよね。こちらは何十万人で、向こうは何千人もいないんですよ。基本的にはその国の政治っていうのは国籍を持つべきものだと思ってますので、仮にそれがあったとしても…。

北欧とかにしたって、やっぱり相互主義ですね。…<sup>11</sup>仮に日韓の間で相互主義を導入するとしたって、国境紛争を抱えている国で相互主義もないだろうというのがありますね。いずれにしても国の数でいうと外国人参政権を認めている国は少数派ですね。最近やたら参政権を叫びだしたシナ人の社会ですね、でも中華人民共和国は外国人には一切参政権、選挙権そのものがない国ですからね。それがなぜ日本で要求するのは不思議ですし、いずれにしても国民固有の権利でバーゲンセールするものではないですね。そういう考えですね。

#### 《在特会における外国人参政権の位置づけ》

今、一、二を争う。去年はさすがに本当に危なかったのもっともっとという、かなりステータスが大きかったんですけど。とりあえずそれが落ちたわけではないんですけど、竹島の問題とかもありますし、原点の入管（特例）法の廃止ですよ。これもあります。その中でどっこいどっこいのトップ集団の中にいることには違いないです。やっぱり竹島にしたって外国人参政権が認められたら、島根県が竹島の日を廃止するという条例を作る勢力が生まれかねないわけですよ。たとえば年金の問題にしたって、参政権を認めると在日韓国朝鮮人はこれからも無年金でも福祉給付金がもらえるのを、国レベルの法律で決めてしまうのを地方から起こされる恐れもあるわけですね。

だから、地方自治だからいいっていうのは、ちょっと違うと思うんですね。日本の場合

<sup>9</sup> この「韓国の外国人参政権」の前提となる「韓国の永住権」については、在特会全体に事実誤認が広まっているので、筆者が訂正したのを受けての発言。

<sup>10</sup> ここでも事実誤認を訂正したのを受けての発言。

<sup>11</sup> これについても事実誤認を訂正したのを受けての発言。

は東京都であって東京政府でもないですよ。東京自治共和国でもありませんから。あくまで日本国の東京都の部分の行政の執行を都が代行しているだけの話であって、中央の行政と地方の行政は表裏一体ですから、ましてや自衛隊の駐屯地とかそういうところになりますと、安全保障の国レベルの、国際レベルの問題ともリンクしているんで、そこに自国民以外の人間が入ってくるというのは、やっぱり危ないですね。

#### 《なぜ外国人参政権を問題視するのか》

国としての基盤が脆弱であるというところが大きいと思いますね。独立国といえない部分はかなりあって、一番のあれは日本に事実上アメリカが占領状態ですよ。安全保障が自分でできない。治安維持にしたって、警察官がシナ人の不審者を職務質問したら逆ギレされて石灯籠で殴られそうになって、それを撃ち殺したと、彼は撃ち殺すつもりがなかった当たってしまったというレベルですけど。あるいは奈良県の方で車上狙いの車を取り押さえようとしたらパトカーにがんがんぶつかってきて、それに対して発砲した。普通だったらそこまで警察官に逆らったら、射殺されてもやむなしとか、射殺しなかったら警官が逆に怒られるようなあれですよ。しかし日本の場合には、警察官を特別公務員暴行罪で告発して、それが受理されてしまう。

そういう状況で国防の問題、治安の問題一個とったとしても、これだけ日本の基盤が脆弱であるんで、そこに外国人の意見を入れさせたらどうなるかと。しかも半端な数じゃないですから。60万人という恐ろしい数ですよ。要するに、日本のなかにわざと民族問題を作ってしまうと、民族間の紛争をわざと激化させて継続させるのかといたくもなるような仕組みになってしまうんですね。だからやはり外国人には外国人の限られた権利でおとなしく生活していただく、自由の国アメリカだって政治に参加しようと思うとそれなりにステップ、手続きが必要ですよ。アーノルド・シュワルツネッガーは州知事にはなれますけど、大統領には立候補できない。だから、バラク・オバマがケニア生まれじゃないか、ケニアかどっかの生まれじゃないかというのもそれですよ。もし彼が海外で生まれいたら大統領の資格がなくなっちゃうんですね。

それくらいしっかりした基盤があれば、改めて議論すべきかと思いますが——議論しても私は反対の議論ですけど——これだけ国の仕組みが脆弱な状態で、要するに悪意を持った人間がやりたい放題できるのが今の日本なんです。日本の法律は性善説にのっとって、まさかこんなに悪いことをするやつはいないだろうという前提があるような、甘い法律が多いですから。

それとあともう一つは、多文化共生主義を取り入れた国がことごとく失敗しているというね。ドイツは首相自らドイツの多文化共生は失敗であったと発言しましたし、ベルギー、オランダあたりの外国人の流入によってどんな状態になってるかっていうのは、もうどうしようもなく知れ渡ってますし。あのゴッホの子孫がイスラム系に殺されたりとかして。フランスでもイスラムのコミュニティがフランスの社会から完全に離れて、勝手なことをやっているとかありますね。

だから、そういうのを見ると、やっぱり今の日本で外国人参政権を導入すればとんでもないことになると思いますし、仮に日本がそういった部分がしっかりしても、私は反対ですよ。というのは、そういうのがしっかり国防だの治安だのしっかりした国であったとし



ても、外国人参政権を突破口にされて、政治の方から世の中を動かして、社会をおかしくしていくという方向に持っていられないというあれがありますんで、逆に参政権というのはこの日本においては少なくともこの日本という国が続く限りは、導入してはいけないものと思っています。

## (8) 小括

A 氏の場合、拉致問題をきっかけにかなり劇的な転換を経験している。それまでは左派政党に投票していたケースは、12 名中 2 名だけであり、その意味で A 氏は相対的に大きな転換をとげたといえるだろう。

A 氏の転換の背景には、大きくいえば東アジアの地政学的状況がある。東アジア国籍が日本の外国人人口の約 3 分の 2 を占めるなかで、近隣諸国との火種がつきない構造は、近隣諸国に対する敵意が外国人に対する敵意へと変換される現実を生み出す。聞き取りを進めるなかで筆者が課題の 1 つとしたのは、本来は異なる両者が活動家のなかで結びつく論理・過程の解明であった。A 氏は在日が「たかる」という表現を用いているが、これは移民研究の常識でいえば反論する気にもならないくらい事実と反している。ネットで蔓延する聞きかじりの情報にもとづく根拠のない説を信じてしまうのは、「近隣諸国」と「在日近隣諸国民」を混同するからではないか——こうした仮説を筆者は持っており、両者をつなぐものに関心があったからである。A 氏の場合、歴史修正主義が両者の媒介になっているといえる。

A 氏にとって歴史修正主義は、単に在日外国人に対する憎悪を増幅する装置となっているだけではない。靖国神社への参拝や地産地消の試みといった形で、積極的にアイデンティティやライフスタイルを構成するものともなっている。こうした感覚は、必ずしもほかのメンバーに共有されているわけではなく、A 氏の方が自己の深いところで転換をとげたとみることでもできるだろう。

そして認識上の転換を行為にまで変換させたのが、インターネットという基盤であった。最初に A 氏が街頭に出た人権擁護法反対の活動では、ネットでしか知らない人同士が集まり、警察に不審がられたというエピソードまで披露している。在特会は、こうした形態の集まりに明確な目的をつけて、会のホームページと動画を整備することによって組織化されたものだといってよい。在特会に入る人たちの動機やきっかけ、社会的な背景には一定の多様性があるが、インターネットから活動に誘う動員構造の効果については、ほぼ全員が共通して経験している。こうした新たな動員の回路の構築については、右派が左派に先んじており、排外主義運動の出現のタイミングの少なくとも一部はこれで説明できると筆者は考えている。だが、それを学習した左派の側も動画配信などは始めており、インターネットは単に極右（ネットウヨからリアルウヨへ）を利するばかりではない。組織動員が難しくなった現代において、新たな動員構造として機能するのがインターネットであり、東日本大震災後の反原発運動が実現した大規模な動員との比較で分析することも可能だろう。

## 2 「心震える歴史」を経験したB氏の場合

### (1) 政治に対する関心

全くなかったです。大学時代までは全くなくて、そもそも社会とのつながりを自分と当てはめたってのはあまりないですね。極端な話をしてしまうと、就職活動を大学時代にやってみましたけど、それもやっているというのがいわゆる言い訳みたいな感じで、あまり積極的に働くようなつもりもなかった。何がやりたいというのがないまま、もともと高校から大学上がったのもやりたいことがないから、何となく取り柄もないし大学行っとくか、という感じで行って。4年間の間で空手やったり運動とか、そっちの方面ではあったんですけど、いわゆるこういう方面で働きたいとか、こういった仕事したいというのがないまま、就職活動する形になって、面接とか当然落ちますから。そんな状態ですから。

で、あまりそういった部分では社会に出て何だかんだというのは、学生のとしまではなかったですね。それが幸か不幸か就職活動していくなかで採用決まって、そこに入ってそこで8年間働いて。その会社が3年前に倒産しまして、それからその破産処理とかやりつつ、再就職活動して3ヶ月後に今の現職の会社に入って。で、今に至るような。ずっと財務経理畑ですね。

なんで、元々はまったく新聞も読まなければ何も読まない、世の中のことにそもそも趣味的なこと以外で関心がない。ま、よくあるパターンっちゃパターンなんですけど。政治に関心持たないという意味では。

選挙だけは絶対行ってましたね。やらなきゃいけないものだと思ってはいたんです。選挙権の行使というものは。ただそこに何かの目的があったとか、こういった体制がいいとか、そういった形はなかったですね。多分、今選挙あって投票行かれる人って、ポスター見て顔の感じとか、いわゆる公約的な耳障りのいいものとか。基本的に若い時って反権力とかそっちのイメージでやっぱり物事考えることがあったんで、そういった何か偉そうじゃない人選んだりとか、そんな感じで投票でしたね。

(投票先は)昔から自民党だったんですね。政党としては、そうですね。あの、実家のほうが農村部で場所的に保守的な層が厚いところで、というのを子供の時からずっとそういうのを聞いていて、何となくそこで。自民党が保守政党とかうんぬんって、そういう発想自体がまずなかったです。結局、政治なんて数なのに、全員受かっても単独過半数取れないところに入れたってしゃあないでしょ、ていうのはありましたね。あと本当に農村部だったっていう。

ただ、働き始めてだんだん若い人、若いからいいっていう、まあもの考えていない年ですから、見た目と若いから何かやってんじゃないかというくらいで投票していた感じですね。元々は。

ただ、一つだけ今思い出したんですけど、学生のとときに薬害エイズって問題になって、それに関しては本当にニュースでも何でも確認したりとか、本読んでみたりとか、何でこういったことがおきてしまったりとか、そういうことは勉強しましたね。それが政治だとしたら、それが初めての政治とのかかわりかもしれないです。ただ、あの時自分の感情を今言うのだったら、政治の勉強しているというよりも、イベントをみている感覚に多分近かったと思うんですね。

『ゴーマニズム宣言』を) 薬害エイズの時には読んでいました。それ取り上げられているときは。あと母親の方が読んでたんで、たまにかいつまんで。僕、『お坊ちやま君』世代なんで、小学校3年生のときに昔の小遣いですから、小学1年で100円、2年で200円、3年で300円というときに、『コロコロコミック』が330円で、やっと自分の小遣いで雑誌買ったんです。毎月漫画本を定期購読できるっていうときに、ちょうど始まったのが『お坊ちやま君』で、その小林よしのりがまだ書いているらしいって、それが母親が居間に普段ずっといますから、そこに積んであったら何となく…。ただ、基本的にマンガって流し読みするものと思ってたんで、あの字を…かえてマンガにすることで読みにくくなっているのかな。その時はそんなに思わなかったですけど、ただちょうど自分がニュース見てこれはひどい話だと思った薬害エイズで、小林よしのりが絡んで、本当に考えました。

## (2) 外国人との接点

基本的に学生時代まではなかったんですけど。働き始めてから、最初の8年間働いたつぶれた会社で働いている時に、朝鮮系の方と関わるが多々あったという。取引先で。契約関係の看板貸しとかいろいろあって。

多分、これ言わないとわかりにくいと思うんですけど、私自身が元々入った会社がパチンコ店だったんです。それまでは逆に在日韓国人朝鮮人っていうのがそもそも日本にいていうのが、まずわからなかったです。で、取引する人とかそっちの方で関わって、普通の常識とはちょっと違う会社とかってあるんですね。やっぱり文化の違いといいますか。そういった部分で何よ、何なのあの人、と言ったらあの人は何人だから違うからって。

まあいろんな人いました。それこそ全朝鮮人韓国人が悪いってことはないんです。普段一緒に仕事して、一緒に飯食って、仕事でこれからどうしようかみたいな話ができるような人ってのは、当然それだけで普通の日常生活はそんな悪い人なんていないわけですから、普通の人間関係なんですけど。僕の中でやっぱり上の世代の人、二世とかそれくらいの人たちは、やっぱり怖かったですね。単純に恫喝とかもされますから。いわゆる朝鮮系の方だったら、俺は朝鮮総連のなになにだぞ、というのはやっぱりあるんです。

で、そういったなかで、でもその時もいわゆるそういった人たちがいるってだけで、今の在特会に入るに至るまでのものの考えてのはまずなかったです。そういった迷惑なおっちゃんがいるっていうくらいで。

電話かかってきて「ぶっ殺すぞ」と言ったり。実際すごく恫喝するんですよ、やるときは。僕ら外の人間だからしなかったですけど。いわゆる朝鮮学校をずっと出て学歴なく、在日同胞の門を叩いて渡って行って、知り合い関係がなかったら仕事できない。そこでうまくいかなかったら、もう死んでしまうしかない。そういった世界の話っていうのを——後からその話を聞いて「だからあの子死んじゃったんだ」というのもあったんですよ。

とある関連企業で一緒に仕事して、設備関係の仕事をしていた。そのときに、設置してその機械がうまく動かなかった。「何で動かないんだ」と恫喝したら、その子が死んでしまったと。目の前からいなくなったのかどうかかわからないですけど、「お前らのせいであいつは死んじゃったんだ、どうしてくれるんだ」とよくわからないことというわけです。

「お前らのところでつけるときに間違っただのを、俺が怒ったら死んでしまった」。言われたほうもわけわからないですけど、ただそれはないだろうと思ったけど、後で門叩いてやっ

と仕事見つける、そこで切られたら生きていけないというところで切られてしまった。そういったこともあったのかなあって。自分がふれてた世界のことをあとから自分が話聞いて、ああこういったことだったのかな、という風に僕の場合は特殊ですよ。実体験からですから。

（在日特権と実体験との関連）それは関係ないです。ただ、そういったこと荒っぽいところする人たちが総連系にいるっていうことは間違いないです。僕はそれ（在日特権）じゃないというか。居候の意見を通そうというわけじゃないですか。当の日本人だって、この国がどうにかなったときにちゃんとケツもって何かできるのかわからないのに、その時に人にやられてるか。特権云々とは関係ないですね。一緒に生活して、それこそ仕事して、普通の生活してて、そこに何も問題はないですね。利益集団ってことですね。

基本的には在日が怖いからだと思うんですよ。パチンコで換金が認められてるのも、国税調査とかもそんなに厳しいものが入らないという話もありますし。その怖さを担保にしたという部分で、その形がしっかりとシステムの中に組み込まれてしまったのが今なのかなど。あとわからないものに対する恐怖心とかってありますからね。実際怖い人はやっぱり怖いし。それは日本人もそうなんでしょうけど。

### （3）在特会へ

#### 《心震える歴史》

本当にひょんなことなんですけど、いつだか覚えてないです。ただ9月の雨が降っている日ですね。何かあの、基本的に戦後教育を受けて生きてきたなかで、台湾の人たちが一リアルプレイヤーかなんかで聴いたと思うんですけど——ネットで話してたんですね。昔の日本っていうのはこういったもので、こういった歴史があって、それに対して今の日本人は昔のことを悪く言うばかりで、という話があったんですね。そこで、ちょっとその当時（家に）ネットもありましたし、本屋にいったらいくらでも本もありましたし、そっち系の本を読んだときにそれまで教えられなかった心震える物語がこの国にはあったんだ。そういうことを思ったときに、そういった国を貶めているのは一体どういったものなのか。

で、その中でいわゆる反日左翼って我々が定義している集団、民団・総連とか、それを支援する日本人団体とかっていうのが出てきて、ていう感じですね。だからきっかけ自体は自分の身に何かあったとか、接点はありましたから、元々素養というか人よりは外国人と触れることが多かったのかなとは思いますが、うまく話できないですね。ただネットで聞いたラジオそれ一個きっかけで。李登輝さんと誰かが話しているやつだったと思うんですよ。その時のことだけは妙に覚えているんです。日本人から言われたのではなく、外国人から言われたっていうのが大きかったと思います。

ネットで個人の人がデータを置いてたんでしょうね。何でそれを見たのか、何でそれを聞いたのか。興味持たなかったら、政治関係のサイトなんてアクセスなんてしないですから……。ただ何となくそういったのを拾っちゃったんでしょうね。拾って聞いてみたら、何か急に心震えるものがあった。そこから勉強をちょっとずつして。ネットからとって本を——図書館行ったりとかですね。以前住んでいるところが非常に図書館から近くて。車で10分くらいのとこだったんで、ちょっと行って。ネットで調べてそれを検索かけて、あつたらそれを読んで。なかなかタイトルとか覚えてないんですけど。

基本的に我々受けてきた戦後教育は、いわゆる明治期以降ってどんどん暗黒の時代に向かっていくという流れで、その後昭和 20 年の敗戦でもって解放がされたというのが基本的な流れで教えられてたと思うんです。それこそ教科書の最後なんてまともにやらなかったですから、本当に駆け足でこういったことがあってこうこうで、本当にひどい時代があったけど……。戦争には負けたけど、そのお陰で憲法 9 条のようなすばらしいものができて、当たり前前に考えたんですね。

そこがもとでいろんなこと自分で考えたときに、その暗黒の時代だったといわれている昭和初期から戦中のときにちょうど戦争に行ったか行かないかっていう世代が、僕らの祖父の世代ですから。うちの場合は両方とも戦争には行ってなかったんです。父方のほうが、足がない人だったんで、もちろん徴用されなかった。母方のほうが訓練中に終戦を迎えたとかだったんで、行ってない。そうした戦争体験とかに関してはかなり希薄な部類だったので。原体験としてそういった人の話を聞くこともなかったです。本当にラジオ（だけ）ですけど。

#### 《在特会へ》

在特会に入ったのが 2007 年の 11 月くらいなんです。メール登録して。もろもろやっていくなかで、李登輝さんのラジオ聞いて、本なんか読んで、そういったものをネットで探した時に、今の会長の桜井が昔ネットラジオ「不思議の国の韓国」ってやっていて。それをネットダウンロードして通勤とか出張とか外回りするときに、そういうの聞きながら動いたりしてたんですけど。なんで、それを一番最初に聞いたのって、そのネットラジオって結構前からやってたんで。2 週に 1 回の更新で。それからいったら 2005 年くらいですかね。そうだと思うんですよね。その当時は在特会じゃなかったんですよ。そういったことを会談形式で 30 分とか長ければ 1 時間の番組をずっと流して、それを聞いているリスナーだったんですね。そのまま在特会立ち上がった、じゃあ入ろうかって。

結局在特会に来る人たちって、在特会しかなかった。ネット主体で入れる場所が在特会しかなかった。選択肢はそもそもなかった、あの当時。という感じですね。何で入ったかって聞かれたら、そこですね。(隣にいる)〇〇さんは、桜井さん知らなかったんですよ。ネットラジオ聞いてない。そこに集まった人でネットラジオを聴いていたのは僕ともう 1 人くらい。

(入会は) そんなに何か考えての行動ではないです。一番最初が、集まったのが、2008 年にとりあえず酒でも飲もうかかっていう感じで。普段こういった話をするのしない人間がいない人間が一同に会したわけですから、まあ盛り上がるわけですよ。年齢層も広くて、その時は僕が一番下のほうでしたね。僕の中ではネット右翼だから若いのしかいないと思ったら、おっちゃん、おっちゃんばかり。え、何この集まり？

(最初に居酒屋で集まったのは) 集まろうと言われてたら集まるんです。一応何かしらの流れであっても入って、そういった人間が集まるんだったら、そういった人と話ができるってすごくいいと思って。僕、結構人好きで、人に誘われたらどこでもひよこひよこついていく。そういった集まりで、しかも普段そういったこと話する仲間も周りにいない。それで集まろうと言われてたら、僕の中では行くの当然なんですよ。

流れ的にはそんなに不自然じゃない。実際最初の在特会って何をするのか結局わからない

かったですから。支部に入っても、デモをするとか何だか抗議活動するとかなく、基本的には講演会、勉強会。でも勉強会って確か1回だけだったんですね。2008年の3月頃にどこかの一室借りて、外国からみたなんか日本史みたいな講義を——確か前支部長の方でやられて。そもそも在特会が、今まで嫌われるような知名度もないですから。何もしてないですから。会長が街宣をやったりとか、というのだけで、一般参加者が集まってのなんちゃらってというのは、まだ最初ななかったです。

勉強会やって飲み会、5時からつぼ八で11時までやっちゃう。その時は激論ですよ。その後初めて、桜井さんが講演会をやったんです。そのときまだ12、3人しか集まらなくて。その時も、勉強会で具体的に外で何かするってのはなかったですね。ただその後、今いるメンバーで大体ば一んと揃って。今一般で参加されているご夫妻とか。教科書を作る会の人とか。そういった人たちが集まったのがそのときで。そうしたら、僕らはそういった界限を知らないんでわからないですけど、彼らの中に基本的に狭い社会できあがってるから、ああなんているんですかみたいな感じで話されているのを僕ら見ている、何も分からない。

集まっている人っていうのが、基本的には以前から何かやられている方で、新しい歴史教科書を作る会とか、そういうところから以前からやられていた人とか、すごい勉強している人とか。なんで、僕最初に在特会に入った頃は、「お前は左翼だ、その考え方は左翼だ」って半年くらいは言われてた。で、結局それがよかったんですよ。みんなで意見ぶつけて話して、それでその人が言った本を改めて読んだりとか、そっち方面勉強してみようっていうところで、やっぱりいい稽古なんですよ。そういった酒の場で話をするって。その中で話したことをいざ家に持ち帰って、考えてみたときに、納得いけるものは納得するし、納得できない理由を探すのも勉強するしかないし。で、本読んで。で、半年くらいたったらちょっとこの人がまた「こいつちょっとわかってきたな」みたいな顔して。でもその時に、「でもお前は話し方が左翼だ」って。でもそういった感じで話していくのが、お互いの元からさらに勉強して高めあおうっていう。

その後はチベット問題というのがあの頃クローズアップされていて、それに対する抗議活動を行おうというんですね。中国に対する脅威だとか、これからこういったものを認めるときに起こりうる状況っていうのを顕著に示しているのがチベットである、ということで考えたときに気持の中で勝手に連帯しちゃったんです。「今日のチベットは明日の日本」だっていうキャッチフレーズがあったけど、あれはその通りで。そんな簡単に、そんなことにはなるはずはないんですけど。そんな弱い国じゃないですから。政治的にも、ポテンシャルでいっても。ただ、もしそうなってしまう可能性が万が一でも発生するようなことは、しちゃいけない。実際にそういった国があるわけですよ。そうなってしまった国がある以上、応援したい。

#### 《勉強会から街宣へ》

そこ（飲み会）で話をして、その後に、その前後ですかね、初めて外での街宣活動をするってことに。デモの参加者を募るためにビラ撒きやって何してってところで、いったんパンと人が飛んだところはあるんです。それまできている、飲み会でといった人がいなくなっちゃって。

そのハードルをクリアできたのは経験者で、ノウハウ——いわゆる警察に申請出してなんちゃらって。実際にこういった人が来たらどうするかとか、それこそ昔ながらの民族派の人たちが来て「お前のしゃべり方はなっていない、マイクかせ」となったときにマイクをどうやって取り返すか。そういった現場の経験があって、僕らはそれに乗かって。

僕らのときは学校の時に、宗教の話と政治の話は会社にいったら絶対にしちゃいけない、あと野球。摩擦のもとになるから、と学校で教えられませんでした？ 小学校の時はなかったですけど、中学高校のときですかね、そんなこと言われて。言われたので、逆に言えないんですよ。そうやって育ってきているから。そんなにまじめな学生じゃなかったけど、そういった教えて意外と骨身に染みてというのがあって。やっぱり、日の丸の下に我々は集うわけじゃないですか。だけど日の丸に集うというのは基本的に悪いイメージの右翼が作ったのであって、あまりよろしくないんだっていうのが学校教育であったわけで。

そのときに、僕は頭の中では日の丸のもとに集うべきだということをわかっていたし、そうすべきだと思ったんですけど、体が一瞬躊躇したんですね。ああ、あそこにいるみんながそうだこれからデモだっていうときに、いったん止まっちゃったんですね。そっちのこと自体がすごいショックでしたね。だから、戦後教育大成功！ だから僕はその会場に入るまでに一周しました。じゃないと向かえなかった。あれは自分で全然考えたことも、そうするのは当たり前だと思っているのに、いざやろうとしたときに自分の心と自分の体が本当に乖離して。そのことが一番ショックだった。

(街宣をしたのは) 広めたい健全化したいと思って、「ああそういったことできるんだ、じゃあやりたいなあって」。…それ(葛藤)はやっぱりありますよ。やっぱり私も普通の会社員ですから、それこそ人事のほうに(情報が)入ったら、もしかしたら「ちょっとこいつ面倒くさいから、ここで離すのにちょうどいいってやっちゃえ、さすがに沖縄まで行ったらそういうことしないだろう」って。やっぱりそういったのは過去の経験っていうのが、昔の学生運動家が、がちがちの共産主義系のローカルユニオンとか、そういったのができたときの大変さを知っている企業だったら間違いなく受け入れないですね。

(ハードルを乗り越えたのは) 広めたいから。今もそうなんですけど、ばれてやばいとかいうよりも、面倒くさいな…。やっぱり会社員としてのあり方とか、人事から何か言われた時に。今もそのつもりでやってるんですけど、人から文句言われただけ仕事したら、休みなんて何やってもいいでしょ、支障きたしてないでしょ、だから休みだって来るし。なんで、今仕事たくさんしているのも、やりたいことをやるって決めたので。でも基本的に「こういったものを世の中で健全化させて、何とかしなきゃいけないよね」というところが、もともとの集まりじゃないですか。設立の段階でも、そういった趣旨でやっているわけですから。

その時に街宣とか街中で物事やるとかいうことに対して、全然自分のなかにまったくないものだから想定ができないわけですよ。やってみたら、まあなかなか大変だったり、通行人の人にビラを渡して、目の前で破られたりとか、普通にありますよね。でも、やっぱりこういったことをやらなきゃっていうか、やった損得じゃなくて1人でもいいから伝えたいっていうのはありますよね。賛同しなくても考えてくれればいいと思うんですよ。なんで、そこに至って街頭でビラまきするってことに対しては、正直何もなかったですね。

ただマイク握る時は本当に(葛藤が)ありましたね。マイクを握るっていうのは、人前

でしゃべるとそれだけで違いますよ。もともと上がり性だったのですが、そういったもので。あと、そんなに人前で立派にしゃべれるような立派な人間じゃないっていうのが心の中であったりするし。でもそのことに対して何かいいたいことがあったら、やっぱやるんですよね。

集会の場は楽です。集会の場でしゃべるのは、基本的に仲間達ですから。ただ、それと公に対してしゃべる時の街頭マイクってのはずいぶん違いますよね。デモ…大変ですよ。デモで前でマイク握るって、その人たち背負って、自分達の意味を伝えているわけじゃないですか。ヘンなこと言っちゃったら、それこそその人たちに恥かかせることになっちゃうし、という風に思いますよね。ただそれと同時に、基本的にみんな聞いてませんから。

基本的に右であれ左であれ、デモ活動ってのは基本的にはみんなうるさいものなんですよ。左の街宣車でも、憲法9条守れっていう街宣車でも、軍歌流して日本の国体を守ろうと言っている右翼の人の街宣車も、興味のないおおむねの人からしたらただうるさいだけなんですよ。たまに意見をもっている人が拍手してくれるか。それか罵声を浴びるか。でもその声自体にも意見が何かしらあるっていう意味ではいいと思うんです。左の人でも真剣な人だったら全然話せると思いますよ。少なくとも、そういったことに対してもの考えるって。

あるかないかって、最終的には何かあると思うんですよ。それこそ子どももっている親御さんとか、これからこの国どうなるんだって。僕は子どもがないからああよかったな、将来日本が悪くなくても別に知ったこっちゃねえよ、という悪い冗談も出てくるんですけど。そういった皮肉が言いたくなるような今の状況を何とかしたいと思うのですが、何ともならないんですよ。でも、何ともならないから何も言わないないもしないかといったら、それもなんか癪なんですよ。せめて石の1個でもぶつけてやりたいとか。それを具体的に何かしようと思っている人たちが、こういった運動のなかから市議に手を上げたりとか、そういった流れが出てきているんです。なので、これからこういった運動がもとで考える人もいれば、やっぱり運動があると人が集まる、人と話すことによって勉強する。1人で本読んでも、やっぱり政治って扱うのは人ですからね。いろんな人がいるってこと、一緒に遊べる人がいるってことはバカにできないなって。

ただ、こういった活動、こういったデモ活動とかやっている団体が、これから抗議に行くぞというときに、それが担保になると思うんですよ。実際ネットみたら、こういった面倒くさい奴らが来る、そういう土俵じゃないと行政に行つて話聞いてもらえないですよ。

#### (4) 外国人参政権と愛国心

(外国人参政権に反対する理由) いったん引き受けてしまった責任って2度と逃れることができないんですよ。会社と違って、国ってリストラできないじゃないですか。よく議員になるとかって人は、会社の経営やっててマネジメント能力っていいですけど、マネジメントって結局その状況に合わせてあり方を変えていくっていう。ただ、日本人リストラされちゃ困りますからね。いきなり「あんた国籍ないよ」って放り出す。

それが僕はマネジメントだと思うので、そこでできないことをやっちゃいけませんって、



昔母ちゃんとかに言われてやったことだと思うんですよ。人を引き受けるって、やっぱり僕は仕事上お金いじって——お金というのとはことん現実ですから——ないものはない、払えないものは払えない。給料払えなかったら、怒って外の対立する会社よりも中の従業員のほうが怖いんですから。それに給料でなかったら怒るのが当たり前ですし。そういったなかで引き受ける責任を果たす能力がそもそもあるのかなのかってところで、僕はやっぱり根っこだと思うんですよ。根っここの国、自分が何者なのかって、結局そこからよきにしろ悪きにしろ離れられないと思うんです。

以前1回だけこういった話って聞かれたことがあるんですよ。××会というところに入りしていた人がいて、その人からマクドナルドで30分くらい。あなたは どうしてこういう風に考えるようになったんですか、ってずっと問われるなかで、言葉に頼ってしゃべっているんですよ。例えば我々が出す反日左翼とかっていうキャッチフレーズとか、例えば反日左翼の中身を説明できるかっていったら、意外とできなかつたりするわけですよ。

そういった言葉に頼っている。でもそのことっていうのは自分のなかでおぼろげながらしっかりやって、それがこの国で生まれ育ってこれまでの経験のなかで、言葉にできないながらもできてきた何となくのものだと思うんですよ。この何となくってものから逃れることって、ずっとできないと思うんですよ。あくまで感覚ですから。で、その感覚を大事にしたいなって。それが僕の中のこの国が好きだ、まあ好きか嫌いかってそもそも論ずるものじゃないっていうものの元なんですよ。しょうがないんですよ。こういった風にできあがっている。

それが、国があつて家族があつて地域があつて、まあ昔牛舎にいた牛も含まれますよ。やっぱり命を考えるとというのは、母方の実家が稲作農家で、肉牛を2頭買っていて、そんなに広い田んぼだったんで2頭いて堆肥のため糞をとって1m積み上げるんですよ。糞があつて、それを発酵させて、それをトラクターの後ろに荷台くっつけてそのうえにわんさかのせて、それをフォーク使ってわさわさ撒いて土を作つて。基本的に肉牛ですから、2年たつたらいなくなるわけですよ。で、お迎えの車が来て、お迎えの車には次の子が来ているんです。そういったところに、そういった日に呼ばれて、何かちっちゃいのが来たから、子どもはちっちゃいほうがかわいいですから、そっちをなぜている間にああ行っちゃった、どっか行っちゃった、引っ越すんだ。で、それを食っちゃったって気づいたのは小6の時。広義でいう食っちゃったです。食肉ですから。でも牛おいしいんですよ、牛肉は。

なんで、今の僕って必然なんです。酒飲んで恥ずかしい思いをすることがあるのも。会社つぶれて悔しい思いをしたのも。そもそもこの国に生まれたのも、父ちゃん母ちゃんから生まれたのも、全部必然で偶然はないと思うんですよ。そう考えた時に、そもそもこの国を好きか嫌いかっていうのがたまにあるじゃないですか。あなたは日本が好きですか、そもそもそういった問いがナンセンスだから。好きであれ嫌いであれこの国で生まれ育つた以上、愛すしかないと思うんです。

結局、僕は今在特会にいますけど、別に正直在日嫌いなわけじゃないんですよ。今でもちょっと友達と一緒に飲みに行く韓国料理が在日の人のお店とか。本当においしい店なんです。そこ行ったりするし。よく飲みに行くんですよ。一つの店にずっと行っているんですけど、そうしてたらそこに来るいろいろな人と話したりして、一緒に遊びに行こうかと

なったり。その人の関係で別の店に連れて行ってもらって、いろいろな話したりとか。そういったのがあって、今行っている在日のおばちゃんがやっている居酒屋も、その関係で行って。これがなかなかおいしくて、本当にいいですよ。

在特会といったら本当に意地でも韓国人のやっている店なんか行くか、という人もいます。そうやって肩肘張るのは逆に面白くない。日常生活と活動って全然違いますから。おいしいものは誰が食べたっておいしいし。いい人は何人であってもいい人だし。そもそも考えない、何人がやっているとかそんなこと考えない。うまいかまずいか、ただそれだけであって。あと店の人がいい人かって。

同僚とは（関係する話を）しているって言ったらしてたし……。まあ、全部が全部出しにくい環境ですから。いわゆる在日社会で仕事してたわけですから。実際働いている人はほとんど日本人なんですけどね。ただ経営者とか、メーカーの営業さんとか、そっちのほうにそういう方がおられて。僕が知る限りでは、一緒に働いている同じラインで仕事している勤め人の中で、ヘンな人そんなない。ただ、昔の人は恫喝も、本当にあいさつみたいな世界ですから。「よう、元気か」みたいな。そんなの言われて、そういった中でやっぱり、「どうよ？」って。

結局、日本が嫌いだ嫌いだって壊している人間が嫌いなだけなんで。そのわかりやすいのがその当時在特会に入ったときには、民団・総連という外国勢力であり、今でいったらそういった集団とタッグを組んでいる日本人の団体も含めてです。結局根っこは否定できないです。それは頭で考えてなんちゃらって、そういう堅苦しいの嫌ですよ。できないです。僕は頭悪いから。もう理論では生きてられない。

なんで、僕は国家観とか正直ないほうだと思うんですよ。どういったことがあって、こういった歴史があって。そうじゃなくて、そういった話を持っている国に生まれたこと、だけなんですよね。だって国家とは何かって聞かれても、正直システム論の話もできませんし。ただ今まで経験してきた中で、そう思って今ここにいていう。そして気づいたらもう3年以上経っちゃった。そんなに難しくは僕は考えてないですね。他の人はいろいろ歴史的経緯とか、いわゆる皇紀2670年、日本の歴史といったものを国家神道とかそういったものを勉強しつついられているんで、僕よりは皆さんすごいんですけど。僕はそんなに……。勉強はしてるんですけど、基本はそこですね。

## （5）活動による変化

### 《活動により得られたもの》

デメリットはたくさん出てくるんですけどね。まず、この活動を始めて外で一番最初に話したときに、そのとき付き合っていた彼女と結局ダメになっちゃったんです。そういったことする人はダメ。それまで6年ちよい付き合っていた。それこそ街頭で会社の人に会ったら面倒くさいな、とか。面倒くさいけど、それはそれなりに大人なんで対処するんでいいんですけど。デメリットはたくさんあってもメリットはないですよ。そもそもこういったことで、僕らは別にお金もらっているわけでもないし。むしろ趣味の時間とかどこかに遊びに行くとか時間を、こういったことで使って。その準備のために使っているし。

良かったことを求めてやってないから、考えたことないですね。ただ会として物事を動かしたときに、結果が出るときには嬉しいですね。やっぱりこういったことやっている、

世間様からしたらネガティブな視線がありますから。その意見がどうこうではなくて、ただこいつは面倒くさいって。ものをいう奴は面倒くさいんですよ。

気に入らないものを気に入らないといたい。それぞれスタンス違うと思うんですけど、住民監査請求とか具体的な政治的な行政に手続きしている人もいて、僕の中ではそういったことができる能力があればやりたいと。そう思うけど、それ以前に気に入らないものを気に入らないといたいんです。で、いっていくなかでそういった集まりだからこそ、そういったことをいっていくなかで何かができるんじゃないか。もういろんな集まりですから。職業にしても、立ち位置にしても。住んでいる地域、職業、社会的な立場、全部違う人間が一箇所に集まっているのですから。その機会があれば、何かできるかもしれない。ただ、今それはなかったとしてもこれからあと10年20年経っていく間に。今は何ができるかというよりも、これから何か爪あとを残せるかもしれない。そこの期待だけですね。世の中簡単に変わらないですよ。そんなちっちゃな国ではないし、そんな弱い国でもないし。

景気がそんなに——今はもうひどいですけど——2002年03年に中小企業にお金貸しなさいとか、そういった指導があったときに、やっぱり現金商売だからパチンコ店というのは。資本金1000万円くらいでできるんですから。中小企業融資やってますよ、といういいわけのために使い易い。そういった取引する中で、銀行のほうからパチ店のほうに、そこで不良債権化した土地があるから使ってみないか、そういった話とかもあるわけですから。パチンコ1つ崩すんだって、いろいろなところがガツッと固まっちゃっているんですから。役員みたって元警察という人もいたら、それこそ元銀行員でそこで出向のままそこで役員についてという人もいて。それだけで世の中簡単じゃないって見えてきますよね。

パチンコの売り上げ今21兆だとしたら、だいたい粗利15%でいったら3兆円が手残り。その中でいろいろなものやっていくわけですよ。人件費払ったり機械代払ったり土地代払ったりとか。その中で自分もその仕事して、給料も一部入っているかもしれないって、その仕組みの一部ですよ。だからそんなに簡単じゃない。簡単じゃないけどでも、こんなこともあるよね、とずっといってきたのは事なかれの話で。それで何か悪くなるかもしれないけど、貧乏になるかもしれないけど、言わなきゃいけないことは言ったほうがいいんじゃないか。

で、もしかしたらこれから何かができるかもしれない。今はいろいろと何かやって、あちこちでお騒がせしているみたいになっているけど、日本がさらに悪くなったら……こういたったところは、それなりの意見を持っている時に来ると思うんですよ。その時に入る（入会する）んじゃないくて、常にいて匂いを感じる癖を持っていないと。今何もないから離れちゃおう、とかそういったものじゃないと思うんですよ。1回入っちゃったからには。そういったことに興味持った自分、消せないですもの。もし僕が今、在特会をやめたからって、世の中の政治のことに興味持たなくなるといったらそれはないし。意見がおおむね一緒であれば、正直一番最初に入ったところでいいんですよ。ちょっとの意見を違っても他の団体に行ったりとか、あそこはダメだとか他に行ったりとか。おおむねここで僕は満足している。自分で選んだ立ち位置ですから。

## 《投票行動の変化》

僕は変わりますね。それは変わります。真剣に調べますね。もうちゃんと告示されたら出てくるじゃないですか、私の公約はなんちゃらって。そういう人間をグーグル検索かけて、それで実際過去の前歴がどういったもので、どういった思想信条かってのを調べたうえで選択、その中でマシな選択をする。手伝いができるんなら、つまらないことでも手弁当でやったりしたいんですよ。行けるのだったら行きたいですよ。ただ、行きたい人ってなかなかいないですね。政党、関係なくなりましたね。人です。

比例区は別ですね。困るんですよ。今回でいったらたちあがれ日本ってのは、多分我々の……こういった流れでいったらあったと思うんですけど。基本的に力になりえない数ですね。ただ、死票か云々かって実際関係ないと思うんで。そこからスタートすればいいじゃないですか。それしかとれなかったって。じゃあ、取れるように今度はこういったこととして。で、死んだとしても自分の意思ですから。逆に死ぬことを恐れて全然関係ないところに入れたって、それこそそれが一番死んでいると思います。意思表示という点で。

#### 《外国人に対するまなざし》

(在日コリアンより) 中国系の方が怖いですよ。実際にやっぱり無茶するんですよ。栃木に店があって、栃木ってすごい宇都宮の中で多くて、いつも来るからか昔ゴト師って悪さしてメダル抜いて換金するのが、捕まえようとしたら逃げるんですよ。ただ、中国系になると何かしてから逃げるんです。この距離(20センチくらい)で催涙スプレーかけるとか。それこそ刺しちゃう、ナイフで刺すとかってこともあって。そういったことで触れていくうちに。あとそういったゴト師に対して弁護士ついたって、中国人(のケースが)初めてですね。僕は預金担当だったんで、預金管理とかしてよくわからない入金があって、何これ?としたり「こういったことがあって示談金」。ゴト師に弁護士がついて示談がついて。どうなってるの? と。

まあ、不法入国じゃない学生ビザで働いている人もたくさんいますよね。あれ違法なんですよ。で、そういった人を常勤で使っている人を知っていて。まあその人は別にいい人だったんですけど。ただ、いい人かどうかでフィルターかけられない以上、一律ダメって言っちゃうしかないですね。本当に怖い連中は怖いので。それこそこの距離で催涙スプレーやられたら、いくら催涙スプレーでも視力を奪われたりするんですよ。眼球痛めますから。そういった姿を現実に見てきた以上、中国人は嫌いとかって思うよりも怖いですね。何しでかすかわからない。ただそれと中華屋でちゃんと働いているおっちゃんとはまた違うわけですから。

普通に生活してたら、韓国は話の種にならないですよ。中国はなるけど韓国って別にあるかっていったら何もないし。(でも中国関連の団体はないので、外国人関係でいえば)基本的にここしかなかったって感じでしたよね。あのときみんな。だから僕は〇〇の会があったら〇〇に入っていたし。僕はそういったこと考えずに自分が入れるようなところができたっていうのが、ただ一番最初に在特会ただただ。その前に××知ったら××に入っていたかもしれないし。

#### 《拉致問題について》

(それ以前の拉致問題については) ひどい話だと。ただ自分とは接点ってなかなか持て

ないし、その時は持てなかったんですね。(現在の認識について) 僕は、横田さんが拉致された3ヶ月か4ヶ月後に生まれたんです。で、そういった部分で言ったら、僕はこうやって今まで生きてきた、三十何年と彼女が拉致されて生きている三十何年と考えた時に、三十何年という時間がその人にとってどういう時間かって、やったことがないからわからないですけど。何というか、単純に理不尽なんですよ。人の時間が取り上げられるってことが。

## (6) 小括

B氏は、自ら「人好き」と称するように人当たりの良い、誠実な印象を受ける人である。「やりたいことがない」という悩みを持つものの、交際相手もいて「正常人口の正常生活」を営んでいたといえるだろう。彼の場合に特異なのは、パチンコ産業という在日コリアンのエスニック・ニッチで働いていたことであるが、それ自体が在特会への参加に結びついたわけではない。彼をして「国家」や「保守」に眼を向けさせたのは、「心震える歴史」であり、つまり1990年代から蓄積されてきた歴史修正主義運動という右派にとってのインフラであった<sup>12</sup>。

ただ、B氏のその後の行動で興味深いのは、ネットでみるだけだった状態から飲み会に参加することで「同志」と知己を得たことである。デモなどに参加する以前に、類似した関心を持つ人たちが集まる機会があり、「人好き」だから参加したという。そこで話は大いに盛り上がり、B氏は活動家となっていく。在特会のデモなどをみると、確かに社会生活を営むのに困難を来たすであろう人たちは、一定割合で存在する。だが、それをもって「社会の縁辺で暗い情念を持ってネットに眼を凝らす」担い手像を描くのは誤りだろう。そうした人たちは、在特会のなかでも周縁的な参加者である。デモの申請や集会会場の確保、会計、各種連絡といった組織運営を担っているのは、B氏のような「正常人口の正常生活」を営む人たちであることが多い。

その意味で、不安や鬱屈した心情といった剥奪による説明では、社会運動論の学説史としてのみならず、現実の理解として不十分である。問題は、そうした人たちがなぜ在特会にひかれ、多くの事実誤認と曲解にもとづいて「在日特権」を糾弾するのかであろう。この点については、別稿で少しずつ論点を提示していきたい。

---

<sup>12</sup> 筆者は調査に着手する際、歴史修正主義と拉致問題が在特会への参加動機の背景にあるのではないかと考えたが、それに加えてワールドカップが韓国嫌いを生んで在特会に連なっていた(別稿参照)。

### 3 「鬱憤晴らしじゃつづかない」C氏の場合

#### (1) 政治への関心、外国人との接触

(政治への関心は) 高校生のときから持っていた感じですね。高校生のときに自衛隊のPKOのああいふ派遣のところから、ずっと関心を。で、もともとはいわゆる保守系の思想ではなかったんですよ。いわゆる、天皇陛下に対する考え方も違ってたんですよ。ずっとそれが根っこにあって。

(PKOは) カンボジアの派遣のとき。あの時に、いろいろ左側が盛り上がってたんですね。正直いって。自衛隊はいらないとか、自衛隊はなくせとか、今でもやってますけど。自分ももともとそういうような目で見えて、自衛隊っていうのはやっぱりいらなんだって。これだけみんなに迷惑掛けて、先の戦争でも迷惑かけて、また日本は行って何かやるのかって。軍隊なんか派遣してどうするんだって。

自分もPKO反対の署名活動にちょっと名前書いたり、やってたんですよ。活動には参加しなかったですけど、名前書く程度でやってましたけど。その時にはやっぱり自民党がね、当時の政権与党を嫌ってたんです。どちらかという和社会党的な、社民党的な立場、社会党的な主張です。まったく自衛隊いない、憲法守れ、9条守れって。まったくの9条論者でした。

(選挙には) 欠かさず行ってますね。当初は、僕が選挙権を持ったときは民主党(が投票先)でした。民主党ですね。やはり民主党でなければダメだろう。まあ自民党はダメだから、民主党が勝ってこの国が変わるのなら民主党に入れよう、というような感じでした。うちの親とかには「民主党いいんじゃないかい」。全然政策とかはまったくわからないままで、民主党に1票入れたら、民主党に入れたら自民党も落ちるからいいんでないか。では民主党に入れてみようや、って入れていった。〇〇さん(民主党議員)が強いじゃないですか。〇〇さんが何かやってくれるんじゃないか。地元の選挙区じゃないですか。〇〇さんという大看板があるから、強いですよ。だから皆、民主党に期待している。

自分が保守系のほうに変わってから、やっぱり自民党(が投票先)ですね。(郵政選挙の時には?)あの頃の時には民主党です。迷ってました。そこから変わっていったんですよ。たちあがれ日本という新党ができた時には、たちあがれ日本ですね。小選挙区はないですから比例ですね。小選挙区は自民党、できればたちあがれ日本というかたちです。

(外国人とは)もともとそんな接するような場面がなかったですね。職場でも学校でもないです。

#### (2) 歴史観の転換

##### 《コミュニティFMとの邂逅》

ある時に、FM局でラジオ番組がやってたんです。コミュニティFMです。車で配達しながら聞いたものですから、普段はほとんどAMなんですけど。自分はテレビよりもラジオなんですよ。テレビはあまり見ないんです。ラジオなんですよ。何しながらでも聞けるじゃないですか。テレビだと画面見なきゃいけない、ラジオってのはいろいろな作業しながら聞けるんで。そういうのは慣れちゃっているんですよ。だから家にテレビあるけど、テレビつけっぱなし。ただにぎやかしてつけているだけです。

(その FM を) ずっと聴いてたら、日本、いわゆるあちら側がいう太平洋戦争に対しての見方がちょっと自分とは違って、これは何なんだろうな、ということできっと調べて…。

(その FM は) 保守系の立場です、どちらかというところ。左からも意見来るんだけど、意見とかいろいろ戦わせていたんですよ。FM 番組、その人のそういう話をいろいろね、再放送でいろいろして、そうじゃないんだぞってというようなことをずっと訴えていたんですよ。戦争とか国の歴史ていうかそういう話を取り上げて。自分はそれをみながら仕事もやってましたんで、時々しか聴けなかったんですよ。だからいろいろその、聴けることはネットで詳しく検索するなり自分で勉強して行って、知識を頭に植え付けて。

ああそうなのか、こういう見方もあるのか。左の人たちが言っている、日本は侵略戦争して他の国にいっぱい迷惑をかけて、だから日本はずっと償っていかなくやならん。そういう考え方からちょっとずれてみたら、また違った真実の歴史っていうのが見えてきた。歴史っていうのは勝ったほうが変わっていくものだから。僕たちは負けたけど、伝わっていることって文書で残らない口で伝わっていることってのはあります。

祖母が生きてましてね。祖母にもいろいろな話を聞いたんですよ。出征のときの話とか、アメリカから空襲を受けた話だとか。それでも悪いことしたって言わないんですよ。「お国のために」っていう。皆そんな風に思っている。お国のために戦って、みんな私の同級生も近所の人もお国のために死んでいった、というんですよ。やっぱり祖母の話も大きいですよ。

聞いたんですよ。ばあちゃんどうだったんだい、昔のことを思い出されるけど。淡々と話してくれましたね。祖父が軍隊にいて写真も見せてくれたんですよ。馬に、白馬に乗って日本刀をこう差して、凛々しいんですよ。親戚も海軍にいて、海軍にいた親戚の写真ってのも見せてくれたんですよ。で、その人も死んだ。だけど、全然そんなこの国が悪いことしたなんて思っていないよ、と言ってましたね。5、6年くらい前の話かな。ちょうど亡くなる前だからね。僕が在特会に入るだいぶ前なんです。

#### 《ネットでの情報収集》

その当時はインターネットをやり始めてた頃なんで、インターネットでいろいろ検索してみたら、テレビでやっていることと実際に起きたことが違うんだな、というのがわかった。どこでどう違うかといったら、侵略戦争というものではなくて、日本の国の自存自衛のために、いわゆる東亜の解放ってのが、そういうような目的でアジアを守るといところから始めていった戦争だったのがわかってきて。

社会人になってからのころですね。20代半ばです。20代半ばになってわかってきて。テレビの見方、終戦記念の日でテレビとかでよく特集をやるじゃないですか。そういうのをちょっと疑いの目でちょっと見てた、疑いの目で見えるようになったんですよ。で、これは何かちょっと違うぞというので、またいろいろ調べて行って、その向こうさん、あちらの人が言うには侵略戦争して日本は悪いことした、だから日本はずっと反省すべきでずっと謝っておくべきだ、という風なことをテレビ番組でもジャーナリストといわれる人たちも、そういう主張を繰り返してきて。それに乗っかって洗脳されてるっていうかね、そういう人たちも、自分もその1人だったし。

そこから抜け出して、インターネットでいろいろ調べて行って、そういう文章とかも、

東条総理大臣が言っていた開戦の詔勅とかもあるし、国を守るために戦った人たち、いわゆる英霊と呼ばれる人たちがいた。それは日本人だけでなく、台湾人でも朝鮮人でも日本を守るためにがんばって戦ってきた人たちがいる、というのがあって。

うちにパソコンがなかったので、ネットカフェ行って見てたんですよ。ネットカフェに何時間もいて、動画見せて。そういう感じかな。動画いろいろ。6時間なら6時間、9時間なら9時間、3時間パックとかあるじゃないですか。そういうので動画とか見てたんです。パソコンも後で買って、ネットでつないで動画を段々見るようになってきて。(『ゴーマニズム宣言』などは)全然読んでないですね。マンガ読まないです、全然。本も、まあ好きな本は読みますけどね、そんなにあんまり読まないですね。

### (3) ネットからリアルへ

#### 《護国神社での邂逅》

そこでまあ、(保守系の運動に) 出会って———昨年8月に出会ったんですよ。まあ何かやっているかな、というのでいったら××でやってたんですよ。そこで会って、ちょこちょこ話して、ちょこちょこ顔出すようになったんです。△△さん(と会ったの)が最初です。ブログやっているんですよ、△△さん。本当に僕たちの最初の、△△さんはずっとやっているからわかると思うけど、在特会の活動は最初は本当に小さな活動から始めて、△△さんはそれよりもずっと長く活動やってるんで。

8月15日に何かやっていないかなと思って検索かけていったのです。そうしたら(△△さんのブログが) ヒットしたんですよ。〇〇のところでやる、じゃあ見に行きたいなって見に行って、そこで出会ったんですよ。それが最初ですね。リアルで会ったのは。それまで全く1人でやってて。1人でやっててという言い方も変ですけど、1人で見てて。キーボードカチャカチャやっていて。書き込みはしないですね。ただ見るだけ。

(護国神社での集会に行くのは) やっぱりためらいましたよ。二の足踏んでました。だけど本当にあの時に、本当に行かなきゃいかんって何かの衝動に駆られて行ったんです。それまでは全然、「行ってもねえ」っていう。行かなきゃダメだって駆られたんじゃないんですかね。行動しなきゃやっぱり変わらん、ていう。いつまでもネットでカチャカチャやっているような状態じゃねえんだって。行動で示してかないと変わっていかない、という思いになったんです。そういうようなものじゃないですか、っていう感じで行ったのが最初です。何か行かなきゃ変わらん、動かなきゃ何も変わらないっていう。自分も動かなきゃ変わらないし、周りも動いていかなければ変わらないって。でも動いて変わるもんでもないですけどね、今思えばね。

それまでは護国神社がどこにあるかもわからなかったですね。どこにあるんだろう、って。全然わからなかったですね。こんなところがあるのかっていう感じでしたね、最初。初めて護国神社に行って、その日の午後です。神社のお参りの仕方なんかもわからないんです。その当時はやっぱり。鳥居のくぐり方一つでも、お参りの仕方でもわからなかった。本当に情けなかったですね、あの当時。

あの時はねえ、ただお参りできてよかったっていうだけですね。本当に。その気持ち一点だけでしたね。これで自分もね、きちっとお参りすることができたって。亡くなられた人たちに「ありがとう、国のために戦ってくださってありがとう」ってその気持ちだけでし



たね。本当にその気持ち一点だけです。その当時は心が落ち着くとかそんなのもなかったです。本当に良かったっていう、それだけです。ただその気持ちだけで感動しましたね。

(2009年8月の総選挙との関連は) それもありましたね。あの時に、紙を広げてたんですよ。参加されてた人たちが。鳩山さんも靖国神社へ、麻生さんも靖国神社へって。その後にも選挙戦ってのがやっぱりあるから。自分もそこには行かなきゃならんだろうな、って。意識がその時に、それまでとは違った、ネットでいろいろ見ていたテレビの報道の仕方とかをね、テレビの報道の仕方とネットで見る情報のあり方が全然違った。何か行かなきゃならんと思ったのかな。あの時は。本当、7月まで別に行かなくてもという感じだった。行く気もなかった。

何か行かなきゃならんだろう、やっぱりいろいろ調べていって、いや一頭に来るなというのもあったしね。麻生さんとかバーで飲んでたのが、それをやたらとね、テレビが揚げ足とって報道する。一本1万円だか何万円だかするバーでワインだか飲んでたって。そういういろいろな話、テレビでもいろいろして。自民党というか麻生内閣のイメージダウンを狙ってやっています。それが一番あれかな。僕はそんなに麻生内閣は支持してないんだけど。麻生さんはどっちかという保守系の思想の人だから、それでやっぱり靖国神社にも行くとか行かないとか、あの時行ってましたよね。それで結局行かなかったけど。靖国神社にも行ってもらわなきゃならんようになって。テレビの報道の仕方とネットの情報の流し方の違いかな。知ってもらいたいってそういう、8月のある日にそう思った。

やっぱり印象操作ですよ。ネットでもそうじゃないんだってね、テレビはもうワイドショーとか本当に麻生さんのことでボロクソに言ってるし。本当にあの時はテレビ全体が自民党叩きをやってた、片やネットで見てみるとそうでもない。麻生さんは日本のために一生懸命がんばってる、だからここで自民党を…いやあのとき民主党のいろいろ政策とか選挙戦には書かれないマニフェストの政策をずっと流し続けたんです。ネットの世界では。外国人参政権だとか、その当時の人権擁護法案とか、あと沖縄ステイ計画とかそういうの流してた。

これはやべえなって。民主党に勝たせたらやべえよなっていうので、自分も何か行きてえな、って8月の頃から考えていて。何か宣伝の一つにでもなればいくなって。あの時の街宣は、本当にただ英霊を守るとか英霊に感謝するためだけじゃなくてね、いろいろなプラカードを持っている人もいますよ、実際に。外国人参政権、民主党に政権をとらせてはならんとか。いろいろなそういう趣旨のプラカードを掲げた人もいます。行って良かったと思いますね。

#### 《活動家へ》

(それから) △△さんとほとんど一緒に参加して、活動に参加して。在特会の活動とかも——△△さんも会員ですからね——来てくれて、僕も行って。「お前気持ち悪いな」って言われるくらい、「気持ち悪いな」って言われるんだけど顔出すって。毎回来るからお前気持ち悪いって。お前なんで来るんだよ、ブログ見て来ましたっていったら、ああそうかって。そこで在特会というのも初めて知って、いろいろ動画を見ていると在日特権の——私たち

の会の根本ていうのは入管特例法の廃止というのが最終目的ですから——枝葉が一杯あるそういう風な特権をちょっとずつでもなくして、それを街宣でもってみんなにわかってもらおう。

(△△さんの活動に参加し始めた時点で在特会の会員には) なってないです。なってないです。ちょっと事情がありましてね。全く個人的な事情<sup>13</sup>で、入るのはしばらくやめましようって。実際に会員になったのは去年の1月です。会員になろうっていうのは。それまではなる気はなかった。動画を見てもなる気はなかった。組織的には、最初に組織に入らないでずっとやっていこうかなと思った、まったくフリーの立場でいようかと思った。支部が新しくなるんで入らないか、というのがきっかけです。支部が刷新されるってのをきっかけにして、自分も会員になろうかって。(在特会メンバーとの接触は) 会員になる前からありましたんで、「どうだい、入らないかい」といわれても、いやちょっとってまだためらっていた時期がありますね。本当に、そのとき刷新されるからどうだい、って誘いですかね。で、いろいろお話してなったというのが始まりですね。会員としての。

〇〇には在日というのはあまりいないんだけど、××とかああいうところに行けば、あの在日の人たちが役所に押しかけていろいろヤクザ使って恐喝まがいのことをやっているというような話を、動画でもってちらちら聞いて。ネットでもいろいろな交流サイトとかあるから、そういうの(を)使って話、いろいろ会話とかして、いろいろ事実を並べてくれる人もいるので、そういう人たちとコミュニケーションをとっているうち、在特会というのに入って。で、自分なんかちょっとでも役に立てればいいな、というので入らせていただきました。

#### 《ネットとリアルの違い》

結構ギャップありますね。その時に動画で見ていた人と別な顔が——面白くもあるけども、ちょっと自分とは違うなって。それでも、いいギャップですけどね。全然、「がっくし」っていうギャップじゃないんですよ。いつも考えているんですよ。「いつも思考しなさい」って言われるんです。「毎日思考しなさい」って。自分も思考してるんですけどね、思考の仕方がね、足りないっていうか。まだ全然できてない。動画では言われない、言わないんです。実際会うとそういう風に毎日思考しなさい、街宣終わった後でも。お前は毎日思考しろって言うんです。それがやっぱり、実際会ってよかったことです。

#### (4) 歴史修正主義と排外主義

##### 《なぜ歴史修正主義が排外主義に転じるのか》

それは何ていったらいいのかね。ネットでいろいろと検索かけていくんですよ。で、戦争の話は戦争の話。全然違いますよ。で、動画を見て Youtube で動画があって、戦争の動画に付随する動画ってあるじゃないですか。関係動画。そこで在特会の動画があったんですよ。そこで在特会の動画をクリックしたのが最初ですね。外国人に参政権を与える——あの時に東京の小平で創価学会に行って、小平の学会の会館のところでぐるぐる回ってた。その後東京の信濃町の学会本部まで行って、公明党が進めている外国人参政権を許さん、

<sup>13</sup> 具体的に何を指すのかは話してくれなかった。

なんでやらなきゃならんのだって。動画を見たのが最初で、本当の初期の動画です。それからずっと在特会の動画を見て。

いろいろネットで調べてたら、外国人参政権ってのにぶつかって、外国人参政権というのを調べていったら、いわゆる特定の外国人に参政権を——地方のね——参政権を与えようじゃないか。で、これ何なんだろうな、自分で調べていった。憲法でも国民の——日本国民が持っている固有の権利ですよ。その固有の権利を外国人に与えてしまつては、私たち日本国民の意見が取り入れられづらくなる、聞き入れられづらくなる。外国人、今主張しているのは在日韓国人の人、朝鮮人の人、いわゆるシナ人と呼ばれる人、その人たちが外国人参政権を求めている。それに乗っかっている議員もいる。その国会議員がいるっていうので、それは間違っている。

日本国民の固有の権利である選挙権をなんで外国人に与えなきゃならんのだ。憲法でも謳っている通り、日本国民固有の権利ですよ。そこを履き違えて外国人に参政権を与えたらね、移民という形でどあーっと入ってきて、参政権をよこせとか言ってくる人も出てくるし。現に外国人参政権じゃなくて住民基本条例という形に名を変えて、意見とか行政のほうで募集している、おかしいじゃないか。そういう人たちがいる、って僕たちは外国人参政権に反対という立場でデモ行進とか、街宣とかいろいろしていますね。

#### 《外国人ではなく特権を求める輩と戦う》

〇〇（C氏の地元）ってのは在日の人は・・・しかいないんですけど、そんなにデモとか街宣とかしても、ほとんどないよね、全然ないよね、攻撃とかね。××（他地域）は激しいけど、〇〇はないんですよ。民団とか総連の事務所はあります。そこに行ってもね、この間——今年か——民団のあそこ行ってやってきたけど。保育所があそこにあつて、うるさいっていう。そういうのもあるんですよ。さすがに総連のところはちょっと申請をできないんですよ、（許可が）下りないんですよ。静穏条例というのもあつて下りなかったんですよ。だから、道路——2km 弱歩いて、朝鮮学校のそばでデモやったというのがあります。その時にいろいろなんか書かれてましたけどね。ツイッターでもいろいろなんか書かれてましたけどね。在特会が朝鮮学校に来て騒いだとかね。朝鮮学校の前に在特会が来てどうのこうのとかね。ないことばかり書いていたんです。

（コリアンと中国人を比べると）どっちもどっちといえばそれまでだけだな。はるかに、だけど、シナ人の方が怖いですよ。あれだけ人口持てればね、簡単にできますよ。あいつらはやっぱり人口が大きいし、何よりも共産党主導で動いているのは大きいですね。共産党の命令一下でどんなことでもしてくるから。お世話になった人たちを平気で殺したりね、金とか奪ったりね、平気でやる。倫理観がないんですよ。シナ人には。道徳観とかね。倫理観がまったくない。留学生でも平気でお世話になった日本人を、そういう人たちを平気で殺してね、金品とか奪って逃げるし。片やですよ、チャイナタウンとか池袋にできつつあるようですけどね。自分達のチャイニーズマフィアとか、そういうのも作ってやっているって。そこでまた本国から呼び寄せて、いろんな悪いことをする。組織的に言ったら在日朝鮮人よりもシナ人のほうがはるかに怖いです。僕の考えですけどね。

僕らは在日の朝鮮人とかシナ人とかっていうのでやるんじゃないで、特権を求める輩には断固として反対する、断固として戦う。国の根幹を揺るがすやつらは、それを支援して

いる人たちとか。

今はやっぱり外国人問題もそうだけど、やっぱり人権侵害救済法っていうのは人権擁護法案ってのが、次回の国会に提出されるってのはね、これもやっぱり外国人をね、日本人を差別する、外国人が思い通りにこの国を牛耳ろうとしているやつらがいる。外国人に対する憎しみじゃないんですよ。それを動かそうとする国会議員に対する憎しみですね。外国人に対する差別意識ってのはないんですよ。それを動かそうとする国会議員ですね。そちらのほうにどちらかといえば怒りが高いですね。あと地方議員もそうだし。この地元もそうだし。

それを進めようとする不逞の輩も本当に頭にくるけど、この国を動かしているのはやっぱり議員だし。それを陰で牛耳っているやつらがいるってのはわかるんだけど、それを具体化していくのは議員じゃないですか。地方議員だったり国会議員だったり、そういう人たちに対する反感は強いんですね。外国人よりも。そこで金を、利権をむさぼろうとする奴らがね。そういう奴らに対する怒りってのは高いですね。

外国人は基本的に進めていくだけですからね。実際に動かすのは議員ですからね。議員だったり市長だったり行政だったりするわけじゃないですか。それに対する怒りってのは高いですね。よく在特会は差別主義者だとかヘイトスピーチでどうのこうのといいますけどね、あれを差別っていうんだったらいわゆる左の人たちがやっているようなことっていうのはね、正しく差別じゃねえかって。9条を守りましょうっていういいながら、片やでね、人を殺してるんですよ、いろいろと。過去にもやってきてる。自分達の仲間を叩いてやっているやつらが、一番の差別じゃねえか。

片やで先日テレビでもあった「ハガネの女」の話も、フィリピン人に対する、フィリピンはこんなにひどい国だとか、フィリピンという国ではなくて仮想の国ですけどね、その国はすごいひどい国で毎日ゴミを食って生活しているとかね、そういうようなことをテレビで言って、それをテレビで流して、それに対してあいつらが何も言わないんですよ。一番そういう国を差別しているのは正しくあいつらじゃないか。僕たちのやっていることは何だかんだいわれるけど、決して間違っていることをやってきていない。その裏返しでもって会員数がどんどんどんどん伸びて、1万人を超えましたし、実際カルデロン問題でやったときに会員数がくっと伸びたんですね。やっぱり多くの人たちがそれに対して共感を得た、大きかったですよ。

## (5) 活動の実際

### 《活動を支えるもの》

鬱憤晴らしじゃ続かないですよ。鬱憤晴らしだったら続かないっす。やっぱり怒りです。そういうことをやる人たちに対する怒り。もっとわかってもらえない日本国民に対する怒りもあります。国が崩れようとしている時に、のほほんとして自分のことだけ考えてりゃいいやっていう、そういう時代じゃない。平和ボケっていわれる人たちがね、何とか気づいてほしい、国の根幹が崩れようとしている時に、自分のことだけ考えて、私利私欲という言い方もヘンだけど、そういうようなものに溺れていくっていうのはね。自分さえよければいい、それはちょっと違うじゃないかな、そういう感じですね。

街宣とかですかね。やっぱり街宣もそうだしデモもそうだし、一から組み立ててみんな

と話して一から組み立てていかなきゃならんという立場になって、いろいろとみんな意見を出すんです。それが大変だな。書類1つ作るにしても、自分もやったことありますけど大変なんです。道路使用許可、自分は□□で1回やったんですけど、自分が出していったときに仕事の合間縫って警察署まで行って出して、また帰ってきて仕事して、また申請がおりたときに□□まで取りに行くという形で。大変だけど面白いですよ。自分の企画でできるんですよ。

サイトにも載せなきゃいけないんで、その文章も自分で考えなきゃいけないですよ。それも全部考えて。ところどころ添削してもらって。サイトにのっけてもらって。文章をひねるのは好きですね。書くのは苦手ですね。頭の中で考える文章は好きですね。

#### 《得られたもの》

出会いが得られたってのは良かったですね。こうやってやってきて、どんどんどんどん参加者が増えていって、その中でも来てみようかなという人もいるし、本当に来ましたっていう、動画をみて来ましたっていう方もいる。そういう出会いがどんどんどんどん広がっていくってのは、自分の得られたもの。いつも動画で見えますとか、そういう話もちよこちょこちょこ聞きます。実際に街宣の場所に来て。初めて来まして、という。そういう出会いを得られるというのは、同志が増えてきたというのは自分としてやってよかったことじゃないですかね。1年弱で本当に人は増えてます。やっぱり良かったことです。

僕みたいなネットで検索して見に来ましたっていう人も実際います。組織を改善したから云々じゃなくて、ネットで見てキーボードで叩くのではなくて、実際に自分の足で来てくれる。それが一番やっぱり嬉しいですね。来てくれるってだけで嬉しいです。

(実際に活動した手応え) 周りの人の反応、歩いている人たちの反応。去年も何十回ってやって、誰も聞いてくれないとは思うけどやらなきゃならん。そこでやってると、年配の人だとか若い人だとか、頑張ってくれよと言ってくれるんですよ。本当に小さな小さな活動なんですけどね。頑張ってくれよとか、励ましてくれる人たちがちょっとずつでも増えてきている、会に関係なく。そういう趣旨にある程度共感してくれる人たちが、少しずつ増えてきている。声にならない声、やっぱり大きいですね。実際ありますからね、現場に行くと。中には反対とか意見いうヘンなオヤジもいますけど、酔っ払ってくるとかね。多くの人たちはある程度、民主党のトロさ加減をみて気づいている人多いと思いますけどね。時事問題とか話すと結構食いついてきます。

根本的にあるのは、この国の根幹はやはり代々125代続いてきた天皇陛下を頂点とする国でなければならん、と。そのためには憲法といわれるものを廃止して、明治憲法、大日本帝国憲法に戻すのであれば、日本人が作った憲法ですから、そこにもう1回戻って日本人の腐りきった心というのを立ち直る、という言い方もヘンだけどそれに見合った日本人らしさというものをもう1回取り戻していけたらいいな、という感じで頑張ってます。そんなとこです。

#### (6) 小括

C氏の場合も、B氏と同じく在特会に接近する端緒となったのは歴史修正主義であった。

しかも C 氏は、それ以前は民主党に投票しており、PKO にも批判的な立場だったという。それが「天皇陛下を頂点とする国」を目指すまでに変化するわけで、そうした「国の根幹」を揺るがす存在に対する怒りが活動を支えていることになる。歴史修正主義から出発したのであれば、こうした復古的な理想の国家像にたどり着く方が、論理的には一貫しているだろう。こうした氏の変化は、在特会のなかでも典型的なものとはいえないが、それは最初に「リアル」で出会ったのが民族派の影響を受けた右翼だったことによる。C 氏が最初に行動に踏み出したのは、在特会のデモや集会ではなく 8 月 15 日の護国神社であり、そうした場で政治的社会化が進んだと考えられる。

「鬱憤ばらしじゃ続かないっす」という C 氏の言明には、自らの活動が義憤にもとづくものであるという思いが込められている。あるべき日本から逸脱させようとする勢力がこの世には多すぎる——民主党だけでなくそれを応援するマスコミ等も含めて。だが、C 氏がそこから排外主義へと行き着く論理は明確ではない。在特会は、歴史修正主義ではなく排外主義を前面に掲げた団体であり、なぜそこへの参加があるべき日本にたどりつくための「小さな活動」となるのか。まず、C 氏自身がネット世論のなかで盛り上がった外国人参政権に危機感を抱いたことが第一にある。ネットを介して、C 氏のなかで「日本を壊そうとする行為」の代表が外国人参政権であり、在日特権であるという認知が形成されていく。

現実問題として、在日コリアンの存在が日本に深刻な脅威を与えると考えるのは社会全体の仕組みを理解できていない証左と考えるより他はない。が、ネットの中にある「真実」は現実世界の真実とはかなりずれており、それがドンキホーテのように空想上の敵を見出すことへと結びつく。C 氏がパソコンを自宅で使うようになる前に、ネットカフェで何時間も検索して情報収集していたのは、そうした状況の象徴ともいえる。インターネットが極右や排外主義にとっての動員構造になっているのは、何も日本だけではないが、これについては稿を改めて論じたい。

## 4 教育勅語を暗記しているD氏の場合

### (1) 生き立ちと政治への関心

(育った環境は) 学術的にいうと、尊皇主義、多分そっちに私は近いんじゃないかと思うんです。今改めて思えば。要するに陛下がこう言うんだったら、それに従うのが当たり前だ、という感じなんです。それが今のところたまたま保守の人と似ているというか。行動の経緯が同じだから、そうなのかなあという感じですね。

とにかく小学校の時から、教育勅語とか暗記させられたんで。中1のときは、大東亜戦争終結の御詔勅も暗記させられたんで、今でも普通に言えますね。だから、その時は意味が不明だったんですけども、何回も言っていて読んでいるとわかるんですよ、意味が。だからみんなね、戦争で亡くなった人やその遺族のことを思ったら、私の「五内為ニ裂ク」先帝陛下がおっしゃっている。要するに、内臓が張り裂けそうに辛いついていうようなことを言っていると、しゃべっているうちに段々泣きそうになってくるんですね。段々分かってくるんです。ややこしいことはわからなくても。そういうのがずっとあったんで。

うちは親父の教育があったから、学校の教育なんかクソだったね。ただ学校の先生は学校行ったら親だと思えていわれてたんで、よくいたずらしては学校の先生に怒られたりしては、内緒にしてはいましたけどね。今みたいに、何でもかんでも言うという子ども達とは考え方がだいぶ違うので。半殺しにされるもの。だから、だいぶ違いますね。そういうのを考えると。だから学校教育でどうのとかいっても、学校の先生はすべてをうちの親父よりも年下だったし。親父は戦前生まれなんで、だから若いんですよ、先生も。だから先生のいうことの方が嘘臭く聞こえたし、あんまり何も思わなかったですね。

ただその、政治的にどうかっていわれたら、あんまりないですね。実は。基本的に歴史。だから歴史についてどうかっていう話ばかりなんで、政治的にどうだっていう話は・・・どうかなあ、平成14年くらいですかねえ。人権擁護法案が最初に飛び出た時くらいかな。あのときくらいですよ、初めてその政治っていうものがやばいっていう風に思ったのは。それまでは基本的に歴史の本ばかり読んでいて。歴史が大好きだったんで。ただ、当時読んでた本っていうのが、ほとんどが左の方が書いた自虐史観的な本ばかりで。クソ面白くねえなって言って、ずっと本当、そんな感じで読んでた。歴史小説みたいなものは本当に楽しく読んでたんですね。だから何が間違っただけ政治的なことになっちゃったっていうのが、本当後悔ですね。本当に。

(周囲の人たちと) 政治というものの話は確かにしなかったけど、それは会話にならないからというのが大きい。私は衝撃を受けるんですよ。あの、そんなこともわからない、というかそういう風に物を考えるんだって。

(選挙には) 全部行っています。国民の義務——それやらないと自然にダメでしょう、という感じですね。別にそんなかっこいいあれでもないけども、信号赤だったら止まるのと同じな感じです。感覚としては。それはもう何があっても絶対に。当時はただ、何となく自民党がいいんでしょ、という感じで基本的に自民党です。ずっと自民党。今一番まともなのが、自民党の人多いんで、結果的に自民党に投票することが多いですけど。まあ、そういうことですね。

## (2) 外国人との接触

在特会に入って、何の気なしに「シュプレヒコール！」とか「朝鮮人は云々かんぬん」っていうじゃないですか。別にそう思っただけでもまあプロパガンダだと思ってはいますが、そんな言うなんて考えられなかったですものね。まず、さっきから言ってますけど、怖かったですよ。朝鮮人とかって。うちの親父の友達もいっぱいいたんですけど、やっぱりみんなそっち系なんです。怖いんですよ。スジ系の人ばかりで、何かあったらすぐやっちゃうような感じだったんで。そういう人たちはそういう人だ、という感覚がずっとあったから、何かいったりしたら報復受けるんじゃないかっていうのがずっとあって。今でこそ総連とかに名前と住所書いて抗議文とか出すけども、当時はおっかなかったですもの。名前これ出したらやられるんじゃないかねとか、本当に思ったんで。だけどそれも人数いけばクッションじゃないけど、どうにかなるのかなって思ったんですよ。そういう意味で、外国人参政権のときの行動を起こすときも、割とできたっていうのもある。

私は別に小さい時からの親父の付き合いで「ああ、怖いな」と思った程度で、自分とは何も関わりがあるとは思ってなかったんで、別に何も。だから、恐らく多分在特会のなかで、(在日コリアンに)もっとも関心がないのは私だと思ってます、興味もあれもないのは。ないんですよ、実際。だから平気で韓国人とも友達になるし。ただ、喧嘩になることは多いんで。というか、仕事と一緒にしたくないですよ。嘘つくの。すぐ嘘つくから。約束すぐ破るし。

だからそういうのはいやだけど、ただ仕事だからいやなんであって、あとはいい。(在日コリアンは)酒強いし面白いし騒ぐし。ただ仕事と一緒にやりたくない。現場で働く人だから、ちょっとおかしいんだ。やっぱり。あると思いますよ。そういうのは。だから、朝鮮学校出て、そのままとあえずどこか修行入ったとか、(そういう人は)平気でウソつくんですよ。だからそういう意味では嫌いだけど、それは別に日本人でもあそこの会社のやつはすぐ嘘つくからいやだ、とか同じなんで。割合がちょっと多いというだけで。

## (3) 人権擁護法というきっかけ

《初めて街頭へ》

あの時はぎりぎり廃案になってくれたんで良かった。あの時にあれでしょ、初めて(活動した)。一応なんとなくですけど。特にそういう仲間もいなかったし、言っただけでよく理解されないし。だから、飲食店で「おかしいよね」とかいうそんな会話だけで終わってたのが、人権擁護法案出たときは「これは絶対しゃれにならない」といって、自分でビラ作って駅前です。1人でやってたんです。

それだって、それやるのに手続きが必要だとかも知らないし、ただやってた。とにかくみんなに知らせるしかないと思ったんで。それはもう衝動に駆られたっていうか。これじゃあともかく「赤狩りじゃなくて、まともな人間を狩る法律なんじゃないの？」ってそっちのほうが強かったですね。法案内容見ても、これ恣意的に使われたらアウトだよな、というのが本当に大きかったですね。

(情報は)普通にインターネットで調べました。(ネットを使い始めたのは)早いんですよ。94年から。パソコン通信をやってましたから。ウィンドウズ 3.1、3.0、DOS の時からやってました。だからネットに関しては結構古いんです。最初は面白かったから。ただ、その時



にそういう人たちと政治的な話したかっていったら、何もしない。パソコンの話。あとどの部品がいいとか、そんなのばかりで。あと好きな本の話とか。全然政治とは関係ない状態でした。

チャンネル桜さんの前身で、そういうネットの媒体を通して保守的なものをずっとやっているサイトがあったんですよ。それがすごく影響大きかったですね。最初はインターネットで知ったんです。で、「は？」と思って、こんなことがありえるのか。それまであんまり興味なかった政治家個人個人の考え方にも興味持ち出して、当時は誰だったかな、城内実さんだったかな、あの辺が騒いでたんですよ。平沼（赳夫）先生とかもまあ騒いでいて、これはどうしようもないのかなという思いがすごかったですね。

だから、結果として何もなかったんで良かったのかなとは思いますが、あの時は正直こいつ馬鹿じゃねえかよ、と思われていたと思うんですよ。配っている時。興味のかけられない人たちばかりだったんで。今は政権がアホ過ぎて、多少なりとも「この人たちは政治のことやってんだろうな」と認識されるんでしょうけど、当時だって一水会の人たちが街宣するのを見たことあったんですけど、正直「あれが右翼なんだ」という意識しかなくて。要するに右翼思想というものが一応わかっただけで、私は違うんだな、そんな感じしか印象がなかったの。まあまさか似たようなことをやることになるとは思って見なかったですね。本当に思ってなかった。まさか（その人たちと）けんかになるとは思ってもみなかった。

（チャンネル桜の前身をみたのは）元々のきっかけは忘れてしまったのですが、何かで引っかけたんですよ。何気なく見ていたある日。何だっけな。それでチャンネル桜って知って。桜井さんとか出てきて。桜井さんを見たのがチャンネル桜だったんで、そんな感じでしたね。なんで、でも本当の最初は忘れたな。何だっけな。人権擁護法案を知ったサイトを見るようになったきっかけというのは、本当忘れてしまったな。多分何かしらつまらない理由だったと思うんですよ。興味あんまりなかったんで。それが何かのきっかけで見ちゃったのが、失敗の元。本当、間違った。

拉致は思想とは違ってました。人権擁護法案というのは、完璧に政治的な話だと思ってたんですよ。拉致というのは、全日本人が起こると思ってたし、当たり前だと思ってたんで。だからあの時のわかったうちの、安倍さんとかがさっきまで知らないと言っていたくせに、急に（変わって）この野郎とかいろいろ思ったんですけど。あのとき、でも拉致で何か行動を起こそうかなという気にはならなかったですよ。どうしてかという、あまりにも国がやらなきゃいけないことすぎて、何もできないじゃないですか、一個人が。で、そういうのを考えると、というか日本政府が取り返すと思ってたんで、絶対に。だから最初におかかったときの衝撃というのは、テレビとかでも連日のように拉致がどうの拉致がどうのとやってたし、だからこちらもそれについて何かやらないという感じではなかったですね。

むしろ人権擁護法案のほうが、圧倒的にこれはやばい。テレビに対してあの時まだマスコミにも規制入ってたんで、ちょこちょこは言ってたけど、その後一切言わなくなったし、怖かったですよ。これは妄想じゃなくて、本当にやばいなと思いましたから。拉致が本当にわかったときも確かに衝撃でしたけど、それは政治的にというよりは日本人として頭にくるといえる。考えられないなと思いましたけどね。北朝鮮に行くわけにもいかないし、本当にだからどうしようもない。向こうの国家が認めて実際に拉致しているのは判明

しているのだから、あとは国がどうにかするしかないんであって。国民がどうするという話じゃないと思うけど。

昔、多かったみたいだけど。刑務所に突っ込まれて、どうしようもなくなるのと同じくらいのことだと私は思うんですよ。自分の意思とは無関係な、何も悪くもないのに、それに対して頭に来ないと思う人がいるのかな、これは許せないものね。だから拉致しているっていう、よく朝鮮人が拉致したんだからって皆怒りを朝鮮人に持つのかもしれないけども、「なぜそれを救い出せないの？」って日本人に対する怒りの方が。

人権侵害救済法案について、本当に腹立つなあ。何で、何で、何で必要のないものを作ろうとするのが私には理解できないんですけど。間違いなく法務省の天下りになるんだろうと私は思っているんですけど、だからあんなに熱心にやっているのかなあ。私はだから、間違っってといたらおかしい言い方になりますけど、こういうことをやる羽目になっちゃったのが、これ（人権擁護法案）なんで。本当に頭にきているんですよ、実は。

#### 《ネット左翼？》

よくネット右翼って話が出ますけども、「むしろネット左翼の方が多いいんじゃないの？」って思いませんか。インターネット見てたら。私あの人たち（左翼）すごいなと思いますよ。情報の伝え方。私から見ると左の方が上手だなあと思うんですよ、ネットの使い方が。たとえばハテナブログであるとか、すごくまとめたがるじゃないですか、左の人たち体系的に。ああいうのって保守的な人って何もやらないじゃないですか。面倒くさがるのか何なのか。興味がないのか知らないけど。ウィキとかでも、たいてい左の人が完璧に作るじゃないですか。データベースを。確実に頭いいですものね。

だから、私とかよく言うのは、ものすごい学歴の高い馬鹿ってよく言っているんですよ。日本人として大事なものをお前ら忘れてるんじゃないの、と思うんですけど、勉強になったら勝ち目ないし。言い合いになっても全然。1回も生まれてきて聞いたことがないような言葉で言われたら、「はあ？」と・・・わからないとも言えないしな。

#### （４）在特会へ

後でわかったんですけど、（入会前から桜井氏の）ブログは見ていたんですね。ピンク色のバックで、韓国人がこうなったらこうやって言う、みたいな。大したホームページじゃないですけどだーっと書いてあって、それをたどっていったら『不思議の国の韓国』だったんですよ。それは後で知ったんです。それはお気に入りに入れていて「へーそうなんだ」って思っって。

（入会は）2007年の終わりぐらいだったような気が。支部で告知を見てから入ったんですよ。（そこで集まった時）会ってみたかったんですよ、どういう人だか。だからさっき言ったように、本当怖い人ばかりだろうと思って行ったら、若い人から年寄りまで普通のサラリーマンから役人までいてさ、公務員までいてさ、何だこれって。しかもパチンコ屋で働いてますって人までいるし、「何だこれ？」って。本当にそうだったんですよ。だから、最初やっぱりどきどきはしてました。これでも今行かないと多分いけないなって、こう第一歩じゃないですけど、それは思いましたね。一度会ってしまったら、ああ普通の人だ、と何の抵抗もなくなったんですけど。イデオロギー的なもので集まるということになると、

やはり意味は違って。どんな人がいるのかっていうのが本当にわからない。

何で入ったんだっけな。元々会ができたのは知ってたんですよ。(チャンネル) 桜で流れてたから。だけど、当時ですね、私がよく知っていた会でいうと、やっぱり右翼系の団体ばかりで市民団体、保守系市民団体という感じではなかったですね。いかつい人たちが何かこう命をかけてます、みたいなものばかりだったんで。在特会に一番最初に入るきっかけは、名前が良かった。「在日特権を許さない」…めっちゃポイント絞っているじゃないですか。あれが何か…もしあれが「日本の国民を守る会」とかだったら、私は多分何の興味も——そんなの守って当たり前だろうって思って終わって、「何でいちいち会に入るの?」と思って終わったと思うんですよ。

ただ、「在日特権」何だそれ? というのがあったんですけど、ちょうど私が会に入るきっかけになったのが、三重で詐欺がですねえ、公務員による詐欺が発覚したんです。住民税が半額、50年間に渡って恒久的に半額にしてたっていうあのニュースが出て、「ああやっぱり在日特権はあるんだ」。半額にしてくれないとおかしいって、言いがかりでいっていたら、実はその人が半額にして半額分を自分がネコババしてたっていうニュース見て。それまで在日特権ってあるんだなあ、漠然と何となく言われてたけど、「ああ本当にあるんだ、やっぱりこれダメじゃない」というのがすごく、じゃあ入ろうかなと思ったきっかけです。それまでは別にそういう会があるのは知ってたし、桜井さんもわかってたけど、お話が上手な人だなあというくらいにしか思ってなかったし。

実は、在日関係の「在日」って朝鮮韓国人に特化しているってことを、わかったのは結構後なんですよ。在日外国人だから、ブラジル人でもそうだし、中国人もそう、そういうのを思ってたんで。でも、改めてこうしてちゃんと読むと、あれこれ韓国人、朝鮮人のことを知っているんだな、というのは後でわかったことなんで。こういってはなんですけど、その程度の理由。高尚な考えがあるわけでもなければ、単純によくわかってなかったっていう。ただ単純に特権を許さないというのが、正しいんじゃないのかっていうことなんですよ。

#### 《東アジアに対する関心》

ただ、積極的に、何というかなあんまり韓国の興味がないんで。実は今でもあんまり興味ないんですよ。特に何で在特会にいるの? っていわれたら困っちゃうんですよ。全然興味ない、実は。韓国がなんだろうと「ふーん」っていう感じで。だからよくある嫌韓厨とか、韓国人とか朝鮮人とか嫌いでしょうがないっていう人がいるじゃないですか。確かにそういう人もいますよ。何か知らないけどすごい嫌っているというのいが分かる人はいるんですけど。全然嫌いでもなければ好きでもない、興味もないんですよ、私は。だから何かおかしいよね。その辺がなんで在特会にいるのかな—っていうのはあるけど。

(主権回復を目指す会) 俺は絶対入ってないな。主権回復を目指すたって日本人として当たり前なんだから。だってさ、「日本を大切に思う」とかね、「日本を大切に思わない国民」がいたら「切腹しろよ、馬鹿かお前」とか思うので。

ただ在日特権を許さない市民の会というのはものすごいインパクトありますよね、名前が。だから漠然としてないですよ。ものすごいそこだけ。たとえば「ビールをこよなく愛する市民の会」みたいに、びしっと目的がはっきりしているってのが。で、ちょっとイデ

オロギーとは違うところにあるじゃないですか。在日特権、要するに在日を許さないのではなく、特権、そういう特権があるのを許さないというところに思想とは違う…。

今は思想がないと…ただね、来る人、集まる人に思想を求めるのは難しいと私は思っています。思想で人集まらない。会長もよくいいますけどね、私も本当にその通りだと思って。思想っていうのはやっぱり千差万別なんですね。保守主義とかって言っちゃうと、まあいっぱい主義はないですよ。保守主義は保守主義なんだから。だけど、思想ということになると、やっぱり人の数だけあるんじゃないか、って思うんですよ。それを束ねるといっちはちょっと無理なんじゃないかな。であれば、もうちょっと分かり易い部分でまとめる。それがうちの会でいうと、いわゆる在日特権というものなんだろう。じゃあそれはなんだ、っていわれたらうちの会の思想でいうと、特別永住、それを廃止するという話ですけど、これだって相当難しい話で、これ廃止しようと思ったら、もともとの根本的なところからすべて変えていかないと、まあ無理ですよ。だからとても無理で、その無理な目標に向かってもっと細かいところ、通名を廃止しろ、パチンコの利権をどうにかしろとか、ちょっと遠回りですけどやっていくという。この手法というのはありなのかなあと思ったりします。

ただ、北朝鮮に対しては「朝鮮人じゃなくて日本人拉致すんじゃないよ、早く返せよ」という意味での関心はありますが。民族、たとえば半島民族には何の興味もないです、悪いけど。純粋に歴史を勉強するなかで百済とか、あのへんは私個人的に好きだっていうくらいなこと。そういう趣味の中での好きだって話であって、たとえば朝鮮人はこうだからああだとか、そういうことには全然興味ないです。まあいいじゃないのっていうくらいなもので。ただまあ、言っている人たちのキチガイじみた主張ってのもなんとなくわかるんです。ミクシイとかみてる、ちょっとおかしい人いるじゃないですか。明らかに頭おかしいのかな、と思う人とか。震災の時も、韓国人がやってきたら口蹄疫だっけ、何だかうつされるから入国拒否しろとか騒いでいる、馬鹿じゃないかと思うけど。それを抗議するからといって、電話回線が込み合っているのに馬鹿みたいに抗議している。何て迷惑なことしているんだ、こいつら馬鹿じゃないかって思ったりはしますけども、ある種そういう考えに陥る人もいるんだろうな。日本人はいっぱいいるんで、あんまりそういうのは大して何とも思わないです。馬鹿だなあと思って。

#### 《活動の実際》

やっぱり外に出て、ピラ配りは自分でやってたからあんまり抵抗なかったんですけど、マイクを持ってしゃべるとかっていうのは、めちゃめちゃ抵抗あります。まずしゃべれない。まったくしゃべれないし、しゃべる気もない。元々ずっと裏方をやってたんで、表に立つというのはちょっと（自分の）キャラクターじゃないなって。

私が初めて街宣したのは、まじめに街宣をしたのは、なにかちょっとしゃべれていわれて、何かよくわからない意味不明なものを1分くらいじゃなくて、ちゃんとしゃべったのは1年前から。本当にそんなレベル。それまでもう断固拒否してたんです。私はしゃべらないって。乗りかかった船じゃないですけど、やらなきゃしょうがないんだなって。実際やってみたらできるんだよね。何となく。

《得られたもの》

さっきもチラッとおっしゃってましたけど、メリットなんて何にもないですよ。冗談ぬきで。唯一あるとしたら、やっぱり普通にサラリーマンになり、社会人になってたら絶対合わないタイプの人たちと知り合ったというのは、なかなか大きいなとは思いますが。なかなか会う機会がない。一応、人の縁なんで、それは大きかったなあと思いますけど。逆にこんなことしなかったら、もっと違う出会いもあったんだろうなと思ったりすると、どっちがいいのかはわからないですけどね。

金銭的にも全然メリットないですすね。減る一方なんで。だから鬱憤晴らし（が参加動機）というのの意味がわかりません。私としては、むしろストレスたまりますので。デモなんてやりたくてやっているわけじゃないんで。本当に義憤です。誰もやる奴いないんだとしたら、自分がやらなきゃいけないと思ってやるので。元々私飲むの好きなんで、1週間に5回も6回も飲みに行っていますから。それがむしろ活動やっているせいで、準備とかあるから週2回くらいしかいけなくなって、減ってるじゃない。そもそも友達と遊ぶ時間、かなり減っちゃってるんで。土日こんなことやっているから。そういうのもあるから、どうなんだろうね。寂しくもなければ鬱憤晴らしもしてない、ていうのが普通の感覚ですすね。

まあ、一応今もう付き合い長くなっていますんで、（在特会の人たちは）友達といえば友達だし、「おい飲みに行くぞ」と誘うし、誘われることもありますけど、一応それはある種イデオロギーで若干つながっている部分があるので、本当に友達という、ちょっと違うんですね。やっぱりね。そういうのを考えると、どうなのかなあと。

#### （5）外国人参政権について

もともと、国家として考えたときに、他国の要するに日本に帰化していない他の国の人が日本の政治に関わるっていうことを、ものすごくそれがグローバル・スタンダードであるというような論調の朝日新聞もそうだし、記事がいっぱい出るんですね。新聞に。それに対して全然マスコミが騒がない。要するに何でおかしなことを主張しているのに、マスコミはいつもの論調でそれはおかしなことを言わないのかな、というのが本当に怖かったですよ。

外国人参政権が出てきたのが、十何年か前に認知はしていた。だけど悪い癖じゃないですけど、「ふん」って話。どこかの幼稚園児が「ばーか」といっているのと同じで、「へー」という感じでした。あの、歯牙にもかけない。馬鹿だな、で終わり。まさかそれがこんな成立間際までいくようなレベルにまで話が膨らむなんて、微塵も思っていないんで。絶対にありえないと思っているんで。今なんかありえるかもと、ちょっと思っていますけど。

人権擁護法案というのは危ないと思ったんですよ。成立するかも。でも外国人参政権というのは、絶対にありえないと思ってたんで。だから馬鹿なこと考える人もいるもんだなあ、というレベルでした。本当にそんな感じで。それが両方強いじゃないですか。どっちも現実的な話として、普通にいつでも通りそうみたいな状況が本当に怖いんですね。そうなるとますますつまらなくてもこの活動から足を洗えないですよ、本当に。

（関心を持つきっかけ）いつだったかな。在特会に入るちょっと前ですかね。そのときにはもう結構政治のチャンネル桜とか全部見てたし、政治系のブログとかもよくみるよう

になって、永住外国人地方参政権運動という名前が出て、「何だこれは？」と。それもやっぱりインターネットから——もともとはそうですね。で、おかしいじゃないかと思ってそれにまつわる本を片っ端から買って。

(外国人参政権を具体的な問題として認知するようになったのは) それはもう完璧に在特会に入ってから。前だったら、ただ愚痴を言っていて終わるだけなのが、会に入ったことであるじゃないですか。何となくこう細かいところは大きく違うんでしょうけど、似たような考えの人がいっぱいいるってことがわかったことで、アクションを起こすにしても数多いに越したことはないっていうのもあって、できるのかもしれないなと思ったんですよ。保守運動というものが。だからまさかそのときはうちの会から逮捕者が出るってのは、微塵も思っていなかったんで。

どう言ったらいいかな・・・国家というものを意識したときに、たとえば今回の震災でもわかったように、永住許可をもらってですよ、生活保護を受けている人でも簡単に自国に帰っちゃう。果たしてそういう人に政治に関わる権利というものを与えることってのは正しいんですか、という思いがすごいです。だから、ケツを持ってないような人に——例えばその結果何も変わらないんだとしても、それは申し訳ないけど結果論であって、やっぱりそれは全員が全員そこからいってだめじゃないかと感じているわけです。

日本で本当に影響が出ないといったら、私は絶対に出ると思うんです。特にやはり中国側の政策っていうのがあって、毎年毎年どんどん人を入れていってますよね。日本に流入、日本どころかアメリカもそうだし、インドもそうだし、とにかく自国から人を出して人数減らそうとしているのか何なのか知らないですけど。そういう政策がある中で、日本のように国家に忠誠を誓う必要もなければ何もしない状態で・・・かなり軽い感じに国籍を取ってしまうような国で、政治に関わる権利ってものを永住許可持っている人にはみんな与えましょうという流れになっちゃってますよね。もともとはあくまでも在日一世のもともと日本に併合においていた人の子孫なり何なりという限定で、ずっと話が進んでたはずが。

だから民主党政権になって急に、いや別に永住許可をもっている外国人みんないいんじゃないの、という流れにシフトしていつている。それはやはり危険で、それをやっていると間違いなく永住許可をもっていない外国人から、「私にないのは差別だ」という話になると思うんですよ。で、なった時に「いやそれは法律上違うからダメです」と突っぱねないんですよ。日本の政府なり日本人というのは。そっちに傾くんですよ。「ああ、であれば外国人、たとえば3年いたら自動的に取れるようにしたらどうか」とか、恐らくそういう風に本当になると思うんです。今外国人が、在日韓国人が外国人の証書<sup>14</sup>持たなくてもいいように騒いでいるとか、なったのか忘れたけど、どんどんどんどん甘くなるんですね、規制が。世界の進んでいる方向とは逆に進んでるような気がやっぱりする。

外国人参政権で騒ぐと、多分私たちが騒ぐとというのもあって、他の保守系団体が騒ぐっていうのがあって、市の条例とかで住民投票を外国人やりましょうというのをどんどんやっていますよね。あれ私としては間違いなく憲法違反だと思ってるんですよ。市の条例で云々かんぬんって、市の中の住民投票といっても、やはりそれは私、国政にも影響してくるって思ってます。それが日本の政治体系のベースになっているのが、要するに地方と中央

---

<sup>14</sup> 外国人登録証を指している。

が切り離されてない、アメリカみたいにナントカ州ナントカ州みたいに独立していないですよね。やっぱり中央集権というのは江戸時代、その前からずっとそうですから。それが日本の歴史として積み重なって、敗戦後のわずか 60 何年とか 70 年程度で日本というものの形が変わるといのはちょっとおかしいよ。だから、外国人参政権には断固として反対ですよ。

#### (6) 小括

D 氏は、教育勅語や終戦の詔勅を暗記させられるような家で育っており、自らを「尊皇主義」という。そうした D 氏にとって重要なのは天皇制や伝統であり、東アジアではない。その意味で、在特会に関わるきっかけは他の大多数のメンバーとはかなり異なっている。本人も関心がないといっており、「保守運動」を進めたかったという動機から在特会に入っている。そして D 氏自身も「思想で運動はまとめられない」と割り切っており、「特権」に対する異議申し立てだけ共有できればいいという。その意味で、在特会のメンバーの参加動機には幅があり、「剥奪」に還元できるようなものではない。D 氏の場合、「思想」としては旧来型の右翼に入っても何らおかしくないが、「いかつい人たちが何かこう命をかけてます」とみえた右翼の組織文化とは相容れない部分があった。ホワイトカラーとして働く D 氏にとって、在特会は思想こそ完全に共有しているわけではないものの、「市民の会」という名前が体現する組織文化に親和性があったということだろう。

その意味で在特会という看板は、D 氏のように「思想」と「組織文化」のギャップから活動してこなかった潜在的支持者も引きつけたと考えられる。全国各地に支部ができたのも、ネットをみて共鳴した個人が「支部の担い手になります」と自発的に手を挙げたのが大きく、D 氏のようなケースは一定程度見られると思われる。

## 5 「普通に生活できる時代」を取りもどしたいE氏の場合

### (1) 政治に対する関心

《民主党への不信感》

(政治に対する関心は) 全然なかったです。昔は自民党政権でしたから、別に一般人は興味持たなくても上の人が適当に何かやってくれるだろうと。(選挙には) 国民の義務ですから。行ってました。全部行ってました。(投票先は) 自民党でした。みんなが宮沢(喜一)はダメダメといっているけど、私からみるとまあまあよくやっているのかなと。まあ 100点ではないけども。まあ、少なくとも今の菅(直人)さんよりは全然いいと思ってるんです。

羽田(孜)さんが出てたときは民主党に何度か入れたことがあったと、昔の民主党というのは今と違って結構大人しかったんです。社会党にしたって昔は結構こう、何ていうんですか、下の人を対象に動いてくれていたのが、まあがんばっているなという感じは持ってたんですけどね。(2009年総選挙では) 自民党でした。

ただ、いつ頃かな、(民主党政権になって) 鳩山(由紀夫)さんが出たあたりから「ちょっと民主党っておかしいな」って何か感じていたんです。鳩山さんって、ホメオパシーを保険の対象にするって言っていたでしょ。ホメオパシー。フラワーエッセンスを使った治療をすとか、オカルトですよあれ。それとか催眠療法を使って治すとか、霊気を使うとか。私はそれを聞いてこんな人が国のトップになっちゃったら、この国とんでもないことになっちゃうと思って、ちょっとそれが(きっかけで) 反民主に傾いたんです。

(支持政党は) ないですね。たとえば、菅さんが今回の震災の件とか原発の件もそうなんですけども、正しいことやれば私だって民主を支持してますよ。今回の件もそうなんですけど、菅さんがやっていることというのは結局東北の人をいじめるようなことしかしないから。だから私はますます民主党が嫌いになっちゃうんです。

《過激派嫌い》

小さい頃からちょっと日本の報道ってへんだな、と何となく感じてたんです。たとえば60年代とか70年代の電波とかテレビって、なんかこう政府に対して反対する人がヒーローとか、警察に対して挑戦するのがヒーローだみたいに取り上げている点が多いけど、それはどうなんだろう。「飛龍伝」という舞台があったんですけど、ご存知ですか。つかこうへいの。結局あれってテロリストですよ。テロリストを果たしてロミオとジュリエットにするの、どうなのかな。素敵な恋と。何かあんまり私、女だから、血を流すとかそういうの好きじゃないんです。それとか「女囚さそり」とか。でもやっぱり当時の若者、そういうことするのがかっこいいと思ってたんですよ。

で、まあ高校に進みました。そうすると結構、「先生は若い頃、日本赤軍に入ってたんだぞ」とか「浅間山荘の事件、先生かっこいいと思うぞ」という人、結構いたんですよ。要するに、「人を傷つけるような活動って、先生どうなのかな」とちょっと感じてたんですよ。でもみんなはそういう先生をみて、先生かっこいいというから、それをへんだと思う私がへんなのかなって、ちょっと悩んだ時期があったんですよ。



## (2) 外国人との接点

思い出しているのは高校の頃なんですけど、なんか在日の先輩とか結構いたんです。まあ私、昔は朝日新聞読んでたから、朝日新聞これ日本は過去悪いことして在日の人すごいかわいそうなことしたから保護しなければいけない、とってまあ一種洗脳されていた時代があったんですよね。で、その時に中国大陸に行っていた国語の先生がいて、生徒に「あいつらは在日だからあんまり仲良くするな」って言われていた時代があったんです。私それ聞いたとき、それちょっとひどいよって思ってたんです。

まあ、それから大人になりまして、まあ〇〇っていうエリアに在日の方が多かったんですね。別に何にもなく、最初は派遣社員で働いてまして、次に正社員で働いたんですけども、その会社っていうのが中国とか韓国を相手に機械を輸出する会社だったんですよ。どうやら内部の方の話だと、韓国でいろいろ見聞きする日本人の話だと、日本のマスコミの報じている話とずいぶん違うというのは随分聞かされるんですよ。それ、今韓国の方が日本との戦争については昔はそういうことがいろいろあったね、くらいにしか思っていない。それが一つと、実は竹島についてもそんなに欲しがっているわけではないです。とりあえず上の人が竹島は我々の領土だって言っているから、とりあえずそうだそうだと言っているけれども、別にどっちでもいいというのが現地の人の考えだって。ただやっぱりこれ、竹島を韓国に返せ返せって一番やかましく活動しているのが日本人だって言うんですよ。まあ左側の。

## (3) 東アジアに対する関心

(拉致について) やっぱりいけないと思うし。でも、その頃は拉致に対して動いている団体があるっていうのを知らなかったんです。

(北京五輪については) それは2ちゃんねるで。たまたまそういう板がトップに出ていて、そこで見てたんです。フリーベットで検索して出たような気がしたんですけど。あのね、(自分は) ある業種に入ってまして、2ちゃんねるに自分のこと書かれてたらどうしようと思って、板を見てたんですよね。そうしたらたまたま誰かがフリーベットというのを書いていたから、それで自分で逆に「フリーベットって何だろう」と検索して。

長野で暴動があったというのがあって、それは Youtube だったかと、ニコニコだったかな——動画サイトで (見ました)。2ちゃんねるに「ここみてごらん」とあったから——記憶が曖昧ですけど、もしかしたら大規模オフ板だったかもしれないし。何か女の子が中国の旗に囲まれてわーって泣いていたんです。…そう思い出した、Biglobe のトップのニュースに出ていました。

(そうして) ネットで調べているうちに、これはちょっとよろしくないというのがあったのと、中国に関しては、北京オリンピックの長野の行進での暴動を知って、これはちょっとやばいかなと思って。で、フリーベットに参加したことがあったんです。あ、胡锦涛が来た年です (2008 年)。

ただ、その後私なりにちょっと調べると、なんかそんな単純にフリーベットって支援できるものじゃないのかな。結局ベットを作っちゃったのは、ダライラマが原因なわけなんです。ベットって国は、これあの乾隆帝がいた頃っていつだったかな……。なんかあの国って昔から軍隊を持たない国で、何か自分の国で動乱があると全部中国のほうに助け

を求めているそうなんです。だから、結構ダライラマが自分の国の民を、中国使って弾圧してたんですよ。これはどうなのかなというのが1つと、リアルチベット人に聞いたらどうも日本人が考えているチベット問題と現地の人間が捉えたチベット問題、微妙に違うらしいんですよ。私たちはチベットって国を愛しているけど、別にそれはダライラマ=チベットと捉えないでほしいと。チベットという国はチベット人のための国であるということですね。だから、まあちょっとネットにあおられて簡単にフリーチベットというのもどうなのかなあ。

やっぱりチベット問題というのはイデオロギーだとか、思想とかそういうものが関連してくるんですけど、在特会というのはこれ自分達の生活にすごい密接に関わるから。私としては、まずそういう綺麗な思想よりも生活かな、と。今の（生活を）。

#### （４）在特会へ

##### 《他団体への参加》

（最初に参加した集会は）確か外国人参政権反対だったような気がします。一番最初の時。12月だったから、2009年だったような。で、それからずっと時間がたって、翌年に在特会を知ったような気がするんですけど。

（在特会につながるような関心は）最初はホメオパシーのあたりから。保険法の改正の。だから2009年から。それまで在特会って知らなかったんです。（ホメオパシーに関心を持ったのは）なぜかというとその頃から私ネットを本格的にやるようになってたんです。その前はあんまりネットってやってなかったから。仕事も忙しかったし。だからそういう政治活動している市民団体があること自体知らなかったんですよ。そのときまでずっとそういう団体があることも知らなかったの。まあ、2チャンネルの集まりとかそういうのに出ていたんです。2ちゃんねるはどっちかというとき事ネタとかそういうので、あんまり政治は興味なかったんです。

（2ちゃんねるの）掲示板で、たとえば××で外国人参政権反対運動があるよって、そういうのに出てたんです。で、まず最初に△△の集会に行って、チラシ配っている方からチラシをもらって、確か最初は〇〇と□□のデモに行った気がするね。鳩山さん外国人参政権を積極的に推奨しているというので、じゃあやっぱりその外堀を埋めるのに出た方がいいと。（彼らがやっていることを）1つ1つつぶしていく。外国人参政権についても、日本の法律が選挙というのを国民が権利を持つのであって、権利をないものに受けてはいけないって書いてあるんでしょ。やっぱり私国家というのは、法律でなっていると思うんですよ。左側の人たちは何か感情的になっているから、感情で国が動いたらこの国どうなっちゃうのかなって。

（集会は）面白いとかそういうのではなかったような。まあでも、自分たちの主張っていうのは少しは通じたかなと思ったんです。行くっていうのは面白い面白くないかじゃないし、まあとりあえず誰かが声を上げないと、こういうのって決まっちゃうような気がしたんです。（そうした集会参加は）1人。私、〇〇出身だから〇〇の間人って結構頭にかっとな血が上っちゃうと1人でつぶしちゃうんです。これは間違ってるなと思ったら間違っているって言っちゃうし。

（外国人参政権について）政治的にはちょっと興味はなかったんですけども、ただ私昔

話とか結構好きでしたから、たとえば世界で一番最初の外国人参政権が成立した後に——エジプトのモーゼの伝説ありますよね。モーゼの前のダニエルですっけ、ユダヤ人がエジプトの偉いさんになっちゃって。今で言う不法入国ですよ。エジプトの地がユダヤ人ほとんど入っていきました。で、時代が下った時にエジプトの行政とかそういうのってというのが、ユダヤ人によって全部されていった。彼らがあまりにも力を持ちすぎちゃったから、エジプトの公共工事とかそういうのがすごく動かなかった。そういう話を聞いて、昔話で聞いて、それちょっとどうなんだろうと思ってたんです。

ただ、日本には当時そんなに外国人いなかったから、遠い昔の話だし、日本関係ないやと思ってたんですね。(そうしたら鳩山さんが)地球は1つだと。私の周りも国境なんか知らないんじゃないかという人が多かったんですね。誰かがそれに対してそれは違うよと言わないと、勢いとはとどまるところを知らなくなっちゃうなって。

#### 《在特会への参加》

以前は私、どっちかというところ△△会に参加してたんです。今はああいう風になっちゃったけど、昔は△△会って一番おとなしい団体だったから、参加しやすかったんです。(デモへの抵抗は)なかったです。そんなに怖い目にあつたことないし。小さい頃私、××(反対運動が盛んな地域)で生まれたから、大人たちは結構集まってるなあという。ただその頃小さかったし。ただちょっと今までと違うなと思うのは、それまでは国を壊すとか、ひたすら日本人は悪い民族だつていうそういう考え方で、新しくできたデモというのは日本人は素晴らしいという風にといいのでちょっと違うなって思ったんです。

最初の頃、××と在特会と△△の区別ってあまりついていなかったんです<sup>15</sup>。でね、まあ最初の頃は××に出てたんですけど、ただ××で私ちょっといやだなあと思うのは、あそこ日本は核ミサイル持ちましようって宣伝するから、ちょっとそれは違うと思って。どっちかというところ、在特会は生活に密着したことを主張しているから、だからまあ主張していることは——口調は過激なんですけど、結構考え方としては穏健なのかなあと思って。でまあ、□□の在特会っておとなしいし。

みんなが捉えている在特会の像というのは、チーム関西取り上げて在特会だと思ってるんじゃないのかな。実際、在特会って県によって大分性格が変わってくるから。私の支部は意外と一番おとなしいんですよ。だから私はどっちかというところ、在特(会)でもおとなしい支部だから参加したなって思うんです。あまり暴れない。デモのときも、ちゃんと理屈をこう練って理論武装でいうのがいいな。「東京湾に叩き込め」くらいならまだいいけど、イケイケどンドン上等みたいな人たちがいるでしょ。たとえば、この間のビデオでチーム関西の方が、通行中の老婆つかまえて「朝鮮ババア」って言ったでしょ。あれ良くないなあ。もし自分の母親がそういうことされたら、どうするんだろうとかって思って。無視すればいいじゃないですか。

#### 《なぜ外国人が問題なのか》

ちょっと思い出しますね……。震災の後でいろいろ記憶が消えちゃって……。ええとね、

---

<sup>15</sup> いずれも極右の団体。

外国人参政権でしょ。人権擁護法案っていうのは在特が取り扱ったのかしら…。あれも違うか、あれは××か。あ、小沢改革で何かあったような記憶が…。何かちょっと××とごっちゃになっていて…。アンチ民主です。私たちの生活を追いやるような政策ばかり…。

あ、子ども手当。一番これ騒いだのが子ども手当。だって結局、あの日本に住んでいない子どもにお金を払うわけでしょ。だったら丸川珠代さんみたいに、配るんだったら日本に住んでて日本国籍を有する人間という風につければいいと思うんですけど。結局、あれも実施しちゃったから、1年に5兆円ずつ流れちゃうわけですよ。今、日本という国は借金があって、すごく財政が大変な時期なんだから、それはどうかと思うんですよ。実際に外国人たちに聞いたら、結婚して子どもいないんだけど、子ども5、6人いることにしてお金もらっている。

昔はそういうの一切知らなかったんですよ。大人になってから、他に在日の友達いますけども、そこまで普通そんなにあの「あなたのお母さんのくらい稼いでるの」って聞けないし。まあスルーしてたんですけども、たとえば今回の震災の一件で——韓国人じゃないんですよ——中国人の留学生に対して国が200万円でしたっけ、一時支払金出しましたよね。でもこれ日本人に対しては確かおうち流された人も17万円とかしか出さないと、逆に日本人差別じゃないのかなって思うんですね。

あたし石巻に行って知ったんですけど、そこのおうちの人たち全部流されて、空き家になったところに中国人が移り住んで、ここ私の家ですって言っているわけでしょ。石巻の人がこんな荒地に店出してたくましいなと思って、石巻の人に八百屋さん開いていましたよといったら、「おかしい」と。あそこは八百屋さんないし、そこのおうちのご主人、家族みんな流されちゃったはずだって。

私が危惧しているのは、中国人と日本人って物事の判断が全然違うんですよ。日本人は法律の範囲で動こうとするけども、向こうは儒教の国だから。向こうってお父さんお母さんがこれをいっていうから、私をこれをやるとか。なんか一緒に暮らしていて「そんなことしちゃうの」っていうのが結構あるんですよ。でも中国人の子って「私たちの国ではこういうことが当たり前だから」って。

ただ私、「外国人の共生について、共生してもいいから、日本人と同じ権利を与えて」と思うんです。今の法律だと外国人が何かやっても、やはり日本人が悪いってことになっちゃうから。

#### (5) 普通に生活できる時代に戻すこと

はっきり在特会（のデモに出た）というのは、2010年です。たまたま仕事のシフトが空いている日とか。やっぱり月イチくらいでしょうか。（手伝っているのは）会長がデモに出れないんだったら、お手伝いというので。お手伝いってあんまりぴんと来なかったんですけどね、私にできることだったら（やります）。

やりがいがあることは、まず第一ですけども。確か参院選だったと思うんですけども、当時のなかで民主党が限りなく優勢だった時代がありました。私と在特の支部長とポスティングしたんですけど、あれがもう自民党がぎりぎり民主に差をつけて勝てたんです。私たちのような力のない人間が地道に活動すれば、やっぱり民意というのを政治に反映させることが手ごたえを感じました。菅首相も国会でおっしゃってますよね。私のやり方に

ついて誰も反対意見を述べてないから、それは国民の皆さんが私を期待していると。ただ私はデモに出る以外は、ちまちまポスティングして、「こういうことをやっていますよ」というのは前からやってたんですけどね。

(究極的には) この国を元の 90 年代の日本に戻したいということじゃないかなと思います。80 年代か 90 年代の。昔の自民党がこう政権を治めていた時代、何も考えないで普通に生活できる時代に戻すことかな。やっぱり女性っていうのは、今の生活を守りたいというのがあるんです。

## (6) 小括

E 氏の場合、必ずしも一貫した論理を持っているわけではない。在特会につながる関心を持ったのはフリーチベットであるが、それを排外主義へと直接結び付けていくような回路にはなっておらず、その後生じた民主党政権への反感とが渾然一体となっている。ただし、そうした明確さを欠く意識が行動にまで至る背景として、「女性っていうのは、今の生活を守りたい」という生活保守主義がある。1980 年代に自民党が勢力を盛り返した背景として生活保守主義が指摘されてきたが、奇しくも E 氏は 80~90 年代の「何も考えないで普通に生活できる時代」にノスタルジアを感じていた。ここで彼女がいう 90 年代とは、55 年体制が崩壊する以前の、生活実感としては長期不況に入る以前の日本を指しているだろう。

現実問題として、90 年代半ば以降の日本は今に至る「失われた 20 年」を経験してきたが、そこで噴出したさまざまな問題の原因は一口に語れるものではない。ニューカマー外国人の増加は、そうした原因の一端にすらならないだろう。ましてや、戦後ずっと居住し続けてきた在日コリアンが、事態を悪化させたというには SF 並の空想力が必要となる。ここでいいたいのは、東アジア諸国への反発→在日外国人の敵視という筆者の仮説とは異なる回路が E 氏には見られることだ。「住みにくくなる日本」という茫漠とした感覚をもたらす犯人を探すなかで、排外主義的な主張に行き当たってそれに易々と呑み込まれてしまう。これは、西欧の極右研究でつとに指摘されてきたことである。E 氏の場合、外国人の敵視は経済的な水準には及んでいないが、そうした結びつきが今後なされるとすれば、日本の経済的没落と外国人を結びつけた議論が受け入れられる素地はある。現在は、地政学的要因に基づく排外主義の主張の方がもっともらしく聞こえるだけで、状況の変化に応じて排外主義の根拠も変化するかもしれない。

そう考えると、不満を社会運動の源泉とする古典的社会運動論は、排外主義運動に関しては説明力があるように見える。しかし、資源動員論を経て再度提示された「不満」をめぐる議論は、不満が運動組織と潜在的構成員の間で、あるいはピア・グループの内部で構築されることを重視するようになった点で異なる (Noakes & Johnston 2005)。つまり、「不満」がプッシュ要因となって運動に駆り立てるというよりは、「不満」を作り出すインフラというプル要因に眼を向けなければ説明できない。その点でいえば、E 氏が何の気なしにみたネット上の情報というインフラがプル要因になった経験は、他の多くの在特会会員にも共有されている。

## 6 ワールドカップがきっかけとなったF氏の場合

### (1) 政治に対する関心

まあないことはないですけども、ただどそんなにね、社会運動やろうとか政治運動やろうというほどではないです。投票ぐらひはしてました。そこまで厳密には行っていないですけどね。さぼることもありましてし。

(投票先は自民党かという) 必ずしもそうじゃないですよ。まあ自民党が多かったとは思いますが。私は印象に残っているのは、細川政権誕生した時に選挙行けなかったんですね。あれが結構印象に残ってね。で、その後だれに入れていたか、自民党が確かに多かったとは思いますが、当時は反自民にも結構期待はしてました。無党派です。

(それが変化したのは) 2002年くらいですよ。ワールドカップです。小泉政権というのもあったと思うんです。靖国神社に参拝すると。当時靖国神社って私全然知らなかったんですけども、それに対して何でいちいち外国が文句言ってこなきゃなんねえんだと、そう思ってですね、それで「いやこれはすごい人がでてきたな」と。それからですね、意識して本当に国のこと思っているのかを考えて投票するようになったのは。

(それからは) 自民党ですけど、私自身は西村真悟先生。今、西村塾、西村真悟先生のところの塾にも入りましたし。政治家としては西村真悟、あとはまあ他の人についてはヘンですけど、そこに近い、考え方が近いところですよ。

### (2) 外国人との接点

(在日コリアンは) 地元にはいないんですけど、隣町には朝鮮学校があるみたいですね。そこ、どれだけ勢力でかいのかってわからないんですけど。そっちの隣町のほうには何かその、左翼の活動家としても有名なのが、これは後からわかったみたいなんですけど、いるみたいなんです。何かと在特会のイベントなんかやったときに、何とかっていう左翼の連中が相手側のところに賛同しているというのがありまして。(当時は) 全然知りませんでした。

(近所や学校にも) いないですね。在日っていかもしれないけど、彼ら自身が在日と名乗ってはいなかったし、だいたいみんな日本人だと思いますけど。キムチだって食べたのは大学に入ってからじゃないかな。在日って存在を意識したことはないですね。

(外国人問題に対する関心は) まったくなかったです。で、普通に外国人ていうか、会社ですね、いますし。特に私、理系なんで外国人の研究者と一緒にやりますし。その中で英語で会話するってのも普通にやりますし。外国人に対してそこまで侵略とか排斥だとか考えたこともない。

(中国や韓国についても) 知らなかったです。この運動ってというのは、結局知ったというのが、そういう現状を知ったというのがきっかけになっているんで。なんていうのかな、そこまで関心も今までずっとなかったし。韓国とか中国といたって、はっきりいってどういう国だったかよくわからなかったんですよ。ただ中国人とか韓国人って留学生という形で来ていて、ちょっと文化が違うな、くらいだったんですよ。で、ただどなんか彼らが——我々が教わっている、なんていうかな要するにアジアに対する負の考え方ね、日本は悪いことした悪いことしたって——その割にはあいつらなんか妙に日本のこと好きだし。

何でだろうなとずっと思っていました。

### (3) ワールドカップと拉致から「在日特権」へ

《ワールドカップというきっかけ》

(東アジアに眼を向けるきっかけは) ワールドカップですね。ワールドカップの年にだいたい集約されていると思うんですよ。拉致の問題もそうですし。あとワールドカップで実際になんかマスコミがおかしいぞ、という。インターネットでのぞいてみたらやっぱりそうだって。自分と同じ考え方がこんだけいたって。ワールドカップに対する韓国の報道です。

やっぱ一番なんか象徴的だったのが、最初日本で単独開催だったんですね。韓国で一緒になろうって話になって、準備できているのかなと思ったら、全然その準備もできてなくて。いきなりなんか共同開催って、ぎりぎり向こうも間に合ってよかったなと思ったら、あいつらファールはいっぱいあるわ。じゃあ共催だっていうことだから、互いに応援し合っているのかということとんでもない。そういうのが段々明らかになってきて、やっぱおかしいなと。やっぱりサッカーというのは結構大きかったんですよ、影響というか。今回こういう運動やるという意味で。

(そう思ったのは) ワールドカップが終わってからですね。それでインターネットで調べて、情報が入ってきたっていう、たまたまそういうところ見たっていう、こちらから積極的に調べたっていうのがあって。それでおかしいということがずっとわかって、納得するような答えが出てきて、それでああ在日特権なんだと、いうところに行きました。

(韓国がおかしいということか) まあそうですね。おかしいということと、それはうすうす感じてましたし。それで検証するっていう、そういうことをやっていた人たちもいて。で、やっぱその何か審判買収しているんじゃないかと。大体わかるんですよ。韓国のラフプレイっていうのは、もう非常に眼に余るものがある。他の国ってもんじゃないですよ、ラフプレイしているんですから、普通に。今のファウルだろうというのをとってこないとか。

(そうした話をする人は) 周りはいないですよ。ワールドカップの話題で何か韓国おかしいぞっていうのは出てきましたけど、「そうだよ」くらいで。自分で調べて、本もいくらか——それ以降ですけど——出始めて、『嫌韓流』も出てきて。

(それだけでなく、教育勅語を) 暗記してますよ。それでも靖国神社にお参りするようになってからだから、拉致の事件が起こってからですね。小泉純一郎の「俺は行くぞ」、とそれで確かに私も靖国神社ってほとんど意識してなかったんですよ。いつも靖国神社近く通るとですね、右翼の街宣車があって、殺すだなんだって書いてあって、なんでこう品のない奴らが集まってきているのかと思っていたんですよ。ところが小泉さんが何が何でもお参りするとやって、外国というかね、特定アジアの人たちが嘔み付いてきて、何でという形でそのあたりですよ。それで実際に自分の眼で見てこようと。自分で行って見て、その頃からですね、『ゴーマニズム宣言』なんかを読むようになったのは。

《拉致の衝撃》

そこからマスコミってやっぱり本当のこと報道してくれねえじゃないかって。どうも在

日特権みたいなことがありそうだとかって。韓国に対する批判の目というか、そこだと思  
うんですよ。その中で拉致の問題が出てきて、やっぱりそうかあいつら拉致してたんだと。  
そのくらいからですよ、特定アジアという言葉が出てきたのは。何か知らないけど特定  
アジアで、アジアに対するなんつうの、戦争犯罪とかっていうのは必ず特定アジアなん  
ですよ。それで何となくこういうのがつながってきて。(ネット上の情報ということか) そう  
ですそうです。あのとき2ちゃんねるはすでに。私は一部の結果しか知りませんが。  
(書き込みは) 全然、全然そんなことは。書くこともないし、それから書くことも全然  
なかったし、本当に。在特会に入ってから、割とバンバン書くとっていうか、しゃべる  
とっていうか、それからです。

(衝撃が強かったのは) やっぱ拉致ですよ。確かにね、そのあれが結構でかかったの  
は、今まで拉致なんかないよってという意見が結局あったという意見を圧倒していたん  
です。それががらっと変わりましたよね。(拉致は) あったとは思いましたが、ただその、  
表立っていえるほど証拠もないし、まあちょっと弱いかなど思ってたんですよ。それが  
向こうのトップが認めたんだから、ああやっぱあったのか、と思いましたよ。

(韓国は無関係なのではないか) だけど、同じ民族だって私は思ってたから。今に  
なってみればね、北と南でやっぱり仲悪そうだったっていうのはわかったけれども、  
同じ朝鮮人じゃないかって。

#### 《「在日特権」の発見》

(なぜ朝鮮半島から在日に眼を向けたのか) 同じ民族ですから。私もね、民族性とか何  
だかってはっきりとはわかりませんよ。けどね、結局そんなに簡単に人の生活とか人の  
文化、習慣って変えられるものじゃないでしょ。そこを考えてみたら、在日もそんなに  
一朝朝鮮人という点で変わらねえだろうと思いますけど。ただ彼らも少しずつは変わっ  
ていきますよね。彼ら自身も日本にしかいられないってことがだんだんわかってきた  
というか、そういう文化・習慣というのをなじんできていますよね。

(そのとき在日特権という言葉はなかったのではないか) そうですね。あ、でもその  
とき言っていた人いたみたいなんです。そのときから在日特権ということ。ただその  
ときには全然気づかなかったですね。

#### (4) 救う会から在特会へ

##### 《救う会への加入》

きっかけとしては拉致被害者救出運動のとき、少しずつ運動し始めていって、それで  
行動するってことに広がっていった。最初に出たのがあれだと思うんです。何か街頭で  
リボンを配るとっていう。ただそれだけの運動なんですけどね。それにたまたま参加  
して、日本全国こういう組織があるってのがそこでわかってきて。で、「地元じゃないの？」  
って調べたら救う会がある、それでこういう形でやりたいんでお願いしますといたら  
受け入れてくれて。いつぐらいかっていうと、在特会できる直前くらい。集会とか  
っていうのは。

行動ということっていうと、私はデモ行進とかなんかついてということっていうと、  
5年以上かかっているんですよ。(リボン配るのも) 2006年とか2007年とかそんな  
ものですから。そこまでに4年は少なくともかかった。それまではネット見て本を  
読んで、それくらいでし



たよね。まあ周り見ても（そういう人が）いなかったというのもあります。デモ行進というのは、私はあまり見たこともないしやったこともないし、在特会入ってからですね。周りでデモ行進やっている人がいる。じゃあそれで出てみようかと。

（実際に行動するのは）簡単といえば簡単だし、簡単じゃないといえば簡単じゃないですけども。ただやっぱり、署名運動とかってというのは別にそんなにハードル高いことでもないと思うんですよ。拉致被害者を救出しましょうという、当たり前のことを言っているだけです。それで拉致の問題というのも認識されているし。言えばすぐにわかってくれるだろう。そんなに特別に躊躇するようなことはないと思うんです。

（参加した理由は）なんででしょうね……。それで集会とかにも結構行くようになったんですよ。聞いているだけです。いろいろこういう運動があるってことを少しずつ知っていった。これもたまたまインターネットで調べたのか、チラシっていうのかビラっていうかですね、集会なんかで配られる。ああいうので知ったのかももう定かでないですけど。

損得勘定じゃないですよ。もうやらなきゃ。たとえば拉致の問題にしたって結局わかったのが、これだけ拉致被害者というか特定失踪者もひっくるめて言うと、多くの人が北朝鮮に連れて行かれているっていう現状があって。それで自分も被害者になるかもしれないよ、と。そういう・・・たまたま今自分が日本にいられるのは偶然だったかもしれないな、とわかってですね、そうしたらやっぱり損得勘定じゃなくて、これはやらないと、と思いましたがよね。別に警察に頼って警察が全部やってくれるのならやることはないと思うんですけど、警察っていったって市民の協力がなければ捜査もできないわけですから。

#### 《在特会へ》

その頃に在特会というところも知ったし、いろいろなブログとかも出始めてきて。（活動したのは）救う会の方がちょっと早くくらいです。これはもう、インターネットでこういう組織ができそうだっていうのが、リンクたどっていくと何かそういう動きがあるよ、と。このことを知って、ああこういう組織なんだと。それで在特会の発足集会、500人くらいの集会に行き、ああこういうのがあるのかと思ってそこで入会した。

（当時桜井氏のブログなどは）全然読んでいなかったです。（初めて在特会を知って）そのときやっぱりすごい印象的だったのは、無年金訴訟です。何で税金払っていないやつに、いや年金払っていないやつに保障しなけりゃなんねえんだって。在特会ができるきっかけというのが無年金訴訟。桜井さんが特に言っていたのはですね、在日の無年金訴訟、在日の敗訴になったんですけど、あれに何で日本人が支援しに来るんだと。それで反対の運動ってあるのか、ということらしいんですよ。どこ探してもない。ないだったら自分でやるしかないと思ってやったって。

（拉致と在日の）根幹は一緒ですよ。主権、国家主権という問題。これがずっとおろそかになってきた。自分でも気づかないうちに国家主権といったものをまったく意識せずにとずっと過ごしてきて、気がついてみたらこれだけやられているんだ、拉致被害、やられたい放題やられて。いつの間にかその、就職における在日枠というのも一部企業ではあるらしい。で、何か知らないけど在日が集団で押しかけていって、わーわーわめきたてて、そういうことをやっているとか。

（入会した）最初はそう（一会員）ですね。その後に運営募集という話があったんで、

じゃあやりますよと。そこからですね。少しずつこっちの運動に積極的に関わってくるといのは。(救う会についても) 明日も横田さんらが呼びかけて、全国一斉で署名活動やるべく呼びかけてくれというので、ちょっとそれに賛同してですね、私も一応やります。在特会も最初それほど表に出て行くというスタイルではなくて、少しずつ勢力拡大していきこうというスタンスでやってましたけども。民主党政権が誕生しそうだっていう、そういうところになって表に出るようになったんですね。

私はそのあたりからですね、集会にも出るし××さんのデモ行進とかにも行くようにしていたんです。最初はそんなに私もそういうつもりはなかったんですけども、出始めてそういうやり方もあるんだと思って。

#### 《維新政党・新風への加入》

デモ行進とか、表に立って街宣をやるとなると躊躇することになると思いますけど。マイク渡されてしゃべれというから(ためらいはなくなった)。ちょうどその頃新風——維新政党新風というのにも入りました。在特会と同じくらいの時期に。街宣とかというのも出ると。それでちょうどたまたまですね、北京オリンピックありましたよね。そういう時期だったんで、そうするとやっぱ支那中共の大気汚染の問題とか、あるいは核実験の問題も段々出始めてきましたし、そこから入っていったんです。それで少しずつ慣れていったんだと思いますね、人前でしゃべることは。政治のこととかいうのは、原稿があればしゃべれますけど、それがなければちょっとしゃべれなかった。

最初はちょっと恥ずかしいとか、ありましたけれども、ただ主張していることも別にそんなに過激なことではなかったですよ。××さんがやっているのをみると。首相は靖国神社に参拝しろって。そんな当たり前のことだから、別に言ったところで・・・。

私としては在特会も新風もその時は同じだと。それは政治運動とやるのかと市民運動をやるのかという差であって、目的としているところはだいたい同じであって。それはいろいろなところでやっていこうと思ひまして。

で、やっていったら何か新風のほうが、民族差別を許さないという声明を出しちゃって。あれ以来、党の勢力が落ちちゃったんです。在特会名指しで。そういう感じですよ、あの時は。代表というか魚谷さんが、その時ですね、なぜそういうことをやったのかということの説明しましたが、在特会の活動というのは新風と一緒にだと思われると困ると。イメージが悪くなると。我々はあくまで政治運動としてやっていた、政党としてやっていた票を得たいからやるんだと。在特会みたいなのは困ると。だから、やるんだったら在特会と新風は別でやってくれと。でもそれをやったがために、新風は落ちちゃったんです。在特会というのは、少しずつですけど勢力を今伸ばしつつある。明暗の差がはっきりわかりましたよね。その時に。

動画の再生数でいうと、新風が一番トップなんですよ。我々の業界では。2007年だっけかな、参議院選挙、その時も新風の瀬戸さんたちが朝鮮総連の前で街宣やって、最後なんか信濃町歩き回ったとか。あの動画が20万アクセスあって、あれが一番やっぱ歴代トップ、我々なんぼやっても5万6万が最高なんですよ。圧倒的にそっちのほうが最初よかったんです。その路線でずっとやってれば党勢拡大できたのに、それをやめちゃったんですよ。そういう教訓とかっていうのもあって、最初は在特会も我々が今「きれいごと保守」

だといって馬鹿にしているような、そういう路線を歩むっていう選択肢もあったんですよ、最初は。それがそこと決別できた。まあ、ある意味新風がそういうことを、自爆してくれたんで、こっちは見ていてこれやっちゃいけないんだなと学ぶことができた、いい例だったと思いますよ。ただ私、新風（を）嫌いでもないんで、党籍は残してます。

## （５）在特会での活動

### 《活動の手応え》

やっぱ一番面白かったのはあれですね、河野談話白紙撤回しようという運動ですね。あの署名をですね、まあやると。とにかく敵にダメージを与えるんだっていう、そういうスタンスですね。これはやっぱり重要だなと思って。それで××さんたちも見ている、在特会もそこに合流してきて、この流れいいんじゃないかとそのときは思いました。その頃はやっぱり手探りでしたよね。あのときは。何やっていいのかよくわからないというか。

結局そのとき、今のスタイルというんですかね、こうすればいいんじゃないかというのが見えてきたのが、蕨市のカルデロン一家の問題。あれで入国管理局のほうにも抗議活動に行ったり、蕨市でもデモ行進やったり、あのあたりからこうすればいいんじゃないかっていうのがちょっとわかってきたような感じがしましたよね。要するに敵——左翼に対してどうすればダメージがあるのかっていう。そのダメージを作るためにどうすればいいのか、と。こっちは今、たとえば今日の反原発っていうのをやりましたよね、向こうが。そのときに黙っているのがいいのか、出て行く方がいいのか。どちらかというところ、と、そういうところに出て行ってやった方がいいだろう、ていう。時間の許す限りそういうところに行った方がいいだろうと。

（当時は）どうすればいいか私自身もよくわからなかった。とりあえずデモ行進もやる、集会もやる、その頃は結局やってもなかなか成果っていうんですかね、会員数伸びるといって、そういうところには、なかなかたどり着かなかったです。やはり会員数が目標を持って近いうちにとにかく 1000 人超えるように努力しましょう、2000 人超えるようにと、そういう形で少しずつやってきたんですけど。あの時ですね、カルデロン問題が起きてそこに乗り込んでいったときに一気に伸びて、ああこうすればみんなみてるんだと、そういうことがわかってきた。

（カルデロン一家について）基本的に問題は一緒で、国家主権という問題と、今の不法滞在を認めると第2第3の在日作っちゃう、そういうことだと私はそう思ってます。結局在日の問題も、私は全然知らなかったんですけど、結局は密入国というのを暗に認めちゃって、それが在日問題にここまで広がってしまった。だからそれは不法滞在という問題、不法入国という問題は、これきっちりやらないと。あんまり移民を受け入れるということにも私は反対ですけど、せめてね、正規に入ってくる人間だけにしてくれと。そう考えるとやっぱり不法滞在というのは絶対にやらないと、思っていました。

あの時不法滞在の問題という、左翼のジャーナリストたちはそれは資本主義の構造の問題だとか、それでなんか落ち着けようとしてましたよね。でも、あのときはっきりわかったんですよ。我々が不法滞在の問題ってことをやったときに、会社の経営者が我々に対して反発するんじゃないかと、左翼が反発してきて、今まで労働者の権利を守れとかって言っていた人間が反発してきたってのはどういうことなのかと思って、結局そこに利権と

いう問題が左翼の問題としてあったんだと。まあそういうところが暴いていけたというのも1つの大きな成果だと思う。それで、多くの人たちはそこを気がついた、そういうきっかけを作れた。

だからあれ、何気なくというかね、これは大きな問題だと思って我々真剣にやってみましたが、成果が出ると思ってやったわけじゃないけれども、結果的に相手の痛いところをつくことができたんだと。要は相手の痛いところをついていけば、相手も嫌がるし、嫌がってカウンターかけてきたら、それでこちら側も目覚めてくる。そういうことがようやくわかってきて。それで運動論というか、その時どうしていけば我々の目標というのをね、とりあえずそのときは会員数を増やすという大きな目標がありましたんで、そういうところに結び付けていく。あと動画を使ってとにかく拡散していこうと。

その年ですよ。あのときは最後に勸進橋児童公園という一番大きなイベントがあって、あれが本当に一気に増えたんですよ。あれ、誰が見ても朝鮮学校のやっていることはおかしいだろうと、思えるようなきっかけをうまく作ってくれたんですね。あれでほしい、そこから先は我々にとって舵取りが難しくなっていましたけれども、でも基本的にあの路線ていうのですかね、敵の嫌がることをやっていけば必ずこちら側の賛同者も増えていってくれるという。勢力伸ばせるし。ちょっと今勢力伸ばすということよりも、地道にやっていくということ、そっちのほうにちょっと重点を置かなければならないというのはありますけども。ほしいそれで運動の方向性、ようやく見えてきたと。

あれ（勸進橋事件）で、共産党がずっと国会議員も含めてですね、一緒にやっていたのが、共産党が逃げましたからね。あれで。だからあれは結構でかかったんですよ。

### 《真の敵としての左翼》

結局我々ね、在日朝鮮人を敵に据えてるけれども、大部分の在日ってそれほど敵だという認識はないですよ。根本的な問題はそれを支援する日本人なんですよ。そこが一番問題だと思いますよ。在日朝鮮人に対してどう思っているかといったら、大部分の在日朝鮮人はほしい日本人に味方じゃないかと思うんですよ。彼らも彼らなりに日本で生活しているという意識はあるでしょうし、民団にしる朝鮮総連にしる、彼ら自身がそんなに快く思っていない部分というのは多々あると思うんですよ。

やっぱ実際会社の中でも在日朝鮮人っていますし。彼らがどう思っているのかっていうことも、ほしい話は聞いていますし。学生の頃かなり大変だったと。暴力事件なんかいろいろやるんですけども、なんか学校同士の抗争があったらそこに参加しなければならない。参加しないと先輩からいじめられるし、教師からいじめられるし。本当に半殺しの目にあう。先生が怖いから暴力に参加するって、そういうこと普通にやってたっていうんですね。

彼らなりに日本に溶け込みたいし、やっぱり在日というのものもあるし。まあ彼らは彼らなりに悩んでいるんだなあと思いますけども。じゃあこっこのほうとして、悩まなくていい方法っていうのはありますよと。そんな中途半端な在日というのをやめて、外国人なら外国人なりに、日本人になりたいというのなら日本人になるというのもいいかもしれませんですけども、ちょっとそれも怖いなど最近思うようになりました。

社会運動という——いろいろと研究されていると思いますけれども——我々ね、偶然の

産物というのがいろいろとあると思うんですよ。ただ、爆発させてそれで終わりというね、そういう運動にはしたくないな。やるんだったらきちんと目的持って、その目的達成する、それに向かってきちんとやっとうと。で、あくまで在特会って桜井さんが特に言ってますけれども、本当に在日特権がなくなったら我々の会をつぶしますよ、そのためにやりましょうと。非常に潔いというね。それでそのためにやっとうとはいけないことというのは、だいたい普通ならわかるよね、その常識にもとづいてやっとういきましょうと。非常に単純だと思いますよ。成功したか成功しないかっていうとね、ちょっと今のところまだ入管特例法というところに全然手つけられていないわけですから、今の段階では目的は達成していないわけですが。まあでも、それに近づいてはいるのかなと思います。

(重要なのは南北朝鮮、在日、左翼のうち)全部ですけれども、とりあえず片付けなければならぬのは左翼、日本人のほうです。結局、この問題って在日特権じゃなくするのはどうしたらいいかといったら、日本人がなくなると決めるしかないわけです。そこで政治的な勢力、市民運動としての勢力を持っているのが左翼なわけですから。だからそこ対決していくというのは、1つの大きな路線だと思いますね。在日朝鮮人って確かにそういう形で対立みたいな構造はありますけれども、在日朝鮮人自体がそんなに我々とそんなに対立するようなものでもないです。彼らは彼らなりに悩んでいるところがありますのでね。そうしてみると、本当の敵というか今すぐやらなきゃならない敵は、日本人の左翼のほうだと。

ただやっぱり我々もね、将来的にどこと戦わなければならないのか、というのは頭の中には入ってますよ。我々別に左翼を拒んでいるわけでもないですよ。たまたま左翼と在日問題ということでフィルターかけちゃうと対立するんです。左翼と戦わなければならないけれども、我々戦争したいのは、戦わなければならないと思うのは北朝鮮であり、韓国であり、もうちょっと先にはシナっていうのがあるわけですけど。でも、本当に戦わなければならないのはアメリカですよ。もう1回戦争しなければならないと思ってます。

#### 《社会統制》

確かにそういう側面(公安が気になる)はありますね。だけど、一応その我々は今のところ公安に対して敵対しているわけでもないですし、彼らの嫌い——警察にとって嫌いな組織に対して我々は攻撃しているんだから。ただやっぱりそうはいてもね、完全に味方だとは思ってませんよ。彼らは彼らの仕事でやっていると、こっちはこっちでたまたま利害関係が一致していれば、ちょっと協力お願いしますと。今日のカウンターとかって、基本的に彼らが通ってくるルートってあまり許可が出るような、集会とか街宣の許可が出るようなところじゃないんですよ。そこを通行の邪魔にならないという通行の一角を設けてくれて、そこの中でやる分にはいいよ、その代わり出たら保障しないよということになりますけど。そういうことになりますんで、私はそんなに公安、あるいは最近公安調査庁ともいろいろインタビューとか、こっちが情報提供してあげてますしね。

左翼担当は目つきでわかりますもの。それが一番よくわかるのは、一般参賀、皇居の時に公安で右翼担当と左翼担当が出てくるわけですよ。公安の人はだいたいバッジで分かるわけですが、右翼担当の人たちっていうのは何か目つきがだらけてますよね。左翼担当の人はものすごい目つき悪いっていうか、厳しい目つきしてますよね。見てすぐに

わかりますよね。時々その警察なんか我々申請しに行くじゃないですか。で、土曜日とかに受け取りとか何かっていうと、担当の人、宿直とかなかそういう形で、その場に残っている人しかいないですよ。時々刑事課の一番ガラの悪い人間が受付にいる時があるんですよ。そのときはすぐにわかりますよね。暴力団かと思うような人間がそこに座っているわけですから。だから、我々ね、どちらかという公安の三課なんで、あんまり怖い人とか目つき悪い人たちは出てこない、あまり表立って出てこないし、そういう人たちはむしろビデオとっているとか、ちょっと遠く離れてます。機動隊の対応をみてもそうですね。こちら側に対してはちょっと甘いですよ。

デモ行進の指揮というのですか、デモ行進に出にくい人を引っ張り込むという点ではチャンネル桜はよくやっていると思いますよ。今までデモに出てこなかった人がデモ行進に出てもいいんだよ、当たり前前に思っていたことを表現してもいいんだよ、在特会ほど過激なことはいわない。そういう形でね、私は在特会と違いますよ、こういう過激な人たちとは違いますよという路線を示せた、ああいうことをやってくれたのは1つありがたいと思いますよね。

## (6) 活動の果実

### 《右に行く土壌》

(右に寄る) 土壌というのはあったと思いますよ。我々の信仰っていうんですかね、神社、あるいは仏教というところも日本流にアレンジされたものだともともとあって、子どもの頃からお葬式だとかあるいは正月なんかにしても、昔からの習慣をやっていると。で、それが何か知らないけど教育で大分歪められますけれども、やっぱりその習慣というのはなかなか消え去るものじゃなくて。それがぼっと拉致という問題とか入ってきて、国家主権とは何かと考えると、やっぱり実は右翼の人たちがずっと言ってきたことは間違っていないと。何となくその怖いイメージだとかいうので言われるけれども、実際に会ってみると別にそんなに怖い人たちでもないし、我々とそんなに変わらないと思えるわけです。

そういう眼でみると、左翼の人たちがあまりにも異常に見えてくるんですよね。合理的にあって、正しければいいんですけど、どっかしら矛盾を抱えちゃっているわけで。そういうのに段々気がついてくると、やっぱり2000年以上の伝統とかを持っていて、そのまんまでいいんですよ、という右翼の流れというんですかね、それが自然と「ああなるほどな」と思える。もともとの自分が生まれ育ってきて、これが当たり前だと思ってきたことはやっぱり当たり前だった、それくらいですよ。

### 《得られたもの》

やってよかったというのは、私自身はかなり個人主義になっちゃいますけども、会社でマネジメントとかっていうのをこれからやっていかなければならない。今もやらなければならない立場なんですけども、その段階で会社では教えてもらえないそういうことを直に自分がやらなきゃならなくて、いろいろ成功失敗ありますよね。そのなかで学ぶことができた、これはかなりよかったと思いますよ。

それとあとやっぱり、運動もそうだし会社でもそうですし、何をやらなければならないのかなというのが割とすぐに答え出せるようになったところですよ。やっぱり会

社にいてずっとやっていたら、ここまで知ることできなかったなと思いますし。会社でああやれこうやれといわれると、これはおかしいだろとすぐにわかるんです。おかしいんだけどこれはやらなきゃならないのかな、とかいろいろやり方はありますけど、それがわかってきた。それはもう在特会の成功失敗というところでいろいろ経験してきた、大きな財産になりましたね。

国民運動とか運動論とかっていうと、ちょっと最近インターネットで答えが出てますけれども、何が大切かというところの目立つというそこも重要なんですけれども、そこにいるナンバー2とかナンバー3がいかかにしてこれを伝播させるか、そこに集約されているんじゃないか。で、なるほどなと思いましたね。今の在特会の組織を見てみると、とにかく支えている体制があるということです。で、会長の、一般からしてみれば常識はずれなことをぽんとやると。それをいかかにして面白く伝えるかというのがね、うまく広報とか使ってるね。それに尽きるなと思いますよ。

私としてはそんなに特別なことをやっているわけではないですけども、それは普通にできる。その上で、普通に社会人やってたらどうにも得られなかったものを得られるようになった。交友関係もできましたしね。そういうのは大きかったですね。在特会をやっているということで、普通にやっていたら得られないような人脈、日本会議にしてもそうですし、そういうのもやっぱりありましたから。普通にしゃべれないような相手としゃべれるとか。

## (7) 小括

F氏に関して興味深いのは、「ワールドカップ」と「拉致」の双方が影響を与えた点である。ワールドカップは、「嫌韓」感情を抱くきっかけとなり、拉致問題は運動を始める端緒となった。しかしF氏の場合、単なる排外主義にはとどまらず、維新政党・新風に入党したり、西村眞悟に師事したりするところまで至っている。その意味で、体系的に極右的な思考を身につけて政治的に生まれ変わったといってもよい。

筆者にとって、ワールドカップ、拉致、在日コリアンを結びつけるのが、「同じ民族ですから」という本質主義的な民族観であることも興味深かった。仮に3者をエスニシティで結びつける研究者がいたら、エスニシティ研究者として失格といつてよいくらい、現代の研究水準からすれば非科学的な議論である。しかし、政治体制や包摂様式の差を乗り越えて「民族」の本質が保たれるという観点に立てば、韓国・北朝鮮で何か生じるたびに「在日」が標的となる構造が維持される。これは、冷戦と植民地清算が影響しているという筆者の仮説より、さらに朝鮮半島と在日コリアンを同一視する見方である。在特会の他のメンバーは、ここまで本質主義的な見方を示したわけではないが、現実の運動に際して本質主義的な排外主義へと変化する可能性もあるのではないか。

さらに、運動論として興味深かったのは、「相手の痛いところをついていけば」在特会に対する支持は増えるという分析である。これは、別稿で示したようにカルデロン・デモについては該当しており、その後に会員数が伸びるようになった。しかし、京都の朝鮮学校襲撃事件では、一時的に注目され入会者も増えたものの、それ以降組織が伸び悩むきっかけとなった。維新政党・新風やチャンネル桜など、関連団体から在特会の「過激さ」が非難されるようになり、それ以外のの団体とトップ同士の関係悪化といった状況が重なり、

在特会自体は孤立の度合いを深めている。「相手の痛いところをつく」ことの効果は、攪乱性を高めて注目を集める一方で、それが「行き過ぎ」ると組織の孤立と支持者離れにつながるのではないか。タローがいう抗議サイクル論によると、初期のうちは攪乱性が高い行為が効果的であるが、末期になると攪乱性の追求が暴力に行き着いて支持を失う（Tarrow 1989）。在特会が逮捕者を出して支持者離れを引き起こしたのは、いわば自滅といってもよい失策であるが、そうした集団は少数精鋭で過激化する傾向がある（della Porta 1995）。在特会が「思想」教育を打ち出したのは、少数精鋭の集団として再編する路線の模索ともいえるわけで、それを先取りするのがF氏の活動歴なのかもしれない。



## 7 「自分のなかで問題提起された」G氏の場合

### (1) 政治と外国人との接点

《政治に対する関心》

(政治に対する関心は) 特にないと、支持党はないですね。20代後半くらいから(選挙に行くようになった)。前半はあんまり行ってなかったんです。(政治一般に対する関心は) まあ、普通に国会中継とかあればたまに見てますし。前まで全然、本当に関心がなくて、「選挙の手紙が来てるわ」という感じだったんですけど、いろいろ考えて与えられた権利を行使しようとして行ってます。(決まった投票先は) 特にないですね。(入れたい候補が) いないときは白票で出したり。今、ちょっと変わりましたけど。

(2年前の選挙のときは) 自分は…どこだっけな、自民です。一番無難だからですね。(郵政選挙の時には) ちょっと忘れました。というくらいあんまり記憶がない。民主には多分入れてないと思う。

《外国人との接点》

自分、出身〇〇の方なんですけど、いなかったですね。身近に地域にもいなかったし、××に来たときも、そんなに仕事上とかプライベートで会う人、知る限りではないですね。韓国料理屋に行くとオヤジが韓国人とか、そういうレベルです。(外国人と会うことは在特会に) 参加してからはありますけど、それまではあんまり会わなかったんですけど。まあテレビとかネットとかで反対というか否定する人がいるんで、それで違うんじゃないかというのも1つ(参加する理由)。

### (2) 在特会との接点

《動画の発見》

(きっかけは) うちの会長の動画を見て、ちょうどカルデロン問題で何か街宣をしている時に「こんなことしてる人いるんだ」ってんで注目を持った。今までニュースで名前くらい聞いて、そういう問題が発生しているというのがあって、会長がいう考え方があるんだっていうのがあって、(その) 考え方で隠されたものを調べることでわかってきたので。

で、いろいろと調べると在日問題でいっぱいそういう問題が発生しているというのをわかって、関心を持ったんです。確か入管でマスコミにも入管にも文句言っている、強烈だったんで。(動画を見つけた経緯は) 記憶が定かでない…もう2年ちょっと前なんですけど、普通に見ててニコニコ(動画)で何か再生回数が多いなというので見て、ですね。面白い動画とかを見て、ネットサーフィンですよ、それでやってて本当たまたまですね。

(在特会の動画は) 面白いというよりも強烈なインパクトがあったんで。自分の中で問題提起された感じになって。グーグルで検索して、在日と永住権とかそういうなんか検索して、こういうことがあるんだって。(在特会に入ったのは) 去年の3月くらいでしょうか。比較的新しい。(会員番号は) 8000番台。

(拉致やワールドカップについては) 事実としてはもちろん知ってます。で、自分、結構まあ頭悪いんで、頭悪いというか考えなかったんで。15、6(歳)から20代前半の時は天皇制とか何にも考えてなかったんで、「いらんんじゃないの」という感覚だったんです。

で、20代後半からいろいろ引かかる、要所要所で引かかる点、たとえば学校で教わってないことが、朝鮮に絡むことだけ教わってないことがあったな、っていうのが。たとえば伊藤博文を暗殺した人とか。それ学校で習った記憶ないんですよ。で、ネットで調べると「あれ、何か韓国人っぽいやつが暗殺したぞ」とあったんで、調べたら本当にそうだったんです。「おかしいな」というのを感じて、それにつながって会長の動画があって、点が線になったという感じのイメージです。

(安重根について) 自分は習った記憶がない。親にも聞いたんですよ。親に「何かこういっているけど、本当にそうなの」といったら、「俺も知らない」っていうのがあったんで。まあ自分、高卒で普通の大学とか行ってないんで、教育されてなかったのかなあという疑問もそういうときにあったんですよ。(歴史に関わる動画は) NHK だとかそういう類の(を見ていた)。で、それも点になっている部分です。

(それから動画を見るようになったが) 実際に入会しようと思うのには1年くらいかかるんですけど。(在特会のホームページは) 知ってましたけど、たまに動画見て、「ああこういう活動をしているんだ」っていう。活動の現場に行ったこともないですし、それまで。ネットでそういう調べただけ。

#### 《加入の経緯》

2回目のデモ、蕨であったのと、大阪で同時に違う問題で確かにやりましたよね。それを実際生(放送)で見て、会長がデモやって、蕨のこともカルデロンでデモやって、それですごいことしてるなというので、入会しようかなというのを思ったんです。(実際に参加したのは2010年)4月の終わりくらい。支部長にメールをして、たまたまサタデーナイトを土曜日にやっている、それで参加したいかという誘いを受けたんで、そこに実際にはしてないんですけど——遅れて参加したんで。それで運営にならないかという誘いがあったんで、実際に活動して。

一番最初にメールを送る時も、書いては消して書いては消してというのがあったので、やっぱり大なり小なりハードルはあるので。そうですね、最後に送信しようという気持ちになったのは——ちょっと説明しにくいですね。自分の中では何回かやりとりありますよね。「やめとこうかな、でも手伝いたいというものもあるし」というのも、当時はありましたね。(踏み出したのは)自分の性格ですかね。行動起こしてから考えようと。きちっと考えて計画的にやるタイプじゃないので、行動起こしてから何か考える性格なんで、そういうのもあるかもしれないですね。慎重ではないですね。

(メールを出すのをためらったのは)初めて出すのもあったし、自分は抗議とかクレームとかもしないタイプなんで。そういうのはあります。まあ、とりあえず会場まで行って、そこから帰るのもあるかと思ったんですけど。実際、その時自分は遅れて、サタデーナイトやってたので、見ながら終わってから入ろうというのがあって、実際終わって入った感じ。まあドアを開ける瞬間とか……。

(参加したのは)うーん、まあ、ちっちゃいことでもできることはないかな、と。自分はほとんど今の時点で裏方の仕事なんですけど。実際の中継の撮影したりとか、(デモ)申請に行ったりとか。そういう調整の裏方を中心やってるんで、そういうお手伝いでもって。(最初から運営する気は)そこまではなかったんですけど。どんなもんか、と実際に見

たかったのはありますね。自分も運営側になったから分かるんですけど、そういう活動（に参加するようになる人）はほとんど1割に満たないんです。自分はそんなケアのプロセスしていないので、まあ義憤までいかないですが「何かしなきゃ」という思いになったのかなど、今思えば思うんですね。

（義憤とは）何ですかねえ。言葉には表現しにくいですけど、ちょっと難しいですね。いろいろ動画見て、朝鮮人問題とか。あと年金問題、朝鮮人の年金問題とか。そういうの聞く段階で、本当に特別な権利を得てるというので、そこで義憤になるということですかね。だから、何か心の底であるんじゃないんですかね。在日の人が自分らと違う存在だという。差別といえば、自分はちょっと違う感覚なんですけど、何かあるのじゃないかなって。難しいですけど。

#### 《実際に参加して》

同じような考えを持っている人といろいろ話して、実際こういう問題もあるよとかいうのを、また教えてもらったり。でまた、次もこういうことするから来なよというのがあったし。で、興味があったのでまた参加するような形になった。（参加したのは入会して）1ヶ月くらいたってからです。3月終わりくらいに入会して、4月終わりくらい（に参加）ですね。

まあ民主党も要因じゃないですけど、原因の一つになるかもしれないですね。実際、（2009年）7月に在特（会）で反民主のデモやってたんで、民主党政権になってから何かおかしくなったというのは思っていることがあったんで。それとイコールじゃないですけど、何かその朝鮮人も見え隠れしているようなこともあったので、それで怒りじゃないですけどふつつつとするものはあったと思いますね。

（活動の頻度は）週1から2週に1回くらいですか。参加というか、結構イベントというのは急に起きるんですよ。こういう問題が発生したんで、こういうことをやるというので、ばばばっと動くのが多いんで。デモとか自由参加のデモとかで、そういうのは時間の許す限り行ってますね。自分、比較的工場勤務なので土日も仕事するけど、平日も休みのときがあるんで、動き易い。（デモ）申請とかも動き易いし、デモとかも休み（でない日）以外は行きます。

（休日に休みたい気持は）それはあります。やっぱり自分が問題とすることで、たとえば外国人問題だったり反民主党だったり（は参加します）。ちょっとこれは違う、在特会のイベントじゃなくて違う保守系のイベントで、ちょっとこれは自分と違うなというのは参加しないです。（参加するのは）9割くらいは在特会ですね。あと1割くらいは違うところ。（工場勤務でも）1日休みのときも行きますね。全部が全部（休日を）犠牲じゃないですけど、自分のこともしながら参加している。自分の趣味もやってますし、その趣味が若干やらなくなったというのはありますけど。普通に趣味とかもありますし。それに保守系のことばかりというというのでもないです。

（関心を持ったのは）外国人参政権と、あと在日特権の件。もともと選挙権というのは、日本人に与えられた権利ですし、外国人に与えるものではないというのが思ってたんで。で、そんな法律作ってまでやるべきことなのかな、というのを関心を持った。それ自体は知ってたんですけど、賛成でなく反対なんですけど、そこまで反対ではなかったですね。在

特会で問題提起、いろいろ聞くので調べる、で反対が強くなった感じ。

(参加して得られたことは) あんまないですね。見返りもとめてないというか。いい悪いというのはない、そういう感情ではやってないので。そういう結論というか、そういう感情でやったことはないです。

一言でいうと、ちょっと愛国心までいかないですけど、そういう感情に似たものがあるかもしれない。国を良くしたい。もっと今の状況より、運動することによって良くなるとは思わないですけど、しないよりはした方がましという感覚で。後で後悔するよりやっ後悔する方がまだいいかな、と。実際問題、会社とかで、政治とか朝鮮問題とか、自分は結構仕事場で(政治に)文句いう人はいるけど、そういう環境じゃないので自分から進んで話すこともないですし。

今年から月イチで行ってます。靖国(神社)に。前は何かあまり行ってなかったのも、気合じゃないですけど行ってます。別に義務化されているわけでもないし。

### (3) 小括

G氏の場合も、他の一定割合のメンバーと同様に、「たまたま」在特会の動画をみて関心を持ち、行動にまで至った過程をたどっている。最初に参加するときには、メールを「書いたり消したり」といった逡巡はあるものの、参加へのハードルは高くない。そのなかで、「カルデロン問題」のデモで強烈な問題提起をされたというが、これはG氏だけの経験ではないだろう。G氏がみた動画は、2009年3月9日に在特会がマスコミを前に街宣したものだと思われるが<sup>16</sup>、再生回数は14万回を超えておりニコニコ動画の在特会関連の動画では2番目に多い。ネットサーフィンが「オルグの場」になっている以上、動画の分析も必要と思われるが、それについては別の機会に試みておきたい。

---

<sup>16</sup> <http://www.nicovideo.jp/watch/sm6383538>。

## 8 『嫌韓流』を地で行くH氏の場合

### (1) 政治に対する関心

政治に関心があるかないかといえば、正直ないですね。今もないです。単純に今、実際に誰に入れているかって、僕は全部無党派の人に全部入れるようにしているんですよ。あんまり群れないで頑張ってもらいたいという、自分的なポリシーというんでしょうかね、そういうものがあって——で一応やっているんで、政治的な関心はないです。ただし、自分の持っている思想信条に関して1つの手段としてこれを使いたいな、という関心は若干あります。というレベルですね。

(選挙には)行きますよ。僕は結婚しているんですけど、嫁さんが行こうとするんで、一緒に車乗って連れて行って、ということをしていると自動的に毎回行くってことになりますけどね。独身時代も、実を言うと行かないときもあったんですよ。行かないときはなぜ行かなかったというのは、ちょっと投票所がすごく離れていて行くのが億劫だったので行かない。行くときはそんなに距離が離れていないから行ってた、という明らかに行動学的に面倒か面倒じゃないかっていう区分で行ってたくらいですね。

たとえば比例選挙区だったら民主党以外に入れることに考えてはいますけど。そのなかでどれにしようかなとって、その時の自分の気分しだいで入れてたりするというレベルです。自民党に毎回入れようとかいう気はまったくないです。僕は。本当に気分が良かったらそのまま共産党、ということもやってたし。そういう適当な人間ですけど。

(在特会に参加してからも変化はないか)そうですね、だって見てたらわかると思うんですけど、政治家って馬鹿だなと思うでしょ。馬鹿だなと思うことでそんな関心持てないですよ。僕、個人的に政治に関心がないから、日本の総理大臣ってあのう引退したクリントンですか、あのへんとかブーチンとかでもいいじゃん、持ってくればいいじゃんって感じでしか僕は思っていないです。有能なのが海外だと、中国・北朝鮮・韓国以外から持ってくればいいじゃん、でもありますんで。その方が合理的でしょ、みたいな。

結局彼ら(政治家)の目的というのは日本を富ませて、国民を飢えることなく育て、将来に向かってバトンタッチできるような、その、国家の継続ってのが彼らの最終的な目的だと思うんですけど。その観点からいくと僕らは彼らの目的は達せられてないのかな、という見方ではあるんですけどね。ですので、なかなか彼らに期待することもないし、そこまで政治に関心はないですよ。一時期小泉さんが出てきた頃っていうのは、若干関心は持ったんですけどね。ただまあ、終わってみればもう関心は薄らぐし、ということですが。

(投票行動も変化なしですか)そうです。相変わらず無所属主義でやっています。

### (2) 外国人との接点

外国関係は、僕が〇〇出身なんですけどね、〇〇の時に朝鮮部落というのがあって、彼らを当時外国人と呼べるかどうかの定義は別ですけど、学校に朝鮮人が通ってきてたんですよ。そこでのふれあいがまずあったことと、高校時代にアメリカとかに留学した時代があって、そこでアメリカの学生さんたちと仲良くなったというのはありますね。それからあとは社会人になってドイツに仕事で行ってたり、シアトル行ったりしてたんで、そういうことがあってそれなりには触れ合っているんですよ。

外国人問題に関心はあったんです。実を言うと僕、〇〇という地区で朝鮮人部落というのがあって、親から朝鮮人とは付き合うな、あいつらと関わると危ないぞという教育があるんですよ、僕らの世代って。だから朝鮮人は敵だっていう、極論でいうとそういう教えがあって、学生時代はそういう連中と会って。たとえば修学旅行行くときに、海外行くときにパスポートがなぜか菊の模様じゃない別のパスポートを見たときに、「ああこいつ外国人なんだ」って。なんで外国人なんだろうという、在日韓国人なり朝鮮人なりであったり、そこで考え方の（上で）関わり合ったらいけないんだな、という形で線を引くという立場をとってたんですね。

あとは大学時代になって、△△のほうの大学行ってたんですけど、□□（在日コリアンの集住地区）ってあるんですよ。あの辺の問題があったりして、そういう考え方、そういう教育方針で育てられた人間が、そういったところに行くとなぜか彼らとかうちの大学の学長とか教授とかが、彼らを擁護しようという方向にいつてるんですよ。

じゃあなぜ擁護するんだろうと考えますよね。じゃあ何で彼らとの逆説を唱える人がいないんだろうと不思議に思ったんで、ああなんだこんなことをやってたのか、という彼らの行動原理を目の当たりにして、そこから僕はこの活動でちょっと彼らに対しての抵抗運動みたいなことをやるようになってきたというのが正直なところですね。在特会ではなくて、それまだ僕が22、3歳の頃とかの話なんで、まだ在特会その当時できてないです。その頃は僕たちは、彼らと直接会って話して、あんたたち何を主張したいんだ、そういうディベートですよ。ディベートやることによって彼らの考え方を知って、彼らの考え方を否定したり受け入れたりとかいう形でやりましたね。ただ、その時はそのディベート合って単純に相手の意見を打ち負かすとか、そういうところに喜びを見出していたので、楽しみといたらそういうことになるんじゃないですかね。そういう感じですってやっていた次第です。

大学時代からその辺考えてたりとか、やっぱり××問題で話考えてて、何か胡散臭い、黄色信号がずっと灯っているんでしょね。「在日」をキーワードとして。だからそこで言っているのかなと思えるんですけど。

そこからいろいろやっていて、大学を出てちょっとして※※に6、7年前にこっちに来て、みんなでディベートサークルを作ったんですよ。仲間内で。そのときインターネットもないので、本当に小さい掲示板でやって。地元掲示板ってあるじゃないですか。そういったところでそういった人いないですかねって話をしていた、そうしたらいたって感じで。

その頃にちょうど※※では、従軍慰安婦問題が勃発しまして、そこで社会運動で従軍慰安婦はいたんだと訴えてきた人と対峙してディベート合戦していたと。在日というよりも、しょっぱなは従軍慰安婦の問題で、従軍というものはいなかったって話のテーマだったんだけど。在特会も同じなんですけど、こういう活動していくと、いろんなテーマがどんどんどんどん積み重なって、誰かが定義してテーマがどんどん増えてくるんですよ。それで継続してたという話になります。

彼らがいつも根拠のないことをどんどん言ってきたりするんで、そこをちょっと覆るのが好きなのかな。そういう考えでいくと彼らの論戦って結構、矛盾しているところって結構あるんですよ。一番気になったのが従軍慰安婦——私、従軍慰安婦ですという金さんが

日本におられて、文句言ったんですよ。じゃあそういう時って、あなたなぜ従軍慰安婦っていえるの、証明してみてという話になるじゃないですか。仮に僕が100年前に僕の親父があなたに1億円貸してたから返してとあなたに言ったとしますよね、あなたじゃあまず何ていう？その時にお金貸したよという借用書見せてっていうでしょってまず言って。僕ら日本人側もそうだし、その時あなたが従軍だったよという従軍としての給与明細それ見せて、というのが僕らの論理であるんですよ。じゃあ何も示さずに私、従軍慰安婦ですよといっても、それは話信じられないよと。だからそこらへん明確にしてくださいねとかって話をずっとして。結構そんな感じで今に続いてきたという話ですよ。

そういうところから崩していくのが面白かったという感じですかね、若い頃は。でも大人になってくると、まあそんなことはどうでもよくなって、とりあえず大きな声で「やめろ」ということが一番重要なんだと。それが1人が「やめろ」と言っても聞かない。これまでのことでね、少人数が「やめろ」と言っても無理だったんで、大人数で「やめろ」と言ったらそれは変わるんじゃないかと思って。ということでやっていますね。

元々仕事が品質保証しているんですよ。誰かが検証したものを評価して、これ悪いですよと言ったら「どう悪いの」というかたちになるじゃないですか。たとえばじゃあ何と何を比べてここはこういう風に数値出ているから、悪いという僕は認識の捕らえ方なんですけど。それで※※のほうでがんばってまして、今に至るのかなと。

### (3) 拉致問題について

拉致というのは、正直なところ実際に何を持って拉致とするのか、拉致というのがあったのかどうか、拉致の存在の定義が何かって考えたんですよ。その定義って近年になるまでわかんなかったじゃないですか。ある意味、情報で拉致があったというレベルでしかなくて、それがはっきり北朝鮮に拉致された人たちがいた、帰って来た、そこがはっきり根拠になってそこから考え始めたんですよ。だから知識的には、まあひとさらえですよ。でまあ、それは人として考えたらまずやっちゃいけないことなんだと。あとはまあ、段階踏んでいけばという感じになると思うんですけど。

本当にだから、拉致という言葉が昔からついてまわっていて、本当にあるんだということで本物になった時に、やっぱりそれは憤り覚えますよ。だって自分の親しい人と——日本人って人の立場になって考えることのできる民族だと僕は思ってるんですけど——もし僕が横田めぐみさんのお母さんだったりお父さんだったりしたときに、どれだけ心が痛むかと考えると、そこは発狂するくらい怒りまくりですよ。

(小泉訪朝について) その時に、僕はあの拉致された人がいたんだというよりも、それを明確にしてくれたんだということの方が関心は強かったですね。(それで何かしたいとは思わなかったんですか) だって僕らが、何ができますって感じで考えると、手段が思いつかないんです。単純に言えることは北朝鮮に言って、「拉致した人を帰せ」ということくらいじゃないですか。じゃあ、果たして1人で北朝鮮総連に行って返せといったところで、自分の身の保障もないわけですよ。人を拉致するような国家の出先機関のところに、要はヤクザに喧嘩売りに行くようなものですよ。それはたぶん、一般の人だったらまず行かないですよ。自分の身がかわいいですから、と僕は思っていますけど。本当にやっぱりやるべきことは「返せ」という行動を起こすことなんでしょうけど、実際それができるだけ

のバックボーンがなかったというのが正直……。だからみんなこういう憤り感を腹に据えかねていた人が、在特会という団体があることによって外に吐き出せるんだと知ったら、だからこそこの繁栄した——繁栄といたらおかしいけど——ここまで皆さんにご支持されるような団体になったのかなという見方ですよ。

#### （４）在特会との邂逅

（在特会を）認知するのがカルデロン問題です。皆さんがやった（2009年の）カルデロン・デモになるんですけど、そこで初めて在特会という団体があるのかなと知って、それをやるうちに僕らの作った団体が男女関係でもめたりとか、いろいろな問題があって空中分解しちゃったんですよ。そこでちょっと何かないかなと探していたら在特会というのがあるって、あと在特会で関心を持った。カルデロン問題で、何かネットか何かの何かでカルデロン問題の話で、動画をアップしてたのがあって、そこからですかね。

というのは、彼らの在日特権を振りかざす連中というのは、いろいろなことをこれまでやってきたというのがあって、何でこれが続いてきたんだろうと思うと、誰も「やめろ」って大きな声で言わなかったから続いてこなかったんじゃないかなという考え方なんですよ、僕は。じゃあしっかりそいつらに面と向かって「やめろ」という人が、在特会がいたんですね。これは素晴らしいじゃないかということで、そこから在特会に入ったんですよ——というのが簡単な経緯になります。

（カルデロン関連の動画をみた経緯）そこはちょっと関心があって、カルデロン問題を論議する時に、なぜかそこに僕の中の考え方、彼らのあるべき姿というのがあって、それはやっぱり親子と一緒に住むことが一番望ましいと考えているんですよ。じゃあ日本で親子と一緒に住めないのであれば、母国に行って一緒に住むのがあるべき姿かなと思ったんですね。じゃあなのになぜそこを、それを率先しようとする人がいるんだろうと思ったんです。

で、人権派弁護士ってのがそこに出てきたんですけど、じゃあ何で彼らは彼らが母国で安心して暮らせるような地盤を作ってあげるような努力をしないんだろう。なぜ日本で法を犯してまで強引に住ませよう住ませようとしてるんだろう。そこで僕、矛盾点を持ってそこにまずカルデロン問題って、あの女の子たちの問題じゃなくて、それを餌に何かをやるようとしてる人権屋と呼ばれている連中の考え方が僕は気になった。そこからずっとカルデロン問題ってのは見てます。だから最初にカルデロン問題を在特会でデモしたときに、次の年なんですけどもう1回やったんです。2年連続であったんです。2回目はカルデロンという女の子じゃなくて、そこを利用しようとする人権屋弁護士とかそういう汚い大人たちに声を上げようね、と持っていったという。

さらにもう一言付け加えれば、人権屋弁護士っていうのが、今後たとえば日本で住みたい女の子がいますと。涙流しながらテレビ会見してますと。普通しないでしょ。普通日本で今後また生活するかも、生活させてあげたいと思っている女の子をマスコミの目の前にさらして、日本全国でさらし者にしないでしょ。普通の大人なら。でもそれをあえてやろうとしている連中がいたんです。そこらへんがちょっと僕は大人としてちょっとこの人たちへんだなと思ったんですよ。で、何かおかしい。という形でいろんなことを検索かけると、在特会にひもついたので。 (蕨のデモの後ですか) その前です。その前何か告知か



何かで「やるよ」と出てたんです。

それまで、さっきも僕ちらっと言ったんですけど、マスコミが何でもそういった連中をみても「お前らへんだ」とか「やめろ」という声ってほとんどなかったんですよ。そのころ初めて在特会が——僕の体験では在特会が初めて面と向かって「やめろ」って大声で街中で叫んでるんですよ。僕はそこにすごくあこがれというんでしょうかね、やっぱり僕もこれやりたいなと思ったんですよ。だって言わないと変わらない、伝わらないですものね。ということですよ。

実際、会長も普段おっしゃっているんですけど、在日朝鮮人が悪いんじゃないんです。それを行使しようという連中がいて、それを手助けしようとする、悪いことだと知っていて手助けしようとする連中が悪いと思うんですよ。そこが問題なんで、そこをつぶさないと第2第3（の同様の問題）ってあるのかなと思ってますけど。

#### 《最初の行動》

それもカルデロンなんですよ。1年目（のデモに）は行ってないです。ちょうどその頃、僕も学会の——学会というか技術者やってるんですけど——ちょっとそっちのほうの発表があったんで、そちらは行ってないです。ただ、多分皆さんと若干違う点があって、僕ここまでネットに依存している、そこまでのネットというのはあまりなかったんですよ。だから多分、見ている量が全然違うと思うんですよ。僕もインターネットで検索して1個か2個くらいカチカチってみて、ただそのとき上位に在特会のやつが来てたんで、印象に残ったんでしょうね。だからそこで怒らないと、人としてダメでしょというところがまず自分の中にあっただんで、僕はそこで怒りを覚えた。

その翌年にカルデロン問題で蕨デモがあったんです。それに参加したのが初めてです。だいたい僕も1ヶ月くらい前に在特会に加入していたんですよ。（会員になったのは）去年の1月か2月前ぐらいだったと。会員番号6000番台です。（その前年は）ちょっと多分仕事でばたばたしてたんだと思います。いろいろ在特会のイベントがあって、カルデロンの問題があって入国管理局とかに行っているいろいろあったんですけどね。そういったのも仕事がちょうどその頃は充実してたっていうか、忙しかった時期なので、そちらのほうを優先したということです。単純に（翌年の）1月2月、正月のときにヒマだったんでインターネット見てたんです。それで、じゃあ時間があるから在特会の会員に入ってみようかということで、会員入会手続きしたんです。

（それまで在特会のサイトは）定期的に（見ていた）。（実際に参加するに際しての抵抗は）それはありましたよ。初めて会ったこともない人たちに会いますからね。そこらへんの勇気というのは結構必要だったですね。ただ、僕自身、技術者関係の横のネットワークというか、いろいろな学会に参加していると、まあいきなりでも名刺交換しながら初めましてってあるじゃないですか。あのノリで、ノリかなという延長線上でもあったので、多少の怖さというのはあったんですけど、その点はそういう理由で経験があるのですんなり入れたという感覚でしょうか。

#### 《関心》

（関心があること）僕はやっぱり、ずばり在日特権ですね。たとえば僕はですね、中国

の故事でいって「隗から始めよ」というのがありますけど、まずやるなら目先のことからやりなさいというのがあるんですね。僕はそれを地元置き換えてまして、地元の在日特権をなくしましょうねということで動いているんです。たぶん他の支部も同じだと思いますけど。じゃあ地元によって在日特権がありますと。他のところでどういう特権があるんだろうなって調べる時に、在特会のホームページが役に立つし、そこに知識というものが役に立ちますし。という感じでやっぱり「在日特権」ですかね、団体の名の通りに。僕らは在日特権を許さない市民の会ですから、在日特権のことを研究してなくしていくというのが第一義でしょう。ということはあるんですけど、ただ、そういったことをこれまでいろんな利権を求めようとしてきた連中が、他の事で原発とかいろんなことに手を出すと、「それはちょっとダメだよ」ということで活動ももちろんするんですけどね。

外国人参政権とかでもふらっと出たことなんですけども、だってあんたたち母国に帰れば参政権あるんじゃない、だったらいいじゃないそれで、と僕は思うんですけど。さらにそれ主張しちゃうと何かいやだって言う人もいるわけです。あと在特会で、これは僕の指針なんですけど、一つ思うのはみんな道理を外すやつが嫌いなんです。理を外すというか。ですので、実際の道理だって自分参政権ほしかったら母国に入って政治に参加すればいいじゃんというのが僕らの考え方であって、それを他所の家でやろうというのが何事かと。

## (5) 活動の結果

### 《しやすい場所》

(想定と現実のギャップは) 結構いろいろありますね。結構皆さん飲み会好きなんだなって。やっぱりイベントでカメラが向かっているところと向かってないところは、やっぱりそれなりの安心してしゃべれることもあるし、やっぱり皆さん人間なんだなって。まあそれこそいろいろな考え方もあるし、みたいなの。いろいろな考え方が聞けることは面白かったのかなという。

在特会って結構しやすいというか、100人いたら100人の考え方があるんだよというのを前提にしたうえで、お話されるんですよ。たとえば、若干違う考え方でも「ああそうなんだ」って許容してくださって、根本は一緒なんで「がんばろうね」というのが在特会だと僕は思っていて、まあそれがいいのかな。

### 《やりがい》

やりがいになったことといたら、自分で計画したことはしっかりやることができたということでしょうか。こういうことをやりますよと言っちゃうと、もう逃げることでできないんですよ。だったらそこを責任持って最後までやれたということが一つ。そこで参加してくれている人たちに対しても、いろんな能力がそれぞれ違うんですよ。たとえば××さんだったら撮影が得意なので、撮影の部分を全権お願いしますねとできたりとか。事務方が得意な人が事務方の作業できるって言って、この人ってどういうところ得意なんだろうとか、そういった見方というのが、仕事以外でもそういう見方ができるようになったところとか、よかったことじゃないでしょうか。辛いところはさっきいったけれども逃げられないところですよ。実際「やるぞ」といって、本当に辛い時に逃げられないわけだから

ら、そこは自分が言った手前やらなきやいけないということです。

(活動のエネルギー源も) それですよ。逃げられないってことですよ。イベント出すじゃないですか。イベントを告知するともう動き始めてるから、そこで逃げられなくなってくるんですよ。それを続けようとする、また次のイベントを企画するんですよ。そこでですね。で、僕らってみんなにはそんなに認められてない支部だと思うんですよ。派手なイベントはしないし。ただ、在特会も全部そうなんですけど、まず続けないと大きくはなれないんですよ。だから今は続けることが大事なんだということもあって、定期的——多分わざとイベント途切れさせないようにしているんです。言ったら言った手前、イベント、皆しっかりして続けて、良い緊張感を持って継続させる。そのうちにこつこつやったら、という。

で、もちろんずっと続けても体調的に・・・100ある休日(のうち動ける日)が50あってそのうち在特30あるとつぶれるじゃないかという。つぶれないところという見極めでしょうか。これ以上やっちゃうと、この人(から)不満出っちゃうかなとか、ここまで・・・。最近、根詰めてがんばってたから、ここらへんちょっとみんなでゆっくりのんびり休もうね、とか。そこらへんってバランス感覚だと思うんですけど、そんな見方、みながらずっと継続していくことがまずは大事かなと思ってるんです。

#### 《右翼的なものとの距離》

そこはまず、僕だけの考え方でいくと僕は何も囚われないでいいと思ってます。自分がこのこういうことみてこれがいやだなと思ったら、そういった他の極右団体、たとえば皇室を実際に敬いなさいとか、そういったものは度外視して、自分の信念だけで動けばいいと思ってますよ。ただ、僕らは在特会という団体なんで、本部がこういう方針なんだと思ったら、ある程度そこには従う必要があるんで、そこ踏まえた上でやっていますということでしょうかね。

(靖国参拝なんかは)本部方針なら従うしかないので、うちバカじゃないので、皆さんそういうときには反応するんですよ。「何で参拝する必要があるのか」って本部の幹部の人たちが会長に対して言うんですよ。それで議論されることがあるんで、そんなアホな道を、手段をとるってことはまずないので。だから本部の通達っていうか方針は、そのまますんなり受け入れられると。ごもつとなことですよという感じで。あとはそれに自分の信条あわせて、どうやってやるか。それから支部活動につなげるなら、自分の信条信念をちょっと出してもいいのかどうか、という。そこは他の運営さんたちにも話して「ここはこうだけど、どう思う？」とやっていく感じ。

(だから靖国神社に行くことも)ないです。僕は逆に、靖国神社じゃなくて護国神社ってあるじゃないですか。すぐそこにあるんですけど、護国神社は1ヶ月に1回行ってますよ。昔から行ってます、護国神社は。うちは元々神主なんで、実家が。それはもう親の教えですから。だからみんなそれぞれいろんな正義って100人いたら100の正義ってあるじゃないですか。それは在特会って否定はしないんですよ。だから僕ももちろんそうだし、僕も人の正義は否定しないです。だからいいのかな。だから自分の正義を大切に生きるということだと。

## (6) 小括

H氏は、家族から在日コリアンに対するネガティブなイメージを叩き込まれてきた。さらに、学生時代からマンガ『嫌韓流』でしばしば登場する「敵とのディベート」を実践してきた。それは社会人になってからも続いており、赴任した新たな地ではネットで知り合った者同士のグループを作っている。幼少期、学生時代、社会人と場所は変わっても在日コリアンと接点を持ち、しかもネガティブなイメージは継続してきた。その意味で、H氏は「東アジア地政学」という媒介を経ることなくして在日コリアンに対する否定的な感情を持っており、インタビュー対象者のなかではやや特異な存在であった。つまり、H氏は在特会と出会う以前から在特会の主張を先取りして内面化してきたともいえるわけで、そこに参加するイデオロギー的な転換は何ら必要なかったといえる。

だが、H氏が在特会に対して最初にインパクトを受けたのは、カルデロン・デモを動画でみたときであり、初めて参加したのもそれに関わるデモの時であった。H氏にとっての「自分の正義」とは、一家全員が退去強制になることである。それは、「子どもの権利を認めるのならば一家全員を在留特別許可にすべし」という国際人権基準とは著しくずれているが、H氏のような感覚をまったく特殊なものとはいえない。主権国家といえども、政治的リベラリズムの規範に配慮せざるをえない——こうした自由主義体制の持つリベラル・パラドックスの論理 (Hollifield 1992) よりむしろ、メディアでは人情論が支配的であった。そうした人情論は、「法と秩序」という観点にもとづくマイノリティ敵視を誘発しやすい。

ただ、イデオロギー的には在特会ときわめて親和的なはずのH氏でも、実際の参加に際しては一定の躊躇を示している。これは、多くのマイクロ動員論が示唆する対人ネットワークを通じた勧誘プロセス——運動にとっては社会関係資本の活用——を経ない運動ならではの特徴だろう。在特会の参加者は、会につながる接点をネットでしか持たず、それは多くの参加者が示すためらいにつながっているが、それでも動員に成功したのも事実である。社会関係資本なき社会運動が、どのようにして動員に成功するのか、そして初対面同士が集う運動は既存の人的ネットワークに依存する運動とどう異なるのか。排外主義というイシューの特性を離れたところでも、在特会に関しては解明されるべき問いが多々あることを明記しておきたい。

## 9 「創価学会をつぶす」動画に引き込まれたI氏の場合

### (1) 政治に対する関心

政治に微塵も興味ないんですよ。だから国会議員の名前 10 人挙げろといわれたら結構難しいですよ。よく名前を聞く人とかそんなのくらいしかわからないですね。逆に自民党信者になっちゃって、こっちの活動やっている人で、自民党のやることは何でもかんでも正しいということで、自民党マンセーしている人たちいっぱいいるんですけど。

結局、今の日本を作ったのは自民党じゃないですか。だからそれを今後も続けたいのかな、と思いますよね。今、売国法案と業界で言われているやつで、やっているのはほぼ自民党ですからね。最近ちょっと民主党がさらにひどいを出してきて、さすがそれはまずいぜと言っているのも自民党なんですけど。だからといって今までやってきたこともそうだし、というのであんまりよく言う「誰がなっても変わんねえや」ってことですよ。だから政治家なんて利権とくっついて金ももらったらそれでできない、パチンコ問題が正にそうじゃないですか。

政治家の人があんまり有名じゃない人であっても、国会の中で「朝鮮人がなんで日本にいるのか、今すぐ叩き返せ」って一言でもいえば絶対にニュースになって物議醸すと思うんですよ。でもそれをやる人っていないんですよ。結局、椅子がほしいままなんです。だからそういう人たちには、桜井さんも言うように、俺は期待していません。それは今も昔も変わらず。(選挙時には)自分を入れる時は調べますよ、ある程度は。ただその時だけしか調べないです。××(有名な自民党政治家)の本くらいしか読む気にならないですね。俺が今、総理大臣になってほしい政治家を挙げろといわれたら××ですよ。

選挙にはまあ普通に、〇〇出身なんで「××」って書きに行ってますけど、俺の時代は××って(引退して)いなかったんで、とりあえず自民党に入れとけといううちの爺さんの教育の通りに(入れていた)。100%行けたわけではないですけどね。仕事が、たとえば忙しい時には事前(不在者投票)も行けないときとかもやっぱりあったんで、80%くらいですね。

### (2) 外国人との接点

俺がこの問題に、朝鮮人問題に興味を持ったきっかけをお話するとですね、仕事でヤクザの組に行っていたんですよ<sup>17</sup>。さんざんばら嫌な思いをさせられて、途中でその組長が朝鮮人だって聞いたんですね。何で日本人じゃないのにヤクザの組長なんかやっているんだろう、というのを一瞬疑問に思ったんですけど、そこから何年も、特にそこから進展もなく、一緒に働いている在日朝鮮人の友だちもできて、何で日本にいるのかなあと。全然うちの方は朝鮮問題の教育とかはなかったんで、全然、普通に外国人が来ているのかなというくらいに思ってたんですけどね。で、それでいろいろと聞いたら、朝鮮の組長がそういう、さんざんばら嫌な思いをさせられた方が、そういう経緯で日本に来ているというのを聞いて、「あれ、おかしいぞ」というのがことの始まりですね。

(学校や近所には)全然いないですね。だから初めて朝鮮人として認識したのが、22、

---

<sup>17</sup> 販売業で、団体顧客としての暴力団相手の営業を行っていたという意味。

3（歳）くらい。（それ）まで、朝鮮人がそんなに日本にいるっていうのを知らなかったんですよ。興味もなかったし、韓国なんていう国が。多分日本のほとんどの人が10年前に韓国に興味ありましたか、って聞かれたら今ブームになったから知ってるよという人ばかりだと思うんですよ。そういう意味では政治に興味はなく、圧倒的大多数の「別に選挙なんか俺には関係ない」という人間の一人ですね。

（働いていたのは）ばりばりの堅気の会社なんですけど、その堅気の中でもヤクザのシマがあって、うちの会社2つの組のシマのかぶっている部分だったんですね。だからこちらの組も来る、こちらの組も来るというところでもないところで、2つの組がいたり来たりだったんですよ。そういうのでさんざんばらいやな思いさせられて、人までそういうのだというのが、「ああそうなんだ」というのがきっかけです。そうですね。10年くらい前。その時は別に朝鮮人がいやなんじゃなくて、ヤクザがいやなんですよ。

### （3）「行動する保守」との邂逅

それが大前提としてあって、自分がこういうのの存在を知ったのは、瀬戸弘幸さんってご存知ですか——瀬戸弘幸さんの前々回の参院選に立候補されたんですが、その瀬戸弘幸さんの参院選の立候補されたときの街頭演説の動画をみて、「創価学会をつぶす」発言をばんばんやってたんですよ。で、自分の友だちが創価学会の創ってかいて「創」という名前だったんですよ。そこのおばさんが、ガチガチの眼がいつちゃっているタイプの人で、勧誘するためには一切手段を選ばないというような人で。

子どもにとってたとえば、特上寿司とラーメンといたらラーメンの方がご馳走じゃないですか。で、俺は家で寿司とか普通に、うちの親が握るタイプの人なんですよね、ばあさんの実家が魚屋で、普通に魚には困ってなかったんですけど、普段食えないラーメンというご馳走をエサにですね、そのおばちゃんに『聖教新聞』の読み合いのイベントに連れて行かれて。というのが結構頻繁にあったんですね。それを一つの事案として、あの子と遊んじゃだめよという家だったんですけどね。で、それとは別に親戚のおじさんの嫁がまたがちの学会員で、天井まであるようなでっかい仏壇があるような家だったんですけど、そこのおばちゃんの所に遊びに行くと、「夏休み東映まんがまつり」に連れて行ってくれるんですよ。それで、「東映まんがまつり」を見る前に、大勢の体育館みたいな広い部屋で、大勢の背広の大人たちがうちと違うお経を唱えているやつを、一緒に知らないお経を唱えさせられる。その苦痛の行事を我慢すれば、『プロゴルファー猿対メカゴルファー』が見れるわけですね。

そういうのを楽しみに、いやいや我慢してそれをある程度の歳になってきて、もう「東映まんがまつり」もいやとなった時に、拝みに行くのがいやだから今年はいいいという話をしたら、うちの親は拝みに行っているのを知らなくて、それ以降はたつとその家には行けなくなっちゃって。仕事の都合でその近くに住んでたら——住めば通勤楽だったんですけど——その家に呼ばれるからというので、わざわざ1時間以上離れたところじゃないと家の許可が出なくて住めなかったというのがありまして。さらに仕事が終わって終電で駅に着きました、それで駅に着いたところでわらわらと日蓮上人について素晴らしい素晴らしいと語りだす奴に——最初1人だったんですけど——1人増え2人増え最終10人くらいに囲まれて警察沙汰になって、というのがあって。それがきっかけで、創価学会があ

んまり好きではないんですけどね、それで瀬戸さんの動画を見て「そんなすごいことを言ってもいいんだ」というのを気がついて。それから〇〇さんを見て、桜井さんを見てという感じです。だからもう、前々回の選挙のときだから今からすると5年くらい前、ですよ。前々回の参院選（2007年）。

それが原因です。休みの日に——確か昼間に見てたから休みの日だったと思う——休みでも仕事が終わった後でもいいんですけど、日本語動画で見たら1位になっている動画があって、そこに「創価学会をつぶす存在」みたいなタイトルがあったんで、「何だこれ？」と思って。「あんなところにけんか売ったら殺されるだろう」と思って。当時は創価学会がそういう犯罪やっているとかっていう知識はなくて、単純に嫌な奴らという程度だったんですよ。で、それでまあ「何だこれ」と思って、それがきっかけです。

瀬戸さん見てたら、一緒にやってる〇〇さんの動画もあって、こっちも面白いなあと思って。〇〇さん見てたら数寄屋橋でやってる動画とかもあって、そこからちょっとすると□□さんやら桜井さんやらも外でしゃべるようになってきて、という感じですね。月に1回2回くらい休みの日に半日動画をみて、という感じぐらいでした。

多分ですね、「面白い」をメインで（動画を）見ている人ってそんなに多くないと思うんですよ。面白いだけで見ている人って。単純にエンターテイメントとして楽しむだけで見るとしたら、他にもまだあるじゃないですか。テレビなり何なり、お笑い一般なり。その、自分の気になりだした問題に対する話をしてくれるのを聞きたくて、デモ行進の歩いているところとかは、ほぼどうでもいいんですよ。なので、マイクでしゃべっている人がどういう問題があるっていうのをどういう切り口で言うかというのが、気になる場所ですよ。

だから、普通にエンターテイメントとしてお笑い番組として見るというのは、襲撃が来る時のデモ行進とかであって、普通に演説系のやつを見るときは、楽しいって見ている人ってそんなにいないと思いますよ。自分としてはですけど。他の人はどうかかわからないですよ。それで言っている内容が、たとえばリチャード・コシミズみたいにFBIがとかそういう素っ頓狂な話をしていたら、多分誰も見ていないと思うんですよ。ああまた始まったって。それを信じていっちゃう人はバランス感覚のない人たちだと思うんですよ。なので、俺はまだリアリティのある方がいいですね。

（「外国人問題」に関心を持つ）それ以外のきっかけは、思いつく限りないですね。存在自体知らなかったですからね、参政権も。その前に外国人が日本にそんなどっさりいるというの知らなかったんですよ。（関心を持ったのは）それはあれですよ、演説聴いて興味を持ったからですよ。多分、雑誌の人が喜ぶ表現をすると洗脳されたからですね。動画を見て。興味を持ったきっかけになったですよ。俺、多分かなり特殊なほうだと思いますよ。誰にでも当てはまるパターンではないです。たとえば、ワールドカップ日韓同時開催って後々考えたら、そういえばなんかおかしいくらい感覚ですよ。当時は。何で、他の国、一国でやっているのに今回だけ日本と韓国でやっているんだろうという感じですね。拉致も自分には関係ないと思ってましたからね、ずっと。大多数の人と同じですよ。

『嫌韓流』を読んだのも大分後ですよ、ちなみに。半年とか1年とか後じゃなかったかなあ。古本屋で100円で売っていたから、ああ見てみようという程度のものでしょ。だから、よく皆様の想定してらっしゃるような「漫画『嫌韓流』を読んで」「2ちゃん（ねる）

みて」というのは俺には全然当てはまらないです。2ちゃんねるも、日護会の関係で最近電波板だけ見ているだけで、他は見えていないですからね。書く（ネットに書き込む）こともほぼないですし。

#### （４）在特会への参加

##### 《参加の経緯》

元々ミクシィの前はGREE やっていて、GREE は会社の人がやっていたんですよ。会社のヒトとやっていて——ああそうだ、参加するきっかけになったのは、△△さんとミクシィで知り合って。一般の会社とかも普通にしている△△さんが在特会の運営をやっている、というのをみて、一般の人でもできるんだというのが、行ったきっかけの1つですね。初めて（知ったの）は△△さんですね。それ以外のミクシィやGREE やら、最初はGREE ですね。GREE のほうで一緒にやっていた系の人たちとは、今も交流ありますよ。今も。

ネットで見て、反対意見の人たちと議論を続けるというですね、あっち側の反対意見のほうの意見のスジが通っていないんですよ。人権守るためなら何人殺してもいい、なんていう人がいますよね。で、犯罪者の人権守るためだったら被害者の殺された人の人権を無視していい、という弁護士とか普通にいますからね。GREE の方だと、いつだったかな、だいたい在特会とか××さんとかその周辺のだったはずですよ。（元から入っていて、そのコミュニティに加わったということか）そうです。それで見つけて行きだしたって感じですね。ミクシィはその後ですね。

（デモなどに参加するのは、ここ）2、3年くらいですね。瀬戸さんたちのビデオをみながら2年3年あったと思ったんですよ。それまでは家で見ている一視聴者の1人ですね。コメントはあまりした覚えはないですね。普段から今も知っている人が何かやっている時に挨拶したりとか、そんな感じですね。酔っ払って気持ちよくなったときに、部屋で1人でコメントしたとかはありますけど、普段はあんまり書かないですね。

初めてデモに参加したのが、4月11日カルデロン・デモ、あれが一番最初なんですよ。（在特会の会員になったのは）そこ（蕨デモ）のあたりですよ。直前とかだったんですよ。だから会員番号5千いくつかですよ。で、それまで東京でやっているのとかも行こうと思えば行けたんですけど、大体仕事とかぶっちゃって、それで土日にやって「ああこの回なら行ける」というので、それで参加。行くときには自由参加なので、やりますよという告知がホームページにされているので、「よし行こう」と。初めての人もだいたいそうですよ。逆に、行きますよと報告する口がないですものね。俺も一番最初の蕨の時の時は、始まる30分前に駅に着いてたんですね。で、それで〇〇さんが準備しているのを見て、「うわっ、〇〇さんだ」って。「動画で見てる人だ」って。いうのはちょっとありましたよね。

デモというか、そういういわゆる政治的な活動というのは全くの初めてですね。他にも一般の人たち大勢いますから（強い抵抗感はなかった）。それ（強くはないがためらい）もあって、初めて参加するのに2、3年あったということですけどね。たとえば、いきなり初参加で演説をマイク渡されてしろうたってももちろんできるわけじゃないじゃないですか。だから最初はデモ行進の一参加者として、そのときは俺もでっかいトラメガを持って歩いていましたから。持ってくれる人いませんかっていうので。

初参加者のやつで、しかもその時、襲撃にあっているんで。主な人たちはだいたい××



さんの車で蕨の警察に行っちゃったんで、懇親会とかも特になく。その次、直後というわけではないのですが、確かその翌週か翌々週くらいに、〇〇市長糾弾街宣か何かがあったんですよ。そこで初めてビデオ撮影をしたんですよ。ビデオはもともと趣味で持ってたんで。勝手に好きなだけみんな撮っていいよ、という状態なんで。そこからもう、行ける時には100%に近い状態で参加ですね。マイルも10万マイル貯まっていたのを、1年で飛行機代で全部使い果たして。クレジットがゴールドで、普通に使っていればそのくらい。飛行機も仕事で飛んだりしますんで。

(参加に対して) 別に悪いことしているわけじゃないんで、何の抵抗も俺にはなかったんですけどもね。例えばそれが暴力団とか、過激派の——今回、昨日やった反原発デモ、日本中でやったじゃないですか——あれの裏で糸引いているのは中核派なんですよ。根拠なく言っていないですからね、中核派というのを。反天連とか中核派とか、その辺の奴らが——直接知っている奴らが——いるのを確認していますからね。そういう奴らの中核派とかがやっている奴らの方が、俺にはとても恥ずかしいし、犯罪行為に加担しているから顔を出せないですね。あっちは。あっちのほうに参加するんだったらマスクして。昨日もいたって言ってますよね。顔にマスクして、マスクに原発、核のマークつけているような奴が——人(を)馬鹿にしていますよね——そういう奴らはいっぱいいると思いますけど、そっちだったら俺はそもそも参加からしないんですけどね。

ここ何ヶ月かは、仕事が忙しいのとお小遣いが足りないのとで、参加の頻度がちょっと減ってるんです。東京まで往復するのに5000円するんですよ、うち。さすがに月4回2万円プラス懇親会行くと3万4万かかっちゃうんですよ。ちょっと家のローンの返却に支障が出始めて来たので、家のローンと車が壊れて買い替えしたんで、そっちが今ダブルで来ちゃっているんで。ちょっと今あと3年、4年くらいは家のローンを払っちゃいたいなというところですね。あと4年くらいでローンを払って。(随分早いんですね) 安いです。月々4万、ボーナス20(万円)であと4年ですね。

(往復5000円かけてまで行くようになったのは) 何となくですね。ノリで。特に最近はこちらちょっと小遣い困ってますけど、当時は何にも困ってなかったです。よく在特会の活動やっている人たちは、社会の底辺で虐げられて、危機感を持って、さっきおっしゃった話される方が多いんですけど、俺がみる限り虐げられて危機感を持って死にそうな人はあまりいないですよ、普通に生活して。バランス感覚がない人たちの中には、いっぱいいますよ、生活できてない人たちが。でも大半の人は普通に生活してます。一部のその、ちょっとピントがずれてらっしゃる方々が目立つ、いっぱいいるという意味じゃなくて、目に付くというだけですね。インパクトが強いというか。そういう人たちをもって全体を語られる方が多いですね。

運営(幹事)になって、たとえばディズニーランド好きな人って年間パスポートを買うとするじゃないですか。年間パスポート買ったら行くのが義務になりますよね。行きたくなる。そんな感じです。俺、年パス(ディズニーランドの年間パスポート)持ってたときと感覚近いと思いますよ。たとえば家で寝ころがっていたとするじゃないですか。それでどんどんおかしくなっていったら嫌ですよ。自分がやらないで人にやってもらうというのは、結局ね、何もしない。それだったら自殺したって構わないわけですよ。生きている意味がないということですよ。おかしいと思ったら、文句言うなり良くしようと

するなり、それが普通だなと思うんですよね。

(活動を持続させるのは) 動画の力ですよね。動画でこんな問題があるっていうのを見ると、気になって調べるじゃないですか。そうすると何だこりゃってなってきた、それをたとえば、今それが始まったばかりで他の人がほっといて勝手に何とかしてくれるんなら、何にも俺、気にしないんですよ。他にやってくれる人がいないからやっているだけであって。だから俺としてはこの活動を一生頑張って続けていこうという気はさらさらないんです。他の人たちがもっとやってくれれば、俺も楽できるんで。だから地元の皆様がんばってくれて、こちらの方を盛り上げてくれるから、俺も最近は毎回行かなくても良くなってきてるし。今までは動画撮影生放送をやってたんだけど、代わりにやってくれる人がでてくれたから、俺も今は別のこともやってるし。という感じですよ。だから、できる人、やる人をいっぱい増やす、後進の育成というのと、それくらいですよ。それが桜井さんの言うところの「すべてを巻き込む」、すべてを巻き込んで民意を変える、国民意識の変革というところにつながると思うんです。

(参加して楽しい、あるいは) いいからやっているわけじゃなくて、良くないから行っているわけですよ。良くないことに文句をつけに行っているわけですから。いけないことにそれはダメですよ、と言っているわけですよ。チーム関西がいつも言っているのは、「あかんもんはあかん」と。その通りだと思います。おかしいことをやっているから、「それは違うんじゃないですか」と文句を一緒に言いに行っているわけですよ。

#### 《参加してみても印象》

特に激しく思ったのはいですね。たとえば、会社の友達と飲んでいるときのネタが1個増えたって感じです。遊びのネタ言っているのに加えて、シナ朝鮮問題のネタもぼろぼろっというようになっただけです。至って普通ですね。

いつも動画で見てる時っていうのは、気がついたら始まって、気がついたら終わってますよね。その前段階で何週間も前から事前調整したりとか、横断幕作ったりとか、そういうのがあってというのはギャップですよ。だからマイク持ってしゃべっているだけが活動じゃないっていうのは、すごい感じますよね。

(本人が望まなければ) マイクを持ってしゃべらないのは全然俺はいいと思うんですよ。個人の問題ですから。だから、いつも桜井さんが言っているのは、できるときにできることをできるだけやってもらえればいい、とすべての人に言っているんですけど。そういうのを俺もここ1年くらいはできたからやっていたんであって、できなくなっているここしばらくはちょっと参加頻度も減っているし、あんまりできないよと。で、平日も仕事忙しいから、なかなかできないというので、それで文句言ってくる人っていうのは今のところいないですし、言ってくる人というのはバランス感覚がない、活動以外に趣味もない、活動以外に生きる意味のない人たちですよ。俺はさっき、生きていない意味がないと言ったのは、活動以外にもそうですからね。すべてのものに対して。そのときに自分が必要だと思ったことやらないんだったら、生きていないんじゃない、ということですから——と思います。

#### 《関心があること》

主に朝鮮やらチャイナやらの特定アジア問題ですね。悪いことですね。俺判断で悪いことを率先して取り上げたいです。たとえば今回のパチンコ。(筆者のテーマからすると) 外国人参政権の話がいいんですよ。外国人参政権の話だとすると、今回、地震でガイジン大勢逃げましたよね。一気に街からガイジン消えましたよね。そういう方々に選挙権を与えて日本の行く末を左右させるのはいかなものなのか、ということはずごく思いますよね。で、しっかりした日本に根を張って、日本のために日本人と一緒にがんばろうというガイジンの方、そういう人たちだけならいいと思うんです。選挙権も。ただ、それだったら今簡単に帰化できるのだから帰化しちやえばいいんじゃない、と思うんですけど。そうすると相手側からアイデンティティがどうのこうのといいますが、でも国籍変えれば変わるようなちんけなアイデンティティなら、いらねえんじゃないかと思えますけど。

(参政権を取り上げたのは) 在特会だけじゃなくて、こっち側の陣営がみんなで行っていることですから、在特会が取り上げているわけではなく、いたるところで話を聞いて「これはおかしいな」と思ったからです。選挙っていうのは、その国の行く末を左右することですよ。それを、その国に対して責任も義務も負わない人たちが、権利だけ要求するっていうのはおかしいと思うんですよ。

今回韓国で選挙権を持っている人何人いますか、日本人で。外国人参政権通ったら、参政権を持つ——今日本人限定で韓国の話したんで、朝鮮半島出身、今あそこの半島には日本と国交のある国家は韓国しかないですよ。だから、(日本で) 韓国朝鮮人合わせて朝鮮人の選挙権を得られる人間っていうのは、人数としては60万人くらいいて、年齢20歳未満を考えるとだいたい40万人くらいかなと個人的に思うんですよ。外国人参政権を何にもしないで得られる人。じゃあその人たちの40万人は、選挙の権利を持つのにに対して、50人しか持っていない。じゃあなんで50人かという、50人しかいないわけじゃないですよ。税金、日本でいうと1億だか2億円以上納めていて、というしぼりがいっぱいあるじゃないですか。(事実誤認を訂正) じゃあ永住するための条件は規制緩和されたんですか。(韓国の制度について説明) じゃあちょっと話を戻しますが、日本人がぱっと行って、選挙をとるには永住ビザを取らないといけないんですよ。永住ビザをとるための条件がそれなんですよ、何億円以上という。(事実誤認を訂正) じゃあ今、向こうで50人くらいしか選挙権持っている人がいないってどういうことなんだろう。(現状を説明)

在特会は極右といわれましたけど、極左と思っています。わかります? 差別に徹底的に反対しているんですよ。朝鮮人問題という点でいうと、他の外国人に対する差別ですよ。朝鮮人にだけ特別待遇を与えるとかって。それは他の人、朝鮮人も他の外国人と一緒にしなさいよという、なぜか差別といわれるんですね。他のところも、たとえば今、部落解放同盟とかでやったりとかしていると、それも「おかしいことしちゃダメよ」というと差別といわれるんですよ。朝鮮学校も無償化するって言ってますよね。で、他の外国人学校とかもやったりやってなかったり、朝鮮学校と同じ教育形態である教習場とかは無償化されないのになぜか朝鮮学校だけされると。そんな差別よくないからやめなさいという、なぜか差別といわれる。

今回の外国人参政権もそうですよね。等しく外国人には日本のことに口出しをする権利はないですよ、という風に基本言ってますので、「永住権を持っている人だけ特別に、それ差別でしょ」って。外国人なんだからすべてダメという、なぜか朝鮮人差別っていうん

ですね。基本的に、日本人と日本の国に対して義務と責任を持っていない外国人は、差があるのは当然だと思うんですよね。なので、そここのところで他の外国人の方々が日本のことを良くしたいと思って、日本人と一体になって頑張りたいんだったら、国籍を取得する。それに対して俺は文句一言も言っていないんですよ。だから他の外国人いっぱいいるなかで、朝鮮人が自分達だけ特権がほしいといっているからふざけるなといっているんです。それがどこでどう差別になるのかはちょっとぴんと来ないんですよ。

#### 《得られたもの》

大勢のいい人たちと知り合えたってことですよ。金なんかもちろん出て行くばかりだから。入ってくるのもないし。で、たとえば具体的に「これだ」というすごい実績も、我々だけで作っているわけではなく、実績というのは意識を持っているみんなで共有するものだから、俺1人が占有するものでもないです。かといって在特会がすべてやったんだ、というわけでもないじゃないですか。だから別に実績がどうこうというのは、あんまり俺、成果とか気にしないんですよ。なんで、当たり前前は当たり前やるだけ。だから、世間の考え方が変わってこっちに対する文句——意見、お小言、感想、一言で言えば悪口ですけどね——をいう人たちだって、もともとは興味を持ってた人たちだらけじゃないと思うんですよ。

(変化したことは)自分で意識して——狂った人とかを多々見てるんで——ああいう風にはならないようにするために、いつも自分を見直ししてるんですよ。だから、変わったなというところは役職について発言に対して気をつけるようになったぐらいかな。と思います。下手なこと一言言うと、それでおかしなのが食いついてくるんで。でも、普段からそういう風には前々からしてるんで、そんなに激しく変わったというのはあんまり自分としてはないです。ありのまま。たとえば俺は暴力的な発言とかが嫌いなんで、自分ではいっつもしません。それは継続でやってます。それは当たり前前のことを肅々と、自分にとって当たり前のことですよ、とやっていくわけですね。

### (5) 組織の運営

#### 《組織間関係》

ただまあ、人ってのは変わるもんだなと感じますね、最近。一緒にやってた時は仲良かった人でも、自分以外の人同士で喧嘩を始めちゃったりとかすると、結局、こっちはどっちとも仲良くやっても、そっちの人の絡みでやっぱりある程度距離をおかないといけなくなっちゃうじゃないですか。それで、というのが××さんのときにもあって、〇〇さんのときにも今あって、何でそんなにすぐ喧嘩するんだろうなというのは感じますね。

自分の持っているやり方と違うから、それはダメだよという人がいるんですよ。たとえば先週あったやつで、救う会のデモが5日にもものすごいやるって言ってやったのがあったじゃないですか。で、その第三挺団を在特会がやって、在特会がいわゆるチャンネル桜から言わせると、汚いことばを使っていたのが許せないということで、在特会を「寄生虫め」とチャンネル桜が今、罵っている状態なんです。自分達とやり方が違うんだったら自分達の正しいと思うやり方をすればいいだけじゃないですか。それをなぜかこっちの方のことも攻撃し始めるんです。

だったらそんなことする暇があるんだったら、救う会でその時やっているんだから、金正日のところ行って一発ぶん殴ってくるくらいをしてほしいですよ。で、みんなで仲良く歌うたって気持ちよくなって帰るだけでしょ、あの人たち。それで本当に救われると思っているのかな。それは1つのあくまで例ですね。そういう人たちっていうのは、たとえば先週の救う会の話でいうと、ほとんどの参加者は救うことが目的ですよ。そういう人たちっていうのは、我々に対して言ってくる言い方というのは、そんなのは美しい日本人らしいやり方ではないと、下品であると。ということはですよ、救えようが救えまいが上品にやっていたらいいんですよ、その人たちは。それ感じますね。目的は救うことにないから、そういう外見のことばかり言うんですよ。で、そっちの汚いことばを使った方々は、何でもいから早く取り返せ、ということをお願いしていただけなのに、下品だ下品だというわけです。だからそういう目的を持ってやってない方々っていうのは、正しく言うと目的を自分を良く見せるためにやっている方々っていうのは、自分としてはちょっとどうかと思います。

バランス感覚がない人が入ってらっしゃる方、結構いるんですね。バランス感覚がない方がそれを外に向かって吹聴するからもめているように見えるわけで、最初から一枚岩でももめることもなくやっていたわけじゃないですよ。ただ最初はバランス感覚を持った人たちが多くて、やり方が違う、意見が違う、その他なんかちょっとしたいざごぎがあったら特に立つ鳥跡を濁さず去っていた人たちが、立つ鳥後を濁しているだけなんですね。たとえば、今回東北の支部長がおやめになって日護会側についているんですけど、その人がやめた原因というのが、東京支部長——東北の支部長の前に支部長やっていた人が、幸福の科学のスパイであると言い出しまして。その人は在特会にもぐりこむために、東北でいったん実績を作ってから東京に行くように幸福の科学の指令を受けてやっているんだと、言い出したんですね。それどう思います？ そんなアホがと思いませんか。

そういうウソを真に受けちゃう人たちというのが、こっちの側でも政治的な話のウソを広める人っていっぱいいるんですよ。それを情報の取捨選択をしないで、ネットで見たっていうので全て真に受けて吹聴する人というのはたくさんいるんですね。確認作業一切なしで。それがまあ、ひどいものになるとツイッターのデマ騒ぎとかになりますよね。それと同じようなので、いっぱい飛び交ってるんです。

《注目を得るために》

最近、よく襲撃されることがあるんですね。暴力的に。たとえば「踊れコリア」とかってわかります？「おどれ、こらあ」といって胸倉つかんでくる奴がいて、それが「おどれ、こらあ」というのがなまっていて「踊れコリア」に聞こえるんですね。多分「踊れコリア」で調べると動画で出てくると思うんですよ。そういうのとか。まあそういうのは襲撃されているうちに入らないと思いますけどね。去年の1月24日だったかな、在特会の臨時全国大会から新宿の外国人参政権反対デモの時とかも、催涙スプレー持った奴に襲撃されましたよね。これとかは、襲撃犯とか知ってたんですよ、元から。ミクシィとかで存在は知っていたんで。

俺は身内だけの「そうだそうだ」と盛り上がって会話するよりも、敵対している人たちの中にこそ真実があると思うので、主に敵対している人たちとばかり話してたんですね。

だから襲撃している人とかも、アンチ在特会コミュニティの管理人とかもよく知ってますよ。直接会ったことは3回4回くらいかな。まあ大体、どっかでやってる時にひょろっと現れたりとかそんな感じですよ。

実際暴力ってのはほぼないんですよ。向こうが襲撃してきて、というのしかないんですよ。こっちでいきなりぶん殴ったというのは、ほぼ知ってる限りないですよ。そういうのさえ今後もない方向でやっていきたいなと。だから俺は、率先して止めるほうに回るために、デモ行進の時もデモ隊の真ん中とか先頭とかいて、やるよりも行ったりきたりしてトラブルがないか、先に行って待っているキチガイがいないか、そういうのを見るのを重点的にやっているんですね。なんで、この間のパチンコデモの時も、もめた時は率先してマイク奪って、「いいから進んでくれ」とやっていますね。一箇所に集中して大騒ぎしますと、事件屋さんたちが眼の色変えて寄ってくるんで。それでガツーンやっているとこをビデオ撮ったら、あっちとしては大喜びですからね。

うちは、やられたところはビデオ撮りたいんですけどね。「また襲撃された」と。で、時々あの反日役をやっている人がいるみたいなことを書く人がいるんですけどね。自作自演で毎回反日役をローテーションで用意するなんてできないですよ。ほっといても勝手に狂った奴が突っ込んでくるんで。今回も〇〇ってわかります？ 〇〇が反原発デモ、昨日やったやつで右翼と一緒にやることはできないって言って大騒ぎしていたんです。もう、本来の目的よりも自分が大事なんで、右翼と一緒にできないと。ゲバルトとかもそうですし。そういう奴がちよっと餌まくと食いついてきますからね。もう、我々の言っていること全てが、奴らにとって餌なんですよ。なんで、勝手に襲撃されたり、本当は襲撃されるのは嫌なんだけど——こっちも捕まる人が出ちゃったら大変じゃないですか。

特に、ネット系の方でしか（知名度が）やっぱりまだないんですから、それがもうちょっと世間に広がってくれればいいんですけど、それを広めるには前回パチンコ禁止デモ全国でやったんですね。自分は地元と一緒にやったんです。他、日本中全部で7箇所くらいでやりましたけど。話題に出ているとことというのは、だいたいもめたところなんですよ。向こうが突っかかってくるころ、とかなんで普通にね、当たり前のことを当たり前姿勢正しくして綺麗に言っているというのは、一切話題に出ないんです。それで、やってる意味としては薄いですよ。

だから、それもすごい重要なんですけど、人の目を集めるにはどうするかって考えると、ちょっとそこどころがもめた方がいいのかな、というのはあるんですけど、もめてばかりだと一般の人参加できなくなるから、会の中でもめてる地域と粛々とやっている地域とある程度区分けが必要だと思うんですよ。それで自分は、××と一緒に粛々とありのまま正論を述べる、ということで他の「過激なところには行きたくない、でも参加はしたい」という人が行きやすい所を作りたいなっていうのはありますね。今のところ××で、過激で暴力振るう人はいないですからね。で、政治家の先生が、たとえば過激なところと粛々とやっているところだったら、粛々とやっているところに行きますよね。俺としては政治家の先生には、個人では興味を持ってないので、ここは支部長に全部政治がらみのやつはお願いしちゃってあるので、支部長に任せているという状態ですね。

《社会統制》

東京でやる時っていうのは、何で公安の人が 20 人もいるかっていうと、東京、千葉、埼玉、神奈川、どさっと来るんですよ。1 つの県で 3 人来ると、そういう風に多くなってくるだけであって、実質としては全部が全部申し合わせてさあ 20 人というわけじゃないんですよ。あの日聞いているだけでも、千葉と神奈川と東京は来てました。埼玉はちょっと確認してなかったんですけど。

(気にならないですか) 気にならないですね。我々捕まえにきているわけじゃないですから。それ以上やると捕まっちゃうから、これくらいでやめてねって言うわけですから。見張られたって、それはあっちのお仕事だから。公安の人たちは、どっちかっていうと公安の一課二課三課ってあるじゃないですか。うちにきているのはどちらかという、右の市民団体(担当)の人たちなんですね。

その人たちは情報連絡はやりとりしていないんだけど、そこにいると極左が捕まえられるっていうんで、大勢来ているというのは左担当も襲撃に備えてきていて、なおかつ事件屋っていわれる部隊があってですね、何でもかんでも事件として立件して捕まえようとする人がいるんですよ。公安って。なので左担当と事件屋がいるからより人数が多くなっているんですね。その人たちは別にうちらを捕まえにきている、ああ事件屋はうちらも含めて捕まえに来ているんですよ、何でもかんでも捕まえられればいいっていう。だから、公安でわれ警察なりっていうようなベスト着て、ビデオカメラを三脚でこうやって持って構えている集団いるじゃないですか、あれが事件やなんですけど。そっちの事件屋の人たちは、何かちょっとでも不備があったら捕まえるぞというのは満々で来ているんで、あの人たちは正直いやですね。ただそういう人たち、終わったらすぐ帰っちゃうんで、別に関係ないですよ。

#### 《右翼的なものとの間合い》

思想に関しては、今うちの会長が日本中をまわって講演しているんですよ。今日その最後やってるんで、それを後でまとめて DVD にしようかって話をしてるんですけどね。

で、右翼とうちの決定的な違いは、たとえば運営支部長、副会長っていますよね。まず強制されて来ている人がいないっていうのと、嫌ならすぐに辞められるっていうのと、あとは他の一般の会員の方々、主な参加者——参加者の大体 9 割以上は一般参加者ですよ。そういう人たちにあなたは誰ですよという名簿もないし確認もしていないし。次(に)来なかったらまあそれはそれでうちの考え方、やり方に賛同していただけてないからしょうがないよねっていうことで、そのあとしつこく何かしたりとかは全然ないんですね。なので、もし来れるようだったら皆さん来て下さいね、がスタイルなんですよ。だから、無理して参加することを強要していないし、来やすいというのがあるんですよ。だから人が減りだすと止まらないというのもあるんですけど。そこは今騒ぎの途中なんで。

護国神社、靖国神社の話ですが、俺はもともと神とか仏とかは基本、信じてない人間なんですよ。ただ、一神教はすべて邪教だと思ってるんです。ただ日本の神道はすべてのものが神様であると言ってるんで、それはすごくいいと思うんですよ。ものを大事にするという観点から。だから日本神道は基本的に否定するつもりはないです。たとえば、これは神様だけどこっちは神様じゃないっていうんだったら、それはおかしいなと思うんですけどね。すべてが神様だっていうんだったら、それはそれでその人が言っていることにお

かしな点はないんですけど。それならお好きにどうぞと。

俺も家に仏壇と神棚が並んでいるような家で育っているんで、神社へのお参りは子どもの時からの習慣で普通にしているんです。で、日本のことを守るために戦ってくれた朝鮮人を含めた戦死者たち——まあそれも戊辰戦争からですよ——の方々が眠っているところなんで、それに日本を守ってくれてありがとうとお祈りするのは全然悪いことだと思わないし、8月15日くらいはやりたいとは思いますが。

ただ活動を始める前は全然そういう意識がなかったんで、戦争はうちの爺さんが子どもの時にあった。だけどうちの爺さんはびんびんしている、だから戦争は俺には関係ないと思ってたんです。だから、うちも地元の護国神社にごくたまーに行きますね。だいたい夜、散歩がてらという感じですけどね。靖国には8月15日に行ってますね。あとは何か行事があれば行ったりはします。たとえば会のイベントとして清掃奉仕ってのが出てて、行ける日だったらいきます。ただ清掃奉仕だけに往復5000円かける気はないので、たとえば土日のどっちかに清掃奉仕があってその翌日に何か行事があるというのだったら、金曜日の夜のうちから入って事務所に泊まれるんで。事務所に金曜に泊まって、清掃奉仕して日曜日に帰るとか、そういうのなら全然行きますけど、それだけで出されるとちょっと行かないです。つまりその程度です。

在特会が右寄りの活動を義務化したことって何かありますか？ 俺、覚えがないんで。靖国どうのこうの。天皇陛下がどうされたとか、どうしなさいとか、全然ないっすよ。うちでやるけど、来るんだったら来てというスタイルなんで、全然清掃奉仕活動を神奈川支部としてやります、というので神奈川支部でやります、じゃあ行きましようというのがあります。強制は一切してないの。

## (6) 小括

在特会のメンバーは、自らを「ヘイトスピーチを垂れ流す集団」とは思っていない<sup>18</sup>。特権許さまじという大義を掲げ、義憤にかられた人たちがデモ行進に参加しているというのが、メンバーの自画像になるだろう。それゆえ、I氏がいうように在特会のデモに対する抗議は「反日極左の卑劣な妨害」として、ネットの世界の中では自らの正統性を喧伝する材料となる。

ただし、こうした在特会の像に加えてI氏自身も創価学会批判にひきつけられた経験から述べるように、極右が「タブー破り」をする姿に快感を覚え溜飲を下げる側面は確実にあると思われる。合意争点でない限り、ある措置(カルデロン一家の長女の在留特別許可)に反感を持つ層は一定程度存在する。それは、「社会の底辺で鬱屈した感情を持つニートや非正規就労者」だけではない。そうした感情を表出する回路がないなかで、タブー破りをする極右の姿に喝采を送る層は一定程度存在するだろう。インターネットという安価な自前の通信手段は、そうした勇ましい姿をメディア映りを気にせず自ら配信することを可能にした。タブー破りが動員を可能にする側面は、日本社会の停滞や流動化、グローバル化のような大きな変化をもたらす不安と結びつくところもあれば、そうでない部分もある。

---

<sup>18</sup> 現実には、EU諸国にある差別禁止法を適用すれば、活動停止になるような水準だと考えてよい。



これは、当事者の主張だけをみたのでは解明しえない。それゆえ、直接的な聞き取りによる冷静な分析が必要になると筆者は考えている。

## 10 愛国心と排外主義の間・J氏の場合

### (1) 外国人や政治との関わり

(外国人との接触は) 一応、外国語学科だったんで、その国の方との交流は結構ありましたよね。(小さい頃は) 在日でしたら1人いましたね。何の違和感もなく。ちなみに彼は野球やっていて、亜細亜大学から熊谷組経由で阪神タイガースに入りましたけどね。まあ在日の方です。僕は彼のこと外国人だという意識はまったくなかったの。外国語学科に入りましたが、当然先生もあちらの国の方もいますし、留学生もいらっしゃいますし、大学出たらいわゆる外国人と接する機会は増えましたよね。(今の活動とのつながりは) まったくないですね。そういうのはまったくないです。私は決して——断っておきますが、決して排外主義ではないです。

(在特会の活動に連なる関心が生まれたきっかけは) 天安門ですかね、やっぱり。相当昔の話ですね。20年以上昔の話です。あれで何か、中国という国に対してなんか嫌悪感というか、それ以来中国という国に対しての嫌悪感が拭えなくなってますね。で、その後の反日活動とか見て、この国——あと毒入りギョウザとか、北京オリンピックの時の長野の暴動事件とか——この国はちょっと信用できんなどという思いがずっと20年来なってますね。世界にはこういう国があるんだということですね。正直そこまで韓国に対して嫌悪感というのは——まあ北朝鮮は別ですけどね——なかったんですけどね。どちらかという、この運動始めていろいろ勉強していくにつれて、韓国もおかしいなど、今は感じるようになりましたね。どちらかという僕は、中国の方から始まっています。でも韓国も竹島問題とかいろいろあるんで、まあおかしいなどは思ってたけど、そこまで——嫌悪感まではなかったですね。

(拉致問題などのきっかけは) 拉致は本当に知らなかったですね。拉致は本当に、本格的にインターネットで情報を得ようになるまでは。あったんだろうと思ってましたものね。(2002年の小泉訪朝の時には) そこまでなかったですね、関心は。正直。あの頃どちらかという僕、サッカーのほうに熱中していて。あの頃はそこまで社会問題に関心なかった時期なんです、自分の中で。もう日韓ワールドカップに熱中しててですね。拉致——もちろん拉致被害者の方が帰ってこられたのはそれは嬉しかったですけど——そこまで深くは考えていなかったですね、あの頃は。

(ワールドカップの時に韓国が嫌いになった人がいますが) そこまではなかったですね。羨ましいと思いましたね。勝ち上がったことに羨ましいと思ったけど。でも後でよくよく考えてみると、ずるいなとやっぱり、これは何かおかしいなどは後で思いましたよね。明らかに反則とか、あと誤審があったので。やっぱり何かおかしい、これおかしいというのは、後になって思いましたよね。まあ、そこまで深くも考えてなかったんですけど。(それらは) きっかけとはいえないですね。

むしろあの、韓流ドラマの気持ち悪さ、日韓ワールドカップが終わってから韓流ドラマが始まったじゃないですか。冬のソナタですかね、ちょうどその時期じゃないですか。ちょっと気持ち悪いなどというのはありましたよね。気持ち悪いというか、「何でこんなものにみんな熱中するんやろう」とか。「何が面白いんだろう」とか。「それはないだろう」みたいな(ストーリー)。で、竹島問題もクローズアップされてきましたしね。でも、韓国に関

してはやっぱりこの運動始めて勉強するようになってからですかね。

(政治に対しては) 結構社会科とか好きだったし、子どもの頃からニュースとか見るの好きでしたからね。(政治に対する) 関心はある方だったと思います。(選挙には) 行きますね。必ずとはいえない、行かなかったこともありますけど、少なくとも30(歳)過ぎてからは必ず行ってますね。(理由は) どうしてといわれても困りますけども、まあやっぱり与えられた権利ですからね、当然行使しないとイケないと思うし。ただ、やっぱり空しさを感じたんですよ。小泉郵政選挙とか、この前の2009年の民主党選挙とかで、何でこうマスコミの言うことを聞いて投票したらこういう世の中になっていくんだらう。投票に行きながらもそういう矛盾を感じてましたね、ずっと。

(支持政党は) 特にはないですね。特に自民党が好きってわけでもないし、社会党が好きだったわけでもなく。何かその時の是々非々でしたよね。(投票先は) 自民党でしょうか、やっぱり。(2007年参院選の時にも自民党に) あのと時もそうですね。やっぱり民主党はちょっと信用できないなど。本当、消極的な理由ですけどね。民主党もですね、やっぱり一見自民党、旧自民党の人が多いけど、やっぱり旧社会党の人間も多いじゃないですか。支持母体がどうしても、日教組とか自治労とか、どうしても左翼側じゃないですか。これはちょっと危ないなど。ちょっと信用できないな、というのがありますよね。

やっぱ反共ってのがあるんですよ。共産党、共産主義が嫌いとか、社会主義が嫌いとか、やっぱりあるんで。どうしても社会党とか共産党に入れるのは抵抗があるんで。かといって公明党は「うーん」という感じなんで。どうなんですかね、消極的な理由でやっぱりどうしても自民を選んでしまうという感じでしょうかね。

(天安門事件との関係) それもあるかも知れませんね。天安門・・・あるでしょうね、やっぱりそれは。あとソ連も嫌いでしたからね。何か共産主義イコール独裁主義とか何か、そういう暗いイメージがあって、どうしてもそういう国とかそういうなにか、イデオロギーを好きになれなかったんですよ。だから、積極的に自民党が好きとかいうわけじゃなくて、何ていうの、マイナスを選んでたら結局まあ自民にならざるをえなかった。——いや、決して自民党好きじゃないですよ。不満は一杯ありますよ。今でも。

(93年に自民党政権が) いったん崩壊しましたよね。あの時は、どこに入れたんだっけ。もしかしたらどこに入れたか覚えていないですけど、もしかして日本新党かどっかに入れたかもしれないですね。ちょっとそこは記憶が定かじゃないんですけど。やっぱり自民党政権に不満があったのも、それは事実。かといって社会党や共産党はイデオロギー的に嫌だと。もしかしてその、あったかもしれないですね。どこに入れたかもう定かじゃないんで。なにせもう20年近く前ですからね。もしかしたら自民党以外に入れたかもしれないですね。

## (2) 運動に至る経緯

### 《尖閣というきっかけ》

ネット(で情報を集め始めたの)は・・・やっぱり尖閣事件くらいからですね。それまではテレビで情報を得ていた方なんで。・・・尖閣よりもうちょっと前かな。もうちょっと前から、きっかけはわからないけど何か、自分の中でこう愛国心が湧くことがあったんですよ。テレビドラママかなんだったかな・・・特攻隊か何かの。まあ、特攻隊が大きいですかね、あと。

特攻のドラマか映画みて。こんな立派な人たちがそんな悪いことしたはずがない。それで、そうですね、そういったことを調べるようになりましたね。

この運動を始めるきっかけは、やっぱり疑問を——2009年から民主党政権になって疑問をずっと感じたんですけど、決定的な出来事は尖閣ですよ。中国がああいうことをする国だというのはわかってたけど、中国の行為よりも日本の政府の対応の方に怒ってたんですよ。その前は竹島もそうですよね。何でこの国は自分の領土を守ることができないんだろうって。竹島にせよ尖閣にしろ——今、対馬も狙われてますよね——何でこう、外国に対して毅然とした態度が取れないんだろう。それをずっと疑問に思っていましたね。

(中国については) ああやっぱこいつら嫌な奴だなあと。反中感情はもうこの20年ずっと持ち続けてますね。まあその、比較のない時もありますけどね。いつも、毎日そればかり思っているわけじゃないですから。何かことあるごとに反中というのはずっと思っていましたよ。さっき申し上げたように、尖閣はどちらかという、やった中国よりも日本の対応がおかしいだろう、みたいな。これは絶対裏でつながってるぞ。これはこのままだったらやばいなど、竹島もやばい、対馬もやばいぞと。やっぱり自分の中で危機感ですか——を持つようになりましたよね。

その頃から、まあテレビニュースに疑問を持ち始めて、きっかけはよく覚えてないんですけど、インターネットで情報を調べるようになっていったんですよ。たとえばチャンネル桜であるとか。まあ、あるいはいろいろな動画とかですかね。在特会さんの動画を見たし、日護会さんの動画を見たし。「ああ、こういう考えってあるんだな」って。「ああ、従軍慰安婦問題、ウソだったんだ」、そういうの教えてくれないじゃないですか。そういうテレビじゃ、学校じゃ教えてくれないことをいろいろインターネットで知るようになって。

#### 《講演会からリアルな活動へ》

うーん、直接在特会に入るきっかけはなんだろう。My日本というSNSがあるんですよ。それで今から半年前ですが、青山繁晴さんの講演会がありまして、そこで終わったらMy日本のメンバーだけで食事会をしようという話になって、それに行ってみたところで、そこで今一緒に活動している在特会さんで活動している方が何人かいらっしゃって。まあそこでの出会いがきっかけでしたね。そこで出会って、在特会というのは桜井誠さんというのは知ってましたけど、まさか自分が活動するとは思ってなかったんで。

その2、3週間前、田母神さんの——田母神さん(の講演会に参加したの)が初めてですね。(足を運んだのは)田母神さんの講演会が今年の2月くらいですからね、多分それが初めてですね。田母神がやっぱりこう、自分が目覚めるきっかけだったんですよ。2008年でしたか、日本は侵略国家ではなかった——「ああこういう考えの人もあるんだ」って。かなりマスコミから叩かれたじゃないですか。それから自分の信念一切曲げないで、自分から辞表を出さなかったし。書くのを拒否して。こういう考えの人がいるんだって、田母神さんが大きかったですよね。(知ったのは)一般的なニュースですけどね。テレビニュースです。で、やっぱりあの何ていうか、ユーモアに魅かれたのですね、彼の。こんなユーモアのある人がそんな悪い人じゃないと思って。で、まあ論文なんかちょっと読んでみて。そうですね、やっぱり田母神さんは大きかったですね。この人の話なら聞いてみようと思って。

(講演会を知ったのは) My 日本経由ですね。もっと詳しくいうと、My 日本もチャンネル桜経由だったんですけど。My 日本の生放送をチャンネル桜の枠で借りてた番組があって、「ああ、こういう SNS サイトがあるんだ」って。それで My 日本にアクセスするようになって、青山さんの講演会があるということで行って見て、そこでたまたま在特会のメンバーの方と知り合う機会になって、「ああ、こんど街宣やるから一度来てみない？」みたいな。それが今年の 6 月ですかね。桜井さんの演説に魅かれてたのもありますし、講演に行って出会った人たちが、すごい穏やかな人たちだったんですよ。「ああこんな人たちなんだ」って。それは大きかったですよね。

何かこう、一応それまでもツイッターや何かで拡散して、いろいろ情報拡散とかはしてたんですよ。自分で情報発信したりとか。勝手にやってただけですけどね。ただやっぱこう、リアルに人に伝えたい、何かそういう欲求があったんでしょうね、自分の中で。自分の言葉で伝えたいというのがあったんでしょうね。生の声で。ネットじゃなくて。そういう欲求が多分、多分自分の中にあっただいしょうね。(人前に立つことの抵抗は) それはないですね。もうかなり動画が上がってますからね。たとえば知り合いにばれるとか——いや、ばれて困るような知り合いもいませんしね。特に何か身内に組合員がいるとか、労組がいるとかそういうのはないです。まあ別に抵抗はなかったですね。

### (3) 活動の実際

(社会運動への参加は) まったく初めてです。社会運動というかどうかはわかりませんが、初めてですね。社会運動といたら何か、共産主義とか社会主義という感じ。チャンネル桜の水島さんとか国民運動といいますけどね。市民運動…まあ市民の会だから市民運動なのかな。

(実際に参加して) いいですね。あの、居心地がいいというか、自分と同じイデオロギーの人たちといるというのは、居心地がいいんです、すごい。居心地がいいし、刺激になりますものね。自分にない知識を持っている方がいっぱいいらっしゃるんで。すごい刺激になります。ストレスが溜まるんですよ、こういう話をしたくてもまったく関心がない人に話をしたって、馬の耳になんとかじゃないですか。まあでもそういう人たちに伝えていかないといけないんですけどね、本当は。

(それまで政治関連のトピックについて話をする人は) いないですね。いなかったですね。話しても無駄だから話さなかったというか。それはちょっと違うだろうみたいな。こういう話ってしにくいじゃないですか、イデオロギーの話ってやっぱり。政治とプロ野球の話は気をつけろっていうじゃないですか。野球の好きなチームの話は気をつけろっていうじゃないですか、何か話しにくいというのはありますよね、そういう。

どちらかというとみんなテレビのことを鵜呑みにして、自民党がダメだから民主党だと。戦時中日本は韓国に悪いことしたんだから賠償しなきゃいけないとか、そういう人が多かったですよ。あとお花畑な、「日本が武器を捨てたら世界が平和になる」というお花畑な人とか、そういう人ばかりですからね。初めて自分とこう、イデオロギーで合致できる人たちと出会えたというのは大きかったですね。もちろん、(在特会の) 皆さん先輩ですから知識もすごいあるし。話をしてもすごい勉強になったんですよ。自分ももっともっと勉強しないとイケないなと思いましたよね。

ほぼ毎回参加してますね。好きなんですよね、行くのが。やっぱ演説するのが好きなんですし、多分。2 回目の街宣でもうマイク握ってましたから。まあ一応、自分なりにチャンネル桜とか、桜井さんや日護の黒田さんの動画見て自分なりに研究してたんで。

多いときは（月に）2、3 回というときもありますよね。まあ、別に彼女もいるわけじゃないし、家庭があるわけでもなし、（時間的な制約は）思ったことはないですね。もし本当に大事なことがあれば、「ごめんなさい、今回は」といいますから。別にそれでとやかく言われることもないですし、一応在特会は自分の仕事やプライベートを優先して、自分でできる範囲で参加してくださいというのがポリシーですから。それでストレスを感じることはないですね。

（参加して）仲間を得られたのが一番大きかったですね。同志か。あとやっぱり、本当にリアルで活動する大切さを教えられたというか、「ああこんながんばっている人たちがいるんだ」と思って。やっぱ尊敬しますよ、（同席していた）彼女だって。すごいですからね。がんばり屋さんなんですよ、彼女もね。がんばり屋さんで演説なんかもすごくうまいし。で、気もすごくよく利いて。すごく気遣いのできる方なんですよ。演説は結構どぎついんですけど。すごい良い方ばかりと出会えたなと思って。それが大きいですよ、やっぱり。良い方々と出会えて、リアルな活動の大切さを思い知らせてくれたというか。

（リアルな活動の意味）やっぱりわからないじゃないですか、ネットでは。実際に街に出てチラシを配ったりとか、演説をしたりだとかして、リアルで反応を見てみないとわからないじゃないですか。「ああやっぱり関心ねえんだな」とか。「ああ今日はこんなにビラ受け取ってくれた」とか。「ああ読んでくれた」とかですね。何かそういうのを感じることで、そういうことを肌で感じるってすごい大切なんだなって思って。「ああやっぱまだまだ無関心な人が多いな」と。まだまだがんばらなきゃいけないな」。そういうのは、ネットで——ツイッターで拡散するだけじゃわからないじゃないですか。「書を捨て街に出よ」ではないですけど、そういうのがリアルな活動じゃないとわからないと思うんですよ。

まあ、普通の人は引くかもしれませんね。でもそれ（街頭行動）だけじゃないですからね。実際に市役所とかに行政交渉に行ったりもしてますからね。ヘイトスピーチだけがクローズアップされますけど、それだけじゃないですからね、決して。（でも）言葉が適切かどうかはわかりませんが、（目立つ行動で）エンターテインメント性というかそういうのがないと、人集まらないと思うんですよ。どうそれを折り合いをつけていくかということとさだだと思うんですよ。

#### （４）危機感という動機

##### 《愛国心と危機感》

（エネルギーのもと）月並みですが愛国心ですかね。危機感。なんといっても、この前の TPP もそうですし、外国人参政権、人権侵害救済法——これらがもし本当に、もし可決されようものなら僕は日本終わりだと思っているんですよ。それくらいの危機感を持っているので。やっぱり国を守りたいというのがあるんですけどね。

（愛国心が生まれた契機は）サッカーとかスポーツで日本が勝つと嬉しいという、そういうのはあったし、負けて悔しいというのもありましたし。あと、ノーベル賞でもなんでも日本人が賞賛されたら嬉しいとか。逆に何か中国や韓国で反日運動があったら悔しいと

か。まあ、人並みには（愛国心が）あったと思いますけどね、昔から。普通に。そこまで国旗や日の丸に、そこまでの思い入れはなかったですけどね、正直。（皇室に対する関心は）正直なかったですね。ただいろいろなことを調べて知っていくうちに、自分のアイデンティティというか、日の丸とか国旗とか国歌とか。

本当にだから、ここ2、3年ですかね。それまではどちらかというとテレビの言うことを真に受けてというか、「まあそうなんだろうな」くらいにしか思ってなかったんで。30代の終わりくらいに竹島がありましたから、「何でここまで日本はなめられるんだろうね」と、そういうのはありましたよね。どの年代（だった時）でも疑問は持っているんですよ、やっぱり。何でこう日本は外国にぺこぺこするんだろうとか。アメリカの言いなりになるんだろうとか、何でこう賠償金を払わなきゃいけないのんだろうとか。そういうはずっと思ってましたけど、なかなかテレビじゃ本当のこと言わないじゃないですか。

なぜ目覚めたかと言われても・・・まあ年代は関係ないと思うんですけどね。僕の・・・はつきりとは覚えてないんですよ、どの瞬間だというのは。でも尖閣は大きな分岐点だったろうなとは思いますがね。

（外国人参政権について）そういうのはあるって聞いてましたけど、「それやばいんじゃないの」という意識しかなかったんですけどね。賛成したことはないですね。強い関心を持っていたわけでもない。まして人権擁護法案は、ほとんど知識なかったですね、それまでは。（外国人参政権に対して関心が出たのは）ネットで情報をいろいろと得るようになったのと、やっぱり中国人と韓国人を、日本の地方行政とはいえ政治に関わるのは絶対いけないなという思いがあって。だからやっぱり2、3年前からネットでいろいろと情報を調べるようになってからですかね、本格的に。何となく嫌でしたけどね、外国人参政権は——（ネットで調べてから）強く思うようになりましたね。

でも、人権擁護法案は正直わからなかったんですけどね。何か名前が良さそうじゃないですか。「ああどうなんだろう」と思っていたら、自分でいろいろ調べてみたら、これはとんでもない、これは言論弾圧だと。（夫婦別姓に対する関心は）ほとんどなかったですね。（賛否については）反対ですよ。まあ、日本の家制度ですからね。そこまでまだ深く勉強もしていないんで。あんまり大きな声では言えないですけども、どちらかというと僕、TPPの方が関心があつてですね。TPPは、日本の社会制度を根底から覆す可能性のある制度だと思ってるんですよ。国民皆保険制度とか、あるいはもしかしたら銃社会になる可能性だってあるじゃないですか。あるいは公共投資に外国の、アメリカの建築会社が入ってくるかもしれないじゃないですか。下手すれば日本の中小の建設業者がばたばた倒産することもあるし。まあ、夫婦別姓よりもどちらかというとTPPの方が関心があるんですよ、正直な話として。夫婦別姓も勉強しなきゃいけないなと思ってるんですけどね。

どちらかというと、外国人地方参政権——夫婦別姓で特にデモやったという話は聞いたことないですけどね。この前TPPではデモ、街宣やりましたけどね、私たちも。これから勉強していかなきゃいけないんでしょうね。（参加して変わったこと）変わってはないですけどね。まあ、強いてあげればますます愛国活動、護国活動に入り込んでいった、そういうのはありましたけどね。特に変わったことはないと思います。

（活動の中で一番関心のあるトピック）TPPと人権侵害（救済法）ですかね。まあ、もちろん外国人地方参政権もあるんですけど。この3点が一番自分は気になります。（人権擁

護法については) もちろん反対ですから、いろいろな議員さんに反対の電話したりとか、抗議のメールしたりとか、個人的にはやっていますよね。もちろん必ず街宣活動ではそういった問題に絶対触れて、通行人の方の注意を促すとかですね。そういうにはしていますね。(演説の時には) なるだけ取り入れるようにしていますね。あとパチンコ問題ですか。

《なぜ反中感情と在特会の活動が結びつくのか》

(在特会の) 専門はどちらかという和在日の、どちらかという和在日韓国・朝鮮人の方ですけどね。(なぜ反中感情が在特会の活動と結びつくのか) うーん、何ででしょう。まあ、縁でしょうね。縁があつて。それでやっぱり、どうしてもそういう話をするとそういう(在日関連の) 話になるじゃないですか。で、自分で調べてみてもやっぱり、自分でもネットで見てみた。「これはおかしいだろ、お前ら」みたいになりまして。

まあ、反韓国・反朝鮮の——やっぱ決定的だったのは、従軍慰安婦はウソだった、これですよね。俺なんかだまされたと。俺は20年間だまされてたのか。(当時は) 信じてましたね。情報がテレビしかなかったですからね、当時は。もうテレビがいうことをそのまま僕も思っていましたからね。ああ、俺達のおじいちゃん、ひいおじいちゃん、そんな悪いことしたんだ、じゃあ恨まれてもしょうがねえかな、と正直思っていましたものね、やっぱり。ただそれがないとわかった以上、あんな賠償金はなんだったんだと。俺達の税金を返せ、そういう感情になりましたよね。まあ、それも在特会の活動に入ってネットでいろいろ調べていくうちにです。まあ、(慰安婦問題の「真実」を) 知ったか、在特会か、それに気づいたほうが早かったかな。でも、こんなこと言っているのかあれだけど、きっかけはとにかくリアルで活動したかったというのが…。まあ、それでたまたま在特会の方と知己になったんで、ここでちょっとお世話になってがんばってみようかなと。

(反中感情との関係) 外国人地方参政権と中国って関係あるじゃないですか。まったくなくはない。人権救済法案も、地方参政権が——地方参政権を有する者というじゃないですか、人権擁護委員が。それに韓国人や中国人がなる可能性あるじゃないですか。外国人参政権が通ったら。反中国と無縁じゃない、関係ないとは思わないんですよ。

(東アジア統合は) それはいやですね。なりたくないですね。だって今EUだってヒイヒイいっているじゃないですか。やっぱり文化も違えば経済格差も違えば、絶対そんな統合なんか無理やり統合したら、何年かしたら絶対こういう軋轢というか、出てきますものね。それは僕は反対だな。現に実際、長野で北京オリンピックの時の事件があったじゃないですか。やっぱり何も起こらないという保証はないと思うんですよ。国防動員法でしたっけ? あれが発令されたらもしかしたら中国人留学生が暴れるかもしれないですし。その可能性もゼロじゃないと思うんですよ。

## (5) 小括

J氏は、愛国心が現在の活動に結びついたとしている。自らを排外主義者ではないともいう。J氏ほど明示的にではないにせよ、こうした自己規定をする極右の活動家は少なくない。在特会などの極右運動をめぐる言説では、活動家がたぎらせる「憎悪」に焦点が当てられており、憎悪→そのはけ口として弱者をいじめる排外主義という立論が圧倒的に多い。その意味で、活動家のいう「愛国心」はレトリックに過ぎないとされ(あるいは「寄



る辺なき人がすぎる最後の砦としての国家」という剥奪の結果として)、分析の俎上にはのぼらない。つまり、剥奪→憎悪→標的としての弱者という説明図式が、多くの論考で用いられている。

しかし、剥奪→憎悪というプッシュ要因は、極右運動への参加の説明として適切でないと考えられる。代わりに提起したいのは、活動家による「愛国運動」という自己規定を、ひとまずは「真に受ける」ことである。別稿で述べたように、不満や不安といった剥奪要因による極右運動の説明は、社会運動研究からすれば二昔前の議論でしかなく、批判に堪えるものではない。むしろ、J氏もそうであるようにインターネットが潜在的な支持層を糾合する基盤になるという動員構造（プル要因）に、まずは注目したほうがよいだろう。

すなわち、極右運動はインターネットを効果的に活用することで、「愛国心」を持つが直接行動に携わったことのない潜在的な支持層をひきつけるのに成功した。こうした潜在的な支持層は、2000年代後半に限らず常に一定程度存在したと考えられるが、それを組織化する動員構造が存在しなかった。街宣右翼や新右翼、あるいは日本会議のような保守系団体は、そうした層を組織化してこなかったと言い換えてもよい。それに対して動員構造を作り上げたのは、ネットに頼るほかなかった在特会などの極右運動であった。

こう考えたとき、「なぜ愛国心が排外主義と結びつくのか」という問いの解明が課題となる。活動家たちは「愛国・護国」を旗印としているが、それが単なる排外主義運動でしかないのはなぜか。あるいは、「在日特権」という根拠のない糾弾対象が活動家の「愛国心」を捉え、排外主義が愛国心の発露であると理解されるのはなぜか。この点に関して、活動家の（集合的）認知の面——フレーミング、集合的アイデンティティ、現象学社会学や構築主義といった道具立てにより迫るのは、事態の解明に至る1つの方向性と考えられる。それに加えて、「在日特権」に信憑性を与えるコンテキストの解明も必要になる。後者については序論的な考察をすでに行っているため（樋口 2011a）、前者について考察するのが筆者の次の課題となる。

## 1 1 ノンポリ転じて活動家になったK氏の場合

### (1) 政治に対する関心

ノンポリとか言われる感じですかね。まったく関心がなかったの。まったく（左右）どちらでもなかったですね。昔からアジアに対して日本はひどいことをしたって聞いてますし、社会人になってから従軍慰安婦問題も聞いてますけど、その時も「そんなのいちいち問題にすべきじゃないよ」というくらいで。当時は外国人問題にもまったく興味がなかったですね。思うのは、無関心の時よりも関心持ったほうがよかったです。政治問題に大きく関心を持ったことがありますし、政治問題は国内問題で自分にふりかかってくると思います。だから、何も知らなくて気がついたらこんなことされてたとか、こんな法律ができてたというよりは、関心を持っていたんで自分では納得がいけない決め事ができる、法律ができというときに反対できるというのがあります。

新聞自体は読んでないんですけど——新聞とってないんですよ——ネットで見るニュースくらいですね。各新聞社が出しているのがありますから、それを見る。（新聞は）昔はとってましたね。一般紙といわれる朝日新聞とか読売新聞とかだとかかなり前にはとってたんですけど、その時、親がスポーツ新聞だけになったんですよ。スポーツ新聞はしばらくとってたんですけど、父親が死んだんで——もともとスポーツ新聞は父親がとってたんでそれ以降は新聞をとらなくなったというのがあります。

今は（政治に関心を）持っているほうです。昔まったく興味なかったんですけど、やはりこの問題に興味を持ち出してから政治にも興味を持ったという感じですね。（選挙には）行ってないんですよ。まったく興味がなかったんで。今もう興味を持ってる方なんで、今から考えると後悔してますね。（20代の頃は）全然行ってないんです。だから今になって後悔している。本当にまったく興味がなかったんですよ。選挙そのものにも興味を持たなくて、選挙自体がそんなに重要とかまったく考えてなかったんです、当時は。（政治の話をするこも）まったくなかったですね。自分の知り合いとか友達も政治の話をする人はまじいなかったんで。

（政治に関心を持つようになったのは）よく覚えてるのが、上海で大規模な反日デモがあったとき、あの時に調べ始めてちょっとおかしいなと感じ出して、調べているうちに選挙の重要性を知ったということです。いや、ちょっと勘違いしていたかもしれません。2002年がワールドカップで、結構興味を持ったという人も多かったんで勘違いしたが、その後のデモです。2004年ですかね、その辺の大規模なデモですね。それからです。その前は、多分（選挙に）行ってないですね。その辺から興味を持って調べ始めて、選挙がいかに重要かというのをようやく知ったんですね。（それから）欠かさず行くようにしました。

（投票先は）基本的には自民党に入れてる形ですね。でも自民党も100%頭から信用しているわけではないので、その時になって調べてこの人に入れたくないと思ったら、別の候補者を探す。そういう感じですね。ですから投票する前には候補者を調べて、自分の考えが一番近い候補者に入れるようにしています。

### (2) 外国人との接点

いったん専門学校行ったんですけど、中退して就職したという形です。（学校や職場での

接点は) まったくないです。(知り合いに外国人が) いるにはいたんですけど、当時は気がつかなくて後で気がついたというのがありますね。例えば在日韓国人の方とかは普通に日本名を名乗ってたんで、付き合ってもまったくわからなかったんでしょうね。後になってあの人は実は韓国人だったって知るケースがありましたね。ですから外国人の方と親密に付き合うことはなかったです。

ただ、地元に住んでれば韓国人というか朝鮮人の評判の悪さは子どもの頃から聞かされているんで、その話だけは昔から聞いてますね。××のほうに朝鮮部落があったりして、△△の方にもあったそうです。実際に朝鮮人に何をされたとか、そういうのはないんですけど、子どもの頃から知り合いには「××には朝鮮人がいて危険だから行くな」とか、そういう話はたびたび聞かされていました。ただ、弟が一度被害にあったそうです。いきなり囲まれて殴られたり、そういうことはあったらしいです。

### (3) 「外国人問題」に関心を持つきっかけ

先ほど言いましたように、上海の大規模なデモですね。あのデモで昔から日本は中国や朝鮮に対してひどいことをしてきたんで、嫌われているって話ずっと聞いてたんですよ。当時の僕としては、当時戦争時代だったんでそんなの別に当たり前のことじゃないか、その程度しか考えてなかったんですよ。でも、あれだけの大規模なデモが始まったんで、当時の日本はどれだけひどいことをしたんだろうと思って、調べ始めたんですよ。ところがほとんどそういう事実はなかったというのがわかって、今に行き着いた、たどりついたんですよ。

(拉致については) 見て関心は持ってはいました。当時の拉致問題に関しては。ただ、それにおいて朝鮮人批判をするとか、当時はまったく気にもしなかったですね。拉致した北朝鮮に対してはやはり、多少なりとも腹を立てたというのにはありましたけど。

(W杯については) そういう話も聞きますね。当時僕は、もともとサッカーが好きではないんで、日韓ワールドカップもほとんど見てないんですが、当時やはり韓国のひどさは多少なりとも聞いてはいるんで、サッカーファンはそれで興味を持ったという方が多いみたいですね。そういう話は聞きます。(自分は) その時はまったく気にはしなかったです。

ネットで調べて、当時日本がアジア諸国に対してひどいことした、と書いてあるのがありましたし、その反証としてそんなことはあり得なかったという感じで。そういうのを見ていて、おかしいんじゃないかなと思ってきたんですよ。

調べていくうちに、当時は中国人より朝鮮人の方が身近なんで、そちらのほうが多く出てきたものですから、そちらをより多く調べるようになったということですね。より身近な問題として、やはり在日韓国人・朝鮮人という問題が大きいと思うんです。朝鮮半島中国本国の人間については、間接的に問題になってくると思ってます。直接的な被害は、在日の韓国人・朝鮮人、または中国人がいますので、そっち側のほうがより大きいのはあるのですが、国と国同士の付き合いになってしまいますので、本国にいる人たちはですね。そうなると、個人の問題とはなりにくいのですが、間接的に個人にふりかかってくる問題ではないかと僕は考えています。

(関心が強いのは) 身近に感じている在日の方ですね。そちらの方がより大きな問題かなと僕は思いますので。直接的に身近な問題になりますので。どちらが大きく関心を持つ

かといえば、在日の方になりますね。もちろん中国に関心はあったんですけど、在日と外とを分けてなかったと思うんですが、それで在特会に入って、より在日の方に関心を持つようになってきた。

#### (4) 在特会との邂逅

(ネットは) 僕は元々パソコンを趣味としていて、かなり早い段階で使っていましたね。確かいつごろだったかな、95年ぐらいに初めてインターネットにつないでましたね——それ以前はパソコン通信でやっていたんで。会社にも入ってましたし、当たり前のように使っていました。当時は在特会なかったですね。

興味を持って調べているうちに、今の桜井会長ですね——Doronpa のサイトを見つけて、そのブログとか見てるうちに在特会を設立しますという話をして、入ってみようかなという感じでしたね。あちこちそういう情報を探してるうちに、桜井さんのサイトにたどりついて定期的にみるようになったという感じですね。僕は番号が 1000 番台なんで、設立して3ヵ月後くらいですね。最初はすぐ入ろうかなと考えたんですけど、ちょっと考えて、でもやっぱ入ろうかなという感じで3ヵ月後くらいに入ったんです。

設立したってのは知ってたんですけど、入ろうかどうしようかって考えて。先ほど言ったように弟が被害にあったという件もあって、家族に被害が及んだりしないかなとちょっと考えたんですよ。地元では朝鮮人に対するイメージってあまりよくないんですね。何かあると集団でやってくるとかですね、そういう話よく聞くんで。考えたんですけど、入っとくべきかなということで入りました。

(在特会のことを) 友達に話したことはありますね。その当時、友達はサッカーファンだったんで、僕よりも先に朝鮮問題というのは知ってたと思います。その友達と話をしていた、こういうのができたよ、入ろうかという話をしたことはありますね。(一緒に) 入ったと思います。その後、話をしたので、もしかしたらやめたのかもしれない。(友人は) 住んでいるところは遠隔なんですよ。ネットでチャットで話をしたんですね。99年から2000年にかけて1年半転勤になっていたんで、その時に知り合った友達ですよ。最近会ってないですけど、しばらく定期的に会っていた人です。雑談の中で出てきたんで、「こういうのがあって、入ろうか」と話をしていました。

(入会まで) 書き込みはしなかったですね。調べるだけ。当時僕はまったくそういう情報知らなかったの。知識を身につけるといえるか、読んでいだけという感じ。当時は入っただけで満足みたいな感じだったんですけど、入っただけでは意味がないなということで、ちょっとしてから——2、3ヶ月後だったと思いますけど、地元でイベントがあるということで桜井会長が来られて講義をやるというので、「入っただけで何もしないものなんだから」行ってみようかなと行って、そこで話を聞いたんですよ。

交流会といったほうがいいですね。桜井会長の話とゲストによべれたつくる会の方がこらえて、その方の実体験をもとに。炭鉱で働いていて戦時中に朝鮮人が働いた記録を出して、別に強制連行で来たんじゃないとか過酷な労働を強いられたんじゃないとか、そういう話をされてました。初めて出たときは知らないことばかりで、当時の記録とか資料とか見せられたんで、なるほどなという。知らないことを知ったという感じですね。よかったなと思ったんです。

(その手のイベントに出たのは) 初めてです。(出るのは) 多少抵抗ありましたね。あまりそういうのは好きじゃないタイプなんで。やはりこの問題を調べるわけで、何とかしようとして在特会に入ったものの、入っただけで何もしないのは意味がないなと思ったんで。仮にそれで情報発信するにしても、1人でやるよりも組織のほうでやった方が効率というか説得力があるだろうなという考えがありました。

やはり在日問題とかでは実態としてはそんなに在日朝鮮人韓国人に被害を受けてるという感覚はもろんなかったですけど、調べているうちに知らないところでいろいろあって、最終的には自分に降りかかってくるようなそんな感じのものがあるなという思いがしてきたんですね。そういうことで、在日問題を取り扱うということなんで、入ったほうがいいかなという感じですね。最終的には家族に危害が及ぶんじゃないかとちょっと考えたんですけど、大丈夫じゃないかなという感じがしてきたんで。それも入るきっかけにはなりました。

#### (5) 運営側へ

5月か6月かそのへんだったと思いますけど。在特会入ってイベントをやるっていうんで、ちょっと行ってみようかなと言うことで。その時は支部のほうで何度か勉強会だの情報共有とかそういうのをやって、ちょくちょく顔を出して。そうしたら当時の支部長が、運営に入ってくれないかという話をして、こういう活動もいいかなと思って運営として入ったんですよ。それが確か秋から冬にかけてだったと思います。入会して1年たたずにですね。街宣とかその当時はまったく考えなかったですから。運営になって半年近く後ですね、街宣始まったのは。

(街宣には) 結構抵抗ありました。人前に立つのは好きではなかったの。その時は僕はマイクを持たずに、動画の撮影だけやったんですよ。だから多少抵抗はあったものの、そこまで抵抗はなかったという。基本的には撮影やってるので、あまりマイクは持たないですね。ただ一時期人手不足でマイク持ってたんで、多少は慣れました。本当はやりたくないんですよ。やりたくないんですけど、ほっとくわけにはいかないという感じで。

(時間的には) 僕はプログラマーですけど、会社としてはソフトハウスじゃないんですよ。だからそこまで過酷じゃないんですよ。だから割と暇は多いです。(休日は) 大体休みます。ですから特に無理して行ってるというわけではないです。面倒くさいけど、という感じですね。ただ、大体休みの日ってのは時間があるんで。やるとしたら家の用事で出かきなきゃいけないという感じなんで、重要な用事があるときはいかないんですね。僕らも参加するときにはみんな話しますが、まず自分の生活を先に守ろうということですね。生活に影響があるのであれば、出ないほうが良い、そういう感じでやっています。

#### (6) 活動を続ける動機

(得られたものは) 多分あんまりないんじゃないんですかね。せいぜい知り合いが増えたという程度じゃないかな。あとは、やって多少なりとも自分の活動成果が出たんじゃないかなと思えることがいくつかあるんで、そういう時はやった甲斐があったなという気はします。外国人参政権についても反対の声を各地で上げてたんで、簡単には国会に提出できなくなったということとか、人権擁護法案についても出す寸前とかいわれてたんです

が、国会に出さずに済んだ。僕らの活動が本当に影響があったかわからないんですけど、国会には出されなかったというところで、活動した甲斐があったんじゃないかなと考えています。

(活動は) 正直あまり楽しくないですよ。もし楽しい部分があるとするならば、活動終わった後、みんなと食事しながら話をするってぐらいですかね。僕の性格からすると根をつめると嫌になってくるんで、根をつめないでいいや、という感じですかね。情報は仕入れられるんですけど、そんなに深刻に考えることはしていない。

(活動を続けるのは) 実態をいろいろ知ってしまった。一番僕が腹が立っているのは、年金の問題と生活保護の問題があります。日本人に対してはまったく出さないくせに、外国人には生活保護が結構簡単に出てしまっている問題ですね。年金もそうですね、日本人は 25 年間掛金払わないと出ないのに、外国人、きわめつけは朝鮮人に対しては掛金 1 円も払っていないのにかわいそうだからといって、年金の代わりに月額いくら払っているとか。そういう問題を知ってしまったためにですね、自分の将来にも関わる問題なのでほっとけないなという感じはしています。やはり日本人に対して問題があると思われることがあれば、在日韓国人・朝鮮人に限らず活動とかすることはあります。

#### (7) 関心のある 이슈

最近で言えば TPP 問題とかですね。あれに反対でやったりしました。僕らが考えているのは、やはり産業が——農業がダメになるという問題ではなくて、食糧問題とかライフラインですよ。生命線をとられ食糧問題を外国に握られてしまうと、全般にわたって不利益が生じるという可能性を考えているんですよ。ですから、TPP に関しては参加すべきではないという考え方ですね。大もとのきっかけは中国問題なんですけど、そこから在日問題に移ってきて、在特会で活動してるうちに日本全体の不利益になるような問題は関心を持っていこうという感じになっていますね。在特会の大きな目標というのは、入管特例法を改正して特別永住資格をなくしていこうというのが設立当時からあって変わらないです。でも、保守活動をやっている以上、日本の国に対して不利益になる問題は関心を持って反対すべきは反対していきたいという感じですね。

(外国人参政権については) いつ頃か覚えてないんですけど、結構早い段階でネットで話題になったという感じですね。僕も反対の立場なんで、そういう問題が起こるたびに反対運動とかはよくやりました。在特会に入って以降の早い段階という感じですかね。少なくとも民主政権になる前はデモやって街宣やった記憶があるんで、もうちょっと早いですがね。

国内問題で、国内に関するのを他国からきた外国人に決めさせるのはおかしいんじゃないかという感じですね。そもそも外国人に関しては自分の所属する国で政治に参加する仕方、当然持ってるじゃないですか。その上に日本国内の問題に口を出す権利を有するのは、やはりおかしいんじゃないか。もし外国人参政権が成立したとして、A 国の人間と日本の国益が反した場合、参政権を行使するのはおかしいんじゃないか。この問題は大きく取り出されてしばらく下火になって、また大きく取り出されて、山積みになっている感じなんで。要するに国会に上程されようという話が出るたびに、反対活動をしています。成立してしまうと自分の生活が危うくなると感じてますので、高い関心を持ってやっ

ます。自分の生活に直結すると考えてますので、優先度としては歴史問題よりも大きく関心持っている感じですね。

(年金問題は) いずれ消える可能性がないとはいえないんですけど、放置しておくとも拡大される可能性があるんですよ。たとえば川崎市ですね。最初は1万円ぐらい支給していたのが今は2万いくら…増えてるんですよ。そうすると拡大する恐れがある。となると、消えずにずっと残ってしまうんじゃないか。何よりも、やはり僕らは掛金払わないともらえないのに、彼らは一銭も払ってないのにもらってる。僕らがやってるのは街宣ぐらいなんですけど、桜井会長がこられた時に市役所のほうに担当者に抗議したことがあります。向こうはやはり悪いとは考えてないみたいでして。でも明らかに日本人には存在しない制度ですから、やめてほしいと考えてますね。

そもそも、現在の入管法では生活ができない外国人は生活できない外国人は日本に存在してはならないとなってるんですよ。そうなっているにもかかわらず、日本で生活できない外国人がいるのはなんでだ。何よりも、外国人が生活困ってるんだから、あの人たちが所属している国は何やってるんだ。国に助けてもらえよ、そんな感じですね。

(領土問題の優先順位は) 下がるといえば下がるようになってしましますが、重要な問題には変わらないですね。領土問題に関しては、韓国との間に竹島問題がありますけど、僕個人については生活に直結する問題ではありませんが、現地の人たちにとっては生活に直結する問題ではありますので。自分個人についてはそうでもありませんけど、日本人としては重要な問題ではないかな。

(関心が) 朝鮮人になっているのは確かですね。在特会の影響が大きいとおもいます。在特会に入って、本来在日韓国人・朝鮮人を扱う会なんで、それによって活動の中心がそっちに移ってきているんですね。そっち側が大きくシフトしたのは間違いないです。(中国に対する関心は) 相対的には若干下がっていると思います。中国に関しても尖閣問題とかああいうのがでできますので、日本に不利益があるような問題は、結構大きく、無視はしてないということです。

## (8) 結語に代えて

K氏は、中国における反日デモに関心を持ったのがきっかけだったが、在特会に入ってからもっとも関心を持ったのは、「年金問題」など「身近な問題」だった。「風吹けば…」ではないが、近隣諸国との摩擦をきっかけとしてインターネットで検索を掛けると、それがいつしか「年金問題許すまじ」と変換されてしまう。

排外主義運動の関係者は、自民党の支持基盤となる組織に組み込まれているとはいえないが、基本的には保守支持層であった(樋口 2012x)。それに対してK氏は、選挙にまったく行かなかったというくらい政治とは無縁な生活を送っていたが、反日デモをきっかけとして政治にまで目覚めてしまうことになる。

インタビューから垣間見えるのは、実家から通って仕事を無難にこなし、友達もいないわけではないがそれほど積極的に何かに挑戦するタイプではないインドア派のサラリーマンの姿である。そうした生活スタイルは変えないものの、月に何回かは在特会に関わるようになっていく。最悪の形ではあるが、積極的に政治参加するようになったK氏のような存在は、もともとのイデオロギーからすれば排外主義に取り込まれる必然性は必ずしもな

かった。ネットに頼らざるを得ない新興の組織だからこそ、ある種のネットユーザーをひきつけなければ存続はおぼつかない。だが、K氏を他の活動に誘うようなインターネットの「魅力的」なコンテンツはそれほど発達しているとはいえない。橋下徹・大阪市長のTwitterを通じた発信が影響力を持つ一方で、既成政治勢力も、左派市民運動も、K氏のような層を取り込むことに失敗してきた。K氏のような政治的無関心層の一部も、橋下の発信に意味を見出したという推測は可能である。インターネットを介した政治的組織化の方法を真剣に考えない限り、インターネットは極右にとっての草刈場となり続けるだろう。



## 12 在特会が多くの人に勇気を与えたというL氏の場合

### (1) 政治に対する関心

なかったですね。まったくと言っていいぐらいなかったですね。(選挙には)あんまり行かなかったですね。暇つぶしに「投票ってどんなのかな」ぐらいの感覚で、暇つぶしがてらに行ったことがあるくらいですね。(行かないことの方が)多かったですね。仕事があったりとか、友達と遊ぶとかあったら、それを優先させて。投票なんて、優先順位でいうと何もすることがない時くらいしか行かなかったですね。今も、行かないこともたまにはありますけど、日頃、投票に行くべきと言う建前もありますんで、一応行くようにしています。(変化したのは)この運動してからですね。政治のことを言っておきながら、自分が無関心で投票も行かないとしたら、具合悪いと思いますしね。2年くらい前からですね。

(投票先は)支持政党——それが難しいとこなんですけどね、維新政党・新風が今のところ一番の支持政党です。まあ、ぶっちゃけ言いますと、自民党は支持していないんですけど、自民党に入れることが多いです。もう消去法ですね、これは。どれがマシかという基準で、悪いのから消して最後に残ったのに入れる。それで自民党に入れることが多いですね。昔からそうですね。選挙に行けば自民党に入れてました。昔から、自民党が何か言ったら野党は反対するだけ、そういうイメージしか政治に僕の理解がなかったの。

### (2) 外国人との接点

クラスメートに朝鮮人が何人か、ぱらぱらいるくらいですね。まあ、名前でわかる子が多かったんで。(付き合いは)まったくないです。(それ以降も接点は)全然ないですね。僕自身に関心がなかったですね。僕自身の経験じゃないですけど、朝鮮人にお金払ってもらえないという話は、しばしば耳にすることはありましたから。自分は朝鮮人と仕事する時には、ちょっとその辺の、金のことには…幸い、僕が被害を受けたことはありません。僕も、こんなに朝鮮人にひどい目に合わされたという人に、一度でも会えばよかったんですが、なかったんですよ。

### (3) 在特会に連なる関心

(以前から)ありました。大きいところでいくと、高校生くらいから始まりますね。いわゆる、僕ら自虐史観と言いますが、自虐史観に対して僕自身、懐疑的な考え方を持っていました。例えば、歴史教育で日本は侵略したと、その辺(の時代)は僕もずっと好きだったんで、「そんなわけないだろ」ってわかっていたんですよ。僕自身、ちょっと興味があったので、戦争の本とかあったんですよ。純粋に日本がアメリカ相手に侵略なんか企てるはずがないと。

ちょっと専門的なことになりますけど、アメリカを占領しようと思ったら、地上軍上陸させて、首都陥落作戦を取らないきゃいけないんです。日中戦争でも、隣の大陸でもあれだけ軍隊を送ったら、点と線で補給路が確保できずに泥沼に入っているのに、アメリカなんて太平洋に補給路確保して地上部隊の上陸なんてできるはずがない。ということ、軍事的なことをやってましたんで、アメリカに侵略戦争を仕掛けたというのが、「そんなわけないだろ」ってわかっていたんで。別にだからといって、授業中、先生に歯向かうとかそんな

なのは全然なかったですよ。まあ、子どもだまされたという感じで見てましたね。

神風特攻隊も——あれが、いやいや行かされて、母親とかプライベートなこと・・・とお涙頂戴的に語るのも（違和感があった）。僕は読んでましたんで・・・日本人は死ぬことに美意識持ってる民族性だから、これはありえると。我が子を助けるために自分の身を犠牲にして、我が子を助けるという美談が、日本にはありますからね。戦争ということに関して若干専門的な勉強したということで、中学生高校生が学校で教わるような薄っぺらい、あんなのは出鱈目というのは思っていましたね。だからとって思想的に、ということは全然なかったですよ。（新しい歴史教科書のときは）あの時はそれほど関心なかったですね。それほどは。

（歴史認識は）根底の部分では（在特会に）つながっているのかもしれませんがね。ことさらに自分達の国を貶める方向に持っていかれて、気分が悪いなというのは、根底でつながっているのかもしれませんがね。（それ以外には）全然ないですね。

10年位前ですかね、（自分の）サイトが10年位前に開設してますので、一応、その時にはある程度愛国的な——愛国的なホームページではあるんですけど。最初は遊びで作ったサイトで、今でいうブログみたいなものですね。何か事件とかニュースがあったら、僕が愛国的な考え方から「これはこうだ」とか感じることを述べるみたいな感じで。

でもね、僕、面倒臭がり屋でちょろちょろとやって、飽きたら3年4年書かなくなったりとかあるんですけど、一応続いています。作ることになったきっかけが、小淵恵三が総理だった時に、北朝鮮に米を支援すると言ったんです。拉致被害者が、拉致問題の進展なしに米の支援やめてくれとずっとお願いしながら、小淵が踏み切ったんです、米の支援に。その時に、僕も何かそういうことに力を貸したいなと思って、それでそのサイトを設立して。（拉致問題に対する関心は）途中からですけどね、昔からではないですけど。（小泉訪朝以前の）10年位前には関心がありましたね。同胞がさらわれたっていう信じがたい事件があって・・・。普通に義務教育卒業した程度のあれがあれば、北朝鮮がやってるに決まってるだろうって思っていました。

#### （4）在特会との邂逅

（外国人問題に対する関心を持ったきっかけ）桜井会長の動画を Youtube で見てからですね。あれは多分、3年ぐらい（前）になると思いますけど。インターネットやってみましたんで、その時に何かの暇つぶしかなにかで、時間つぶしで巡回いうんですかね、ネットで暇つぶしで検索とかしてると・・・。何かのはずみに Youtube の動画サイトで、桜井会長の動画をたまたま見てしましまして、面白い人がいると。その関連動画、他にも検索して行って影響されてますね。一番最初見たのは、外国人地方参政権ですかね。3年前の春くらいですかね。朝鮮人が地方参政権よこせてデモを何千人かやっている中で、会長が30人くらいで抗議する動画でした。そこで桜井会長が、「ゴミはゴミ箱に、朝鮮人は朝鮮半島に」と叫んでましたね。なかなか・・・公衆の面前で面白いこという人だなと思って。（関連動画を）どんどん見て行って、それから在特会の存在を知って、在特会のホームページに行って、決起集会とかなんかがあったので、それを見て。ああ、なるほどなるほど、言っていること間違えてないだろうって。

（動画を見たのは）全然偶然でした。普通に（Youtube を）見てて。どうして行ったん

でしょうね……。今となつてははつきり覚えてませんが、どっか見て「こんなへんな奴がいる」って感じでリンクを貼ったのをたまたまクリックしたとか、そんなんでしょうね。暇つぶしにパソコンでネットをやれば、何かのはずみに見つけたって感じですね。ネットは10年ぐらいやっていますね。(使っているのは) 趣味です。

(その後は) 何もしなかったんですけどね。それで、3年前の12月に桜井会長が地元に来るって告知があったんですよ。それで地元だったら自分も参加できるって。それに参加させてもらったのが一番最初ですね。(参加したのは) 自分の家の近所でありましたんで。

(政治活動の経験は) 全然ないですね。(ハードルは) 感じなかったですね。その時は。桜井会長が好きだったんで、桜井会長の実物に会えるってことならば。(入会時も躊躇は) 全然ありませんでしたね。何するか、僕もそんなに何も知らずに行きましたけど、街宣とかいろいろやりましたね。(参加して) 楽しい思い(が) できましたね。初めての経験だったんで。そういう運動をこれまでやってきてる人間と初めて話もして、「ああなるほど」と思いながら。で、僕もこれから協力していこうかなという気になって。

(12月の次に参加したのは) 元旦ですね。護国神社で昇殿参拝と、河野談話の白紙撤回の署名活動するってメールが来ましたんで。僕自身も護国神社、元旦なんて行きたいなというのあって、ついでだし——ついでという申し訳ないけど、僕も行きたいと思ってましたんで。それまで近所の神社の初詣はありましたが、護国神社というのはなかったですね。

(定期的に参加するようになったのは) 元旦行って、春のゴールデンウィークくらいからですね。外国人地方参政権のデモなんですけど、その時は在特会が全国でデモするって……だったんですね。そこでちょっとAさんと話して、話の流れから6月13日に地方参政権反対のデモする、という連絡が来まして。それなら参加しますと。その時に内々で、運営に参加しないかと話をふられてましてね、「運営、構いませんよ」と返事してたんですよ。

(実際に入ってみてのギャップ) は一番最初に感じましたね。やっぱり僕とか、右翼のイメージがありましたんで。ちょっとこうね、黒い車乗って大騒ぎするような怖い方々が多いんじゃないかなというイメージは持ってましたけど。それもね、全然違うんだなって。

(これまで) 仕事とか何かで、右翼の人間は何人かいましたけどね、知り合いに。本当の愛国的な、そんなんじゃないしに、チンピラの右翼はね。だから、僕の中では右翼ってヤクザと一緒に、ぐらいな。仕事でたまに来るんですよ、右翼が。資料購入してくれとか、ああいうイメージ。話聞いたら3万円くらいで薄っぺらい本かなにか知らないけど、せいぜい500円か1000円でできるような冊子を、3万円くらいで置いていって。昔は近隣対策とかいう名目で出していたみたいですね。今はもうそんなの出ないですけどね、僕の知る限りでは。僕も断ってますけどね。

今、ヤクザが——ヤクザが来て、頭を下げて「何とかこっちの顔もあるし、どうにかなりませんかね」って頭下げる。ヤクザが頭下げて、それでもこっちが「何とか応えたいんですが、こっちも予算ぎりぎり、出せないわ」。ヤクザが「そうですか」と帰っていきまからね。昔だったら、そうになったらすぐベンツを持って来て車汚れたとか、そういったイメージがあるけど、今はヤクザが頭下げて「ちょっとでも出してくれないか」と言って、無理と言うと何も言いませんよ。ヤクザは法律でがんじがらめですからね。ヤクザもカタ

ギを襲ったら取り締まるべきでしょうけど、外国系のマフィアとかあんなのが暴れた時に、国内のヤクザをあまり押さえつけたら…とったりはしますけどね。

(ネットでの活動は) 基本的には継続しましたが、ちょっと減っていきましたね。激しく活動しましたんでね。本当に、月に10日くらいなんやかんやで——準備とかもありませんんでね。本当、何回もやりましたね。仕事ができなくなりましたんでね。だから、収入が減りましたんでね。それまで割と自由に使いたい放題だった小遣いが減りましたね。だから余計な趣味とかはどんどんやめていってますね。活動で手間隙とられますんでね。それでもいいと思ってやっていますね。それだけ国が大変な時なんで、自分の生活守って国が減ったら元も子もないんでね。そう思ってやっていますね。

### (5) 運動の動機と手応え

(そこまで活動したのはどうしてか) しないとしょうがないな、と勝手に思いましたね。(活動は) 面倒ですよ。デモとか面倒です。(動機は) まあ、愛国心としかいいようがないですね。国が大変だと思ったら、日本が好きなのでできるだけのことをしたい、日本のためにしたいと思って。自己犠牲であるとか、公共の利益のために自己を犠牲にするとか、そういうボランティア精神ですね。(愛国心という自覚は) あります、実は。昔からではないですけど、この運動始めてからですね。

自慢する気は全然ないんですけど、僕らがあれだけやったから——伸びていく時期に入っていたんでなしに、僕らをやったから伸びたってことですよね。自慢でも何でもないんですけど。あれ(動画)で多くの人が見てくれて。で、一気に伸びていったと思います。あれで世間に——多くの日本人に勇気を与えることができましたし、日本人の——ちょっとこうね、目覚めるためのきっかけの1個は与えたんじゃないかなと。

人間がどんどんどんどん増えて、これだけ大きくなりましたんで。僕がやり始めた頃なんか、僕らがいなかったらこの活動が終わってしまう可能性がありましたけど、今でしたら僕らに仮に何かあっても活動は誰かが引き継いで、どんどん継続されて…。

(活動の) 手応えはあります。まあ、朝鮮学校の無償化の時も朝鮮人が役所に行って大勢で押しかけて座り込みとか、そんなのもできなかったのは僕らがいるからだと思いますね。それまで街中で「ほらチョンコ、出て来いや」とか言ったら、朝鮮人が大勢で襲ってきて怖い目にあうという都市伝説がまわって来てますけど、散々僕らやって全然平気だと。そういった、それまで当たり前だった思われてきた価値観も、そうじゃないんだなって思われるとか。で、僕ら一般市民が日の丸もってデモするのもおかしくないって、10年位前にその辺の主婦とかが集まって日の丸持ってデモするなんか、まず考えられなかったことが。それが頻繁に、いろんな団体が日の丸持ってデモやっていますんで。

パフォーマンスも含めて世間でいう過激なという表現…やりましたんでね。動画配信しますので、多くの人に動画を見てもらおうと思ったら、駅前でマイクでしゃべってるだけでは誰も見てくれない。そういうのがあって、僕らの活動知ってもらおうとなったら、まずは動画を、政治に無関心な人間に人間を見てもらうことから、ちょっと危ないところに行ったら「チョンコ出て来い」とかインパクトがあって、過激なパフォーマンスを。

### (6) 外国人参政権について

(外国人参政権について知ったのは) この活動やってからですね。(それ以前は) 関心なかったですね。(あることも) 知りませんでしたね。関連動画で見ていくうちに、なぜ地方参政権に反対かという意見を聞きましたんで。それをそのまま受け売りになりますけど、こんなもの絶対に認めたらいかんなどと思って。それで反対になりましたね。52万(票)くらいですからね、数が多いですからね。その52万票がどれだけの——本当に悪意を持ってそれを悪用すれば、52万票でどれだけのことができるかっていうリスクを考えると、日本を滅ぼすことができるくらいの危険性があると。

あのね、はっきり言います。実は(外国人参政権は) 重要に思ってません。外国人地方参政権を与えて、本当に朝鮮人が日本を乗っ取ろうと頑張っても、20年30年かかると思っていますね。地方参政権もらって、次は被選挙権、立候補させると。次は国政参政権を与えると、どんどん獲得して行って、いつか韓国籍のままの国会議員を50人100人送り込んで、自分達の法案を通して日本を操れるというところに持っていかうと思っても、20年30年。

もちろん、誤解してもらいたくないんですけど、20年30年、長い年月かけたらつづれますよ。だから反対しますが、差し迫った危険性というのと、即効性の猛毒ではないと思います。それよりは、目の前にこの国を滅ぼしかねないような危険なものももっとあると。

(例えば) シナの国防動員法、人口侵略ですね、シナ人の。日本が仮に滅びるとすれば、シナ人ですよ。朝鮮人に滅ぼされることは、まずないでしょうけど。

とりあえず在特会に入りましたんで、地方参政権に限らず在日特権すべてに反対しますので、そういう意味では在日特権の1個として(地方参政権に) 反対する。僕の中では生活保護とかあんなのと同程度くらいですね。より大きな問題は、シナの武力侵攻を含めた覇権ですよ。僕も大した力がないので、在特会として——考え方はいろいろあると思うんですけど、朝鮮人というのはシナ人の先兵くらいにしか思ってないので、朝鮮人と戦えないのにシナ人と戦えるわけないだろ、と。だから今は、シナ人のことを基本的には余力があったら取り組むけど、メインは朝鮮の問題でと考えてる。

(中国に対する関心は) まあ、オリンピックのあの辺ぐらいからでしょうね。わけのわからん国があると。チベットやウイグル、東トルキスタン、ああいうとこで残虐なことやってる連中が、いよいよ日本を視野に入れ始めて動き始めたってことですね。チベットのことはね、もっと早い時から僕も知ってましたんで——『ゴーマニズム宣言』読んでましたんで。『ゴーマニズム宣言』自体は昔から読んでましたけどね。活動の前から。初めは漫画という感覚で、娯楽の一環で読んでましたね。

さしあたって(関心があるの) は日本にいる在日ですね。さしあたっては。本国の方も、もちろんとんでもないですけど。反日で謝罪賠償でお金がほしいと言ってくるし、竹島の不法占拠も拉致問題もあるし。(在日外国人に対する反感は) 昔はなかったですけどね。今は勉強して、来歴とか習慣、文化、民族性、そういうのを知ってますので、一日も早く日本から追い出したいなと思ってますけどね。

## (7) 小括

L氏は、在特会のなかでもっとも過激な部類に属するといえる。ヘイト・スピーチが一種のタブー破りであり、それにより勇気を与えたとまでいうのは、在特会のメンバーからみ

でも常軌を逸しているというところはあるだろう。ただし、彼は言葉だけでなく実際に仕事に支障を来たすほど活動にのめりこみ、活動が生活を変えてしまったという点で、Blee (2002) が調査した女性の白人至上主義活動家を想起させる。そこでは生活にも困窮する活動家が登場するが、それは活動の原因ではなく結果であり、活動したから職も友人も失っていくというキャリア・パスを歩んできた。

在特会は、公安警察の監視下にあるだけでなく、明らかに狙い撃ちされて逮捕されている。こうした統制は、在特会の活動力の低下に一方で結びついたのは間違いない。だが、統制はそれを恐れぬ活動家にはあまり効果的ではなく、かえって過激化をもたらす可能性もある。現実には、逮捕経験者が再逮捕されるような事件も起きており、今後は統制と過激化という観点からの分析も必要になるだろう。

### 13 大学生時代から『正論』を読んでいたM氏の場合

#### (1) 政治に対する関心、イデオロギー志向

(政治に対する関心はありましたか) はい。小学校高学年、中学生にかけてくらいですかね。よく図書館に通ってたんですよ。で、とにかく本を読むのが好きで、歴史の本——当然難しい本は読めないんですけど、ありきたりのところでいうと小林よしのりの漫画とか。とにかくいろんな本を読んでたから、そこに引っかかったのが小林よしのりだったんですけど。その当時はインターネットとかあまりなかったんで。でも、関心というほどじゃないね、ただ本を読んでたということですね。

雑誌もありますよね、『正論』とか、そういうのも読んでました。大学生の間だけだったと思います、購読してたのは。あとは目にとまった時にちょこちょこ。学校…バイトめちゃくちゃやってたんで、本を読む時間というのは、移動時間だけですね。移動時間といっても、片道2時間かけてたんで。電車下りてバス乗って、バスまた乗り継いでっていうんで。だから、とにかく読むものがほしいんですよ。

北朝鮮の問題…ちょうど大学(生)の時に拉致被害者が一部帰ってこない…。全部が全部ってわけじゃないんですけど、そういうことを議論する友達、先輩もいましたよ。あと先生も。ゼミが中心ですね。(専門は)英文学です。その頃はあるインターネットも使ってなかったし。今みたいに活発に在特会みたいなサイトもなかったんじゃないかな、と思うんですよ。見てないから記憶してないんですけど。とにかく、地元から大学に通ってたんで、本を読む時間というのは結構あったんですよ。暇つぶしも兼ねてですね。他の子だったらファッション誌とか見るのかもしれないんですけど。(どうして正論を知ったのか) 拉致被害者が帰って来たという見出しに惹かれたのかもしれないです。

で、在日特権を許さない市民の会に入ってるんですけど、歴史の問題とかには興味持って問題も感じてたんですけど、でも在日問題ってあまり知らなかったんですよ、実は。薄々気づいてたのかもしれないんですけど、そこにあまり着目してなかったんですけど、やっぱり歴史の問題ですよ。ただその、在日韓国人が書いたような本も読んでましたし。小説家でもありますよね、在日の作家とか。

やっぱりインターネットが使えるようになって、何かしらの違和感はそれまで感じてたんですよ。マスコミとか、学校教育であるとか。学校で戦争の、そういう特別な授業があるじゃないですか。とにかく日本人は悪いことをした、しかも作文書かされたり。福沢諭吉は悪い人だとか、そういうどこの学校でも多分そうだったと思いますけど。人権教育とかそういうのはありましたし。そういう冊子とか、そういう本は必ず学校にありますし。

(選挙には) 毎回行ってます。必ず行ってます。どうして(選挙に行くのか) とか考えたこともないかもしれない。親が絶対行けっていうんですけど。大体地元が自民一色なんですよ。それで、親の付き合いとかでだいたい言うんですけど。大体、他に入られるところないですよ。他に選択肢がないというか。共産と2人とか、そういうことが結構あったり。民主党は、あんまりないです、自分の地元では。

支持政党…それ難しいですよ。ここはダメ、ここはダメというのしかないから。政党という大きなくくりで言っても、結局その中の人を見ないと。でも、消極的な選択で自民党になるのかもしれないですね。まあ、他の有望な政党がもっと力をつけてきてというの

であれば、また考えるんですけど。へんにばらけて（投票して）もつていう…。

## （２）「外国人問題」への関心、在特会との出会い

ありますよ。韓国人・中国人とか小さい頃あんまわからないんですけど、フィリピン人とかめっちゃいました。歓楽街というか、そういうところに家があるんで。フィリピン人は多いですね。あとは大学行ったら韓国人とか、中国人の留学生いっぱいいますし。友達もいましたよ。

在特会に入るきっかけになったのが、フィリピン人のカルデロン一家、やっぱり「これはもうマスコミおかしいぞ」って思ってた。（一家のことはテレビで）やってみました。なんかかわいそうって。「何がかわいそうだ、てめえ（と思った）」。テレビの報道はおかしいなと思ってたんで——その動画見つける前ですけど。周りの人間に聞いたんですよ、どう思いますかって。やっぱり薄々おかしいって思っている人、結構いるんですよ。で、自分が心が狭い人間じゃなかったんだって。会社の人間であつたりとか、あんでテレビでかわいそうかわいそうって言ってたら、自分のほうがおかしいんじゃないかって、ふと思うわけですよ。

たまたま Youtube でですね、桜井会長が入国管理局前で街宣したんですよ。それをたまたま見かけて、「やっぱりそういう風に思っている人っているんだな」って。Youtube とかよく見てたんですよ、結構あれ注目されてたんですかね、トップ開いたら出たんで。音楽聴いたり。暇つぶしになるんで。そんなに昔（からみていたわけ）じゃないです。見出した頃ですかね。あの圧倒的な街宣を見てですね、すごいって。それからしばらくは動画を見る感じで。ホームページがありますよね、入会して。カルデロン問題をたまたま動画で見たんですけど、そこからホームページにいくと在日特権を許さない市民の会ってことで、というのじゃおかしいですかね。韓国人・朝鮮人が嫌いでも…嘘つき（だから）。とにかく謝罪しろ、賠償しろ、ですよ。

でも、参加するっていても別に友達がいるわけでもないんですけど。地元でもやってるんだってというのがわかって。最初に参加したのが、一昨年（2019年）の5月だったと思いますね、ゴールデンウィークだったと思います。5月のゴールデンウィークの外国人参政権反対デモだったと思います。横断幕が確か外国人参政権反対って。あと年金問題ですね。地元で問題になってたのが。そのことが書かれてありました。（運動経験は）初めてです、まったくの。結構思い立ったらやるって判断で。

世の中のおかしい——おかしいぞって、こうやって活動してる人たちがいるんで、自分も合流しなければいけないなと思って。だから、まったく最初、素人で参加して何ができるってわけでもないんですけど、頭数にはなるかなっていうんで。それまでそういう、一般（市民）でこんだけの規模でっていうのがなかったと思うんですよ。まず、日章旗持ってそういう在日特権に断固反対みたいな、そういうのなかったですよ。参加しなきゃいけないなって思った。

（関心がある）問題…まあ、在日の年金問題ですよ、参政権の問題ですよ。あとは、何あったっけ…結局全部つながってるのは、攻撃対象がつながってるんですよ。慰安婦賠償問題とか、朝鮮学校の無償化とか…実際ですね、地元でそういうのやってるんですけど、攻撃対象というか、戦っている相手は全部おんなじなんですよ、人脈が。この前あつ



た原発反対のにしても。だから、自ずとそうなっていくんですけど。

今までベースの特権があって、さらに上乗せを狙ってるわけなんですよ。いい加減にしるよっていう。今まで自分たちが得た特権に対しても、感謝とかそういうのがなしに、さらに特権を要求するっていう。今まで黙っていたけど、既存のそういう特権だっておかしいじゃないかって。究極の目標っていうのは、在特会ですね、入管特例法の廃止ですよ。そこまで要求するんだったら、もうこっちもとことん追い出すまで追い込むぞっていう、実際それができるかどうかは別問題なんですけど、そういう姿勢を見せておかないと。在日特権の具体的なものについては、在特会で学んだことが多いです。

(それまで活動していなかったのは) 受け皿がなかったですものね。ネットで情報を見るにとどまっていた。在特会が早くからやれば、一緒に参加してたっていうのは断言できるんですけど。そういう受け皿としての役割ってすごく大きいと思いますよ。

(救う会は) 知らなかったんだと思います、地元でやっているというのは。歴史教科書を作る会、そのへんのも見てましたし、動きをですね。ネットとか。(しかし) 一般大衆の運動ではなかったんですよ。その時でも何かやり方はあったと思うんですけど、たとえば抗議の電話をすとかですね、でもそういう発想がなかったです。だから在特会が立ち上がってから変わったこととか、結構あるんじゃないかなって。インターネットの生中継もやってますし。(周囲に話す人は) 大学の頃はちょくちょくそういう話題・・・それ(在特会に参加する) 以前はなかなかないですね。世間話程度ですね。

(フィリピン人一家のことも受け皿がなければそのままに) 多分その可能性は大いにあったと思います。せいぜい周りの人に知らせるしか。今はいろんな手段を手に入れたんで。結構在特会ってデモ、街宣派手にやって、そればかりって思われてるかもしれないんですけど、結構地道なこともやってるんですよ。本当に1人でもやれることだったら、チラシを印刷してポスティングしていく。あとは、電話掛けるとか葉書送るとか。結構、そういうの割合も同じくらい大きいですよ、表に出てやる(ことと比較しても)。当時はそういう手段があるっていうのも知らなかったですし。

活動のベースになっているのは、歴史の問題そしてマスコミの違和感です。もともとはそんなにテレビなんか見ないんですよ。見なくても気になるくらいになったのが、カルデロン一家の時かなって感じですね。本当にテレビ見ませんもの。小さい頃はアニメとか見てましたけど、それこそ今は競馬中継しかみないです。(競馬は) やってますよ、ちょこちょこ。

### (3) 運動経験で得たもの

そういう活動を目の当たりにしたのも初めてでしたし、生で。方向性が見えてきたっていうか。「こういうことを積み上げて変えていけるかもしれないな」って。(初対面でも) まったくそういうのは・・・人見知りしない性格なのかな。今思ったら、女の子1人であまりないのかも。(女性のメンバーも) いないです。(やりにくくないですか) まったくそんなことは・・・。すぐ打ち解けますし。

新鮮さはすごいありましたね。結構人数集まっていたんですよ。日章旗を持って、横断幕を持って、マイク持って、大通りを歩いてアピールするって。(それから) ほぼ毎回(の参加) です。(繁華街は) 職場からもうちょっと足を伸ばしてって感じなんで、そこまで(負

担では)。(知っている人が通る可能性は)あるかもしれないですね。実際ありましたね、声かけられたことはなかったんですけど、後から動画確認したら映ってたっていうことは。

やっぱり、在特会が立ち上がってそういう活動が芽生えてきて、継続しないといけないんで。さらに拡大しないといけない、というのがあったんで。最初の頃なんか、本当にただ突っ立ってるだけだったんですけど、それでもやんなきゃいけないし。それに実際現場でそうやってがんばっている人たち見たら、活動があるのに自分が特別な理由もなく参加しないっていうのも、自分の気がすまない。本当にみんなまじめなんですよ。

(関心があるテーマは)順番つけられないかもしれないです。考えてみてもいいですか……。朝鮮学校の無償化かもしれないですね。何が何でもおかしいだろうって。朝鮮学校に公金を支出するっていうのは。どういう学校かっていうのは、調べたらすぐわかりますし。まあでも、他にも……。どれが一番っていうのはないです。生活保護の問題も大問題だし。もちろん、外国人参政権も。でもそれは、実際に実行されていませんから、現在進行中っていうことでは生活保護だったり歴史の問題だったりしますね。(歴史の問題というのは)だから、やってるんですよ、水曜デモとか、そういう人たち地元にもいるんですよ。署名活動したり、やってるんですよ。そういう人たちがいるっていうのは知ってたんですけど、地元で活発に活動しているというのは思ってなかったです。

(得られたものは)何もないです。本当はやりたくないやりたくないと思いつつながら、実はやってるんですよ。街の真ん中で街宣やってもほとんど誰も聞かないし。しんどいだけだし。時間もお金も使いますし。相手側と対峙するとか、そういうイベントの時ってめちゃくちゃストレスたまりますし。「許せんな」っていう。やる必要のない世の中になっただけいいな、ということです。やらないと押される一方なんで。今、在特会を叩いたり、誹謗中傷とかありますけど、それって裏を返せばそれだけ脅威となってるんじゃないかなって。極端にいうと、相手が嫌がることをどんどんやんなきゃなって。やらないでよかったらそれに越したことはないですけど、見て見ぬふりはできないですし。

(運動しない生活に戻ることは)できないです。危機感があるから……。今が勝負どころっていうか。今一步も引いてはいけないんじゃないかって思います。領土問題にしても、在日の問題にしてもですね。やっぱり活動のエネルギーっていったら、危機感であったり、怒りであったり。自分がおかしいって思ってるから、それをごまかせないですね。思ったら行動する派なんで。

やっぱり一定の効果は感じてるんですよ。在日特権を許さない市民の会が会員数1万人を超えて、その亜種っていったらヘンだけど、いろんな協賛団体のようなものも出てきたし。やっぱりこれが社会運動として拡大していったら、という手応えは感じてます。だから、寂しくて参加している人っているかもしれないんですけど、そういう人(の参加)でも極端に言っちゃえばなんでもいいんですよ。そういう人でも参加して、その人の参加が結果としてプラスになるのであれば、それはいいかなと思ってます。何も得られたものってないんですけど、これからですね。とにかく今は動くしかないって感じです。

(仲間との関係は)それは大きいです。支部長とかお会いになりましたか?支部長にしても、他の仲間にしても、めっちゃ愛してます。本当、まっすぐなんですよ。いくらそういう政治の問題っていつても、「そういうこともあるんじゃない、いろんな人がいるから」ってそういう人がいますよね。そうじゃなくって、真剣に怒る、そして動く。いくら周り

の人に話をしても、自分の目の前の生活のことしか頭にないから、「まあ、いろんな人がおるけんね」「どっちもどっちやな」みたいな、そういう感じになってしまうんですね。(でも在特会の人)は) めちゃくちゃ真剣なんですよ。(打ち上げの時も) 盛り上がります。というか、その日の活動の反省ですよね、あと情報交換。そして次の打ち合わせって感じですね。

#### (4) 小括

M氏は、大学生時代から『正論』を購読するなど、相当に保守的なイデオロギーを持っていた。その意味で、イデオロギー的に大きく変化したから在特会に参加したわけではなく、本人も述べるように「受け皿」があればもっと早期から保守系の運動に参加していたと思われる。購読者の平均年齢が相当高いと思われる『正論』を20歳前後で読んでいた点で、M氏はかなり特異な例に入る。

だが、そうしたイデオロギーだけではなく、M氏にはかなりの積極性が見られる。彼女は、交際相手を在特会の活動に誘い、彼も活動家に仕立てて共に活動してきた。安田(2012a)のルポルタージュでも描かれる在特会の活動家は、家族にも友人にも活動のことを言わず、個々ばらばらに参加するというものであった。そうした活動家像からしても、M氏はかなり特異な部類に入る。自らのイデオロギーを隠すわけでもなく、交際相手を活動に引き入れるだけの主導権も示す。その意味で、これまで排外主義運動について言われてきた、孤立した弱者というイメージから、ある意味でもっとも遠い存在なのかもしれない。それは、女性であるにもかかわらず参加するというジェンダー・バイアスの乗り越え要因として、どこまで一般化できるかわからない。女性の保守団体の活動家も含めた研究、あるいは男性の側からのジェンダー視点をういた研究が必要になるだろう。

## 1 4 交際相手に勧誘された N 氏の場合

### (1) 政治に対する関心

いろいろな事件があって、たとえば湾岸戦争があったりとか、小学生のときですけど、そういうテレビで言われている一般的なことには興味があったんですけど、特にどういう政策がどうだっているのは、そんなに深くは考えてなかったですね。

(投票は) 毎回ではないですね。興味持ち出してというかある程度自分で、自分の責任を自覚し出して行くようになりました。僕の場合遅かったんですけど、23 (歳) くらいですかね。それまでは政治家なんて、一般に言われている「誰がやったって一緒」みたいなのがあって、自分のためにしかやってないという意識で、誰に入れても一緒かな、みたいな一般的な意見ですかね。そういう風潮ではありましたね。自分が行動することに対して責任があるし、沈黙することにも責任があるんで、行動するほうに変わった。

(投票先は) 政策問題になりますね。人間的なことになって、やはり能力のある人を選びますね。政治家ですから発言することに説明能力のある人とか、自分がみようとする政策に対してメリットとデメリットをちゃんと答えられる人を選んでます。(支持政党は) 特にはないです。今も、民主党があまりにひどいからですね、民主党以外ならということ——まあ共産党とかはないですけど。

(投票先は) 自民党になってきますね。保守というのの論理が、論拠がちゃんとしてるじゃないですか。保守というのは、自分の——「守る」ということで。改革とかそういうのは、改革するけどその先に何があるかを見せれる人間がいないですからね。保守は、自分の主張があってちゃんといえるんですよ。で、自民党になってきたと思いますね、どうしても。比例も。場合によっては、比例は投票しないということもあったんですけどね。自分も一貫して同じ主張というわけではないです。社会状況とか環境によっても考え方が変わってくるからですね。

### (2) 外国人との接点、「外交」への関心

結構いますね。深い付き合いということではないですが。(学校の同級生で) いました。中国 (人) ですね。外国人問題 (への関心は) は、10 年くらい前にですね、自分の家でパソコンを貸して、それまでネット環境もそんなに整ってなかったですね。10 年前からブロードバンドが普及してきて、つなぎ放題みたいな感じになってインターネットで証拠を得るようになったのが一番大きいですね。それまでは、それほど関心はなかったんですけど。

(関心を持ったのは) 日本の外交問題とかですね。歴史観であつたりとか、日本がやってる政策——海外に対してのですね——そこに対して理不尽というか納得のいかない部分が多かったというのがありますね。たとえば、戦後補償問題とかですね。なんで私達の、たとえばおじいさんがそういうことをやったとしても、それでなんで現役世代の私たちに責任がある (のか)、そういうこと。誰も (政治家が取り上げないので) 政治の問題にならないです。

情報がですね、一方的な情報でなくてやはり自己責任ですね、情報をどう選ぶかという、その責任を意識しだして、その情報は嘘かもしれない、でもそれを信じたからには自分にも責任があるというか。そういう関係になって初めて、情報に対する自分の方向性だと

かがみえてきたってということですかね。新聞とかそういう風なのは、一方的で——事実であったとしても——事実が 10 あるうちの 1 個。伝えたい側の意向が入るわけですね、(メディアは) それを選ぶことができるんで。まあ、膨大な量の情報からピックアップすることには向いていないんですよ、メディア自体。

(歴史問題に対する) 関心もあったんですけど、分からない時には自分 1 人のことで精一杯で、社会のことに対して積極的に働きかけることはなかった——学生時代もですね。バイトとか忙しくて、そういうのはありましたね。ただ、インターネット自体には興味がありました。その頃ちょうど最新技術の走りみたいなのが出てきてですね、それががらっと変えるんじゃないかなって、そういう風な期待はありましたね。今、ソーシャルネットワークとか発達してますけど、これはちょっと変わってくるんじゃないかという期待が。ネット社会とかいうのには興味があったんです。(インターネットを本格的に使うのは) ブロードバンドが普及しだしてですかね、10 年くらい前から。一応パソコンは家にあったんですけど、テレホーダイとか深夜しか使えないという制約があって、あまり使わない。自分で買ったパソコンを持って自分でつないで、それからです。

(見るのは) 最初の頃は掲示板サイトですね。それは責任を持ってない人がいっぱい集まる、そういうのに辟易してもう見なくなりましたんですけど。僕は一切書き込みはしません。顔が見えないと卑怯なことになるわけです。責任もないわけですよ、それって。何の意味もないです。リスクを課さないとなんも生まれてこないです。あとは Youtube だとか。(トピックとしては) 政治のことに限ってだったらですね、外交問題が一番です。日本の将来とかどうなっていくか、という。どういう風に自分なりに予測を立てていこうかな、ということで見ましたね。日本が抱えている問題もありまして、少子高齢化だとか、産業の構造の問題だとか、別に外交がどうこうじゃなくて全体的にですね、なんでも見ます。

(在特会関連では) 在日朝鮮人問題と、韓国に対する戦後補償問題、それと北朝鮮の問題ですね、拉致問題。それには興味がありましたし、あまりにも偏ってるというのがあって。それに対してどういう風な主張があるか、自分 1 人で思っているのかわかりませんでしたかね、ネットを見ないと人がどう思っているのかわからないのは。ネットだとわかりますね。わかるけどそれも玉石混交というか、そうなるとなんが……。その中でも自分の主張に合うような、合うというか——反対意見も取り入れてはいるんですけど——そういう風な意見も多数みるとあとは自分の考えのどこに責任を持たせるかな、ということですね。

(有益なサイトは) ニュースサイトだとか海外のメディアとか、日本の国内だけでそう言われているというのとわからないですね。他の国がどう言う風に見てるんだってというのを客観的に見たうえで、日本がこういうところおかしいなというのが見えてきますね。身近なものでいえば『東亜日報』とか『中央日報』とか『朝鮮日報』とか、韓国メディアがほとんど対日の話題が多いですよ。そこで見てくるに、何でこんないわれを受けなければならないんだ、社会全体がああいう風なイメージだ——論調もそうなのですね。これを変えないと日韓友好なんてあり得ないじゃないですか。基本的には排斥したいとかなんか、相手をいじめたいとかそういう気持ちじゃないんです。本当に友好するのなら、その問題を避けては通れない。戦後補償問題も、もう解決しているって言って、それをまだ引きずる。一生解決なんてありえない、それはずっと永遠に。そうすると完全に解決するには、やはり何らかの変革がないといけません。

(そういう感覚を持つようになったのは) ワールドカップの時とか、そういう風なイベントがあるたびに反日活动ってのがクローズアップされたりするじゃないですか。なんでこういう風な意見があるんだって思うんですね。日本人で生きて今まで生まれてきて、僕たちの世代とか海外に対して何した、悪いことしたっていうものはないからですね。そういう風に言われる理由があるのか、と考えてですね——それですかね。

### (3) 在特会との接点

《参加のきっかけ》

(在特会のサイトをみることは) まったくなかったです。(交際相手が) 地元で街宣をやっている時に誘われて、行って見て。最初は反対意見だったんですよ。いろいろなリスクを考えたとき、女の子の身でそういう活動に参加して、いろいろなリスクがある。リスクを背負うだけの活動なのか、と疑問を持つわけですよ。反対意見というか、古いやり方だと思ったんです。みんなで集まって組織を作って、シュプレヒコールをあげたりとかデモ活動するっていうのは、古いやり方だと。ネットとかアップして、あと分散して個人でやって行くやり方(のほうが良いやり方) なんじゃないかな、と思ってたんですけど。でもそれ、実際知らないですからね、やってる活動ってのを。

(交際相手に誘われたのか) そうですね。昔から会社の(同僚で) …仲良しになった時にはこういう活動しているとは知らなかったです。(参加したのは) 2年くらい前ですね。1年半前くらいですかね。彼女のほうが先輩になる。(オルグされたということか) そうですね、簡単に言えば。そう言ってしまうとあまり信念のないやつと思われそうですが。

(政治に関してカップルで話すことは) 政治問題には興味を持ってたんで、普通の人のレベルだとは思いますがね。詳しく論文をみたりとか、そういうのはないですけど、どの新聞のどの社説がいやというのはなかったですし。(他者との) 政治問題(に関する話) は——テレビをみながらこういうことについてどうこうというのはありましたけどね。まあでも、ある程度悪者を決めてしまっただけで思考停止している人が多かったんで、それ以上は進まなかったですね。どう自分達でアプローチしていこうか、というのはなかったんで。

(最初は彼女が) 街宣をしているところに出掛けてって、(車を) まわさせられた感じですね。徐々に徐々に(関わるようになり)、自分でも興味を持てたからですね。こういう人たちがいるんだなって。それまで自分のなかでの想像でしかなかったからですね。レッテルで、こういう人たちがやってるんじゃないか、こんな日曜の昼間からやって、暇な人たちがやってるんじゃないか、みたいなあるじゃないですか。自分の趣味もないんじゃないかって感じで。そしたらそうではなくて、真剣にやって主張もあるし、個人の趣味も持ってはる方で、それでもなんか活動しなくちゃいけない。(活動してみてそれまでの先入観は) なくなりましたね。普通の人(がやってるん) だって。(在特会の趣旨には) 賛成ですね。はい。活動に参加していると本当にいろいろな人がいて、魅力ある人がいっぱいいて。人物に魅かれる部分もあります。

《ネットとリアル》

ネットの情報は、いろいろな情報があるんですけど、リアルじゃないじゃないですか。

実際に活動してみると、地元では誰も注目してくれないかもしれないけど、誰か注目してくれる人がある、ネットで生中継したらそれに対してコメントが入ってくる。賛成してくれる方もいれば、批判してくれる人もいる。リアルに批判を受けることなんてそんなにならなから。在特会にいと、公安の方だとか警察の方だとかのお話を聞くことができ、ある程度リアルに近づくじゃないですか。そここのところが、プロセスが大事だなと思ってですね、実際に人間と話してみても——例えば、「反原発とかしている人たちはこういう人たちだ」みたいなレッテルを自分で貼ってしまうからですね、何も知らないよ。

実際に直接会ってみて、それで話をしてみてどういう主張があるのか、というのをリアルで聞いてみないと、自分でそこでとまってしまうから、主張がですね。人間安易な方向に行くから、レッテルを貼って安心してしまうということになるから。リアルな部分に近づけていこうという努力を、そのためにですね。やっぱり、ネットだけじゃ限界があると思うんですけど。ネットで自分で情報を仕入れてそれを人に拡散するだとか、そういう風な活動だけをしてたらリアルな情報は入ってこないわけですね。それは大きな失敗になるんですけどね。

穏健派の保守みたいな、「汚い言葉を使ったりするのはよくないんじゃないかないか」という、そういう気持ちがあるじゃないですか。「あなたたちの主張は、まあそれを普通にやってくれ、それをわざわざ汚い言葉で言わなくていい」という風な。もっと有益な情報というのは、図書館とかに行ったりすればもっと美しい言葉で語れて、もっと何か高級なものとしておいてあるからそれを見てやればいいんじゃないか、そういう意見もありますよね。わざわざ声を荒らげて差別発言のようなことを言う必要はないんじゃないかと思っただけ。それがいけないことかどうかっていうのは、聞く人の耳にいいか悪いかなんて、関係ないんですよ。そこもいろいろ葛藤とかあったんですけど。

#### 《参加してみても》

(参加するようになってから) 忙しくなると。(休日の使い方も) 変わってきますね。自分の、1人の時間が減ってきますかね。それまでもネットをぜんぜん使わない時ってあったんですけど、それも連絡を取り合ったりするのにできるようになったな、というのはありますね。活動自体にネットが便利だってことで、使うようになりましてね。

(続けて参加するのは) 金魚のフンみたいについていっているだけですね、僕は。彼女は活動メイン。僕はいろいろな方向性を考えてるんですけど、芽が出るかどうかよくわからないですけどね。とにかく、自分なりのアプローチを考えたいし、こういう活動を通していろいろ勉強していかないといいのもあります。(口汚くののしるのは) 逆に、それがどういう影響を及ぼすのかってのは予測がつかないんですよ。綺麗な言葉で耳障りのいいことを言っておけばみんなが賛同してくれるわけじゃないし。活動してもわからないところがある。「相変わらず馬鹿なことやってるな」と思いますよ、自分でも。でも、見てる方もバカ・・・同じアホだなんて。僕の場合、どちらかといったら利己的で薄情な人間かもしれないです。冷静に見て正視する人間も必要かなと思っています。皆さんと一体になってやるというわけではなくて、引いて参加してますね。(彼女がいなければ) きっかけがなかったら参加しなかったでしょう。

今はたとえ彼女と別れたとしても参加すると思います。そこはやはり、自分にメリット

があるんだと思います。リアルとの接点というんですかね。(手応えは) ありますね。人脈だとか、普段、話すことのない人と話せるっていうか。講演会だとか、政治活動やられてるかただとか、そういう方と実際に。市役所の方とそういう話をする事って、個人ではないわけですよね——やろうと思えばできますけど。いろいろなジョイントができる、その部分ですかね。

(よかったこと)「経験」と「先入観みたいなのがなくなっていく」のと、いろいろな自分の「経験値」ですかね。どういうアプローチを次からしていくのかを考えるうえで、選択肢が——いろいろな考え方が増えるというのが、すごく有益なことです。

#### 《関心があること》

一つの問題ではないですね。社会の問題はめまぐるしく変わっていくので、関心事項も変わってくるし、TPP 問題だとかいうのも国の——自分達の生活にはねかえってくる感じ、その部分で関心が(あります)。(在特会では) 活動をどう拡大していくというか、効果を上げるか、それが課題ですね。一番効果を上げれることを。(トピックでは) ほぼ全般というかですね、不平等とかそういうことにつながってくるんですけど、理不尽な問題だとか。全般に対して、働きかけても効果がないことに対しては……。重点的にやるのはまず目先の目標をつぶしていくこと、これを活動にしたいなと思いますね。

(続けるエネルギー) 行動するってことは、形がつくっていうんですか、それに対して惰性で流れていくのはあって、それもあと思っていますし。これからは時代の流れとか、社会がどういう状況にあるというのではなく、自分の責任でやっとう、積極的に社会に悪いところがあったら働きかけようという考えでやっています。やる以上はいろいろリスクがありますからね、だからといってそんなにそのことに対して跳ね返ってくるほどの関心を持ってくれる人が逆に少ない。「何であんなことやっとうの」と反応がないというか、もっと活動を本格的にしていけないといけないのかな、反論が来ないと……。握手をしてくれる方とかはいますよ、関心を持って集まってくれる方とか。でも、一般の人は素通りですね。1000人おって1人くらいですね。そんなものですね。

#### (4) 小括

N氏は、「ネットとリアル」の違いに対するこだわりを強く示していた。彼自身の情報源がほとんどインターネット経由であり、他のメンバーと異なり韓国の新聞の日本語版に目を通す点で、メディア・リテラシーは相対的に高いと考えられる。だが、彼はそうして得た情報を表出して他者からの反応を得るような経験はなかった。在特会は、単にそうしたことを話す仲間を作るだけでなく、街頭行動を通じて彼なりの「リアル」な社会を経験する場となっている。

彼のイデオロギー自体は、「なぜ自分の世代にまで先祖の加害の責任があるのか」という、比較的好くみられる被害者意識を軸としている。だが、交際相手のM氏ほどの確信犯的な極右ではなく、活動に参加するに際して交際相手からの「プル要因」が大きかったことは間違いない。このように生身の他者から運動に勧誘されることは、筆者の聞き取りでは実質的にないことであり、そこにN氏の特殊性がある。つまり、それほど極右的でないイデオロギーと運動参加の間には、交際相手という強力なプル要因があった。



だが、彼は今では交際相手がいなくても在特会に参加すると述べる。これは、単に趣旨に賛同するというだけでなく、それが彼にとって貴重な実社会との接点になっているからだろう。他のアソシエーションとの接点があれば、そこを通じて彼自身は社会に統合されていっただろう。労働と小さな親密圏を越える範囲内で、極右的なものでなく市民的なものプールの池をいかに作り出していくか。現実には、西欧では極右参加者は旧来型の組織に統合されていないことが指摘されてきた。パットナムの問題設定とも相通じるこうした課題も、長期的には極右研究の視野に入れる必要があるだろう<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> もちろん、それに代わってインターネットが新たな動員構造になっていることは間違いない。「ネット」と「リアル」の補完的な関係をどう築いていくか、この点についての研究も必要になるだろう。

## 15 「元々右だった」0氏の場合

### (1) 政治に対する関心

いろいろな政治に、ニュースなりに関心持ってたし。政治活動は何もしてなかったですけどね。選挙には当然行っていました。(投票先は) 大体自民党ですね、僕は。保守がね、それぐらいしかなかったんですよ。共産党なんか入れるはずないし、社会党ももちろんダメだし、まあ自民でしたね。保守的な感じでね。学生時代はそうでも(それほど保守的でも)なかったんですけどね。どちらかという学生運動の——ちょっと先輩みたいな連中がやっていたりかしてたんで、一応マルクス・レーニンとかその辺もやってたっていうか、読んだ程度。でも、いろいろ突き詰めて考えたら日本にはそぐわないと思わなかったんで。(大学の専門は) 電子工学なんで。

多分そう(もともと右寄り)なんでしょうね。やっぱり左の考えもわかるけど、何かしっくりこないんで。結局それは、自分の責任を他人にまわしてるだけで、誰かのせいにしてる、というのが左の考えだから。自分が仕事せんでもお金もらえるとかな、そういうのがあるんですよ、左の考えは。

(在特会に入る前後でイデオロギーは) 変わってないですね。自民党を保守かと言われてたら、現実には半分くらいは保守、半分くらいはおかしなやつがいるんで……。ちゃんとしたらもっと保守政党があれば、そっちに入りたいと思ってますけどね、特に在特会に入ってから。(自民党は) 民主党よりはましかという程度ですけどね。

### (2) 外国人との接点、排外主義に至る認識

朝鮮人ですね。遊んでましたよ、普通に。友達として。仕事関係でインド人とか、アメリカ人とドイツ人と、韓国人もいましたし。何もあれ(問題)もないですね、仕事では。中国人もいましたね。(外国人との接触と活動とは) 何も関係ないです。(それ以前は) 北朝鮮はおかしいな、とかそんなのは思っていましたけど。別にねえ、どうのこうのというのはなかったですね。

在特会に関していえば、韓国人に利権——在日特権というかね、在日の特権があまりにもきつくなってきて、平成に特に変わってからどんどんひどくなってきて、どちらかという日本人が差別されているんじゃないか。河野談話とかあの辺ですよ。(特に行動は) してないですね。日本ってどこまで土下座外交するのか、ヘタレというか情けない国だなと思ってましたけどね。従軍慰安婦の問題とか、南京大虐殺もその辺からでしょ、話が出てきたのが。そういう捏造があまりにも多すぎるなど。いろいろ聞いている話と違うから。これは何かそういう勢力が動いているんだろうなと思って。そのくらい、在日関係がひどくなってきて、ちょっとおかしいなあと思っているときにこの運動を知って入った。

### (3) 在特会との接点

3年くらい前ですかね。(民主党が政権を) 取るんじゃないかと思った頃ですね。インターネットで——ネットは昔から使ってます。(アクセスしたのは) 偶然ですね。偶然。Youtubeの上のほうでぱくぱくやってるでしょ(リンクが出ているという意)。それで出てたから。Youtubeとか見てて、ちょっと「何だろう、これは、何を言ってるんだろう」。在特会とか

主権回復を目指す会とか、あの辺がやってたんです。こんな運動してるグループがあるんだな…。(それまで) おかしいなとは思ってたけど、それ以上に追求するところまではしなかったんで。見るようになって、「そうかそうか」って。

僕らの世代というのは、朝鮮人という言葉すらしゃべったらいかん、という時代だったんですよ。朝鮮人と言うだけでボコボコにされるぞ、だからちょっと抑えないといけないような時代だったんで。まだね、戦後暴れまわっていたことを知ってる世代が沢山いたんで、その僕らは下の方(の世代)だったんで、「朝鮮人というたらあかん、朝鮮人と言ったらどつかれるぞ」というコメントを聞いていて。だから見て見ぬふりみたいな。タブーだったんですよ。それが堂々と「朝鮮人出て行け」と言っていると。「何だよ、この運動体」はと思って見るようになったのがきっかけですね。堂々と発言して、抗議して——「朝鮮人」って言うっていいんだ。それはそうだ、フランス人をフランス人と言っているのに、朝鮮人を朝鮮人と言っているっていけないことはない。

日本にある民団とか朝鮮総連、それは本国の指令によって動いているわけですから、金は全部そっちから出ているんですよ——ということが、日本においてずっと起こってきたんですよ。で、帰化もしないわけで、日本に住んでいるのに…。なんで在日がまだいるんだろう、何かおいしいものがあるからですよ。日本に住んでいて日本に帰化すれば、日本国民と同じようにすべて日本人と同じ権利が与えられる。なんで帰化しないのかなって。在日であるメリットって何かなと思ったら、いろいろ特権があったって。

(前から) 薄々は感じてました。税金払ってないよ、とか。調べていったらいろいろ…。だから、結局、日本人にない特権があるわけですね。これはおかしいや。名前もいっぱい使えるし。口座でもいくらでもいけるし。免許証も通名でいけるし、通名で名前を何個でも持てるし、税金もまともに払ってない。生活保護はものすごい。人口比にして日本の5倍6倍ね、もっとひどい数だから。4人に1人が生活保護ですからね。生活保護にたかって。で、そんなことがいっぱい出てくるんですよ、次々と。これはまずいと思って。

とりあえず会員登録して。地元であったのに出るようになりまして、そのうち支部作りたいというから、お願いされたんでやってみた感じですね。(参加したのは、入会してから) 3ヶ月、それくらいですかね。それまで参加しなかったね。その頃、告知とかあんまりなかったんですよ。で、一番大きな告知だったのが地元のデモで、外国人参政権反対デモ。それに行くしかないね、と思って。それが最初ですね。2年前の12月だったかな、実際参加したのは。(参加に対する抵抗感は) なかったですね。まあ、何百人のデモでいるので、別にマイク持つわけでもないし。できるだけたくさん見てくださいというので、この際、と。元々だから、考え方が右だったんですね。だから胡散臭いと思わなかったですね。

やっぱり意思を示さないと——今まで日本っておとなしかったから、世界からみても。それが美德とされてくる。慎ましやかで大人しい日本人、それではもう通用しないな。昔はそれでよかったけれども。これだけ外国に攻め込まれていて——実際、向こうが声大きいわけですよ。で、自分らの要求ずっと通してきた。日本が言うなりになってたら、どんどんどんどん侵略されてくる、ますますね。黙ってるより声出す。下がって下がって、もうこれ以上はないと思ったんで行ったんです。

(その後) 結構出ましたね、続けてね。「次、何々ありますからね」、とそこで言われるから「ああ、じゃあ行ってみようか」って。お誘いがずっと出たんで。一参加者でよかつ

たんですけど、どうしても地元でやってくださいというお声がかかったから、「じゃあやりましょうか」って。各都道府県に支部を作りたいってことなんで。(家族に止められることは)ないです。そういう話もしないです。家族は何も思っていないです。(胸に着けているバッジも) 拉致被害者を帰せというバッジ。これは維新政党・新風が最初に作ったバッジなんです。結成した時に。どさっとあったんで、1 つどうぞって感じ。飲みに行く時もつけていきますし。(救う会には)入ってないです。日本人の意思として「同胞を帰せ」という。本当は日本人全員つけないといけないんです。

(活動は公に)してます。(周囲の人で) 離れていったのもありますよ。言うことはわかるけども、嫌なんですよ。そういうのが嫌という人もいます。(それは)しょうがないです。仕方ないですよ。まあ、遊ぶ間がなくなったから、人付き合いは減りましたね。むしろ今の方が周りの人が減ってるんですよ、遊び相手が。昔はもっとにぎやかに遊んでましたよ。一緒にその(運動の) 仲間と活動行ったりとか、そっちの時間が増えましたね。変わりましたね、余暇の過ごし方が。こういう運動やってると、自分の遊びの時間って減ります。運動がなくなるから。多い時は1週間ぶっ通しとかあります。(仕事に支障は)でないことはないですけどね。多少は目をつぶらなきゃならないですから、それはそれで…。逆にね、何も思っていない人と話してるとかなりずれがあるんですよ。話してて、相手がわからない人が多いんで——政治に興味がない人は特に。政治活動なんで、そんな話もしたら——政治の話したら——「うーん」とピンと返ってこないとしんどいですよね。そういう話したら。(運動の人という方が)自分が楽ですよ。

(この数年で運動を始めたのは) やっぱり、どんどんどんどん(「彼らの攻撃」が)来ていて、当たってしまったんでしょうね。彼らは、やりすぎたわけですよ。後ろのほうで言ってるくらいだったら、多分そのままだけど、どんどんどんどん前(に)進んできて僕に当たってしまったんですよ。それに、そんなになかったですよ、市民活動が。市民活動いったら左翼系ばかりですよ。保守系の市民活動なんか少ない。右翼は違うだろうと思うし。「日本民族を」というのはいいけど、街宣車に乗って——それは違うだろうと。

(在特会で活動しているのは) 最初に見たのが在特会の動画だったんで。だから中身は救う会もやってるし、教科書も行ってると、やってることは広範囲なんです。だから、国家主権の問題であるとか、いろんな問題——教科書問題にしても拉致問題にしても、全部動いてます。今は全国で自治条例が作られて、その中で住民投票条例が各地で作られて。それは外国人参政権の通りじゃないか。だから今、それを阻止するためにあっちこっちにまわってるんです。

警察関係とか公安調査庁とか、その辺との付き合いは増えましたね。普通に参加しているだけなら、どっかにいって話することないけど。(それは)嫌ではないです。結構同じ考えの人が多くて、話してみると。また、警察に対する対応と公安調査庁に対する対応とは少し違いますけどね。

### (3) 運動を継続させるもの

日本人が目覚めないからじゃないですか。目覚めない人があまりに多すぎる。ぱっと「あなた、何民族ですか」って聞かれて、大和民族って即答するよりも、まず民族という言葉聞いた時点で「え？」と思う人が多いと思うんです。それだけ意識レベルが、GHQ 政策

が浸透して、浸透しすぎて、ほぼアメリカ人がびっくりするくらい浸透しすぎて。今そういう教育でずっと育ててきているし。ますますですよ。自分はどこの国、国境どこにあるかもわからん、対馬ってどこかって知らん、竹島知らんとかいう奴もいるし。尖閣列島なんかね、大分ニュースになったからあれですけど、国境がわからんような人間もいくらでもいるんで。国家主権とは何か、わかってない人もいますからね。

本当に、「ほっとけんな」みたいな。ほっといたらますます——特に××（応援に行っている県名）は韓国民団がなんだかんだ行政に対して言うてきて。日本のことは日本人がまずやろうというのがあるんで、その兆しを止めるというかね。日本が終わるよりも——日本でなくなるのと、自分の仕事だったら、日本のほうを優先させてもらったら。滅私奉公の世界です。自分のためには何もならんけど、大きな眼で見たら日本国のためにいいんじゃないか、というのが基本的な考え方。自分らは捨石になるつもりなんで、どっちにしても。次の世代が良くなっていけばいいな、というために。僕らの世代は多分変わらないだろうから。

（参加してみて、思っていたこととの違いは）ありますね。結構いろんな人が参加してるんで、この人はちょっとなあ、という人はいますよ、中には。本当に運動しに来ているんだろうか、とか。運動外の目的、彼女探しに来てるのかな、みたいな。

結構ね、運動体としてはレベルが上がってるかな、と思うんですよ。賛成している人も増えてきてるし、初めは「わー」と声を上げているだけでしたけど、そのうち行政交渉であったり、実際いろいろ変わってきているところもあるんで、進歩してるなどは思いますね。結構あちこちに行ってますね、行政に——市役所と県庁とか。

少しずつではあるが、世間の雰囲気が変わってきてるなというのを感じますね。始めた頃に比べたら。やってることに対する支持者が、初め少なかったわけなんですよ。今は結構若い人とかも応援してるし。応援者が増えましたね。それで、それだけの成果は出てますんでね。結構普通にやってたら、拍手してくれるじいちゃんばあちゃんもいますしね。目の前で。動画でもコメントは増えてるなあと思いますけどね。（チーム関西の事件で）一時問題があって離れた人はいるんですけど、結果的にその時よりも増えてますんで。

今年夏くらいか、花王デモとかフジテレビデモとか、あの辺から空気がまた一つ変わりました。本当の一般の人がずっと参加するようになったから。（その影響で在特会も）増えました増えました。あるデモだと、8割の人が知りませんもの。初めて見るなという顔の人がどんどん増えていった。

#### （４）敵対性をめぐって

（在日コリアンを敵手とするのは）相手が全部朝鮮なんですよ。拉致問題にしても教科書問題にしても、全部在日がいろいろ言うて来てる。今中国だけその前から朝鮮が。結局、中国の手先。あいつらは賢いから、直接やらす朝鮮使っているいろいろやる形で、いろいろ政治的なことを様子見ながら。様子を見てるんですよ。朝鮮人使って。だから、どこ行っても当たるのが朝鮮人なんですよ、相手が。だから問題の相手は1つなんで。

（外国人参政権について知ったのは）3年くらい前ですかね。民主党が本当に政権取るんじゃないかという危機感があった。少なくともそれまではある程度は自民党が良識的な人が多いから止まってたけど、民主党が（政権）取ったら終わりだと思ったんで、動かな

いとしようがないなと思ったところもある。それから「取ってしまった、はあ、どうなるのかな」って。でも何とか止まっていますけどね。

日本のことは日本人が決めねばいかんでしょう。日本はもともと島国でしょ。ほぼ単一民族ですよ。で、その中でずっと育まれてきた伝統や歴史文化があるんです。外国だと侵略されて、こっちの民族、あっちの民族とあったんですね。そうして繰り返されてきた中で他民族と・・・という点、日本とは考え方が違います、もともと。で、あまりにも日本の周りは敵国が多い、朝鮮も中国もロシアも全部、日本侵略したままです。北方領土取ったまま、竹島取ったまま、北朝鮮・・・拉致したままですから。北朝鮮も韓国も同じですよ、同じ民族ですから。これが友好国ならいいですよ、外国人参政権を認めても。でも友好国ではないですよ。

(しかし敵手として) 大きいのは中国でしょうね。在日より大きいのはチャイナですね。奥に控えていますからね、チャイナが。前におるのは在日だけでも。目の前でちらちらしているのは在日ですけどね、奥に控えているのは中国なんです。それに合わせて民主党が移民 1000 万人、政策 INDEX2009 で移民 1000 万人とか言っていたんで・・・。移民 1000 万人受け入れるとは——今、中国は国策として人を追い出そうとしていますよね。人余り。特に人民解放軍・・・。残っていた人間、出てきた人間というのは仕事がないんですよ。その人間はどこ行くかという、海外に放り出される。日本は受け入れますよと言っているわけだから、そういうのがどんどん来るわけですよ。あいつら賢いのは、ある日突然戦わないかん、国家動員法ですから——7 月 1 日から施行されているでしょう、あの国では。戦わないといかんわけです。人間を、全部人民解放軍上がりというのをどんどん入れていったら、これはもうすぐやられます。そういう危機感を持って生活しなければいけない状況に、日本はなっている。(自分達も) 気持ちだけはしっかりするため、街宣しておく。「覚悟しとけよ」という意味で。

## (5) 小括

「極右」という言葉には、(メインストリームの)「保守」よりも「右」であるという含意がある<sup>2</sup>。だが、そうした「極右」の主張に共鳴するのは、元々極右的なイデオロギーを持っていた者ではなく、政治不信や相対的剥奪感、不安感のはけ口を求める層であるという見方は根強く存在する。日本においても、ナショナリズムや排外主義を剥奪や不安といった用語で捉えるものが多いが、筆者自身はそれに懐疑的である。

O 氏は、学生運動が身近だった時代に育ち、マルクス主義にも接したが、それは自らの考えに合わない、として若い時から保守を自認していた。筆者が聞き取りした在特会や「行動する保守」のメンバーでは、このような「元々保守」という者が多数派だった(樋口 2012f)。もちろん、保守的な者がすべて極右になるわけではないし、ましてや「在日特権」を真に受けて排外主義運動に馳せ参じる現実には、「保守」という要素だけでは説明されえない。O 氏の場合、右派の市民活動という受け皿の存在によって自らの行動を説明しており、「保守的」というプッシュ要因に加えて「右派市民活動」というプル要因が必要であることを示唆する。

---

<sup>2</sup> どのような側面で「右」であるか一様ではないが、Mudde (2007) は「ナショナリズム」と「排外主義」を共通する要素としている。

また、O氏は在特会での活動を周囲に公にしており、それゆえに失われた人間関係もあるという。その分だけ在特会での付き合いが増加しており、イデオロギー的な純化が進むものともいえる。実際、政治や「在日特権」に関する話を存分にできる相手との付き合いが、活動家達に心地よさをもたらすことは、他のメンバーに対する聞き取りでも言及されている(樋口 2012d)。Blee (2002)の調査では、活動の結果としてそれまで持っていた人間関係や仕事を失う白人至上主義の活動家が登場する。O氏は、そのうち人間関係の一部だけを失った格好となるが、チーム関西のメンバーのように職を失う者も出現した。della Porta (1995)は、運動を続けているうちに集団内部で社会化されることが、運動の過激化に結びつくことを指摘しているが、それが部分的には現実化しているともいえる。

## 16 歴史問題が気にかかっていたP氏の場合

### (1) 政治に対する関心

20歳から選挙権もらいますよね。そこからやっぱり、自然と(政治に)眼を向けるようになりますね。それ以前は、パッパラーパーですよ。全然、ほとんど興味がありません。新聞なんかも三面記事くらいしか読まないし、テレビ欄とか、そうなんです。でも選挙権、20歳超えたらもらえるというんで、私も自分の一票は国の将来に関わってくるよと思うと、責任感じますんで。(選挙には)行ってます。選挙権をとった最初のほうは、家族が言うようなところに入れるとか、ちょっと甘い感じでしたけど。投票先は、とりあえずまあ自民党ですね。この間(の選挙)も自民党です。

うちの親の世代はアホなんで、もう税金さえ払ってれば平和だろ、みたいな感じですよ。話にならないですよ、何しゃべっても。(親の影響は)まったくありませんね、うちは。(政治の話は)親とはできませんね。

### (2) 歴史修正主義からの出発

(周囲に外国人は)いません、うちは。接点ありませんね。周りに在日の子供のもの、ほとんどいないんです。ちょっと出会わないですね。(在日とは)接点がないんですよ。

(初発の関心を)わかりやすくいうと、慰安婦の問題とかありますよね。私らも学校で、日本軍は朝鮮人の女の人を無理やり慰安婦にして、むちゃくちゃにしたという教育をずっと受けてきたんで、実際これは本当かな?という単純な疑問から興味が湧いてきていたんですよ。で、今でも慰安婦の問題、左側の人らは補償しろとぎゃーぎゃー言ってますんで、事実と異なるのであれば、こっちも声出して反論しなきゃと思いますし。

幼稚園ぐらいから結構興味があったんですよ、戦争問題とか。8月になると、戦争特集とかテレビでやりますよね。あれ見てて、何でこんなに日本が悪い悪いといわれられないといけないのかという疑問があったので。誰に教えられたわけではないですけど、やっぱり右に寄っていきますよね。

大きくなると、学校で教えられたこと以外に自分でも調べたりとかして、「ああ、事実と違うわ」って。(自分で調べるようになったのは)高校出てからですかね。いろんな本を読むようになりましたし。学校の勉強から解放されたってのがあったんで、好きなことを一好きな本を読めるようになって。

朝鮮人は慰安婦の件に関して賠償しろだの言ってくるような民族なんだな、と。そこから広がっていくわけですよ、調べる項目が。(本国と在日コリアンに)距離はないですね。教科書の中にも強制連行という文字がありましたから。慰安婦の問題だけでもなくて、在日朝鮮人の言っている主張というのは、学校で習ってきたのとはいろいろ違うんですよ。強制連行がどうとか、学校では強制連行って教えたりされたけど、大人になって自分で調べると、「それも違かったんだな」っていう。

調べていけば調べていくほど、慰安婦でも強制連行でも、こんなにはっきりしない事実がちゃんと解明されていないことを、生徒に教えたんだらうって。そこでぶち当たるのが日教組なんです。実際、小学校までの教科書には、慰安婦と強制連行と南京大虐殺が明記されてたんですけど、中学校からは教科書変わって、「南京事件」に変わったり。慰



安婦と強制連行はもう表記されなくなったんですよ。実際、事実じゃないから、はっきりしないから教科書には載せないことになったので。単純に腹立ちますよね、学校でそう教えられてたとか。

（歴史記述については）すごいよく覚えてるんですよ。この問題だけですね。戦争の話について。高校でも変わってました。記述が無くなってました。どうにもね、日本は悪かったんだよっていう教育ばかりを受けると、逆にちょっと反発したくもなるんですよ。「本当なの？」みたいな。それで単純に、我々の先祖はすごく凶悪犯だった、みたいなレッテル貼られてるのも腹が立つし、納得もいきませんし。

### （3）Mixi から在特会へ

（Mixiに入った時は）友達とのコミュニティって感じで、コミュニケーションをとるためのツールですね。Mixi自体は4、5年やってるんですけど、保守系に入りだしたのは3、4年前になるんですかね。ネットで（保守関係の情報を得るの）は、Mixiですね。保守系のコミュニティとかばかり入ってたんで。やっぱり、おかしいことをおかしいって主張しなかったから——日本人は——ここまで「朝鮮人の団体が大きくなりすぎてる」ってのは、ずっと思ってたんで。どっかで声上げていかないと、もっともっと大きくなっても困るし、というのがあったので。

民主党が政権をとりそうになったときは、特に保守系のコミュニティが盛り上がりますんで。外国人参政権に反対するコミュニティとか、いっぱいできたんですよ。そこで「ビラ配りをしますから協力できる人は来て下さい」というのが近くであったんですよ。それは在特会ではなくて、保守系の人個人でやっているビラ配りだったんですけど、とりあえずそれには参加しました。飛び込みで参加しました。（テーマは）参政権でした。それが一番最初ですね。それがちょうど2年前くらいですかね。（参加したのは）あまりに関心な人の方が多かったんで、その時は。何か1つでも行動しないことには、何ひとつ変わらないだろうな。本当だったら、日曜日にデモ行ったりするの面倒くさいですものね。でも「やらないといかんだろうな」っていう……。

うちの団体は、明確に目的を掲げて団体名にしてるわけです。「在日特権を許さない市民の会」である、そこはまあ、もちろん自分が同調するから入ってますし。でも日本でいえば、在日の人らの勢力があまりにでかすぎるかなと思うようになったので、在特会に入ったというのはあるんですよ。

（きっかけは）外国人の特権に反対する団体があるんじゃないかって思ってネット検索したら、正しくそれを団体名にしているような、この団体が一番最初にヒットしたので。もうこれは入ろうと思って。だから私、動画なんて見てないし、今でも動画なんて見ないですよ。「盛り上がってるから」とかね、そんな……じゃなく、「楽しそうだから」とかそんなのもまったくなく。すぐに入って——簡単に入れますからね。そうしたら、いついつデモやりますっていう情報がメールで来るようになるので、それで参加しましたね。（参加時には）ちょっと緊張しましたがけど——朝鮮総連前の街宣でしたんでね、あれね。

### （4）行為の持続

（初めて参加してみて）画期的でしたね。画期的だなと思いました。今まで朝鮮総連に

向かってやいやい言っていくような一般人、いなかったです。それをもう、「出て行け」だのねえ・・・真っ向勝負挑んでというのが画期的だなと。(右翼とは) 違いますね。右翼というのは、うちは市民団体ですので、一般の人がどんどん増えていく形になりますけど、右翼は別に人増やそうとかそんなではないですよ。そういうところには入っていきにくいですよ。

慣れないことを初めてやりましたんで、緊張しましたが、やり終わった後にはやっぱりよかったなと思いました。(かつては) それ言ってしまうと、差別とか何とか言われましたし。やっと日本も、ここまで言えるようになったんだなっていう。画期的ですね、本当に。

(運動に参加して) いいことは、情報が早く回ってくることだと思うんですよ。いろんな人の話を聞いたりするんで。あとやっぱり、ギャラリーとかでも「応援してます」ってしてくれる人がちらほら出てきたとか。そこはやり甲斐あるかなと思いますね。

国の将来をものすごく心配してますので。国が心配なんですよ。その一言に尽きますよね。しょうがないですよ。戦後ね、日本というのは左に偏りすぎたと思うんですよ。それを真ん中に戻していきたいなと思います。右にまでいかんでいいんですけど、ちょうどいくらいまでは戻していききたいな。(国は) ずっと好きですけど、小学校くらいからですかね。戦争みても日本軍はかっこいいなと思いますし。(天皇のことも) 学校では教えてもらえないので、正しく「天皇陛下」って知識を得たのは18(才)とかですかね。自分で本読むようになってからです——日本神話とか。

なんで在日を糾弾するかっていうのも、大きくいうと日本のためによくはないと思うから糾弾するんですよ。在日特権というものを、廃止になるまで、なくなるまでやらなければ。折れるわけにもいかんし。(「在日特権」に急に関心を持つようになったのは) 昔は子どもだったというのもありますけど。最近になってぼろぼろと、「やっぱりあった、特権が」というのが出てくるようになってますから。それまでは出てきもしなかったようなものです。

(参加は) 自分の生活のほうが一番ですので、空き時間があれば活動するという感じで。自分の時間も大事です。 (周囲の人には) 隠してるわけではないですけど、あえて言いませんけどね。がちがちの話をするのは、友達にはかわいそうかと思うけど、ちょっと言われてしゃべったりすると、「ああ、日本ってそういういい国なんだ」って。友達でも一部ではちょっと分かっている子がいるから。そういう子たちは、何で活動には直結していかないかという、やっぱり保身のためもあると思うんです。動画撮られたりとか、そういうのもあると思うので。(周囲の人は) メール会員にはなっている子もちらほらいますけど、活動には出てこない。「会社の人にばれたら困る」とかありますか。私の場合は結婚してるので、自分が仕事をしてるわけではないです。だから会社にばれるとかそういうことはないですね。(夫は) 危ないんじゃない、という心配はしますが。「やりたかったらやったら」という感じですね。(誘ったりすることは) それはないです。

(人前に出るのは) やっぱりね、どんな嫌がらせされるかもわからないわけですから、できれば本当にデモとか行きたくないんですけど。行かないとしょうがないかな、という感じですよ。どこでどういう写真とか動画をさらされるかもわからないです。なので、ストレス発散のためにやるとか、寂しい人たちがやると、在特会を叩きたい人はそ

う言うんですけど、ストレス発散のためにここまで大きいリスクは普通犯さないと思うんですよね、私。顔さらしてるわけですから。(それに対して)抵抗はあるんですけど、だからといって黙っているわけにはいかないですよ。

仮にもし、嫌がらせとかを受けないといけなくなったとしても、国の将来を思えば行かないわけにはいかないということですね。結局、原動力はそこに直結してくるんですよ。選挙権を得てからちょっとずつ考えるようになってきましたね。一歩ずつとは言わずとも、半歩ずつでもいいから、ちょっとでも変わっていけるように。

### (5) 外国人参政権について

民主党が政権を取りそうになった時くらい、ですかね。3年くらい前ですね。(知ったのはネット)もありますし。すごく関心のある友達とかは、「こういう法案って危ないよね」って言うてくる子もいたので。(その人は)全然普通の一般人ですね。「外国人参政権っていう話はおかしいと思わない?」って。おかしいと思いましたし、話聞いてて。(民主党政権に)なる前ですね。(自分にとっては)最重要事項ですよ。法案が通ったからといって、1、2年でどうこうということはないと思うんですけど。まあ、10年20年30年先を考えると、日本が日本人のものじゃなくなりますよね、あれって。徐々に徐々に——このご時勢に大東亜戦争みたいな戦争というのは、あんまりありえないかと思うんですよ。軍隊使つてという…。

ただ、こういう形での侵略っていうのはありえるかなと思うんです。地方では朝鮮総連が…(そういう)集団みたいなものの意見ばかり聞くような議員が出てくるだろうし、それは国政にも関わってくるし。どうしても参政権というんだったら、帰化してもらおうほうがいいかなと思います。朝鮮人の場合は、帰化してもらったところで信用できない部分はやっぱりあるかな、と思いますけど。ただ、でもまあ、帰化すれば日本人と同じ権利は当然彼らにも与えられるわけですから。

無責任さを感じるんですよ。何かあったら別に自分の国に帰ったらいいよって感じですよ。日本人として生まれて、今後日本がどれだけぐちゃぐちゃな状況になろうが、日本と共に生きていくしかないですから。責任感というのがあんまりないんじゃないのかな、外国の人に参政権を与えても。三世四世五世にまでなって、ずっとこの先も日本で生きていくだろうけども、帰化しないというのはよくわからないですね。親の国籍は変えがたいというのは、わからんでもないけど、ずっと日本で生きて日本で死んでいくのであれば、やっぱり日本国籍をとったほうが絶対いいだろうし。

### (6) 小括

P氏は、幼少時からの歴史修正主義的傾向を根っこに持ち、在特会へと引き寄せられた。テレビの戦争番組を好み、教科書で取り上げる「論争的な歴史的事件」についてまで記憶している。これは別に彼女が学校文化に親和的だったからではなく(彼女は、学歴的にも職歴的にもエリートとはかなり遠いところにいる)、歴史記述に対して幼少の頃から常ならぬ関心を示していたことによる。それが当初はMixiを介して、その後には在特会での直接行動を通して表に出るようになっており、「思想的なキャリア」は他のメンバーと比べても長いといえる。

こうした志向は、祖父母や両親から継承する場合もあるが、P氏の場合は異なっている。彼女自身の意識では、教育に対する個人的な反発が存在し、それが変わることなく現在に至っている。さらに、「在日コリアンが強制連行された者の子孫というのは嘘だ」という、在日コリアンの自己規定をそもそも歪曲した言説の受容を介して、歴史修正主義が排外主義へと転化されていく。その一方で、彼女は愛国心の強さや天皇に対する敬慕の念も持っており、それが排外主義を強化する材料ともなっている。歴史認識の問題は、排外主義運動に至るもっとも有力な経路であり（樋口 2012f）、過去清算の失敗が戦後 60 年を経て運動を生み出したといってもよい。こうした排外主義を掲げる政治勢力が、今後日本で出現するかどうかはわからない。が、民主主義の生み出す悪夢ともされる極右政党の出現を予防するに際して、日本の場合は近隣諸国との根本的な関係改善が不可欠であることを、彼女の事例は示唆している。それは、彼女をはじめとする潜在的な在特会支持者が持つ「愛国心」を最悪の方向にむけないためにも必要なことと思われる。

## 17 1人で街宣していた動画に引き込まれたQ氏の場合

### (1) 政治に対する関心

あまりないです。元々（関心が）あったわけではないですし、在特会に対しての関心を持ち始めたっていうのは、インターネットでたまたま見たっていうのがきっかけです。投票には必ず行ってました。やっぱり、その時点からある程度やっぱり自分の意志っていうのは政治に対しては示す必要があると、誰でもいいという周りの思想自体が——当時よくあったんです。今でもよくあるんですけど、誰でもいいというわけではないはずなんですよ、やっぱり。で、当時からその辺は考えてた。投票に行く前にはある程度、その政治家の地域の者だったり公務員にその辺の情報はある程度仕入れて、誰に投票するかはある程度決めてます。二十歳の時はまだ学生だったので。ただ、その辺はきっちりやっていたと思うんですよ。

投票する政党は、基本的にはやはり自民党になるかと。ただ、自民党自体もダメなところも結構あって、疑問はしてたんです。疑問は持ちつつも、他に代わる人たちがいなかったというのがあって。逆に、人は別の——いわゆる共産党系の人だったりに入れたり、その時その時で変わるのですが、その人が言っていることが正しければその人に入れて、政党としては自民党に入れて。

（どこに不満があったのか）自民党の——その時その時で考えが変わってくると思うのですが——何ていうんでしょうかね。結局その時はマスコミしか情報がないもので、そこがメインとなるわけですが、ここがいやっていうところが必ず1つか2つ出てくるわけじゃないですか。まあ、すべての政党そうなんですけど、その割合ですよね。ここは許せるけれども、ここは許せないと。そういったものを考えていくと、やはり許せるものを選択していくと、自民党にならざるを得ない。そういう形で選んできたっていうのがありますね。

まだ学生時代の時は、別に保守主義とか民族主義とかそういったものは、まったく感じていませんでした。考えもしていなかったという。どちらかという、右左あんまり考えてなかったっていうのが正確かと思いますね。まあ、今でもそんなに右の考えでいってるわけでもないと思うんですけども。いろいろなもので取捨選択していくと、自民党しかないかなと。当時は、どちらかという社会党とか共産党の方が興味があったというのがありますけど。やっぱり生活していく上で、彼らの方がいいこと言ったりするものだから。

（投票先や政治意識の変化）投票先は、後で変わったというか、たちあがれ日本が出てきてからそこ——今まで自民党一辺倒だったのが。前々回、新風の方から人が出たんで、その時は瀬戸さんが出られましたんですけど、その時は瀬戸さんに投票しましたが、それまでは自民党。たちあがれ日本が出てからは、たちあがれ日本にか。自民党に対する不信というのはずっと持ち続けてましたんで、そこで天秤かけて「どうだろう」って。他がなければ自民党に入れるしかないと思いますけどね。自民党に対してもうちよつとものを言える状態に、どうにかして仕組みを作っていくかといけないのかな。でないと、また同じことの繰り返し。やはり自民党は一党独裁をやってきたので、一党独裁になると結局腐っていくじゃないですか。ならどうにかして浄化する仕組みを作らないといけない

かなと思いますね。

私の兄がですね、労働組合の役員とかやっています。逆の——反対側の人達の方を見てたって感じです。まったく（社会運動を）意識してなかったわけではないです。彼らの言うことも理解できますし——おかしなこと言っても。やっぱり向こうの人たちの言うところは、感情論が一番最初に来ると思うんですよ、理屈云々の前に、一番最初に何かあると「かわいそう」とか、人助けの意味合いが最初に来ると思うんですけども。

でも、そこだけ言ってしまうと社会として成り立たない。何でもかんでも救えるっていう、そんな社会ってないわけです。やはり誰かが切り捨てられる、残酷なようですけどそういう社会ですよ。彼らの言うことも理解はできるけれども——気持ちとして理解できるけれども——やはり違うだろうというところもあるわけです。理想は理想としてあっていいんですが、現実ちょっと理想と違うでしょ、という。なので完全に毛嫌いしているわけではないですし、「ちょっとおかしいよね」という、理解できるところは理解できるし。正しいと思っていることは正しいと思うし。

兄貴が左翼——やっていますんで、ある程度の口論する時はあります。ただ、ここは交わらないというところは必ずあるんですね。「ああ、この人とは交わらないな」というところが、そこは話しても無駄なのでしゃべらないです。ただ、話して理解できるところは理解できます。お互い歩み寄れるところは歩み寄って。

## （２）外国人との接点

住んでるところではないですね。あ、いました。いわゆるジャパゆきさんと言われる外国人の女性の結婚された、その人たちの子孫と、一応交流というか……おりました。特に別に何かあるわけではなくて、という。最近ですと、ロシアの船が結構来てますけど。地元の方ではロシア人との混血児が結構出ます。

外国人嫌いというものでもなかったですね、当時は。嫌がらせされてる問題もないですし、外国人に何されたということもないです。特に何かされたわけでもないですし。別にその辺で暮らしてくんだから、別になんともないと思ってましたけど。特に外国人が悪さをしているという情報もあまり入って来てないですし。特に関心はなかったというのが一番だと思いますね。

若干あるのが、地元の方だと浜辺に住んでたんですが、浜辺のとある場所って行っちゃダメっていわれるところなんです。北朝鮮人にさらわれるって場所があるんですね。昔から言われてる場所です。子どもの時はそこに絶対入っちゃいけないって。防風林って松の林があるんですけど、そこには入っちゃいけないってのは、子ども達も絶対入っちゃダメ。さらわれるからダメって言われる。でもただそれって、まだ言われる前くらいだったですね。拉致がまだ言われる前くらいのころから言われてたんです。なので、地元——あの辺の付近の人はやはり見かけてるんですよ。北朝鮮人の怪しい船とか、そういうのを見かけてるんです。ただニュースにならないだけで。だからそういうのはあったんですけど。ただ、子どもなんでそんなのは気にも留めないですし、北朝鮮——何言ってるんだろうってわからないですから、理解できてないです。後々考えると、「ああ、そういうことにつながるんだな」という感じはありますけど。

（拉致問題のときは）よく認めたなというのはありましたけど。5人帰したのは奇跡的

だなと思いますけど。ガンとして「拉致してない」の一点張りにするのかな、と最初は予想してたんですが、あっさり認めたんで「ああ、すごいな」と。ただ、我々のところでもあったように、そんな5人で拉致が収まるわけがないんですよ。言われてるだけで四百何人かいますけど、多分もっといると思うんですね。その人たちって多分、向こうで暮らしてるんだろーとは思いますが、帰りたいとは当然思うと思うんですよ。で、これからどうやってそれをやっていくんだろーっていうのは、やっぱりありますね。自分がその場所に行ったとき——近いですからね、私ももし子どもの時そこで遊んでたとして、さらわれた場合、可能性としてはあるわけですよ。やっぱり身近なところにそういうのがあると、「ちょっとな」と思います。

(従軍慰安婦については) 関心は持ってましたけども、情報を調べていくとずるずる芋づる式に出てくるわけですよ、それに関連する情報が。これはちょっとまずいだらう、この人だけがこんなことを言っているかという、他の人も言っている。それを——確かに情報を見ていくと、証拠となるものが一切ない。逆に、人員募集している証拠が出てきた。じゃあ、どっちが本当かといったら、当然証拠が出てきた方が正しいだらう。ただ、他の人の証言も、話もありますんで、その話を考慮していくと、やはりこっちはどう見ても嘘。そういう感じで1人だけですが情報を採集して行って、自分1人で——どこまで検証っていうとあれですけど——ネットからの情報なので疑問なところもありますけど、そこで判断して。

### (3) ネットでの鑑賞

(ネットは)IT関係に勤めてるんですけど、ネットから何から全部——あの当時 Windows とか出てきたばかりでした。そこから仕事で使うというのがありまして、日頃から情報仕入れる、勉強するというのが常にあったんですね。そうしないといけないというので。古い技術を覚えても、これがもう過去のものになるわけです。新しいものが出てきて、すぐ勉強しないと技術者としてやっていけないわけですよ。昔みたいな技術者は1つ覚えればそれだけ勤めれば良いというわけではなくて、IT技術というのは新しいもの全部取り入れなければならない、それは大変ですけどね。それもあってインターネットもできてからすぐつないで、情報を仕入れるというのはよくやってました。とりあえず興味を持っているいろいろなものを見る、というのは当時からやってたことですね。

きっかけとなるのは、ある方が動画で配信してたんです。動画が Youtube で載ってたんです。何をきっかけにあの動画を見たかという、たまたまとしか、偶然見かけたとしかいえないです。インターネットサーフィンで、ぼちぼちただ見ていただけです。たまたまクリックした動画がそれだったっていう。過激なことを言ってる人がいる、みたいな感じで載ってたのかどうなのかわからないんですけど、何かのリンクで飛んでいったんですね。それで見たんです。

その Youtube で載ってるのが一番のきっかけですけども。その人が発した言葉ですね。その発した言葉によって、「この人なに言ってるんだろー」というのが疑問のきっかけですね。疑問から出た、「そんなこと本当にあるの？」というのが最初ですよ。まあ、その疑問からずんずん調べていくきっかけになるわけです。そこからずんずん興味を持って、外国人問題とかそういったものも調べて行って、過去にこういう犯罪があったりとか、今で

もこういうものが横行していると。

(最初に動画をみたのは) 2006年くらいだったかなと思うんです。そこで、もともと面白い芸をやっている人の——鳥肌突ってという芸人がいるんですけども——その芸人が面白かったのが、ちょっとあったのかなというのもあるんですけど。その後ちょっと——その動画というのが瀬戸弘幸さんという方だったんです。その方が動画で1人で話してるんですね。1人でしゃべってて、その時は創価学会に対する批判を言ってたんですね。(創価学会に対して特に関心は) ではないです。知り合いにも創価学会員がいますんで、特にどうこうする興味持ってるというわけじゃないですけども、ただ批判してるのがすごかった。その人が、よく1人で言えたなっていう。創価学会を批判できるってすごいなあと。やはり地元でも創価学会に対するそういうこと(批判)は若干タブー視されているというか。みんなしゃべっても知らないふりをするっていうのが、田舎のほうでもあるんですね。なので、カルト宗教というのが地元でも根付いてるというか、なのであまりその辺の言葉を普通の人も言わない。しかもそれ言った人は何かされるっていうのが、まあありますんで。

その人が1人で、しかもやっていたというのが一番最初の興味を持った動画です。すごい興味が湧いた、この人はすごいな、面白いこと言ってるし、この人殺されるんじゃないかと思って。そんなことを言って大丈夫なのかな、いつ殺されるのかな、と見てたんですね。この人いつ殺されるんだらうと、ちょくちょく、その頃から瀬戸さんのホームページを——いつ止まるんだらうというのもある。興味を持って読み始めた、面白いこと言ってるなというのが最初に意見ですね。

その後すぐに政治の話を、外国人、朝鮮人の話もされて。そこから調べて、気になって調べたというのがあるんですけどね。裏付けるものもいろいろ出てくるわけですね、いろいろ調べて。そういう悪いことあったんだというのが。まあ、一番許せないとなるのが、やっぱり税金を支出しているってことなんです。それって国民1人ひとりが関わってくることなんです。なぜ外国人に対してそんなお金が支出されてるんだ、というのが怒る原因になって結びついてくるわけです。その時それを見なかったら、私はここにいないですし。この運動に参加しようとも思っていなかったです。

その後ですね、「行動する保守」として瀬戸さんと今の在特会の会長の桜井さんと、主権回復を目指す会の西村さんと、日本を護る市民の会の黒田さんと、この4人が——黒田さんは後から入ってきたんで、3人の頃から見出したというのが。そこから最初にやったのが、ニコニコ動画ができてそこから動画を見出したという。ただその当時は、在特会に対してはそれほど興味を持ってなかったですね。どちらかというとな瀬戸さんの方にメインがあったという、最初から見ましたんで。そこからずっと…。

在特会というか、「行動する保守」としての動画ですね、それを見てたんです。ちょくちょく見てました。やっぱり、街角で街宣する、そういったことは当時やってる人たちっていなかったと思うんですよ。その主義主張を街で街宣して言っているというような感じが、見て面白かったというのと、弁士の人が言う言葉も結構納得できたんで、それを聞いたかったというのもありますね。(動画以外で話をする) 人の主義主張が——会長の意見とか瀬戸さんの意見、行動する保守の人たちの意見は、納得する。「ああ、そうだな」というところもありますし、「違うな」というところも確かに。まったく全部受け入れるというのはしてないですね。



インターネットという媒体がなければ、多分成功しなかったと思いますね。個々で勝手にやってそのまま消滅していたと思います。継続していく、意志を受け継いでいく人もいなければ。何かの大学のサークルとかあって、そこから人を集めていくとか、何かそういう仕組みがない限り人は集まらないですからね。ですからネットがあって、ネットがあることで情報が伝わってと。私も、そこで見なければここにいませんし、活動にも参加しませんし、普通に生きてきたと思いますので。

#### (4) 在特会への加入

会員になったのは結構後ですね。(活動に) 入るちょっと位前ですかね、7000 番近いです。カルデロンの後くらいですかね。ただ、存在自体は知ってたんですけど、別に会員になろうとまでは思ってなかった。特に入ろうとも思ってなかったですね。見て興味を持ってましたけど、手伝おうとは思いましたけど、特に会員になろうとかそういったことはいいですね。手伝うのに会員になる必要があるのかな、とかちょっと思ったんです。後から会員になって、確かあの当時は会員じゃないと見れない動画とかあったんですね。それで「ああ、会員登録しよう」と思って。ただそれだけで、会員登録しただけなんです。

在特会に入る(実際に活動する)きっかけとなったのがですね、各地方の支部を作ったんですね。地元の支部ができるということで、とりあえず何か手伝えることがあればと思って、最初の集会に行ったんですね。ただ、人が集まらなくてですね、行ったらすごい目立つわけですね。あの当時、運営の方が3名と一般の人が3人くらいしか集まらなくて。

(実際に参加した)根底にあるのは、やはりそういう不正をなるべく——韓国人とか北朝鮮がやりたいようにやってると。このままではいかんだろうと。今までやりたいようにやってきたのをどうにかして食い止めるか、ちょっとでも抵抗になるものとして在特会がやってたというので。しかも地方に支部を置いてやるのは在特会だけだったので、在特会に応援しようということで行ったのがきっかけなんですけど。

ただ、運営に入ろうとは思わなかったですね。手伝えればいいかな、くらいで。地方でも盛り上げていこうかなというくらいで行ったのですが、あまりにも人がいなくてですね、いつの間にか……。その時ですね、しばらくしてから地元のほうでデモを行う、それは全国一斉の民主党の反対デモを行ったんですね。その時の地元でもデモやるんで、ニコニコの生放送のできる機材持ってるから手伝ってくれませんか、ということで手伝いますよという形で行ったんです。

参加して、もっといかつい人たちがいっぱいいるのかな、と思ったんですけどそうでもなくて、普通の人たちだった。ちょっとおかしい人たちもいることはいるんですけど、その人たちは想定外。その人たちが暴走しないように……。 (活動は) 街宣とかデモですんで、周知行為ですよ。ただまあ、インターネットで見られる人は見られるので、デモとか街宣とかやっても興味がない人はずっと興味がないままですからね。その辺はちょっと疑問に思ってますけどね。動画で、私のように偶然でもいいんで、それをきっかけにと思ってくれる人が1人でもいたらと思ってるんですけど。

そこからなぜかずっとですね。運営になるつもりはなかったんですけど、人がいないというのと機材持っていないので——当時他の運営の方ってまったく機材もってなかったんです。それで、その当時の支部長が仕事の関係で転勤になったんです。そこで人が少なくなると

いうのもありまして、そこで私が運営にならないかということで、お誘い受けたんで。まあ、それで運営になったと。

運営になってから、特に——皆さん働いてますので、社会人ですので、日中何かをしようとしても——道路使用、街宣やるにしてもデモ行進するにしても、道路使用というのは取らないといけないですし。そういった日中じゃないとできないと、申請するのに。ただそうすると、なかなかできないというのがあって。なかなか運動としては、そんなうまく進めなかったですね。時間休のある職場ってなかなかないと思うんですね、だから取るとすると半休いただいて——でもそんなにしょっちゅう休みはとれないですので、なかなか難しかった。

(周囲の人は) 家族には特に言ってないです。ばれているかもしれないですけど。ばれてても別にいいですけど。それで家族に迷惑をかかったら謝る程度でしょうね。若干の影響は出てくるとは思います。でも、それを言っちゃうと何もできないので、そうすると誰もできなくなっちゃうわけですから。誰もできないのはちょっとまずい。やはり必ず言う人がいないといけない。

私も、こっちに来たのが去年なので、こちらに来てまだ1年しかたってなくて状況もつかめてないんですけど。転勤で。活動のために来てるわけじゃないです、ははは。でも、本当であれば——できれば運営からは降りたかったんですけど。まあ、転勤をきっかけにうまく逃げようかな、とちょっとは思ったんですけど。

やっぱり人が多く集まってくれた場合は、今日は多く集まってくれましたねという、その辺くらいですかね、よかったなあというのは。チーム関西の勧進橋の問題とかありますけど——あれは完全に、奪回に成功したんです。あれは地元の人からの要請で、国も何にも動いてくれない、在特会というただの一市民団体を頼ってきている、それに対して皆さんが声上げて。今まで使ってきた公園を——グラウンドのように使ってきたんですけど、なくなっている。普通の公園に(なった)。それを考えると効果があった。あとは役所に対して物申したという。それでやっぱり、補助金とかそういったものが減ってますよ。補助金とかその辺の——今新たに来る人たちに対して、ストップがかかるいいきっかけになると思うんですね。

私の思想としては、右翼とか愛国的なところから入ってるものではないです。若干ですけど、何となくは彼らの意識的なものも伝わって来るので、感情としてはわかるかなと。どちらかといえば、右翼的な感じもちょっとは理解できたんですね。なので、それはそれでいいのかな——ただあの人たちってどっちかっていうと体育会系の上下関係のような、そんな意識が強いじゃないですか。どちらかという、民族意識とか護国とかそういったものよりも、上についていく——と言っていいのかわれませんが、上の人に従順に従っているだけなような気がするわけです。自分の意志でやってるのか、ちょっと疑問に思ったりします。

(在特会は) 完全に縦ってわけじゃないですし、自分の自由意思もありますし。そういう感じで言うと、自分の思っていることも伝え易いのかな。右翼になってしまうと、政治結社としても登録されてますんで、完全に政治団体になってしまいます。そこはちょっとやっぱり、考えが違うなど。多分自分の考えをそこで主張したとしても、全部消されてしまうわけですね。ですので、ちょっと行動は一緒にはできないというのはあります。神

社にお参りするのがある（護国）かな、というところと違うような気がしますし。

（在特会）そこまで組織だってやってるのかな、というところと違うような気がしますね。どちらかというと、個々の自由意思が反映されているような気がするんですね。ですので、社会運動となると確かに社会運動だと思うんですけど、本人の自由意思が入ってるのが違います。そこで自分がやりたいこと、主義主張したいことを言えるというのがありますし。会全体としての意識と思想と、個人としての思想は少し違うと思うんですけど、そこで個人の主張がある程度言っていけるところがあるので、そこは他とちょっと違うのかなという気はします。

（他の右派からの反対論は）在特会の主義主張というより、行動に対する意見だと思います。過激だとか乱暴だとか。そこだと思います。乱暴だとか反発があるんですね。私も乱暴なところには「うーん」と思いますけどね。人に周知をして集めてやっているのに、反発をもらったら周知も何もないんじゃないというのが、私は若干ありますけど。過激なことをずっとやってればいいかという、違うと思うんですよ。そうすると、過激なところを見たいプロレスファンと同じなんです。若干スライドさせていって、もうちょっと知識人を、一般の人たちをサラリーマンとかそういうレベルの人たちを取り入れて——共感持てるような形でやっていったほうがいいと思いますね。ただ、来る人たちは関係なく言っていますんで。

#### （5）「在日特権」への関心

（在日特権に関心が収斂した理由）まあ、税金が不正に取られていると。いわゆるゴネ得というもので、ゴネたものに対してお金が支払われていく。暴力的にといいますか、脅しみたいところを役所にやっていくわけですから。そこから今までやってきて、支出が何億とありますけど、やっぱりそれはおかしいだろうと。日本の国に行って日本の国のためにやっているわけではなくて、外国のためにやっているわけじゃないですか。日本の税金を使うのはおかしいだろう、自分達で稼いだ金でやるんだったら別に文句はないけども。日本の税金を取るという時点で、理屈としてはおかしいだろう。それをちょっとでもなくさないといけない。

あとはですね、在日朝鮮人については外国籍のまま日本に永久に続けるという、そこはいびつなものだと。どちらかいても、そこは日本としても外国人としても不幸が続くだろう。子孫に当たる人たちも縛られるので、日本にいるなら日本人として暮らすのか——そこも疑問のところもありますけど、彼らは逃げてきた人なんで。そうした人を本当に受け入れていいのかというのはありますし。ただ、どこかが受け入れないといけないので、そこはしょうがないのかなという気はありますけど。だから、その人たちが日本で悪さをしていると——ちゃんとしたまじめな人がいるのも当然聞いているし——悪さをしているのであれば、止めないといけないわけじゃないですか。ですので、そこで在日の問題、特権の問題というか、永住という問題ですね。永住というのをとりあえず無くさなきゃいけない、というのは私の在特会の方で活動していくメインの考えですね。

いびつな関係であると、ですのでここを解消するためにはどうやっていくかという、すぐにばさっと切るのは無理だということで、少しずつ勢力を国民の意識とともに変えていく必要があると思います。最悪としては——最悪といういい方はどうかと思うんですけど

どね——彼らが日本籍を取って日本国民として生きていくというのも、それはそれで私はありだと思いますけども。ただ、在日ということを利用して、今いろいろな特権を取得できている。彼らはそれで利益を得ているわけですので。それも含めてどうにかして止めていかなきゃと思っています。

(関心を持ったのは) 調べていくうちに、というところですよ。調べていくうちに、特権があって——特権があるというのは特権をなくしていけばいいんじゃないかというのがあるじゃないですか。ただ、その中身が永住ってなって外国籍のまま、それがしかも韓国人、北朝鮮人にも適用されていて、他の国の人たちには適用されない。どう見てもこれだけで不公平になるんです。そこだけ見ても引っかけます。調べていくうちに。何で朝鮮人だけ優遇されてるんだ。まあ、そういうのが引っかけって調べたというのがちょっとありますけど。

歴史問題もそうですけど、きっかけがそこですから一気に情報としては入ってきているわけです。今までほぼゼロだったのが、急に一気に情報が入ってくるわけですね。このネットの情報により。今まで何となくあったもの、気にもしてなかったものですけど、それがこれと結びつくわけですね。「ああ、そういえばそうだったな」というものが結びついていくんです。そうしますと、急に情報が入ってきて情報過多というか、処理できなくなっていくのはありますけど、そこで精査していったらなるんですけど。まあ、世界史とかそういうものは興味なかったというのがありますけども、元々外国とかあまりそんな興味がないというか、ありますね。そのきっかけをもとに、いろいろ調べていった。

(強く関心を持つのは) やっぱり、裏で悪いことしてるからです。自民党もそこはあると思いますけど、嫌なところですね。それって自民党を変えればすぐ変わるものです。「在日特権」は) お金に換算するとそれ(少額)ですけど。ただ、在日特権についてはなくそうと思ってもすぐなくならないんですよ。だからここが、負の連鎖といいますか、そこがありますので、その子ども達も、ずっとそれを引きずっていかないといけない、その不幸の連鎖をどこかで止める必要があると思うんです。と思うのが、(活動の) 一番の動機ですけど。

## (6) 抵抗勢力として

(続いてきた理由) やはり私としては、核になる抵抗勢力だと、長い間続ける必要があると思ってるんですよ。ですので、ある意味在特会がなくなってもそれに代わるものがあればいいと思うんですよ。在特会も名前がこれだけ知れ渡ったので、そこからつぶすのはちょっともったいない。私も、どちらかというところ「お手伝いしている」という意識なんです。お手伝いして、活動を続けていくことによって、少しでもそういった問題が解消してくれればいいと思っています。

思考自体が理系なので、政治に関してはそれほど興味はなかったですけども、やはり生活を——哲学的なものになるかもしれない、文系の考えになると思うんですけど——政治を良くするためには国民が意思表示する必要があります。そこから入ってきているものなんです。元々政治に興味があるかというところ、ないんです。やはり自分の生活を支えるものは政治になるわけじゃないですか。ですから、やらなきゃいけない、国民の意思をちゃんと伝える必要がある。そこからですね。

この一票投じたからといって——それは理系の考え方ですけど——必ずしも何できるかっていうと、請願書出したところではねられたら終わりなんですよ。だからあまり興味がなかったんです。(在特会は) 影響を及ぼさないかもしれないという感じはあったのですが、ただし在特会がその時点である程度抵抗勢力になっているというのを、はっきりと感じ取れたんですね。ですので、これは会として存在することによって、意味があるのだと。今日明日中に在日問題がすぐなくならないとしても、この会があることによって、いわゆる抵抗勢力になるんですよ。なので、今まで役所に対して自由奔放なやりたいことをやってきた人たちがですね、役人も在特会があるからという免罪符的なものができるわけです。在特会が言うてくるからダメですよといったら、向こうも引き下がる条件として成り立つ。逆にこちらとしても、役所に対しておかしいことはばしっと言ったら、やってみると思うんですけどね。ちょっとずつではありますけど。

思想という関係ではないんですね、自分は。自分の考えが正しいか間違っているかというのは、今の時点では多分わからないですね。ただ、自分の考えと合ったらこっち。そう考えたら、主張している人と私の考えが合っていると、「合ってるね、そうだそうだ」って。「行動する保守」の人たちと考えが合っている部分が多い。ただ、違うと思うところも結構あったりするわけですね。で、在特会はなくしちゃいけないというのが、根本的な——ここにあるからこそ抵抗勢力になるんだ、唯一抵抗できるのがここしかない、と。

そこが自分としては守らないといけないと思うんです。国を守るといってちょっと大げさなんですけど、そういうのがないと——中国とか韓国にしてみれば日本をほしいわけじゃないですか、どうにかして。日本をどうにかして自分の方にうまく引き込みたいと思ってるんで、そういう工作とかいろいろやってくるわけですけど、そのままではいけないと。私の意見としては、アメリカの言いなりになってる日本というのも、あまりよくないと思います。やはり日本という国があって成り立ってるんですから、日本は自分の意思で、自分の足で立たなければいけないと思ってます。アメリカにもやりたいようにやらせてる、というのは良くないと思ってます。

本当はやることはいっぱいあるんですけども。それでもやらなければならない。世間の批判も結構ありますけども、それでもなくしちゃいけないという思いが強いのでやっています。このままずっとこれが続いていくのか、個人的には疑問に思っています。一般の市民の意識のレベルが、ちょっとずつ変わっていると思います。去年の夏のフジテレビのデモとかそういった問題もありますし。それから一般の人の意識が変わってきているのかなと。昔は、2ちゃん(ねる)とかあったんですけど、そこで朝鮮人に対する反対の声って以前はなかったと思うんです。大っぴらに反対するケースは。今は普通に反対する人が出てきてますし。今の若い人は基本的にインターネットする人たちなので、今の若い人たちが情報を得ているので、その人たちがどう情報を得るかで今後かかっているなという気がしますね。

## (7) 外国人参政権について

(存在を知ったのは) 外国人参政権に反対する市民の会とか、東京でやってたんですね。その方がやり始めてからです。でも、その以前から地方の方でもある程度ささやかれていたんですが、そういう情報が流れてきたんですね。それはちょっとうまくないね、という

話をするくらいですね。(在特会に接触する前から) ある程度は知ってましたね。

外国人参政権(が問題)となるのは、外国人は外国人じゃないですか。自分の国に帰れるわけですよ。ある意味、他の方が日本に来て、日本にいいように政治を変えられる。これはちょっとある意味恐ろしいことだと思うんですね。簡単に言ってしまうとスパイを堂々とできる感じになってしまうんですよ。それはちょっとうまくないな。ですので私の考えとしては、基本的に反対ですね。外国人が自分の主義主張をしたいのであれば、自分の国に言えばいいだけの話なんです。それを他国に言うのはちょっとおかしい。ですので、参政権を与えるというのは、ちょっといかなものか。

参政権ではなくてもものが言いたいのであれば、意見を役所に出すなり、そういったところで市民の意見を聞く窓口が必ずありますのでそこに行って、精査するかどうかは役所のほうです。ですので、そのところの仕組みとしてはあるわけなんで、政治に対してものを言うというのはちょっとおかしいと。生活を変えるのであれば、役所のほうに意見を言ってくれ、と。

(参政権に対して) あまりそこまで関心はないですね。できればそれに対しては、でもまあ似たような感じですかね。そこまでは関心は高くはないですけども低くもない。通しちゃいけないとはいけないとも思いますけど、通ったからといってすぐさま影響力があるかという、そんな人数いないわけですから。そこまで影響力は思うんですね。一番その辺を考えると、民団とかそういったものから支援を受けている議員さんですね、民主党、自民党両方ともいらっしゃると思うんですけど、そういう人をうまく排除していかないといけない。

## (8) 小括

Q氏は、特に保守的な家庭に育ったわけではないが、自民党一辺倒だったという意味で保守的な部類に属する。とはいえ、瀬戸弘幸の動画を偶然見るまでは、排外的な意識を持っていたわけでもなく、「東アジア問題」が在特会への参入経路になっていることが多い他のメンバーとは異なっている。「反日諸国」に対する言及が多い他のメンバーとは異なり、彼の関心はあくまで「国内問題」としての「在日特権」にある。

また、彼自身は会の中では穏健派の部類に入るといってよい。「下品」な「ヘイト・スピーチ」として強く嫌悪される在特会の状況を理解し、過激路線の追求よりはソフト路線により支持を広げたほうがよいという立場をとっている。だが、Q氏自身が関心を持つようになったきっかけは、過激な創価学会批判の動画であり、そうでなければQ氏は自ら述べるように「普通の生活」を送っていただろう。その意味で、穏健路線をとった在特会はネットで耳目を引くことが困難になるから、過激路線の放棄は難しいと思われる。

## 18 職場にあった産経新聞を気に入ったR氏の場合

### (1) 政治に対する関心

人よりはあったと思うんですけど、今ほど関心があったというわけでは……。会社に入ってからですね。思想的にだんだん右寄りになってきたのは、会社に入って2、3年たってからで。最初はノンポリで、あまり関心がなかったですね。選挙権持ってですね、(最初の頃は)よく覚えてないですね——選挙には確か行きましたね。県知事選で行ったのが最初ですね。ちょうど知事が叩かれたんですけどね、それで革新の知事に代わった。

その頃から、ちょっとマスコミに対して不信感を感じて。いろんな新聞取ってたんですけどね。朝日新聞から毎日、読売、地元の新聞。どれ見てもなんか……特に朝日新聞はひどいなと思ったんですけどね。産経新聞は、あまり売りに来ないんですよ。会社に入って(会社でとっていた)産経新聞を(自分でも)取るようになってから、一番面白かったのが産経新聞だった。他の新聞は、いまいちだなと思いつつながら、テレビ欄があるから取ってたというのがあって。テレビ欄があるから取ってたという程度ですね、新聞は。

(右寄りになったのは)産経新聞を読むようになってから、だんだんそういうような考え方になったんですね。それ(会社にあったの)がきっかけで取るようになったんで。今まで前に取ったことがない新聞だから、とろうという気になったんでしょうね。まあそうですね、会社に入ってからですね——もう20年以上前か。つまり、考え方的にこう——合致したんですね。ノンポリといいながら、若干保守的な考えがあったのかもしれないですね。

(産経新聞をよむようになってから選挙には)必ず行くようになりましたね。自民党か——自民党に入れた時期もあるし、民社党に入れたりしましたね。組合が民社党系だったので、民社党に入れたんです。引越しが多かったんで結構行けないときが多かったんですけど、行ける時は本当に行ってます。(民社党がなくなってからは)自民党ですね。まあ、この間はたちあがれ日本、参院選挙のとき。

### (2) 外国人との接点

(小さい頃は)なかったですね。会社に入ってから、ありましたね。あとは英会話の授業があったから、それくらいですね。大学の授業で英会話してたんですね——ほとんど、半期受けただけですが。会社に入ってからですね、外国人と仕事関係で。(活動とは)それはあまり関係ないです。本当に仕事の話しかしないですし、政治的な話はしたこともないし。

(外国人問題に関心を持つのは)以前はあんまりなかったですね。そういう問題があるということ自体、あまり……。拉致問題は、関心はありましたね。(外国人に関心を持ったのは)それはやっぱりチャンネル桜見てからですね。それまでは、在日韓国人とか朝鮮人とか接点が、私自身全然なかったんで。あまりぴんとはこなかったんですね。その意味では、やっぱ民主党が政権とるようになって、いよいよまずいなということでしょうか。

### (3) 活動につながるきっかけ

民主党が政権をとることになってですね、初めて街宣に。民主党が選挙にかかった2年前の8月ですね——31日ですか——あの時の街宣が最初でしたね。それまでは、全然そうい

う——考え方としては保守的な考え方があったんですけど、チャンネル桜見たりとかその程度ですね。危機感を感じたというのは民主党が政権をとってからですね。

(チャンネル桜は) 元々スカパー見てたんですよ。スカパーにとって、それでまあ気づいたんですね。始まった頃からスカパー見てたんですよ。最初の頃は全然そういうチャンネルがあるって知らなかったんです。何かの時に見て、それ以来見るようになって。それからチャンネル桜、地元で活動してないです。(地元にないので) チャンネル桜みただけで何の活動もしてなかったんですけど。

在特会があるというのを知って。民主党が政権取る直前くらいですね、その前くらいですか。最近です。最初はね、弟から聞いたんですよ。そういうのがあるって。それでネットで検索する、それで見て参加して。参加したのは、民主党の街宣が一番最初です。民主党が政権取る直前の、2009年の8月、それまで全然知らなかった、在特会の存在自体を知らなくて。

東京の2009年の8月の街宣が一番最初です。たまたまね、なんでだろう、出張に行っていたか単に遊びに行っていたのか覚えてない。出張で行くことがよくあるんですけど、たまたまその時に東京であって。ちょうどいい、なかなかそんな機会はないと。東京に住んだこともありますから(土地勘もある)。あの時は主権回復(を目指す会)と一緒にしたね。今は別々ですけども。(運動参加は)初めてですね。最初は、どういう人がいるかと。(参加してみても) まあ、いろんな人がいるなあと思いましたね。結構若い——一番年上だったのは多分村田さんだと思いますけど。若い人がいて。その時はね、会長がいなかったんです。八木さんがいましたね。あとは覚えてないですけどね。(参加には) 多少抵抗はありましたよね。(でも) 何かやらないとまずいかなという気があったし。どういうことやってるか知りたい。

(参加したのは) 外国人参政権がまずいなと思って。ヨーロッパの外国人参政権と全然違いますからね。ヨーロッパは基本的に EU 圏内しか認めてないじゃないですか。オランダは違いますけどね。EU は外国人参政権といっても、彼らにとっての外国人というのは隣の人、あまりそういう感覚で外国人参政権といってもね。日本のおかれている状況、周辺国の状況、同列に扱うわけにはいかないじゃないですか。(そうしたことは) チャンネル桜で言っていたんです。外国人参政権という考えがあること自体、知らなかったんで。(知ったのは活動に入る) ちょっと前。本当に直前、半年前。日本の場合の外国人というのは反日的な人が多いじゃないですか。親日的とはいわなくても、せめて反日的でない人にしてくれ、と(いう気持ち)がありますけどね。日本に対して領土的野心を持っている国だとか、ヨーロッパではないじゃないですか。まあ全然根本的に違う。

その後しばらく何もなかったんですよ。地元のほうで活動があるというのは何となく知ってたんですけど、なかなかうまくいかなかったんですよ。半年ちょっとあいたんですよ。なかなかイベントがあるところは遠いというのもありましてね。機会をうかがってはいたんですけどね。なかなか、遠いから面倒くさいなというのもあったんですけどね。だんだんこう、いよいよまずいな、鳩山政権でまずいなということになって。やっぱ参加せないかなと思いました。

(最初に) 民主党の街宣に参加したときは(支部を) まだ知らなかったですね。(地元では) 最初はね、街宣じゃなかったんです。(東京の) 街宣で在特会に参加したんですけど、



(地元で)勉強会みたいなのがあったんです。それが去年の6月くらいでしたね。勉強会というか、街宣より参加しやすいじゃないですか、敷居が低いというか。その翌日もね、街宣があったんですよ。2日連続で参加して。土曜日に勉強会があって日曜日に街宣があったんです。

(在特会に入ったのは)あまり選択肢がなかったんじゃないかな。チャンネル桜が地元でやってたら、そっちの方に先に入ってたでしょうね。そういうのがなかったです。(チャンネル桜も在特会も)考え方は一緒ですから。その意味では抵抗感ってなかったですね。

(外国人問題にかかわるのは)在日といっても、基本的に韓国人、朝鮮人ですよ。法律が守られてないというのが一番問題かな、と思うんですけどね。特権が与えられているのはおかしい。他の外国人はないじゃないですか。中国人だってない。朝鮮人だけというのは、それはやっぱりおかしい。基本的に、それ(在日関連)以外のこともやってますよ。もちろん、中心は在日の朝鮮人の特権問題なんですけど、それ以外の問題もやってますんで。そればかりやってたら、ネタがないですからね、実際的に。街宣やるにしてもね。いろんなことやってますから。基本はそう(在日関連)ですけどね。

#### (4) 活動の継続

もう顔も覚えられたし、ずるずると…(参加するようになった)。まあ、そんなに抵抗感もなかったんで、まあいいかな、と。思想的に近い人ばかりだし。思想的に近い人と話していると気も合うしね。なかなかね、そういう人っていないんですよ、身近に。

(参加するのは)月1回か——1回もいかないかなあ。最近は多いですけどね、最初のほうは1、2ヶ月に1回くらい。運営側になってからは、立場上、頻繁に行ってますけどね。月イチくらいか。(運営を引き受けたのは)副会長に言われて、結構軽い気持ちで、しばらく——1ヶ月、2ヶ月くらいかな、1人支部で。で、地元で街宣やるというので、そうしたら4人集まりましたね。今と同じメンバーです。(支部では)あまりネタがないですからね。それでも今年になって3回やりました。4ヶ月に1回くらいは、やってますよね。

(当初のイメージとのギャップ)そんなにはなかったですね。人は大分入れ替わりましたけど。(参加し続けるのは)まあ、義務感みたいなものですよ。こういう運動を始めてしまった以上、続けざるを得ないというんでしょうかね。運営側になった以上、放り出すわけにはいかないし。でも、地元の支部は最初の頃からずっと同じ人が(続けているので)、そういう時は楽っちゃ楽ですよ。他の支部は、いろいろとごたごたがあるとは思ってますよね。面倒くさいことがあったら、やめましょうというのものもあるかもしれないですけどね、そういうのも今のところないですし。

朝鮮人学校の問題がね——我々の活動のせいかわからないですけどね——結構大きな問題に発展して補助金が切られたとか、よかったかなあ。ほんのわずかなんですけどね、若干でも進歩があったかなと思いますね。まあ、独身ですからね——前は結婚してたんですけど。独身になってから、やりたいことやる、言いたいことを言う、我慢することはない。(独身になったから活動しているというのはあるのか)まあそうですね、家族がいたら難しいです。独身の人が多いです。

#### (5) 小括

R氏は、現在は出身地の近くに住んでいるが、就職以来転勤族で各地を渡り歩いてきた。大手企業に勤める転勤族という点で、彼は新中間層の上層に属しているといえる。離婚を経験しているが、それ以前から保守的なイデオロギーを身につけており、剥奪が彼を運動へ向かわせたとはいえない。彼自身がいうように、家族がいなくてさまざまな制約が無くなったことが、運動参加を促したと考えたほうがよいだろう<sup>3)</sup>。彼の場合、インターネットで偶然に排外主義へと取り込まれたわけではなく、産経新聞とスカイパーフェクトTVのチャンネル桜という制度化の度合いが高い経路を経ている。参加のきっかけも、「外国人問題」ではなく「民主党政権」という保守派の「正統な」危機感を反映している。その点でも在特会の多くのメンバーとは異なっており、地元にならざるに在特会以外の保守系団体があればそこに取り込まれていた可能性が高い層だといえる。その意味で、彼が使う「反日」という言葉も、インターネットを通じて自らの語彙としたわけではなく、2000年代に保守系論壇誌が「反日」という表現を頻繁に用いるようになったことを反映している(cf. 上丸 2011)。

彼が外国人参政権について述べる反対の理由も、「参政権で国が減じる」といった類の極論ではなく、欧州とは異なる日本の地政学的要因であった。外国人参政権を付与したとしても、たとえば韓国籍や中国籍の住民が反対派の憂慮するような行動をとる可能性は、実質的にゼロと考えるのがまともな社会科学の見解である(樋口 2011)。とはいえ、外国人参政権に反対する論理の有力な1つとして、2国間関係が良好でないことが西欧でも掲げられている(e.g. Hammar 1990; Rath 1990)。彼が言う「欧州と日本は違う」という論理は、極論を排した後も解決を要する問題として存在するだろう。こうした相対的に説得力のある反対論は、彼が右派の中でも相対的に地位を確立したメディアにふれていることから生じたと思われる。その意味で、R氏は在特会の他のメンバーよりも保守系メディアの読者たる高齢層に近いタイプであり、アクティビズムという点で在特会と親和性があったといえる。

---

<sup>3)</sup> 結婚はかなり微妙な問題を含んでいるため、明示的には全員に対して質問していない。ただし、話題の中で出てきた限りでは結婚している者は少数派だった。

## 19 カナダで変わったS氏の場合

### (1) 政治に対する関心

政治そのものに関しては、いわゆるノンポリ。ただですね、行動する保守だとかそういう人たちがよくいう愛国心——愛国心云々ということに関してはあまり意識してなかったんですけど、昔から持っていたのは愛校心なんです、学校の。今でも小中高ぐらいい普通校歌を歌えますし。もともと野球やってたんです。少年野球。小中。高校は硬式だったんですけど。その多分ベースがあって、今のこういう道に入ったんだなと思っております。

それとですね、多分これ——少年野球とかりトルリーグとか、実際にされたことがある人間の大体が教わることだと思うんですけど、一番最初にチームに入って教わることというのは、キャッチボールのやり方でも素振りのやり方でもなんでもないんです。何を教わるかという、「グラウンドには野球の神様がいて、君達はその野球の神様に野球をさせていただいているんだ」と、「だからグラウンドには常に礼を尽くしてグラウンドはきっちり整備をしなければいけない」という教えをまず受けるんです。ある意味これっていうのは、今にして思えばですけど、まあ神道の考え方に近いのかなと。そういうような積み重ねがあって、愛校心だとか人の英知を超えた何かに対する敬意を少し学んでいったのかな、と今にして思えばですけど、そんな風に考えています。

(成人した時に) ちょうど都知事選がありまして。青島幸男さんが都知事になられたあの年の選挙、生まれて初めての選挙で、その時には行きました。出席率 100%ではないですけど、6割7割の確率で多分行っています。ただそれっていうのは、誰それに入れたいというよりは、国民の権利というより義務という風に考えておりましたから、選挙は。その中で、もちろん当然考え方はそんな程度でしたから、白票入れたこともありますし、正直さぼってしまったこともあるんですけども、基本的には行かなきゃいけないというぐらいの観念は持って、一応は臨んでおりました。

あの時(都知事選の時) 確か黒木さんと言う弁護士出身の——確か共産党から出られた方だと思ったんですけど——あの方に入れました。というのも、あの頃共産党に入れてたたった1つの理由は、あの世代で唯一本格的に政権与党になったことがないというのが理由だったんですね。政権について世界を見てみたい。ここまでね——当時の考え方ですよ——ここまできれいごとを並べ立てる政党が実際に政権を取ったらどう政治をするか見て見たい。そういう考え方、浅はかといえ浅はかなんですけど、そんな感じでした。

(支持政党は) 特にはなかった。個人が例えば、こういったような理念を持っているだとか、こういった公約を掲げるだとかというのを——政見放送だとかってありますよね、大体それのみを見て選びます。政党がどうのこうのというかんがえ方は、正直なかったです。正直、どこそこの政党を支持するというのがなかったんです。どうしても有名な人がいるですとか、そんな程度でしたね。個人がいて、その人が例えば自民党にいるなら自民党。もうなくなっただけ社会党にいるとしたら社会党とか、さきがけならさきがけとか。

それこそ強いて言うならば、近所で同級生の子がいたんですけど、そのお母さんが学会の信者で。結構うちの方にも選挙のときよろしくね、みたいな感じで誘いはあった。それをすごくうちの母が嫌がって、その姿勢というかを嫌がって。公明党——毎度毎度うるさいなあ、嫌だなあという感情は醸成されてましたので。どこそこがいいというより、とり

あえず公明党はうざったくて嫌だなというのは正直ありました。

そんなような感じだったんですけど、ただうろ覚えの記憶をたどっていくと、どうしても自民党の方が多かったんじゃないかなという気はしています。それはこの人がいるからという。あくまで始めに立候補者ありき、その後の政党。割と多いのが政党ありきでその中の、例えば私なんか神奈川 10 区の人がいるとかじゃなくて、逆だった、考え方が。私は投票したことないんですけど、例えば A さんという人がいて A さんが気に入ってたまたま公明党だったら多分公明党に入れていたと思います。A さんが自民党から出るのなら（比例区は）自民党。比例だと選挙区と関係ないんですけど、正直そこまで考えるのが面倒だったので、選挙区から出る人がいる政党。それが当時のやり方でしたね。

（排外主義運動の）活動始めた＝練馬から川崎に引っ越したという感覚なので、それからたまたましばらくなかったんです、選挙自体が。で、その後いろいろと川崎市議どんな人がいてどんな勢力なのかと調べまして。まあ、とりあえずまだまともなのが自民党かなと。それと名前はちょっと伏せさせていただくんですけど、市議さんでいろいろと協力して下さる方がいらしたものですから。その方には入れられなかったんですけど——選挙区が違ったんで。私は川崎区（民）なんですよ、川崎区から自民、その人も自民だったんで、自民党を選んで。当然市議選なんで自民党からも何人か出るわけじゃないですか。その中でどの方がいいかなという選別をして入れると、そんな感じですね。（投票に対する意識も）当然変わってくると思いますよ。今までどちらかというと惰性というかのんびりだらりというか、あまり考えずに入れてたという部分は否定できませんので。

（職場で）実は誘いはありました。といいますのも、前職はタクシーのドライバーだったんですけども、ちょっと前いた会社というのは変わってまして。共産党系の労働組合と民主党系の労働組合が、なぜか知らないけど 1 つの営業所に 2 つありまして。で、会社全体としては共産党系の方が強いんです。交通労連（共産系）という労働組合がありまして、そちらが強かったんですけど、私が所属していた営業所の中では自交総連（民主系）の方が強かったんです。そうした誘いが正直いろいろとありましたけど、無視してました。まさかどっかに入れなきゃ会社クビになることもなかろうと思ひまして。これでクビになったらクビになったで訴えてやるというだけでしたから。

## （２）外国人との接点

（外国人と接触）し損ねたことはありましたけど、本格的に外国人と接するようになったのは 2006 年にカナダに行った時だったんですね。2006 年当時、韓国ってイメージするものって何？と聞かれたときに、「韓国ねえ、首都がソウル、野球がそこそこ強い、いわゆるお隣の国」、あと何？本当このレベルでしたから。まあ、一応なんだっけ、今にして思えば「釜山港に帰れ」というのは、そういえばそうだなというのはありますけど。今の一兆円企業の Samsung、あれ読めませんでしたから。三星（さんせい）と読んでましたから。三星ライオンズ結構強いので、何人か日本に来ていたんですね。それで名前だけは知ってましたけど、あれをサムソンと読めなかったレベルです。ましてや LG だとか SK だとかあのあたり（を知ったのは）、こっち（運動）に踏み込んでからですね。

今にして思えば、あいつ在日韓国人だったんじゃないかなというような人はいましたけど、それこそ本当わからないくらい。普通に名前だとかイントネーションの違いだとかも

何もなくて、ましてや反日的な言動もなかったですし。あくまでしかも推測なので、その友達のおじいさんの名前の一部、朴正熙大統領っていましたよね、あの「熙」の字が入っていたので。確証とったわけではないですし、そこまで根掘り葉掘り聞けるような知識もなかったですから。意外と練馬って創価学会が多いというのはありますけど、基本的に農家が多い割と保守的な土壌がありまして。そういったような革新的な方まで踏み込んでどうのこうの、という——ある意味で川崎と真逆なんですよね、空気が。そういった中で育ちましたんで。

### (3) 活動に連なるきっかけ

本当に一番のきっかけは、2003年だか2004年だかくらいに妹がロンドンに短期留学しまして。で、その時に初めて私も年末年始かな——ぐらいにあそびに行きまして。へー、外国って面白いなというのと、妹がそこまでいろいろとやっていると目の当たりにして、ちょっと正直悔しさもありまして。だったら海外でいろいろ体験してみたいと。妹の留学を見て、職を変えてタクシーの運転手やってお金貯めてって感じです。まあただ、頑張り次第なんですけどね。サボろうと思えば、逆にいえばいくらでもサボれる仕事ですから。10万(円)以上は多分月収上がったと思います。

で、ワーキングホリデーという制度があるのを知りまして。今だとカナダをはじめとしてオーストラリア、ニュージーランド、イギリス、ドイツ、韓国だったかな、当時日本と7ヶ国でそういった提携があるんですけれども、その中で本格的に野球をやっているとカナダ。もしくは隣の本場アメリカ。(制度を使えるのは)30(歳)までなんです。ぎりぎり年齢が。当時は26、7(歳)くらいでしたので。何とか期限のうちに行こうと思いつめたのがきっかけ。

やっぱりベースは野球なんです。カナダと隣はアメリカじゃないですか、はっきり言って行こうと思えばいくらでも行けるわけです、観戦です。うまくいけばなんかもぐりこめるかなというのが、ちょびっとだけありましたけど。いわゆるメジャーリーグとマイナーリーグを見てみたい。要はベースボールを見てみたい、野球じゃなくて。バンクーバーに行きまして、2006年。30(歳)の年にビザを取って、とった12月までの間に入国しなきゃいけないんですね。入国したのは実は31歳なんです。9月のぎりぎりにビザを取って、入国したのは31歳。それが2005年の12月でした。2005年の12月から翌年の7月だから8ヶ月です。アメリカにいたのが約40日。合わせて9ヶ月くらい。そこでね、予算を使い果たして帰って来たんですけど、そもそもワーキングホリデーって1年しかいられませんので、どっちみち。ちょうどいい頃合かなと。

(排外主義に至るのは)やはり2006年がきっかけ。一番最初に影響受けたのは、インターネットなんですけれども、世界史コンテンツというウェブサイトがありまして。その中でいわゆる日本が今までやってきた、いわゆる自虐史観がいかにも虚構に満ちたものであるかというものを、1つ1つ暴いていくサイトがありまして。まずそれが1つ。

(サイトを見たのは)今でも覚えていないんですけど、たまたまです。バンクーバーって、1月とか2月くらいが梅雨というか雨期に入るんですね。私あの時は27日連続降雨で、あと1日降れば観測史上タイ記録だったらしいというそういう年で。はっきり言って、外に出てなかったはずですね、折角行ったにもかかわらず。お金がなかったというのもあ

るんですけど。そういった中でネットサーフィンに時間つぶしてたなかで、たまたま何かの拍子で行き着いたのがその世界史コンテンツ。(探したのは) ただのネットサーフィンです。いわゆる行動する保守とよばれる人の——あくまで印象ですけど——7割8割はネットからのはずですよ。どういう形かは、人それぞれバラバラだと思いますけど。(そうした動員は) 時の流れかなと。私自身がパソコン通信全盛の時代から入ってた人間ですから、その後で Windows 95 ができて、インターネットの世界が我々も入るようになって、時代の流れ。さまざまな情報がある意味黙っていても入ってくるのは、時の流れかなと。

やっぱりどうしても、今まで日本は悪いことした、従軍慰安婦だ強制連行だ、そういったような歴史を植えつけられてきてたわけで、私も実際従軍慰安婦がどうのこうのというのは、中学や高校では習った記憶がありますので。そういった既成概念を破壊する、多分その人たちも自分が持っている概念を何かの拍子で破壊されるのは、良きにしろ悪きにしろインパクトがすごく強いと思うんですね。そういったような感覚で捉えていただければいいかなと思います。(それから) 調べて。本当なのかどうか。(そのサイトは) もちろん全部見ました。

それからしばらくして、同じようにたまたまぶつかったのが、Doronpa さん。今でいう在特会の桜井会長なんですけど、その方が主宰されていたインターネットラジオ、「不思議の国の韓国」というサイトを当時されてまして。ひたすら聞きまくってまして。今はもう閉鎖されているのかな。あの当方で 40 本か 50 本か上がってたのを、ひたすら聞きまくってました。それでいろいろ感じるどころがあって、当時の Doronpa さんとメールのやりとりもしてましたし。

その次に大きかったのが、トリノオリンピックと特に WBC——ワールドベースボールクラシック、野球版のワールドカップ。若干(世界史の) サイトの方が早いですけど、ほぼ同時とっていいと思います。トリノの時は、どちらかというとも日本ってすごいんだなという考え方だったんですけども、WBC の時に二次リーグで韓国とやって、日本が負けて、その時に韓国の選手団がマウンドに旗刺したって事件覚えてないですか。そういった事件があったんですね。

先ほど申し上げた通り、グラウンドっていうのは野球をやる人間にとってはこれ以上神聖なところないんですね。ましてや野球のマウンドってのは、その中でもさらに上位、それこそ何ていうんだろうな——感覚的にはそれこそキリストだとかマリアだとかに近いくらい神聖なものなんです、マウンドっていうのは。それに対して旗を刺すとは何事だっていう怒りがこみあげてきてまして。そこからですね、本格的になったのは。あの時の怒りは正直今でも覚えています。それが直接的なきっかけになった最初です。それも 2006 年でしたから。

(放映されていたのは) カナダも当然当事国でしたし、参加国でしたから。多分、あの当時の日本が WBC に対してどういうコマーシャルかけていたかは知りませんが、あの頃はすごかったですね。コマーシャルが。割とスポーツに対するコマーシャルって結構多いんですね、カナダって。例えば向こうに NHL というアイスホッケーのプロリーグがあって、バンクーバーカナックスというチームがあるんですけども、シーズン中はほぼ毎日というか毎日次はデトロイト戦だとか次はニューヨーク戦だとかいうコマーシャルをやってますんで。割とスポーツに対する意識っていうのは高いんじゃないかと思います。

そうした中で WBC に対するコマーシャルも毎日のように見てましたし。どんなベースボールするんだろうなというのは、さすがに会場までは出掛けられない、ちょっと一次リーグの会場忘れたんであれですけど、もちろんアメリカだったのですけどね。やっぱり見てはおきたいなって。ただ日本じゃやらなかったはずなんですけど、あの時の一次リーグってアメリカとカナダともう一カ国が南アフリカなんです。カナダ対南アフリカなんて、こんな試合日本にいたら絶対見られませんか、それだけでも行って良かったなというのはありますね。

私、サッカーのほうは逆に見ないので。日韓のワールドカップってほとんど見てない。日本戦は見ましたけど、韓国の試合だとか他の試合って正直見てないんです。ですから、他の人たちが 2002 年にそういった意識が醸成されるのを、私は 4 年遅れで醸成された、そんな感じだと思います。

あとですね、2006 年の 7 月から本格的にアメリカ一周し始めたんですけど、あれは確か 7 月の中旬かな。ベースボール見に。放浪の旅ですね、野球を求めての。その時、でもなんていうのかな、春先にシアトルに行ったんです。シアトルということは当然入管を通るじゃないですか。国境を越えるわけですから。その時に 1 つ面白い体験をしまして。当然順番並ぶわけじゃないですか。ヒスパニックがいたりチャイニーズがいたり、ずっと並んでいるわけです。友達と——友達も日本人なんですけど——並んでまして。順番が来ます。前に並んでいた彼らより私らのほうが早かったんです。手続きが。これ、どう考えても菊の御紋のパスポートの威力です。あれは。他の連中ってというのは、「これはなんだ、あれはなんだ」ずっと長々とやってたんですけど、私なんかしゃべったのは、今でも覚えているのは、奥さんが日本人で北海道に温泉旅行に行った、そんな雑談ですよ、そんなレベルでしたから。それでトランクをちょっと見せたぐらいで、「はい、いいよ」。あれはちょっと今でも impressive な出来事でした。それだけ自分らの先輩、ご先祖様は積み重ねてきたんだな、信頼を勝ち取るために。

シカゴに行ったんですよ。シカゴでユースホステルに泊まったんですね。シカゴのユースホステルのロビーに、でっかい世界地図があるんです。よく見ると、当然ただインド洋だとか中国だとか地名とかかいてあるわけですよ。よくよくみると、日本海のところが削られて、East sea ってかいてあるんです。まあ、こんなことするのは韓国人しかいないはずなんですけど——中国人は基本的に Japan sea で通してますから。いわゆる日本海を、東海と呼ぶのは韓国人だけです。多分北朝鮮の人間だったら Korean sea だと思うんですよ。ほぼ 100%韓国人だということで、写真を撮って当時の Doronpa さんのところにデータ提供して、実はブログでも読み返していると今でもあります。その時の写真は。

#### (4) 参加へ

またタクシーの職業に戻って。そこからそういった国に対する意識、まあそれから世界史コンテンツと不思議の国の韓国から受けた影響にもとづいて。その頃、その秋に在日特権を許さない市民の会を立ち上げるというのをネットラジオで聞いて、それを本当にやるのなら俺も参加しようというので、11 月だか 12 月だかに準備会合があって、その時点から私、参加してます。(桜井と) メールでのやり取りはやってましたんで。昔からインターネットという世界がある前に、パソコン通信ってあったの御存知ですよ。あの頃からオ

フラインミーティングという、どちらかというとながその概念持ち込んだんですけど、それもやってみましたんで、そういったことに対する抵抗はなかったです。私がパソコン通信始めたのが二十歳だったんですけど、21（歳）の時にアマチュア野球の会議室がありました、そこにオフ会って概念を持ち込んだのは実は私です。

ちょっとわけあっていったんやめたんですけど、最初に背負った会員番号は3番です。一番は当然会長。2番は御影副会長。3番は私です。一応、初代事務局長は私です。その準備会合の時に、事務局長やってくれないかという話が会長から直々にありまして。受けて始めたというのが在特会における私の歴史です。在特会は在日特権を許さない市民の会っていう名称でいいかどうかという議案にも、私当然参加しましたので。あと、一番大きくもめたのが、国籍条項入れるかどうか、会員に。その時にも私——あの時何て言ったか覚えてないんですけど、確かあの時は国籍は不問でっていう派に一票確か入れたと思うんですよ。いずれにしてもそういった形で参画はしています。

会の中で一番最初に本格的にやったのが——時期まで覚えてないんですけど——品川区で外国人高齢者福祉給付金を始めるという動きが実はありまして。それが確か毎日新聞だ、毎日新聞にそういった動きがあるって報道がありまして、それで直接交渉したのが私です。それで品川区での福祉給付金の成立は何とか見送られたと。私が認識する中では、在特会があげた成果、一番最初の成果がそれだと私は思っています。

基本、在特会というのは本当は周知街宣的なことを、公的なことをやるのと、特に在日の歴史を掘り下げる研究部門との、本当はこの二本柱だったはずなんですよ。ところが主権回復を目指す会の西村修平さんと組むようになって、街宣——それも周知街宣というより抗議街宣とかデモに傾倒して行って、研究的なものがおろそかになっているのは今でも同じなんですけど。

（西村修平と仲がよかったのは）私より会長ですね。2007年だか2008年だかに外国人参政権反対のシンポジウムの方に、パネリストとして出席の方はさせていただきました。私と外国人犯罪追放運動の有門さんとあとお二方忘れて申し訳ないんですけど、4人いたんですよ。その時に、私は西村修平さんからぼろくそに言われました。何を言われたかは覚えてないんですけど、とにかく「お前なんぞ話にならん」というようなことを言われたんですよ。今でも覚えてますね。それから、そこまで言われるのならちょっと距離をあげようかなと。（抗議街宣を）やったことがないとはいいいませんが、どちらかというとながそれだと実際の効果を上げられないんじゃないかなという考え方は、実は今でも持っています。

（続けてきたのは）正直覚えてないんですけど、確か2008年ぐらいだったと思うんですよ。いったん（会員登録を）消して1ヶ月くらいしてからかな、番号を復活させるわけにはいかないんで、新規でとなりましたけど。当初からやっていた人は私のことをみな知っています。会長はそうですし、米田さんとか八木さんもみんな私のことは知っています。

（やめた理由は）平たく言うと、風邪ってありますよね、あれって普通は鼻とか口からの菌が入ってウィルスが悪さして起きるじゃないですか。どうも皮膚から入ったみたいです。症状としては風邪に近いですね。あの時は脱水症状と40度以上の熱と咳もありました。たまたま家の近くに総合病院がありまして、そこであらゆる検査やってそれでもわからなくて、1週間くらいしてやっとわかったと。ひたすら点滴打って。ある意味風邪にな



ったのと似たようなものなので、それでもやっぱり1ヶ月くらい。それこそ最初の1週間くらいは朦朧としてまして。(それから)しばらく本当に大人しかったです。籍だけあるって感じで。例えばデモだと400人いたら400分の1みたいな。挨拶するでもなし、普通に参加する One of them というだけの——こつこつとした感じではやってみました。逆に言うとそこまでです。

(運動経験は)全然なかったです。(抵抗も)なかったですね。ここまでなったのは、今まで黙ってきた日本人側に若干問題はあるんじゃないかと思ってましたので。逆にいうと、今の「日本侵略を許さない国民の会」ってあるじゃないですか、あそこまでやるのは正直どうかなっていう部分がありますけれどもね。ある意味、ヘイトスピーチ大歓迎なやり方してますので。そもそもデモ自体、私はそんなに評価してませんので。反対はしませんが、自分が思い描いている部分とちょっと違うかなと。

実際に桜井会長も、以前の自身の、ニコニコ生放送で、そんなにデモで上げる成果はないと本人が言ってますから。ただ、例えば尖閣、竹島を奪還しろというデモをやったからといって、それを一般聴衆が聞いて自分の考えを改めるとか、目覚めさせることはまずないと。じゃあ何のためにやるか、自分達の周りの団結のためだというような説を唱えてらして、なるほどなど。逆に言うと、今、考えを持っている以上、よっぽど余裕があるという状態でない限り、まあ「俺はいなくても大丈夫かな」と、ある意味で。正直、今の在特会のやり方だと自分のイメージとは違うなっていう。もっと行政立法に働きかけていかないと、自分の理想は達成できないんじゃないかと。デモだ街宣だ、そのものは反対しませんが、それだけじゃダメだなと。

### (5) 川崎市での活動

山野車輪さん、あの方が『在日の地図』という本を出されまして、その中でいろいろな、三河島だとか川崎だとかウトロだとか取り上げてらしてるんですけど、その中で川崎を取り上げてまして。その中で神奈川県税務署員が日本でただ1人、殉職したっていう事件がありまして。それが紹介されていたんですね。簡単にいうと戦後直後って荒れてまして、その中で特に川崎の場合は密造濁酒の製造が盛んだったんですね。で、その取締りをした税務官がいたんですけど、その人が闇打ちにあったんです。今でも家の目の前に川崎南税務署があって、慰霊碑があるんですけど、その慰霊祭をやろうと、あくまで私個人で。その時は村田春樹さんが協力してくださったんですよ。やろうやろうとなって、30人くらい集めてくれました。その中の1人が、私は大田区民だけど、川崎にこんな話があるって知らなかった。だったら川崎を何とかしようとする団体を立ち上げようじゃないかという話をいただきまして、できたのがクリーン川崎なんです。

神奈川は——神奈川県でいろいろやっている人って、まあみんな個性が強いんです。例えば日本の自存自衛を取りもどす会の大井町議の金子さん、あの方も個性結構強いですし。あとは元外国人犯罪追放運動の副理事の中村さん、やっぱり個性強い方ですし。人材はあるんだけど、なかなか1つにならない。その中で幸か不幸か川崎で専門にやっている人がなかなかいないので、自分も住んでるし、じゃあ担当しよう。

(立ち上げは)3、4年前ですね。在特会は、建前上は在日特権に絞った活動をするというコンセプトがあるわけです。当会の場合は川崎市に対しての活動をしよう。私、市民

ですから。生活してますからねえ。伯母はずっと川崎ですし、うちの母は伯母と仲がよかったもので、割と川崎に遊びに行っていたんです。実際、生まれて初めて見たプロ野球は今はなき川崎球場ですし、その意味で普通の感覚とはちょっと違う、ある意味第2第3の故郷に近い感覚があるんです。

当会としては、正会員は市民とその隣接する自治体、具体的にいうと横浜市、大田区、町田市、相模原市もなるのかな。ぐらいに限定してます。あとオブザーバーということで、それらに縛られない会員さんもいますけれども、そういった方々には会として重要なことを決めるときに議決権はないです。もともと特に外国人の跳梁跋扈がはなはだしいというのを何とかするというコンセプトがありますから。

逆にいうと在日問題だとか同和問題だとか、いろんな条例の問題だとかを取り上げるけれども、日本全国レベル、あるいは他の自治体には基本ノータッチ。そこまでやるとキリないんで。在特会関係（のメンバー）は、はっきり言っていません。1人は外国人犯罪追放運動の方ですし、1人はライオンズクラブの方ですとか、あと1人市議さん、あと1人は同じ川崎市の人でどこの団体にも所属していない方がいまして。そういった方々と集まって。まあ、ミニ在特会ですね、ある意味で。あまりネットばかりには頼らない。なるべくできる範囲で足で稼ぐ反面、研究等ともやっていきたいなど。（デモや街宣はしないのは）今うちの会の力がないからですね。そこまで集められる人脈、私個人のスケジュールリングの問題もありますし。でもどうしてもね、小回りが効く分、力がない＝限界がありますから。

（川崎の外国人政策との関係は）むしろ大ありです。むしろそれです。先ほど少し申し上げた外国人高齢者福祉給付金、あれの発祥は川崎なんです。平成6年に、民主党の飯塚正良議員の発案でもともと立ち上げたものなんですけどね、あれが当初は1万円だったんですが、今は2万1000円だか2万3000円まで膨れ上がってまして。あれの支出額が——高齢者に出るものですから、亡くなる方も出てますけど——確か今でも2000万くらい出ているんです。これってある意味で我々の市民税から出ていますから。あとは例えば自治基本条例、川崎の場合、自治基本条例の3条で市民とはなんぞやという定義があるんですね。それって、よくよく読み返していくと、住民票持っている人は当然なんですけど、例えば（横浜の）反町に住んで、東神奈川に住んで渋谷に通う人がいます。その人は当然川崎通りますよね、その人も市民に該当するんです、条例を解釈すると。あれはいくらなんでもおかしいだろうと。

今私が考えているのが、多分条例ですから、かなり強い拘束力がありますよね。これはつぶすのはまず無理だと。つぶさないでやるにはどうしたらいいかと考えて。まだ誰にも話してないんですけど、自治基本条例第3条に1つ加えるんです。日本国籍を有する者、これだけで随分違うんです。国籍条項がないがために、同じ自治基本条例の第31条にもとづいて住民投票条例が成立しているんです。今のところ不幸中の幸いで住民投票条例が施行されたことは一度もないんですけども。

病気のことがありますので、かなりブランクはありますがけれども。何が一番のネックかという仕事なんですけどね。今までは割とやれてたんですけど、病気の絡みもありまして、今はポツポツと。（民主党政権では）その頃は私は仕事のほうから手が離せなくなって、運がいいのか悪いのか。全国レベルの方は在特会にお任せ。同じことやっても意味がない

し、競争という観点からみたら絶対に勝てないので。大きさも違うし質も違うし、(桜井)会長とタメ張ろうたって絶対に勝てるわけないので。

正直、事実上1人親方みたいな感じでやっています。今ですと例えば、川崎署とタイアップして立ちんぼうですとか、ちょんの間ですとか、あのあたりの摘発——私は情報提供するだけなんですけど、何とかせいと。堀之内ってご存知ですか、あそこの手入れがいつせいにあったんですね。あれで1回つぶれたんですけど、また復活しまして、今4、5軒あるんです。(働いているのは) 韓国人。

川崎ってちょっといろいろ妙な歴史がありまして、その絡みで性的歓楽街が1つの町に2つあるんです。堀之内と南町って。普通は1つなんです。その中の堀之内の方にはいろいろとやっちはいるんですけど、南町のほうには黒い歴史がありまして、なかなか警察が動いてくれないんです。何とかせいと私は言っているんですけど。まあ、平たくいうとヤクザが絡んでるんです。割と堀之内の方に関しては動いてくれてます、所轄は。もちろん似たような顔立ちなんで、中国人という可能性は否定できないですけど、仮に日本人だとしても当然売防法、風営法に引っかかります。言ってみれば川崎を浄化しようと。

#### (6) 「外国人問題」に目が向く理由

正直、今でも在日だからというカテゴリーというよりは——外国人に対する、韓国人だなんだという個人に恨みつらみは、はっきりいってまったくないですよ。どちらかというと、中国人の方がしょっちゅうドンパチやっていますんで。バンクーバーの時にも日本食レストランでアルバイトしていた時にも対立しましたし。それと並行して水産加工の工場です仕事してたんですけど、その時もあいつら仕事しないし。大学時代なんかは(アルバイト先の中国人と) 本当にぶん殴りあいの喧嘩もしましたし。そういった意味で、個人的にはドンパチやっているのはどちらかというと中国人です。

あとは個人という——工場の話なんですけど——2006年のワールドカップで、オーストラリアとやったときに確か3対1で負けたんです、日本が。ちょうど翌日、工場で飯食っているときに、(韓国人が) 例の「大韓民国」(韓国の応援歌) とやったんです、それでむかつきましたね。あくまで個人レベルの話です。あとはどちらかというと義憤ですよ。そういった特権的なものはおかしいんじゃないかという。

(外国人参政権についても) 2006年以前は(認識が) なかったですね。そんなものあることすら知らなかった。というか、外国人参政権もそうですし、在日韓国・朝鮮人がいることすら私は知りませんでしたから。日本人だけという頭しかなかった。(外国人参政権) そんなもの、なんで認めないといけないのという。だってあの、例えば生徒会の選挙ありますよね、あれってというのはその学校に所属している生徒しか投票権ないじゃないですか。それに対しては、私がAという中学に私がいたとして、Bという中学校の生徒がAという学校の生徒会なり何なりを選ぶということですよね、簡単にいうと。何で?むしろそっちのほうがわからないから、その理を教えてくれという感覚なんですよね。

(「外国人問題」が重要になるのは) それは正直、桜井会長のカリスマ的な部分は大きいですね。彼の影響は正直自分なりにかなり強く受けていると思います。もちろんこの時点でいえば、特例公債法だとか消費税増税とかいろいろ問題ありますけれども、今の外国人問題の方に強い関心を置くようになったのは、桜井会長の影響なのは間違いないです。あ

そこまで理路整然と、こういった問題で述べる人って今までいなかったですから。例えばチャンネル桜に出てらっしゃる西村幸祐さん、あの方も理路整然と言う意味ではひけをとらないというか、あの方はむしろプロですんでね。ただ桜井さんのすごいところは、講演をやらせても街宣をやらせても、まったく一定以上のレベルをずっと保ってらっしゃる方なんです。

今年の4月3日に川崎市役所に抗議をかけるというので、お話はいただいてまして。要はそういうオファーがあったんですね。よりもよってその日は私手術だったんで、行けなかったんですけど。そういうような感じでちょこちょこありましたし。会長本人じゃないですけど、会として広報局長の米田さんから、先月だったかな、ニコニコ生放送に出て川崎の現状をしゃべってくれないかというのもありましたし。それと別に例の練馬区の江古田で慰安婦展の抗議街宣やるというので、私が主催でやりました。

### (7) 活動の持続

まあ、別に単に食べるだけだったら、(活動は) いらぬといえぬいらぬですよ。その中で一番大きかったのは、自分と同じ考え、あるいはそれ以上のことをしようとしている同志がいる。ということに対して勇気付けられた。あとはさっきの妹の話じゃないですけど、俺も負けてられないなという考え、思い。その後いったん、これとも全然別の件で体の調子崩してやめちゃったんですけど、また新たに復帰して現在に至るという。

(活動を継続するエネルギーは) 会長へのカリスマ、もう1つはちょっと時間的にずれちゃうかもしれないんですけど、川崎という町への現状に対する怒りというか不信感というか、それですね。何で外国人の方が日本人より優遇されなきゃいかんのだ。その福祉給付金の例でいうと、当然ながら日本人にはびた一文払われぬんですよ。基本的には日本人のお金です。もちろん徴収する市民税——外国人からとるのかな、川崎市の場合それがあてにならぬんですよ——そういった行政に対する不信もありますし。外国人への怒りももちろんないわけではないですけど、それに便乗する日本人に対する怒りのほうが今は強いですね。

例えば、ついこの間もやってたんですけど、ついこの間まで川崎市の市議会に国旗立ってなかつたんです。普通、例えば東京都議会とか岡山市議会だとかって、必ず日章旗が立ってますよね。あれが最後の最後までなかつたのが、実は川崎市なんです。あれを何とかせよというので、陳情を出しまして——請願には時間なかつたもので——その時に自民と民主と公明は賛成したんです。ところがこれに反対するのが共産党の佐野っていう議員がいて、これのお陰で全部パーになつたんです。というのも、陳情が委員会で可決されるには全会一致が原則なんです。なので誰か1人の反対があると全部おしゃかになつちゃうんです。それで私の陳情はご破算になつちやうです。ただその後うちの市議さんがいろいろ頑張つて下さつて、おかげさまで川崎市にもようやく日章旗と川崎市旗と両方立つようになりまして。その後また起こつたのが、毎日新聞だつたかを取り上げて、弁護士がこれおかしいんじゃないかというのが記事に載つてたんですね。もうふざけるなよ、日章旗を立てない議会が馬鹿な議会というのがどこにあるのよ。そういう、本当に異常さが如実にあらわれているのが、川崎市なんです。

他にもねえ、外国人参政権ももともとは賛成派だったんです、川崎は。それをようやく、

うちの会を最初に立ち上げて取り掛かったのがそれなんです、外国人参政権。陳情で出しはねられて、その後市議さんが頑張ってくれたお陰で、何とか辛うじて反対でなく慎重な審議を求める意見書の方は、可決させるのに成功しました。今の在特会に対して思うところとかなりかぶるんですけど、本格的に今の自分たちが考えていることをやるんだったら、政治を動かさなきゃいかんと。元々は桜井会長が、あの方がおっしゃってたんですけど——をやってる。自分のできる範囲で。そのためには当然政治家さんとも直接いろいろ話はしますし、陳情や請願も出しますし。行政とネゴシエートをやれる範囲でやりますし、そんなような感じで今はやっています。

やっぱり我が国は民主主義国家ですから、国民の声を何らかの形で上げていく——私はこれ権利ではなくて義務だと思ってますんで、それを果たしているというある種の充実感はあると思います。さっきお話した品川区の問題、あれも多分、在特会が動かなければ多分成立してたと思うんです。あくまでも新聞報道でしか見てないですけど、どちらかというとまだ迷っていた節があったんですね、区長さんは。それをまさか多分、直接区役所の方にそんな問題が取り上げられると多分思ってなかったと思うんですよね、区役所の方は。あの顔は間違いなく（びっくり）してました。もちろん、今の在特会がやっているような居丈高な感じでなくて、こういう流れのネゴシエーション。私だってある意味初対面ですから、その方（区役所の職員）とは。「これがあって品川区に対して不利益ではないかと思うんですけど、考えていただけませんか」そんな感じ。

#### （８）小括

川崎といえば、外国人政策の先進地として知られ、全国にさきがけて市職員採用の国籍条項を撤廃したり、条例設置の外国人市民代表者会議を設立したりした（宮島 2000）。これは 1990 年代における「自治体の外国人政策」の一つの頂点をなしているが、その後の選挙で保守系の市長が就任してからは、停滞が目立つようになったといわれる（崔・加藤 2008）。本稿でみた S 氏の事例は、それからさらに排外主義運動まで生まれた川崎の状況に関する報告でもある。S 氏の運動は、抗議街宣やデモといった直接行動よりも、行政への陳情・請願を中心にしており、自民党の市議ともつながりを持って活動している。在特会が出発点だった活動家が、地域レベルで根を張って排外主義運動にいそむ状況は、さいたま市などでもみられる。S 氏がそうであるように、直接行動中心の活動に不満を持ち、行政交渉を中心にするべきという者は一定数存在する。街頭でのヘイトスピーチが今年になって問題化しているが、「成果」を地味に追求する排外主義運動の動きがあることも見逃すべきではない。

## 20 戸塚ヨットスクールに共鳴したT氏の場合

### (1) 政治に対する関心

(政治に対する関心は) 全然。全然ない。(選挙には) もちろん行ってない。そんなもの、選挙なんか行き始めたのは40(歳)過ぎてからですよ。本当に僕は一般の、普通のノンポリ。

だから大学受かって、ただ国立滑って、うちの親父は怒ってしまって。日本にはお上が作った学校が、国立に行くのなら応援するけども、どこの馬の骨が作ったかわからん学校、私立はうちの親父にいわせればどこかの馬の骨の学校なんですわ。なら知らない勝手にせいと、なら勝手にするわと家飛び出して大阪に来て——母親は結構裏から応援してくれたけどね——大学に行きながら入ると同時にバイトですよ。もうバイトバイトバイト、朝から晩までバイト。で、家庭教師を始めて、その家庭教師ももちろん教育に興味があったわけではない。単に時間給が高いから。お金になれば何でもいい。

初めは自分で歩いていく。これはとても歩いていけないな、チャリンコ買う、バイク買う、車買って、最高のときに家庭教師7、8軒いったのかな。毎日3軒くらいですよ。ちょっと待ってよ、これは自分で行くより自分の下宿に呼ばばいいんじゃないか。自分の下宿に呼んだ。自分の下宿が一杯になった、じゃあ近くの公民館を借りよう。公民館を借りた。これも一杯になってしまった。で、公民館よりきちっとしたテナントの方が格好がつく。で、ビルを借りよう。ちょうどそれは田中角栄の前なんですよ。だからバブルがよかったというけども、その頃はバブルの比じゃない。よく学生社長って言葉が流行りましたじゃん、あんなもの何をいってるんだ、俺は50年前にやってるよって話で。あの頃本当に日本がね、ちょうどあれですよ、Always 三丁目の夕日があんな時代ね、日本が高度経済成長の真っ最中で、ほらオリンピックだ新幹線だと。日本がガーっとバイタリティが、力があつた。それにうまく乗ったんでしょね。

僕が大学4年、留年して5年目、大学5年目にね、1年間でランザム——アメ車のこんなでかいアメリカンドリーム、あれを1年間で4、5台買った、そのくらい儲かった。そのまま卒業して、卒業するとかしないとかいう話じゃないのね。みな就職活動に走り回ってる、こいつらアホじゃないかという話で。それから3年、5年、ずっとどんどん生徒が入ってくる。しかし空しいんですよ。俺はこんなのやってていいのかな、充実感がない。金は儲かるけどもね。

というのは、僕自身の中学高校が福井なんですよ。母方の方でね。だから福井で生まれて幼稚園ぐらいまでずっと横浜におったんです。4、5年。それから福井に戻ってきて小学校も中学校も高校も福井で。高校というのが、東大に20-30人入っているような公立なんですよね。中学校も勝つことがすべて。負けたら泥棒より悪い。だから運動会で負ける、試験で負ける、ともかく勝つことが正義、そういう教育を受けてきたんですよ。中学で。家庭というのは共働きで、家庭も学校もすべてがなんというのかな、ちぐはぐじゃなかったんです。僕だって自慢じゃないけど遊び好きだしね、多分あそこになかったら今頃呆けてますわ。高校も辛うじて入った、高校に入ったらその反動で山一直線で。実際勉強なんかやらないで山ばかり行っていて。

だからそんな人生を送ったから、塾をやっている、30(歳)くらい40(歳)くらい、そ

うするとテレビでもね、子どもの意見を聞いてとか、子どもの視線でとか、子どもの立場でとかさんざんいうわけ。それで子どもの人権でしょ。だからやっぱ、そのギャップですよ。そんなもの人権ってなんだ、と。その時たまたまテレビで戸塚校長——戸塚ヨットスクール——の講演をたまたま見たんですよ。そうしたら、すーっと吸い込まれてね。自分と話が合うんですよ。それですぐテレビ終わったら手紙書いたんですよ。そうしたら電話がかかってきて、遊びに来いというからじゃあ行こうって、遊びに行ったんですよ。あれいくつかな、30（歳）くらいかな、35（歳）くらいかな。それから10年間くらい土日は全部名古屋通い。ずっと土曜日日曜日は——金曜日に、夜に行くんですよ。あの頃はまだ高速もできてなかったから、6、7時間かかったかな。10年間くらい通いました。

やっぱり僕は、戸塚さんの言っていることが一番正しいと思います。残念かな、事故が起きたから。もちろん僕は事故を肯定するわけじゃないしね、事故は絶対起こしたらいかん。つい最近も自殺者が出ているんですよ。どうしようもないもの。監禁したらいかんでしょう。部屋に持ち込んで鍵掛けておけばね、命の保証はできるけれども、鍵掛けたらいかんというわけだからね、勝手に鍵あけて屋上から飛び降りるんだから、これはどうしようもない。でもやっぱり僕は、彼の言っていることが一番正しいと思います。

だから何のために教育をするのか、別に末は博士か大臣か、別に博士か大臣を作るんじゃないくて、大きくなって自分自身が飯食える、嫁さんも養える。それが教育の最低限の目的じゃないかと。そう考えた場合にね、今この最低限の教育さえ——受けてはいるんだろうけれども、最低限の人として飯を食う（ことが）できない人がどんだけ——今は、3割くらいいるんじゃないかな。ニートとかわけのわからんのが。それでもっとひどいのだと勝手に結婚して勝手に離婚して、子ども3人つれて帰ってきて、それで生活保護。まあここで愚痴ってもしようがないけども、何でそんなものお前が勝手に結婚して勝手に離婚して子ども作ってだね、そんなものの面倒を俺がみないといけないのか。そこへ税金がどれだけ食われているか。そんなとこに使う金があったら、北朝鮮向けにミサイルの一発でも買うのが先でしょうと。防衛そっちのけにして、なんでそんな馬鹿なものを面倒みなきやいけないのかと思うけども。

戸塚さんと10年間付き合ったんですよ。彼の意見はあくまで現場で結果を出せと。現場で結果を出せば何が重要かわかってくれると。僕はそう思ってそう信じてきたんですよ。10年くらい付き合って、やっぱりこれは現場で結果が出るのは出るんだけど、もうなんていうのかな、見にくいというか、時間かかるというか、かったるいんですよ。あの、強制ができないから。だから彼が捕まる前は、事故が起きる前は全部強制ですからね。監禁してやってるんだから。簡単ですよ。ところがそれがいかんというわけだから、時間がかかる。

だから僕は、ああこれは政治力、戸塚ヨットスクールを否定するのは日教組。日教組のバックは当時社会党です、今の民主党ね。ああ、これは政治でいじらんことには何もできないなど。それから今度、反日教組の政治活動に走りました。45（歳）くらい（の時）かな。ちょうどその頃たまたまある人が——元中学校の先生ですよ——日本の場合には議員が教育は票にならん、だからもっと議員を教育に巻き込まないといけない。そう言うんで、百人の会という会を……。いろんな矛盾がありますよ。それを調べていけば調べていくほど、全部日教組ですわ。

で、今議員が全部で 200 人くらいいるのかな。議員のネットワークを作って、今の辻先生という方が理事なんですよ。ところが、うまいことに維新が、橋下が教育基本条例を発表して、たまたまうちの理事長の辻淳子先生が維新の会の副団長なんですわ。だから、辻先生を副団長にするのなら我々の面倒もみないといけないんですよと言ったら、「えー」と言ってるけどね。我々が——百人の会が橋下を応援しているわけでもないし、橋下維新を応援しているわけでもないし、橋下維新の教育を応援してます。というのも橋下に「お前、俺らをパクっただろ」。まったく一緒だからね、言っていることが。彼が日本は資源がないというところから始まっているんですよ。その切り口までまったく一緒でね。あれはいつか絶対にパクりましたと言わせてやる。

話がそれますが、今、維新というのはね、自民からの大阪市議会府議会ですよ。自民からの転向組と、この前の選挙でどさくさに紛れて、わーっと量増えるんですよ。若い子と。若い子はやっぱり政治を知らなすぎる。自民からの転向組っていうのはね、この辻先生にしてみてもね、議員 70 年だからね。おじいちゃんが 30 年、お父さんが 25 年、彼 15 年。だから半端な人間じゃないからね。大阪っていうのは、ずっと今まで自民党——いろんなことがわかってきたんだけど——大阪は谷川秀善、あいつがドンだよ。あれがすべて牛耳ってきたわけ。谷川が朝鮮総連とかですね、同和ですわ、あの辺の相談しながら、お小遣いもらいながら大阪の政治をやってきたわけ。その下にいる市会議員、府会議員というのは権限持ってない。だから一切自分で議案提出も条例作るのも、全部こっこの言うがまま。だから、これはうるさいお前ら、わしの言った通りにやっとならばいい、とこれにずっと 30 年間も見えない線があって、不満ですよ。私ら別に谷川の奴隷じゃない。やはり我々は我々のしたいことがある。彼らは本当に純粋に教育を考えているんですよ。このままだと日本はダメになると。

今回の教育基本条例も橋下がやったと思うけど、違うんですよ。あれは堺市議会の団長の坂井っていう議員が全部書いているんですわ。もう 1 つ面白いのはね、維新には弁護士が 10 人くらいいるんですよ。だから非常に面白いんだけど、彼らが作ってるんですよ。それで橋下は橋下で自分の夢がある。それで議員は議員で、乗り換えたら自分らのしたいことができる。そこで利害関係が一致して、よっころしよと引っ越したんですわ。だから辻先生なんかはね、維新に行く前と後ではもう生き生き度が違います。昔はもう極端に言ったら目がうつろ。私、したいことがあるんだけど何もできないし、なんていうかどっちを向いて歩いたらいいのかなと。今はそんなもの日本を変えるというのだから。もう生き生き度が違いますわ。だから、僕もよく感じます。世の中変わるのが。だからやっぱりこれに少しでもいいから、何かお手伝いができれば嬉しいなと思って。

日本はね、法治国家です。ご存知のように。議会制民主主義です。だから日本の国を変えようと思ったら、政治を変えようと思ったら、法律条例を改正するか作る。まあ一番親玉は憲法だけだね。それか、あとは裁判で勝つ。それしかありません。街宣しようがデモしようか、それはトンカツに乗っかってるパセリですわ。だから皿の中に全部パセリだったら、何これって話でね、あくまでもトンカツが大事。僕は決してデモとか街宣を否定するわけでもないけど、それはトンカツがあつての話ですよ。あくまで街宣とかいうのは何十回もやってきたから言える話ですよ。やってた時には、一番有効かなと思ったわけだから。だからそうすると法律を作ったり改正したりするのは、議員だから。我々は代表者



を通じて行動して、そう書いてあるわけだからね。

結構みんな、議員何もしてくれんというでしょ。で、政治なんか誰を選ぼうか変わらんというでしょ。あれはね、そうじゃなくて今日と明日は何も変わらないのです。共産党に入れようが公明党に入れようが民主党に入れようが、誰に投票しようがね、総理が誰になろうがね、野田になろうが谷垣になろうがね、今日と明日は何も変わらんですよ。でもやっぱり3年5年でみると、天と地ぐらい違う。だからその辺からみんなわかりにくいというか、もっとこう（狭く）見てるからね。もう少しこう（広く）ものを見る…。で、みんな議員を軽視しすぎますよ。だから僕がよくいうのはね、議員の足踏んだらそれ2000人の足を踏んでいるんだよ、議員に馬鹿といたら2000人に馬鹿言っているんだ、2000人相手に馬鹿と言えるのか。我々は公正に選挙された議員を持っているからね。それだけ議員はエライですよ。

よく票が欲しいのかというけどね、当たり前だって。票というのはみな意見だから。この意見の多いのを代表するわけだから、当たり前ですそんなことは。それをみな自分の意見と合わない、その議員をボロカスに言う。それはそうじゃなくて、あんたの意見が世間の常識とは違うんだって。議員がおかしいんじゃない、あんたがおかしいんだって。だから僕は外国人に反対だけど、もしそれが多数決で可決されれば、それはそれでしょうがないと思いますよ。そういう人が多いんだから。それまではもちろん、僕らは言い続けますけどね。こうなったらこういう弊害が起きますよ。それでもよろしいんですかと。それでもよろしいという人が過半数だったらさ、甘んじて受け入れるか、僕が日本を出て行くかどちらかですよ。

別に僕は自民党を支持するわけではないです。強いて言われれば消極的選択で、断腸の妥協、それ以外にもの言いようがない。だから本当にこのスリッパでも自民党の議員をひっぱたいやりたい、「お前らがもっとしっかりせんから」。本当に自民党がしっかりしないから。やっぱね、左は真面目ですよ、左翼は。だから左翼というのは、やってることは正しいんですわ。言っていることがおかしいんで。ビラまきやって、おかしいことがあったらきちっと全部裁判やって。負けても負けても、それでもめげずにね。だから最近左翼のね、勝訴の判決が結構出てるでしょう、ばらばらと。本当に馬鹿どもがね、裁判所が左傾化したとね。違うんだよ。左翼はね、今まで一勝するために百敗しているんです。百敗してやっとな勝掴んでるんですよ。ところが保守の方っていうのはさ、胡坐をかききってる。

第一、保守でいろんな人いっぱいいるでしょ。保守の中で一番大きいといえば、菅直人とね、安倍さん（の違い）が一番大きい。運動の基本というのは、いうならば自分で壁新聞作って、やっぱりこれを郵便で送る、いくら今ネットがといってもやっぱり郵便で送る、宛名書きする、あれ安倍さんって封筒の宛名書きしたことあると思います？菅直人は？そういう違いですよ。安倍が菅に逆立ちしても勝てるわけないって。

だって、ランニングもせずしていきなりバットを振り回したらさ——やはりランニングでしょ、まずは。どこの野球部に入っても。どこのテニス部入ってもラケット振り回す前にやはりランニングでしょう。やはりそういった意味でね、安倍さんはランニングもしていない。だから本当になんというのかな、延長18回のね、2アウト2-3くらいになってきたらね、菅には勝てないんじゃないかな。だからうわーっと行け行けどんどんという時には

ね、僕はすごくいいと思いますよ。でも本当のしのぎあいね、生きるか死ぬかかという時には僕は強さを感じない。そういった意味ではね、菅とは思想はまったく逆だけど、僕は菅の方が強いと思いますよ。結局、運動って手間でしょ。

## (2) 外国人との接点

生まれは福井なんですが、横浜に——親父が元々横浜の人間なんで、親父の実家ですよ、横浜に子どもの頃ずっといました。山下町——南京町の近所なんですよね。周り全部中国人、山ほどいます。知り合いというよりも周りにおった。特に親父の周りにね。親父が、運送関係の仕事してたから、中国で会社仕事、荷物持ってくるんですよ。で、やっぱりお金を払わんとか、いちゃもんつけてとか、そんなトラブルがしょっちゅうあったんでしょね。

そうするとね、うちの親父がね、チャンコロ、チャンコロ言うんですよ。チャンコロは、チャンコロは、侮蔑ですよ。チャンコロは侮蔑語でなくして、シナがどうのこうのってね。そんなのは屁屈屈でね、あの頃はチャンコロなんてのは所詮侮蔑語ですよ。ただ、僕はそれがすごく不愉快だった。親父が中国人をね、チャンコロと呼ぶことが僕は不愉快だった。小さい頃。何でそんな差別するんだと。で、大きくなるにしたがって、やはり中国人の、いろいろなその——例えば南京大虐殺にせよ、そんな大きい話でなくてもね、身近な話でも彼ら一緒に生活しますとね、僕はできない。もう人のものは人のもの、自分のものは自分のもの。チャンコロ、侮蔑的によばれて当然やなと僕はそう思ってます。全員じゃないですよ、でも圧倒的にそういう連中が多い。特に中国人では。こいつはナイスガイというのは僕は会ったことがない。

韓国・朝鮮というのを意識し始めたのは、こちらに来てからですね。中学の時にもクラスに韓国の子はいました。やはりそれは差別してました。ひどく——20軒くらいの小さな家があって、あのそばに行ったらいかんとか。でもそれはいかんといっても、別に仲がいいし——なんていうのかな、特に理由があって仲が悪いわけではないしね。親があかんというからあかんのかな、とこれですよ。わざわざ行って来ますといって行って来たわけじゃないし。で、二十歳、30(歳)、40(歳)と歳が来るにしたがって、いろいろな現象が起きますよね。

例えば竹島の問題とか。まあ、竹島が一番わかりやすいけども、結局韓国についていろいろ本書いてますわ。片っ端から読んでいくと、「恨」ね「恨」——誰だったかな、恨という概念をわかんなかったら韓国人を理解できないって、そういう文章があったんですよ。それを読んで、「ああ、これかな」と。だから、文化が違うんでしょうね。文化というのはね、音楽とか美術とかそういう文化じゃなくして、魂の文化、心の文化。やっぱり日本人というのは相身互いとかね、今日も「インタビューしたいんですけど」「うん、いいですよ」。でも韓国人のイメージというのはね、「インタビューしたいんだが」「じゃあギャラなんぼくれんの」こんなイメージね。もちろん現場に出くわしたわけではないけども、だから歴史自身が——自分がない。

もっと言い出したら韓国が、朝鮮が、もっとしっかりしてりゃ、日清も日露も起きてないから。あそこがそもそも頼りないからだね、ロシアを抑えるために日本が出て行った、やむを得ず。何も日本は好き好んで行ったわけでもないし。やっぱ文化の違いなんだろう

けども、例えば竹島に関して何か向こうはね、あれ記事か何かをちぎってね、記事食べながら国旗燃やしている写真、知りませんか。そういうとんでもない写真が…。

身近に(住む韓国・朝鮮人について)は数字ですね。生活保護が圧倒的に多いとか。まあ、朝鮮学校の問題とか。政治的にあまりにも無茶言い過ぎる。だから、これを中へ受け入れたら、日本の国内が…ブラックバスと一緒にですよ。今、琵琶湖大変でしょう。

最近ね、人権人権とか、あれはねえ、一番いけないのは朝鮮人じゃなくて日本人ですよ。日本人が尻搔いているわけですから、言え言えって。日本人の極左の連中が運動する。同和もこうなってきた——何とか法が廃止になって、ネタがない。日教組も今一步、そんなに組織率も 20-30%でしょう。どっかに誰か何かで——利権ですよ、要するに。左翼の利権。左翼が尻搔いて朝鮮人に暴れさせてだね、当然それに対抗するものが出てくる。マッチポンプな話で、火付け役は日本人ですよ。仮に生活保護といってもね、朝鮮人は無茶苦茶って、明らかな数字を見ればわかります。あんなの役所がパンといたらおしまいだから。役所がはいはい言って受けるからいかんのであって。

### (3) 関西保守運動との関わり

(いろいろ関わるのは)狭い世界だから。昔、共産党のある奴と話したら、向こうはもっと狭い言っていたね。若い奴の取り合戦ですよ。若い奴をどれだけゲットできるか。もう「結局はその戦いですね」「そうですね」言って。そうこうしているうちにね、まず拉致運動。だから、新風っていうのがありますよね。新風が大阪で拉致運動始めたんですよ。それで付き合えいうから「はい」と行ったんですわ。月 1 回くらい活動するんですよ。半年くらいたって、5 回 6 回行って、はっと周りを見たら僕しかない。大笑いだ。僕はやっぱり、どんなことでも始めたら途中でやめるのは犯罪だと思うから、続けると。だからそれからずっと続けていって、そうこうしているうちに救う会ができた。それで救う会の大阪支部やってほしいと言われて、まあいいですよと。今までやってたことだからね。それで救う会、拉致問題ですよ。

それでいろいろな勉強していくと、拉致も竹島も憲法もすべて根っこは一緒ですよ。拉致が解決して竹島が解決しないと、尖閣が解決したけどもこっちが解決しないと、ありえません。解決する時は全部一緒に解決する、日本が変わる時です。そういうワンチャンスは僕は今、橋下に夢見てるんだけどね。

やっぱり従軍慰安婦の問題とか、南京大虐殺の問題とか、強制連行とかいろいろなものが見えてくる。で、まず自分に被害があるのは——日本人だから、日本人の性格。南京大虐殺にしても従軍慰安婦にしても、ゼロとは思わない。やっぱりアホな奴はいるからね。南京大虐殺も何件かはあったはずだ。あったけども、それが 20 万とか 30 万とかとんでもない話だけども、そこにゴキブリが一匹いたら一匹のゴキブリをもって、この部屋を汚いと評価するのか、汚いとまでは言えないと評価するのか、評価の問題ですよ。一匹おってもね、ここは汚い不潔だというやつは、その人のそういう感覚だからしょうがない。

そういった意味において僕はゼロではないけれども、虐殺なんてとんでもない話だし、従軍慰安婦といってもそんなものスレスレですよ。みんな生きていくわけだからね。当然、今でも売春といたらね、あいつの嫁さんは売春とかあいつの娘は売春とかいうけども、当時はそんなもの「それがどうした」。生きた者が勝ちだから。軍の関与があったかなかつ

たか、あったって何をもってあったというのか。それこそ暴行の定義みたいなもので、腕を掴んだら暴行じゃないの？胸倉掴んだら暴行なの？胸倉を指 2 本でつまんだら暴行なの？そんな話でね、軍の関与も真っ白けではない、真っ黒けではない。だから沖縄の集団自決もそうだ。口では言っていないだろう、でも、じゃああの人は目で言っていたと。セクハラと一緒にすよね。あの人はいやらしい目をしていたって。俺は生まれつきこの目だ、そんなものスレスレの話だから。だから殊更それを言うというのは、背景に政治的な意図があるとしか思いようがない。

ただねえ、南京大虐殺に関しても慰安婦の問題もね、やっぱり僕は子どもに事実だけを教えるべきだと思います。絶対ひん曲げずにね。で、その事実をどう判断するかは子どもの価値観だ。今回の橋下の素晴らしいのは——教育基本条例の第一条ね——首長が教育の方針を決めるといことなんです。ということはね、革新の人が市長になってしまったら、その町は全市がスターリンの写真が掲げなきゃいかんわけだからね。でもそれはそれでしようがないと思う。日本は民主主義だから。民主主義を選択してしまったわけだから。いいか悪いかは別にして、吉田茂がそれを選んでしまったわけだから。

(新しい歴史教科書をつくる会には) 関わってました。あそこもね、初めは運動体だったんだけど、途中から社交会。僕はダメなんです、社交会というのは。会議 10 分で懇親会 2 時間と。そんな懇親会行って酒飲んで——酒自身が僕は嫌いだし。ただただしゃべっているのがね、ああだこうだ、ああだこうだ、問題はだから何？でしょ、一番は。だから文部大臣に火炎瓶をいつ投げに行こうとかね。そこが一番肝心で、そこが何もないのよ。まあ一応、本は今回出したけどね、あそこの保守圏の運動家というのは、愚痴の言い会。そんなもの愚痴なんかいくら言い合ってもしょうがない。わかりきっている話だから。だからどこの市役所にも組合が部屋を借りていると。だから温度差はありませんというわけね。じゃあ具体的にどうするのか、何月何日にそこにいつて会議やるとかね、そこが一番肝心なんです。

こと関西に関しては、知らないことないですよ。だから日本会議とももちろん仲がいいしね。ただ、僕は考え方が違う。こってりラーメンが好きな奴と、さっぱりラーメンが好きな奴と。僕は嫌いなところは全部食べるけど——濃いやつも薄いやつも——やっぱり自分が一番好きなのは、結果を出す。やっぱり自己満足のマスターベーションなんかやってもしょうがないしね、いい歳こいて。だから石原慎太郎はね、「NO!といえる日本」——NO と言わないいけないと言ったんです。しかし NO と言わないといけないという話と、(実際に) NO (というの) は違うからね。橋下は NO と言ったんですよ。石原と橋下と僕のなかではこういう感じ(天と地の差)ですね。NO と言わないかんというのはあくまで評論ですわ。白いペンキ塗らないといかんとか。でもあいつ(橋下)は、ばーっと白いペンキを塗ってしまった。

#### (4) 在特会での活動

在特に？あれねえ、3 年かな、3 年ほど前です。在特を作ると。お互いに名前くらいは知ってましたね。そんなに広い世界じゃないから。まあ、たまたま大阪にこういう奴がいるよって、どこかから耳に入ったんでしょ。それで桜井がこういう趣旨だと。趣旨は僕も読んでね、入管特例法、僕もおかしいと思うから、単にそれに賛成して、桜井が僕に関西支

部長をやってくれと。全国展開したいから関西やってくれ、いいよと言って、東京行って、用事があって行った時に忘れもしない秋葉原の喫茶店でずっとしゃべって。それじゃあ OK、やるよと言ってやったんですよ。やって1ヶ月2ヶ月3ヶ月、なんかそれがねえ、やっぱおかしい方向へ走っていく。ちょっとだから違うような気がする。桜井のあれ、自分の名前でもない、仮名だと。源氏名だと。なんでお前、自分の名前できないのか、居所もわからない。なんかその辺からまず僕はクエスチョンマーク。

それで次に何かあったときに大阪に彼が来た。その時に僕は彼に——まあ4、5人いたわけだけどね、「本名は？本名じゃないみたいだけど」。「いや、それは僕を信用して聞かないでおいってください」。「あ、そう。俺が君を信用して名前を聞かないんだと。俺が名前を聞きたいとっているんだ、お前は俺を信用しないのか、お前が俺に信用しろという前に、お前が俺を信用して言うべきじゃないか。俺、正しいと思うよ」と言って。結局、それがあいつとの縁の切れ目かな。ちょうど1年くらいかな。で、そうこうしているうちに、僕は街頭で何かをやったらきちつと言いたいからね、演説したいから。でもみんな必ずそれをすると、外国人とやり始めると来ますから、朝鮮人が。うわーっとやり始めると周りほうわーっと騒乱。中で1箇所 Youtube であるんですよ。ベルト持ってケツ引っ張っているんですよ。僕がベルトであかんと引っ張っているんですよ。それでいろいろ言っているんだけど、全然ブレーキが利かない。そうこうしている時に、桜井からクビになりました、万歳と。

引き受けてくれるなら誰でもいいんだ、あいつは。後の動きを見ているとね。2回飲んだら会計責任者で、3回一緒に酒飲んだら支部長。「なんだそれ？」と言って。あまりにも話が浅すぎる。僕は何かものを頼んで、長を受けてくれという時は、やっぱり最低でも3年や4年の付き合い。非常に安易。ごっこ。だから運動とは全然縁遠いものだなと。(関わりは)半年くらいだね。だから、桜井と関わりを持ったのがわが人生最大の後悔だね。

(会員が)1万といってもね、実際あんなの——会費が年間3000円でね、1万人で3000万か、入ってきたというのならそれはすごいけれども。そんなもの、それこそ猫でもできるわ。あれは運動ではなく風俗。一時ね、暴走族が走り回ってだね、それをばーっと見に行く連中がいっぱいいたでしょう、あれは風俗。ちょっと昔は竹の子族とか、ストリート族とか、風俗あれは。あれは風俗であって運動じゃない。あんなもの運動にされたら迷惑。どういう結果出しました、彼らが。彼らが行動してどういう結果が出たんですか。やっぱり結果が出なかったらね——Time is money です。やっぱり僕は、結果が出ない運動なんていうのは運動じゃないと思いますよ。だから僕は絶えず結果を求めますよ、だから嫌われるんだけどね。

いつも僕、冗談で言うのはね、僕が主催する行事に——集会だろうがデモだろうが、来る人は皆、戸籍謄本を持って来いと。それが来た人に対する安全保障です。誰が来るかわからんのにね——AさんBさんCさん来ますよ、僕を信頼して来ますよ——その人に対しての安全保障の義務があります。そんなもの、わけのわからん奴が来たらさ、安全保障できますか？だからそこは、それが一番揉めた原因ですね、在特と。僕は知らない人は帰れというわけ。名前書いて受付作って。そうするとさ、ピョンピョンとかキャンキャンとかネズミとか書くわけ。「お前、どこにこんな名前があるんだ、きちんと書いてもらえませんか」「嫌だ」と「じゃあお帰りください」。それで揉める、(組織の)中で。「折角来たのに」

って。現に、それまでに過去 5 年も 10 年も僕と一緒にやってくれた方がいっぱいいるわけだから、彼らに対する安全保障。もう 1 つは僕の性格だと言われればそれまでだけど、てめえの名前も名乗れないやつが何をちゃらちゃら言っているんだ、運動する資格がない。まず納税です——税金——在特会見ると納税しているとは思えます？あの連中。あと選挙にみんな行っているか。納税と選挙に行かん奴が政治は語るな、最低限政治を語る資格は納税と選挙。

#### (5) 外国人参政権に反対する会

(関わったのは) 4、5 年 (前) …。外国人参政権のホームページがあるでしょ、あれですわ。(頼んできたのは) ××っていう大阪のある中小企業の社長の奥さんなんですよ。いくらなんでもそれは絶対あかんで、と旧姓にしてやったんですけども。自分がトップにはなれない、トップになってくれと。やらないかんから、トップになってくれと。元々は豊中の男女共同参画の問題で、ずっと一緒にやってたから。

やっぱみんなね、根気がないの。途中で脱落するわけね。結局全部僕に置き土産をおいていくと。一旦始めていけばね、一応けりがつくまで尻すばみにできない。男が一旦やったのなら。一旦東京に行くといつて車で出発したらさ、着かなきゃ。「なんだあいつ名古屋を通過したみたい」「静岡のあの辺で車消えた」では具合悪いもの。

(関わったのは) まあその時やっぱり周りのムードです。みんなやるやる言って、それで…周りのムードですね。ただあんまり今までデモとか、自分から行ったこともないですよ。みんなからやるやる言われているからやろうって。お付き合いというわけではもちろんないけどもね、責任はとりますよ。みんなそれだけ気持ちがあるのならやろうか、ということで。あんまり自分から企画を持ち出して、「やるから協力して」というのはないなあ。何人かに言われて、やろうかと言われて、決まってしまうえば団体にお願いはもちろん僕の名前でやるし。

(東京の会とは) 親分子分の関係でなくて兄弟ですな。親分子分というより兄貴弟ですな。僕は村田さん尊敬しているし、彼のアイデアが一番大事にしてるし。村田がやっているから俺も関西でやるわ、と言って。××さんもこう言っている、村田もこう言っている。××も村田を知ってますからね。村田はね、非常に心が広い。神田君 (参政権に反対する会の代表) の方は、こういう傾向 (閉鎖的) にありますね、何かしゃべったら利用されるとかね、何かしゃべったら悪く書かれるとかね。悪く書くのなら書いたらいいでしょ、度を越えれば名誉毀損で訴えたらいいわけだしね。堂々とものをしゃべれないんなら、やめたらいいんだ。やっぱり、自分自身でどこまで自信持っているかということでしょう。自分の信念の問題というか。

本来、村田が (参政権に反対する会の) 代表になるべきだったの。ただあの馬鹿の一番の欠点は、人間が奥ゆかしいから代表を神田君に譲ったんよ。そこがそもそも間違いの元なんだ。だからしょうがないから——やっぱり神田君は積極的じゃない、村田はイケイケどんどん。まして僕が尻搔く。だからあれ (村田) が、東京で独立したんです。そうすれば神田君関係なしに、東京だ東京だとやってたらいいんだから。だから、東京と大阪がクーデターを起こした。

(活動は) 街頭演説、デモが主ですね。あと国会議員への陳情。(人は) 来ます来ます。

デモすれば 200 人くらい来ますね。でも、うわーっと来る時期が少ない。本当にブーム。ブームが去るのが早い。今、外国人参政権は過去の話、でもまだわからないからね。死んでいるわけではないんだから。頬かむりしているから。現在はね、名前だけの様な形で実際は何もしてませんがね。収まるまでは名前を消さんぞと、いつでも嘯み付く準備はしているよと。

まあ、いろいろやっているうちの 1 つです。それがすべてじゃないから。あくまで 1 つで。まあ、在特が始めた 3、4 年前、その辺かなあ。あれ、外国人参政権っていつ頃から言われたんだらう。(そのことについて) 何回も聞いているけど、これ(左から入って右から出る仕草)だからね。あくまで One of (them) だから。一番僕が興味があるのは教育です、元々の僕の仕事が。

ただ、外国人参政権に関しては、これは僕は敗北したと思ってるからね。前の衆議院選挙で民主党が勝った、自民党が負けた、この瞬間に勝負がついている。民主党が明日やろうと思っただけなんです、それが選挙ですわ。僕がいうのはね、選挙が終わってから外国人参政権反対反対って、わーわー言っているわけ。お前らアホじゃないか、選挙が終わって、選挙とは白紙委任状だぜって。あいつらが権限を権力をそれを使うか使わんかは知らないけどね、もう負けた話なんだよ。負けたからといって白旗揚げて、そのまま通してというわけにはもちろんいかんけどね、最後の最後まで悪あがきはしないとイケないのだけど、基本的には負けた話。

## (6) 小括

T 氏は、自らが経営者で時間の都合がつくということもあり、さまざまな保守系運動に関わってきた。そして排外主義運動の活動家としては珍しく、戸塚ヨットスクールに傾倒して反日教組、そして教育関連で保守系議員を応援するような活動を起源としている。それが排外主義に至る経路としては、教育における歴史修正主義が経由地となり、関西極右運動での有名人であるという人脈上の基盤が存在していた。彼自身は、在特会に関わったことを「後悔」としているが、これは運動文化の違いによるもので主張などの相違によるものではなかった。インターネット上のハンドルネームを「リアルな」運動現場でも用いることは、在特会がネット上の活動から生まれた以上は自然なことともいえる。だが、T 氏にとっては理解しがたいことであり、それは彼が排外主義運動で連携する年配の活動家達とも恐らくは共通する部分だらう(そうした者は本名で活動している)。

T 氏を他の活動家と比較した時の特徴として、ある種の徹底した結果志向が挙げられる。40 代になるまで投票に行かなかったという政治との関わりも、目標達成に有効であると認識した時点できわめて積極的になる。他の活動家と単に交友するよりは結果を出さねば意味がないという志向は、本人の語りだけからみれば、中学高校での「勝つこと」がすべてだった教育の刻印を受けているともいえるだろう。それに加えて、事業で結果を出すことを求められてきたことも、それに拍車をかけているとはいえる。

## 2 1 インターナショナルスクールで学んだU氏の場合

### (1) 政治に対する関心

うーん、小さい頃……そうですね、まあ中学高校くらいだと思います。中学入ってくらいからですかね。僕はどちらかというと、歴史に興味があって、特に近代史、近現代史。その辺がすごい好きで、本読んだりとか——まあ知れてますけど——テレビ見たりとかして。そこがきっかけじゃなかったかと思いますね。

母親はノンポリでしたし。父親も——うち離婚してるんですけど——地元の議員さんを応援している、それくらいはやってるみたいですね。(家で政治の話が出ることは)それはなかったです。せいぜい NHK の夜のニュースみるくらいですか。それくらいで、そういう話もせず。まあ、普通の家ですね。

一番やっぱ大きかったのは、ネットですかね。これはまあ、在特関係の人だいたいみんな共通していると思うんですけど、若い人で。ネットで、そういうのがある程度家庭に普及した時期じゃないですか。そういうので政治関係の情報を載るようになって。左右両方の人が発信していたわけです。その時たまたま、自分にしっくりするものがそこにあったということで。それは興味を引きつけたというか、そういう感じですね。

(インターネットを使い出したのは) 小学校ぐらいから。ちょうど、ゆとり教育の一番最初の頃なんです。結構、総合学習とかあって、パソコン活用したりとかそういうことがあったんです。それで調べ物してまとめて。それがきっかけでうちのパソコンを買って、自分でやるようになって、そんな感じですね。

(選挙権を持ったのは) 今年の統一選が初めて。知り合いの議員とかいますよね。まあ活動のつながりですから。そういうところに——まあ自民党ですけどね。この間の統一(地方選)の時に知り合いの人がいて、その人のところに応援に行ったり、それくらいはしてました。それがベターかな、ベストじゃないけど近いオプションでいうたら、それでいいのかなみたいな。その人に入れたからといって、自分に入れられないですけど、地元で入れたとして、自分達の主張がまず 100%通ることはないじゃないですか。でもゼロよりはいいんじゃないかなと。

(投票先は自民党か) そうですね。だって、たち日(たちあがれ日本)なんてずっと世論調査 0.1 (%) じゃないですか。まず無理ですよ。それは他の人たちとは違う部分で。あの界限の人も、選挙のときにどうするといったら、結構たち日に入れたという人も。おつるさん(中曽千鶴子)もたち日の人じゃないですか、選挙に出たりして。でもそういうことをやっても、実際に入れたってまず死票になるんですよ、やっぱ。それよりは、うまいこと生かしたほうがいいんじゃないかと思います。流れを作るという部分ではね。そこは妥協しなきゃ。

### (2) 外国人との接点

(外国人との接点は) ありました。身近どころか、多分、他の活動家の方よりも身近だと思います。というのは、自分、中学高校はインターナショナルスクールってあるじゃないですか、ああいうところに行っていたんです。クラスメートに韓国人いましたし、中国人 1 人いましたし。そういう面白い環境でした。僕もちょっとしゃべり下手なんで、人見



知りは若干するんですけど、でも打ち解けたら…。

(韓国人は) 本国からきて。本当に在日とは違いますし。お父さんが例えばいろんな会社の派遣で日本に駐在していると、そういう人の子どもが通うとか、そういうケースが多かったです。よく会社なんかも——リーマンショックの前ですけど——会社が学費出してくれる、そういう話も結構ありました。

(学校に) 行って、そこの先生としゃべって、簡単な会話ですよ。その時そんなにわからないじゃないですか、半分くらいしか答えられなくて、それでも入れた。正直、入試という入試は——今はうるさいらしいですけどね、自分が入った時はそんなにうるさくなくて。まあ、学費払えばいいだろうみたいな、そんな感じです。(英語での授業は) すごいしんどかったですけどね、最初は。最初特訓して、特訓クラスみたいなのに入れられて、そこで覚えてから普通のクラスに入ってくみたいな。最近ちょっとしゃべってないんで落ちるでしょうけど、でもなんとか。

(活動への影響は) あったと思いますよ。やっぱ、自分を知ったっていうか。だから例えば、こういう運動に入る人がどうやって自分のアイデンティティを形成するかって、僕あまりわからないんですけど。そういう意味で、普通の人の成り立ちと比較にはなりにくいと思うんですけど。いろんな視覚的にわかるんですよ、あいつターバン巻いているからインド人だな。あいつ韓国人の顔だな、とかあるじゃないですか。そういうと自分はあれだな、自分は日本人だなんて。母国語は日本語。そっから自分を知るということですね。だったら日本っていうのは…そういう感じですかね。

(そこで受ける教育は) アメリカ視点のアメリカの授業ですよ。1回あの、日本の歴史を——選択だったんですけど——それ取って、大分ちょっと頭にきましたね。まあ、アメリカ人から見たらこうなんでしょう。そういうこともありました。逆にそれで(日本の) 中高の歴史教育がどういうのか、実際には知らないんで、話はできないんですけど。

(大学入試は) いわゆる学校教育法的一条校ってあるじゃないですか、あれではないので——最近多いんですけど——私学で独自の入学の試験を設けている、そういうのを受けて。AOとか自己推薦とか、そういう選択肢しかなくて、受けて。それがたまたま英語の資格が使えるところだったんですね。それで受けて入りました。

(日本語は) 家庭でもしゃべってましたし、テレビでも見てましたし。友達ともある程度日本語でしゃべったり。一応(日本語の) 授業はあって、新聞を使ったりして授業はありました。まあただ、普通の一般の人に比べたら、ちょっと漢字書けないとか、今でも時々バイトとかで——コンビニなんですけど——領収書で宛名って言われたときに、あの字なんだっけ…見たらわかるんだけど、それは結構あります。それはちょっと情けないというか。でも全然読む分には問題ないです。(漢字は) 6年間普段やってないじゃないですか、それもあります。

### (3) 活動に連なるきっかけ

特に一番手っ取り早いといったら、韓国の併合問題。その後の問題というか、その辺の関係がちょっと気になったこと、それがきっかけだったと思いますけどね。(調べたら) そういう(修正主義的な) 主張があって、それが気になって。そういうのを何年かやっていて、その頃に在特会できたんですよ、確か。ネットをすごい利用してたんで、あそこは。

それがきっかけでした。

(歴史から在特会に流れる理由) 早い話が、一番興味があったのが日本の近現代、いつてみれば 1910 年以降となりますね。韓国併合して、台湾併合して、満州国作って、そういう経緯があるじゃないですか。大分、僕らはテレビを見て聞いていたら、日本はあまりいいことしなかった。でもそれも、いろんな側面があると思うんですけど、じゃあ実際どうなのかなという話をネットで見聞きして、本で読んで。必ずしもそうじゃなさそうだな、という。そこからどちらかという社会——日本と韓国との関係、日本と中国との関係という社会問題にシフトしていった。そういう感じですかね。それから外国人問題。そんな感じですか。

(在特会に行き当たった経緯は) それはやっぱ、あまり覚えてないですね。結局ネットサーフィンしていたら、気づいたらぜんぜん違うところ行ってますでしょう。本当にあんな感じで、友達からサイト教えてもらって、それから検索の検索の検索のという感じで、多分行き着いたんじゃないんですか。たまたまそいつネットが好きで、いろいろ見ている、それでたまたま見つけてきたんですよね。本人は多分、今彼はそんな(排外主義的)でもないし、活動しているわけでもないです。それでたまたま本当に——たまたまですね。だからそういう意味ではある程度ネットの社会にそういうのがある程度、よく出てたというか。そんな感じですね。

#### (4) 参加へ

(活動を始めたのは) 実質 3 年くらい前ですかね。高校 2 年くらいだと思います。ネットで在特会が出てきて、それなりにある程度自分も含めて注目が集まっています。(その頃には) ネットで見る程度ですが、一応(会員に)なっていました。(会員番号は) 皇紀と似ている、2667 とかそんななんですよ。できたのが 2007 年の暮れだったから、それくらいですね。で、それで桜井誠が来るという話があったんですけど。で、一回あの人の話を——結構あの人しゃべりはうまいんで——どんなもんかなと思って行きました。多分在特(会)かなんかの。そこで講演会の情報が載っていたと思うんですよ。(ミクシィと在特会サイトの) 多分両方見てました。ミクシィだったら、同じ興味を持っている人の講演も聞きます。そういうのもありますし、いろいろ見てましたね。

(参加者は) 40 人くらいですかね。どこかのレストラン借りて。桜井さんそんなに来ないじゃないですか。普通に桜井さんがしゃべって——あの人しゃべるじゃないですか——それは聞き慣れていたし。問題なかったですね。それ自体は納得できたかなって。(テーマは) 外国人参政権だったんじゃないんですかね。多分そうだったと思います。最初、桜井が一番テーマにしたのはそこだったと思うんで、それですかね。あの人ダメダメいうじゃないですか、それを聞いてそうだなと思って、反対運動してるんですけどね。

その時、(講演)会をやった人に会って、だから講演聞いてその後街宣があって、それくらいだったと思うんですけどね。その時たまたまミクシィで、お会いしようという話になって。行きますって書いたら、私も行きますよと。たまたまその人が声をかけてくれて、お茶に行ったんです。それで人と知り合って、自分はなんだかんだと活動に入っていたというか。

正直、自分もそうなるとは思ってなかった部分はもちろんありますけど、やっぱりそう

いうのを見るうちに、今現状がおかしいと、現状を変えたいけどどうしたらいいんだろう、みたいな。そういう中で、桜井誠とかいろんな人が街宣やる、講演会やる。そういうのを見ているうちに、そういう方法があるんだなと思って。それで変わるのなら、それが最終的に回りまわって何かになるのだったら、やったほうがいいんじゃないかなと。そういう感じです。

(周囲で活動したことがある人は) まずいないでしょうね。むちゃくちゃマイノリティですよ。(活動では) 面白い友達も普通にいますし、結構そうですけど、自分が興味を持ったことに関してはほとんどいきたいというか。自分がある程度いって見て、わかるところまで知りたいというか。それは好奇心、興味ですかね、やっぱり。それが強かったから。

(同年代の人は) 1人いて、今もう彼はあまりやってないですけど。ちょうど僕が入ったころはまずいかなかったです。(珍しがられたりも) 大分ありましたね。だから、よくお前来たな、みたいなことは結構言われました。自分は周囲にいつも古臭いって言われるんですよ。お前、一回りごまかしてるとか言われるんですよ。まあ別にそれもあるんですけど。小さい頃から周りに大人が多くて、それでそういう意味ではぜんぜん抵抗はなかったです。元々(育った環境)が影響していると思うんですよ。

同年代だったら話も合うでしょうけど、自分が何をしたいのかですよ。自分はそれほど強くは望んでないことって、やる気はそんなに起きないんです。やる気の問題ですからね。そういうところはすごい完結してるじゃないですか、今の運動体というのは。そういう良さ(やる気が起きる要素)があるんでしょうね。だからよく本当にこういう活動に入ってきたなど。同世代って、すごい少ないじゃないですか。で、そんな中でよく入ってきてる。同世代の中ではすごいマイノリティじゃないですか。周りはノンポリばかりで、そういうことに興味を示さないで。だから、そういう意味で連携もしてきました。

(親には) その時は言わなかったかな。いちいち言うことでもないかな。講演会があって、しばらくしてから何かの話でしましたけどね。(親は) ほどほどにやれよ、みたいな感じですよ。放任主義までいかないんですけど、そんなにうるさく言わないほうだったから、その意味ではやりやすかったですね。友達でも結構うるさい親がいて、大分ごまかすのに苦労してましたけど。そういうことを考えたら、大分やりやすかったです。すごい敷居が低かったというか。ネットというツールがあって、普通の講演会があると。そういうだから、ステップがあったんです。逆に考えたら、左の運動とかあるじゃないですか、あんなのどうやって入っていくんだろうなど、いつも疑問に。それなりにあるんでしょうけど。ただ自分にとっては、こっちの運動が敷居が低かったんですよ。

あの人(桜井)自身はそんなに来ないんで、実際、なんだかんだで支部のところに行くようになって。北朝鮮がミサイル打ったときかな、テロ支援国家指定を解除したとあって、「アメリカ大使館に行くから」って言って、「ああそうですか」ってなんだかんだと行って。そんなことの繰り返しでした。こんなんやるよとあって、行くみたいな。最初は講演、桜井誠とあったのが5月で、その次7月、本当に飛び飛びで。(受験への支障は) まったくなかったです。

(今は) 普段の生活は学校行ったりとかバイトしたりで。せいぜい、活動だって土日くらいじゃないですか。だからぜんぜん問題ないです。自分のできる範囲でやってますよね。だって続かないでしょう。そのくらいのペースでやってたんで、できたかなと。前に荒巻

さんが捕まるまえに3日に1回くらいやっておって、この人は何でこんなに暇なんだ。荒巻さん仕事夜だからいいんですけど、こんなだったら絶対に続かない。またみんな来てるんですよ、平日の昼間から。暇だなーと思って、いつも見てたんですけど。だから続かないです。結構入れ替わりも激しいです。あそこは。

#### (5) チーム関西について

荒巻さんとか、あの人（西村斉）がやるようになったじゃないですか。荒巻さんが切り込み隊長、西村斉さんが参謀みたいに、後ろである程度構えて、彼なりに作戦を考えて。

（主要人物は）彼ら2人です。最初は僕も行ったりにしてはいたんですけど、なんか違うなって思って。違うのはいいんですけど、何となく荒巻さんらの始めた、京都の朝鮮学校の……。これはちょっと違うんじゃないかと思いましたね。

やっぱりね、なんていうかすごい経験がない、あの人ら経験がないわけですよ。荒巻さんも後から入った方なんで、すごい燃え滾っていて——すごい燃え滾ってましたね。で、保守運動関係で自分達でやるようになって。その燃え滾っている部分がすごい前へ前へ出ているんですよ。だからすごい、運動しているいろいろあると思うんですけど、それじゃあ絶対失敗すると思うし、うまくいかないことあると思うし。だから理性的な部分——理性的な部分がないといったらあれですけど——運動論というか、普通は何かを考えてやるじゃないですか。先に行動をやって、それから後で結果を総括するみたいな。ある程度グランドデザインが大事なわけじゃないですか、あるはずなんでしょうけど、曖昧で。だからまず行動ありきで。そこは、ああ、これはまあまあ、曖昧な気持ちで見てて。なんだかんだで、結局、最終的なところが見えてこなくて。何したいんだろうなと思って、それはありましたね。そういう気持ち。ちょっとなんだろうなという気持ちが。

（京都の朝鮮学校の時には）僕は行ってないです。なんか公園清掃しますみたいな話だけ聞いて、ふーんと思って。多分本人たちも、そんなには思ってなかったでしょうね。結局学校側で、後ろについてくる総連とか弁護士、法曹界がすごい騒ぎ出したのが大きかったですね。

（彼らが捕まった時には）荒巻さんよく知ってたし、何度も一緒にやってたし。仲間は仲間です。たまたま今一緒にやってないだけで。たまたまその時に、だからまあ若干応援したりはしました。中谷さんは、京都の拘置所に入ってたんですよ、迎えに行ったりとか、それくらいはしてましたね。あの時出て来るのすごい遅くて、普通出てくる時間ってわからないじゃないですか。話ではその日の午前中とかいう話で、西村修平さんも来られていて、ずっと待ってたんですけど、出てこなくて。なんかすごい警察が嫌がらせしたらしくて、出たくなくて。何度も準抗告出したりして。出てきたのが11時くらいです。夜の。ずっと車を止めて。ローソン行ったり暇つぶしして、話したりしてとにかく暇つぶしして。

（西村修平は）その前からよく来てたんですよ。だから一緒に街宣やったりとかしましたね。僕もなんだかんだ東京行くようになって、向こうでも御一緒したりとか。荒巻さんの事件の時に、いろいろお互いにやった関係で、大分、一緒にやるようになりました。すごい知っている方ですし。運動論的にもすごいですし、社会全般そうだし。その意味であの方は安心できる。ちょっと時々ぶれることがあるんですけど、根幹はすごいしっかりしている。

引っぱり人があれだけイケイケでやってたじゃないですか。それに共感した人が多かったと思うんです。お祭りのな部分で。それでそういう人が集まったんじゃないんですか。あれを運動というかどうかは別の話ですけど、そういう方針でやってそういう人が集まってきた、それはあるでしょうね、実際。現に荒巻さんがやるようになって、僕も最初行ってたじゃないですか、いきなり知らない人がば一と増えて、何やこいつはという風になって、いつの間にか主力になってた。それで僕は少し行きにくくなったんですよ。荒巻さんは初対面の人にも「あーどうもどうも」って軽いといったらあれですけど、気さくな感じ。いろいろな人ととりあえず仲良くなって。で、いきなり知らない人ばかりになって、ちょっとやりにくかったですね。

(それまでとは) ぜんぜん違いますよね。そんなにああいう経験の激しいのをやったりするときは、必ずしもいたわけじゃないんですけど。そういう人らも加わって、色がどんどんそうなったというのはありましたね。あの行動力はすごいです。あのモチベーションがわからない。違うんですよ。燃え滾っている。生活レベルを落としてでも運動してる、そういう人たちですから。経験がそれほどなくて、それが全部だと思ってるんでしょうね。運動の多面性をあまりに認識していないというか。まあ、今はさすがにねえ、ある程度は落ちついていると思いますけれども、あの頃はもう……。

3日に1回(の活動)なんて絶対に無理です。(川東大了は) 失うものがないですから。奥さんいないし、実家暮らしです。自営業で。だからできるんでしょうね。そういうこともいえる。そういう運動を主体的にやろうとしている人は、そういう人らばかりじゃないですか。荒巻さんにしても自営業だし。してもそんなに迷惑にはならない。普通に会社勤め……〇〇社長、会社やってるじゃないですか、ああいう人は言えない。あの4人の中で一番こたえたのは、多分中谷さんだったんでしょうね。一番だって、社会的な束縛が強いじゃないですか。荒巻さんは一人者だし、自営業。斉さんも奥さんと子どもいますけど自営業です。僕も中谷さんの支援したり、そういうのはやりました。そういう部分でやったんで。でもあそこは奥さんが強いですから、しっかりしてますんで、本当に。今はね、若干引いている部分もありますけど。それどころじゃない。

元々在特会はああではなかったんです。桜井誠もそれなりの自分のペースで、根っこの部分である程度にたようなものがあると思うんですけど。そこに荒巻さんたちが入ってきて、自分達の運動をやる、それが世間一般でいう在特になったって、そういう感じでしょうね。元々あの人はずい理論的な人じゃないですか、桜井さん。だからすごい理路整然としゃべるし、それにもとづいたそれなりの新しい保守運動なりにはやってみましたけど。やっぱそれに行動的な色をつけたのは関西だと思います。元々あんなにパフォーマンスする——まあ若干あったんでしょうけど——あそこまではなかったです。そういう意味で影響されたんでしょうね。すごい影響されましたね。こうやるんだ、みたいな。関西の、そこまでのアグレッシブさがなかったでしょうけど、関西のあれが出てから意識している部分が。最近、どうも桜井さん、どうもその部分があるみたいで。運動の最終目的がみえないという部分に関しては、一緒だと思いますね。ちょうど荒巻さんが出てきて、やっぱその影響を受けてる感じがしますね。

## (6) 既成保守との関係

在特会なり新しい右の運動が生まれたじゃないですか。それまでの運動ってあったじゃないですか。右翼なり、いわゆる保守層というたら、そこが行き詰まっていた部分があった、本当に左みたい長いものがありながらそこにそれを広げようというあれがなかったし。だから右（は）自己完結してたんです。右翼は右翼で一つの存在じゃないですか。もう完成された。それも、もちろんそれはそれじゃないですか。で、右の保守層もすごいマニアックで、広がり——広がりとうとほしない。だからそこで行き詰まって、いろいろ社会が変わるじゃないですか。そういう中で必然的に新しい運動が生まれたんじゃないんですかね。そういう意味で、それはプラスもマイナスもあるんでしょうし。必ずしも今の在特なり、あれに100%マイナスではないと思う。もちろんプラスの部分もいっぱいある。広がった、保守層の考えを広げるという意味ではプラスだと思うんですけど、やり方的には100%ではない。マイナスもあるでしょうね。一般層には広がりとうとしてるけど広がらない、みたいな——結果的には。だから何かを変えるという意味では必ずしも成功していない。

左の市民運動って最終的に票になるじゃないですか。ネットワークの中ですけど。だからそこに住民運動として1人議員作ったりとか、それは極端ですけどするじゃないですか。なんだかんだ辻元清美みたいな人も出てくるじゃないですか。地方議員って結構いますよね、共産党なり社会党なり。（右の市民運動は）そういうのをやらないじゃないですか。だから自民党は自民党だし、利権の人もいますし。必ずしも保守じゃない。結局そういうところに行き着かないから、例えば今の自治基本条例、あんなんでも止めようできない。結局その、自分達で議員を持っているわけではないから、とりあえず自分達に少し似通っている人たちに、自民党の議員団に頼み込んでやるとか。そこらへんの連携がうまくいってないですよ。だからそういうのを止められない。

日本会議って、神社関係者も多い。すごいだから、これまでの保守層なんです。もちろん何かあったときには動くでしょうけど。それまではまず動かない。それはどーんと構えてる程度なんで、それで変えられるかいうたら無理でしょうね、やっぱり。まあせいぜい年一回総会やって、時々講演会やって、それだけじゃないですか。その程度。それで社会を動かせるかいったらまず無理ですね。いったら悪いですけど、年寄りばかりじゃないですか。すごい何かを変えようというあれもないし。それは無理でしょうね。

何を保守というのかなんですよ。日本の文化だと思ってますし、ひいては皇室だと思えますけど、今の現状をどうするのか。例えば僕らからしたら外国人参政権が法案になるろうとしている。今は自治基本条例が、もしかしたら人権擁護法案が出るかもしれない。そういうときに、構えとってはいかんですよ。自分達はできないのに、成立しないのに行動しないと。自分たちが動かないと変わらないですから。その中で保守保守いっても、じゃあ何（を）保守するのか。自分たちが動いて守らねばならないものを守らなければならないんじゃないか。そうなんです。自分たちが動くという部分が、どうもこれまでの保守界には、あんまり——あったとしても——やっぱり欠けてたり。だからこそ、ああいうのが——新しい保守運動が生まれたんでしょうね。

## （7）大学の環境

（周囲と政治の話は）まずしないでしょうね。だってそんなの興味を持つ人自体が少ないじゃないですか。ある程度はあるんでしょうけど、知れてますよね。うちの学部っての

は附属から上がってきてとかそういうのがあるんで、結構一番確か枠が広いんです。だからあまり興味ない人も入ってきているし、興味ある人もある程度入っている。でも興味を持つかっていったら、大学生なりというか、それくらいですよ。正直、大学入って物足りない部分は結構あります。それまでにいろいろやってた分もあるから、逆に。まあ逆にみられましたら、同世代に近いのがないんです。ある程度の少ない種類の集団しかいないんですよ。多様性がないっていうか。その意味でちょっとつまらない部分はありますね。

(大学で保守系活動している人は) あまりいないですね。いますけど、ぜんぜん一緒にはやってないですね。日本会議系に近い学生組織みたいな。学生文化会議とかいう——それなりにはやってるみたいですが、接点はあまりないです。最初はコンタクトはあったんですけどね、なんだかんだであまりやらなかったし。やっぱ毛並が違う、(行動) するけども限られてる。でも最近、結構してますけど。日本会議なんか、尖閣の漁船の問題あったじゃないですか、あれで結構やるようになったなって。それまでほんまに何もしなかったんですけど。また結構大阪が熱心で、やってる方が。結構週イチくらいで署名やったりとか。

#### (8) 日本文化への関心と排外主義

それ(皇室への関心)は歴史を学んで、そこから社会、それで自分がガイジンの学校に行ったりして、自分のアイデンティティを作るじゃないですか。アイデンティティを。で、日本で(アイデンティティになるのは)何なのかなと思ったら、皇室かな、みたいな。何となく。それは見聞きもあるでしょうけど、最終的にそうになりました。

(そう考えるようになったのは)5年くらい(前)じゃないですかね。学校で勉強したって教わらないじゃないですか。存在が空気になっているというところがありますね。残念ですけどね。それまで右の人は(皇紀)2600年という、それがどうかは別にして、実際に長く続いてきたものですよね。少なくとも天智天武から確立されているわけじゃないですか。政治の主体でありそうでない時期も含めて、1つの存在だったんですね。やっぱそういう意味では、これまで続いてきたものだから、貴重なものなんじゃないかな、自然にそう思ったんですよ。だってもし必要でなかったらそれもとっくに廃れてると思うし、でもそうじゃなかったじゃないですか。で、その皇室の方々の存在だけじゃなくて、それに例えば行事をやったりとか。そこに人が周りがあって、そこに文化があって。それで発展してきたものだから、と思いますね。だからこそ重要性がある。単に日本という1つの国の統治者だったならば、それほどの存在ではなかったわけです。いってみればリンクしてると思うんです、日本の文化と。神道なりも。その意味で1つの集合体として。だから全部含めて日本の文化じゃないかと思いますね。

日本の文化伝統があって、それを守りたいという気持ちがあって。ああそうか、…(「外国人問題」とどう関連するか)…そうですね。やっぱりその、質問されて、何だろうなって自分で初めて思ったんですけど、何なのかな。例えば外国人参政権があるとして、仮に通るとするじゃないですか。それはやっぱりその、社会を動かしているわけじゃないですか、選挙で。そうなった時に、そういう中で日本のあり方も変えようと思ったら変えられるじゃないですか。もちろん可能性として。

で、よく言われるのは竹島ですとか、島根県で外国人参政権、松江、隠岐島でとるとし

たら、そういういろいろな法律を通せるとして。やっぱああいう場所は国防の場所だし。国防という観点からいえば、そういう意味で重要なんですよ。そういうところで、変えてはいけないところを変えさせたらいけないんじゃないかな、そういう感じですかね。

やっぱり、すごく近い国だから、そういう問題がありますし。現に併合問題で問題になっている、そこから来るんでしょうね。だから日本には移民がまず少ないですよ。そういう意味では問題にあまりならないですけど、そういう部分から生まれてくるから、外国人参政権問題がすごく問題にはなるんでしょうね。それは、韓国との関係が元々はあるじゃないですか。その上にやはりそういう参政権を求めるとか、そういう主張が違うんじゃないかという。ちょっと筋が違うというか。そういう部分ですよ。そういう意味ですごい疑念があると思います。だからそういう問題に関心を寄せている部分はあります。

在日と韓国人、朝鮮人といったら今すごい同化してますよね。周りでも見てましたし。そういう意味でいったら、日本人にすごく近くなってると思うんです。中国人だって、これまで来てた層はやっぱりある程度、日本に意識があって、日本で勉強したりとか。そういうレベルでいったらそうなんですけど、やっぱりなぜブラジル人とか追い出そうと言わないのかといったら、すごい民団とかが政治的な主張してるから。そういうのを見て、保守界の人は、なんていうかすごい凶々しいと思っている部分があると思うんですよ。だから、日本で政治的な主張をする外国人といったら、基本的にそのどちらかに限られてくるじゃないですか。そういう部分に関して、保守の人たち、在特の人らはつぶさないかと思ってる。多分そういうことなんですよ。外国人いてもいいですけど、その人たちは例えば政治的な主張をしていくのは、それはどうなのかなみたいな。もちろんいいんですけど、程度問題でしょうね、やっぱり。

周りがよくいうのは、韓国併合して、それなりにオランダなんかには比べたらうまいことやったのに、何でこんなこといわれなきゃいかんのか、そういう部分とリンクしてくるんじゃないかと思えますね。それをすごい最初思ったのがあって。韓国でそれなりにいいこともある程度はした。だからもうちょっと評価してもいいんじゃないか、そういう気持ちはあった。多分そこだったと思うんですよ、今考えたら。

## (9) 活動の持続

それ（活動し続ける理由）は確かに自分でも時々わからなくなるんですけど、どちらかというとも早く冷めた方だと思うんですよ。だから、いつも思うのは、ネット見て在特会のデモ行ってという人は、燃え滾っているんですよ。燃え滾っている人は絶対続かないですよ。確かに。僕も最初はそれくらいありましたけど、どちらかというとも一歩離れて見てたというか。冷めて見るようになった。客観的に見るようになって。それが早かったので、それは過ぎて。そこで別に行かなくなるということではなくて、なんだかんだお付き合いして。いろいろ手伝ったりして。在特会の活動というのは、すごい限定的じゃないですか。街宣やってデモやって集会やって。活動は、在特会は一部であって他にもいろいろ、ああこれは面白いなというのがあって。活動範囲が広がったです。そっちにすごい興味がありました。その一環で在特もやってみたいな。

正直自分でも不思議なんですけど、今までなんだかんだやってきたのかなというの。それはあるんですけど、何なのかなあ。正直その問題は難しいです。答えにくいというか。



なんだかんだで自分の中の一部、自分はそんなにいつも何かをやったりとか、主体的に動いては不是ですけど、だからこそ続けてきたんかなという…。そういう立場だからこそできたかなと思います。

(活動してよかったのは) 人間関係が広がったということ。もちろん運動の中ではありますけど、そこで幅広い層の人、そういう人と知り合いになれた。そういう人間関係の幅と。それとすごい人間観察ができましたね。いろんな人いるじゃないですか。そういう意味では本当に面白かったですね。あと議員とか、そういう人とかもある程度知り合いましたから。やっぱ人間関係ですかね。

(将来なりたいもの) 今ねえ、ちょうどないんです。大学入ってから決めようなんて思っていて、とりあえず適当に大学に入って。もう2年たつんですけど。今だにわからないです。将来的には何かになってるのかな、とは思うんですけど、何かって聞かれたらそれはわからないです。「お前、4年後選挙に出ろ」とかいわれますけど、それは断ってるんですけど。もしかして何らかの形で議員秘書なり、活動とつながることはもしかしたらあるかもしれないけど、ないかもしれない。その時(次第)ですかね。

#### (10) 小括

U氏は、インターナショナルスクールに通うという珍しい経歴を持ち、それが排外主義運動への参加にも関係しているという。「ガイジンの学校」に通う中でアイデンティティを模索した結果、日本の文化や伝統、ひいては天皇を意識するようになった。それは中学生の時であり、排外主義運動に関わる以前のことだったから、インターナショナルスクールでの経験が影響したのは間違いないだろう。

ただし、彼がその際に情報源として依拠したのはインターネット上の情報であった。インターネットでの調べ物の習慣は、日本の公立小学校での総合学習の時間に身につけたものである。総合学習のカリキュラムで学んだ世代は、こうして歴史修正主義と接点を持つようになるわけで、U氏以外にも同様の経路で排外主義へと至った活動家がいた。学校で学ぶ「正史」たる歴史教科書の採択に際しては、相当のエネルギーを費やして修正主義的な教科書の採択阻止運動が展開される。だが、総合学習におけるインターネットの使い方については、その情報の質を判断するような教育がなされているとは考えにくい。ここでのいうのは、イデオロギー的な観点からの是非ではない。実証上の根拠に乏しい修正主義的な情報がインターネットにあふれかえる現状に鑑みて、情報の質を判断できるような教育も必要になる。

活字メディアが支配的だった時代には、権威主義的ではあったものの編集・出版というフィルターを通していたため、最低限の「質の管理」は相対的にやりやすかった。インターネットでは、誰もが発信できるという民主化が進む一方で、情報の質を保証するものが何もないアナーキーな状況も作り出した。それが排外主義運動にとっての機会を作り出していることは間違いなく、そこからネット社会のあり方を考える必要もあるだろう。

## 2 2 「日の丸をじいちゃんが掲げた」V氏の場合

### (1) 政治に対する関心

最初に関心を持つっていうか、だいたい中学くらい。だいたい社会とかで政治とかを、仕組みとかを大きく学んでくる時期ですよ。で、うちはじいちゃんがいたんで、毎日、新聞読んでたんで、「お前も読め、中学(生)になったんだから」となったんで。中学(生)だからまだ理解できない部分って多いわけですよ。まだ勉強したり社会でわからんところを聞いたりしながら。漫画が好きだったけど、7時くらいニュース見ろとか、社会の流れとか仕組みとか、それくらいで教えてもらったというか。自民党があり、なにに政党がありとか、参議院・衆議院があって、とかいうような具体的な話とか。

まだ僕らが小さい頃は、祭日には日の丸をじいちゃんが掲げたりとか。でも、中学になる頃にはもう掲げてなかったけど、幼稚園とか小学校低学年の時には家で日の丸掲げたりとかいうくらいきちっとして。で、政治に興味を持つというか、社会人としての最低(のことを)知らないかんということ、ニュースは見なさい、毎日、新聞読みなさいとか。わからんところは聞いたらちゃんと教えてくれるし。まあ一般人というか、普通の人と同じくらいのレベルというか、ですね。

(選挙権を)初めて持った時は、どこに入れようかというのは新聞とか読みました。行ったこともないし。多分、地方選挙かなんかだったと思うんですよ。市議会選挙かなんかで。当然、選挙広報みたいなのが来ますんで、誰に入れようかと。(選挙には)ほぼ行きます。日曜日行けないときは期日前投票で。一応どこに入れるというので入れているというか。行かないって言えば、今でも怒られますんで。「行け」って。

地方議会は、昔はやっぱ田舎とかだったら地縁血縁とかあるじゃないですか。知り合いとか、うちのおじさんが立ったから入れてくれとか、あるから。党派とか公約とかあまり関係なしに無条件に入れなきゃいけない、というのが昔はあったから「しゃあないね」というのはあるし。会社がここを推したりとかあるんですよ、組合とかで。だから入れてくれとはいえないから、推してますとかなれば必然的に入れなきゃいけないというところで、安易に選んでいた部分が正直あります。

もともと自民党ですね、入れるとしたら。それ以外に入れてたのは、組合とか地方選挙の地縁血縁があるから入れてやってくれと言われれば、という感じですね。基本は自民ですね。うちのじいちゃん自体が自民党が好きだったんで、昔の話からいうと「自民党に入れとけば」というような考え方ですよ。安定政権を望むというか。途中で、こういうの(在特会関連のことがら)に興味を持ち出してからは、地方選挙でも政党とかそういうので選んで、という風には変わりました。いくら地縁血縁といっても…。

### (2) 外国人との接点

高校の先生がカナダの先生で、英語の授業は、というくらいの接点です。(学生時代に)あとは思いつくのは特になしですね。外国人と初めての接点は、仕事をしだしてから当然外国の人とかいますんで——アルバイトとかで外国人来たりするんですよ。近くの大学とかは交換留学生がいるんで、韓国と姉妹都市で。韓国から来て。何ヶ月間かアルバイトし

たりするんですよ。で、政治の話は当然しないけど、日本語ができるんですよ。英語と母国語ができるくらいで、まじめに働いてくれて。それくらいの接点ですね。(活動に対する影響は) 関係ないですね。

### (3) 活動につながるきっかけ

元々ですね、家の近くに航空自衛隊の基地があるので飛行機が好きだったので。小さい頃から航空祭って行って中に入れてもらって戦闘機が飛んでというのを見てたので、元々保守的というか自衛隊には容認的な土地柄でもあるんで。それで世界の軍事常識みたいなのを知ったら、韓国と北朝鮮という2つの国があつてとか、前の(戦争)体験の話とかいう部分で、(戦後教育に)疑問は昔から持ってたのはあるんです。じいちゃんとかから聞いた話とかと大分違うなど。で、うちの母も自分のじいちゃんは植民地——朝鮮半島のときに農園とか1つ持ってたんで、向こうに行っていたという話を母に聞きながら、なんか聞いているような話と大分違うなどというイメージはありました。そんなひどいことなんかしてないのに、という感じのイメージもありましたし。違うなっていうのが——向こうの国に対してのイメージが。

前から結構『SAPIO』とか読んでたんで。拉致の問題とかもかなり前から落合信彦とかあの人たちが書いてたので、横田めぐみさんの話とかは拉致が発覚する前から知ってたんで。ミリタリー的なものが好きだったので、当然拉致はあっちの国だろうねという話があったけど、確証がなかったような時代で。その後拉致が発覚して、「ああやっぱりね」というか。

ちょうど時期的に高校ぐらいの時に、中国の天安門事件とかベルリンの壁とかが崩壊してたんで。国際的なことに興味があるというか、一番高校生ぐらいの時に社会の仕組みが変わっていくというか、世界が変わるので、世界的な情勢に興味が出てきたんですね。その中で拉致の話も出てきたので、横田めぐみさんの話とか。高校時代から学生時代、就職してぐらいまでですよ。あの人(落合信彦)の本をずっと読んでいたので。ただあれだけの数が拉致されているというのは、まだわからなかった時代ですし。

(「外国人問題」に対する関心は)当然その、拉致が発覚する前からそうです。朝鮮総連というのがあって、その時代に、朝鮮人のそういう組織や団体とかがあつて、とかいうのもその時の本にも書いてあつたし。拉致が発覚した後も朝鮮総連が残ってるというのも…漠然とそれは疑問に思ってたんですよ。何でなくならないんだろうな、とか。

一番決定的だったのは、ミサイル発射をやったじゃないですか、北朝鮮が。二千何年ですよ。日本が打ち落とすとか打ち落とさないとかやってた時から。あの時に、Youtubeでいろいろ見てたんですよ。ただその時もたまたま在特会が朝鮮問題でヒットして、その動画を見たんですよ。それで、この会の存在を初めて知ったというか。Youtubeで調べたら、(動画画面の)横にいろいろ出てくるじゃないですか、関連の(動画が)。そうしたらたまたまヒットしたんで、たまに見るようになりました。最初は見つかった時は東京とかでやってたんで、向こうの方でやってるんだな、としか認識はなくて。いろいろ調べてみたら、地元とかやってるんだね。参加までは(至ら)なかったですね。

---

<sup>1</sup> 2009年4月の実験を指すと思われる。

元々、もう少し『SAPIO』とかよんで知識的なものがあったって、プラスアルファで補完するものとしての動画という位置づけですよね。一つ思うのは、やっぱり「おかしいな」と思います。公園を不正に使われても何も言えないって、何かおかしいなって<sup>2</sup>。

#### (4) 参加へ

(動画を最初に見たのは) 北朝鮮のミサイル発射があった後くらいですよね。(実際に参加したのは、それから時間が) 経ってます。興味を持ちつつ動画を見て。で、京都の朝鮮学校の問題とかあったじゃないですか。(2010年) 8月に逮捕されたじゃないですか。あの時には、自分は納得がいかなんと思ったんですよ。学校<sup>3</sup>を不正に使用された挙句に、逮捕、書類送検、向こうは罰金だけと。ちょっとこれはおかしいなというので、それが8月に逮捕があって、9月に会見があったんですよ。

(参加を決意したのは) 逮捕が大きなきっかけですよ。あまりにもやっぱりこう、理不尽だなんて。インターネットで見たら、9月20日に街宣が地元であるっていうので、それで初めて参加した。(会員になる) 前です。参加してみたらなろうと思って。どんなもんだろうと思って。その時は朝鮮学校の問題だったんですよ、無償化かなんかの。で、拉致の問題も当然あって。その時、一緒に支部長がいて話して、いろいろ。で、入るきっかけになったんですけど。

当時は多分、在特会自体、朝鮮問題メインでやってたから——街宣も。多分他の問題でも朝鮮問題でしょうから。だって動画をみると朝鮮問題がメインで、たまに日教組をやったりとか、あとカルデロン問題とかもやってましたよね。あれぐらいで、今みたいに尖閣だなんだってまだ言っていなかった時代だったので。

(参加に) 抵抗がありました。(直接行動には) 一切そういうの出たこともないです。まずどんな人が来るんだろうか、どんなんだろうと思って。1時間前くらいに行って、駅前の銅像の前でずっと見て、「ああ動画でみた人だ」と思って。で、大丈夫そうかなと思って。動画でみると——街宣自体は前から見てたから、流利的なものは大体わかるので、「ああこういう感じなんだな」と思って。その後の打ち上げというか、やる時には動画とかないから、いろいろ話をしたんです。その時に、「ああやっぱりなるほどなるほど」という共感とか、いろいろなものがあったので。

それでも、入る(在特会に入会する)まで若干ちょっとまだ時間があったんですよ。直後に入ったわけではなくて、その後支部長と何回か話した後に、入ってと言われたと思うんですけど。(街宣参加から入会まで) 1ヶ月ないぐらいですよ。(会員になってから) すぐ(支部)運営になったんですけど。

はっきり言うと、在特会の活動とかに自分が参加しても、自分自身じゃなくてみんなに迷惑がかからないか、とか自分でも務まるのかなとかという部分がありました。経験もないし、ノウハウも当然ないし。みんなに迷惑かからんように、自分のスキルで何ができる

<sup>2</sup> これは後に言及される、京都朝鮮学校に対する嫌がらせのことを指している。嫌がらせを実行したチーム関西は、「学校が公園を不正に使用している」(八木 2012)として正門前で長時間にわたって街宣した。それに加えて公園のスピーカーを無断で撤去するなどしたため、関係者が逮捕されている(安田 2012a)。

<sup>3</sup> 「公園」の誤り。

んだらうって。結構みんなマイクでガンガンしゃべれるじゃないですか。会社の朝礼とかああいう時でしゃべったりするのは当然あるけど、それ以外でマイク持ってしゃべる経験なんてまずないんで。動画でみるとみんなうまくしゃべってるし、果たして自分にそんなことができるんだらうか、というのが一つありましたね。(活動頻度は) 1ヶ月1回ぐらいですかね。

#### (5) 外国人参政権について

外国人参政権は、『SAPIO』とかにも確か書いてあったと思うので、多少の関心はありました。でも活動を始めてからの方がより一層、理解も深めたし。危険度というのも認知しました。(それまでは) こういうのがあるなっていうくらい、流れは。そこまで身近には思ってたかったですね。参加するまでは流してたと思います。今の日本人も流してると思いますし。

#### (6) 尖閣よりも身近な問題

尖閣は尖閣でまた(問題が)ありますけど、あれってやっぱり沖縄の遠方海上だから、台湾寄りのまだ遙かかなたで……。日本人の感覚として中国人の云々と意識するのは、やはり身近なレジに中国の人が多くて、居酒屋とか飲み屋さん行って注文取りに来る人が、というので「ああ、向こうの人多いな」という一つの認識が増えたかなど。(身近な問題として) 感じますね。あと、飲み屋さんとか居酒屋とかいっても、向こうの——韓国というより中国の人のアルバイトで結構多いですよ。だからかなりの人達が入って来てるなという印象がありますね。

最初(活動を)始めたときは、韓国・朝鮮に強い興味がありましたけど、今は両方ですね。もうほぼ同列ぐらいかなと。近年の1つの移民って、在日韓国・朝鮮人ですよ。ある意味、移民というか不法入国の人もあるんですけど。次に多く入ってきているのが中国人。まあ、フィリピンの人たちもそうなんですけど。で、流入もどンドン続いているような状態だし。あと、コンビニエンスストアに行ったらわかる通り、中国人が、留学生の人達がレジ叩いているわけじゃないですか。大学とかでも多く受け入れているわけだし、彼らは卒業しても帰らない人が多いんですよ。データからいうと6割くらい残るんですよ、日本で。ひどい人は親兄弟とか連れてきて留学してる人達が、統計上あるんで。ここに定住するというか、それはちょっと深刻な問題だなと思っています。

例えば大分の中国人の生活保護の問題とかもありますし<sup>4</sup>。ああいう問題も、やるべきかやらないべきかという問題もあるけど、話の根本からいうといろんな複雑な問題がね、あの件は絡んで。実際、義理の弟に資産全部おさえられてしまって、生活に困窮するような感じになって、その他問題であって。実際、じゃあその問題を先に解決しないと、あのおばあさん幸せにならんかって思います。だって暴力受けて、お金から通帳から全部取り上げられて。で、195万(円)くらいあった貯金が210円まで減らされて。で、駐車場と

---

<sup>4</sup> 中国籍永住者による生活保護申請が却下され、その取り消しを求めて提訴した裁判。大分地裁は、知事が審査請求を却下したことを違法とする一方で(2010年9月30日)、生活保護の権利性自体は棄却する判決(2010年10月18日)を下した(嘴本 2011; 奥貫 2011)。

か家の賃貸料で70万とか80万(円)あったのを全部口座窓口移し変えられて、出鱈目やられていて。今、確かに困ってるんだろうな、とは思いましたよ。でも生活保護やって、じゃあその義理の弟の排除しない限り、お金も取り上げられるんじゃないかとか、暴力受けるんじゃないかと思って。その裁判は本末転倒だなと。

まずはおばあちゃんのことを考えるんだったら、生活保護の裁判を起こす前に、おばあちゃんの義理の弟を何とかしてあげないと、そのおばあちゃんに幸せは来ないなって思う。それをマスコミとかは、人権報道じゃないけど、外国人にやるやらないとか難しい問題にしてるじゃないですか。憲法14条だ25条だ、法の下での平等だ、あとなんだ…生存権とかやってますけど、それ以前の問題でしょう。記録を見たら——裁判記録とか見たら。

危機感があります。民主党が移民をどれくらい受け入れるだ、こうだと言ってますし。現実問題、中国人の留学生ってすごいんですね、今日本で。だからとっかかりの在日韓国・朝鮮人の移民問題で日本(は)失敗してるわけですよ。甘いから。それを韓国や違う国の人に恩恵という形で生活保護にしろ——あといろんな問題ですよ、社会保障というか——国のお金をどんどん出し続けているのが現状だから。とっかかりが甘いのに、これ以上受け入れてどうなるのか、という危機感がありますね。地元なんですけど、10年前でいたい生活保護って外国人って数十人くらいしかもらってなかったのが、今は4,500人。どんどんどんどん増える一方なんですよ。今、日本人でも生活保護を受けないと生活が困窮する人が多いのに、日本人ですらあんまりもらえないのに、外国人の枠が増え続けてどうなっちゃうのかなって危機感がありますね。

## (7) 活動を持続させる動機

一つは危機感ですね。やはりこのままだったら大変なことになるな、というのは身近に感じました。市役所とか県庁舎とかいろいろなところに行って担当の人たちと話したりする時に思いました。外国人にこんなに甘いんだ、国が…。

自分が特にこの活動を始めて思ったのは、支部長から朝鮮学校の補助金の件をやれって言われて、監査請求とか行政関係をやったんですよ。その時に担当のところに朝鮮問題とかを提起すると嫌がるんです。こういう問題を言いに来る人は誰もいない、かつて一人もいなかったというのです。「こういう問題に手をつけると大変なことになる」と(役所の人が)言うのですよ。こういう問題に手をつけると大変なことになるから、やめましょうやめましょう、とやってきた経緯があるというのを直接見聞きすると、大きく考えが…。こんなにも外国人に甘いのかという認識がありました。

直接肌で行政の人たちと意見を聞いたり、意見を発することというのが得られた一番の成果ですね。インターネットで見聞きするよりリアルタイムの運動を感じられたことはすごいですね。あと交渉能力っていうか、今までにないようなスキルがつかますよね。行政がのりくらりとかわすような、そういう交渉とか。会社でそんなのりくらりなんかないですものね。答えないんですよ。「うーん」とか「あー」とかしか、朝鮮問題とかそっち系になると、絶対口割らないです。そんな経験は今まで本当なかったです。商談とかいろいろ会社同士で話したりしても、受け答えで返ってくるわけじゃないですか。疑問点とか投げかけたらこうとか。イエスノーですらないんですから。そういうのをどうやってしゃべらせたりしたらいいんだろうか、とか。

今までの経験でないですね。あの、キャッチボールにならないんですよ。本当に異常な空間だなんて思います。実際に体感したらわかります。(交渉では)押したり引いたりとか、なだめすかしたりとか、声を荒げたりとか。(そうすると話を)してくれる人もいますし、動画とか持っていけ、止めてくれたら話すとかいう人もいますし、いろいろですね。それは本当に実地で学んでいかないと、個々の生活とかいろいろあるでしょうけど、場を踏まないとわからないですね。この人はどういう人なんだろうかというのがあって。

## (8) 小括

V氏は、筆者が聞き取りした活動家のなかでも実直そうな雰囲気が強く伝わるタイプだった。また、他の活動家と異なり、自ら経験したことから活動の論拠を示すのも特徴的であった。当初の関心こそ北朝鮮との関連で生まれたが、実際に活動して培われた「危機感」はコンビニエンスストアでアルバイトする留学生など、体感的な移民の増加である。あるいは、行政の姿勢をみて移民が増加した時の受け入れについて懸念を表明するなど、実体験と意識の連関が密な珍しい部類に入るだろう。

彼の実直さの少なくとも一部は、比較的好くみられるような——極端ではない——保守的な大家族で育ち、保守的な祖父の影響を受けてきたことによるだろう。祖父は、単に日の丸を掲げるという保守的な姿勢だけでなく、新聞を読むという社会性もV氏にしついている。投票先も祖父の影響を受けて自民党であり、安定政権を望むという「システム・サポート」的な姿勢(田中 1995, 1996)にとどまっていた。

それが排外主義と接点を持つ要素として、次の2点を挙げることができる。第1は、戦前の状況に対する親族の話により培われた、歴史修正主義的な見方である。身近な親族の話の準拠点として、過去のファシズムや戦争責任を否定するのは、特に珍しいことではない(Dechezelles 2013)。第2に、幼少期の自衛隊体験を挙げることができるだろう。自衛隊に対するポジティブな見方は、軍事・国際情勢への関心を醸成したと思われる。それが青年期に入ると、ベルリンの壁の崩壊といった事件を媒介として、『SAPIO』という落合信彦のような怪しげな「国際情勢」を伝える書き手を抱える右派雑誌の講読へと結びついた。

このうち自衛隊との接点がある者は、必ずしも多数派とはいえないだろうが、これは地域性によるものである。歴史修正主義も親族からの影響であり、インターネットを介して受容したわけではない。つまり、彼が排外主義を受容する素地になったのは、地域や親族を媒介とした第一次的な社会化の過程であり、社会集団から遊離したネット右翼というイメージとは対極にある。筆者が調査した範囲では、こうしたタイプは排外主義運動の活動家のなかで必ずしも多くはない。しかし、地方の保守的な環境のなかで「まっとう」に育ち、その実直さから「疑問」を持って運動に馳せ参じる者がいるから、在特会は多くの都道府県に支部を設けられたとはいえるだろう。これもやはり、社会解体が不安を蔓延させて排外主義運動に結びついたという、俗耳に入りやすい見方を諫める材料の1つとはいえる<sup>5</sup>。

---

<sup>5</sup> こうした見方の問題点については、樋口(2012x)で論じておいた。

## 23 インターネットで世界が変わったW氏の場合

### (1) 政治に対する関心

小学生の頃は新聞はぱらぱら読むくらいですよ。三面記事とか、小学校の時でも読んでいたのは確かですね、私なんかの時代では。今の若い子だったら、小学生で活字を読むというのはあんまりないと思いますが。まあ、それは自分自身が読んでいただけであったから、他の人が全部当てはまるかといったら、そうでもないと思うんですけど。確かに、ニュースに関しては結構関心があったのは事実ですね。

ネットが広まるまでの間はテレビとか見ながらですね、その時はテレビだけの情報しかないからですね。たとえば筑紫哲也とか久米宏とかそういうキャスターしていた番組がありましたね。ああ、そういうものがあるのか、こういう風な考え方もあるのかという形で、特別情報源としてはそれしかなかったから、乏しかったから、何ともどっちつかずという立場だったですね。政治というかニュースに関しては結構興味があったんですけど、右だ左だとかいうのは何もその時はなかったですね。だから判断する基準がわからなかったんですよ。今のテレビの——テレビ局の体質を昔から疑ってなかったということですよ。だから一方的に垂れ流しでテレビ局の都合のいいような報道ししかない。ただネットの場合だったら双方向だから、そこらへんが「じゃあこういう風な話がある」ということで、検証する形ができるからですね。それによってちょっと考え方が「そうか」という風な感じで、自分自身変わってきたのがありますね。

(選挙には) もちろん行きます。行くといっても、行ったり行かなかったりという形で。仕事の都合で忙しくて行けなかったこともあったし、興味がなくて行かなかったということもありましたし。その時までは、そんなにあんま政治に関しては——ニュース見るということに関しては興味があったんですけど、それはどっちの思想かとかいうことはやはり、そういう考え方があるんだという形で別に否定はしなかったという形ですね。ただ、左翼とか過激派とかいうのは危ない人だなと思っていたんですけど、特別に考え方を否定するのは——天皇陛下を貶めるような発言をする、そういう人もそういう考え方があるのか、ぐらいにしか思ってなかったんですね。

(投票先は) 右左関係なく、会社が推す人間とか。それとか、この人はちょっとあんまり好きじゃないとか、そういう単純な理由で投票していました。(投票先は) 会社員の当時は民社党とかいうのがあってですね——今は民主党に吸収されてるみたいなんですけど——労組関係だったら民社党ですかね、そういう風な感じの。同盟系ですかね、同盟系の候補に入れていましたね。自民党は、その時入れたり入れなかったりという形で。まあ、共産党はちょっとやっぱり入れたくないというのはありました。詳しくはわからなかったんですけど、入れたことはなかったですね。(社会党には) 頼まれた時は1回くらい入れましたね——という気がありますね。それも別に深い考えじゃなかったですね。何回も言うように、画期的に変わったのはネット見てからですね。

(インターネットをみるようになってからは) 左翼とはそういうのは——社民党はだめですよ。民主党はどうかなという感じがあったんですけど、民主党もいろいろなところに、社民党やめたりとかそういう集団ばかりで、人間自体も結構左系とか多かったからという感じですね。自民党にも左系とかいることはいるんですけどね、基本消去法でいったら、し



ようがなく自民党しかないかなというところですね。ただ自民党でも、そういうような形でちょっとおかしい人がいるのだったら、誰も投票するところがないから、批判票のような形で幸福（実現党）とかそういうところに投票したというのも1回ありましたね。これは批判票だから、そこを推しているつもりではなかったですけどね。入れる選択肢がないとなったら、それしかしょうがないかなという感じで。

## （２）外国人との接点

基本的にはないですね。ただ、いろいろそういう風なのに興味を持ちだして、2000年以降ですけどね、そういう風な形になって興味を持ちだしたときに、在日朝鮮人とかそういうのが身近にいるかもしれないと考えた時に、同級生の身近な人間というか、同級生であった人間ですよ。家が何しておったとか、これしておったとかいう風な形で、こいつはもしかしてそうじゃないかなと、調べたら現実にそうだったという人間がいましたね。そういう風な人間は、未だに知っていることは知っているんですけど、私がそういう活動をしているのは知っているでしょうし。まあ、しょっちゅう会うわけでもないですからね。心の中では、口に出してそういうことを言うわけではないですけどね、友達というか同級生ですから。

（それまでは）そこまで考えてなかったというのか、そこまで深く考えることもなかったということですね。ただ「朝鮮人が朝鮮人が」という話は、昔からあったことはあったんですけどね。ただ聞いても、俺に関係ない世界としか思ってなかったんじゃないですかね。この問題というのは、その人その人が興味を持って考えないと、わからないと思いますね。一般的にそういうこと考える余裕がない人がほとんどですから。自分の趣味とか仕事で忙しかったりして、そんなことやる余裕がない。もちろんこちらも仕事が暇ということはないですけど、たまたま自分が興味があったからということですけど。

東京とか行ったら白人とか含めてブラジル人とか交差点とかで、周りが多かったですね。東京はやっぱそうなんだ、多いなという感じですね。徐々に多くなったのは確かですね。アメリカ人とか一見みてわかる方ですね。ただ私なんかは、別に特別アメリカ人がどうのこうのとかいう形で異議を言うということはないです。ひいきしているということではないです、ヨーロッパ人とかイタリア人とかドイツ人とかですね。ただ、その国にいるのならば、その国の習わしに基づいて、生活している外国人に対しては何もいうべきことはないですね。

ただ、在日朝鮮人というのが今なぜいるのかと考えたのはなかったんですね。ほとんどというか100%と言っていいほど、不法入国ですね。それは事実ですよ。在日という形でいる人は永住権を持っているわけですね、そういう方は不法入国ですね。現実には戦前に徴用で245人の朝鮮人が、徴用といたら日本人でいたら赤紙ですね。その朝鮮人版が245人。あとは自分で志願してから陸軍士官学校とか、海軍兵学校とか行ったのもいることはいらね。そういう風な方は全部帰られている。戦前日本人であった朝鮮・韓国も日本国であったもんだから、その中で日本にいた人間がそのまま居座り続けている。その二世三世という感じですね。だからそういう風な方もですね、日本にいるという、百歩譲って日本国に永住するという考えであるならばですね、日本国に帰化して日本のためにやるなら別にかまわないです。それなら全然問題ないですね。

ただそうじゃなくて、そういう特権とかいうのを生かしてですね——なぜ特権が生まれ

るかも不思議なんですけどね——弱者利権みたいな形でそういうのを振りかざしてやるのがいやなんです。生活保護に関しても、もう日本人の比率と比べて考えた場合、すごく高いですよ。在日朝鮮人の方の生活保護受給率は。そういう風なもの、おかしいと思うし。まあ、樋口さんの考え方からしたら、そういう風な外国人は差別するなという形に持っていられるのかもしれないですけど、これは差別でも区別でもなんでもありません。便利な言葉で差別とかそういうのは、私はあると思います。日本人の方が逆差別されているんだと、私は思います。日本人の方が生活保護本当にもらいたくても、そういう風な組織もないし。1人がまともに生活保護をもらおうと思っても、絶対却下されるのは目に見えてるんですね。

### (3) 活動につながるきっかけ

転機は、はっきりいってネットを使い出してここ十何年くらいですかね。それからですよ。今までの考え方、やはりちょっと違っていたなという感じは。(インターネットを使い出したのは)1999年からです。パソコン自体はWindows 95が出た時に半年くらいしてからNECのパソコン買って、その時はそこではワープロ機能とか使う、仕事で使ったりとかあったんですね。でもネットには自宅でつないでなかったもので、会社でもつないでたところ少なかったと思うんですけど。ネットをつなげたのは1999年になってからですね。それからですわね、いろんなサイトを見ながら、結構興味は、新聞は結構三面記事とか面白記事を探していたくらいですから。性格的に、真剣に調べるということに関しては興味があったから、パソコンにはまりこんでいったのは確かですね。その中で政治的な発言があったりして、最初はもうそういう考えがあるのかなと思いつつも……。

2002年のワールドカップですね。それが始まった年ぐらいには、あのときの韓国人が日本に関しての考え方がちょっとおかしいんじゃないかというのが、ネットでいろいろ出てきて。やっぱよく調べたらこういうことがある、これはデマじゃないのかといたら検証つけて裏付けを探してみたら、やっぱそうなんだって確証をつかめた感じですね。

あと2002年はまた拉致問題の関係もあったから。その拉致問題に関しては、週刊誌で1990年代後半くらいですかね、5、6年かそこら書き始めたのがあったんですよ。書いていた記事が。それは本当かどうかと考えると、でもあの北だったらありえないことはないな、という形で。で、2002年にサッカーが終わってから拉致被害者がどうのこうのというニュースが……。もしかしたらあの話は本当だったのかなということですね。初めて衝撃的という感じがあったんですよ。それからですよ、やっぱ。その事件があった後については、人間というのはそこらへんで、こいつら何するのかという形で考えてしまうんですね。やっぱり、検索すればするほどいろんな情報が出てきて。ただデマみたいな感じも当然あったりするんですけど、デマを検証することがネットはできるから。そこら辺が確信というか。現実、竹島問題とか、韓国が占領しているのもそうです。どう考えてもおかしいでしょ、というのが。

(サッカーは)特別好きというわけじゃなかったですね。その時までにはですね。2002年のワールドカップでも、特別あまり関心はなかったですわね。どちらかというと野球とかのほうが——日本は昔野球の方がメインだったわけですから。ワールドカップは90年代中頃くらいから、ワールドカップに出る出ないということで人気が出てきたじゃないんですかね。代表とかいったら興味はありますけど、普通に地元のチームとかですね、そういう風な

のはあまり興味なかったですね。ワールドカップの関係がですね、日本代表の試合とかは見ますけど。(韓国対)イタリア戦とかですね——記憶にあると思うんですけどね——かなり乱暴なプレイとか。その時までには、やっぱりネットで、その時はそういうプレイをしたという風なことはあまり気づかないですね。後からネットをみたら、あ、こういうプレイをした、そうだったかなあと。思い返してみたら、検証サイトで何ヶ所か見たら——その時に動画サイトがあったか覚えてないんですけどね——ああそうなのかな。まあ、韓国を応援したりする時にはしておったんですね、確かに。近いからということで、隣国だからということで。大体の方は、ワールドカップの時に韓国チームの日本に対する態度、そういうのがちょっとおかしいと気づいたと思うんですけどね。でも、私はその時はまだまだという感じで、拉致問題が出てから明らかに、というか初めて認識しましたね。

やっぱり要するに朝鮮人、韓国人の問題だけでなくですね——それだけだったらそれで終わるんですね。ただ私なんかの行動というのは、何があるかという、日本国というのがあるわけですね。国益ですわね。それを害するような団体とかは、たとえ日本人でも許せないという感じがあるわけですね。日本国民としては、皆さんがそういう考えじゃないんですけどね、私はそう思いますわね。だから、それはもう自分自身に何の関係もないことですよ。何の知識もない人とかそういう風な人には、何でそんなことするのか馬鹿やねえとか。そういう感じで、まあ友達なんかでは話したらそういう風に言われる時も、前はあったですよ。でもここ最近では民主党政権になってから、かなりおかしいぞという感じになって、皆さんもそれなりに認識し出したと思うんですけど。自分にメリットがあるかないかといったら、まったく関係ないんですね。でもやっぱ、行動せずにはいられないというかですね、報酬とかそんなこと抜きにして。やはり言うべきことは言わんとだめだなと。今もその考えですね。

#### (4) ネットからリアルでの参加へ

(見ていたのは) 大体コミュニティサイトで、いわゆる代表的な2ちゃんねるとかですね。そういう風なサイトですよ。ああいうのも全部が全部信用できるわけじゃないんですけど、結局それを検証するという、その情報は何なんだというのがあるんですよ。現実には。掲示板とか2ちゃんねるを見たら、こういう事実があるんだよという形で。そして今は検索は便利でキーワードを入れたら、すぐぱっと出る。ワールドカップが終わったくらいまではまだまだですよ。拉致問題ができてからですよ。ただ、Windowsは普通に使っていましたけど、そこまでまだ興味がなかった、検索するまでの興味はなかったという形ですね。

政府の出した資料とかですね。たとえば従軍慰安婦の問題、それは本当にいるのか。それは最初検索で、テレビばっかしの時はそういうことはまったくわからなかったから、ああそうかなという感じしか持ってなかったんですけど。現実にはいろいろと検索してみたら、政府資料としてはそれは戦地売春婦だったということで。今でいう要するに歓楽街の中にある女郎部屋みたいな風俗店、そういう風なのと同じ扱いだなという形でお金をもらえるから。しかも自分なんか志願して、強制連行ということで、トラックに乗せられて、無理矢理犯されてとかそういう風な問題じゃないですわね、それはまったく捏造というのが明らかになっているから。一次資料としてはそんなことなく、自分なんかはお金がないから望んでやったということですね。しかも、合法的にやっているということですよ。それを韓国軍がベ

トナム戦争の時に、韓国人との子どもで強姦してからできた子どもというのがごっそりいるというニュースもありますよね。日本はそういう従軍慰安婦と言われる人との間の子どもは1人もいない。それははっきり言って、そこまで統括されていたということは事実ですよ。突撃一番とかいうコンドームがあったみたいだから。今は従軍慰安婦がどうのこうの言うのだったらですね、今すぐに日本から風俗関係、外国人の女、朝鮮人の女を全部強制送還しないとだめですよ。そういう風なこと言えない。それは非常におかしいと思うわけですよ。従軍慰安婦ということで後押しする左翼の日本人がいたりするんですけど、それで日本政府から金を巻き上げるということを率先している国会議員がいたりするから。

(ネットでの)書き込み云々はしたこともありますよね。活動し始めたのが一昨年くらいから徐々にという形だったから、7年間。在特会ができたのが2006年の終わりですね。それまでは、核になるようなそういう風な頭になるような人間が出てこなかったということがあります。だから皆さん、私も含めて歯がゆいというかがあったと思うし。マスコミとかに相当(「偏った」情報が)まわってますから。1人で最初にするというのは、かなり勇気がいると思いますね。今となっては集団になってからは、そういう活動をしようということで堂々とやってますけどね。それまでは朝鮮人の批判するとヤクザとかそういう感じのが結構出てくるとか、ある意味恐いとかいうのが確かにあったのは事実ですよ。だから要するに、ネットでそういう形で新たな情報とかデマとかですね、たとえば私なんかデマ関係ないんですけど、私は自営業してるんですけどね、その中で電話かかってくるわけですよ。朝鮮人じゃないんですけど、同和の関係の人間から電話がかかってくるんですよ。「社長、同和なんとかなんとかの者なんですけど、今度同和20周年というアルバムが出るんですよ、それを5万円で買いませんか」と言ってくるわけですよ。最初のうちはそんなこと何もわからなかったですから、大変申し訳ないんですけど、うちも貧乏なもんでとかやったわけなんですけどね。結局そういう詐欺というのがわかると、何だこれはという感じになってしまいますよね。もう、そういう風なものもネットで検索したというよりか、それはデマだなという形で確証したわけですね。

ネットする前から電話かかってくる、「何で電話なんだろう、何で俺の家に電話」・・・片っ端から電話するんですよ。日本人は差別という何とも言えなくなるから、それをうまく利用してお金をせしめる。そういう詐欺というのは、初めてそういうのがあるのかとわかったんですね。ただ、あくまで朝鮮人から利害関係があってちょっとこういう目にあうとかいうのがあったというのは、直接はないんですけど——私自身はですね。

会社員である時にはそういうのには遭遇しませんでしたね。そういう電話がかかってくるような部署でもなかったからですね。そういうのがかかってきたとしても、総務で対応していたみたいな感じですから。いろいろな詐欺があるということですが。

何とか抗議の声を上げるところはないのか、という形で常にいたんですよ。救う会はあっても、やっぱり強く抗議するという形でもなかったですね。会合とか横田夫妻とかそういう方が出ての会ですかね、そういう風なものには何回か行ったことがありますね。来るといって聞きに行こうかと。(情報は)新聞とか、どっかからチラシを見たことが。あとニュースかネットか何か知らないですけど、その辺は記憶が定かでないですね。そういう情報があるなら行こうかと。救う会とかそういう形のは、いろいろ(な所に)行ったりしてるんですけど、活動内容が街宣というわけじゃないから。あくまで拉致問題とかそういう絞っ

た団体だったからですね。結局、今となつては尻すぼみになっているところがあると思うんですけどね。

(それから続かなかつたのは) 活動といつても今、在特会みたいにしょっちゅう活動しているわけじゃないですからね。横田さんも全国回っているから、関心が薄れていく感じですよ。横田さんとか救う会とかも、街宣活動とかメインにしてなかつたですよ。ほとんど何とか会館とかそういうところで講演会を開いていただけだから。ただ聞くことに関してはいいと思うんですけど、それを訴える場所が多くないとだめだと思いますね。あとまあ横田さんなんかは拉致問題とかそういう風な形に特化した——まあ当然ですけどね——それだけだとなかなかしょっちゅう行くというのは、段々と薄れてくると思うんですよ。

#### (5) 参加へ

在特会を知つたというんですかね、名前を聞いたのは発足当時からですよ。桜井会長がそういう風な形の団体を作るといふことで、まず最初にネットでそういうニュースがあつて。ニュースというか、情報で出ていたんですよ。掲示板ですよ。2ちゃんねる等の掲示板とかで、そういう風なのができるという形で、最初にすぐに入会しようかなと思つたんですけど、一瞬ためらいがあつて。1年くらいして入つたんですよ。住所名前とかメールアドレスとか書いたりとか、そういうのがあるんですよ。趣旨には賛同するけど、ちょっと様子を見てみようかなといふのがあつたんですね。(会員番号は) 2700 かそれくらいですよ。3000 番弱だつたと思いますけどね。入つたのは早かつたけど、活動するのは早くなかつたですよ。メール会員になってからですよ。運営までするとは思つてなかつたから。

情報としては見るだけですけど、見ていたのは確かですよ。その時にちょうど動画が出てきた、Youtube とか動画が出てきたくらいですよ。それを見て、やっぱ動画の威力はすごいですよ。ああ、こういう風な感じで街宣するのか、すごいという形ですよ。それを見て、自分も何かできることがあればという形で始めたのが、参加するきっかけですよ。

(在特会の特徴は) 「行動する保守」ですかね。在特会が先駆けじゃないですかね。そういう形で(直接行動するのは) 一番に在特会は回数的には相当多いですからね。地元にもあるし。まあ、東京とかに一極集中してあるといふことであれば、賛同会員としては名を連ねたいと思うんですけど、東京にしょっちゅう行くのは無理だから。そういう形だったら、私も思うんですよ。だから桜井会長は、そういうので済まらずに、全国に支部を作つてきた方ですよ。あの人が頭になつてなかつたなら、ここまではないと私は思つてるんですけどね。あの人のカリスマ性はすごいと思つてますね。

(他の団体は) 内輪だけだから。議論するだけであつてですよ。要するに私なんか——居酒屋保守といいますよね、自分なんかだけでパネル・ディスカッションやつて、自分なんかだけだから自己満足して終わる世界ですよ。そういう風なのが、保守系団体の中でずっと続いてきたわけですよ。そういう風なことを続けてきた結果、何が変わったかといふと全然変わっていないわけですよ。そういう保守系の人間には、日本人だったらおとなしくしろ、荒い言葉を使うとか。そういう風なこと、日本人の民族性が疑われるようなことをするとか、そういう揚げ足取りばかりして結局できなかつたといふのがありますね。在特会は初めて批判の声を上げたんです。主権回復とかもあつたんですけどね。ある程度そこらへんは、ずばつとやることが出来る団体といふのが…他にもそういう風な悪いことはあまり

言いたくないみたいな感じですが、活動の範囲が狭められている感じですね。

前から行きたいなと思いつつ、自分自身の中で、ああいうのに出るのはどうかなと躊躇いがあったのは事実ですね。半年ぐらい前から行きたいなとは薄々と思ってたんですね。そういう動画が結構公開されるに従ってですね。そこら辺は賛同できると自分自身思ったからですね。まあ自分自身は、そういう活動をしたことがなかったから、人間というのはそういう活動したことなければ、最初はためらいますよね。自分とは関係ないような分野のことで、自分に直接関わりあるんだったらあれですけど関係ないからですね、そこでどうかなーということはあるんですね。(会場が) ちょっと遠いかなとか。

(過去の運動経験は) まったくそういうような性格でもなかったですね。大体、組合とかそういう活動もしたことなかったんですね。さっきから言うことと同じかもしれないけど、いてもたってもいられないというか、具体性はあまりないんですけどね。結局その、たまってきてから俺も参加したいとか思ったと思いますね。事前には連絡してないですね。その時初めて飛び入り参加して。

(最初に参加したのは) 2009年9月くらいですかね。街宣に参加して。そしてプラカード持ってから、旗を持つくらいしかできなかったですね。その時は支部長が何か言ってみなとあったんですけど、さすがに演説できる能力もまったくないし、という感じで。今でもあんまりあるわけではないんですけど。でもやっぱ、片言でも自分の訴えを、持ってきたことを訴えたいなという感じがあってですね。

街宣活動をする人がいるなかで、自分自身何もしないというのは、自分自身の中でちょっと……。俺も活動に参加して、手助けできることがあったらいいかなという簡単な考えですよ。(活動場所が) 遠いというのがあったんですね。でもいてもたってもいれなくてですね。それからすぐに支部ができて、〇〇さんが支部長になってくれたからですね、じゃあやろうかと。

(実際参加してみても) ちょっと過激な言葉も最初はあるかなと思ったんですけどね。でもそれは、確かな、まともなことだから、言っている内容は正解だから。ある意味、最初聞いたらびっくりするとは思いますが、言って当然だなと思ったんですけどね。

(それ以降は) 仕事の関係でちょっと行ってない時もあったんですけど、3ヶ月に1回くらいは何とか出席するような形ですね。私自身がマイク持って言い出したくらいから、しょっちゅう参加するようになったんですね。マイク持ってといっても、そんなに長い演説はできないから。長くても10分くらいですよ。やっぱり皆さんに気づいてほしいという気持ちから、これはもう自己満足みたいな世界かもしれないですけど——何もしないところでは、無視する人もいるから。でも、そのうちに何人かが気づいてくれればいいと思うから。いきなり100%そんなというのはあり得ないから。

顔さらしてまずい人はサングラスかけてやっていますけどね。私自身は地元だったらサングラスはかけたいと思うんですけど、帽子とかかぶったりすればそうはわからないですよ。アップで写すことはないから。ああ、誰かどこかに似ている人がいるな、としか思わないですよ。最初のうちは戸惑いがあったんですが、段々やっていくうちに、1億2000万人日本人がいるんですから、似ている人が何人かいるんですから。帽子かぶっているんだし。でもわかったならわかったで、別にいいのかなと最近は思ったりもするんですけどね。ただ地元にはわかるのはあまり好きじゃないですね。(地元では) 年に1回のペースで、一応サン

グラスはしますね。地元では特定されるのは好きじゃないですけどね。そういうのは、サングラスと帽子かぶってからすればいいんじゃないかなと思いますけどね。

## (6) 朝鮮半島と在日コリアンについて

(筆者が質問したところ) 韓国と北朝鮮というまったく別の国という形で今おっしゃったんですけどね、元は一緒、民族が。ただ、たまたま国が2つに分かれているということであって、私なんかは完璧にその2つは同じだと思っています。まったくの。ただ北は貧乏だから、南の方がそこそこ裕福としか思っていないからね。民族性は全部同じだと思ってますよ。いわゆる日本が悪いことしたとか、日本人の無知にかこつけて謝罪しろ賠償しろとか、竹島を占領したとか、そういう風な人間どもとしか思っていないですからね。

何でそういう風な民族なのか、民族性がそういう風にあるのか、犯罪が多いとか。まあ犯罪とかいうことをキーワードにいろいろ調べていたりとかしたら、やはり外国人犯罪ですとか国が出しているのありますよね。犯罪発生率とか。韓国人が何人で、中国人が何人で、そこで一番多いのが中国人ですけどね。それで日本人の犯罪率が極端に低いということになれば、外国人というのは、全部が全部というわけではないですけどね、気をつけた方がいいと思いますね。だからアメリカ人が犯罪が多いといっても、中国人とか韓国人に比べたら、日本の中では低いですよ。だから、全部が全部そういう風な人間でないというのはわかりますけど、犯罪率が高くなったらそれは要注意になると思うんですね。そういう風な形でみるというと、また差別とか言うのがおかしいわけであって、それは区別という形の問題であって。それをまた今度、逆手にとって差別だとか、お前の考え方はおかしいと決めつけるのがまたおかしいですね。向こうだって日本人を完璧に差別してますよね。日の丸を——国旗を踏みにじる、焼く、引き裂く、そういう風なこと自体はちょっと外国の人に対してそういう風なことを——その国の方に対してどうかしている。

犯罪率が高いですよ。それを結構みてから、どういう結論出すかというのは人によって考えはいろいろあると思うんですが。私は犯罪率が高い人間というのは、そういう風な形で用心していたほうがいいんじゃないかと思うから。と同時に、犯罪を犯していなくても犯罪すれすれみたいなことをしているというのが、従軍慰安婦の問題ですね。まったく事実じゃないようなことで、国からお金をせしめるとか。要するに詐欺ですね。そういう風なことが堂々に行われているのが ちょっと許せない。なぜ在日で日本にいるのかということですね。それはやっぱ、どう考えても日本におるということであれば、日本人に帰化するのが普通じゃないんですかね。帰化して普通に帰化してですね、普通に日本人と同じような生活すればいいわけですよ。そうしたら何も言わんですよ。犯罪犯さないでおとなしくしていればいいですよ。在日朝鮮人であるというのは何ですか、ということです。国籍がなかなか取れないとか、ハードルが高いとかいうこともないから。取れるんですから、今は。

それははっきり言って向こうのメンタリティとしては、在日韓国・朝鮮人のメンタリティをなくしたくない。といいますよね。それなら帰ってくれ、帰ればいいじゃないですか。なぜ帰らないんですか。それはその根底に何があるかといったら、在日朝鮮人であるということが、メリットがあるということじゃないんですか、と言いたいわけなんですよ。

在日朝鮮人の無年金問題とか。年金を掛けていないにもかかわらず、年金訴訟で金をくれとかいう感じで。年金問題の時に感じたのは、在日朝鮮人が入れないということはなかった

です。昭和 34 年か 35 年かそこら辺から年金制度が始まったと思うんですけどね。その時から在日朝鮮人も入れることは入れるという形で決めていたらしいんですけど、在日朝鮮人はいずれ韓国に帰るから俺たちは入らない。それは実質強制的に徴収されるという形だったから、そうされるのがいやだということで、帰るということを盾に入らなかったわけですよ。今の時点になってから、もう自分自身が俺たちは帰れなかったと嘘を言う。そして年金——日本人のために積み立てた年金を詐取する。これはちょっと違うでしょと思います。保険だって、普通の生命保険だってそうですよ。何も掛けてないのに、掛ける保険制度がなかったから、そんな制度があるというのを知らなくて、俺は知らなかったから保険会社にくれと言っても通るわけがない。どう考えてもおかしいと思いますよね。

（関心は）全般的に在日朝鮮人の問題はほとんどですね。在特会も在日朝鮮人の問題だけじゃないでしょう。在日朝鮮人だけの問題だったら、もう在特会に行ってもしょうがないなと思うけど、今は民主党問題とかですね。在日朝鮮人だけじゃないという考え方ですよ。日本にいる、日本を壊したいような正義感、左翼含めて、そういう方が非常になんでそう考えて活動するのか、私自身が不思議なんですけどね。ただ、アメリカ人でも——そういう風な形の、一般の外国人ですよ、そういう外国人と共生するとなると私は別に構わんと思うんです。政治的に特権を得たいような形で、強引に割り込んでくる中国人、韓国人というのが許せない。だから、全部を否定するわけでは私の中ではないんですね。そこはあまりに異民族がいっぱい来て、日本人が淘汰されるような形では賛成しかねるんですけどね。ただ日本の秩序を守って、郷に従えではないですけど、そういう形でやってくれる外国人ならば問題ないですよ。

ただ民族的にどうしても考え方が違いますね。それを成功するかどうかといたら、かなり成功率は低いですよ。なぜかと思ったら——オランダですよ、その実態はどうなんですかということですよ。ノルウェイの乱射事件、そういう風なものなぜ起きたか。原因は知ってますよね。根底にあるのは移民政策なんですよ。ドイツにしてもフランスにしても、イギリス、オランダ、スウェーデン、移民政策は実質どこかの政治家、どこかの国の首相が言ったかもしれないですけど、移民政策は失敗だったと決めてますよね。民族が違うんだから、イデオロギーが違うんだから、多文化共生というのは厳しいんじゃないんですかね。私は失敗する確率が高いと思うんですよ。成功する可能性は1%もないかなと思ったりするんですよ。そこで今度は犯罪、強盗、強姦——犯罪がむちゃくちゃ巻き起こる環境に日本をさらしていいのかということですね。

いわゆる日韓併合とか戦前の時代もありますよね。それ以前の朝鮮というのはどういう状況だったかと考えた時、あの国は日本が作ったと思うんですよ。日本は日韓併合、朝鮮併合する前がどういう風な状況だったかということはわかってますよね。チャングムという宮廷料理とかそういうのを作る状況じゃなかった、あれは嘘ですからね。で、日本がインフラ整備して、今でいう戦争終了までに朝鮮半島に残した資産、今の金額にして 17 兆円くらいを投下して。それを全部どうぞという形で引き上げてきたんですよ。そのインフラがあったからこそ発展して。今度日韓基本条約——1965 年、そのときもお金をあげる筋合いはまったくなかったわけですけど、今の金額でいう 5 兆円くらい出して。それを 1 人 1 人に日本が配ろうという形になったらしいんですね。それも配らんでいいお金だと思んですけど。それを国がまとめて 1 人 1 人に渡すからということで国に渡したんだけど、そのお



金をインフラ整備に、社会資本の整備に全部使ってますます良くなったという感じですね。だから、日本はそれ以上謝罪とかする必要がまったくないわけですよ。最初からない上に、相当の金を渡している。それ以上に 韓国の通貨スワップの問題もあったわけですよ。そういう風な形もあったんですけどね、その時も日本は援助しておいて、そのお金をまだ返してもらっていない。それってやっぱ、そこまでして何で反日なのかという、そこら辺はやっぱどう考えても許せんすわね。

韓流が多いというのも、まあ要するに、政治家を使って結構動かそうとしてますよね。韓流とかチャンダムとかフジテレビとかね。あれも結局、韓国ブランド委員会から金をもらっているからと思うんですけど。現実に払っているという方もいるかもしれないですけど、結局疑問符ですよ。私の前では存在しないし。そういう風な力が強大ですよ。韓国人朝鮮人はテレビ局も牛耳っているし、政治家にもお金を渡す。その資金源は何かというとパチンコとかそういうなのです。パチンコ経営というの 80%とか 90%とかあるんですね。在日朝鮮人が経営しているというのが——90%はないかもしれませんが。豊富なお金を使って、警察権力とか司法とか、国の政治と関係を持って浸食してるという。在日朝鮮人の異様な感じの法律しか出てこんですからね。だから日本の国を守るとか、自衛隊とかは叩きまくって。それはちとおかしいと思うんですよ。そこでやはり多文化共生とかそういう話も出てくるかもしれないですけど、結局浸食されちゃうのと同じですよ。私はそういう風にしか思っていないから。だからそういう風なのを含めて、在特会。在特会は、さっき言ったように民主党関連の政治とか TPP 問題に関しても、ずっと範囲を狭めずに広く演説するから、街宣するからですね。

それだけじゃないですよ。複合的な問題ですよ。それも一部ですよ。それ 1 つだけだったら、あと他のことはいいということであれば、そんなに興味を持たないですよ。今、しゃべっていることが本当に一部だと、他にいろんな問題があるから。

### (7) 活動を持続させる動機

自分には関係ない(こと)かもしれないですけど、自分の思いですかね。金をかけてまで行きたいというのは、うまい言葉では表せないかもしれないですけど、民族とか日本が危ないとかいう風な形で。左翼の方から言わしたら、それは妄想ですよと思われるかもしれないですけど。やはり私も言いたいという気持ちも強いから。それは、そういうのに時間かけてアホだなと思う人もいると思うんですけど、私はそれでいいと。結局、皆さんお金を使うことに関して、メリットがあるかないか考えるんじゃないんですか。自分で損をすれば金を出さないという感じですね。在特会の活動というのは、それを抜きにしても自分自身賛同できるからというのがあって、人からどう思われようと、それはいいかなと思います。ただまあ、それなりに仕事もしてないと活動できないですからね。お金がないとどうしてもできないから<sup>1</sup>。それは普通一般的な普通通りの仕事をしているからですね。自分が経営者であって、従業員がいるから。

自己満足の世界かもしれないですけど、皆さんに訴えられてよかったという風なことが一番ですね。周りの人は見たら何も興味もないで過ぎ去って行く人もいれば、立ち止まってじ

---

<sup>1</sup> 彼自身は、在特会の通常のイベントに参加するに際して、毎回 1 万円強の費用をかけている。

っと聞いている人もいるからですね。良かったことといったら、皆さんにちょっとでも周知できたのはいいんじゃないかと思えますね。あとポスティング、ビラ配りですね。そういう風なのも何百部、自分が配ったのが 250 部とか 300 部とか 500 部とか配る時があるんですけど、そのうちの 10 人でもいい、5 人でもいいからそれに興味を持ってみて、それを考えてくれるだけでいいですよ。ほとんどが ビラというのも広告みたいに捨てられてしまうと思うと…でも、最初から興味を持っている人はおらんのですよ。そこはある程度しょうがないと思いますけど。ちょっとでも周知してもらえたらいいかな、というところをやっているから。

左の方は資金的には潤沢ですよ。左翼の方は労働組合とか巻き込んでやっていますよ。労働組合の（場合）、趣旨に賛同するもしないも関係なく、従業員であれば日産とかトヨタとかであれば、労組に強制加入で労組の金を引かれるわけですね。そういう風なのを使って左翼活動をしているのも事実で。男女共同参画とかわけわからんのがありますが、それも左翼が突き上げて作ったものだと思うんですね。男女共同参画とは女が差別されているからというので作ったものだから。実質、男と女といったら全然違うものだから、差別もくそもない、それは区別の問題ですよ。それをなぜ差別とかいって駆り立てるのかという問題で、男女共同参画というのが出てきてますよね。そういう風なお金から、左翼団体はお金が流れていると思いますよ。左翼の方はお金を引き出すのがすごくうまいと思います。

右の関係で専従という人はいませんね。桜井会長を含めて仕事持っています。専従という形でやっている方はまずいない。行動でも左翼運動じゃなくて、制限が——時間の制限がある。その中で皆さんが自分自身の思い入れから活動するということだからお金が出て、それを給料としてバイト代としてやるのだったら集まるかもしれないですけど、そういうものじゃないですね。だから、在特会はお金でつられる団体ではない、全部自腹切って街宣のトラメガ、マイクとか自前でやっているから。私も相当お金は出しているから、交通費だけじゃないですから。

右翼という言葉で、日本人は怖いと思うこと自体がおかしいんですね。あれも街宣右翼があるから、君が代を大音量で流す人が怖いというのは、街宣右翼によって押しつけられたイメージだと思うんですけど。軍艦マーチとかパチンコ屋でかかっている、それはいわゆる工作なんですよ。完璧に工作なんですよ。本当に日本のことを思っていない人間が、かなりたてるとか、怖い言葉で脅すとか。だから、国旗とか国歌とかどうでもいいなとか思わせない形の工作だから。私が考えるにあれは完璧に裏で左翼の別働隊だと思うんですね。それしかあり得ない。日本を貶めることをメインに活動している。街宣右翼とかナントカ塾とか捕まったりする。みんな在日朝鮮人が多いですよ。それをどう説明されるのかということですよ。何で在日朝鮮人が街宣右翼しているの？という感じですね。昔から相当工作が入っているわけですね。

私が思うに、私自身は愛国心は当然強いと思いますけど、日本人に生まれてから——アメリカとか中国もそうだと思うんですよ。たとえば中国なんかも北京オリンピック、その時も聖火リレーとか日本でもやったんですけど、党员かどうかはわからないんですけど、国から動員されたかわからないけど、中国国旗のどかいのを振って、車から抜け出して国旗を振ってやる。道交法違反ですね。そこまではするから「えー」とか思ったりするんですけど、日本人のメンタリティとか考えないと思うんですけどね。そういう風な形でできるというのがす

ごいというか。アメリカとかでも政治活動したら全然違うじゃないですか、それが普通だと思うんですね。

(家族の反応は) それは——そうですねえ、まあ身内の人間はそれほど関心なかったりするものもあるんですけどね。でも自分がやることに関しては、反対はしないという感じですね。最初はやはり「えー」という感じで思われたんですけどね。それはまあ、話して行って「実はこうこうである」と説得していけばいいと思うんですけど、そういう説得するという時間もかかるし、まあいいじゃんという形で。

在特会は在特会で、好きな人の集まりですからね。その中で友達ができてという風な形では、あまりないですね。自分なんかの友達はそれとは関係ない。同級生ですから、それとは在特会の話してもしょうがないんですけど。ただ、政治的な話には結構なったりしますよね。この歳になったら。ニュースがつまらんとか、どこの国が政治がとか、酒飲んだ時に議論はしますよね。まあそんなもんだから。在特会は在特会で活動に対することしか、別に・・・それでもいいと思うんですよ。慣れ合いとかそういうのがしたいわけではないですから。

## (8) 小括

極右活動家に対してライフヒストリー調査を行う理由の1つは、他の調査では必要なデータが得られにくいことにある。調査ができたとしても、極右団体の活動家から正確な情報を得るのは極端に難しい、と人種主義団体の女性を調査したブリーはいう (Blee 1996: 687)。質問紙調査を行ったとしても、正直に答えない可能性が高い。構造化面接を行っても、単に自分の信念を繰り返すだけに終わってしまう。それに対して、ライフヒストリーという方法は、こうした方法論的問題の多くを解決する。信念や組織に対する関わりではなく対象者自身のライフヒストリーから始めることにより、組織の方針を自らのものとして語らなくなる。

だが、W氏はこれまで聞き取りをした中でも特に「語りたい」欲求を強く持ち、問わず語りでネットを介して得た情報を話し出した。右翼を「工作」とするところまで、彼の妄想の体系は完成の域に入っているといつてよいだろう。また、筆者を「左翼」だと認識しつつ、彼の関心について議論したいという欲求も強く表明していた。そうした「ひたむきさ」が彼の特徴だといつてよいだろう。

彼自身は、もともとは日課として新聞を読み、政治にも普通程度の関心を持ち、同盟系労組の組合員として民社党に投票もしていた。その意味で、きわめて「昭和的」な「正常人口の正常生活」を営んでいた。それを変えたのが自宅でのインターネット環境の整備であり、一言で言えば「ネットにはまった」くちということになるだろう。それは、自分で調べて「検証」という意味での知的好奇心も満足させられたし、「発見」に対する知的興奮もあったのだろう。だが、それまでは歴史修正主義的な根拠のない情報に接しても、「そういう考えがあるのかな」と思う程度であった。

それを変えたのが2002年の小泉訪朝と拉致の問題化であり、それをきっかけに彼のなかでの「体系」ができあがっていく。彼自身は、ワールドカップと拉致問題が排外主義に傾斜したきっかけだと述べるが、ワールドカップについては後から遡及的に「おかしさ」に気づいている。それほど強い関心もなく、むしろ韓国を応援していたのが、ネット検索により問題を「発見」する。バーガー＝ルックマンは、長期的な変化をもたらす制度の典型を宗教と

する一方で、短期的に激しい変化をもたらす制度として病院と軍隊を挙げた（Berger and Luckmann 1966=1977:274）。これらはゴフマンのいう全制的施設（Goffman 1961）の典型であり、そうした環境でなければ激しい変化は生じにくいということでもある。つまりW氏の変化を支えていたのは、病院や軍隊のような全制的施設と化していたともいえる、小泉訪朝後の日本であったともいえる<sup>2</sup>。

---

<sup>2</sup> もちろん、ゴフマンがいうような生活の隅々に至る管理が、日本社会でなされていたわけではない。だが、筆者の個人的経験でいえば、全制的施設というのは感覚的に間違っていない。筆者は、2002年8月下旬から10月上旬まで、調査のためにバングラデシュに滞在していた。当時のバングラデシュのインターネット環境では、日本のニュースサイトを閲覧するのは困難であり、現地英語紙で日本のニュースをみることもなかった。そうした情報の隔離状態から日本に戻った時、小泉訪朝を受けて報道や社会的雰囲気が一変しているのに驚かされた。日本全体が全制的施設と化したというのは、その時の印象にも依拠している。

## 2 4 労組専従から右旋回したX氏の場合

### (1) 政治に対する関心

(20歳の時には) ないような気がしますね。まったくなかったです。最初はなかったんですよ。(選挙には) 行ってました。棄権したことはないと思いますね。これは権利だからちゃんとね、権利であり義務であるから私はちゃんとやらないといけないぞと。その一票のどうこうがあるんでしょうけど、それが何の役に立つかとあるかもしれませんがね、行かなきゃいけない。それは日本人の真面目なところと言っていいと思います。そんなのは、さぼっちゃいけないという感じですね。学校もさぼっちゃいけないというのと同じなんで、行かなきゃいけないみたいなどころとつながっているものがあります、そこら辺は。ただある意味惰性で行っているというところがあります。(その時組合には) 入ってないですね。大学行ってるんで、学校出て、会社入ったのが23(歳)ですけど、1年間予備校行ってるんでちょっと遅いんですね。

(投票先は) どうしてたんですかね。親がね——うちは市役所なんですけど——公務員だったんで。「自民党はお金持ちのための政党だから、そうじゃないところに入れなさい」。「ああそうなんだ、ふーん」という感じです。そうなのかと。自民党は金持ちのためにしか仕事をしない人だった、と私は思っていた。知らないから、勉強してないから。(自民には) 入れてないですね。何党だろう。社会党かな。社会党とかも、前は多分そうだと思う。それに民社党にも絶対に入れてないと思う。親が自治労ですからね、自治労が応援しているところに入れます。

そういう指示があったわけではなくて、唯々諾々というか、日々そのように流れるがままに。流されていたというより流れるがままにたぶん、そう行っていたのだと思います。あんまりそういうことに対して、きっちり思想のあるようなタイプではないです。親は今でも私が何か活動していると言うと、そういう考え方はやめなさいと言います。今でも。だからあまり言いません。ただ最近に関しては、韓流ね、なぜだめかという、ああいうテレビばかりじゃ面白くないよね、もうちょっと考えた方がいいよねという話とかはしますけどね。生活保護とかよその国に来てもらっているよという話をすると、とんでもないねとはいえます。だからといって、別に母親はそんなに過激なことしないでよと言われる。過激なこととしてないんですけど、そんなに。母、父にとっては過激な行動だっていう風に見える、理解をされているみたいです。断片はわかっても、全体的にそうだそうだという感じではないみたいです。父は口聞かないです。話しません。母には女子同士でお互いこうあるじゃないですか、ああいう感覚で日々のドラマの話だったりとか、やりとりの中でちょこちょこことしゃべって。父とは改まってしまって。

(政治に対する) 関心がなかったのと、それ(投票に行き始めたの)と同じくらいなんですよ。なかったといったのは、若い頃、学生の頃です。目覚めたというか、言い方でいいかもしれませんが。そのタイミングと政治的なことに自分が目を向けていなければいけないということが、一緒くらい、大体、同じような感じでそこら辺の飛躍というか。自分の中では同じ歩みの感じですね。イメージは。

(政治に対しては、参加している団体の) 気功の話だったりとか、教わってきた先輩とか先生が、政治の問題くらいはちゃんと興味持って考えなさいよといわれてから、ああそうか

知っとかなきゃいけないんだ、やらなきゃいけないという気持ちを持とうと思って、それから目を向けるようになったというのが事実ですね。自らという感じではないけど、やり始めるとそうしたら私たちが自分のことをあまりに考えすぎている、目の前に起きているそれこそ日々のテレビドラマのことだったり・・・、そうじゃないだろうという風に思い始めたんですね。そういう意識をしだしたら。そこらへんぐらいから、物事に対してちゃんと自分の言葉なのに、誰かに投げたまんまはおかしいよねという。日本の社会変わらないと、あまりそういう自分は平和を守るといえることは言わないし。自分たちの生活を、たとえば9条みたいなことを含めて、平和を黙って待っている。戦争はないみたいな感じがあるじゃないですか。本来は平和だったりそういう勝ち取るべきものがあると今は思いますね。そのときは、平和平和平和って唱えてれば平和は来るみたいに思っていたというよりも、そういう意識すらないですよ。そんなものだと思ってもないし。なんかこう、普通にあるものだから、お水とか空気とかと同じで普通にあるから。あまり考えるものじゃない。日々、隣で銃声が聞こえるとか、隣の人が死んだということがあってもいいので。まったくそういう恐ろしい思いもせず、普通に何も考えないでしてたという感じですよ。

平和に関しては、たとえばむしろ学校の教育のなかでは、平和は大事、戦争はいけないと教えますが、平和を守らなきゃみたいな、本当に左翼的な発想でしかなかったんですね。うまく言えないけど、そんな感じですよ。だから日本人はひどいことしたという風に言われるけど、それはずっと信じていたというか、そんなものなんだろうと。だけどどこかでおかしいなあ、そうなのかなあと、という茫漠とした不安感みたいなのが、根無し草みたいな感じというんですかね。私たちは悪いことをしてきたんだ、みたいな。何か。特に日本人として、自分の誇りみたいなものがまったくなかった状況でいた。そうじゃないんだと気がついた後でわかったんです。それまで、ふわふわした何ともしれない得体の知れないこの感覚、これは誇りを持たない自分に自信というか、よってたつところがなかったからふわふわしてたんだと思うんですよ。

(その後の) 投票先ねえ、変わっているだろう、どこかが変わってますよね、組合やっていた時はね、組合のこと聞いてましたよ。頭悪いから。選挙活動行ってましたからね、お手伝いして。悪い気はなかったですよ。みんながみんな悪い人じゃないし。議員さんいろいろ。今度法務大臣になった小川さんのとことか、ここも応援しました。別に事務所には入ってないけど、入れようと思って入れたかなあ。そういう投票行動に推薦するようなことしてると思います。

はっきりとは覚えてないんですけど、(投票行動を変えたのは) そこら辺(組合をやめたの) がきっかけ。誰も教えてくれないので。ちょっとおかしいぞというのが、結局自分で考えて。(投票先は) むしろ自民党じゃないですか。あとはねえ、わからない時は若い人。可能性がある。今はインターネットがよく使えるのでいいんですけど、そうじゃない時はわかんないから。たとえば書いてあったりすることを読んで、何か自分にちょっとでも合いそうだったりするのを見て、じゃあこの人にしようと思ってたと思います。詳しく聞きに行ったりとか、手伝いに行ったりとかはしてないです。そういうことはしてないけど、一応考えてやりました。

## (2) 外国人との接点

ないです。まったくないです。(身近に) いないですね。中学校高校といた1つ上の先輩が、中学校の時には日本人だったんですけど——要するに通名ですね——高校に入ったら名前を変えられて。え、なんで?まったく知らないのに、それも本当に「ああそういうことなんだ」って気がつくまでには、ずっとおかしいなとか何だろうとかなくて、普通にああ名前変わったんだと、普通に受け入れてた感じで。「あの人なんか人なんだ、ああそうなんだ」って思わずに接して、色眼鏡も何もないところもあって。在日の方って結構多いですね。色眼鏡を持ってとかってよく話があると思うんですが、わたしはぜんぜんないですね。だからそれに対してはまったく抵抗もないし、そういうものだという風には認識もなかったですね。ただ、学校の授業とかでは習って、エタ非人とか言われてますけど。それは遠い話というか、自分の生活に何も関係ないものだという風に、何かそういうところだと思って話を聞いてましたね。直接関係ある——日々の生活と関係あることとかぜんぜん思ってたので、そのことと在特会に入ったこととはまったく関係ないですね。

地元は在日も多いと思うのですが、私は残念ながらというか幸いながらというか、在日からとってお目にかからず恐いこともなく。飲み屋のところで一度だけ見たことがありますけどね、そんなにないです。今も危ないみたいですけどね、刺されたとかあるんですけど、そんなのはまったくないようなところで、そういう中で普通に暮らしてきたんですよ。

### (3) 『戦争論』との出会い

どっか私の中では日本の文化と日本語がすごく大好きで、そのことといいものだなと思ってたこと、それは小さい頃から日本語が好きだった、言葉というのが好きだったので、すごい色んな表現だったりが好きで。だから日本語が好き、日本の文化も好き、だけど日本人は悪いことした。それがものすごいアンビバレントで離れていて。だからそれがあたしの中では合致しないんです。だけど、どこかで日本人は悪いんじゃないかなと思ってます。それを確認できることがないので、確認したのはあれですね、小林よしのりの『戦争論』ですね。

あれを読んだ時に、日本人は悪くない、正しいことをしてきたんだ。——そうじゃないことももちろんありますよ。戦争がいいかというそうではない。だからといって、全体を否定することはない。日本人だけが悪いわけじゃないと落ち着いて。あの本を読んでやっぱりそうだったんだ、あたしが信じていた日本人は悪いものではなかったし、あたし自身が信じている何かは正しかったんだと(腑に)落ちた時に、なんか据わりの悪いスイートスポットが見つけれなかったところに、やっと落ち着いたという感じ。それがですね、二十歳ちょっと過ぎくらいかな、中にあるんですよ。ああ、やはり日本人は悪い民族ではないというのは、そこらへんから芽生えているんです。だからといって、それを行動につながっているかという、つながってはいないですよ。結果的に。つながってなかったけれど、潜在的には持っていたときという風に思っています。

(『戦争論』に関心を持った理由は) 何だったんだろう。ああ、あのちょっとよくわかりませんが、私　そういう意味ではねえ、ものすごい変に真面目なんです。そういうところで小学校から中学校、平和教育、どこでもあるんですね。日教組として進めて、戦争で日本人は悪いことした、第二次世界大戦。そういう悲惨なことは、ちゃんと見ておかなければいけないと、ずっと思ってたんです。だから小学校の時とかに、ひめゆりの話とか、ああいう戦

争のこと結構一生懸命読んでたんです。絵本ですとか。ああいうのを一生懸命読みましたよ。悲惨な状況は知っておかなければいけない、731部隊の話とか読めと言われて、三光作戦とかああいうのを全部読めと言われて、残虐ないろんな写真があるやつとか読んでます、結構。そういうところに対しては、知っておかねばならない。知りたいじゃなく、知っておかなければならないという義務感でずっと読んでたんですよ。だから、それとつながっているかもしれない。

戦争論で書いてあるものに対して、ちゃんと読まなきゃいけないというのがあったのかもしれない。その前からもしかすると、社会的なことに興味を持たなきゃいけないと思って、あの人、ゴーマニズム宣言書いていた人、サリンとかの話も書いていたのかな。ああいうのから読んでいたんで、そのつながりで読んでいるのかもしれないです。『SPA!』だったかな、『SAPIO』に変わったのいつだろう。あのあたりずっと、どこかから読み始めたんです。マンガだから入りやすいと思って読んでいた気がします。ものすごい字が多いですね。ほとんどマンガとはいえない。

なんかねえ、『Playboy』とかも読んでましたね。あれも結構社会的なことがありますね。あれね、多分ね、その時にね、付き合っていた男の人がいて、その人とご飯食べに行ったりすると、おいてあるじゃないですか、雑誌って。読むのがないからその人と話して読んでたような気がしますね。そういうところに行って読んでいた、記事になっているところ、エッチな写真じゃないところを、まあそれを見たとはいえないんですけど、そうじゃないところを軽い読み物としてちょっと読んでたりとかしてた気がします。あんまりそういうのに対して抵抗がないし。女兄弟がいると違うでしょうが、私は一人っ子なので、あまりそういうこれはああだとか、こうだとかはなかったですね。少女雑誌とか読まないの。だからそれは何度か買ったと思います、『Playboy』とか。ただ、あまりなんか抵抗なく普通に雑誌を立ち読みとか、ありますね。だからあまり抵抗ない。そこら辺からですね。何となく。

#### (4) 組合専従として／自己啓発セミナーで

普通のサラリーマンというか、まあサラリーマンでいいですよ、やっていたんですけど。普通にサラリーマンだったんですが、会社の労働組合の書記局というところにいました。結局、どちらかというところ左翼的なところですね。労働問題を扱って、賃金上げろ、日本でも連合とかやっていますよね。そちらの方におりまして。普通にそれを、そんなもんだと思っていましたし。会社自体が一度ストライキを起こしていますし。いた時ですね、私が。

会社がですね、半導体とかああいうの作っていたり、そういう電子部品を作っている会社だったんですね。全国展開でやっていたんで、組合でいえば支部という感じで工場とか支社が北は秋田から南は九州まで。あとは関係会社が各アジア、なかにはアメリカもあったのかな。営業拠点だと思いますけど、生産拠点はアメリカとかアジアもありましたんでね。マレーシアだったりとか、中国もそうだし、そういう感じのところでした。

なので、結局、山形かなんかの工場をつぶすのつぶさないのということになって、結局どうするんだ、雇用を守るのか守らないのかということ。どちらかというところ本来は保守系の労働組合だったんですね。保守系とか私はあまりよくわからなかったんですけど、後になって今考えたらあれは実はそうだったらしい。元いた人たちもどちらかというところ、もうちょっと保守的な感じでもありました。でも連合ですからね、やはりどちらかというところ左翼的な



匂いのするのは否めない状況にはなっていましたよね。最終的に。

専従でやってたんで、ちょうど私が入ったのは男女雇用機会均等法ですが、あのあたりで、女子のことやったらどうえすかって。男女差別とか男女共同参画何とかとかいうあの手の問題を担当して、そういう意識があったのでやってたんです。そういう意味では左翼系の労働活動家だったということですね。こっちでもあっちでも活動家だったということで、私自身は。社会的なことに意識持たなきゃいけないという気持ちは、ずっとあったし。それでベクトルがあっちに向いたのかこっちに向いたのか、ということだと思ってもらえばいいです。

ただ、だからといって組合にいてね、それを威張って言うような関係ではないんですね。だから私は自分で、当時は国粋主義者だという風に言っていましたよ、自分で。そういう人じゃない人を売国奴とか言っていましたよ、当時。頻繁には言わないけど、そういう感覚はありましたよ。自分の中で日本が好きだというのをかっちり持っていましたけど、外には口にできない。そういうことに対しては、ストレスが多いというか。

(変化したきっかけは) いろいろ教えてくださった先生たちがよかったですね。学校ではないところでいろいろ教わっていたので。その時にそこで教わっていることが、「今、男女共同参画社会で女が権利ばかり主張することがおかしいんじゃないか。あなたたちは権利じゃなくて義務を遂行しているのか」と言われたりとかしてたんですよ。そうすると、「確かにね」というところに立ち戻れるようなことを問いかけることが多かったんですね。

うまくいえないんですよ。宗教的なイメージというか、宗教団体と行ってしまうと大げさなんですけど、人生——精神修養の訓練みたいな。だから気功とか同じなんですけど、そういういろいろなことを教えてくれるところがあったので。そこで教わったことですね。いろんなことを教わった時に、自分で学び取っていたというよりも、教わって気がついていったという、目覚めていったという感じですね。

(通ったきっかけは) どちらかという、自分を変えたいとか、そういう何て言うんですか、セミナーみたいな感じ、そんな感じです。自己啓発のセミナーみたいな感じの団体です。自分を変えたいとかあるじゃないですか、自分の性格を変えたい、このままじゃいけない。そこらへんからですよ。どちらかという。そこで教わったことが、この団体自体があたしには非常に合っていたというよりも、正しい——自分は偉そうに言うてはいけないんですけど——正しく導いてもらった気がします。自己啓発の団体と言うと怪しい感じに聞こえるので、宗教というのも非常に怪しい……説明がしにくいです、そこら辺は。まあ団体で。今でもちょこちょこ、あまり行かないんですけど、最近。ありますよ。そういう感じ。

(価値を見いだしたのは) なんでしょう。じっくりくるからじゃないですか、自分に。うーん。やっぱ簡単にいえばはまったという感じですね。じっくり来るという感覚、いろいろな物事にあたしは最近びったり来ると、それを自分の中で基準にしようと思ってるんですね。たとえば日本人としてとか、日本の文化を守ろうとか、それ以外——むしろ逆にね、男女平等だったりとか。自分の中に何かわからないんですけど、何かじっくりこない。たとえば今も女系天皇の話があって、女系宮家を作るとか、何か据わりが悪い感じです。なんでそういう今までなかったことをやろうとしているんだろう、何か据わりが悪い感じというのは何かおかしいんだろうと、私は信じるようにしています。日本の文化が好きなのに、日本人はなんでこんなこととしておかしい。ずっと据わりが悪かったのが、私の中でびたつとはま

ったのは、そうではないよという、その感覚。「ああこれこれ、これよね」って、すぼっとはまる感じなんです。男女平等、男女共同参画とかいうと、何かそれに対していろんな講釈がつくんです。何か据わりが悪い。で、家族が大事とかいうね、そういう形になった時にこれがすっきりする、しっくりくるという感じなんです。それに従っているだけです。ね。

教わっていることも、自分の耳が痛いかもしれないけども、自分を鍛えるというんですか、他人を先に自分を後にできるようにしたいなということですね。「自分が自分が」っていくんですよ、それはそれで。あれが食べたいとか、あれがやりたいとかでいくんですけど、(自分を後に) できるのにしたいなという思いがあるから、そういうことを教わる意味がある。自分が、ダメな自分をもうちょっと何とか良くなろう、良くしたいという気持ちが、そこら辺とつながっている。今日本を何とかね、守りたいって。自分のことは後、人のことの先にしたいという気持ちが、それでありたいというのが一番今は大きいかなあ。難しいな、そんなに偉そうなことじゃないのになと思いつつ言っているんですけど、そういう気持ちはありますね。気持ちとしては。だから何か自分が先ではなく、国のために何ができるかとか、何かのために何ができるとか、言われるようにしたい。そういう感じ。話が大きさになりますけどね。気持ちはどこかでそういうつもりは持っていようと思っています。

今でもそれ(団体への参加)は一応継続はしてます。頻繁には行きませんが。最近ずっと放ったらかしなんですけど。心を改めてというか。心して生きよう思いますよ本当に。それはね、それはそれで本当に。

(『戦争論』より) 啓発(セミナーに通ったのが)が先だと思いますね。そうですね、啓発の方が先ですね。そこで教わりながらなるほどと思って、そこからもうちょっとそういうものに意識がいつているので、見る世界が変わりますよね。そうすると。教わることで自分が見る世界が。その部分によって、変わってきた部分があると思いますね。

組合にいたのは——30(歳)の時にこっち来て(引っ越して)いるんですね。4年くらいいました。だから男女共同参画云々とかが、あたしに合わないということですね。説明ができないんですよ、組合員に。ああじゃこうじゃと言って。もっともらしいことがいえなくて。自分が大事なことじゃなくて、それを人に説明するほどの説得力がなくなってきたんですよ。それで辛くなってしまっ。本当は仕事に戻ればよかったのに、そのままやめちゃったんですよ、結局は。そこからですよ。感覚としては解放されたものがありますよね。やっぱりあれ、おかしかったよね、みたいな感じになってますよね。その時は。

##### (5) 北京五輪聖火リレーのインパクト

あたしが活動始めた一番最初は、まずいなあと思い始めたのがフリーチベット、長野のオリンピックの時の聖火リレーでどなたか中国に対して反対をするとか、チベットの虐殺とか弾圧をやめるとかいうことから始まっているので。(その時) あたしは、ボランティアですかね。気功をやったんで、それと一緒にボランティアをやっているような団体でしたので。たまたまそういうボランティアの活動から、ボランティアの活動は台湾で地震があったときに、ずっと前にあったのが募金活動したりとか。高砂族のおじいちゃんたちを日本に呼んだりするような活動に、お手伝いに行ったりとか。そういうボランティアと一緒にやっている団体なので、そういうことの手伝いをしていました。それがあって、じゃあ行ってみようというようなところから入って、こちら(排外主義運動)ともまったくもって(関係な

い)。不思議ですよ、そういう意味では。最終的に、私も真ん中に入ってみんな同じ志の  
が集まった。それから何もしないんですよ、その時は。それが4月——3年くらい前ですか  
ね——だったんですけど。4年か。

で、行ってみたらここは日本じゃないと思った。きっと、あの人たちが 押しかけてきた  
らここは中国——いえない雰囲気ありますよね。何ともいえないね。日本じゃなかったです  
ね。空気が違うんですよ。うまくいえないな。しっくりこない、何となく据わりの悪い感じ  
の空気なんです。攻撃的なね。

それぐらいから日本やばい、まずいかな、隣にああいう大きな国があつて。実際に（長野  
に）行って見てきましたけど、その時に。あれは日本じゃないですね。長野、あの瞬間は日  
本ではありませんでした。聖火リレーの走る日に——長野を走る時に行きました。チベット  
を弾圧する中国を許さないぞ、というフリーチベット、チベット人を解放してそういう差別  
をなくさせろ、どちらかという人権的な感じですね。そちらの方から入って。いって来た  
時に、本当に日本のはずなんですけど、空気が違うんですよ、やっぱり。ものすごいでっか  
い五星紅旗を広げた、広げたのがごっそりいるんですよ。で、ぎゃーぎゃー騒いでいるし。  
それであの人たちが中国語でいうんですね。すごい やばい。圧倒されました。これ日本人  
このままだったら飲み込まれるなという感じを受けて。これはやばい。しっかりしようよ  
って思いました。そういう感じ。そこらへんくらいから、活動として入り込んだ最初ですね。

そちらのことから入って結局その時に、このまんまだとこの優しくてゆるい危機感も何  
もない日本人は隣の国に、がつがつした中国人に吞まれるな、これは本当にやばいって。  
大事な国をね、文化も伝統もすべてですよ。あの人たちは、そういうものに対しては興味  
がないでしょうから。そういうものを守っていくのが日本人しかいない、根本としてはわか  
らないだろうな。というのは、中国語、言葉がどうか、はっきりはしないけれど、言葉のつく  
り自体は英語と変わらないじゃないですか。ああいう風なもの考え方なんです。脳の構  
造もそうです。聞いたことがあるんですね。ポリネシアの言葉と日本語がよく似ているとか、  
ポリネシアの人だったか、ノイズとか聞ける民族というのは要するにそれは言語の体系で  
覚えて。言語の体系によってそれをどういう風に聞くか、聞けるかということらしいので。  
いくら日本人の顔をしていたって、小さい頃から英語をしゃべっていたりしてきたのは、そ  
の脳にならないっていうかという風に聞いたことがあったんで。ああなるほど、これは持つ  
て行けるのはちゃんとわかっている 私自身もわかってないんですけど、ちょっとでも知  
りたい、知ろう、大事にしようと思ってる私たちには、何とかして残して次のために後世  
じゃないや、次の人たちのために残していくように守っていかなきゃならないと思ってい  
る気持ちがなんかもう、焦りになって。

あとはだって、へんな話ノンポリの人たちは「あ、別にいいんじゃない」。中国人が来る  
よ、参政権で日本人じゃない人たちがいっぱい日本人になっちゃえばいいんじゃないか、目  
の前の生活困らねえしという感覚に、そういう人たちだけでは困るんですよ。伝統文化があ  
って、今のこの日本という存在、この得がたい文化があつて支えられている私たちである  
ことにやはり気がついていない。それはでも、説明してもわからないのかなあと思ったりする  
けど、これを守れる人たちだけでも守っていかなければ。そういうのに任していたら、本当  
に飲み込まれていくというか、グローバルスタンダードだとか何とか言って、今も秋入学に  
しましようなんて言ってますけど、ああいうことで日本人らしさ、ちょっと違うところって

あるんじゃないかと思っていて。そのちょっと違う部分をも全部おしなべて、平地にしちゃうような感じがあるんですね。それはもったいないという私の感覚。私は朝鮮人が嫌いとか移民が嫌いとかそういうつもりでは全然なくて、守らなければならないものは守らなければいけないという感覚の方が、私にとっては正しいというか。そちらのほうが主ですね、どちらかという。まあ、他の方とはちょっと違うかもしれません。でも本当は、もしかしたら、守ろうというもの自体は同じなので、どういう発想をしようが同じだと思うんですけど。

## (6) 排外主義との接点

大事にしなければならない伝統を守ろうとか、日本のいいところを大事にしたいという気持ちはずっと、それは。それを内に向かって守っていく、その時にみたいに外に向かって発することは、まったくやってなかったんです。外に出すようなプロテスト（をしないと）いけないと思ってたけど、出せなかったんですけど。それで（長野以降）しばらくは何もしないんですよ。結局ね、（同じ年の）11月だか頃に国籍法を変えましょうという、あのときに、たまたまそれも別の、気功ではない別の会に、ブログとかでいろいろやるのを見てたので、それで誘われて。何とかっていうブログを書いたんです<sup>3</sup>。団体を作って、11月に行きますって。それじゃちょっと行ってみよう。大変なことになっているので。それに抗議に行きましょうって。何それ？という感じです。こんなことがあるんだってすぐに法律がそうやってどんどん変えられていっているんだ。で、びっくりなんですよ。人権擁護法案だったりとか、外国人参政権の話とかいろいろ出てきていることを知るわけですよ。知り始めるようになって、なんじゃこりゃ？

でもそれって（情報源が）どこからかわからないですよ。私もちょっとあまり記憶がないですね。情報をどうやって仕入れていかかわらなかつたんで。何かで身についたんでしょうね。そのブログはちょこちょこ見ている。こちら（在特会）には、まったく他の方は動画見てきましたという人が多いと思うんですけど、私はまったく動画なんか知らなかつたんです。（動画が）あるって。で、それ（上記の集会）に出た時に、後で縁とかね、ニコニコ動画と Youtube とかが、何それ？って話したんです。そこから見始めて、「へー、そんな人がいるんだ」とかいう感じですよ。だからむしろ、後付けなんですよ、私の場合は。他の方は反対の方が相当います。それと私は、おばちゃんたちみたいな、年寄りみたいにまず何かに行って、そこで初めて知って。（ネットは）見てただけど、何も見てなかつたんですよ。そういうのがあるって知らなかつた、使い方もわからなかつたんですね、結局ね。とっても惜しいことをしました。

（在特会に引き合わせたのは）その時に来た黒田大輔の話なんだけど、だから言いたくないんですよ。彼が何とかという会を作ってるんですけど、そこに関心を持ったりとか行き始めると、それにつけいる何かこういう方たちに会う。それは何なんだという風になって、ああ在特会ってそういうのがあるんだ、じゃあメール会員になろう。まずそういう流れで、絶対にこれに行くのだというのでもなく、皆さんに知り合いになって、というような感じが多分あれですね。最初の（抗議）に行って、その後、黒田大輔、日護会に行くようになって、それと他のいろんな名前もの、瀬戸さんもそうだし、在特会も桜井さんもそうだし。そん

---

<sup>3</sup> 保守運動家のブログだが、X氏本人の希望で名前は伏せてある。

な感じじゃないかな。みんな渾然一体としてやっていたので。同じ。趣旨が違うと思ってなかったの、何かあるよっていったら、わーっと行く行く、という感じ。これじゃなきゃいやとかなかったんですよね。それはそれでいいかどうかは別として。

（在特会に入ったのは）いつ頃だったかね。（会員番号は）5000 番くらい。今でも基本的には、それこそメール会員なんで、何かをしなきゃという団体ではないんで。何かあって行ける時は行く、他の（団体）も行ける時は行く。今でもそのスタンスは基本的には変わってないです。ただ、在特会に関してはもうちょっと関わろうと思っていて、行ける時に關してはお手伝いしようと思っていて。

### （7）活動を持続させる動機

当初はもしかしたら（驚きが）あったかもしれませんが、今は違和感ないですよ。最初はデモにしても街宣にしても、「叩き出せー」とかああいう過激な言葉は非常に抵抗があったのを覚えています。出て行けとか言っちゃいけないんじゃないとか、思った記憶がありますね。それが抵抗なく、むしろひどい言葉を吐いているのはお前だろというくらいひどいので、ちょっとなかなかね、ありますよね。そこら辺は良くも悪くも慣れていく。

大事なことがあるじゃないですか。日本を守らなきゃいけないよね、という。そういうと大げさになってしまうので、そういう表現はどうかと思うのですが。あまりにも世の人が無関心すぎて。日本は変わっちゃっていいんですという人はいいいんですよ。良くないんです。変えられないという人たちです、私たちは。そうじゃなく、自分の生活さえなんとかできればどうでもいいんじゃない？というような、ノンポリの人たちの考えがあまりに大きすぎる。それをあまりに作りすぎた感じの日教組、許せないところがありますね。教育は非常に大きいので、私たちがどれだけなんていうか、よくここまで（右に）振れてきたなという感じがあるんですね。平和とか言ってきたのが、よく振れたのが自分でびっくりするくらいなんですけど。

何かないことには、衝撃がないことには、こっちに来れないんですよ。それに今、目の前に何かが起こるわけじゃないですか<sup>4</sup>。だから危機感もないしね。だから教育できちっと教えてあげなきゃいけないことも、きちっとやってくれないので、それをちょっとでも伝えたいという気持ちはありますね。だからって、何が変わるとか、そういうのがないがゆえに焦燥感があるんですね。焦りもね。行政に行つてね、何かやると言っても、市役所に行つて、抗議に行つたってのらりくらりで。今の民主党政権だと、わいわいわいわ私たちが焦つてるけど、するするいろんな意味がわからない法案なりが、頭の上を通り過ぎるようにしてできあがってますよね。でもやらないわけにはいかんですよ。黙って嫌がるわけにはいかんです。できる限りのことはやって。しなきゃいけないというようなことがありますかね、やっぱり。とりあえずやれること、何がいいのかわからないので。

教育の現場にも行かないといけないと思っているので。教育に関わりたくないという気持ちがあったりしてますよ。教育を変えないことにはちょっと変わりようがないですよ。日の丸君が代いやでしょうがないのがね、学校の先生やりたい、歌も歌わない、俺の自由だって。アホか、おまえが教えなければいけないのを、それを強制という言い方で。

---

<sup>4</sup> 起こるわけではない、の意。

(教育と在特会は関係ない) けど、在特会はどこかで——文科省は考えてないでしょう。確かに在日特権で云々というんだけど、私はそういう風に今のところのアクションをすることが大事だと思ってるんで。だから言ってるんですけど、日本人ですよ、それ以上のものがないので。

(活動は) 楽しかったんですよ。みんなが集まってわいわいやって、いろいろな人の話を聞けるじゃないですか。終わった後に、お疲れ様ってやった時に懇親会でいろんな人の話、何でそんなことやってるんですかということも含めて、初めてだからいろいろ聞くわけですよ。知らないおじさんお婆さん、お兄ちゃんお姉ちゃんに。いろいろな人がいろいろな思いでやってきて、その空間が……。会社では言わないようなことじゃないですか。外国人参政権の何とかね。政治家は何なんだとか。テレビはちっとも面白くないとかね。ここ来たらみんな話ができる、共有ができる。それが楽しい。お疲れ様という今日はよかったね、下らないことでも。総括っていうのかなんて言うんだらう。デモとかだったら、あそここのところはこうだったねというのものもあるし。ああよかったねとか、人数少なかったねとか多かったねとか、みんな何かを共有して確認しあう。サークルとつながってきすよね。

共有できる。それによって広がりが出るじゃないですか。それによってしがらみが出て、なかなか活動にはつながっていないけど、自分が今度どうしようと思った時に、行動してみようとか。今いくつか考えているのがあるんですが、共有できる。1人で悶々と閉塞感に苛まれて、このままじゃ日本はだめじゃないかというよりは、こうしたらどうだろうああしたらどうだろうと。与太話でもないし、人間語れるだけでもないし、そんな部分も含めて気持ちが強くなって——「終わらないな、まだ」という。1人だと気持ちが萎えたりしてしまうので、ああいやとくじけてしまうところが、「もうちょっとがんばろう」とお互いが支え合う感覚ですよ。

それ(連帯感)はもちろんありますよ。向こう(気功団体)でもね、それは。共有できるものっていうのは、ある種の限られた空間と限られた人数でしかできないものはあるので、向こうでもありますよ。飲み会ついているから楽しい、(気功では)何か別に(社交的なものが)ないというわけではないけど、その場でのがメインになることが多いですね。あとはそれぞれ個々ががんばるといふか。ただ、みんななんでもそうなんですけど、サークル活動みたいなものは、何でもいいです。在特会でも気功でも合唱でも、サークル活動ってあるじゃないですか。何でも共有できる、小さなコミュニティの中で共有できる人たちと、気の置けない仲間と時間を共有するのは楽しいですよ。癒やされますよね。本当に。浮世を忘れることも含めて。仕事できつきつしてたりするじゃないですか。それを忘れるわけじゃないけど、それ以外に気持ちを抜けるっていうの？仲間と語り合う時間も含めて。飲む時間も含めてね。いろんなそうやってやる中で、いろんなアイデアを出して次に進む、お互いに励まし合う、支え合うこと、それは大きいですね。

## (8) 小括

X氏について指摘できるのは、彼女が通っていた自己啓発の団体と『戦争論』が語りに及ぼす影響の強さである。小林よしのりの「公と個」は、公＝国とアブリオリに想定する点でそもそも社会科学的概念たり得ていないが、ちっぽけな自分であっても公＝国家に対する献身が必要である、という論が随所にみられる。これは、自己啓発団体の保守的な世界観、

およびビルドゥングロマン的なストーリー設定によって補強されている。

彼女の語る限りにおいて、これは市役所職員だった父親をはじめとする家族の影響ではない。むしろ「金持ちのため」の政治をする自民党を支持しない父親の影響が、「平和教材」を熱心に読んだり、労働組合でも役割を果たそうとするとところに現れている。それが自己啓発団体に通うようになり、違和感となって仕事まで辞めてしまう。その意味で、自己啓発に通わなければ労組の専従から会社に戻っても、父親に類似した価値観を持ち続けていたかもしれない。ただし、これは定かではないが彼女自身がそれに息苦しさを覚えたからこそ、自己啓発団体に通うようになったのだともいえるだろう。

これまで、両親との関係は活動家の政治的社会化にとって決定的に重要とされてきた (Demerath III, Marwell and Aiken 1971; Keniston 1968)。これは、西欧における極右活動家の研究でも指摘されており、活動家のなかには極右的な両親のもとで育った者が多いという (Klandermans and Mayer 2006)。排外主義運動の活動家にも家族の影響について言及する者はいたが、それは先行研究が示唆するより少数であり、しかも両親よりは (保守的な) 祖父母に言及する頻度の方が高かった。両親から、保守的・排外的な態度を引き継ぐ例が少ないだけでない。聞き取り中に水を向けても、親の影響はない、政治の話はまったくしないといった答えしか返ってこないのがほとんどだった

それに対して X 氏は、それほどドラマチックではないが、リベラルな両親に反発するようなエディプスの反抗 (Keniston 1960=1977: 304) として右旋回したともいえる (こうしたケースは一例のみであった)。彼女の場合、葛藤を抱え続けるのではなく、自己啓発団体に参加してそれを本人なりに解消し、そこで生じた別種の葛藤も労組を辞めることで解決している。これにより職業生活と私生活の矛盾は解消されたが、それでも職場で話せないことを在特会の懇親会で話すという形で充足させている。その意味で、彼女は常に表局域と裏局域にある種の乖離があり、それが行動の原動力になってきたともいえるだろう。

## 25 勉強サークルとしての在特会に参加したY氏の場合

### (1) 政治に対する関心

あるのかないのかと言われるとないですね。一般的なものはあるでしょうし、その時の消費税がどうのこうのとか、そういうときにはもちろん関心は出ますよ。ただ、全体的に当事者としてどうのこうのというところまでは、そんなに深い意味ではないです。こうしなくてはいけない、ああしなくてはいけないというのは、私の解釈ではあまりないです。なぜかという、悪法でも法は法なので守るべきだ、と私は解釈しています。もちろん仕事柄もありますけど。それからいうと、今は不満があるからそれはおかしいんだよ、声を上げるところまではしたとしても、それはただ必ずしも証明するのではなくて、自分のなかでこういう解釈を持っているよという、そこまでですね。ではどうするの？という、一番いいのは議員さんになるとか政治家になるしかないんですから。

(投票には) もちろん行きます。昔から。私は——ある意味、義務です。ただ、大前研一さんの話だったと思うんですけど、投票しないということはその人の意思表示をしないことであって、そうすると国家が予算でいろんな執行をすることに対して自分で意思表示をしていないことなんだよ。結局、税金というのは所得の再配分でしかないわけですよ。それで予算をするわけですから。で、それを1人あたり100万円お金を使うんだよ、なんだかんだ有形無形で100万円も使われていると。それを自分で放棄する形じゃないか、というのになるほどなどと思いまして腑に落ちて。寝坊してもちろんと行くように、真面目に。

(支持政党は) 特にないですねと言いたいところですが、今は消去法で自民ですね。(昔から支持政党は) 特にないです。こだわる必要もないじゃないですか。是々非々という部分がありますし、今の状況について大幅に不満がないならば、今の政権与党に投票するのが通常の感覚でしょう。比べようと思えば比べられるわけですよ。(投票先は) あんまり考えてないですね、20歳くらいの時には寝坊して行かなかったこともあるから。

かといって職業柄、どこそこに入れてくれというのはですよ、ないわけじゃないけど。そんなの関係ないですね。実際私はあの、職員組合の事務所に行って堂々と推してる——うちの組合としてはこの政党ですよと聞いていながら、私は「嫌です」と答えて——非常に私は俗な人間なんで。別に革新政党がどうのこうのというのを気にしたことはないです。最初からいくと90年代だよな……あのときひどかったもんな。森さんの時には確か自民党に入らなかった気がするな。だってハワイでゴルフしちゃだめでしょう、本当に。あれはちょっとおかしいなと思う時があるけど。

でも、それからは歳もとりましたし、冷静に考えると執行能力というところまで判断する必要が出てきますよね。政策理念、それも確かに大事ですけどね。実際にそれを——絵に描いた餅をちゃんと、せめて形にしてよというところまでいかないと。そうするとやはりどうしても、保守的な解釈になると思うんですよ。へんな話、今現在の民主党がなぜだめなのかというところですよ。何も——理想は確かにとてもいいし、決してそれを実現できないほど能力がないわけでもない、人もたくさんいるし。実際、市民団体上がりの方々もいたみたいですけど、ああいうのでなくてむしろ高学歴な方がたくさんいるわけですから。でもできなかった。それはやはり、別の意味の執行能力のなさじゃないのかなと。それは問題だろうなと。で、そういうのをもう実際に見てしまったわけですよ。日本新党という例も含めて。



そうすると、やはり変だけどもいきなりがらっと変わるというのはまずいんじゃないかなど。やはり、既存の政党、実績のある政党か、不満はあるけれどもちゃんとまわしてくれるところにやってもらわないといけないのかなど。明日の晩ご飯はステーキだよと言いながら、結局握り飯しか出されなかったら困るわけですよ。それくらいなら、握り飯しか出せないくらいなら、昨日までのちゃんとご飯に味噌汁つけてくれと普通は思うんですよ。ご飯と味噌汁、飽きたけど、まだご飯と味噌汁の方がよかった。おにぎり1個じゃだよ、そういうもんじゃないですかね。そうすると、やはり変化を求めないというか、積極的な支持じゃないにしても、やはり消去法で選ぶのはそういう形になってしまうのかなど。

むしろあの人（在特会の人）なんかは、私は認めてない、存在として認めてないけど、ネットで新風というのが出てた。あれがなんでいいのかまったくわかりませんね。別にそういう口調でどうのこうのって今更引っ張り出してどうするの。死にかけのミイラ引っ張り出してどうのこうの言ってどうするのだろう。それならまだ今とりあえず生きているやつ（自民党）の、こねくりまわしている方がまだましと。昔の方が良かったというのは、それはありますよ。給料高かったし。そういうのはありますけど、そういうのじゃなくて昔の制度が良かったとは私は思いません。確かに今の制度、やはり進化しているわけです。進化を否定するというのは、私はおかしいのかなど。おかしかったらまた変えりゃいいわけですよ。

（皇室についても）男系だろうと女系だろうと私はかまわない。もちろん、それは続くべきだと思ってますけど、男系女系のことを考えていた時に思ったのは、これって話だいぶ飛びますけど、車は好きですか？日産の Skyline という車が、あれがゴーンさんが来てから変わっちゃいまして。正確に言うとエンジンの形式が変わっているんです。ネットとか見るとすげー非難轟々だったんです。ただ、冷静に考えれば名前が残ればいいんですよ。へんに昔にこだわってもダメなんだよ、というのが私の考え方ですから。

もちろん、伝統というものはいいですよ。それはいいですけど、懐かしんでいるのとは違うんですよ。生まれる前のことなんて、わかんないじゃないですか。そこにこだわってどうするんだよ。そこを昔は良かったと言われても、昔知らないんだから、40年しか生きてないんだから、こっちは。ただ、じいさんから戦争の話は聞きましたけどね、それは関係ないじゃないと。話は話として。揚子江でですね、刀くわえて泳いで——うちのじいさんは泳ぎが達人だったらしいんで——そのまま泳いで行って揚子江に浮かんでいる船のスイカをいっぱい積んでいるシナ人の上ってわーっとおどかしてから、積荷ごとちょうだいというのかなか豪快な話を聞いたことはあるんで。それは私の思想において、特に（影響）ないでしょうね。だから当時の日本は良かったとまでは私は思いません。悪くなかったけど、そこを目指すのは話が別ですよ。

## （2）外国人との接点

（外国人との接点は）ないです。まったくないと考えて結構です。ですから、いわゆる見た目の変わらない方たち、在日の方とかいませんし。ガイジンとって外国人の方と仕事したということも。もちろん私の職場であれば、講師で来られる時があるんですけど、しかも長期滞在することもありますから。ただ、そういうときでも部署が一緒でなかったもので、そういうのでもないです。だからその意味でまったくない。

### (3) 在特会につらなる関心

根となると、あのときはネット（普及）前ですね。私が一番なっていくとなると、やはりあれはいつ頃ですかね、90年代、2000年が近づいてくるあたりになると、北朝鮮のことが出てきてあのへんの話が、右翼左翼とか何とかの関係でかなり出てきた記憶があります。そういうのが出てきて、ああいう今の体制は違うんだよ、なんでこういうのを礼賛するのか、礼賛する左翼の方々がいるのかな、というのがあって。自分はこういうのおかしいなと思ったのはあります。ただ、それで私たちが受けることはあくまでも、本とか何とかから来る知識の収集しかないですよ。で、それからネットというのが出てきて。そうすると今度は証明ができるわけです。で、あとその紙媒体にならない個人の意見がいっぱい聞けるようになるわけです。

（ネット掲示板を使うようになったのは）いつだろうな・・・私、やっぱり Windows 95 以降だったと思うんですよ、時期的には。ダイアルアップでしてたんで、確か記憶があるのが気づいたらアフリカのどこかの国に高額請求がどうのこうので、あれが社会問題になるくらいだったと思うので。十分こなれた時期だったと思うんですよ。

私もそのときダイアルアップ回線だったので、なんか変なですよ。アダルト系のバナーを間違えてクリックすると、つるつるってあつという間に・・・見たらダイアルアップのやつが新しくついていて、「あれ？まずいまずいこれは消そう」って。そこらへんはある程度、ある程度コンピューターとか扱うのはそんなに。その当時でも別に先端じゃないけど、人並みには使って。最初の部署がコンピューターでプログラム作る場所だったんです。まあ職場で、おかげでプログラム言語を使って、数十万件の土地の値段を決めるとかね。だからそういうロジック的に「あれ？」というのが嫌いです。だから、話とか聞いていても、主語がないような話というのが大嫌いですね。もちろん、2人で話すと絶対主語なくなるんですよ。なくなるけど、途中途中でなんだったかなと考えるんですよ。

（北朝鮮に対する関心は）確かですね、あれはこれまた俗な本ですけど、テリー伊藤の『お笑い北朝鮮』だったと思うんですよ。けったいなものがあるな一って調べたら悪評ばかりじゃないですか。うわー、こんなものがあるんだ。ミサイルがどうのこうの・・・まったくこいつらは。（金）日成さんが死んだのは90年くらいだったんですよ。それくらいですよ。あそこから、確かお笑いなんかはその前だったという気がするんだよな。2ショットの絵とかいっぱい載せて、きっとそうだと思うから。

本格的になったのは、私が従軍慰安婦関係のやつですか、ただ最初の従軍慰安婦のあれじゃないんですよ。90年代以降の2回目ぐらいに盛り上がった後だったんです。一番最初、70年代か千田ナントカさんですね。その後、吉見さんの本買いましたから。薄っぺらい岩波新書のやつと、6000円くらいの大月書店のやつの資料集成と、議論の時の基礎資料として。で、多分その後韓国が謝罪しろというのを蒸し返したのが、90年代ちょっと過ぎてからだったと思うんですよ。ダイアルアップでその時に接続してたのが、韓国生討論といういくつかの掲示板があって、その管理人が Doronpa さん<sup>5</sup>だったんです。だからあの時の議論は従軍慰安婦についてという、スレッドの2つ目から3つ目まではとてもいいけれども、それから先は大したことないです。何回も書き込むんですけどもね、私も。だから Doronpa

---

<sup>5</sup> 桜井誠のハンドルネーム。

さんは早くから知ってるんです。で、そういうのがあるから私は未だに首突っ込んでいますね。最近「ちょっとな」というのが多いですけどね。何年前かな・・・8、9年前ですね。あのときは Tele 放題使ったり、Tele 放題入る前は、とにかくお目当てのページが出たら、お目当てのホームページにつないで、そこをテキストでコピーしてばーっとハードに貼り付けて、すぐに切ると。一晩放置したら進んでからですね。それで考えてと。

指環さんという素晴らしい人がいまして。指環というハンドルネーム。あの方が掲示板などでこういうのがある、あなたが言っていることはおかしいんだよと、ばーっと出てきたので。何だろう何だろうと思って調べたんですけど、だからネタ元を調べたんです。これが資料ナントカというんだよ、まったく同じ文言が吉見さんの資料集成に書いてある。なんだパクリじゃないか、同じこと書きやがって、こいつは。一番問題になったのは、もちろん有名な一文がありますけれども、昭和 12 年シナの方、そっちの方で日本の駐留で、もちろん大きな基地があって、その中に利用規程のようなものを書いたのがあって。これをもって慰安所というのがあったんだという証拠にしてあるんですね。で、それを読むと「ああ、日本が慰安所を経営してたんだ」という考えがするけれども、よくよく見たらこういう風なのがあるんだよという書き方しかしてないんです。

で、「え？」と思ったんですけど、それがわかったのはその分厚い本を買ってからなんです。ネットでのやりとりでは、結局わからなかったんです。もちろん全部を載せてなかったというのがあります。断片しかないと、誰も現物を検証してなかったから。現物を検証すると、どうも違うなど。ただ最初にばーっと読んだら、「あ、まずいな」と思ったんですけど、2回3回と読むうちに「あれー、おかしいな」と思って。その資料の解説のところに遡ってみると、これは昭和 12 年に慰安所が存在した資料である、それしか書いてないですよ。経営したと言も書いてないですよ。おかしいな。似たようなのが——それから 1 週間くらいたってから、上海から中国内地の方でも同じような通知があったんです。これはよくよくみたら日付も一緒だし、文面も一緒だから、完全に大きな所から小さな所に行って、小さな所は自分の配下のところに改めて文書を送ってるだけじゃないか。単なる事務連絡じゃねえか。そういうのを見てから、やっぱりネットの情報とはとっかかりにはいいけれども、現物見ないとだめだなと。まあ、そのスタンスを私は極力今も変えないように。

(そこまで調べたのは) 悔しかったからですよ。簡単にそうでしょ。本当なのかな、ともちろん知的的好奇心的なもの、その見解っていうのはじゃあなんで今まで出なくて、こんないきなりつかかってきた普通の個人がいうんだよ。学者誰も何も言ってねえじゃん。——私はその、学者さんに勝てないと思っているのは、1 の言葉を発する時には後ろに知識が 10 くらいあって、10 の知識のために 100 も 1000 も本を読んでいるんだから勝てるわけがない、本来は。結局そうでしょ。だから学者さんたちをその場でやり込めるんだったら奇襲しかないわけだから。次にリベンジマッチされたら絶対に負けるんだから。準備したら、向こうが本気で準備されたら負けるからね。私たちがいくらがんばっても、相撲取りと相撲取っても勝てないのと一緒ですよ。相撲取りに不意打ちで後ろからドンと押したら土俵の外に出せるかもしれないけど、普通にしたら絶対勝てない。

だから私は慰安婦のスタンスとしては、最初に言っていた人たちは「いわゆる慰安婦の人はいました」と。その言葉を使うのが一番わかりやすいからですね。よく言われますけど「戦時売春婦」ってなんで言葉を使い換える必要があるのか、言い換える必要ないじゃん。あえ

て口汚く言う必要ないわけじゃないですか。だから私も中国をあえてシナと言い換える意味がわからない。中国でいいじゃないですか。歴史的な経緯でいうのであればシナでいいでしょうけども、今の中国をなんでシナって言い換えるんだよ、意味ねえじゃん。そういう意味ではあまり過去にこだわらない人ですね、私は。シナって学校で習ってないですし。

私はそこ（慰安婦問題）がとっかかりだし、その時が一番がんばったですね、ある意味で。勉強したんで。まあ、結論出るわけないんですけどね、今更。双方の主張が絶対に合致するわけがないんで。良くて平行線です。重なるかなという角度が違うだけです。ベクトルがずれて重なっているから意味がない。それを言葉尻であだろこうだろとこねくり回しても一緒でしょ。

（調べていたのは）多分1年は間違いないけど、2年か3年まではいってないでしょうね。そこまでいくとネタ出尽くすじゃないですか。しかも私たちみたいな一般の人に調べられることに限界が出てくるんですよ。読んでない本は本屋さんに行けばいくらでもあります。でも、新たなやつが出てきても非常にイデオロギー高すぎて、資料性がどうしても弱いじゃないですか。常にそういうイデオロギーのもとに、右にしろ左にしろその上にあるから。吉見さんの慰安婦資料集成、あれみたいに資料をそのまま羅列したものじゃないから。それはやはり納得できないですよ。そういうやつ。それじゃないのだと無駄な情報が多すぎるから、それはいらぬ。まあ、若干技術主義的な部分も私はあるので、プログラムを組むとどうしても仕様書を見た時の方が早いこともある。何で動かないかなって。私たちが手に入れられる資料ってそれくらいしかないじゃないですか。今はアジア歴史資料センターでPDF化されているから、見ようと思えば見られるんですけど、もう探す気ないですよ。自分の関心は移ってるんで。

（北朝鮮と慰安婦の話は）まったくリンクしませんね。私もそれを結びつける気もないし。そういう風に議論を広げたくないからですね、関係ないことを。右翼的なこととこののであれば、北朝鮮とかそういうのは、その時にいっぱい本が出たからですね。考えてみりゃ『SAPIO』結構買ってた気がするな。『諸君！』は面白かったけど、『正論』はちっとも面白くないし。『諸君！』は意外とまともなこと書いてあったけど、『正論』はつまんないもん——産経新聞は信用してないから、絶対に。（『諸君！』を）読みましたね、買ってましたね、確かに。やはり私は紙媒体を信用するからですね、ネットよりも。たまたま面白い特集があって、2、3回連続で買ったら、多分その後はある程度惰性的の場合と、あと私は雑誌買う時に1年買わなくちゃいけないと思ってるんで。1年でだいたい特集一回りするんで。

産経新聞は信じないんです。産経新聞が出た後に続報で出れば。朝日新聞が出れば一発で信じますけど。へんな話ですけど、右翼的な活動に付き合っているし、基本的な思想は私も保守的だと思うんですが、ただああいう風な自分たちで保守と言っているあの人たちの媒体というのを、必ずしも信用しないので。やはり誰がなんと言おうと、新聞を一紙しか取っちゃダメだよと言われてたら、私は迷わず朝日新聞を取りますね。今は違いますけど、昔はうちのじいさんがいてから、じいさんが権力あった時になぜか朝日だったんですね。別に天声人語読んでないんですけど。小学校の頃だから。でもやっぱり、一番ある種クオリティペーパーといわれたら、朝日じゃないかと私は思ってます。実際はわかりません。ただ、私の中ではそう思ってますから。産経はどうもいろいろ見たら、誤報も多いし信用できねえもん。まあ、だいたいネットで取り上げられる、ネット右翼の喜ぶ情報は信用できねえ。だ

から去年の夏だったかな、朝鮮学校の補助金の東京の補助金が不正に利用されてるよと出ましたが、後追う記事1つも出てないので信用してません。関係者のインタビュー、私はあれ絶対に信用してないことにしている。

#### (4) 在特会への参加

(その後も桜井の) ブログは結構見てました。まあ、眺めるというか。ただ内容的にどうのこうのじゃなくて、むしろあんた字間違えているよという指摘を何回かしたくらいですね。会則こう作るのに、会則間違ってるじゃないか、とその視点から文句ばかり言ってますよ。そんなこと、意思表示するようなことはなかったです。議論に加わって——コメントいっぱい出てるじゃないですか。(できるときには) 知ってましたし。

確か会長がどっかで宣言したと思うんです。探して見つからないので、多分講演会で言ったのかもしれない。ただ、あの頃はまだニコ生なかったから、何かで発言した文章じゃないかと思うんですけど。あの人が最初言ったのは、既存の保守云々って当時は非難はされてなかったんですけど、自分たちは自分たちのやり方でやるという、当時のネットを使うというのが邪道の時代だったんですね。既存の保守の方に応援してくれとは言わないけれども、足を引っ張らないでくれと。それには非常に好感を持ちました。

ただ今、足引っ張っているのが在特会ですから。何やってんだよ。だから、多分あると思うんですよ。結構街で街宣されてますけど、名前出せないですよ。普通の会社員が在特会の名前を出せるはずがない。ちょっと調べりやすぐわかっちゃうんだから。本当に何やってるんだろうという感じ。私自身が右も左も関係なくフレキシブルに動く人間なんで<sup>6</sup>。とてもフリーダムな人間だから。

最初はお勉強サークルだったんですね。だから私は昔から知ってたのもあって、こういうのができたのを知っていたので勉強会に参加した。それからですね。在特会自体が最初から500人いるんですよ。すごい数だと思うんですよ。それから考えるとやはり、最初のネットの入り口というのを門戸を広げればというのが、私みたいなのが引っかかるわけですから。その意味では大変私のように入ってくる人もいたんじゃないかな。

(他の団体で) 慰安婦に特化したのはないですけど、あれは教科書関係ですね。(そういうのに参加しないのは) なかったからですね。こちら(地元)にはないでしょ。少なくとも門戸が低いのは存在しないです。(拉致に対する関心は) それはまあ一環としてはありましたけど、それに特化することまではなかったですね。募金くらいならしてもいいですよ。でもそこで率先して活動するというのは……もちろんそれが職場で認められるような活動であったとしてもですよ。組合活動みたいなものであったとしても、そこまではいいよと。もっといいのがあればそこに行った可能性は高いですね。その時は在特会だったのが一点と、今の在特会とは違うから。年齢的なものとの関係でそれしかなかった。まあ私も薄々感じてはいましたが、『諸君!』とか『文藝春秋』の平均年齢が高い、それはそうでしょう。

私はまったく(参加に際して抵抗を) 感じませんでした。私が知らないことも出ましたが、まったく知らないかという、そんなこともなかったからです。私は、人の好き嫌いは

---

<sup>6</sup> 法学者の前田朗の講演会に出て、講演記録を自らテープ起こししていることを事例として挙げている。

ないわけではないですけど、別に話す上でそんなに嫌悪する必要もないし。そこら辺は人たらしの人間なんで。別に暴力団の集会に出るわけじゃないんですから。そういうところは出て行きませんよ。それはちょっとぼったくりの店に行くわけじゃないんですから。せいぜい何千円か持って行けば十分ですよ。行ってからちゃんと五体満足で殴られもせず帰ってくるんですから。逆にその後の打ち上げで飲んでから、激昂して喧嘩、そういうのは別にいいじゃないかと思うんですよ。その場で切った張ったならいいじゃんかと。私も1回喧嘩しそうになったんですけどね。ちょっと私がチャラチャラしすぎただけですけど。

(会員になろうと思ったことは)ありますよ。数度あります。ただ私がなぜやらなかったかということ、在特会本体ではなくて、在特会を取り巻く方々——まあ誰とは言いませんけど西村修平です。確かですね、何だかおかしいなと思ったのは、確か西村修平が安田さんの本にも書いてあるけども、Doronpaさんが招聘した時って、会ができてから半年くらい後だと思うんですけどね。そのくらいの時に、署名か何かに出てきた時に書いてあったと思うんですけど、すごいことしてるなと私は思って。で、それからブログをちょこちょこ見たら、「あれ？」と思ったのが何か主権回復の宣伝ばかり出てきて、「え、何で？」と。在特会が今度ここでこういう行動をしますよと出たのに、2つも3つもそっちが出ていたんで、これおかしいんじゃないのと。で、西村修平さんで名前をとる(検索する)と、これはちょっとろくでもない人間だと。そういう人が出入りするのはずだろうと。だから、経歴を見ると。それまで社会人だったんだけど、その後完全にどうやら本職右翼になったわけです。それはおかしいだろうと。そういう人たちとつるむ団体になるというのは、まずいんじゃないかな。

あと瀬戸ナントカさんとか。あの人はどうやら、見るともっと後ろ暗いっぽいから。活動B5のタブロイド紙5000円とかWikipediaに書いてあったけど、これどうみても総会屋の手口じゃないかと。これはどう考えてもシノギだなと。まずいよと。それを他の人はあれ見てから気づかないのかなと思うんですけどね。あそこまでがっちりWikipediaで書いてあったから、この人は総会屋くずれだと気づかないのかなと思うんだけど、他の人に瀬戸の評価とか聞いたことがないんでわからないけど。こういう人たちが在特会に入り込もうとしているのがちょっとまずい。連携するならまだ良かったかもしれないけど、是々非々で。どうもそれが中に入り込んでどうのこうのになってくると、ちょっと違うだろうと。で、そのうち西村さん——主権の宣伝が減ってきて、何回か経緯もあって。で、入りませんかと誘われるわけです。悪い印象もなく誘われもして、乗り気になってみたら、関西が暴れて。だから2、3回メールフォームを呼び出したんですよ。でもちょっと、たまたまトラブルが発生して。メールフォームを呼び出して、一晚考えようと思って、次の日まで自重して、結局そういうのばかりで。

私は門戸が、桜井さんつながりで、桜井さんのホームページつながりです。在特会の中では慰安婦の話が出てくることはないですね。考えが今の活動の内容と関係ないからです。

「慰安婦はいなかった」だけの見解しかないんだから。私はいわゆる(「慰安婦」は)いて、問題は国、軍がどの程度関与したかの問題ですから。じゃあ軍、国が関与した証拠はあるのかということ、そこは非常に似つかわしいのはあっても、実際直接関与はないんだよ。であるから、それはひどい話、文句もたくさんあるでしょうけど、それでいうと慰安婦というのはなかったという結論にいてもおかしくはない。そういう職業をしてそういう風に軍もそ

れで利用して、利益も得たけれども、それはあくまである意味、請負契約のそういう風な年次契約の話であって。そこに国の関与があったにしても、あくまでもそれは委託契約の先の話だから。そこを直接業者の方に出せよというのが出てこない限り、または個人さんを引っ張って、かつちゃんとした業務の一環として認められて行動した書類が出てこない限りは、それはちょっと……。やはり人道的な部分でそこでお金を出すのは別だけでも、それ以上はおかしいでしょというのが私の考え。だから、そういうのの線引きをどこにするのかは、調べなくてはわからないですね。一番簡単ですよ、なかったというのが。すべて拒否できるんだから。そこでとりつく島がないから理論も何も無い、議論も存在しなくて。

### (5) その後の状況

首突っ込んでいるのは、最初の入り口はそれだったらすね。事前に知っていた。当時の在特会は、勉強会指向、知識的なものを積み上げようという思想だったので、最初のへんはQ&Aとかホームページにも出てたんですけど、今なくなりましたね。まあ、理由はわかりますけどね、大体。私の思うのは、在特会がどうすれば良かったのかの、何を選ぶのかは別として、本来であればそこにいったら知りたいことが全部わかるんだよというホームページを作っていれば、もっと違う方向にいったんじゃないかなと思うんです。私はだから本当に初期の考えなんですよ。あくまでも問題を提起する形で勉強会・講演会、調査研究——理論武装というのが目的にあったわけですから。誰と討論するのか、別に討論する奴いないんですけど。

少なくともそうすれば、暴力的な行動するのは単なる一面だけで済んだと思うんです。それがなくてただ単に告知してから「あそこ行くぞ、ここ行くぞ」だけじゃだめなんですよ。私はだから今の流れというのは、非常に私の価値観からいうとちょっとおかしいな、嫌だなと。実際また逮捕されているし。「何やってるんだよ、本当こいつら」って。

顔出す分には、こっち（支部）はある意味穏健じゃないですか。安田さんも書いてましたけど、個々の話で変な人は少ない。（参加するのは）その後の飲み会が面白いからですね。他の人もある程度近いんじゃないですか。でなきゃあんまり楽しくない部分があると思います。要は打ち上げですからね。私はそこに特化しているだけであって。下らない馬鹿話ばかりですけど。しょうもない話ばかりしますけどね。1回乾杯前にクソ難しい話している人がいたんで、「馬鹿野郎、乾杯してから30分は馬鹿話するんだよ」って逆に言ったりし。クソ真面目な人どうするですかね、こんなのと私は思ってるんですけど。他の人は真面目なんでしょうけどね。

私はある意味、知的好奇心が満たされる方が楽しいかなという感じ。だから右も左も行きますし。面白そうなら行くという。あそこ（関西）が特殊なだけで、ある意味普通はあんまり問題——へんへんなことやってますが、カウンター街宣の意味がわからないんです。カウンターで街宣しなくていいじゃんかって。何の考えがあるのかなって。結局、表現者というのは批判されるのは当たり前じゃないですか。でも、批判されるのを——自分たちが批判するのに文句を言うのに対して、向こうに文句言うってわけわからなくて。自分たちが理路整然とデモをする、それは私はいいと思う。おかしいでしょう。考えおかしいじゃねえか、別に違っていいじゃんか。

現場に行って（直接行動を）ぼーっと見る時はあります。安田さんがいうインタビューの

時にはごく普通に受け答えができる、何でこんなに——私もそんなに何で怒るんだ、すごいな、そんなに不満あるんだって思って。

付き合いで確かにデモの後ろの辺歩いたことはありますよ。でも、それで積極的に何かをというのではないですね。(マイク握ったり) しません。旗も持ちません。ぞろぞろ歩くのはいいです。何せ私は、首からプラカードぶら下げるあのファッションセンスが許せない。なんであんな格好悪いことできんだよって。あれを嬉々としてやるのがまるでわからない。首から下げるって、何だよお前ら囚人かよって。ある意味そうじゃないですか。西村修平さんみたいに字間違っていたらどうするんだよ、本当に。写真撮られたら日本人として恥さらしてるって、馬鹿みたいなことやっちゃダメだよ。

本当の初期っていうのは、結局歴史だったと思います。「在日の存在する歴史」くらいの。最初はそちらの方が強かった。最初はそこ(入管特例法の廃止という目標)がなかった気がするんですよ。あんまり言ってなかった気がするんです。出ていますけど、そこ以前の問題じゃなかったかということですよ。入管特例法の話も出てくるかもしれませんが、それを条文に列記してというのはあんまり出てこなかった気がするんですよ。(かつては)無年金のことで補助金を出しているところ、だから県内の全自治体に電話で状態まで調べてあったんで。今そういうことないから。だから、これ見たらすごいなと思います。でも、そういうのが今ないからですよ、「あれれ？」(こんなはずじゃなかったのに)と。まあ私がやる気になればできるんでしょうけど、そんなのする気ないし。

なんで(「在日問題」に)こだわるのかなあと思うんですね。あとまあ、これもちょっと何で出てくるのかがわからない。創価学会は嫌いですが、別にどうでもいいじゃないかと思うんだけど、あれと同じだと思うんですよ。それが正にいわゆるゼノフォビアというやつでしょうけど、何で不安なんだろう、取り込んだら面白いんじゃないのという感覚ないのかな。そんなかたくなにする必要ないし。ちょっと嫌だからといって、そんなに口うるさくするのは必要もないじゃん、不安だから恐いんじゃない？それだけの話じゃない？と私は思うんで。

(現在は)そんな積極的に、イーブンで積極的に選ぶというのはわかりませんよ。繰り返しになりますけど、最初のとっかかりでずっと昔から知っている。比べるところがないです。結局今、イーブンで勉強しているわけでもないんですよ。若干話を聞いて、救う会のやつがあるらしいんですけど、別に回線がなければ難しいじゃないですか。在特会というのは広報活動しているから比較的入りやすい会ですね。年齢層も若いし。

(参加してよかったことは)ないとしかいいようがないですね。なぜかという期待してないから。その意味では、何か得ようとしているわけではないからでしょ。要は私はある意味、フリーダムなので、楽しめればいいのかなど。今でも追い続けているものがあるとすれば、知的好奇心を満たすということですね。一番最初。ああこれおかしいな、本当かな、どこでどうしたらいいのか、ああちょうどいい講演会があるから行ってみようかなと。ただ最近それ関係ないですね。

で、得られたものがあつたのかと言われれば、逆に村田さんより情報先回りして、あれれ？と。ただ単に自分の解釈能力がなかっただけじゃないかと。そしてあとは自分も社会経験を積んでいったら、ああこんな気づかなかつたこともあるんだ、出てくるんですね。村田さんが来たのがずっと前だから、それから期間もたつてくると私も別件とか何とかで調べ



て、勉強することがあるわけで。もちろんこれに関係しないことでも。知識が増えてくるわけで、その当時はほとんどなかった、法律の読み方だかの知識はだいぶ増えましたんで。だからほとんどの人は、法律といたら法律だけで、それに規則とか政令とかいうのがくっついて来て、それをもっと1つの体系になっているというところまでは、多分把握してないんじゃないか。

#### (6) 外国人参政権について

在日についての問題はどちらかというと（関心が）弱いですけど、選挙権の方は若干気になりますね、職業柄。有名な最高裁の判決ですけど、あれは別に違憲でもなんでもないんですよ。違憲判決でもなんでもないですよ。ただ、憲法に書いてないから知らないよ、というだけ。よくよく読んだら。他の人は「違憲なんだ」。違憲じゃないんだけど。ちゃんとした本を読んで、ちゃんとした解析した本を読めば、法律ができりゃそれまでだけれども、ダメともいいともいっていないんだよというのが、あの判決ですよ。でも、村田（春樹）さんが来た時もそこまで言われなかったですね。でも飲み会の時に聞いたら、その通りと言われてましたから。あの人が知ってるんですよ、だから。ただ知った上でその行動されるのを、私が今更文句言ってもしょうがない。

私は法律ができれば、それは文句は言えません。言いたくても言うべきことではないです。まあ、悪法も法ですから。ただ私はそれについては、やはり若干慎重である必要はあるのかなと、少なくとも普通選挙と同じ扱いにするのはおかしいでしょ。居住要件を満たすというのは必要かなというのが前提です。別にお金を払えというのはまた別ですよ。ただ、居住要件をどういう形でみるかはまた別ですね。たとえば帰化したらそれは無条件ですけどね。永住権というのが日本にあるんですかね。アメリカ人とか旧植民地関係ない部分での永住資格もあるんですか？そういうの（永住者に対する付与）はまあある意味いいのかな。逆にそういう風なのをしっかりしないといけないんじゃないかな。来たんだよ、3年たったんだよ、OKだよ、それはちょっとまずいんじゃないか。3年4年というのが果たしていいのか。

あとまあ、やはり自活できる能力というのをどう見るかですね。ただ、自活というのを必ずしも選挙権のあれじゃないから。ちょっと難しいところだと思いますね。ニートの人、収入がなくても（選挙権は）あるんで。じゃあ、たとえば今お金がなくて税金払えなかった、または今年は生活保護に落ちたんだよと、ただその次の年に税金を納めるようになるんだよという場合にはどうなるんだろうというのが。日本人はそういうわけでしょ、結局、関係ないんだよ。外国人もそういう風に法律より、そういう風な収入とか税金の線引きをつけるのはやはりおかしいかな。そこら辺を考えると、ちょっと条件については相当厳密にしないでいいのかなと。納得できるのがあれば、納得するかどうかは別として、私は致し方ないかなと。ただし、地方参政権なんですよ。で、被選挙権については私はよろしくない、そこまでは認める必要はないんじゃないか。公権力の行使の一環になるわけですよ、議員さんになれば。私はあくまでも地方参政権について条件を付して、法律の整備があれば何の異論もありません。ただそれをつまびらかにしないという、そういうのをしないというのであればそれはちょっと問題ですけど。まだそういう話もないじゃないですか、実際。

#### (7) 在日コリアンについて

(在日には) あんまり関心がないですね。犯罪がどうのこうのがありますけど、それは個別の部分があるので、それが民族だからどうのこうのってそこはまた別でしょ。結局金がないければ誰だって盗むんだし。大阪人がちょっとけんか早いかもしれないけど、あくまで誤差の範囲じゃないか。それを民族性のどうのこうの言ったらおかしいでしょ。金がないだけなんだから、奴らは。

私も本当にわかりませんね。なんで在日の人たちをあそこまで嫌悪するのか、私にはわからない。それがまさにゼノフォビアなんでしょうけどね。特権があるという風な前提になっているけど、本当の特権の数そんなないと思う。もうすでに。私も伊賀市にメールしたんで。伊賀市の広報に「こういう報道がありますけど、どうなんですか」私はメールして、メールもらいましたけど。私も自分で調べはしたんで。あそこの税条例みたらわかるんですけど、免除するためには、免除というのは先に課税とか行政手続きをしたのを申請によって免除させるわけだから、いったん課税しているはずなんですよ。でも非課税とは違う、だからその書類はあるんですか、そこら辺のメールしたんですね。事務決済規定をみてもどこがどこなのかわからなかったし。多分そこまで知ろうとした奴は、あのとき騒いでいたやつはいなかったと思うんですけどね。(返信は) 素晴らしかったですよ。こちらも「こういうことなんですけど、教えてください」とそれだけだったんです。別に抗議のメールじゃなかった。だからちゃんとすればちゃんとなるんですよ。ロートみたいに桐喝しなくていいんだよ。何でそんなことするのか。ちゃんと誠実に対応してもらいましたし、言われたのは「決算書と予算書は図書館の方でも公開してますよ」「そうなんだ、素晴らしい素晴らしい」。そこまでわかるんですよ。ちゃんとすればですね。

盛り上がって来るところに在日がどうのこうのという話をするのは、確かに多いですね。「在日だから」という言い方をされます。それはちょっと私もそこはね、たしなめる必要もないので言いませんけど、在日が悪いんじゃないで犯罪者が悪いんだと。そういう人が多いだけじゃねえか、たまたまと。表に出るのか、出やすいのかどうかわかりませんが、ただ単にたまたま多いんだよと。悪い人はどこだっているんだから。やっぱり日本の政府の関係もあって、わかりにくいから、ある意味その隠れて見えてくるのはある。だって戸籍がないんだから。自治体のコントロール外にあるわけじゃないですか、ある意味。それはある程度わかりにくくなりますよ。それこそ密入国されてもわからないです。で、ある意味コミュニティがあったら、そこの中に閉じ込められたらわからない。しかも言葉が違ったら日本語ほとんどわからないわけですから。バイリンガルの人間は日本にほとんどいないんですからね、私も含めて。だから細かいところに入り込まれたらわからないですよ。安田さんの本にもありましたけど、外国人の、ブラジルの方々のコミュニティに入ってもわからないでしょう。あの中に私たちが行って、きつと行っても言葉わからないからです。そうしたら本当に、どうなんだろうとか思うでしょうし。顔見てもわからないですね。新しい人が出てきても。新入りだよと言われて、「この間 10 人だったけど、11 人というのは誰が新しいのかな」きつとわからない。

## (8) 小括

Y氏は2000年代前半から、在特会会長の桜井誠が運営する掲示板のユーザーだった。その延長で在特会の結成も知っているし、支部での活動にも参加している。しかし、公務員であ

るということもあって「反社会的」とされる要素には慎重であり、会員にはならなかった。それに加えて、「運動」ではなく本人がいうところの「知的好奇心」の充足に関心があるため、行動ではなく勉強会のような方向を指向している。ただそうした団体がないため、これまでの経緯から在特会に参加し続けていることになる。その意味で、彼は在特会はもう長くはもたないだろうと言いつつも、在特会のような集まる場をどのように確保できるかに心を砕いていた。

こうした当初の路線をそのまま採用し続けていたとすると、おそらく在特会はそれほど会員数を伸ばすことはなかつただろう。とはいえ、そうした需要も一定程度存在するのであり、現在の直接行動路線とは異なる組織にとってのニッチは——少なくとも大都市部においては——あるのかもしれない。それ以外にも、単に直接行動で主張することに満足する現在の路線に飽き足らず、行政交渉を中心に朝鮮学校への補助金を廃止するような活動を指向する者も、調査対象者のうち2名いた（両名とも在特会とは別の組織で実践している）。排外主義運動の抗議サイクルが2000年代前半に始まったとすると、その展開に即して組織は分化することになる（Tarrow 1989, 1998）。現在は、全国的にみて在特会以外の組織が勢力を伸張させることはないが、都道府県の水準では分化がすでに進んでいる。今後は、地方における外国人政策と排外主義運動の関連にも目を向ける必要があるだろう。

## 26 中国が重要というα氏の場合

### (1) 「行動する保守」とは何か

日本で右翼といえば、特殊な塗装を施した街宣車に大音量の軍歌、同様に特徴的な服を身にまとった人たちといったイメージがある。だが、そのような街宣右翼（行動右翼）と呼ばれる存在に対して、1970年代後半から新右翼と呼ばれる運動が現在に至るまで続いている。筆者の問題関心に照らし合わせて興味深いのは、こうした新右翼の一部から排外主義に傾く活動家が現われ、2000年代後半以降の排外主義運動につながった点である。

一般に右翼は、天皇制と反共には関心が高かったものの、「外国人問題」には無関心に近かったとあってよい（Szymkowiak & Steinhoff 1995）。それに対して、排外主義運動の指導者の1人である瀬戸弘幸氏は、運動が立ちあがる以前から「外国人問題」を取り上げていた（瀬戸 2000）。その後、瀬戸氏らは「行動する保守」として排外主義を機軸に据えた街宣活動を展開し、それが在日特権を許さない市民の会（在特会）のような若年層主体の運動団体を生み出すに至っている。一般向きの情報発信に熱心でなかった旧来型の右翼と異なり、ブログや動画などインターネットを用いた情報拡散など、手法面でも大きな変化を遂げている。その結果、「行動界限」と揶揄的にいわれる排外主義運動は、全国に広がるようになっていく。

なぜこうした運動が広がりを見せたのか、これらの運動はどのような特徴を持つのか。これらを中心的な問いとして取り組む研究者は増加しているが（別稿で概観）、筆者は移民研究を専攻する者として別の問いを立てたい。すなわち、右翼は「外国人問題」に関心がなかったのに、なぜ「行動する保守」はそれを中心的な問題とするようになったのか。本稿を含む「行動する保守の論理」のシリーズは、在特会の会員だったり協力関係にあるが、主な帰属は在特会以外である活動家への聞き取りをまとめたものである。

### (2) 右派活動に関わるまで

《「外国人問題」への関心の根源》

ひとつには僕はそのチベット問題、これはシナの問題だからね。中華人民共和国の問題だから。その中華人民共和国、シナの問題に関心を持ったって言うのは。僕がちょうど高校生の時だからね。文化大革命ね。常に新聞のトップを飾る出来事だった。そのあとをついでフランスの学生の革命があった。ちょうどそれで僕より3つ上の兄貴達がいたんでね——彼たちは東京の大学に行っている——夏休み冬休み友達なんか連れてきて、いろいろディスカッションして、それを僕は中学校のときから高校のときまでずっと耳にしている。他の人と比べると基本的な情報量ってのはしっかり整ってた。やっぱり毛沢東、中国共産党、それがありましたね。

それで僕が東京に出てきたのが昭和44年かな。そのときちょうど東京で兄貴達がそのまあ、全共闘の運動とかやって、第二次羽田闘争とかあったかな。あと三里塚なんかもあってね。その中でまあいわゆる社会運動っていうものに目覚めていくよね。それがブームだったから。その頃まではまだね、特段外国の問題たって僕はほとんど知らなかった。僕がチベット問題に関わるようになったっていうのは、ひとつには全共闘とか学生運動、さらに右のほうからも若干そういう風に参加してたんだけど。

要するに学生っていう身分そのものが、社会にやっぱり基盤を持っていない。一時的な鬱憤晴らしで。さらにはたとえば家庭なり結婚なんかしていて、自分の生活に責任持ってないから、やっぱり運動そのものに対する責任性がない。だからやっぱり社会から反感買うような運動に突っ走っていった。学生運動が分裂していきましたよね。革労協、中核派、核マルとね。ああいうものに対してこれはもうだめだという感じで。僕は23、4（歳）の時だね。僕は大学は2年で中退しているから。それはやっぱりそういう問題も絡めてね。

僕は自分で職を持ったほうがいいと資格とって、ずっと今に至るように飯食ってきた。その中で23、4（歳）かそこらでもって僕はもうはっきりいって、いわゆる挫折だよ。民間会社にずっと勤めて、それが32、3（歳）くらいまでだね。それでやっぱり運動に——左翼運動よりもどちらかといったら保守系の運動のほうを客観的にみるようになった。

### （3）反中国活動

その過程でチベット運動にふれると同時に、ちょうどあの第二次天安門前事件があった。天安門広場で虐殺された。それで一気に僕は外国問題、特にチベット問題だ。

それまで比較的日本の国ってのは安定していたんだよね。82年まではね。82年に第一次教科書問題があった。教科書誤報、進出が。あれでもってシナの問題が強烈に意識にでた。完璧にこれは、国民教育に対する内政干渉で、それに自民党政府が屈していくっていう。それに絡めてチベット問題も一気に。しかもおしゃべりじゃなくて表でやるっていう。なぜかという、日本の保守は表で全然運動できないから。

（この時点では、在日中国人を標的とした活動は）やらない、シナ人たちは。シナ人って非常に慎重な民族でね、簡単に乗ってこない。なぜ僕がこの問題をやるかっていうと、あの時代はチベットががんばったんですよ、やったんですよ。ダライラマでも独立掲げてね。だから我々もそれを支援すると。ダライラマがね、ノーベル平和賞をもらってからガラッと変わってしまったわけですから。独立を認めないわけですよ、もう。シナの連邦共和国でいくってわけですから、話にならない。ガンジー首相だって非暴力は伝えけどね、独立を放棄するところまでやらなかったわけですから。それでこういうことですよ。常にデモとか何かやるたびに、必ずチベット国旗を日本の国旗と一緒にたててやっているわけですよ。これは日本の国旗をモチーフにしている、日の丸を。だから常に日章旗と一緒にね、僕らはこれを掲げてた。

ところがね、ダライラマがノーベル平和賞をもらうまでは、日本にいるチベット人はものすごい貧しかった。チベット人というのは、高地民族で色が黒くて着るものはいつも地味。はっきりいってなんというのかな、浮浪者みたいな感じがしないでもないわけよ。しかも非常に中途半端でしょ、流浪の民なわけだから。だからほとんど相手にしてくれなかった、誰も。

ところがこの方たちが、ダライラマがノーベル賞をもらってから、ダライラマ法皇日本代表部から完全に距離をおかれちゃった。それまでは朝日新聞だろうが毎日新聞だろうが、ダライラマ相手にしてなかった。それがダライラマがノーベル平和賞を取ったとたん手のひら変えた。世界的なステータスだから。ダライラマが日本に来るとなったらとにかくゴマすって、代表部に頼んでどうのこうのね。それまでは今まで話ししてくれなかった偉い人が来るとか、入ったことがないようなホテルとかね、食べたことがないようなレストランでもの

を食べれた。そうすると人間は変わる。しまいには国旗持ってきたらダメだと、あれ持って来られたら右翼だと。そういうことがあって、はっきりいって5年前に、完璧に僕らはもうチベット運動から手を引いたんだよ。

そのときなぜやめたかっていうと、はっきりいって日本の国がダメなわけだから。日本の国が。たとえば、自分の家が火事になっているわけですから、そうしたら台湾とかウイグル、チベットなんかの消火作業やっているヒマないでしょ。

僕は台湾問題でも昔からずっとやってきた。最初のほうから。台湾研究フォーラムを立ち上げるとかね、今から15、6年くらい前からかな。台湾の二重国籍の問題でデモだとか。ただ、何でやらなくなったかという要するに、チベット人にしても台湾人にしてもウイグルにしても、彼らは日本人のことは利用するんですよ。日本人バカだから人がいいから。彼ら日本のこと絶対にやらないから。そして今言いったようにね、自分の家が火事になってね、2階から子どもがお父さん助けてくださいというのに、隣の消火作業をやるのは偽善ですよ。だからはっきりいって、今僕はウイグルだとか台湾問題でね、やっているやつは偽善だと思っている。だって日本のことやらないでしょ。あんた日本人なんだからさ、いや台湾人とかチベット人だったらこれやらなきゃね。僕は台湾人チベット人が日本人の善意を使ってね、シナのこと一生懸命やるとなったら当たり前のことでしょう。それに対して僕らは日本のこともやるって、これもおかしい話だと思う。それが当たり前なんですよ。

問題は、当たり前じゃないのは自分の家が火事になっているのにね、人の家の消火作業やって私素晴らしいでしょ、たくさんやっているでしょ、って。で、チベット人とかウイグル人とか台湾人からお礼言われて喜んじゃってる。愚かだって。

(火事というのは)日本で尖閣諸島の問題、地震の問題、南京大虐殺の問題もあったし、慰安婦強制連行の問題もあったし。外国人参政権の問題もありました。簡易国籍法が成立した時もそうだったし。まだまだまだいっぱいある。シーシェパードのときだってそうだし。

(そういう問題は以前からあったでは)そういうことですよ。なぜかという、何だって隣のうちを自分のものにする時にいきなり台所まで突っ込んでここは俺の家だといって飯食ったりしないよ。少しずつ様子みてくんですよ。ずっとそうでしょ、シナのやり方は。だから石橋をたたいて渡っていると言っているんですよ。少しずつ少しずつやってくんですよ。一気に何かやらない。それは愚かですよ。やらないですよ、シナ人は賢い人間だから。今まではくすんでたけどね、火が燃えているんですよ。僕はもう終わっちゃったと思っている。だから僕は淡々としている。だいが声に元気も出なくなったな。

#### (4) 既成右翼運動について

いわゆる左翼に比べて右のほうは運動の理論とか思想がないんですよ。要するにはっきりいって自民党っていう——自民党は保守なわけですから、その保守の傘の下でそこそこにしてれば食わしていけるわけですから。たとえば教科書問題とかあったとか何とかいったってね、それでもって具体的に我々は生活に困ることないから。少なくとも左翼のピンからキリまでいるけどね、とにかく自民党政権を打倒すると、引きずり倒すというところで非常にしっかりしているわけですから。まあ、中には社会党のみたいね、そういっただべつくした部分もありますけどね。少なくともあと右の人たちと比べて、社会改革の本なんかもしっかり読んで、そこそこ理解してそれを実践しているわけですからね。

右の方たちなんか天皇陛下万歳、皇統 2600 年、もうこれでおしまいですから。あと何もないわけだから。彼らはよく国体を守れ、国体を守れというけどね、その国体っていうのよくわからないな。天皇を守れっていうのかどうかわからないし。明確な体系だった理論ってものがまったくないんだよね。何が保守なのか。

そうすると少なくとも左翼運動の人たちは、マルクス主義だったらマルクス主義っていうそういうひとつの系統だった本みたいなのがありますからね。そういう理念を持って運動に参加するのと、ただ抽象的に国体を守れ守れじゃ、やっぱり長い時間かけてきたら勝負つくだろうな。

彼らははっきりいって、大正のときからやってきたわけですよ。日本共産党なんか徹底的に弾圧されたなかでやってきたわけですしね。そういう運動ってのはないじゃない、右の方たちは。弾圧されてね、敵権力と戦うなんてやってないし。彼らは闘いの中でノウハウなり理論なりを蓄積してきたわけですから。そういうのがある人とない右の人では勝負にならない。

今盛んにやっているネット右翼といわれる連中見れば一番わかる。空っぽだもの、何にもないんだから。それひとつとってもね、右の方たちはまったく気力とかないなと思うよ。

#### 《北方領土や反共について》

まああれはあれでやっていいんじゃないんですか。だったら尚更ね、そういう皆さんがたね、天皇大事だとかなんかいったら、5、6 年前に『週刊金曜日』が悠仁親王の首をちょんぎっている作家のなんかあった事件知らない？ あの時じゃあなんで右翼が仕掛けて徹底的にやらないのかって。まあちょっと言ったことはあったけどね。あと保守がなぜやらないか。悠仁親王が生まれた時あれでしょ、男が絶えないって神風吹いたって保守が喜んだ。保守がね、神風が吹いて生まれた悠仁親王がああいう風にされたとき、誰ひとり行かないじゃないですか。一体これはなんですかってこと。まあ僕はすぐそばだから行ってやってきたけど。副編集長が謝罪してきた。右翼やらないじゃん、ほとんど。例えば南京大虐殺の問題だって、シーシェパードだって『ザ・コーヴ』だって、全然やらないじゃない。

(反ソと反日教組について) あれはスケジュール闘争だろう。あれは決まっているものなんだからさ。他の事やらないのよ。年に 1 回どんなことがあったって雨が吹こうが風が吹こうが、これだけはやるって、日教組と北方四島の問題。それはそれで構わないけどね、それしかないじゃない。相撲取りじゃないけどさ、一年を何場所で暮らすいい男じゃないけどさ。ね、一年を日教組と北方領土で暮らすいい右翼じゃ……。ただこっちには体張って行政に乗り込んでやるわけですから。僕は何もバックアップ何もないですよ。

#### (5) 行動する運動へ

##### 《行動する運動の前史》

(街頭に出るようになったのは) せいぜい 12、3 年前から。コレ(ヤクザ) じゃないから。あと他(の人たちは) はわからん。それと僕は彼らと違ったところをやらないと。本来はあいつらたちが凄み利かせれば震え上がるわけよ。やらないもの。俺達は堅気だから、そんな凄み利かせて脅しかけるようなことはできないけど、逆にこっちの方がもっと脅しかけてくるんだけどなあ。行政とか行ってさ、締め上げて帰ってくるんだけどさ。本来はあの

人たちがみっちりやってくれればね、僕らは細々と資金援助（するだけ）でね、家庭生活営めますよ。あの人たちがやらないから、僕が過激にやるようになったんであって。だから、絶滅を免れた日本人を1人でも2人でも集めて、それを後世にいかに残していくか。それもね、50年100年のスパンでもしか日本を変えることができるかもしれないけど、当面はまったく望みないね。

（チベットの運動時代には）街頭ではなくてシナ大使館とかそういうところに押しかけてとか、そういうことしていた。僕は、具体的に街頭に立ってやるようになったのは、今から10年前の女性国際戦犯法廷があったのよ。そのときからね。具体的に僕が表に出てやるようになったのは。街頭でマイク握ってやるようになったのは。誰も反応しないから。日本人がね、大陸で慰安婦強制連行やったってわけだから。片っ端から女を捕まえて強姦してね、満州に売春婦を送り込んだ、こんな出鱈目なことをね、世界的な会議でもって決めていくっていう、もう堪えられないってことですよ。

そのとき、この問題のときは日本の右翼と保守が動くだろうと思ったけど、まったく動かなかったのよ。（女性国際戦犯法廷を）やった場所はあの九段会館でしょ。九段会館といったら軍人関係でね、日本遺族会でしょ。そこに日本会議とか英霊にこたえる会が事務所構えてやっているときにね、中止させて下さいと、キャンセルさせて下さいとじゃなくやらせるんだから、あの方達は。だから英霊にこたえる会や日本会議が一番とにかく無視して嫌がっていたのは、あのかことを取り上げられると自分達は立つ瀬がないから。じゃあなんてあなた方やらなかったのか。あなた方（会場を）貸しちゃったんでしょ、極左に。返す言葉ないでしょ。

（右翼の政治的な動きは）やってないでしょ、ほとんど。そりゃ雑誌1ヶ月に1回は出して、その程度はやるんだろけどさ、何にもやらないですよ。だってあれでしょ、あのNHKで5、6年前か安倍晋三と中川昭一がNHKの番組に干渉して放送中止させたっていう、あの時僕らは、日本会議を通して中川昭一と安倍に放送中止させてくれって申し込んだんだから。一切無視だったよ。そういうことですよ。やってくんなかった。だってNHKの予算っていうのは我々の税金で賄っているわけだからね。国会で承認されるわけだからね。

あれはね、性奴隷制度なんですよ。日本軍の性奴隷制度が正式な名前なんですよ。天皇制を構成する一構成部分とまでやられたわけですよ。本来だったらNHKで放送すると、中止させて当たり前なわけですよ。ところがあれが問題になった時には、2人は「自分は干渉しなかった、知らなかった、何もしなかった」。嘘っぱちですよ。そんなんならやめさせなきゃならない。じゃあ日本会議も何やったか。あのとき何もやらなかったでしょ。そのとき僕らは、やってたわけだから。（彼らは）わかっててやらなかった。だから何もやってなかったってこと。その後問題がどうかなったときには、「慰安婦強制連行、あれは嘘だ」。それは言うだろう、まさか朝日新聞と同じじゃ。あつたって言いやしない。問題はあの時あなたがた何やったんですかって。

（この時の動員は）せいぜい14、5人。それで今またその状況にまた戻った。ていうことはね、日本人の場合はいくらネットが普及したとか何とかいったからって、人間の情念を爆発させるってところにはいかないのよ。たとえば中東とかなんかで、いろいろネット革命とかいっているけどならないんだから。デモやったって暴動にならないんだから。僕は残念ながら100人くらいしか集まらない。デモ。これが500人、1000人集まったらいくらでもでき



ますよ。警察はできないでしょ、規制できないよ。たとえば行政とかなんかに抗議行くとなんかしたときにね、大体 20 人から 30 人くらいいると結構いろいろできるんですよ。なぜかっていうと、1 人の人間を排除しようとするれば警察官何人いますか？ 3 人いますよ。単純にいったら 50 人いたら 150 人以上いないとダメなんですよ。1000 人 2000 人 3000 人集まったら何だってできるんですよ。圧力加えられるんですよ。ところができないもの。人集まらないから、来ないから、呼んだって来ないし。だから行政とか何かと交渉する時もね、人数の割合に応じていくらでもできる。警察だって簡単にできるね、大体わかるから。僕のこと警察は。

ただ、みんなついてくると思ったけど、全然ついてこないから。特に保守が。今僕のところに来てやっている人たちは、まったくそういう保守運動とか右の運動に関わってきていないまったく新しい人たちだから。もっとも皆世代的にそうだね。30 代でしょ。年取っても 40 代。大体 30 代とか 20 代だもの。なまじっかああいう運動に関わってこなかったほうがいいんだな。

#### 《語る運動から行動する運動へ》

だから 5 年前にね、僕はこういうスローガンを出したんですよ。「語る運動から行動する運動」。それが 5 年前ね。それまでは右の方たちも焦燥感を持っているわけよ。河野談話とか村山談話が出る。南京大虐殺が教科書に載る。靖国神社に首相が参拝できない。そういうものは決していいと思っていない。だが行動できないわけですよ、この方達は。結局、夜中に講演会やっておしゃべりやって酒飲んで相手の悪口言って、それで国士をぶるわけですよ。たとえば河野談話にしたってね、村山談話にしたって、あの時なんか大々的なね、それこそ安保を髣髴するところまでいかなくてもいいですよ。それらしきことあったかといったら、全くないわけですよ。なんか 1000 人か 2000 人集まってデモあったことがありましたね、一度ね。

だけど安保みたいだね、社会に騒乱を、社会に混乱を招くくらいのそういう運動なんかできないですから。はっきりいって弱いんですよ。左に比べたら右の人たちは。へタレなのよ。そのへタレを自覚できていない。酒飲んでああやって、ブーブーあいつらの悪口言って悦に入るのが運動になっちゃっているわけですから。それに対して僕は、語る運動から行動する運動ってのを提唱したのよ。それがいつの間にか行動する保守っていつているけど、全然そうじゃない。

アクション、行動を起こしながら発信しながらやらなければ、僕がやっている運動をアピールできないでしょ。だから例えば、1000 人の人の目に触れてね、それで 1 人か 2 人でも賛同して運動に参加してくれれば上出来だと思っている。でもそれは運動しなければ発信はできないわけですから。これがこの先どうなるか僕にもわからない。でも僕は無抵抗主義じゃないから。僕の世代にこういう言葉がありましたよ。力及ばずして倒れるは辞さないが、力尽くさずして倒れるを拒否する。まあそんなもんだよね。そのためには無駄なことはやりたくない。非常に限られたコストでいかに大きな効果を与えるかっていう、その効果をね、日本人が我が物として受け取るかといったらほとんどもう期待はしていないよね。

(運動が広がるという見通しは) あった。今まで日本人は知らないから。情報が不足している。マスコミに一方的にやられているから、わかれば来るんだと思ってたのよ、こっち

も。だけどネットでね、腐るほどわかるわけよ。今から 10 年前に比べたら情報なんか 10 倍じゃない、何百倍ですよ。だけど日本人は動かない。そうすると、今まで日本会議なんか学習会とか勉強会やって「日本人知らないんだと、知ればわかる」。あんなのみんな嘘っぱちだって。そうして自分が思っていた主観的な願望は、木っ端微塵に打ち砕かれましたから。

#### 《運動文化の改革》

僕が 5 年前に行動する運動を——語るから行動する運動を立ち上げた時の目的は 2 つあった。この 2 つの目的は僕は達した。1 つはデモ行進できるってこと。デモ行進できなかったんだから、びびっちゃって。さらには日の丸を持って街頭での辻立ち演説ができること。これ誰でもできるでしょ。昔できなかったんだから、5 年前までびびっちゃって。日の丸持っていれば右翼だって。今どうですか、何もなくなった。僕はこの 2 つは完全にやったから。日の丸持ち込ませたので何とか言ってきたのは朝日新聞系ですよ。僕ら排除するために。日の丸持ってい立てなかったんだから、こっち（右翼）の人間は。右翼が汚い日の丸を掲げてさ、檻みたいな車の中に入ってさ、豚小屋みたいな車の中で日の丸掲げて走ってただけで、自分達の生身の体で街頭でやるかって、できなかったんだから。連中は。人を威圧するような戦闘服を着て出るとか、普通のこれ（服）でできなかったんだから、あの連中。

だから今僕がね、ここでもって日の丸持ってい神田神保町で、「皆さん今回の地震はどうですか。反原発しようとか脱原発って、いかに危険なコストを伴う原子力発電を見直すって形でいかなきゃならないんじゃないか」。エネルギー転換施策って、僕のこと右翼って言いますか？ 言わないでしょ、日の丸持ったって。そういう保守に対して意識革命を成し遂げた。

（日の丸を持つ意味）日本人としての自覚を持てってこと。我々は本当に空から降ってきて生きているわけじゃない。連綿として先祖の血を引いて人格が形成されて今に至っているわけだし。この日本列島そのものが突然できあがったものではない。先人が労苦を積み重ねて今の日本列島ってあるわけだから。これに我々感謝すると同時に、感謝した場合、後世に託していかなきゃいけない。これが民族精神だと。日本を愛するってことはそういうことですよ。その観点に外国人も立つことができたなら、立派な大和民族じゃないですかと僕は思うわけですよ。

#### 《運動の成果》

僕は今まで具体的な仕事として成し遂げたものは、NHK の女性国際戦犯法廷ってありましたね、あれは NHK が放送を拒否した、放送が中止になった、あれに深く関わってやりましたし。あとは小学館で本宮ひろしの『国が燃える』が掲載中止、あれもやった。あとはどうかな、いくつかあったな。あとは南京大虐殺の映画の上映中止とかね、そういうのもいろいろやりました。非常に少ないコストで、ああいう大きな仕事をしてきたし。

最近でいえばね、『ザ・コーヴ』ってあったよね。あの『ザ・コーヴ』、本当はせいぜい 20 人かそのくらいですよ、だけどそれがね、日本人が闘っているという形で海外のメディアに報道されたんですよ。なぜ僕らがそれをやったかっていったら、肝心の漁民がやらないのよ。太地町の漁民が、水産業者が。だから僕らがやった。発信してやった。日本人はこうやって怒り狂ってんだと。シーシェパードの裁判所の前でも徹底的に街宣やってね。これをみんな取り上げてくれたけど、じゃあ私たちの運動の輪に参加しますか？ これはネットで大変

問題になったよ。だけど結局 20 人しか集まらないもの。

それでもってね、今僕はザ・アンプラグドという『ザ・コーヴ』の上映会社から裁判で訴えられているよね。じゃあ誰が支援してくれますかといったら、誰も支援してくれないですよ。せいぜい 10 人くらいですよ。10 人も来たり来なかったり。ということは、日本人はもう動かないのよ。保守が動かないというよりも、日本人が動かないのよ。

デモって何なのかっていったら、社会騒乱なんです。社会の騒乱。お花見じゃない、ピクニックじゃないんですよ。交通マヒして、焼き討ちとか暴動とかね、社会にインパクトを与えるんですよ。あんなデモ、100 万や 200 万集まったって何も社会に影響与えないですから、日本の場合は。僕はそんなのは本来のデモじゃないと思ってる。だって日本だってあったんですよ、70 年代までは。学生がデモやったら必ず警察とかね、社会にインパクトを与えたんだ、いい悪いは別にして。そういう人間じゃなくなったのよ。

(争点について) まあ、Youtube とか探せばいろいろ出てるだろうけど。だって 3 日に 1 回やってきたんだから。3 日に 1 回とにかく我々の運動をこういう風にしてアピールすることによって、意識のある人を結集するんだって。だけど意識がある人いなかったんだ。意識があつたって動かない。もうこれは証明されたわけだから。3 年間 4 年間やってみて証明されたわけですから。そうすると、5 年前に立ち上げた語る運動から行動する運動、この趣旨タイトルを変えなきゃなんないだ。でしょ？ 行動すれば皆ついてくると思ったわけ。行動したってついてこないわけだから。そうすると行動する運動から変えなきゃならない。

今ちょうどいい時期だ。こういう震災があつて僕は動かない主義にしているから。よっぼどのことがあつたら行きますよ。この間の検察庁のね、被疑者を皆釈放したとか、あのときは僕は行ってやりますけど。それ以外のことは。あと東電に菅直人が怒鳴り込んでいったときには、断固としてやると。ああいうときはやりますけど、今はなるだけ…戦争中だから。行政が主体となつてこの処理に当たっている時に、なるだけコストの負担をかけないと。ちょうど僕の考える時でもあるし。昔読んで読みたいと思った本を読み返すこともできますし、ちょうどいいんだ。

### 《運動のビジョン》

ただ、あえて僕に何でやりますかっていわれたら、僕は党を作っているわけではないから、綱領とかも作っているわけじゃないから。強いて言えば、僕がやっていることは、僕は日本人という絶滅を免れた希少種として自分を思っている。僕の発言とかに賛同して運動に参加してくれる人たちは、絶滅を免れた希少品種、軍隊でいったら日本は完璧に殲滅した。そのなかでかろうじて生きながらえているゲリラ。ゲリラの使命は何か、生き永らえることですよ。存在していくことがゲリラのゲリラたるゆえんであつて、今は僕はこれしかない。どういう理念でもって闘っているんですかといわれたら、これですよ。だから僕はネット右翼みたいにこれが面白い、あれがよさそうだな、これをやれば皆さんアクセスするなんて、そういう面白おかしい鬱憤晴らし、欲求不満のストレス発散でやっているわけではない。そこは僕は全然違いますから。

だから、たとえばパチンコ反対やるにしても何にしても、いったんその問題に取り組んだ以上は、それに対してきちっとした責任を持った運動として関わっていくし、それがなかったら僕は関わらない。明確なビジョンを持っていますかといったら、せいぜいそれしかないね。

そして私がどういう明確なものを持ってますかと聞かれた場合、僕は議会制民主主義ってのは否定はしていない。少なくとも議会制民主主義がしていくわけだけどそれだけじゃ不十分。民主主義は何かって。民主主義は数ある政治制度の一つであって、それは絶対的なものじゃないから。非常に世相が安定しててね、波風立たないところでは民主主義つまり多数決でしょ。民主主義とは僕は、51%が49%に対する独裁支配だと思ってる。そうすると、民主主義とは国民主権でしょ。1人が一つの権力を持つ、一票っていう権力を持つわけですから。その国民主権なり議会制民主主義を支えるとしたら、非常に有権者の知的レベルが保障されてなきゃ運用できないものだと思う。

政治運動っていったら共産党の党組織ってものを使って細胞を作っていくと、そういうところまでしないと政治運動にはならないよね。やるんならそこまででしょ。これができるものかどうかわからないけどね、本当に変革して生き残っていかうとするなら、それくらいやっていかなきゃだめだろ。

だから、日本共産党に過去の党活動をきちっと総括してもらえば非常に僕らも役立つわけよ。結局、失敗したわけでしょ、彼らは。あれだけすごい犠牲を払ってやったわけでしょ。だが結局成就できなくて、社会党の腐ったような連中が今国家権力を握ったわけですから。あれだけ高邁な思想を掲げてね、どれだけ頑張ったかって、日本共産党は。だからそれをきちっと総括すれば僕の勉強になるわけよ。なぜ日本共産党はできなかったんだって。総括してないでしょ。敵が強かったとか、弾圧されたとか、その程度。それは除名された人が書いていたりしているけど、あくまでそれは悪口とかであって、思想的にきちっと総括したそういうものがまだ出てないんでね。本当それできちっとしたもの出してくれたら、今度は僕らのこれからの運動の教科書になるんですよ。

僕の場合は、比較的なるだけ活動家っていう核を育てたいね。文章書ける、話ができる、それが活動家なんですよ。例えば行政に抗議文を書くとか、その場合、こういう人間の集団としていこうとした場合、数に頼ることはできない。そのためにはかなり地道な思想運動をやらなきゃ。課題図書とか何かを持ってね。でないと思想というのはつかない。そうしたらね、デモやって人がたくさん集まったからって、そんなのは…だから僕はシフト転換したんだ。僕の場合は、政治運動をやるのならそれを支える思想ってのがないとダメ。その思想がね、高いそういう運動のほうにいつまで続けるかはわからないけど、これはちょうどこの震災を境にして続けようとしているってことですよ。

運動は一時的な鬱憤晴らし、憂さ晴らし、面白おかしいでは続かない。僕はこういう風にして運動やってきているけどね、保守の最大の右のほうの欠点は続かないってこと。早くて1年でしょ、だいたい3年、5年続くかって。まあ5年続けばいいにしても悪いにしても何か残るんですよ。5年続いてやっている人、ほとんどいないでしょ。なぜそうなのか。それは思想がないからなんですよ。「パチンコでぼろもうけしやがって、鬱陶しい奴らだ」って。でも人間の感情ってのは一時でしょ。感情だから。その人の社会生活の環境とか条件によって感情なんかいくらでも変わるわけだから。良かったり悪かったりね。

## (6) 東アジアという磁場

《中国について》

今、アメリカとシナが必ず関わってくるんですよ。これは今まで想像つかない事態でしょ。

この間、長野聖火リレーでちゃんと証明してくれたじゃない。あれ皆学生だよ。統率していたのは人民解放軍だけどね、あれは素人にはできない。日本のいろいろなイベント団体だって、4000 人の人間をね、ぱっと一晩のうちに集めてぱっとその日のうちに撤収させるってできませんよ。すでにシナ人を使って一つの都市を制圧したわけですよ。長野聖火リレーは、僕はそういう風にしてみているんですよ。そういう捉え方は、国家としてできていないでしょ。ただシナ人が集まって騒いだけだ。

たとえばね、日本にいるシナ人たちが組織を作って中華街構想を立てるなんてことは、本国の意向と無関係ではないわけだから。その意向を体現したっていう人に対してはね、今後政府の意向だとして僕はやりますよ。それと僕が付き合っているシナ人がどうこうというのとは全然違いますよ。もっといえばね、今そうじゃないけどね、かつて日本人は金持ちだ金持ちだ、確かに日本人っていうアバウトな概念だったら日本人は金持ちだ。じゃあ僕が金持ちかって言ったらそうじゃない。同じですよ。シナ人は侵略主義だとかシナ人はうそつきだといってもね、僕が個別に付き合っている〇〇さんがウソつくかっていったら、全然違う次元の問題だから。

ネットはね、僕否定はしていない。使っていますから。ただ諸外国みたいなああいう形にはならない。だってコンピューターの数値で社会を変革するわけじゃないですから。生きている人間を動かすわけですからね。それはチュニジアだとかエジプトみたいにああいう風にはいけませんよ。東日本大地震で暴動が起きないわけですよ。長野聖火リレーのとき、あれだけやられたってね、みんな黙ってみているわけ、日本人は。普通そういうとき内戦でしょ、あれ。何もないわけですから。

(長野の五輪が運動に及ぼした影響は) あった。大きくあったな。だって、世界的に注目される出来事だったんだから。それにこっちが乗り込んでいったわけですよ。100 人。たった 100 人の日本の右翼のために、折角の歓迎ムードも台無しにされたって、ちゃんと評価してもらったからな、人民日報から。勲章ですよこれ。まあでもよく調べてるね、100 人というのは。東京から大体 50 人、60 人くらいね。あとは地方とか何とかから 40 人くらい。それをちゃんと。それは世界最高の情報網を備えていますから。

#### 《在日について》

シナに比べたら朝鮮の問題は高が知れてる。圧倒的です、シナの力は。あと民族性も違いますよ。朝鮮人はやりやすいですよ。だって裏表がないもの。あの人たちは。怒る時は怒るし、笑う時は笑うし。シナ人はわからない。一人ひとりもそうだし、全体として。

パワーにおいても (圧倒的な差がある)。在日中国人の場合は、本国の意向を受けているわけですから、かなり強烈に。そこなんです。確かに民団もかなりそれはあるけどね、あんな中国共産党みたいなもんじゃないから。民団とか朝鮮総連というのは、はっきりいって目に見える形であるわけ。それは実際そうですよ。シナ人の場合ね、だけど 2 年前の長野オリンピックの時は何だったんですか。組織も何もなかったってね、あれだけのことをね、民団だっとなかなかできないと思いますよ。だってデモやるだけでさ、よたよたやっているわけですが、整然としているわけですよ。いつの間にかぱっとみんな集まってね、さっといなくなるんですよ。だからシナ人の場合は何か団体がないとかそういうレベルじゃないと思うんだよね、僕は。恐ろしさを感じますよ。

(だから)僕は、その主題(在日コリアンに関わるトピック)を取り上げて僕自身がやるって運動はしなかった。彼ら(他の「行動する保守」団体)がデモとか何かやるときには僕も参加するとか何かしていたけど。それとか彼らが税制の——たとえば民団のいろいろな施設の減免措置とかやっている、そういう具体的な問題に対しては特権だよ、として僕は〇〇市でもやりましたし。あとは具体的にいえば、中華街構想なんかはやりましたよ、やっぱりね。あと朝鮮学校の公園の勤進橋の公園、あれもやりましたよ。おかしいじゃないかって。

拉致問題とか何とかやってるけど、それは終わっちゃったから。あれは日本政府がやめたしね。肝心の被害者家族会がやらないから。横田めぐみさんがね、首相官邸と国会の前で座り込みやればいいんだよ。やらないから、絶対。そうすると終わったんですよ。僕は信じられない。自分の子どもでしょ。自分の子ども拉致されているっていうのにさ、日本の国が国家としてやらないのに何で黙っているんですか。それで国から活動資金もらって、話にならない。だからこれも愛想つかしてやめた。拉致問題も、僕は一番最初からやっているから。今から10年くらい前。一番には学士会館で旗揚げしたんですよ。第一回目の街頭での署名活動なんか全部やっていた。会ができる前から。横田めぐみさんの蓮池君のね。(ミサイル発射時)も抗議なんかはやってましたね。朝鮮総連のところで。

#### 《外国人参政権について》

(外国人参政権の)問題ねえ。いくつもあるけどな……。あれは主に在日朝鮮人の人たちでしょう。この在日朝鮮人の韓国の連中と、それとあと創価学会の問題ね。これが非常にやっぱり密接なつながりがあるっていう。それは僕も情報としては知っているけど、情報をね、確固たる根拠に基づいて資料をそろえたってわけじゃないけど、ただ新聞のニュースとかなんかを見るとね、公明党の議員とか自民党の国会議員と密着したつながりがあるってなかで、こういう法案ができてきている事態に対しては、非常に由々しきという、それが一番大きいよね。

(95年の最高裁判決のときには)まったくしてないね。というのはね、僕の基本的な問題はシナ問題だから。あと他の問題だってやるわけですよ。靖国問題とかもやってるしね。もう何から何までできないんでね。僕が主導的にもってやるって、そこまで関わってない。この問題に対しては。

国籍の取得の前に、外国人参政権はたいした問題じゃないと思う。なぜかというとな3年前に国籍簡易取得制度ってのができたでしょ。あれに比べたら、外国人参政権はどうってことないじゃない。だっていくら外国人参政権たって投票権だけでしょ。高が知れてるじゃない。彼ら、あれ(国籍取得)でもって自衛隊にもなれるしね、警察官からなにからなにまでみんななれるんだよ。外国人参政権が大変だ大変って、簡易国籍法案が成立した後に騒いだって愚かだ、バカだよ。全然やる気もない。僕らは。

今さら外国人参政権が通ったって関係ない。やるんだったら国籍法案ですよ。国籍法案撤廃ですよ。日本の国籍ね、どれだけ高いもんかって、僕は海外に行ったことはないけどね、菊の紋を持っていけばフリーパスくらいのことができるわけですよ。そんな簡単にね、10年20年でとれるもんじゃないですよ。そういう風に厳しくするってことが一番危険な問題であってね。外国人参政権なんか……。僕もやってたけどさ、国籍法案ができてからやる気ない。もう終わっちゃった。国籍法案が2年前に可決するまでは、やってみました。

(では問題はないのか) いや、それはありますけどね、その国籍法案の前にはみんなぶっ飛んじゃう。どうしても受け付けられないですよ。国籍持てば参政権もてるんだから。屋上屋を重ねてというかさ。

## (7) 日本とは

### 《支配構造》

僕は、巨大な日本の政治は自民党を中心とした利権分配集団がね、日本の国を支配していると思っている。それは左翼の方たちは以前は、米日独占資本とそれに対する日米安保条約という軍事同盟がね、日本国民を弾圧して収奪していると。僕はそうじゃない。基本的にはまだ日米安保条約という軍事同盟でね、僕らなんかのときだったらやられるだろうと思うけど、基本的には自民党を中心とした利権分配集団が戦後の日本を支配してきている。

ですから、民主党と自民党は私(にとって)は兄弟です。利権分配集団っていう本家が自民党であってね、民主党はその分家ですよ。今その分家が本家をのっとったんですよ。その傘下にね、いる民社党とか小さな党がいっぱいあるわけであって。それが明確に僕がそういう風に規定したっていうのは、あの小選挙区制が実施されて、政党助成金が交付されるようになった。で、細かい数字はわかりませんが、年にだいたい金額に換算すると3億円くらいの供与を受けているわけですよ、国会議員は。特に新聞図書費が1ヶ月に100万円もらっているって。今まで日本でですね、こういう階級ってのは存在しなかったんですよ。日本の国には、それが750-60人もいるわけですよ。新しい日本の支配階級が出現した、そういう風に僕は考えているけど。まずこの利権の構造を認識して、これを撤廃するところから始まらないと僕は日本の再生はないと思っているし。

### 《日本人の変質》

僕はだから保守でも何でもなし。僕ははっきりいって革命(指向)ですよ。革命ってのはマルクス=レーニンの古典的な暴力革命ってことじゃなくてね。それと並行してね、政治制度は革命っていろいろできるでしょう。だけど結局制度を運用するのは人間だから、この人間がね、平成の時代に入ってまったく変わったと思っているんですよ。目に見える形で日本人ががらっと変わったってのは、平成の時代に入ってからなんですよ。要するに学級崩壊ってなった、さらに服装の乱れ、自由化。服装の自由化。あの、とにかくもう服からパンツ出して見せて歩いたってどうってことない。しかもそういうのを学校が容認する。あと電車の中で飲み食いするだとかね、そういうのは、昭和の時代まではなかったんですよ。はっきりいってなかったんだ、これは。平気で学校だってね、子どもの・・・たってこれでもって問題起きることはなかったですよ。

平成の時代に入ってね、粗相して怒られた子の親が学校に乗りこんでね、教師に暴力をふるう、これは別に珍しいことではなくなった。電車の中でキスする。飲み食いしたって平気。学校の中で携帯電話したって教師が注意もできない。これだからもう崩壊してると。こういう主役を担っている人たちがね、一人ひとりの国民主権という権力を握ったらどうなるかっていう。だから物事はもう事物とか物事概念というのは、ある一定程度の条件でもって反対の側に転化する、これは哲学で対立面の統一っていうけどね、はっきりいって僕はわからないね。難しいと思う。日本を再生するっていうのは。

じゃあ、なぜそうなったか。侍がなくなっても、少なくともまだ侍って明治の時代の薫陶を受けた世代が残ってたんですよ。昭和の時代までは。昭和天皇が亡くなられたからではなくて、昭和っていう時代が明治の時代の薫陶を受けた昭和の時代がなくなったんだから、人間が変わったって。僕は今の日本っていうのは、日本人の顔をして日本語を操るけど、まったく今まで、僕らみたいな人間がイメージした人間とは違った人種が、この日本列島に生育していると、僕はそう思っているんだよ。それは、思想の右と左を問わずに日本列島を貫いている。

それとあと問題は、今まではどっちに転んでも何しようが、とにかく日本人の間だけで問題を処理できたんですよ。今そうじゃないでしょ。これだけ大量のシナ人が日本に来て、黙っていませんよ。あとそれと何ていったって日米安保条約ってあるから。何かの時にこれを発動するわけですよ。一番発動するのはその時のためなんじゃないですか。シナがね、尖閣諸島とか東シナ海の領有を侵したからといって、アメリカ軍は全然出動しないから。爆撃機が60年代に日本列島を横断した時、アメリカ全然スクランブルかけないでしょ。日本の自衛隊だってケツくっついて歩いているだけだし。威嚇射撃すらできなかったわけだから。

だけでも、我々が武装蜂起したらやるだろう。じゃないかな、やれるかな。日本の自衛隊はやれねえだろう。アメリカはやるだろう。なぜ日本の自衛隊はできない？ 法律がどうのこうのじゃなくて、この間の大震災みたらわかる。要するに、心のケアがなければ死体の収容できないってわけでしょ。今や心のケアが必要な時になってきちゃった。だって軍隊だよ。しかもね、自衛隊は缶詰と冷たい食事で救援活動に当たってる、何ですかこれって。当たり前の話じゃない。お前達そのために税金もらって訓練してきたんじゃないかって。これはね自衛隊の広報が出すんですよ。するとね、あなたがたこういってもらいたいんですか。被災者が冷たい食事をしながらね、暖かい食事を自衛隊の皆さんに食べてもらってますって。

だから日本はね、思想の右左とかなんかじゃなくてね、究極の偽善の国家を、偽善を歩んでいるんですよ。偽善なんですよ。右と左で死ぬか生きるかの繰り返そうがね、国家は滅びないですよ。明治維新のときもそうだったしね。やってやられて、でも国が滅びるとかならないですよ。

#### 《日本人とは》

じゃあこの日本人をどうやってみるか、そこから始まっていく。日本人は基本的には羊とかヤギっていう草食動物。それで日本列島は、ある意味じゃ家畜小屋みたいなもんですよ。それは正に極東の海の上にぽつんと離れたところにあって。

僕ら、今こういう勉強会やってるけどね、吉川弘文館から世界史地図って出たけど、あれでもって勉強会やってるんだよ。僕ら今ね、世界史の勉強会やってんですよ。〇〇先生が講師になってね。朝鮮海峡を隔てて、他の国は興亡の歴史を繰り返してきているわけですよ。王朝なんていうのは瞬く間に消えていくような、そういう世界の勉強しているわけですよ。そうすると、日本はどうかというと地図見ると日本の国だけはずっと変わらないでいるんだ、やっぱり。世界の特殊。何も日本人が強くてね、日本人が特段強くて優秀だからとかで今の時代まで残ってきているわけではないと思っている。それは非常に地政学があったから。圧倒的ですよ。今これだけグローバルになったといっても、日本海があるのは決定的で



す。東シナ海、日本海に囲まれているのは。

それでね、羊という草食動物がなぜ明治維新やって日清日露、大東亜戦争までやってダメだったけど戦えたかという、キーワードがあるんですよ。それは侍っていう獰猛な狼がいたんですよ。この日本列島には、少数の軍事においても特段の少数のエリート、侍がいたから草食動物をきちっと統御してきた。でなきゃ存在していないんですよ。その侍の階級ってのは、基本的には僕は、大東亜戦争でみんななくなったと思っている。その侍階級がいたから明治維新できたしね、日清日露闘えたし、大東亜戦争までつながらなかったけど…。

結局、国を運営するのはコンピューターの数値でも何でもなくて、人間ですから。そういう面で僕は——僕なんか今回のね、東日本の大震災をみててね、海外のメディアは暴動起きなかったとかさあ、なんか非常に統一的な行動して成人としてなんてほめてたけど、それは日本の保守が喜んでしょうがない。『産経新聞』あたりが。だって日本人はみんな素晴らしいって、だったら何で金庫泥棒とかこそ泥が頻発するんですかって。説明できない。特に保守がバカだ。弱い。メンタリティが非常に脆弱だ。

なぜ暴動しない。なぜ略奪しない。必要がないんですよ。なぜ必要ないかって。だって避難所に行けばね、風呂とかテレビもなければ、食事には困らないですよ。やる必要ないんですよ、何も民度が高いんじゃない。生きるってぎりぎりの選択の場面でのエネルギーの発散、情念の爆発がないのよ。弱いんですよ、羊だから。今までずっと家畜小屋で飼いならされてきて、平安時代から奈良時代から。光明皇后とかね、ああいった人が要するに救助米とかなんとかやって、秘殿院とか作ってね、やってきてるんですよ。江戸時代だってそうですよ。ずっとそういう風にされてきている。水戸黄門なんかそうでしょ。日本人、水戸黄門なんで好きか。結局自分が何もやらなくたって悪いやつ退治してくれれば面白いでしょうに。助さん格さん。日本人が主体になってね、革命やるってそういうのはないんですよ。

今度の震災のとき小学校とかさ、ああいうところに収容されている大人みるとよくわかりましょ。大のいい大人がね、食べるものがないとか毛布がねえとかいって泣くわけでしょ。大変な目にあったって。そういうの僕は信じられないね。家族のいる前で。泣くんだから。こういうとき日本人ってのは弱くてヤギなんですよ。羊なんですよ。ヤギ、羊を一番できてないのが保守なんですよ。右翼なんですよ。天皇は125代が、皇統2600年、これさえ知っていればあといいんですよ、っていうふうに僕は思う。

### 《愛国心》

あと、今日本人は絶滅したとなれば、日本の国を成功させるためには、日本列島に骨をうずめて日本人を愛して日本人として生きたいと、こういう人であれば外国人だって構わないと思うよ。ちょうどコウノトリをシナからもらってきて、ああいう形にせざるをえないんじゃない。日本人は弱いわけですから。それは何においてもそうですよ、学力においても気力においてもそうだし。

難しい問題…僕はだからそんなにこだわらないな。日本のために大和魂だって、ボクシングのフジタケシって知ってる？ 「大和魂！」って勝った時に叫ぶんだ、外国人だけど。シナ人、朝鮮人、腐った日本人よりはるかにいいじゃないですか。ちなみに僕の大和魂の概念は、国難を前に燃焼爆発する民族精神。これが大和魂。

(国難とは) 日本の国家主権、さらにその日本民族の誇り。主権ってのはつまりあれでし

よ、いろいろありますよ。領土の問題だって主権だし。教育の問題だって主権だし。あと今回も原発のね、第一原発の原子炉を鎮火する、これだって国難ですよ。特攻隊募って突っ込むくらいのことやらないと。さっき言ったようにね、暴動とか略奪と同じようにね、生きるか死ぬかの時に発散するエネルギー、人間の情念、それですよ。まあ日本の場合は大和魂って僕は言うけど、それぞれの民族に皆あるんでしょ。何も大和魂は日本人の問題ではない。そこは僕は排外じゃない。ただ大和の国に生まれているから僕たちは大和魂と呼んでいる。

オーストリア、ドイツとかあの辺の昔のヨーロッパの神聖ローマ帝国とかあそこまでいけば、ゲルマン魂になるわけでさ。ベルギーだとかスイスだとか、あの辺全部がそうなわけでしょ。元は皆同じなんだからさ、オーストリアとか。ゲルマン魂。我々は大和魂ですよ。民族精神ですよ。愛国心ですよ。同じですよ。その後に僕は常日頃いっているのは、大和魂は保守派の知識人が己の教養を飾るアクセサリーではないって。

#### (8) 小括

α氏の場合、教科書やチベット問題といった1980年代の反中国活動が、外国人排斥の背景にあった。それに加えて、河野・村山談話や女性国際戦犯法廷といった歴史修正主義も作用している。だが、朝鮮半島より中国の方が重要と語るように、α氏は在日コリアンよりも在日中国人を脅威として捉えている。現実には、脅威と呼ぶにはあまりに瑣末な北京五輪での長野聖火リレーを挙げ、中華街が本当に脅威ならば世界中が中国に侵略されているはずだという思考にも至らない。中国の台頭を背景にした中国脅威論と一見共鳴するようにみえるが、「中国」に比べて「中国人」の脅威をめぐるエピソードはあまりに現実味に乏しい。

しかし、そうした荒唐無稽といってもよい在日中国人脅威論が、一定程度受容され現実離れした中国人像が作られていくこと自体が、東アジアの特徴ともいえる。すなわち、この地域の地政学的状況が欧州とは異なる排外主義を生み出す土壌となるわけである。

## 27 中国が重要だというα氏・再

### (1) 生い立ちとイデオロギー

右というのをどう概念化するのかわからないけど、少なくとも1970年代はいわゆる日本の歴史を否定するとか、日本の過去の歴史が侵略の歴史だったとか、そういう考えはまったくなかったのよ。反体制だってね、日本の存在そのものとか日本人のメンタリティのあり方がね、アジアの人たちの存在を無視とか、そういう考えとか発想がまったくなかった時代だったんだよね。

うちは職業軍人が何人かいたんでね、そういうところから子どもの頃からね、日本の戦争というのはどういう経緯を経て戦争に突入したのか、そういうのは物心つくころから耳に入ってきて。時代もそうだったし。それと僕らの育った時代は、歴史——社会科の歴史ではABCD 包囲網の中で日本は戦争に突入したってそういう教育方針であったね。だからよく社会の授業、歴史の授業だと先生がとうとうとね、やりましたよ。

### (2) 訪中と学生運動からの離脱

その前はフランスの8月革命<sup>7</sup>というのがあって、日本の学生運動も毛沢東に・・・「造反有理」とかね。(日中友好協会で)訪中団の学習をしていったわけですよ。あの当時はまだ国交がなかったから、香港から深圳、広州、武漢、上海、北京、撫順、安山、瀋陽とか、3週間ちょっと。僕の生涯で最高の思い出というのは、あのシナ旅行でしたよ、待遇が。我々が行ったのは、30人か40人くらいの訪中団だよ。移動するときには1つの列車なんですよ、専用の。それでワン・コンパートメントが4人掛けね。下2段と上2段で。そこで専用のコックがついてたよ。あと通訳ついて、医者もついてて。僕があの中で一番印象に残ってるのは、北京飯店で生まれて初めてフランス料理のフルコースを食べた、あの時代に。どれだけ我々に対しての当時の政府が力入れていたかって。

思い出とかそういうのはないから。ああいう貧しい体制って見たことがないってことだな。それはまず人々の表情が暗い。着ているものが人民服、それも擦り切れたような。それがね、日本の知識人はシナにはゴミ1つない、ハエも飛んでない、素晴らしい国だって。みんな人民は毛主席のもとで光り輝いている、これはなんだって。印象いいも悪いもそれはなかったな。壮大な旅行してきたなと思って。まだまだ18か19(歳)だからな。昔そんなに意識高いわけじゃなかったから。ただ工場だとか農村みるとね、これは話にならんって。混乱してるなって。まだプロ文革が終息してなかったから。

僕自身があの頃まだね、プロレタリア文化大革命というのは中国共産党内における権力闘争っていう概念化が全然できていないから。要するに、遅れた農村を解放しようとかね、知識人は下放してとか、そういう表面的なことしかわからないからね。それで農業は素晴らしいとか、病院は素晴らしいとか言って、汚くて・・・病室がさ。そういうモノの見方ができない人もいましたよ、「中国素晴らしいじゃないか」って。その時つくづく思ったのは、人間、心あらずんば物あれどもこれ見えずって行ってね、逆もまたいえる。「物がなくなると心があれば」ってこんなものかなって。

---

<sup>7</sup> 5月革命の間違いと思われる。

僕は自分の家が農家だし、高校時代はその近くの——僕は高校のとき電気やってたから——電気関係の工場とかでアルバイトしていたから、日本の農業のレベル、日本の電気会社のレベルから、それが向こうに行けばいかに遅れてるかってすぐわかるから。ただ、農業やったこともないし、アルバイトやったこともないで、ぼこっと大学行った奴は何もわからない。

それで日本に帰ってきて、丁度凄惨な内ゲバが始まるんだよな、中核と革労協で。そういうのを見てから、学校に行く気が失せて、これ意味ないって。それで経理学校に通って。みっちりサラリーマンだったな。正社員になって働いたのは、26、7（歳）かな。それから約30年働いて。子どもたちも小さいしね、面倒みなきゃいけないし。

僕が右のほうに視点を移したというのは、こういうことですよ。学生運動とか左の運動やってる方達をみると、地に足が着いてないってことですよね。例えば街頭に出てデモ1つやるにしても、社会の共感を受けて社会運動に昇華していくという発想がなくて、はっきりいえば体制に対して鬱憤晴らし、ストレス発散。これは社会運動に結びつかないって。そこから僕は距離を置いたってことですよ。（右の運動には）ほとんど関わってない。運動から距離を引いて、それでもって自分は社会人としての実質的な中身を身につける、そっちのほうにいったわけです。だから僕は学校（大学）もやめたし、仕事しながら（経理）学校に通ってまず社会人になって。国家に対して納税の義務を果たす、家庭を持つ。それが最高の愛国運動じゃないかと。

### （3）天安門、チベット問題と右派市民運動

僕はほら、日中関係のいろいろ関係あったし、それとうちのすぐ上の兄が、秋田出身の——片親が秋田の人で残留孤児で秋田に帰ってきて水墨画家がいたんですよ。その水墨画家が東京で古典を開くって、確か天安門事件の2年前くらいだったかな。その頃来るってのは国費留学生とか、特別なコネがある人で、その残留孤児の日本人が東京で個展を開く時に、シナ人の留学生の友達が何人か来ていて、それで僕は知り合って。今の日中友好会館（で）——あそこ昔、善隣会館っていうんだ。そこにシナ人の留学生がごしゃっといてき。

僕は住まいが文京区の白山で、それもあったからしょっちゅう会いにいった。それで俺は趣味が卓球だったから。あそこに立派な卓球場と卓球台があつてね、よく遊びに行っていた。日常生活で元々そういうものはあったし。少なくとも僕はほら、話ができるから、そっちのほうの話が。普通の日本人はそういう話できないでしょ。シナの問題とか。

その時いきなり天安門事件が起きて、シナ人留学生が一気に反体制で反政府で、これはすげえやって。これで決定的にシナの社会主義体制ってのが、学生運動、学生に対する弾圧のなんか見たし。その時は天安門事件の支援とかに関わってたよ。留学生の支援運動とか、あの時は中国民主化同盟ってのが発足したのよ、日本国内で。その支援運動いっぱいやったよ。シナに対してね、日中友好協会とか共産党批判できなかつた。あの虐殺に対して。（自分としては）「何だこりゃ？」って。あと日本政府も。

右の運動に深く関わってきたというのは、やはり酒井先生とチベット運動やってからだろうな。あの方はずっと1人でチベット運動やってた。チベット独立運動。それで東京大学の教授の身分でね、1人でデモ組織して、シナ大使館に抗議に行くとか、今から20年前の産経新聞、それを非常によく報道してたんですよ。こういう方たちがやってるという形で。

産経新聞が住所とか電話かいてあったから、コンタクトしようと思って。チベットがどうい  
う状況におかれているのかは僕がわかっていたし、でもね、日本で運動するのはほとんどな  
かったわけだ。そのころ、酒井先生が立ち上げて。(それに至る) 間は一切空白の・・・(運動  
に関わっていない期間)。酒井先生の持論は、「これはシナの、シナ人の民族性に属していた  
んだ。中国共産党が崩壊したからってね、東トルキスタンとチベットに対する侵略がやむか、  
そういう問題じゃない」って。あのころから独自の自分の理念を持っていた人で。しかもそ  
れが実践を伴って。

元々ね、チベット運動というのは右の人がやるとかそういうことじゃなかったのよ。要す  
るに、人権、ヒューマニズムの運動だった。その右とか左とか何もなかった。ただ僕がやる  
時は、日の丸を掲げてやってたよね。というのは1つにはすでにその時から尖閣問題がクロ  
ーズアップされてたから。あと南京問題も絡んでね。そこで日本の独自の、日本人としての  
存在を示すという形で日の丸出したんだよね。その当時は、日本の保守はそういうのまった  
くなくなかったわけよ。運動というのは、はっきりいって皆無だったんだ。だから、日の丸掲げ  
て表に出ることできなかったんだから。ましてや街宣するとかね、街頭で演説するなん  
て・・・。ついこの3年くらいでしょ、できるようになったのは。それまで全くできなかった  
よ。

(南京大虐殺の時には) 街頭(行動)というよりも、シンポジウムだとかね、あとそれと  
かいろいろ教職員組合が南京大虐殺の映画の上映するとか、そういうことに対して「一体こ  
れはどういうことなんだ」と地方自治体に乗り込んでいって中止させるとか。慰安婦映画で  
もね。あとシンポジウム。(人数としては) よくて10人集まるとか。デモだって20人集ま  
るかどうとか。

(チベット・ウイグルと日本との関連) 周辺諸国に対するシナの膨張だから。日本とて例  
外じゃない。必ず日本に来るわけですから。ただ、ウイグル、チベットに対する拡張政策と、  
日本に対する政策は手段が違うわけだから。ウイグル、チベットには武力弾圧でいくわけ  
ですから。日本の場合にはそうじゃないですよ。日本に対する侵略三段階論。第一段階は精神  
侵略、教科書とかイデオロギーの問題。第二段階は人口侵略。最終的には何かあったら武力  
でもって制圧。僕はその第二段階はほぼ終結したと思っている。だが、第三段階は行使する  
可能性は少ないんじゃないんですか。武力でもって制圧するってのは最悪の手段だから。そ  
こまでやる必要はないでしょ、日本(に対して)は。日本は抵抗しないから。

(長野のオリンピック聖火リレーで) 指揮運用したのは軍隊ですよ。投入されたのは留学  
生の人たちだろうけど。それを加味したのは、完璧にプロの軍事集団ですよ。こういうこと  
なんですよ。日本人はお金持ちだ——まあ今は貧乏だけどね——かつては日本人はお金持  
ちだって。じゃあ僕がお金持ちかっていうとそうじゃない。僕はそこはちゃんとわかってる  
から。シナ人がこうこうこうだって、じゃあ僕が付き合うシナ人がそうかって、それはぜん  
ぜん違う次元。僕はあくまで民族運動としてやった場合、シナ政府の進める1つの政治的な  
傾向っていうのは、明らかに日本人口侵略しているっていう。これをもって僕は言っている  
わけです。それとね、僕は個別に付き合うシナ人、ぜんぜん次元が違う問題。とんでもない  
奴もいるし、日本人もかなわないような人格の整った人達だっているわけだし。

僕はあくまでもそこはね、政治運動、思想運動としてそこを貫くわけであってね。そうす  
れば、一般的な映像とか何かみれば、僕も断片しかわからないですけど、それは運動をやる

うえでの骨子だから。ただ僕は、一時かなり煽ることをやったのは、なぜやったかという、意図的にやりました。日本人は能天気だから。保守が何やってるんだ、と立ち上げてやったけれども、それはもう行き過ぎてるね、今。僕はそれを手段として使うべきであって、目的にはしない。

それとね、どんな人間が来たって日本人が強ければいいんだから。日本人が弱いんですよ。日本人が弱くて負けてしまうから。例えば電車の中に乗ってね、シナ語でべらべらしゃべるのをみて、ゴミ出しだって日本人が黙ってれば彼らはそれを当たり前だと思うんだから。だからこっちの問題であってね、日本人が弱すぎるんですよ。

前は（中国関連なら）皆同じ（人が運動の担い手）だったのよ。やる人が本当に少数の人で、全部かけもちでやってた。オールラウンドプレイヤーだな。僕は何でもやったし、（他に人が）いなかった、やらなかったんだから。だから僕は台湾問題だって慰安婦問題だって、何から何まで全部最初の初期の——拉致問題だってそうですよ。初期の拉致問題、僕はずっとやってましたから。あの時は、誰もやらなかった。日本会議とか、頼みに行っただってやらなかったんだから。

拉致の問題に関わった時期ね、日本の保守たちは拉致なんか、小泉が行って初めてなわけだから。それまで誰もやらなかったわけだから。僕はなぜ拉致問題から手を引いたってのは、あの時代、この問題を国家間の交渉に持っていきってやっていたわけですよ。小泉が行くってそれで終わったわけですよ。そうしたら、それにどういう人間が来たかといったら、今までわかって動かなかった人間が、おいしいから来た。お金の問題だよ。政府がお金出すわけですから。あと募金とかカンパとか、いっぱいお金集まったんでしょ、恐らく。来るなっただって来るんですよ。

#### （４）女性国際戦犯法廷に対する行動

##### 《河野談話に対する行動》

（河野談話には）抗議したけどね、保守が動かないんだもの。僕ら一介の市民だからね。いろいろやったりはしているよ。具体的には自民党に出した。自民党がやったわけだから、抗議文とか出したってこと。これがね、必ず何かのアクション必ず起きますよっていう、（アジア女性）基金に始まって最終的には松井やよりがやった女性国際戦犯法廷、これは大成功したんだからね。あれだけ海外から人集めてね、報道して。その後、世界に定着したんだから、あれは大きいですよ。それに対してこれに異議を唱える保守の人達って、まったく無抵抗だったんですよ。

それは名誉に関わる問題でね、南京大虐殺とか仮にあっただって戦争だから。慰安婦強制連行って次元が違うから。まったく次元が違う問題だから。まともな意識ならこんなの黙ってられませんよ。仮にあなたのお父さん、親族が朝鮮半島で女を片っ端から強姦してトラックに放り上げて、満州行って売春宿に売りつけた——到底受け入れられませんよ。この人たちの言っていることに欺瞞が、偽善が満ち溢れてるから。この人たちが本当に思うのなら、なぜ自分達の身銭切ってやらないのか。自分達の家屋敷売ってね、補修にあてるとかそういうことをしないのか。「同じ日本人が謝罪していないのに、私は謝罪している、偉いでしょ、素晴らしいでしょ」こういうことだから。

## 《女性国際戦犯法廷に対する街宣》

(街宣をかけた理由) だって九段会館でやってるんだから、表(に)出ざるを得ないからじゃないですか。九段会館と日本青年館。今みたいな映像も手段もなかったし、写真もとってないけどね。(人集めの方法は)ファックスとかそういうもんですよ。知り合いしかいないから。その当時、右はまったく反応しなかったんだから。保守のね。一番ひどいのは、英霊に答える会とか日本会議は、九段会館に事務所持ってるんだよ。

(街頭行動するのは) アピールできるからですよ。存在を。あと、1つには日本の保守って本当腑抜けなの、早い話が。今でこそ皆やって大丈夫だと思ってるけど、昔はとにかく出られなかったんだ。解放同盟批判したら何されるかわからないとか、そんなことばかりやってたんだから。本当、肝っ玉小さかったよ。

それ(街宣したの)は学生運動の経験があるから。(保守には)そういう作法が何もないのよ、手段が。だいたいこんなもの、昔みんな左翼がやってたんだから。横断幕作る、プラカード持つて。こういうのがまったくなかったのよ。だから珍しかったわけですよ、僕の存在が。右には活動家がないの。要するに日の丸掲げる側においてはね、活動家ってのはいないのよ。おしゃべりや話し会でね。講演会だとかなんかね、それはやるけど、役所に乗り込んで、「今日やってることはどういうことなんだ、おかしいじゃないかと。手続きに瑕疵があるじゃないか、どうなってるんだ」。こういう形できちつきちっと1つ1つ詰めていって、落とすところを見つけるってのが。

基本的にはまったく日本の保守陣営が反応できないなかでね、抵抗する日本人がいるんだよ、と。海外の取材がすごい多かったのよ。そうするとね、日本人が——仮に僕らが運動をね——日本は言論の自由が保障されているわけだから。その前に九段会館に掛け合って、1週間以上、2週間近く掛け合ってやったんですよ。中止させろと。あれは遺族会の建物でしょう。「靖国神社に祀られている方達がね、そういうことをやったってね、それで落ち着けるんですか」。それを自分の建物でやるわけだから。何回も行って交渉したんだよ、支配人がノイローゼ気味になったわけね。あの時の遺族会の会長ってのは古賀誠、みんな保守だ、自民党の。

それをずっとやってましたよ。こういう人たちがいるっていう存在を知らしめる。海外のメディアはやってくれましたよ。俺達右翼だって。反対している人がいるんだよって。でも日本のマスコミは一切報道しない。

結果としてはNHKの放送を中止させた。日本のマスコミがちょっと報道したってのは、NHKの放送が中止になった時ですよ。右翼って形でね、右翼が乗り込んできたって。だから僕の運動の1つの中身は、右翼っていうイメージを払拭することが大きかった。普通の通常のサラリーマンが普通の服装で、堂々と表から玄関のドアノックしながら入って抗議するって。日の丸掲げるってこと自体が右翼って、それが定着したわけだから。

でもその時点で中止は成功だったかもしれないけど、その後アメリカやヨーロッパでも続々と決議されているところみればね、かえってあそこでNHKが昭和天皇が断罪されている放送してもよかったんじゃないかと思えますよ。僕はそれに絡んでいろいろ刑事事件に発展してるんだけど、巻き込まれたりなんかしたわけだし。これがいいか悪いかはまた別の話。

街宣右翼の影響でもって——あれは非常にマイナスだ。朝日新聞は、「右翼ってこういう

ろくでもない奴がやってるんだ」って、そう思われるわけですから。少なくとも運動を5年（前に）立ち上げた目標の1つは、誰でも日の丸を掲げて表に出られるってことだからね。辻立ちできる、それと「シナ」って言葉を使える。これはもう目的果たした。

#### 《なぜ街宣するのか》

だって慰安婦強制連行ってのは冤罪だもの。あれはプロパガンダの集会だからね。日本は言論の自由が保障されてる、お互いに言い悪いは別にしてね。僕は僕なりの道理を説く根拠ってのはあるから。それを持ち出すとほとんど議論はならなかったよ。だって元々は、慰安婦っていうのはあったわけだから、昔から。なぜ当時問題にしなかったの。慰安婦はいたけど、慰安婦問題ってのはなかったわけだから。何回も言っているように、生産力が極端に低くてね、まして朝鮮半島なんかもっと貧しかったわけだから。

日本の国内で親兄弟がたくさんいて、女の子がいたらね、貧しくて大した学問をできない状況だった女の子だからね、昔だったら玉屋だとかああいうところで働きやっていた。日本列島でいっぱいあったんですよ。そこでは朝鮮人も働いていたし。それでもって朝鮮の慰安婦がね、日本人をお客にしたからって、なぜ日本人がそれに対して謝罪しなければならないかって。

慰安婦問題に関していえばね、映画でDVDとか出ていると思うから、溝口健二の「赤線地帯」って一度見たらいいと思うな。今、スカイツリーができたところ、昔の遊郭、そこにいわゆる公娼制度の廃止される前後を描いた映画だよ。なかなか優れた映画だよ。ああいうのを見てると、当時の公娼制度ってのがよくわかるね。

僕はよく街宣でやる言葉は、松尾芭蕉の奥の細道にね、あの中に遊女が出てくる場面があるんですね。芭蕉が山形から新潟をって行くときに、ある宿の中で隣の部屋に年老いた男のオヤジさんと娘が2人とまって部屋に、隣同士。お伊勢参りに行く娘をオヤジさんが新潟のどこかまで送りに来ているんだよ。一晩ね、自分はそういう社会に身を投げなければならない、その境遇を、松尾芭蕉が聞いているんだよね。その上で松尾芭蕉は、「一つ家に遊女も寝たり萩と月」っていう。萩ってのはね、我々みたいに根無し草みたいなやつ、風に吹かれてぷらぷらして。遊女ってのは天空に輝く月だって、そういう風にして、遊女に対するオマージュとして日本の文学史に輝く句だよ。当時の人たちが遊女をどう見ていたかって。近松門左衛門だって、道行の場面なんてのはね、心中というのをいくつか、当時の遊女の世界を。日本社会というのは、当時の売春婦に対するどういう態度で臨んでたか、そういうのもよくわかるし。

だけど考えてみれば、日本は商業社会が発達したから、その子ども達が遊女とはいえ、社会が救う体制にあったということは、角度を帰ればそういう見方ができる。ある意味じゃ遊女にすらなれない境遇が、シナ大陸とか朝鮮半島にあったわけね。だから朝鮮半島なんかには、妓生という形で身売りされてね。芸とかなんかを仕込まれて。日本の、金学順って人が妓生として修行って行って。あとは当時日本人の娼婦も満州にいっぱい行っていたのよ。朝鮮人従軍娼婦として、朝鮮も当時は日本だからね。ソ連が進攻した時ね、こういう人たちがどういう境遇にあったのかって、凶暴なソ連兵が来るわけだから、あの人たち体張って相手して、そういうのがいっぱい残っている。ただそれは日の目を見ていない。その人たちは、絶対そのことで自分達の境遇を世間に訴えて泣くってこともしなかったし、ほとんど年老



いていないだろうなあ。日本人はそういうことしなかった。今の朝鮮の慰安婦みたいにね。だから、僕の疑問は、あの人たちだって好きでやったわけじゃないから、日本人と同じで。別にお前達卑しい商売なんてそんなことは僕は1つも言わないし。

そういう風な境遇にいかざるを得ない社会の貧しさがあつたわけであつてね。日本も朝鮮半島も同じだし、世界にそういうところいっぱいあつたわけだね。常に女の人はそういうところの犠牲になっていたわけであつて、何も日本は国策として朝鮮半島で軍隊を使って朝鮮の女性を強制連行して、そんなこともないわけだし。それは実証もされてないわけだし、ないわけだから、事実として。もしそれがあつたとしたら、それは個人的な犯罪の問題であつて、日本の国策とか何とかとは違う話であつて。そこを事実挙げて冷静に話し合えばいいんですよ。ただ、僕はそのままでやってきたけど、そういう風に答えることはないね。

### (5) ジェンダーと保守主義

#### 《婚外子差別での騒動について》

ああ、外務省でやったシンポジウムでしょう。この問題も裁判で決着済みの問題だよ。あれは外務省でやった婚外子が、要するに私生児が差別受けてるとかね、そういう問題だったんだよね。僕自身も忘れた。僕は今裁判6つ抱えてるんだよね、何が何だかさっぱりわけわからなくなってるんだよね。唯一勝った裁判だった。その時、日本の保守の人たちが——婚外子の(問題は)差別だということを支持する人たちが圧倒的に多くてね——こっちが少数で全然ダメなんでね、俺に声かかってきたんだよ「ちょっと来て」って。それで僕が行ってやったことだった。それが要するに差別だつて。

面白い話はね、そこまで僕が堂々とやってね、それで裁判にかけられちゃつて。それで呼んだ日本会議の人たちは全然知らんふりしちゃつて。「家族と何とかを守る会」の彼女が僕に直接電話してきて、「何とかお願いします」。で、裁判となつたら声をかけたのも知らんふり。そういう意味でね、日本の右とか保守ってのは、ものすごく冷たいんですよ。でも僕は世の常人の常だと思っているからどうでもないけど。別に頼まれたから行ったわけで、説明聞いてこれはしょうがない、とんでもないと思ったから(発言した)。

僕が発言したのは2つだったんだよ。フィリピンと日本人の間に夫婦がね、夫婦の問題で夫が自分に手を出した、そういうこと縷々述べてさ、これがフィリピン人に対する日本人の差別だつていうから、「そんなもの、ただの夫婦喧嘩だろ」そういうこといったんでね。あともう1人の人が婚外子、婚外子つていうから、俺はそれまで婚外子つて言葉知らなかったのよ。私生児だろと言うから「それは差別だ」つていうから、私生児つて何かつて言うから、結婚してる相手がいる不倫の子じゃないか、といった。それが名誉毀損だつて。それで裁判になった。私生児に対して嫡子の子どもと同じように相続を与えるというのだったら、本妻に対する差別じゃないかと。家庭の崩壊だろう、という形で自分の議論をとうとうと述べたんだけど、向こうが大騒ぎして流会になったんだよ。

(それは)持論というより、当たり前じゃないかと思ってるね。少なくとも、僕の生まれてきた家庭教育の中では。旦那がね、不倫の末に生まれた子どもに対して、子どもと自分の子どもと同じ財産分与。不倫の子どもは不倫の子どもとして、母親がしっかり自分で育てていけばいい。じゃないとね、ちゃんと操を守った女性に対する差別ですよ。そんなことやったら家庭が崩壊する。私の持論。僕が積極的に言ったわけじゃない。とんだとぼっち受け

ちゃった。

#### 《DVの講演会中止について》

あれは離婚を勧める講座かなんかだったんだよね。一体これはなんなんだと。僕はその人（講師）は知らない。本をちらちらと見たことはあったけどね。大体、税金でもって役所が離婚する講座を開くのは一体どういうことなんだと。家族の絆を深める講座とかいうのならわかるけども。一体これはどういうことなんだと、僕は乗り込んで行ったんです。説明責任を求めるために。それに対してね、きちっと答えられなかったのよ。

（抗議に行ったのは）僕と女性が3人いて、だいたい4、5人だよ。普通の家庭の主婦ね。子ども達を社会人にさせた、家庭の主婦。田舎だからな、あそこの前でちゃちな抗議用のトラメガでやったの、そんな驚くほどのものじゃないけどな。（抗議に来るよう頼んだのは）地元の人。そこには女性もいたけどね。なかなかしゃべる人がいないじゃん、しゃべって交渉する人が。結局、僕みたいに乗り込んで行ってね、丁々発止でさ、ものを理詰めで言って相手を問い詰めて、落としどころを見つけて決着をつけるという、難しいんですよ。

それで、これは一般の感情からして許されないよと、つぶすわけにはいかないからディスカッションするか、また別の場で我々の発言の場を用意しろとそういう要求したわけよ。そうしたらすぐ中止しちゃったのよ。これ非常に事なかれ主義なのよ。両方の意見をやらさなければよかったのに。言論弾圧するのはね、非常に——はっきり言って言論弾圧したのは役所なのよ。ジェンダーを主張する人たちの見解も否定したし、それに対する市民の——一般の人たちの声もつぶしたわけですよ。だから役所叩かなきゃならない。

（他の保守団体と意見自体に乖離は）ないでしょう。僕の場合は、言うこととやることを一致させるということだから。（保守は）ただおしゃべり集団だから。俺よりはよくしゃべるんじゃない、僕は勉強してないから。だったらあの人たちが乗り込んで言ってやればいいのか。それが全然動かなかったというのでね、そこに住んでいる人が声をかけてきたのよ。だからまた僕が行った。これは裁判にならなかったからよかったけどね。市長の自宅まで行ったんだよ、なんではっきりさせないんだって。俺にも発言の場所を用意しろって。

私がおのひと会えばね、「なぜあなたは離婚するんだ、もっとそこに深い理念があるはずだろうと。それは何か」って意見を交流する場がなかった。僕は離婚したことない。別れたいとは思うよ、しょっちゅう別れたいと思ったけど、うちの女房強くてね。夫婦って男と女の間だから、いろいろ外から見えないいろいろなものがあるわけだからね。それは一概には……昔から日本には三行半って離婚はかなりあるわけで。

やめさせた講師とディスカッションとかそういう条件があれば、ゆっくり話し合うことができただろう。だけどね、行政は一気に中止した。面倒くさいから。それで、女性の側は街宣をかけてつぶしたとか、話が全然違うところに飛んでいっちゃっている。これは俺としては釈明させてもらいたいよ。今から（でも）遅くない、いつでも話しますよ、僕は。時を経て。僕のね、夫婦、男と女の問題はシンプルでそういうことですよ。

でも中にはどうしようもない事例もあるわけだからね、それをいろいろ行政が介入しなきゃいけないものもあるけど、それは特殊な問題であってね。離婚ってのはね、もっと必死の力があるんだよ。核分裂と同じで。核分裂でどれだけのエネルギーが生じるかって。くつつくのは簡単なのよ。そんな別れる時に問題起こすわけでしょ。簡単に行政がこれがドメス

ティックバイオレンスとか、介入する問題でもないと思ってる。あと、うちは2人とも娘で間もなく結婚するんだけど、そう言っている。何だかんだと選んだのはお前だ、と。俺が選んだんじゃないよ、俺は見立てはしてやる、選んだのはあんたなんだからね、と昔から言っている。

(在特会はそういう問題に関心が) まったくないでしょう。こういう人たちは。言っただけで意味わからないんじゃないの。だってまずほとんど恋愛したこともねえだろうし、彼女いるわけでもねえし。はっきりいって精神的に片輪みたい奴が多いから。よく言ってるんだけどね、「デモとかに女1人くらい連れて来いよ」。色気がないよな、保守のほうの女の人たちは。女はイデオロギーと勝負事にのめりこむと、女らしさがなくなってくる。非常に大事なことでね、男と女の場合は。男はあんまり関係ないのよ。女の人がものすごい変わりやすいね。僕は長い間サラリーマンやっていたから、会社リタイアした後だって会社関係の仕事やってきたわけだから。

そうすると、男はね、独身で年取ってもあんまり変わらないのよ——「ああ、独り者かな」ってわかるよ。でも女の人が変わるんですよ。独り者でいるとね。そういう心身の影響を、そういう条件から受け易い、影響与えられ易いって。だから若い人たちに言うんだけどね、とにかく学生だったらまずしっかり勉強しろ、単位とって。その上でね、運動とか何とか二次的三次的なもので、学校の勉強で「今日はいやだから街宣行くか」、これはご法度だった。そんなら来なくていい。社会人だったら、しっかり会社でステータスをもって仕事のノウハウを身につける、その上で好きな相手を見つけて家庭を持つっていう。これが最上の愛国運動なんだよ、国家に納税の義務を果たす。やることねえから日の丸掲げて、それが愛国運動でもなんでもない。僕はそれを口酸っぱく言っている。だから来なくていいと。

## (6) 行動する保守との関係

桜井君が僕のところにきて運動やるようになったのは、いつ頃かな。彼と僕ね、最初に会ったのは——確か銀座で慰安婦の署名運動やった時があったんだよ。その時、僕は明確に彼は——その時は彼は普通の格好だったよ。あんな奇抜な服装してなかった。(当時の若者の参加者は) ほんのちょっと。平成19年の頭の頃からだな。6月とかは僕のところに来てなかったから。このとき初めて彼の顔を初めて見たんだ。これが平成19年4月だ。桜井君も、来たときには二言目には「今日は逮捕されないでください、警察と揉めないでください」。その度に俺は怒鳴ってた。何やっているんだと。それが今は完全に逆転でとんでもないことやっちゃってるけど。

(そういう人が参加するようになったのは) 3年ちょっと前からでしょ。僕がちょうど(ネット配信を) やり始めて。大きいですよ。インターネットがなければ、僕らはなかなか上に行けませんでしたよ。(戦犯法廷の時には) インターネットがなかった。あったけど、使う人ほとんどいなかった。それこそ少数で…いや、人は来てたかな。ネットとかファックスとか手紙とか。ほんの少数の人でね。

(新しい知り合いは) みんなネットですよ。今、それしか手段ないでしょ。(ネット以前の付き合いは) 何人かいますけど、地方にも結構(いる)。1つは通信手段としては革命だったんですよ。(左派は) 週刊金曜日とか、システムとして整っているからね。それが(右派も) 3年前に一気に拡大したのよ。あれ(インターネット) はやっぱり大きかったな。

いい悪いは別にして、一気にこれが1つの武器になっているわけだから。それは左にまったくなかったよな。(右は)他に何もものがないから、こういう手段を見出した、そういうことなんだよ。(それまでは)ファックスしかないわけだから。

それと、左の人たちみたいに運動の経験がほとんど皆無で実績もないから、情報を共有する媒体がないわけですよ。まったくないわけですよ。ネットワークもない。まったくないわけですよ。そこにインターネットが出てきたって。それが一気にばーっといったわけですよ。それがまた下火になっちゃってる。じゃあネットでね、日本の運動なんかね、質的に変えることができたか、まったくないですよ。本来だとネットで参加してきた若いやつを昔みたいに徹底的にオルグしてやればいいんだけどな、今はそういう馬力もないしな。昔はやったのよ、デモで呼んで来たら2人1組になって、頻繁に当たるって。共産党って左翼もみっちりやっていたわけだけども。本来そういうのやればいいんだけど、今、そういう時代でもないしね。でも僕は、左とか共産党で熱心にやってきたのを見て、その結果が良くなかったのを見ているんですよ。運動を継続しようとしたら、目の前の目の前のデモとか何かに人を動員する道具みたいな扱いしちゃダメだよ。学生だったらしっかり勉強して就職するって。時間を見つけてとにかく読書にいそしんで、若いうちに趣味の1つや2つ身につける。

初めて運動を目指しているいろいろ試行錯誤してね、一番注意したのは服装ね。人間の形式と内容とは一致するものだって。物事は形式と内容は統一するわけであってね、服装が乱れた人間が社会に訴える、どんなにいいこといったってね、汚いなりして汚い頭ぼさぼさで、誰が話し聞きますかって。でもなかなかこれがね、今の時代受け入れられないんだ。しょっちゅう言うとうるさくなってくる。若い人が僕から離れていく一番大きなのはそれかな。僕の理念について来れないかどうかわからないけど、大した方針の問題じゃないですよ。普通のちょっとしたマナーとか、そういう問題なのよ。運動の量的なものを蓄積して思想にいく前の前の段階だから。

(人数が増えたことの手応えは)何を持って手応えにするかだね。僕は在特会とかネット保守と違って、騒ぐのが目的じゃないから。やったアクションに対して、結果をどういう風にアセスメントするかってことだから。効果だから。僕の場合は、例えば日教組の教師——扶桑社の本の白拍子本とか、あれの勉強会だとか何かでいろいろなことをやった教師を処分させるだとか、南京や慰安婦映画の上映中止だとか、いろいろやってきたよね。集英社の漫画本の連載中止だとか。

それは仕事として、騒ぐんじゃないで。たとえそこで中止とか結果が得られなくても、「次回から問題が起きるんですよ」という形を作る。仕事をするのが僕の仕事、そうするとそれには人はいらないんだよ。人いたって仕事はできない。チャンネル桜であれだけ人集まってね、結局何を得たんだって。何もなし。今お台場で騒いでいるとかね、どなたがやってるかわからないけど、目的は何なのか。何を言うためにやっているのか。落とすところは何か、まったくないままでやっているから。僕とは運動の次元が、世界が全然違う。

それ(人数)でもって何か仕事ができたっていうと、ないんだよ。仕事するときには2、3人でいいんですよ。本当の圧力になるんだったら、3000人、2000人、まあ500人までいいけどね、集まってくれば僕はいろいろやりますよ。でも、ここという時にはこないですよ。たとえばKKRの土地の売却問題。普段あれだけ領土死守だとか竹島奪還という人がね、目の前のこととなるとやらないんですよ。わからない、僕は保守のメンタリティとい

うのが。僕は保守じゃないから。日の丸は掲げてるけどね、いわゆる保守と僕は違ってね。

大いに失敗して、大いに試行錯誤して、そこから自分達の思考を凝縮するっていう、そういう意識もってもらえばいいと思っている。そのためには、やっぱり運動して失敗しないでしょうがないだろう。基本的にはみんな鬱憤晴らしにきているから、ストレス解消。不条理みたいなのを抱えてそれを発散する場がない。インターネットの動画とかなんかで見てきたっていう。つまりは感情だよ、気分だから。自分達のやってることを、日の丸掲げることによって自分達の行動に正義っていう愛国の味付けしなきゃならないんだから。日の丸持つこと自体が自分達の運動の正統性を保証してくれるわけですよ。彼らの考え方は。

それともう1つは、基本的にああいうネット関係の、今どうかわからないけどもね、基本的には定職についてないんだよ。あと家庭を持ってない。結婚して家庭を持って子どももいない。そうすると、これはなにかといたら、守るべきものがないんですよ。守るべきものがある、こういう政治思想運動やったら、そこに1つのコントロールが働くんですよ。しっかりしたコントロールが。だから、特に保守と日の丸掲げる人間が定着しないっていうのは、そこなんです。結局、責任がないんですよ。責任がないってことは、プライドもない。

(女性の保守団体は)最初は僕のところにきてやってたけど、僕のことわからないんだよ。あの人たちさ、僕の表面上の街宣やっているととか、アクションは見たけど、僕のこういう話はなかなかわからないんじゃないかな。街宣の仕方とか、みんな僕のほうで——別に教えるとかそういうことじゃなくてね。ただ僕はいろんな節目節目でいろいろ忠告するからね、それがやっぱり嫌かどうかそういうことじゃなくて、段々違いが——違うんだなという感じで距離を置いてくるし。僕のほうから行ったことはない。

(そういう人たちは)筋を通せないな。僕らは筋を通すということだから、動じないということだね。たとえば一緒に運動やった人たちがね、警察といろいろ厄介になるとかいたら、必ずきちっと同じ仲間として最後まで面倒みることとか、そういうところも極めて弱いから。それと、日常生活でもそうだったね、なかなかお付き合いできない。はじめの問題だとかね。ただルンルンルン、デモで僕の後ろで騒いでいる分にはどうってことないけど、自分たちが当事者として問題を処理するとなったら、それはもう難しい話ですよ。そういうのいくつかあったからね。

(活動家は)おばちゃんたちいるけどね。そよ風の人には昔からよく知っている。そよ風にいるおばちゃんたちっていうのは、昔から知っている人であり若手の主婦であり。花時計ってのは、そよ風から分派したんでしょ。それで事務所に来た時、僕は何も僕の真似して女の人たちが街頭でマイク握って何になるんだ。それより女の人だったら夫婦別姓の問題とか、そういう問題で地域で2、3人でいいから学習会やって取り組んでいく。まずそういうのを1年くらいやってから、それから街頭とかで訴えたりするのであって、順序が逆だと思う。僕は、立ち上げに際しては否定的な見解出してたんだよ。どうしてもやるっていうから、1回渋谷の(街宣の)段取って作ってやったし。その後、いろいろネットでへんな奴からバッシングされた時ね、すぐ受けに入っちゃったから。「あたしは家庭の主婦だから、表に出て行きません」とか。「介護してる身ですから」とか。そうしたらあんたは何言ってんだ、今まで、と私は意見した。それは彼らにすれば怒られたと思ったのかな。

(そうした女性たちは昔から運動を)してないしてない。たとえば教科書問題とかで集会やる時に手伝うとか、受付やるとか。そういうレベル。だからこそ、地元の公民館とか自分

の子どもの行っている学校のこととか、そういうのをじっくりやる運動を作ったほうがいいよ、と。これ、いい悪い別でモノの考え方が違うんだって。

左の人たちはそれ（根を張った活動）をずっと長年追求してきているわけですよ。そういう問題をね。一番あれ（保守）にとって足りないのはそこなんですよ。僕はこういう身分だから表に出たり——だけど子ども達が小学校中学校高校のとき、僕はPTAの役員をみっちりやってきているし。そういうことをやらないの、保守の人たちって。あれだけ教科書問題とかでいろいろやっている人たちが、自分の学校の子供達、孫達の学校で何かやったか、まったくやらないもの。それで集会やれば出てきてさ、酒飲んでかっくらって人の悪口いって、それで愛国運動やって、と。この脆弱なメンタリティなのよ。

### （7）小括

α氏は、排外主義運動のなかでの有名人である。これまでみてきたように、その「実績」も排外主義にとどまらず幅広いが、全般的なイデオロギーとしては日本会議のような極右の主流と大きく変わらない保守主義であることがわかる。彼我の差は、α氏自身が述べるように、言っていることを実際に過激な行動に移すか否かであり、その意味で「行動する保守」という自称は誤っていない。言説で留めるのと実行するのとでは大きな差があるとはいえ、日本の保守主義に深く根ざした部分を、排外主義運動が持っていることは確認しておきたい。

その上で問題は、「人口侵略」のような珍説にもとづき排外主義が突出するのはなぜか、ということではないだろうか。在特会は、この部分を純化してそれに特化した運動を展開しているわけであり、保守主義に根ざしたものとはいえない。この点の解明はまだ端緒についたばかりだが、今後明らかにすべき課題として明記しておきたい。

## 28 外国人参政権に反対するβ氏の場合

### (1) 外国人参政権という問題

《政治的社会化》

元々、学生時代からいわゆる保守系の月刊誌、『文藝春秋』とか『諸君！』とか愛読していたんですよ。で、『諸君！』なんてのはもうなくなっちゃったけど、昭和44年にできたんだけど、大学入って創刊号からずっと読んでる。一冊残らず。それで『正論』なんてできて——まあ『正論』はあまり読んでなかったんだけどね——あれは誤植が多かった、すごく。今は考えられないけど、『諸君！』のほうが圧倒的にレベルが高かった。『諸君！』『文芸春秋』を読んでいて、ずっと本多勝一とかイザヤ・ベンダサン論争とか、南京大虐殺のこととかね、まあいろいろ読んでいて、ああいう雑誌に出てくる類のことはすべて興味があったんですよ。すべてに関して。すべて要するに、私の立場は戦後体制に反対する立場だから。

卒業してからずっと仕事どさまわりで、〇〇行ったり××行ったりね、全然活動できなかった。(活動する以前の保守派との付き合いは)ないことはないんですけどね。でも一緒に活動するわけにはいかないからね、遠くにいるからね。だから時々手紙のやり取りとか、その程度かな。ほとんど付き合いなかったね。何にもしませんでしたよ、地方では。田舎にいると何にもできないんだよ。僕なんかね、□□と△△にいたから、ウルトラ田舎なんだよね、何にもないんだ。(地方で活動している人たちは)オールドライトね。僕もオールドライトなんだけどさ。でもね、若いときはニューライトって言われてた。あつという間にオールドライトになっちゃう。

(都市部にいると活動の条件が)全然違いますよね。それともう1つ、仕事がやっぱりね。この歳、特に10年前でしょう。サラリーマンってね、50(代)になるとね、だいたい激職から外れるんですよ。そういうものなんですよ。ちょうどタイミングが良かったんですよ。(都市部に)来た、激職からも外された、土曜日曜は休める、となってくるとやっぱり活動を始めますよね。活動ってほどのことじゃないんだけど。

《外国人参政権に着目した経緯》

(1995年の最高裁判決について)全然知らなかった。あの判決は平成7年の2月なんですよ、あれ。僕はその1ヶ月前に、阪神大震災あったじゃない、あのとき私は神戸にいた。震災でそれどころじゃないから、あの2月28日の判決かな、まだ震災後1ヶ月だからそんなで新聞読むとかそういう状態じゃなかったからね。全然知らなかった。

(1998年の連立与党合意についても)全然知らなかった。覚えてない。だから『正論』や『諸君！』にね、載ってたと思うけど、載っていて腹を立てていたかもしれないけど、記憶にないんだよ。よくわからない。ほとんど諸君なんか細かく読んでいたから、多分読んでないことってないんですよ。でも他のイシューと同じような感じで、これも頭くる、これも頭くる、とんでもない。全部頭くるで終わっちゃうかもしれないね。

平成13年の4月、ちょうど10年前ですけど都市部に来た。今度は本読んだりじゃなくていろいろな講演会に行くわけだ。ある保守系の講演会に行ったら、具体的には平成の大演説会で、そこで米田建三さんっていう前の自民党の代議士が外国人参政権について熱っぽく語っていた。それを聞いて僕はびっくりしたわけだ。こんなのあったんだ、とんでもねえ

と。何年くらいかな、平成 15、6 年かな。それで興味を持った。それはそれで別に行動を起こさなかったんですけど。

たまたまあるきっかけで若い女性と知り合って、活動でね。ある台湾関係の講演で、ある若い女性が質問したわけだよ。その質問に講師が答えなかったんで、俺が教えてやるよと、「あんたメルアド教えてくれたらメールで教えてあげるから」って。メールのやりとりするうちに、向こうが、「今度こういう外国人参政権のあれあるから一緒に行きませんか」と言うから行ったら、そういう世界だったんですね。「オフ会ってのがあるよ、外国人参政権」って。オフ会って何かわからなかったけど、要するに若いネット族の集会に行ってみないと言われて行ってみたわけ。それで彼ら数人でね、若い人が細々と活動していて、私がアドバイスを——年配だからね——アドバイスをしたりして、会に参加したってことなんです。それがきっかけ。

(米田建三の話を聞いて初めて関心をもったのか) そう。プラス実際に「オフ会」ってのに行ってみて話を聞いてみるうちに、自分もオフ会の中でいい顔をしようと思えば勉強するじゃないですか。そうすると、すればするほどこれはやばいな、とんでもないなとなってきたわけです。

いわゆる保守の人はオールドライトばかりで、そこ(参政権)だけヤングライトがいたわけですよ。それでこれは若い人を育成できるかな、みたいなね。そういうのもあったんですよ。珍しかったわけ。要するにネットで知り合って、ネットだけで話し合って、ハンドルネームでいろいろな知識を持っていて——薄っぺらいんだけどね——ネットの知識を持っているわけ。(ネットについて) 教わって、当時チャットで話したりとか。ミクシィなんてなかったんだよね。彼らに教わり教わり、その世界に入っていくんです。そういう若い人たちが関心を持ってくれて、これはいいことだなと思ってちょっとそこに力入れた。

(参政権が若い人の心をとらえるわけは) 僕の勝手な推測ですけど、やっぱりワールドカップ。ワールドカップって年配者興味ないと思うんですけど、若い人は熱狂するじゃない。だから最初の頃のグループにいた人たちは、これに参加したでしょ、みんなサッカーキチガイばかりだったんです。びっくりしたんですよ。(自分は) 全然サッカー知らないのに。みんなサッカーで、韓国はひどすぎるわ、と。そこから入ってきている。だからリベラルな人や左翼の人は頭きていると思うけど——どうしてこんなに若い人がネオコンサバになってきたんだと。理由は 2 個あるとして、拉致とサッカーだと思います。わたしはワールドカップ見なかった、何にも興味なかったんだけど、すごい大きなパワーっていうかね。そういう感じで若い人がこっち側に入ってきたのかなと思いますけどね。だから敵失ですよ。敵のオウンゴール。

お互いに勉強していて、向こうに教わることもあれば、僕も教えることもあるし、いろいろですよ。そんなに私のほうが知識が優れているということはなく、外国人参政権については両方とも同じくらいに。みんな勉強していた。だから、そのうち僕が年配になってから人に話をするようになると、知識の量が違ってくるからね。そういう面で若干あるとは思いますが、そんなものです。だから一般的にネット族って本読まないから、知識が浅いというのはありますね。広く浅く知っているんだけど、ちょっと突っ込まれるとわかんなくなっちゃうんですね。

(2000 年代初頭の当時は) まだその問題がね、あんまり大きい問題として取り上げられ



てなかったんですよ。他のね、たとえば〇〇問題<sup>8</sup>とか、靖国神社の国立追悼施設とか、そういう問題がすごい大きかったでしょ。外国人参政権とか二の次だったわけだ。ところが、民主党政権ができちゃって、その前に参議院で民主党が圧勝した、そのあたりからこれはやばいぞ、と。みんなの耳目がこっちに向いてきて、保守系の陣営がね。元々うちらが前からやっていたんで、逃げられなくなっちゃった。しょうがねえからやろうか、みたいな形で運動をやってきたというのがあなたのご質問の一番ですね。だから大した理由じゃないんです。たまたま行き当たってこれはやばい、と。

#### 《コリアに対する関心》

それと自分のなんていうかな、もともとこれ在日問題でしょ、在日問題って興味あったんですよ、昔から。コリア関係はね。私どちらかというとコリア関係が好きだから。いわゆる業界内では韓国好きで通っている。だからそういう面でちょっと深入りして。

樋口さんは若いからあれだけど、僕なんか子どもの頃けっこうね、年寄りがね、例えば「お前、そんなことすると朝鮮人みたいになる」とかね。「嘘つきは朝鮮人になるぞ」とか、そういう差別発言ってあるじゃないですか。そういうのを聞いていてね、興味を持ったわけです。そんな悪い奴らなんだと。で、たまたま大学4年の時に行ったんだ、1回韓国に。そしたらまるで180度反対で、大歓迎されちゃって、それでいろいろ興味持ったと。それで韓国語少し勉強したりしてね。あの頃ハングル読めるっていったら、超珍しかった。韓国語なんて今までいなかったね。韓国の映画見たりとか、歌謡曲聴くとかいうのは誰もいなかった。

韓国人の友達もいるし。時々韓国に行くし。ただ私は、彼らとは根本的に相容れないところがあるんだけどね。たとえば日帝36年の支配が牢獄だったと、「そりゃ違うだろう、天国だろう」と、そういう違いがね。でもそういうところを別にすれば——別にできないんだけど——ただ向こうでも日帝36年はよかったという人がいっぱいいる。懐かしいという人がたくさんいるわけであって。在日の友達はいない。親戚はいるけど。でもあまりそういう話はしないね。

僕の知っている韓国人なんてのは、在日がなんで日本の選挙権求めるんだと。これはね、僕の友人だけでなく韓国のある有名なチェ・カプテって日本で言うと文芸春秋みたいな『月刊朝鮮』の編集長やっている人とか、いろいろな人が言っているんですよ。在日韓国人は韓国人なのになんで選挙権求めるんだ、お前ら日本に忠誠誓っているのか、違うだろう本国だろう、へんじゃないか。そう思っている人はいっぱいいる。基本的に半島のコリアンにとって列島のコリアっていうのは、理解し難いへんなやつらなんですよ。嫌いなんです。だから在日も韓国人も韓国にいる韓国人も、一枚岩じゃないってことだよ。いろいろな人がいるってこと。(コリアに対する関心が外国人参政権に対する関心につながるのか) いやあ、つながるかもしれないなあ。つながりますよ、やっぱり。そうですね。

## (2) 外国人参政権反対の活動

### 《組織をめぐる世代間対立》

組織についてはいろいろありまして、若い人たちがサイトを作っているわけですよ。チラ

<sup>8</sup> トランスクリプトの作成時にどうしても聞き取れなかったため、〇〇としてある。

シとか全部作っているわけ。ところがね、その人たちと私とやっぱり年代が全然違うし、うまくいかないんだよ。路線闘争というよりも感情的な問題もあるのかな。うまくいかないんだよ。それでのべつ幕なしでトラブルがあって、結局お互いにじゃあもうこれはあれだっというんで、提案して分かれようと。会を分けて、全国と〇〇と、××にもある。要するに親会社と子会社、情報を親会社が持ってきて子会社に提供する、子会社はそれを使って活動する。活動に使うのはなんだっていい、フランチャイズみたいなものだ。そういう形になっている。だから干渉しない、お互いに協力するときは協力する、そういう形になっているんですよ。だから私はサイトについては一読者に過ぎないわけ。

(会としての活動は) 集会と署名活動。それくらいかな、会としてやっているのは。あとはばらばらですよ。僕、(分派してから) 自分の勝手な独断でやってきましたから。もうまったく別々ですよ。ただ情報がほしいとサイト見たり、向こうの人に話を聞いたり。

この前、珍しく一緒にやったんですよ。住民投票と自治基本条例ね。あれも私やりたくなかったんですよ。無理やりやらされた。私はいやだった。住民投票も自治基本条例も困るけど、基本としてはあまり広げたくないんですよ。わかるでしょ。結局アブハチ取らずになっちゃうからね。私は外国人参政権だけに行きたかった。せいぜい人権擁護法案と外国人参政権くらい。広げたくなかったが結局広げられちゃった。それはお付き合いだから。でもね、そういうのやりたかったら自分達だけでやってくれ、時間もないし、ちょうど定年間際で忙しいんだよと。

僕が〇〇で代表と名乗っているけど私1人です。私は会員増やすつもりもないの。入りたいという人はいるけど入れないの。面倒くさいから。1人で活動するのが一番いい。△△にもある。これも1人でやっている。××もある。これも2、3人でやっている。本社と支店、銀行でいうと本店と支店、またはセブンイレブンの本社とフランチャイズ店、セブンイレブンの名前を使って物売っているけれども、営業勝手にやれと。そういう形になっている。これは非常にすっきりしてやりやすいんです。

組織を作ること自体がね、面倒くさいんですよ。そちらに手間取られちゃう。僕はつい最近までサラリーマンやっていたから、仕事やりながらそんなことやってられないんで、組織を作りたくないってことです。もう3人寄ればトラブルです、やっぱりね。

(運動の目標は) まったく同じです。細かいことですよ。つまらないことで。やっぱり、みんな自分のやりたいようにやりたいわけですよ。僕みたいに年取ってきて、社会人として背中にコケが生えたような男なんだけど、若い人からみれば鬱陶しいじゃないですか。こっちはこっちで、若い人がいうこと聞かないで嫌じゃないですか。会社に行けば、若い人みんないうこと聞くのに、何でこいつらいうこと聞かないんだ。それで結局別れた。路線上の問題はないんですよ。結局ね、ああいう団体と付き合いな、こういう団体と付き合いなってるさなんだ、結構。私は誰とでも付き合いって、とにかく外国人参政権に反対する人を1人でも増やせばいいという考えだったから、そういうところでの路線の違いはあった。

(他団体に行く時には) こっちの人(同じ団体だった若い人)たちは、行っちゃだめというんですよ。あいつらと付き合いな。そんなこといってもね、街頭でもどこでも、僕はいつでもどこでも誰とでも外国人参政権を訴えるべきですよという方針で、彼らはあいつはダメこいつはダメとなっているでしょ。だからいいからもう別個で切ろうと、それが一番の問題だよ。

### 《具体的な政治的脅威としての外国人参政権》

自分でいうのもなんだけど、私が具体化するように持っていった面もあるんですよ。選挙権が危ないよって、たとえば対馬市とかね、島根県とか沖縄とか。そういうところの選挙管理委員会いろいろ話をし、データをとって。それからそういうところの住民のなかの在日の割合とか、外国人の割合とか——なかなか教えてくれないんだけど——そういうのを聞き出して書いたり、いろいろなところで話し合うようにして、具体的に危ないぞ、という部分に話を持っていったというのはある。

幸か不幸か向こうからつついてくるんで、コリアやチャイナからいろいろ突っついてきてくれるんで。しかもチャイニーズが急増してきたでしょ。そういう面で、ここ2、3年で急激に抽象的な脅威だったのが具体的な脅威になってきたと。まあチャイニーズの激増が一番大きいでしょうね。ということだと思っただけです。来日する外国人の中だと、チャイニーズが圧倒的じゃないですか。これは誰でも、「この人たちに選挙権あげるの？」ということになるじゃないですか。

で、敵も愚かなところがあって、あの民主党の小沢一郎なんて一般永住（者）も与えるなんて言い出したわけだよ。それはチャイニーズにも与えるってことだから、それでやっぱりみんな危機感を持って火がついた。漠然と外国人参政権って問題から、シナ人が選挙権持つってというきわめて具体的なものになった、イメージがね。そういった（運動やメディアの）誘導とかいろいろあって、話がホットな、具体的なイシューになってきたと思っただけです。

（選挙管理委員会に連絡をとって調べたのは）いつだったかな、2、3年前だったかなあ。選管とか市役所村役場に電話して、おたくの村には永住者何名いるのってね。隠岐島には何名いるのか、そういうのをいろいろ調べたわけ。最初に調べたのは荒川区か。最初に東京の荒川区を調べて、すごい、まずい、やばいんですよ。あそこは区議会議員なんて20票くらいで順位が入れ替わっちゃう、そこに何千人っているんですよ。それは区議会議員びびりますわね。彼ら選挙権持ったら。コントロールされちゃいますよ。そういう風に具体的なイメージとして、ここが危ない、ここが危ないと。東京じゃ荒川だ新宿だ、大阪は生野区、九州はここだってね。そういう風に活動やっついてね、段々とみんなが危機感を持ってくれるということですね。

具体的に選挙得票数と在日の数、外国人の数をドッキングさせたのは僕が最初です。それで実際の危なさを、だいぶ前から私が最初に警告したんで。あの荒川区の資料っていうのは衝撃的だったんだね。簡単に3分の1くらいコントロールできる、区議会議員を。それコリアだけですよ。これにチャイナになったら大変なことになる。

（なぜ調べたのか）説得力を増すためと、もちろん興味ありますよね、自分で言っていてどれだけ危ないのか、知りたいじゃないですか。危ないと言って、実はこんなに危なくなかったということ、やっぱり危ないじゃないかって知りたいわけですよ、自分で。

### 《ネットワーク》

（学生時代からの知り合いとの付き合いは）結局ねえ、両方ですよ。さまざま。全然知らなくて『正論』や『WILL』みて参加したり、昔からの仲間のやっついているところに行ったりとか。40年来の仲間がやっついているわけじゃないですか、いろいろな活動をね。そういうと

ころに参加したりとか、いろいろですよ。だから一概には言えない。(行動する保守との付き合いは) 僕が会を始める前から、××とか。××(との付き合い)は8年くらい前かな。僕が始めた頃に、桜井さんが在特会始めて。

××さんは、5、6年前はまったくマイナーだったんですよ。1人2人しか活動に来ない時に、頼まれて来てくれといわれて、僕も会社ヒマだったから行くよって、よく3人くらいでやっていたんだよ。そのうち動画ができて、動画が流れることによって知名度が上がって、彼のところにいっぱい人が来るようになって、まあよかったんだけどね。今でも基本的には××さんからメールがきて、行くぞといっただけ。最近あまり付き合わないんだけど。いろいろ用事があってね。なるべく付き合うようにしてるんですけど。

(もっとも力を入れて活動したのは)ここ2、3年じゃないですか。そんな大したことやってるわけじゃないんだけどね。去年1年かなあ、やっぱりピークだったのね。結構忙しかったんですけどね。サラリーマンやりながら。でも結構暇な仕事だったから、平日の真昼間からやりましたよ。もう閑職になるんですよ。大企業で50(歳)過ぎると窓際になる、窓際に。(ずっとリストラされないで)たまたま僕なんかレアケース、いまだき珍しい恵まれたケースだね。最後の恵まれたケース。だからラッキーです。武道館なんか行きましたよ、集会(日本会議が実質的に主催した2010年の1万人集会)にね。ただ、日本会議はあまり本部は接近してこないね。いろいろあるんですよ、右翼の中でね。日本会議のいろいろな支部がね、××の支部とかそういうところは接近してきて、去年も日本会議のなかに呼ばれていたんだけど、そういうのはあるんですけど。なんか日本会議本体はあまり接触してこないね。だから僕の活動の場としては〇〇とかね。

最近他のこともあるけどね。沖縄の話、自治基本条例の話、人権擁護法案の話とかいろいろありますけどね。今度は母体保護法。いわゆる保守のいろいろな問題を、いろいろ頼まれているんですよ。頼まれて自分にできる範囲のことはやろうかなってにわか勉強していくわけですよ。自分で受けて自分で行くみたいな、一番気楽でいいですよ。組織を作って自分が会長になって部下を持って、そんなのとんでもない話で。

私はね、たとえ相手が創価学会だろうと共産党だろうと、外国人参政権に反対するんだっただどこでも行くよと。あいつはいやだこいつはいやだ、あいつは統一教会だ、とこの業界多いんだ、そういうのが。私はそういうのいやだ。誰でもいい。ビジネスなんだから。気にくう気に食わないでやっちゃいけないんだよ。その辺のビジネスマインドがない人が結構多くて、オレはあいつは幸福の科学だから共闘しないと、あいつは何とかだからといろいろいうんだけど、関係ない。ビジネスの世界は関係ないんだから、外国人参政権を打倒するという目的のためには、誰とでも何でもやるんですよ。というのが僕の闘争観。

#### 《民主党政権と外国人参政権》

やっぱり盛り上がってきましたよね。民主党政権になったおかげで、みんな危機感あるからね。すごいアンチ民主党も盛り上がっていたんじゃないんですか。人数もそうでしょ。反対するデモなんかどんどん増えているからね。大したもんですよ。

(参政権法案を出さなかったのは)出せなかったんですよ。結局反対がいたから、党内保守派がいたわけですよ。松原仁とか渡辺周とか。あと渡部恒三とか、そういう元自民党の保守派の人たちが反対したからでしょ。だから出せなかったんじゃない? 党議拘束を外す

ってことは小沢一郎の体質からありえないでしょ。だから結局まとまらなかったんじゃないかな。相当渡辺周さんなんか裏で動いたらしいけどね。出さなかったけど、出したら下手すれば分裂したかもしれないし。

これは個人的見解だけど、小沢一郎なんてのはしたたかな男だから、本当に民団がかわいそうだから在日がかわいそうだから選挙権あげましようなんて思っていないと思うんだけど。馬を使っている、エサを食わしちゃうとエサがなくなっちゃうじゃないですか。次の選挙で協力してくれなくなっちゃうじゃないですか。エサをどンドン・・・協力させ続ければいいわけで、にんじんを馬の前にぶら下げて馬を走らせればいいんじゃないか、そういう風に使っていると見えなくもないけどね。したたかな男ですよ。

(外交目的で外国人参政権を使っているのではないか) 対コリアで? そうですかねえ。それはよくわからないけど。なるほどね・・・。でもね、民主党の推進派のなかには参政権を与えることによって韓国との関係がよくなるという人いるけど、とっても愚かな話であって、良くなるわけなんかないので。竹島があるからね。それとやっぱり韓国の政治家から見たら、在日の選挙権なんてどうだっていいことなんです。向こうは在日から税金は取りたいし、徴兵は取りたいと思っているのにさ、選挙権持ってどンドン向こう側に言っちゃうと、日本のほうへいっちゃうと。日本の投票すると、韓国に背を向けてさ、ヘンじゃないですか。こっち向いてこっちに投票しろよといいたいわけでしょう。だからそんなに僕は本国政府はリップサービスで言うけども、日本に来ると民団がいるからいうけれども、本気じゃないんじゃないの。と思いますけどね。

(外国人賛成権法案を) やりたがってますよ、まだ。民主党の左派も自民党左派も公明党も。でもそういう余裕がないでしょ。それどころじゃないんじゃないですか。だからいろんな 이슈がみんな流れちゃったと。とりあえず。津波(東日本大震災)で流れちゃってどっかいちゃった。復興してきたらまた考えるんじゃないかな。あとどういう連立政権ができるかによるけどね。そこはよくわからないね。

(人権擁護法案は) やる気なのかね。ただ、ああいうのって僕もよくわからないんだけどね、選挙向けのアドバルーンっていうのはあるんですよ。どこまで本気かわからない。選挙が近くなると、まあ今度がそうだけでも、民団向けこれやるよとか、解放同盟向けこれやるよ、とか打ち上げるじゃないですか。で、選挙終わるとこうなるでしょう。どこまで本気かなってちょっとわからないけどね。人権擁護法案なんて成立しないでしょう。今の状況だったら。

公明党を与党(に)するために使うのはありえますけどね。公民連立したら本当にやばいからね。でも公民連立もありえるんですか? まさかこんな選挙に弱くなっちゃったところにくっつかないでしょう。下手すりゃ、あいつ、仙谷とか興石とか極左政権になっちゃうかもしれないでしょう。それはありえる。まあ、仙谷は公明党と仲悪いのか。

#### 《今後の活動》

この前、自治基本条例に反対する会をやって、ちょっとしたきっかけで引きずり込まれて、自治基本条例に反対する市民の会を立ち上げつつあるんですよ。結局いろいろなところから引っ張り込まれるわけよ。人と会えば会って、仕事が増えるんでいやなんだけど。定年になったらゆっくり畑とかやりたいのに。だから外国人参政権だけじゃなくて、自治基本条例、

まあもろもろやっぺこうかな。細々と。微力ながら、と思っているんです。

(誰と活動するか) これ見てくださいよ (とたくさんの熨斗袋を見せる)。選挙の応援ですよ。これ、昨日 (手で厚さを示して) これくらいあった。配って歩いている。今日もこれから配らなきゃいけない。いつでもどこでも誰とでも一緒にやる。これが僕の方針なんです。だからあれは民主党だろうとか、あいつは統一教会だろって関係ねえんだ。当選してくれればいいんだよ、って。ね。鄧小平がいていたように、白い猫でも黒い猫でもネズミをとりゃいいんだよ。私も白い猫でも黒い猫でもいいんです。外国人参政権だのへちまだのっているね、反日勢力ってね、ネズミを食ってくれればいいんだよ。関係ねえんだよ。4年前と比べたら倍以上配っている。逆に困るんだ、金がかかるから。

(8年前の統一地方選では) いなかった。どんどん増えていったんだよ。まあ4年後は出せないな、もう。収入がないわな。国会議員となると大変ですよ、金かかりますよ。市会議員なんか1万円でいいけどさ、国会議員となれば1万円とはいかないわけです。片手(5万円)包まないといけない。何十万ってかかるんですよ。選挙のたびにね。

自分の体を使ってやりたいけども、これもつまらない理由なんだけど、私、××に住んでるでしょ、〇〇まで出てくるのが大変なんだ。朝早くからさ、駅前で。4年前の時は△△(近所)に住んでたわけ。近いから、朝早くから夜遅くまでお手伝いできるわけだ。走り回って運転したり、ポスター貼ったり。体でできるわけ。それができないんだよ。それから人数が増えちゃってできないわけですよ。選挙期間7日間で15人を応援しようとしたら、これありえない。しょうがない。

### (3) 在特会について

(イデオロギー的な評価) まあキャリアが浅いからだね。それこそ高校生時代からそういう本を読んでいるんだから、僕の場合はもう彼らとは違うよね。生まれる前から『諸君!』『文芸春秋』読んで。「嫌韓」ってあるでしょ、いったん嫌韓という目で韓国をみたら、あれも気に食わないこれも気に食わないってなるじゃないですか。彼らが日本を見ているのと全く裏返しでみている。お互いに憎みあっている、という状況ですよ。だからその、今まで自分が知らなかった過去30年って、日本がこれだけやつらに踏みにじられてきたんだって思ってるのは確かです。だからまずコリア、チャイナ、(に対して) 頭来ているわけです。気持ちはわかるけど。で、そこだけ集中していく。他の事についてはあまり興味ない。

だからパチンコなんか異常に盛り上がっている。今回節電担当大臣が、六百何十業種に対して節電の出してましたよね。それで遊技場だけ入っていないんだよ。何で入ってないのかって答えられないわけですよ。大臣が。そういうのにつつつくわけです。おかしいじゃないですか。そういうことでパチンコだけを特別に優遇しているわけですよ。平等に扱えよ、パチンコだけやめろってっているわけじゃなくてね、他の業種と一緒にしたらいいじゃないか、なぜ特別扱いするんだって。答えがね、「いや、あの業界が自主的にやっているからいいんだ」って。自主的にやっているからいいんだっていったらさ、節電なら他の業種がみなそうじゃない。返事になっていない。そういうところがみんな腹立つんですよ。それで彼らだって、コリアンと今の政治家とパチンコがぐるになってるって。

確かにパチンコ業そのものやめちゃえっていうのは無理な話でさ、僕も指摘したことあるんですよ。あんた憲法違反だって。職業選択の自由って。彼らの論理はあってね、パチン

コ業はいくらやってもいい。一兆、二兆、百兆円産業だっていいんだ。換金しなきゃいいんだ。昔みたいにお父さんがチョコレート持って、家(に)持って帰って子ども達を喜ばせる。缶詰たくさん——カニの缶詰なんて滅多に滅多に食わないやつをたくさん持って帰って、奥さん喜ばせる。そういう健康な姿に戻せばいいんだって(在特会は)言う。なるほどなど。それはそれで論理が一貫している。「換金なんでするんだ」って、現金で。

僕も知らなかったんだけど、100%換金しているんだってね。私はね、タバコ屋のところで換えてると思ったら大きな間違い。換金するこういうのがあるんだってさ。現金を持たせるのにほんのちょっとだけ換えているんでしょ。それをやめて——まあ無理だけどね、警察が利権持っているらしいから。でもちゃんと現物にきなさいよ、と。そうすれば、赤ちゃんを車に置きっぱなしで夢中になることもないです。パチンコで借金まみれになることもない。パチンコで自己破産する人もいないでしょ、家庭を破壊しないでしょ。商品を全部家庭用品にするわけです。洗剤とかさ。旦那さんが会社の帰りにパチンコ行ってき、洗剤持ってきてくれたら奥さん嬉しいわな。でもこの洗剤実はね、3万円も5万円もかかったと。これはこれで問題が出るけど、やっぱりね、それは論理一貫していると思いますよ。パチンコに関してね。

若い人っていろいろ千差万別いるからさ。僕の知っている在特会の幹部だってさまざまですよ。天皇のテの字も頭がない人もいるし、これは熱烈天皇主義者もいるし。いろいろだな。一概にはいえない。ただこの業界で長くやっていると、段々やっぱり似てくる。天皇とかさ、大和心とか武士道とか、そういうものに収斂していく。成長していく。そのパチンコから、たとえばアンチ 코리아 から本を読んだり人と付き合ったりして年数を経て、本当の保守主義者になっていく人も多んじゃないんですか。一概には言えないけど。

僕は保守主義って言葉がね、保守って言葉あんまり好きじゃないけどね。行動する保守なんて言っているけどさ、俺やだな、あれ。保守って言葉が好きじゃないね。保守ってだってさ、昔保守党って政党があったんだけど、英語で書くとメンテナンスなんだな。コンサバティブだったらいいんだけども、だったら保守って呼びたくないんだよな。じゃあ何がいいかって言われたらね、僕なんか活動している頃は保守主義なんてなかった。昭和40年にはなかった。保守なんてなかった。そういう言葉はなかった。僕ら自分が保守派だなんていわれたなんて知らなかった。保守派？ウソでしょ？覚醒するほうだと思えるですよ、だから民族派って言ったんですよ、当時は。民族派とか日本主義とか。僕は古いからね、オールドだから。だから保守派って言葉はなじめないね。昭和40年代の新右翼だな。もうみんな年取っちゃったけど、ニューライト。保守なんて言葉は最近でしょ。

そのときの保守ってのはね、まさに自民党を指しているんですよ。まさに自民党そのものだったんですよ。自民党そのものが嫌なのだったら、保守と言われるのにすげえ抵抗がある。面倒くさいからあまりいわないけどね。日頃は別にいちいち言い返さないんだ。「保守派です」って言われて、「違うよ」と言わないし黙っているけど。言い返さないけども。

(自称するとしたら) 王党派だよ、一番しっくりくるのは。フランス革命でいえば王党派だよ。ロイヤリスト。今、王党派と言っても誰もわからないからさ、言わないだけで。面倒くさいから。民主主義に代わるものは何がいいかっていうと、答えはないですね。議会制民主主義しかないんじゃないですか、今のところは。立憲君主制でもいいしさ。1つの国家の理想としては、僕は大日本帝国を持っているわけですよ。明治27、8年以降の大日本帝国っ

てのが。まあ、僕の知っている限りでは一番いいあれだった。残念だけどね。僕ら残滓しか知らないわけですから。

#### (4) 小括

β氏は学生運動華やかかなりし時代から、右翼イデオロギーを持ち続けている。そうした民族派の一部が、行動する保守として——β氏自身はこの言葉を好きでないというが——在特会を生み出す基盤となったのを、α氏に続いて確認できる。ただし、民族派ないし新右翼のほとんどは、在特会を初めとする排外主義右翼を批判している。もっとも、民族派も外国人参政権についてはおしなべて反対なので、それをイデオロギー的な「逸脱」ということはできない。だが、ほとんどの民族派が外国人参政権を主たる課題としていないのに対して、β氏がそれを重視するのはなぜか。

第1に、β氏が「つまらない話」というように、強い動機があって取り組んだというよりも、講演会を聞いて危機感を覚えたこと、別の講演会で出会った若者にいざなわれたという「プル要因」が作用している。仮に、β氏がそれ以前に自らの中心的な課題に取り組んでいたら、こうしたプル要因によって運動を始めることはなかっただろう。その意味で、β氏が全国を転々として決まった活動をしていなかったという事情は大きな要素となっている。

だが、それだけでなく本人が「 코리아好き」というように韓国に対する関心はあった。それが、「本国にいる植民地賛美の韓国人」と「参政権を要求する在日韓国人」という二項対立へと読み替えられ、参政権を問題視することになったとも考えられよう。氏自身が入手したデータにもとづく計算によれば、「簡単に3分の1くらいコントロールできる、区議会議員を」というが、外国人がそれほど強固に組織化されていれば、参政権など持たずとも影響力を行使できる。こうした「常識的な計算」が、参政権論議からなぜ欠落するかは、β氏の聞き取りから明確には伺えない。他の活動家のデータと合わせて解釈する必要があるだろう。



## 29 在特会から学んだY氏の場合

### (1) 政治への関心

高校生の時にはたまたま政治経済の授業をとっていて、点数取るために勉強していたら「割と面白いじゃん、政治の世界」ってところが始まりですよ。振り返ってみるとそうですね。政治にあんまり興味なかったけど、たまたま授業でとったのがきっかけなのかなという感じはします。

今振り返るとね、やっぱり高校時代って多感な時期じゃないですか。政治的なものかちょっとわからないけどね、活動のベースになっているものが高校時代にあって。たまたま歴史の授業でちょうど俺、茶道をやっている明智光秀のところがあった、日本史で。お茶の家元が、明智光秀は千利休だったという一子相伝の秘密を暴露したんですね。今までは秘密にしてたけど、これはもうそういう時代じゃないでしょって。歴史学会がどんでん返し喰らって、それは俗説だっていってつぶしにかかって、今、教科書も書き換えられていないけど、家元が言うのなら間違いねえだろって、それをテスト——論文テストで明智光秀について書いたんです。千利休だったと。こうして歴史というものは捏造されているもので、これが日本でも行われているっていうのは普通にあるだろう、と。「だからまるで私たちが学んでいる歴史というものは無意味に近いと、教科書なんて」って論文で書いて、教科書に載っていないことを書くな、と（教員が）言ったのが多分きっかけになっていると思う。すべての。世の中の仕組みに対する、不条理に対する文句っていうか、それは多分それがきっかけだったんじゃないかなって思いますけどね。

それから高教組がストライキやるって言った時に、それは思想とか関係なく、「いや先生、俺達は授業料を払っているんだぞ、高教組だか日教組だか知らないけどストライキやって休むんだぞ。俺達金払っているんだから休んだっていいだろう」と。ストライキの日に合わせて授業ボイコットするという話で集めたら、行こうぜ行こうぜっていう話に。まあ、高校生ですからね。朝まで酒飲みながらどんちゃん騒ぎしただけなんですけど。そういうのもすべてそこから多分起源ですね。自分達のちっちゃい気持ちの中での不満とか、不満に対するちっちゃい正義みたいなのを体現するという方向性を持つようになったのは、明らかにその時期です。

ただ、それは小さい政治。結果的にはわがままというかね、遊びたいだけだったんだろと言われたらそうなんだろうけど。そこには小さい反骨精神みたいなのがねえ、どこかにあったかな。（筆者とY氏が）同じ年代だからわかると思うけど、あの時、あの高校生の時代って反社会的、社会に対する不満みたいなものがすごいヒットしたり。たとえば尾崎豊とか、小山卓治だったりとかっていう。あと自分は何なんだっていうのが混沌として、向かっていく敵とか目標がないような時代だったから。あらゆる不満のぶつけどころを探していたのかもしれないですね。

（教員組合から社会党嫌いになることは）ないです。思想とも結びついていない。爺ちゃんっ子だった、爺ちゃんと婆ちゃんのところで育ったんで、高校時代ね。必ず爺ちゃんがお前なんぼ忙しくても仏壇に手を合わせて行けとはいわないんだけど、天皇陛下のお写真があって陛下に挨拶くらいしてけ、という爺ちゃん。自然とこう、天皇陛下というものが学校でも教えられないじゃないですか。だから多分わかんなかった。天皇陛下の御存在自体考

えたことなかったのに、爺ちゃんに高校時代お世話になってから、天皇陛下というのは尊敬しなければいけないものなんだ、と毎日刷り込まれていったっていうのが土壌になっていると思いますね。

(選挙権を持って) 高校のときは振り返るとそれが政治に関わっていく土壌というかきっかけになったんだらうって振り返っているけども、選挙権持った当初ってのはね、大人になった一つの証みたいなくらいな感覚ですよ。だからそこでも政治というものを考えたりとか、候補者のことを考えて投票にいくというよりは、大人になった権利を行使に行くぐらいのもので、まったくの愚民ですよ、要するに。そんなものに選挙権あげちゃいけないのに、と今思えば思うぐらいの何にも興味もない状態でただ選挙に行っていたっていうだけです。

面倒くさいとは思わなかったし、投票したやつ、クイズみたいですね。誰が当選するでしょうかって。僕はこの人だと思えますって入れたやつが、いったいどうなるんだらう、そのぐらいのものです。でも、そのノリでいってもね、まったくもって意味がない。それで選挙投票率を上げていったい何がどうなるんだらうっていう。

(投票する特定の政党は) ないですね。投票所に行ってよくありますけどね、当日ポスタ一見てどれにするみたいなの結構いるんですよ。この人イケメンとか、そういうノリですよ。人相で決める。名前で決める。何かまじめそうな名前だな、とかそれくらいなものですよ。本当に選挙権持った当初っていうのは、まったくもって政治に興味があるから行くとかじゃなくて、責任として行っているとかではなくて。大人の一環として行使するのが大人になった気分がする、みたいなそんなまったくもって軽いノリでしたよ。

共産党とかに入れてますよ。今でもたまに入れたりしますけど。潜在的に自民党だって、お前みんな同じだらうっていうのがあったので、当選しないやつに入れて頑張れ頑張れって言ったりとか。共産党を支持しているとかじゃなくて、絶対投票しえない人に入れたりしてます。それは民主主義の否定。学生時代はさっき言ったように、何も考えずに入れてただけですけど。

## (2) 外国人との接点

(身近に) 北朝鮮籍の人はいましたよ。飲み友達で。それが仕事がなくなっちゃって××に行ったのかな、恐らく。行っちゃったんだけど、否定してましたよ、朝鮮学校のあり方とか。朝鮮総連のあり方とか。生まれも育ちも日本人なのに、自分の意思とは関係なく考え方もほぼ日本人ですよ。だけど、1つの絶対に動かしちゃいけない存在が將軍であったりとか、完全に傘下になっている朝鮮総連や朝鮮学校があるお陰で、我々は不幸なことにしかならない。だから俺達が人間らしくというか、人として生きていくためには、在日特権というものを朝鮮人の側からぶっ壊さなきゃいけないものだと思うけど、それは今できないっていった。圧力が非常に激しくて。でも恐らく、そういう考え方をもっている在日ってほとんどじゃないですかって言ってたね、その飲み友達は。

いなくなっちゃったけど。高校卒業資格もないから就職できないですよ。朝鮮学校卒業したってね、何の資格もないですから。そうすると、同胞の会社にしか入れない。だから、故郷大好きなのに生まれ育ったところを捨てていかなきゃならない。これから朝鮮学校に入っていく人たちも同じ道を歩むから本当に不幸だと思う。それを聞いてからね、ああ在日特権というのは多分なくならないけど、ぶっ壊す運動っていうものを始めて、在日たちがそれ

自ら「在日特権が自分達の首を絞めてるんだ」ということに気がつくところまでは、やらなきゃならないだろうって思ったね。そいつが××に行くのをきっかけにして。

自分が考えてたよりも、大きい問題だなんて。重要っていったら重要なんだけど、どうでもいいたらどうでもいいって話なんですけど。朝鮮人のなかでも一部の朝鮮人が、利権というか漁っている話で。微々たるものですけど、国民の税金からもらってるよね。それよりももっと不条理なものっていっぱいあるし。許せねえ許せねえっていうけど、別に許してもいいんじゃないのっていうぐらいなものだけ。でもこの運動って展開していかなきゃいけないだろうって思う。

### (3) 右翼活動へ

#### 《野村秋介との邂逅》

野村秋介という方が、多分あの当時はもう亡くなってたんですね。何年前だったかちょっと…。で、亡くなった直後ですよ、そんなにたっていない頃に先生の本があって。その数年前から政治にはすごい関心があって、テレビを通じて「朝まで生テレビ」ってのが爆発ヒットしていました。あの時に野村秋介先生というものを知って、ああなんか右翼ってなんかわけわかんなかったのに、ちゃんと国のこととか国民のこととかを真剣に考えて、しかも行動する人が今の時代にもいるんだっていうのがわかって、感じて、それリアルタイムで見たんですけど。

亡くなってからたまたまその本を、友達のなかで政治の話をよくするように段々なってきた、それで多分右翼的な話をしてたんでしょ、きっと。恐らくね。で、友達が古本屋から「お前の好きそうな本を持ってきてやったぞ」ってくれたんです。それが野村先生の本で、そこからですね、一気にヒートアップしていったんです。何かしなきゃいかんなど。それが多分ね、行動するっていう風に走っていくきっかけ。

「風の会」というのができたのも知ってたけど、それほど関心はなくて。多分その選挙が終わったくらいから、少しずつ政治——世の中の動向にすごい興味を持つようになって。朝まで生テレビの影響が大きいのかって思いますよね。政治を語るとかね、世の中を語る論議するってのはこんなに面白いもんなんだ、っていうのを…田原総一郎に感謝しなきゃいけないね。嫌いですけどね。きっかけ、多分それじゃないですかね。今記憶をよみがえらせていくと。恐らくそれくらいしか思い当たらないですね。

(どうして朝までをみたのか) たまたま夜更かししてやっていた番組がそれだったんだと思いますよ。それまでテレビ、遊ぶほうが楽しくて、テレビほとんど見なかったですから。夜中しかテレビ見れないっていうか、遊びが忙しくて。間違いなく学生時代なんだよね。大学生ですよ、それこそ。浪人して入ってるから、通常でいくと3年になるのかな。1年遅れで入っているから。大学2年生くらいのときじゃないですかね。あんまり覚えてないですけど。多分それが関心を持つきっかけだったと思います。

#### 《維新政党・新風への加入と脱退》

(野村秋介の本で) 感銘を受けて、その当時は結婚したばかりだったのかな…いや違うか。離婚しているんですけど、離婚するちょっと前くらいに野村先生の本…いや、子どもがいなかったからその前かな。ちょっと記憶が定かでないけど、その本を手に入れて野村秋

介事務所に電話したんですよ。で、先生の本を読ませていただいて何ができるんだろうと思ったんだけど、自分は右翼団体は嫌いなんです。今思ったらとんでもないことを野村先生に言ってたな、右翼に右翼が嫌いだってね。若いから怖いものがなかったんですね。で、右翼は嫌いなんですけどどうしたらいいのでしょうか、といきなり相談の電話したんです。

で、蜷川先生っていう野村先生のことを継承している先生がいて、「ああそうか、じゃあね、君が納得するかどうかは後で判断すればいいけど、魚谷哲央という人を絶対に裏切らない男を紹介する」って言って、その当時新風の党代表だった魚谷さんを紹介されて党本部に電話したら、〇〇本部があるからまずそこに電話してごらん、って電話したら「ちょうど1週間後に党のブロック会議があるからそこに来てみなさい」ということになって行って。参議院選挙に出る多分直前だった、半年前とかそのくらいですね。

で、そこでね、選挙に出る党なのに「選挙どうする？」みたいな話してるんですよ。何だこれ？ と思って、「初めてきた感想は」と聞かれて「こっちは野村先生のところから来ているのにね、紹介されたところが選挙間近なのにどうやってやる？選挙は、みたいな話をしているから、大人たちが、正直に言って下さいというのでショックでショックでしょうがないです」なんだこれ、って話をしたんです。これが選挙に出る党ですか、来て時間の無駄だったみたいなことを、生意気なことを言ったら、「いやいや、こういうとこって言いだしっぺがやるものだ」といきなり党の事務局長にさせられた。

で、選挙の「せ」の字もわからない人間が選挙を切り盛りしなきゃいけない立場になっちゃって、そこから本格的なスタートです。活動といえば。もう選挙の（資料を）読んで、すぐ管理委員会に電話して、すべて初めて俺が入って初めての選挙で、選挙のこと知っている人もほとんど事務局にはいなくて、全部手探り状態で参議院選挙を戦ったのがきっかけ。活動の、行動のきっかけですね。

（それが）平成10年。2回戦ったんですけどね、活動していくなかでどんどん矛盾、政党の矛盾とか民主主義に対する矛盾とか、そういうものが段々と肌で感じるようになって。新風はね、どのくらい前かな、途中でやめているんですよ。2回選挙を戦って、次の選挙のちょっと前にやめてるのかな。

新風はあの当初から拉致事件に、救う会の——まだ救う会という名前がついていない時代で、佐藤卓己先生の時代から取っ掛かりを持っていたんで——活動の1つとして展開していたんで。新風を通して「家族会の人たちが座り込みやるんだけど」っていう話で「行きます」といって。その時は何やってたのかな——花屋さんだったのかな——多分花屋さんだったんですけど休んで行きました。

あの頃に強烈だったのは、自民党から共産党に及ぶすべての既成政党は、拉致事件は右翼のでっち上げだっていう評価だったんです。だから佐藤先生は苦勞されてたんですけど、家族会の横田さんのお父さんとかと自民党本部の前で座り込みをやったことがあるんですよ。あれ、何で座り込んだのか覚えてないんですけど、多分拉致事件に対する対応が何でやらないんだっていう抗議だった。

で、野中広務が出てきて、励ましてくれるのかと思ったんです。そうしたら、「お前達がいくらイヌのようにギャーギャー騒いでも、拉致被害者なんて帰ってこないんだ」っていなくなりました。党本部からたまたま出てきて。それで一気に、なんていうかな、政党活動から反体制みたいなものに自分の気持が変わっていく瞬間だったんですよ。拉致問題を通

して。

すべてね、嘘、嘘モノじゃないか、政治家ってものは。個人的に悪いやつがいても、国のために働くのが国会議員とすれば、国民の生活を守らなきゃいけないという期待・前提をどこかに置き忘れてしまっている。その一番根っここの部分がないから、民主主義だって成り立っていないし、すべてが嘘モノ、作り物なんだ、これをどうやってぶっ壊そうかと思ってたんで、テロリストみたいな心境でした。民主主義もニセモノ。学生時代の俺の時のように愚民が選ぶから、愚かな政治家が生まれるんだとしたら、この民主主義ってものもニセモノだな。じゃあ愚民が選ぶ選挙を何百回繰り返しても、よくなるわけじゃないかねえか。

じゃあ最終的にはみんなこれ言うたすごいびっくりするんだけど、最終的にはテロしかないだろう。テロっていってもいろいろなテロリズムってあるけど、ただ単に殺害するのではなく、テロというものに行き着いて、その行ったテロに対してある一定程度のそれに賛同する意思を表明する体制ができれば、少しは世の中は変わっていくかもしれない、というのを持ち始めたのはその頃。それは今でも変わってないっていうか。

#### 《自前の組織作り》

××会ができたのが、多分（平成）11年——10年くらい前なんです。その頃から、立ち上げ当初から護国神社参拝はやってます。立ち上げのスタッフの1人として。その頃はまだ新風もやってたはずですね。で、××会ってのは、最初は立ち上げる意思は全然なくて、その時も日本会議とか、西部邁先生の塾だとか、保守系の団体、ああ、歴史教科書を作る会、保守系の団体が流行りみたいにぼこぼこ表に出てきてた時代で、そこでいろいろな会合とかいくと、会う若い——当初若いやつらがいつも会うねって話になって、5月3日の憲法記念日と8月15日、新聞が左翼のオンパレード。当初は、護憲派の集会在どこどこで開かれた、（という）真っ赤っ赤な記事なんです。8月15日はその当時から赤紙配ってね、自衛隊反対、憲法守れとかやってたんで、その日も真っ赤っ赤ですよ、新聞紙上は。それで、保守だか右翼だか知らないけど、うちの主張が活字にならないってのはこれ非常な問題だろう、と。多分県民は地元新聞を見て、世の中には護憲派しかいないんだとかね。世の中には自衛隊反対の声しかないんだっていうような錯覚を、潜在的に刷り込まれていく土壌が新聞にはあるなど。これを何とか打開しなきゃいけない。それでいろんな団体をお願いにいったんです。是非憲法記念日は自主憲法制定、まあ改憲派じゃないんで自主憲法っていう運動展開を講演会でも何でもいいからやってくれって。改憲でもいいすかって。とにかく護憲ではない集会をやってくれと。8月15日には自衛隊の存在を認める、というか賞賛する、先の戦争は悪であるという戦時体制を打破しようという運動を展開しなければ、まっかつかの状態から脱却できないぞとお願いに行ったら、断られたんですよ。いやあ、うちの団体は人集まらないしね、って。仕方ないから俺達でやるしかないなということになって作ったのが、約10年前の××会。正確に何年前かわからないけど、約10年間毎年5月3日と8月15日は必ずそれは外してない。あと中間にはいろいろな講演会をやってるんですけど。それは今でも続いています。

#### 《ネットでの活動》

ネットってね、有効利用しなきゃって思い始めたのが何年前かわれませんが、□□会と

というのができて、本当に本当の街宣右翼から主婦まで会員がいたんですよ。多分 300 名くらいの規模だったんですけど。で、それがあの当時掲示板が非常に流行って、保守とか右翼が発言する場ができたんです。今まで自分で思っているものを語る場所ができて、掲示板がすごい盛り上がった時期があつて。それをツールにしてできたのが□□会。まずこのツールを生かして、地元でも会員募ろうぜってインターネット活動ってのが始まった。そこで地元□□会を××会と同時に立ち上げた。それこそ 2 ちゃんねるもできたばかり。

で、総会とか行くと今の在特会の構図にすごい似ているんだけど、その頃はパチってやったら（クリックしたら）会員って感じじゃない。名前も□□会って重々しいし、会規もすごいあつて。だから遊びで入るっていう人は非常に少ないから、濃い 300 人だったんです。だから行ったら本当に 300 人近く総会に来るぐらいの。そこで議論とかいうものに磨きをかけていく修行時代みたいな。ネットの掲示板から、対面してぶん殴りあいになったり平気でするぐらいの真剣なもので。そういう時代を経験してて、そこから掲示板が廃れたんですよ。掲示板に書いても意味がない、便所の書き込みじゃないかと下がつて。それが収束して行って、ネットってもう使えねえなつて。ホームページ作るのも大変な時代ですから。ブログっていうものもまだなかったし。

その頃に段々動画になってきて、それをいち早く取り入れたのが——□□会が掲示板をいち早く取り入れて左翼より早く取り入れたけど——動画というツールをいち早く察知して取り入れたのが在特会だから、構図がすごく似ているんですよ。ツールは違うけど。

（トピックは）今考えると、それほど政局に対するものの議論ってあまりなかったです。今考えるとね。何々政権がダメだとか、いけないとかいうのはあんまりなくて、思想を語る場みたいな。俺は国家社会主義がいいと言った。民主主義をありがたく思っていたらそのうち大変なことになるぞ、みたいな意見から、俺みたいに最終的にはテロしかないだろうっていう人からね。やっぱり国民の中から保守側の政党政治を作って育てていかなきゃいけないから、新風しかねえなとかね。新風だったら国民受けしないでしょ、100 年経っても新風だったら当選しないよという奴がいて。そこが思考する土壌があつたっていうこと。思想性を語るどころです。政治より。

ただ、時局ではインターネット上の活動というものはいろいろあつて、例えばねえその時から昭和の日運動というのをやってて、要望書を提出してとか、やってはいましたね。あと細かいところでは、朝鮮人がね、新大久保かどっかの駅で人が落ちたのを助けて死んじゃったんですよ。で、あれに朝鮮人だろうが日本人よりも義挙、これは義挙である、日本人は学ばなきゃいけないって言って、そこに顕彰記念碑を役に立てる運動とかをやったりとか。それも実現してますけど。そういう細かいのからいろいろな活動をインターネット上でやり始めた。

インターネット中心の活動は□□会でやって、それで現実的な活動ってのは多分その時はね、保守が外に出て街宣をすることはまったくなかった時代だから、講演会活動をリアルとしてやっていたのは××会。二本立てでやっていた。（講演会では）メインは憲法。自主憲法制定ってのは新風しか言っていなかったもので、改憲派です。8 月 15 日、英霊を顕彰するという日本を中心にして、あとはあいている月に「平成の侍シリーズ」といって政党を支持するところはないけど、中には侍がいるって趣旨で、中川昭一先生を呼んだりとか、西村真悟先生を呼んだりとか、俺達が侍だと感じる政治家を呼んで講演会をするシリーズ。〇〇先

生が本を出したときとか、中国批判を展開するときには〇〇先生を呼んだりとか、そういう展開を。

(8月15日には)午前中は遺族会が団体参拝、それを外して午後から。なかなか入れないですよ。遺族会に入り込むってことはね。なんなんでしょうね。壁があるっていうか。特に思想性で動いているわけではないので。遺族というだけなんで、非常に隔たりがあります。遺族会だから話通じるだろうと思っただらね、靖国神社に行かないけど護国神社はうちの爺ちゃんがいるから来るんだって。だから最近じゃないですか、遺族会と一緒に、遺族会のいるところに僕たちが行って、参拝前にミニ講演会をやるって。靖国神社からもらったビデオを遺族会の見てもらったりとかは、ここ何年前からやっているんですけど、それまではまったく別。

(参加者は)新しい歴史教科書を作る会、これがあつたんで。あとは西部(邁)先生のところに行って、こういうのがあるんだけど、ビラ配らせてもらったりとか。あと日本会議も。今でもやっているといったら、建国記念日、あの当時ね、1000人くらい来てたんですよ。今多分500名いないんですけど、約1000人くらいぐわっと来て、そこで配らせてもらって。あとは救う会の活動は新風時代からやっていたから、救う会の人たちとかね。そういうところをお願いして、「やるんで参加してください」って集めて。

#### (4) 在特会での活動

##### 《フリーチベットと在特会との邂逅》

(外国人に対する関心が生れたのは)在特会と出会ってからですよ。あの時だ。サミット、洞爺湖サミットの時に、洞爺湖サミットが始まる1年くらい前、1年もたっていないか、その時はまだ××会やってたのかな…やめたんですよ、××会。というのは、全部俺がやって、何にもやらないし、やらせようと思っても何かね、俺がいるんならやってくれるかという人任せなものに代わって行ってしまったんですよ。最初はみんなやって。それでどうするかと思って、「やめるかこれ」って。「つぶしちゃえば」って。もう俺達がやらなくても、今頼みにいったら8月15日もやってくれる団体恐らくあるし。改憲運動もやってくれる団体あるから、もう存在しなくてもいいんじゃないかねとか。「つぶしまうべ」という話をして、まあつぶす気はなかったんですけど。俺がやめたらさすがにやるだろうということでやめたんです。

それで同時に保守も外に出なきゃいけないな、って思い始めた時期があつて。街宣活動ってその時代は民族派しかやっていなかったですから。「保守でもできるんだぞ」っていうことを、「街頭に出ていいんだよ」ってことを体現したくて、それもあつて××会をやめて。で、1人で立ってたんですよ。洞爺湖サミットが決まってから街頭に立ってたんですよ。それは反サミットではなかったんです。サミットをやるなっていうんじゃないで、どうせやるなら胡錦濤も呼べと。チベット問題、一体どうなってるんだっていうことを追及せよとね。そういう話をして、隣に□□先生(右翼活動家)がいて、右翼がやっている隙間を縫って街宣でやって。

その時にね、フリーチベット運動が起こってきて、それインターネットで2ちゃんねるかなんかで募集始めていて、地元でもやるっていう、チベットやるみたいな情報が入って。それを機会にして地元でそういうデモとか、保守みたいなものが表に出るきっかけになるか

もしれないな、といって自分からフリーチベットのほうに行ったんです。最初に説明会に。でも最初のうちから分裂したんですけど。

あの、日の丸を掲げてはいけないって始まったので、日本で日の丸を掲げたら何でダメなんだ、そしたらまだまだ国民は日の丸を掲げるのを見ると右翼だと思って拒否反応を示すから、掲げない。じゃあいつになったら掲げることができるようになるのか、と。それほど継続的にお前らはやるつもりなのか、と言ったらそういうつもりもさらさらないみたいだし。じゃあ彼らの言う国民が納得し始めたら掲げましょうという論理は、まったくもって逆で、最初は拒否反応を示すかもしれないけど、国旗を掲げ続けることによって普通になっていくほうが順序としては正しいということで分裂したんです。

そのときに、在特会の桜井君というのも来るらしくて。フリーチベットで胡錦濤の弾圧問題を取り上げろっていうデモをやるらしい。ちょっと手伝ってくれないかと。人集めもそうだし、てこ入れしてもらいたいということになって、そこで多分初めて桜井君と会ったんだと思います。その時に初めて在特会ってのがあったって。

#### 《在特会での活動》

で、「動画にいっぱいあるから見たほうがいいよ」みたいな話になって。面倒くさいけど見るかって、そしたらああこんなことやってんだって。でも地元の在特会って、1年に1回の飲み会やる程度で、活動ってものはなかったし、会の体をなしていなかった。これ、「桜井君ががんがんやってるんだから、支部あるんならやんなきゃだめでしょ」っていう話になって。やる人がいないんで、「じゃあ何か僭越ながら、街頭演説会のやり方とか、ちょっとやってみるかい？」みたいな。そこから当時の支部長にマイクを持たせて、最初は5分くらいしかしゃべらなかつたんですけど。街宣ってこうやってやるんだってよってひな型をそこで作って、徐々に作って行って動画配信すると、段々支部にも人が。

在日特権という運動は新風時代もずっとやってなかったけど、いやあ、改めていわれたら問題だなという話になって。ただ、桜井君は「これはプロパガンダ」って俺はずっと思ってたんですよ。あの、多数の会員を集めるためのプロパガンダとしてやるためには、誰もがわかりやすい問題を特化することなんです。全体的にやると人は集まらないんで。特化してやる。これプロパガンダ。動画配信も、最近大人しいんですけど、がんがんけんかやったり、こっちからふっかけていったり、ハプニングをわざと作るっていうような手法だったんですよ。これもプロパガンダだって思ってて、そうすると桜井君のやり方ってのは当時マッチしたんだろうね。急速に会員がこう増えて行って、そこで「こういうやり方もあるんだな」っていうことを教えてもらったよ、桜井君に。だからこれはしばらくは、形になるまではね、会員数がある程度増えるまでは、一緒にやってみようかなと。

で、多分1万人になったらというのは最近知ったんだけど、多分ある程度の会員を抱えると思想的な問題というのが出てきて、その問題突破すると思想性がなくても参加できる人が集まるんですよ。だから、恐らくいずれは思想性を持たせるための作業が必要になってくるだろうと思ったんで、現実いろんな人と会うときに思想の話をするようになったんです。運動って思想持たなかつたら絶対に空中分解するよって。桜井君は絶対そのうち会員増えたら思想性を持たせるための展開するからという話をしてたんだけど、去年くらいから思想展開をする。



民族派の知り合い連中からは「在特会と組んでたらダメだよ、あんな思想も何もないものと一緒にやったらダメだ」。その時僕は思っていて、いやいやいや、じゃあその運動に特化したものにしか食いついてこない、思想も何もない連中が思想を持ち始めた時に、右翼民族派が彼らに対して何て文句言うんだ。という疑問から段々と応援するようになった。

(役員になることは)断ってるんですよ。誰でも会員になれるし、ポツってやれば(クリックすれば)会員になれるから、それを拒む理由もないだろうってポツって(クリックして)会員になったんですけど。でもあくまでもその当初は××会をやっていたし、もちろんそれをやめてからは△△(別組織)を作ることになったんで。会員募集してないから団体とは言わないかもしれないけど、「△△ってあるんで(在特会の)会員だけど別だよ、運営には関わらないよ」と。サミットのデモの後だと思えます、会員になったのは。それは別に大した決意とかじゃなくて、「ああなんだポツとやったらなれるんだ」っていうノリですよ。

でも、本当はあくまでも在特会が体をなしてなかったから一緒にやっただけで、形になったら俺は違うことをやりたい。今やっている在特会の活動は僕がやりたいと思ってる活動ではないので、運営にも入らないし。要するにいつでも抜けれる状態。活動から離れられる状態。去年の12月で引退をしようと思ってたんですけど。それはね、支部長がものすごい能力のある人で——まああんな奴は珍しいです、それこそ英傑です——それが会を引っ張ってるから、もうなんか俺がいなくてもいいし、あんな俺がいる意味もないな、と。人も集まるようになったし。桜井君も思想性をもっと出せるような作業に入ってるし。ああ、じゃあ俺がやりたいことできるなって、今はいつ抜けるかなーと思ってる状態。

#### 《外国人問題の位置づけ》

関心持ったのは非常に遅いんで、桜井君のお陰なんだけど、何か理論とかってそんなにいないんですよ。「外国人参政権って必要なの？」って言われたら、そもそも必要なのか必要じゃないのかという論議する土壌にも本当はなくて。ここは日本だから、日本の政治の数とりというものは、当然日本人がしなきゃいけないし、ニセモノだけど民主主義なんだから、日本の国民が政治の行方を決める最低限の権利です。今、民主主義のなかで一般の国民が権利を行使できる、国の運営に関われるのって投票権しかないですから。だからそういう意味では論議の土壌は僕の中ではない。

でも憲法も外国人からもらってね、国の行く末を決める投票権も外国人にやって決めてもらうんかい。それは多分、日本を亡きものにする、日本を亡きものにするというよりは天皇陛下を亡き者にする。今、形の上でだけになってしまっているけど、根こそぎ亡きものにするっていうような土壌を作るためには、日本という原理に回帰させない作業が必要で、その一環として外国人参政権がある。

だから今ちょっとね、空気が変わってきているけど、本当に通りそうになっている時があったじゃないですか。民主党政権がぱっと台頭して、弱小勢力の自民党さん。まああれだって自民党が作ったものだけさ。ああこれ通るな、とその時は思ってたんだけど、「いやいや桜井君、これ俺達なんぼががんばったって通るよ、通ったらどうするんだ。通ったら民主主義だから許すのかよ、俺は許せない」ってなったときに桜井君は同じ考えだった。それは合法的な手段として国会を取り囲むって言ってたけど、ああ(人は)来ねえぞって。まだ1万人いってなかったです。

だから論議する土壌にはないものだけでも、非常に通すとすべてが揺らぐ起爆剤になるだろうってのは思ってたから。通ったら通ったで国民に「なんで外国人参政権ごときで命かけなきゃいけないんだ、あいつらは」っていうような場所を本当は右翼がやらなきゃいけないんだけど、そういう気概もないから。

じゃあ保守といわれ、本物の保守なんていねえんだけど、保守というものはあるから、そういう奴が出てきてもいいんじゃないかねえかなと。とにかく思考する材料を提供するものとしては、動画という方法もあるし、ただ一番強烈なのはさっき言ったテロ容認派、テロリズムによって問題を提起してそれに乗っかる国民の数が増えればいいだけの話であって。そのためだったら、今それが法治国家で罪になるんだったら、ちゃんとそれを償うようにすればいいわけで。自決しなきゃいけないほどのテロを行った場合にはてめえで腹切ってお詫びすればいいわけで。そういうところまで考えてるかなあ。

(外国人参政権は) それくらい重要だとは思う。だけど、全部在特会の取り扱っているものって本質的にそうなんだけど、誰も口にできなかったが、本当は大事なのに大きな盛り上がりを見せないっていう意味では。在特会のやり方って非常に下品だとか言われてるけど、あれこそテロの気質なんですよ。何言われようが向かっていく。ばんばんけんか売るとかね、あれも一種のテロリズムですよ。インパクトを与えてという意味では。あのやり方もいろいろ民族派のとかいわれるみたいだけど、気にすることはねえよって思うし。

## (5) 自前の活動へ

### 《1人での活動》

きっかけがあって、僕の△△の顧問兼相談役が〇〇という人物です。その人は多分10年くらい前から交流があったんだけど、その人がたまたま地元に来ることになって、ずっといろんな話をしたんです。そこで邂逅したっていうか。今までは知り合いという付き合いを——ずっと年賀状のやり取りをしてただけだったんだけど、その人の今やろうとしている活動とか思想の根本、日本人は民族派も保守も含めて左翼も右翼も関係なく日本人は何なんだと。その思想の根っここの部分に回帰する作業を、誰かがちっちゃくても始めないと、この国は本当になくなるし、なくなってもそれを語るものとか思考する者がいれば何とかなるかもしれない。

ということを2人で話していて、「□□君そろそろね、根っこを掘り起こす作業を一緒にやろう」と、何かまず会作らないとダメだという話になって。で、※※——※※という団体です〇〇さんのは——それを地元でやれっていったから断ったんですよ。僕は〇〇さん尊敬するし、師匠の1人であるとは思ってるけど、※※の傘下には入らない。それは〇〇さんの顔色を伺ったりとか、〇〇さんの考えはどうなんだろうといちいち気にしてたら活動なんかできねえから、〇〇の傘下には入らんよといったら自分でやれ、というので△△を作った。

### 《活動したいこと》

さっき〇〇と話したなかで、日本人の根っこを思考することです。結果的には右翼的になるんだけど、日本に存在する右翼思想ってのは全然右翼じゃなかったりするわけです。保守だって本当に保守なんていないし、何を保守するんだよって。やっぱりそれを全否定して、

もう 1 回日本人の回帰するところは一体何なんだ、という活動はものすごくアプローチ的にはすごい幅があつていろいろあるんだけど、みんな多分笑うかもしれないけど農業って大事じゃない。日本人にとっては欠かせないものです。だけど保守を語るにほんじんのなかに本当に農業らしきものに携わっている者はいないし、まずそこをやる。

それから保守は日本の伝統文化を継承しなければいけないっていうね、守らなきゃいけない。でも保守の中に日本の伝統文化を実践してるやつはいるのかと。いないんです。ほとんどいないんです。しかも日本の伝統文化って非常に敷居が高くて、お家制度とか。そうすると、きっかけぐらいのものをやってもいいんじゃないかって。

たとえば僕、今空手はやってるんですけど、空手を入門しなくても空手が体験できたり。あ、俺のやりたいことを見つけたと思ったら入門すればいい。お茶ももう 1 回やり始めないと忘れちゃってるけど、入門しなくてもお茶ができる環境。あとは神棚を持ってるけども祝詞を上げないんですよ。神主じゃなくたって祝詞を上げていいんですよ。「でも神棚が折角あるんだから祝詞を上げようぜ」ってところから、神道の世界へ。すべてのきっかけになるものを少しずつ出していけないかなって。そういう活動をやりたいんです。

あとはこれがお金がかかるし暇がないとできないけど、英霊を守らなきゃいけない、先の戦争でお亡くなりになった先人達を顕彰しなければいけない。お参りする、それは当たり前でしょ。どうするんだと。遺骨収集できてない島がある。残砲が埋まってて今でも現地民が数名年間亡くなってる。俺達日本人の先輩が命がけで戦って残してきたものを片付けるのは日本人の仕事だろ。遺骨を収集する活動もやっていきたい。これは〇〇が毎年実践してるんですけど。ガダルカナルに行つて、残砲しょつて帰ってくる。転んだら終わりです。そういうものを少しずつやっていきたいな。

だから命をかけてもいかなと思ってるんだけど、それは去年病気でぶつ倒れて死ぬとこだった。後遺症もなくて、まあでも本当は俺、クソみたいな世の中に生きてるんで早く死にたいとずっと思ってたんです。神様が許してくれるんだったら今死にてえよ。だけど、とりあえず今日を一生懸命生きないと遣り残したことがあったら死んだら後悔するから、酒の席でも一生懸命飲むし、活動も一生懸命やるみたいな、そういうのを信念としてるんだけど、死にたい。でも死ねなかったということは、神様が許してくれなかったんだと。俺は一生懸命やってきたつもりだけど、やり足りねえんだ、って思ったんです。悩んだけど。死なせてくれなかったショックで。全否定された気持だったんです。今までやってきたことは、何か全然意味をなしてないからまだやれちゅうということかと。

で、そう思ったときに入院のときにいろいろ考えたのが、さっき言った在特会と違う、在特会というプロセスがあつて、俺がやりたいことはもう活動をやらないということで、△△の原点に戻ろうと思ったんです。

震災があつてね、すごいなんかヒントみたいなものが見えてきたような気が、すごいするんですよ。恐らくこの震災って戦争でもありえない、爆撃でもあんなに一瞬にしてわずか何十分の間に何万人ももつてかれるようなことってありえないし、これは神様の鉄拳だろうよって、どう考えても。石原慎太郎が批判されてたけど、これは天罰だと。これは東北の人に対してではなく、日本人に対する天罰だから、逆に生かされている俺達は亡くなった人たちの残念な悔しい思いで死んでいった方々の魂に報いるためには、その魂が慰霊されるためには、立て直す側の日本人が日本人としての誇りと原点を取り戻す作業に入って、生きな

がら復興しないと、ただ復興したのでは浮かばれないだろうと思ってて。それが言葉にできなくても思っている人って結構いる、とを感じるんですよ。

で、一番とっつきやすいのは——回帰する時に一番とっつきやすいのは——震災前は明治維新だったんですよ。明治大帝が近代日本国を作ってその原点に帰ろうぜっていう話はあったけど、いやいや日本ってその前からあるだろうって話をする奴があまりなくて。で

もこの震災がきっかけになって、日本の成り立ち、要するに<sup>くにう</sup>国産みのところからはじめようという人がぼろぼろぼろぼろ出てきてる。恐らくコレがね、日本人としての原点に回帰するヒントだから。古事記を勉強する人が急激に増えてるんですよ。

だから在特会のあり方っていうものも、桜井君が思想性を持たせ始めたら、深くなっていくんでしょね。いずれ日本人とは何だ、保守は何だっていうところにみんなが思考を持っていくような時代が来ますよ、きっと。

(少数の活動になることも) 多分それも納得済みというか。それで思想性を持ってなくてつまらないと思う人はどうぞ抜けてください、という体制をとると思うんですよ。何人残るか分からないですけどね。だけど1万人の中でね、濃い連中が残ったらそれこそ本当に国になす集合体になるかもしれない。と思ってます。その中には、今だからちょっととっつかまったら大問題になってるけど、それこそ行動右翼みたいな感じにする奴も出てきますよ。それを暴発させないのが会長の仕事になってくるじゃないかなって思うんだけど。

#### 《在特会から学んだこと》

自分の漠然として考えていたやりたいことが、明確になっていく、少しずつ明確になっていった背景には、桜井君のもってきた在日特権を許さない市民の会の動画があるんです。それによって気まぐれで街頭に出たのが、行かなきゃいけなくなっちゃってるから。去年60回やってますからね、デモを。デモと街頭演説会、抗議、全部入れて60回やってるので、1人でやったら60回もやらないですよ。せいぜい2ヶ月に1回ちょっと行ってみようかな、とかその程度だけど。活動する自分というかこうしなきゃいけないんだっていうものに、拍車をかけてくれたのは、間違いなく在特会だし、自分の思考がどんどんと明確になっていく。こういうごつごつしたものから小さく丸い状態になっていく作業をしてくれたのは、在特会の人たちとの出会いであって、活動であって。

その中には、まったく思想性のない人と話をして、20歳、21、2(歳)の人が「天皇陛下ってそんなに偉いんですか？」っていったときにすごいびっくりしたんですよ。「何でそんなこと聞くの？」でも考えてみたら、天皇陛下とはいったいどういう御存在なのかを教えてくださいの親もいなければ、教育機関でも教わらない。だったら、多分日本人の20歳——その子と同じ年代の子っていうのは、圧倒的にこの子と同じ考え方でいうか、持っているんだろうな。これ大問題だろうなって思ったんですよ。

最初、鼻で笑いましたけど。「何なの」って感じだったけど、家に帰って「あいつの発言って重要、重大発言だな」って。日本全体がこういう状態になっているってことは、やっぱり根っこの部分を掘り下げていく作業に入らなきゃいけないって思ったし。それだって在特会と出会って、20歳くらいのに出会って。おっさんがそういう人と活動するってないから。そいつの発言聞かなきゃ気がつかなかった。あらゆるものを包括して在特会の活動とか、

飲み会とかを通して自分も学んだ、自分で取り入れなきゃいけないものが明確になってきたというか。めっちゃめっちゃ感謝してるんですよ。

## (6) 小括

γ氏は他の在特会参加者と比較して特に年齢が高いわけではないが、大分異なる活動家キャリアを歩んできた。1990年代半ばに民族派の活動家たる野村秋介に影響を受け、自ら連絡して右翼活動に参加する。それ以降は、民族派の人脈を中心としていくつかの団体を渡り歩きつつ、自らも団体を設立して活動を続けてきた。氏がテロという言葉に込めるマッチョなヒロイズムは、強い男性性を自明にできないメンバーが多い在特会のそれとは異質である。そうしたキャリアを持つγ氏が在特会と出会うのは、洞爺湖サミットに合わせた反中国活動であった。民族派の一部は、確かにサミットだけでなく APEC などにもナショナリストとして反対の動員をかけているが、民族派と在特会の出会いが「反中」であるのは興味深い。国内問題であれば、両者の接点はなかったのではないか。

そして多くの民族派が在特会に否定的な態度を示すなかで、γ氏はそこに「プロパガンダ」を読み取って新たな動員手法を見出す。民族派が在特会の主張の中身のなさ（思想の欠如）や言葉の品のなさに反応したのに対し、γ氏は在特会が動員に成功したというノウハウを評価したといえる。現実問題として、民族派は閉鎖的なサークルの中で活動も停滞していたから、γ氏のような着眼点はあっても不思議ではない。γ氏は、在特会をヘイト集団としてではなく、「思想」を持った右翼活動家を育てるインキュベーターとみなしたわけである。

γ氏が在特会での活動を通じて得たのは、そうした動員の手法だけではない。街頭に出ることを主たる活動とする在特会にあって、活動することで自らの思考が明確になるという効果もあった。民族派の活動では、相互に理解が行き届いた集団での付き合いになるから、不特定多数に訴える在特会とは自ずと性格が異なる。そこでの活動は、思想を深めることにはなるだろうが、自己確認の場とはならないだろう。γ氏は、活動のノウハウを提供するといった手助けから始めたのが、在特会の行動主義に引っ張られる形で自己確認を進めていったといえる。

最後に、在特会に集う若者の多くは右翼思想を身につけているわけではない。そこでの付き合いを通じて、日本の一般的な状況を知って自らの活動を立て直していく。実際、γ氏は若年層を集める形で自宅を開放し、余暇活動の機会も提供している。在特会自体は、組織内部でのトラブルが増加して衰退過程に入っており、その手法が飽きられて一般参加者が減少すれば、やがて自然に消滅する可能性が高い。だが、仮に在特会が解体を免れないとして、在特会を経験した若年層がγ氏の期待したような「成長」を遂げていくのか。民族派の一部から排外主義を訴える活動家が生まれ、それが在特会の基盤となったことは別稿で述べた。在特会は、それから別の右派活動を生み出すようなものとなりえるのか、あるいは単なる麻疹のように排外主義など忘れてしまうのか。γ氏の経験は、現時点では論点になっていない「ポスト在特会」の排外主義運動というテーマにつながっている。

### 30 「さらなる右」としての排外主義を実践するδ氏の場合

#### (1) 右翼に対する関心

外国人ってのは、遠足なんかで外国人を見つけたら「おお、ガイジンがいる」ってみんなね、きゃんきゃん盛り上がっているくらい田舎ですから。だからそれについては、別に何か恐怖心だとか嫌悪感だとか持ったことってのはないですね。

子どもの時に、国会中継を見るのが好きだったんですよ。小学校2年生、3年生くらいですかね。国会中継見るのが好きで、共産党が好きだったんですよ。5年生6年生の時くらいは、『赤旗』読むようになってましたね。街頭に『赤旗』が貼ってあるんですよ。田舎の方に行ったら赤旗掲示板というのがあって、田んぼだから、そこでさしてあるんですよ。登下校の時に読んで、今国旗国歌法がこういう問題なんだ、自民党がこういう政治献金の問題起こしてるんだ、そういうのを見てたわけなんですね。

それと同時に街を走っている右翼の街宣車を見てですね、「何だ」と親父に聞くわけですよ。真っ黒なバスが軍歌鳴らして走っているものですから。「何だ」といったら「あれはな、右翼といってヤクザがアルバイトでやっているみたいなものだ」。「ヤクザってアルバイトするもんなのか、それが右翼ってもんなのか、へんな仕事だな」と思ったんですよ。

共産党に対する好意と右翼ってものに対する興味というものが、半ば同居して小学校6年生くらいになってったんですが、その年に共産党の不破委員長の中国訪問がありました。それまで共産党と関係が断絶してましてね、あれを不破——当時の委員長が訪中して会談を一席して、「日本が先の大戦で侵略して申し訳ありませんでした」という風にもものすごく深謝した。その当時の江沢民国家主席が高く評価したという記事が、赤旗の一面の大きく出ていたんですよ。それを見たとき僕は、ショックというものではないですけど、何か言い知れぬ違和感が起こったんですね。経団連や自民党という大きな権力に対して共産党というのはかっこいいものだ、すごいものだと思ってたんですけど、自民党や経団連よりももっと大きな権力である中国共産党には膝を屈してしまう共産党って何かおかしいんじゃないかと思って。

それでちょっと、思想的に宙ぶらりんになっていた時期があったんですけど。それで中学校2年生になった頃ですね、学校の自習の時間で、読売新聞や毎日新聞が分厚い『20世紀の記録』という本を出しているじゃないですか。写真入りのこう——あれが好きなもので、時間があればあれをずっと1901年からずっとページをめくって世界で何があったか、日本で何があったかを見ていったんですけど。その時に、昭和35年の10月12日に社会党委員長が刺殺された事件の写真が毎日新聞に掲載されたものですね——あれがのって、社会党委員長を刺殺する17歳の右翼少年って書いてあったんです。それで、実行した山口少年というのが事件から半月後に鑑別所で自殺したと。

アルバイトでやっているはずの人が、なんでこんなことするんだ？しかも僕と3つしか違わん人間がなんでそんなことするんやと。これはアルバイトじゃなくて、何かその、唯物的なお金であるとか、そういうものを超越した価値観がそこにあるんじゃないかと。右翼って何かっていうのを中学校のときにそれで、いろいろ本を調べようと思ったんですけど、何もとっかかりがないわけですよ。そんな時、僕の担任の先生がいて、副担任の人がいるんですけど——担任の先生はもうバリバリの左翼の先生だったんですけど——ある日どう

してか風邪をこじらせて寝込んでしまって、学校に来ない日があったんですね。

その時に副担任の若い女性の先生だったんですけど、その先生がホームルームの、放課後のホームルームで最後に一言スピーチをしますけど、あの時にその若い副担任の女性の先生がですね、担任のあの先生はいつもああいう風に言っていますけども、皆さん方は日本人であります。日本人としての誇りを持って、日本人としての誇り、日本人とは何なのか、そういうことを勉強するためにも、皆さんに読みやすいように小林よしのりさんの書いた『戦争論』というのがありますんで、これを皆さんブックオフでもいいですから読んでください、そういう話をされたんですね。若い音楽の先生で、今の僕と同じ歳くらいになるんじゃないんですか。

僕もその頃、古本屋にいつて本を読み漁るのが好きだったものですから、小林よしのりで探してたら、『おぼっちゃまくん』が出てきてこんなもの読んでも日本人って何たるかかなんてわからないから、『戦争論』で探したら『ゴーマニズム宣言』が出てきて。今は『新ゴーマニズム宣言』になってますが、前の『SPA!』に連載された『ゴーマニズム宣言』の1巻からずっと読んでいって。そうしたら欄外のところ小さく文字で書いてあるじゃないですか、「謙虚かましてよかですか」って。あのところに「わしは右翼は嫌いじゃけど、右翼の赤尾敏や野村秋介が言っていることもわかる」って書いてたんですよ。あれはまだ皇太子殿下がご成婚される前のゴーマニズム宣言だったと思うんですけど。野村先生も赤尾先生もご存命の頃だったものですから。

それで僕は右翼ってものの中には赤尾敏と野村秋介というのがいるんだということを知ったんですよ。それで図書館に引き返して、『日本人物人名事典』というこんな分厚い本があるんですよ。そのこんな分厚い本の中から、あ行から赤尾敏を探して、の行から野村秋介を探して、その名前をみて生涯の生き様をみて、「ああ、すごい生き方をしているな」。それで著作ですよ、全部メモ帳に書いて。地元の古本屋に行って書棚を隅から隅まで探したら、あったんですね。野村先生の最後の著書である『さらば、群青』という本なんですけど。

その本があって、こんな分厚い本で、それを買ったのが中学3年生の時ですから、高校受験そっちのけでずっとそういう本ばかり読んでいたら、高校受験も案の定失敗して。高校は全部志望校は落ちますね。志望校全部落ちたら、県内の一番最底辺の偏差値がもう測定不能くらい低いような高校に入ったんですよ。数学の授業が、足し算引き算から始まるんですよ、高校でも。数学の教科書がこんなに薄くて、何かパンフレットみたいくらい薄くて。国語の授業で、あいうえおの書き取りをやるんですね。そんな高校があるんですよ。

そういう所に入ったものですから、宿題がないんですよ。不良ばかりですから、クラブ活動がまったく盛んじゃないんですね。だから学校は早く終わるしすることもないしで、本を読む時間ってのがとにかくすごくてきたんですけど。だから、高校時代もとにかく右翼民族派の本と、あとは昔の歴史の本と、あとはマルクス＝エンゲルス、毛沢東、レーニンですね。

『資本論』だけは未だに手付かずなんですけどね。高校時代、宿題がなかった分その本を読んでいることができましたね。それは1つの人間万事塞翁が馬、瓢箪から出た駒っていいですかね。それでやっぱり政治ってものに目覚める1つの流れとしてあって。

それで、大学に行くつもりはなかったんですよ。もう今の大学は面白いところもないし、学生も情熱は持ってないし。大体もう、高校の近くを通り過ぎる大学生を見ていても感じて

ましたから。ただ僕は、さっきちょっと話そびれちゃったんですけど、小学校のときから昔の全共闘運動とか全学連の運動——昔のこんなことがありましたって振り返るような映像が、テレビ番組でやっているじゃないですか——あれを見るのが好きでした。あの大きい立て看板作ったり、投石したり火炎瓶投げたり警察と——僕もちょっとやってみたいな、と思ってたんですよ。で、〇〇（出身地）にそんなものないですから、そうすると東京に行ったらそういうのあるのかな。東京に行ってみたいなと思ってたんですね。

そこである時ちょっと雑誌を読んだら、国士舘大学というのがある、入学式は軍艦マーチで日の丸を掲げて、白馬に乗った館長先生が先頭を行進して、みんな抜刀隊の分列行進のもとに行進して、天皇陛下万歳と。こんな大学があるのか、こんな大学に入らずに死ぬことはできんと思って、それでも国士舘大学に入ることにして、上京して。滑り止めなんかも一切受けずに。国士舘をこれで落ちたら、一生〇〇で百姓やろうと思ってたんですよ。僕はそれまで英語数学が全然できなかったものですから。偏差値も 32 か 3 かそんなもので、「国士舘絶対入れんから目白大学とか高千穂大学だったら、これなら入れるぞ」。聞いたこともない大学だったんですからね。

国士舘に入るためだったらと思って、夏休みの初日から終わる日までほとんど外出もせず真夏なのに顔を真っ白になるくらい家でずっと英語の勉強してたんですよ。英語の映画があるじゃないですか。あれに字幕を入れたり入れなかったりして、それでリスニングやって、聞き取りやって。その、最後はもう英語の映画の会話を聞いただけで、それをもう聞きながら書き起こせるくらいになったんですよ。そうしたら、一夏で偏差値が 50 なんぼくらいまで上がったんですよ。そうしたら国士舘狙えるじゃないかって先生から言われ……。

で、2 つ試験受けたんですよ。一般入試とその前に推薦入試受けることになって。推薦入試受けたら論述式じゃないですか。論述式の方を受けたんですね。そしたら問題用紙があってぱっとめくったら、「あなたは拉致問題についてどう思いますか」って問題が。過去問題がいいんですよ。前の年の過去問題が「あなたは愛国心についてどう思いますか」が、推薦入試の前の年だったんですよ。同じ柳の下にドジョウはいないですから、今年はそんなことは多分聞いてこないだろうなと思ったんですけど。そうしたら、今年は拉致問題についてどう思いますか——試験の前の日までずっと横田早紀江さんの本とか、拉致問題の二冊三冊ずっと読んでたもんですから、横田めぐみさんは昭和何十年何月何日に新潟港で拉致されどうのこうのって、細かいことまでびっちり書いたら、すぐに「どうぞうちの大学に来てください」。それはやっぱり嬉しかったですね。

## （2）大学時代の活動

上京する前に、インターネットで東京都内で活動している右翼団体の定例街宣の日時ですね、何月何日何曜日どこで街宣やってるって。当時いっぱいホームページに出てたんですよ。それを全部一覧に書き出して、あとは服と荷物を軽く持ってそのまま東京に行って。大学の入学式の翌日には、大学の民族派系の学生団体に入って。その日からビラ配りをして。そこから運動に参加するようになりましてね。

（加入した学生団体は）勉強会ですけど、なんていうんですかね、人数が——野球部でもなんでもそうですけど、人数がいっぱいいるところってのは急に何かをぱっと変えられないじゃないですか。でも 10 人から 15 人くらいしかいなかったですから、僕が入ってから



勉強会だけじゃちょっと少ないから、デモにも行ってみるか、集会でも行ってみるか、選挙の手伝いにも入ってみようかと。それはもうかなり自由にやれましたね。

大学以外でも右翼民族派団体の街宣にはずっと参加して、マイクを持つようにもなりましたし。その頃僕はもう、運動体の違いにこだわらずとにかくやっていたんですよ。あんまり本に書いたらそればかりになっちゃうから書かなかったんですけど、僕は元民主党員なんですよ。民主党の党籍もあつたんです。今はないですけどね。

とにかく日本のためになると思った運動は、全部片っ端からお手伝いしましたね。日本会議のお手伝いしたこともありますし。救う会のお手伝いをしたこともありますし。民主党の党員に一応なつたのは、拉致運動やっていた当時の民主党の議員たちとのお付き合いとの関係で民主党の党員になって。党員だったか周りにいるサポーターとちょっと分けてるじゃないですか、あのどっちに入ってたかは僕はわかりません。どっちかには入れられなかったんですよ。

で、民主党に入って民主党の手伝いして、ポスター貼って回っていたんですよ。当時岡田克也が党首だったものですから。そうしたら、その事務所に「ちょっと来週岡田代表がうちの事務所にみえるから、ちょっと来週は来ないでくれ」「来週来ないでくれ」と手伝つとる人間に失礼なことを言うやつやなど。民主党の手伝いもして、その頃右翼の運動もしてましたから、午前中は街宣車乗って戦闘服着て、民主党の事務所に——本部ですよ——街宣出て叩き潰せとやって、僕はそのまま民主党の事務所に行って、戦闘服からポロシャツに着替えて「すいません、ポスター貼らせてください」って一軒一軒歩いてたんですよ。さすがにこれはおかしいかと、自分でも思うようになったんですけど。

そうしたらある日、街宣車運転してたら先輩が「今日どこに行くんだ、民主党でアルバイトか、いいよいいよ連れてきたよ」。そうしたら候補者が演説している真横に街宣車止めて僕を「はい、お手伝い連れてきました」とやっちゃったもんだからご破算です。とにかくもう、いろいろ何でもかんでもやりましたね。民主党のもやりましたし、自民党の選挙の手伝いもしましたし。それから、チベットの人権問題の運動もやりましたね。あれもされてるのは半分くらい人権意識の高いリベラルな左翼の人も一緒にやっていて、お酒飲んで仲良くなりましたし。それから今、行動する保守とされる運動もやりましたしね。

(こうした団体には)自分から行くんですよ。「自分でホームページ見てきたんですけど、ちょっとお話しかがわせてください」って話を聞くんですよ。当時僕は、町田に住んでたんですよ。で、もう絵に描いたような貧乏学生で、とにかく運動がしたかったんですけどアルバイトする時間も全然ないものですから、輪にかけて貧しいもんで。月に1万円ちょっとしかお金がなかったんですよ。一日の食費に2、300円に切り詰めてパンをかじってもっているようなもので。電車にも乗ってられないですから。移動はもう全部自転車です。

町田から街宣があるって聞いたら、上野や新宿渋谷まで自転車で行き来してるんですよ。片道2時間半。町田と狛江あたりの山や谷を抜けて。で、最初街宣に行ってる人たち——来てる右翼の人たちは「自転車で来てるからその辺から来てる子なんだろうな」といって。ある時話したら「どこに住んでるの」「町田に住んでるんですよ」「町田から自転車で来てるのか」。それから皆さんと仲良くなりましたね。そうしているうちに、自転車を街宣車に折り込んで、街宣車で送ってくれたり、ありましたけど。

(活動に参加する)抵抗はなかったですね。東京の右翼ってカジュアルなんですよ、ヘン

な話ですけど。田舎のほうの右翼ってのは、みんなばっちり戦闘服着て街宣車もいかめしいのが多いんですけど、東京は同じ系列の右翼でもみんなスーツか私服か、とっつきやすい格好ですね。いったんそういう右翼の人と面識ができれば、右翼の人ってのはびっくりするくらい顔が広いですから、そこから一気にいろいろな人を紹介していただいて。だから大学の1年生2年生の頃までには、随分な数の方々とお知り合いになったんじゃないかなと思いますね。

大学には通って単位も全部取って、単位を1つも落としたことないですけどね。大学の単位は1つも落としてないですよ。及第点をとって、落第点をとったこともないです。大学3年生の時には卒論だけにしましたので。1年生2年生3年生で単位を、規定の単位のうちの卒論残して全部履修して。で、4年生には卒論だけになるわけですから。月の登校が4日になったんですけど、そうしたら担任の担当のゼミの先生が運動に理解がある人で、「お前は日本のために頑張ってるんだから、軽いレポートを毎週原稿用紙3枚提出すれば次週の授業は出席扱いにしとくから」。そういうことをおっしゃってくださったので、大学には4年の時には月に2回しか通わなかったですね。授業に出なかったですね。あとは学食が安いから食べに行っていたくらいですけど。

徳島も〇〇も同じだと思うんですけど、何も刺激がないですからね。たとえば僕なんか〇〇帰ってちょっとのんびりしてた時にですね、朝起きて新聞を読んで、「ああ、ロシアがまた日本にとんでもないことしやがった」「じゃあロシア大使館まで抗議にいこうかな」と思っても「ああ、〇〇だったか」となっちゃうんですね。〇〇だとか徳島だとか田舎で何かしようと思っても、行くところが県庁か市役所か、民団・朝鮮総連の支部くらいしかないです。

それに比べれば東京ってのは、そのものが片道160円のメトロの切符一枚で行けるところにあるわけですからね。とにかく本当にあらゆるものが新鮮でしたしね。抗議行動だけに限らないですけど。人間の数がもう圧倒的に多いですもの。たとえばその、東京が1000万ですかね。人口で何倍といっても、刺激といいますかね、人間の付き合いの広さや面白さというのは、それと比例するわけじゃないですからね。10倍20倍30倍、もっとあると思いますね。運動の面白さ、というよりは東京の面白さになっちゃういそうですけど。非日常の連続というのは、とにかく若かった頃の学生時代にとっちゃ面白かったですね。

### (3) 行動する保守との邂逅

《右翼から行動する保守へ》

右翼の運動も、2年3年もやってますと、なんだか毎年やってることが一緒になるんですよ。1月2日に皇居に新年の一般参賀に行って、2月7日に北方領土の運動をやって、11日に建国記念日の運動やって、8月15日に靖国神社に行って、8月9日にはロシア大使館に行って暴れて。毎年一緒に、でも日本を取り巻く情勢は毎年一緒なはずがないわけで、それなのに「何でこの人たちは毎年一緒のことやっとならうな」って。

それに若い人が全然入って来ないんですね。気がついたら僕も右翼の世界に片足突っ込んで、6年も7年もたつのに僕の後輩が全然出てこないんですよ。で、上にはどんどんどんどん年取った連中だけがどんどん吹き溜まりのように溜まって行って。若いのが気がついたら、ずっと僕がお茶くみさせられて——若いからしょうがないですけど——若い人は興

味持たなくなるんでしょうね。

右翼とお付き合いしてましたのが、平成 16 年で 1 年生の時ですけど、その年から「行動する保守」っていいですか、「保守」自身は年に 2、3 回はデモはしてたんですよ。台湾を支援するという。中国共産党に反対するデモだとか。ただ、頻度は圧倒的に少なく、内容としてもすごく大人しかったですよね。平成 17 年夏からのお付き合いは、集会とかデモとか、たまーに集会とかたまーにデモとかで挨拶するくらいのお付き合いだったんですよ。で、その翌年にチャンネル桜ってあるじゃないですか。あそこが大きな拉致のデモをやって。で、(δ 氏の) 学生団体も (デモに) 入ってました。

それで平成 18 年に在特会が——18 年ですかね、在特会ができたのは。同じ年にですね、当時ブログ人気ブログランキングというのがあって、その中で第 2 位の人気を誇ってた「極右評論」が、日本を変革させるためには国会に極右の勢力を台頭させないとならないと。今までになかった論調だったんですよ。そうしたら瀬戸さんはどうするかっていったら、自民党にも民主党の右派にも期待できない。今在野ではあるけれども、維新政党・新風にそれを期待する。維新政党・新風への大々的な支持を打ち出したんですよ、連日。

これがまた運命の不思議なもので、瀬戸さんがそういう 2 週間前にですね、僕、維新政党新風に強制的に入党させられてるんですよ。いや、入る気全然なかったんですけどね。朝飯食べようと思って新宿に出てきて、ほっつき歩いてたら、向こうから新風の今の代表の鈴木さんともう 1 人新風の党員が歩いて来て。右翼運動を通して顔見知りだったから、「ああ、どうもおはようございます」といったら、「おい飯食ったか」「まだですけど」「じゃあ飯食わしてやるからちょっとこっち来い」。街宣車が止まっているんですよ。街宣車の中で食わしてくれるのかなと思ったら、ボタンとドアを閉めてそのまま発車して。

夕方まで街宣車の上で日の丸持つ係をさせられて、弁士が「皆さん拉致問題というものはですね」としゃべってる——「拉致問題もいいけど、人を拉致しておいて拉致問題もねえだろう」。そのまま事務所に連れて行かれて、「はいこれ、入党用紙だから」って入党申込用紙に記入させられましてね、それで新風の党員になったんですよ。で、まあ特にやる気もなく党籍だけお付き合いだなど、新聞を購読するのもお付き合いだなどと思って入ってたら、瀬戸さんがブログで盛り上げてくれて、そうしたら瀬戸さんが桜井誠さんを口説いて。

当時、在特会は 1000 人もいなかったんですよ。超弱小勢力。で、それに西村さんがくっついて、ほとんどその当時の在特会といったら勉強会ですね。やることは勉強会と集会の繰り返しだったんですけど、西村さんがくっついたら今度は直接行動するようになったんですよ、この三者がくっついて。それが「行動する保守」の誕生ですね。だから瀬戸さんが新風への支持を打ち出して、それを結集軸として桜井さんと西村さんが集まって、新風の選挙が終わってから新風が凋落して、この運動は別個に「行動する保守」として残って現在に至っているというような形じゃないかなと思いますね。

新風の時には最終日には桜井さんがいらっしゃる予定だったんですけど、お仕事の関係でいらっしゃらなかったの。西村さんはお手伝いに来てまして、その時瀬戸さんを比例代表候補にあげてましたんで、とにかく瀬戸さんを盛り立てていくと。だからどっちかといったら、「行動する保守」が新風という器を借りて議会制選挙に挑戦した、結集軸として集まったというような形ですかね。

僕は党員だったんで、盛り上がってきたから楽しそうですから連日——大学の 4 年生で

したしね。平成 19 年に入って——3 月ですけど、新風の学生部長に任命されたものですから。それでもう連日やってみましたね。その翌年からですか、新風の選挙が終わって在特会や主権回復を目指す会の運動がどんどん頻度も増えて、内容もどんどん今までにないアグレッシブなものになっていくにつれて、従来の保守的な層から成り立っている新風としてはこれに違和感を持つようになって。平成 21 年の 4 月に民族差別的な言動を許さないとする声明を新風が出して、そこから大きく行動保守の人脈と新風を起点とした人脈が決別した——表層的には決別したような感じですね。（しかし）今でも新風の党员です。政治ってのはそういう諍いがあっても、立場に近い者について、それを盛り立てるのが政治的態度でありますから。そこでトロツキーみたいに南米に追われてしまったら敗北ですからね。

#### 《右派にとって未開拓の領域》

で、「行動する保守は何でやれたんですか」って他の方が聞かれたことなんですけど、1 つは未開拓の領域への参入ってことだと思うんですね。右翼っていうのはすごい敷居が高いわけですよ。みんな声をかけづらい。声をかけて話しづらい。ちょっとお聞きしたいんですけどって言ったら、「何だてめえ、この野郎」とされるんじゃないかという先入観がありますからね。敷居が高いですけど、行動力は従来の右翼って街宣車も駆使して高い行動力を持っています。

保守ってのはどっちかという敷居は低いですよ。やることは皆さん参加してくださいという集会を開いて、その中で先生を呼んで拍手をして。で、終わったら居酒屋に行って、ああよかったよかったと。敷居も低いけど行動力も低いわけじゃないですか。そうすると、敷居が低くて行動力が高いという、一番必要とされている広大な分野がずっと未開拓であったわけですよ。日本の戦後のナショナリズム運動というのは。その広大な未開拓な——最近の経営の本で読みましたけど、ブルーオーシャン理論というのですかね、青い広々とした海があって、それがまったく手付かずであると。その領域を埋めたのが「行動する保守」ってものなんじゃないかと思うんですね。

#### （４）排外主義へ

僕は別にシナ人が嫌いなわけじゃないんですよ。ただそれが日本で外国人が増え、日本の社会秩序が悪くなる、日本の社会秩序が歪むとなるからこれを排除するべきであると。移民に対する好き嫌いとは別の問題ですからね。

（排外主義に行き着いたのは）日本人にそれが一番必要であるにもかかわらず、一番欠如しているからだと思うんですよ。というのも、保守——右の中でも分裂しているというのは、これは今に始まったことじゃないと思うんですね。日本人の外国人認識というものは、非常に拙いと思うんですよ。1500 年前になりますけれども、仏教伝来に対して物部氏と曾我氏が論争するんですが。論争してる中身を読んでますと、物部氏は仏教の伝来に対して異国においても仏を拝んでいるのでだから、これを取り入れるべき…。あ、逆ですね。曾我氏が受け入れを説いたんですね。物部氏は我が国には八百万の神々がおおわまして、異神を拝めば必ず災いを来す、こんな風に言って排斥するわけですね。でもこれは両者とも仏教とは何なのかということを論じていないんです。外国で拝んでいるのだからいいんじゃないか

という姿勢と、外国から来るのはダメだという姿勢と。両方とも外国から来るものは何なのかというものに対する理解がない上での議論ですから。

今の日本人の外国人——外国を受け入れるにあたっての姿勢というのは、この時代に毛が生えたぐらいじゃないか、本質的に変わってないんじゃないかと思うんです。だから保守派、いわゆる右派の中に民族差別がいけない、悪い、いや仕方がない、民族差別はやったほうがいい——そんなことなかなかいう奴はいないんですが。そういう議論が起こると、曾我氏と物部氏の議論のレベルの延長に今はあると思っています。

(外国人に関心を持つ) きっかけですか。東京に来たときにですね、居酒屋に行きますと店員がシナ人しか——ほとんどいないんですよ。コンビニもそうだし大学もそうだし。どこに行ってもいっぱいいる、〇〇から来たらこれはやっぱり「こんなにいるものなのか」と思うくらいだったんですよ。ところが、あまりにも多すぎやしないかな。実際に統計の数字をとってみても、まあこの10年間で、だから僕が東京に来たときよりも、8年前からよりも2倍以上に増えているわけですから。それに対して右翼——右翼といいますか、保守の方が「外国人の排斥排除はよくない」ということを言っていること自体に危機感を持ったんですね。

確かに右翼の中には(排斥を唱える者も)いましたが、保守ってのは決定的に薄かったですし。むしろ外国人の排斥なんてのが出てきたら、日本は八紘一宇なんだから、日本はアジア主義なんだから、天皇陛下の…外国人を排斥するような言動に保守が反対してみせるわけですね。僕はこれに危機感を持ったわけですよ。聞いてみれば、彼らはそれは本音じゃないんですね。酒を飲めば「シナ人朝鮮人なんて冗談じゃねえよ」って保守派の先生なんか言うわけですよ。『正論』や『WILL』に書いているような先生方が。でも、いざ講演をする時や雑誌に書くときになれば、「いや、天皇陛下はそういった排外主義はお喜びにならない、中国や朝鮮の方々と仲良くするアジア主義の理想こそ我々の祖先が大東亜戦争で戦った」。——おいおい、ちょっと待てよ。居酒屋で言っていることと講演でしゃべっていることが違うじゃないか。それは先生に限ったことではなくて、他の一般の保守層の方々のホンネの部分なんです。

まあ実際に本気で思っている人もいますけどね。外国人と仲良くしなきゃいけない、外国人受け入れなきゃいけない。展転社の20年前くらい出た本で出てくる保守系とされるおじいちゃんたちが、日本はヤマトの国だ、和を持って和を大きな国なんだから、外国人の移民を受け入れないというのは偏狭だ、と保守派のおじいちゃんたちが言ってるんですよ。

僕は、これはちょっとその認識が危ないなと。特に日本人全体にそれを求めるわけにはいかないですけど、オピニオンの先頭に立つ保守や右派にその気概が欠けているのは、ちょっといかなものかなと思って。まあそういう先生とか話をしてたんですね。そうしたらその、「いや、そんなこと言ったら講演や執筆の仕事がなくなっちゃう」というのです。彼らは、大学でも教鞭をとらなきゃいけないし、講演で講演料も稼がなきゃいけないし、筆して原稿料をもらわなきゃいけない立場で、急にそういった急進的なことを言える立場ではないです。ただそれは、思想的にも学術的にもすごく不誠実な態度だと思うんですね。まあ、結論ありきというのは、イデオロギーに携わっている人間には致し方ないことかもしれないですけど、知っていて思っていてそれを言えないのだったら、それはきわめて不誠実。でもまあ、彼らにも身すぎ世すぎがありますから。

外国人もいろいろだと思いますけど、僕はブラジル人がいっぱい増えても電車の中がうるさくなってコンビニの前でたむろする若者が増えるだけだと思いますし。フィリピン人が増えても、怠け者がちょっと増えるくらいで、生活保護を受給する母子家庭が増えるくらいで、ちょっと場末のキャバクラで人余りが起きるくらいですし。トルコ人が増えても、ケバブ屋がちょっと共倒れするくらいだと思いますよ。

そういった人々と決定的にシナ人ってものが異質なのは、自分達の街を作っちゃうんですね。そして日本国籍とっても日本人にならないんですね。アメリカでもフランス、カナダでもそうですけど、その国の国籍をとっても自分は華人なんだっていう特別な意識を持っているんですね。

そこ行ったらケバブ屋があるんですけど、そのケバブ屋はですね、ニイハオって呼び込みをしているんですよ、トルコ人が。トルコ語でこういう言葉あったのかなあと。…で、会計したら謝謝、再見っていうんですよ、トルコ人が。「兄さん、俺日本人だから…なんでそんなこと言うんだ」。そしたら隣が小籠包屋なんですよ、シナ人の。トルコ人のお兄さんが「隣の中国人のおばさんから『この街は私たちの街だから、あなたもこの言葉覚えた方がいいよ』」とって北京語を教わった」と。私たちの街だから…びっくりしましたね。

上野だけじゃないんですね。池袋にかけてもそうですけど、僕らがチャイナタウン反対で街宣やったら、あいつらがホームページブログにいっぱい書いてるんですけど。バカだアホだと言われるのは、差別主義者だって言われるのは何でもないですけど、「池袋は我々のものなのに日本人の勝手を許すな」って書いてるわけですね。これは極めて特異な、民族意識とは違ったものなのでしょうけど、極めて特殊な意識を持っているんです。日本の社会にとつて極めて危険なものであると思いますね。

名古屋のほうでは僕らの仲間が、華僑総会が——尖閣諸島の去年の漁船衝突事件の後に——華僑総会って名古屋にいる華僑が総会を開くんです。そこに抗議しに行ったら、中からシナ人が出てきて「日本人は日本から出て行け」って叫んできたんですね。そういった意識っていうのは、他の外国人の方々には見られないですからね。いろいろな運動をすれば、いい出会いもすることもありますが、外国の人たちと小競り合いになったこともありますし、極めてみんな特異な、特殊な意識だったです。中華思想という風にいわれますけど。

そうしたら、どうしたら彼ら（保守派）が言えるようになるかなと。そうしたら、やっぱりどこかで一部極端なものを正々堂々と打ち出して、それが一定の地歩を得れば、彼らはそれに準じた、それに次ぐくらいのことは言えるようになるかと。世間の、世論の常識の枠組みを広げる作業はそういったものじゃないかな。だから僕は排害社というものを作って、まあとにかく目に余る、おどろおどろしい人の嫌がることを自分で一身に背負ってそれをやっていたら、他に続く人たちが「あいつらほどじゃないけれども」という前置きでそれに準じたことを言えるようになるしできるようになる。その結果っていうのは、この1年で大きく出せたのではないかなと思いますね。

在特会なんかと一緒にやっていますが、在特会も当時「私たちは排外主義ではない」ということを言っていたんですね。なかなかねえ、ナントカ主義とつくものってのは、大体まあ共産主義であれば共産主義の是々非々についてはみんないろいろと論ぜられるじゃないですか。社会主義についても無政府主義についても民族主義についても、みな是々非々を論じ

られる。こと排外主義になったら在特会ですら我々は排外主義ではないというわけですから、この意識はまず変えなきゃいけないな。

なんで排外主義がいけないのか。絶対に思想や運動ということには、いいものもあれば悪いものもある。そう認識したうえで運動をやる必要がある。僕は排外主義は自分でやっていて、これは危険なものであるとそのくらいの認識はねえ、やっぱり。危険物取扱者資格を持っているわけでもないですけど、自分は常にガソリンや爆薬のような燃え易いものを手にして、それに火を近づけるようなことをしながら運動しているものである、というそういう認識は持っている。でもそれを全否定する、全肯定というのが、そもそも極めて不誠実な態度だと思いますから。

で、今まで排外主義というとみんなダメという大前提ありきだったんですから、これについてどこが悪い、どこがいいという議論というのは誰かがそれをしないとできないですからね。その作業が今からの日本には必要なんじゃないかな。外国人に対する、外国に対する理解、知識が乏しい日本においては、ますます今後そういう作業が必要かな、というのがひとつのきっかけですね。

(在日韓国・朝鮮人に対する関心は) そんなに強いほうじゃなかったですね。ただ、どんどん在特会の運動が出てきて、在日の実態ってものを彼らが伝えてくれるにつれて、僕としては意識は持つようになりましてけど。今は多分、日本で在日って言葉が韓国朝鮮の人を指すってのは、意味としては間違っているじゃないんですかね。彼らは今、60万人を切ってますし、どんどん少子高齢化して日本人と結婚して、自分がもう日本人になりたいって日本国籍、帰化される方も多くいらっしゃいますけど。

シナ人は80万人いて韓国・朝鮮人よりずっと多くなってますし、年齢比率でいったら彼らの7割8割が20代から40代なんですよ。韓国・朝鮮人は今、3割4割以上が高齢者ですよ。だから、在日問題というのは韓国・朝鮮人問題からシナ人問題に完全に切り替わったと思ってますし。在特会のいう在日特権というのは、特権的扱いをしてるという事実がありますけど、運動としてなくしていくのもそうですけど、このままいけば在日韓国・朝鮮人はニューカマーを除いてですけどね、絶滅するという言い方はヘンですけど、ほとんどいなくなるんじゃないんですかね。あと一世代二世代で。日本列島にずっと住んでいて、彼らの民族意識ってものが、いくら民族教育をやっても——民族教育ってものがあと日本という地で一世代二世代もずっとはもたないですね。

彼らのアリランの踊りなんかっていうのも、結局、徳島の阿波踊りみたいに一部に残された無形文化財みたいな形として、形を留めるぐらいになるものだと思いますけど。シナ人は違いますよね。どんどんどんどん増えてますし、一人っ子制度も去年で終わっちゃいましたから。

彼らが得ている特権というのは、絶対に今のまんまであればシナ人が引き継ぎますから——実際に今そうなるんですよ。大阪の門真市というところでは、生活保護の受給者の一番が韓国・朝鮮の方だったんですけど、平成18年にこれがシナ人にとって代わられて。内容も全部違うんですね。韓国・朝鮮の方で生活保護受給されている方の8割は高齢、高齢家庭です。シナ人の受給者の半数くらいが貧困ですね。高齢家庭は極めて少ないですよ。貧困ですけど、大阪で去年明らかになったような不正受給ですね、入国直後にそのまんま市役所区役所に行って生活保護くれ、こういうのが多くなってますから。

そもそも生活保護ってのは、厚生省の社会保険局の局長の通達でサンフランシスコ講和条約によって日本国籍を喪失した旧日本人であるところの台湾出身者、朝鮮出身者に対して受給を日本人に準じて支給するというものだったわけですけど。日本でもなかったところの人間が今いっぱい受給するようになってきてるわけですから、在日韓国・朝鮮人の持った特権がシナ人に引き継がれつつある状況に。今日本に来ているのは7割8割が若い世代ですけど、彼らも歳を取れば働けなくなって生活保護を必要とするじゃないですか。これは深刻な問題だと思ってますね。だから、それをなくすためにも先例たる在日韓国・朝鮮人の問題というのは、いったん綺麗に清算しなければ、在日シナ人の来る民族問題により大きな禍根を残すと思いますね。

### (5) 排害社

《右翼でも市民団体でもないもの》

市民運動もやって左翼の友達とも酒飲むなかで、「これが日本」の社会運動を作りたいなと思ったのは、右翼団体とも市民団体ともつかないものを作りたいかっただけです。なんで右翼だったら、「大日本ナントカ同志会」ってなきゃいけないのか。別に法律で決まっているわけじゃないのに、そうつけちゃうじゃないじゃないですか。市民運動だったら、「ナントカナントカのナントカナントカする市民の会」、なんでそんな名前じゃなきゃいけないのか。これは不思議なものじゃないですか。左翼だったら——極左だったら、「革命的共産主義者同盟全国委員会」とかいう名前じゃなきゃいけない。市民運動だったら、「ナントカナントカ市民ネットワーク」こういう名前じゃなきゃいけない、誰が決めたんですか。でもそれが何か1つの慣例になって、ムラ社会みたいな、運動・思想をめぐるムラ社会みたいなものができてる構造というのが、僕は面白くなかったですね。

だから市民運動が集まってるなかで、排害社なんて名前作って、旗も真っ黒白黒にして、みんな黒服で黒ヘルもかぶらせて、黒の腕章つけて編み上げ靴でやってたら、まあ新しい刺激になるだろうなど。そうしたら8月15日にみんなその格好でぞろぞろ靖国神社歩いてたら、機動隊に止められたんですよ。そうしたら、「ここから先は靖国神社大切に思う方がいますんで、ちょっとお帰りください」。こっちは靖国神社大切に思ってるんだ、がちゃがちゃいって、僕らをアナーキストと間違えているみたいで。旗が黒で——ゲバ文字で黒で。それでこの運動は1つ正解だったなと思いましたね。右翼にも市民にも見えないものを作る。

早い話、みんな誰だって汚名を蒙るのは嫌なんです。誰だって差別主義者排外主義者といわれて、気持ちがいいものじゃないでしょう。特に日本の右派や保守ってのは、左翼以上に対面を世間体を取り繕うきらいが強いですから。でも不思議なことに、彼らは世間体を取り繕うがゆえですかね、何か空気や同調圧力に極めて弱いんです。じゃあ誰かが率先して、排外主義者の名を持ってしなきゃいけないと思われない。そうしなきゃ日本の右翼も保守も正々堂々と言うべきことを言えないなと思ったのが、自分が率先して排害社を作ったきっかけなんです。

団体を立ち上げる時に会員たちにこういうところで、創立メンバーたちと話をしたんですよ。半分くらいが20代の若者で、半分くらいが30、40（代）でした。その中でいろいろ案があったんですよ。団体名について・・・「大日本攘夷塾」というのがいいんじゃない



いか、ちょっと右翼みたいな。「攘夷を進める市民ネットワーク」はどうですか？これはちょっと何かぎこちないしへんだな。一番みんなが反対したのが「排害社」だったんですね。みんなが反対したからこれはやらないかと。創立メンバー全員が反対したってことは、既存の右翼運動、既存の保守運動をやった人間も拒絶反応を起こすくらいの急進的な名称であり、運動体になると。みんなそれを反対はしましたけど、僕がやるっていったら呑んでくれて、それで排害社が生まれたんですよ。

全員が賛成するってことは——ユダヤですかね——全員が賛成したらそれを否決する。1つの英知だなあとと思いますね、あれも。全員が賛成するってのは、よほどつまらないことか、よほどろくでもないことですね。全員が反対するくらいの方が面白いんじゃないかなと思いましたね、その時は。

#### 《「中国人」という敵手》

（敵手は）第一にシナ人、その次にそれに関係する政治家・行政。次に彼らの大幅な受入れと TPP の推進などを進める経団連をはじめとした財界人。3つに絞って順序をつけて、会員たちにもそれは基本的に徹底させるようにしてまして。

僕はこういう団体運営みたいなものは、ラーメン屋の経営みたいなものだと思ってるんですよ。塩ラーメン屋がいっぱいあるところに、塩ラーメン屋を出店させてもつぶれるに決まっていますから。しょうゆラーメンがいっぱいしのぎ削っているところに、しょうゆラーメン屋建ててもつぶれますから。その中で勝負するんだったら、東京にあるような次郎ラーメンだとかね、徳島ラーメンみたいなものとか、あるいは油そばだとかみんなが取り組んでいない分野のものを持ってくれば、他のところが 500 円 600 円で売ってても、こっちは 800 円 900 円でも勝負できる。隣が何かまたおいしい塩ラーメン出したから、うちでも塩ラーメン始めようかというのはいらない。

放漫経営というのは本当に倒産の元ですからね。つれの実家のうどん屋が客が来ないものだから、うどん屋の店の半分をカラオケにして、それを酔っ払いに歌わせてたら今度はうどんの客が入らなくなっちゃってつぶれちゃって。本当に放漫経営というのは良くないですね。うどん屋はうどんを作ることに命賭けるべきですし、ラーメン屋は自分の作ったスープ一本で勝負すべきだと思いますから。あれやこれや手を出したら身が持たないですからね。仮処分や民事訴訟をいっぱい抱えて首が回らなくなっちゃいます。

最大の問題であるのに、今までどの団体も専門としてやってこなかったですからね。西村さんの主権回復が、池袋でチャイナタウン反対というのを軽くちょろっとされていたくらいで。桜井さんのところもたまにちょっとしていただくくらいですけど、1年を通してずっとこれに取り組んでいくというのはなかったですからね。

#### 《ネットの活用》

ネットというのは個人的なツールですから、ネットでもう完全に情報なんか収集できるものでもありません。排害社の会員にはとにかく Google で検索しているヒマがあったら歩け、と言っているんですよ。とにかく歩いて現場を見る。ネットの情報なんか得体の知れないものも多いし憶測も多いわけですから、とにかく歩く。電車の乗換えで3駅乗らなきゃいけないんだったら、その3駅歩け。とにかく歩くように若い会員たちには、みんなそういう

風に言っています。歩いたら、何かを見つけますからね。小さなことでも。

(ネットの効果は)ものによりますけど、大体4分の1と100分の1と僕は言うんですけどね。1つの1枚のホームページを開いたら、そこにある先のクリックを押すのは4分の3になるんです<sup>9)</sup>。4分の1はそこから先はクリックしないです。そこから先のリンクをまたクリックするのは、さらに4分の1になる。で、1つの告知を打ったら、デモであれば—集会であれば10分の1、デモであれば50分の1、物の販売であれば100分の1。この法則ってのはなかなか崩れないんですけど。1000のアクセスがあるところで何が物を売れば、10人買ってくださるんですよ。で、1万のアクセスあるブログでデモの告知を打ちますと、大体200-300人が参加。

#### 《参入の効果》

(排外主義を掲げた効果は)ありましたね。在特会の幹部の中でも、ことここに至っては排外主義しかないというようになる人も出ましたし。いろいろな各団体が、自分達の催している集会の協賛・後援・共催団体に—まあ今までの付き合いがありますけど—排害社って入れざるを得なくなるわけですよ。この団体名を、普通の市民運動の団体が。そうすると自ずと意識はがらっと変わりますね。今までも「ナントカナントカの市民の会」が主催して、参加するのも「ナントカナントカの市民の会」ばかりのところ、に、「排害社」がぽんと入ることによって、参加する人たちの意識も急に変わりますね。

だから、この1年で本当に僕の周辺というか行動する保守に限らず既存の保守の中でも、従来は排外主義なんて良くないとかって言ってた人間の言葉がやっぱり変わりましたね。もう排外主義しかないんじゃない、排外主義でいいじゃないか、そういう風にやっぱり意識をこの1年で大きく変えられたんじゃないかなと思いますね。

#### (6) 外国人参政権に関して

参政権(反対運動)ってのは、他の団体がやっているところでお手伝い程度させていただいたくらいですね。外国人参政権みたいなのに、保守派は反対しますが、でも彼らは民主党の白眞勲だとか、あるいはシナから帰化した張景子とか、平成19年の選挙で民主党から立候補した金政玉、こういう人間の政治参加についても嫌悪感をあらわにするわけですね。彼らは普段は、日本国籍を持ったものに参政権を限るべしって言っているわけですよ。

じゃあ彼らの政治参加については問題がない。彼らを擁護すべきなんですよ、従来の言辞で参政権を批判するのであれば。日本国籍を持ってない者の政治参加じゃなくて、本質的には異民族による日本の政治への参加に反対しているのであると、そう言えばいいだけのことですよ。それは民族差別になるといって、対面を気にして口に出せないわけですから、まだまだ日本の保守も弱いんですよ。

僕は、外国人参政権反対というのは、異民族の政治参加反対に昇華しなきゃいけないと思ってるんですね。外国人ってものの定義ですけど、日本国籍を取ってたらそれで日本国民同胞なのかってことについても、歴史的伝統的な価値観というのが、まったくそうではない。

---

<sup>9)</sup> これは恐らく言い間違いで、リンク先のページを閲覧するのは4分の3ではなく4分の1だと思われる。

法務省の紙一枚の話ですから。

それで人間の持つ民族性や意識というものが変わるとは思えないし、たとえ日本国籍持っても浜松や群馬あたりで電車の中で大騒ぎしている日系ブラジル人の日本国籍持った子ども、僕は日本人同胞とは思えないです。渋谷や池袋なんかで、たまに青龍刀抜いたり抗争でヤクザの手切っちゃったりする中国残留孤児の人間、マフィアがいますけど。あれも彼らが日本国籍持って日本の名前を持ってますけど、彼らを日本人だとは思えないですよ。日本語は——日本語不自由なものもそうですけど、意識が日本にないですからね。

僕はそれを言ったら、日本国籍を持ってる持っていないというのは、極めて表層的で皮相な議論であって、もっとそれよりも深い民族的なものに議論を昇華していかなくちゃいけないじゃないかなと思います。逆にブラジルに移民した日系人の一世で、ブラジル国籍を取得された人なんか、日本国籍ないですけど日本人の意識だし、広義で言えば彼らは日本人だと思いますけど。そういう意味でいえば、外国人参政権ってものを国籍の有無だけ問うてそれを問題にしている今の保守の問題意識ってのは、極めてレベルの浅いものだと思います。だから僕はこれを——外国人参政権ってのに反対する運動は、民族問題まできっちり昇華して、異民族と日本民族がどう向き合ってくるのか、対峙していく問題にきっちり据え付けなくちゃいけないです。

あれ（参政権反対の盛り上がり）が一昨年で、去年の1月2月頃から僕はシナ人問題に直接向き合い対峙するように、急速になりまして。その中でこれは国籍問題じゃないな、これは民族問題だと。もっといってしまえば生態系の崩壊ですね。ブルーギルやブラックバスが繁殖しているのと一緒に。この問題、日本国籍の有無ばかりに限った話をしてたらね、日本に来ている80万人100万のシナ人がみんな日本国籍とっちゃったら、同胞として迎え入れて選挙に参加させてあげるように擁護するのが従来外国人参政権反対論を駆使していた保守派の論拠によれば、そういう流れになっちゃうわけですから。「国籍持っていないからダメだよ」と言っていたのが、国籍取ったら同胞として歓迎しなくちゃいけないはずですからね。でも彼らにはそんな気はないんです。ないのに、それははっきりと言えないですからね。その問題意識というのはきっちりとしてますね。

## （7）活動を通じて

### 《活動のエネルギー源》

若い14歳17歳くらいにこういう考えに目覚めて、こっちに来て運動するようになって、大学1年生の時に初めて靖国神社を昇殿参拝させていただいたんです。それで靖国神社に昇殿参拝しますと、本殿の中に御神体として大きな鏡が祀ってあるんですよ。大きな鏡は、当然参拝している自分達の姿が映るわけじゃないですか。鏡を見たときに、僕は英霊っていうものはですね、英霊を祀るものが鏡であってそこに映っているのが自分達である。彼らの魂っていうものが僕らの中で生きてるんだと。日本人の、僕らの中で生きてるんだ、と思ったときに今までの本で読んでいた知識云々でなくて、ものすごい実感として感動して涙を流しましたね。それなんか、1つの原体験のようなものを感じたんですよ。

で、その翌年にですね、硫黄島に遺骨収集に行ったんですよ。『硫黄島からの手紙』の舞台の日米激戦の硫黄島に遺骨収集に行きました。まだいっぱいトンネルが掘ってあるんですよ、日本兵がたてた。その中に掘ってますとね、骨がごろごろごろ出てくるんですよ。

拳くらいある手榴弾も出てきて大騒ぎになったこともあるんですけど。

掘っていたらきれいな骨が出てきましたね。人が本当に倒れて鉄砲、三八式歩兵銃を抱えたままの骨で、引き金をカチャッと引いた状態で弾が籠もっているんです。引き金をパンと打てば出るくらいの状態で倒れてなくなられた方です。その銃口がトンネルの外へ。外から来たアメリカ兵に照準を合わせてまんま……。祖先の遺骨が出てきて、亡くなられて 60 何年でまだ銃抱きかかえて姿を見たときに——硫黄島は暑いもんですから、トンネルの中はサウナのように暑いから汗まみれになりますけど、目から本当にとめどなくねえ。日本人を、我々子孫を守ろうとしてくれたと痛切な思いで。

それで集めた遺骨を茶毘に付すんですね。茶毘に付す時に、一緒に行った先輩が「いつも遺骨を燃やす時は不思議でな、海が凪いで風が止んで、煙が日本のほうに、本州の方に煙がなびいていくんだ」。「そんな日本昔話みたいなことあるわけねえだろ」と思ってたんですよ。硫黄島といたら 1200 キロ離れた島ですから、周りも何にもさえぎるものもないですし、風が天気がいい日もビュービューずっと吹いているんですよ。モンスーンっていうか、太平洋をアメリカの方に向かって西風がずっと吹いているようなところで。それが遺骨を茶毘に付す時にですね、不思議と本当に風が止んで海が凪いで、燃やした煙がですね、本州の方に帰っていくんですよ、本当にもう。あんな不思議なものは本当に初めてみましたね。これはやっぱり、これもまた強烈な経験でしたし。

その後、帰ってからすぐですね、国士舘大学で毎年皇居勤労奉仕をやってるんですよ。皇居に 1 週間くらい通って、皇居の掃除をするのが国士舘の毎年の恒例行事でやってるんですけど。その最終日ぐらいに天皇皇后両陛下から御会釈をいただくんですが、その時に一緒に行ったのが、奉仕団が並ぶわけですよ。天皇陛下の御前に。岡山や長崎の JA のおじちゃんやおばちゃんが来てたんですよ。週刊誌みたいな話するんですよ、おじちゃんおばちゃんたちが。「美智子さんって綺麗なのかしらね」「天皇陛下って背筋曲がってらっしゃらないかしら」。「何言っているんだこいつらは」と思っていたら、そこに両陛下が……ざわざわしていたのが、いらしたら、静けさが耳に染み入るほどの静けさっていうんですかね、ずっと静かになって。

天皇陛下が岡山と長崎から来られた奉仕団のおじちゃんおばちゃん——平成 17 年でしたか、その年岡山と長崎で台風で大きな水害があったんですよ。その時に「先の台風・水害ではどうでしたか、お体大丈夫ですか」。言葉かけた途端に、それまで週刊誌レベルの話をしていたおじちゃんおばちゃんたちが、皆泣き崩れたんですよ。まだ 50 代後半か 60 (歳) くらいの戦後生まれのおじちゃんおばちゃんだと思うんですけど。

それで僕らの——国士舘の前に両陛下がいらっしゃって、「今年卒業されて就職される方はいらっしゃいますか」。そうしたら先生が陸上自衛隊に何名、航空自衛隊に何名、海上自衛隊に何名——国士舘は自衛隊が多いですから——そういう風に先生が申し上げましたら、陛下が「そのものをこちらに」という風におっしゃられまして。それぞれ、自衛隊に就職が内定した先輩方を御前に召されて、「国を守るというのは極めて大変で尊いお仕事です。お体に気をつけてがんばってください」。そのようにおっしゃられたと僕は記憶しているんですけど、そのようにお言葉がありまして。そうしたら気が強くて喧嘩ばかりやっている飲んだくれのような先輩たちも、もう面を挙げられないくらいに泣いて、僕も泣きましてね。不思議なもんだなと思ったんですよ。

昭和 21 年の新日本建設に関する勅語<sup>10</sup>、いわゆる人間宣言というものがあって。でも僕は、まだ日本というのは変わってないな、遺骨を硫黄島で茶毘に付したときに煙が本州になびいていきましたけど、「ああこの煙はここに帰らなかったんだな」って。陛下がおられて、そのお言葉に涙を流されて。「ここに帰らなかったんだな」——それが原動力じゃないかなと思うんですね。何聞かれても、僕の中ではそれしか出てこないですね。結局、この本を読んで感動した、この本を読んで影響を受けたってのは出ますけど、それはやっぱり知識や表層的なイデオロギーであって、それを超えた実感としてあるものじゃないですから。強い実感だと、僕はそれだけです。そのことです。

#### 《活動で得られたもの》

良かったことは、街宣をしますんで、街宣をして人前でしゃべって——すごく世俗な話ですけど、街宣でしゃべって機動隊ともぶつかって警察とも掛け合いをやって、シナ人朝鮮人とも丁々発止の言い合いをしますんで、人前で話をするのにすごく慣れたもので、就職活動で面接する時にまったく困らなかつたですね。就職氷河期といわれた時、僕は——みんな 2、30 社受けて受かる受からないって時だったんですけどね——僕は 7 社受けたら 5 社くらいは受かって。もうやっぱり面接で臆せず正々堂々としゃべる。

その頃、就職活動の時期になったら、「ちょっと面接の練習するから付き合ってくれ」なんてみんな言って、学食で面接の練習を隣あちこちでやってるんですよ。知ってる人間が。

「私は学生時代ボランティア活動…」「お前ボランティアなんかしてねえだろ」、知り合いに突っ込みなんか入れたりしてたんですけど。僕は就職活動の時には、学生時代何してましたかと聞かれて、さっき話してたようなことをしてましたって包み隠さず話したら、それでも内定くれましたね。落としたら街宣でもかけられるかな、と採用したのかもしれないんですが。

#### (9) 小括

中学時代からの右翼思想への傾倒、学生時代からの右翼運動への参加——排外主義運動の若い活動家のなかでいえば、δ 氏は例外的な性格を多く持つ。その意味で、属性や動機の面で彼を「行動する保守」の典型とみなすことはできない。彼の転換と方針からは、むしろ排外主義運動の分析をめぐる次の 2 つの論点を提示したほうがよいだろう。

第 1 は、既存の右翼が排外主義へと転換する可能性である。右翼運動の分析では外国人の増加が排外主義運動を生み出す可能性が指摘されてきたが (Szymkowiak and Steinhoff 1995)、現実はこの説を裏切ってきた。在特会の標的は、戦後ずっと日本に住んできた在日コリアンであり、外国人人口の増加とは関係なく運動が生起している。しかし、δ 氏が標的とするのは国籍別人口で最大集団となった在日中国人であり、その点で上記の予測に沿って排外主義が生じている。その背景には、右翼ないし保守派の本音として、「異民族に対する不寛容」があることを δ 氏が指摘したのは、基本的に妥当だと考えられる。さらに、既存右翼はルーチン化した行動ゆえに先細りしているという指摘に鑑みれば、生き残りをかけて排外主義を旗印とする既成右翼が現れる可能性もないとはいえない。

<sup>10</sup> 正確には勅語ではなく詔書。

第2は、「さらに右」の運動が現れることにより、運動や言説が変化する可能性である。δ氏は、運動の言説空間に排外主義を意識的に持ち込むことで、過激な言説が受容される余地を作り出そうとしている。一方で、運動組織間の競合関係が運動の過激化をもたすという、タローの指摘に沿った展開が始まってようにもみえる (Tarrow 1989)。タローの議論に従えば、運動の過激化により一部の先鋭的な行動と世論の乖離が著しくなり、暴力的な行動は増加するものの運動は衰退する。他方で、タローの抗議サイクル論を裏切る形で、過激な言説により排外主義に対する免疫ができるような展開は起こるのか。排外主義運動が表面化してから5年以上が経過した現在、その実態解明にとどまらず、軌跡の分析まで踏み込んだ研究が求められている<sup>11</sup>。

---

<sup>11</sup> この点について詳しくは、以下の文献も参照のこと (Koopmans 1995; Traugott 1995)。

### 3 1 トンデモ本から歴史問題をめぐる嫌悪感へ・ε氏の場合

#### (1) 政治に対する関心

ありましたね。親の付き合いというか、一時期『赤旗』をとってそれを熱心に読んでいた時期がありました。選挙権持った当時はすごく政治が嫌いというか、一票投じたところで何も変わらないからいいやっていう感じで。だから棄権ですね、ずっと。でも、20代後半以降になって、それではいかんと思うようになって、大体白票を投じるようになりました。自民党に投票したことはないです。一度もないです。政党では共産党だけ。今は白票ですね。(白票を投じるのは)抗議ですね。政治ってなんか最初からマイナスイメージなんです。

たとえ話しますと、ホットケーキがありますよね。ホットケーキは一部の人だけのもの。その一部の人たち、誰からも文句言われぬようにホットケーキを切り分けて配る、それをみんなに、一部の人たちが配る。それが政治、僕はそういう風に理解しています。利権の分配と利権をめぐる争い、そういう風に認識してるんです。

共産党の場合、汚さがないんです。金にまつわるものがないじゃないですか。主義主張にしても、はっきり主張するんです。それが自民党に比べてすごく好感を持ったんです。これは後の西村修平さんの支持の伏線になってるんです。ただ、マルクス＝レーニン主義の思想ですかね、そっちの方は全然興味がないというか、理解できなかったです。わからなかったです。要は姿勢ですね、表面的な、そういうものに共感したんです。一時期そういう(共産党に)投票していたことがあった。(共産党に投票をやめたのは)勉強すると、日本共産党はコミンテルンの日本支部というか、工作機関なんですね。大日本帝国に革命を起こして体制をひっくり返そうというか、その工作機関として設立されたわけなんです。そういうのを知ると支持はできないです。

#### (2) 外国人との接点

ありますね。ただ、韓国人と在日朝鮮人が主ですね。で、あと中国人ですね。まず、韓国人から言いますと、幼少の頃ですね、近所に韓国人一家が住んでたんです。知り合うようになったきっかけはよく覚えてないんですけど、表札があるじゃないですか、そこにハングル文字とか書いてあるんですね。で、「これは何だ」と友達とわいわい言っていた時に、中から人が出てきて、それで関わるようになった。あくまでも子ども達だけ(の付き合い)ですね。でも一時的なものですぐ引っ越して行っちゃったんですけど。学校には通ってなかった——民族学校っていうんですか、ですから同じ小学校には通ってなかったです。別にそれが個人的な恨み(につながった)とかないです。彼ら普通に日本語話してましたし。外国人という認識は持たなかったです。ちょっと目が釣り上がっているように見えたり、へんな文字使っていたり、日本の学校に通わないとか、それをちょっとおかしいなと思っただけで。

朝鮮人の場合は、少人数制の予備校に通っていた時に、大検の資格を取るために来ていた人がいたんです。その人は、顔が面白かったので、自分の方から話しかけて関わるようになったというか。フビライ・ハーンに似ていたんです。特徴のある顔ですね。幅が広くてはの字眉毛で目が細くて、あんな感じだった。変わったものに対する好奇心というか、自分の方から近づいて、今から思うと随分と失礼なことを言ったと思うんですけど、向こうもよくしてくれて、帰りの電車で一緒に帰って。予備校だけの付き合いだったんですけど、まあそ

んな関係、世間話するような感じですね。

中国人は、まあそれに近い年なんですけど、親の知人の紹介で建設現場で働いたことがあるんですよ。その頃は不動産バブルの——92年のバブルの余韻が残っていて、3K——キツイ、キタナイ、キケン——そういう仕事は日本人がいなくて、中国から来た人が僕のいた現場にもいたんですけど。朝鮮の人と違って、中国の人は異質っていうか、明らかに不潔な、嫌悪感を持ちましたね。明らかに自分達と違うものを感じて。言葉も違いますし。

中国人の場合は、政治的に関わるんです。要は排外主義の形成の原因になっている——1つの原因になっているんです。生理的嫌悪感をすごい持ちましたね。甲高い声でまくし立てるような言葉が本当に耳障りだったんですよ。それで、中国人に関するセンセーショナルな本を読んだんですよ。黄文雄——台湾人の立場ですごく中国を悪く書いている——あれを読んだんですよ。中国人と関わってそれで衝撃を受けたおかげで、どうなんだってことで嫌悪感とか軽蔑の感じですよ。こういう人たちが日本に来るって、乗っ取られるというか関わりたくないって。

今の僕の中国人に対する観念は、黄文雄さんという本と僕の個人的な経験で培っているんですよ。中国人に対するステレオタイプ的なマイナスイメージというですか、公共の概念がなくて整列乗車しない、あたりかまわず痰を撒き散らすとか、自分を守るために平気で嘘をついたり、盗むことに対する……。あとは、これも本で読んだんですけど、中国ってトイレ文化がない、水がないところですから、流すって習慣がないんですよ。ウンチをしたら流すのは後から使う人の役目だ、と本で読んでちょっと信じられなかったんですけど、自分がそういう目にあつた。建築現場に事務所代わりに近くのアパートを借りて、そこに中国人の労働者が寝泊りしていて僕もそこで着替えていたんですけど、ある日トイレに入ったらまるまるのウンコが……それで嫌いになりましたね。

だから僕は中国と韓国というと、すぐ思い浮かぶのはウンチと……ですね<sup>12</sup>。韓国も多いですね、嫌がらせに大便を使うとかそういうニュースが流れます。衝撃的だったのが『朝鮮日報』で、フライドチキンに虫が入っていたことに腹を立てて、大便を汲んできて店に撒き散らした——そういうニュースをネットで見ると……。 (それまでの中国に対するイメージは『西遊記』ってあるじゃないですか。悠久な大地に住む大らかな人々、そういうイメージしかなかったですね。実際に生身の人を見て変わりました。あと個人的に恨みとかないんです。けんかしたとかそういうことも。

中国人と韓国人では、同じ排外主義でも全然理由が違うんですよ。韓国は政治的なものに対する嫌悪感で、中国は恐怖心ですね。黄文雄さんの本から得た知識なんですけど、中国ってのはどうしてあんな広大な国になったのか、あれは侵略したんじゃないんですよ。1つの王朝が崩壊して内乱が始まりますね。そうすると流民が発生するわけです。それが周辺地域に散らばって、周辺地域で多数になったのを呑み込む形で中華は大きくなったんです。長城から北って元は中国じゃなかったんです。日本も同じように北海道とかああいうところで多数になると、中国になる。これは阻止しなければならないと思って。

### (3) 活動のプル要因

---

<sup>12</sup> 「……」の部分は聞き取れなかった。



## 《インターネット》

まず、インターネットとの接点があるじゃないですか。元々、株をやる前は競馬に興味があったんです。競馬場に通っていたんですけど、それが段々苦になって自宅にいながらコンピュータで予想の過程を自動化というんですかね、コンピュータ言語を学んでシステム化して…。そんなことを考えていて、インターネットとかパソコンですかね、CS デジタル放送とか通信関連の技術革新に興味持っていて、Windows 95 が出て、本格的にインターネットの時代が始まるじゃないですか。僕も始めたんですけど、動機は競馬のパソコン投票。アニメとかじゃないんですよ。中央競馬と地方競馬って両方あったんですけど、ネット時代になってからパソコン投票で買えるようなシステムができたんです。98年の5月に初めてWindows 95 のノートパソコン買って、それから2002年ぐらいまでずっとそんなCSも継続して、それ見ながら——趣味なんですけど、それで生活送っていて。

それが挫折してから株なんです。僕はギャンブルとかじゃなくて、投資としての競馬というのを考えていて、いろいろ単勝が出るからとか、いろんなやり方を試したんですけど、最終的にうまくいなくて、諦めて株を始めた。それが2002年なんです。転換期となったのが、ブロードバンドですね。ADSL という技術が2000年くらいにできて、僕も2002年の9月12日に契約して、そこから常時接続のネット環境ができた。これがライフスタイルを大きく変えちゃった。(それまでは)投票の時だけつながるって、従量制ですから長くつないでいるとお金かかっちゃうんです。それを嫌って…。

それが常時接続になると、ライフスタイルが変わっちゃうわけです。要は無制限ですから、ずっと家にいて一日中用事がなければ朝から晩まで——仕事がない日ってことですね——ずっとにらめっこしてるんです。ネット廃人って社会不適合者への方向性が決定的に…そういう時期。だから昼間の仕事もやめる原因になったのも、これが影響しているんです。働いて収入を得るよりも、ネットに向かって知恵を働かせてお金を得るっていうんですかね。

…生き甲斐が持てなかったんですよ、働いて。ただ生活費のために働く、嫌なことをやるっていうか、そういうのが得意じゃなかったんですよ。別にお金はどうでもいいんですけど。生き甲斐とか誇りを持てるようなもの、そういうものがあればそれに打ち込みたかったんですけど、そういうものがないので。でも、生活のために働かなければならないとか、それがちょっと納得いかなかったんですよ。親は「みんなそうやってるんだから、それが当たり前だ」というんですけど。かつては助言に従って、望んでもいない大学受験して、浪人して、それが何にもならなかったわけですから、「みんながやるからお前も」というのは…。

その時は株で当てる自信がなかったんです。要は競馬が不発だったんで、次はこれって感じ。で、ネットで株だけじゃないんですよ。合間や暇つぶしにネットサーフィンをするんです。2ちゃんねるとかYahoo!掲示板とか。その当時は日韓ワールドカップがありましたよね。それで、韓国人のマナーとかいろいろ問題があって、嫌韓コピペっていうんですかね、韓国を誹謗するようなアスキーアートとか、僕が見ていた嫌韓というんですかね、韓国を誹謗するというか、ああいうのがいっぱい貼られて。僕が見ていた関係ない経済とか市況の板とか、そういうところまで貼られるようになるわけです。韓国人を誹謗中傷するような…。ですからいやでもそういうのに向き合うようになったというか。

## 《歴史認識の問題》

あとは、僕は基本的に歴史の知識があったんですよ、素養として。ネット掲示板の歴史議論をはたから眺めているわけですよ。おかしいものがあれば、あるいはネット右翼と左と在日朝鮮人とで歴史——植民地時代のいろいろなことについて議論を戦わせていたわけで、興味があるものについては個別に横槍を。その時に、僕が横槍を入れたわけですよ。それで相手から右翼認定受けたんですよ。その当時、僕は在日朝鮮人問題に対する認識は特になかったんですけど、イメージとしては「望んでもないのに日本に連れてこられた」恨み節を口にする人たちが、同時に日本に居座り続けて民族としての権利というか主張するのは、道理に合わないと思ったんですよ。

多文化共生じゃなくて——むしろ民族の権利でいうのなら、南北の祖国統一を求めなきゃおかしい。僕は、朝鮮人は朝鮮半島に帰るべきだと思ったら、(ネットでの相手が) 右翼だといったんです。どうして右翼なんですかと聞いたら、明確な答えが得られなかったんですよ。歴史的にも右翼って朝鮮人に排他的というか、とったことがないんですよ。昔、玄洋社ってあったじゃないですか。頭山満とか内田良平とか、その思想ってのは、日本と朝鮮は欧米列強の侵略に対抗するために、アジアは団結していかなければならないという考えを持っていた。金玉均とか知ってますか——明治維新を実現した日本のように近代化を目指す、層としては開明派の知識人。そういう人たちを日本の右翼が支援した。あとはなんだろう、東学党の乱とか覚えてますか。それも日本の右翼というのか、内田龍平の国龍会とか支援してたわけですよ。ですから、「朝鮮出て行け」は右翼の考え——そういう主張をしたことはないんですよ。今も昔も。それなのになんで自分が右翼認定されるのか、それがきっかけですよ。

義務教育ですかね、いわゆる自虐史観を植えつけられた覚えがないんですよ——「日本はアジアで悪いことしました、反省しなければならない」。歴史に関しては、プラモデルあったじゃないですか。零戦とか軍艦、ああいうのを作っていた関係で、特に昭和初期とか歴史には興味があつて。小学校の図書館に学習漫画ありますよね、『日本の歴史』とかああいうのを見てたんですよ。で、学校では歴史に関しては縄文とかあっちのほうから初めて、近代になると授業時間の関係で全然取り上げないですよ。僕も大正昭和の歴史については学校で習った覚えがないんですよ。授業でも戦争の思い出話を語る教師ってのがいたんですけど、戦争はもういやだとか戦争はもうやっちゃいけないとか、感傷的なことしか言わない。テレビでも終戦記念日の8月15日になると特番が組まれて、内容はやっぱり戦争はもうやだとかやっちゃいけないとか、感傷的な反戦……。僕も知識も分別もない子どもだった頃、そういう風潮に辟易してました。

でも、南京大虐殺は知らなかったですけど、朝鮮人強制連行については何となく知ってました。高校の時がおかしかったんですよ。僕は公立高校に進学したんですけど、いわゆる偏差値でいうと落ちこぼれ組になるんです。で、どんな学校かといいますと、大学に進学する人はクラスで数人しかなくて、それもFランクの私立大に推薦で入る程度、残りは専門学校とか就職なんですよ。そういう学校なんです。教職員の組合の力が強くて、フェミニズムとかリベラリズムに染まった自由放任とか。生徒のほうも無気力無関心しらせていて、生徒の思想信条を尊重しろという趣旨で、学校の行事で日の丸を掲げなくて、卒業式でも君が代は歌わないとか、そういう学校でした。(それに対して) 反発はありましたね。おかしい

と思いました。

修学旅行は広島に行って、修学旅行の前に『はだしのゲン』ってありましたね。あの著者の中沢啓二氏を学校に招いて、体育館で講演会ってのがありまして。その講演会の後に中沢氏を囲んで座談会が行われたんですね。僕はそれに参加しなかったんですけど、後で『会報』とかを通じて政治経済の教師が「天皇に戦争責任がある」って発言したのを知って、僕は明らかにおかしいことを言ってると思ったんですけど、自分には知識がなくて弁も立たないですから反論できなくて、自分の無力・・・悔しかったんですね。これが今の人格形成に与えた早期の影響ですね。左（に対する嫌悪感）ですね。

世界史の教師、すごく教え方がうまいですよ。その人は西洋東洋の歴史を古代から近代まで網羅して、そのお陰で全体の流れが（頭に）入ってるわけですよ。その教師も、第二次世界大戦の意義について、民主主義勢力と全体主義勢力が戦って、民主主義が勝利を収めたとかかかっている、と提示した。良いものと悪いものが戦って良いものが勝った、そういう風に教えてたんで、それはちょっと違うかなと。

左の言っているような「初めに悪いものがあって、歴史は前途開く」との対立で、加害者と被害者の対立で説明するようなものには違和感を持ってました。僕はそういうものに対しては相対主義というのですかね、何が良いもので何が悪いものかを決めるのは軍事力だ、戦争に勝った者が正しくて負けたものが悪い。だから、僕もその当時は日本とドイツが悪者になったのは、戦争に負けたからであって、勝っていたら評価が違ってたと。それに対してクラスメートが、「ホロコーストってある、アウシュビッツでユダヤ人を大量に虐殺しているのだから、戦争に勝っても悪という評価は変わらない」なんて言うんです。僕は違う、戦争に勝てばそれも正当化される、そう言ったらへんな奴扱いされました。

この当時、自分の運命を変える本を読んだっていうか——トンデモ本になるんですけど、『ユダヤがわかると世界がみえてくる』——86年にそれ読んだんです。歴史修正主義との接点はユダヤ陰謀論、僕の場合そうなんです。この本を通じて『シオン賢者のプロトコル』——有名な偽書がある、ヒトラーの思想形成に大きな影響を与えた偽書ですね、あの存在を知って。この偽書なんです。僕の今の政治思想というのは、自分の人格形成、思想形成に大きな影響を与えてるっていうか、要はこの偽書の内容そのままなんです。この偽書の内容で世の中は動いていると思ったんです。ユダヤが世界を支配とかそういうのは信じてなかったんですけど、内容は本物だと思いました。これ（書籍を提示して）は97年に研究のために買ったのですが、僕のものの方の考え方の根底というのは、陰謀論的発想と愚民思想ですかね。

（こういう思想を受け入れたのは）左側の教師に対する反発ですね。イデオロギーに対して、自分のイデオロギーを確立しないといけないと思ったから。僕はそれで人間嫌いになりましたね。今までは小学校も中学校も、学校の近くに一流企業の社宅があったんです。ですから生徒の質も、要は進学校とか東大とかあっちの——善良な師弟が多かったんですけど、高校のときは偏差値の低い・・・層が全然違ったんですね。人間の層ですね。だから話が合わなくなっちゃったんです。だから教師も生徒もみんな嫌いでした。ですから、愚民思想ってすごくアピールするわけですよ。多数の人間というのは判断力を持たなくて少数の賢者が導いてやる、そういう思想に影響を受けた。なんか惹くものがあるんですね。左翼嫌いになりましたね。あと歴史観も独自のもの、正しいものなんてない、力が決める、と。

大学は無気力になってましたね。浪人していいとこに入れなかったんで、空白の時代というんですかね。その頃は公務員試験の勉強してましたね。就職とかは考えてなくて。僕は人間的に営業に向いてないんですよ。そういう仕事に生き甲斐というか長く続けていく自信がなかったんで、はじめから公務員ですかね。国家二種には受かったんですよ、最終に残らなただけで。それから人生が白紙になったわけです。でも働かないと生活に苦勞するわけですからアルバイトするわけですよ。どうやって身を立てていこうか、というので競馬になるわけです。いろいろ頭を働かせて。それから株になって株の次がFXですかね、それで大きく当てるわけですよ。

#### (4) ネット上の活動からリアルな活動へ

##### 《教科書問題という契機》

(それまで活動していなかったのは) 昼間の仕事をしてたというのはありますよね、それを完全にやめたのは——やめたというかクビになっちゃったんですけど——2004年12月17日で昼間の仕事はなくなって、あとは早朝の仕事しかない。あとはネット取引ですね。それで2005年を迎えるわけですけど、7月ですね、「つくる会」の教科書、自治体が採択するという。それに抗議する人が人間の鎖で、それが一時期ネット上ですごかったんですよ。逆に「人間の鎖をさらに囲むオフ」とかみたいなのが企画されて。これですね、韓国に対する排外主義を形成するきっかけが。何で韓国民団が日本の歴史教科書にいちいち文句言ってくるんだ、非常に不愉快に思ったんです。

同じ歴史上の出来事でも立場によって見方が違うのは当たり前なんですよね。ナポレオンはフランスにとっては英雄ですけど、ドイツやロシアにとっては侵略者なんです。だから共通の認識ってのはないんです。それは当たり前なんですけど、なんで韓国とあっちの見方に合わせないと歴史の歪曲とか極右とか非難されるのか、それが納得いかなかったですね。

(2001年の教科書採択時は) 常時接続のネット環境がなかったんで何も…。新聞は読まないです、テレビも見ないです。ですから僕は拉致問題とか興味がないというか、興味持たなかったですね。在日コリアンと左翼が結託して日本を悪くしているという世界で、これに対抗すべく自分も現実の世界で団体に所属して活躍しなければならないな、と思うようになったのがこれなんです。

##### 《崇敬奉賛会への加入》

2005年の8月15日というのは、節目の歳の靖国神社です。僕は、参拝じゃなくて見物に行っただけですが、それを見て感銘を受けて。それで靖国神社に崇敬奉賛会といって、信者じゃないんですけど参拝する人たちの組織というんですかね、同好会というんですかね、そこに青年部というのが新しくできたんですよ。そこに行けば僕と同じような志を持っているような仲間がいるんじゃないかと思って、それが2006年の僕の誕生日に加入したんですよ。でも、人間が全然違うんです。全然タイプが違うんです。政治的なことが、僕と同じような問題意識は持ってない、全然関係ない神道とかあっちの文化ですね。人間的にも面白くない、生真面目すぎて趣味思考も全然違う、話も合わなかったですね。ですから所属しても、活動とかあまりしなかったです。

2ちゃんねるで「参拝するオフ」とかで熱い議論が、僕もそれで興味を持って一度行って

みようかと思って。僕は国家主義とか民族主義とかいう要素は持ってないですよ、ノンポリですよ。(でも行ったのは)物見遊山ですね。在日コリアンとか左翼の人たちが靖国神社を攻撃しているわけです。ですからそういうところに行けば、同じ関心を持った人たちに会えるんじゃないかという期待がありました。

(感銘を受けたのは)参拝者がすごかったんですよ。20万人ですかね。場にそぐわないカトリック信者の団体とかも来ていましたし、これが今の時代のタイムリーな現場にいるんだな、という。

#### 《ネットでの活動》

Yahoo!掲示板を通じて、同業者っていうんですかね——韓国とかあっちの方を叩くユーザーから力量を見込まれて、Mixiに誘われたんですよ。Mixiでコミュニティってあるじゃないですか、そこの移民反対同盟っていう…そこで「行動する保守」の有門大輔、あの人と接点を持つようになったんです。当時は「行動する保守」ってできてなかったんですけど、あの辺との活動家との接点はMixiなんです。それが2007年5月4日ですね。書き込み見ると、参加した挨拶文を書いています。その当時から、(自分は)「中国韓国を対象とした排外主義を」と展開してますね。中国人というのは、中華街のような自分達だけの排他的なコミュニティを作る。中華思想ってのは差別思想というんですかね、「自分たちは人間で 周辺はけだものだ」そういう発想を持っている。そういう人たちが日本に入ってきて多数派になると、そこが中国になっちゃうから、こういうのをやめさせなければならないよと。

特徴としては、人種に対する嫌悪感というのは僕はないんですよ。中国人そのものに対してはあまり…むしろ彼らの発想を嫌ったんですね。その当時、中国の雲南省で乱開発の禿山があって、これを緑化しよう…それをどうしたかという、緑のペンキで塗ったという事件があったんですよ。こういう自然に対するおかしな発想、感性——融和共存というのはできない。こういう人たちに日本の国土が荒らされることを、すごく敬遠する書き込みをしましたね。ですから人じゃないんですよ。発想とか文化ですね、言葉なんかも。

Mixiの友達をマイミクっていうんですけど、この頃は政治系のユーザーがいなかったんですよ。音楽関係のばっかりで。ですからそういう人たちの誤解を受けるのを恐れて、最初是有門さんを友達には加えなかったんですよ。Mixiで政治的な日記はまだ書いてなかったんですよ。こういうのはけんかの元になるんですよ。それが変わったのが翌年です。行動する保守の誕生するきっかけになった経緯ってご存知ですか？ 在特会と瀬戸さん、西村さん、この三者が共同で河野談話の白紙撤回を求める署名活動を始めたことがきっかけで結成されたんですよ。その前は何をやっていたかという、瀬戸さんのグループが中心になって維新政党・新風を応援してたじゃないですか。それが参院選で惨敗して。慰安婦問題はもともと主権回復のテーマなんですね。それが結成されて、いわゆるヘイト・スピーチの街宣をやるわけですよ。それを最初に見たのが2008年3月7日、議員会館前で行われたものですね。

(それまで在特会関連のサイトは)一切見てませんでした。在特会については、Mixiに加入する前に嫌韓の同業者にですね、そこを通じて会が発足するよという情報は得ていません。発足記念集会に行くつもりでいたんですけど結局行かず、というのはあります。チャンネル桜で桜井さんが出ているものをYoutubeで見ただけですけど、特に魅力を感じなかったで

す。今みたいにマシンガントークで、ということではなく凡庸な——特に興味を持たなかったです。

この運動に加わるきっかけになった出来事が、長野聖火リレーなんですよ。Youtube で中国人留学生の乱暴狼藉な振る舞い——僕はこういう人たちだから日本に入れちゃいけないよって主張してたわけですよ。それが正に主張していた通りのことが起こっている。殴りつけてやりたいような衝動にかられて、今のうちに芽を摘んでおかないと将来大変なことになると思うので。このニュースを全然伝えなかったマスメディアの報道のあり方にも、すごい疑問と不信感を持ったんですね。大きな混乱もなく無事終了なんて、どうしてこういう嘘を平気で言うんだって。

これ以降は Mixi で中国人に対する悪口っていうんですかね、そういう日記をずらずらって書くようになったんです。それで現場に初めていったのが、胡錦濤主席が来日して、日比谷で福田総理の晩餐会があって、そこが初参加です。でも、そこも靖国と同じで見物に行っただけなんです。そこで、うーん、この運動に加わろうと。この中でやろうと思いましたね。

(共感したのは)ストレートに感情を表現する。共産党に共感を持ったような理由と同じなんですよね。歯に衣着せぬ物言い、本音をそのままストレートにぶつける、そういう姿勢に共感を持ったんですよ。

#### 《リアルな運動へ》

その当時は羞恥心と警戒心が入り混じった奇妙な、あとビデオにうつるのを嫌って、街宣参加者の輪の中になかなか入れなかったんですよ。ですから参加するといっても、遠巻きに彼らを監視している公安と同じ位置に立ちながらシュプレヒコールやったり、なんか随分おかしなことやってましたね。

加わるきっかけとなったのは、僕は最初「行動する保守」の3グループですね、瀬戸さん、西村さんと桜井さんですね。その中で瀬戸さんと西村さんは僕と世代が違うじゃないですか、だから敷居が高そうな感じがして、桜井さんに最初接近したんですよ。初めて話したのが2008年6月22日ですね。その時に声をかけたら、冷たくそっけない態度をとられて、「ああそうですか」と。これで僕は在特会に最初入ろうと思ったんですけど、入る気なくしちゃって。——でも冷たいんじゃないって、桜井さんって元々そういう感じの人なんですよ。

でも同じ日の街宣で、非常によく通る声でわかりやすい演説をしていた弁士、若手弁士がいたんですよ。それが日護会の黒田大輔って、今はもう廃人同然になってますけど、あの人。「こんな人材が埋もれていたんだ」と思って、その日に Mixi で演説を讃えるようなメッセージを送って。7月1日も街宣の時に、現地に行って黒田君に挨拶したら、すごく感じがよかったですよね。ああ、ここをベースにして行動する保守の活動に参加しようと思って。あとはこの当時は、毎日新聞の英語版がひどすぎるという記事で、ここの黒田君が毎日新聞変態祭——毎日新聞本社前で糾弾会をやったんですね。それに2008年はずっと皆勤で参加しています。そこで多くの活動家と出会って、そのうちの重要な出会いが主権回復を目指す会のナンバー2のカメラマンの細川勝一郎です。あの人との出会いが一番大きかったですね。僕は細川さん支持なんですよ。細川さんが離れたら、主権も支持できない。

日護会はどちらかというと過激なヘイトではなく穏健な保守が集まったんですよ。ポスティングやるような人たちが。そういう人たちの影響というか人間関係上、僕もそういう活

動していた時期がありました。僕は日護会を基準にして、ベースにして活動する予定だったんですけど、それが東村山事件——それをきっかけに黒田君が毎日新聞から創価学会へ運動路線を切り替えちゃった。方向性の違いとか関心の違いから関係が薄くなっていった。それが黒田君との関係の始まりと終わりです。別にけんかしたわけじゃないです。ただ徐々にフェードアウトって。

それで、2009年の大きな激動の年です。一番運動が——カルデロン問題から始まって、暮れのチーム関西の朝鮮学校をピークにして。衆院選もあったり、外国人参政権の問題すごく大きくなった時期。（この頃に）ポスティングを僕はやっていて、それも一時的なものであとやめちゃったんですね。次の方向性を模索していた時期があって、あまりはっきり動いてないんですけどね。その後に主権回復との接点ができるわけですが。

（「カルデロン問題」について）僕は関心なかったんですよ。テーマが違うんで。外国人の不法滞在とかフィリピン人とか、どうでもよかったんです。ただメディアがかわいそう、かわいそうの同情論一色で世論を誘導するのを見て、「ああこれは胡散臭い、背後に朝鮮がいる」と思って、「徹底的に叩かなきゃ」。それは調べたわけじゃないんです、直感的に思っただけです。でも実際に調べたらやっぱりいる、一家支えていた弁護士ですね。調べたら従軍慰安婦ですかね、福島瑞穂と共に名を連ねている悪名高い弁護士だったんですね。やはり在日コリアンとか朝鮮のために働くような人たちが、カルデロン一家の背後で暗躍している。（こうしたことを）書き散らしたと思いますね、どこに書いたかは失念してしまっただけですけど。（街宣にも）行きました。このデモ、反響というか在特会の悪名が轟いた。在特会が全国同時で外国人参政権反対デモってやったんですよ。それも成功して、在特会の知名度が全国区になってしまったんですよ。そうすると在特会と主権回復の関係にひびが入り始めたんです。妬みとかやっかみですね。

#### 《運動の過激化》

それが関係するのかわからないんですけど、主権回復の運動路線がすごい過激化するんですよ。すごい滅茶苦茶なことをやるんですね。チーム関西の伏線のような感じですね。僕は2009年の4月11日の浦和の栄光ゼミナール抗議ですかね、教材に南京大虐殺とか従軍慰安婦を盛り込んだ件で抗議に行っただけなんです。無許可街宣だったんですけど。南浦和のような辺鄙なところに機動隊が何台もバスを出して、機動隊と一触即発の・・・僕はすごい怖かったんですけど、なんともいえない高揚感だったんです。逮捕されるんじゃないかと思いましてね。

帰りの電車で、主権回復の運転手——あの人と一緒に意気投合して。細川さんというのは運動に対して真面目だったんですよ。よく日記を書いていたんですね。運動に対するあり方とか日誌を書いて、僕はそういうところに自分の見解を投稿しているうちに認められて、参謀のような役目を果たすようになったんですけど。僕も自分なりの運動論というのを、この頃から発表するようになったというか。

主権回復の滅茶苦茶な運動路線、あれを正当化する理論作りですよ。僕はそういうのを作ったというか。それはどういうことかといいますと、主張は政治テーマで広く一般に周知させるには、本当は全国ベースとして新聞とかテレビに取り上げてもらうことが一番効率いいんですね。でも報道機関というのは、権力のイヌなんですよ。自分達に都合の悪いもの

は黙殺、都合のいいものは大きく大げさに取り上げて、メディアを支配する。メディアに取り上げられようと思って、どんなに常識的な——ヘイトスピーチなしに訴えても、体制にとって都合の悪いものであれば無視されるんですよ。たとえば外国人参政権反対とか移民受け入れ反対といっても……。これに対しては、政治的主張よりも自分達の存在そのものを知らしめることを優先させるんだ、そのためには支持や賛同を得ることを度外視して、過激な行動を演技でやってネットで配信して、存在が知れ渡れば彼らはどういう人なんだろうって興味を持つ人たちも出てくる。その結果として、自分達の政治的主張が拡散につながるのならば、政治目的は達成したとか、僕はそういう風に思ってたんです。

転換点となった出来事がありまして——関西の大馬鹿っていうんですかね、未熟なメンバーを主権回復が指導する形で新たに運動を始めたわけですけど、関西の人たちって優秀なんですね。すごい口がうまいというか、演技が。逆に暴走しすぎて刑事事件とか、そういう不安があったんですね。関西の人たちは感情表現がうまいんですよ。僕はこれを絶賛したんですけど、細川さんという人は違ったんです。批判を口にしたのは初めてだったんです。関西のメンバーは政治運動の経験がないから、警察との駆け引きが未熟だ、このままじゃ逮捕されちゃうって。それで初めて（自分も）イケイケから一転して。あと京都の件でチーム関西の知名度が全国区になって、主権との力関係が変わっちゃって言うことをきかなくなっちゃうんですね、勝手な行動をとる。それで主権との関係がまずくなって。最終的には除名になっちゃうんですけど。

#### 《活動の動機》

（なぜ活動するのか）西村さんの考えと同じで、社会悪を打倒するというか、やっつけるきっかけになればいいと思って。そのための狼煙を上げる作業だって、そういう風に解釈している。僕は街宣とかデモで世の中変わるとは思ってないんですよ。ただきっかけは作れるんじゃないかと思って。変わるきっかけですね。僕の立場は基本的には傍観者なんですよ。脇から見ていてだけで。ただ、社会の不条理とか社会悪に憤って変えたいと思っている人があれば、力になってあげたいということです。

（最初は）なかなか輪に入ることができなかつたんですよ。最初のステップとして日護会の街宣があったわけですよ。僕は別に演説とかするわけじゃないんです。参加しているときも、僕は活動家という意識はなかつたわけですよ。ただ、僕はネット上で意見——それが本来の役割で、現場に「見に行く」というか、そういう関わり方ですね。ですから「参加したことはない」——活動家として参加したことはないともいえますね。それは今でも変わってないと思いますね。名前をさらさないし、演説もしないし。やっぱりリスクがあるじゃないですか、そうすることによる。それが小心であると同時に悪い人間だとか、卑怯だとか。まあ、それが1つの戦い方というんですかね、僕からは相手を攻撃できますけど、相手からは自分を見えない。卑怯とか言われますけど、僕はそういう戦い方というか。

（運動に参加しての変化）はありますね。似てくるんですよ。西村（修平）さんとか……。暴言を吐くようになりましたね。僕はどちらかというと思っていることは言わないタイプです。人に気を遣うタイプで、自分が何かいったことで人を不愉快にしたり傷つけたりするが嫌で。そういうことを避けるために、自分が我慢して避けられるのだったら我慢する。何も文句を言わないタイプなんですよ。ですから損をすることが多いんですよ、今まで。



でもこれに参加することによって、ストレートに暴言吐くようになる。職場でもそうなんですけど、60代のパワーハラする問題がある人なんですけど、そういうのに「人間のくず」とか「死ね」とか言うようになりましたね。理不尽なことは我慢しないで、言いたいことは何でも言って。逆に、職場の仲間の人たちからは評価されるわけです。パワーハラスメントとかそういう悪い人がいて、権限も何も無いのに長くいるからやりたい放題やっている人がいるわけです。そういう人に、僕だけです、逆だったのは。皆がいえないことをぼんぼんストレートに言ってけんかして、最終的に影響力が排除されて。ですから人望が……。でも結構恨まれたりもしてますけど。でもあんまり褒められるようなことじゃないですよ。

自分の将来の人生とかも考えたわけですよ。つまらないことで将来の幸せな人生を棒に振ってしまうと困る、ということで下手なことをしない。自分の将来がなくなってくると、どうでもよくなってくる。それもあと思うんですよね。未来がないから、そういう状態で西村さんのような人を見て変わったというか。あの人の運動に参加する気はないですけど、今でも尊敬の念は変わらないです。

最近では排害社の池袋清掃に参加しているくらいで、運動に対する考え方の違いでどんどん溝ができてきています。行動する保守というのは、従軍慰安婦問題、河野談話の白紙撤回を目標に始まったものなんです。でもそれがなぜか、創価学会問題にはまって、話題になっている時事問題に乗り換えていって……。僕は慰安婦なら慰安婦で、1つに絞って続けていこうという考え方なんですけど、実際そうやる人はいないです。だから僕はロートとか吉本とかパチンコとか反対なんですよね。1つのことに集中して結果を出すことが大事だと思っています。原発問題が起きて、在特会は反原発を反日極左で原発維持推進を愛国者、そういう安易な設定で運動をやるようになったことに対して、僕は反発して。あと素人の乱、あそこに原発デモに賛同メッセージ送ったりして。あまりにも幼稚な設定ですね、愛国反日という、そういうのにも冷ややかな態度をとるようになりました。

排害社ってのは、「行動する保守」というのが崩壊する過程でできたんですね。僕は金友君に、「行動する保守」の失敗を踏まえていろいろ指南したわけですよ。団体を作るな、組織にしちゃうと運営コストがとられるじゃないですか。まじめな政治目的で運動始めても、組織の維持が目的に入れ替わっちゃって。だから組織にしないことと、今までの運動というのは街宣とか鳴り物系のことしかやってないんで、もっとバラエティに富んだことやらないとダメだっていうか。そこで提案したのがグリーンボランティアっていうんですか、清掃ボランティアです。運動の建て直しのために、一時期排害社にてこ入れしてました。

#### 《外国人参政権について》

(知ったのは) そんなに前じゃないですね。参政権自体は、別にどうでもいいんです。ただ韓国人が参政権を得るのは反対。韓国人だけ。中国人、韓国人に当たらなければ認めてもいいよ、という立場です。なぜかという、昔のことがあるんですね、過去の歴史が。過去の歴史に対する物言いに対する反発があるんです。彼らが本当に一方的な被害者なかって。強制連行にしても、それは本当のことなんです、調べたら。でも、在日コリアンの来歴由来とは直接関係ないですね。でも、自分たちは強制連行されてきて、とかそう主張するわけですから。自分達を正当化するための嘘つくわけですから、そういう人たちが日本の公権力に関与することには警戒心を持っているわけです。うそついて好き勝手させら

れたのではたまらない、そういう問題ですね。

中国人の場合は、ちょっと違うんですね。数で圧倒されちゃうという恐怖心ですね。あと、中国の人がいっぱい日本に入ってくると、日本企業はやっぱり商売ですから、彼らを対象にする商売するために、商品に向こうの簡体字を表記したりとか、従業員に中国の言葉を覚えさせるとか、そういうことをやるわけです。必須なんですね、必ず。でもそうになると、日本語だけでは日本で暮らしていけなくなる、そういう危機感なんです。ですから最終的に、お金のために国を売り渡しちゃうことになるんじゃないか、と危機感…。

#### 《「慰安婦」問題について》

いろいろ興味があるのはあったんですけど、慰安婦に絞ったほうがいいんじゃないか。これを崩すというか。南京とは違って記録がないんですよ。慰安婦がいたことは本当なんですけど、公権力が強制的に朝鮮の女性を動員して売春婦にした、それは事実ではないんですよ。でもそれが河野談話で政治的妥協というかそういうので認めてしまって、今の悪いことが起こっているんですよ。それを何とかしなければ、これを突破口にしなければ。一番崩しやすいんですね。戦略の問題です。

(なぜ歴史問題から排外主義に至るのか) 在日は過去の歴史を政治利用するじゃないですか。慰安婦じゃなくても、植民地、強制連行とか。在日朝鮮人は慰安婦のことは言うてなくても、被害者としての歴史を口実に権利を主張しますよね。そういうものに対して嫌悪感があります。僕は当事者じゃないですから、過去の戦争や植民地支配に対して責任を追う立場じゃないんです。何か言われても僕は関係ないというんです。今の在日コリアンの三世四世も、植民地支配を受けたといっても受けた人たちの子孫であって昔のことに對する直接の被害者じゃない。でも、なぜ子孫の間で加害者と被害者の関係で向こうの人たちを尊重しなければならないとか、不満がありますね。なぜ向こうが弱者なのかと。一方的な被害の歴史をもとに政治的主張をするのはダメです。それなら半島に戻るべきじゃないか。

在日コリアンだけじゃなくて、かばう人たちが問題あると思いますね。僕は中国人韓国人には憎しみとか敵意を持っていないんです。向こうが何言っても無視すればいいじゃないか。でも、かばう人がいるんですね、日本人で。彼らの利益供与について。そういう人たちに対する反感が大きいんです。ですから在日朝鮮人の問題にしても、彼らそのものに対しては反感がないけれども、彼らの立場に立ってあれこれ擁護して気に入らないことがあるとレイシストとかレッテル貼る人には反感がありますね。僕の物言いに対してすべてレイシズムで片付けるんです。一切批判を受け付けません。そういう主張をしながら、彼らは「異なる価値観を認め合いましょ」とかそういうことを同時に言うんです。多文化共生とか。僕としては在日コリアンについては日本にいることは問題視していません。ただ政治的な主張をするのは勘弁してくれ、自分たちが被害者で日本が悪者だと、それをもとして民族的主張とかいうのは危険だと。

#### (5) 小括

ε氏は、生計の立て方がかなり特殊な部類に入っており、インターネットを使用する時間(空いた時間)が多くの人とは比較にならないくらい長い。それゆえ、彼自身は「リアル」の活動よりは「ネット」での活動を主に行ってきた。それは「警戒心が強い」という彼自身

の性格にもよるだろう。彼を排外主義に誘ったのも、ネットにおける書き込みであり、インターネットにおいてネット右翼と呼びうる層による書き込みが目立つ現状と運動の関係についてより多面的な考察が必要だろう<sup>13</sup>。

彼は自らの「将来がない」こと、思想の偏りなどを率直に語っている。これは、彼自身が運動からの離脱を考えていることとも関わるが、そうした自分を痛いほど自覚していることによるものだろう。だが同時に、彼は自らを「参謀」「力量を見込まれて」と表現する強烈な自負心が顔を覗かせる。そこに自らの生き甲斐があることを読み取るのはたやすいが、彼自身は自らが経験する剥奪感と運動参加との関係を否定している<sup>14</sup>。30代になってからの彼の不遇が、排外主義への傾斜になったわけではないとは確かにいいうる。ただし、それより遡れば人間嫌いだった高校時代の「トンデモ本」との出会い、それをきっかけとした「愚民思想」への傾斜など、「剥奪」で説明できないとは必ずしもいえない。

だが、これは短期的な剥奪といえるものではなく、青年期からの社会化との関係でみるような視点が必要になる。ある種の思想への接近が、時を経て排外主義を生み出すような素地を持つのか、育った環境との関係で分析する必要性も示唆しているだろう。

---

<sup>13</sup> この点については、不十分ながら北田（2005）や辻（2009, 2011）による仕事がある。

<sup>14</sup> このあたりについては、彼による具体的な説明があるのだが、情報源秘匿のため公開できない部分があることをお断りしておく。

## 3 2 右翼に弟子入りした η 氏の場合

### (1) 「外国人問題」への関心

(生まれた) 周辺の環境というのはどういふとこかと申しますと、非常に工業地帯が多くてですね。在日も多いですね。同級生にもいましたし、上級生下級生にも当然いました。ちょうどバブルの頃に——私は中学生くらいなんですけど——近所の工場でイラン人を雇ったとか、中国人を雇ったとかそういう話がありまして。最初(に関心を持ったの)は外国人、工場に雇っているといっても不法滞在で、ブローカーが会社に連れて来て使ってくれないかと、そのなかから雇用者が1人だったら採用しようとか、2人だったら使おうとかいふ具合ですね。

外国人労働者使ってる雇用者が、会社の中でこういうトラブルがあったとか、こういう問題があったとか……。非常に外国人は扱いにくい、なかなか一筋縄ではいかない。例えば社長の言うことは聞いても、専務とか部長・課長の言うことをまったく聞かない。外国人の側からしてみれば「あなたはボスじゃない、俺のボスじゃないのになんでお前の言うことを聞かないといけないんだ」。社長のいうことは聞くけど他の幹部は無視して、他の社員とトラブルを起こすような、そういう事例が——大人同士の会話であったんですけど。私も子供心にそういうのは話を聞いていまして、これはなかなか一筋縄ではいかないんだなと。

うちの親父なんか会社経営してましたし、そういった近所の主婦同士の付き合いですね。奥さんでも会社の経理を手伝ったり会社に関わって、会社の中で起きるトラブルというのは、はしばしで聞こえてきますから。(両親は) そんな(排斥的な)考えは持ってなかったです。トラブルがありながらも使っているという周囲の状況は、逆に私のほうが度し難かったですね。トラブルが起きるくらいなら、最初から使わないで別の方途を考えればよかったんじゃないかと思えますけどね。

バブル期で日本中どこもそうだったと思えますけど、外国人がどんどん身近に入ってきたと。例えば自分の近所で入管の手入れがあったとか、そういった話も聞きますね。田舎町で、あんまり事件というのは珍しいものですから。当時、私が19歳になったころなんですけど、関西国際空港というのが開港しまして、これが国際化であるとかいろいろ言われておったわけなんですけど。このまま外国人がどんどん増えてきて、日本という国の形ですね、これまでは日本人同士で学校行っても日本人ばかり、会社に行っても日本人ばかり、地域の中でも同じ日本人ばかり。それが当たり前だと思って僕なんか育ってきたわけなんですけど、だんだん外国人が入ってくることによって、「これどうなっていくのかな」と心配になりますよね。自分の地域の町でもそう、外国人とかどうしても目にしますから。中国人、イラン人、南米系も増えてたんですね。やっぱり、このまま国際化国際化といってどんどんどんどん無制限に増えてくると、これはちょっと大変なことになるんじゃないかな、というところから僕は関心を持ったわけですね。

当時は(排斥的な考えを持つ人は)まったくなくて、むしろ外国人を差別しちゃいけないとかいふような風潮で。工場なんかでは逆に不法滞在者でも使っているくらいで、外国人を排斥しようとか、トラブルがあってもどうにかしようとか、そういう懸念がまったくないものですから、これはなかなか大変だなと。学校の教師も教えてくれない、地域の大人も教えてくれない、当時はまだインターネットもないと。

私の行った会社——大阪にいた頃は 2 つくらい会社勤めしましたけど——そこで特にはなかったですね。(自分が直接) 接することはなかったんですね。自分の勤めている会社の中にはいなかったのですが、例えばそこからどこかに派遣されたりしますとね、その先で大きな工場で南米系労働者を使ってるとか、そういうのはありましたね。ただやはりどうしてもそういう問題が起きたりしますし、犯罪も起きたりしましたから、問題だなというのはずっとありまして。どこの社会の階層の中にもいずれ入り込んでくる、学校にもいるし社会にもいるし地域にもいるし。やっぱり国の形というのはどうなってしまうのだろう、すぐに追い出せなくても、本来的には国の形でそうあるべきものじゃないというのを発していかねばならないと思ひまして。そうすると一朝一夕で片付く問題ではないし、自分の一生をかける価値があるのかな、この問題に。それからですね。

## (2) 政治への関心

政治というよりも、多少なりとも——長くはないんですけど、防衛問題とかですね、その辺ちょっとどうしても国を守るとかですね。そういった方面には関心がありましたね。防衛・治安ですね。当然その中には政治というのが深く関わってくるわけで、ニュースなんかでやっていることに対しては多少なりとも興味はありましたね。単純な話なんですけど、どうしても男というのは強いものにあこがれるじゃないですか。いかに反戦教育の中でも、自衛隊基地周辺を通ったら艦船があるとか、自衛隊の何かあるとか、自衛隊の車両が走っているとか、そういうものに対しては関心をひかれますよね。単純なことではあるんですけど、国を守る人に対するあこがれというのはありましたね、下地といいますかね。

一般的な中学生と志向が違って、当時から映画でいいますと戦争映画とか、そういうのがすごく好きで。自衛隊とか軍隊に関心持ち続けてきましたから。ただの中学生がずらっといて、その中から自分なんかはみ出てる存在ですからね。どうしても大人としては余計なこと言わずにこっちに入っとけと。そういった出る杭は打つというんじゃないんですけど、はみ出てるものだから、どうにかして…大人からみればそんなだったかなと。

誰しも関わってくる問題じゃないかと思ひますけど、教育界というのは左系とかああいいうのが多いですから、特に社会科なんかそうですから。これは中学生の時から高校生に至るまで、教師と生徒という関係でもそうですし、個人的にもかなり折り合いが悪いような部分というのはありましたね。向こうもこっちが右的な要素があると思ったのかもかもしれませんけど、あまりこちらに対しては快くないような姿勢というのはありありと。社会科だけでなく英語の教師にしたって、これからの日本は日本語ばかり使っている時代ではない、どんどん外来語が入ってきて、いつまでも日本人が日本語使っているとは限らない。それを肯定するような言い方で、こういう言語をどんどん破壊していくような、かなり危うい教育方針といいますかね。危うい思考だなと。それに対する反発というか、心の奥底に忸怩たるものがありましたね。

(皇室に対する関心は) あの当時は——今もそうなのかもしれないですけど——関心という部分では特には…あまり意識というのはなかったですね。ただ、社会科の教師はどうしても授業のたびに例えば歴史とかじゃなくて地理の授業とか、全然そこに何で今の皇室の殿下の問題が出てくるの? という場面ですね、非常に口汚い言葉で皇族の悪口を言うわけですね。天皇陛下にしてもそうですし、皇后様にしてもそうですし、皇太子様、内親王

殿下…こういった人たちのことを個別に口汚く罵るようなことを言うものですから、それに対する違和感は確かにありましたね。この教師、このおっさんはなぜこんなことを言うのか、ここまでこの授業で言う必要があるのかなど。子供心にそういう違和感といいますか、そういったものはどこかで——僕だけじゃないかもしれないですけど——感じたのはありましたね。

あまり自民だとか当時の野党に対してもそんなあれ（思い）はなかったですけども、必然的に国を守る自衛隊となりますと歴史とか政治とかそういうのはもちろん出てきますから。愛国心の現在の行動の下地になるものはそのころにあったんでしょうね。主に投票してきたのは、やはり自民党であるとか、まあその辺ですね。あとはまあ、非常にマイナーな存在なんですけど、維新政党・新風ができてからそこにも入れましたし。だいたいその2つくらいですかね。

### （3）大阪から東京へ

当時は会社勤めを大阪でやってまして、その時仕事の関係で夜の勤務で、休憩室——夜の休憩の時間帯ですね——でテレビを見ておったんですけど。その頃、TBSのスペースJというニュース番組がありまして、そこで国家社会主義者同盟というのが——日本にもこういう人種差別、民族差別をするような極右団体があるということで取り上げて。批判的に取り上げられておったんですけど。（国家社会主義者同盟が外国人労働者を取り上げたのは）90年の前半くらいです。90年とか91年とか、そのくらいからやっているってことですよ。

まったく外国人問題に対して懸念を表明する大人がいない、怒りを主張するような人たちも存在しないという中で、日本にもこういう考えを持った人たちがいたんだと。そういう躍動感がありまして、これはもう自分もこういうところに参加しなければと。大阪というのは当時周囲に同じ考えを持った友達もいない、そういった団体も組織も存在しない。そういう中で、そういうところに入って戦わなきゃいかんと。下らない会社勤めでこつこつと——やっている人には申し訳ないけど——日々の生活を考えて、というよりもこういう国の国難といいますかね、それに逃避せずに向き合うにはそういう運動に入ることだなって。

その翌年なんですけど、会社辞めてこちら（東京）の方に訪ねてきたのですけどね。団体（国家社会主義者同盟）の当時副代表であった瀬戸弘幸と偶然に、訪ねた時に接触することができて。東京に生活の基盤とかないものですから、「それだったら俺のところに来たらいいんじゃないか、来たかったら来いよ」ということで。それから1週間くらいたって、こちらの方に住み始めたという話ですね、17年前にここにきて。その前に右翼団体というのも見て回ったんですよ。本で見たり、あとは実際に訪ねてみたり、人とは会わなかったんですけど活動風景というのを見ようと思って。（大阪でも）いくつも見回って。ところが休眠——開店休業状態というか、そういう団体も多くて。あるいは活動らしきことはしていても、外国人問題には触れていないと。これはなかなかあてにならないなど。そういう中で国家社会主義者同盟という関東で活動している団体を知りまして。

（活動家になることによって）一般的なステイタスというものが失われたというか、本当だったら会社勤めして結婚でもして今頃家族でも築いてたのかなと思いますけど。恐らくそういう人生を歩むと、それはそれで幸せなんだろうけど自分のなかでどこか物足りなさというか、大切なことをしてこなかったんじゃないかなと思いますし。今、こういう道を

歩んできてそういったものは何も得られてはいないけども、自分の中で納得はできますよね。自分で選択してこういう道を歩んで。少ない人かも知れないけれども、勇気を与えたといいますかね、人に。結局、自分のためにやってきたんであって、それが結果、人のためにもなったんだなど。もう1回二十歳の時点からやり直すとしても、多分こちらの道を選んだと思いますしね。

#### (4) 国家社会主義者同盟とネットでの活動

当時、活動らしい活動——月に1回集会開いたりですね、同じような考えを持った人たちが周りでできましたからね。あとは外国人に対する威圧、威嚇といったらあれですけど、こういう勢力があるのを示すために街頭でのビラ貼りとかやったんですけどね。当時はビラの真ん中にナチスのマークがあったりですね、外国人でも一目でわかる、どういったものを意味するかと。(ナチスについては)学校教育でもなんでも、こういった層というのは悪なんだと言われてきましたが、私なんかそれほど学校教育とかで言われているほど悪いものだというあれはなかったんですね。むしろその、別の側面から教えてほしい、学校で言われているようなことでなくて客観的な評価といいますかね、そういったものは聞きたいなど思っていましたね。

何よりも同じような考えを持った人たちが——ちゃんと日本にもね——こういう考えを持った人たちがいる。ヨーロッパでは極右が台頭してますけどね、日本では今でもそうですけどまったくそういうものが存在しない。その中で、本当にごく少数、マイナーな存在といえどもこういうしっかりした考えを持った人たちがいたんだなど。妙な安心感といいますかね、そういうのがありましたね。決して自分で考えたこと、1人で考えたことは間違った方向性ではなかったんだと。

そこにいる人たちの質というのもありましたよね。(街宣右翼とは)まったく違った……。団体に入っている人たちとはどういう人たちかという、例えば暴力団員とか、社会の裏街道とか、そういうわけじゃなくてですね、普通に会社勤めされている、会社経営されている、そういった方たちばかりで。だからこそ、こういう人たちが主張するくらいになっているのだから、これは本当に問題なんだと、事実として問題なんだと。やはり自分の考えたことも決して間違っていなかったんだと、そういう裏づけといいますかね。新右翼の系統もなくはないですけどね、昔は一緒にやっていたという話ですから。でも、当時としては既存のもの(右翼)とは別に派生してきたような形で。

その当時は神田のほうに会社があったんですけど、そこでいろいろなことをやりながら(活動していた)。特に出版関係ですね、自分なんか携わったのは。そこで最初はベタ記事みたいなのを書くことから始まって。それでひたすらものを、文章を書くような、そっこのほうの仕事を。ほとんどその頃は(在日コリアンのことを)意識していなかったです。(関心があったのは)不法滞在ですね、当時は。それも実際、在留特別許可の付与だとか、国際結婚だとか、そういったものに関してかなり合法化されているんですけどね。

1997年——平成9年くらいから本格的にインターネットの方の活動をしまして。私から来たら2年弱くらいでインターネットを導入して、そこでホームページを作ったりして——政治的な。そこでどんどん主張していくような活動が始まりまして。そこからインターネット中心の活動ですね。最初に目をつけたのはうちの先生の瀬戸弘幸っていう男なんです

けど。先生がインターネットというものを早くから着目しまして、これはすぐに導入してホームページを作ってやっていこうと、そこからですね。今のネット活動があるというのは、うちの先生の先見性といいますかね。そこによるところが大きいですね。(ホームページを作るのは専門的なデザイナーとかプログラマーだったんですけど、そこに自分たちが主張していく。自分なんかの場合は仕事でも文を書くのが仕事で、それをそのままネットに転用できますよね。だから非常にいろいろな条件が整って入り易かったんでしょうね。

(運動が NPO 法人格をとったのは) 2004 年ですから平成 16 年ですね。これを取得したときには団体の活動の趣旨というのも不法滞在——今も変わらずそうなんですけどね——でやってますし。当時はそういったものを主眼として活動やってましたし。(協力団体は) なかったです。団体としてはなくてもそこに属しているメンバーが外国人問題に関心があって、インターネットなんかでコンタクトをとるようになって、それで接触してこういうのを立ち上げる時に協力してもらったというのがありますね。でも団体としては存在しなかったですね。(法人格をとったのは) 運動していく過程できちんとした法人格をとろうという発想からで、先生からの提案でしたかね、NPO 取ったらいいんじゃないかと。

#### (5) 「在日問題」への関心

オールドカマーにはほとんどふれない形で活動しているなかで、ニューカマーというのは何で来ているのかということを考えれば、やはりオールドカマーがいるからニューカマーが来た。オールドカマーは元々同和ってものがあつたから来たのだ、と。すべての問題はそこに集約されるのだと。問題があつて、表面だけを切り取って対象としてきたものが、根っこをどうなっているのだというところを見ていったら、そういう構造に見えますよね。不法滞在の問題を追っていっても、どうしても在日というのが関わってきますよね。支援している勢力に在日がいり。人権団体、極左団体……恐らく中に深く関わっているだろうと。

私達の間でも問題関心というのは目に見えてわかる外国人問題、たとえば肌の色が違うとか、明らかに外国人とわかる、なおかつ日本に在留する資格がないものに対して「出て行きなさい、そんな不法滞在者を使っちゃいけません」とそちらのほうどうしても主眼にきてしまつて。在日というのは日本で育つて日本語を駆使して、ほとんど日本人と変わらないものなんだ、と周りも私もそういう考えだつただと思いますけど。それからネットが始まつて、どうしても事実として起こつたものを聞きますよね。自分たちが直面している参政権の問題だとか、その背後には在日社会の存在があると、そういうところからですね。

(「在日問題」に対して関心を持ったのは) ブログを書き始めてですから、2007 年——平成 19 年か 20 年、そのあたりからですね。確かに国家社会主義者同盟に入っている頃も在日の問題とか言っている人間はいたんですけど、全体の中で 1 人か 2 人くらいですね。むしろ「在日、在日」と言っているほうが、「昔、朝鮮人にいじめられたんじゃないか」とかそういう風にあざ笑うような傾向があつたんですけど。その次にネットをやり始めると、ブログやっていてコメント欄で「在日、在日」とひたすら書いてくる人がいるんですね。最初、「この人たちはなんでこんなに在日というのか」と思っている間に、自分のほうが「在日、在日」となつて。

いつ頃っていうのは、はっきりしたのはいないですよ。何年何月の何日、在日問題に目覚めたとかそういうのではなくて、気づいたらなつたというくらいですよ。ブログで書い



たのは、ただ不法滞在問題を言うのもいいんですけど、そうしたらどうしてもコメントで突込みがくるんですね。その背後に在日のこういう問題があって、こういうことだからこういう風に主張したほうがいいんじゃないの、とか。そういった突込みがきて、むしろ発信している私よりもコメントしている側のほうが意識が高い、見識が高い、知識がある。逆に自分が教えられるような立場になるんですね。ああそうなのか、と。その中では、在特会に関わっていた人間もいるのかもしれないですけどね。お互いに研鑽していく中で意識が高まって。これは私だけでなく多方面で起きている現象だと思うんですけどね。

今度は自分なりに考えて、在日のこういう問題があって、そこに不法滞在という問題が発生していると。さらに意識の高い人が、在日もそうだけど同和っていう問題があって、それが在日のもとなんだよと。それがさらにこういう外国人の問題につながって、生活保護のこういう支出につながって、と。それを自分で吸収して、自分の言葉として同和、在日、移民だとか不法滞在の問題とかを書くんですね。どんどんお互いに侃侃し合って、さらに意識を高めていくと。そういった中でいつの間にか、気づいたら「在日、在日」と言っていた、「同和、同和」と言っていた。そういう感じですね、経過としては。

#### (6)「行動する保守」

西村修平さんというのは、平成12年——もっと前から街頭でずっとやっておられた方で、その方の提唱によってちよくちよく街頭に出るようになったのですけれども。在特会が立ち上がった次の年から街頭でやり始めるという。それが最大で3日に1回とか2日に1回とかそれくらいの頻度で行ってまして、その頃からですよ。で、街頭で行動したことをさらに動画とか記事にしてインターネットで伝えると。またより新たな賛同者が増えてさらに街頭の行動も大きくなって。

当時、西村修平さん、瀬戸弘幸、桜井誠さん、村田春樹さんとおられて、この4人が中心になって街頭でやっていこうかとなりまして。その中でも研鑽といいますかね、お互いに感化され合う部分があって、いろんな意識を高める機会になりますよね。交流していくなかで在特会もそうですし、その他もそうですし、さらにお互い研鑽し合って意識を高めていったという、そういう話ですね。誰が誰に対してどう教えたということもないと思うんですよ。お互いが刺激あって、侃侃し合って。さらにそのなかで、「在日、在日」という主張がより強固になっていく、より大きくなっていく。治安だけじゃなくて、あらゆる問題に関わってくる、政治、経済いろいろな問題に関わってくる。幅ってのは飛躍的に広がりましたよね。犯罪だけの問題というのは、この枠でとどまっているのを、在日、同和とそういったものがマスコミの報道にしてもそうだし、政治にしてもそうだし、経済でもそうだし。いろんな枠がでてきたという話ですね。

当時大きかったのは、4人の持っているそれぞれの良さというのが噛み合って、いろんな層を惹きつけたんだと思いますね。西村さん、桜井さんの関係でいえば西村さんのきちっとした戦略、戦術。桜井さんの時々の話題に飛びつく即応性といいますかね。で、キャラクター。そういったものがうまく噛み合って両方の層を惹きつけたのかなと。言い方は悪いですけど、その場限りで「朝鮮人に出て行け」だとかそういうことを叫びたい人、きちっとした民族意識にもとづいた運動をやりたいという人たちがうまく噛み合ったんだと思いますね。そこに瀬戸弘幸とか村田春樹とかそういった人たちのキャラクターも隠し味になって、さ

らに層を広げた。

(動画配信の効果は)全然違いましたね。それまでは、ただインターネットで情報を発信する、今度は街頭でやったことを映像化して文章化してそれをさらにブログで伝えると。さらにそれによって新たな賛同者ってのが街頭行動で、街頭行動がさらに大きくなりますよね。それをさらにインターネットで——動画で記事で流して——新たな団体が集ってきたり、その中から新たな団体ができたりと。(アクセス数も)まったく違ってきますね。最大で——たとえば普通に情報流している時が1千とすれば、街頭で行動した時は1万くらいありましたね。「このおじいちゃんもネットを見てたんだ」とかいろんなカルチャーショックはありましたね、最初の頃は。

もともとそういう在日問題もそうですし、外国人問題全般に対しても反発を持った人というのはいたわけであって、ただそういった情報を目にする機会が無かった、行動に参加する機会が無かった。それが私達のブログを通じて見られるようになった。今度はただ見て応援しているだけでなく、実際に街頭で自分も主張してみたい、行ってみたいとなりましたね。で、さらにいろんな人にまた別の人に呼びかけられて、その人たちがさらに来るようになって、さらに別の人呼びかけるようになって、どんどん広がりをもせたと思うんですよね。

(それまでは)集まって来る人間も本当にごく身近な人間だけ、見てる人間も誰だかわかる。それが街頭で行動するようになってから、「私はいつも見てる、コメントしてる誰々です」とか(あいさつしてきて)、そこから広がりが出てきて。サイレントマジョリティの意識を呼び覚ました、そういう情報を目にする機会がなかった、発信する機会がなかったところにそういうのが出現して、自分もそういうのに参加して一緒にできるようになった。声を上げる機会ができた。

写真も絶大な効果を持ちます。この場面でこういうことが起きたとか、ここがこういう状況になっていたと伝える。さらに動画ですね。画像にしても動画にしても、1箇所、毎回決まった場所、同じことをやるんじゃなくて、違う場所でやっていますよね。東京なら東京、大阪なら大阪。東京でも民団の前だとか、朝鮮総連の前だとか。銀座でデモが行われたときにこうこうこういうことがあったとか、在日と衝突したとか。そういう多様な場面、多様な場所、多様な運動というのがいろんな関心呼びますね。

(アクセスが)一番多かったのは、行動している2007年——平成19年から2010年くらいまでですかね。(アクセス数が減ったのは)やっぱり近代の否定とか言い出したら、奇抜な思想にはついていけないという読者からの感想はありましたね。それでも自分なんかは——烏合の衆とっては悪いけど——烏合の衆に迎合して人気を保つよりも本来的に主張したい、主張すべきだと思ったことを主張するためには、読者とか支持者が減っても本当の志を同じくする者と意見を共有する、志を同じくする者と歩んでいく方が今は重要かなと思いますね。

## (7) 外国人参政権から攘夷へ

かなり前、私達が東京に出てきた当時から外国人参政権というのは国会に提出されて、たびたび問題になってますが、「これは大変だな」というような具合で。ただ、その当時というのはどうしても背後に在日の存在があるとか、あまりそういう強い意識というのはない

ですから。まあ、朝鮮国籍の人間に、韓国国籍の人間に参政権を与える、これは道理としては通らないというくらいで、在日というのが民族問題であるというのは捉えられなかったですね、当時はね。

皆さん、不法滞在者を追い出せばいいとか、外国人犯罪だけを追放すればいいとかいう発想ですけど、外国人を入れること自体は誤りであると。明治以降から始まった帰化制度にしても、それ自体が誤りであって、そんなものが存在しなかったそれ以前に戻るべきなんだと主張してまして。最初は不法滞在、その次に外国人労働問題全般、その次に在日問題も加わってきて、さらには帰化の問題。段々変遷はたどってますね。自分の中ではそれは進化だと捉えていますけども。

今も右翼全般にそうですけどね、民族問題に対する意識があまりにないですよ。どうしても右翼というのは近代から発生したものであって、日本の近代は明治の開国からスタートして。朝鮮半島、台湾に進出して、そういったものすべてが同じ日本人だと、さらに世界交歓というのかな、天皇陛下のもとに皆平等なんだと。そういう発想のもとにきていますから、どうしても民族問題という考え方にはならないんじゃないんですかね。

(参政権に関心を持つようになったのは) 実際に私達が行動する保守として街頭に出るからですね、本格的に。在日という民族問題があるから、在日社会が存在するから外国人参政権法案が出てくるんであって。在日社会を解体または排除しない限り永遠に続くんだという、強い民族問題に対する意識を持ちまして。在日社会を叩かない限り参政権はどの政権になっても出てくるし——自民党であっても民主党であっても出てくるし。「最初に朝鮮人の参政権が実現して、その後に必ずシナ人の参政権が実現してくるよ」と、そういう戦術に基づいて当時は行われてましたね。ただ朝鮮人だけを叩くんじゃなくて、大本のところでシナ人をバンと叩かなければだめなんだと。実際に在日がデモしたり直接対峙するようになりましたから、よりそういう問題を目の前の問題として捉えるようになりましたよね。それまでは在日のデモとか全然見たことなかったですから、「こういう問題があるんだ」というぐらいな、「けしからんな」というぐらいで。

明治になって近代政治ができて、最初は男性だけに参政権が認められて、次に戦後になってから女性に拡大して、さらに今現在外国人まで拡大しようと、男女共に。近代政治の流れからみていくと、そこに行き着くのかなと。明治以来ずっと開国できましたから。さらに戦後になって本格的に選挙権まで開国していくと。在日、同和、あらゆるものがはびこるようになったのは近代政治だからこうなるのであって、これをやめなきゃいけないのかなと。選挙制度自体が国にとって何もいいことないんであって——参政権云々に限らず。

外国人問題の大本となったらどこなのかというと、最終的に突き詰めていくと明治の始まりだったんじゃないかなというところに行き着きますよね。この明治の体制というのが今も続いているんだと。私なんか、今までは——つい最近までは戦後のみが悪くて戦前というのは非常に理想的な形だったんだと思ったんですけど。むしろ戦前というのは戦後よりも悪くて、朝鮮人、シナ人というのを同じ日本人だと言ったわけですよ。今、特別永住資格といってますが、むしろ戦前のほうが悪くて、そっちに戻ると今より悲惨な状況になるんだよというところに行き着きまして。ですから明治から現在まで続く近代というもののあり方自体を含めて考えないと、私たちが理想とする攘夷、排外という形には行き着かないんじゃないかなという結論といたしますか、そういう回答に行き着きますよね。

近代から始まった問題でいえば帰化制度ですよね。外国人参政権に反対なのは当然なんですけど、参政権がほしければ帰化しなさいとかそういったのは誤りですよ。明治以降ずっと自民党政権の中でも帰化制度というのはずっと続いてきたのであって、そういう売国政策がずっと続いてきた中で参政権だけを反対するというのは、ちょっと違うんじゃないかと思いますね。参政権だけであれば選挙に投票する権利だけですよね。ところが帰化もできてしまう、日本人になってしまうということは選挙も当然投票もできるし、立候補もできる、公務員にもなれる、日本人としてのあらゆる方途が開けるのであって。今何が起きているかという、日本人の中に異民族ができて、中国系日本人だとか韓国系日本人だとか、そういうことを主張してはばからない輩がいる。日本国籍でありながら生活とか思考は朝鮮人のまま中国人のまま、そういう人を増やしているものであって。それなら帰化を一切認めないで、外国人のまま選挙権を与えたほうがむしろ管理できるんじゃないんですか、そういう考え方もできますよね。

昔（の自分の考え）は近代という枠の中でどう国難を排除していくか、外国人を排除していくかだったんですけど、国難とか外国人とかすべて近代に起因するのであれば、政治自体がおかしいんじゃないかと。近代が始まって——明治から平成の——150年もないですよ。一方で武家時代というのは600年も700年も続いていたわけであって、それを考えれば明治にしても戦前にしても、そこが日本人が立ち返るべき本来の姿かという、全然そうじゃないわけであって。むしろそれ以前に日本人だけで共同体を営んでいた時代があったわけで、そちらが本当の正解なのかなという風に思いますね。

武家時代は本当の意味で鎖国が実現されてましたし。鎖国で国内の中が悲惨になっていくというわけではなくて、むしろ今よりもかなり潤っていて資源も生かされてましたし、経済も国内で循環していた。お金も国内できちんと循環していた。であれば、今のいびつな——今の形がこれだけいびつになっているのであって——むしろそっちの方に志向としては戻るべきではないかと。民族問題が発生した原因は近代にあるわけであって、強いて言えば——大雑把ですけど——近代の全否定となりますかね。法案といえば、たとえば参政権問題だけを追及してもどうにもならないですよ。参政権を阻止するというのは、結論したら帰化しなさいということにしかならないわけであって、帰化制度自体が問題だから近代がここまで来ているわけであって。帰化制度自体をなくさないといけないですよ。それをなくすには近代以前に戻りなさいということだから。

## （8）小括

η氏は、日本の排外主義運動の中でもっとも極端な主張をしているが、これはひとつには彼がいわば専従に近い形で排外的な活動に携わっていることによるだろう。彼がいう武家時代への回帰が、再帰的近代の段階に至った現時点で一顧の価値があるか否かは、他に「本業」を持っていればすぐに判断がつく。一方で、他の排外主義運動の活動家の議論が矛盾に満ちているのに比べると、氏の議論には——実現可能性はさておき——一貫性があるともいえる。

η氏のもう1つの特徴は、「外国人労働者」に対する嫌悪感から排外主義運動に馳せ参じたことにある。1980年代後半以降の「外国人労働者流入」は、右翼による排斥運動を生み出さなかったが、その数少ない例外たるイータ氏は2000年代後半の排外主義運動の源流の

1つとなった。7節で彼が言及した4人のうち1人は、国家社会主義者同盟時代から上野でイラン人を排斥してきたが、あとは反中国、反韓国、盾の会と出自が異なる。2007年の街頭行動を共通項とした共同戦線により、在日コリアンの排斥運動が成立した。かつて筆者は、排外主義運動の担い手の多くは「反周辺諸国」から外国人排斥へと絡め取られたと述べた。だが、その源流にはη氏も含めてそれとは異なる系譜もあったわけで、それが「在日特権」へと収斂して運動を展開しえたことが、運動の「成功」の1つの要因だといえる。

### 33 「ネット右翼のカリスマ」Z氏の場合

#### (1) 国家社会主義者同盟と「外国人問題」への関心

(関心を持ったきっかけは) イラン人問題だよ。そこに住んでるからね、上野に。ここを毎朝通って——当時神田に事務所があったんで——そこ(上野駅近辺)を通ったわけですよ。その辺にイラン人がたむろしてて——日本人が歩けないくらいね、イラン人がいっぱいあふれかえってました。(上野公園で)寝泊りして出てきてね。で、こいつら何なんだろうと思うよね。その後テレホンカードの偽造、「カード買いませんか、カード買いませんか」って皆に売りつけて。結局、警察も何も全然関心を示してないんだよね、当時まったくね。それでやっぱり困るなと思って、イラン人を日本から出さなきゃしょうがないとなって。だから、最初イラン人追放運動ってね。

イラン人のことだし——要するに、何の目的もなくただ日本に来れば職にありつけるんじゃないか、というのでロクな金も持って来ないで。金も持って来ないから公園に寝ているわけだね。とにかく来れば何かいいことあるんじゃないかという程度のことで来ているわけだから、必ず犯罪とかそういうのが起きるようになっちゃったと思うよね。それがきっかけですね。

(排斥活動の母体となった国家社会主義者同盟という団体は) やっぱりイラン人問題と大きな関係があるよね。あの頃作って、あの頃から(イラン人排斥)活動始まっているわけだから。最初、国家社会主義者同盟ったらイラン人追放ですよ。そのために作ったわけじゃないけど、たまたま作った頃にそういう問題が——一番大きな社会的問題として取り上げられたんで、そっちのほうにやっぱり運動の矛先が向いていったんじゃないかな。

(名前はナチスを意識しているみたいだが) 関係ありますよね、確かにね。でも、ドイツのナチズムを日本に持って来てき、定着できるはずもないしね。ナチズムと日本の国家社会主義ってまったく異質なものだからね。人は同じように捉えてるけどさ、やってる方は全然同じものだと思ってないからね。ちょっとでも勉強した人ならわかるけどね。(戦前との連続性が強いわけですか) 国家社会同盟とかあったからね。そういう流れだね、そもそもね。

思想的に集まってきた人はほとんど皆無ですよ。10人もいなかったでしょ。そういう思想を持っているのは10人くらいかな。みんなそれぞれ仕事とかやってて——当時、協同組合みたいな発想じゃないですか。建設業の協同組合が母体になったんです。組合が順調に伸びてたから、その延長で国家社会主義者同盟を作ってたから。

だから思想なんかじゃなくて、その組合に入っていれば公共事業に携わることができるとか、あるいは談合にあって有利とか。そういうことで、ほとんど組織ってのは増えてったんです。1000名近くまで名簿上は行ってたわけだけど、それは組合活動だよ。組合が埼玉とか東京とか長野とか、あちこちあった。組合が不景気とともに破綻してからは、結局ダメになっちゃった。思想性を持った組合員はほんの一部なんで、そういう人たちだけが残ったわけ。仕事があつてね、たとえば1つの組合で年商10億やったとしますよね——まあ軽く10億やっていたから——そうするといっぱい付随する産業があるじゃない。そういう人たちの賛同を求めながら、ピラミッド的な組織を作った。ヨーロッパの極右政党みたく、反グローバルズムとか、そういうしっかりした思想性があつてやってたんじゃない。それはやっぱり、崩れるのも、なくなっちゃうのも早いよ。

(思想持っていたのは右翼的な人だったか) もちろんそうです。実際逮捕覚悟でやっているわけだからね。だって公園に行って殴り合いになればさ、当然両方逮捕される。何で逮捕しなかったのかってわからないけど。警察だってイラン人なんか捕まえたってさ、通訳つけなきゃいけないし、どうせ喧嘩してるのは右翼だから。死んだりしたら困るけどね、小競り合いくらいなら…でも正直言うと怖かったけどね。彼らのほうが強かったものね。体も大きいしね、若いし。私はね、その後、何の理由だったかわからないけど、東京都の公園管理局の人間と話し合う機会があったんだよね。その人たち言ってたものね。あなたたちだけが反対していたけど、実際には違って、一般の都民からの苦情がすごかったんだって。肉を買って来て食べさせたんでしょ、保健所が何でこんなの放置しておくんだとか。子どもが「体がでかくてもじゃもじゃしてさ、怖い人がいる」とか。

我々は思想性持って、時代の前衛みたいに——未来の尖兵みたいに使命感を持って動いてたけど、そういうのは極少数だけど、嫌悪感を持って眺めていた人はたくさんいたわけですよ。日本人というのは、そんな寛容な社会じゃない。

具体的には、結局、入国してくるのをまず阻止しなきゃならないからね。当時ノービザだったんですよ、外務省がね。要するにノービザをやめさせると。まずビザを取得しなきゃ入って来れないという風にしたのが1つの成果だよ<sup>15</sup>。次の成果は、公園に寝泊りしていたから、公園に言って。暴力事件に発展してね——暴力事件に発展すれば、そこを管理している東京都の都市公園課というのがそのまま放置できないから、管理事務所が公園を閉鎖したんです。閉鎖したから行くところなくなって、実質的にそれが止まって。たむろしているやつらがたむろできなくなって帰国した。で、極端にずっと減っちゃって。結果的には犯罪組織と、覚醒剤とかそういう犯罪組織は根強く残ったんだけど、あとは日本人と結婚したりした人は、ビザも当時下りましたからね。ダルビッシュの親みたいだね。ああいう人は日本社会に溶け込んだんだけど。そういう形で解決した。ただ解決してないのが犯罪組織だけが残っちゃった。今でいうと覚醒剤の販売の60%以上はイラン人が牛耳ってるからね。

(排斥的な関心を持っているのは) 僕だけじゃないと思うけどね。誰にはばかることなく話を言えるっていう、極端な主義主張を掲げてるから。あえてその自分がそういうことを言わない限り、誰も言わないからしょうがないから言ったということであって。やっぱりそれは、日本とか単一民族国家という概念を訴えてんですよ。だからそこにいろいろな人が混ざってくると、単一民族国家そのものが崩壊してくるから。それは守らなければならないという立場だから、こういう感じで言ったんだ。

そうすると必ず議論があって、じゃあアイヌの人はどうなんですか、琉球はどうなんですかと質問が来るんだけど。単一民族国家概念というのは、宗教とか言語とかそういうものに絞っちゃうと、明らかに信じてる宗教も違うし、アイヌ人とか琉球とかね、言語も違って。だからそういう概念じゃないんですよ。私の概念というのは、日本列島と称するところに同じ時代に住んでた人、それをひっくるめて単一民族というんだ。というのは、日本に住んだ

---

<sup>15</sup> イランと日本の査証相互免除協定が停止されたのは1992年4月だが、これは「活動の成果」としてもたらされたというのは、因果関係からすれば明らかに間違いだろう。それ以前の1989年にバングラデシュとパキスタンとの査証相互免除協定が停止されており、その前例にならただけのことである。こうした因果関係の解釈で疑問を生じさせる部分は多々あるものの、本稿ではあえて検証せず語りをそのまま起こしていくこととしている。

後に世界的に広がるでしょ。でも国家というのは1つの領土があって国家であり、そこに住むのが国民であり、民族という概念の——領土というのが基本にあるんです。領土が基本にあるから、言語とか宗教とか関係ないから、そこに住んでた人が同一国民であり同一民族だという概念ですからね。そこはあまり議論が噛み合わない。インターネットでも何度となく議論してきたんだけどね。前から住んでる人は日本民族だけど、後から来た人は外国人ですよ、という感じですね。どこまで過去をさかのぼっていくかというのと、大体明治維新以降くらい、場合によっては戦後社会に限定してもいいけどね。戦後日本にやってきたのは、明らかに外国人。

## (2)「在日」に対する関心

(在日コリアンはどうなのか) いや、明確にねえ…私はやっぱり外国人問題で在日を意識しだした頃というのは、ネットがどんどん盛んになってきてね、ネットの中で結局国境問題でも竹島の方を重視しているような方がネットで多く見られて。反朝鮮ね、そういう流れができつつあるという中でやっぱり、意識してきたんじゃないかね。前からのブログの中でね、自らが反省ってのを挙げてるよね。在日問題ってのを十分知らなかった自分に。

(90年代まで関心がなかったのは) まあいないからね、外国人ね。在日ってあんまり関心なかったね、正直。仲良かったしね。韓国人なんか、在日韓国人は右翼活動やってたからね。朝鮮総連は北だからね、共産主義者だから。反共運動というのがあるから、当然韓国とは仲間だと思ってた、当時。民団なんか日教組大会の時、金持って来たからね。「カンパです、使って下さい」ってね。どこの団体も金もらってましたよ。

だから在日問題を外国人として捉えたことはないし、それに彼ら自身もパチンコ産業がこれほど大きくなる前は、自分たちが在日だってことについて、なんていうのかな、自分達の自己主張をね、これほど高めてきたということは、ここ10年くらいであって。私は活動——外国人、イラン人追放とかいった頃は、関心持ってる人は持ってたのかもしれないけど、私はまったく関心がなかったね——朝鮮人とか韓国人問題には。共産主義打倒とかそういう意味での関心はあるよ。あくまでの北朝鮮だけだよ。共産主義者だからね、北朝鮮はね。もちろんそれ(反北朝鮮の活動)はしてますよ。

自分とネットの意見とのかなり乖離があって、反韓国とかね、韓国は仲間じゃないのかということや段々言われるようになって、「ああなるほど、そうか」という風に思うようになりました。ネット始めてからですね。ネットで書かれてることを読みながら、そういう風に自らも反省していく。

私はねえ——帰化運動ね、韓国人・朝鮮人の帰化運動を一番最初にネットで提唱したのは私だったんです。これには理由があって、私はね、帰化とは——お父さんが朝鮮人、お母さんが日本人。両方の国籍があるんですよ、その子どもはね。でも、朝鮮総連が昔、日本国籍返上運動ってやったんですよ。だから、日本国籍はいりませんよと、ちゃんとお母さんの同意をもって日本の法務省に届けたんですよ。だから、それが物心つくようになって両方とも朝鮮人じゃなくて、片方は母親日本人だからだとね。そういう人については、「じゃあとんでもない、俺は日本人だ、日本国籍持ってるはずだ、日本人だ」と言っても、「あなたが幼少のころに日本国籍返上しているから、あなたは日本国籍持ってませんよ、あなたは外国人ですよ」とやってたんですよ。



要するに、片方日本人なのに日本国籍がないと。日本国籍を取りに行ってももらえない、それはどう考えてもおかしいだろうと。それが本人が子どものうちに自分の意思が表明できないうちにね、決められたことだから。それはその法律改正でもって、今は18(歳)だけ二十歳になったけど、自分で国籍を選べるようになったんですよ。それは問題なくなったんだけど、昔はそれができなかったんで、片方の親が国籍を持つ親に対しては、日本国籍を持つには、帰化するしかないわけね。そういう風に日本人への帰化運動を提唱したんです。

反対派、私の過去を「Zはかつてこういうことをやったやつだよ」と、左翼とか人権派が私を批判するためにやるんだよね。私の名誉、運動歴をあんまり貶めるようになっていないような気がする。逆にさ、私はかつてそういう差別感とか、民族的な差別感とかまったくくない人間なのに——ない人間ということがはっきりしてるわけだからさ。やってたわけだからね。最近書くやついなくなったね。

### (3)「外国人問題」関連の取り組み

確かにイラン人問題は深刻に捉えてたけどね。で、その次が今度中国人の不法入国だね。ボロ船で来たりさ、蛇頭とか送り込んできたりね。そういう問題でいえば関心が強まって。だから、外国人犯罪であって韓国人問題には関係ないところだね、多分ね。ただ、あの辺というのは、まだネットがそれほど——あるにはあったにしても——ネットがそれほど、なんというのかな、ネット右翼といわれるものは、大きな力を持っていなかった時だから。あんまり反韓国とか反朝鮮というのはなかったんじゃないんですかね、今よりはね。多分——と思います。ほとんど関心がなかったね、北朝鮮という国家を除いてね。まあ北朝鮮に対しては、これはもう敵対国家だからね、明確に敵だと思ってたが。北朝鮮というのは、そのころソ連もあるしね、旧ソ連が崩壊してない頃だと思ってるから。ソ連の方は強大な脅威であって、北朝鮮なんか何の脅威も感じれない時代だよ。

(他の右翼は)まったく関心持ってなかったね。逆に私がある右翼団体の——鈴木邦男さんと鬼塚英昭、その人と3人でパネルディスカッションに臨んだときに、私に対する批判が当時の右翼の民族派の中から、「何でそういう人種差別をするんだ」。右翼は大アジア主義だから、イラン人だってアジア人だから、とつるし上げられた。大アジア主義。アジアは1つみたいな。そこまで何で拡大する必要あるのか。大アジア主義とかそういうのじゃなくて、日本のことを世界観の中で考えれば、イラン人は全部別だと。そういうものは当然排斥してしかるべき。

問題意識を持っていない人が、右も左も含めて、世間一般も含めて・・・段々偽造カードが、販売で生計を立てるみたいなそういう形になってきて、社会問題化して。それまでは社会問題化する人いなかったんじゃないんですかね。

中国、朝鮮人を除けば一番日本で最初に問題になったのはフィリピン人ですよ。どこの繁華街でもフィリピン人が、フィリピン人の女性が働いて。観光ビザでやってきて、就労ビザもなく、いろいろ商売で。男はフィリピン人みると家庭を顧みず、フィリピンの子に惚れたとか問題起こして、フィリピン人の問題が最初。その次イラン人。あとバングラデシュとかああいうのが不法就労で入ってきて。それはそれほどでかくないね。その次が中国人ね。シナ人が——やっぱりシナ人の場合は、ボロっちい船で来たからね、余計社会問題がでかくなったし。ピッキングだとかサムターン回しとか、次々と日本人が考えつかないよう

な窃盗技術を編み出して、被害者が相次いだから。外国人犯罪というのはそういうレベルで。

外国人犯罪、凶悪犯罪とか警察の仕事なんですね。だから我々は不法就労というものは犯罪としようと、やった。一番の成果は——全体の中で一番の成果というのはね、今も法務省オーバーステイと言う、ところがオーバーステイじゃないんだよね。違法だから、Illegal なんとかっていうんだよね。新聞もね、不法滞在者っていう名前を使わないようにしようと、超過滞在者って名前を使おうと。その時に私が各社に全部質問状を送って、観光ビザで入ってきているというのはね、超過滞在というよりは明らかに違法なんだから、名前を変える必要があるんじゃないかという運動を起こしてね、それは新聞社が引っ込んで。今も不法滞在者という名前が残ったんですよ。我々がそういう運動をしなければね、不法滞在という名前は完全に消えちゃって、超過滞在とか名前を変えられる可能性もあったんだよね。今も法務省はオーバーステイって使ってる。オーバーステイというのは不法滞在者じゃないんですよ。それがなんで不法滞在者っていう風に英語で表記しないんだと。そういう取り組みは、あまり最近やっていないけどね、随分法務省に行きましたよ。そういう小さなところから積み重ねてくるからね。やっぱりイラン人追放と不法滞在者っていうことを明確に国民世論に訴え啓蒙してね、それを超過滞在は不法滞在なんだっていうことを知らしめたというのが、まあ私達の成果だったんじゃないかね。

中国人の不法就労とかね、あれは不法入国——観光ビザも何も関係ないわけですから、中国人はね。不法というのはもともととんでもない話ですから、みんな社会が関心を持ってね、取り締まれと。それは別に我々が言わなくてもそういう世論って起きたけど。我々があえてやって、超過滞在と不法滞在とに、その線で——やっぱり一番の成果じゃないかね。あんまり世間的には知られてないけど、我々が活動した成果なんです。

もう1つ注目されるのは、自民党の小泉政権の時代のマニフェスト、不法滞在者を5年間で半減して——あれはねえ我々の働きかけによってできたんで。あれは本当にマニフェストのね、5番目くらいに不法滞在者を5年で半減——大きな選挙公約で社会・話題になるはずなんだ。ところが新聞なんかどこも報道しないし、他の政党はそのことに対してどこも追及しない、自民党の政策に対して何も問題にもしない、そういうことがあったね。長年の活動の中で思い当たるというのは、そのくらいだね。だから、何で自民党が不法滞在者を5年で半減ってマニフェストで謳ったときに、どこの政党もそのことに対してまったく触れなかったのか。何で触れなかったのか、不思議といえば不思議だよね。

要するにだからタブー視してたんだね。不法滞在者の存在すること自体を認めたくない、自分達と立場が同じなんだ。要するに地球市民みたいな感じだから、不法滞在者という言葉を作ることさえもできないって。そういう風に——何かにかかったような形になってるんじゃない。反対派というか人権派というか——反対派というのは我々に対する反対の人たちね。それは間違いだったというのは、まず歴代の総理大臣で「外国人が日本にやってきたらば、暴動が起きるから外国人を受け入れるべきでない」と国会ではっきり明言したのは、小泉首相ただ1人なんですね。はっきり言ったんだ。私のブログで検索すれば出てきます。外国人が来ると暴動が起きる、暴動が起きる可能性があるから、安易に受け入れるべきでない。すごいよね。それもどこの新聞も日本の新聞取り上げなくて、アメリカのTimes誌、何かアメリカの新聞社がそれを次の日に報道したんです。それも私のブログに出てますよ。その辺がおかしいんですね。外国人問題をタブー視しているんです。

(外国人参政権に関心を持ったのは) 外国人参政権問題が浮上してからだよーネット  
でね。外国人参政権を民団なんかが強くて求めてきて運動が盛り上がってきて、日本の社会も  
それを受け入れるか受け入れないかという両論が出てきて、そういう中でネットなんかで  
は絶対ダメだ——人権擁護法案と外国人参政権というのは——という流れがあっただよ、  
正直いってそういう問題を考えるようになったのは。それまでは、外国人参政権を与えるこ  
とによって、世の中がどう変わるかというような議論よりも、今外国人がいることによって  
犯罪が起きているとかさあ、外国人がいろいろな問題があるとかね。現実はその問題に  
関心を払ってきたんで。関心はやっぱりそういう問題かね。

#### (4) 「パチンコ問題」と「在日」

パチンコ産業の問題が一番の外国人問題と今思っているよ、これを何とかしなきゃだ  
めだな。20兆円近くさ、こんな現金賭博でね、一切賭博行為が禁止されているにもか  
かわらず、大っぴらにやられてる。韓国ではどうに禁止されているのにさ。韓国で禁止して  
いるのに、なぜ日本の社会ではそういうのやってなきゃいけないのか。そういう問題は、自  
分の人生の集大成として取り組もうとしてるから、あんまり外国人参政権の問題とか人権  
擁護法案の問題とか、いろいろな問題よりも、これに特化して——というのは犠牲者がハン  
パじゃないのでね。毎日毎日パチンコ代がなくてさ、横領したとか金盗んだとかね。売春に  
走ったり。俺もねえ、ネット始まる前ってのは——俺はネット始めて今年で7年目ですかね  
——パチンコ結構大好きでやってたんだ。自分の玉積んでるとき、女の人が寄って来てさ、  
脇に座って話しかけてきて売春を持ちかける。実際に両替してて襲われて、換金したばかり  
のカードを盗まれたって……。やってる時には「ああそうだろう、そうだろう」くらいだけ  
ど、こんなことやっちゃいけないなと思って。そういう考えになったよ。

やっぱりどういったものでも広がりすぎると求心力が衰えちゃって、求心力を取りもど  
すためにやっているのがパチンコの問題。反パチンコっていうのがどれだけの求心力を持  
つか……。掲示板を作ったりしてやっています。いろんなことやってきたけど、今までにない  
くらいの賛同者が得られる可能性がある。ネット上で発信を始めたら、1年間で1万人くら  
い集まるんじゃないんですかね。1年間で1万人集まれば、まあ2年3年で3万人くらいで  
すね。私は65(歳)で引退するつもりなんだけど、65歳まで5万人くらい全国で集められ  
れば、全国支部作って。今在特会が1万人と言ってるけど、在特会凌ぐだけの団体になる  
と思う。パチンコってね、相手が明確だから。在日特権というのはあまり明確じゃないわけ  
です。パチンコっていったら、みんな損してるから明確。あんなもの必要ないって。1回や  
ってそう思ってるから。だから今、反パチンコが最大のテーマだろうと思う。

近年のネット上の盛り上がりですよ。2ちゃんねるのニュー速サイトを見ているけど、パ  
チンコのスレッドが常にあるし。スレッドを上げる人も関心持ってるし。見る方も書き込  
みが、一番こうね、動きがいいですよ。パチンコの動きが。最近パチンコを批判的に捉え  
る人が結構増えてきているしね。大阪のあいりん地区でパチンコやっている人たちに 質  
問していたの。生活保護で生活したりすると息苦しいからね、「パチンコくらいやらせてよ」  
そういう声があつて。そういう声があれば、なんだぶざけるな、何で俺が働いた税金がね、  
そんな生活保護でパチンコなんて、冗談じゃないよ。そういう、きわめて常識的な意見が出  
つつあるよ。昔はそういう元気がなかったけど。世知辛い世の中というかお金がなくなっ

てるから、「生活保護費をパチンコに」——ふざけるなという話になるしね。

民団自らがパチンコを自分達の基幹産業って言うてるから。大韓民国側の大統領は小沢と会った時に、「在日の基幹産業であるパチンコを、規制が厳しくなっているから何とかしてください」と言うてるわけだから。パチンコ＝韓国人だ朝鮮人だというのはおかしいと言っているけども、それはだめなんですよ。彼ら自身が言ってきた話であって、道理が通らない。

今回、一番聞きたいと思う話をさせてもらえば——ネットでは書かないけど——はっきり言えば現代のユダヤなんだよ。1930年代のドイツ国内におけるユダヤ人問題と2012年のパチンコ問題の在日とユダヤ人はダブって見えるんだよ、私には。ユダヤ人とか他の人を顧みずに自分達のために金利を稼いで高利貸をしていたわけだから。それで稼いだお金をドイツの政権内にばらまいて、自分達の地位を築いてきたわけですよ。その時に、資本主義社会の中でそういう風にユダヤ人はそれなりの力を発揮しながらね。それでも一方の対峙する共産主義の運動とか思想はユダヤ人が作り出しているんですよ。

今の在日は正しくそういう風に私には見えるよね。一部の人間が20兆円の産業を牛耳ってき、どれだけの利益を上げているかわからないわけだよ。でもその一方で、生活保護費に頼らなければ食っていけないような在日がいっぱいいるわけです。そういう問題を、同じ同胞なのに「そっちはそっちで国が面倒みなさい、我々の権利はよこしなさい」。そういうのは、当時のユダヤ人の発想とまったく同じ。そう見えるんだよね。結局当時、ドイツ人にとってユダヤ人はよそものだった。ドイツだけがゲットー作ってユダヤ人閉じ込めてということではなくて、フランスでもどこでもあったわけだからね。それとダブってみえるし。日本の社会に、いろいろなところに影響を与えてきたんだ、というのがあるよね。

##### (5)「右翼」と「極右」

ネットで極右と名乗ったのは、従来の右翼と違うということ、やっぱり強調するためだし。ネットから離れて実社会に植えてこうという場合には、右翼というよりは——当時ヨーロッパに台頭していたわけだから——極右と名乗ったほうがいいってというのが大きな理由だからね。やっぱり一種の差別化として使ったことは事実。何が違うかっていわれれば、いろいろ違う面はいっぱいあるけど、民族的な問題と外国人排斥とが一番違ったところだよ。そこにイラン人問題とか中国人問題とか。今は中国人が圧倒的に大きくなってんだけど、批判されている中では反韓国・反朝鮮という外国人……。

私が選挙に出た頃、あの辺はやっぱり（活動の）最高潮だったんじゃないの。私の人気ブログランキングはあそこ極右評論、それが人気ブログランキングトップで——維新政党・新風から立候補した時ね——全体の。なおかつ私の個人の名前を書いたひとが14700人もいたわけだからね。私の個人の名前だからね。ネットで書いてるだけだから、ネット見て私の主張に強く賛同した人というのが全部でそれくらいいたのは、紛れもない事実であって。その数っていうのは、今、私を支持した人がそれだけの数いるかどうかという疑問だけだね、分散していろんなところに出てきた。（選挙戦の時に手応えは）ないですよ。実態は、ネット喫茶とかああいうところに泊まってるわけだからね。お金がないからね。ネット喫茶に泊まって全国歩いたわけだからさ。最近ネット（カフェ）で寝泊りしている人間っていっぱいいるよな。あの頃はそんなにいなかったよ。

(ブログへのアクセスは) 随分少なくなりましたね。(ピークは) 昨年か、一昨年、中国の尖閣が来た頃だね。あの時、仙谷が出てきた、あの時、1日4万。私が何を考えてるんだろうということ、見に来る人が多いんだよね。あの時の愛国の盛り上がり、民主党政権があの映像を見せない、しかも限定して国会議員にしか見せなかった。そういう理不尽さに対して国民が反発した。やっぱ反発なんだよね。今の運動は反発なんですよ。韓流とかすべてね。明確にいろいろな現象に反発しましょう——それが1つの方向にまとまって、というそこまでは行ってないね。やっぱりリーダーがいないんですよ。運動というのはリーダーがいて初めて大きな流れを作るんであって、ナチズムだってヒトラーがいたからできたんであって。日本の場合そういうリーダー的な人が出てくるのかどうかって、非常に疑問ですよ。

実際、(行動する保守)の中には右翼団体やってた人いないからね。右翼団体を経て活動しているのは私くらいなものだからね。保守系のデモを組織しているね、ああいう人たちは右翼団体の活動経歴がないんで。私自身は「極右」って普通の人とは違った考えですよ。日本の右翼はいわゆる暴力団的な体質を持っているし、そこからなかなか逃れることができないし。極右の場合、昔からやってる人たちは、自分の仲間じゃねえなと思っちゃうからね。交流は自然に消えていったという。右翼団体とか右翼活動している人には1人もいない。パチンコなんかやってるのね。私なんか旧来右翼の出身者だったけど、そういうことで書いていけるというのは、今現在そういう人との付き合いがまったくないんですよ、しがらみが全くない。他の人たちにはできない。何らかのつながりがあるから。

極右が伸びた？ そうじゃないよね。極右をどう捉えるかというだけであってね。今ネットで活動している人たちを——ネットウヨを極右と見るかどうかという。ヨーロッパのように体系的に極右政党みたいな形できちんとしているところは、どこもないからね。韓国のテレビ局がきて、ネットウヨとかどこかに指令塔があってそこから金が、統一がとれていると理解した、そういう風に思って取材してるらしいね。それもまったく認識が違うよね。

極右ってやっぱりさ、移民反対、自国民優先、それが最大の柱だからね。そこで反共、というのが反共産主義があるんだけど、いい悪いにしたって自国民優先の外国人排斥だから、それが極右だから。国内において一水会が我々を批判しているんだけど、批判している人がフランスの極右を受け入れている。これはちょっと。あそこはそういうイベント屋だと思ってるから、わたしは。思想的に考えたら本当に矛盾してますよ。どう考えてもおかしい。

(政治的には) 今も自民を支持してますからね。新風と自民党以外は投票したことないからね、私はね。私はね、自由ってのが一番尊いと思っているんだよね、自分で考える自由。強制されるような自由とか、そういうのは昔からいやなんだ。ナチズムなんていうのと矛盾していると、人なんかは思うかもしれないけど、私には一番基本的な部分なんだよね。自民党だよ、やっぱり19歳の時から入党してるからね。基本的に自民党だからね。一番の政治活動は自民党だからね。自民党があまりだらしがないから、右のほうに走っちゃうわけで。逆にいえば一番自民党を支持していたと。

(具体的な関わりは) 小泉内閣時代の不法滞在者の犯罪。あまり根回し的なことは、裏で何かしたりするのは好きじゃないし、そういうのでもないんだけど。あの時は自民党に働きかけをして、自民党からそういうことをさせなければ、いつまでたっても・・・という思いがあったから。たまたまその時そういうパイプがあったから、そこに熱心に働きかけたけど、そこから小泉首相に直接話がいった。小泉首相はそういう考えを持っていたから、ああいう

アイデアがああいう感じ（「不法滞在者半減」）であらわれたんだね。

新風で活動したというのは、長らく街頭でやって、新風のほうから選挙で出てみないかという話があって。今年は断ったんだけど、たまたまその時候補者が誰も出なくてね、引き受けざるを得なくなったというか。私は自分が長いこと——自由か共産かという二者択一の政治運動が最初のきっかけなんで。（極右に対する期待は）あまりないですね。本音の部分として、普段はあまり言わないことなんですけど——慶応大学の学生達が三十何人、私の話を聞きたい、私は講演したんです。そこでいろんな質問があって、その質問の中でね、今の社会における極右的な主張をする意図とか目的を尋ねられたんです。だからね——ネットだとそういうこと書いちゃいけないことなんですけど——これから前途ある若者だから、「私みたいな人間がやがて台頭する危険性があるよ」と。このままの社会にしておく。そのために今主張しているんだと、自分の主張を広めようということではなくて。自分みたいな極端な、こういう過激な主張する人間が、このまま放っておくとなっちゃいますよと。民主主義をきちんと守っていかないと、民主主義を否定する人間が出現するんだと。しかも私はネット上で非常に危険な人物といわれるかもしれないけど、皆さんと接した時に皆さんどう思いますか、普通の人でしょ、普通の人の変貌する、そういう社会になる。私は自分でお手本を示しているだけなんですよ、そのために存在しているんですよと。そういう説明しているんですよね。自分で何かを成し遂げたいとか、こうしないとというのではなくて、こういう社会状況を皆さんが放っておいたら、必ずそのうち私のような人間が——私は年老いちゃったけど、仮に私が若くて、ハンサムで文章がうまくて、そういう人間が出たらさ、ぱーっといっちゃ危険性が世の中には存在しているんですよと。

## （6）小括

排外主義運動の中でいえば、Z氏の遍歴はヨーロッパの極右ともっとも類似している。とはいえ、排外主義との最初の関わりを持った「国家社会主義者同盟」は、別にナチズム的な人種主義を導入するものではなく、戦前の日本のファシズムを意識したものだ。また、組織自体は建設業者の談合の隠れ蓑であり、右翼に名を借りた同業者組合のようなものだった。それが外国人排斥へと傾くのは、思想的な動機にもとづくというよりは、もっと偶発的なし陳腐な経験にもとづく。

1991年には「上野公園で寝泊りするイラン人」が確かに耳目を集めた（町村 1999; 東京大学医学部保健社会学科研究室 1992）。1990 年前後における「外国人労働者の流入」は、目立った外国人排斥運動を生み出さなかった（Szymkowiak and Steinhoff 1995）。氏の住居兼事務所は上野にあり、そこで「イラン人の流入」を眼にしたことで、排斥——というより嫌がらせを始めるようになっている。これ自体は、氏がいうように 10 名程度の活動でしかなかったし、排斥運動と呼べるような広がりがあったわけではない。「イラン人の流入」が下火になってからも、氏は「外国人犯罪」をテーマとした著作を发表或、インターネット上の活動を続けていたが、社会的影響力は皆無に近かった。

それが変化するのは、「在日問題」を取り上げ標的とするようになってからである。氏は、近年まで在日コリアンに対しては関心がないと答えており、韓国とは反共で利害が一致、北朝鮮とは反共から敵だったがソ連に比べれば存在は小さかったという。これは伝統的な右翼の典型的な態度であるが、ネット上での活動を通じて彼は嫌韓・嫌中へと舵を切っていく。

ここで彼が吸収したのは、右翼イデオロギーとは関係のない若年層の意識であり、それが「行動する保守」として排外主義運動の基盤となった。『嫌韓流』が何らの妥当性もない言葉を連ねつつも、一定のまとまりをもった嫌韓意識の醸成に言葉を与えたように、Z氏のブログは嫌韓を排外主義に結びつける役割を果たした。彼の場合、直接行動に携わりそれを発信したことで、言論にとどまらず排外主義運動への参加を促したともいえる。

ソ連崩壊以降、右翼が敵手を見出しかねて衰退していったなかで、彼は「外国人犯罪」を新たなターゲットとして活動してきたが、動員として成功を収めたとはいえない。「ネット右翼」から学習し、それに影響されることで初めて、彼の排外主義は運動として拡大することになる。ある意味では、「外国人犯罪」「在日問題」と新たなテーマに飛びつく「柔軟性」が彼の特徴であり、「行動する保守」と自称する独自の集合行動を生み出したといえる。

「外国人犯罪」はともかく、彼が「在日問題」に関心を向けるようになったのは、インターネットを通じた発信に対する反応を取り込んだゆえのことだという。これも「柔軟性」のなせる技であるが、Z氏はネット右翼の妄想に絡め取られた結果として「ネット右翼のカリスマ」になったともいえる。政治的企業家として新たな需要を取り込んだともいえるだろうが、影響関係の因果でいえば、Z氏もまたネット右翼の影響を受ける側にいたことに変わりない。そこで知己を得た活動家が「リアル」で会することで、旧来の右翼とは独立した「行動する保守運動」が成立した。在特会とZ氏の違いは「ネット」ではなく「リアル」の活動が先立つことにあり、旧来型右翼とZ氏の違いは「リアル」より「ネット」を活動の場としたことにある。Z氏は、この相違ゆえに旧来型右翼から「行動する保守」へと接近し、「外国人労働者排斥」は「在日特権」の敵視へと転換したのである。

### 3 4 国家革新の一部として排外主義運動に参加するθ氏の場合

#### (1) 政治に対する関心と右翼としての立場

自然とですね、家に右翼系の機関誌とか何か、いろいろと送られてきていたんで、そういうのを見ているうちに自然と、そういう風な思想に傾倒するようになったといいますかね。(父親は)活動家じゃなかったですね。ですけど、そんな方面に知己が——いろいろ知り合いが多かったものですから。子どもの頃は、5.15(事件)の三上卓って、三上卓さんの家にはよく親に連れられて遊びに行ったりとかそういうことがありましたんでね。まあそういうのは自然とですかね。

要は2.26事件で頓挫した昭和維新運動の復興ですね、日本の国家革新を担うための運動やってるわけですから。目標はもう、政権の転覆ですよ、それは。

やっぱり日本の伝統を、日本の国体護持という風な一本の幹があって、それに対して枝葉がついて、その中で領土問題があって、竹島があって尖閣諸島の問題があったりとか、対米問題があったりとか、いろいろと靖国神社の問題、外交問題、領土問題ある中の1つとして外国人問題。外国人問題の中にさらに枝があって、外国人参政権の問題とか、いろいろあるわけですから。One of them であると考えてますね。

新右翼系の人って、むしろ鈴木邦男さんなんかは外国人に対して非常に融和的でもって、「ダメだよそんなに外国人を差別しちゃ」みたいな感じでやっているし。在日外国人、朝鮮人のジャーナリストや文化人知識人といわれる人からは、鈴木さんは非常に話しやすいし、ああいういわゆるネット系の右翼の人たちも批判してくれてるという意味で重宝されているくらいであって。他にも結構、まあ外国人に非常に寛大な発言をすることでもって、自分達はまともな右翼なんだということをまあ見せたがっている人もいますよ、それは。

1つには野村秋介さんなんかは、獄中18年とって、まあ河野一郎邸焼き討ちで12年で、経団連占拠で6年で18年。また別に、戦後闇市の時代にあったわけですね。それは政治的なものじゃないから獄中18年に数えてないんだけど、近所でもって悪どいヤクザが朝鮮人のおばちゃんをいたぶって非常に差別して意地悪したんで、これはいかんと義侠心からこれをやっつけてやったというのがあって。たとえ外国人だろうが、当時戦後の日本でもって横暴振るった朝鮮人であったって、個人は個人なんだからと。何も朝鮮人のおばちゃんを懲らしめていた人間に対して、日本人だからそれを見て見ぬふりなんかそんなけしからんという義侠心から、蛮勇をふるったわけですけども。

そういうこと知ってるから、割と新右翼の人たちというのはそういう風にならって、今世間の風潮でネット系の右翼とか保守の人たちが殊更外国人排斥と言うけど、それに対して自分が義侠心的なものから日本精神をもってそういう人たちを懲らしめてやるんだという風な論調を張るといえるのは、ありうるのかなとは思いますが。ただそれは根本的な道筋、その運動そのものを見ているわけじゃないわけであって、ちょっとパフォーマンス的かなという感じがしますがね、私から見ると。ただ私は別に保守の人たち、ネット系の右翼、在特会とかそういう人たちとも知り合いがいるわけだし、一緒に運動で接点があるわけだし、右翼的な新右翼の人も知っているわけだし。私は別に中間をとるわけじゃないんですね、中間をとるような立場なんだけど、中間をとるのではなく是々非々であると。是の部分には是であるし、非の部分には非であるし。そういう観点から冷静にすべての事象に対してこの問題は、



あの問題はときちんとした検証をしていく必要がある。感情的になって外国人は出て行け、感情的になってそんな日本人らしくない、大和民族としてけしからんと弾圧するとかね、そういう問題でもなかろうと思うんですけどね。

(義侠心が新右翼の行動規範に) なっているがゆえに冷静に物事をみていないというかな。1つには三島由紀夫の言葉でもって、右翼とは理論じゃないと。右翼とは心情の問題だという風に言われたことがあって、ある意味じゃあそういう言葉にちょっとまあ寄りかかりすぎかなと。甘えてるかな。その言葉を持ち出せばすべてが事足りてしまうと思ってるかもしれないけれども、それは1つ確かに心情の問題だと。日本人的な大和魂、そういうものを内々に持った者が燃え滾るものがあって、今の運動があるんだというのは確かなんですけど。まあ冷静に、現在状況も違うんで、1つ1つ物事事象を検証していくことが求められていると思うんですね。だから外国人参政権、反対は反対なんだけれども、ああいうような彼ら(在特会)のようなやり方がいいのかどうか、手段方法の問題が出てくると思うんですね。

新右翼としてそういう風な政策を出しているわけでもないし、割とそういう流れが強いのかなと思うだけであって。すべてがそういうものでもないし。だから新右翼的な中ではそういうのがあまり議論されてないですね。反対をする立場で一所懸命議論することはあっても、賛成する立場というか、外国人参政権反対に対して批判するという立場では、これといった明確な基準的なものはないわけなんで。特にそれだけを取り上げられているわけではない。まあ中には去年かシンポジウムかちょっとあったときに、私のことを批判したくて批判したくてしょうがない人たちがいて、なんで在特会とか主権回復とかああいう人間とつるんでるんだと。けしからんと。何とか私を説き伏せたいみたいな人たちはいたんですけども。まあ、直接本人に言えばいいんだけどさ、付き合っているからけしからんとさんざんいうみたいですけどね。是々非々の問題がありますんで、議論するなら論戦戦いましょうというのが私の立場ですけどもね。

(「外国人問題」の重要性は) そんなに大きくないですよ。全体では日本の国家革新、平成の維新運動をやる中において、領土問題があったり憲法問題があったり靖国のことであるとか、いろんな中において外国人問題としてやっていますんで。まあ参政権の問題。いくつ支柱が10本もあるかないかですけど、その中の1つという。10分の1か5分の1か、そのくらいの比重じゃないかと思えますけど。だから外国人問題というのは、それほど意識はしてないし、するテーマでもないですよ。他にやることも、訴えるべきこともあるわけであって。

## (2) 外国人との接点

多かれ少なかれ近所に(外国人が)1人や2人は住んでいたことはあるでしょうけど、それが後々の人格形成とか思想形成に影響を及ぼしたとかいうことじゃないですけど。

(外国人と接点を持ったのは) 海外に居住していた時であるとか、そういう関連の仕事やっている時ですよ。まあいろいろと——関心というほどではないですけど、興味というか見るべきところは見てありましたんでね。最初行ったのはイラクですね。イラク、バグダッドの方に駐在していたんです。ゼネコンの事務ですね。そして行ったものですから、労務管理とか外国人に対する給料の支払い、計算をやったわけなんですけどね。

要は日本だと外国人差別しちゃいけない、労働賃金は同じであると。同じ仕事やっているんだから、日本人と同じ給料を払わないといかんというのは当たり前なんですけど、イラクにいた場合やっぱり第三国人のワーカー連れてくるわけですよ。第三国人というのは、イラクと日本が第一、二国でそれに対しての第三国、バングラデシュとかスリランカとかフィリピンとか来ると。そうすると同じ職種やっても、例えばフィリピン人は10万円だよと、スリランカ人は5万円だよと、バングラデシュ人は2万円の給料だよと。それはその国々の貨幣価値に換算して、それを同じ労働に対しても金額が違ふと。それは当然のことなんであって、自分達の国に入って同じ——日本人と同じ30万円の給料をやって、バングラデシュに行くと30万円使っていたらどうなるかと。向こうの経済状況がおかしくなってしまうですわね、ごく一部の外国に行って日本企業で働いた経験のある人間だけが、平均賃金2万円の国でもって30万円持って使ったら、やりたい放題、地上げでも何でもできてしまうということがあるわけ。その点あまり日本が外国人に対して、いい意味では寛容なんですけれども、ちょっと給料体系がとち狂ってるなど。それは西尾幹二さんの『労働鎖国のすすめ』でも書いてあったんだけど、あのバブルの頃、日本経済がいい頃に日本に来たバングラデシュ人が日本で稼いだ金でもって、ダッカに帰ってダッカのメインストリームざーっと地上げしたと。日本から帰った金だったらものすごい広大な土地買えるわけで、地上げ、土地を買って畑を耕して耕地を広げて、その金で持って農奴を——奴隷的な給料でもって現地からの人間をさらに雇い入れて搾取しているという状況。これはその国の発展のためにもなっていないだろうと言ってましたけど、正にその通りなんでありましてね。その点で見ると、日本人があまりにも外国人に対して無知であるというようなことは、非常に感じ入ったわけですけどね。

そういうことが後々に、日本に帰って来てから、民族運動を實踐するにおいて過去の状況をみていくと、日本の言っていることはおかしいと。外国の状況はこうだという比較対象としてみることが出来ますよ。比較するには、外国と日本じゃ外国人に対する扱いが違いますからね。

接点を持ったから関心と言うわけじゃないですけどもね、それはこういう仕事柄、いろいろな国々に行ったりとか来たりとか、人々と会ったりしますけどね。それは今、私のような立場に限らず、誰だって日本にいれば外国人と——都市部に住んでいけば普通に誰でも付き合いある。特に中古車業界というのはその辺の町の修理工場のオヤジだって、みんなパキスタン人やナイジェリア人も付き合いがなんだかんだとあるわけですから。外国人に対してはその中で意識を持つか持たないかというだけの話でしょうが。

私に限らず社会に住んで社会に接点持っていれば、外国人の問題これはおかしいぞと。中古車業界でいえば、オークションのほとんど外国人だらけになっていて、外国人が高値でどんどん買っちゃうものだから我々が車買えなくなっちゃうとか。私のような政治活動に携わっている者に限らず、町の中古車のオヤジだって持っているのであって。ガイジンにやられっぱなしだよなという意識は持っているのであって。だからこの問題に取り組んでいるとか、外国人参政権に反対するという意識は持たないし行動もしないでしょうけど、誰しも多かれ少なかれそういう問題を直視する場面には行き当たっていると思うのですわね。

彼らは制度上の問題、合法的に入ってきて車を買付けるためにやっているわけであって、彼らは参政権をよこせとは言っていないだろうし。ただ、目に余るものはありますよ。た

だ目に余るといったって別にあの、オークションにいて車を自分達で高値で落札しているから相場が上がっちゃったということはあったり。ただ、それは制度上法律上問題ないんだから、「参ったな、こんなにいっぱい来て困るよ」という思いは皆さんあるんでしょうけど、それをどうこうは言えないですよ。

それに対しても右翼の反発はあったんで、数年前から草加のほうのオークション会場でもって右翼団体の街宣車がそれに対して言ったところ、向こうがパキスタン人が応戦してきて、石投げるは棒で突っついて街宣車を壊したと。彼らは——そういう右翼団体の人たちは、違法駐車していると。オークション会場前でずらっと並べて。ただ交通が頻繁に通るところじゃないから、えらい交通の妨げになっているわけじゃないけど、これは路上駐車だからいかんと言ったわけです。それはある意味では、因縁ふっかけと捉えられないこともないんだけど。それを言った根底というのは、外国人、パキスタン人があまりやりたい放題やっているとすれば、鬱憤晴らし的な要素もあったろうと思うんですけど。そういう形では、まあパキスタン人、中古車業者に対して攻撃というか、私の知る限りではありましたね。私がやったわけではないですけど。パキスタン人が日本にやってきて、やりたい放題というのは——商売上の問題というのは、それを上回るだけのこっちは商売をやればいだけなんであって。

私、そういう風に意識して外国人問題を意識したのは、やはり 20 年くらい前ですかね。ああそうだ、読んだのは西尾幹二氏の『労働鎖国のすすめ』という本を見てね、あれにかなり具体的に書いてありましてね。そういうところでもって外国人が日本に沢山いつくことに対して、永住することによってどういう風な弊害があるかということを知り明かしていた本がありましたんでね。なかなか詳しく具体的な例も書いて。要は西尾さん自体、ヨーロッパ、ドイツか何かの国にいた人ですから、ドイツかフランスの例を挙げて言っていましたけどね。まあ、向こうの例とは日本と若干状況は異なりますけど、そういう状況でもってヨーロッパの国々ではすでに外国人をシャットアウトしているにもかかわらず、日本人はこれから入れようとしているのは、どうかしているという論調で書いてましたけどもね。共感することが多々ありますよね。

(ただし) 西尾さんの本を読んだから、私が変わったとか目覚めたというもんじゃないんで。私はヨーロッパの状況と今の日本は全然違いますんでね。ただ厳密に見ていきますと、労働者の賃金の問題であるとか、そういうことを日本人が従来の日本的な奥ゆかしさというか、寛容な精神からあまりにも外国人を自分達と対等に扱っているようだけど、それは決して彼らの国の発展のためにならないということもあるわけだし。日本人がそこまで寛容になったら、日本人の常識は世界の常識じゃないと。

ヨーロッパではきちんとした階級社会があるのであって、その中でもって外国人受け入れにしても、まあフランスあたりだったらちょっと上のほうの下級官吏は何人、もっと下の門番は何人、下のごみ収集は何人、とかそういう階層ができていくわけだし、それを彼らは当たり前として受け入れてるけど、日本人は非常に違和感あってできないというか。建設現場でも外国人労働者に対して、日本人で行ったエンジニアが何かやる時、ちょっと建設関係でいうと難しい仕事で溶接はこうやってやるんだよとやってやると、ダメだと。やったらもう外国人はそれを見たら馬鹿にしちゃって、なんだお前できるのならお前やれよ、俺たちやらないんだよとなるんであって。技術者だったら、決して現場に出て彼らに対してものわか

りよく日本人に教えるように教えちゃだめなんだよ、というような階級社会が外国人と接する時には当たり前なんだよと言われてましたけど。その点で日本人は鈍感というかね、結局自分達が外国人にこうやってやればいい、と親切心でやったことが仇になっているのがあるわけ。それをもう少し日本人が警戒心というかね、もって世界の標準に近づいたほうがいいかなという気はしますよね。

在日の問題というのは、特にそんなに強い問題意識はないですよ。ただ最近の流れとして参政権をよこせよと、被参政権も認めるべきだとかそういう議論が出てきちゃうと、普通に居住している外国人の枠を飛び越えて、外国人に我々の持つ主権の一部を委ねるみたいなね、風潮になってくると、これは由々しき問題かなと思うわけですよ。

彼らが在日特権という——あるのかどうかもあま不確かなという意見もありますけども——ずっと長いこと日本に特別永住許可があるのは普通の外国人と違うという、ある意味では特殊な外国人というんですかね。その中で1つ言われるのは犯罪犯しても実名で報道されない、日本人名にならなると金何某とか言われて、「こと金何某」もいわれないで済んじゃうというのがけしからんというわけだけ。それはまあ、外国人名を報道することが意味があるかないかわかりませんが、そういう意味で自分達の出自というものを知らせずに済んじゃうよというのは、確かにいびつといえいびつ。これはまあアメリカ人とかヨーロッパ人、欧米人だったらそれはありえない話なんですけどもね。で、逆に正しいこといいことやると、有名なことになると、何とか文学賞とると、外国人でもって芥川賞とった初めての、という顕著にもはやされているというのは、確かに正常な状態じゃないと思いますね。ただそれに対して、感情的になって糾弾するのはどうかと思いますけどもね。

(在日コリアンも)パチンコ屋やって非常に金がある人もいれば、やくざにしかねない人もいる、いろいろな層があると思うんですね。朝鮮人というのは、戦後の混乱期において結構日本人の土地を不法占拠したりなんかして、結構財を成したということが多いわけ。そういう意味では結構努力した人というか、狡猾に生きた人というのは結構金を持っていると思う。前あの、野坂昭如氏が言っていたのかな、朝まで生テレビに出た時に、あれは若者特集か何かで会場に行ったんですけど、要は在日朝鮮人の人たちは非常に戦後苦勞したんだよと。でもって、普通日本人ができないような商売やって、キャバレーとかタクシーとかパチンコとか焼肉屋とか、現金商売でその日すぐに金が入る商売をやってたんだと。という風な、彼らに対して非常に同情的な発言をしておったんですけどもね、

逆に言えばそれは、そういうのはうま味のあるところに食いついたというか、すべて現金で金が入る商売をやっていると。支払いは後でもいいわけです。ローンでも月賦でも払えば焼肉なんて月末払えばいいわけなんだけど、タクシーでもキャバレーでも焼肉でもパチンコでも、その日に特に現金で入るようなうまい商売だと。そのため普通に日本人がまともに働いていたって、お客さんからお金をもらうのは月末払い。そういう非常にきつい日本の商習慣に則ってやっているわけで、彼らはいまのところは食い込んだわけだから、彼らに同情するというのも、それは逆じゃないかということでもって、私は感じたわけなんですけどもね、本質をみていくなれば。

そういう意味で今言われたのは、彼らが決して下層階級じゃなくて、上流階級、裕福だというのは確かにその通りであると思いますから、そこまで下手な同情は必要ない。ただ気分的にさっき申し上げたように、日本が嫌なら帰れというとしても、帰るところもないんです

よというのは、気の毒といえば気の毒かも知れないですけども。ただ外国で暮らすということは、親たちが日本人と一緒に住んでいると外国人なんだからといって、自分の国の言語を教えるべきだと思うんですね。カルデロンのりこさんの場合が、中学生になって今からフィリピンに帰ったって言葉もわからないというけれども、それは親として子ども達に対して、我々は不法滞在で来ているからいつ追い出されるかわからないから、ちゃんと日本語だけでなくタガログ語を教えるということをしてこなかったのが怠慢なわけで。まあ、日本人でも外国でもって海外駐在しているなかで子どもが生まれれば、英語しかできない、日本に帰ってきて苦労して日本語覚えている海外帰国子女のエリートと呼ばれる人たちはいっぱいいますからね。言語の問題は気の毒でしょうが、外国人として親が子どもに対して意識させるべきだったんでしょうね。

(カルデロンの時に行動は) いや、全然やってないですよ。まったくやってないですけど。だからカルデロンの問題は別に言わないけど、背景にあるのは極左、蕨に左翼のセクトが彼らを広告塔として使って、ネット右翼攻撃のための1つのツールとしてやってるというのがあります。まあ後で動画で見ましたよ。彼らの——保守系の人たちがやるデモ行進に対する妨害活動というのは、あそこまで警察が許してるのはおかしいと思うほど、あからさまに左翼が突っ込んで来てましたよね。ただそれは別に、カルデロンのりこが別にそれを頼んだわけでもなんでもないんですね。彼らはうまく利用しているだけの話でありましてね。

その点は成田闘争と似ているので、成田の農民達は自分達の土地を奪われたくないと。要するに共産主義は別に支持しているわけでもなんでもないけど、それにセクトがどんどん入って、彼らと人間的な連帯感を持ってがっちりとして。ああ、保守の人が全然見向きもしなかったけど、こういう人たちが来てくれたんだ、彼らは藁にもすがる思いで左翼の人に飯食わせたり寝泊りさせながら、運動を一緒にやってたということなのかな、似たような感じに思いますけど。

### (3) 東アジアに関わる運動

台湾、中国も含めてとなると、いつということはないですね。それはまあ、台湾正名運動ですかね。台湾の名前使えという。この民族運動やっている中で、どこかでそういうのと接点はできてきますんで。接点というか、運動を進める上において何らかの関わりはできてくるわけなんで。そういうのは主張としてはすると思いますよ、あらゆる場面で。台湾正名運動は、いわば人づてですよね。知り合いからこういう運動やるからどう？と言われて、じゃあ一緒にやりましょうということでもって。集会とかデモとか繰り広げたりとか開催したりとかやっていますけどもね。何か特別にきっかけになったとか、そういうのは特に意識してないですね。テーマが自分達の意見と一致すれば、みんな来てくれるわけですから。

慰安婦問題、これは随分前から言われてましたんでね、これは。まあ古くは日韓基本条約締結でもって、賠償金、有償無償5億ドルかなんか金払っているのに、また言っているのはおかしいじゃないかという論調、ずっと昔からあったわけでありましてからね。ごく自然な流れとしてみんな行っていたと思いますよ。私が運動やるもっと前、政治の場の上までは地道に運動やっていた吉田清治とか熊本青柳敦子という女が始めたり、地道に草の根的に延々とやってきたんですよ。そういうのが功を奏して国会の場で取り上げられるまでに

ったし。社会党のなんか女の国会議員でしたっけ、国会の場でも出るようになった確証があると、運動やってこれだけのベースメントがあるということでもって国会でも取り上げて。そこでもって河野談話で伝えるようなもの持ってきたのであって、長い道のりを彼らは地道にやってきたんでしょう。

(アジア女性基金にも) 反対しましてね。要は政府主導できないから民間でアジア女性基金だとかそういうのが場当たりのなもの作ったけど、それはただ我々が言ったのは政府がやっちゃいかんというのは、それはクリアできたわけであって。そういう反対の声があったからこそ、アジア女性基金という曖昧模糊のもので片付けたと。我々が声上げた成果が1つあったのかなという気はしますけど。その前は河野談話ですね、平成5年の。河野談話でもって従軍慰安婦の強制連行はありましたという、不確かな証拠でもって突っ走っていったと。それを言うなと叫んだけど言うわけであって、それ以前から言ってましたね。河野洋平なんかが出す前から。要は慰安婦があったという人が声を上げていたんで、これは違うぞと我々がいわざるを得なかったわけですから。当時は一水会にいたくらいの頃から、平成5年ですからね、河野洋平談話は。そういう新右翼、民族派の団体でも声は上げてましてね。

それは嘘っぱちなんだということはいわざるを得ないわけであって。従軍慰安婦強制連行というものは、嘘だよと。それやったことに対して起爆剤になったのは、日大の秦郁彦教授が済州島まで行って検証して、吉田清治があれを引っ込めたというのは非常に画期的なわけなんですけども。ただその時には時すでに遅しというか。だから今現在やるべきことは、河野洋平談話というのが、嘘っぱちだとわかった以上は引っ込めろというようなことを一原理原則的なものですけど——言うのは当然だと思いますよね。

(具体的には) 昔のことはあんまり覚えがないんですね。主張として街宣などでは言っていましたね。街宣とか竹島の問題も含めて対韓国、南朝鮮の問題に対しては街宣なりで訴えていたと。あとは何か当時一水会の機関誌でも書いたことあったかな、そんなことですかね。ただ我々は、どんなことやってましたかといっても、実際は街宣やるか勉強会か機関誌かくらいしかやることないわけですから。じゃあ国会で質問したかって、それはないわけですからね。我々がやっている運動なんて小さなものですよ。政治家がいるわけでもないし、政治家につてがあるわけでもないし。そういうことをやることによって、そういうような声を人々に浸透させていって、いつか我々が政権をとるといような大舞台に登場した時に、そういう人たちの支持を得るといふための土台作りの段階でありますからね。

竹島の問題やったのは、それは向こう側の方から竹島に対して——たとえばこれでもって、埠頭を建設しているとか、要塞を作ったとかなんかあって、そういう報道があってこれはいかんというきっかけがあって、竹島の問題・・・前、竹島のデモをやった最初の頃は——平成6年7年くらいだったかな——韓国大使館の前までデモをやったりとかですね。その頃はまだできたんです。麻布の大使館前のデモ行進して、今はシャットアウトでもって前まで行けないんですけども。前はアメリカ大使館の前だったら十分行けて、あそこで街宣して街頭演説なんかできたけど、今はずっと遙か先の坂の下の200mほど離れたJTの本社前まで、官憲によって無理やり引きずりだされてやらされてますけど。昔は政治活動は割と自由にできたものなんですよ。今は非常に厳しいですね。

当時は竹島の問題はそれほど顕著じゃなかったことと、韓国政府自体が従軍慰安婦に対

する補償とかなんとかいうことを、あまり言ってなかったから（右翼は抗議しなかったん）じゃないかと思うんですよね。あと1つにはインターネット上での書き込みによると、右翼には朝鮮人が多いから朝鮮にはいかないんだとか、そういうことを言っているのがいますけどもね。確かに日本には在日韓国人朝鮮人というのが非常に多くいて、こういう人たちが多くは——ほとんど暴力団の多くは、暴力団とかヤクザとか任侠とか、そういう人たちは韓国・朝鮮人が多くて。なおかつやくざ系の組織が別働隊として政治団体を作っているということになると、日本の政治団体、任侠系の特に真っ黒い街宣車であるとか、強面な人たちが朝鮮人が多いんだよ、ということはいく言われますよね。

朝鮮は反共だから。共産主義打倒の意味から言っているのもあって。まあ、韓国に対しては昔から反共では同じなんだからという意味があって、非常に南に対しては寛容な人が多いですね。反共一辺倒、反共がとにかく第一なわけでありますから。ちょっと我々と考えが違うと思いますが。反共なら何でもいいということでしょうから。

北に対しては拉致問題ですかね。我々が拉致問題を始めたわけですがけれども、平成9年に西村眞悟衆議院議員が国会でもって横田めぐみさんについて質問して、そこから拉致というものが明るみに出てきて。平成9年に拉致被害者家族会が結成されて、救う会作って、それでもってそのころから街頭で署名活動とか延々とやってきたわけなんで。北朝鮮がどういいう国かというのが段々人々にわかってきたし、私自身も勉強してわかってきたし。人にそれは伝えていく必要があると感じたわけなんですけどもね。

拉致問題が平成9年からですから、あの当時は全然人々見向きもしないし、特にNHKや朝日新聞なんかこれだけ取り上げてくれといっても、意識的にわざと無視してきたわけです。だからもうあの横田さんなんかと一緒にあって、署名簿を持って街の人にお願ひします、お願ひしますという、「拉致なんてねえよ」とか「連れて行かれる方が悪いんだよ」と汚い言葉を吐きかけ（られ）ながら、それでも画板もって署名を集めていたわけなんですけど。10年前の9.17、小泉訪朝でがらっと変わりましたね。あれ以降ですよ、国会議員が拉致問題言い出すのは、ブルーリボンの立派なバッチつけてやっていますけど。当時は街頭でもってリボン、青いリボンをぐるぐる巻いて買って来てそれ持ってハサミで切って端っこ折り曲げて安全ピンつけて、どうかこれ付けてくださいと人々にお願ひした時代があったわけなんですけど。今の人たちは、そういう時代は知らん顔でいた人たちが、今偉そうに拉致問題というのが、自民党であれ民主党であれ国会議員はいっぱいいるということなんで。

今、救う会の運動には関わってないですからね、全然。小泉訪朝以降、ちょっと意見が違ったものですから、あまり私が行っても歓迎されないようですし。5人の人が帰ってきて、その後の運動の方針・進め方として、彼らは政府側とべったりくっついてきたんで、政府と一体化していますんで、ちょっと私は考え方が違うなという感じがしますけどね。

それ以前は総連に対して抗議したりとか、ハンドマイクでもって街宣したりとか、そういうことは、やりましたけどね。ただそこも前までなかなか行けないんですね。抗議文を持って行ったって抗議文を受け取るわけでもないし。まあ人々にこうやって訴える必要があるんですし、直接行かなくても・・・他の立場でもって訴えるとかですね。

#### （4）排外主義運動

外国人に関わる運動って、特に私はやってないと思いますね。外国人排斥ではないですけ

どもね。外国人に対して運動やったかな？ちょっと覚えがないですね。ただ外国人、在日の問題にかかわらず、外国人どうこうせよというようなのは、永住許可の問題とかあとは入管法の問題から、その点は法務省とかに要請はしてますけどね、それは。まあ広い意味でいえば、たとえば台湾人の外国人登録証の国名が台湾なのに中国なのはおかしいとか、それも外国人問題の一環ではありますんでね。台湾正名運動、これは10年位前からやっていますんでね。台湾関係の人たちと一緒にやってきましたけど。

瀬戸（弘幸）さんとは国家社会主義労働者党かなんとかの、外国人排斥ということでやって、それは朝鮮人、在日朝鮮人とは違った人だね。ただその頃は日本は欧米のように外国人労働者どうこうという、そこまで大きく社会問題化してなかった時代ですね。私——どうかな、彼に（ついて）思うのはネオナチに対する憧憬、憧れがあってそれをただ無理やり日本に持ち込んできたのかなと。外国人排斥を主張することによって票が集まるといふか、支持を得られるといふか、いびつな民族主義的なものを、向こうを見ていて憧れの的なものでやってるんじゃないかなという気はしますけどね。日本に根付いてなかったんじゃないかな。

（外国人排斥運動とは）関わりはなかった。ただ運動の接点としては、国家社会主義労働者党の人たちもデモなんかのときは一緒にやったりとかですね。ただ外国人問題じゃない。あの人たちが外国人問題をテーマにしていただけであって。当時たとえばイラク、湾岸危機のころだったか、アメリカのグローバリズム、New world order に対しての抵抗という形でもってイラク支持のデモやったら、彼らも来てくれたりとかね、そういう程度のものでしたね。だからある意味で反米的な主張を彼らは持っているんでしょね。アメリカは無造作に外国人を受け入れるような状況はあるけど、日本は違うんだよということですから。

（外国人排斥をするのは）日本的なシステム破壊であるとかですね、外国人の狼藉といふかそういう点に目が行くわけなんですけどもね。あくまでも外国人に対して非常に寛容な人、みんな地球市民だ、グローバルだ、国境なんかないから誰とも仲良くしよう。で、外国人がちょっと日本人的な社会にそぐわない、さっき言った電車の中でギター弾いて金もらって集めると、そういうことに対しても非常に寛容であると。まあまあいいじゃないのという人というのは、人に寛容であるということは自分も寛容な扱いしてくれというわけですね。自分達が外国にいて、外国人に蟹蹠買うようなことを外国で日本人なら平気でやっても、どうせ私達は外国人なんだからこれは許してくれるだろうという思いが同時にあって、実際にそのことが蟹蹠買っているわけですね。そういうことは知らなきゃいけないわけであって。自分達がやっている行いが外国で良くない……テレビ局なんか取材でもって日本のお笑い芸人が裸で外国人から蟹蹠買ったと。日本ならそれは許される行為なんだろうけど、外国に行ったら違いますよといふことは、日本からしたら外国人にも同じ事言わなきゃいけないわけでありまして。そういう意味で文化は受け入れるけれども、システムの破壊は許しませんよということにつながるんですよ。

ハロウィンパーティー粉砕というのは、一昨年10月30日やったわけですね。あからさまにインターネットで予告して、9時何分発の山手線の内回り新宿駅から何両目に、でパーティーやろうと。あくまでこれは犯罪の予告でありますから、それに対して誰も手をこまねいて何もやらないんだったら、きちんと対処するのは当然のことでありまして。これは主にアメリカ、白人社会に対する警告でありますけどもね。

（それ以外の行動は）特にないですよ。外国人に対する。池袋の北口のあそこの、シナ人



の商店が 24 時間 365 日営業でもって、ずっとあそこに商品、冷蔵庫やなんか陳列させているのを撤去させるとかね。動画なんかで映ってますが、それ以前から言っていたんですが、あれはおかしいと。地元で警察なんかにも言っていたことがあって、言っても全然聞かなかったんですね。あれは陽光城という商店なんですけど、全然言うこと聞かないのが我々が行ったことによって、警察にはトラブル回避のために土下座したんでしょうけど。365 日 24 時間営業だから、冷蔵庫どけたら下からいろんなガラクタが出てきたんですけど、いかにずっと占拠してたかがわかったんですけど。まあ日本人は非常に大人しいから、何も言わずにずっと済ませてきたんでしょうけど。それじゃあいけませんよということを、我々は主張して訴えているわけでした。私なんか別に外国人排斥でもなんでもありません、それは。本当に親日的な人は、日本が好きなのは日本に来てください、ただ嫌いなのにわざわざ来ることないわけであって。

だから私なんかイラク湾岸危機以降——ずっとイラクから平成 2 年、1990 年にクウェイトに対して侵攻して以降、経済制裁かけて孤立させてたわけだけ——その中でもって私が何でイラクに行ったり来たり自由にできるというのは、イラク政府としては私は入国させればイラクのためになると思うから私にビザを発給して、わざわざ招待状も来て行けるわけですね。それを日本から行っておいて、「イラクは人権侵害国家でもってフセイン政権だめなんだ」と言うのなら入れないわけであって。日本に持ち帰ったことを実際のイラクの状況、フセイン政権でやっていること、イラクの人々の窮状を日本に持ち帰って、声は小さいかもしれないけど広めていると、あの国にとっては友好であると。少なくとも、不利益をもたらす人間ではないと見られているわけなんであって。まあ、人が外国に行くということは、それだけ重きを持ったことでありますから。誰でも彼でも外国に行けるわけではありませぬし、誰でも彼でも受け入れるわけではない。特に戦時下にあったわけですし当然。それは平時にあっても日本においても、外国人を受け入れるというのはそういうネックがあるというのは、日本人はほとんど知りませぬよね。パスポートさえ持っていればどこでもいけるんだと思ってるようなんですけど。

そういう点において、従軍慰安婦のおばちゃんとかよばれる人たちがやってきて、日本政府は強制連行したんだということを訴えるために来ているというのは、観光ビザで来ておかしいだろうと言わざるをえないですね。

だからイラク戦争が終わった後に、イラクの友人が日本に来ることになって、私が招聘して。ちょうどイラクで人質になった高遠菜穂子とかあの子たちと向こうで活動を——考え方は違うけど活動を一緒にやったりしたものだから。向こうで世話した現地のイラク人を日本によんできて、中野ゼロホールでシンポジウムやることになったんで、その時はビザを私がとったわけなんですけど。あくまでもその人をうちの中古車の買い付けというか、商業的なので来るんだということと呼んだわけなんです。彼らにも言ったんで、そういう状況で来ているから、あからさまに日本政府を批判するような発言はその場では出さないでくれと言ったわけなんですけども。逐一外国人が日本に来るというのは、そういう重きがあるんだということをおね、日本の人たちは——ほとんどの人はまったく意識してないと思うんです。

## (5) 外国人参政権について

参政権の問題というのは、要は行動したのは、いわゆる保守の人たちが出てきてやってい

るときに、それに乗っかる形でもって参政権は反対だと。せいぜい5、6年前じゃないですかね。そういう人たちが出てきたということ自体が、外国人が参政権をよこせというのが出てきたのでそれに対抗して在特会みたいな団体が出てきたのであってね。それがきっかけで、彼らは反対運動のきっかけを、戦う場を作り出してきたのは功績としてあると思います。やり方とか主張の仕方は別にしてですね。

その頃（90年代）は新聞報道等をみると外国人参政権、これを認めるなんてけしからんという思いがあって。それがまあ最高裁判決があったりとか、民主公明合意があったにしても、まだそれが現実的なものになるとは思えなかった。そういう主張をする人がいるにしても、それが日本の政府の内部においてそれがどんどん上に上がってきて、現実のものになるとかいう感じではなかったですけど。この数年の間にそういう流れができてきたのは、非常に脅威的なものがありますよね。（それまでは）他にもやることありましたんでね。だから、彼らが運動を盛り上げてくれたんで、それ一緒にやる、その問題をテーマとして戦う場ができたということでしょう。外国人参政権に反対する運動に関してはですね。

外国人参政権に反対するデモ行進や何かは、彼らに関わってからそういうことをやりだしたわけであって、それまではそれほど危機感はなかったわけですからね。そういう人たちの中で、ネットで情報を拡散してきたんで、今度こういう集会あるよと。デモ行進があるよと。そういうことでもって誘い合っていくようになったということですかね。

それは日本の国体護持、日本の維新・革新運動という柱の中において枝葉がある、その中でもって1つして、これも重要な1つですよ。領土問題やっけるとか憲法の問題があったりとか、拉致の問題があったりとかいうのの中に外国人問題がある。1つの問題としてそればかりに特化する必要はないけど、これもやってるよあれもやってるよとやっていかないと。彼らの場合、在特会というのは外国人の在日特権を許さない、それが一本の幹であるのであって、我々のような国体護持とか維新・革新いうのと全然違って、外国人の特権を許さないと彼らはそれだけやってればいいけど。私はいろいろあるなかでもって枝葉の1つとして外国人の参政権の問題としても注目し値すると思ったわけですよ。

やはり日本という国柄のなかでもって、外国人がどんどん無造作に入ってくると。日本の我々が営々と築いてきた日本的なシステムというのが破壊されていくということに対しては、日本人として危機感持たねばならないのであって。システムがいったん破壊されるのがいいんだ、と考える人も恐らくいると思うんですね。昔、山手線の中で普通に乗ってきたらば、白人、外国人がギターじゃんじゃん鳴らして歌を歌いだして、歌を歌ってもう1人が帽子持って皆さんからお金をもらっていたというのは、「ふざけるな」とつまみ出したんだけど、彼らにしてはこれが当たり前になっているわけだし、許容してしかるべきだとなっている。日本人としてこれは許さないと。システムとして電車の中で静かに本を読んだりとか、まあ転寝してもいいんだろけど、日本的な文化侵略という大層な問題だけど、要はシステムの破壊を許すなということであって。外国人は自分達の文化持ち込んだりとか自分達の言語を使ったりとか、それはいいわけなんですけど、ただシステムの破壊は許しませんよという立場なんです。自分達が日本で自分達の国の料理を作って郷土料理のレストランやったり、それは別に構わないわけなんですけど、それをスタンダードにしてじゃあ学校で日本の給食で日本の給食は朝鮮料理で統一しましょうとかそれでは困っちゃうわけであって。それは参政権の問題もしかりなんですけどね。

だから参政権の問題とは、国を司どる——国というものを行政を遂行するというのは、日本人に与えられた使命であると、義務であると。義務というのは辛いものがあって、自分達の国をどうにかせねばならんと、財政破綻しちゃいかんし、教育の問題も子ども達に未来ある日本ということをしなないといけないんだけど。ある意味その辛い義務を——参政権を与えるのは自分達の義務をあんたたちやってちょうだいと放棄するのと同じなんですね。押し付けてると。外国人の押し付ければ楽なんだけど、あくまでも自分達が日本という家の主人なんだから、ゴミがたまっているからといってお客さんにゴミ掃除しろと言わないのと同じであって、あくまで自分達できれいにしてお客さんとして招き入れるというのが本来の本筋だろうと。彼らの権利どうこう以前に日本人の義務として参政権を行使せよ、ということでありませう。原理原則に則って、道義的な問題からしてもですね。人数が沢山いるから乗っ取られちゃうとかそういう問題とは別の次元で語っていかんといけないと思うんですね。

(他の団体は) 外国人にそんなものを与えるのはけしからんというかな、割とまあ感情論的なものがあるんじゃないんですか。中にはその問題、そういう団体であるとかそういうテーマに限らず、割と保守系のネット系の運動ってのが鬱憤の捌け口とか、不満の捌け口として成立しているような部分も多分にあるわけでしょうから。本当、筋の通ったきちんとした運動体ではない。ただ単に外国人の特権をというのが一本の柱でもって。右翼・民族派とか保守とかそういうのと違うというのは、根底に守るべきものがないと。国体護持であるとか尊皇であるとかそういった精神がないままに、竹島は韓国領土ですという人間を日本に呼び入れてテレビコマーシャルに使っているのはけしからんんじゃないかというアンチですね。そういう運動が根底にあるのであって、その先にどういふ日本じゃなきゃいかんからこういうものだというわけではないんですね、彼らの場合は。

問題のある国の人間が参政権を言っているからであって、問題のない国の人間が参政権を言う分には構わないということですね、それは。ある意味、独島は韓国領土だという人間が日本に来て、活動するということになると、また従軍慰安婦は強制的に連行されたんですよと、日本は賠償せよという国の人間がわざわざ日本にやってきて活動するとなると。それは確かに国家主権の問題として、あくまでも日本に限らずどこの国でもエントリーさせるということは、その国に対して利益をもたらすかその国に少なくとも不利益にならないことを条件にその国に入れるわけだけでも。日本に来て破壊活動とはいわないが、反日本的な事実でないことを言う。独島は韓国領土であるとか、そういう人はお引取り願いたいと。ただ別に純然たる日本が好きなんだ、日本で勉強したいという場合には構わないんですね。その点が運動やっている人たちって混同している部分があって、それとプラス彼らは——在日朝鮮人というのはずっといつているわけであって、親のまたその親の代から日本にいるわけで、動きようがないのではあって。日本が嫌いなら日本から出ていけばいいんだけど、彼らとしては悲しいかな出て行くところがないと。生活の基盤がこっちにあって、向こうには家屋敷もなければ行っても言葉もわからないという、非常に辛いところがあるわけなんであってね。それをただ原理原則からいえば、確かに出て行くべきなんですよ、嫌だったら。ただそれができないから嫌な国でも住まざるを得ないということに対してはね、非常に重く受け止めざるをえないと思うんですけどね。

(在日コリアンは) 普通に日本でもって普通に暮らしている分には構わないわけでしょう

けど、ただその中で独島は韓国領土ですよとか、我々は税金払っているのだから参政権よこせとか言われちゃうから困るのであって。あくまで彼らは外国人でいるということは——今では非常に帰化制度が簡略化されているのであって、犯罪歴とかなければ割と簡単に日本国籍取れるんだけど、あくまで軸足は韓国朝鮮のほうを向いておいて、なおかつ権利としての日本の選挙権だけよこせと、また税金払っているのだから当然だと言われちゃうと、それは困るわけでありまして。あくまで彼らの外国人としての朝鮮なりシナ人のパスポート持っていることに誇りをもって、自分の国の国籍を維持しているわけですからね。

そういう意味じゃ、一昔前に選挙権がほしければ日本国籍とればいいじゃないかと言われた。確かにその通り。それ言っちゃうと今ならネット系の右翼の人たちは、その論は言わないほうがいいと。選挙権ほしけりゃ日本国籍取れというとなら取っちゃいますよ、今簡単にとれるんだからと。国籍だけとっておいて向こうのほうを向いているから言わないでくれ、という人もいるみたいですけどね。日本国籍を取っちゃうということは、日本政府が認めちゃえば同じ日本人なわけなんですから。その中でもって反日活動やろうが何しようが致し方あるまい。別に朝鮮人シナ人にかかわらず、アメリカ人であれヨーロッパ人であれ、どこでも同じことなんですけどね。

#### (6) 在特会について

現在のいわゆる保守運動ですかね、ネット系の右翼ができたのは自分が安全な位置にいたい。決して批判はされないと。でも人は批判する、人の罵詈雑言悪口はいいたい放題というのがネット社会から始まったいびつな形の保守というんですかね。ネット右翼というんでしょうけど、まあそういうものは言論ではないですからね。認める必要ないし、取り上げる必要もないと私は思っているんですよ。

民族派は北方領土返還とかでデモ行進やれば、千人二千人集めてやったこともありますしね（だから在特会が特別動員力があるとはいえない）。ただ世の中メディアなんかは、まったく見向きもしなかっただけの話でありまして。在特会とかそういうところがやっていると、まあ一般市民というかね、団体に入っていない人たちが集まるようになってきたということで、それだけやっぱり皆プラスチックを持っていて、今までの右翼団体の集会には行きづらいくらいけどああいうところだったら簡単に垣根が低いから行けるじゃないのということで、と思うんですけどね。

まあそれなりの人たちが来ているんでしょう。その程度の人たち。要は鬱憤晴らし、不満の捌け口として非常に重宝して来てんじゃないの？という感じはしますよね。その人の信念というか理念というか、どこまで持ってるかという。前に外国人参政権で左翼がデモやったときに、我々も彼らも一緒に行って、銀座の公共施設でやっているからと行った。抗議行ったら官憲がずらっと阻止線張っていると。我々普段5人10人でやったって警官に押し戻されちゃうわけだけど、彼らの動員力は100人位人が来ていると。100人位で突破すれば、警官がいても押ししていけば阻止線突破できるんで、我々が先頭に立ってさーっと警官と押し合いへし合いやっついて、「さあ来てくれ」と言ったら、向こうは警察によって設置されたカラコンのポールの柵の中に入って、警察がここにいなさいよと言ったところに大人しくいるんであって、実際ここまでは来てくれないわけですよ。「何で来てくれないんだよ」と言ったら、「みんなそこまでやったら引いちゃいますよ、だめですよ」。

檻の中に入れられた羊であって、その中でもって「朝鮮人叩き出せ」「東京湾に叩き込め」と言うことは過激なんだけど、実際戦力としては役に立たないというのは、そういう人たちでもってそういうことを目的にしてきてないわけなんだから。それはもう、そういうことは現実として、そうした人だと認識はしてなきゃいけないわけだね。下手にそのこと認識してないと、あれが悪いこれが悪いと、誰かみたいにあの人たちを一生懸命批判罵倒することになって。私からすれば、批判とか罵倒する相手でもないと思っているわけで。そういう人たちにはあまり期待しちゃいけない。利用できるというか、彼らも私どもを利用すればいいのであって、お互い相互的に補完してやって、自分達の運動にプラスになる面は一緒にみていけばいいけど、マイナスになる部分は関知しなければいいわけですから。それは大人の関係でいけばいいんじゃないの、と思うわけですよ。運動体においてはすべてにおいてですね、みんなそれぞれ違うんですから。ただそれはコネクションというものがあって、ずっとそれを維持していけばいつかそれが立つべきときには、一緒に大同団結してできる部分もあるはずなんだからと。それは温存しとけばいいわけなんであります。

(近年排外主義運動が出てきたのは) 彼らの中心になる人物が出てきたからではないですかね。何か思ったかそれにやりだして、その時期がちょうどインターネットが普及してきた時期、彼らがインターネットに長けていたというか、インターネットをうまく駆使できるようなスタッフが周りにいたというか、そういうタイミングが一緒になったんで。何か機会があればやろうと思っていたんでしょ。やっぱりネットですよ、強みというのは。

ただネットというツールとして使えば非常に便利なんだけど、彼らの場合はインターネットがすべてになっちゃっていると。インターネットに使われているというか、インターネット中心に物事考えているというか。インターネットに映ることが主目的になっちゃっているのかな。特にニコニコ動画というかな、あれだと常に自分からやっていることがぱっと全国、全世界に映るということは、ちょっとスターになっているという気分があるんじゃないかと思うんですね。今までマスコミでテレビで散々無視されてきたけれども、それに代わるものとしてテレビの中継ほどではないけれども、似たようなツールを得たということでもって。どこか集会の後に飲み会に行った、飲み会の場面まで一所懸命生中継でさらしたりして、要は傍から見れば醜悪なだけで愚かなだけなんだけど、自分達は感覚からいうとすごいと。自分達の主義主張、そういうものが世間に対して受け入れてもらったという錯覚を覚えてしまうんですかね。それは非常に怖いことなんですけども。

元々インターネット右翼というのは、インターネット、2ちゃんねるの掲示板なんかで書いていくと。今までは一般のマスメディアというのは、左翼にあらざれば人にあらざりたいな、左翼的な言論は文化人取り上げているけど、右的なことは取り上げてくれなかった。ちょっと書き込んでいくと、結構みんな保守的なんだなとか、外国人参政権、結構みんな反対しているじゃん、そういう意見結構多いんじゃないかと書き込んでいったけれども。それが今度オフ会という形で出てきたらば、みんな一緒に考えでいて、ハンドルネームの名刺作って、彼らの名刺の特徴というのは住所は書いていない。本名もない。ハンドルネームと携帯電話の番号とメールアドレス、もしくはホームページのURL 書いている程度でもって、お互いにハンドルネームで呼び合っていると。非常に気持ち悪い世界なんだけど、そういう人がどんどん集まってきて、反フジテレビのデモだとか発展してただけですけど、それが果たして発展していったと言えるのかどうか。情報化社会のなかでもって、私はむしろ責任ある

言論というのが衰退しているのではと思うんですね。インターネットの普及でもって言論の枠が、言論と呼べないような発言の枠が広がっていったんだけど、逆に我々の訴えるような政策をもった声というのは、マスメディアに対しては届きづらくなった。国家権力も、そういうものを必死になって封じ込めようとむしろしている。だから韓国、南朝鮮の大使館にいつでも抗議もさせないとかね。それも1つの——一端ではありますけども、我々の声が正当な言論として届く、国民に対して主張すべき輪がどんどん狭まっているということでもって、言論の不自由さを感じますよ。インターネットの普及でもって言論の枠が広がったといわれる反面ですね。正当なる言論と鬱憤晴らしの不満というものがごっちゃになっちゃっている面がありますんでね。

### (7) 小括

θ氏にとっての「外国人問題」は、彼のいう「システムの破壊」に関わる限りで重視すべきものということになるだろう。排外主義運動が台頭した際、マスメディアに右翼活動家がしばしば登場し、「弱いものいじめ」や「差別」を批判するコメントが掲載されてきた。排外主義運動（より端的には在日特権を許さない市民の会）は、思想がなく右翼とは呼び得ない単なる鬱憤晴らしだ、という言説を一方で支えたのは右翼だったといえる<sup>16</sup>。

だが、右翼は排外主義を批判するような立場にあるどころか、排外主義と非常に親和的である側面はなぜか議論されない。θ氏がいう「国体護持」や「国家革新」とは、きわめて排他的な民族主義以外の何ものでもなく、状況次第で簡単に排外主義に転化するものだろう。鈴木邦男は、自殺した元代議士の在日コリアンである新井将敬を、日本人以上に日本人たろうとしていたと賞賛するが、それを賞賛すること自体が排外主義に他ならないことをまず指摘すべきだろう。

θ氏は、排外主義運動に参加していることを新右翼陣営で批判されているという。だが、「システムの破壊」を問題視するのは他の新右翼も同様であり、具体的な事象の解釈で相違が生まれているにすぎない。すなわち、θ氏と彼を批判する者の違いは、現時点での「外国人問題」は「国体護持」に対して害をなすと考えるか否かでしかなく、「国体護持」という思考の排外性は埒外におかれる。θ氏の「功績」は、「国体護持」に必要な「システムの破壊」を問題視することが排外主義に逢着することを示した点にある。右翼にコメントを求めのならば、まずこの点から始めて再帰性を伴ったものにするべきだろう。

---

<sup>16</sup> その意味で、「しんどそうな人々」の鬱憤晴らしとして排外主義運動を描く安田（2012a）の議論と、排外主義運動の切り捨てをはかる右翼の利害は一致する。それゆえ、一水会顧問の鈴木邦男や会長の木村一浩は安田の議論を引いて「鬱憤晴らし」と規定し、安田はその言葉を借りて排外主義運動を批判するという共犯関係ができあがっている。